

Oracle® Cloud

Oracle Analytics Cloud でのデータのビジュ アル化およびレポートの作成



F26046-23
2023 年 11 月



Oracle Cloud Oracle Analytics Cloud でのデータのビジュアル化およびレポートの作成、

F26046-23

Copyright © 2017, 2023, Oracle and/or its affiliates.

著者: Nick Fry、Pete Brownbridge

執筆協力者: Rosie Harvey、Suzanne Gill、Stefanie Rhone

協力者: Oracle Analytics Cloud development、product management、and quality assurance teams

This software and related documentation are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are protected by intellectual property laws. Except as expressly permitted in your license agreement or allowed by law, you may not use, copy, reproduce, translate, broadcast, modify, license, transmit, distribute, exhibit, perform, publish, or display any part, in any form, or by any means. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of this software, unless required by law for interoperability, is prohibited.

The information contained herein is subject to change without notice and is not warranted to be error-free. If you find any errors, please report them to us in writing.

If this is software, software documentation, data (as defined in the Federal Acquisition Regulation), or related documentation that is delivered to the U.S. Government or anyone licensing it on behalf of the U.S. Government, then the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs) and Oracle computer documentation or other Oracle data delivered to or accessed by U.S. Government end users are "commercial computer software," "commercial computer software documentation," or "limited rights data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, reproduction, duplication, release, display, disclosure, modification, preparation of derivative works, and/or adaptation of i) Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs), ii) Oracle computer documentation and/or iii) other Oracle data, is subject to the rights and limitations specified in the license contained in the applicable contract. The terms governing the U.S. Government's use of Oracle cloud services are defined by the applicable contract for such services. No other rights are granted to the U.S. Government.

This software or hardware is developed for general use in a variety of information management applications. It is not developed or intended for use in any inherently dangerous applications, including applications that may create a risk of personal injury. If you use this software or hardware in dangerous applications, then you shall be responsible to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy, and other measures to ensure its safe use. Oracle Corporation and its affiliates disclaim any liability for any damages caused by use of this software or hardware in dangerous applications.

Oracle®, Java, and MySQL are registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

Intel and Intel Inside are trademarks or registered trademarks of Intel Corporation. All SPARC trademarks are used under license and are trademarks or registered trademarks of SPARC International, Inc. AMD, Epyc, and the AMD logo are trademarks or registered trademarks of Advanced Micro Devices. UNIX is a registered trademark of The Open Group.

This software or hardware and documentation may provide access to or information about content, products, and services from third parties. Oracle Corporation and its affiliates are not responsible for and expressly disclaim all warranties of any kind with respect to third-party content, products, and services unless otherwise set forth in an applicable agreement between you and Oracle. Oracle Corporation and its affiliates will not be responsible for any loss, costs, or damages incurred due to your access to or use of third-party content, products, or services, except as set forth in an applicable agreement between you and Oracle.

目次

はじめに

対象読者	xxix
ドキュメントのアクセシビリティについて	xxix
ダイバーシティ&インクルージョン	xxix
関連ドキュメント	xxx
表記規則	xxx

第 I 部 Oracle Analytics Cloud でのビジュアライゼーションおよびレポートの概要

1 データのビジュアル化とレポートの作成の概要

ビジュアライゼーションおよび分析について	1-1
Oracle Analytics Cloud へのアクセス	1-3
自分のパスワードの変更	1-4
コンテンツの検索と探索	1-5
コンテンツの検索	1-5
検索オプション	1-7
検索のヒント	1-8
コンテンツの探索	1-8
ウォッチリストについて	1-11
ウォッチリストの作成	1-12
ウォッチリストへのビジュアライゼーションの追加	1-13
ウォッチリストからのビジュアライゼーション・カードの削除	1-14
モバイル・デバイスでのコンテンツの表示	1-15
外出先での Oracle Analytics コンテンツへのアクセスおよび操作	1-15
Oracle Analytics Day by Day を使用した分析チャートの表示およびコラボレーション	1-16
組み込みブラウザを使用したモバイル・デバイスでのデータの探索	1-16

第 II 部 データの準備

2 データセットを使用したデータへの接続

データセットとは	2-2
データセットのオープンについて	2-2
使用可能な接続の表示	2-4
データセットで使用可能なデータ・ソース	2-4
データセット・エディタについて	2-5
接続からのデータセットの作成	2-9
データセットへの複数の接続の追加	2-10
接続から作成されたデータセットへのファイルの追加	2-11
SQL 文を使用したデータセットへの表の追加	2-12
データセット表の結合の理解	2-13
データセットの表間の結合の追加	2-14
データセットの自動結合の無効化	2-15
データセットの結合の変更または修正	2-16
表の列が一致しない場合の結合の追加	2-17
データセットからの結合の削除	2-18
データ・ソースの問合せにデータセット表を含める	2-18
グレインの保持とは何ですか。	2-19
グレインを決定する表の指定	2-21
データセットの表の順序の再配置	2-21
品質インサイトとは	2-22
品質インサイトを使用したデータの探索	2-26
データセット列の除去または復元について	2-31
データセット表の列の除去または復元	2-31
データセット表のフィルタ処理	2-32
データセット表がキャッシュされているかライブであるかの指定	2-33
データセット表の元の書式設定の表示	2-35
ファイルからのデータセットの作成	2-36
データセットのファイルについて	2-36
コンピュータからアップロードされたファイルからのデータセットの作成	2-37
Dropbox または Google Drive からアップロードされたファイルからのデータセットの作成	2-37
データセットへの複数のファイルの追加	2-38
Oracle Fusion Cloud Applications Suite のサブジェクト領域からのデータセットの作成	2-39
Oracle Fusion Cloud Applications Suite の分析からのデータセットの作成	2-40
ローカル・サブジェクト領域によるデータセットの作成	2-41

ローカル分析によるデータセットの作成	2-41
Essbase 接続によるデータセットの作成	2-42
REST エンドポイントがあるデータ・ソースからのデータセットの作成(プレビュー)	2-42

3 データのエンリッチおよび変換

Oracle Analytics でのデータ・エンリッチメントと変換について	3-1
データのエンリッチおよび変換	3-3
エンリッチメントの推奨の受入れ	3-5
データの変換	3-6
置換を使用したデータの変換	3-7
正規表現を使用した置換変換の例	3-8
テキスト列の日付または時間列への変換	3-9
日付または数値列の表示形式の調整	3-10
データ準備時のピン列の作成	3-11
データセットの列プロパティの構成	3-12
列の非表示または削除	3-14
非表示列または削除列の復元	3-15
データセットへの列の追加	3-16
ワークブックの計算済データ要素の作成	3-17
データ準備スクリプトの編集	3-17
エンリッチおよび変換リファレンス	3-18
変換推奨のリファレンス	3-18
データ・プロファイルとセマンティック推奨	3-19
セマンティック・タイプのカテゴリ	3-20
セマンティック・タイプの推奨	3-20
認識されるパターンベースのセマンティック・タイプ	3-20
参照ベースのセマンティック・タイプ	3-21
推奨エンリッチメント	3-21
必須しきい値	3-22
カスタム・ナレッジの推奨	3-22
一般的なカスタム書式文字列	3-23
クイック・データ変換の列メニュー・オプション	3-24

4 データ・フローを使用したデータセットの作成

データ・フローについて	4-1
データ・フローのデータベース・サポート	4-2
データ・フロー・エディタでの作業	4-3

自分のデータを編成および統合するために使用できるステップ	4-3
データベース・アナリティクス関数	4-7
グラフ分析関数	4-8
データ・フローを使用したデータセットの作成	4-9
データ・フローを使用したデータセットの生成または更新	4-9
データ・フローの再利用	4-10
データ・フローの増分処理の構成	4-10
データ・ソースの新規データ・インジケータの指定	4-11
データ・フローでの増分処理の適用	4-12
OCI 関数を使用したデータの変換	4-12
特定の時刻でのデータセットの生成または更新	4-13
データ・フローによるデータ処理のタイミングの変更	4-13
データ・フローのシーケンスを使用したデータの処理	4-14
データ・フローの管理	4-15
データ・フローおよびシーケンスの共有について	4-16
データ・フローの共有	4-18
シーケンスの共有	4-19

5 データセットの管理

データセット・タイプのアイコン	5-1
データセットとその情報のリストの表示	5-2
データセットのデータのリロード	5-2
データセットのデータのリロードについて	5-3
データセットの個々の表のリロード	5-4
データセットのすべての表のリロード	5-5
データセットのファイルのリロード	5-6
データセットのリロード履歴の表示	5-7
リロード・ジョブのログ・ファイルの表示またはダウンロード	5-8
データセットのリロード・スケジュールの操作	5-9
データセットのリロードのスケジュール	5-9
データセットのリロード・スケジュールの詳細の表示	5-10
データセットのリロード・スケジュールの変更	5-11
データセットのリロード・スケジュールの削除	5-11
データセットのプロパティの検査	5-12
データセットの名前と説明の変更	5-12
データセットのオブジェクト ID のコピー	5-12
データセットの認証	5-13
データセットのデータ要素の表示	5-13

データセットのデータを検索で使用可能にする方法	5-14
データセットの索引付けについて	5-14
データセットの索引付け	5-15
オンデマンドでのデータセットの索引付け	5-16
データセットに索引付けする時期のスケジュール	5-16
検索しやすい分析コンテンツにする	5-17
分析コンテンツを検索しやすくする方法について	5-17
データセット列のシノニムの指定	5-19
データセットの権限の追加または更新	5-19
データセットのソース・ファイルのダウンロード	5-20
データセットの複製	5-20
データセットの削除	5-21
ワークブック・エディタでのナレッジ・エンリッチメントの有効化	5-21

第 III 部 データのビジュアル化

6 データのビジュアル化および分析

ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始	6-2
ワークブックを編集モードで開く	6-2
ワークブックのデータセットの操作	6-3
ワークブックへのデータセットの追加	6-3
ワークブック内のデータセットの置換	6-4
ワークブックからのデータセットの除去	6-4
ワークブックのデータセットの変更	6-5
データセットのブレンド	6-6
ブレンドの理解	6-6
ブレンド・データの一貫しない値について	6-8
データセットのブレンド	6-9
ビジュアライゼーションのデータ・ブレンドの変更	6-10
データの追加によるビジュアライゼーションの構築	6-11
選択されたデータ要素に最適なビジュアライゼーションの作成	6-11
ビジュアライゼーションへのデータの追加	6-12
ビジュアライゼーションを別のビジュアライゼーションから作成	6-16
ビジュアライゼーションのツールチップの変更	6-17
ワークブック・エディタでのナレッジ・エンリッチメントの使用	6-17
ビジュアライゼーションの編集に関するヒント	6-18
ビジュアライゼーションの複製	6-21
別のワークブックからのビジュアライゼーションのコピー	6-22

自動インサイトによるデータセットのビジュアライゼーションの推奨	6-23
自動インサイトとは	6-24
データセットと自動インサイトについて	6-24
自動インサイトで生成されたビジュアライゼーションの検索と選択	6-24
自動インサイトでプロファイリングする列の選択	6-27
自動インサイトで表示されるビジュアライゼーション・タイプの指定	6-28
データセットのインサイトのオンまたはオフ	6-30
ビジュアライゼーション・タイプについて	6-30
棒グラフ	6-30
フィルタおよびその他のビジュアライゼーション・タイプ	6-31
地理空間グラフ	6-32
グリッド・グラフ	6-32
折れ線グラフ	6-33
ネットワーク・グラフ	6-33
円グラフおよびツリーマップ・グラフ	6-34
散布図	6-34
統計分析によるビジュアライゼーション内のデータの拡張	6-34
統計分析を開始する前に	6-35
ビジュアライゼーションには、どのような統計分析を追加できますか。	6-36
ビジュアライゼーションへの統計分析の追加	6-38
ビジュアライゼーションへの基準線の追加	6-40
言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションの追加	6-40
言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションについて	6-41
言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションの作成	6-43
スパーク・チャートを使用したトレンドの調査	6-44
ビジュアライゼーションでのデータのソート	6-45
編集を元に戻すおよびやり直し	6-45
データがないビジュアライゼーションに関するカスタム・エラー・メッセージの作成	6-46
ワークブックのデータのリフレッシュについて	6-46
ワークブックのデータのリフレッシュ	6-47
ワークブックでのデータ問合せの一時停止	6-47
キャンバス・プロパティの使用	6-48
キャンバス・レイアウト・プロパティについて	6-48
キャンバス・プロパティの更新	6-49
キャンバス・グリッド・ガイドラインを使用したビジュアライゼーションの配置	6-49
キャンバス上のビジュアライゼーション間のブラッシングについて	6-50
キャンバスでのビジュアライゼーションの同期について	6-51
キャンバス・データ・リフレッシュ・プロパティについて	6-52
ビジュアライゼーションまたはキャンバスのコピーと貼付け	6-52

ビジュアライゼーションのコピーおよび貼付け	6-53
キャンバス上の複数のビジュアライゼーションの操作	6-54
キャンバス上の複数のビジュアライゼーションの共通プロパティの更新	6-54
キャンバス上の複数のビジュアライゼーションのコピーと貼付け	6-54
キャンバス上の複数のビジュアライゼーションの削除	6-55
ビジュアライゼーション・タイプの変更	6-55
ビジュアライゼーション・プロパティについて	6-55
ビジュアライゼーション・プロパティの調整	6-56
ビジュアライゼーションの境界線のプロパティの設定	6-58
ビジュアライゼーションの影のプロパティの設定	6-58
表およびピボットでの表示名の変更	6-59
ビジュアライゼーションのデータ・ポイントのサイズ変更	6-59
グラフの線のパターンおよび幅の変更	6-60
ビジュアライゼーションへの色の適用	6-60
ビジュアライゼーションの色の割当てについて	6-61
色のオプションへのアクセス	6-61
色パレットの変更	6-62
列への色の割当て	6-63
条件付き書式を使用した重要なデータ・イベントの強調表示	6-64
条件付き書式の使用方法	6-64
既存の条件付き書式ルールを使用したデータの書式設定	6-67
データへの条件付き書式設定の追加	6-68
例 - メジャーと一連のしきい値との比較	6-70
例 - メジャーとターゲットまたは目標との比較	6-72
例 - メジャーと複合式の値との比較	6-73
例 - メジャーと値のパーセンテージの比較	6-74
列の数値の書式設定	6-75
ビジュアライゼーションの数値の書式設定	6-76
数値および通貨値のスケール・オプションの設定	6-76
ビジュアライゼーションの通貨記号の設定	6-77
ビジュアライゼーションへのノートの追加	6-77
ビジュアライゼーションへのノートの追加	6-77
ビジュアライゼーションのデータ・ポイントへのノートの接続	6-78
ノートのデータ・ポイント・コネクタの表示または非表示	6-79
ノートのデータ・コネクタの削除	6-79
ビジュアライゼーションのノートの表示または非表示	6-80
ビジュアライゼーションでのデータのソート、ドリルおよび選択	6-81
「マイ計算」の概要	6-82
クラスタまたは外れ値に基づいた計算の作成	6-84

Explain を使用したデータの分析	6-86
Explain とは何ですか。	6-86
インサイトとは何ですか。	6-86
Explain を使用したデータ・インサイトの検出	6-87
Explain で使用するデータセットの作成	6-89
ビジュアライゼーションのデータの問題に対する警告について	6-89
ダッシュボードでのワークブックおよびビジュアライゼーションの埋込み	6-90
ダッシュボードへのワークブック・キャンバスの埋込みに関するヒント	6-91
カタログ・フォルダの作成	6-91
共有カタログ・フォルダへのワークブックの保存	6-92
共有カタログ・フォルダとワークブック権限の割当て	6-93
共有ワークブックの権限の追加または更新	6-93
共有カタログ・フォルダ権限の追加または更新	6-94
ワークブック権限ルール	6-95
ワークブックを開くデフォルトの方法の構成	6-96
すべてのワークブックをデフォルトで編集モードで開くための構成	6-96
ワークブックを編集モードで開くように構成	6-97
ワークブック・サムネイルの設定	6-97
ビジュアライゼーション・ロード・オーバーレイの不透明度の設定	6-98
ワークブックのパーソナライズ(プレビュー)	6-98

7 データのフィルタ

フィルタとフィルタ・タイプについて	7-1
データセットとフィルタの相互作用の方法	7-2
データセットの数がフィルタに与える影響	7-2
自動的に適用されるフィルタについて	7-4
ワークブックでのデータのフィルタ処理	7-5
フィルタの選択値の指定	7-9
フィルタ・バーからの次により制限設定の有効化または無効化	7-10
ビジュアライゼーションのデータのフィルタ	7-11
ビジュアライゼーション・フィルタのラベルのカスタマイズ	7-12
ビジュアライゼーション・リスト・フィルタの複数選択の無効化	7-13
ダッシュボード・フィルタの使用	7-13
ダッシュボード・フィルタについて	7-14
ダッシュボード・フィルタ・ビジュアライゼーションを使用したデータのフィルタ	7-14
スライダ・ダッシュボード・フィルタを使用したビジュアライゼーションのフィルタ処理およびアニメーション化の概要	7-17
スライダ・ダッシュボード・フィルタを使用したビジュアライゼーションのフィルタ処理およびアニメーション化	7-20

メイン・フィルタ・バーとビジュアライゼーションの間でのフィルタのスコープの変更	7-23
ビジュアライゼーションのフィルタとしての使用	7-23
様々なフィルタ・タイプの適用	7-24
範囲フィルタの適用	7-24
上位下位 N 件フィルタの適用	7-25
リスト・フィルタの適用	7-26
日付範囲フィルタの適用	7-27
相対時間フィルタの適用	7-27
式フィルタを使用したデータのフィルタ	7-28
ロールベース・フィルタの適用	7-28
ロールベース・フィルタの使用の概要	7-29
アプリケーション・ロールに基づくデータセットのフィルタ	7-32
例 1 - ワークブックへの単純なロールベース・フィルタの適用	7-34
例 2 - ワークブックへの複数のロールベース・フィルタの適用	7-36

8 パラメータの作成および使用

パラメータの概要	8-1
システム・パラメータについて	8-2
パラメータのプロパティについて	8-2
パラメータの変更および削除について	8-4
パラメータの作成	8-4
二重列に論理 SQL 問合せを使用するパラメータの作成	8-5
SQL 式データ型を使用するパラメータの作成	8-6
パラメータを参照するための構文	8-9
フィルタへのパラメータのバインド	8-9
フィルタへのパラメータのバインドについて	8-10
パラメータの作成およびフィルタへのバインド	8-10
パラメータの作成およびリスト・ボックス・ダッシュボード・フィルタへのバインド	8-11
パラメータの作成と二重列タイプ・フィルタへのパラメータのバインド	8-12
フィルタへの既存パラメータのバインド	8-12
パラメータの使用	8-13
フィルタ・バーでのパラメータの使用	8-13
ダッシュボード・フィルタ・コントロールとしてのパラメータの使用	8-14
ビジュアライゼーションのタイトルでのパラメータの使用	8-15
パラメータをビジュアライゼーションの軸ラベルとして使用	8-16
パラメータをタイル・ビジュアライゼーションのメジャー・ラベルで使用	8-17
式フィルタでのパラメータの使用	8-18
計算でのパラメータの使用	8-19

分析リンク・データ・アクションを使用してパラメータ値を渡す	8-19
URL ナビゲーション・データ・アクションを使用してパラメータ値を渡す	8-21

9 ビジュアライゼーションを強化するためのマップ背景およびマップ・レイヤーの適用

マップ背景について	9-1
マップ背景によるビジュアライゼーションの強化	9-2
ワークブックでの異なるマップ背景の使用	9-3
マップ・ビジュアライゼーションで色とサイズを使用したデータ値の解釈	9-3
カスタム・マップ・レイヤーの追加	9-4
カスタム・マップ・レイヤーの更新	9-6
別のマップ・レイヤーを使用するように切替え	9-6
単一のマップ・ビジュアライゼーションへの複数のデータ・レイヤーの適用	9-6
マップ背景としてのイメージの使用およびイメージ上でのマップ・レイヤー形状の描画	9-7
マップ背景としてのイメージのアップロード	9-7
アップロードしたイメージへのカスタム・マップ・レイヤー・スナップの描画	9-8
アップロードされたイメージに描画されたマップ・レイヤー形状とのデータセットの関連付け	9-9
データ列へのマップ・レイヤーの割当て	9-9
マップ・ビジュアライゼーションのデータへの自動フォーカス	9-10
マップ・ビジュアライゼーションのズームの構成	9-10
マップ・ビジュアライゼーションの場所の一致の確認	9-11
マップ・ビジュアライゼーションでのヒートマップ・レイヤーの作成	9-12
マップ・ビジュアライゼーションでのクラスタ・レイヤーの作成	9-13
マップ上のカスタム・アイコンでのポイント・データの表現	9-14
マップ上でのポイントまたは領域の選択	9-15
マップ上のサイズおよび色を使用した線データの表現	9-15
マップ・レイヤーと背景をユーザーに対して使用可能にする方法	9-16
デフォルトとしてのマップ背景の使用	9-16
マップの背景の追加	9-16
Google マップの背景の追加	9-16
Baidu マップの背景の追加	9-17
Web マップ・サービス(WMS)の背景の追加	9-18
タイル Web マップ(XYZ)の背景の追加	9-19
Web マップ背景のトラブルシューティングのヒント	9-20
マップでのアウトラインのポイントおよび形状への追加	9-20
マップへのデータ・ラベルの追加	9-21

10 データ・アクションの使用

ビジュアライゼーション・キャンバスに接続するためのデータ・アクションの作成	10-1
ビジュアライゼーション・キャンバスから外部 URL に接続するためのデータ・アクションの作成	10-3
HTTP API データ・アクションの作成について	10-3
HTTP データ・アクションの作成	10-4
Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続するためのデータ・アクションの使用	10-5
Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続するためのデータ・アクションの作成について	10-6
Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続するためのデータ・アクションの作成	10-6
データ・アクションにカスタム列名を作成して Oracle Business Intelligence Publisher レポート URL に渡す	10-7
ビジュアライゼーション・キャンバスからのデータ・アクションの起動	10-8
データ・アクションがフィルタに与える影響	10-8
外部コンテナに埋め込まれたビジュアライゼーションのデータ・アクションの作成	10-10
埋込みコンテンツを含むデータ・アクションの実行	10-11

11 カスタム・データ・アクション・プラグインの作成

データ・アクション・プラグインおよびデータ・アクション・フレームワークについて	11-1
データ・アクション・カテゴリ	11-2
データ・アクション・コンテキスト	11-3
データ・アクション・コード設計	11-4
データ・アクション・モデル・クラス	11-4
データ・アクション・サービス・クラス	11-6
データ・アクション・コード相互作用	11-8
データ・アクション plugin.xml ファイルの例	11-9
データ・アクション・プラグインのファイルとフォルダ	11-10
拡張するために最適なデータ・アクション・クラスの選択	11-10
AbstractDataAction クラス	11-11
DataActionKOModel クラス	11-12
CanvasDataAction クラス	11-13
EventDataAction クラス	11-13
AbstractHTTPDataAction クラス	11-14
URLNavigationDataAction クラス	11-14
HTTPAPIDataAction クラス	11-15
テンプレートからのデータ・アクション・プラグインの生成	11-16
生成されたフォルダとファイル	11-17

データ・アクション・ベース・クラスの拡張	11-17
オーバーライドするデータ・アクションの継承メソッドの選択	11-19
データ・アクションのテスト、パッケージ化およびインストール	11-22
Knockout モデル変更のためのアップグレード・ハンドラの使用	11-23
データ・アクション・プラグインのアップグレード	11-24
データ・アクション・プラグイン・ファイルのリファレンス	11-24
データ・アクション plugin.xml ファイルの例	11-25
データ・アクション plugin.xml ファイルのプロパティ・セクション - tns:obiplugin	11-26
データ・アクション plugin.xml ファイルのリソース・セクション - tns:resources	11-26
データ・アクション plugin.xml ファイルの拡張機能セクション - tns:extension	11-29

12 その他の機能を使用したデータのビジュアル化

ツールチップによる内容の識別	12-1
カスタム・プラグインの管理	12-2
式の作成	12-2
ホーム・ページからのデータのビジュアル化	12-3
変更内容の自動保存	12-4
ページでの項目のソート	12-4

13 プレゼンテーション・フローの作成

プレゼンテーション・フローとは	13-1
「表示」の自動モードと手動モードとは	13-2
「表示」の自動モードと手動モードの切り替え	13-2
プレゼンテーション・フローを開く	13-3
「表示」でのキャンバス・レイアウトの指定	13-3
「表示」でのキャンバスの再配置	13-4
「表示」でのキャンバスの複製	13-4
「表示」での重複しているキャンバスの削除	13-5
「表示」でのキャンバスの非表示	13-6
非表示になっているキャンバスの「表示」での表示	13-7
「表示」のキャンバス上のビジュアライゼーションの移動または非表示について	13-7
「表示」のキャンバスにおけるビジュアライゼーションの配置の変更	13-8
「表示」でのキャンバスのリセット	13-8
「表示」での「ワークブック」プロパティの設定	13-9
「表示」でのワークブック・キャンバス・ナビゲーションの指定	13-10
「表示」でのワークブックのヘッダー・バーの表示または非表示	13-11
「表示」でのワークブックのヘッダー・タイトルの変更	13-11

「表示」でのワークブックのヘッダーの色の変更	13-12
「表示」でのワークブック・ヘッダーへのイメージの追加	13-13
「表示」でのワークブックのツールバーの表示または非表示	13-14
「表示」でのワークブック・ツールバー・オプションの選択	13-15
「表示」でのワークブックのフィルタ・バーの表示または非表示	13-15
「表示」でのワークブック・フィルタ・オプションの指定	13-16
「表示」でのワークブックのフィルタの表示または非表示	13-16
「表示」でのワークブック・ビジュアライゼーション・アクションの指定	13-16
「表示」でのワークブック・キャンバスのビジュアライゼーションの配置の変更	13-17
「表示」でワークブックおよびキャンバスのアクションをすべてオンまたはオフ	13-18
「表示」での「キャンバス」プロパティの設定	13-18
「表示」でのキャンバス・フィルタ・アクションの指定	13-19
「表示」でのキャンバス・フィルタの表示または非表示	13-19
「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーション・ツールバー・オプションの選択	13-20
「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーション・メニュー・オプションの指定	13-20
「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーションの表示または非表示	13-21
「表示」でのキャンバス・ノートの表示または非表示	13-22
プレゼンテーション・フローのプレビュー	13-22

14 Oracle Analytics 予測モデルおよび Oracle 機械学習モデルの使用

Oracle Analytics がサポートする機械学習および人工知能サービス	14-1
Oracle Analytics 予測モデルの作成および使用	14-2
Oracle Analytics 予測モデルとは	14-2
予測モデル・アルゴリズムの選択方法	14-3
Oracle Autonomous Data Warehouse の AutoML を使用した予測モデルのトレーニング	14-6
予測モデルの作成およびトレーニング	14-7
機械学習モデルのトレーニングのデータ・フロー・ステップ	14-9
予測モデルの検査	14-9
予測モデルの詳細の表示	14-9
予測モデルの質の評価	14-10
予測モデルの関連データセットとは	14-10
予測モデルの関連データセットの検出	14-14
ワークブックへの予測モデルの追加	14-14
リフトおよびゲイン・チャートを使用した機械学習モデルの評価	14-15
リフトおよびゲイン・チャートの使用の概要	14-15
リフトおよびゲイン・チャートの予測データの生成	14-17
リフトおよびゲイン・チャートを使用した機械学習モデルの評価	14-18

Oracle Analytics での Oracle 機械学習モデルの使用	14-19
Oracle Analytics では Oracle 機械学習モデルをどのように使用できますか。	14-19
Oracle Analytics への Oracle 機械学習モデルの登録	14-20
登録されている Oracle 機械学習モデルの検査	14-20
登録されているモデルの詳細の表示	14-21
登録されているモデルのビューとは	14-21
登録されているモデルのビュー・リストの表示	14-22
登録されている Oracle 機械学習モデルのビューのビジュアル化	14-23
予測モデルまたは登録されている Oracle 機械学習モデルのデータセットへの適用	14-23
オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析の実行	14-25
オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析モデルのパラメータ・オプション	14-27
オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析モデル用に生成された出力データ	14-27
Oracle Analytics での OCI Data Science モデルの使用	14-29
データセットへの OCI Data Science モデルの適用	14-29
Oracle Analytics での OCI Document Understanding モデルの使用	14-31
ドキュメント分類およびキー値抽出の概要	14-31
OCI Document Understanding モデルによる分析対象のドキュメントの作成	14-32
ドキュメント分類およびキー値抽出の実行	14-35
OCI Document Understanding モデルのパラメータ・オプション	14-38
OCI Document Understanding モデルに生成された出力データ	14-39
Oracle Analytics での OCI Language モデルの使用	14-41
データセットへの OCI Language モデルの適用	14-42
データセット内の機密データの不明瞭化	14-44

15 インポート、エクスポートおよび共有

ワークブック・ファイルのインポート	15-1
ワークブックの共有	15-2
選択した特定のキャンバスとのワークブック URL の共有	15-3
ワークブックまたはフォルダのファイルとしてのエクスポート	15-4
「ビジュアル化」または「表示」ページからのビジュアライゼーションのエクスポート	15-5
ビジュアライゼーションから Excel への書式設定されたデータのエクスポート(プレビュー)	15-6
ソーシャル・メディアとのビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードの共有	15-6
ソーシャル・メディアと共有しているファイルの管理	15-7
ビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードのファイルの電子メール送信	15-7
ビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードの印刷	15-8

ワークブック電子メール・スケジュールを使用したビジュアライゼーションの共有(プレビュー)	15-8
ワークブック電子メール・スケジュールの作成について(プレビュー)	15-9
ワークブック電子メール・スケジュールの作成(プレビュー)	15-10
バースティング・ワークブック電子メール・スケジュールの作成(プレビュー)	15-11
ワークブックのスケジュールおよびジョブの管理(プレビュー)	15-12

第 IV 部 レポート・データ

16 分析の作成

分析の作成の一般的なワークフロー	16-1
最初の分析の作成	16-2
列のプロパティの設定	16-3
コンテンツへの書式設定の適用	16-4
列の書式設定	16-5
分析を動的に設定	16-6
分析への相互作用の追加	16-6
相互作用を使用可能にする方法	16-7
システムに対するデフォルト書式の設定	16-8
分析およびダッシュボードからのコンテンツのエクスポート	16-8
分析の結果のエクスポート	16-9
ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのエクスポート	16-9
エクスポートのヒント	16-9
式または計算済メジャーの編集	16-10
列の式の編集	16-10
計算済メジャーの編集	16-12
分析のプロパティの設定	16-12
プリファレンスの設定	16-13
高度な手法: 別の分析からの書式設定のインポート	16-14
列からの書式設定の適用について	16-14
ビューからの書式の適用について	16-14
コンテナからの書式設定の適用について	16-14
保存済分析からターゲット分析への書式設定のインポート	16-15
高度な手法: HTML タグを使用した書式設定	16-15
高度な手法: データを異なる方法で表示するための列の結合	16-16
高度な手法: 分析用論理 SQL 文の確認	16-17
高度な手法: 分析のキャッシュ・オプションの設定	16-18
高度な手法: 変数の格納値の参照	16-18

セッション変数について	16-19
システム・セッション変数	16-19
システム以外のセッション変数	16-20
リポジトリ変数について	16-20
プレゼンテーション変数について	16-20
リクエスト変数について	16-21
グローバル変数について	16-21
グローバル変数の作成	16-21
変数を参照する構文	16-23
セッション変数	16-24
プレゼンテーション変数	16-24
リポジトリ変数	16-25
高度な手法: 直接データベース・リクエストの発行	16-25
直接データベース・リクエストに必要な権限	16-25
直接データベース・リクエストの作成と実行	16-26

17 様々な方法でのデータの表示

様々な方法でデータを表示するための一般的なワークフロー	17-2
ビューについて	17-2
ビューの追加	17-4
ビューの編集	17-5
様々なタイプのビューの編集	17-5
表ビューおよびピボット表ビューの編集	17-6
パフォーマンス・タイル・ビューの編集	17-7
ツリーマップ・ビューの編集	17-8
ヒート・マトリックス・ビューの編集	17-10
ヒート・マトリックス・ビューについて	17-11
トレリス・ビューの編集	17-12
トレリス・ビューの機能について	17-14
単純トレリスと拡張トレリスについて	17-14
トレリス・ビューおよびマイクロチャートの設計上の考慮事項	17-16
ゲージ・ビューの編集	17-17
しきい値の設定	17-18
マップ・ビューの編集	17-18
マップ・ビューについて	17-19
マップ・ビューのフォーマットとレイヤーについて	17-21
マップ・ビューのフォーマットとレイヤーの編集	17-24
マップ・ビューのレイヤーに対する書式の適用	17-25

マップ・ビューの操作	17-25
マップ・ビューの初期ビュー・ポートの設定	17-27
ナレーティブ・ビューの編集	17-28
データ以外のビューの編集	17-29
列セレクト・ビューについて	17-29
ビュー・セレクト・ビューについて	17-30
フィルタ・ビューについて	17-30
選択ステップ・ビューについて	17-30
静的テキスト・ビューについて	17-30
タイトル・ビューについて	17-30
分析でのデータのグラフ化	17-31
グラフ・ビューの編集	17-31
グラフのズームおよびスクロール	17-32
グラフの外観の書式設定	17-33
位置に基づいたグラフの書式設定	17-33
列に基づいたグラフの書式設定	17-33
グラフの条件付き書式の適用に関するルール	17-34
グラフの列に対する条件付き書式設定の例外	17-35
グラフおよびゲージに表示されるデータの制限	17-35
グラフとゲージのセクション・スライダの定義	17-35
グラフおよびゲージのセクション・スライダの使用	17-36
ビューの保存	17-36
ビューの再配置	17-36
ビューの結果のリフレッシュ	17-37
ビューの印刷	17-37
ビューの印刷オプションの変更	17-38
ダッシュボードに表示されるビューのプレビュー	17-38
ビューの除去	17-39
ビューでの値のソート	17-39
ビュー内のソートのクリア	17-40
結果のドリル	17-41
ドリルについて	17-41
表とその他のビューのドリル	17-41
グラフのドリル	17-42
マップ・ビューのドリル	17-43
ビュー内の行および列のサイズ変更	17-44
ビューでのサイズ変更の構成	17-44
ビューでのサイズ変更	17-44
ビューでの Null 値の抑制	17-45

表示するビューの構築	17-45
マスター詳細関係でのビューのリンク	17-46
マスター・ビューの定義	17-47
詳細ビューの定義	17-48
ビューのデータのレイアウトの変更	17-49
ビューでの列の追加と再配置	17-49
ビューへの列の追加	17-49
ビューからの列の除去	17-50
ビューでの列の再配置	17-50
ビュー内のデータ・セクションのプロパティの設定	17-51
表およびピボット表への合計の追加	17-52
ピボット表での合計と相対値の表示	17-52
ピボット表でのメジャー列の累計の表示	17-53
ピボット表でのメジャー列の相対値の表示	17-53
「レイアウト」ペインのドロップ・ターゲットについて	17-54
ドロップ・ターゲットのタイプについて	17-54
「除外」ドロップ・ターゲットについて	17-55
様々なビューのドロップ・ターゲットのガイドラインについて	17-56
グラフおよびファンネル・グラフに対するドロップ・ターゲットのガイドライン	17-56
ヒート・マトリックスに対するドロップ・ターゲットのガイドライン	17-57
トレリスに対するドロップ・ターゲットのガイドライン	17-58
ツリーマップに対するドロップ・ターゲットのガイドライン	17-59
分析でのデータのビジュアル化	17-59

18 ダッシュボードの作成

ダッシュボードを作成するための一般的なワークフロー	18-1
最初のダッシュボードの作成	18-2
ダッシュボードの編集	18-3
ダッシュボードでのページの追加と削除	18-3
ダッシュボードへのページの追加	18-4
ダッシュボードへのサブページの追加	18-4
ダッシュボード・ページへのコンテンツの追加	18-4
ダッシュボード・ページと BI Publisher レポートがどのように相互作用するかを理解	18-5
ダッシュボードとページのスタイルおよび動作の構成	18-6
ダッシュボード・ページに追加されたオブジェクトのプロパティの変更	18-7
ダッシュボード・ページのオブジェクトの削除	18-8
ダッシュボード・ページの削除	18-8
ダッシュボード・サブページの削除	18-8

ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのレイアウトの作成および管理	18-9
印刷とエクスポートのカスタム・レイアウトについて	18-9
カスタム・レイアウトの作成	18-10
カスタム・レイアウトの編集、置換または除去	18-11
BI Publisher のカスタム印刷レイアウトでサポートされないアイテム	18-11
ダッシュボードの印刷	18-12
ブリーフィング・ブック内のダッシュボード・ページの編成	18-12
新規または既存のブリーフィング・ブックへのコンテンツの追加	18-12
ブリーフィング・ブックのコンテンツの編集	18-13
ブリーフィング・ブックのダウンロード	18-13
ブリーフィング・ブックのリストをダッシュボード・ページに追加します	18-14
デフォルトの選択項目を含むダッシュボード・ページの表示時間の改善	18-14
ダッシュボード状態の保存および復元	18-15
ダッシュボード・ページのカスタマイズの保存	18-16
保存されたカスタマイズの適用	18-16
保存済カスタマイズの編集	18-16
現在のカスタマイズのクリア	18-17
ダッシュボード・ページの公開	18-17
ダッシュボード・ページへのリンク	18-17
ブックマーク・リンクについて	18-18
ダッシュボード・ページへのリンクの作成	18-18

19 分析用データのフィルタリングと選択

データをフィルタ処理して選択するための一般的なワークフロー	19-1
フィルタおよび選択ステップについて	19-2
プロンプト・フィルタについて	19-2
列に対するフィルタの作成	19-2
インライン・フィルタおよび名前付きフィルタの作成	19-3
フィルタの値の指定	19-3
フィルタへの EVALUATE_PREDICATE 関数の埋込み	19-5
フィルタの組合せとグループ化	19-5
フィルタの保存	19-6
列に対するフィルタの編集	19-6
フィルタの再利用	19-8
保存済分析のフィルタとしての使用	19-8
高度な手法: ダッシュボード・プロンプトと分析プロンプトとの相互作用	19-9
データの選択の絞込み	19-10
選択ステップの作成	19-10

選択ステップの編集	19-11
再利用するための選択ステップの保存	19-11
高度な手法: 条件ステップの作成	19-12
グループと計算項目を使用したメンバーの操作	19-14
グループおよび計算項目について	19-14
グループと計算項目の作成	19-15
グループと計算項目の編集	19-16
グループのコンテンツの表示	19-17
グループと計算項目の保存	19-17
分析でのグループまたは計算項目の再利用	19-18
グループおよび計算項目の削除	19-19

20 分析とダッシュボードでのプロンプト

分析およびダッシュボードでプロンプトを作成するための一般的なワークフロー	20-1
プロンプトの作成	20-1
列プロンプトの作成	20-2
変数プロンプトの作成	20-3
プロンプトによる選択ステップのオーバーライド	20-5
通貨プロンプトの作成	20-5
プロンプトの編集	20-6
ダッシュボード・ページへのプロンプトの追加	20-7
ダッシュボード・ページへの非表示プロンプトの追加	20-7

21 分析のインタラクティブ化

分析をインタラクティブにするための一般的なワークフロー	21-1
再利用するための名前付きアクションの作成	21-2
インライン・アクションの作成	21-2
分析へのアクションの追加	21-3
ダッシュボード・ページへのアクションの追加	21-4
アクション・リンクによるダッシュボード・ページへのアクションの追加	21-4
アクション・リンク・メニューによるダッシュボード・ページへのアクションの追加	21-4
名前付きアクションの編集	21-5
分析内のアクション・リンクの編集および削除	21-6
ダッシュボード・ページ内のアクション・リンクの編集および削除	21-6
分析内のインライン・アクションのカタログへの保存	21-7
ダッシュボード内のインライン・アクションのカタログへの保存	21-8

22 コンテンツの管理

コンテンツを管理するための一般的なワークフロー	22-1
カタログ・オブジェクトの名前付け制限について	22-2
コンテンツの名前変更	22-2
項目の名前変更	22-2
ビューの名前変更	22-3
お気に入りへの容易なアクセス	22-3
カタログ・ページからのお気に入りの追加	22-3
カタログ・ページからのお気に入りの除去	22-3
他のページからのお気に入りの追加または除去	22-4
アクセス・プロパティ	22-4
アクセス権限の割当	22-5
品目権限の追加または更新	22-5
ダッシュボード選択権限の追加または更新	22-6
レポートの電子メール送信と配信のトラッキング	22-7
1回のみ、週次または日次のレポートの電子メール送信	22-7
電子メールまたはエージェント経由で配布するレポートのトラッキング	22-8
電子メール・セキュリティ・アラート	22-10
エージェントによるビジネス・プロセスの自動化	22-10
コンテンツを配信するエージェントの作成	22-10
分析からコンテンツを直接配信するためのエージェントのスケジューリング	22-12
エージェントのスケジュールの無効化と有効化	22-12
エージェントのサブスクライブ	22-13
サブスクライブまたは所有するエージェント・リストの表示	22-13
アラートへのアクセスおよび管理	22-13
デバイスと配信プロファイルの構成	22-14
デバイスと配信プロファイルについて	22-14
デバイスの構成	22-15
配信プロファイルの構成	22-15
項目の所有権の割当て	22-16
項目の所有権の想定	22-16
コンテンツへの外部イメージおよび他の外部リソースの埋込みについて	22-17
Smart View でのレポート・コンテンツへのアクセス	22-17
Microsoft Power BI でのレポート・コンテンツへのアクセス	22-18
高度なカタログ管理の実行	22-18
カタログ・マネージャのデプロイ	22-18
Oracle Analytics Client Tools のダウンロードおよびインストール	22-19
カタログ・マネージャを使用したカタログ・データを表示するレポートの作成	22-21

レポートの使用例	22-21
XML でのカタログ・オブジェクトの表示	22-22
XML でのカタログ・オブジェクトの編集	22-23
カタログ・マネージャを使用したカタログ・テキストの検索と置換	22-24
単純なカタログ・テキスト文字列の検索と置換	22-25
複数のカタログ・テキスト文字列の検索と置換について	22-25
複数のカタログ・テキスト文字列の検索と置換	22-26

第 V 部 データの公開

23 ピクセルパーフェクト公開の概要

ピクセルパーフェクト・レポートの概要	23-1
レポート・コンシューマのタスク	23-1
アカウント・プリファレンスの設定	23-2
カタログについて	23-2
カタログの参照	23-2
カタログの検索	23-3
デスクトップ・ツールのダウンロード	23-3

24 ピクセルパーフェクト・レポートの表示

レポートの表示	24-1
レポート・ビューアを使用したピクセルパーフェクト・レポートの構成	24-1
パラメータを指定	24-2
パラメータ値の検索	24-3
レイアウトの選択	24-3
出力タイプの選択	24-3
出力タイプ	24-3
アクションの実行	24-5
アクション	24-5

25 ピクセルパーフェクト・レポート・ジョブの作成

レポート・ジョブのスケジュール・ページへの移動	25-1
一般オプションの設定	25-1
出力オプションの設定	25-2
レポート出力への宛先タイプの追加	25-3
レポート出力の宛先タイプ	25-3

「コンテンツ・サーバー」宛先タイプのプロパティ	25-4
出力の追加	25-5
ジョブのスケジュールの定義	25-6
繰り返しパターンの定義	25-6
スケジュール・トリガーの使用	25-8
スケジュール・トリガーについて	25-8
スケジュール・トリガーの有効化	25-8
通知の構成	25-9
ジョブの発行およびモニター	25-9
既存のジョブからのジョブの作成	25-9
バースティング・ジョブの作成	25-10
高度なトピック	25-10
日付パラメータの増分	25-10
日付式を使用した宛先ファイル名の動的な定義	25-11
例	25-12

26 ピクセルパーフェクト・レポート・ジョブの表示および管理

レポート・ジョブの管理ページについて	26-1
レポート・ジョブの管理ページへのアクセス	26-1
特定のレポートに対するジョブの表示	26-2
レポート・ジョブの検索	26-2
ジョブを表示するタイム・ゾーンの設定	26-3
ジョブ詳細を表示	26-3
ジョブの休止	26-3
ジョブの再開	26-3
ジョブの削除	26-4
ジョブの編集	26-4

27 ピクセルパーフェクト・レポート履歴の表示および管理

レポート・ジョブの履歴および保存された出力の表示	27-1
特定のレポートに対するジョブ履歴の表示	27-2
レポート・ジョブ履歴の検索	27-2
ジョブ履歴の詳細の表示	27-3
レポート・ジョブからのデータのダウンロード	27-3
レポート・ビューアでの履歴からの再公開	27-3
履歴からのレポートの再公開	27-4
新しい宛先への出力の送信	27-4

実行中のジョブのモニター	27-4
ジョブのステージの処理	27-5
実行中のジョブの取消し	27-5
レポートのエラーおよび警告情報の取得	27-6
ジョブ履歴の削除	27-6

28 ピクセルパーフェクト・レポートの管理

フォルダの概要	28-1
「カタログ」に格納されているレポート・コンポーネント	28-1
フォルダまたはサブフォルダの作成	28-2
カタログ・オブジェクトに対するタスクの実行	28-2
カタログ・オブジェクトのダウンロードとアップロード	28-3
レポートによって参照されるオブジェクトへのアクションの実行に対する影響の理解	28-3
カタログ翻訳ファイルのエクスポートとインポート	28-3

第 VI 部 リファレンス

29 よくある質問

検索とレポート作成に関する FAQ	29-2
データの公開に関する FAQ	29-6

30 トラブルシューティング

使用可能な診断ツール	30-1
一般的な問題のトラブルシューティング	30-2
ワークブック、分析およびダッシュボードでの問題のトラブルシューティング	30-6
ビジュアライゼーションの問題のトラブルシューティング	30-8

31 データ準備のリファレンス

変換推奨のリファレンス	31-1
クイック・データ変換の列メニュー・オプション	31-2
「開発者」オプション	31-2
開発者オプションの有効化	31-3
OCI テナントへの接続の作成	31-3
Oracle Analytics の OCI 関数との統合	31-5
Oracle Analytics での OCI 関数の使用について	31-5

Oracle Analytics で使用する OCI 関数の構成について	31-5
OCI 関数と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー	31-9
OCI 関数を使用したデータの変換のための一般的なワークフロー	31-10
Oracle Analytics での OCI 関数の登録	31-11
Oracle Analytics の OCI Data Science との統合	31-11
OCI Data Science モデルを Oracle Analytics と統合するための前提条件	31-12
OCI Data Science と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー	31-12
Oracle Analytics で OCI Data Science モデルを使用可能にする方法	31-14
Oracle Analytics と OCI Document Understanding の統合	31-16
Oracle Analytics と OCI Document Understanding を統合するための一般的なワークフロー	31-16
OCI Document Understanding を Oracle Analytics と統合するために必要なポリシー	31-17
Oracle Analytics での OCI Document Understanding モデルの有効化	31-18
Oracle Analytics の OCI Language との統合	31-23
OCI Language モデルを Oracle Analytics と統合するための前提条件	31-23
OCI Language と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー	31-23
Oracle Analytics で OCI Language モデルを使用可能にする方法	31-24
Oracle Analytics の OCI Vision との統合	31-26
Oracle Analytics と Vision の統合の概要	31-26
OCI Vision と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー	31-27
Oracle Analytics と Vision を統合するための一般的なワークフロー	31-28
Vision モデルを使用した分析用のイメージの準備	31-28
Oracle Analytics で Vision モデルを使用可能にする方法	31-31

32 式エディタのリファレンス

セマンティック・モデル・オブジェクト	32-1
SQL 演算子	32-1
条件式	32-3
分析およびビジュアライゼーションで CASE 文を使用するためのベスト・プラクティス	32-5
関数	32-7
集計関数	32-7
分析関数	32-10
変換関数	32-11
日付と時間関数	32-12
日付抽出関数	32-14
表示関数	32-16
評価関数	32-17
算術関数	32-18

集計実行関数	32-19
空間関数	32-20
文字列関数	32-21
システム関数	32-24
時系列関数	32-24
定数	32-28
型	32-28
変数	32-28

33 アプリケーションおよび Web ページへの分析コンテンツの埋込み

分析コンテンツの埋込みについて	33-1
安全ドメインとしての埋込み環境の登録	33-1
iFrame を使用した埋込み	33-2
iFrame を使用したコンテンツの埋込みに関する考慮事項	33-2
iFrame を使用したコンテンツの埋込み	33-2
JavaScript 埋込みフレームワークを使用した埋込み	33-3
JavaScript 埋込みフレームワークを使用するための一般的なワークフロー	33-3
JavaScript 埋込みフレームワークを使用したコンテンツの埋込みの開始	33-4
開発者オプションの有効化	33-5
コンテンツの Javascript および HTML の検索	33-5
HTML ページの準備	33-5
HTML ページにフィルタを渡す	33-9
HTML ページにパラメータを渡す	33-11
HTML ページのデータのリフレッシュ	33-12
Oracle JET を使用するカスタム・アプリケーションへの埋込み	33-13
Oracle JET を使用しないカスタム・アプリケーションへの埋込み	33-14
認証の追加	33-15
ログイン・プロンプト認証の使用	33-15
3-Legged OAuth 認証の使用	33-16
トークン認証の使用	33-17

34 動作保証情報

動作保証 - サポートされているブラウザ	34-1
----------------------	------

はじめに

ワークブックとレポートを作成することで、このサービスの使用によるデータの検索と分析の方法を学習します。

トピック:

- [対象読者](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティについて](#)
- [ダイバーシティ&インクルージョン](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

対象読者

このガイドは、**Oracle Analytics Cloud** を使用して次のことを行うビジネス・アナリストおよびビジネス・ユーザーを対象としています:

- セルフサービス・データ・モデル(データセット)を作成し、それを使用して、ビジネスに関する説得力のある事例を明らかにするワークブックおよびデータ・ビジュアライゼーションを作成する。
- レポートおよびダッシュボード・ページを作成して準備し、ビジネス・ユーザーと共有して、ビジネス全体のアクティビティを迅速に分析および管理する。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、**Oracle Accessibility Program** の Web サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Support へのアクセス

サポートをご契約のお客様には、**My Oracle Support** を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>)か、聴覚に障害のあるお客様は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>)を参照してください。

ダイバーシティ&インクルージョン

Oracle はダイバーシティ & インクルージョンに積極的に取り組んでいます。**Oracle** は、ソート・リーダーシップと革新性を高める社員の多様性を尊重し、その価値を重んじています。従業員、お客様、パートナー様にポジティブな影響をもたらすインクルーシブな文化を醸成する私たちのイニシアティブの一環として、製品やドキュメントからインセンシティブな用

語を取り除くように努めています。また、Oracle 製品および業界標準が進化する中、お客様の既存の技術との互換性を維持する必要性およびサービスの継続性確保の要求にも留意しています。このような技術的な制限により、当社のインセンティブな用語を削除する取組みは継続中であり、時間と皆様のご協力が必要となります。

関連ドキュメント

これらの関連 Oracle リソースで詳細情報を入手できます。

- ガイドの完全なリストは、Oracle Analytics Cloud ヘルプ・センターの「Guides」タブを参照してください。

表記規則

このトピックでは、このドキュメントで使用される表記規則について説明します。

テキストの表記規則

表記規則	意味
太字	太字は、アクションに関連付けられたグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素や、本文または用語集で定義されている用語を示します。
イタリック体	イタリック体は、ブック・タイトル、強調、またはユーザーが特定の値を指定するプレースホルダー変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、またはユーザーが入力するテキストを示します。

ビデオおよび画像

スキンおよびスタイルを使用すると、アプリケーション、ダッシュボード、レポートおよびその他のオブジェクトの外観をカスタマイズできます。製品ドキュメントに含まれているデオおよび画像は、ご使用のスキンおよびスタイルと外観が異なる場合があります。

スキンおよびスタイルがビデオおよび画像で示されているものと異なっていても、示されている製品の動作と技術に違いはありません。

第1部

Oracle Analytics Cloud でのビジュアライゼーションおよびレポートの概要

ここでは、Oracle Analytics Cloud でのデータのビジュアル化およびレポートの作成について説明します。


章:

- [データのビジュアル化とレポートの作成の概要](#)

1

データのビジュアル化とレポートの作成の概要

このトピックでは、データのビジュアル化とレポートの作成の開始方法について説明します。

 チュートリアル

トピック:

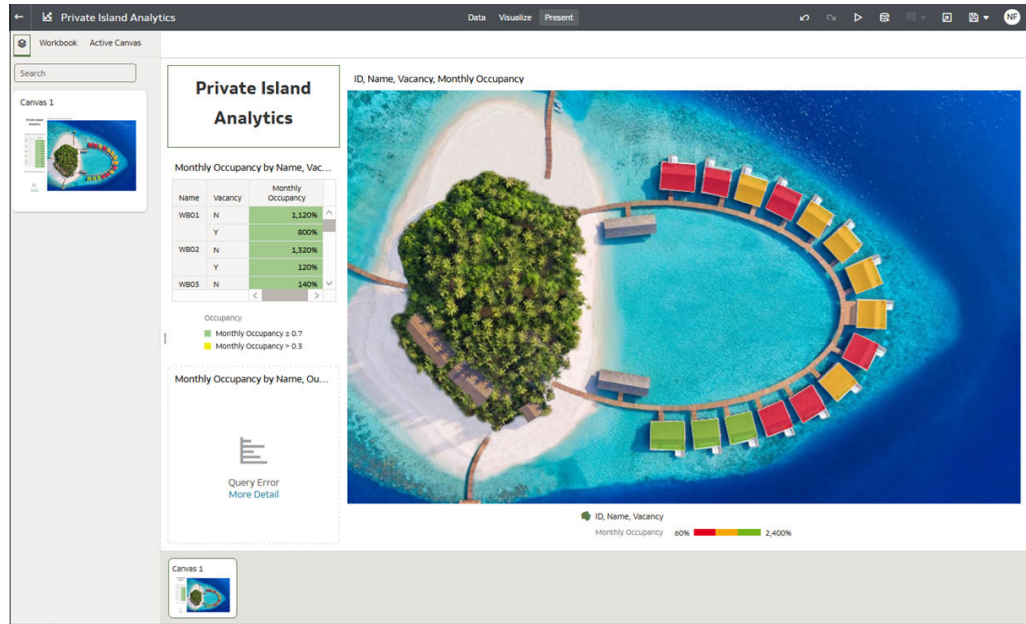
- [ビジュアライゼーションおよび分析について](#)
- [Oracle Analytics Cloud へのアクセス](#)
- [コンテンツの検索](#)
- [ウォッチリストについて](#)
- [モバイル・デバイスでのコンテンツの表示](#)

ビジュアライゼーションおよび分析について

ビジュアライゼーションおよび分析を使用して、グラフ形式で表示されている主要ビジネス・データから必要な回答を見つけます。

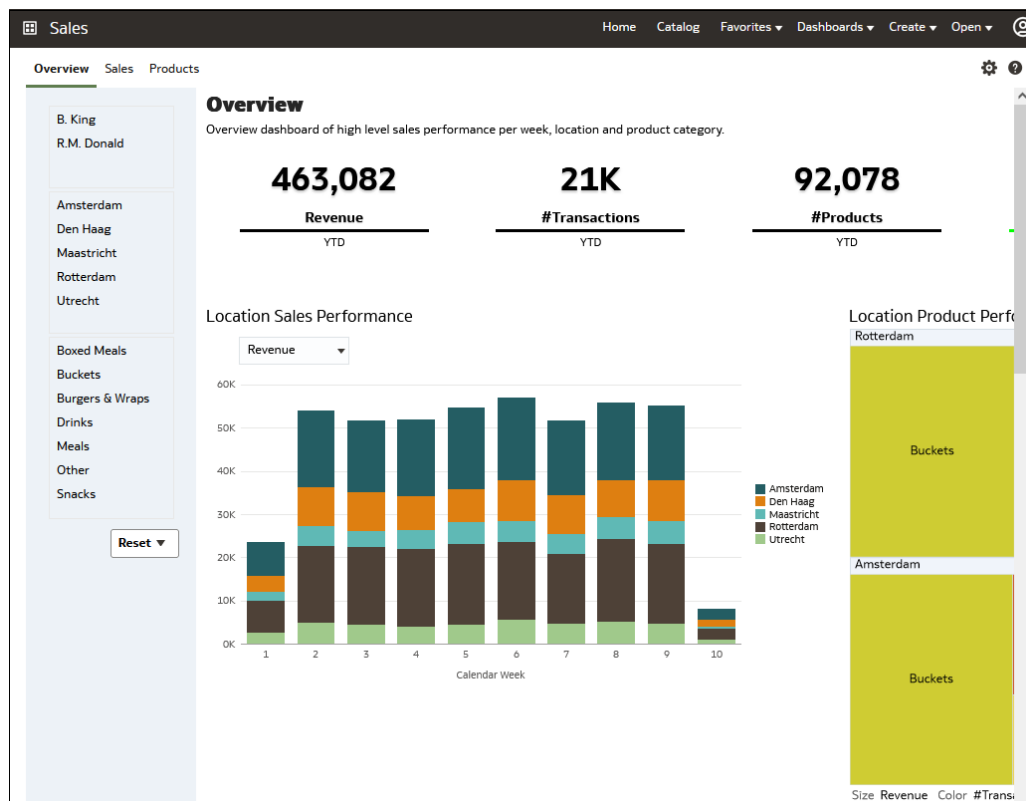
ビジュアライゼーション

ビジュアライゼーションでは、複数のデータセットをグラフィカルな方法で、すべてを単一のインターフェース内で動的に検索できます。一般的に使用されているデータ・ソースからデータをビジュアル化できます。ワークブックにより、ビジュアライゼーションを編成および共有できます。



分析

分析は、ビジネス上の疑問に対する回答を得るための、組織のデータに対する問合せです。分析では、表、グラフ、ピボット表およびその他のデータ・ビューの情報を視覚的に調査して対処できます。さらに、分析の結果を保存、編成したり、他のユーザーと共有できます。



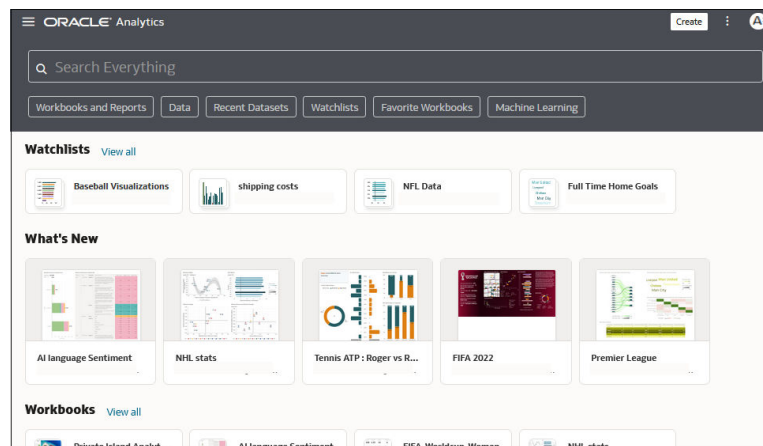
ダッシュボードには複数の分析を含めることができ、会社の全部門および運用データ・ソースの情報を完全で一貫性のあるビューで示すことができます。ダッシュボードでは、各ページが上部のタブで識別される 1 つ以上のページを使用して、情報をパーソナライズされたビューで表示できます。ダッシュボード・ページには、分析結果、画像、テキスト、Web サイトやドキュメントへのリンク、埋込みコンテンツ(Web ページやドキュメントなど)を含めて、ユーザーがアクセス可能または Web ブラウザで開くことができる内容が表示されます。

分析をダッシュボードに埋め込むと、ダッシュボードにアクセスするたびに、分析には最新データが自動的に表示されます。たとえば、ある範囲の製品や場所に渡って、週ごとの販売実績を確認する必要がある場合は、ダッシュボードを実行して、最新の情報を表示できます。

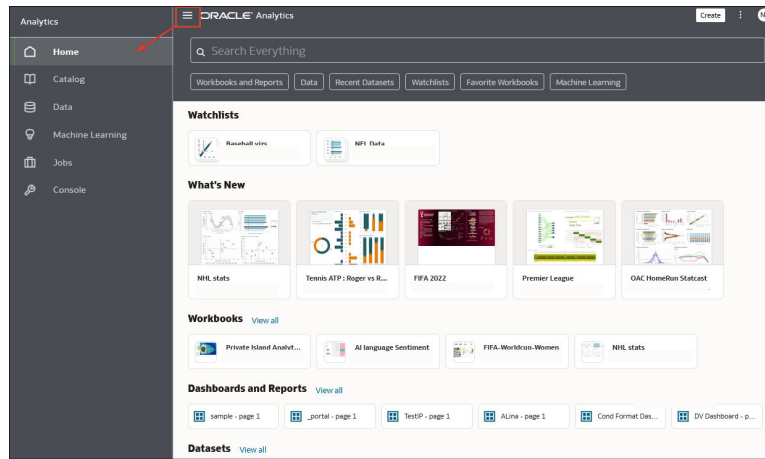
Oracle Analytics Cloud へのアクセス

「Oracle Analytics Cloud へようこそ」電子メールには、サービスへの直接リンクが含まれています。このリンクをクリックして、サインインします。または、cloud.oracle.com で Oracle Cloud にサインインして、「Oracle Analytics Cloud」を選択します。

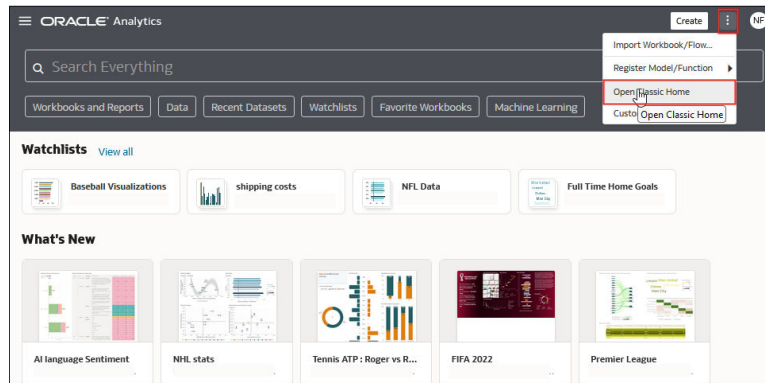
Oracle Analytics Cloud に初めてサインインすると、製品ツアーが表示されます。ツアーの終わりには、使用可能なすべての機能へのリンクがあるホーム・ページが表示されます。ビジュアライゼーションの作成をすぐに行うには、「データのビジュアル化」または「データの準備」をクリックします。ホーム・ページに表示されるサムネイルを参照するか、検索バーを使用して、分析コンテンツを見つけます。



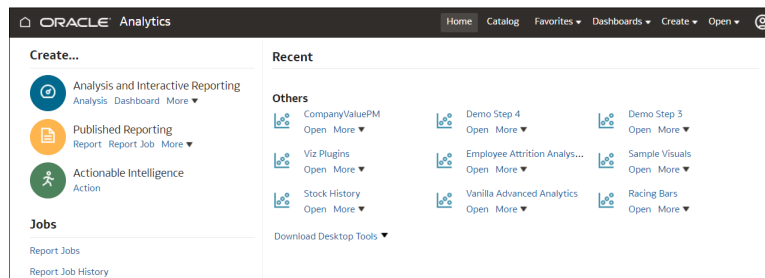
「ナビゲータ」バーを使用すると、ホーム・ページ、カタログ、機械学習などのコンテンツにすぐにアクセスできます。



レポート、モバイル、アクションナブル・インテリジェンスまたはピクセルパーフェクト・レポートのコンテンツを使用するには、「ページ・メニュー」をクリックして「クラシック・ホームを開く」を選択します。ホーム・ページに表示されるサムネイルを参照するか、検索バーを使用して、分析コンテンツを見つけます。



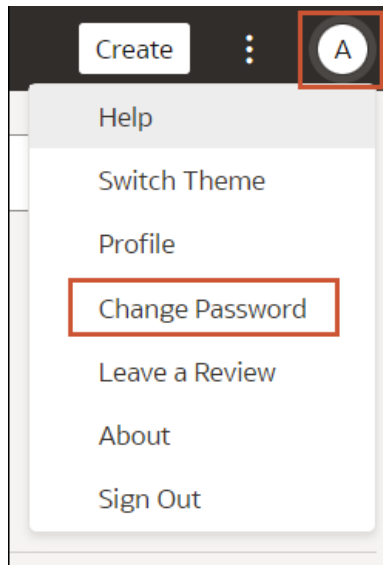
クラシック・ホーム・ページが、ブラウザの新規のタブまたはページに表示されます。



自分のパスワードの変更

Oracle Analytics Cloud にサインインすると、自分のパスワードを変更またはリセットできます。サインインに使用するパスワードを忘れた場合は、管理者にリセットするよう依頼できます。

1. ホーム・ページで、ユーザー名またはイニシャルが表示された名前バッジをクリックします。



2. 「パスワードの変更」をクリックします。
3. 新規パスワードを2回入力します。
4. 「更新」をクリックします。

コンテンツの検索と探索

ホーム・ページから、ワークブック、データセット、接続およびデータ・フローなどの分析コンテンツを検索できます。

コンテンツの検索

ホーム・ページから検索バーを使用して、目的のコンテンツを検索します。

検索バーを使用して、検索語、コンテンツ・タイプおよび検索タグでコンテンツを検索します。

ノート:

拡張検索コマンドを検索語と組み合わせて使用して、完全一致、複数語の一致およびフィールドレベルの一致の検索結果を調整できます。[検索オプション](#)を参照してください。

1. ホーム・ページの検索バーで検索語を入力して、**[Enter]**を押してコンテンツを検索するか、**[Shift]**を押しながら**[Enter]**を押してデータをビジュアル化します。
 - a. 検索している内容の名前または名前の一部を指定します。検索では大小文字が区別されません。

- 最近アクセスしたコンテンツを表示するには、`filter:recent` を貼り付けます。お気に入りとしてマークしたコンテンツを検索するには、`filter:favorites` を貼り付けます。
`filter` コマンドを `type` コマンドを組み合わせることができます。たとえば、`type:workbook filter:recent` を貼り付けます。

4. 検索語をクリアするには、検索バーで「X」をクリックするか、検索タグを選択して削除を押します。

検索オプション

拡張検索コマンドを検索バーに入力して、完全一致、複数語の一致およびフィールドレベルの一致の検索結果を調整できます。

複数の検索語をコマンドと組み合わせて、検索を絞り込んだり広げることができます。たとえば、`name:(revenue AND Analysis)` です。検索コマンドと検索語は大文字/小文字を区別しません。

検索コマンド	説明	例
AND	検索語の間に AND を入力して、すべての検索語を含むコンテンツのみを表示します。and、&&など、すべての形式の AND や、2 つの検索語を一緒に入力すると、同じ結果が返されます。	Revenue AND Forecast Revenue and Forecast Revenue && Forecast Revenue Forecast
OR	検索語の間に OR を入力して、検索語のいずれかを含むコンテンツを表示します。	Revenue OR Profit Revenue or Profit Revenue Profit
NOT	検索語を入力した後に、NOT を入力し、その後にさらに検索語を入力して、NOT コマンドの後に入力した検索語と一致したコンテンツを結果から除外します。	Revenue NOT Product Revenue not Product
?	不明な 1 文字を示すためにワイルドカードとして、疑問符(?)文字を検索語に入力します。これによって、検索結果には検索語の既知の文字と一致する単語を含むコンテンツが含まれます。たとえば、 <code>st?r</code> を検索すると、結果に <code>star</code> と <code>stir</code> が含まれます。	<code>st?r</code>
*	アスタリスク(*)文字を検索語の一部または語根の最後にワイルドカードとして入力して、検索語の一部を含むすべてのコンテンツ、および同じ語根のバリエーションを含むコンテンツを見つけます。たとえば、 <code>employ*</code> を検索すると、結果には <code>employee</code> 、 <code>employment</code> または <code>employer</code> が含まれます。	<code>Employ*</code>
name:	name:の後に検索語を入力して、検索語が「名前」フィールドの一部であるコンテンツを検索します。	name:Revenue Analysis
description:	description:の後に検索語を入力して、検索語がコンテンツの「説明」フィールドに含まれているコンテンツを検索します。	description:template desc:template

検索コマンド	説明	例
owner:	owner:の後に検索語を入力して、検索語がコンテンツの「所有者」フィールドに含まれているコンテンツを検索します。	owner:Admin
columns:	columns:の後に検索語を入力して、検索語と一致する列を参照するオブジェクトを検索します。	columns:product
text:	検索の最初に text:を入力して、その後に検索語を入力し、検索語がコンテンツのフィールドのいずれかに含まれているコンテンツを検索します。	text:Revenue
" "	検索語を二重引用符で囲み、検索語と一致する語句またはストップ・ワードを含むコンテンツを検索します。	"Balance Letter" "Research by analysis"

検索のヒント

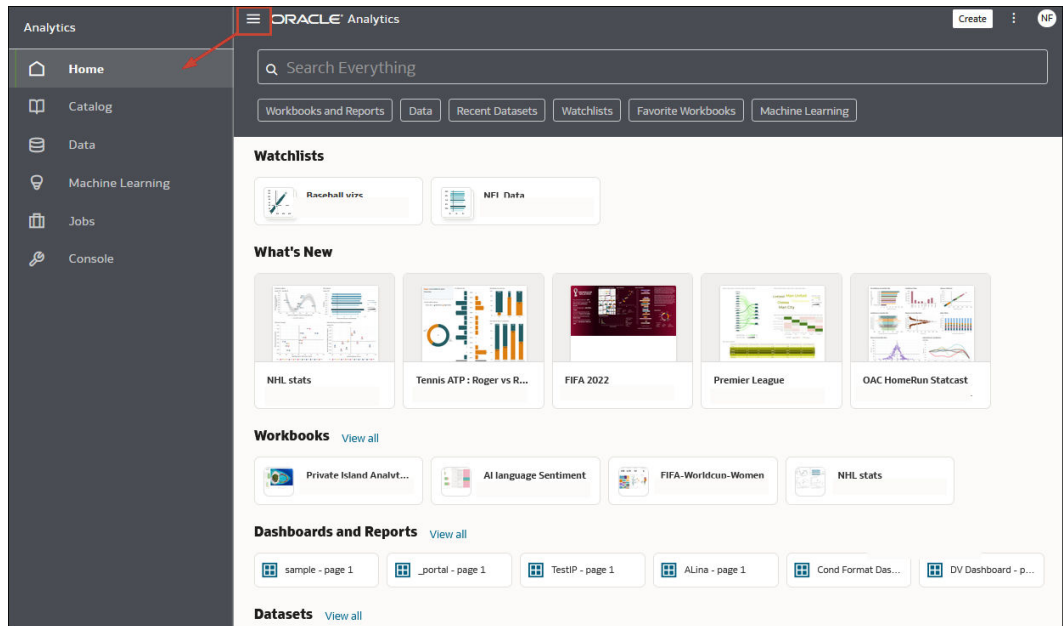
これらのヒントを使用すると、コンテンツの検索に役立ちます。

- 英語以外のロケールでの検索** - 検索フィールドに基準を入力したとき、候補のドロップダウン・リストの表示内容がロケール設定によって異なる可能性があります。たとえば、英語ロケールを使用して **sales** と入力した場合、候補のドロップダウン・リストには **sale** および **sales** という項目が含まれます。しかし、英語以外のロケール(韓国語など)を使用して **sales** と入力した場合、候補のドロップダウン・リストには **sales** という項目のみが含まれ、**sale** などの項目は候補のドロップダウン・リストに含まれません。
- 新しいオブジェクトおよびデータの検索** - ワークブックの作成や保存、またはデータセットの作成を行った直後にその検索を行うと、一致する検索結果が表示されない場合があります。これが発生した場合、ブラウザをリフレッシュしてください。それでも新しいオブジェクトまたはデータを検索できない場合は、索引付けプロセスが実行されるのを数分待ってから、検索を再試行してください。ユーザーは、アクセスする権限を付与されているデータにのみアクセスできます。

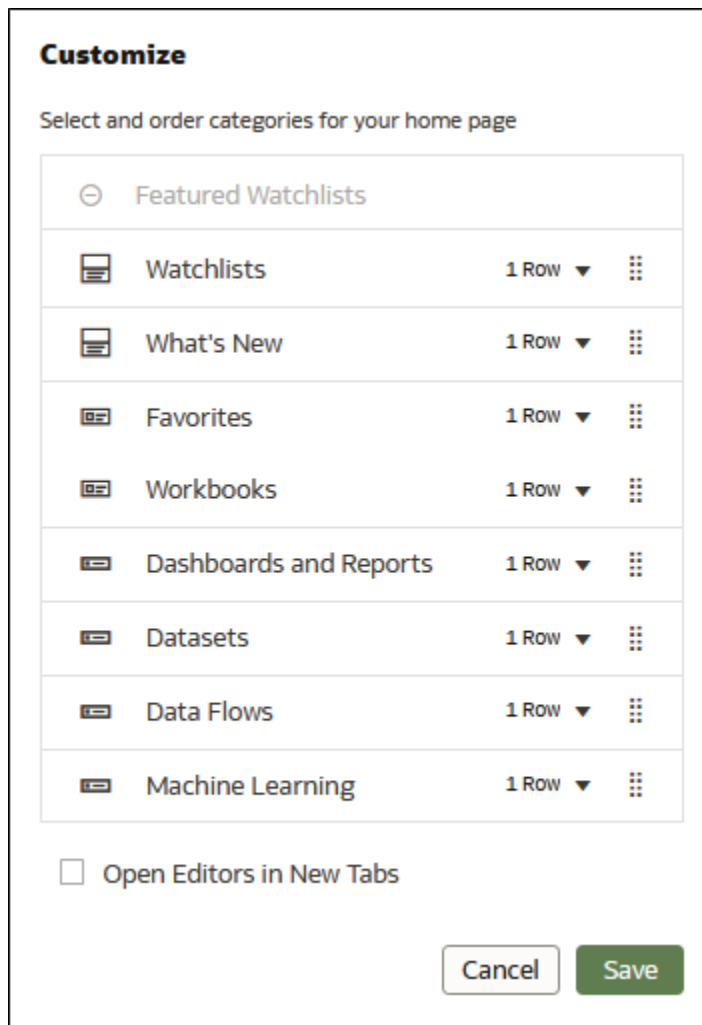
コンテンツの探索


「ナビゲータ」バーを使用すると、分析コンテンツにすばやくアクセスできます。

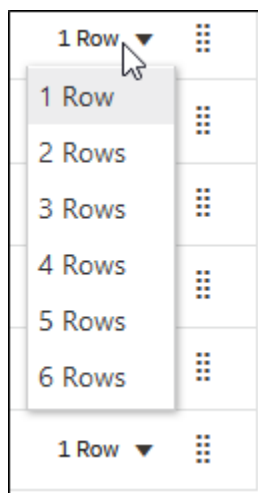
1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」メニューをクリックします。




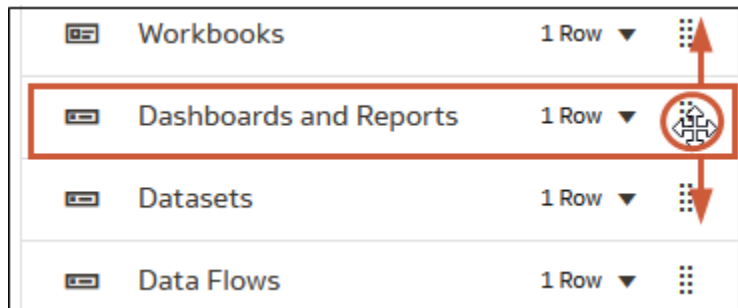
2. 「ページ・メニュー」をクリックし、「ホーム・ページのカスタマイズ」をクリックします。



3. コンテンツ・サイズ(小、中、または大)を表すアイコンをクリックするか、「**非表示**」をクリックしてコンテンツを非表示にします。
4. 下矢印をクリックし、表示する行数を選択します。



5. ハンドル  をクリックして押したまま、コンテンツ・カテゴリ行をドラッグしてホーム・ページでの表示順序を並べ替えます。



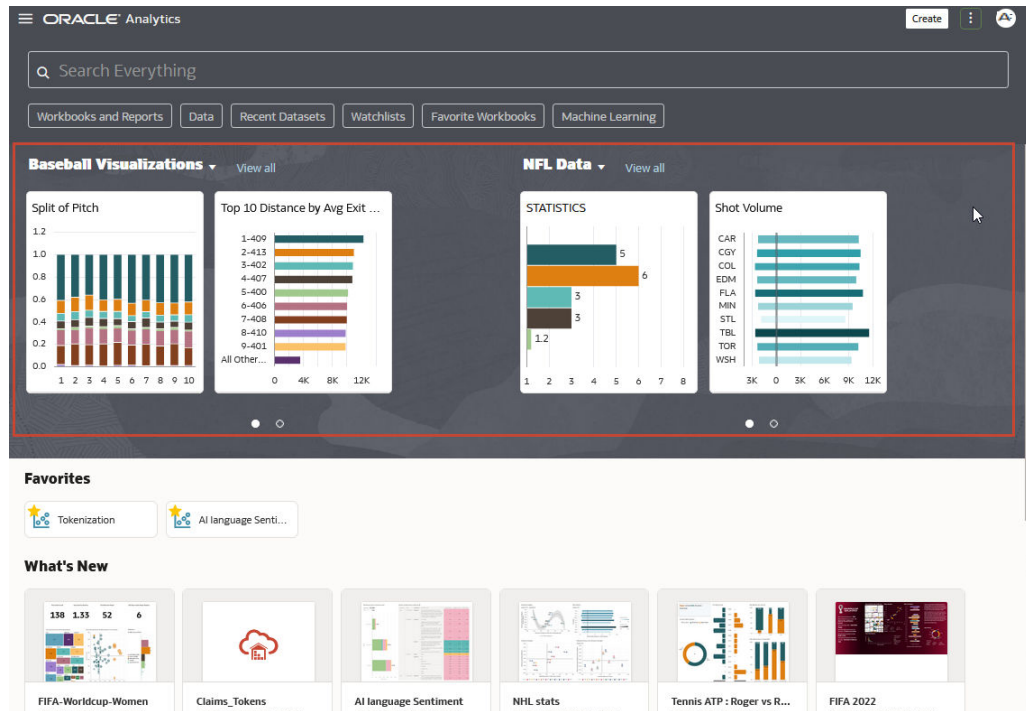
6. 「新しいタブでエディタを開く」をクリックします。
7. 「保存」をクリックします。

ウォッチリストについて

便利なビジュアライゼーションをグループにまとめてウォッチリストを作成し、ホーム・ページの「機能付きウォッチリスト」領域に表示します。

ウォッチリストを使用すると、重要なビジュアライゼーションを、複数のワークブックを検索して探すことなく迅速に表示できます。各ウォッチリストに、ワークブック・ビジュアライゼーションのデータを表すビジュアライゼーション・カードが表示され、そのウォッチリストからビジュアライゼーションを直接開くことができます。

ホーム・ページに機能付きウォッチリストがない場合は、作成できます。[ウォッチリストの作成](#)を参照してください。



ウォッチリストの作成

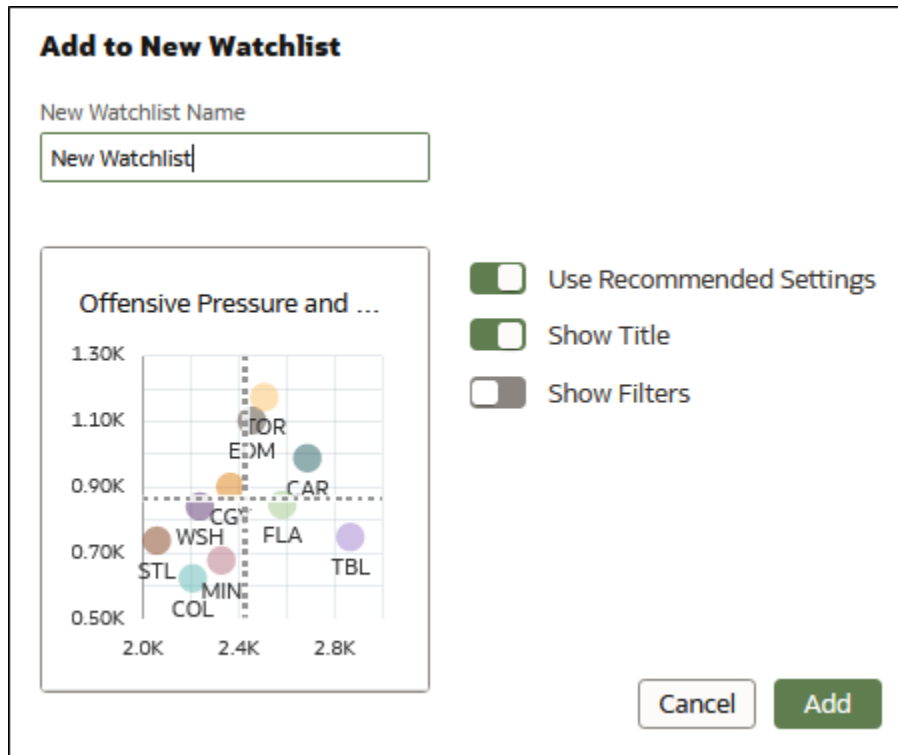
1つ以上のワークブックからビジュアライゼーションを追加することにより、ウォッチリストを作成できます。

ウォッチリストを作成して、最もポピュラーなビジュアライゼーションをグループにまとめ、ビジュアライゼーション・カードとして表示します。ビジュアライゼーション・カードを使用すると、ユーザーは毎回複数のワークブックを検索しなくても重要なデータを表示およびアクセスできます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「編集」をクリックして、作成者モードに入ります。
3. ビジュアライゼーションにカーソルを合わせて、「ウォッチリストに追加」をクリックします。



4. 「新規ウォッチリスト」をクリックし、新しいウォッチリスト名を入力して「追加」をクリックします。



ウォッチリストへのビジュアライゼーションの追加

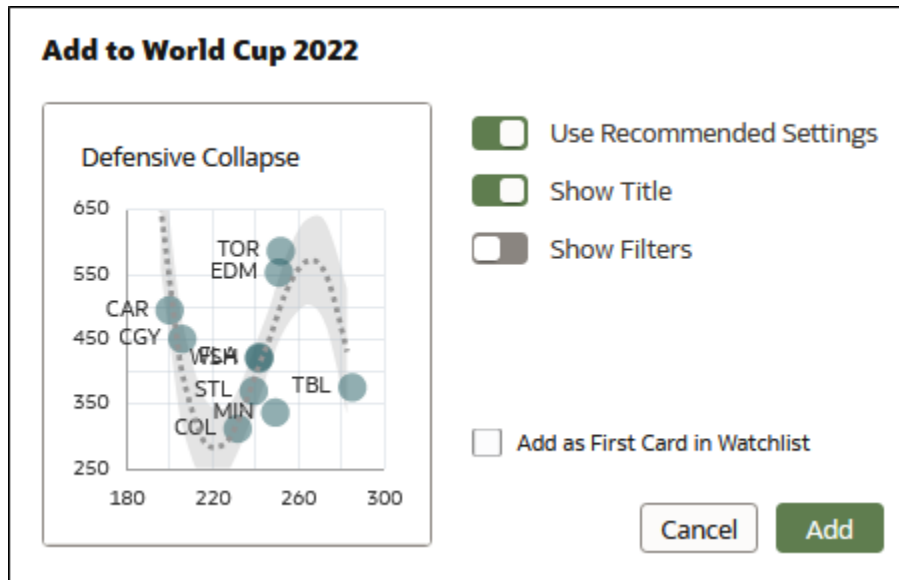
1つ以上のワークブックからビジュアライゼーションをウォッチリストに追加できます。

有用なビジュアライゼーションやお気に入りのビジュアライゼーションを既存のウォッチリストに追加できます。ビジュアライゼーションをウォッチリストに追加すると、ウォッチリストにビジュアライゼーション・カードとして表示されます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「**編集**」をクリックします。
3. ウォッチリストに追加するビジュアライゼーションにカーソルを合せて、「**ウォッチリストに追加**」をクリックします。



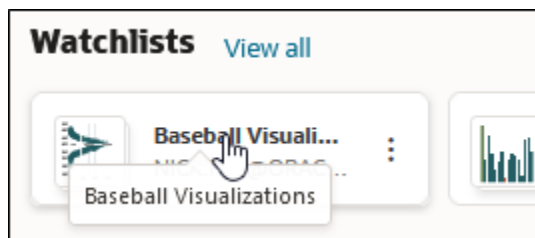
4. リストから既存のウォッチリストをクリックします。
5. 「**追加**」をクリックします。



ウォッチリストからのビジュアライゼーション・カードの削除

ウォッチリストからビジュアライゼーション・カードを除去できます。

1. ホーム・ページで、ウォッチリストをクリックして開きます。



2. ウォッチリストから除去するビジュアライゼーション・カードの「アクション・メニュー」をクリックし、「削除」を選択します。



3. 「はい」をクリックして、選択したビジュアライゼーション・カードをウォッチリストから除去します。

モバイル・デバイスでのコンテンツの表示

モバイル・デバイスでコンテンツにアクセスできます。

コンテンツにアクセスするには、モバイル・アプリのいずれかが必要であり、ワークブックの場合は、モバイル・デバイスのブラウザを使用できます。

Oracle Analytics Cloud で使用可能なアプリ

- Oracle Analytics for Android および iOS
- Oracle Analytics Day by Day

外出先での Oracle Analytics コンテンツへのアクセスおよび操作

Oracle Analytics for Android および iOS モバイル・アプリケーションを使用して、外出先で Oracle Analytics コンテンツにアクセスし操作できます。

これらのアプリケーションにより次のことを実行できます：

- Oracle Analytics コンテンツの検索、オープンおよび操作。
- 「ワークブック」セクションを使用して、次のことを実行できます：
 - Oracle Analytics からのデータ・ビジュアライゼーション・ワークブックの表示および操作。
 - モバイル・デバイスからのワークブックの直接作成。
 - 同僚とのワークブックの共有。
- 「データセット」セクションでは、次のことができます：
 - スプレッドシートなどのデータ・ファイルのモバイル・デバイスからの直接アップロード。

- 既存の Oracle Analytics データセットからの新規ワークブックの作成。
- 電子メールの添付など、お気に入りアプリケーションからのデータセットおよびワークブックの開始。
- すべてのクラシック・コンテンツの検索、およびそのアプリケーションからの Web ブラウザでの直接オープン。

Oracle Analytics for Android および iOS アプリは、Google Play Store および Apple App Store から入手できます。

アプリにログインするには、次を参照してください:

- サインインはどのようにして行うのですか。 - Android
- サインインはどのようにして行うのですか。 - ios

Oracle Analytics for Android および iOS アプリを使用するには、モバイル・アプリケーション内で使用できるヘルプ・システムを参照してください。

Oracle Analytics Day by Day を使用した分析チャートの表示およびコラボレーション

Oracle Analytics Day by Day は、適時適所に適切な分析を提供する画期的なアプリです。アプリ内のビジネス・データの検索に基づいて、関心のあるもの、関心を持った時期および場所を把握し、すぐに使用できる分析チャートにデータを表示します。アプリでは分析チャートがカードとして表示されます。

Oracle Analytics Day by Day アプリは、Apple App Store および Google Play Store から入手できます。

アプリにログインするには、次を参照してください:

- アプリにはどのようにログインしますか。(Android)
- アプリにはどのようにログインしますか。(iOS)

Oracle Analytics Day by Day を使用するには、モバイル・アプリケーション内で使用できるヘルプ・システムを参照してください。

組み込みブラウザを使用したモバイル・デバイスでのデータの探索

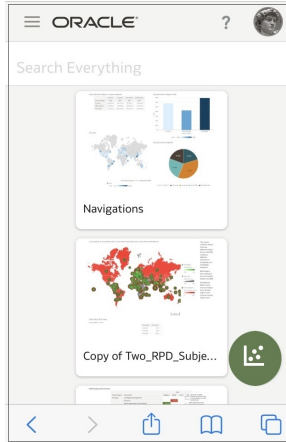
Android、Windows または Apple オペレーティング・システムのモバイル・デバイスでブラウザを使用して、デスクでも移動中でもデータを探索できます。

ノート:

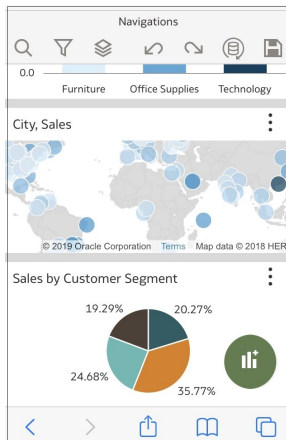
モバイル・デバイスのブラウザを使用すると、提供される Oracle Analytics の機能に制限があります。より包括的な分析機能については、Oracle Analytics で使用可能なモバイル・アプリのいずれかを使用してください。


モバイル・デバイスでブラウザを使用すると、ワークブックおよびビジュアライゼーションを表示できます。簡略化されたエディタを使用して、ワークブックおよびビジュアライゼーションを作成することもできます。

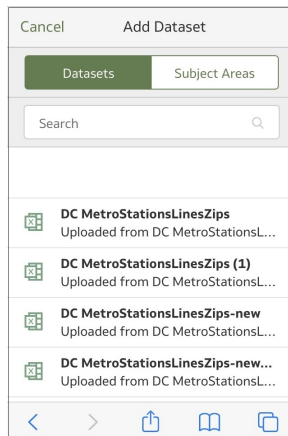
- Oracle Analytics にログインして、ホーム・ページにアクセスします。



- コンテンツを表示するワークブックまたはビジュアライゼーションをタップします。



- 追加アイコン  をタップして、ビジュアライゼーションを作成します。簡略化されたビジュアライゼーション・デザイナーが表示されます。



第 II 部

データの準備

ここでは、ビジュアライゼーションおよび分析用にデータを準備する方法について説明します。

章:

- [データセットを使用したデータへの接続](#)
- [データのエンリッチおよび変換](#)
- [データ・フローを使用したデータセットの作成](#)
- [データセットの管理](#)

2

データセットを使用したデータへの接続

このトピックでは、データセットを作成する方法について説明します。

トピック:

- [データセットとは](#)
- [データセットのオープンについて](#)
- [使用可能な接続の表示](#)
- [データセットで使用できるデータ・ソース](#)
- [データセット・エディタについて](#)
- [接続からのデータセットの作成](#)
- [データセットへの複数の接続の追加](#)
- [接続から作成されたデータセットへのファイルの追加](#)
- [SQL 文を使用したデータセットへの表の追加](#)
- [データセット表の結合の理解](#)
- [データセットの表間の結合の追加](#)
- [データセットの自動結合の無効化](#)
- [データセットの結合の変更または修正](#)
- [表の列が一致しない場合の結合の追加](#)
- [データセットからの結合の削除](#)
- [データ・ソースの問合せにデータセット表を含める](#)
- [グレインの保持とは](#)
- [グレインを決定する表の指定](#)
- [データセットの表の順序の再配置](#)
- [品質インサイトとは](#)
- [品質インサイトを使用したデータの探索](#)
- [データセットの列の除去または復元について](#)
- [データセット表の列の除去または復元](#)
- [データセット表のフィルタ処理](#)
- [データセット表がキャッシュされているかライブであるかの指定](#)
- [データセット表の元の書式設定の表示](#)
- [ファイルからのデータセットの作成](#)
- [Oracle Fusion Cloud Applications Suite のサブジェクト領域からのデータセットの作成](#)

- Oracle Fusion Cloud Applications Suite の分析からのデータセットの作成
- ローカル・サブジェクト領域によるデータセットの作成
- ローカル分析によるデータセットの作成
- Essbase 接続によるデータセットの作成

データセットとは

データセットとは、セルフサービス・データ・モデルであり、これを自分のデータ・ビジュアライゼーションおよび分析要件専用で作成します。

データセットは、1つの表、スプレッドシートまたはファイルに基づくことができます。また、表間で定義された関係を持つ複数の表を含むセルフサービス・データ・モデルにすることもできます。

データセットは、アップロードしたファイル、SaaS アプリケーション、Oracle Analytics レポート、接続を作成した多数のリレーショナル・データ・ソースやビッグ・データ・ソースのデータから作成できます。データセットで使用できるデータ・ソースを参照してください。

データ・セットは、特定の分析およびビジュアライゼーションのニーズを満たすようにキュレートおよび構成するファイルまたはデータ・ソースのデータのサブセットです。データセットには、データ・ソース接続情報、表、指定する列、および適用するデータ・エンリッチメントと変換が含まれます。

データセットは複数のワークブックおよびデータ・フローで使用できます。データセットを変更すると、そのデータセットを使用するすべてのワークブックおよびデータ・フローが影響を受けます。

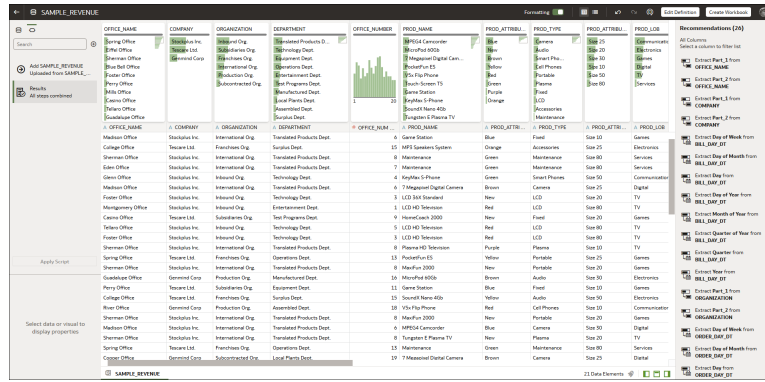
データセットを作成および構築すると、次のことが可能になります：

- 多数のタイプの接続またはスプレッドシート間で選択します。
- データベース接続、Oracle データ・ソースまたはローカル・サブジェクト領域内の複数の表のデータに基づいてデータセットを作成します。また、様々な接続およびサブジェクト領域内の表のデータに基づいてデータセットを作成します。たとえば、Autonomous Data Warehouse 接続の表、Spark 接続の表およびローカル・サブジェクト領域の表を含むデータセットを構築できます。
- 表間の結合を指定します。
- データセットの列を変換およびエンリッチします。

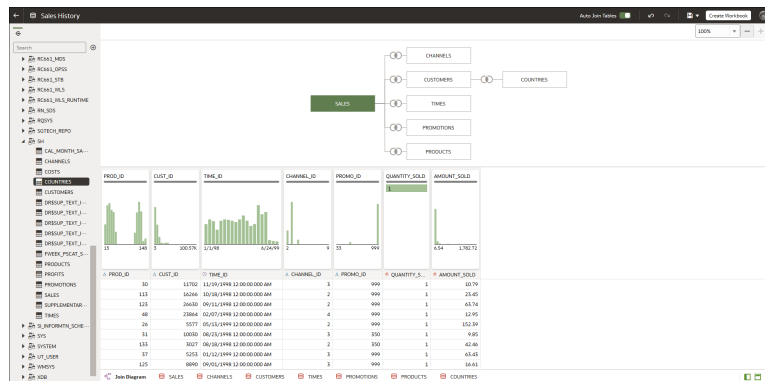
データセットのオープンについて

データセットで使用されるデータ・ソースのタイプによって、新規データセットを作成するとき、および既存のデータセットをそれ自体で開く、またはワークブックから開くときに、どのようにユーザー・インタフェースをナビゲートするかが決まります。

Oracle EPM Cloud、Oracle Essbase または Google Analytics を使用するデータセットを作成するときや開くときに、データセットが変換エディタに表示されます。

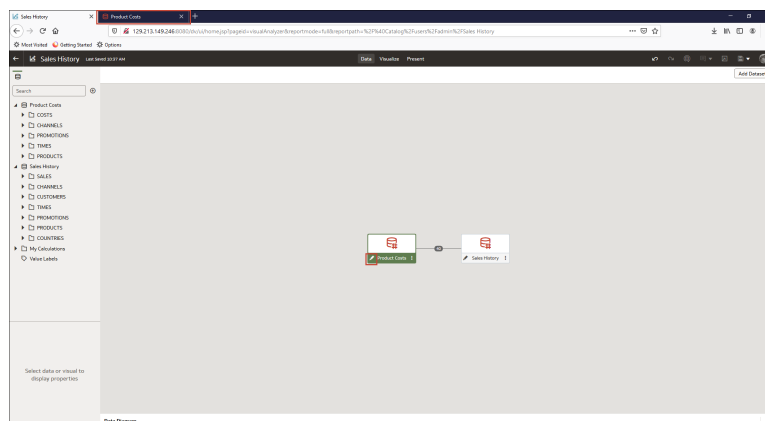


複数の表を含むデータセットを作成するときや開くときに、データセットがデータセット・エディタに表示されます。



ワークブックで作業するとき、ワークブックのデータセットを表示したり、開く場合に「データ」タブを使用します。データセットによって、Oracle Analytics で開くエディタが決まります。

- データセットが Oracle EPM Cloud、Oracle Essbase または Google Analytics に基づいている場合、変換エディタが新しいブラウザ・タブで開きます。
- データセットに複数の表が含まれている場合、データセット・エディタが新しいブラウザ・タブで開きます。



使用可能な接続の表示

データセットはデータ・ソースへの1つ以上の接続を使用して、分析およびビジュアライゼーション用にデータにアクセスしたり、データを指定します。

接続のリストには、ユーザーが作成した接続や、ユーザーにアクセスと使用の権限がある接続が含まれています。接続のリストは、データセットの作成が必要な接続が存在しているかどうかを確認する際に表示します。また、特定の接続に関する詳細情報にアクセスする場合や、特定のデータセット(接続先のデータベースのタイプやデータ要素に関する情報など)の作成に必要なデータを提供できるかどうかを判断する場合にも、接続リストを使用できます。

ノート:

ほとんどのデータ・ソース内の複数の表を使用してデータセットを作成できます。例外としては、Oracle EPM Cloud、Oracle Essbase または Google Analytics があります。

接続の作成が必要な場合、データ・ソースへの接続の作成を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「接続」タブをクリックして接続リストを表示します。

データセットで使用可能なデータ・ソース

データセットで使用できるデータ・ソースについて学習します。ほとんどのデータ・ソースを使用して、複数の表を含むデータセットを作成できます。

Oracle データ・ソース

次の Oracle データ・ソース接続のいずれかを使用して、複数の表を含むデータセットを作成できます。

- Oracle Analytics のローカル・サブジェクト領域
- Oracle Fusion Cloud Applications Suite (**Oracle Applications** 接続タイプを使用)
- Oracle Autonomous Data Warehouse
- Oracle Autonomous Transaction Processing
- Oracle Database
- Oracle NetSuite
- Oracle Service Cloud

その他のデータ・ソース

次の1つ以上のデータ・ソース接続を使用して、複数の表を含むデータセットを作成できます。

- Amazon EMR
- Amazon Redshift
- Apache Hive
- DB2
- Dropbox
- ファイル(XLSX、XLS、CSV および TXT)
- Google ドライブ
- GreenPlum
- HortonWorks Hive
- IBM BigInsights Hive
- Impala (Cloudera)
- Informix
- MapR Hive
- Microsoft Azure SQL Database
- MongoDB
- Pivotal HD Hive
- PostgreSQL
- Salesforce
- スノーflake
- Spark
- SQL Server
- Sybase ASE
- Sybase IQ
- MySQL

複数の表のデータセットに使用できないデータ・ソース

次のデータ・ソース接続は、複数の表を含むデータセットを作成したり、そのデータセットに含める場合に使用できません。

- Oracle Fusion Cloud Enterprise Performance Management (EPM)
- Oracle Essbase
- Google Analytics

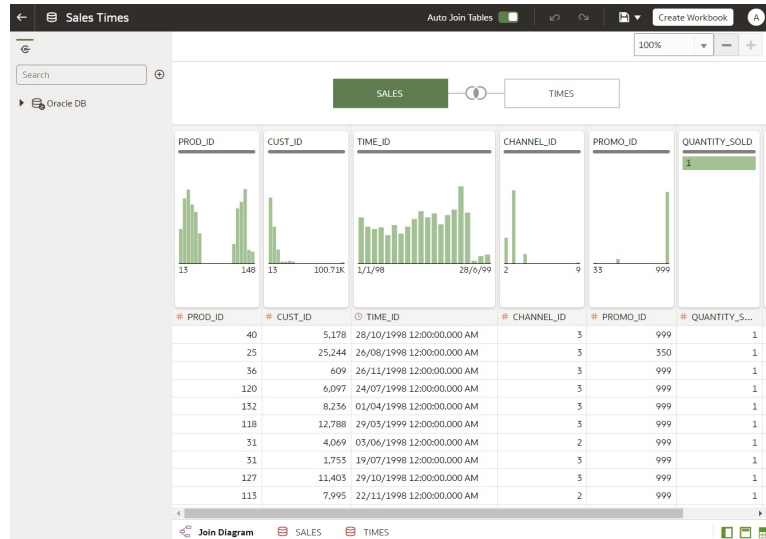
データセット・エディタについて

データセット・エディタを使用して、表、結合およびエンリッチ済データを含むデータセットを作成または編集します。

複数の表を含むデータセットをサポートするローカル・サブジェクト領域または接続からデータセットを作成すると、**Oracle Analytics** ではデータセット・エディタが表示されます。[データセットで使用可能なデータ・ソース](#)を参照してください。

Oracle EPM Cloud、Oracle Essbase または Google Analytics 接続から複数の表を含むデータセットを作成することはできません。複数の表を含むデータセットをサポートしていない接続には、変換エディタを使用します。

各データセット・エディタ機能およびこの機能で実行できる内容を次に説明します：



• 「接続」 ペイン

このペインには、データ・ソース接続のスキーマおよび表と、アップロードされたファイルが表示されます。「接続」ペインから結合ダイアグラムに表またはファイルを追加するには、リストからダイアグラムにこれをドラッグ・アンド・ドロップするか、これをダブルクリックします。複数の表またはファイルを追加することも可能です。

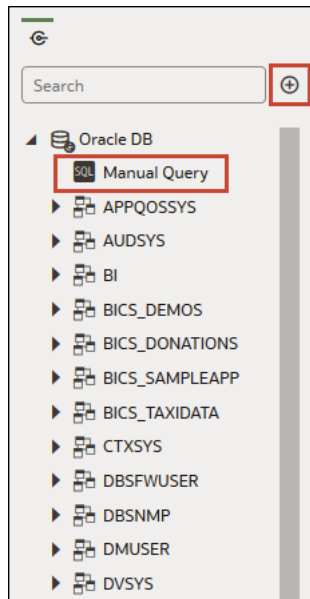
「追加」をクリックして「接続の追加」または「ファイルを開く」ダイアログを開き、ここでデータセットに追加する別の接続を選択または作成するか、ファイルを選択できます。

「検索」を使用して、「接続」ペインで表示されるスキーマ、表またはファイルを検索します。

SQL 文を作成して表を作成するには、手動問合せアイテムをダイアグラムにドラッグ・アンド・ドロップします。次に、ダイアグラムに移動し、「手動問合せ」表をダブルクリックして SQL エディタにアクセスします。

✎ ノート:

JDBC 接続がスキーマおよび表の表示を提供していない場合に、「手動問合せ」を使用します。

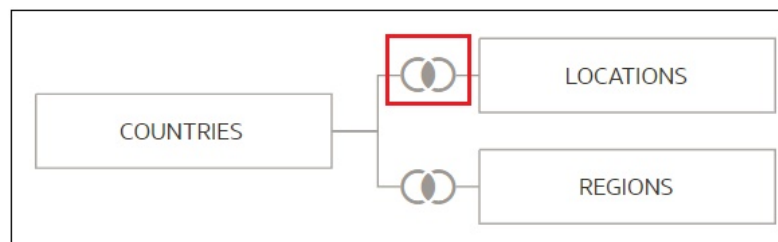


- **結合ダイアグラム**

結合ダイアグラムには、データセット内のすべての表および結合が表示されます。表をドラッグ・アンド・ドロップしてダイアグラム内の表を並べ替えます。

表を選択すると、「データのプレビュー」領域に表のデータのサンプルが表示されます。表をダブルクリックした場合、変換エディタが表示されます。ここで、表のデータを変換またはエンリッチします。

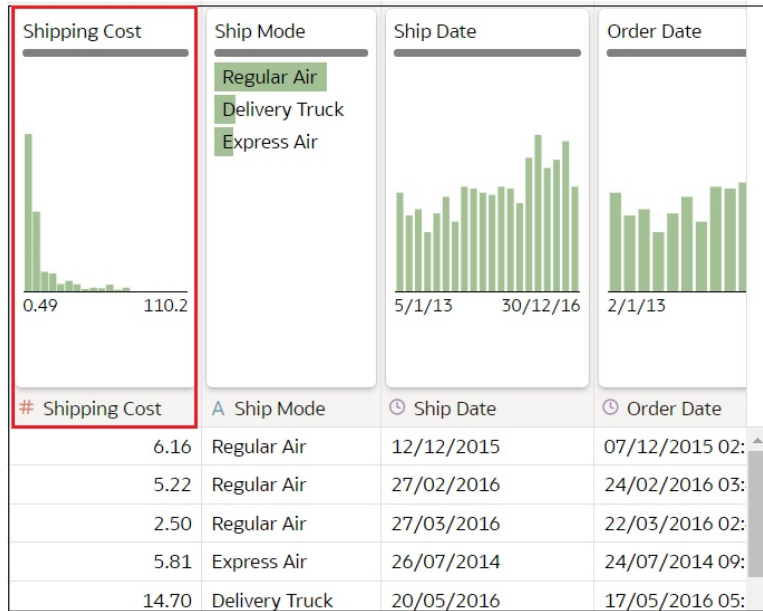
ダイアグラムの結合リンクおよびアイコンは、結合される表および使用される結合のタイプを示します。表を別の表にドラッグ・アンド・ドロップすると、結合が作成されます。結合をクリックした場合、結合エディタが表示され、ここで、これを表示、更新または修正できます。



- **データ・プレビュー**

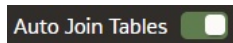
データ・プレビュー領域には、**結合ダイアグラム**で選択された表のデータ・サンプルが表示されます。データ・プレビュー領域から、列のタイプ属性をクリックしてそのタイプを変更できます。たとえば、CALENDAR_YEAR列をメジャーから属性に変更します。

デフォルトで、品質インサイト・タイトルが列ごとに表示されます。品質インサイトでは、列のデータの代表的なサンプルを使用して、列のデータ品質に関する情報を決定します。[品質インサイトとは](#)を参照してください



• 「自動結合表」トグル・ボタン

「自動結合表」トグル・ボタンは、「結合ダイアグラム」に表をドラッグ・アンド・ドロップしたときに結合が自動的に作成されるかどうかを決定します。デフォルトでは、Oracle Analytics によって結合が作成されますが、場合によっては、自動的な結合の作成をオフにして、表の結合を手動で作成する必要があることがあります。



• データセット表のページ・タブ

データセット・エディタにはデータセットの各表のタブが表示されます。表のタブをクリックし、変換エディタに移動して表のデータを変換またはエンリッチします。タブは変換エディタの下部に表示されます。これらを使用して、他の表に移動するか、結合ダイアグラムに戻ります。



• データセット・エディタのトグル・ボタン

これらのボタンは、表示されるデータセット・エディタの部分を制御します。



このボタンは接続パネルの非表示と表示を切り替えます:



このボタンは品質タイルの非表示と表示を切り替えます:



このボタンはデータのプレビュー領域の非表示と表示を切り替えます:



接続からのデータセットの作成

データセットを作成すると、1つ以上のデータ・ソース接続からの表の追加、結合の追加およびデータのエンリッチを行うことができます。

[ビデオ](#)

[チュートリアル](#)

データセットを作成する前に、必要なデータ・ソース接続がすでに存在するかどうかを確認できます。[使用可能な接続の表示](#)を参照してください。

ノート:

ほとんどのデータ・ソース内の複数の表を使用してデータセットを作成できます。例外としては、Oracle EPM Cloud、Oracle Essbase または Google Analytics があります。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「データセット」をクリックします。
2. 「データセットの作成」ダイアログで、接続を選択します。
3. データセット・エディタで、「接続」ペインに移動し、スキーマを参照または検索します。
4. オプション: Oracle Analytics でデータセットの表の結合を自動的に作成せずに、手動で作成する場合は、「自動結合表」トグル・ボタンの選択を解除して、自動的な結合の作成をオフにします。

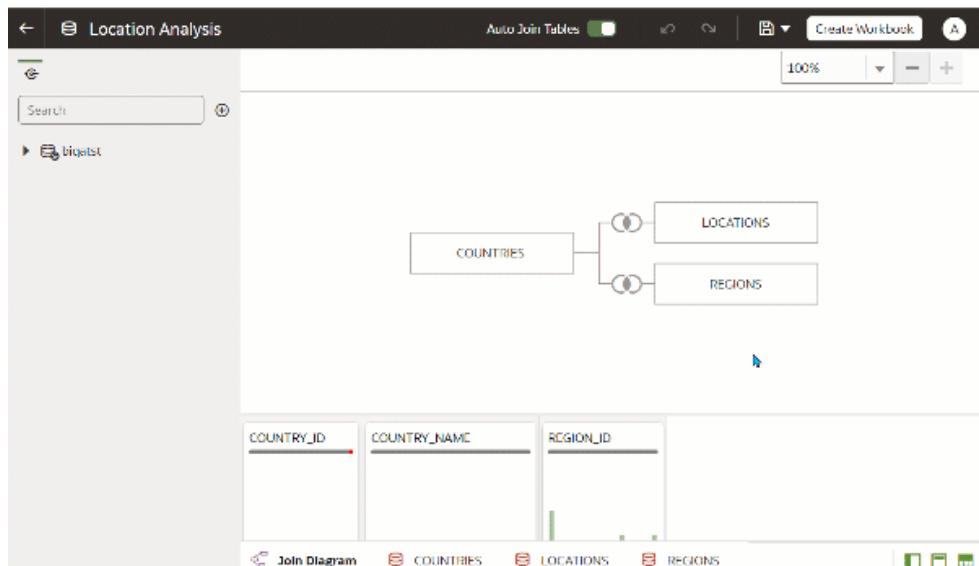
5. スキーマをクリックして、その表のリストを表示します。表を**結合ダイアグラム**にドラッグ・アンド・ドロップします。ファクト表がある場合、これを最初に追加してから、ディメンション表を追加します。ファクト表は**結合ダイアグラム**で最も左側にある表である必要があります。

デフォルトでは、作成しているデータセットに、データ・ソースに定義された表の結合が含まれています。結合がデータ・ソースに存在しない場合、Oracle Analytics では結合が指定され、追加されます。

6. オプション: 追加のデータ・ソースからデータを追加するには、「接続」ペインに移動し、「追加」をクリックしてから、「接続の追加」または「ファイルの追加」をクリックし、別の接続またはファイルを選択してデータセットに追加します。
7. オプション: 別の接続またはファイルを追加した場合、「接続」ペインから新規接続のスキーマをクリックしてこれを開き、表を「**結合ダイアグラム**」にドラッグ・アンド・ドロップします。
8. オプション: ローカル・サブジェクト領域や Fusion Applications Suite サブジェクト領域などの一部のデータ・ソースから、表を「**結合ダイアグラム**」にドラッグ・アンド・ドロップすると、列は表示されません。**表ページ・タブ**に移動し、サブジェクト領域表をクリ

ックし、**変換エディタ**を使用して、表に含める列を指定します。「OK」をクリックします。

9. **結合ダイアグラム**で、結合を検査、変更または削除します。
 - 結合を検査または変更するには、結合をクリックして結合エディタを開き、結合タイプおよび結合条件を検査または変更します。
 - 結合を追加するには、結合する表を見つけ、これにカーソルを合せて選択し、これをクリックして、結合する表にドラッグ・アンド・ドロップします。結合エディタを開いて、結合タイプおよび結合条件を検査または更新します。
 - 結合を削除するには、結合アイコンにカーソルを合せ、「**結合の削除**」をクリックします。
10. 「**保存**」をクリックします。
11. 名前を入力し、「OK」をクリックします。
12. 表のデータを準備するには、データセット・エディタの下部にあるタブ行に移動して、表のタブをクリックします。または、結合ダイアグラムから表をダブルクリックするか、表を右クリックして「**開く**」を選択します。



13. 変換エディタを使用して、データ変換またはエンリッチメントを実行します。「**データセットの保存**」をクリックします。
14. 含める列や除外する列、データ・アクセス権など、表の定義を編集するには、変換エディタで「**定義の編集**」をクリックして変更を加えます。「OK」をクリックし、「**データセットの保存**」をクリックします。

データセットへの複数の接続の追加

1つのデータセットには、複数の接続を含めることができます。接続を追加すると、データセットの構築に必要なすべての表とデータにアクセスして結合できるようになります。

データセットには、接続とファイルの組合せを含めることができます。[接続から作成したデータセットへのファイルの追加](#)を参照してください。

ほとんどの接続を追加できます。例外には、Oracle EPM Cloud、Oracle Essbase または Google Analytics があります。

データセットを作成する前に、必要なデータ・ソース接続がすでに存在するかどうかを確認できます。[使用可能な接続の表示](#)を参照してください。

サブジェクト領域または分析を「**結合ダイアグラム**」にドラッグすると、列は表示されません。**変換エディタ**を使用して、サブジェクト領域のデータセット表に含める列を指定する必要があります。

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**データ**」をクリックします。
2. 「**データセット**」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「**アクション**」をクリックし、「**開く**」をクリックします。
4. 「接続」ペインで、「**追加**」をクリックし、「**接続の追加**」をクリックします。
5. 「接続の追加」ダイアログで、「接続」ペインに追加する接続を見つけてクリックします。
6. 「接続」ペインで、選択した接続が追加されたことを確認します。
7. 「**保存**」をクリックします。

接続から作成されたデータセットへのファイルの追加

データセットには、ファイルおよび接続から作成された表を含めることができます。

ほとんどの接続をデータセットに追加できます。例外としては、Oracle EPM Cloud、Oracle Essbase または Google Analytics があります。

接続を追加する前に、必要なデータ・ソース接続がすでに存在するかどうかを確認できます。[使用可能な接続の表示](#)を参照してください。

サブジェクト領域または分析を「**結合ダイアグラム**」にドラッグすると、列は表示されません。**変換エディタ**を使用して、サブジェクト領域のデータセット表に含める列を指定する必要があります。

ファイルをアップロードする前に、ファイルが次の要件を満たしていることを確認します：

- ファイルは、.XLSX または .XLS 形式の Excel スプレッドシート、CSV ファイルまたは TXT ファイルです。
 - スプレッドシートにはピボット・データが含まれていません。
 - スプレッドシートは、データセットとしてのインポートおよび使用のために適切に構造化されています。[データセットのファイルについて](#)を参照してください。
1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**データ**」をクリックします。
 2. 「**データセット**」タブをクリックします。
 3. 開くデータセットを見つけて、「**アクション**」をクリックし、「**開く**」をクリックします。
 4. ファイルを見つけます：
 - 追加するファイルがコンピュータに存在する場合、「接続」ペインの「**追加**」をクリックし、「**ファイルの追加**」をクリックします。
 - 追加するファイルが Dropbox または Google Drive に存在する場合、「接続」ペインの「**追加**」をクリックし、「**接続の追加**」をクリックします。

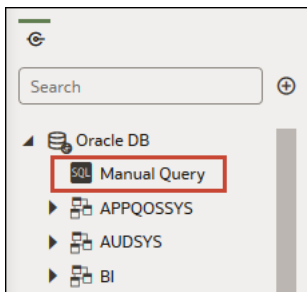
- アップロードするファイルを参照して選択します。
- オプション: CSV または TXT ファイルをアップロードする場合、「区切り文字」、「3桁区切り」および「小数区切り」フィールドでデフォルトのデリミタを確認または変更します。
カスタム・デリミタを指定するには、「区切り文字」フィールドで「カスタム」を選択し、デリミタとして使用する文字を入力します。CSV または TXT ファイルでは、カスタム・デリミタは 1 文字である必要があります。次の例では、デリミタとしてパイプ(|)を使用しています: Year|Product|Revenue|Quantity|Target Revenue|Target Quantity。
- 「OK」をクリックして、データセットにファイルを追加します。
- 「接続」ペインで、ファイルが追加されたことを確認します。
- 「保存」をクリックします。

SQL 文を使用したデータセットへの表の追加

ソース固有の SQL SELECT 文を作成して、接続のデータを問い合わせたり、データセットに表を作成できます。この手動の問合せオプションは、ほとんどの接続タイプに使用できます。

データセット内の接続の表を使用しないが、かわりに特定の情報をターゲットにする場合に、手動の問合せオプションを使用して、表を作成します。または、データ・ソース接続でスキーマ・リストが提供されない場合に、手動の問合せオプションを使用します。使用する SQL 文はデータ・ソース接続タイプによって決まります。

- ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
- 「データセット」タブをクリックします。
- 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
データベース表に基づくデータセットを開いていることを確認してください。これらは、データベース・アイコンとともに表示されます。
- 「データ」パネルの「接続」ペインで、問い合わせる接続を見つけて展開し、「手動問合せ」オプションを見つけます。



- 「手動問合せ」を結合ダイアグラムにドラッグ・アンド・ドロップして表シェルを作成します。
- 「手動問合せ」表をダブルクリックします。

7. 「SQL の入力」が選択されていることを確認します。
8. 「文」フィールドに SQL 文を入力します。
9. オプション: 「プレビュー・データの取得」をクリックして、正しいデータを問い合わせていることを確認します。
10. 「OK」をクリックします。
11. オプション: SQL 文を変更するには、**表のページ・タブ**に移動して作成した表のタブを選択します。「定義の編集」をクリックして「文」フィールドを使用して、SQL 文を編集します。

データセット表の結合の理解

データセットには、複数の表を指定できます。ユーザーが追加する表の結合は、データセットの表同士の関係を示します。

チュートリアル

デフォルトでは、表を結合ダイアグラムにドラッグ・アンド・ドロップして複数の表のデータセットを作成すると、データ・ソースに定義された結合が、データセットの表の間に自動的に作成されます。また、Oracle Analytics によって、表間で検出された列名の一致に基づいて結合が自動的に作成されます。データセットを定義する際に、必ず最初に最も詳細な表を追加してください。通常、これが分析用のプライマリ表になります。たとえば、売上表などです。次に、分析にコンテキストを提供する製品、顧客、チャネルなどの残りの表を追加します。ディメンションでモデリングされたデータセットの表またはトランザクション表を追加している場合、最も詳細な表がメジャーを含むファクト表である可能性があります。

場合によっては、データセットの結合を手動で作成することがあります。たとえば、データセットに含まれる一致する列が多すぎて、不要な一致の削除に時間がかかる場合などです。そのような場合は、データセットの自動結合をオフにできます。[データセットの自動結合の無効化](#)を参照してください。






ファクトおよびディメンションに基づいてデータセットを作成している場合で、結合がすでにソース表に存在する場合、結合は自動的にデータセットに作成されます。複数の接続とスキーマからデータセットを作成している場合、表間の結合を手動で定義します。これを実行するには、ファクト表にディメンション表をドラッグ・アンド・ドロップして、使用する結合のタイプおよび結合列を指定します。複数の列に結合を作成できます。結合する列は属性列であり、データ書式が同じである必要があります。

Oracle EPM Cloud、Oracle Essbase または Google Analytics は、複数の表を含むデータセットで追加および結合に使用できません。ワークブックで作業していて、Oracle Autonomous Data Warehouse の複数の表を含むデータセットや Oracle EPM Cloud のデータを含むデータセットなど、様々なデータセットのデータを含める場合、ブレンドを使用して列を照合します。[データセットのブレンド](#)を参照してください。

ノート:

2つのスター・スキーマに基づいてデータを分析するには、スター・スキーマごとにデータセットを作成し、データセットをワークブックに追加してから、データセットをブレンドします。

結合ダイアグラムには、結合が不完全な場合、表間で使用される結合のタイプを示す結合アイコンが表示されます。結合アイコンは、結合タイプを示すベン図のサムネイルです。

アイコン	説明
	内部結合を示します。このアイコンを選択した場合、青色で表示されます。内部結合では、右表の行と一致する左表の行を返します。
	左結合を示します。このアイコンを選択した場合、青色で表示されます。左結合では、右表の一致した左表のすべての行を返します。右表に一致する行も含まれます(ある場合)。右表に一致した行がない場合、左結合には右表の列の null 値が含まれます。
	右結合を示します。このアイコンを選択した場合、青色で表示されます。右結合では、左表の一致した右表のすべての行を返します。左表に一致する行も含まれます(ある場合)。左表に一致した行がない場合、右結合には左表の列の null 値が含まれます。
	完全外部結合を示します。このアイコンを選択した場合、青色で表示されます。完全外部結合では、左表と右表の両方のすべての行を含む結果セットを返します。両方に一致する行も含まれます(ある場合)。一致がない場合、欠落している側には null が含まれます。
	破線は未完了の結合を示します。このアイコンを選択した場合、青色で表示されます。このアイコンを選択しない場合、黄色で表示されます。アイコンをクリックして結合エディタを開き、結合を割り当てるか修正します。

データセットの表間の結合の追加

結合を追加して、ファクト表とディメンション表間の関係を示します。

チュートリアル

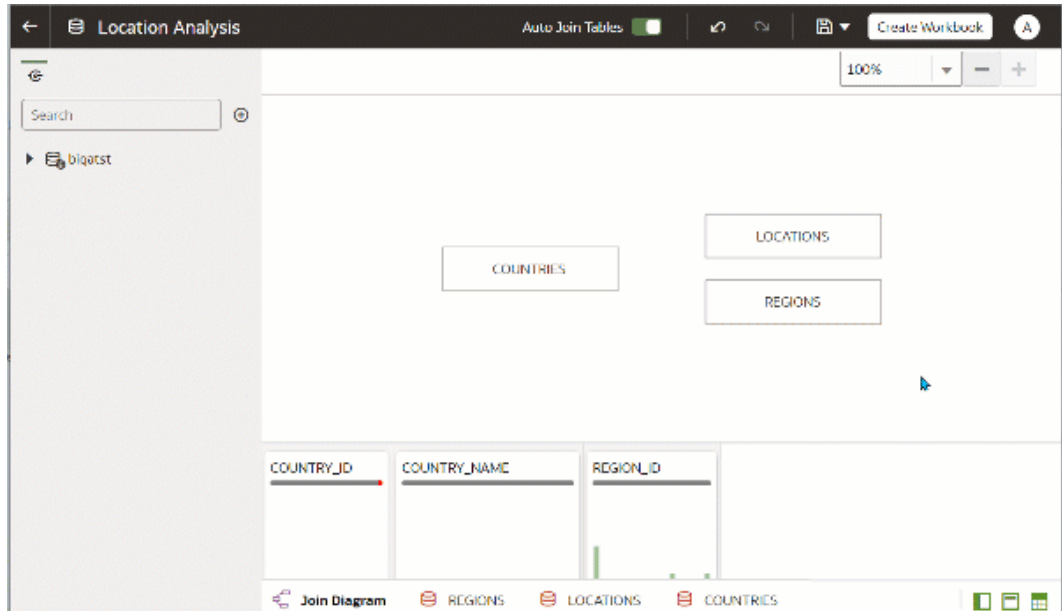
デフォルトでは、データセットに表をドラッグ・アンド・ドロップすると、データ・ソースに定義されている結合がデータセットの表の間に自動的に作成されます。また、Oracle Analytics によって、表の間に見つかった列名の一致に基づいて結合が自動的に作成されます。ただし、Oracle Analytics は、結合を自動的に作成する方法を常に認識できるわけではありません。そのような場合、データセットを保存するには、結合を手動で作成する必要があります。

データセット表に削除された列が含まれている場合、これらの列は結合で使用できません。データセット表に非表示になっている列が含まれている場合、これらの列は結合で使用できます。[列の非表示または削除](#)を参照してください。

結合の使用の詳細は、[データセット表の結合の理解](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 「結合ダイアグラム」で、他の表への結合が必要な表を見つけます。
ファクト表は結合ダイアグラムで最も左側にある表であることを確認します。

5. 表をクリックして、結合するターゲット表に選択した表をドラッグ・アンド・ドロップします。
結合アイコンは青色で表示されます。
6. オプション: 結合をクリックして「結合」ダイアログを開き、結合を検査します。



データセットの自動結合の無効化

データセットに表を追加したときに Oracle Analytics で結合が作成されないように、「**自動結合表**」トグル・ボタンを使用できます。

デフォルトでは、データセットに表をドラッグ・アンド・ドロップすると、データ・ソースに定義されている結合がデータセットの表の間に自動的に作成されます。また、Oracle Analytics によって、表間で検出された列名の一致に基づいて結合が自動的に作成されます。

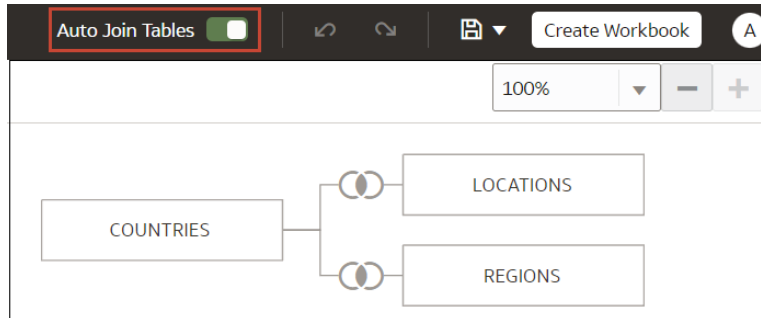
場合によっては、Oracle Analytics によって自動的にデータセットの結合が作成されるようにするのではなく、自分で結合を作成します。たとえば、データセットに含まれる一致する列が多すぎて、不要な一致の削除に時間がかかる場合などです。そのような場合は、「**自動結合表**」トグル・ボタンの選択を解除して、自動結合をオフにします。

「**自動結合表**」の選択を解除しても、データセットの既存の結合は削除されないため、それらの結合は手動で削除する必要があります。

自動結合をオフにして、データセットに表を追加した後で、データセットを保存するには、結合を手動で追加する必要があります。データセット表の結合の作成の詳細は、[データセットの表間の結合の追加](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 「結合ダイアグラム」タブをクリックします。

5. データセットに追加する表に対して、Oracle Analytics で結合が自動的に作成されないように、「自動結合表」をクリックします。



データセットの結合の変更または修正

データセットに自動的に追加された結合を変更したり、不完全な結合または破損した結合を修正できます。

ノート:

データセット内の各表は、1 つ以上の表に結合する必要があります。

このアイコンは未完了の結合を示します:



結合の使用の詳細は、[データセット表の結合の理解](#)を参照してください。

結合を作成するための必要な列が「結合」ダイアログにリストされない場合は、結合に使用できるようにするために列を更新できます。[表の列が一致しない場合の結合の追加](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 「結合ダイアグラム」で、結合を見つけ、その上にカーソルを合せてクリックし、「結合」ダイアログを開きます。
5. オプション: 結合タイプをクリックして、新しいタイプを選択します。選択した結合タイプによって、結合ダイアグラムの結合アイコンが決定します。
6. オプション: 結合条件を変更するには、表の結合列名をクリックして結合する別の列を選択します。
7. オプション: 別の結合条件を追加するには、「結合条件の追加」をクリックして表ごとに結合列を選択します。

Join COSTS - PROMOTIONS

Inner

COSTS		PROMOTIONS
PROMO_ID	=	PROMO_ID
Select a column	=	Select a column

Add Join Condition

8. 「保存」をクリックします。

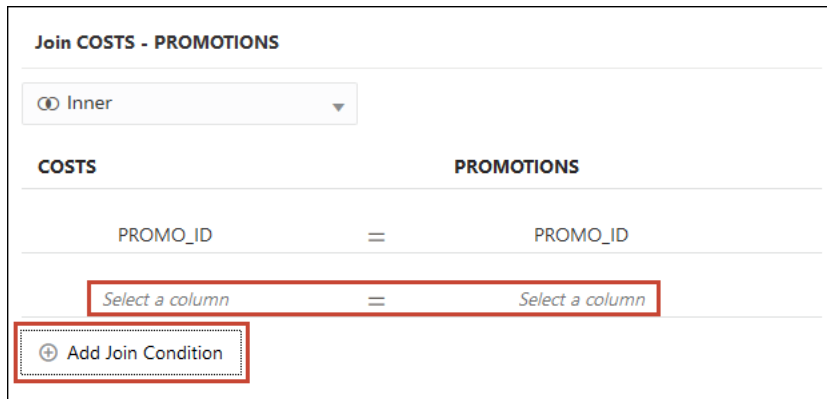
表の列が一致しない場合の結合の追加

データセットの列データが表間で一致しない場合、列のデータを、結合を作成するために必要な書式に変換できます。

▶ ビデオ

変換の例として、データ型の変更、列のデータの分割または連結、列のデータのエンリッチなどがあります。列に対して使用可能な変換メニュー・オプションのリストは、その列にあるデータの型によって異なります。[変換推奨のリファレンス](#)および[クイック・データ変換の列メニュー・オプション](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 「結合ダイアグラム」で、変換する列を含む表を見つけます。
5. 表を右クリックして「開く」を選択します。
6. 変換エディタで、変換する列を見つけて、「オプション」をクリックします。
7. メニューから、変換を選択して、すべての必須フィールドを指定します。
8. 「データセットの保存」をクリックしてから、「結合ダイアグラム」タブをクリックします。
9. 「結合ダイアグラム」で、表をクリックしたままにして選択し、結合するターゲット表に選択した表をドラッグ・アンド・ドロップします。
10. 「結合ダイアグラム」で、先ほど追加した結合を見つけ、その上にカーソルを合せてクリックし、「結合」ダイアログを開きます。
11. オプション: 結合タイプをクリックして、新しいタイプを選択します。選択した結合タイプによって、結合ダイアグラムの結合アイコンが決定します。
12. オプション: 結合条件を追加するには、「結合条件の追加」をクリックして表ごとに結合列を選択します。

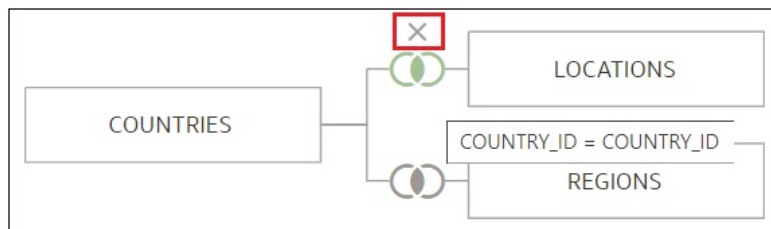


13. 「保存」をクリックします。

データセットからの結合の削除

データセットから表の結合を削除できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 「結合ダイアグラム」で、結合を見つけ、その上にカーソルを合せて「X」をクリックします。



5. 「保存」をクリックします。

データ・ソースの問合せにデータセット表を含める

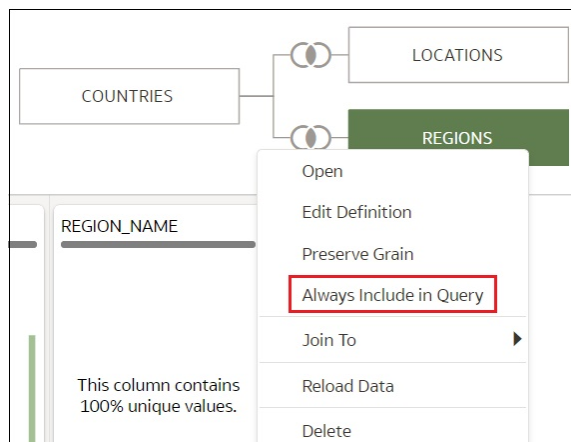
Oracle Analytics では、ビジュアライゼーションごとに最適化したソース固有の問合せを生成します。このプロセスで、データセットはデータ・モデルとして処理されます。ここで、ビジュアライゼーションを満たすのに必要な表のみが問合せで使用されます。

ただし、表をビジュアライゼーションで問い合わせなくても、問合せで表を使用するシナリオがあります。これらのシナリオで、表を「常に問合せに含める」に設定できます。たとえば、製品が関連付けられていて、ビジュアライゼーションが顧客および売上にのみ基づいている売上のみを表示することが必要な場合があります。また、ワー

クブックト内のすべてのビジュアライゼーションに日付フィルタを適用することが必要な場合もあります。

Oracle Analytics では、ビジュアライゼーションで使用されていないか、問合せに含めるように指定されていないデータセットの表のいずれかを削除します。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 「結合ダイアグラム」で、表を見つけて右クリックし、「常に問合せに含める」を選択します。



5. 「データセットの保存」をクリックします。

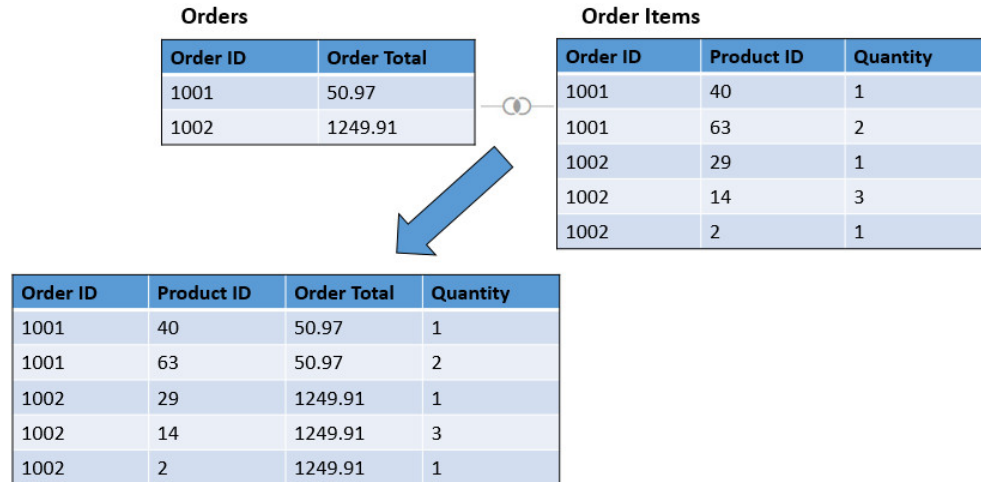
グレインの保持とは何ですか。

デフォルトでは、データセットのグレインは、最下位のグレインの表で決定されますが、グレインの保持の設定を使用して、データセットのグレインを決定する表を指定できます。

[グレインを決定する表の指定](#)を参照してください。

データセットの表でメジャーを作成できます。ただし、これによって 1 対多または多対多の関係のいずれかでメジャーが複製されます。このような場合、一方の側のカーディナリティの表を「グレインの保持」に設定して、そのレベルの詳細を維持できます。

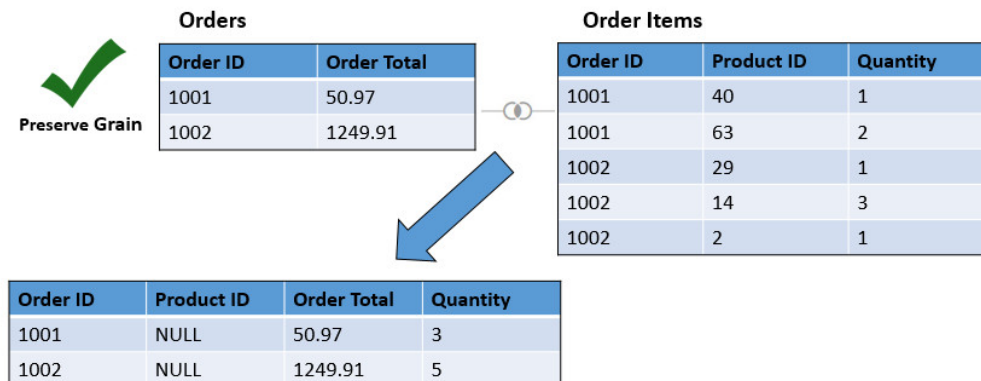
たとえば、オーダー表とオーダー・アイテム表がある場合、これらをオーダー ID 列で結合して、これらを問い合わせ、オーダー合計をオーダー・アイテムごとに複製します。これは、オーダー・アイテム表に下位のグレインがあるためです。



ただし、結果を問い合せてオーダー表のレベルでデータを表示する場合は、データセット・エディタのデータ・ダイアグラムでオーダー表を「グレインの保持」に設定します。

ノート:

次の例では、オーダーごとに製品に複数の値があるため、製品 ID 列は NULL になります。オーダー・レベルのグレインを保持するために、値が NULL に設定されます。



グレインを決定する表の指定

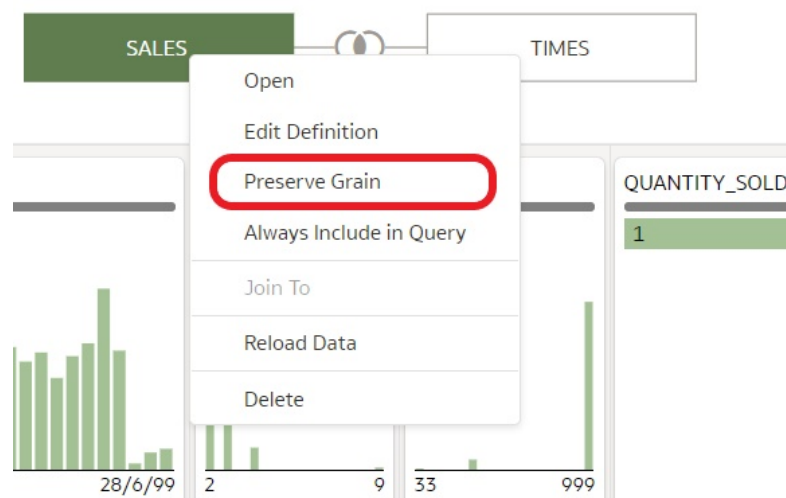
パラメータを使用して、計算の定数を置換します。

データセット内の任意の表にメジャーを含めることができます。ただし、これによって1対多または多対多の関係の片側でメジャーが複製されて、予期しない問合せ結果が生成されることがあります。このような場合、一方の側のカーディナリティの表を「**グレインの保持**」に設定して、そのレベルの詳細を維持できます。

表のグレインを変更した理由の例については、[グレインの保持とは](#)を参照してください

表を「**グレインの保持**」に設定すると、緑色のバーが結合ダイアグラムの表の上部に表示されます。この緑色のバーはデータセットが使用する表のグレインを示します。

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**データ**」をクリックします。
2. 「**データセット**」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「**アクション**」をクリックし、「**開く**」をクリックします。
4. 「**結合ダイアグラム**」で、表を見つけて右クリックし、「**グレインの保持**」を選択します。



5. 「**データセットの保存**」をクリックします。

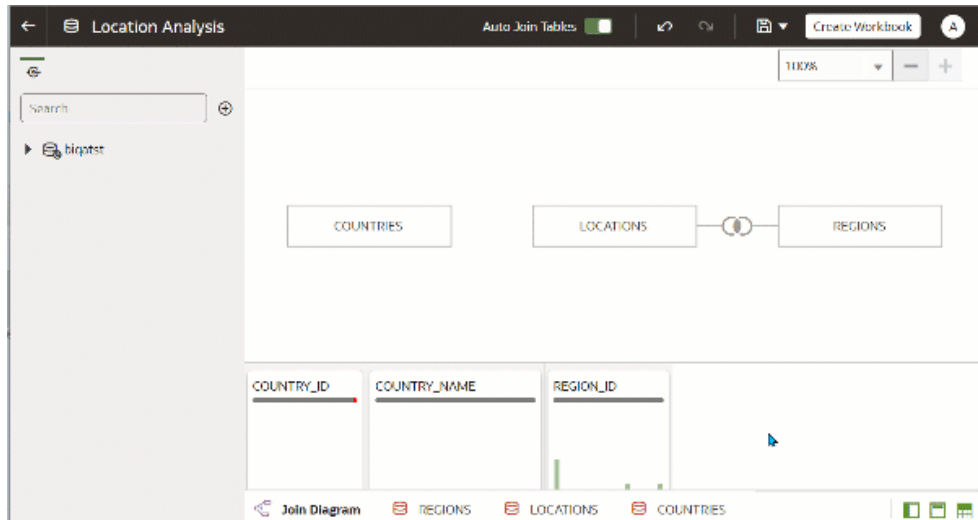
データセットの表の順序の再配置

ワークブックにデータセットを含めると、ワークブック・エディタの「**データ・パネル**」には、データセットの表がフォルダとして、データセットに追加した際と同じ順序で表示されます。

データセット・エディタの**表ページ・タブ**で、ビジュアライゼーションで最も頻繁に使用するフォルダと列を見つけやすい順序で、表をドラッグ・アンド・ドロップできます。

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**データ**」をクリックします。
2. 「**データセット**」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「**アクション**」をクリックし、「**開く**」をクリックします。

4. **表ページ・タブ**で、再配置する表を見つけます。
5. 表をクリックしたまま、タブ・バー上の別の位置までドラッグ・アンド・ドロップします。



6. 「データセットの保存」をクリックします。

品質インサイトとは

Oracle Analytics では、データのクレンジングおよびエンリッチに役立つように自動的にデータを分析します。

結合ダイアグラムまたは変換エディタで表を編集する場合、Oracle Analytics ではデータの品質を分析し、各列の上部にあるタイトルで品質インサイトと呼ばれるビジュアル・サマリーを提供します。品質インサイトを使用すると、データを探索したり、コンテンツのビジュアルの概要を使用して、データの品質を評価および改善できます。品質サマリーはデータのサンプルに基づいていますが、加えた変更はすべてのデータに適用されます。品質インサイトには、テキストの頻度タイトルまたは日付と数値のヒストグラムが表示されます。

The screenshot shows the Oracle Analytics interface for a 'Sample States' workbook. The main area displays a table with columns: City, State, Postal_Code, Country, Latitude, and Longitude. Above each column, there is a quality insight summary. A red box highlights these quality insights for the State, Postal_Code, and Country columns. The quality insights are as follows:

- City:** This column contains 100% unique values.
- State:** This column contains 99.22% unique values.
- Postal_Code:** This column contains 99.22% unique values.
- Country:** This column contains 96.53% unique values.
- Latitude:** This column contains 100% unique values.
- Longitude:** This column contains 100% unique values.

The table data is as follows:

City	State	Postal_Code	Country	Latitude	Longitude
Abra Pampa	Jujuy	AR101514	Argentina	-22.71	-65.69
Adelaide	South Australia	AU101679	Australia	-34.93	138.60
Ahmedabad	Dadra and Nagar Haveli	IN101449	India	23.030	72.580
Ahmednagar	Maharashtra	IN11439	India	19.110	74.750
Albany	New York	US10878	United States	44.620	-123.0
Aomori	Aomori	JP101537	Japan	40.825	140.71

品質タイルを使用すると、次のことが可能になります:

- **探索** - インスタント・フィルタ処理を使用してデータをリアルタイムで探索します。これにより、表のすべての列でデータを一時的にフィルタできます。同時に複数の値でフィルタできます。

City	State	Postal_Code
Belfast	EN	E1 1
Birmingham	Alabama	GB101409
Bristol	California	GB101410
Cardiff	Nordrhein-Westfalen	GB101432
Edinburgh	Ciudad de Buenos Ai...	GB101483
Glasgow	Colorado	GB101484
Leeds	Jujuy	GB101490
Liverpool	Karnataka	GB101491
London	Western Cape	GB101493
Manchester	Arkansas	GB101495

A City	A State	A Postal_Code
Belfast	EN	GB101409
Birmingham	EN	GB101495
Bristol	EN	GB101490
Cardiff	EN	GB101410
Edinburgh	EN	GB101432
Glasgow	EN	GB101496

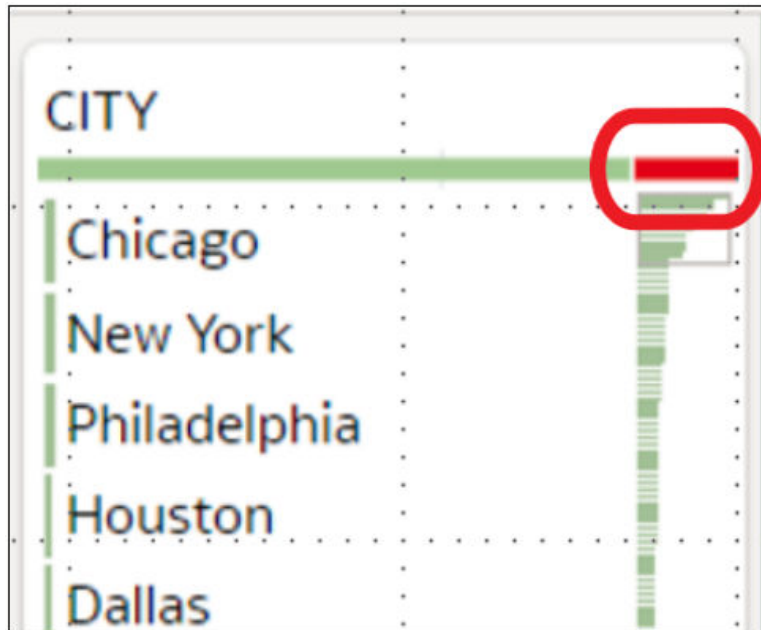
フィルタされる値は、緑色のボックスでマークされます。フィルタはデータ準備スクリプトに追加されます。

- **レビュー** - 棒グラフやヒストグラムなどのインタラクティブ・ビジュアライゼーションを使用して、データを評価し、異常および外れ値を識別します。

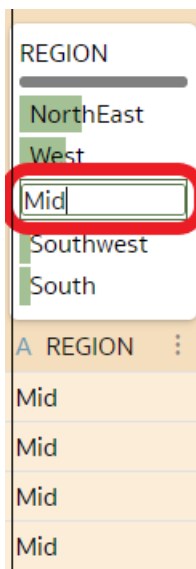
CREDIT_CARD_L...	REGION	HOUSE_OWNER...	N_TRANS_WEB...	BUY_INSURANCE
	NorthEast West Midwest Southwest South			No Yes
A CREDIT_CAR...	A REGION	A HOUSE_OWN...	A N_TRANS_WE...	A BUY_INSURA...
1100	West	1	1600	Yes
900	South	1	5000	Yes
600	NorthEast	1	414	No
2500	NorthEast	1	1400	Yes
1100	NorthEast	0	900	No

各列の上部にある品質タイルでは、データの深い意味的な理解に基づいて、その列のコンテンツの品質を即座にアセスメントします。

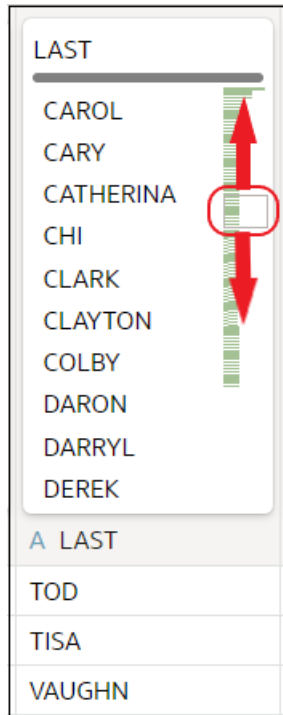
- **評価** - 品質バーにカーソルを合せると、有効な値と無効な値のパーセンテージを示すポップアップ・サマリーが表示されます。赤色でマークされた領域をクリックし、無効な値でフィルタします。



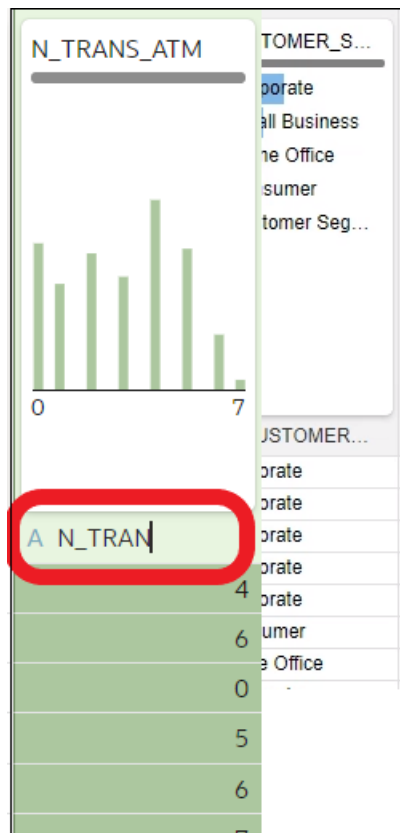
- **置換または修正** - 異常および外れ値を識別した場合、インライン置換を使用して値を修正します。品質バーでデータ品質の改善に関するフィードバックを即座に取得します。



- **スクロール** - スクロール可能なミニ・マップを使用して大きなデータセットを移動します。



- **列の名前変更** - よりわかりやすい列名を容易に作成します。



右下にある**品質タイル**・オプションを切り替えて、品質タイルを表示します。

A LAST	A N_MORTGAGES	A CAR_OWNER...
TOD	1	
TISA	1	
VAUGHN	1	
CHARLES	1	
LAVERN	0	
STEPHAN	1	
ANGFI O	1	

V_APPLY 31 Data Elements

品質インサイトを使用したデータの探索

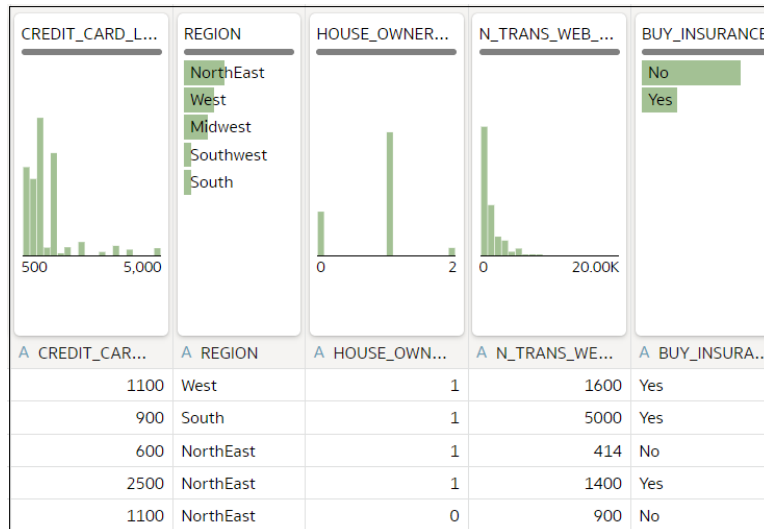
変換エディタでデータセットを編集すると、Oracle Analytics では品質インサイトと呼ばれるデータ品質のビジュアル・サマリーを各列の上に提供します。

1. ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックし、「開く」を選択してから「データ」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。

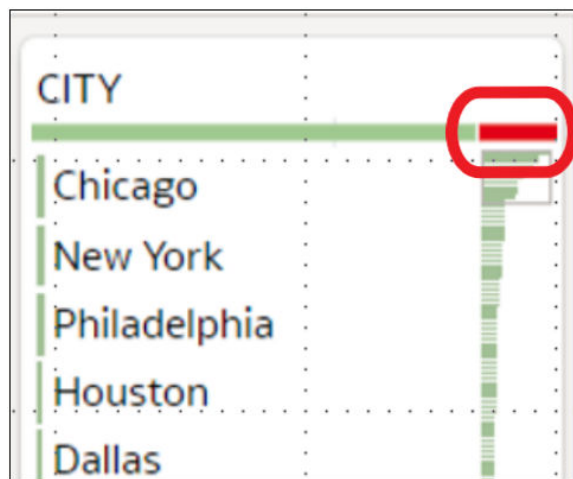
ノート:

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

2. 品質インサイトを使用して、データの深い意味的な理解に基づいて、その列のコンテンツの品質を即座にアセスメントします。



たとえば、品質バーにカーソルを合せ、列の有効な値の数と無効な値の数を表示します。赤色でマークされた領域をクリックし、無効な値でフィルタします。



3. 一時的なフィルタを適用してデータを探索するには、フィルタとして使用する1つ以上の値をクリックします。

Oracle Analytics では、緑色のボックスでフィルタ値を強調表示します。値のフィルタを解除するには、再度値をクリックします。

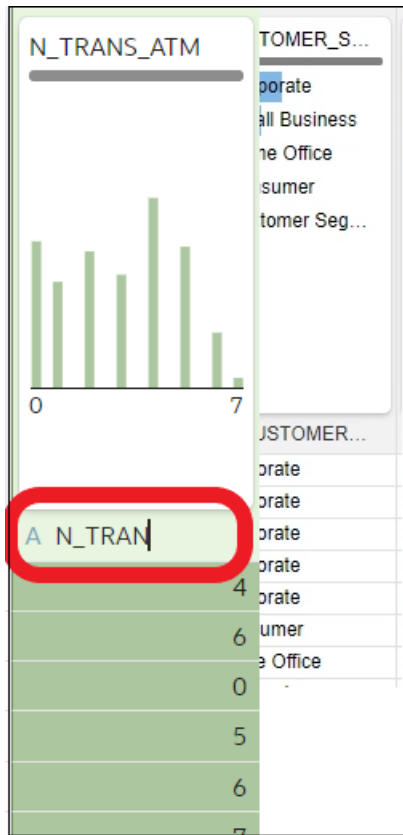
City	State	Postal_Code
Belfast	EN	E1 1
Birmingham	Alabama	GB101409
Bristol	California	GB101410
Cardiff	Nordrhein-Westfalen	GB101432
Edinburgh	Ciudad de Buenos Ai...	GB101483
Glasgow	Colorado	GB101484
Leeds	Jujuy	GB101490
Liverpool	Karnataka	GB101491
London	Western Cape	GB101493
Manchester	Arkansas	GB101495

A City	A State	A Postal_Code
Belfast	EN	GB101409
Birmingham	EN	GB101495
Bristol	EN	GB101490
Cardiff	EN	GB101410
Edinburgh	EN	GB101432
Glasgow	EN	GB101496

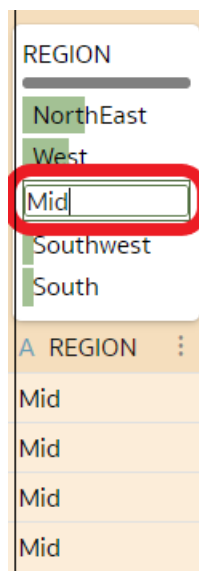
値をフィルタすると、Oracle Analytics では、すべてのデータ列を更新して、選択したフィルタ値に関連する行のみを表示します。長いリストの下部に近い値をフィルタすると、値を選択解除するためにこれを見つける際に、リストのスクロール・ダウンが必要になる場合があります。

ノート: 品質タイルで適用する一時的なフィルタは、データとともに保存されません(データ準備スクリプトに追加されません)。

4. 列の名前を変更するには、列名をクリックして値を編集します。

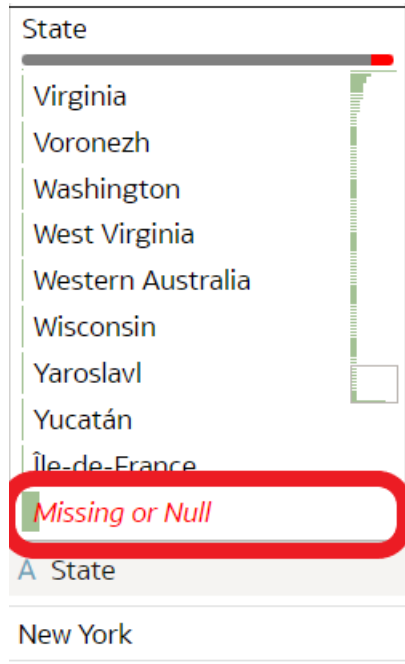


5. 値を編集するには、次のようにします。
 - a. 品質タイルで、変更する値をダブルクリックします。

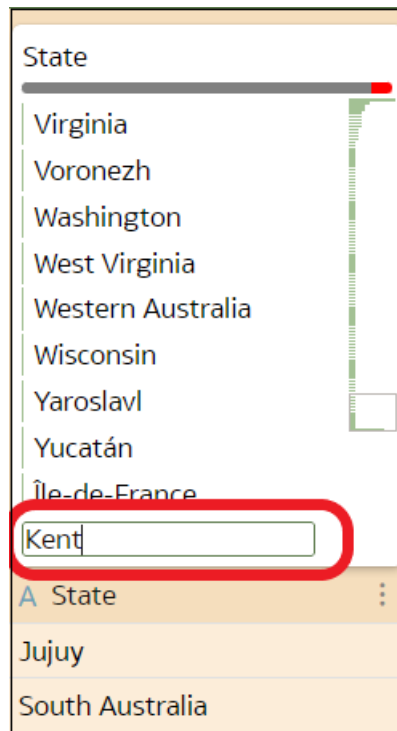


- b. Oracle Analytics では、元の値を含んでいた各行に指定した値を挿入します。
6. null または欠落している値を修正するには:

- a. 品質タイルで、リストの最後の値にスクロールします。
データに欠落している値がある場合、「**欠落または Null**」が赤色で強調表示されます。



- b. 「**欠落または Null**」をダブルクリックして、使用する値を入力します。
Oracle Analytics では、各「**欠落または Null**」行に指定した値を挿入します。



品質インサイトに適用した変更が、データ準備スクリプトに追加されます(フィルタを除く)。

データセット列の除去または復元について

列を除去しても表から永続的に削除されることはなく、エンリッチメントや変換を目的として、またはデータセットから作成するビジュアライゼーションに含めるために、除去した列を必要に応じて再度追加できます。

列を除去することはデータセットから列を削除することとは異なることを理解することが重要です:

- 「定義の編集」を使用して、列を **除去** します。
- 変換エディタには、どの列が除去されたかは示されず、列を除去しても、準備スクリプト・パネルにステップは追加されません。どの列が削除されたかを確認したり、列を再度追加するには、「定義の編集」に移動します。
- 変換エディタを使用して、列を **削除** します。
- 列を削除すると、準備スクリプト・パネル内にステップが作成されます。このステップを除去して、列を復元します。

データセット・フィルタは除去した列で作成できます。

場合によっては、多くの列が含まれる表の品質に関するインサイトをプロファイリングおよび生成すると、多くの時間とリソースが使用される可能性があります。多くの列が含まれる表を処理しているときにシステムのパフォーマンスを強化したい場合は、エンリッチメントまたは変換を実行する前に不要な列を除去することをお勧めします。

[列の非表示または削除およびデータセット表の列の除去または復元](#)を参照してください。

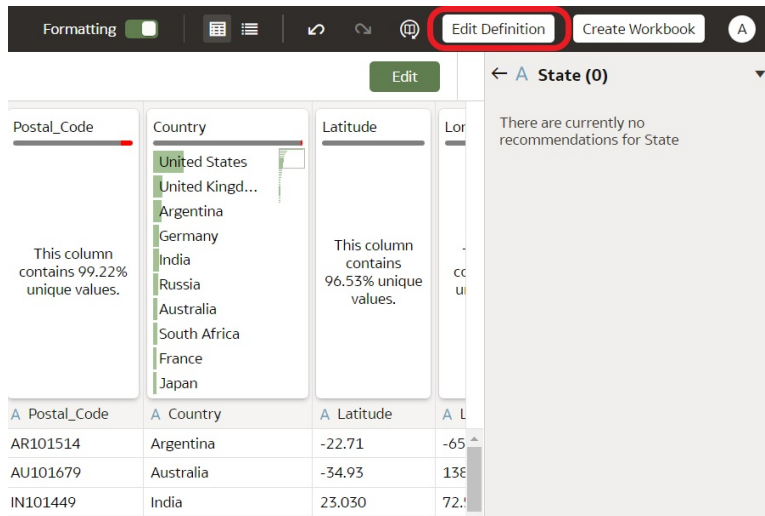
データセット表の列の除去または復元

データセットで列が必要ない場合に列をデータセットから除去したり、除去された列を復元できます。

[データセットの列の除去または復元について](#)を参照してください。

列を除去または復元すると、これらの変更は変換エディタ内の表のビューに表示されます。**Oracle Analytics** では、除去対象として選択した列が変換エディタの「準備スクリプト」ページで使用されている場合、警告が表示されます。ただし、除去対象として選択した列がワークブックまたはビジュアライゼーションで使用されている場合、警告は表示されません。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 「結合ダイアグラム」で表ページ・タブに移動し、操作する表をクリックします。
5. 変換エディタで、「定義の編集」をクリックします。



6. (オプション)列を除去するには、「すべて除去」をクリックしてすべての列を除去するか、除去する列を選択して「選択項目の除去」をクリックします。
7. (オプション)列を再度追加するには、「すべて追加」をクリックして、表示に含まれない列をすべて追加するか、追加する列を選択して「選択項目の追加」をクリックします。
8. 「OK」をクリックします。

データセット表のフィルタ処理

ほとんどの場合、表をデータセットに追加すると、表の列値がすべて含まれます。データセットで必要な値のみが表に含まれるように、フィルタを追加できます。

フィルタの使用の詳細は、[フィルタとフィルタ・タイプについて](#)を参照してください。

フィルタを列に適用すると、表内のすべての項目が制限されます。たとえば、表に世界のすべての地域のデータが含まれている場合、**COUNTRY_REGION**列でフィルタを作成して、その値を **Americas** に設定すると、表の列には北米、中米、南米のデータが含まれます。

データセットに複数のフィルタを追加する場合は、デフォルトで、フィルタが相互に制限されます。たとえば、**COUNTRY_REGION**列にフィルタを追加してその値を「南北アメリカ大陸」に設定し、**COUNTRY**列にフィルタを追加した場合、**COUNTRY**列のフィルタ選択値は、南北アメリカ大陸にある国の名前(カナダ、ブラジル、パナマなど)に限定されます。

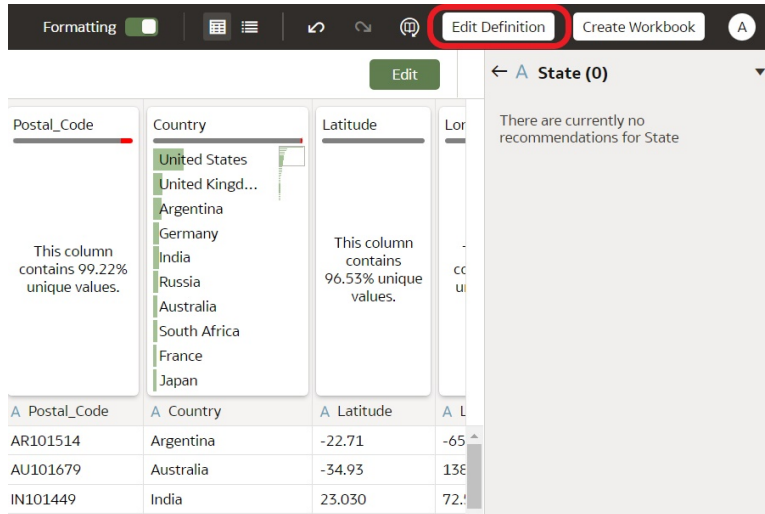
適用するすべてのフィルタは、表の品質タイル、変換エディタ、および表のデータ・プレビューで表示されるものを制限します。

表から除去された列にフィルタを作成できます。[データセット表の列の除去または復元](#)を参照してください。

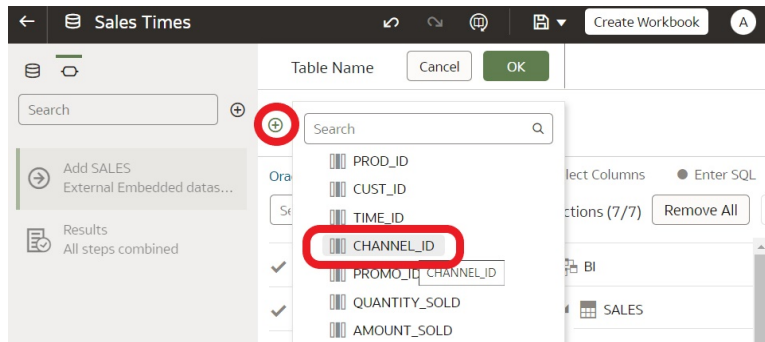
場合によっては、表のフィルタを使用して、ワークブック内の他のビジュアライゼーションを問い合わせることがあります。[データ・ソースの問合せにデータセット表を含める](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。

2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 結合ダイアグラムで表のページ・タブに移動して、操作する表をクリックします。
5. 変換エディタで、「定義の編集」ボタンをクリックします。



6. 「フィルタの追加」をクリックします。
7. フィルタ条件にする列を選択します。



8. フィルタの値を選択します。
9. フィルタのオフをクリックします。

データセット表がキャッシュされているかライブであるかの指定

データセット表のデータ・アクセス設定では、表のデータをキャッシュにロードするのか、データ・ソースから直接データが表で取得されるのかを決定します。

表を「自動キャッシュ」または「ライブ」に設定できます。

- **自動キャッシュ** - このオプションを選択した場合、表はデータをキャッシュにロードまたはリロードします。変換エディタまたはワークブックから表のデータをリフレッシュす

る際、このオプションによりパフォーマンスを改善できます。このオプションを選択すると、「リロード」メニュー・オプションが表およびデータセット・レベルで表示されます。

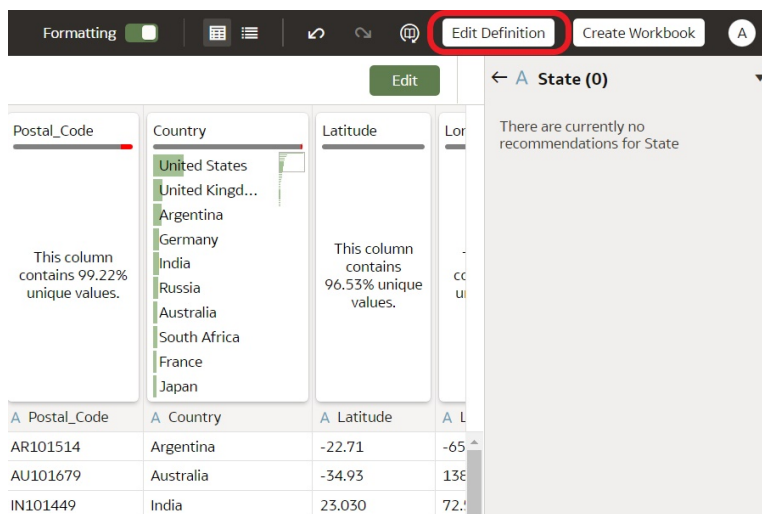
このオプションは圧縮後、2GB のデータに制限されます。データが 2GB より大きい場合、またはデータのロードに時間がかかる場合、データ・アクセス・モードはライブ問合せを使用します(接続タイプがこれをサポートしている場合)。自動キャッシュを使用し、データが 2GB より大きい場合、データのサイズを小さくするための日付範囲の制限など、列フィルタを表に追加しします。

- **ライブ** - このオプションを選択した場合、表ではデータ・ソースから直接データが取得されます。表を「ライブ」に設定すると、ソース・システムにより表のデータ・ソースの問合せが管理されます。データが Oracle Autonomous Data Warehouse などの高パフォーマンス・システムに格納されている場合、このオプションは便利です。また、最新データを使用することもできます。

複数の表を含むデータセットには、自動キャッシュを使用できる表およびライブ・データを含むことができる表があります。同じ接続を使用して複数の表をリロードし、ある表のデータのリロードに失敗した場合、自動キャッシュを使用するように設定されている表はすべてライブ・データを使用するように切り替えられます。

最高のパフォーマンスを得るには、データセット内のすべての表を、同じ方法でデータにアクセスするように設定します。1つのデータセット内の表に自動キャッシュとライブ・データが混在していると、システムで結合を解決する必要があり、各表で問合せの完了に必要なデータ量によってパフォーマンスが異なります

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 「結合ダイアグラム」で表ページ・タブに移動し、操作する表をクリックします。
5. 変換エディタで、「定義の編集」をクリックします。



6. データ・アクセス・パネルが表示されていることを確認します。

データ・アクセス・パネルが表示されていない場合は、ウィンドウの中央右端に移動し、ハンドルを見つけ、ドラッグしてパネルを開きます。

7. 「データ・アクセス」フィールドで、表のデータへのアクセス方法を指定します。

8. 「OK」をクリックします。

データセット表の元の書式設定の表示

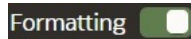
デフォルトで、Oracle Analytics では書式設定をデータセットの数値および日付に適用します。デフォルトの書式設定をオフに切り替えて、データセットのデータ・ソースで書式設定した数値および日付を表示できます。

たとえば、Oracle Analytics のデフォルトの書式設定が適用されると、日付は 06/20/2019 として表示されます。ただし、デフォルトの書式設定がオフになると、日付は 2019-06-20 として表示されます。

デフォルトの書式設定のオンとオフを切り替えることはできますが、デフォルトの書式設定を保存することはできません。列の書式設定を変更するには、[日付または数値列の表示形式の調整](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 結合ダイアグラムで表のページ・タブに移動して、操作する表をクリックします。

5. 変換エディタで、ツール・バーの「書式設定」切替をクリックして、書式設定をオフまたはオンにします。



ファイルからのデータセットの作成

このトピックでは、ファイルを使用してデータセットを作成する方法について説明します。

トピック:

- [データセットのファイルについて](#)
- [コンピュータからアップロードされたファイルからのデータセットの作成](#)
- [Dropbox または Google Drive からアップロードされたファイルからデータセットを作成](#)
- [データセットへの複数のファイルの追加](#)

データセットのファイルについて

Microsoft Excel スプレッドシート(XLSX および XLS)、CSV ファイルおよび TXT ファイルからデータセットを作成できます。アップロードできる最大ファイル・サイズは 250MB で、1つのファイルのデータ列制限は 250 列です。

コンピュータから、または Dropbox や Google Drive のデータ・ソース接続からファイルをアップロードおよび使用できます。

ファイルをアップロードする場合、アップロード先のデータセットでのみそれを使用できます。Oracle Analytics はアップロードされたファイルを格納しないため、別のデータセットに含めるにはファイルを再度アップロードする必要があります。

Excel スプレッドシート・ファイルの書式設定ルール

- 表は Excel ファイルの行 1 の列 1 から始めます。
- 表は、ギャップ、繰返し列名およびインライン見出しのない通常のレイアウトです。インライン見出しの例としては、印刷レポートのすべてのページに繰返し表示される見出しがあります。
- 行 1 には、表の列の一意名が含まれます。
- 行 2 以降には表のデータが含まれます。
- 列のデータ型は同じです。たとえば、電子メール・アドレスの保持に電話番号列を使用しないでください。
- データの細分度は同じです。

CSV および TXT ファイルの文字セット・エンコーディング・ルール

- UTF-8 を使用してソース・ファイルをエンコードします。
- ファイルを編集する前に、適切なフォントおよびスクリプト(またはサブセット)を使用するようにテキスト・エディタを構成します。

コンピュータからアップロードされたファイルからのデータセットの作成

Excel スプレッドシート(XLSX または XLS)、CSV ファイルおよび TXT ファイルをコンピュータからアップロードして、データセットを作成できます。

アップロードするファイルが、次の要件を満たしていることを確認します:

- ファイルが.XLSX または.XLS 形式の Excel スプレッドシート、CSV ファイルまたは TXT ファイルである。
- スプレッドシートにピボット・データが含まれていない。
- スプレッドシートは、データセットとしてのインポートおよび使用のために適切に構造化されています。[データセットのファイルについて](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「データセット」をクリックします。
2. 「データセットの作成」ダイアログで、ファイルをダイアログにドラッグ・アンド・ドロップするか、「ここにデータ・ファイルをドロップするか、クリックして参照します」をクリックしてアップロードするファイルのコンピュータを参照します。
3. 「データセットの作成」ページの「名前」フィールドに、ファイルから作成されるデータセット表の名前を指定します。
4. オプション: CSV または TXT ファイルをアップロードする場合、「区切り文字」、「3 桁区切り」および「小数区切り」フィールドでデフォルトのデリミタを確認または変更します。

カスタム・デリミタを指定するには、「区切り文字」フィールドで「カスタム」を選択し、デリミタとして使用する文字を入力します。CSV または TXT ファイルでは、カスタム・デリミタは 1 文字である必要があります。次の例では、デリミタとしてパイプ(|)を使用しています: Year|Product|Revenue|Quantity|Target Revenue| Target Quantity。

5. 「OK」をクリックしてファイルをアップロードし、データセットを作成します。

Dropbox または Google Drive からアップロードされたファイルからのデータセットの作成

Excel スプレッドシート(XLSX または XLS)、CSV ファイルおよび TXT ファイルを Dropbox または Google Drive からアップロードし、これらを使用してデータセットを作成できます。

ノート:

Google Analytics からアップロードしたファイルは、複数の表を含むデータセットを作成したり、そのデータセットに含める場合に使用できません。

データセットを作成する前に、必要な接続が存在することを確認してください。[使用可能な接続の表示](#)を参照してください。

アップロードするファイルが次の要件を満たしていることを確認してください。

- ファイルは、.XLSX または.XLS 形式の Excel スプレッドシート、CSV ファイルまたは TXT ファイルです。

- スプレッドシートにはピボット・データが含まれていません。
 - スプレッドシートは、データセットとしてのインポートおよび使用のために適切に構造化されています。[データセットのファイルについて](#)を参照してください。
1. ホーム・ページで、「作成」、「データセット」の順にクリックします。
 2. 「データセットの作成」ダイアログで、接続を選択します。
 3. アップロードするファイルを参照して選択します。
 4. 「データセットの作成」ページの「名前」フィールドに、ファイルから作成されるデータセット表の名前を指定します。
 5. CSV または TXT ファイルをアップロードする場合、「区切り文字」、「3桁区切り」および「小数区切り」フィールドでデフォルトのデリミタを確認または変更します。

カスタム・デリミタを指定するには、「区切り文字」フィールドで「カスタム」を選択し、デリミタとして使用する文字を入力します。CSV または TXT ファイルでは、カスタム・デリミタは1文字である必要があります。次の例では、デリミタとしてパイプ(|)を使用しています: Year|Product|Revenue|Quantity|Target Revenue|Target Quantity。
 6. 「OK」をクリックして、ファイルをアップロードし、データセットを作成します。

データセットへの複数のファイルの追加

データセットには、コンピュータから、または Dropbox や Google Drive からアップロードされた複数のファイルを含めることができます。

ノート:

Google Analytics からアップロードしたファイルは、複数の表を含むデータセットを作成したり、そのデータセットに含める場合に使用できません。

接続からファイルを追加する前に、必要な接続が存在することを確認してください。[使用可能な接続の表示](#)を参照してください。

データセットには、ファイルおよび接続から作成された表を含めることができます。[接続から作成されたデータセットへのファイルの追加](#)を参照してください。

アップロードするファイルが次の要件を満たしていることを確認してください。

- ファイルは、.XLSX または .XLS 形式の Excel スプレッドシート、CSV ファイルまたは TXT ファイルです。
- スプレッドシートにはピボット・データが含まれていません。
- スプレッドシートは、データセットとしてのインポートおよび使用のために適切に構造化されています。[データセットのファイルについて](#)を参照してください。

チュートリアル

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。

3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. ファイルを見つけます:
 - 追加するファイルがコンピュータに存在する場合、データセット・エディタの「接続」ペインの「追加」をクリックし、「ファイルの追加」をクリックします。
 - 追加するファイルが Dropbox または Google Drive に存在する場合、データセット・エディタの「接続」ペインの「追加」をクリックし、「接続の追加」をクリックします。
5. アップロードするファイルを参照して選択します。
6. 「データセットの作成」ページの「名前」フィールドに、ファイルから作成されるデータセット表の名前を指定します。
7. CSV または TXT ファイルをアップロードする場合、「区切り文字」、「3桁区切り」および「小数区切り」フィールドでデフォルトのデリミタを確認または変更します。
 カスタム・デリミタを指定するには、「区切り文字」フィールドで「カスタム」を選択し、デリミタとして使用する文字を入力します。CSV または TXT ファイルでは、カスタム・デリミタは 1 文字である必要があります。次の例では、デリミタとしてパイプ(|)を使用しています: Year|Product|Revenue|Quantity|Target Revenue| Target Quantity。
8. 「OK」をクリックして、データセットにファイルを追加します。
9. 「接続」ペインで、ファイルが追加されたことを確認します。
10. 「保存」をクリックします。

Oracle Fusion Cloud Applications Suite のサブジェクト領域からのデータセットの作成

Oracle Fusion Cloud Applications Suite のアプリケーションに格納されているサブジェクト領域からデータセットを作成できます。たとえば、Oracle Transactional Business Intelligence を含む Oracle Fusion Cloud Financials などです。

サブジェクト領域を「結合ダイアグラム」にドラッグ・アンド・ドロップすると、デフォルトでは、Oracle Analytics はデータセット表に列を含めません。表に含める列を指定する必要があります。

Oracle Analytics は、サブジェクト領域から作成された表を自動的に結合しません。これらの表を手動で結合する必要があります。[データセット表の結合の理解](#)を参照してください。

Oracle Applications 接続を作成または使用してローカル Oracle Analytics インスタンスに接続しないでください。インスタンスへの接続を使用してローカル・サブジェクト領域または分析からデータセットを作成すると、データ・キャッシュの問題およびビジュアライゼーションのエラーが発生します。かわりに、ローカル・サブジェクト領域の接続タイプを使用して、Oracle Analytics インスタンスに格納されたサブジェクト領域からデータセットを作成します。[ローカル・サブジェクト領域によるデータセットの作成](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「データセット」をクリックします。
2. 「データセットの作成」ダイアログで、分析するアプリケーションへの接続を選択します。

Oracle Applications 接続にはこのアイコンがあります:



3. データセット・エディタで、「接続」ペインに移動し、サブジェクト領域を参照または検索します。

4. 1つ以上のサブジェクト領域を「**結合ダイアグラム**」にドラッグ・アンド・ドロップします。
5. 表に列を追加するには、**表ページ・タブ**に移動し、サブジェクト領域表をクリックし、**変換エディタ**を使用して、表に含める列を指定します。「**OK**」をクリックします。
6. 「**結合ダイアグラム**」で、結合する表を見つけ、これにカーソルを合せて選択し、これをクリックして、結合する表にドラッグ・アンド・ドロップします。結合エディタを開いて、結合タイプおよび結合条件を検査または更新します。
7. 「**データセットの保存**」をクリックします。
8. 左上に表示されているデフォルト名"新規データセット"を変更します。

Oracle Fusion Cloud Applications Suite の分析からのデータセットの作成

Oracle Fusion Cloud Applications Suite のアプリケーションからの分析に基づいてデータセットを作成できます。たとえば、Oracle Transactional Business Intelligence を含む Oracle Fusion Cloud Financials などです。

Oracle Analytics は、分析から作成された表を自動的に結合しません。これらの表を手動で結合する必要があります。[データセット表の結合の理解](#)を参照してください。

Oracle Applications 接続を作成または使用してローカル Oracle Analytics インスタンスに接続しないでください。インスタンスへの接続を使用してローカル・サブジェクト領域または分析からデータセットを作成すると、データ・キャッシュの問題およびビジュアライゼーションのエラーが発生します。かわりに、ローカル・サブジェクト領域の接続タイプを使用して、Oracle Analytics インスタンスに格納された分析からデータセットを作成します。[ローカル分析によるデータセットの作成](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「**作成**」をクリックし、「**データセット**」をクリックします。
2. データセット・エディタで、「**接続**」ペインに移動し、分析を参照または検索します。
3. 1つ以上の分析を「**結合ダイアグラム**」にドラッグ・アンド・ドロップします。
4. 「**結合ダイアグラム**」で、結合する表を見つけ、これにカーソルを合せて選択し、これをクリックして、結合する表にドラッグ・アンド・ドロップします。結合エディタを開いて、結合タイプおよび結合条件を検査または更新します。
5. 「**データセットの保存**」をクリックします。
6. オプション: 左上に表示されているデフォルト名"新規データセット"を変更します。

ローカル・サブジェクト領域によるデータセットの作成

Oracle Analytics インスタンスに格納されたローカル・サブジェクト領域からデータセットを作成できます。

サブジェクト領域を「**結合ダイアグラム**」にドラッグ・アンド・ドロップすると、デフォルトでは、Oracle Analytics はデータセット表に列を含めません。表に含める列を指定する必要があります。

Oracle Analytics は、サブジェクト領域から作成された表を自動的に結合しません。これらの表を手動で結合する必要があります。[データセット表の結合の理解](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「**作成**」、「**データセット**」の順にクリックします。
2. 「データセットの作成」ダイアログで、ローカル・サブジェクト領域を選択します。
3. データセット・エディタで、「**接続**」ペインに移動し、ローカル・サブジェクト領域を参照または検索します。
4. 1つ以上のサブジェクト領域を「**結合ダイアグラム**」にドラッグ・アンド・ドロップします。
5. 表に列を追加するには、**表ページ・タブ**に移動し、サブジェクト領域表をクリックし、**変換エディタ**を使用して、表に含める列を指定します。「**OK**」をクリックします。
6. 「**結合ダイアグラム**」で、結合する表を見つけ、これにカーソルを合せて選択し、これをクリックして、結合する表にドラッグ・アンド・ドロップします。結合エディタを開いて、結合タイプおよび結合条件を検査または更新します。
7. 「**保存**」をクリックします。
8. 名前を入力し、「**OK**」をクリックします。

ローカル分析によるデータセットの作成

Oracle Analytics インスタンスに格納された分析からデータセットを作成できます。

ローカル・サブジェクト領域接続オプションを使用して、ローカル分析からデータセットを作成します。「Oracle Applications」接続を作成または使用してローカル Oracle Analytics インスタンスに接続しないでください。ローカル・インスタンスへの接続を使用すると、データ・キャッシュの問題およびビジュアライゼーションのエラーが発生します。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「**ページ・メニュー**」、「**クラシック・ホームを開く**」の順にクリックします。
2. クラシック・ホームで、「**カタログ**」をクリックし、データセットの作成に使用する分析を見つけて開きます。分析エディタで、「**詳細設定**」タブをクリックします。
3. 「**発行された SQL**」フィールドで、SQL コードを選択してコピーします。
4. Oracle Analytics ホーム・ページで、「**作成**」をクリックし、「**データセット**」をクリックします。
5. 「データセットの作成」ダイアログで、ローカル・サブジェクト領域を選択します。
6. 「接続」ペインで、サブジェクト領域を見つけて展開し、「**手動問合せ**」オプションを見つけます。

7. 「**手動問合せ**」を結合ダイアグラムにドラッグ・アンド・ドロップして表シェルを作成します。
8. 「手動問合せ」表をダブルクリックします。
9. 「データセットの追加」ページで表の名前を変更し、「**論理 SQL の入力**」が選択されていることを確認します。
10. 「**文**」フィールドに SQL 文を貼り付けます。
11. 「**OK**」をクリックします。
12. オプション: SQL 文を変更するには、**表のページ・タブ**に移動して作成した表のタブが選択されていることを確認します。「**定義の編集**」をクリックして「データセットの追加」ページにアクセスし、SQL 文を変更します。

Essbase 接続によるデータセットの作成

Essbase 接続を使用してデータセットを作成できます。

ノート:

Essbase 接続は、複数の表を含むデータセットを作成したり、そのデータセットに含める場合に使用できません。

Oracle Essbase 接続を使用するデータセットは、ブレードに使用できません。

データセットを作成する前に、必要なデータ・ソース接続が存在していることを確認します。[使用可能な接続の表示](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「**作成**」をクリックし、「**データセット**」をクリックします。
2. 「データセットの作成」ダイアログで、Essbase 接続を選択します。
3. 変換エディタの「データセットの追加」ステップで、データセットで使用する Essbase キューブをダブルクリックします。
4. オプション: 「**別名**」値を選択します。

デフォルト以外の別名値を選択した場合、選択した別名表の値が、この Essbase データセットを使用するビジュアライゼーションに表示されます。

5. 「**追加**」をクリックしてデータセットを保存し、変換エディタに移動して、データセットのデータを変換およびエンリッチします。

REST エンドポイントがあるデータ・ソースからのデータセットの作成(プレビュー)

Workday、eBay、MailChimp など、SaaS または PaaS アプリケーションの REST エンドポイントからアクセスされたデータでデータセットを作成できます。

REST エンドポイント経由でデータに接続すると、データの内部的な形式や構造がわからなくても、SaaS や PaaS の多数のトランザクション・アプリケーションのデータを分析できます。

1. 分析する REST データ・ソースにすでに接続している場合は、ステップ 2 にスキップします。
接続していない場合は、REST データ・ソースへの接続を作成します。REST エンドポイントからのデータへの接続を参照してください。
2. ホーム・ページで、「作成」、「データセット」の順にクリックします。
3. 「データセットの作成」ダイアログで、REST データ・ソースへの接続をクリックします。
4. データセット・エディタで、「接続」ペイン、「スキーマ」、「AUTOREST」の順に移動します。

BUSINESS_TOTAL	BUSINESS_LOC...	POSITION	ID	ALIAS
523	27617	0	Ad68N3lg9HtYgzmFTGDtg	the-angus-barn-raleigh-2
523	27617	1	YAfSUU3Yq8uDhG9WqEMVIQ	aladdins-eatery-raleigh-15
523	27617	2	PriedvOPzA9hgHcHUNFygQ	phoxpress-raleigh
523	27617	3	h6cJlyX4YEEzrwUfN-ZK8Fg	william-b-umstead-state-park-raleigh
523	27617	4	aw7nO_lwXc3FttZ76VPukg	flame-kabob-raleigh

5. 「結合ダイアグラム」に、「AUTOREST」スキーマの表を 1 つ以上ドラッグ・アンド・ドロップします。
6. 「データセットの保存」をクリックします。
7. 名前を入力し、「OK」をクリックします。

REST エンドポイントがあるデータ・ソースへの接続のトラブルシューティングを参照してください。

3

データのエンリッチおよび変換

データをビジュアル化する前に、データセットのクレンジング、標準化およびエンリッチメントによってデータを準備します。

データをエンリッチおよび変換してその品質を改善し、ビジュアライズの準備をします。データの品質を改善すると、インサイトの質が向上します。

トピック:

- [Oracle Analytics](#) でのデータのエンリッチおよび変換について
- データのエンリッチおよび変換
- エンリッチメントの推奨の受入れ
- データの変換
- 置換を使用したデータの変換
- テキスト列の日付または時間列への変換
- 日付または数値列の表示形式の調整
- データ準備時のビン列の作成
- データセットでの列プロパティの構成
- 列の表示/非表示
- 非表示列または削除列の復元
- データセットへの列の追加
- ワークブックの計算済データ要素の作成
- データ準備スクリプトの編集
- エンリッチおよび変換リファレンス

Oracle Analytics でのデータ・エンリッチメントと変換について

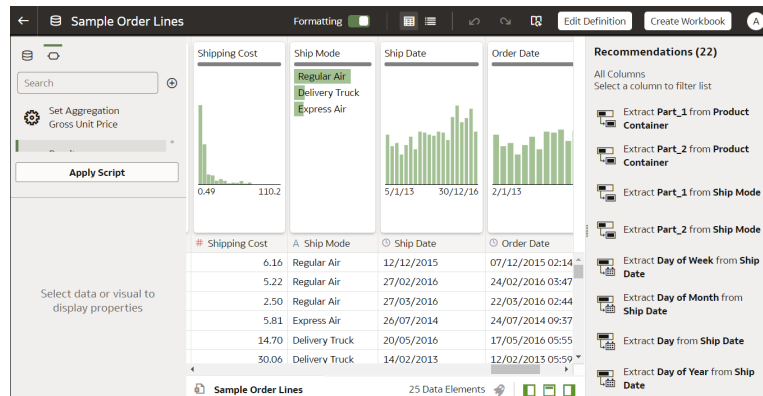
Oracle Analytics では、分析用に使用可能にする前のデータのエンリッチおよび変換が容易になります。

 [チュートリアル](#)

変換エディタに移動します

ワークブック - ワークブックを開く場合、「データ」ページをクリックし、「**データ・ダイアグラム**」で、準備するデータセットを選択します。データ・セットに複数の表がある場合は、表ごとにタブが 1 つある「**結合ダイアグラム**」が表示されます。表を選択して、変換エディタでこれを開きます。

データセット - データセットを開くと、変換エディタが表示されます。データセットに複数の表がある場合は、表ごとにタブが1つある**結合ダイアグラム**が表示されます。表を選択して、変換エディタでこれを開きます。



推奨される変換の適用

ワークブックを作成してこれにデータセットを追加すると、データの典型的なサンプルに対して実行される列レベルのプロファイリングが行われます。データのプロファイリング後、データセット内の認識可能な列について提供された変換およびエンリッチメント推奨を実装できます。データに対してシングルクリックの変換およびエンリッチメントを実行するために、次のタイプの推奨が提供されます。

- 列の連結。たとえば、個人の名および姓を含む列を追加します。
- 管理者が Oracle Analytics に追加したカスタム・ナレッジ・エンリッチメント。
- 日付部分の抽出。たとえば、月、日、年の書式を使用する日付から曜日を抜き出し、ビジュアライゼーションで日付がより役立つようにします。
- 機密フィールドを含む列を削除します。
- 年単位、月単位または日単位の有効期間の抽出を使用した、日付列の期間エンリッチメント。たとえば、生成された数値列を使用して、0-3 か月、3-6 か月、6 か月以上などのビンにデータを割り当てることができます。
- 市区町村または郵便番号の緯度および経度などのグローバル・ポジショニング・システムのエンリッチメント。
- 機密フィールドの難読化またはマスキング(全体および一部)。
- 部分抽出。たとえば、住所の番地名から家屋番号を抜き出します。
- セマンティック抽出。たとえば、電子メール・アドレスのドメインなど、認識されるセマンティック・タイプから情報を抜き出します。

独自の変換の適用

列アクション・パネルで表示される推奨された変換に加えて、様々な方法で独自の变換を作成できます:

- 各列の上部にある「オプション」メニューを使用して、「名前変更」、「大文字」および「トリミング」などの一般的な変換を適用します。データの变換を参照してください。

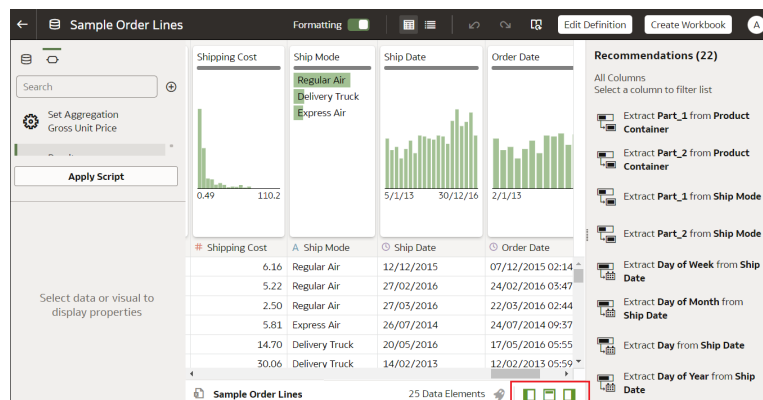
- 「データ・パネル」で「準備ステップの追加」をクリックして、カスタム変換に基づいて列を追加します。演算子、算術、集計および変換などの広範囲な関数を使用して列を作成できます。データセットへの列の追加を参照してください。
- 「データ・パネル」の左下隅にある「要素」オプション・ペインを使用して、「処理形式」（「属性」または「メジャー」）を選択するか、デフォルトの「集計」タイプを変更します。

データセットの変換がワークブックおよびデータ・フローに与える影響

データセットに適用するデータ変換およびエンリッチメントの変更は、同じデータセットを使用するすべてのワークブックおよびデータ・フローに影響を及ぼします。データセットを共有するワークブックを開いたときに、ワークブックで更新済データが使用されていることを示すメッセージが表示されます。データセットのデータをリフレッシュすると、準備スクリプトの変更がリフレッシュ済のデータに自動的に適用されます。

変換エディタの設定

開始する前に、データ・パネル、推奨事項パネルおよび品質タイルを表示して、変換エディタを構成することをお勧めします。右下に表示される「データ・パネルの切替え」、「列アクション・パネルの切替え」および「品質タイルの切替え」の切替えオプションを使用します



データのエンリッチおよび変換

ビジュアライゼーション・ワークブックをデプロイする前に、通常は、データをエンリッチおよび変換します。たとえば、データ列の名前変更、携帯電話のデータの修正または計算の追加を行う場合があります。

- ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックし、「開く」を選択してから「データ」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。

 **ノート:**

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

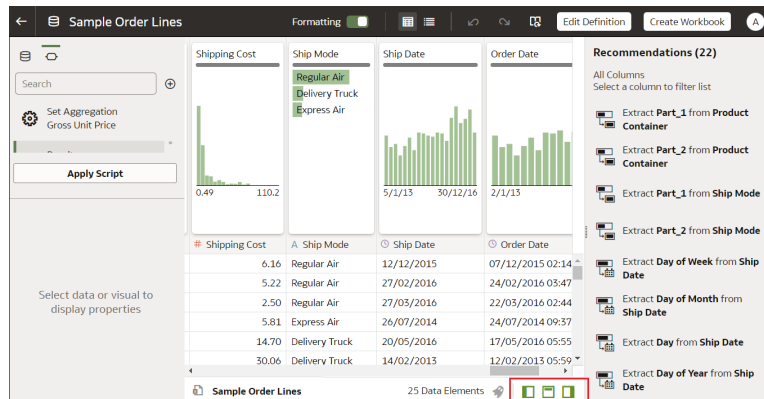
2. 列を選択し、エンリッチおよび変換ツールを使用してデータを拡張します。
 - **推奨事項** パネルを使用して、提示されたエンリッチメントおよび変換を適用します。
 - 各列の上部にある「**オプション**」メニューを使用して、「名前変更」、「大文字」および「トリミング」などの一般的な変換を適用します。
 - 列の上部にある「**オプション**」メニューから、「**編集**」をクリックして Oracle Analytics 関数ライブラリの関数および式を含む列を拡張します。たとえば、集計、文字列、式および数学関数です。
 - 「データ・パネル」で「**準備ステップの追加**」をクリックして、カスタム変換に基づいて列を追加します。Oracle Analytics 関数ライブラリの広範囲な関数および式を使用して、列を作成できます。たとえば、集計、文字列、式および数学関数です。
 - データ・パネルの下部にある「プロパティ」ペインを使用して、列のタイプおよび集計をレビューおよび変更します。たとえば、「**処理形式**」を選択して属性からメジャーに変更するか、デフォルトの「**集計**」タイプを「合計」から「平均」に変更します。
 - 各列の上にある品質インサイト・タイルを使用して、データを探索およびエンリッチします。

データを編集すると、「準備スクリプト」ペインにステップが自動的に追加されます。青色のドットは、ステップが適用されていないことを示します。

3. データ準備の変更を保存し、これらをデータに適用するには、「**データセットの保存**」をクリックします。

単一の表データセットまたはファイルベースのデータセットを処理している場合、「**適用スクリプト**」をクリックします。
4. ワークブックで操作している場合、「**保存**」をクリックして「**ビジュアル化**」をクリックし、エンリッチした列を確認します。

ノート: データ・パネル、推奨事項パネルおよび品質インサイトを表示して、変換エディタを構成することをお勧めします。右下に表示される「**データ・パネルの切替え**」、「**列アクション・パネルの切替え**」および**品質インサイトの切替え**の切替えオプションを使用します。



エンリッチメントの推奨の受入れ

変換エディタでデータセットを編集するとき、Oracle Analytics ではデータをエンリッチするための推奨を提示します。

既存のデータセットをアップロードするか開き、エンリッチメント推奨を使用してデータを変更できます。データセットを変更した後、ワークブックを作成できます。

郵便番号属性列を都道府県名で拡張するなど、エンリッチメント推奨によってデータに情報が追加されると、郵便番号に関連付けられた都道府県の名前を含むデータセットに新しい列が追加されます。推奨を選択すると、変更が準備スクリプトに追加され、データセットを保存するか、準備スクリプトを適用すると、適用されます。変更を削除または元に戻した場合、推奨が使用可能なオプションとして再度推奨事項パネルに表示されます。


エンリッチメント推奨を使用すると、データ・サイエンティストの専門知識がなくてもデータを強化できます。

1. ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックし、「開く」を選択してから「データ」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。

ノート:

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

2. エンリッチする列を選択し、列アクション・パネル(推奨)で「推奨事項」をクリックして、これらをステップとして準備スクリプトに追加します。


 ノート:

右下にある「**列アクション・パネルの切替え**」オプションを切り替えて推奨が表示されていることを確認します。

3. 準備スクリプト・パネルを使用して、データ・エンリッチメントを確認し、必要に応じて変更します。
たとえば、ステップにカーソルを合せ、「X」をクリックしてエンリッチメントを除去します。
4. データ準備の変更を保存し、これらをデータに適用するには、「**データセットの保存**」をクリックします。
単一の表データセットまたはファイルベースのデータセットを処理している場合、「**適用スクリプト**」をクリックします。

 ノート:

システム・ナレッジまたはカスタム・ナレッジが更新され、データセットに対する作成者権限がある場合は、ツールバーの「**プロファイル結果のリフレッシュ**」をクリックして、現在開いているデータセットの結果を再プロファ

イルしてリフレッシュできます()。通常、Oracle Analytics がこのリフレッシュを管理するため、ほとんどの場合、このオプションを使用する必要はありません。システム・ナレッジが更新された場合、またはカスタム・ナレッジが更新され、これを現在開いているデータセットに組み込む場合は、「**プロファイル結果のリフレッシュ**」を使用してデータを再プロファイルします。新しいナレッジが使用可能になると、「**プロファイル結果のリフレッシュ**」アイコンに使用可能な更新数を示すアラートが表示されます。

データの変換


変換エディタを使用して、データを強化できます。たとえば、テキストを大文字に変換したり、データから先頭や末尾のスペースを削除します。データを変換して、コンテンツのコンシューマにとって使いやすく強力なものにします。

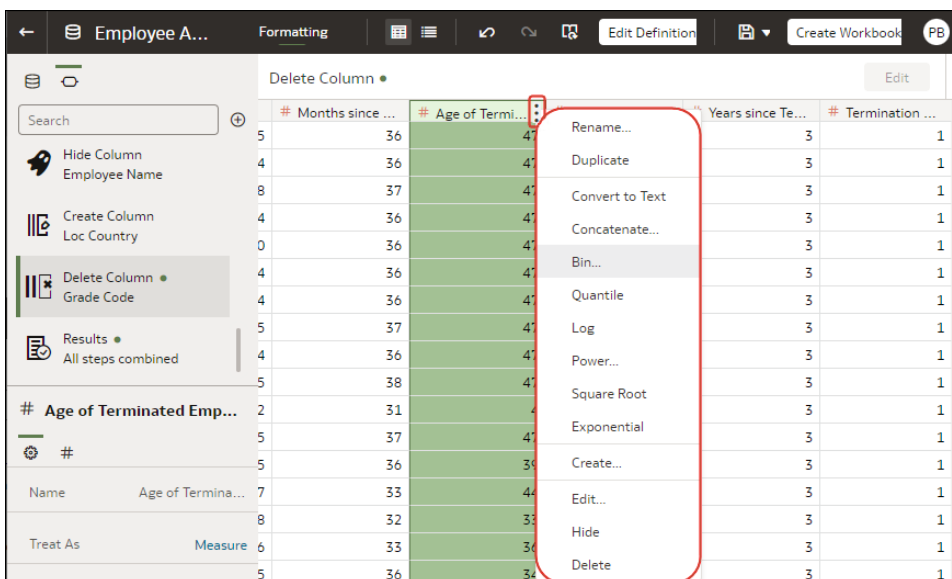
変換スクリプトを適用しないでワークブックまたはデータセットを閉じる場合、行ったデータ変換の変更がすべて失われます。

1. ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックし、「**開く**」を選択してから「**データ**」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。

 ノート:

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

2. 変換する列にマウス・カーソルを合せます。
3. 「オプション」(データ列の右上にある省略記号)をクリックし、変換オプション(「ビン」、「名前変更」、「テキストに変換」など)を選択します。



Oracle Analytics により、選択したオプションを変換するステップが「準備スクリプト」パネルに追加されます。

4. データ準備の変更を保存し、これらをデータに適用するには、「データセットの保存」をクリックします。

1つの表のデータセットまたはファイルベースのデータセットを使用している場合は、「適用スクリプト」をクリックします。

置換を使用したデータの変換

単純なパターン一致または正規(regex)表現を使用して列のデータを変換します。たとえば、「状態」列では、CA を California に変更できます。

正規表現とも呼ばれる、任意の Perl Compatible Regular Expression (PCRE)を使用できます。変換は、データセット内のすべての該当する行に適用されます。

1. ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックし、「開く」を選択してから「データ」をクリックします。「データ・ダイアグラム」また

は「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。

ノート:

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

2. 変換するテキスト列を選択します。
3. 「オプション」をクリックし、「準備」をクリックします。
4. 置換ステップ・エディタで、値を照合する方法を指定します。
 - 「正規表現の使用」をクリックして、複雑な正規表現(regex)を使用して照合します。
 - 「全部の値のみと一致」をクリックして、"male"を"M"に変更しますが、"female"は"feM"に変更しません。
5. 「置換する文字列」フィールドと「新規文字列」フィールドで、検索および置換(大/小文字を区別)するリテラル・テキストまたは正規表現を指定します。

例:

- "2553 Bolman Court"を"2553 #Bolman# #Court#"に変更するには、「正規表現の使用」を選択して「置換する文字列」フィールドに([A-Za-z]+)と入力し、「新規文字列」フィールドに#s1#と入力します。
- "male"を"M"に変更するには、「全部の値のみと一致」を選択して、「置換する文字列」フィールドに male と入力し、「新規文字列」フィールドに M と入力します。これによって、"male"は"M"に変更されますが、"female"は"feM"に変更されません。

両方のフィールドに入力すると、変換されたデータのプレビューがプレビュー・ペインに表示されます。プレビュー・ペインに希望する変換が表示されるまで置換オプションを調整します。

6. 「ステップの追加」をクリックします。

Oracle Analytics では、ステップが準備スクリプト・パネルに追加されます。
7. データ準備の変更を保存し、これらをデータに適用するには、「データセットの保存」をクリックします。

1つの表のデータセットまたはファイルベースのデータセットを使用している場合は、「適用スクリプト」をクリックします。

正規表現を使用した置換変換の例

正規(regex)表現を使用してデータを変換する例をいくつか示します。

これらの例では、検索式は「置換する文字列」フィールドに入力する内容を示し、置換値は「新規文字列」フィールドに入力する内容を示しています。

表 3-1 置換変換の例

検索式	置換値	元のテキスト	置換されたテキスト	ノート
@([a-z]+)(?=\.[a-z]{3})	@example	MichelePFalk@yahoo.com	MichelePFalk@example.com	この例は、電子メール・アドレスのドメイン詳細を置換します。
^Gray Grey\$	Silver	Grey Gray Graystone	Silver Silver Graystone	^\$文字は、文字列全体の一致のみを探すことを意味します。垂直バーは OR の正規表現であるため、この場合、正規表現は"Gray"または"Grey"を探し、"Silver"で置換します。正規表現は値全体の一致のみを探すため、文字列 Graystone は変換されません。
\d+	9999	8398 Park Street 123 Oracle Parkway	9999 Park Street 9999 Oracle Parkway	この正規表現は、1 つ("\d")またはそれを超える("+)桁の数字を"9999"で置換します。置換は、元のテキストに 3 桁しか n ない場合にも機能します。
([A-z]+)(\d+)	\$2	UA101654 US829383	101654 829383	この正規表現は、1 つ("[A-z]")またはそれを超える("+)連続する文字と、それに続く 1 つ("\d")またはそれを超える("+)桁の数字を意味します。2 つの式はそれぞれかっこで囲まれており、これは 2 つのグループ(最初の部分([A-z])と 2 番目の部分(\d+))をキャプチャします。これらのグループは自動的に採番されるため、2 番目のグループ用のドル記号を使用することで置換で使用できます("\$2"など)。
([A-z]+)(\d+)	Postal Code: \$2	UA101654 US829383	Postal Code: 101654 Postal Code: 829383	この例では、グループに加えて独自の置換テキストを挿入する方法を示していることを除き、前の例と同じ一致式を使用します。テキストは、リコールされた一致グループの前後に挿入できます。

テキスト列の日付または時間列への変換

テキスト列を日付、時間またはタイムスタンプ列に変換できます。

たとえば、属性テキスト列を true の日付列に変換できます。

1. ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックし、「開く」を選択してから「データ」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。

 **ノート:**

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

2. 変換する列にカーソルをあわせませす。
3. 「**オプション**」をクリックし、変換オプション(たとえば、「**数値に変換**」または「**日付に変換**」)のいずれかを選択します。

Oracle Analytics では、ステップが準備スクリプト・パネルに追加されます。

4. データ準備の変更を保存し、これらをデータに適用するには、「**データセットの保存**」をクリックします。

1つの表のデータセットまたはファイルベースのデータセットを使用している場合は、「**適用スクリプト**」をクリックします。

加えた変更は、データ・ソースを使用してすべてのワークブックに適用します。

日付または数値列の表示形式の調整

日付列の表示書式および細分度レベルを調整できます。

 **LiveLabs スプリント**

たとえば、トランザクションの日付列の書式を November 1, 2017 から 2017-11-01 に変更したり、細分度を年から月に変更します。

1. ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックし、「**開く**」を選択してから「**データ**」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。

 **ノート:**

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

2. 編集する列にカーソルを合せ、「**オプション**」をクリックします。
3. 日付列の書式を変更するには、「**日付に変換**」をクリックしてから、「**ソース・フォーマット**」をクリックし、ビジュアルライゼーションで使用するフォーマットを選択します。
4. 数値列の書式を変更するには、「**編集**」をクリックし、関数ライブラリの関数を使用してフォーマットを変更します。

たとえば、数値列 `DISCOUNT_VALUE` を小数第2位から小数なしに切り上げるには、`ROUND(DISCOUNT_VALUE, 0)` を指定します。

5. 「**ステップの追加**」をクリックします。
Oracle Analytics では、ステップが準備スクリプト・パネルに追加されます。
6. データ準備の変更を保存し、これらをデータに適用するには、「**データセットの保存**」をクリックします。
1つの表のデータセットまたはファイルベースのデータセットを使用している場合は、「**適用スクリプト**」をクリックします。

データ準備時のビン列の作成

メジャーをビン化すると、メジャーの値に基づいて新しい列が作成されます。たとえば、温度の値を、70度以下と70度超の2つのビン・カテゴリに割り当てできます。

一定の数の等しいサイズのビンを作成するか、各ビンに値の範囲を明示的に指定することによって、ビンに値を動的に割り当てることができます。データ要素に基づいてビン列を作成できます。

1. ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックし、「**開く**」を選択してから「**データ**」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。

ノート:

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

2. 変更する列を選択します。
3. 選択した列の「**オプション**」をクリックし、「**ビン**」を選択します。
4. 「ビン」ステップ・エディタで、ビン列のオプションを指定します。
 - 数字を入力するか、矢印を使用してビン数を増減します。
 - 「**方法**」フィールドでの選択に基づいて、ビンの範囲および数が更新されます。
 - 「**手動**」方法で各ビンの境界(つまり最小および最大)を選択します。各ビンのデフォルト名も変更できます。
 - 「**等幅**」方法では、各ビンの境界は同じですが、数が異なります。「**ビン・ラベル**」フィールドでの選択に基づいて、ビンの列ラベルが更新されます。
 - 「**等高**」方法では、各ビンの高さは同じまたはほんのわずかに異なりますが、範囲は同じです。
 - 「**等幅**」方法を選択する場合、ビンを適用するディメンション(つまり属性データ要素)をクリックして選択します。

5. 「**ステップの追加**」をクリックします。



Oracle Analytics では「準備スクリプト」パネルにステップが追加され、「**適用スクリプト**」または「**データセットの保存**」をクリックしたときに適用できるようになります。

6. データ準備の変更を保存し、これらをデータに適用するには、「**データセットの保存**」をクリックします。

1つの表のデータセットまたはファイルベースのデータセットを使用している場合は、「**適用スクリプト**」をクリックします。

データセットの列プロパティの構成

変換エディタで、データセット列の「データ型」、「処理形式」、「集計」、「非表示」または「数値書式」プロパティを編集できます。たとえば、財務レポートを作成できるように、数値列を通貨として構成できます。

「データ」ビュー()で、1つの列のプロパティを同時に構成します。「メタデータ」ビュー()では、複数の列のプロパティを同時に更新できます。Oracle Analytics では、各プロパティの変更が準備スクリプト・パネルに追加されます。「元に戻す」コマンドを使用して、変更のロールバックを選択できます。


1. ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。

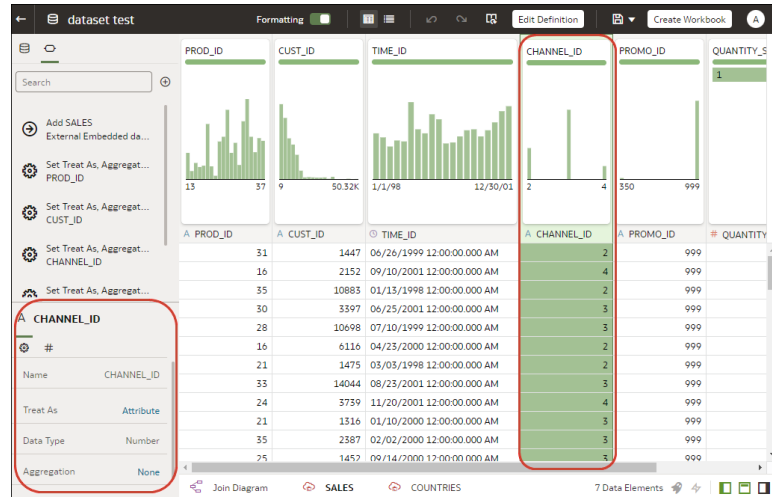
- データセットを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。
- データセットを含むワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックし、「**開く**」を選択してから「**データ**」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。

 **ノート:**

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

2. 1つの列のプロパティを構成するには:

- a. ツールバーから、「**データ**」()をクリックします。
- b. 列を選択し、データ・パネルの下部にあるプロパティ・ペインを使用して、プロパティを変更します。たとえば、「**数値書式**」を使用して、数値列を通貨として構成できます。



3. 複数の列の「データ型」、「処理形式」、「集計」または「非表示」プロパティを同時に更新するには:

- a. ツールバーから、「メタデータ」(📄)をクリックします。
データセット列は、「データ要素」としてリストされます。
- b. 複数のデータ要素を選択し、構成します。

Oracle Analytics は、選択されたデータ要素を強調表示し、選択した最初のデータ要素内に矢印を表示します。

Data Element	Data Type	Treat As	Aggregation	Sample Values
Order Line ID	Text	Attribute	None	1076; 1210; 134; 1630; 178
# of Order Lines	Text	Measure	Count	1076; 1210; 134; 1630; 178
Order ID	Text	Attribute	None	23140; 26439; 28482; 326
# of Orders	Text	Measure	Count Distinct	23140; 26439; 28482; 326
Order Priority	Text	Attribute	None	Critical; Medium; High; Not
Customer ID	Text	Attribute	None	308; 3151; 2007; 1104; 11
# of Customers	Text	Measure	Count Distinct	308; 3151; 2007; 1104; 11
Customer Name	Text	Attribute	None	Glen Caldwell; Glenda Hun
Customer Segment	Text	Attribute	None	Corporate; Home Office; S
City	Text	Attribute	None	Recife; Rivadh; Shanghai; S
Product Category	Text	Attribute	None	Office Supplies; Technolog
Product Sub Category	Text	Attribute	None	Paper; Telephones and Cor
Grouped Sub Category	Text	Attribute	None	Stationery; Furniture; Com
Product Container	Text	Attribute	None	Small Box; Wrap Bag; Sma
Product Name	Text	Attribute	None	Fiskars Soft Grip Scissors; M
Profit	Double	Measure	Sum	-10.87; -16.40; -204.71; -24
Quantity Ordered	Integer	Measure	Sum	7; 9; 12; 5; 10; 4; 2; 3; 8; 11
Sales	Double	Measure	Sum	168.63; 107.53; 151.03; 2.3
Discount	Double	Measure	Sum	0.89; 1.01; 1.34; 1.71; 2.22
Gross Unit Price	Double	Measure	Average	6.84; 69.64; 132.96; 32.69

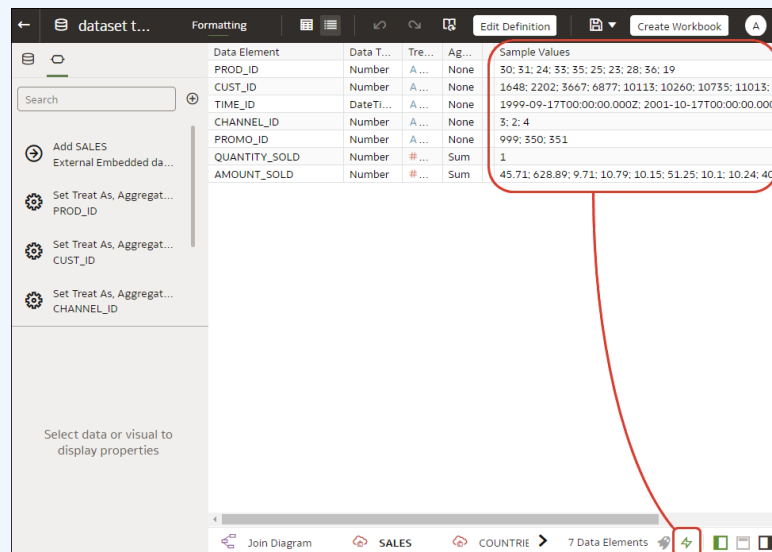
- c. データ・パネルの下部にあるプロパティ・ペインを使用して、プロパティを変更します。たとえば、選択した列の「集計」プロパティを「件数」に設定します。

選択した最初のデータ要素にある矢印をクリックし、ドロップダウン・リストから構成値を選択して、プロパティを変更することも可能です。

Data Element	Data T...	Tre...	Ag...	Sample Values
PROD_ID	Nu...	A...	N...	30; 31; 24; 33; 35; 25; 23; 28; 36; 19
CUST_ID	Number	A...	None	1648; 2202; 3667; 6877; 10113; 10260; 10735; 11013; 11575; 11779
TIME_ID	Text	A...	None	1999-09-17T00:00:00.000Z; 2001-10-17T00:00:00.000Z; 2001-07-13T00:00:00.000Z
CHANNEL_ID	Number	A...	None	3; 2; 4
PROMO_ID	Number	A...	None	999; 350; 351
QUANTITY_SOLD	Number	#...	Sum	1
AMOUNT_SOLD	Number	#...	Sum	45.71; 628.89; 9.71; 10.79; 10.15; 51.25; 10.1; 10.24; 40.62; 61.22

ノート:

「サンプル・データの使用」(🚩)をオフにして、「サンプル値」列に表示されるサンプル値の生成を停止することで、データ準備のパフォーマンスを向上させることができます。サンプル・データの使用オプションは、メタデータ・ビューの右下に表示されます。



列の非表示または削除

変換エディタで、データセットから列を非表示にしたり削除することができます。列を非表示にしても削除しても、列が永続的に除去されることはなく、必要に応じて列を復元できます。

列を削除することはデータセットから列を除去することとは異なることを理解することが重要です:

- 変換エディタを使用して、列を削除します。
- 列を削除すると、準備スクリプト・パネル内にステップが作成されます。このステップを除去して、削除された列を復元します。
- 「定義の編集」を使用して、列を除去します。

- 変換エディタには、どの列が除去されたかは示されず、列を除去しても、準備スクリプト・パネルにステップは追加されません。どの列が除去されたかを確認したり、列を再度追加するには、「定義の編集」に移動します。

列の非表示は表結合で使用できます。削除された列は表結合で使用できません。

データセット内の列を非表示にすることもできます。列を非表示にすると、列を使用して式を作成したいが、列をデータセット内に表示する必要がないときに役に立ちます。[データセット表の列の除去または復元](#)を参照してください。

- ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックして、「開く」をクリックし変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択して、「アクション・メニュー」をクリックし、「開く」を選択して「データ」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。

ノート:

Oracle Analytics では、単一の表データセットにはデータ・ダイアグラム、複数表データセットには結合ダイアグラムが表示されます。

- 非表示にするか削除する列にカーソルを合せます。
- 「オプション」をクリックし、「非表示」または「削除」を選択します。

非表示列または削除列の復元

変換エディタで、非表示または削除したデータセットの列を復元できます。

準備スクリプト・パネルで、列の「ステップの削除」が表示されない場合、データセットから列が除去された可能性があります。「定義の編集」を使用して、列が削除されたのではなく、除去されたかどうかを確認します。[データセット表の列の除去または復元](#)を参照してください。

- ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックし、「開く」を選択してから「データ」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「開く」をクリックして変換エディタを表示します。

ノート:

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

- 非表示の列または削除済の列を復元するには、準備スクリプト・パネルに移動して、「列の非表示」または「列の削除」ステップを見つけます。
- 「**ステップの削除**」をクリックします。
- オプション: 1つ以上の非表示列を表示するには、変換エディタで、「**非表示列**」をクリックし、「**すべて表示**」をクリックします。

time	longitude	#	mag	A	magType
21-08-12T00:15:44+0100	-117.6695	1.02	4.70		
21-08-30T22:57:50.500+0100	-117.6486667	1.02			
21-09-02T23:43:07.160+0100	-117.6695	0.46			
21-08-19T15:46:45.670+0100	-118.8855	1.13			
21-08-23T01:51:06.950+0100	-118.9301667	0.26			
21-08-12T06:26:02.255+0100	-104.3932093	1.90			
21-08-13T16:50:50.742+0100	-26.0294	4.60			
21-08-18T09:50:07.192+0100	141.2019	4.30			
21-08-20T23:54:14.050+0100	-95.38216667	2.20			
21-08-22T12:24:38.330+0100	-117.6748333	0.29			
21-08-08T15:25:02.498+0100	-115.2712	2.40			
21-09-03T15:07:57.560+0100	-122.7403336	1.71			
21-08-13T00:36:34.277+0100	-23.7658	4.60			
21-08-23T07:19:45.792+0100	-104.4097201	2.00			
21-08-10T08:01:20.090+0100	-155.288	0.57			

データセットへの列の追加

列を追加することで、データセットを開発できます。たとえば、列 ADDRESS_LINE_1、ADDRESS_LINE_2 および ADDRESS_LINE_3 を連結する新しい列を作成できます。

- ホーム・ページで、データセットを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。「**データ・ダイアグラム**」または「**結合ダイアグラム**」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。
- 変換エディタで、「**準備ステップの追加**」をクリックします。
- 「**列の作成**」で、列の「**名前**」を入力し、式ボックスで、列に値を追加する式を定義します。たとえば、**カテゴリ**の列と**サブカテゴリ**の列の値を連結するには、CONCAT(Category, Sub Category)と指定します。

演算子、算術関数、文字列関数および変換関数を使用して式を作成するには、**f(x)** 関数ピッカーを使用します。

- 「**検証**」をクリックし、データ・プレビューの新しい列を確認します。
- 「**ステップの追加**」をクリックします。

Oracle Analytics では、ステップが準備スクリプト・パネルに追加されます。

- データ準備の変更を保存し、これらをデータに適用するには、「**データセットの保存**」をクリックします。

1つの表のデータセットまたはファイルベースのデータセットを使用している場合は、「**適用スクリプト**」をクリックします。

ワークブックの計算済データ要素の作成

計算済データ要素には、ワークブックの複数のビジュアライゼーションに追加できる再利用可能な関数があります。たとえば、BIN 関数を使用して、AGE 値を 4 つのバケット、つまり 0 から 20、21 から 40、41 から 60 および 60 超に分類できます。

計算済データ要素はデータセットの「マイ計算」フォルダに保存され、ワークブックには保存されません。ワークブックには、使用されるデータセットごとに「マイ計算」フォルダがあります(データセットが結合されているかいないかは関係ありません)。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 作業するキャンバスを選択します。
3. 「データ・パネル」の下部に移動し、「**マイ計算**」を右クリックして、「**計算の追加**」をクリックして「新規計算」ダイアログを開きます。
4. 名前を入力します。
5. オプション: 説明を入力します。
計算の上にカーソルを合せると、ツールチップに説明が表示されます。
6. 「式ビルダー」ペインで、式を作成および編集します。
列がデータセットに結合されている場合にのみ、「式ビルダー」ペインに列をドラッグ・アンド・ドロップできます。
7. 「**検証**」をクリックします。
8. 「**保存**」をクリックします。

データ準備スクリプトの編集

準備スクリプトに追加されたデータ変換の変更を編集できます。たとえば、変換ステップを編集、プレビューまたは削除してから、それらを適用できます。

列アクション・パネルに表示されている推奨変更を適用する前と適用した後の両方において、データ変換ステップを編集できます。編集オプションは、一部のタイプの変換ステップには使用できません。

列の更新はデータセットにのみ適用され、ビジュアライゼーションには適用されません。最新のデータが確実に表示されるようにするには、「ビジュアル化」キャンバスで「**データのリフレッシュ**」をクリックします。

1. ホーム・ページで、データセットまたはワークブックを開きます。
 - データセットを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。
 - データセットを含むワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックし、「**開く**」を選択してから「**データ**」をクリックします。「データ・ダイアグラム」または「結合ダイアグラム」で、データ・ソースを右クリックし、「**開く**」をクリックして変換エディタを表示します。

 ノート:

Oracle Analytics では、単一表のデータセットの場合はデータ・ダイアグラム、複数表のデータセットの場合は結合ダイアグラムが表示されます。

2. 「準備スクリプト」ペインでステップを選択し、「**ステップの編集**」をクリックします。
3. 「準備スクリプト」ペインで変換ステップを選択し、鉛筆アイコンまたは「**変換の編集**」をクリックします。
ステップが編集可能でない場合、鉛筆アイコンにカーソルを移動すると、変換ステップの編集が無効になっているというメッセージが表示されます。
4. 「ステップ・エディタ」でフィールドを更新し、列に適用されるデータ変換の変更を編集します。
5. 「**OK**」をクリックして列を更新し、ステップ・エディタを閉じます。
6. データ準備の変更を保存し、これらをデータに適用するには、「**データセットの保存**」をクリックします。
1つの表のデータセットまたはファイルベースのデータセットを使用している場合は、「**適用スクリプト**」をクリックします。

エンリッチおよび変換リファレンス

このリファレンス情報を使用すると、データのエンリッチおよび変換に役立ちます。

トピック:

- [変換推奨のリファレンス](#)
- [データ・プロファイルとセマンティック推奨](#)
- [一般的なカスタム書式文字列](#)
- [クイック・データ変換の列メニュー・オプション](#)

変換推奨のリファレンス

データ変換オプションについて説明します。

オプション	説明
編集	列を編集します。たとえば、名前の変更、別の列の選択または関数の更新が可能です。
非表示	「データ・パネル」およびビジュアライゼーションで列を非表示にします。非表示の列を表示する必要がある場合は、ページ・フッターで「 非表示列 」(ゴースト・アイコン)をクリックします。その後、個々の列を表示するか、一度にすべての非表示列を表示できます。
グループ、条件付きグループ	「 グループ 」を選択して、独自のカスタム・グループを作成します。たとえば、都道府県をカスタム地域とグループ化したり、ドルの金額を小、中、大を示すグループに分類できます。
分割	特定の列値をいくつかの部分に分割します。たとえば、名前という列を名と姓に分割できます。

オプション	説明
大文字	列のコンテンツをすべて大文字の値に更新します。
小文字	列のコンテンツをすべて小文字の値に更新します。
文の先頭大文字	列のコンテンツを、文の最初の語の最初の文字が大文字になるように更新します。
名前変更	任意の列の名前を変更できます。
複製	選択した列と同じコンテンツで列を作成します。
テキストに変換	列のデータ型をテキストに変更します。
置換	選択した列内の特定のテキストを、指定した任意の値に変更します。たとえば、列内の <i>Mister</i> のすべてのインスタンスを <i>Mr.</i> に変更できます。
作成	関数に基づいて列を作成します。
数値に変換	列のデータ型を数値に変更することで、数値ではないすべての値を列から削除します。
日付に変換	列のデータ型を日付に変更し、日付ではないすべての値を列から削除します。
ビン	数値範囲に対して独自のカスタム・グループを作成します。たとえば、カスタム要件に基づいて、13歳未満、若年成人、成人または高齢者にビン化した年齢範囲を使用して、年齢列のビンを作成できます。
対数	式の自然対数を計算します。
累乗	列の値を指定した指数で累乗します。デフォルトの指数は2です。
平方根	選択した列内の値の平方根が移入された列を作成します。

データ・プロファイルとセマンティック推奨

データセットを作成する際、Oracle Analytics では、列レベルのプロファイリングが実行され、データを修復またはエンリッチするためのセマンティック推奨セットが生成されます。ワークブックの作成時、データ・パネルからナレッジ機能拡張を追加することで、これをビジュアライゼーションに含めることもできます。

これらの推奨は、システムによるプロファイル・ステップ時の特定のセマンティック・タイプの自動検出に基づきます。たとえば、ローカル・サブジェクト領域をベースとするデータセットは、シンプルな上位 N サンプルを使用してプロファイリングされます。

セマンティック・タイプには、市区町村名で識別される地理的な位置、クレジット・カード、電子メール・アドレスおよび社会保障番号などにあるような認識可能なパターン、日付、および繰り返しパターンなどのカテゴリがあります。独自のカスタム・セマンティック・タイプを作成することもできます。

トピック:

- [セマンティック・タイプのカテゴリ](#)
- [セマンティック・タイプの推奨](#)
- [認識されるパターンベースのセマンティック・タイプ](#)
- [参照ベースのセマンティック・タイプ](#)
- [推奨エンリッチメント](#)
- [必須しきい値](#)
- [カスタム・ナレッジの推奨](#)

セマンティック・タイプのカテゴリ

プロファイリングは様々なセマンティック・タイプに適用されます。

セマンティック・タイプのカテゴリは、次を識別するようにプロファイルされています。

- 市区町村名などの地理的な位置。
- クレジット・カード番号または電子メール・アドレスで見つかるようなパターン。
- ハイフン付きフレーズ・データなどの繰返しパターン。

セマンティック・タイプの推奨

データセットを修復、拡張またはエンリッチするための推奨事項は、データのタイプによって異なります。

セマンティック・タイプの推奨の例:

- **エンリッチメント** - 地理的な位置などの特定の検出済タイプに対応するデータに新規列を追加することです。たとえば、市区町村の人口データの追加などです。
- **列の連結** - データセットに2つの列が検出され、1つが名を含む列、もう1つが姓を含む列である場合、名前を単一列に連結することが推奨されます。たとえば、*first_name_last_name* 列のようにします。
- **セマンティック抽出** - セマンティック・タイプが市外局番を含む *us_phone* 番号などのサブタイプで構成されている場合、サブタイプをそれ自体の列に抽出することが推奨されます。
- **一部抽出** - データに一般的なパターン区切り文字が検出された場合、そのパターンの一部を抽出することが推奨されます。たとえば、データに繰返しのハイフネーションが検出された場合、データがより分析に役立つように、その部分を別々の列に抽出することが推奨されます。
- **データ抽出** - 日付が検出された場合、日付の一部を抽出することが推奨されます。これによってデータの分析が拡張される可能性があります。たとえば、請求日または購入日から曜日を抽出できます。
- **全体および一部の難読化/マスキング/削除** - クレジット・カード番号などの機密フィールドが検出された場合、列の全体または一部のマスキング、あるいは削除も推奨されます。

認識されるパターンベースのセマンティック・タイプ

セマンティック・タイプは、データで検出されたパターンに基づいて識別されます。

これらのセマンティック・タイプには、推奨事項が用意されています。

- 日付(30を超える書式)
- 米国社会保障番号(SSN)
- クレジット・カード番号
- クレジット・カード属性(CVV および有効期限)
- 電子メール・アドレス

- 北米計画電話番号
- 米国の住所

参照ベースのセマンティック・タイプ

セマンティック・タイプの認識は、サービスに付属して提供されるロード済の参照ナレッジによって決まります。

これらのセマンティック・タイプには、参照ベースの推奨事項が用意されています。

- 国名
- 国コード
- 都道府県名(州)
- 都道府県コード
- 郡名(管轄)
- 市区町村名(ローカライズされた名前)
- 郵便番号

推奨エンリッチメント

推奨エンリッチメントはセマンティック・タイプに基づいています。

エンリッチメントは、次の地理的な位置階層に基づいて決定されます。

- 国
- 州(都道府県)
- 管轄(郡)
- 経度
- 緯度
- 人口
- 標高(メートル)
- タイム・ゾーン
- ISO 国コード
- 連邦情報処理規格(FIPS)
- 国名
- 首都
- 大陸
- GeoNames ID
- 使用言語
- 電話国コード
- 郵便番号書式
- 郵便番号パターン

- 電話国コード
- 通貨名
- 通貨略称
- 地理的トップ・レベル・ドメイン(GeoTLD)
- 平方 KM

必須しきい値

プロファイリング・プロセスでは、固有のしきい値を使用して特定のセマンティック・タイプに関する決定を行います。

一般に、システムで分類を決定するには、列のデータ値の **85%**が **1**つのセマンティック・タイプの基準を満たしている必要があります。結果として、**70%**の名および **30%**の"その他"を含む列はしきい値要件を満たさないため、推奨は行われません。

カスタム・ナレッジの推奨

カスタム・ナレッジの推奨を使用して、**Oracle Analytics** システム・ナレッジを拡張します。カスタム・ナレッジを使用すると、**Oracle Analytics** セマンティック・プロファイラでさらに多くのビジネス固有のセマンティック・タイプを識別し、さらに多くの関連する管理対象エンリッチメントの推奨を作成できます。たとえば、処方薬を **USP** 医薬品カテゴリの鎮痛薬または麻酔薬に分類するカスタム・ナレッジ参照を追加する場合があります。

チュートリアル

Unsupervised Semantic Parsing (USP)ファイルなどの既存のセマンティック・ファイルを使用するか、独自のセマンティック・ファイルを作成できます。管理者にカスタム・ナレッジ・ファイルを **Oracle Analytics** にアップロードするように依頼します。データセットをエンリッチすると、**Oracle Analytics** では、このセマンティック・データに基づいてエンリッチメントの推奨が提示されます。ワークブックの作成時、データ・パネルからナレッジ機能拡張を追加することで、これをビジュアライゼーションに含めることもできます。

独自のカスタム・ナレッジ・ファイルの作成

独自のセマンティック・ファイルを作成する場合、次のガイドラインに従います:

- データ・ファイルを **CSV** または **Microsoft Excel (XLSX)**形式で作成します。
- 最初の列にキーを移入します。**Oracle Analytics** では、これを使用してデータをプロファイルします。
- 他の列にエンリッチメント値を移入します。

管理者にカスタム・ナレッジ・ファイルを **Oracle Analytics** にアップロードするように依頼します。

一般的なカスタム書式文字列

次の文字列を使用して、カスタムの時間または日付書式を作成できます。

表に、一般的なカスタム書式文字列および表示される結果を示します。これらを使用すると、ユーザーのロケールで日付および時間フィールドを表示できます。

一般的な書式文字列	結果
[FMT:dateShort]	ロケールの短い日付書式で日付を書式設定します。[FMT:date]と入力することもできます。
[FMT:dateLong]	ロケールの長い日付書式で日付を書式設定します。
[FMT:dateInput]	システムで入力に対して許容される書式で日付を書式設定します。
[FMT:time]	ロケールの時間書式で時間を書式設定します。
[FMT:timeHourMin]	ロケールの時間書式で時間を書式設定しますが、秒を省略します。
[FMT:timeInput]	システムで入力に対して許容される書式で時間を書式設定します。
[FMT:timeInputHourMin]	システムで入力に対して許容される書式で時間を書式設定しますが、秒を省略します。
[FMT:timeStampShort]	[FMT:dateShort] [FMT:time]と入力するのと同じです。ロケールの短い日付書式で日付を書式設定し、ロケールの時間書式で時間を書式設定します。[FMT:timeStamp]と入力することもできます。
[FMT:timeStampLong]	[FMT:dateLong] [FMT:time]と入力するのと同じです。ロケールの長い日付書式で日付を書式設定し、ロケールの時間書式で時間を書式設定します。
[FMT:timeStampInput]	[FMT:dateInput] [FMT:timeInput]と同等です。システムで入力に対して許容される書式で日付と時間を書式設定します。
[FMT:timeHour]	ロケールの書式で時間フィールドのみを書式設定します(8 PM など)。
YY または yy	年の最後の 2 桁を表示します。たとえば、2011 年の場合は 11 です。
YYY または yyy	年の最後の 3 桁を表示します。たとえば、2011 年の場合は 011 です。
YYYY または yyyy	4 桁の年を表示します。たとえば、2011 です。
M	月の数値を表示します(たとえば、2 月の場合、2)。
MM	1 桁の月の場合は左側にゼロ詰めをして、月の数値を表示します(たとえば、2 月の場合、02)。
MMM	ユーザーのロケールで月の略称を表示します(たとえば、Feb)。
MMMM	ユーザーのロケールで月のフル・ネームを表示します(たとえば、February)。
D または d	月の通算日を表示します(たとえば、1)。
DD または dd	通算日が 1 桁の場合は左側にゼロ詰めをして、月の通算日を表示します(たとえば、01)。
DDD または ddd	ユーザーのロケールで曜日の略称を表示します(たとえば、Thursday の Thu)。
DDDD または dddd	ユーザーのロケールで曜日のフル・ネームを表示します(たとえば、Thursday)。
DDDDD または ddddd	ユーザーのロケールで曜日の最初の文字を表示します(たとえば、Thursday の T)。

一般的な書式文字列	結果
r	年の通算日を表示します(たとえば、1)。
rr	年の通算日が1桁の場合は左側にゼロ詰めをして、年の通算日を表示します(たとえば、01)。
rrr	年の通算日が1桁の場合は左側にゼロ詰めをして、年の通算日を表示します(たとえば、001)。
w	年の通算週を表示します(たとえば、1)。
ww	通算週が1桁の場合は左側にゼロ詰めをして、年の通算週を表示します(たとえば、01)。
q	年の四半期を表示します(たとえば、4)。
h	時間を12時間制で表示します(たとえば、2)。
H	時間を24時間制で表示します(たとえば、23)。
hh	時間が1桁の場合は左側にゼロ詰めをして、時間を12時間制で表示します(たとえば、01)。
HH	時間が1桁の場合は左側にゼロ詰めをして、時間を24時間制で表示します(たとえば、23)。
m	分を表示します(たとえば、7)。
mm	分が1桁の場合は左側にゼロ詰めをして、分を表示します(たとえば、07)。
s	秒を表示します(たとえば、2)。 文字列に、s.#やs.00などのように、小数点を含めることもできます(#はオプションの桁数を示し、0は必須桁数を示します)。
ss	秒が1桁の場合は左側にゼロ詰めをして、秒を表示します(たとえば、02)。 文字列に、ss.#やss.00などのように、小数点を含めることもできます(#はオプションの桁数を示し、0は必須桁数を示します)。
S	秒を表示します(たとえば、2)。
SS	ミリ秒が1桁の場合は左側にゼロ詰めをして、ミリ秒を表示します(たとえば、02)。
SSS	ミリ秒が1桁の場合は左側にゼロ詰めをして、ミリ秒を表示します(たとえば、002)。
tt	ユーザーのロケールで午前または午後を表す略語を表示します(たとえば、pm)。
gg	ユーザーのロケールで年代を表示します。

クイック・データ変換の列メニュー・オプション

次の列メニュー・オプションを使用すると、データ・フロー内のデータを変換できます。

オプション	説明
ビン	数値範囲に対してカスタム・グループを作成します。
数値に変換	列のデータ型を数値に変更し、数値ではないすべての値を削除します。
テキストに変換	列のデータ型をテキストに変更します。
削除	データセットから列を選択して除去します。

オプション	説明
複製	選択した列と同じデータを含む列を作成します。
グループ	列グループを作成して関連する値を結合します。たとえば、都道府県をカスタム地域とグループ化したり、ドルの金額を小、中、大を示すグループに分類できます。
小文字	列のすべてのテキストを小文字に変換します。
列のマージ	2 つ以上の列を結合して 1 つの列として表示します。
名前変更	列名を変更します。
文の先頭大文字	列内の各行の最初の単語の最初の文字を大文字にします。
変換	式を使用し、列データを変更します。
トリミング	テキスト・データから先頭および末尾のスペースを削除します。Oracle Analytics では、データ・プレビューに先頭または末尾のスペースは表示されませんが、元のデータ・ソースに先頭または末尾のスペースが含まれている場合、これによって問合せが影響を受ける可能性があります。
大文字	列のすべてのテキストを大文字に変換します。

4

データ・フローを使用したデータセットの作成

データ・フローを使用して、データセットへのデータの結合、整理および統合を行います。

📺 ビデオ

データ・フローを使用すると、手動コーディングのスキルがなくてもデータを視覚的に操作できます。

トピック:

- [データ・フローについて](#)
- [データの編成と統合に使用できるステップ](#)
- [データ・フローを使用したデータセットの作成](#)
- [データ・フローを使用したデータセットの生成または更新](#)
- [データ・フローの再利用](#)
- [データ・フローの増分処理の構成](#)
- [OCI 関数を使用したデータの変換](#)
- [特定の時刻でのデータセットの生成または更新](#)
- [データ・フローによるデータ処理のタイミングの変更](#)
- [データ・フローのシーケンスを使用したデータの処理](#)
- [データ・フローの管理](#)
- [データ・フローおよびシーケンスの共有について](#)
- [データ・フローの共有](#)
- [シーケンスの共有](#)

データ・フローについて

Oracle Analytics Cloud では、データ・フローにより、データを整理および統合して、ユーザーがビジュアル化できるキュレートされたデータセットを作成できます。

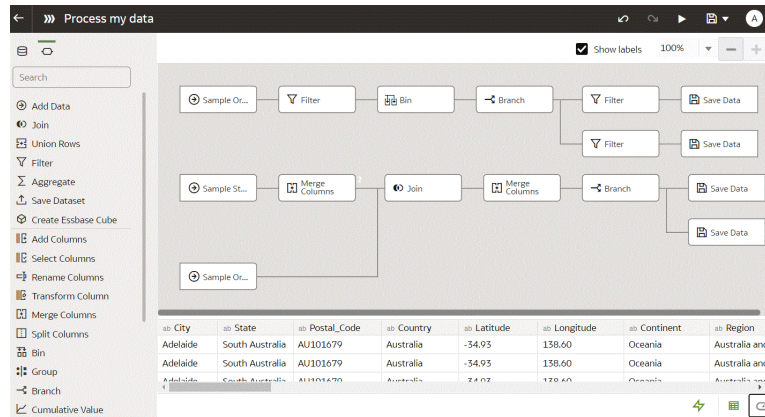
手動でコーディングするスキルがなくても、データ・フローを使用すれば、データを視覚的に操作できます。

たとえば、データ・フローを使用して、次のことを実行できます:

- データセットの作成。
- ソースが異なるデータの結合。
- データの集計。
- 機械学習モデルのトレーニングまたはデータへの予測機械学習モデルの適用。

- OCI Vision サービスによる人工知能を使用した、オブジェクト検出、イメージ分類またはテキスト検出の実行。

データ・フローは、データ・フロー・エディタで作成します。



データ・フローを構築するには、ステップを追加します。各ステップでは、データの追加、表の結合、列のマージ、データの変換、データの保存など、特定の機能を実行します。ステップを追加して構成するには、データ・フロー・エディタを使用します。各ステップは、追加または変更時に検証されます。データ・フローを構成したら、それを実行してデータセットを作成または更新します。

独自の列を追加したりデータを変換する際には、様々な SQL 演算子(BETWEEN、LIKE、IN など)、条件式(CASE など)、および関数(Avg、Median、Percentile など)を使用できます。

データ・フローのデータベース・サポート

データ・フローを使用すると、データセット、サブジェクト領域またはデータベース接続からデータをキュレートできます。

データ・フローは、個別または順番に実行できます。データ・フローに複数のデータ・ソースを含め、それらの結合方法を指定できます。

データ・フローからの出力データは、データセットまたはサポートされるデータベース・タイプのいずれかに保存できます。データベースにデータを保存する場合、データ・フローのデータで上書きすることにより、データ・ソースを変換できます。データ・ソースおよびデータ・フローの各表は同一データベースに含まれ、同じ名前である必要があります。開始する前に、サポートされているいずれかのデータベース・タイプへの接続を作成します。

ノート:

データ・フローで、リモート・データベースからソース・データを取得できます(リモート接続とデータ・ゲートウェイを使用)。ただし、リモート接続を使用するデータセットにデータを保存することはできません。

データ・フローから書込みができるデータベースを確認するには、「サポートされるデータ・ソース」の「詳細」列で「データ・フローからの出力の保存をサポートします」

を探してください。**ノート:** Oracle Essbase および EPM Cloud データセットは、「データの追加」ステップでデータ・フローへの入力として使用することはできません。

データ・フロー・エディタでの作業

分析用のデータは、データ・フロー・エディタでデータ・フローを作成して準備します。たとえば、列の変換、列のマージ、またはビンへのデータのカテゴリ化を行います。データの準備をすぐに始められるよう、データ・フロー・エディタの使用方法を確認しましょう。

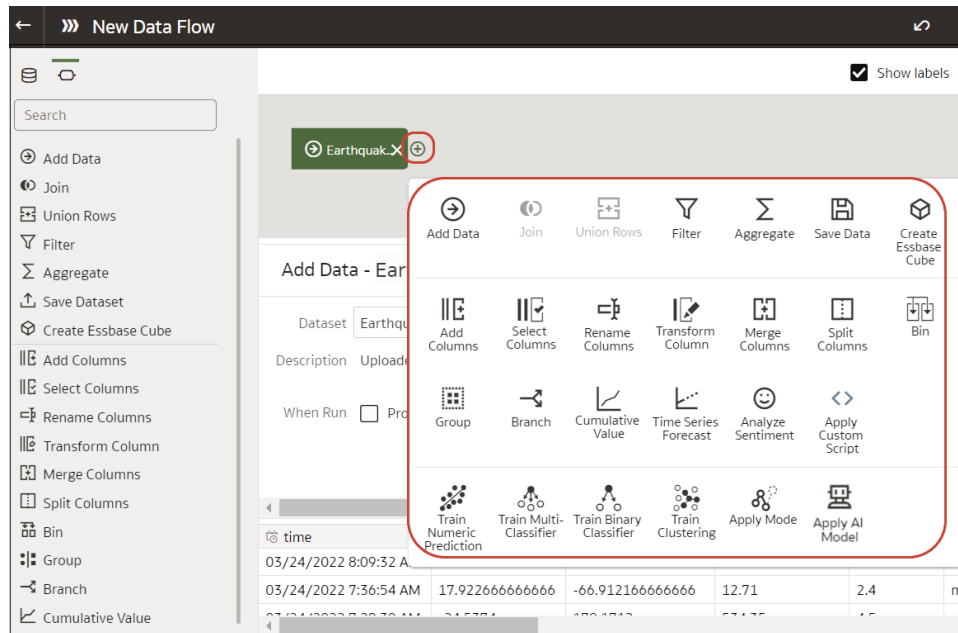
データ・フロー・エディタでの作業:

名前	アイコン	処理の内容
データ		データ・ペインを表示します。ここでデータ列をデータ・フロー・エディタにドラッグ・アンド・ドロップできます。
データ・フロー・ステップ		ステップ・ペインを表示します。ここでステップをデータ・フロー・エディタにドラッグ・アンド・ドロップできます。
データ・プレビュー		データ・フロー・エディタの右下隅にある「 データ・プレビューの切替え 」をクリックして、「データのプレビュー」列ペインの表示と非表示を切り替えます。このペインは、データ・フローに変更を加えると自動的に更新されます。「 自動適用 」をクリックすると、「データのプレビュー」ペインでステップ変更を自動的にリフレッシュするかどうかを指定できます。
データ・フローの実行		データ・フローを実行します。
使用可能な関数の表示/関数の非表示		式ピック・リストの表示と非表示を切り替えます。このアイコンは、「列の追加」ステップや「列の変換」ステップなど、独自の式を作成できるステップに対してのみ表示されます。
ステップ・エディタ		データ・フロー・エディタの右下隅にある「 ステップ・エディタの切替え 」アイコンをクリックして、「ステップ・エディタ」ペインの表示と非表示を切り替えます。
自動リフレッシュの切替え		オンにすると、データ・フローで変更を行ってすぐに、データ・プレビューがリフレッシュされます。たとえば、テキストを小文字から大文字に変更する列の変換ステップがある場合、データ・プレビューには大文字のテキストが表示されます。オフにした場合、データ・プレビューがリフレッシュされるのは、「 データ・プレビューのリフレッシュ 」をクリックした場合のみです。

自分のデータを編成および統合するために使用できるステップ

データ・フローで次のステップを使用して、データを編成、統合および変換できます。たとえば、データ・ソースのマージ、データの集計、または地理空間分析を実行できます。

データ・フロー・エディタを使用して、データ・フローにステップを適用します。



列の追加

カスタム列をターゲット・データセットに追加します。たとえば、UNITS 列の単位数に RETAIL_PRICE 列の販売価格を掛けて(つまり、UNITS * RETAIL_PRICE)、在庫の価額を計算できます。

データの追加

データ・ソースをデータ・フローに追加します。たとえば、2つのデータセットをマージしている場合、両方のデータセットをデータ・フローに追加します。

集計

集計関数を適用して、グループ合計を作成します。たとえば、count、sum または average などです。

センチメントの分析

特定のテキスト列のセンチメントを検出します。たとえば、顧客フィードバックを分析して、それがポジティブなものかネガティブなものかを判断できます。センチメント分析では、正、中立または負の感情を示す単語やフレーズに基づいてテキストを評価します。分析の結果に基づいて、新しい列には「正」、「中立」または「負」が表示されます。

AI モデルの適用

人工知能モデルを使用してデータを分析します。たとえば、OCI Vision サービスで作成されたモデルを使用して、オブジェクト検出、イメージ分類またはテキスト検出を実行できます。「[オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析の実行](#)」を参照してください。OCI Language Service で作成されたモデルを使用して、センチメント分析や言語検出などの言語分析を実行することもできます。

モデルの適用

Oracle Machine Learning または OCI Data Science から機械学習モデルを適用して、データを分析します。たとえば、電子メールがスパムであるかどうかを予測するための分類モデルを作成できます。[データセットへの予測モデルまたは登録済 Oracle 機械学習モデルの適用](#)を参照してください。

カスタム・スクリプトの適用

Oracle Cloud Infrastructure (OCI) で定義されている関数などを使用してデータを変換します。たとえば、関数を使用して、英語のテキストをスペイン語またはドイツ語に変換できます。Oracle Analytics 管理者は、これらの関数を登録してユーザーが使用できるようにします。

AutoML

予測モデルの推奨やトレーニングには、Oracle Autonomous Data Warehouse の AutoML 機能を使用します。AutoML ステップでは、データの分析と、使用に最適なアルゴリズムの計算、Oracle Analytics への予測モデルの登録が行われます。分析は、Oracle Analytics ではなく、データベースで計算されます。このステップは、Oracle Autonomous Data Warehouse に基づいてデータセットに接続されると、ステップ・セレクタで使用できるようになります。

ビン

データ値を高、中、低などのカテゴリに割り当てます。たとえば、RISK の値を低、中、高の 3 つのビンに分類できます。

分岐

データ・フローから複数の出力を作成します。たとえば、国に基づく販売トランザクション・データがある場合、第 1 分岐に米国のデータを、第 2 分岐にカナダのデータを保存できます。

Essbase キューブの作成

スプレッドシートまたはデータベースから Essbase キューブを作成します。

累積値

移動集計や実行集計などの累積合計を計算します。

データベース・アナリティクス

高度な分析およびデータ・マイニング分析を実行します。たとえば、異常の検出、データのクラスタ化、データのサンプリング、アフィニティ分析を実行できます。このステップは、Oracle データベースまたは Oracle Autonomous Data Warehouse に基づいてデータセットに接続されると、ステップ・セレクタで使用できるようになります。分析は、Oracle Analytics ではなく、データベースで計算されます。[データベース・アナリティクス関数](#)を参照してください。

フィルタ

関心のあるデータのみを選択します。たとえば、フィルタを作成すると、売上収益データを 2020 年から 2022 年までに制限できます。

グラフ分析

距離や2つの頂点間のホップ数の計算など、地理空間分析を実行します。このステップは、Oracle データベースまたは Oracle Autonomous Data Warehouse に基づいてデータセットに接続されると、ステップ・セレクトアで使用できるようになります。分析は、Oracle Analytics ではなく、データベースで計算されます。[グラフ分析関数](#)を参照してください。

グループ

定義したグループに数値以外のデータを分類します。たとえば、Communication や Digital という部門に対するオーダーを Technology というグループに配置し、Games や Stream に対するオーダーを Entertainment というグループに配置できます。

結合

共通の列に基づくデータベース結合を使用して、複数のデータ・ソースからデータを結合します。たとえば、顧客 ID フィールドを使用して Orders データセットを Customer_orders データセットに結合できます。

マージ

複数の列を単一の列に結合します。たとえば、番地、番地名、都道府県および郵便番号の列を1つの列にマージできます。

列の名前変更

列の名前をよりわかりやすいものに変更します。たとえば、CELL を Contact Cell Number に変更できます。

列の並替え

出力データセットの列の順序を変更します。たとえば、列名に基づいて列をアルファベット順に並べ替えたり、データ型(文字、整数など)に基づいて列を並べ替えたりできます。

データの保存

データ・フローによって生成されたデータを保存する場所を指定します。Oracle Analytics またはデータベースのデータセットにデータを保存できます。ランタイム・パラメータを指定したり、デフォルトのデータセット名を変更したりできます。

列の選択

データ・フローに含める、または除外する列を指定します(デフォルトではすべてのデータ列が含まれます)。

列の分割

列内からデータを抽出します。たとえば、列に 001011Black が含まれる場合、このデータを 001011 と Black という2つの個別の列に分割できます。

時系列予測

履歴データに基づいて予測値を計算します。予測では、指定されたデータセットから時間列とターゲット列を取得し、ターゲット列の予測値を計算します。

<モデル・タイプ>のトレーニング

数値予測、多項分類、二項分類およびクラスタリングのためのアルゴリズムを使用して、機械学習モデルをトレーニングします。[機械学習モデルのトレーニングのデータ・フロー・ステップ](#)を参照してください。

機械学習モデルのトレーニングを完了したら、「**モデルの適用**」ステップを使用して、データに適用します。

列の変換

データの書式、構造または値を変更します。たとえば、大文字へのテキストの変換、データからの先頭または末尾のスペースの切捨て、値の増加率の計算などを行えます。

行の結合

2つのデータ・ソースの行をマージします(SQL の用語では UNION コマンドと呼ばれます)。

データベース・アナリティクス関数

データベース・アナリティクス関数では、異常の検出、データのクラスタリング、データのサンプリング、アフィニティ分析などの高度な分析とデータ・マイニング分析を実行できます。Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse に接続したときにアナリティクス関数を使用できます。

 [LiveLabs スプリント](#)

データ・フロー・エディタで「**データベース・アナリティクス**」ステップを表示するには、Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse に接続する必要があります。

関数タイプ	説明
動的異常検出	モデルが事前に定義されていない入力データの異常を検出します。たとえば、普段は発生しない金融取引を強調表示できます。 この関数を大規模なデータセットとともにデプロイする場合は、パフォーマンスを最大化するために、パーティション列を構成します。
動的クラスタリング	モデルが事前に定義されていない入力データをクラスタ化します。たとえば、マーケティングを目的として、顧客セグメントの特徴付けや検出を行えます。 この関数を大規模なデータセットとともにデプロイする場合は、パフォーマンスを最大化するために、パーティション列を構成します。
高頻度アイテム・セット	一緒に表示されることが多いアイテムのセットを特定して、データ内の関係を見つけます。このデータ・マイニング手法は、アソシエーション・ルール学習、アフィニティ分析、または小売業界ではマーケット・バスケット分析としても知られています。高頻度アイテム・セットをマーケット・バスケット分析ツールとして使用すると、チャンプーを購入する顧客はヘア・コンディショナも購入することがわかる場合があります。 この操作はリソースを大量に消費し、そのパフォーマンスは、入力データセットの量、トランザクション ID のカーディナリティ、アイテム値列のカーディナリティなど、いくつかの要因に依存します。データベースの潜在的なパフォーマンス低下を回避するには、出力に多くのアイテム・セットが含まれるよう、最小サポート・パーセントの値を高くして(デフォルトは 0.25)、徐々に減らしてください。
データのサンプリング	表からサンプルのデータを一定の割合でランダムに選択します。サンプリングするデータの割合を指定します。たとえば、データの 10% をランダムにサンプリングできます。

関数タイプ	説明
テキストのトークン化	<p>テキスト・データを個別の単語に分解し、各単語の出現回数を数えることで分析します。データ・フローを実行すると、Oracle Analytics によってデータベースに <code>DR\$IndexName\$I</code> という名前の表が作成され、トークン・テキストとトークン・カウント関連の詳細が含まれます。<code>DR\$IndexName\$I</code> 表を使用してデータセットを作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「出力」で、各フィールドの横にある「作成」オプションを使用して索引を作成する列を選択します。 「パラメータ」のテキスト列で、「列の選択」をクリックし、個別の単語に分解するフィールドを選択します。参照列<number>オプションを使用して、出力データセットに1つ以上の列を含めます。 <p>データ・フローに使用するデータベース接続には、特別なデータベース権限が必要です。次のことを管理者に確認してください：</p> <ul style="list-style-type: none"> データベース・アカウントに <code>grant EXECUTE on CTXSYS.CTX_DDL to schema name</code> があります。 ソース表が存在するスキーマと同じユーザー名で Oracle Analytics 接続を使用しています。これは、データ・フローの実行時のアクセス権限の問題を回避するためのベスト・プラクティスです。 分析しているデータベース表の列に、既存の CONTEXT 索引はありません。分析しているデータベース表に既存の CONTEXT 索引がある場合、テキスト・トークン化データ・フローを実行する前にその索引を削除します。
時系列	<p>時系列は、ターゲット値の既知の履歴に基づいてターゲット値を予測するデータ・マイニング手法です。時系列分析への入力、ターゲット値のシーケンスです。これにより、時間ウィンドウ(履歴データから先の最大 30 期間を含めることができる)の各期間のターゲット値が見積もられます。</p> <p>このモデルでは、履歴データに対する適合度を測定する様々な統計も計算されます。これらの統計は、パラメータ設定を介した追加出力データセットとして使用可能です。</p> <p>注意: 時系列アルゴリズムは、Oracle Database バージョン 18c 以降で使用可能です。</p>
データのアンピボット	<p>列に格納されているデータを行形式に入れ替えます。たとえば、各年の収益メトリック値が表示されている複数の列を、年ディメンションの値行が複数ある単一の収益列に入れ替えられます。入れ替えるメトリック列を選択して、新しい列の名前を指定します。これで、データセットの列が減り、行が増えます。</p>

ノート: アナリティクス関数を使用するには、管理者がアナリティクス関数を有効にしていることを確認します(「コンソール」、「システム」、パフォーマンスと互換性、「データ・フロー」のデータベース・アナリティクス・ノードの有効化を使用)。

グラフ分析関数

グラフ分析を使用すると、地理空間分析を実行できます。たとえば、距離や2つの頂点間のホップ数を計算する場合があります。グラフ分析を使用するには、Oracle データベースまたは Oracle Autonomous Data Warehouse に接続します(分析は Oracle Analytics ではなく、データベースで計算されます)。

 [LiveLabs スプリント](#)

データ・フロー・エディタで「グラフ分析」ステップを表示するには、Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse に接続する必要があります。

機能タイプ	説明
クラスタリング	グラフ内で接続済コンポーネントまたはクラスタを検索します。
ノード・ランキング	グラフ内でノードの重要性を測定します。
最短パス	グラフの2つの項点間の最短パスを検索します。
サブ・グラフ	指定した数の特定のノードのホップ内のすべてのノードを検索します。

データ・フローを使用したデータセットの作成

データ・フローを使用して、データをキュレートしデータセットを作成します。たとえば、2つのデータセットをマージし、データをクレンジングし、新しいデータセットに結果を出力する場合があります。

1. ホーム・ページまたはデータ・ページで、「作成」をクリックして「データ・フロー」を選択します。
2. 「データセットの追加」ダイアログで、データセットを選択し、「追加」をクリックします。
「ステップの追加」(+)をクリックしてから、「データの追加」をクリックすると、いつでもデータ・ソースを追加できます。
3. オプション: 「データの追加」ペインで、データを構成します。たとえば、列を含めるまたは除外する、あるいは列の名前を変更します。
4. データ・フローを構築します。

実行する機能ごとに、「ステップの追加」(+)をクリックし、必要なステップ・タイプをクリックして、「ステップ・エディタ」ペインでプロパティを指定します。

ヒント: 最後のステップにカーソルを合せると、「ステップの追加」(+)オプションが表示されます。列ヘッダーの「オプション」を使用して、フローの編集やステップの追加を行うこともできます。たとえば、列の名前変更、再フォーマット、マージまたは変換を行うことができます。

5. 「データの保存」ステップをデータ・フローの最後に追加します。
6. データ・フローを保存します。

「データ・フローの実行」をクリックして、または後で「データ」ページ(ホーム・ページから、「ナビゲータ」をクリックして、「データ」をクリック)の「データ・フロー」パネルを使用して、データの処理を開始します。「データ」ページの「データセット」パネルで生成されたデータセットにアクセスできます。

データ・フローを使用したデータセットの生成または更新

データ・フローを実行して、データセットを生成または更新します。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」、「データ」、「データ・フロー」の順にクリックします。
2. データ・フローを開始します。
 - データ・フローをただちに開始するには、データ・フローを右クリックし、「実行」をクリックします。

- データ・フローをスケジュールして特定の日に実行するには、データ・フローを右クリックして、「**新規スケジュール**」をクリックしてから「**新規**」をクリックし、「データ・フロー」ダイアログを使用して、日時および反復サイクルを指定します。

「**データ・フローの実行**」をクリックして、データ・フロー・エディタからデータ・フローを実行することもできます。

データセットを表示するには、ホーム・ページから、「**ナビゲータ**」、「**データ**」の順にクリックし、「**データセット**」ページに移動します。

データ・フローの再利用

データ・フローでは、使用するデータ・ソースおよび出力データセットをユーザーが実行時に指定できるように、パラメータを追加できます。

- ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」、「**データ**」、「**データ・フロー**」の順にクリックします。
- データ・フローを開きます。
- 「**ステップ・エディタ**」ペインで、ステップに対してパラメータ・プロンプト・オプションを選択します。
ステップ「**データの追加**」、「**データの保存**」および「**Essbase キューブの作成**」にパラメータを追加できます。
- 実行時にデータソースを指定するには、「**データの追加**」ステップで、**実行時、データセットを選択するためのプロンプト**・オプションを選択してパラメータに「**名前**」および「**プロンプト**」値を指定します。
- 実行時に出力データセットを指定するには、「**データの保存**」ステップで、**実行時、データセットを選択するためのプロンプト**・オプションを選択してパラメータに「**名前**」および「**プロンプト**」値を指定します。
- 実行時に出力 Essbase キューブを指定するには、「**データの保存**」ステップで、**実行時、データセットを選択するためのプロンプト**・オプションを選択してパラメータに「**キューブ**」、「**アプリケーション**」および「**プロンプト**」値を指定します。

データ・フローを実行すると、デフォルト値を使用するか、別の値を指定できる、データフロー・プロンプト・ダイアログが表示されます。例:

- データ・ソースを指定するためにパラメータを追加した場合、「**OK**」をクリックしてデフォルトを受け入れるか、「**ソース**」セクションに表示されるデフォルト・データセット名をクリックして、「**データセットの追加**」ダイアログを表示し、そこで別の値を選択できます。
- データ・ターゲットを指定するためにパラメータを追加した場合、「**OK**」をクリックしてデフォルトを受け入れるか、「**ターゲット**」セクションに表示されるデフォルト・データセット名を編集して別の値を指定できます。

データ・フローの増分処理の構成

増分処理を構成して、データベースから新規または更新済レコードのみをロードします。データが(データベース接続を使用して)データベースをソースとする場合に、増分処理をデプロイできます。

増分処理によってデータが最新に保たれ、インサイトの質が向上します。

開始する前に、Oracle、Oracle Autonomous Data Warehouse、Apache Hive、Hortonworks Hive または Map R Hive などのサポートされているデータベースのいずれかへの接続を作成します。

1. データ・ソースで新規データ・インジケータを指定します。データ・ソースの新規データ・インジケータの指定を参照してください。
2. データ・フローで増分処理を適用します。データ・フローでの増分処理の適用を参照してください。

データ・ソースの新規データ・インジケータの指定

増分処理をデータ・フローに適用する前に、まずデータ・ソースで新しいデータ・インジケータを指定する必要があります。

開始する前に、Oracle、Oracle Autonomous Data Warehouse、Apache Hive、Hortonworks Hive または Map R Hive などのサポートされているデータベースのいずれかへの接続を作成します。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします
2. データセットを選択し、「アクション・メニュー」をクリックするか右クリックして、「開く」を選択します。
3. **結合ダイアグラム**で、使用する増分識別子を含む表をダブルクリックします。
4. ツールバーで「定義の編集」をクリックします。
5. データ・アクセス・パネルが表示されていることを確認します。

データ・アクセス・パネルが表示されていない場合は、ウィンドウの右端の中央に移動し、「展開」オプションを見つけます。「展開」をクリックして、パネルを開きます。

Name	SALES
Description	External Embedded dataset for datamoc
Connection	Oracle DB
Data Access	Automatic Caching
New Data Indicator	Select Column
Created On	Just now
Modified On	Just now
Refreshed	Just now

6. 「新規データ・インジケータ」リストから、新規データを追加したときに検出する列を選択します。
7. 「OK」をクリックします。

データ・フローでの増分処理を適用する準備ができました。

データ・フローでの増分処理の適用

データ・フローで増分処理を適用して、データベースから新規または更新済レコードのみをロードします。

開始する前に、Oracle、Oracle Autonomous Data Warehouse、Apache Hive、Hortonworks Hive または Map R Hive などのサポートされているデータベースのいずれかへの接続を作成します。

1. 増分処理を適用するデータ・フローを作成するか、開きます。
2. データ・フロー・エディタで「**データの保存**」ステップを選択して、「ステップ・エディタ」ペインを表示します。
3. 「**データセット**」フィールドで、入力データセットの名前を指定します(「**データの追加**」ステップで指定されたデータセット)。
4. 「**データ保存先**」オプションで「**データベース接続**」を選択します。
5. 「**接続の選択**」をクリックして、サポートされているターゲット・データベースのいずれかへの接続を選択します。
6. 「**データ**」フィールドで、書き込むターゲットの名前を指定します。
7. 「**実行時**」オプションで、「**既存データへの新規データの追加**」を選択します。
8. 「**保存**」をクリックします。

これで、データ・フローをスケジュールして新規データを定期的にロードする準備ができました。

OCI 関数を使用したデータの変換

データ・フローの OCI 関数を使用してデータを変換します。たとえば、関数を使用して、英語のテキストをスペイン語またはドイツ語に変換できます。

OCI 関数を使用して、Oracle Analytics の OCI リソースを活用します。

始める前に、管理者に Oracle Analytics で OCI 関数を使用可能にするよう依頼してください。[Oracle Analytics の OCI 関数との統合](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「**作成**」をクリックし、「**データ・フロー**」をクリックします。
2. 「データセットの追加」ダイアログで、変換するデータセットを選択し、「**追加**」をクリックします。
3. オプション: 「データの追加」ペインで、データを構成します。たとえば、列を含めるまたは除外する、あるいは列の名前を変更します。
4. 「**ステップの追加 (+)**」をクリックし、「**カスタム・スクリプトの適用**」をクリックして、「**カスタム・スクリプトの選択**」ダイアログを表示します。
5. 関数を選択し、「**OK**」をクリックして、「**カスタム・スクリプトの適用**」ダイアログを選択します。
6. 「**出力**」と「**パラメータ**」オプションおよびインライン・ガイダンスを使用して、関数を構成します。

たとえば、関数がテキスト列内の単語数を数える場合、「出力」を使用して、単語数を含む生成列の名前を指定し、「パラメータ」を使用して、分析するテキスト列の名前を選択します。

7. 「データの保存」ステップをデータ・フローの末尾に追加し、出力データセットまたはデータベース表の名前を指定します。
8. データ・フローを保存します。

「データ・フローの実行」をクリックして今すぐ処理を開始することも、後で「データ」ページ（ホーム・ページで、「ナビゲータ」、「データ」の順にクリック）の「データ・フロー」パネルを使用して後で開始することもできます。「データ」ページの「データセット」パネルで生成されたデータセットにアクセスできます。

特定の時刻でのデータセットの生成または更新

データセットを定期的に特定の時刻で生成または更新するようにデータ・フローをスケジュールできます。

データの更新をスケジュールして、データを最新の状態にしておくこと、インサイトの品質が向上します。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから、「データ」、「データ・フロー」の順にクリックします。
2. データ・フローを選択し、「アクション」メニューをクリックまたは右クリックしてから「新規スケジュール」をクリックします。
3. 「スケジュール」ダイアログで名前、開始日、開始時間を指定して繰り返します。
 - 「繰り返し」フィールドで、「1時間ごと」、「日次」、「週次」、および「年次」などのスケジュール済タスクの頻度を選択します。頻度タイプごとに、終了日、特定の曜日または月の日付などの特定のプロパティを定義する必要があります。
4. データ・フローにパラメータを追加した場合、「パラメータ」セクションで他の値を指定します。
 - 「ソース」フィールドでソース・データセットをクリックします。「データセットの追加」ダイアログで新規データセットを選択して「追加」をクリックします。
 - 「ターゲット」フィールドでデータセット名を変更します。「Essbase キューブの作成」ステップのあるデータ・フローの場合、アプリケーション名およびキューブ名を変更します。
5. 「OK」をクリックします。

データ・フローによるデータ処理のタイミングの変更

スケジュール済データ・フローがデータを処理するタイミングを変更できます。

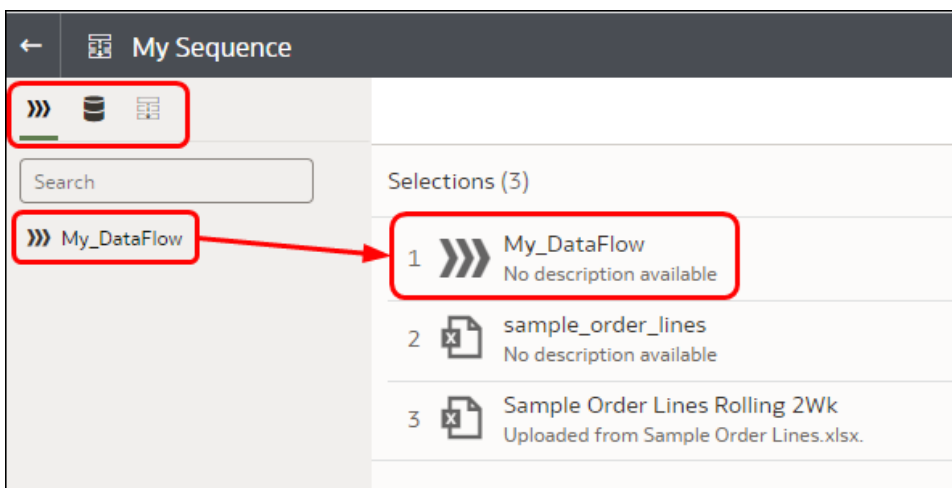
1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから、「データ」、「データ・フロー」の順にクリックします。
2. スケジュール済タスクを追加したデータ・フローを選択します。
3. 「アクション・メニュー」をクリックするか、右クリックして、「検査」をクリックします。

4. データ・フロー・インスペクタ・ダイアログで、「スケジュール」タブをクリックしてから、スケジュール済タスクを選択します。
5. 名前、開始日、開始時間、頻度などのプロパティを確認して変更します。
6. 「保存」、「閉じる」の順にクリックします。

データ・フローのシーケンスを使用したデータの処理

シーケンスは、まとめて処理するデータ・フロー、データセット、または他のシーケンスのコレクションです。これらは、複数のデータ・フロー、データセットまたはシーケンスを単一ランザクションとして実行する場合に便利です。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「シーケンス」を選択します。
2. 左上のデフォルトのシーケンス名"新規シーケンス"をクリックし、"自分のシーケンス"などのわかりやすい名前に変更します。
3. 「データ・フロー」、「データセット」、および「シーケンス」タブを使用して処理する項目を追加し、選択する項目を表示します。



- データ・フローを追加するには、「データ・フロー」をクリックし、1つ以上のデータ・フローを「選択項目」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。
 - データセットを追加するには、「データセット」をクリックし、1つ以上のデータセットを「選択項目」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。
 - 他のシーケンスを追加するには、「シーケンス」をクリックし、1つ以上のシーケンスを「選択項目」ペインにドラッグ・アンド・ドロップします。
4. シーケンス内の項目を並べ替えます。
 - Oracle Analytics が項目を処理するデフォルトの順序をオーバーライドする場合は、「順序付け済」オプションを選択し、項目をドラッグ・アンド・ドロップして順序を変更します(番号 1、2、3 など)。
「順序付け済」オプションが選択解除(デフォルト設定)されている場合、これは自動依存関係検出をトリガーします。Oracle Analytics は、各シーケンス項目

の入力および出力を考慮して実行順序を確認し、必要に応じて項目を並列に実行します。

- 項目を削除するには、項目にカーソルを合せ、右側にある省略記号をクリックしてから、「**除去**」をクリックします。
5. 「**保存**」をクリックします。
 6. シーケンスを開始します。
 - シーケンスを即時に開始するには、順序エディタで「**実行シーケンス**」をクリックします。
 - シーケンスを後で開始するには、ホーム・ページから、「**ナビゲータ**」、「**データ**」、「**シーケンス**」の順にクリックします。シーケンスを右クリックして、「**実行**」をクリックします。
 - 特定の日に実行するようにシーケンスをスケジュールするには、ホーム・ページから、「**ナビゲータ**」、「**データ**」、「**シーケンス**」の順にクリックします。シーケンスを右クリックし、「**新規スケジュール**」をクリックしてから「**新規**」をクリックし、「**スケジュール**」ダイアログを使用して、日時および反復サイクルを指定します。
 7. シーケンス・プロセスを管理します。
 - 処理されるシーケンスを管理するには、「ホーム」ページから「**ナビゲータ**」、「**ジョブ**」の順にクリックします。
 - ホーム・ページからスケジュール済シーケンスを管理するには、「**ナビゲータ**」、「**ジョブ**」、「**スケジュール**」の順にクリックします。

ノート:

シーケンスは、データ・フローのコピーを処理しません。シーケンスでデータ・フローが処理されると、そのデータ・フローのコピーは無視されます。これが発生すると、シーケンス・ログに更新が表示されず(「検査」パネルの「履歴」タブからアクセスします)。

データ・フローの管理

「データ・フロー」ページでデータ・フローを管理します。たとえば、データの処理をスケジュールしたり、データ・フローをエクスポートして別の Oracle Analytics インスタンスに移行したりできます。

データ・フローを管理してデータを最新に保つことで、インサイトの質が向上します。

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」、「**データ**」、「**データ・フロー**」の順にクリックします。
2. データ・フローにカーソルを合せ、「**アクション・メニュー**」を使用して、次の表に示されたオプションにアクセスします。
 - 「**実行**」を使用して、データ・フローによりデータを作成または更新します。
 - 「**開く**」 / 「**新しいタブで開く**」を使用して、データ・フローを編集します。
 - 「**新規スケジュール**」を使用して、データを定期的に作成または更新します。
 - 「**検査**」を使用して、データ・フローに関する一般情報(ソースとターゲットのデータ・フローの最終実行日時、スケジュールされた実行、実行履歴など)を表示します。

また、「アクセス」タブを使用して、自分が所有するデータ・フローを共有することもできます。

- 「エクスポート」を使用して、データ・フローとその依存データおよび資格証明を、.DVA ファイルとしてマシンのダウンロード・フォルダにエクスポートします。エクスポートおよびインポート・オプションを使用して、あるシステムから別のシステムにデータ・フローを移行したり、データ・フローをバックアップします。データ・フローをエクスポートする場合、エクスポート・ファイルに含める内容を選択できます。たとえば、「権限を含める」を有効にすると、データ・フローのインポート時に共有接続が継続して動作するように、アクセス権限を含めることができます。ダウンロードしたデータ・フローをインポートするには、「データ・フロー」ページで、「ページ・メニュー」をクリックしてから「ワークブック/フローのインポート」をクリックします。画面の指示に従って、インポートするローカルの.DVA ファイルを選択します。データ・フローのインポート時に、**権限を含める(使用可能な場合)**を選択してアクセス権限を含めることで、共有接続が継続して動作します。
- 「削除」を使用して、システムからデータ・フローを除去します(これは元に戻せません)。

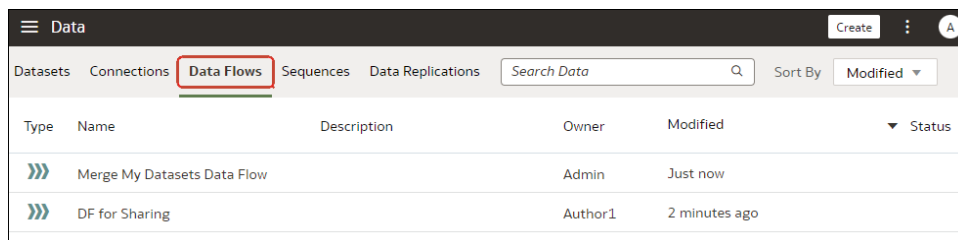
データ・フローおよびシーケンスの共有について

ユーザーはデータ・フローおよびシーケンスを他の Oracle Analytics ユーザーと共有できます。その場合、そのユーザーがそれを使用してデータを準備できます。

データ・フローおよびシーケンスを共有することで、データ準備プロジェクトでのコラボレーションや、Oracle Analytics のアセットやリソースの再利用が可能になります。

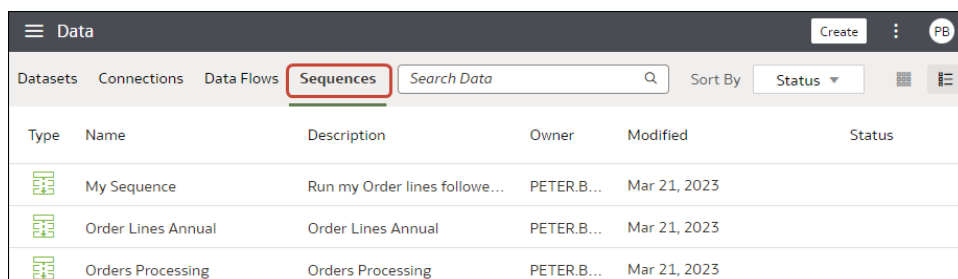
データ・フローおよびシーケンスの共有について

- データ・フローの所有者とデータ・フローを共有しているユーザーには、「データ」ページの「データ・フロー」タブにそのデータ・フローが表示されます。



Type	Name	Description	Owner	Modified	Status
»»»	Merge My Datasets Data Flow		Admin	Just now	
»»»	DF for Sharing		Author1	2 minutes ago	

- シーケンスの所有者とシーケンスを共有しているユーザーには、「データ」ページの「シーケンス」タブにそのシーケンスが表示されます。



Type	Name	Description	Owner	Modified	Status
📄	My Sequence	Run my Order lines followe...	PETER.B...	Mar 21, 2023	
📄	Order Lines Annual	Order Lines Annual	PETER.B...	Mar 21, 2023	
📄	Orders Processing	Orders Processing	PETER.B...	Mar 21, 2023	

- データ・フローまたはシーケンスを共有する場合、それに使用されているデータセットと接続(アーティファクトと呼ばれる)も共有するオプションを選択できます。「**関連アーティファクトを共有して、データ・フローを使用できるようにします。**」を選択すると、共有相手のユーザーには、他のデータ・フロー・コンポーネントへのアクセス権だけでなく、入力データセットへの読取り専用アクセス権と、出力アーティファクトへのフルコントロール・アクセス権も付与されます。「**関連アーティファクトを共有しないでください**」を選択した場合は、データ・フロー・コンポーネントへの読取り/書込みアクセス権をユーザーまたはロールに手動で付与する必要があります。

Share Related Artifacts

You're applying permission changes to a data flow shared with other users. To make the data flow usable by other users, we recommend that you also share the artifact(s) used in this data flow, such as datasets.

Share related artifact(s) to ensure the data flow is usable.

Don't share related artifact(s). You'll need to manually share artifacts used in the data flow with other users later.

[Click here to see the list of affected artifact\(s\) used in this data flow.](#)

- データ・フローまたはシーケンスの共有相手のユーザーは、アーティファクトを共有するために必要なフルコントロール権限を持っていないため、後から他のユーザーとそれらを再共有することはできません。このシナリオでは、データセットの「検査」ダイアログの「アクセス」タブを使用して、入力データセットへの読取り/書込みアクセス権をユーザーまたはロールに手動で付与する必要があります。

データ・フローおよびシーケンスのスケジュールについて

- スケジュールを作成したユーザーのみが、「検査」ダイアログでそのスケジュールを参照できます。管理権限を持つユーザーは、「ジョブ」ページですべてのスケジュールを参照できます。

»»» DF for Sharing <small>Data Flow</small> <input type="button" value="Save"/> <input type="button" value="Close"/> 			
General	Name	Frequency	Next Start Time
Sources/Targets	Author1_Sched	Never	
Schedules	Admin_Sched	Never	
History			

- 「ジョブ」ページの「ジョブ」タブと「スケジュール」タブでは、管理者がすべてのジョブおよびスケジュールを参照できます。コンテンツ作成者は、ジョブおよびスケジュールを編集した最後のユーザーであれば、そのジョブおよびスケジュールを参照できます。スケジュール済ジョブは、スケジュールを追加または最後に編集したユーザーとして実行されます。

Type	Name	Object	Run By	Start Time	Status
dataflow-'Admin'	DF to DB	DF to DB	Author1	Tue Oct 25 2022 2:01:16 ...	Complete
dataflow-'Admin'	DF to DB	DF to DB	Author1	Tue Oct 25 2022 1:58:02 ...	Error

データ・フローの共有

他の Oracle Analytics ユーザーとデータ・フローを共有すると、そのユーザーがそれを使用してデータを準備できるようになります。

データ・フローを共有して、他のユーザーがデータ準備プロジェクトでコラボレーションし、Oracle Analytics のアセットやリソースを再利用できるようにします。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」、「データ」、「データ・フロー」の順にクリックします。

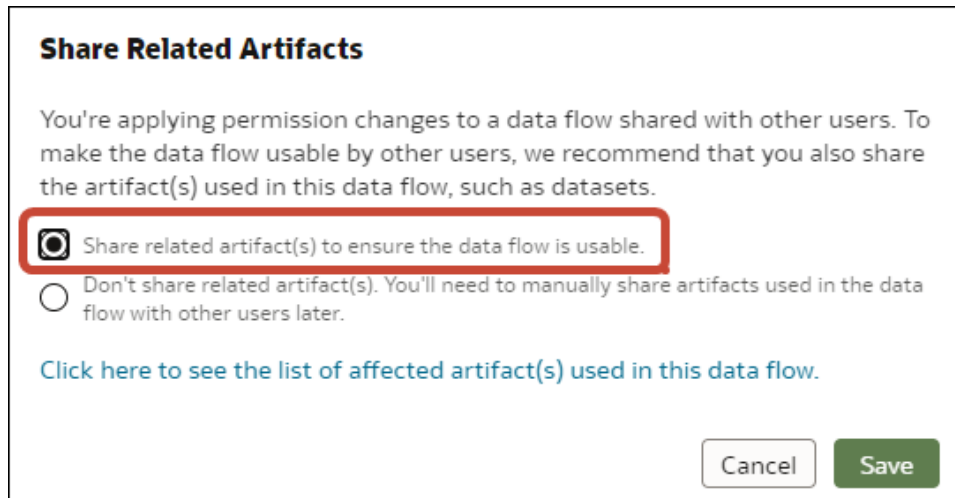
Type	Name	Description	Owner	Modified	Status
Merge My Datasets	Merge My Datasets Data Flow		Admin	Just now	
DF for Sharing	DF for Sharing		Author1	2 minutes ago	

2. 共有するデータ・フローを右クリックして、「検査」をクリックします。

Name	Full Control	Read-Write
Admin	●	●
Author1	●	●

3. 「アクセス」をクリックします。
4. 別のユーザーと共有するには、「ユーザー」をクリックし、ユーザー名を検索して選択してから、「フル・コントロール」または「読取り/書込み」を選択します。

- 特定のロール(BI コンテンツ作成者)のすべてのユーザーと共有するには、「**ロール**」をクリックし、ロール名を検索して選択してから、「**フル・コントロール**」または「**読取り/書込み**」を選択します。
- 「**保存**」をクリックします。
- 「**関連アーティファクトを共有して、データ・フローを使用できるようにします。**」をクリックします。



データ・フローの共有相手のユーザーは、次回のログイン時に「データ・フロー」ページからデータ・フローにアクセスできます。ユーザーが共有データ・フローで使用されている接続およびデータセットにもアクセスできることを確認してください。

シーケンスの共有

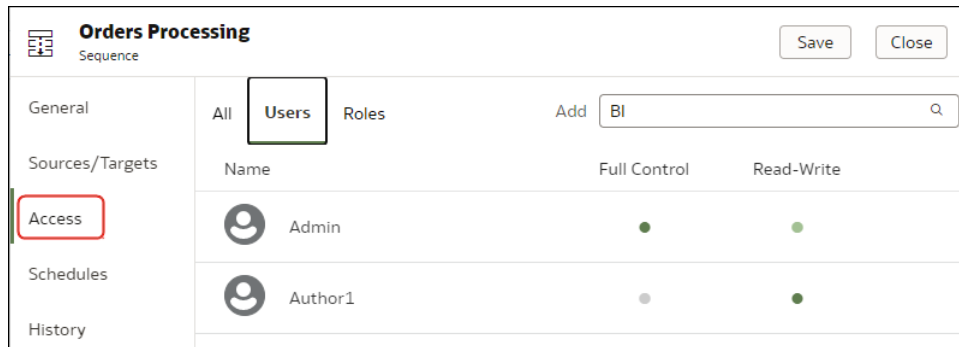
他の Oracle Analytics ユーザーとシーケンスを共有すると、そのユーザーがそれを使用してデータを準備できるようになります。

シーケンスを共有して、他のユーザーが同僚とコラボレーションし、Oracle Analytics のアセットおよびリソースを再利用できるようにします。

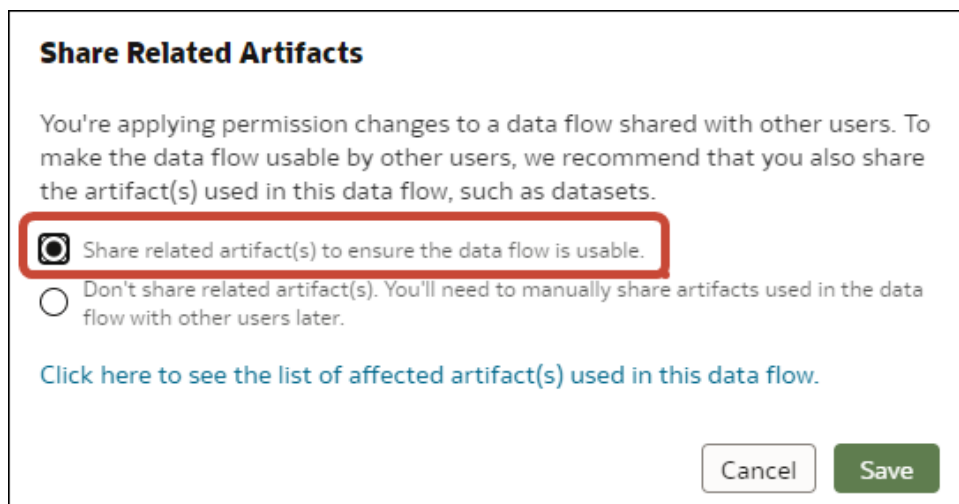
- ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」、「**データ**」、「**シーケンス**」の順にクリックします。

Type	Name	Description	Owner	Modified	Status
	My Sequence	Run my Order lines followe...	PETER.B...	Mar 21, 2023	
	Order Lines Annual	Order Lines Annual	PETER.B...	Mar 21, 2023	
	Orders Processing	Orders Processing	PETER.B...	Mar 21, 2023	

- 共有するシーケンスを右クリックして、「**検査**」をクリックします。



3. 「アクセス」をクリックします。
4. 別のユーザーと共有するには、「ユーザー」をクリックし、ユーザー名を検索して選択してから、「フル・コントロール」または「読取り/書込み」を選択します。
5. 特定のロール(BI コンテンツ作成者)のすべてのユーザーと共有するには、「ロール」をクリックし、ロール名を検索して選択してから、「フル・コントロール」または「読取り/書込み」を選択します。
6. 「保存」をクリックします。
7. 「関連アーティファクトを共有して、シーケンスを使用できるようにします。」



をクリックします。

シーケンスの共有相手のユーザーは、次回のログイン時に「シーケンス」ページからシーケンスにアクセスできます。ユーザーが共有シーケンスで使用されているデータ・フロー、接続およびデータセットにもアクセスできることを確認してください。

5

データセットの管理

このトピックでは、データセットを管理する様々な方法について説明します。




トピック:




- [データセット・タイプ・アイコン](#)
- [データセットとその情報のリストの表示](#)
- [データセットのデータのリロード](#)
- [データセットのリロード・スケジュールの操作](#)
- [データセットのプロパティの検査](#)
- [データセットの名前変更および説明の変更](#)
- [データセットのオブジェクト ID のコピー](#)
- [データセットの認証](#)
- [データセットのデータ要素の表示](#)
- [データセットのデータを検索で使用可能にする方法](#)
- [検索しやすい分析コンテンツにする](#)
- [データセットの権限の追加または更新](#)
- [データセットのソース・ファイルのダウンロード](#)
- [データセットの複製](#)
- [データセットの削除](#)
- [ワークブック・エディタでのナレッジ・エンリッチメントの有効化](#)

データセット・タイプのアイコン

データセットのアイコンは、データのソースとして使用する接続タイプまたはファイルの識別に役立ちます。

データセット・タイプ・アイコンは、ユーザーが使用するために作成または権限を付与したデータセットのリストに表示されます。[データセットとその情報のリストの表示](#)を参照してください。

データセット・アイコン	説明
	データセットは 2 つ以上のデータベース接続を使用します。たとえば、 Oracle Database および Oracle Analytics Warehouse です。
	データセットは 1 つのデータベース接続を使用します。
	データセットは XLSX または XLS ファイルを使用します。

データセット・アイコン	説明
	データセットは CSV または TXT ファイルを使用します。
	ワークブックを作成するために、データセットとして使用できるローカル・サブジェクト領域。ローカル・サブジェクト領域はインスタンスのクラシック・ホームにあります。
	データセットは Oracle Applications の接続タイプを使用します。 Oracle Applications 接続タイプは次のものに接続できます: <ul style="list-style-type: none"> • Oracle Fusion Cloud Applications Suite (たとえば、Oracle Fusion Cloud Financials) • オンプレミスの Oracle BI Enterprise Edition デプロイメント(適切なレベルにパッチが適用されている場合) • 別の Oracle Analytics サービス

データセットとその情報のリストの表示

データセットのリストへのアクセス、参照、ソートまたは検索を行うことができます。データセット・リストから、ワークブックで使用する使用可能なデータセットを選択できます。

権限によって、リストに表示されるデータセット、およびデータセットで実行できるアクション(オープン、データのリロードまたはファイルのダウンロード)が決まります。

データセット・リストを使用して、使用するデータ・ソース接続、作成日時や最終変更日時、名前、データ型、および各データセット列の集計など、特定のデータセットに関する情報を見つけることができます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. オプション: 「検索」フィールドに語句を入力して、特定のデータセットのリストを検索します。
4. データセットの詳細を確認するには、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
5. オプション: 「一般」タブをクリックすると、データセットを作成する際に使用する接続やデータセットでのデータの取得元になるデータベース・タイプなど、データセットに関する情報が表示されます。
6. オプション: 「データ要素」タブをクリックすると、ワークブックに必要なデータがデータセットに含まれているかどうかを判断するのに役立つ情報が表示されます。

データセットのデータのリロード

このトピックでは、データセットで使用されるデータのリロードとワークブックで 사용되는データのリフレッシュの関係について説明します。データセットのデータをリロードする様々な方法についても説明します。

 [LiveLabs スプリント](#)

トピック:

- [データセットのデータのリロードについて](#)
- [データセットの個々の表のリロード](#)
- [データセットのすべての表のリロード](#)
- [データセットのファイルのリロード](#)

データセットのデータのリロードについて

データセットの1つ以上の表がキャッシュされたとき、またはデータセットがデータ・フローの実行時に作成されたとき、1つのファイルをソースとして使用するデータセットをリロードできます。または、データセットのファイルおよび表を個別にリロードできます。

データをリロードすると、ワークブックおよびビジュアライゼーションには現在のデータが含まれます。データセットのリロードが完了して、ワークブックをリフレッシュした後、最新データがワークブックおよびビジュアライゼーションに表示されます。[ワークブックのデータのリフレッシュ](#)を参照してください。

データをリロードする方法は、データセットのデータ・ソース・タイプによって異なります。

外部接続からのデータ

外部接続を含むデータセットのデータをリロードすると、データセットのSQL文が再実行され、「**データ・アクセス**」フィールドが「**自動キャッシュ**」に設定された表の現在のデータがキャッシュにロードされます。

「**データ・アクセス**」フィールドが「**自動キャッシュ**」に設定された1つ以上の表がデータセットに含まれている場合、「**データ**」ページを使用して表をデータセットにリロードできます。個々の表をリロードするには、**データセット・エディタ**を使用します。スケジュールを設定して、1時間に1回データセットの表をリロードすることもできます。[データセットのリロードのスケジュール](#)を参照してください。

Excel、CSV または TXT ファイルのリロード

Microsoft Excel ファイル(XLSX または XLS)をリロードするときに、新しいプレッドシート・ファイルに元のファイルと同じ名前のシートが含まれていることを確認する必要があります。また、シートには、データセットに存在する、同じ列が含まれている必要があります。ロードするファイルに列が欠落していると、データのリロードが失敗します。

CSV または TXT ファイルをリロードするときには、データセットにあるのと同じ列が含まれていることを確認してください。ロードするファイルに列が欠落していると、リロードが失敗します。

リロードのスケジュールは、Excel、CSV または TXT ファイルのみを含むデータセットでは使用できません。

1つのファイルをソースとして使用するデータセットをリロードするには、「**データ**」ページまたは**データセット・エディタ**を使用します。データセットが2つ以上のファイルを使用する場合、**データセット・エディタ**を使用して各ファイルを手動でリロードします。データセットがファイルと外部接続の組合せを使用する場合、**データセット・エディタ**を使用して各ファイルを手動でリロードします。

Oracle Fusion Cloud Applications Suite

Fusion Applications Suite データ・ソースのデータおよびメタデータをリロードできます。Fusion Applications Suite データ・ソースが論理 SQL を使用している場合、データのリロードでデータセットの SQL 文が再実行されます。

データセットの個々の表のリロード

データセット・エディタを使用して、接続を使用する個々のデータセット表のデータをリロードします。リロードでは、表のデータ・ソースに問い合わせ、現在のデータをキャッシュにロードします。

そのソースとしてファイルを使用する表をリロードする場合、[データセットのファイルのリロード](#)を参照してください。

「リロード」オプションは、「**データ・アクセス**」フィールドを「**自動キャッシュ**」に設定したデータセット表で使用できます。

通常、同時にすべてのデータセットの表をリロードするため、データはすべての表で一貫性があります。ただし、データセットの表のいずれかのみをリロードすることに意味がある場合があります。たとえば、データがファクト表で変更されていて、ディメンション表のいずれかで変更されていない場合です。

リロードでは、表のプロファイル・データ・プレビュー情報は更新されません。データ・プレビューで最新のデータを表示するには、表のリロード後に表を再度プロファイルする必要があります。

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**データ**」をクリックします。
2. 「**データセット**」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「**アクション**」をクリックし、「**開く**」をクリックします。
4. **表のページ・タブ**で、リロードする表を見つけ、その矢印をクリックします。
5. 「**データのリロード**」をクリックします。

COUNTRY_ID	COUNTRY_NAME	REGION_ID
AR	Argentina	2
AU	Australia	3
BE	Belgium	1
BR	Brazil	2
CA	Canada	2
CH	Switzerland	1
CN	China	3

データセットのすべての表のリロード

「データセット」タブを使用して、接続を使用しており、「**データ・アクセス**」フィールドが「**自動キャッシュ**」に設定されたデータセットの表のデータをリロードします。リロードでは、表のデータ・ソースに問い合わせ、現在のデータをキャッシュにロードします。

データをリロードすると、ワークブックおよびビジュアライゼーションには現在のデータが含まれます。データセットのリロードが完了して、ワークブックをリフレッシュした後、最新データがワークブックおよびビジュアライゼーションに表示されます。

複数の表を含み、そのソースとしてファイルを使用するデータセットをリロードする場合、または接続から作成された表とファイルの組合せがデータセットに含まれる場合、[データセットのファイルのリロード](#)を参照してください。

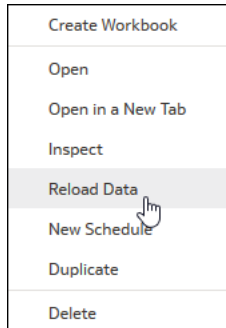
「**データ・アクセス**」フィールドが1つ以上の表に対して「**自動キャッシュ**」に設定されている場合や、データ・ソース接続に1つ以上の表の資格証明が含まれている場合、「**データのリロード**」オプションをすべてのデータセットに対して使用できます。

「**データ・アクセス**」フィールドが「**ライブ**」に設定されたデータセット表は、リロードには含まれません。[データセット表がキャッシュされているかライブであるかの指定](#)を参照してください。

データセットを作成したユーザーまたはデータセットを所有しているユーザー、データセットに対して読取り/書込み権限を持つユーザー、データ・ソース接続に対して読取り専用権限を持つユーザーは、データセットの表をリロードできます。

データセットのリロードを実行するスケジュールを作成および使用できます。[データセットのリロードのスケジュール](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. リロードするデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「データのリロード」をクリックします。



データセットのファイルのリロード

データセット・エディタを使用して、データセットの表を提供する XLSX、XLS、CSV または TXT ファイルを個別にリロードします。

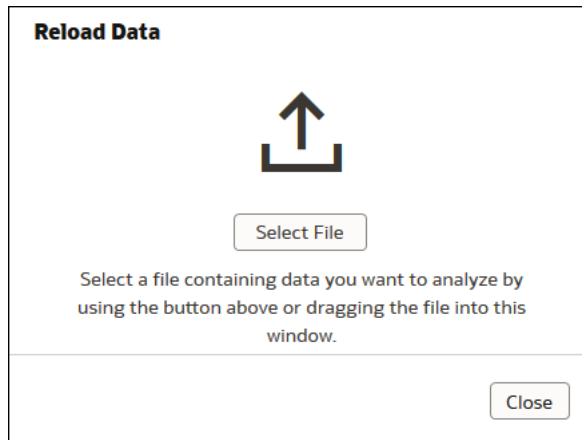
データセットのファイルのリロードすると、ワークブックおよびビジュアライゼーションに現在のデータが含まれます。ファイルのリロードが完了して、ワークブックをリフレッシュすると、最新データがワークブックおよびビジュアライゼーションに表示されます。

次の点に注意してください。

- データセットが1つの表を含んでおり、そのソースとしてファイルを使用する場合、「データ」ページまたはデータセット・エディタを使用してファイルのリロードします。
- データセットが2つ以上のファイルを使用する場合、データセット・エディタを使用して各ファイルのリロードします。
- データセットがファイルと外部接続の組合せを使用する場合、データセット・エディタを使用して各ファイルをアップロードします。[データセットのすべての表のリロード](#)を参照してください。

アップロードを確実に成功させるためにスプレッドシートを構築する方法の詳細は、[データセットのファイルについて](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 開くデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「開く」をクリックします。
4. 表ページ・タブで、リロードする表を見つけ、その矢印をクリックします。
5. メニューで、「データのリロード」をクリックします。
6. 「データのリロード」ダイアログで、ファイルをダイアログにドラッグ・アンド・ドロップするか、「ファイルの選択」をクリックしてファイルを参照します。



7. 「OK」をクリックします。

データセットのリロード履歴の表示

履歴情報は、データセットのリロードに対してジョブ・レベルと表レベルで生成されます。

データセットのリロード履歴を使用して、リロードの実行方法(手動またはスケジュール)、ジョブ・ステータス、開始時間、終了時間、およびデータ・リロードの量(バイト単位)などの情報を参照します。ジョブのリロード表に関する情報をドリルすることもできます。たとえば、表のソース名、リロード・ステータスおよび行数などです。

Oracle Analytics では、接続を使用するデータセットをリロードすると、履歴情報が生成されます。

Oracle Analytics では、次を使用するデータセットをリロードすると、履歴情報およびログ・ファイルが生成されません:

- ファイルのみを使用します。
- 接続およびファイルを使用します。Oracle Analytics では、接続を使用するデータセットの表に対してのみ、履歴情報が生成されます。
- Oracle EPM Cloud または Oracle Essbase 接続を使用します。

ログ・ファイルは、データのリロードごとに使用できます。[リロード・ジョブのログ・ファイルの表示またはダウンロード](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. リロード履歴情報が必要なデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
4. 「履歴」タブをクリックします。
5. リスト内のジョブをクリックし、「一般」タブに移動し、詳細を表示します。
6. オプション: 「ステータス」タブをクリックし、表情報を表示するか、リロードされたすべての表のリストにアクセスします。表をクリックして、その表に関する詳細なリロード情報を表示します。

Sales History			
General	Task Name	Status	Duration
Status	DSET : Sales History - COUNTRIES	Completed	0 sec
	DSET : Sales History - PROMOTIONS	Completed	1 sec
	DSET : Sales History - SALES	Completed	4 sec
	DSET : Sales History - CUSTOMERS	Completed	2 sec
	DSET : Sales History - CHANNELS	Completed	1 sec
	DSET : Sales History - TIMES	Completed	1 sec
	DSET : Sales History - PRODUCTS	Completed	1 sec

リロード・ジョブのログ・ファイルの表示またはダウンロード

ログ・ファイルは、データセットのリロードに対してジョブ・レベルと表レベルで生成されます。

ログは、データセットのリロード・ジョブ・レベルで表示およびダウンロードできます。また、ジョブの個別表にドリルしてログ・ファイルを表示することもできます。これらのログを使用すると、データセットのリロード問題をトラブルシューティングする上で役に立ちます。

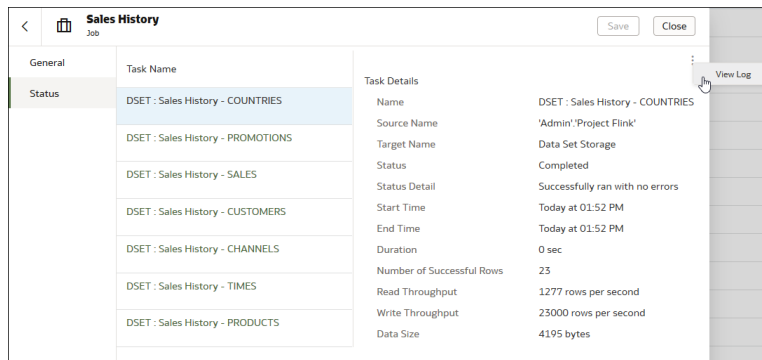
たとえば、データのリロードに問題がある場合、構成に問題があるのか(無効なパスワードや期限切れのパスワードなど)、データが多すぎるのが問題なのかを確認する上で役に立ちます。このような場合、ログ・ファイルには、主な操作のタイム・スタンブや、処理されたレコード数に関する情報が含まれます。

Oracle Analytics では、接続を使用するデータセットをリロードすると、ログ・ファイルが生成されます。

Oracle Analytics では、次を使用するデータセットをリロードすると、履歴情報およびログ・ファイルが生成されません:

- ファイルのみを使用します。
 - 接続およびファイルを使用します。Oracle Analytics では、接続を使用するデータセットの表に対してのみ、ログ・ファイルが生成されます。
 - Oracle EPM Cloud または Oracle Essbase 接続を使用します。
1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
 2. 「データセット」タブをクリックします。
 3. リロード・ログが必要なデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
 4. 「履歴」タブをクリックします。
 5. ログが必要なジョブをクリックします。
 6. 「一般」タブで、「ジョブ詳細」をクリックし、「ログの表示」をクリックしてログを表示するか、「ログのダウンロード」を選択してログをダウンロードします。
 7. オプション: ジョブによって複数の表がリロードされたときに、特定の表のログ情報を表示したい場合は、「ステータス」をクリックし、リスト内で表のリロード・タスク名を見つけてクリックします。

8. オプション: 「**ジョブ・タスク・メニュー**」をクリックし、「**ログの表示**」を選択します。



データセットのリロード・スケジュールの操作

このトピックでは、データセットのリロード・スケジュールを作成、変更および管理するために知っている必要があることについて説明します。

トピック:

- [データセットのリロードのスケジュール](#)
- [データセットのリロード・スケジュールの詳細の表示](#)
- [データセットのリロード・スケジュールの変更](#)
- [データセットのリロード・スケジュールの削除](#)

データセットのリロードのスケジュール

データセットのデータをキャッシュにリロードするために、ワнтаイム・スケジュールまたは繰り返しスケジュールを作成できます。

手動でリロードせずに、データセットを定期的に自動でリロードする場合は、データセットのリロードをスケジュールします。また、ワークブックの作成者やコンシューマにとって都合がよく、作業の中断や混乱がない日時にデータセットのリロードをスケジュールできます。

「**新規スケジュール**」オプションは、次の場合は「**アクション・メニュー**」に表示されません:

- データセットに、「**ライブ**」に設定されている表のみが含まれます。
- データセットでファイルのみを使用します。
- データセットで Oracle EPM Cloud または Oracle Essbase 接続を使用します。

「**データ・アクセス**」フィールドが「**ライブ**」に設定されたデータセット表は、リロードには含まれません。[データセット表がキャッシュされているかライブであるかの指定](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**データ**」をクリックします。
2. 「**データセット**」タブをクリックします。
3. スケジュールするデータセットを見つけて、「**アクション**」をクリックし、「**新規スケジュール**」をクリックします。

Schedule

Object Sales History

Activity Run Dataset

Name

Start Time

Repeat End

Monday Tuesday Wednesday Thursday

Friday Saturday Sunday

4. データセットのリロードを実行するタイミングと頻度を指定します。
5. 「OK」をクリックします。

データセットのリロード・スケジュールの詳細の表示

データセットのリロードのスケジュールに関する情報を表示して、最終実行日時や次の実行日時を確認できます。スケジュールによって、完了したリロード・ジョブ実行に関する履歴情報を表示することもできます。

自分で作成したデータセットのリロード・スケジュールの詳細にアクセスできます。他のユーザーが作成したデータセットのリロード・スケジュールにアクセスすることはできません。BI サービス管理者ロールを持つ管理者、およびデータセットに対する読取り/書き込み権限またはフル・コントロール権限が付与されているユーザーは、そのスケジュールにアクセスできます。

スケジュールされたジョブがリロードした表に関する完全な履歴情報は、[データセットのリロード履歴の表示](#) and [リロード・ジョブのログ・ファイルの表示またはダウンロード](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. スケジュール情報が必要なデータセットを見つけて、「検査」をクリックし、「スケジュール」をクリックします。
4. スケジュールの名前をクリックし、「スケジュール」ダイアログで「一般」タブと「スケジュール」タブをクリックしてスケジュールに関する情報を表示します。
5. オプション: 「履歴」タブをクリックして、スケジュールの完了したジョブのリストを表示します。開始時間や完了ステータスなどの、これに関する詳細情報のために、ドリルダウンするジョブをクリックします。
6. 「OK」をクリックします。

データセットのリロード・スケジュールの変更

データセットのリロード・スケジュールの詳細を変更できます。たとえば、データセットのリロードを実行する日時、頻度などです。

自分で作成したデータセットのリロード・スケジュールを変更できます。他のユーザーが作成したデータセットのリロード・スケジュールにアクセスして変更することはできません。BI サービス管理者ロールを持つ管理者、およびデータセットに対する読取り/書込み権限またはフル・コントロール権限が付与されているユーザーは、そのスケジュールを変更できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. スケジュール情報の変更が必要なデータセットを見つけて、「検査」をクリックし、「スケジュール」をクリックします。
4. スケジュールの名前をクリックし、「スケジュール」ダイアログで「スケジュール」タブをクリックします。

The screenshot shows a configuration window for a schedule named 'Sales History_1'. It has three tabs: 'General', 'Schedule', and 'History'. The 'General' tab is selected. Fields include: 'Start' (10/08/21), 'Time' (02:36 PM), 'Repeat' (Monthly), and 'End' (10/09/21). There is a calendar grid for selecting dates, with 'Last Day' as an option. At the bottom, there are dropdowns for 'Every' (set to 'Second') and 'Friday'.

5. スケジュール詳細を更新します。
6. 「保存」をクリックします。

データセットのリロード・スケジュールの削除

データセットのリロード・スケジュールが不要になったら、これを削除できます。

自分で作成したデータセットのリロード・スケジュールを削除できます。他のユーザーが作成したデータセットのリロード・スケジュールにアクセスして削除することはできません。BI サービス管理者ロールを持つ管理者、およびデータセットに対する読取り/書込み権限またはフル・コントロール権限が付与されているユーザーは、そのスケジュールを削除できます。

スケジュールを削除しても、実行済で完了したリロードに関する履歴情報を表示できます。[データセットのリロード履歴の表示](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. スケジュールを削除するデータセットを見つけて、「検査」をクリックし、「スケジュール」をクリックします。
4. スケジュールの名前にカーソルを合せて「削除」をクリックします。
5. 「閉じる」をクリックします。

データセットのプロパティの検査

作成日時、最終変更日時、データセットが検索用に索引付けされているかどうか、データセットにアクセスできるユーザーおよびデータ要素のリストなど、データセットに関する情報にアクセスおよび表示します。

権限によって、表示および更新できるデータセットのプロパティが決まります。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. プロパティを検査するデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
4. タブをクリックして移動し、データセットのプロパティを検査します。
5. 「閉じる」をクリックします。

データセットの名前と説明の変更

「フル・コントロール」または「読取り/書込み」アクセス権を持つデータセットの名前を変更したり、説明を変更できます。

データセットの名前を変更しても、ワークブックのデータセットへの参照には影響がありません。データセットを使用するワークブックには新しい名前が表示され、引き続き設計どおりに動作します。データセットをワークブックに追加すると、ワークブックは名前ではなく、データセットの固有のオブジェクト ID でデータセットに接続します。これは、データセットが作成および保存されたときに割り当てられたものです。[データセットのオブジェクト ID のコピー](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 名前を変更するデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
4. 「一般」タブをクリックします。
5. 「名前」フィールドに移動して、データセットの名前を変更します。
6. 「説明」フィールドに移動して、データセットの説明を更新します。
7. 「保存」をクリックします。

データセットのオブジェクト ID のコピー

各データセットは一意的な固有のオブジェクト ID が割り当てられています。この ID を使用すると、Oracle Analytics のエラーと問題のトラブルシューティング、ログ・ファイルの検索や Oracle Support リクエストの記録に役立ちます。

データセットのオブジェクト ID(データセットの名前ではない)はデータセットの参照、トラッキングおよび管理に使用されます。ほとんどの場合、オブジェクト ID は、データセットを作成したときに指定した名前に基づいています。データセット名を更

新しても、オブジェクト ID は更新されません。[データセットの名前と説明の変更](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. コピーする ID のデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
4. 「一般」タブをクリックします。
5. 「オブジェクト ID」フィールドに移動して、「コピー」ボタンをクリックします。

データセットの認証

データセットを認証するとき、データセットに正確で信頼できるデータが含まれていることを確認します。ユーザーがホーム・ページからデータを検索すると、認証済データは、検索結果で高くランク付けされます。

ノート:

自分とデータセットを共有しているユーザーが、ファイルベースのデータセットを使用してホーム・ページからビジュアライゼーションを構築する前に、それらに索引付けして認証する必要があります。[データセットの索引付けおよびホーム・ページからのデータのビジュアル化](#)を参照してください。

ユーザーが管理者ロールのメンバーであり、データセットに対して「フル・コントロール」または「読取り/書込み」アクセス権を持っている場合、データセットを認証できます。

最適な検索結果を得るには、ユーザーが検出する必要があるデータを含むデータセットのみを認証します。すべてのデータセットを認証すると、生成される検索結果数が多くなりすぎます。最初に最小限のデータセットを認証し、その後、必要に応じて追加のデータセットを認証することをお勧めします。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 認証するデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
4. 「一般」タブをクリックします。
5. 「認証者」フィールドに移動して、「認証」ボタンをクリックします。
6. 「保存」をクリックします。

データセットのデータ要素の表示

データ要素リストには、データ要素名、データ型および集計などの情報が含まれています。データ要素の情報を使用して、データセットにビジュアル化および分析するデータが含まれているかどうかを判断できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。

2. 「データセット」タブをクリックします。
3. データ要素を表示するデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
4. 「データ要素」タブをクリックします。

Sales History Dataset					
General	Name	Table Name	Data Type	Treat As	Aggregation
Data Elements	PROD_ID	SALES	Number	Match	None
Search	CUST_ID	SALES	Number	Attribute	None
Access	TIME_ID	SALES	Time	Match	None
Schedules	CHANNEL_ID	SALES	Number	Match	None
History	PROMO_ID	SALES	Number	Match	None
	QUANTITY_SOLD	SALES	Number	Measure	Sum
	AMOUNT_SOLD	SALES	Number	Measure	Sum
	CHANNEL_ID_1	CHANNELS	Number	Attribute	None
	CHANNEL_DESC	CHANNELS	Text	Match	None
	CHANNEL_CLASS	CHANNELS	Text	Match	None
	CHANNEL_CLASS_ID	CHANNELS	Number	Measure	Sum
	CHANNEL_TOTAL	CHANNELS	Text	Match	None
	CHANNEL_TOTAL_ID	CHANNELS	Number	Measure	Sum
	CUST_ID_1	CUSTOMERS	Number	Attribute	None

データセットのデータを検索で使用可能にする方法

このトピックでは、データセットに索引付けしてそのデータをホーム・ページの検索結果に含めるために必要な知識について説明します。

 [LiveLabs スプリント](#)

トピック:

- [データセットの索引付けについて](#)
- [データセットの索引付け](#)
- [オンデマンドでのデータセットの索引付け](#)
- [データセットに索引付けする時期のスケジュール](#)

データセットの索引付けについて

データがホーム・ページの検索結果に含まれるように、データセットに索引付けする必要があります。

ノート:

ファイルベースのデータセットを使用してホーム・ページからビジュアライゼーションを構築する前に、それらに索引付けする必要があります。自分とデータセットを共有しているユーザーが、ファイルベースのデータセットを使用してホーム・ページからビジュアライゼーションを構築する前に、それらに索引付けして認証する必要があります。[ホーム・ページからのデータのビジュアル化およびデータセットの認証](#)を参照してください。

「フル・コントロール」または「読取り/書込み」アクセス権を持つデータセットに索引付けできます。データセットの索引付けが有効である場合、データセットの属性の全部または一部に名前を索引付けするか、名前および値で索引付けするかと、データセットに索引付けするための言語を指定します。デフォルトでは、ユーザーがホーム・ページから検索したときに最新のデータを使用できるように、データセットはそのデータのリフレッシュ時に索引付けされます。または、データセットに索引付けする時期と頻度を示すスケジュールを追加したり、オンデマンドでデータセットに索引付けしたりできます。

「**検査**」ページの「**検索**」タブを使用して、ファイルまたはデータ・ソースに基づいたデータセットの索引付けを有効にします。管理者は、コンソールの「**検索索引**」ページの「**データ・モデル**」ペインを使用して、索引付けするサブジェクト領域を制御します。検索索引付けの構成を参照してください。

データセットの索引付け

データがホーム・ページの検索結果に含まれるように、データセットに索引付けする方法を指定できます。データセットの属性のすべてまたは一部に名前または名前と値で索引を付けることができます。

「フル・コントロール」または「読取り/書込み」アクセス権を持つデータセットに索引付けできます。

デフォルトでは、データセットはリフレッシュ時に索引付けされます。ただし、データセットに索引付けする時期と頻度を指定するスケジュールを作成できます。[データセットに索引付けする時期のスケジュール](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**データ**」をクリックします。
2. 「**データセット**」タブをクリックします。
3. 索引付けするデータセットを見つけて、「**アクション**」をクリックし、「**検査**」をクリックします。
4. 「**検索**」タブをクリックします。
5. 「**検索用のインデックス・データセット**」フィールドをクリックし、データセットを索引付けする方法を指定します。
 - 「**名前のみ**」を選択して、すべての属性のメタデータに索引付けします。
 - 「**名前と値**」を選択して、すべての属性のメタデータおよびデータに索引付けします。
 - 「**カスタム**」を選択して、索引付けする属性および索引付けの方法を選択します。
6. 「**言語**」フィールドをクリックして、データセットの索引の作成に使用する言語を選択します。
7. オプション: 「**インデックス設定スケジュール**」セクションを使用してデータに索引付けする時期を指定するか、「**今すぐ実行**」をクリックして即座にリフレッシュを実行します。

8. 「保存」をクリックします。

オンデマンドでのデータセットの索引付け

データセットの索引付けを、リフレッシュ後や実行スケジュール時まで待機する必要はありません。データがホーム・ページの検索結果に含まれるように、必要なときにいつでもデータセットに索引付けすることができます。

「フル・コントロール」または「読取り/書込み」アクセス権を持つデータセットに索引付けできます。

索引付け用にデータセットを有効化および設定する方法の詳細は、[データセットの索引付け](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. オンデマンドで索引付けするデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
4. 「検索」タブをクリックします。

The screenshot shows the configuration page for a dataset named 'Sales History'. The 'General' tab is active. The 'Index Dataset for Searching' checkbox is checked. Under 'Data Elements', 'By names only' is selected. Under 'Search', 'Languages' is set to 'English'. Under 'Schedules', 'Indexing Schedule' is set to 'Start' with a value of '03/29/22 02:42 PM'. The 'Repeat every' is set to '1 Day'. The 'Run Now' button is highlighted with a red box. The 'Last Run' status is 'Success : Tue Mar 29 2022 11:59:10 AM'.

5. 「今すぐ実行」をクリックして、データセットに索引付けします。

データセットに索引付けする時期のスケジュール

データセットに索引付けする時期と頻度をスケジュールできます。ワークブックの作成者やコンシューマにとって都合がよく、作業の中断や混乱がないタイミングでデータセットに索引付けするように選択できます。

デフォルトでは、データセットに対して索引付けが有効である場合、データセットはリフレッシュ時に索引付けされます。索引付けスケジュールを設定すると、このデフォルトはオーバーライドされます。「フル・コントロール」または「読取り/書込み」アクセス権を持つデータセットの索引付けを有効にできます。

索引付け用にデータセットを有効化および設定する方法の詳細は、[データセットの索引付け](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 索引付けスケジュールを追加するデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
4. 「検索」タブをクリックします。
5. 「インデックス設定スケジュール」セクションで、「開始」をクリックし、日時の選択ボタンをクリックします。

The screenshot shows the 'Sales History' dataset configuration interface. The 'Indexing Schedule' section is highlighted with a red box. It contains the following settings:

- Index Dataset for Searching
 - By names only
 - By names and values
 - Custom
- Languages: English
- Indexing Schedule:
 - When Dataset is refreshed
 - Start: 03/29/22 02:42 PM
- Repeat every: 1 Day
- Run Now button
- Last Run: Success: Tue Mar 29 2022 11:59:10 AM

6. ドロップダウン・カレンダーで、月日を参照して選択します。ドロップダウン・カレンダーの下部で、タイムスタンプをクリックし、索引付けを実行する時間を指定します。
7. 「繰返し頻度」フィールドに移動して、数値を入力します。ドロップダウンをクリックし、スケジュールを実行する頻度を選択します。
8. 「保存」をクリックします。

検索しやすい分析コンテンツにする

コンテンツ作成者は、ユーザーがホーム・ページからコンテンツを検索しやすくするためにデータセットにシノニムを指定できます。たとえば、ユーザーが Sales、Revenue または Income を検索してデータセット列 SALES_AMT 内のデータを検索できるようにします。

トピック:

- [分析コンテンツを検索しやすくする方法について](#)
- [データセット列のシノニムの指定](#)

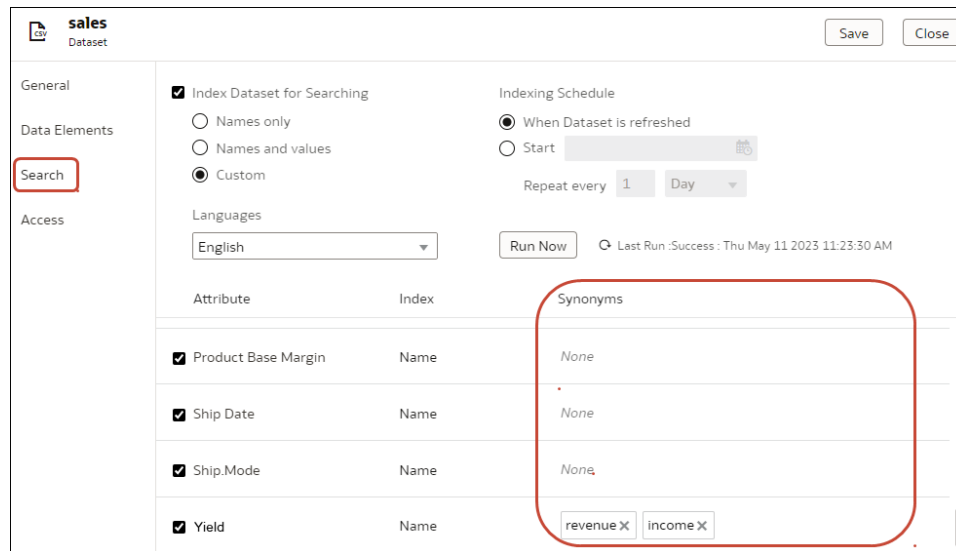
分析コンテンツを検索しやすくする方法について

コンテンツ作成者は、データセットの列にシノニムを指定し、分析コンテンツをホーム・ページから検索しやすくします。

たとえば、ユーザーが **Yield** という列のデータを検索しやすくするために、「*revenue*」と「*income*」をシノニムとして指定します。これにより、ユーザーはホーム・ページから検索語として **revenue** または **income** と入力して、**Yield** という列にあるデータを見つけることができます。

データセットを所有している場合、または読取り/書込みアクセス権を付与されてデータセットを共有している場合は、シノニムを作成および編集できます。

データセットの「検査」ダイアログの「検索」ページで、データセット列にシノニムを指定します。



列名にシノニムを指定する際のヒント:


- 1つまたは複数のシノニムを入力します。たとえば、**Yield** 列に「*revenue*」と「*income*」を指定します。
- シノニムは最大 **50** 文字です。
- 各列名につき最大 **20** 語のシノニムを指定できます。

次のものに基づいてシノニムを作成することはできません:

- 分析関数: **sum**、**AND**、**OR**、**NOT**、**BETWEEN**、**IN**、**IS NULL**、**LIKE**、**Aggregate At**、**Aggregate By** など。
- 分析用語: **null** など。
- 通常、自然言語を処理する前に削除される冠詞、前置詞、代名詞、接続詞(ストップワードとも呼ばれる)。例: **a**、**an**、**and**、**are**、**as**、**at**、**be**、**but**、**by**。
- ブール・ファンクション名: **true**、**false**、**yes**、**no** など。
- 日付書式: **nn/nnnn**、**nnnn/nn**、**nn/nn/nnnn**、**nnnn/nn/nn** など(**n** は整数)。
- 整数: **123**、**123 456** など。
- 特殊文字: **!@#\$%^&*()+=[]{\;'\:"|,<>/?~** など。

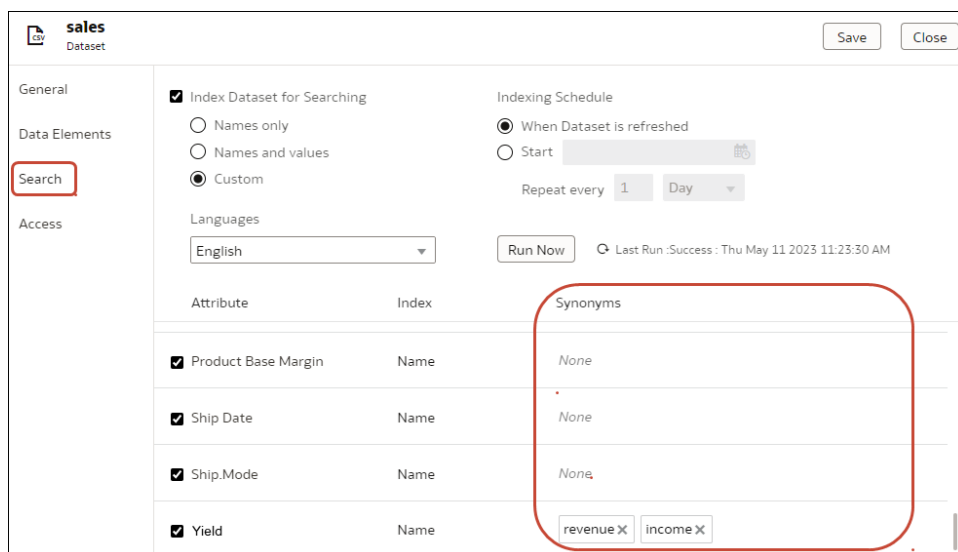
データセット列のシノニムの指定

データセットの列にシノニムを指定して、分析コンテンツをホーム・ページから検索しやすくします。たとえば、ユーザーが「Volume」を検索して、列「QuantitySold」のデータを特定できるようにします。

1. ホーム・ページまたは「データ」ページで、データセットを選択します。
2. データセットにカーソルを合わせて、「アクション」、「検査」の順にクリックします。
3. 「検索」をクリックし、「検索用のインデックス・データセット」オプションが選択されていることを確認します。

「検索用のインデックス・データセット」が選択されていない場合、他のオプションはグレー表示されます。「検索用のインデックス・データセット」を選択できない場合は、Oracle Analytics 管理者またはデータセット所有者に読取り/書込みアクセス権の付与を依頼してください。

4. 更新する列の横にある「シノニム」フィールドにシノニムを入力します。
たとえば、Yield 列のシノニムとして「revenue」と「income」を指定します。



The screenshot shows the configuration page for a dataset named 'sales'. On the left, the 'Search' option is selected under 'Index Dataset for Searching'. The 'Yield' attribute is checked, and its 'Synonyms' field is highlighted with a red box, containing 'revenue X' and 'income X'. Other attributes like 'Product Base Margin', 'Ship Date', and 'Ship.Mode' are also checked but have 'None' in their synonym fields.

5. 「保存」をクリックします。

データセットの権限の追加または更新

作成または管理するデータセットにユーザーとロールおよびアクセス権限(「フル・コントロール」、「読取り/書込み」および「読取り専用」)を割り当てることができます。

LiveLabs スプリント

ユーザーおよびロールに権限を割り当てて、誰がデータセットにアクセスでき、そのデータセットで何を実行できるかを指定します。たとえば、データのリロード、データセットの索引付け、ファイルのダウンロードなどです。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。

2. 「**データセット**」タブをクリックします。
3. 権限を追加するか権限を更新するデータセットを見つけて、「**アクション**」をクリックし、「**検査**」をクリックします。
4. 「**アクセス**」タブをクリックします。
5. オプション: 権限を変更するには、ユーザーまたはロールを見つけて、割り当てる権限をクリックします。
6. オプション: ユーザーまたはロールを削除するには、カーソルを合せて「**削除**」をクリックします。
7. オプション: ユーザーまたはロールを追加するには、「**検索**」フィールドをクリックし、追加するユーザーまたはロールの名前を入力します。検索リストからユーザーまたはロールを選択して追加し、割り当てる権限をクリックします。
8. 「**保存**」をクリックします。

データセットのソース・ファイルのダウンロード

1つの表および1つのソース・ファイルを含むデータセットからファイルをダウンロードできます。ソース・ファイルをダウンロードするには、データセットへのアクセス権が必要です。

データセットのソース・ファイルをダウンロードする理由を次に示します:

- データセット・ファイルをアップロードしましたが、元のファイルが削除されたか、失われたか、配置が正しくありません。
- ワークブックをインポートしたため、元のデータセット・ファイルにアクセスする必要があります。
- 元のデータセット・ファイルがありません。たとえば、別のユーザーがデータセット・ファイルをアップロードした場合です。
- 別のユーザーがアップロードして共有したデータセット・ファイルが必要です。

データセットのソース・ファイルをダウンロードすると、デフォルトでは、結果のファイルの形式は、データセットを作成するために使用されたファイルと同じです。ただし、ファイルを保存することを選択すると、ファイル・タイプを変更できます。

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**データ**」をクリックします。
2. 「**データセット**」タブをクリックします。
3. ダウンロードするデータセットを見つけて、「**アクション**」をクリックし、「**ファイルのダウンロード**」をクリックします。
4. プロンプトが表示されたら、ファイルを開くか、保存します。

データセットの複製

アクセス可能なデータセットを複製できます。データセットを複製してそのコピーを変更した方が、データセットを最初から作成して構築するよりも早い場合があります。

ユーザーが複製したデータセットの所有者になります。複製したデータセットのデフォルト名は、コピーしたデータセットの名前に「コピー」が付加されたものです。たとえば、SAMPLE_REVENUE-Copy のようになります。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 複製するデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「複製」をクリックします。

データセットの削除

データセットが不要になったときにこれを削除します。そうしないと、システムの領域の解放が必要になります。

ユーザーが「フル・コントロール」権限を持っているデータセットを削除できます。

ノート:


データセットを完全に削除すると、データセットが除去され、これを使用するワークブックが破損します。データセットを削除することを選択すると、Oracle Analytics ではデータセットを使用するワークブックがリストされなくなります。データセットを削除する前に、これがどのワークブックでも使用されていないことを確認する必要があります。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 削除するデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「削除」をクリックします。

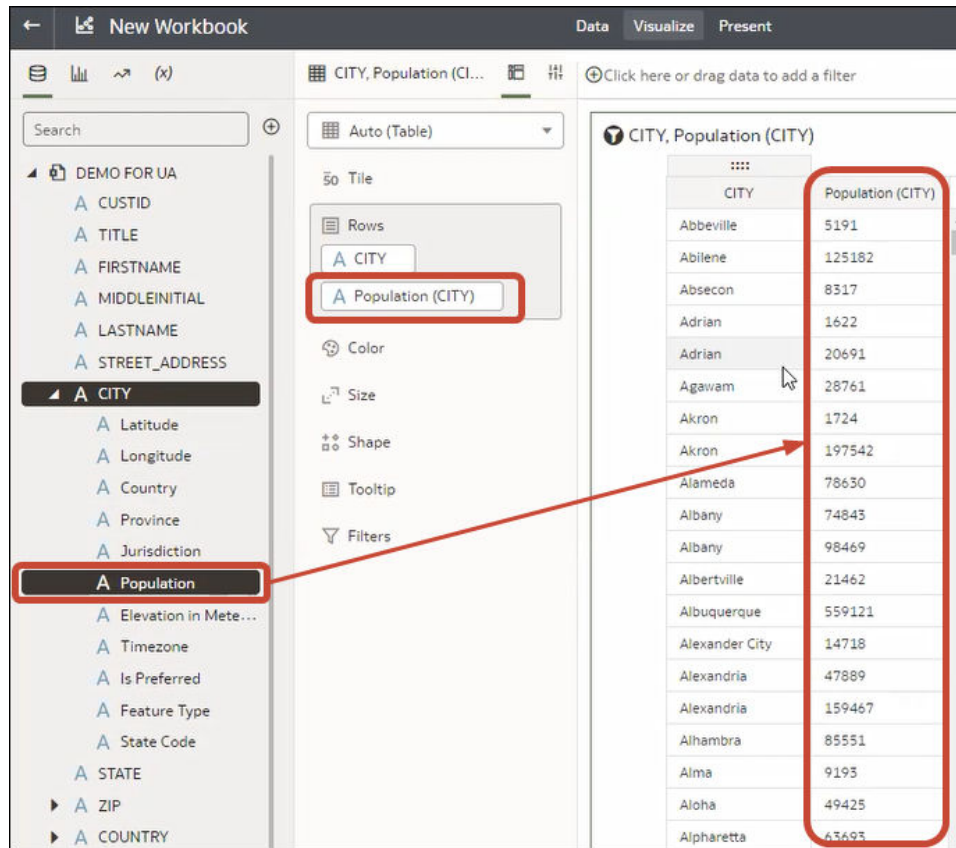
ワークブック・エディタでのナレッジ・エンリッチメントの有効化

Oracle Analytics はデータセットをプロファイリングし、データを他のソースからのデータで強化できるナレッジ・エンリッチメントを生成します。たとえば、データセットに都市リストの列が含まれている場合、ナレッジ・エンリッチメントは、都市の場所、人口および規模を提供できる場合があります。

ナレッジ・エンリッチメントは、通常デフォルトで有効化されていますが、ワークブック・エディタは、所有しているか編集権限のあるデータセットに関してはこれを有効化または無効化できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「データ」をクリックします。
2. 「データセット」タブをクリックします。
3. 編集するデータセットを見つけて、「アクション」をクリックし、「検査」をクリックします。
4. 「ナレッジ・エンリッチメントの有効化」を選択します。

ワークブック・エディタは、ナレッジ・エンリッチメントをデータ・パネルからビジュアライゼーションに直接追加できます。この例の都市列を含むデータセットでは、人口列をデータセットへのエンリッチメントとして追加できます。



データセットに対してナレッジ・エンリッチメントを有効化できない場合、グローバルに有効化するように管理者に依頼します(「コンソール」、「システム設定」、「表示」、「ワークブックでのエンリッチメントの有効化」の順に使用)。

第 III 部

データのビジュアル化

ここでは、データをビジュアル化する方法について説明します。

トピック:

- データのビジュアル化および分析
- データのフィルタ
- パラメータの作成および使用
- ビジュアライゼーションを強化するためのマップ背景およびマップ・レイヤーの適用
- データ・アクションの使用
- カスタム・データ・アクション・プラグインの作成
- その他の機能を使用したデータのビジュアル化
- プレゼンテーション・フローの作成
- Oracle Analytics 予測モデルおよび Oracle 機械学習モデルの使用
- インポート、エクスポートおよび共有

6

データのビジュアル化および分析

このトピックでは、データをビジュアル化および分析する方法について説明します。

📺 ビデオ

トピック:

- [ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)
- [ワークブックを編集モードで開く](#)
- [ワークブックのデータセットの操作](#)
- [データの追加によるビジュアライゼーションの構築](#)
- [ビジュアライゼーションの編集に関するヒント](#)
- [自動インサイトによるデータセットのビジュアライゼーションの推奨](#)
- [ビジュアライゼーション・タイプについて](#)
- [統計分析によるビジュアライゼーション内のデータの拡張](#)
- [言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションの追加](#)
- [スパーク・チャートを使用したトレンドの調査](#)
- [ビジュアライゼーションでのデータのソート](#)
- [編集を元に戻すおよびやり直し](#)
- [データがないビジュアライゼーションに関するカスタム・エラー・メッセージの作成](#)
- [ワークブックのデータのリフレッシュについて](#)
- [ワークブックのデータのリフレッシュ](#)
- [ワークブックでのデータ問合せの一時停止](#)
- [キャンバスのプロパティの使用](#)
- [ビジュアライゼーションのデータのコピーと貼付け](#)
- [ビジュアライゼーションまたはキャンバスのコピーと貼付け](#)
- [キャンバス上の複数のビジュアライゼーションの操作](#)
- [ビジュアライゼーション・タイプの変更](#)
- [ビジュアライゼーション・プロパティの調整](#)
- [ビジュアライゼーションへの色の適用](#)
- [条件付き書式を使用した重要なデータ・イベントの強調表示](#)
- [列の数値の書式設定](#)
- [ビジュアライゼーションの数値の書式設定](#)
- [ビジュアライゼーションの通貨記号の設定](#)

- ビジュアライゼーションへのノートの追加
- ビジュアライゼーションでのデータのソート、ドリルおよび選択
- 「マイ計算」の概要
- クラスタまたは外れ値に基づいた計算の作成
- Explain を使用したデータの分析
- ビジュアライゼーションのデータの問題に対する警告について
- ダッシュボードでのワークブックおよびビジュアライゼーションの埋込み
- カタログ・フォルダの作成
- 共有カタログ・フォルダへのワークブックの保存
- 共有カタログ・フォルダとワークブック権限の割当て
- 「開発者」オプション
- ワークブックを開くデフォルトの方法の構成
- ワークブック・サムネイルの設定
- ビジュアライゼーション・ロード・オーバーレイの不透明度の設定
- ワークブックのパーソナライズ(プレビュー)

ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始

ワークブックを開始するには、データセットを選択および追加し、列を「ビジュアライゼーション」ページのキャンバスにドラッグ・アンド・ドロップしてビジュアライゼーションを作成します。

グラフやチャートなどの分析コンテンツを格納および編成するためのワークブックを作成します。

チュートリアル

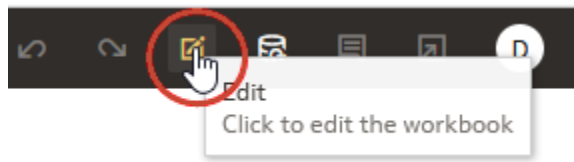
使用可能なデータセットについて確認する場合、データセットのリストを表示し、各データセットの詳細情報を見つけることができます。[データセットのリストおよびその情報の表示](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「ワークブック」をクリックします。
2. 「データの追加」ダイアログで、データセットをクリックして「ワークブックに追加」をクリックします。
3. 「データ・パネル」で、データ列を見つけて「ビジュアライゼーション」キャンバスにドラッグ・アンド・ドロップし、ビジュアライゼーションの作成を開始します。
4. 「保存」をクリックします。

ワークブックを編集モードで開く

ワークブックの作成者であれば、表示用に開いているワークブックを編集可能なワークブックに変更できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックをクリックして開きます。
2. ワークブックが表示用に開いている場合は、「編集」をクリックします。



ワークブックのデータセットの操作

このトピックでは、ワークブックのデータセットを処理するために必要な知識について説明します。

トピック:

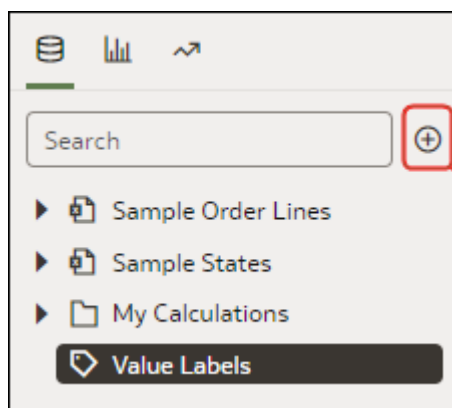
- [ワークブックへのデータセットの追加](#)
- [ワークブック内のデータセットの置換](#)
- [ワークブックからのデータセットの除去](#)
- [ワークブックのデータセットの変更](#)
- [データセットのブレンド](#)

ワークブックへのデータセットの追加

ワークブックは複数のデータセットを使用できます。

複数のデータセットを追加する場合、Oracle Analytics ではデータをブレンドします。デフォルトのブレンドを確認するか、データセット間のデータ・ブレンドを更新または追加できます。[データセットのブレンド](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「データ」パネルで、「追加」をクリックし、「データの追加」を選択します。



3. データセットを選択して、「**ワークブックに追加**」をクリックします。

ワークブック内のデータセットの置換

データセットを置換したときに、Oracle Analytics では、置換したデータセットの列を置換データセットに再度マップする方法を提示します。これらの提示されたマッピングを受け入れことも、更新することもできます。

たとえば、ワークブックのテスト・データセットを本番データセットに置換する場合があります。または、ワークブックとそのビジュアライゼーションをコピーして、重複したワークブックをテンプレートとして使用できます。重複したワークブックの名前を変更した後、別のデータセットを追加できます。

データセットを置換すると、指定したデータ・マッピングがワークブックに適用されます。たとえば、データ要素を「なし」にマップする場合は、ワークブックのビジュアライゼーション、計算およびフィルタから、その特定のデータが除去されます。

1. ホーム・ページで、テンプレートとして使用するワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアライゼーション」ページから「**データ**」をクリックします。
3. 「データ」ページで「**データ・ダイアグラム**」をクリックします。
4. 置換するデータセットを見つけ、「**アクション**」をクリックします。

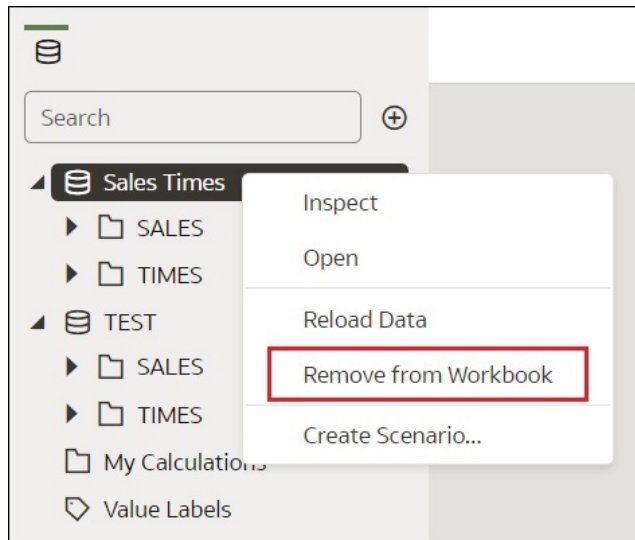


5. 「**データセットの置換**」を選択します。
6. 「データセットの置換」ダイアログで、置換データセットをクリックします。「**選択**」をクリックします。
7. ワークブックのビジュアライゼーション、計算およびフィルタの列マッピングをレビュー、更新および指定します。
8. 「**置換**」をクリックします。
9. オプション: データセット間のブレンドを追加した場合、**データ・ダイアグラム**でブレンドするデータセット間をクリックし、「データのブレンド」ダイアログで列の一致を追加します。

ワークブックからのデータセットの除去

ワークブックからデータセットを除去できます。これを行うと、すべてのデータセットの列がワークブックのビジュアライゼーション、フィルタおよび計算から除去されます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「**ビジュアライゼーション**」キャンバスで「**データ・パネル**」ペインに移動し、除去するデータセットを右クリックして「**ワークブックから除去**」を選択します。

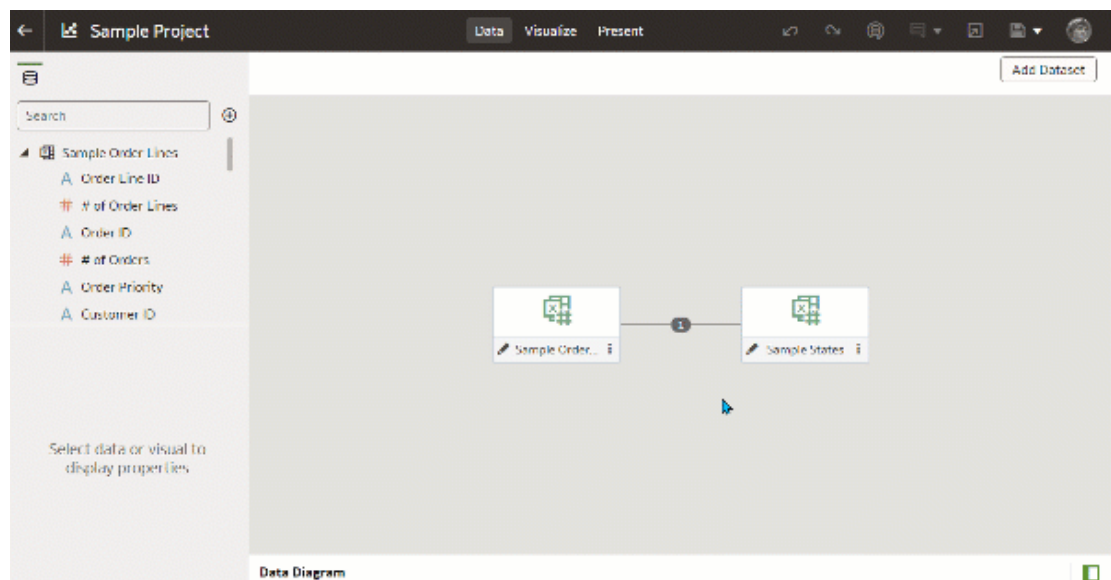


3. 「保存」をクリックします。

ワークブックのデータセットの変更

ワークブック・エディタの「データ」ページを使用して、データセット・エディタまたは変換エディタに移動し、ワークブックのデータセットを表示または変更できます。

データ・ダイアグラムでデータセットのアイコンを見つけて「編集」をクリックすると、新しいブラウザ・タブが開き、データセットの表示または変更使用するエディタが表示されます。ワークブック・エディタはブラウザ・タブで開いていて、保存したデータセットの変更がすぐに反映されます。



ノート:

データセットは複数のワークブックおよびデータ・フローで使用できます。データセットを変更すると、そのデータセットを使用するすべてのワークブックおよびデータ・フローが影響を受けます。

[データセット・エディタについて](#) および [データのエンリッチおよび変換](#) を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. ワークブック・エディタで、「**データ**」をクリックして「データ」ページに移動します。
3. データ・ダイアグラムでデータセットを見つけ、「**開く**」ボタンをクリックします。表示されるタブは、選択したデータセットによって異なります。
 - データセットが Oracle EPM Cloud、Oracle Essbase または Google Analytics 接続を使用している場合、変換エディタがタブで開きます。
 - データセットが複数の表をサポートしている接続を使用している場合(たとえば、Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse)、データセット・エディタがタブで開きます。
4. オプション: データセット・エディタが表示された場合、表示または変更する表のタブをクリックすると、変換エディタが表示されます。
5. データセットを変更して保存します。

データセットのブレンド

このトピックでは、ブレンド、およびワークブックのデータセットをブレンドする方法について説明します。

トピック:

- [ブレンドの理解](#)
- [ブレンド・データの一貫しない値について](#)
- [データセットのブレンド](#)
- [ビジュアライゼーションのデータ・ブレンドの変更](#)

ブレンドの理解

ワークブックに複数のデータセットを追加すると、Oracle Analytics では追加したデータセット間の列の照合が試みられます。この照合はブレンドと呼ばれます。

ビデオ

たとえば、データセット A に、データセット B の属性を拡張する新しいディメンションが含まれる場合があります。あるいは、データセット B に、データセット A にすでに存在するメジャーとともに使用可能な新しいファクトが含まれている場合があります。

ブレンドでは共通の名前を共有し、既存のデータセットの属性と互換性のあるデータ型を持つ外部ディメンションと自動的に照合されます。

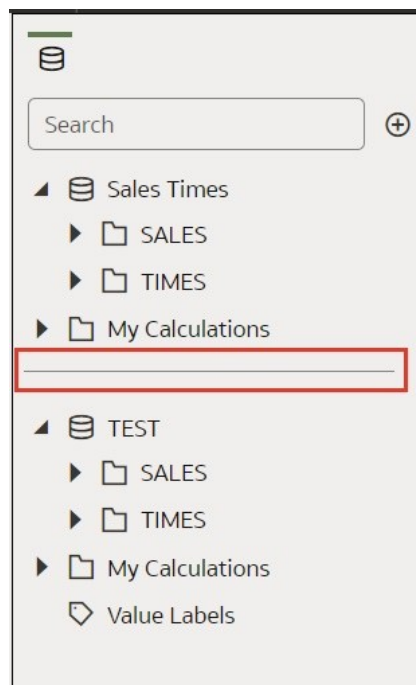
Blend Data

This connection will Add Facts

Match Delete All Matches

TEST	Sales Times	
TIME_ID	TIME_ID	×
DAY_NAME	DAY_NAME	×
WEEK_ENDING_DAY	WEEK_ENDING_DAY	×
CALENDAR_MONTH_DESC	CALENDAR_MONTH_DESC	×
FISCAL_MONTH_DESC	FISCAL_MONTH_DESC	×

ブレンドされていないデータセットは、ワークブックの「データ・パネル」の線で分割されます。



ブレンドされていないデータセットがワークブックに含まれる場合、データ要素とビジュアライゼーションの間に制限が存在します。たとえば、ブレンドされていない 2 つのデータセットがワークブックに含まれている場合は、一方のデータセットのフィルタ、ビジュアライゼーションまたは計算に、もう一方のデータセットのデータ要素を含めることはできません。

ブレンドの関係はワークブックではなく、表に格納されます。したがって、追加または除去した一致をブレンドすると、同じ表を使用する他のデータセットに影響を及ぼします。

Oracle Essbase または Oracle EPM Cloud 接続を使用するデータセットはブレンドできません。

ワークブックには、様々な接続およびスキーマから複数の表を含むデータセットが含まれている可能性があります。データセットに複数の表が含まれる場合、表に結合が含まれます。データセット表の結合の理解を参照してください。ワークブックでは、複数の表と結合を含むデータセットをブレンドできます。たとえば、ワークブックにクロス・ファクト分析を含める場合、複数の表を含むデータセットを追加およびブレンドできます。

ブレンド・データの一致しない値について

データセットに表示されるはずのデータ行が欠落することがあり、この場合、データ・ブレンドに使用するデータセットを指定する必要があります。

データ行の欠落は、ワークブックに属性および値が混在する 2 つのデータセットからのデータが含まれており、1 つのソースに一致した値が存在しているがもう 1 つのソースには存在していない場合に発生することがあります。

次の画像に示すように、行が若干異なる 2 つのデータセット (Source A および Source B) があるとします。Source A には IN-8 が含まれておらず、Source B には IN-7 が含まれていないことに注意してください。

T1 - Source A			T2 - Source B		
Inv#	Date	Rev	Inv#	Rep	Bonus
IN-1	1/1/2015	100.00	IN-1	Billie	1.00
IN-2	1/1/2015	200.00	IN-2	Joe	2.00
IN-3	1/1/2015	300.00	IN-3	Kim	3.00
IN-4	1/2/2015	400.00	IN-4	Billie	4.00
IN-5	1/2/2015	500.00	IN-5	Joe	5.00
IN-6	1/2/2015	600.00	IN-6	Kim	6.00
IN-7	1/3/2016	800.00	IN-8	Mika	8.00

Source A に対して「すべての行」データ・ブレンド・オプションを選択し、Source B に対して「一致した行」データ・ブレンド・オプションを選択した場合、次の結果が表示されます。IN-7 は Source B に存在しないため、結果には null の Rep と null の Bonus が含まれます。

T4 - SA All SB Match -- no Mika		T5 - SA All SB Match -- no Mika		T6 - SA All SB Match -- no Mika		
Date	Rep	Rev	Bonus	Date	Rev	Bonus
1/1/2015	Billie	100.00	1.00	1/1/2015	600.00	6.00
	Joe	200.00	2.00	1/2/2015	1,500.00	15.00
	Kim	300.00	3.00	1/3/2016	800.00	(null)
1/2/2015	Billie	400.00	4.00			
	Joe	500.00	5.00			
	Kim	600.00	6.00			
1/3/2016	(null)	800.00	(null)			

Source A に対して「一致した行」データ・ブレンド・オプションを選択し、Source B に対して「すべての行」データ・ブレンド・オプションを選択した場合、次の結果が表示されます。IN-8 は Source A に存在しないため、結果には null の Date と null の Revenue が含まれます。

The screenshot shows a software interface on the left with two data sources, Source A and Source B. Source A has columns: Inv#, Date, Rev, Bonus. Source B has columns: Inv#, Rep, Bonus. The interface shows 'My Calculations' and 'Value Labels' options. To the right are three tables, T7, T8, and T9, all titled 'T7 - SA Match SB All -- No 3Jan'.
 Table T7 (Source A selected):

Date	Rep	Rev	Bonus
1/1/2015	Billie	100.00	1.00
	Joe	200.00	2.00
	Kim	300.00	3.00
1/2/2015	Billie	400.00	4.00
	Joe	500.00	5.00
	Kim	600.00	6.00
(null)	Mika	(null)	8.00

 Table T8 (Source B selected):

Date	Rev	Bonus
1/1/2015	600.00	6.00
1/2/2015	1,500.00	15.00
(null)	(null)	8.00

 Table T9 (Both selected):

Rep	Rev	Bonus
Billie	500.00	5.00
Joe	700.00	7.00
Kim	900.00	9.00
Mika	(null)	8.00

 In all tables, the null values are highlighted with red boxes.

Source A のビジュアライゼーションには属性として Date が含まれ、Source B には属性として Rep が含まれ、一致する列は Inv# です。ディメンション・ルールのもとでは、一致列も使用しないかぎり、他方の表からこれらの属性をメジャーとともに使用することはできません。

属性とメジャーの両方を含む表のブレンドの設定が 2 つあります。これらは、ビジュアライゼーションで使用されている列に基づいて、各ビジュアライゼーション内で個別に設定されます。設定は「すべての行」および「一致した行」であり、ビジュアル化するデータを返すときにシステムで使用されるソース行を表します。

システムは、次のルールに従ってデータ・ブレンドを自動的に割り当てます。

- ビジュアライゼーションに一致列が含まれている場合、一致列のあるソースが「すべての行」に設定されます。
- ビジュアライゼーションに属性が含まれている場合、そのソースは「すべての行」に設定され、他のソースは「一致した行」に設定されます。
- ビジュアライゼーション内の属性が同じソースから取得されている場合、そのソースは「すべての行」に設定され、他のソースは「一致した行」に設定されます。
- 属性が複数のソースから取得されている場合、ワークブックの要素パネルの最初にリストされているソースは「すべての行」に設定され、他のソースは「一致した行」に設定されます。

データセットのブレンド

ワークブックに複数のデータセットが含まれている場合、あるデータセットのデータを別のデータセットのデータとブレンドできます。

ワークブックに複数のデータセットを追加すると、追加されたデータとの一致の検出が試みられます。共通の名前を共有し、既存のデータセットの属性と互換性のあるデータ型を持つ外部ディメンションが自動的に照合されます。ブレンドの関係はワークブックではなく、表に格納されます。したがって、追加または除去した一致をブレンドすると、同じ表を使用する他のデータセットに影響を及ぼします。

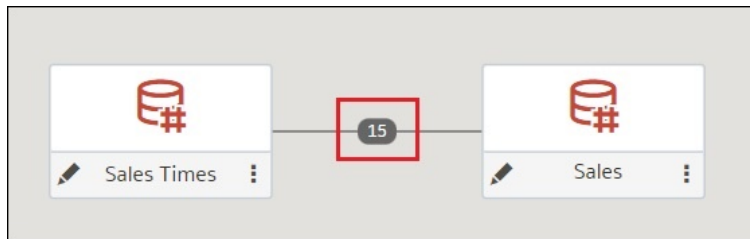
[ブレンドについて](#)を参照してください。

Oracle Essbase または Oracle EPM Cloud 接続を使用するデータセットはブレンドできません。

ノート:

データセットは、様々な接続およびスキーマから表を含めることができます。これらのデータセットは、データセット・エディタで定義される結合を使用します。ワークブックでブレンドを削減または削除するために、可能な場合、複数の表を含むデータセットを作成し、結合を使用することをお勧めします。[接続からのデータセットの作成](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 別のデータセットをワークブックに追加するには、「**データ**」をクリックし、「データ」ページで「データ・パネル」に移動し、「**追加**」(+)、「**データセットの追加**」の順にクリックします。
3. 「データセットの追加」ダイアログで、データセットを選択し、「ワークブックに追加」をクリックします。
4. 「データ」ページで**データ・ダイアグラム**に移動して、ブレンドするデータセットを見つけます。
5. データセット・アイコン間の数字をクリックします。



6. オプション: 列の照合を変更するには、列の名前をクリックして別の列を選択します。
列同士が同じ名前と同じデータ型の場合は、一致する可能性があるともみなされません。設定をカスタマイズして、名前が同じでなくても明示的に選択することによって1つの列がもう1つの列と一致するように指定できます。選択できるのは、データ型が一致する列のみです。
7. オプション: 「**別の照合の追加**」をクリックして、結合する列を表で選択します。
8. オプション: 初めてアップロードするメジャーの場合は、*合計*や*平均*などの集計タイプを指定します。
9. 「**OK**」をクリックします。

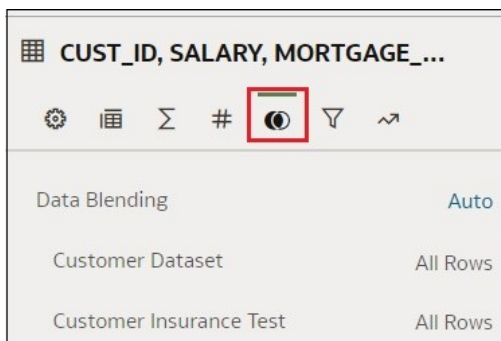
ビジュアライゼーションのデータ・ブレンドの変更

ビジュアライゼーションのプロパティを変更して、ワークブックのデータ・ブレンド設定をオーバーライドできます。

Oracle Essbase または Oracle EPM Cloud 接続を使用するデータセットは、ブレンドに使用できません。

[ブレンドの理解](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. ワークブックでビジュアライゼーションを選択して、プロパティ・パネルで「データセット」をクリックします。



3. デフォルトのブレンドを変更するには、「データ・ブレンド」をクリックして「自動」または「カスタム」のいずれかを選択します。
「カスタム」を選択すると、ブレンドを「すべての行」または「一致した行」のいずれかに設定できます。
 - 少なくとも 1 つのソースを「すべての行」に割り当てる必要があります。
 - 両方のソースが「すべての行」の場合、表はシステムによって混在のないディメンションであると見なされます。
 - 両方のソースを「一致した行」に割り当てることはできません。

データの追加によるビジュアライゼーションの構築

このトピックでは、ビジュアライゼーションにデータを追加する方法について説明します。

トピック:

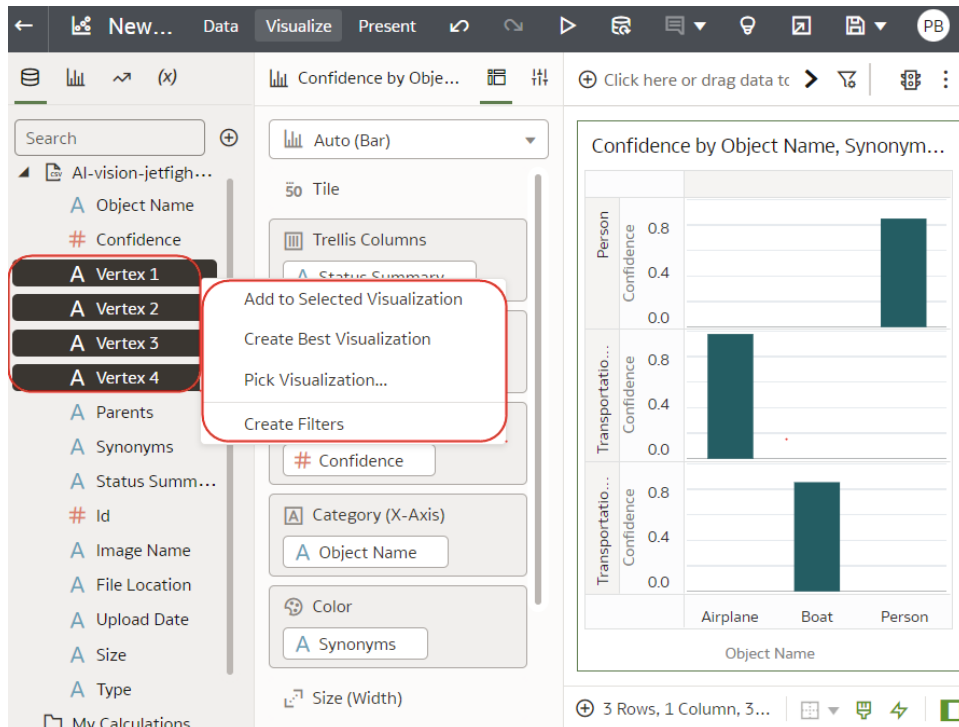
- [選択したデータ要素に対する最善のビジュアライゼーションの作成](#)
- [ビジュアライゼーションへのデータの追加](#)
- [別のビジュアライゼーションからのビジュアライゼーションの作成](#)
- [ビジュアライゼーションのツールチップの変更](#)
- [ワークブック・エディタでのナレッジ・エンリッチメントの有効化](#)

選択されたデータ要素に最適なビジュアライゼーションの作成

データ・パネルのデータ要素を選択すると、Oracle Analytics によって自動的に最善のビジュアライゼーションが作成されます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。

2. データ・パネルで1つ以上のデータ要素を選択して、ビジュアル化するデータを選択し、右クリックしてから「**最良のビジュアライゼーションの作成**」をクリックします。



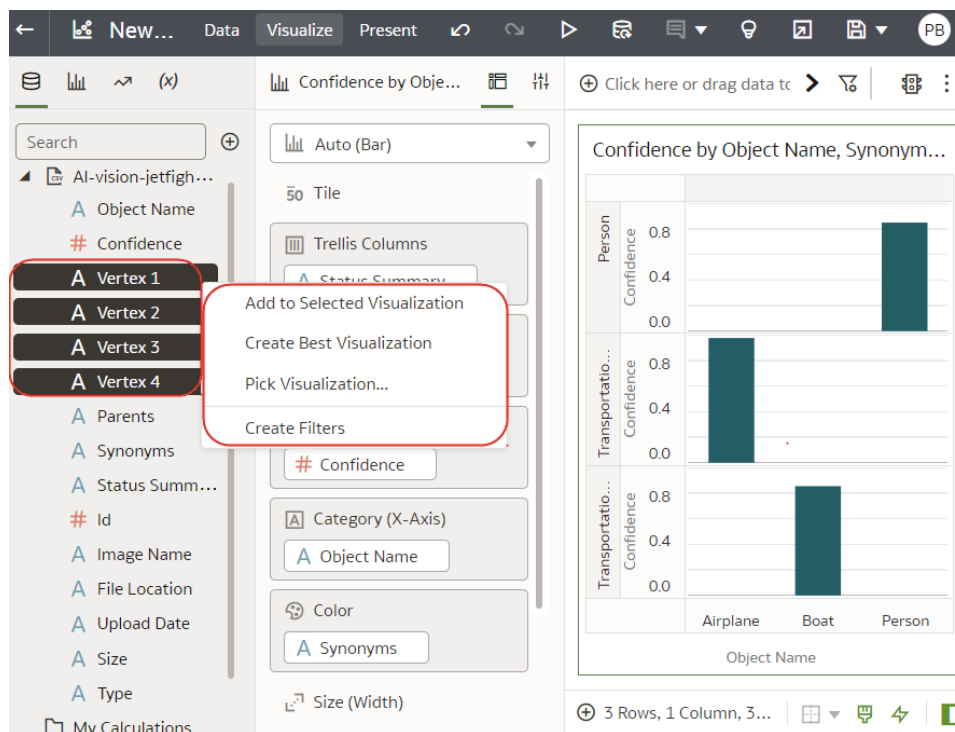
ビジュアライゼーションへのデータの追加

ワークブックのデータセットを選択した後、メジャーや属性などのデータ要素をビジュアライゼーションに追加し始めることができます。

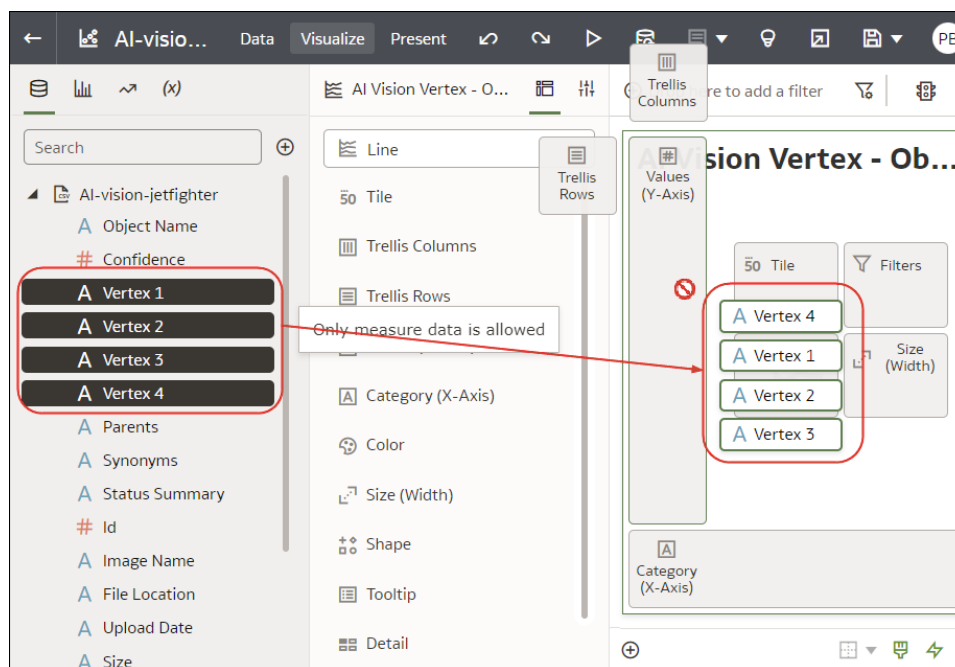
ビジュアライゼーションをまだ作成していない場合、作成する必要があります。[ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)を参照してください。

データセットから互換性のあるデータ要素を選択し、「ビジュアル化」キャンパスの文法パネルにドロップできます。選択に基づいて、キャンパスにビジュアライゼーションが作成されます。文法パネルには、「列」、「行」、「値」、「カテゴリ」などのセクションがあります。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. ワークブックを作成した場合は、ワークブックにデータセットを追加します。
3. 「データ・パネル」で1つ以上のデータ要素を選択してから次のいずれかの方法を使用することにより、ビジュアル化するデータを選択します：
 - 右クリックして、「**選択済ビジュアライゼーションに追加**」をクリックします。

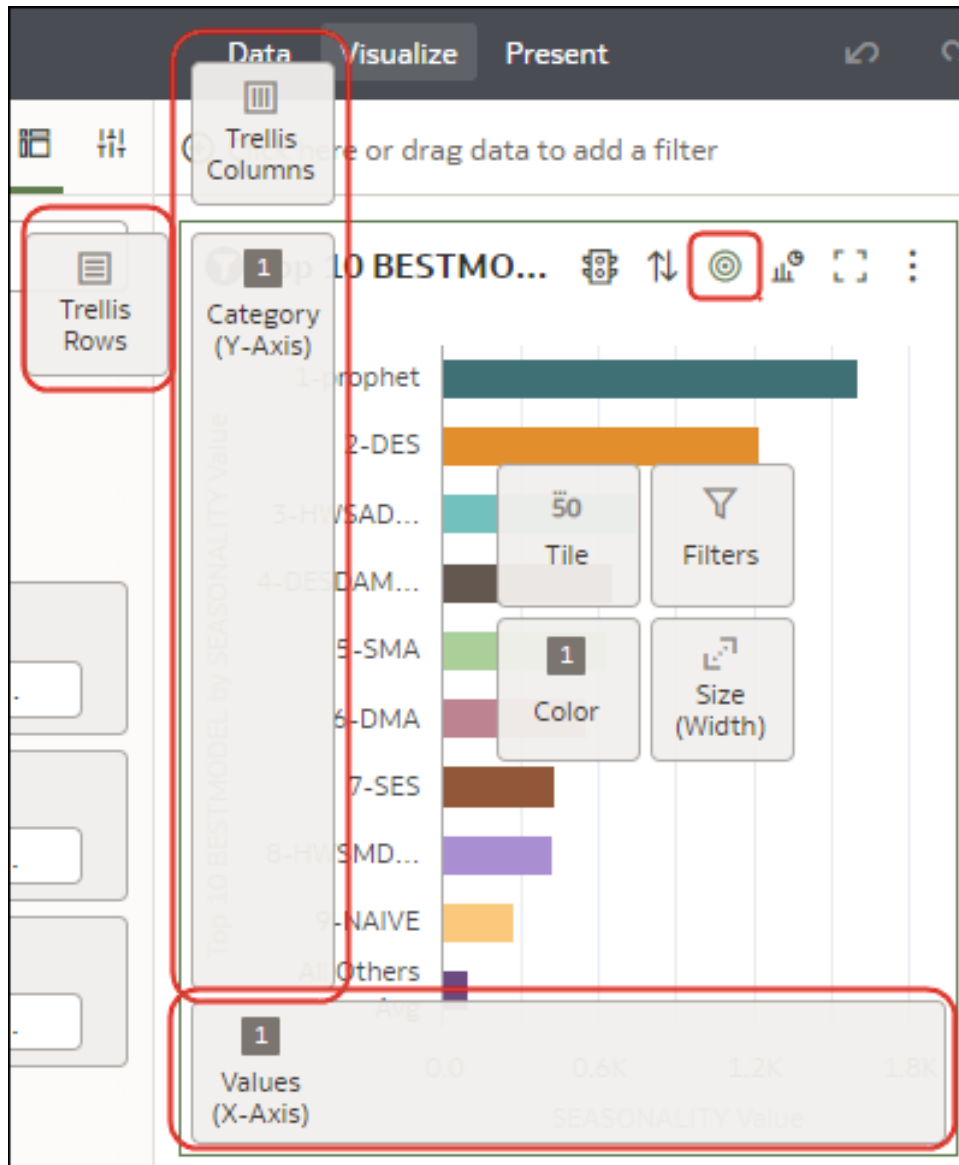


- 右クリックして「ビジュアライゼーションの選択」を選択し、ビジュアライゼーション・タイプ(表やヒート・マップなど)を選択します。
- それらをビジュアライゼーション・キャンバスまたは「文法パネル」にドラッグ・アンド・ドロップします。



データの追加に関するヒント

- ビジュアライゼーションのコンポーネントを理解しやすくするために、ビジュアライゼーションにカーソルを合せ、「割当ての表示」をクリックして、ビジュアライゼーション・コンポーネント(チャートのX軸やY軸など)に注釈を付けます。



- 「文法パネル」を使用して、ビジュアライゼーション・コンポーネント(追加、除去、順序変更など)を構成します。

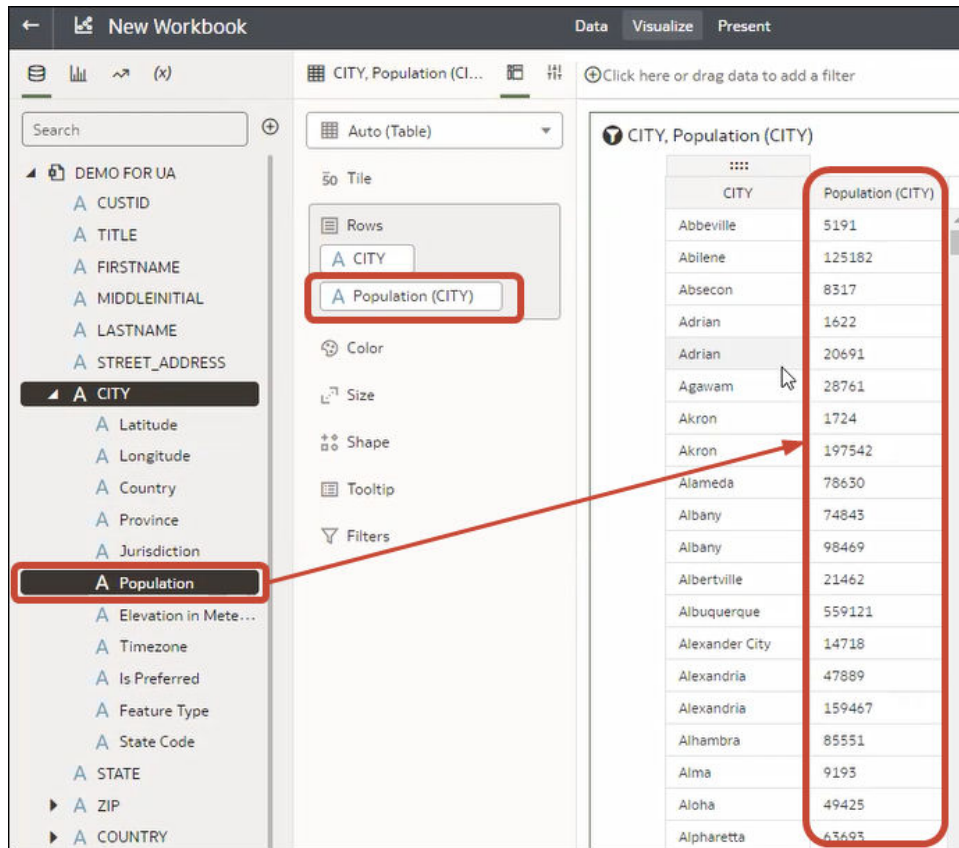
The screenshot shows the Oracle Analytics interface. On the left, a search bar is above a list of fields from the 'Customer Dataset'. The 'CREDIT_BALANCE' field is highlighted with a dark background. Below this is a table with details for 'CREDIT_BALANCE':

Name	CREDIT_BALA...
Treat As	Measure
Data Type	Number
Aggregation	Sum

On the right, a configuration panel is highlighted with a red border. It contains the following elements:

- A header: '+ Click here or drag data to'
- A chart type dropdown menu set to 'Bar'.
- 'Trellis Columns' and 'Trellis Rows' options.
- 'Values (Y-Axis)' section with a dropdown menu showing '# CREDIT_BALA...'.
- 'Category (X-Axis)' section with a dropdown menu showing 'A MONTHLY_CH...'.
- 'Color' option.
- 'Size (Width)' option.
- 'Tooltip' option.
- 'Detail' option.
- 'Filters' option.

- データセットがナレッジ・エンリッチメントで強化されている場合、データセット内の標準のデータ要素と同じように表示されている要素ツリー内にナレッジ・エンリッチメントが表示されます。この例では、Oracle Analytics 管理者が人口および他の都市関連データを Oracle Analytics に追加しています。CITY データセットに基づいてワークブックを作成する場合、人口およびその他のデータ要素をビジュアライゼーションに直接追加できません。



ビジュアライゼーションを別のビジュアライゼーションから作成

ビジュアライゼーションは、あるビジュアライゼーションから新しいビジュアライゼーションに列をドラッグ・アンド・ドロップすることによって作成できます。

この方法を使用すると、既存のビジュアライゼーションから直接列を選択することで、既存のビジュアライゼーションに基づいて新しいビジュアライゼーションをモデリングするのに役立ちます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「編集」をクリックして、作成者モードでワークブックを入力します。
3. ビジュアライゼーションを作成するためのソースとして使用するビジュアライゼーションを選択します。
4. 「文法パネル」上部の「文法」をクリックして、「文法」ペインを表示します。
5. 「文法」ペインの列をビジュアライゼーション間のエッジにドラッグ・アンド・ドロップして、キャンバスにビジュアライゼーションを作成します。
6. ソース・ビジュアライゼーションを選択し、追加の列を新しいビジュアライゼーションにドラッグ・アンド・ドロップします。

ビジュアライゼーションのツールチップの変更

ビジュアライゼーションでデータ・ポイントにカーソルを合わせると、ツールチップが表示され、データ・ポイントに関する特定の情報が提供されます。すべてのツールチップを表示するか、文法パネルの「ツールチップ」セクションに含まれるメジャーのみを表示するかを選択できます。

たとえば、南北アメリカ地域の国の収益を示す単純な棒グラフのビジュアライゼーションを作成すると、ツールチップには地域の名前、国の名前、および正確な収益金額が表示されます。文法パネルの「ツールチップ」セクションにターゲット収益を追加すると、ターゲット収益金額がツールチップに表示され、ユーザーは実際の収益をターゲット収益と簡単に比較できます。ツールチップにターゲット収益金額のみを含める場合は、「一般プロパティ」ページの「**ツールチップ**」フィールドを「**ツールチップ文法のみ**」に設定します。

次の制限に注意してください。

- 文法パネルの「ツールチップ」セクションにはメジャー列のみをドラッグ・アンド・ドロップできます。
 - 文法パネルの「ツールチップ」セクションは、すべてのビジュアライゼーション・タイプに表示されるわけではありません。
1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
 2. キャンバスでビジュアライゼーションを選択します。
 3. 「データ・パネル」から文法パネルの「ツールチップ」セクションに1つ以上のメジャー列をドラッグ・アンド・ドロップします。

ビジュアライゼーションでデータ・ポイントにマウス・ポインタを合わせると、ツールチップが表示されます。デフォルトで、「**ツールチップ**」フィールドは「**すべてのデータ**」に設定されるため、ツールチップにはビジュアライゼーションに含まれるすべての列のデータ・ポイント値が含まれます。「ツールチップ」セクションに追加した列のデータ値は、ツールチップの下部に表示されます。

4. オプション: 「**ツールチップ**」フィールドを使用して、必要なデータ値のみを表示したり、ツールチップをオフにします。
 - 「ツールチップ」セクションにドラッグした列のみのデータ値をツールチップに表示する場合は、「**ツールチップ**」フィールドを「**ツールチップ文法のみ**」に設定します。
 - ツールチップを表示しない場合は、「ツールチップ」セクションに列がないことを確認し、「**ツールチップ**」フィールドを「**ツールチップ文法のみ**」に設定します。

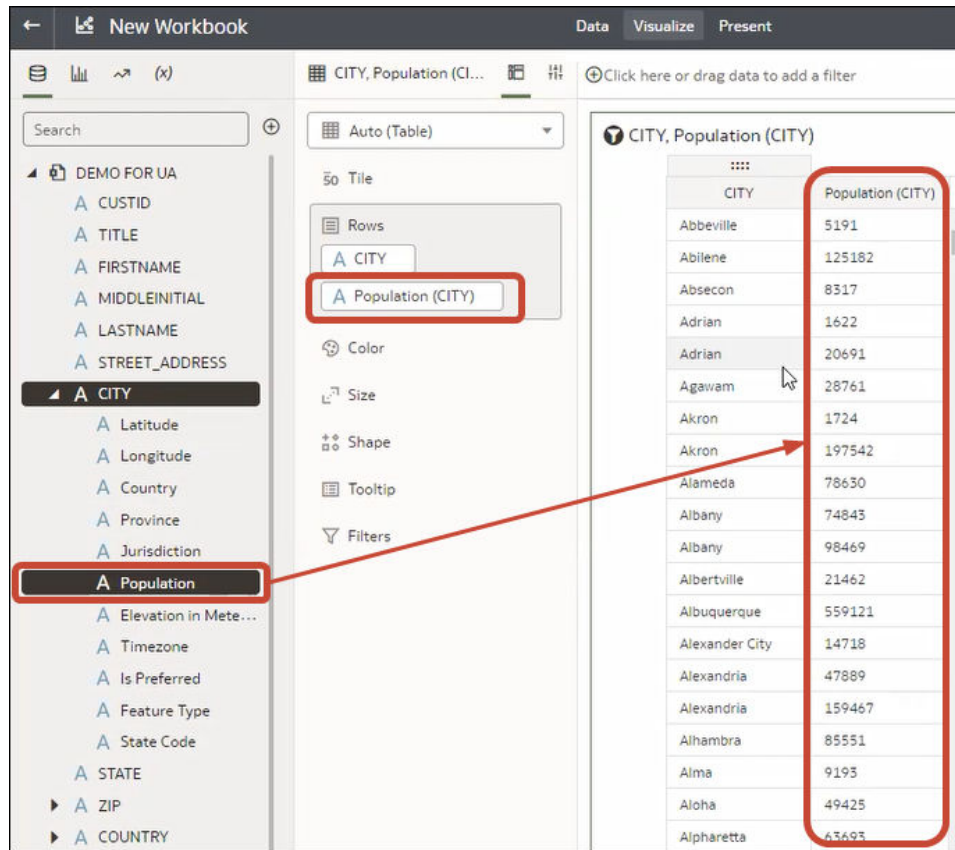
ワークブック・エディタでのナレッジ・エンリッチメントの使用

ナレッジ・エンリッチメントにより、他のソースからのデータでビジュアライゼーション内のデータを強化できます。たとえば、都市のリストがある場合、ナレッジ・エンリッチメントは、都市の人口、規模、場所に関する情報を提供できる場合があります。

Oracle Analytics のシステム・ナレッジおよびカスタム・ナレッジのアップデートをワークブックで直接利用して、強力なデータリッチ・ビジュアライゼーションを作成します。

ワークブック・エディタのデータ・パネルで、データセット内の標準のデータ要素と同じように表示されている要素ツリー内にナレッジ・エンリッチメントが表示されます。この例では、ワークブック・エディタは、ナレッジ・エンリッチメント"人口"およびその他の都市関連

データをワークブックに追加できます。CITYを含むデータセットに基づいてワークブックを作成する場合、人口およびその他のデータ要素をビジュアライゼーションに直接追加できます。



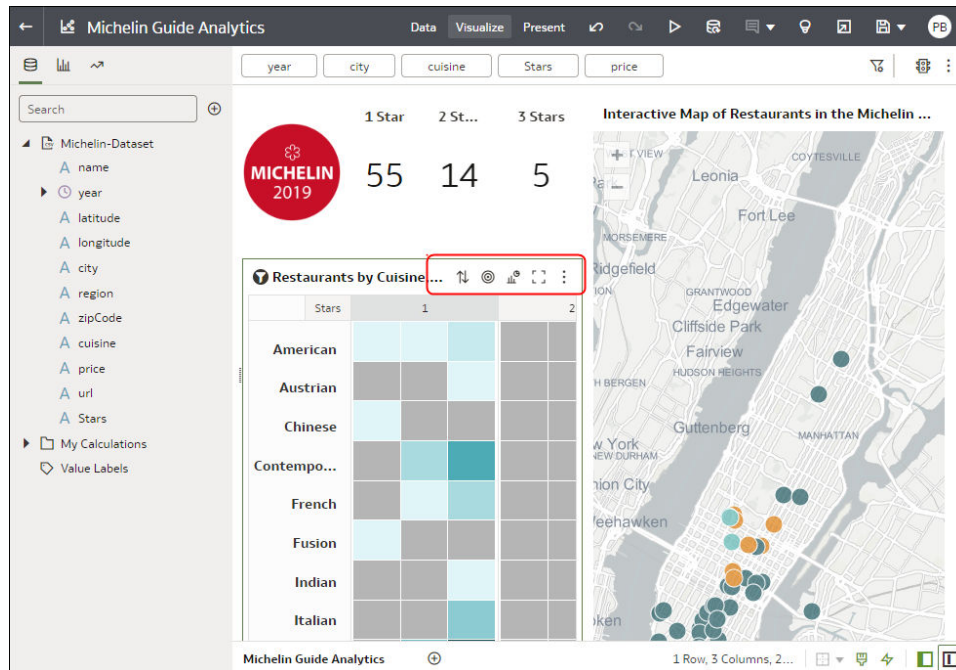
ナレッジ・エンリッチメントは、通常デフォルトで有効化されていますが、データセットを所有しているか、その編集権限を保有している場合、その有効化または無効化が可能です。ワークブック・エディタでのナレッジ・エンリッチメントの有効化を参照してください。

ビジュアライゼーションの編集に関するヒント

これから示すヒントは、ビジュアライゼーションを使用する際に、生産性を高める助けとなります。

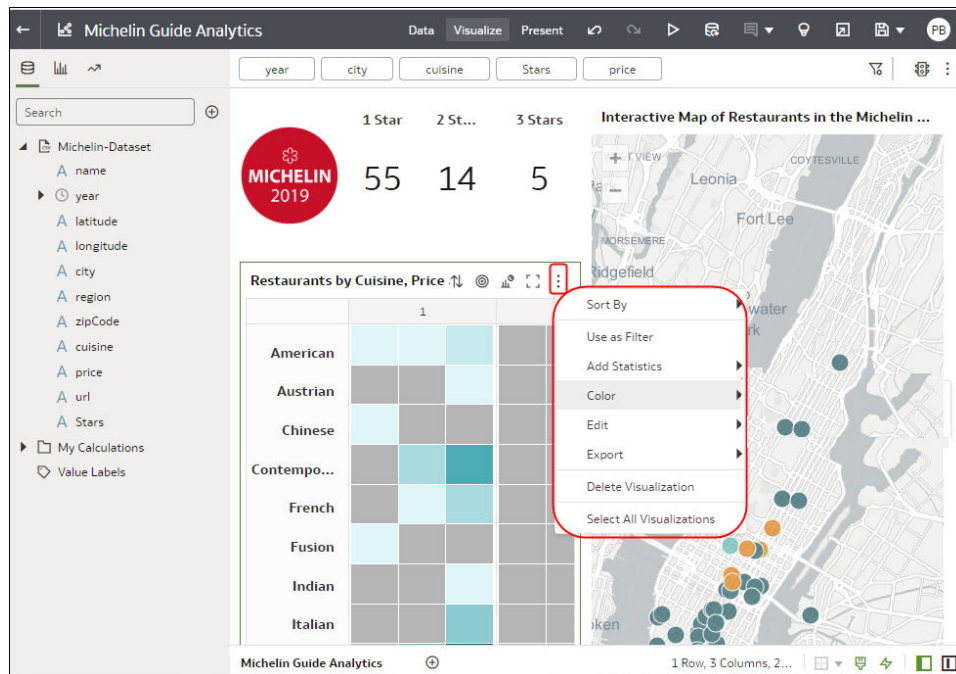
ビジュアライゼーション・オプションへのアクセス

ビジュアライゼーション・ツールバーにより、条件付き書式設定、データのソート、その他のオプションおよび追加オプションのメニューに迅速にアクセスできます。



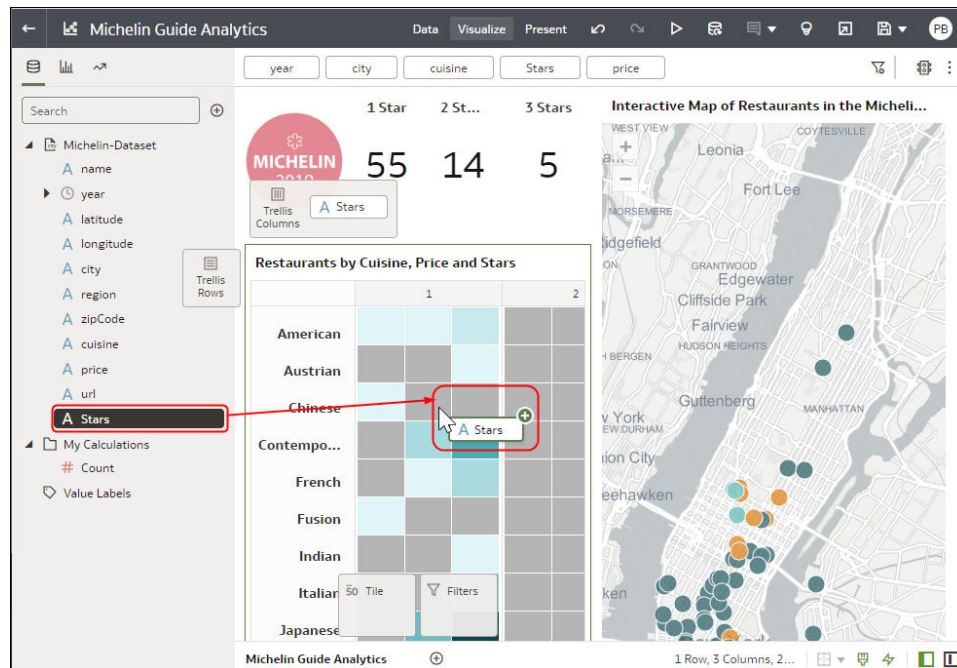
ビジュアライゼーション・メニューへのアクセス

ビジュアライゼーションにカーソルを合せ、「メニュー」をクリックすると、より包括的なビジュアライゼーション・メニュー(ソート基準、フィルタとして使用、統計の追加、色、編集、エクスポートまたはビジュアライゼーションの削除など)が表示されます。



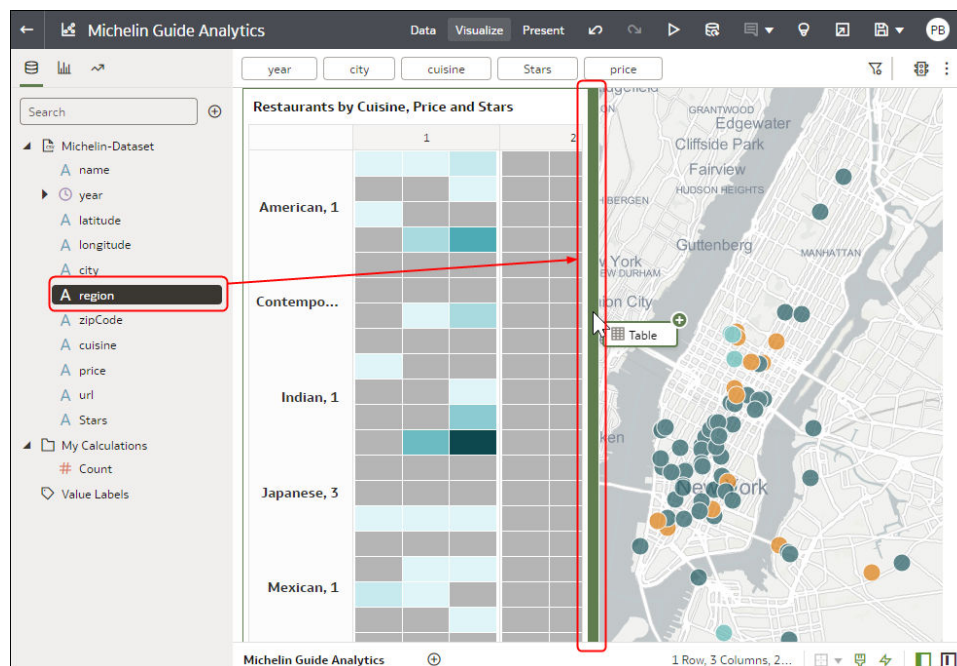
既存のビジュアライゼーションへのフィールドの追加

有効なドロップ・ゾーンを示す緑の十字がカーソルに表示されるまで、データ・パネルからビジュアライゼーションにアイテムをドラッグします。



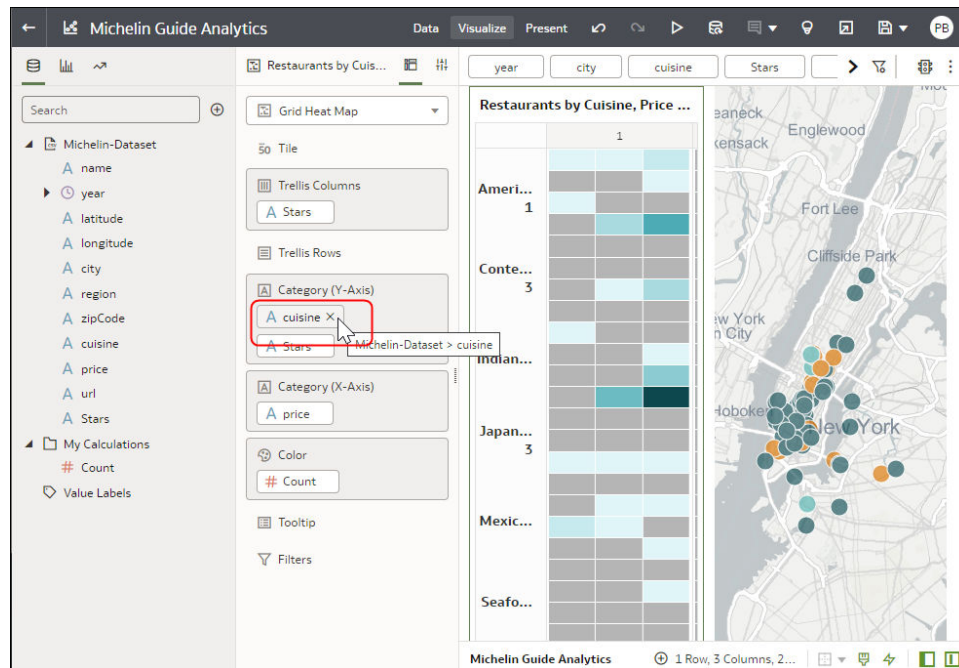
新規ビジュアライゼーションへのフィールドの追加

有効なドロップ・ゾーンを示す緑の棒がカーソルに表示されるまで、データ・パネルからビジュアライゼーションにアイテムをドラッグします。



ビジュアライゼーションからのフィールドの削除

文法パネルを表示し、フィールドにカーソルを合わせて、Xをクリックします。



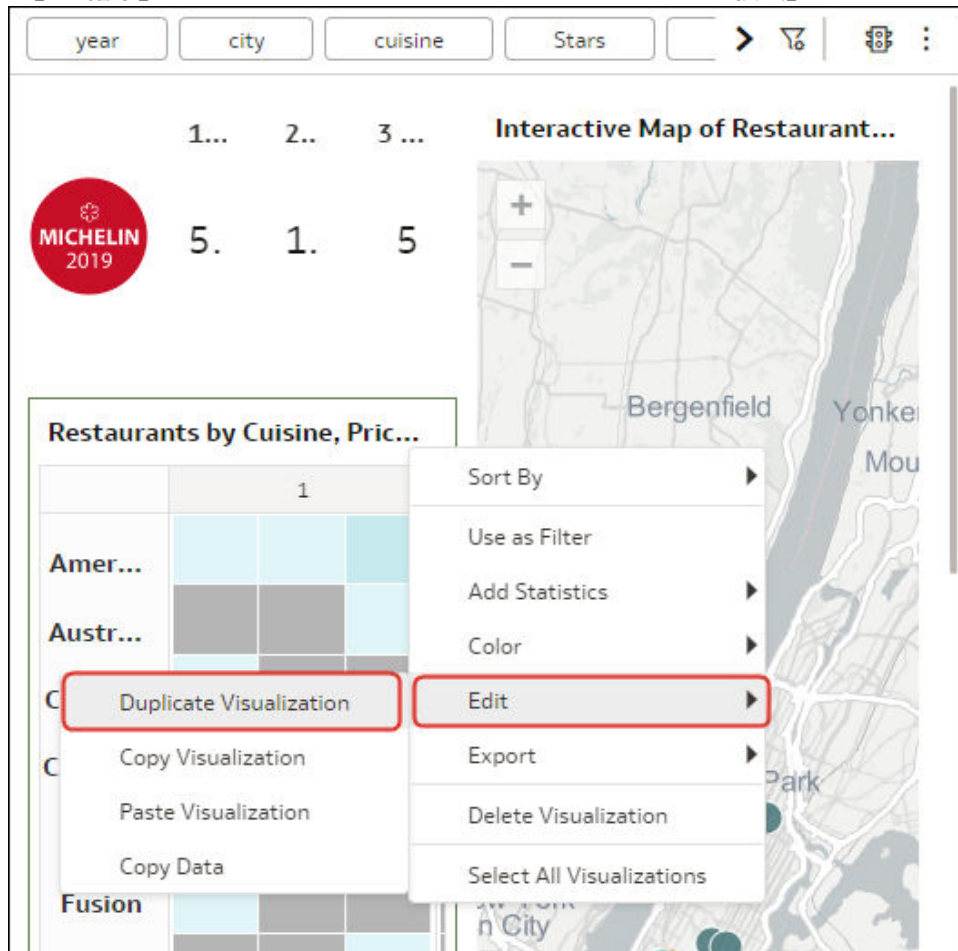
ビジュアライゼーションの複製

ビジュアライゼーションを複製して、編集用のコピーを作成したり、バックアップ用のコピーを作成したりします。

ビジュアライゼーションを最初から作成するより、既存のビジュアライゼーションをコピーした方が速い場合があります。

1. コピーするビジュアライゼーションを含むワークブックを開きます。

- 「ビジュアル化」ペインで、ビジュアライゼーションにカーソルを合せ、「メニュー」、「編集」の順にクリックし、「ビジュアライゼーションの複製」を選択します。

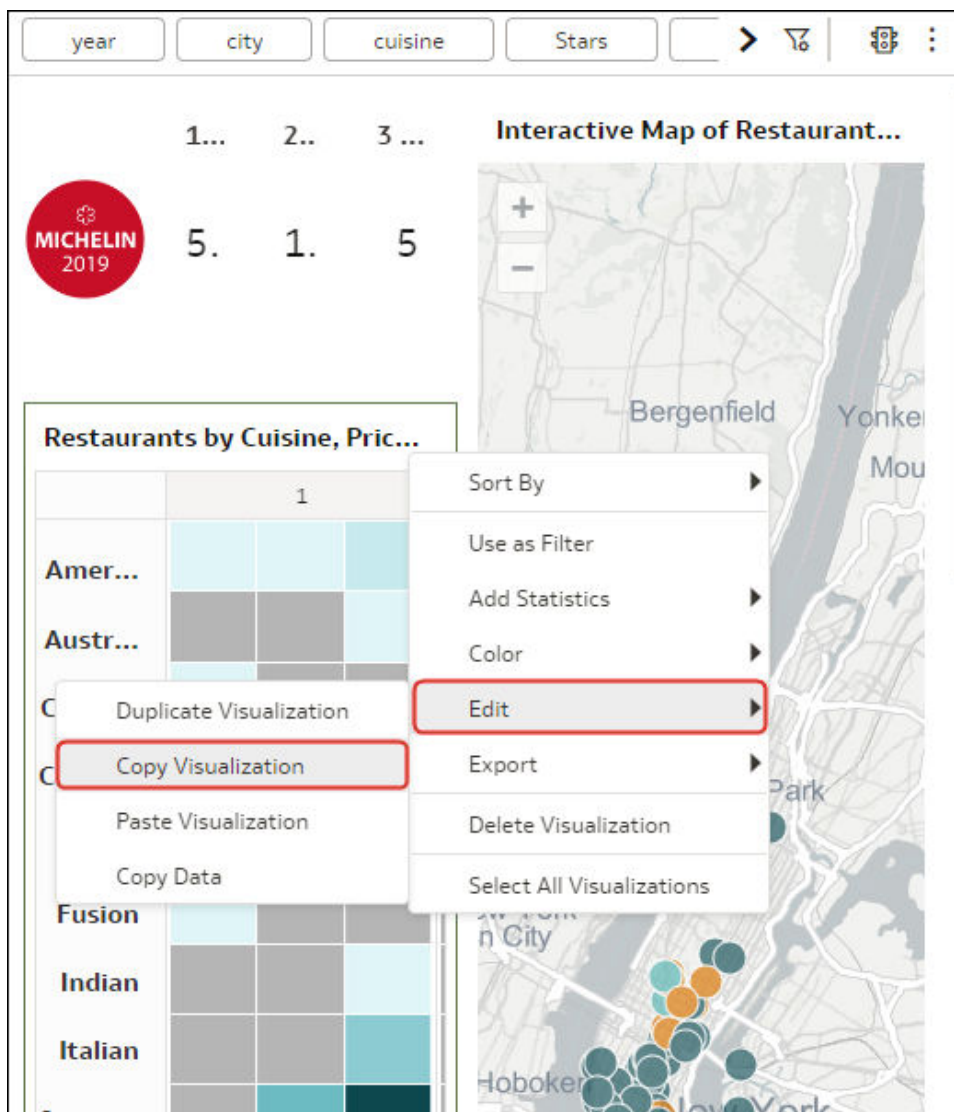


元のビジュアライゼーションの右側に、ビジュアライゼーションのコピーが作成され、すぐに編集できるようフォーカスがある状態になっています。

別のワークブックからのビジュアライゼーションのコピー

あるワークブックから別のワークブックにビジュアライゼーションをコピーして、分析コンテンツを共有します。ビジュアライゼーションをコピーすると、そのビジュアライゼーションで使用されているデータセットもコピーされます。

- コピーするビジュアライゼーションを含むワークブックを開きます。
- 「ビジュアル化」ペインで、ビジュアライゼーションにカーソルを合せ、「メニュー」、「編集」、「ビジュアライゼーションのコピー」の順にクリックします。



3. ワークブックを作成するか、または開きます
4. 「ビジュアライゼーション」ペインで、キャンバスにカーソルを合わせて右クリックし、「編集」、「ビジュアライゼーションの貼付け」の順にクリックします。
そのビジュアライゼーションで使用されているデータセットも、ワークブックにコピーされます。

自動インサイトによるデータセットのビジュアライゼーションの推奨

このトピックでは、自動インサイトを使用するために必要な知識について説明します。

トピック:

- [自動インサイトとは](#)
- [データセットと自動インサイトについて](#)

- 自動インサイトで生成されたビジュアライゼーションの検索と選択
- 自動インサイトでプロファイリングする列の選択
- 自動インサイトで表示されるビジュアライゼーション・タイプの指定
- データセットのインサイトのオンまたはオフ

自動インサイトとは

自動インサイトは、Oracle Analytics で生成されるお薦めのビジュアライゼーションです。ユーザーが行うのは、それらをワークブックに追加することだけです。

自動インサイトは、データセットのメジャー、属性および関係に基づいて、最善のビジュアライゼーション(インサイト)を推奨することで、データ・サイエンティストが行う難しい作業をユーザーにかわって行います。ユーザーは、推奨されたビジュアライゼーションをワークブックに追加すれば、データの最も有用な情報をすぐに得られます。

インサイトの結果は、Oracle Analytics で分析する列を指定することや、自動インサイトで表示するビジュアライゼーション・タイプを指定することでカスタマイズできます。

自動インサイトでは、生成するすべてのビジュアライゼーションに自然言語サマリーも用意されます。このサマリーでは、属性とメジャーの関係、およびその他の対象点を説明しています。

データセットと自動インサイトについて

データセットを作成する際には、Oracle Analytics でデータがプロファイルされ、より効果的なデータの分析に役立つインサイトが生成されます。

最大データセット・サイズ

Oracle Analytics は、最大 3 億のセルが含まれるデータセットに対してインサイトを生成でき、セルの数は行数に列数を乗算して算出されます。

サポートされているデータセット・タイプ

Oracle Analytics は、ほとんどのデータセット・タイプに対してインサイトを生成します。次に例外を示します:

- Essbase、Oracle Planning and Budgeting Cloud Service、分析ビューなどの多次元ソース。
- Oracle 以外のデータベースに基づくデータセット。

自動インサイトで生成されたビジュアライゼーションの検索と選択

自動インサイトで生成されたビジュアライゼーションを確認し、キャンバスに追加するビジュアライゼーションを選択できます。

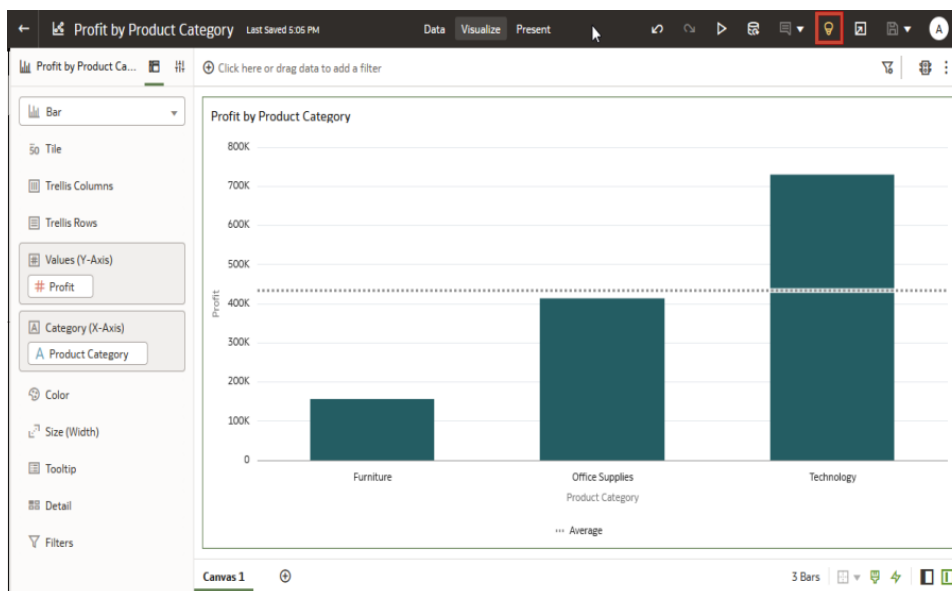
ワークブックを作成するか開くと、Oracle Analytics でデータセットのメジャー、属性、およびこれらのデータ要素間の関係の確認が行われ、インサイトが確定されている間、自動インサイトのアイコンは白です。Oracle Analytics によるインサイトの生成

が終わると、自動インサイトのアイコンが黄色になり、推奨されるビジュアライゼーションとサマリーが表示されます。

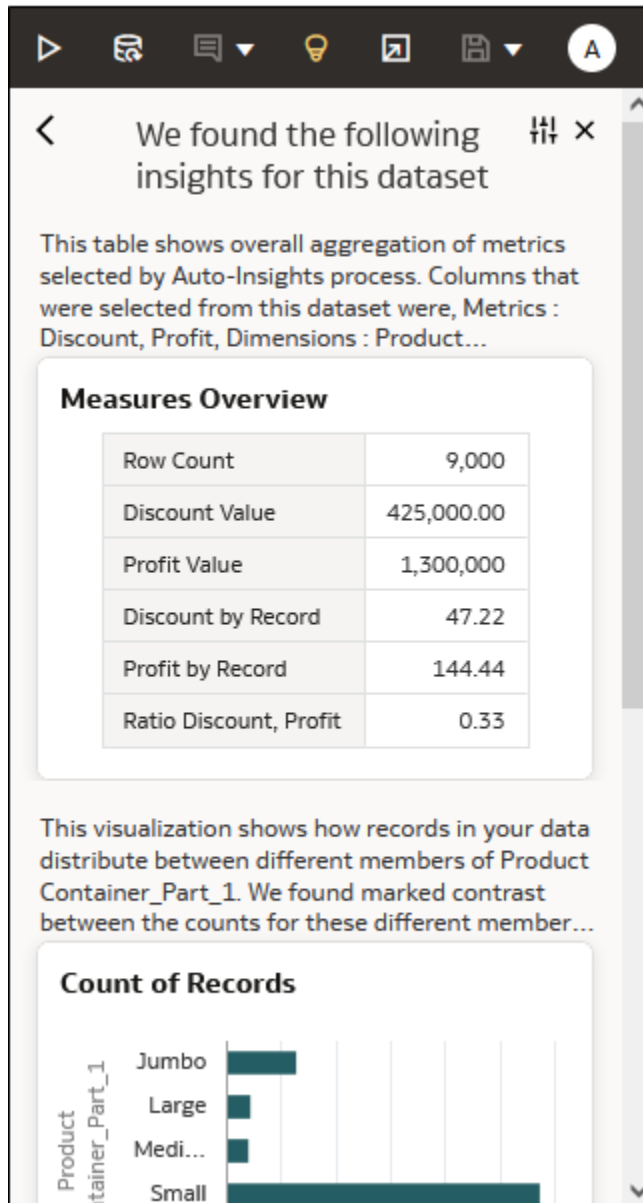
データセットのインサイトを生成するには、データセットの自動インサイトを有効化する必要があります。[データセットのインサイトのオンまたはオフ](#)を参照してください。

1. ワークブックを作成するか開き、「ビジュアル化」パネルを表示します。

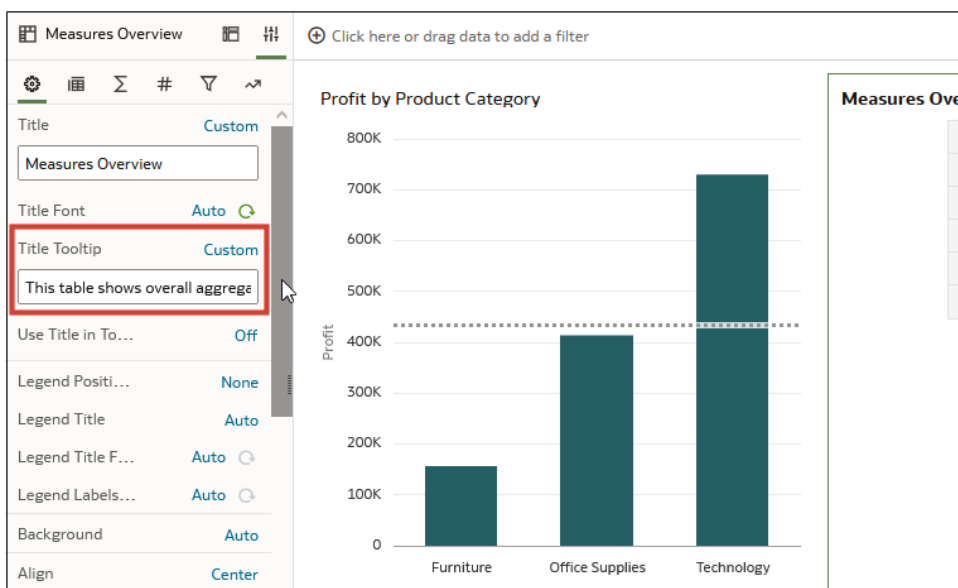
2. ツールバーで、「**自動インサイト**」をクリックします 



3. 「**自動インサイト**」パネルで、ワークブックに追加するビジュアライゼーションにカーソルを合せて+をクリックし、ワークブック・キャンバスに追加します。



- オプション: ビジュアライゼーションの文法パネルで「プロパティ」をクリックし、「タイトル・ツールチップ」フィールドで、ビジュアライゼーションの自然言語サマリーを確認します。



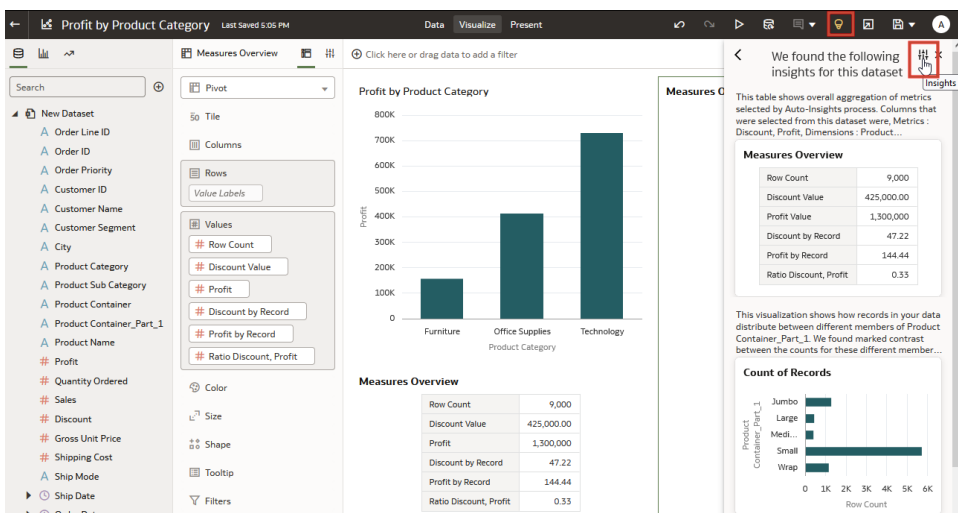
5. 「保存」をクリックします。

自動インサイトでプロファイリングする列の選択

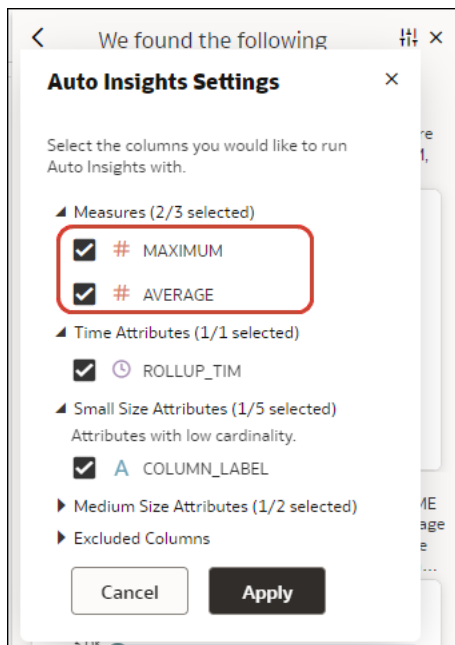
生成されたインサイトを含めるデータ要素と除外するデータ要素を選択して、インサイトをカスタマイズできます。たとえば、ビジュアル化しないデータ要素を除外できます。

自動インサイトでプロファイリングする列を指定すると、最も有用なインサイトに集中できます。デフォルトでは、Oracle Analytics は、データセット内のすべての列をプロファイリングして、インサイトを生成します。

1. ワークブックを作成するか開き、「ビジュアル化」パネルを表示します。
2. ツールバーで「自動インサイト」をクリックしてから、「インサイト設定」をクリックします。



3. チェック・ボックスを使用して、Oracle Analytics のデータ・プロファイリングに含める列を選択したり、選択解除したりします。



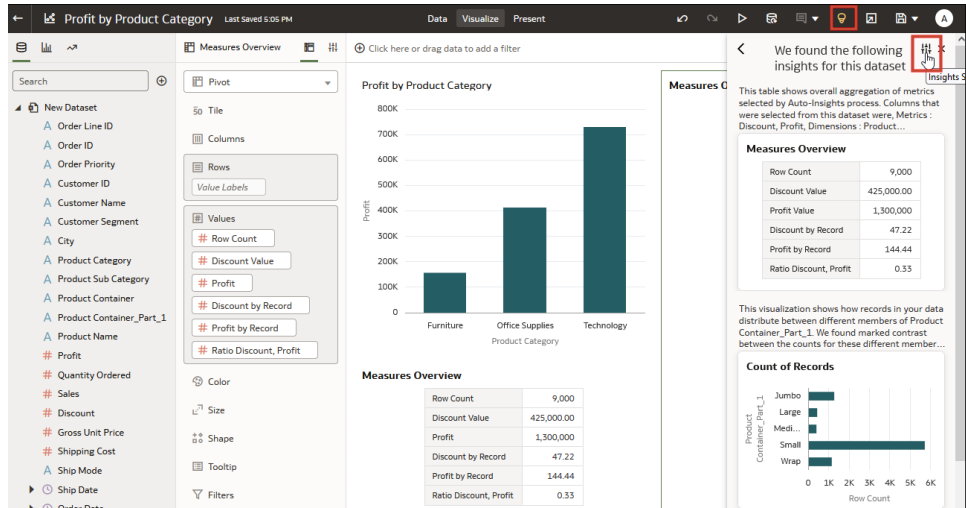
4. 「適用」をクリックします。

自動インサイトで表示されるビジュアライゼーション・タイプの指定

Oracle Analytics では、デフォルトで、すべてのビジュアライゼーション・タイプ(ディメンション、ヒート・マップ、トレンドなど)を使用して、データセットのインサイトが表示されます。データ内の特定の関係にフォーカスするために、自動インサイトを表示するビジュアライゼーション・タイプを指定できます。

たとえば、出荷日ごとに売上げに関する季節性の行動を探し、特定の出荷期間中に売上げの大幅な増加や減少があるかどうかを判断するとします。自動インサイトの設定で、**季節性**以外のすべてのビジュアライゼーション・タイプの選択を解除します。

1. 「自動インサイト」をクリックしてから、「インサイト設定」をクリックします。



- 表示しないビジュアライゼーション・タイプに対応するタイルをクリックします。

Auto Insights Settings

Select/Unselect the type of Auto Insights that you would like to see.

Dimensional Heatmaps Top Ns Trends **Seasonality**

Comparative Trends Time Indexing Boxplots Distributions Others

Select the columns you would like to run Auto Insights with.

- ▶ Measures (2/3 selected)
- ▶ Time Attributes (1/1 selected)
- ▶ Small Size Attributes (2/5 selected)
- ▶ Medium Size Attributes (0/2 selected)
- ▶ Excluded Columns

Cancel **Apply**

- 「適用」をクリックします。

データセットのインサイトのオンまたはオフ

Oracle Analytics で最適なビジュアライゼーションを推奨するかどうかを制御するには、データセットのインサイトを有効化または無効化します。たとえば、パフォーマンス・オーバーヘッドが大きすぎる場合は、データセットの自動インサイトをオフにできます。

データセットが自分と共有されていて書き込み権限がある場合は、データセットのインサイトを有効化または無効化できます。

Oracle Analytics の管理者は、すべてのデータセットの自動インサイトを有効化または無効化できます。パフォーマンスおよび互換性のオプションを参照してください。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」、「データ」、「データセット」の順にクリックします。
2. データセットの「アクション・メニュー」をクリックし、「検査」を選択します。
3. 「一般」タブで、「インサイトの有効化」を選択します。
4. 「保存」をクリックします。

ビジュアライゼーション・タイプについて

Oracle Analytics は、あらゆるデータ分析シナリオにそのまま使用できる様々なビジュアライゼーション・タイプを備えています。

- [棒グラフ](#)
- [フィルタおよびその他のビジュアライゼーション・タイプ](#)
- [地理空間グラフ](#)
- [グリッド・グラフ](#)
- [折れ線グラフ](#)
- [ネットワーク・グラフ](#)
- [円グラフおよびツリーマップ・グラフ](#)
- [散布図](#)

棒グラフ

棒グラフは、最も一般的に使用されるビジュアライゼーション・タイプの1つです。これを使用して、カテゴリにまたがるデータを比較し、外れ値を特定して、過去の高いデータ・ポイントおよび低いデータ・ポイントを明らかにできます。

ビジュアライゼーション・詳細情報 タイプ

棒	垂直フォーマットの1つのカテゴリ変数を使用して長期にわたるデータのグループを比較し、この使用は大規模な変更を示す場合に最も適しています。
ボックス・プロット	四分位数を通じて数値データのグループを示し、垂直フォーマットで外れ値を識別します。

ビジュアライゼーション・詳細情報 タイプ	
バタフライ	データを中央の同じ X 軸を使用する 2 つの横棒としてプロットし、視覚的に蝶の羽に似ています。
組合せ	様々なタイプのデータを様々な方法で同じグラフ内にすべて表示します。
横 100%	横長の矩形のバーの形式でデータをグラフ化し、各バーの長さは 100% です。
横棒	横長の矩形のバーの形式でデータをグラフ化し、バーの長さは、表す値に比例します。
横ボックス・プロット	四分位数を通じて数値データのグループを示し、水平フォーマットで外れ値を識別します。
横積上げ	数値を 2 つのカテゴリ変数にわたり横棒フォーマットでレンダリングします。
オーバーレイ・チャート	マルチレイヤー文法エクスペリエンスおよび積上げ棒グラフのサポートを備えた高度な組合せチャートを有効にします。
100 % 積上げ棒	各垂直棒の長さが 100% である 1 つのカテゴリ変数における数値を表示します。
積上げ棒	1 つのカテゴリ変数ではなく 2 つのカテゴリ変数にわたる数値を調べることで、標準の棒グラフを拡張し、この使用はグループの合計サイズを表示する場合に最も適しています。
ウォーターフォール	ある項目の開始値が最終値になる過程を示し、X、Y、Z 軸により中間値を表示するものであり、これは経営陣向けプレゼンテーションで有効です。

フィルタおよびその他のビジュアライゼーション・タイプ

次に示すビジュアライゼーション・タイプを使用すると、データを活用しやすくなります。

ビジュアライゼーション・タ イプ 詳細情報	
ダッシュボード・フィルタ	ユーザーがコンテンツをフィルタして、関心のあるデータを表示できるようになります。フィルタを書式設定して、表示方向(水平/垂直)の設定や、「適用」および「リセット」ボタンの追加、折返しのオンまたはオフを実行できます。 「ビジュアル化」キャンバスと「表示」キャンバスにプレゼンテーション・モードで表示され、日付、メジャーおよび属性の各列に対して使用できます。 ダッシュボード・フィルタ・ビジュアライゼーション を使用してデータのフィルタを参照してください。
言語での説明	データセット内の属性とメジャーに関する自然言語での説明を、ブレークダウンやトレンドという形で提供します。
リスト	ワークブック・キャンバス上のデータをリスト・フォーマットのビジュアライゼーションとしてフィルタ処理します。
スペース	ワークブックのキャンバス上にあるビジュアライゼーションの間にスペースを入れます。スペースに線を入れて書式設定し、ビジュアライゼーションの間の境界を表すことが可能です。
タグ・クラウド	タグやキーワードなど、テキスト・データの単語の頻度分析を表示します。

ビジュアライゼーション・タイプ 詳細情報

テキスト・ボックス	テキストをワークブック・キャンバスに追加するための包含領域を提供します。
タイル	カード・スタイルの複合的なビジュアライゼーションを作成でき、これには最大 5 つのメジャーの追加と、プライマリ・メジャーとセカンダリ・メジャーのラベルや値のレイアウトとポジショニングの指定が可能です。タイルの文法要素は、ビジュアライゼーションを作成する際に、文法パネルに自動的に追加されます。
タイムライン	期間内のイベントまたはオブジェクトの連続したビューを示します。

地理空間グラフ

地理空間グラフでは、Google Maps、Mapbox および EZ Map などの多くの一般的なマップ API のサポートにより、データをマップにオーバーレイできます。

ビジュアライゼーション・タイプ 詳細情報

イメージ	アップロードされたイメージをマップまたは他のビジュアライゼーションの背景として使用します。
マップ	地理的に関連するデータをマップ形式で表示し、各リージョンのデータの分布または比率の分析に最も使用されます。
マルチレイヤー・マップ	マップ・グラフに基づいており、データ・レイヤー機能を使用して、単一のマップ・ビジュアライゼーションに、複数のデータ系列(ディメンションおよびメトリックの異なるセット)を表示します。
REST 背景	マップ・グラフに基づいており、カスタム REST API を使用して、データをマップ背景に変換します。

グリッド・グラフ

グリッド・グラフでは、データ、またはグリッドのコンテンツを識別するデータおよびラベルのグラフィック表現を含む行および列構造が使用されます。

ビジュアライゼーション・タイプ 詳細情報

相関マトリックス	変数間の相関係数を含む表を表します。
グリッド・ヒート・マップ	2 つの軸変数にわたる主要な変数を色付きの四角形のグリッドとしてプロットします。
統計図表	アイコンを使用して、母集団の様々な部分の絶対数または相対サイズを視覚化します。
ピボット	表と似ていますが、列および行のデータ値のグループを要約および集計します。
表	行および列のデータを表形式で表示します。

折れ線グラフ

折れ線グラフにより、いくつかの異なるデータ・ポイントを単一の連続した数列としてつなげることができます。これを使用すると、他の値と比較したときのある値の変更を特定できます。

ビジュアライゼーション・タイプ 詳細情報

領域	軸と線間の面が塗りつぶされた折れ線グラフに基づきます。このグラフは、時間の経過に伴う変更の量を示し、トレンド全体の合計値の評価に役立ちます。
100%面	面グラフに基づきますが、グラフ全体は 100%塗りつぶされています。
折れ線	時間の経過に伴う一連の値全体を線の書式で示しています。
レーダー面	レーダー折れ線グラフに基づいていますが、折れ線間の面は塗りつぶされています。
レーダー棒	レーダー折れ線グラフに基づき、軸上の各変数およびデータをすべての軸にわたる多角形としてプロットすることで、多変量データを表します。
レーダー折れ線	多変量データを、同じポイントから始まる軸で表される 3 つ以上の定量的変数の 2 次元チャートの形式で表示します。
積上げ面	面グラフに基づいており、合計値をトラッキングするだけでなく、合計のグループ別の内訳を表示する場合に便利です。

ネットワーク・グラフ

ネットワーク・グラフは、線、ノードまたは他のグラフィックを使用してエンティティ間の関係を明確にします。

ビジュアライゼーション・タイプ 詳細情報

コード図	エンティティ間のフローまたは関係(多対多接続)を表しており、共通性がある場所が識別されます。
循環ネットワーク	ネットワーク・グラフに基づいていますが、循環フロー内で接続が発生する方法を示しています。
ネットワーク	スキーマまたはネットワーク・マップおよびその接続を表しています。
平行座標	通常、縦方向で等間隔の n 平行行で構成される背景とともに n 次元空間内の一連のポイントを示します。
サンキー	矢印の幅がフロー・レートに比例するフロー・ダイアグラムを示しており、マテリアル・フロー分析の実行に有用です。
ツリー図	一連の独立したイベントまたは条件付き確率をノード・ツリー・ダイアグラムで表しており、その各ノードはイベントを表し、そのイベントの確率と関連付けられています。

円グラフおよびツリーマップ・グラフ

円グラフは、一定の時間枠におけるデータの割合を円全体のデータ・スライスとして表示し、ツリーマップ・グラフは、様々なセグメントを四角形全体内の小さい長方形のデータとしてビジュアル化します。

ビジュアライゼーション・詳細情報 タイプ

ドーナツ	円グラフに基づいていますが、中央は空洞です。関連する値と比例する複数のセグメントに分割されます。
円	円の統計グラフを示し、数値比率を表すスライスに分割されます。
サンバースト	階層データを表示し、階層の各レベルは 1 つの円によって表され、それに含まれる最も内側の円は最上部の階層です。
ツリーマップ	階層(またはツリーベースの)構造にグループ化およびネストされたデータを表し、パターンを迅速に識別する場合に役立ちます。

散布図

散布図により、変数のいずれかが他の変数の有効な予測材料である場合や、変数がそれ自体で変化する場合に、複数の変数間の関係を解釈できます。クラスタまたはトレンド線を追加して、散布図をより掘り下げることができます。

ビジュアライゼーション・詳細情報 タイプ

カテゴリ	方向を関連付けることもできるエッジ(または弧)と呼ばれるリンクによって接続されている一連の頂点(またはノード)を示します。
散布	ドットにより 2 つの数値変数の値が表され、この場合、横軸と縦軸上の各ドットの位置が、個々のデータ・ポイントの値を示しています。散布図は、変数間の関係を確認する場合に適しています。
積上カテゴリ	値がカテゴリ別に積み上げられているカテゴリ・グラフに基づきます。

統計分析によるビジュアライゼーション内のデータの拡張

統計分析を使用すると、ワークブックで、クラスタや外れ値の強調表示、予測の追加、トレンド線や基準線の表示を行えるようになります。

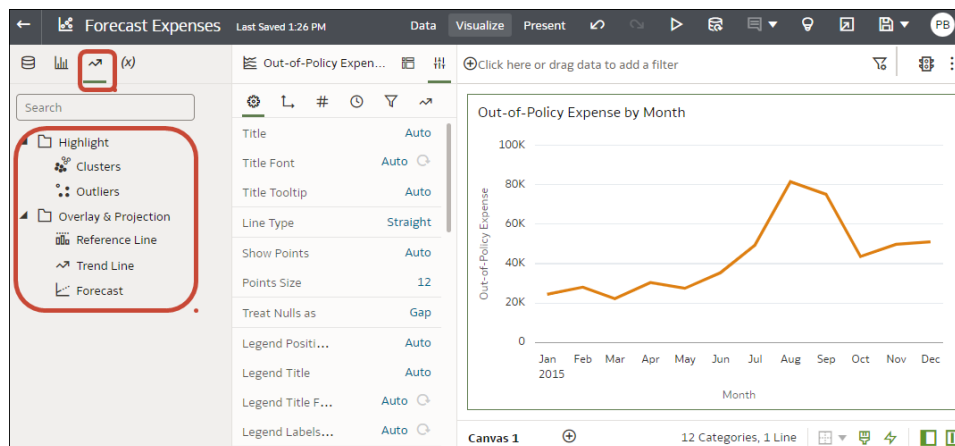
トピック:

- [統計分析を開始する前に](#)
- [ビジュアライゼーションには、どのような統計分析を追加できますか。](#)
- [ビジュアライゼーションへの統計分析の追加](#)
- [ビジュアライゼーションへの基準線の追加](#)

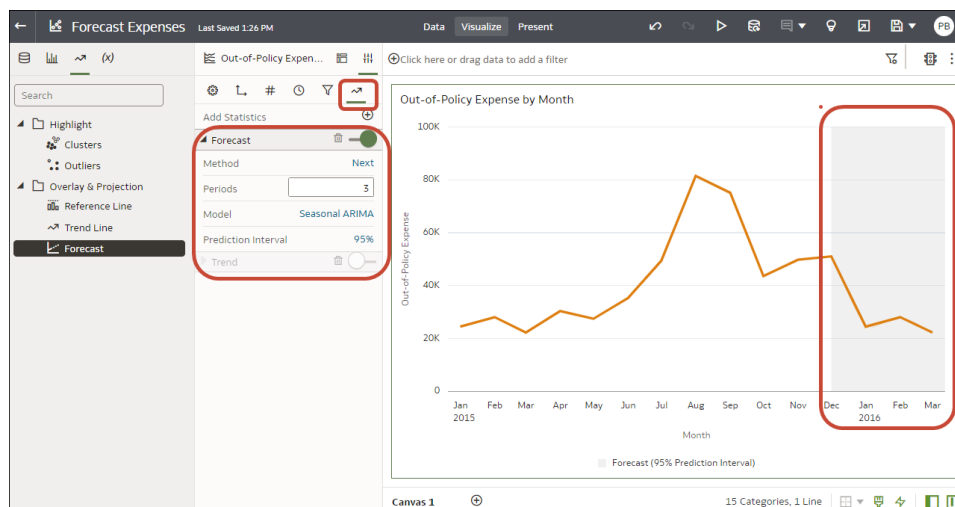
統計分析を開始する前に

ワークブックに予測や外れ値、トレンド線などの統計分析を追加するには、「データ・パネル」の「統計」ペインにある、すぐに利用可能な分析を使用するか、構成を細かく制御する必要がある場合は式ビルダーの関数を使用します。

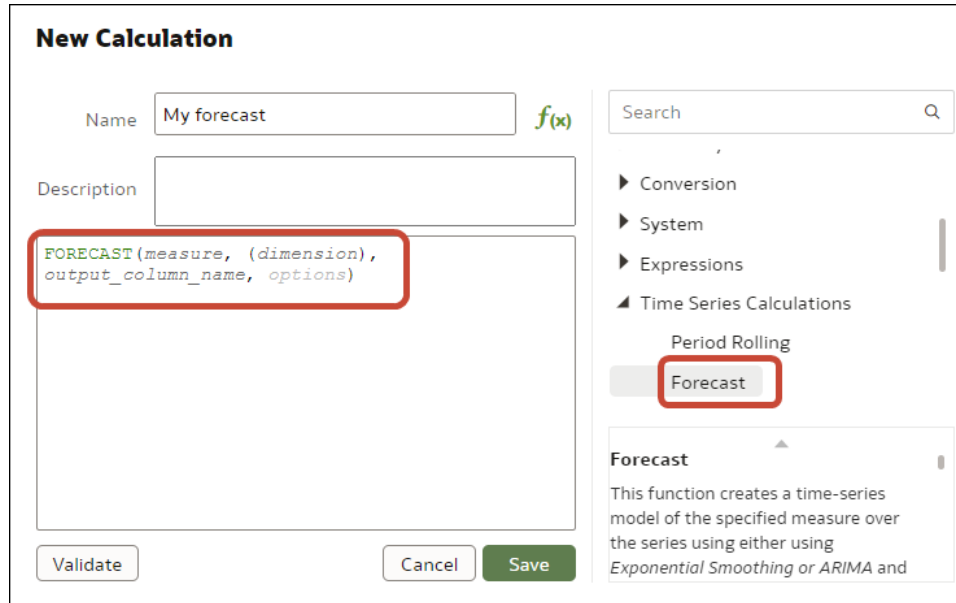
Oracle Analytics では、「データ・パネル」の「統計」ペインから様々な統計分析を追加できますが、この分析は完全に構成済であるため、統計の専門家でなくとも結果を出すことが可能です。



これらの統計の基本的なオプションは、「文法パネル」で構成できます。たとえば、ビジュアライゼーションで **Out-of-Policy Expenses by Month** を分析する場合には、「期間」オプションで予測する月数を指定します(この例の'3'では、最後のデータ・ポイントである 12 月から 3 か月間の 1 月、2 月、3 月が予測されます)。



統計の設定をさらに細かく制御する必要がある場合や、別のビジュアライゼーションの分析を使用する場合は、計算の追加を検討し、式ビルダーを使用して同等の関数を定義します。(「データ・パネル」の「データ」ペインから、「追加」(+), 「計算の作成」の順にクリックし、式ビルダーを表示します。)たとえば、FORECAST()関数を使用します。

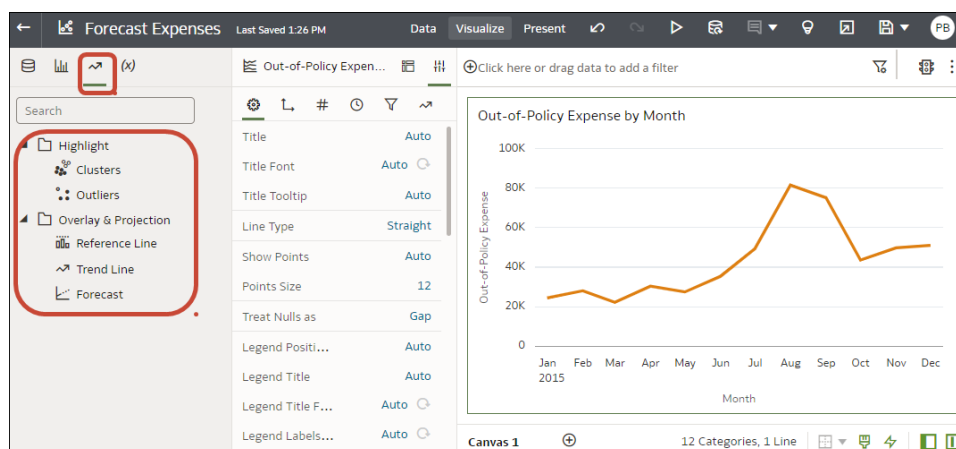


「計算済データ要素の作成」を参照してください。

また、「マイ計算」に格納されているクラスタや外れ値に基づいて計算を作成することも可能なため、ワークブックの別のキャンバスにある計算を再利用できます。[クラスタまたは外れ値に基づいた計算の作成](#)を参照してください。

ビジュアライゼーションには、どのような統計分析を追加できますか。

次に示す統計分析をビジュアライゼーションに追加することで、データに対するより優れたインサイトを得られます。



予測

予測関数は、線形回帰を使用して、既存の値および線形トレンドに基づいて将来の値を予測します。

既存の時系列データに基づいて、値を予測する将来の期間の数値を設定できます。[ビジュアライゼーションへの統計分析の追加](#)を参照してください。

Oracle では、次の予測モデル・タイプをサポートしています:

- **自己回帰和分移動平均(ARIMA)** - 過去の時系列データが非季節性であるが、将来を説明し予測するために十分な観測値(少なくとも 50、できれば 100 を超える観測値)を提供する場合に使用します。
- **季節性 ARIMA** - データに一定期間にわたって繰り返される定期的な変化のパターンがある場合に使用します。たとえば、月次データの季節性は、夏の月に高い値を示し、冬の月に低い値を示します。
- **三重指数平滑化(ETS)** - 明確なパターンを持たない反復時系列データを分析する場合に使用します。このモデル・タイプは、データが時間の経過とともに一定の間隔で繰り返される傾向を考慮した指数移動平均を生成します。

また、設定をより細かく制御する場合や、他のビジュアライゼーションで予測を使用する場合は、FORECAST 関数を使用してカスタム計算を作成します。[時系列関数](#)を参照してください。

クラスタ

クラスタ関数は、同じグループのオブジェクトが別のグループのオブジェクトよりも相互にコヒーレンスと近似性を示しているという方法で、オブジェクトのセットをグループ化します。たとえば、散布図で色を使用して、様々なグループのクラスタを示すことができます。[ビジュアライゼーションへの統計分析の追加](#)を参照してください。

- **K 平均法クラスタリング** - クラスタのプロトタイプとして機能する、最も近い平均のクラスタに各観測値が属するように、"n"観測値を"K"クラスタにパーティション化する場合に使用します。
- **階層的クラスタリング** - 凝集(ボトムアップ)アプローチまたは分割(トップダウン)アプローチのいずれかを使用して構築されたクラスタの階層を作成する場合に使用します。

また、設定をより細かく制御する場合や、他のビジュアライゼーションでクラスタを使用する場合は、CLUSTER 関数を使用してカスタム計算を作成します。[分析関数](#)を参照してください。

外れ値

外れ値関数は、個々の値の平均期待値から最も離れた位置にあるデータ・レコードを表示します。たとえば、他の観測値から最も逸脱している極値は、このカテゴリに該当します。外れ値は、測定のはらつき、実験誤差、または新規性を示している可能性があります。すでにクラスタがあるチャートに外れ値を追加すると、外れ値は様々な形で示されます。

外れ値は、K 平均法クラスタリングまたは階層的クラスタリングを使用できます。[ビジュアライゼーションへの統計分析の追加](#)を参照してください。

また、設定をより細かく制御する場合や、他のビジュアライゼーションで外れ値を使用する場合は、OUTLIER 関数を使用してカスタム計算を作成します。[分析関数](#)を参照してください。

基準線

基準線関数は、X 軸または Y 軸の値に対応する水平線または垂直線をチャートに定義します。[ビジュアライゼーションへの基準線の追加](#)を参照してください。

- **線** - 平均、最小または最大の間の線を計算するように選択できます。たとえば、航空業界では、搭乗率を時間に対してプロットすると、基準線は、特定の月の搭乗率が平均を上回っているか下回っているかを示すことができます。

- **範囲** - 範囲は、データ・ポイントの上限と下限の範囲を表します。カスタム・オプションまたは標準偏差関数を、平均、最大および最小の間で選択できます。たとえば、月別の売上を分析していて、平均値から最大値までのカスタム基準範囲を使用した場合、売上が平均値を上回っているが最大値を下回っている月を特定できません。

トレンド線

トレンド線関数は、対象となっているメトリックの一般的な経過を示します。トレンド線は、グラフ上の複数のポイントを結ぶ直線です。トレンド線は、ビジュアライゼーション内の値セットのグループの特定の方向性を分析するのに役立ちます。[ビジュアライゼーションへの統計分析の追加](#)を参照してください。

- **線形** - 線形データで使用します。データ・ポイントのパターンが線に似ている場合、データは線形です。線形トレンド線は、メトリックが一定の割合で増加または減少していることを示します。
- **多項式** - データが変動する場合は、この曲線を使用します。大規模なデータセットの損益を分析する場合などに役立ちます。
- **指数** - データ値が上昇または下降する割合が次第に高くなる場合は、この曲線を使用します。データにゼロまたは負の値が含まれている場合、指数トレンド線を作成することはできません。


また、設定をより細かく制御する場合や、他のビジュアライゼーションでトレンド線を使用する場合は、TRENDLINE 関数を使用してカスタム計算を作成します。[分析関数](#)を参照してください。

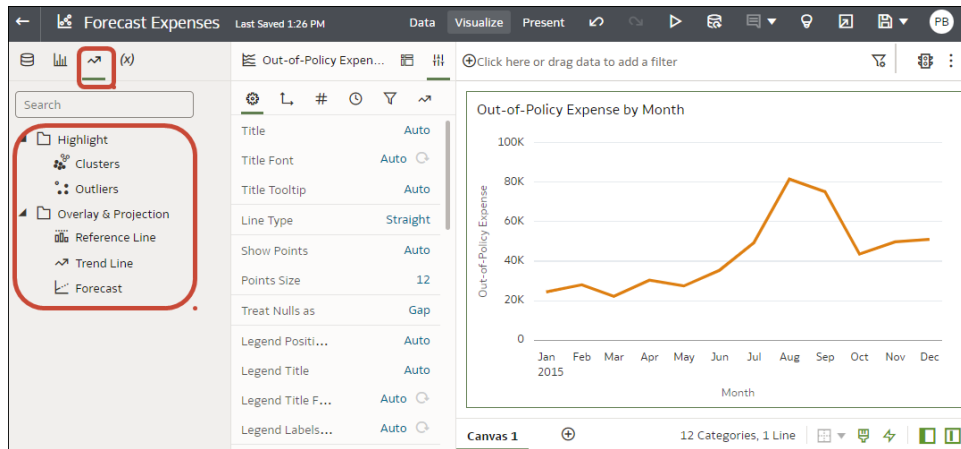
ビジュアライゼーションへの統計分析の追加

統計分析を使用すると、ワークブックで、クラスターや外れ値の強調表示、予測の追加、トレンド線や基準線の表示を行えるようになります。

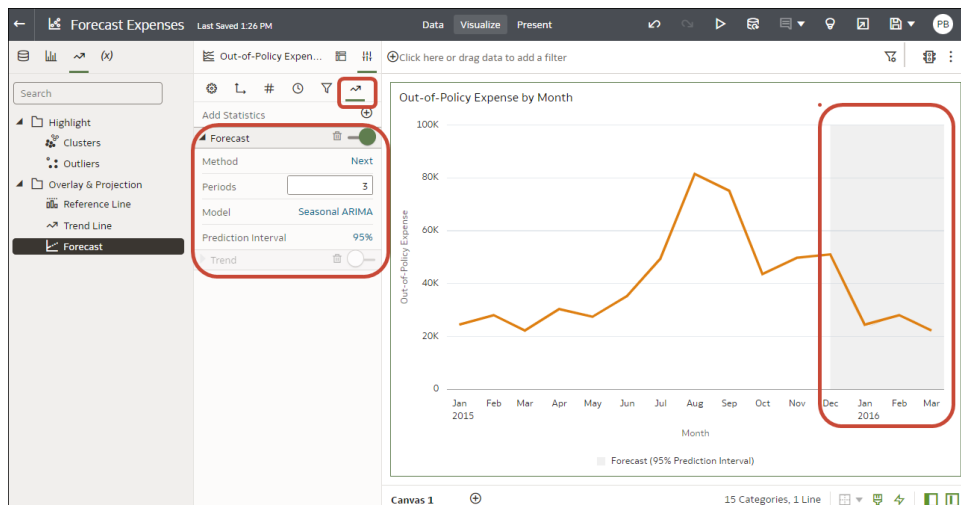
1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 追加する分析のタイプに必要なデータが、ビジュアライゼーションにあることを確認します。

たとえば予測の場合は、少なくとも 1 つの時間ディメンションと、メジャーまたはメトリックが必要です。

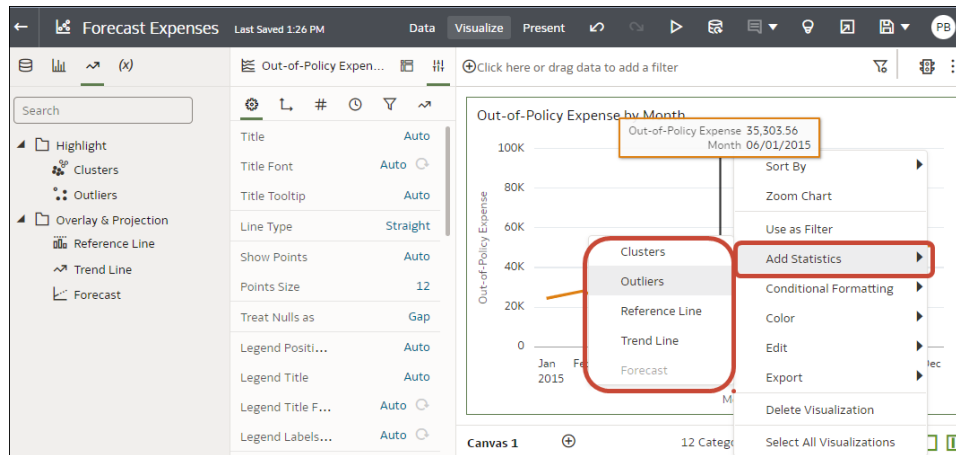
3. 「データ・パネル」または「文法パネル」で、「**分析**」アイコン  をクリックします



4. 「分析」 ペインからビジュアライゼーションに、必要な分析をドラッグ・アンド・ドロップします。
5. 分析の構成には、「文法パネル」の「分析」 ペインを使用します。
たとえば予測を追加する場合は、モデル・タイプや予測する期間の数値を変更できます。




「統計の追加」



ビジュアライゼーションへの基準線の追加

基準線を使用すると、ビジュアライゼーションの中で、平均、中央値、パーセンタイル、および類似の情報を識別できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「データ・パネル」で、「分析」アイコン  をクリックします。
3. 「基準線」をビジュアライゼーションにドラッグ・アンド・ドロップします。あるいは、「基準線」をダブルクリックして、選択されているビジュアライゼーションに追加できます。
4. 「文法パネル」の「分析」ペインで、線を構成します。

たとえば、「メソッド」オプションを使用して線や範囲を表示したり、「関数」オプションを使用して、デフォルトの線を「平均」や「パーセンタイル」、「上位 N」に変更したりできます。

5. 「保存」をクリックします。

言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションの追加

言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションは、会社のデータへのインサイトを提供します。これらのインサイトは、ブレイクダウンやトレンドの形をとります。

トピック:

- [言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションについて](#)
- [言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションの作成](#)

言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションについて

言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションは、データセット内の属性とメジャーの自然言語による説明を作成します。説明は、ブレイクダウンやトレンドの形で会社のデータへのインサイトを提供します。

たとえば、**Sample Sales** でワークブックを作成し、**T00 Calendar Date** 時間ディメンションと **1-Revenue** メジャーをキャンバスにドラッグしてから言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションを選択すると、次の説明が表示されます:

The data represents the 1- Revenue between January 6th, 2008 and November 19th, 2010.

- The 1- Revenue fluctuated throughout the current period, oscillating between 1,046 and 782,094.
- The measure sank 10 times, the lowest of which occurred on March 3rd, 2010, on May 5th, 2010, on June 8th, 2010, on June 22nd, 2010, on June 30th, 2010, on July 2nd, 2010 and on July 28th, 2010 at 36,977. The measure also peaked eight times, the highest of which happened on March 8th, 2010, on June 6th, 2010, on June 20th, 2010, on July 1st, 2010, on September 5th, 2010, on October 2nd, 2010 and on October 9th, 2010 at 345,954.
- Overall, the 1- Revenue has seen an outstanding 7,613.77% rise in comparison with January 6th, 2008.

At least one T00 Calendar Date appears to be missing in the current selection.

自然言語説明機能は、**Oracle Analytics Cloud** とその人工知能テクノロジー・パートナーである **Yseop** の統合によって提供されます。

サポートされているデータ要素の組合せ

言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションは、次の組合せで使用できます。

- 2つの属性と1つのメジャー。
- 1つの属性と2つのメジャー。

選択する属性は、標準列または時間ディメンションです。また、列には長い文字名および特殊文字を含めることができます。

これらの表を使用すると、選択した属性(標準または時間ディメンション)とメジャーの組合せに基づいて **Oracle Analytics Cloud** が実行する分析のタイプを理解できます。

2つの属性と1つのメジャーの組合せ

アイテム	ディメンション1	ディメンション2	メジャー	時系列順	関連なし	結果
1つの標準または時間ディメンション 1つのメジャー	標準または時間	-	標準	はい	はい	時間ディメンションのトレンド分析。 標準列のブレイクダウン分析。 最初にビジュアライゼーションを作成したときは、これらの分析がデフォルトです。必要に応じて、他の分析タイプ(トレンドやブレイクダウン)を選択できます。
1つの標準または時間ディメンション 1つのメジャー	標準または時間	-	標準	いいえ	はい	時間ディメンションのトレンド分析。 標準列のブレイクダウン分析。 最初にビジュアライゼーションを作成したときは、これらの分析がデフォルトです。必要に応じて、他の分析タイプ(トレンドやブレイクダウン)を選択できます。

アイテム	ディメンション1	ディメンション2	メジャー	時系列順	関連なし	結果
2つの標準または時間ディメンション 1つのメジャー	標準または時間	標準または時間	標準	はい	はい	順序付けされている場合(つまり時間ディメンション)、最初のディメンションのトレンド分析、および2番目のディメンションのブレイクダウン。 両方のディメンションが標準列の場合、ブレイクダウン分析。 時間ディメンションはトレンド分析で、標準列はブレイクダウン分析です。
1つの時間ディメンション 1つの標準ディメンション 1つのメジャー	時間	標準	標準	はい	はい	最初のディメンションのトレンド分析。 2番目のディメンションのブレイクダウン分析。
1つの標準ディメンション 1つの時間ディメンション 1つのメジャー	標準	時間	標準	はい	はい	最初の標準ディメンションのみのブレイクダウン分析。

1つの属性と2つのメジャーの組合せ

アイテム	ディメンション	メジャー1	メジャー2	時系列順	関連なし	結果
1つの標準ディメンション 2つのメジャー	標準	標準	標準	いいえ	はい	ディメンションに基づいた、最初および2番目のメジャーの個別のブレイクダウン分析。
1つの時間ディメンション 2つのメジャー	時間	標準	標準	はい	値と参照	2番目のメジャーと値を比較した最初のメジャーのトレンド分析。

その他の制限事項

言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションでは、次の制限事項に注意してください。

- ビジュアライゼーションのテキストは、英語またはフランス語で表示できます。他の言語はサポートされていません。Oracle Analytics Cloudでは、フランスのロケール(fr および fr-CA)をフランス語にマップし、他のすべてのロケールを英語にマップします。

- プレゼンテーション・モードおよび埋込みアイテム(ダッシュボードなど)はサポートされていません。
- 色変更およびデータ・ブラッシング機能は、このビジュアライゼーション・タイプには適用されません。
- データ・アクションは、このビジュアライゼーション・タイプには適用されません。
- このビジュアライゼーション・タイプでは、「**フィルタとして使用**」オプションは使用できません。
- ビジュアライゼーションに2つの属性が含まれ、2つ目の属性に50を超える要素がある場合、Oracle Analytics Cloud では自然言語分析を生成できません。

言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションの作成

データセット内の属性とメジャーの説明には、言語ナレーティブ・ビジュアライゼーション・タイプを使用します。説明は、ブレイクダウンやトレンドの形で会社のデータへのインサイトを提供します。

ワークブックをまだ作成していない場合は、作成する必要があります。[ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)を参照してください。

言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションを作成するには、2つの属性と1つのメジャー、または1つの属性と2つのメジャーを選択する必要があります。[言語ナレーティブ・ビジュアライゼーションについて](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「**ビジュアル化**」をクリックし、「言語での説明」ビジュアライゼーション・タイプをダブルクリックして選択します。
3. 「データ」ペインを表示し、データ要素をキャンバスにドラッグします。2つの属性と1つのメジャー、または1つの属性と2つのメジャーを選択する必要があります。
4. 様々な角度からデータを見るために調整を行います。
 - ドロップ・ターゲットのデータ要素を変更します。ステップ3で説明しているように、サポートされているメジャーと属性の組合せのみを使用できます。
 - ビジュアライゼーションの外部エッジにカレンダー日付列またはタイムスタンプ列がある場合、「プロパティ」ペインの「一般」タブで、分析タイプを変更します。トレンド分析の場合は、「**トレンド**」を選択します。トレンド分析は順序付けられており、切り離すことはできません。選択した属性とメジャーに基づいたデータのブレイクダウンの場合は、「**ブレイクダウン**」を選択します。
 - 「プロパティ」ペインの「一般」タブで「**詳細のレベル**」フィールドを使用して、表示される詳細のレベルを変更します。デフォルトでは、データは最も詳細なレベルの7で表示されますが、スライダを下に移動してデータをより大きいチャンクで表示することもできます。
 - 「プロパティ」ペインの「値」タブで、「**上昇の意味**」フィールドを使用して、属性またはメジャーの値の定義が適切であるかどうかを示します。たとえば、売上メジャーを選択した場合は、「**上昇の意味**」フィールドを「**良い**」に設定します。平均オーダー処理時間メジャーを選択した場合は、「**上昇の意味**」フィールドを「**悪い**」に設定します。

スパーク・チャートを使用したトレンドの調査

タイル・ビジュアライゼーションにスパーク・チャートを追加すると、集計データのトレンドを時間の経過とともに表示できます。

スパーク・チャートの線上にある赤い点は最小値を、緑の点は最大値を示します。ツールチップには、選択したカテゴリの最初、最後、最小、最大、平均の集計値が表示されます。カーソルをスパーク・チャート上の任意の場所に置くと、ツールチップが表示されます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 自動インサイトを閉じます。
3. 「データ」ペインで、メジャーをキャンバスにドラッグします。
4. 「データ」ペインで、時間ベースのデータ要素を**カテゴリ(チャート)**にドラッグし、タイル・ビジュアライゼーションにスパーク・チャートを追加します。たとえば、「**月**」を選択してドラッグします。
5. フィルタを追加する場合は、「データ」ペインから「**フィルタを追加するにはデータをドラッグするか、ここをクリックしてください**」にデータ要素をドラッグします。

たとえば、「**年**」です。

フィルタにより、スパーク折れ線が変化し、フィルタされたデータのトレンドが表示されます。

6. スパーク・チャートの表示設定を変更する場合は、「プロパティ」ペインの「一般」をクリックします。
 - 「**チャート**」をクリックして、スパーク・チャート(「面付き折れ線」、「折れ線」、「棒」、「面」)のいずれかを表示します。
 - 「**色**」をクリックして、スパーク・チャートに色を割り当てます。
 - 「**位置**」をクリックして、チャートをプライマリ・タイル・メジャーの後または下に配置します。
 - 「**幅**」または「**高さ**」をクリックして、スパーク・チャートのサイズを指定します。
 - 「**高/低マーク**」をクリックして、緑と赤の点で表示される高と低のマークを非表示または表示します。
 - 「**基準線**」をクリックして、基準線を表示または除去します。「**平均**」オプションを使用して、平均のトレンドを示す基準線を表示します。「**なし**」を使用して、基準線を除去します。
7. 「**保存**」をクリックします。

ビジュアライゼーションでのデータのソート

ビジュアライゼーションで大量のデータを操作する場合があります。そのデータの表示をワークブックのビジュアライゼーション・キャンバスで最適化するには、データをソートする必要があります。

ワークブックにビジュアライゼーションがない場合は、作成します。[ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、次のいずれかを実行します。
 - メインの編集パネルで、ソートするデータ要素をクリックし、要素ラベルの横の「**ソート基準**」にカーソルを合せて、ソート・オプション(「低から高」、「高から低」、「なし」など)を選択します。
 - ビジュアライゼーション文法パネルの「**グラマー**」ペインでソートするデータ要素を右クリックし、「**ソート基準**」にカーソルを合せてソート・オプション(「低から高」、「AからZ」、「なし」など)をクリックします。

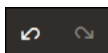


編集を元に戻すおよびやり直し

最後のアクションを元に戻し、その後やり直すことが、すばやくできます。たとえば、選択したビジュアライゼーション・タイプが適切ではない場合に別のタイプを試したり、データにドリルする前の時点に戻ることができます。

「元に戻す」および「やり直し」オプションは、別のビジュアライゼーションを試みる場合に便利です。最後にワークブックを保存してから行ったすべての編集を元に戻すことができます。ただし、編集を元に戻し、その後やり直すことができない場合があります。たとえば、「データセットの作成」ページで、Oracle Application データ・ソースからワークブックでデータセットとして使用する分析を選択したとします。次のステップで、「元に戻す」オプションを使用してデータセットを除去する場合、この変更をやり直すことはできません。

- 編集を元に戻すかやり直すには、ワークブック・ツールバーまたはデータセット・ツールバーに移動し、「**最後の編集を元に戻す**」または「**最後の編集をやり直し**」をクリックします。変更を加えてからワークブックを保存していない場合にのみ、これらのオプションを使用できます。



- ワークブックで作業している場合、ワークブック・ツールバーで「**メニュー**」をクリックし、「**保存済に戻す**」を選択し、ワークブックを最後に保存してから加えたすべての編集を元に戻します。「**保存済に戻す**」は、最初にワークブックを保存した後に有効になります。このオプションは、「**自動保存**」オプションを選択した場合、自動的に無効になります。

データがないビジュアライゼーションに関するカスタム・エラー・メッセージの作成

ワークブックに表示するデータがないビジュアライゼーションに表示する独自のメッセージを作成できます。

選択したデータ要素およびビジュアライゼーションのフィルタで結果が生成されない場合、「データが見つかりません」というメッセージが表示されます。ワークブック作成者は、カスタム・メッセージを作成して、ビジュアライゼーションに結果が表示されない理由を説明できます。たとえば、ビジュアライゼーションにデータが含まれていない場合に表示される、「There is no data for the selected year」というカスタム・エラー・メッセージを作成できます。メッセージは、ワークブックのすべてのビジュアライゼーションに表示されます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. ワークブックの「**メニュー**」、「**ワークブック・プロパティ**」の順にクリックします。
3. 「データ・テキストがありません」の場合、「**自動**」をクリックして「**カスタム**」を選択します。
4. カスタム・エラー・メッセージのテキストを入力します。
5. 「**OK**」をクリックします。

ワークブックのデータのリフレッシュについて

ワークブックでデータをリフレッシュすると、現在のデータが使用されます。

ワークブックの「**データのリフレッシュ**」ボタンをクリックすると、キャンバス上でビジュアライゼーションの問合せが実行されます。データセットを構成する方法および使用するデータ・ソースによって、キャンバスがリフレッシュされたデータを取得する場所が決まります。

データセット表のアクセス・モードが「**ライブ**」に設定されている場合、表はプレゼンテーション・キャッシュをバイパスして、ソースから新しいデータをフェッチします。データセット表のアクセスが「**自動キャッシュ**」に設定されている場合、表はキャッシュされたデータを再度問い合わせます。

データをリフレッシュしても、データ・キャッシュのリロードはトリガーされません。キャッシュされたデータが古い場合があります。データをリフレッシュしてもデータが最新でない場合、データセットのリロードが必要になる場合があります。[データセットのデータのリロード](#)を参照してください。

ワークブックのデータセットを置き換えるのではなく、リフレッシュすることをお勧めします。データセットを置き換えると、破損することがあります。次の結果を理解している場合にのみ、データセットを置き換えてください:

- 列とデータ型が既存のデータセットと新しいデータセット間で一致していない場合、データセットを置き換えると、既存のデータセットを使用しているワークブックが破損します。
- 既存のデータセットで変更または追加された列が失われ、データセットを使用するワークブックが多くの場合に破損します。

ワークブックのデータのリフレッシュ

ワークブックのデータをリフレッシュして、ビジュアライゼーションに最新のデータが含まれるようにします。

[ワークブックのデータのリフレッシュについて](#)を参照してください。

管理者権限を持つユーザーは「**キャンバスを開いたときにデータをリフレッシュ**」、「**データの自動リフレッシュ**」および「**リフレッシュ間隔**」プロパティを設定して、キャンバスのデータを自動的にリフレッシュできます。[キャンバス・データ・リフレッシュ・プロパティについて](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、ワークブック・ツールバーに移動して「**データのリフレッシュ**」をクリックします。

ワークブックでのデータ問合せの一時停止

データの自動適用オプションを無効にすると、ワークブックでビジュアライゼーションのコンテンツを変更したときに、新規問合せの発行を一時停止できます。

変更ごとにデータ更新を待つことなく、すばやくビジュアライゼーションを構成できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「**ビジュアル化**」をクリックします。
3. **データの自動適用**ボタンをクリックしてデータ問合せを一時停止します。
データ問合せは一時的に無効になります。
4. ワークブックのビジュアライゼーションを変更します。
変更が表示されますが、データは更新されておらず、スキップされたデータ・リクエスト数を示すバブルが表示されます。
5. データをすぐにリフレッシュする場合、バブルをクリックします。
データ問合せはまだ無効のままです。
6. **データの自動適用**ボタンをクリックしてデータ問合せを再度有効にします。

キャンバス・プロパティの使用

レイアウト、幅、高さ、キャンバス上のビジュアライゼーションも同期化およびデータのリフレッシュなどのキャンバス・プロパティを操作できます。

トピック:

- [キャンバス・レイアウト・プロパティについて](#)
- [キャンバス・プロパティの更新](#)
- [キャンバス・グリッド・ガイドラインを使用したビジュアライゼーションの配置](#)
- [キャンバス上のビジュアライゼーション間におけるブラッシングについて](#)
- [キャンバスでのビジュアライゼーションの同期化について](#)
- [キャンバス・データ・リフレッシュ・プロパティについて](#)

キャンバス・レイアウト・プロパティについて

キャンバス上でビジュアライゼーションのレイアウト、幅および高さを構成できます。

キャンバス・レイアウト・プロパティ設定を使用して、キャンバスでのビジュアライゼーションの表示方法を構成します。

レイアウト

ビジュアライゼーションが、キャンバスに自由書式または自動調整で表示されるかを構成します。

- **自動調整** - ビジュアライゼーションが複数ある場合、キャンバスでビジュアライゼーションを自動配置、つまり正しく整列するために使用します。ビジュアライゼーションの端を適切な大きさになるようにドラッグしてサイズを変更することもできます。
- **自由書式** - ビジュアライゼーションを配置するビジュアライゼーションの間のスペースに、ドラッグ・アンド・ドロップでキャンバス上のビジュアライゼーションを再配置するために使用します。ビジュアライゼーションの端を適切な大きさになるようにドラッグしてサイズを変更することもできます。
「順序のビジュアライゼーション」 オプション(「自由書式」キャンバス・レイアウトを使用している場合のみ使用可能)により、「**最前面に移動**」、「**前面に移動**」、「**Send Backward**」または「**背面に移動**」を使用して、複数のビジュアライゼーションを含むキャンバスのビジュアライゼーションを移動できます。

「幅」および「高さ」

キャンバスでビジュアライゼーションのレイアウト・サイズを指定するには、「幅」と「高さ」の設定を、「レイアウト」設定と組み合わせて使用します

- **画面** - レイアウトは、使用可能な画面のスペースに合せられます。
「自由書式」を選択した場合、使用できません。
- **拡大** - ビジュアライゼーションが最適なサイズになるよう、レイアウトの高さまたは幅が自動的に拡大されます。

たとえば、キャンバスに複数または複数行のビジュアライゼーションを追加した場合、追加されたビジュアライゼーションが最適なサイズで表示されるよう、レイアウトが拡大されます。

- **固定** - レイアウトには指定のサイズが使用されます。

キャンバス・プロパティの更新

キャンバス・プロパティ・ダイアログを使用して、多くの異なるタスクを実行できます。たとえば、ツールチップとして表示される説明の追加、レイアウトの変更、ブラッシング、ビジュアライゼーションの同期、キャンバス・リフレッシュ設定の構成ならびに背景色およびイメージの指定を行います。

キャンバスのグリッド設定およびレイアウト位置設定オプションを切り替えることもできます。キャンバス・グリッド・ガイドラインを使用したビジュアライゼーションの配置を参照してください。

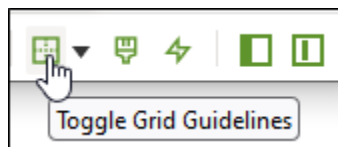
1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. キャンバス・タブを右クリックして「**キャンバスのプロパティ**」をクリックします。
3. キャンバス・プロパティを更新します。
4. 「**保存**」をクリックします。

キャンバス・グリッド・ガイドラインを使用したビジュアライゼーションの配置

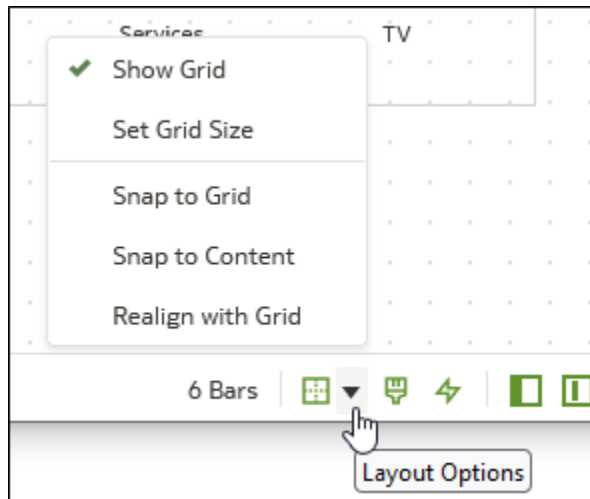
キャンバスの「レイアウト」プロパティが「**自由書式**」に設定されている場合、グリッド・ガイドライン設定を使用して、キャンバス内のビジュアライゼーションの配置を制御できます。

これらの設定を使用すると、キャンバス・グリッド・ガイドライン設定を使用してビジュアライゼーションを簡単に配置できます。

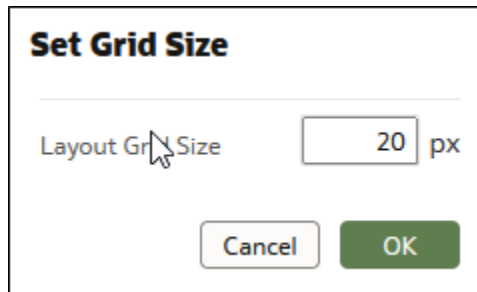
1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. **グリッド・ガイドラインの切替え**をクリックして、グリッド・ガイドラインを表示します。



3. 「**レイアウト・オプション**」をクリックします。



4. **グリッド・サイズの設定**をクリックし、グリッド・ガイドライン間の距離をピクセル単位で入力します。



5. ビジュアライゼーションをクリックし、キャンバス上の必要な位置にドラッグします。
6. 「**グリッドにスナップ**」および**グリッドで再配置**をクリックすると、キャンバス内のすべてのビジュアライゼーションが最も近いグリッド・ガイドラインに自動的に再配置されます。

グリッドで再配置は、「**グリッドにスナップ**」を選択し、以前にグリッド・ガイドラインから離れてビジュアライゼーションを再配置した場合にアクティブになります。

キャンバス上のビジュアライゼーション間のブラッシングについて

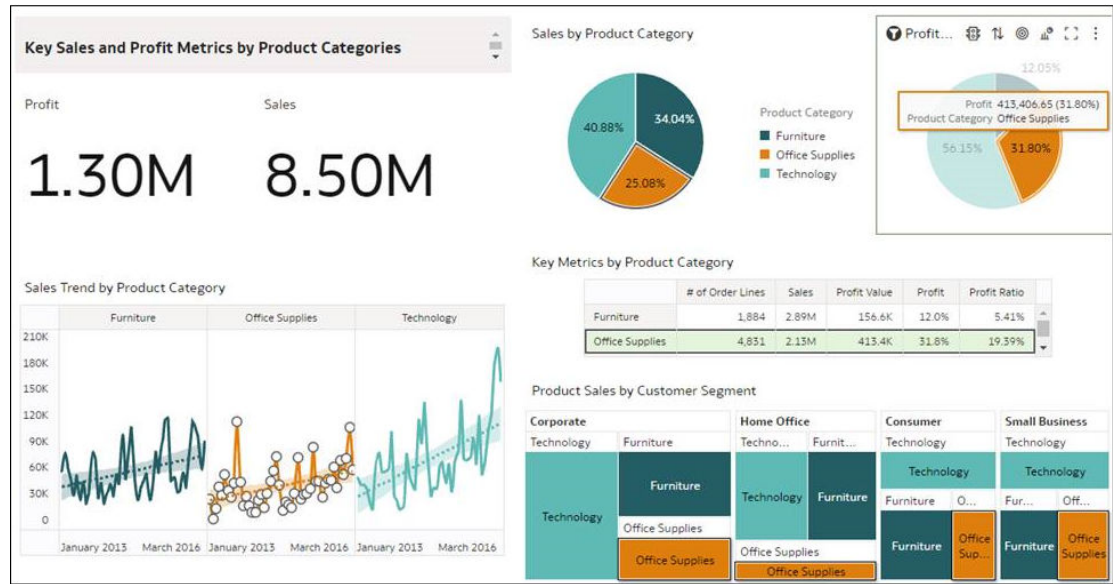
ユーザーがビジュアライゼーションでデータ・ポイントを選択すると、データ・ポイントが他のビジュアライゼーションで強調表示されるように、キャンバスでブラッシングを構成できます。

ブラッシングは、ビジュアライゼーションで同じデータセットが共有されている場合のみ機能します。

選択したキャンバスの「**ブラッシング**」 キャンバス・プロパティを「**オン**」または「**オフ**」に設定できます。[キャンバス・プロパティの更新](#)を参照してください。

- **オン** - ビジュアライゼーションでデータ・ポイントを 1 つ以上選択した場合、対応するデータ・ポイントが、同じデータセットを使用する、キャンパス上の他のビジュアライゼーションで強調表示されます。
- **オフ** - ビジュアライゼーションでデータ・ポイントを 1 つ以上選択した場合、対応するデータ・ポイントは、キャンパス上の他のビジュアライゼーションで強調表示されません。

たとえば、円グラフで「Office Supplies」を選択し、「ブラッシング」が「オン」に設定されている場合、「Office Supplies」データ・ポイントはキャンパス上の他のビジュアライゼーションでも強調表示されます。



キャンパスでのビジュアライゼーションの同期について

キャンパスでビジュアライゼーションを同期するかどうかを指定できます。

「**ビジュアライゼーションの同期**」設定を使用して、キャンパスのビジュアライゼーションが相互作用する方法を指定します。デフォルトでは、ビジュアライゼーションは自動同期化のためにリンクされます。

「**ビジュアライゼーションの同期**」が「**オン**」に設定されていて、ビジュアライゼーションからデータ値を追加または除去する場合、対応するビジュアライゼーションの値が自動的に追加または削除されます。「**ビジュアライゼーションの同期**」が「**オフ**」に設定されている場合、ビジュアライゼーションのリンクが解除され、自動同期がオフになります。

「**ビジュアライゼーションの同期**」が「**オン**」の場合は、フィルタ・バーのすべてのフィルタおよびフィルタを作成するアクション(ドリルなど)が次に対して適用されます:

- 単一のデータセットがあるキャンパス内のすべてのビジュアライゼーション。
- 複数のデータセットがある結合済データセットのすべてのビジュアライゼーション。
データセットのデータ要素がフィルタとして指定されているが、結合済データセットと一致しない場合、フィルタは指定されたデータセットのビジュアライゼーションにのみ適用されます。

「**ビジュアライゼーションの同期**」が「**オフ**」の場合は、「ドリル」などの分析アクションによって、アクションを適用するビジュアライゼーションのみが影響されます。

キャンバス・データ・リフレッシュ・プロパティについて

管理者権限を持っている場合、キャンバス・データを、キャンバスを開くときにリフレッシュする、または特定の間隔で自動的にリフレッシュするように構成できます。

キャンバス・プロパティ設定を使用して、キャンバス・データをどのようにリフレッシュするかを構成します。

キャンバスを開いたときにデータをリフレッシュ

ユーザーがキャンバスを開いたときにデータをリフレッシュするかどうかを構成します。

- **オン** - キャンバスが開いたときにデータをリフレッシュする場合に使用します。キャンバスを開くたびにクライアントおよびサーバーのキャッシュがクリアされて、現在のデータが表示されるようになります。
- **オフ** - キャンバスが開いたときにデータをリフレッシュしない場合に使用します。

データの自動リフレッシュ

指定された時間間隔でキャンバス・データを自動的にリフレッシュするかどうかを構成します。

- **有効** - 入力した「**リフレッシュ間隔**」を使用して、キャンバス・データを自動的にリフレッシュする場合に使用します。
- **無効** - キャンバス・データを自動的にリフレッシュしない場合に使用します。

ビューアのための自動開始

キャンバスを開くときに自動データ・リフレッシュを開始するかどうかを構成します。

- **オン** - キャンバスを開いたときにキャンバス・データを自動的にリフレッシュし、その後は指定した間隔でリフレッシュする場合に使用します。
- **オフ** - キャンバスを開いたときに、ユーザーがワークブックの「**データのリフレッシュ**」をクリックするまで、指定したリフレッシュ間隔でキャンバス・データを自動的に開始しない場合に使用します。

ビジュアライゼーションまたはキャンバスのコピーと貼付け

同じワークブック内のビジュアライゼーションまたはキャンバスをコピーして、開かれている別のワークブックに、または異なるブラウザ・タブで開かれている別のワークブックに貼り付けることができます。

あるワークブックから別のワークブックにビジュアライゼーションまたはキャンバスをコピーすると、**Oracle Analytics** は次のように動作します:

- データ - 貼り付けられたビジュアライゼーションまたはキャンバスのデータセットがターゲット・ワークブックに追加されます。貼付け先となるターゲット・ワークブックを開くかまたは作成する場合、コピーして貼り付けるビジュアライゼーションまたはキャンバスによって使用されるデータセットを含める必要はありません。

- フィルタ - ターゲット・ワークブックのフィルタと貼り付けられたビジュアライゼーションまたはキャンバスのフィルタは、保持されます。ビジュアライゼーションまたはキャンバスのフィルタをターゲット・ワークブックに追加する必要はありません。ターゲット・ワークブックのフィルタと貼り付けられたビジュアライゼーションまたはキャンバスのフィルタ間に競合がある場合でも、貼り付けられたフィルタによってターゲットのフィルタが上書きされることはありません。
- 色の割当て - ターゲット・ワークブックの色スキームが、貼り付けられたビジュアライゼーションまたはキャンバスに適用されます。
- 計算 - 同じ計算名がターゲット・ワークブックに存在する場合、貼り付けられた計算が追加され、その名前が変更されます。

次のステップを使用して、ビジュアライゼーションまたはキャンバスのコピーと貼付けを行います:

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、ビジュアライゼーションまたはキャンバスをコピーします。
 - ビジュアライゼーションをコピーするには、その「**メニュー**」をクリックして「**編集**」にカーソルを合せ、「**ビジュアライゼーションのコピー**」をクリックします。
 - キャンバスをコピーするには、それを右クリックして「**キャンバスのコピー**」をクリックします。
3. ビジュアライゼーションまたはキャンバスに移動してオブジェクトを貼り付けます。
 - ビジュアライゼーションが含まれるキャンバスにビジュアライゼーションを貼り付けるには、既存のビジュアライゼーションの「**メニュー**」をクリックして「**編集**」にカーソルを合せ、「**ビジュアライゼーションの貼付け**」をクリックします。
 - 空白のキャンバスにビジュアライゼーションを貼り付けるには、キャンバス・バーを右クリックして「**キャンバスの追加**」を選択します。新しいキャンバスを右クリックして「**編集**」にカーソルを合せ、「**ビジュアライゼーションの貼付け**」をクリックします。
 - キャンバスを貼り付けるには、キャンバス・バーを右クリックして「**キャンバスの貼付け**」をクリックします。

ビジュアライゼーションのコピーおよび貼付け

Word または Excel のように、ビジュアライゼーションのすべてのデータをクリップボードにコピーして、別のアプリケーションに貼付けできます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. ビジュアライゼーションの「**メニュー**」をクリックして、「**編集**」にカーソルを合せて「**データのコピー**」をクリックします。
これによって、ビジュアライゼーションのデータがクリップボードにコピーされます。
3. ターゲット・アプリケーションを開き、ビジュアライゼーションのデータに貼り付けます。

キャンバス上の複数のビジュアルライゼーションの操作

複数のビジュアルライゼーションを同時に操作したり、共通のビジュアルライゼーション・プロパティを更新したり、複数のビジュアルライゼーションのコピーと貼付けを行ったり、キャンバス上の複数のビジュアルライゼーションを削除することができます。

トピック:

- [キャンバス上の複数のビジュアルライゼーションの共通プロパティの更新](#)
- [キャンバス上の複数のビジュアルライゼーションのコピーと貼付け](#)
- [キャンバス上の複数のビジュアルライゼーションの削除](#)

キャンバス上の複数のビジュアルライゼーションの共通プロパティの更新

キャンバス上で選択した複数のビジュアルライゼーションのビジュアルライゼーション・プロパティを更新できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、[Ctrl]キーを押しながらクリックして、キャンバス上の複数のビジュアルライゼーションを選択します。
3. 「**共通プロパティ**」で、変更するプロパティをクリックし、変更を適用します。
共通プロパティの値は、選択した各ビジュアルライゼーションで同じ値を共有している場合に表示されます。
4. 「**保存**」をクリックします。

キャンバス上の複数のビジュアルライゼーションのコピーと貼付け

キャンバス上で選択した複数のビジュアルライゼーションのコピーと貼付けを行うことができます。

1. ホーム・ページで、コピーおよび貼付けするビジュアルライゼーションを含むワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、[Ctrl]キーを押しながらクリックして、キャンバス上の複数のビジュアルライゼーションを選択します。
3. 選択したビジュアルライゼーションをコピーするには、選択したビジュアルライゼーションにカーソルを合せ、右クリックして「**編集**」、「**ビジュアルライゼーションのコピー**」の順にクリックします。
4. コピーした複数のビジュアルライゼーションを貼り付けるには、コピーしたビジュアルライゼーションを貼り付けるキャンバスの場所をクリックし、右クリックして「**ビジュアルライゼーションの貼付け**」をクリックします。

5. 「保存」をクリックします。

キャンバス上の複数のビジュアライゼーションの削除

キャンバス上で選択した複数のビジュアライゼーションを削除できます。

1. ホーム・ページで、削除するビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、[Ctrl]キーを押しながらクリックして、複数のビジュアライゼーションを選択します。
3. 右クリックし、「ビジュアライゼーションの削除」を選択します。
4. 「保存」をクリックします。

ビジュアライゼーション・タイプの変更

探索するデータに最適になるようにビジュアライゼーション・タイプを変更できます。

ワークブックを作成してデータ要素をキャンバスに追加する際、「自動ビジュアライゼーション」モードでは選択されたデータ要素に基づいて最適なビジュアライゼーション・タイプを選択します。「自動ビジュアライゼーション」モードは、デフォルトでオン(選択済)になっています。さらにデータ要素を追加する場合、ビジュアライゼーション・タイプが自動的に更新され、最適なタイプがデータ要素に基づいて選択されます。

異なるビジュアライゼーション・タイプを使用する場合は、ビジュアライゼーション・タイプ・リストからそれを選択する必要があります。ビジュアライゼーション・タイプを変更すると、「自動ビジュアライゼーション」モードはオフになります。「自動ビジュアライゼーション」モードがオフ(選択解除)になっている場合、データ要素をキャンバスに追加してもビジュアライゼーション・タイプは自動的に変更されません。












1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. キャンバスでビジュアライゼーションを選択し、ビジュアライゼーション・ツールバーで「ビジュアライゼーション・タイプの変更」をクリックします。
3. ビジュアライゼーション・タイプを選択します。たとえば、「ツリーマップ」を選択して、ビジュアライゼーション・タイプをピボットからツリーマップに変更します。

ビジュアライゼーション・タイプを変更すると、データ要素は一致するドロップ・ターゲット名へと移動されます。同等のドロップ・ターゲットが新しいビジュアライゼーション・タイプに存在しない場合は、「未使用」のラベルが付いた文法パネル・セクションにデータ要素が移動されます。その後、希望する文法パネル・セクションにそれらを移動できます。

ビジュアライゼーション・プロパティについて

ビジュアライゼーションの外観および機能を、そのプロパティを変更することでカスタマイズできます。

「プロパティ」ペインで使用できるオプションは、ビジュアライゼーションのタイプに応じて異なります。

プロパティ	アイコン	説明
アクション		URL をタイル、イメージおよびテキスト・ボックス・ビジュアライゼーションに追加する場合に使用します。
分析		詳細分析関数を追加する場合に使用します。
軸		グリッド線の表示/非表示、水平(x)および垂直(y)の軸ラベルの表示/非表示、および軸ラベル・テキストの更新および書式設定を行う場合に使用します。
データ・レイヤー		マップおよびオーバーレイ・チャートでデータ・レイヤーを追加し、各データ・レイヤーの設定を構成する場合に使用します。
日時書式		日付または時刻要素で、表示と書式のプロパティを設定する場合に使用します。
エッジ・ラベル		表およびピボット表で、列のヘッダー・テキストの更新、ヘッダーの表示/非表示、表の列およびピボット表の列と行の階層への null 値の表示、およびヘッダー・テキストの書式設定を行う場合に使用します。
フィルタ		フィルタ・タイトルと選択名を変更して書式設定する場合に使用します。
一般		タイトル、ツールチップ、タイトルの書式、凡例、位置合せ、ラベル、線のタイプ、ポイントの設定、タイルの設定、スタイルの背景、枠線、影、その他のビジュアライゼーションの設定を変更する場合に使用します。
マップ		ズーム、データ・フォーカスの制御、および背景マップのスケール設定と選択を行う場合に使用します。
合計		表およびピボット表で合計を配置し、書式設定する場合に使用します。
値		データ・ラベルの表示、配置および書式の変更、および Y2 軸の非表示/表示を行う場合に使用します。

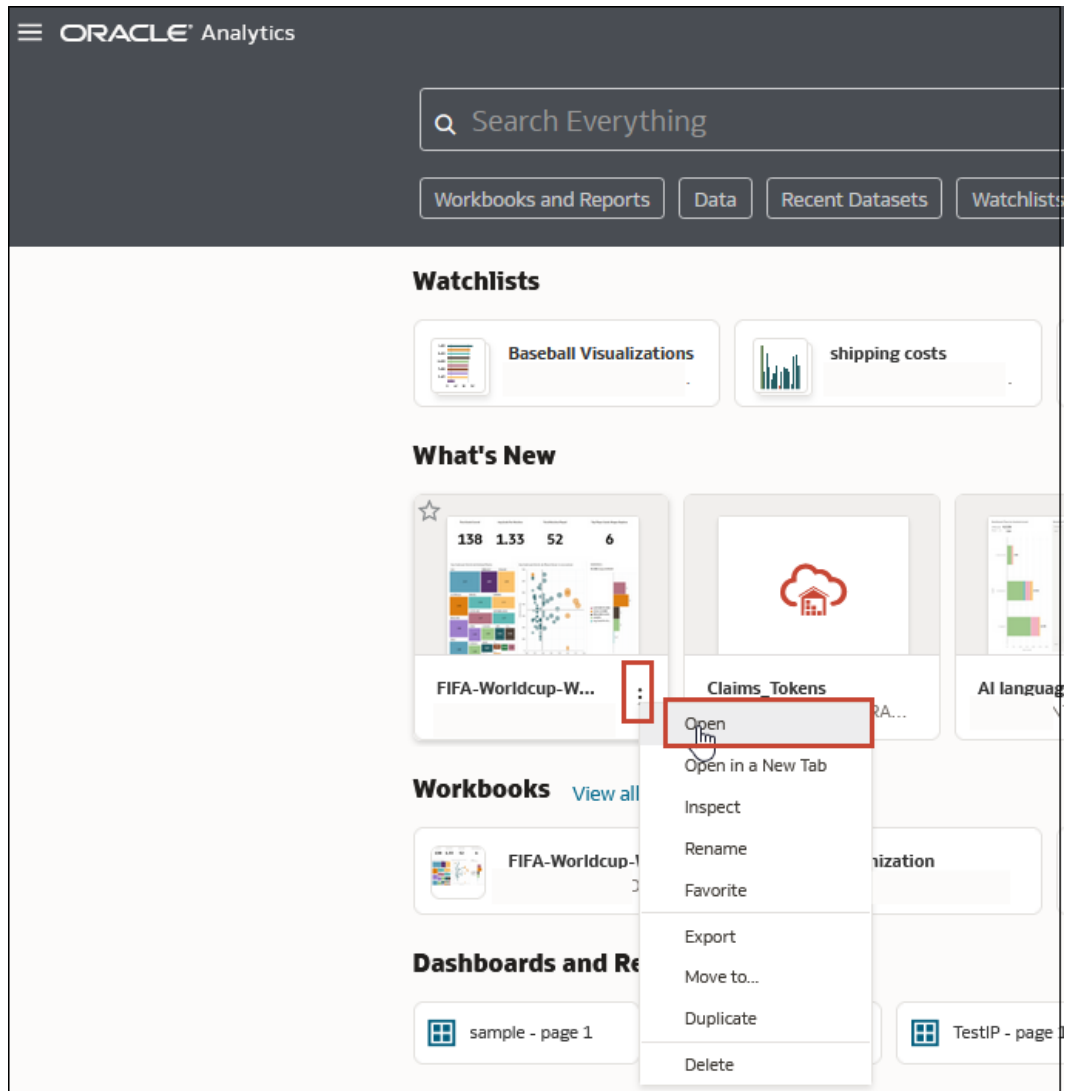
ビジュアライゼーション・プロパティの調整


ワークブックのビジュアライゼーションの表示方法をカスタマイズできます。たとえば、タイトル、凡例、ラベル、数値書式、背景、境界線および影を変更できます。

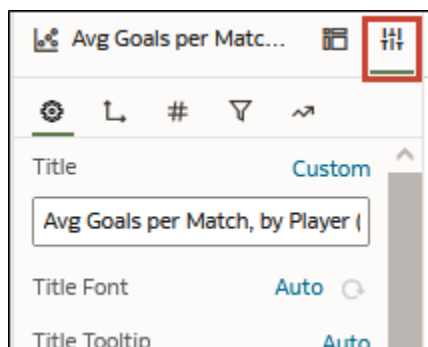
「プロパティ」ペインの下に表示されるタブとフィールドは、操作しているビジュアライゼーションのタイプに応じて異なります。

ワークブックにビジュアライゼーションがない場合は、作成します。[ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。



2. 「編集」をクリックして、作成者モードでワークブックを開きます。
3. 「ビジュアル化」キャンバスで、ビジュアライゼーションを選択します。
4. 「プロパティ」ペイン  のタブを使用して、必要に応じてビジュアライゼーションのプロパティを調整します。



ビジュアルライゼーションの境界線のプロパティの設定

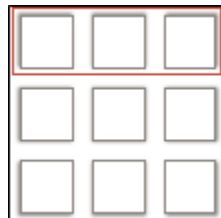
境界線を追加し、様々なプロパティ(線幅、スタイル、色など)を指定することにより、ビジュアルライゼーションの外観を強化できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「編集」をクリックして、編集のためにワークブックを開きます。
3. 「ビジュアル化」キャンバスで、境界線の設定を適用する1つ以上のビジュアルライゼーションを選択します。
4. 「プロパティ」ペインの「一般」タブをクリックします。
5. 「境界線」フィールドで、「なし」をクリックしてから境界線の設定を定義します:
 - 「四角形」または「円形」をクリックして、エッジが四角形または円形の標準境界線を作成します。
 - 「カスタム」をクリックして、独自の境界線の色、境界線の幅、エッジの半径、および線のスタイル(実線、破線または点線)を定義します。
6. 「保存」をクリックします。

ビジュアルライゼーションの影のプロパティの設定

1つ以上のビジュアルライゼーションに対して、影のプロパティ(影の表示場所など)およびその他の特性(影の色など)を指定できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「編集」をクリックして、編集のためにワークブックを開きます。
3. 「ビジュアル化」キャンバスで、境界線の設定を適用する1つ以上のビジュアルライゼーションを選択します。
4. 「プロパティ」ペインの「一般」タブをクリックします。
5. 「影」をクリックしてオプションを表示してから、影の設定を定義します:
 - いずれかの四角形をクリックして、影の位置(たとえば、左上、上部、右上)を定義します。




- 「カスタム」をクリックして、影の色、水平方向のオフセット(影の開始位置と横端とのギャップ)、垂直方向のオフセット(影の開始位置と上端または下端とのギャップ)、「ぼかし」(影のぼかしまたは濃さの程度)および拡散(影の拡散範囲)を選択します。

6. 「保存」をクリックします。

表およびピボットでの表示名の変更

独自のテキストを入力することで、表およびピボット表のビジュアライゼーションの列名をカスタマイズできます。

列名の変更では表示名が変更されるだけで、データセットやソース・データの列名が変更されるわけではありません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「編集」をクリックします。
3. ワークブックで、表またはピボットのビジュアライゼーションを選択します。
4. 「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」で、「エッジ・ラベル」をクリックします。
5. 列を展開します。「ヘッダーの表示」行で、「自動」、「カスタム」の順にクリックします。
6. 列の新しいカスタムの表示名を入力します。
7. 「保存」をクリックします。

ビジュアライゼーションのデータ・ポイントのサイズ変更

散布、コンボ、面、レーダー、ボックス・プロット、折れ線の各グラフなど、ポイントのあるビジュアライゼーションのポイント・サイズを指定できます。

ポイントを見やすくするために、ポイント・サイズの変更が必要になる場合があります。たとえば、ポイント同士が重なり合い、それぞれのポイントを識別するのが難しい場合です。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「編集」をクリックします。
3. データ・ポイントがあるビジュアライゼーションを選択します。
4. 「プロパティ」、「一般」の順にクリックし、「ポイント」を展開します。
5. サイズの文法にメジャーがない場合は、「サイズ」行をクリックして、ポイント・サイズを増やすまたは減らす値を入力するか、スライダを使用します。
6. サイズの文法にメジャーがある場合:
 - 最小ポイント・サイズを変更するには、「最小サイズ」行で「自動」をクリックし、「カスタム」を選択して値を入力します。
 - 最大ポイント・サイズを変更するには、「最大サイズ」行に値を入力します。
7. 「保存」をクリックします。

グラフの線のパターンおよび幅の変更

線、面、コンボ、オーバーレイ、レーダー、参照、トレンドまたは予測などのグラフの線のパターンおよび線の幅を指定できます。

グラフの線の外観を変更して、グラフをより見やすくすることがあります。たとえば、売上げの線が推定であることを示すために、売上げに点線を使用できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「**編集**」をクリックします。
3. 線を使用するグラフを選択します。
4. 「**プロパティ**」をクリックします。
5. このグラフ内のすべての線のデフォルト線パターンおよび幅設定を変更する場合、「**一般**」を選択して、「**線**」を展開します。
 - 線パターンを実線から変更するには、「**実線**」をクリックして、「**破線**」または「**点線**」を選択します。
 - 線の幅を変更するには、「**幅**」フィールドをクリックし値を選択するか、「**カスタム**」をクリックして線の幅の値をピクセル単位で入力します。たとえば、2.5px と入力します。
6. 線のパターンおよび幅を変更して、選択したメジャーのデフォルト値をオーバーライドするには、「**値**」を選択して、メジャーを展開します。たとえば、売上げを展開します。
 - 「**線パターン**」の値を変更するには、現在の値をクリックして、「**自動**」をクリックしてから「**実線**」、「**破線**」または「**点線**」を選択します。
 - 「**線幅**」の値を変更するには、現在の値をクリックし値を選択するか、「**カスタム**」をクリックして値をピクセル単位で入力します。たとえば、2.5px と入力します。
7. 「**保存**」をクリックします。

ビジュアライゼーションへの色の適用

色を使用してビジュアライゼーションを強化します。たとえば、ワークブック内の分析のデフォルト色パレットを変更できます。

トピック:

- [ビジュアライゼーションの色の割当てについて](#)
- [色のオプションへのアクセス](#)
- [色パレットの変更](#)
- [列への色の割当て](#)

ビジュアルライゼーションの色の割当てについて

ビジュアルライゼーションをより魅力的、動的、有益にするために、色を使用できます。一連のメジャー値(Sales や Forecasted Sales など)または一連の属性値(Product や Brand など)に色を付けることができます。

色の選択は、キャンバスのすべてのビジュアルライゼーションで共有されます。そのため、1 つのビジュアルライゼーションで系列色やデータ・ポイント色を変更した場合、他のビジュアルライゼーションでもそれが表示されます。

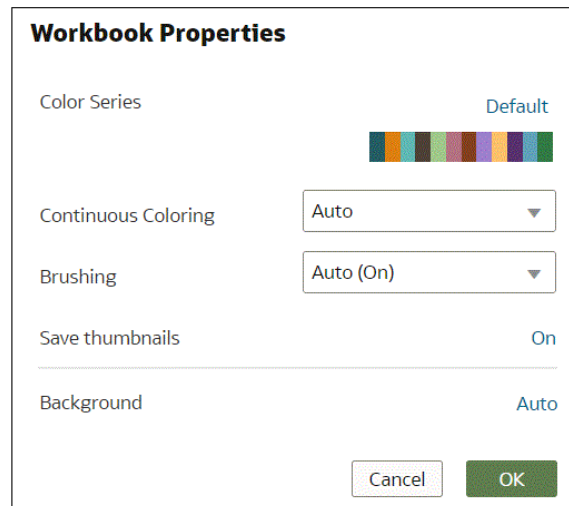
「ビジュアル化」 キャンバスには、メジャー列、属性列または属性列のセットを配置できる「色」セクションが文法パネルにあります。「色」セクションに含まれる列にキャンバスが色を割り当てます:

- メジャーが「色」セクションにある場合は、様々なメジャー範囲タイプ(単一色、2 色および 3 色など)を選択し、詳細メジャー範囲オプション(逆にする、ステップ数および中間など)を指定できます。
- 「色」セクションに 1 つの属性がある場合、デフォルトでストレッチ・パレットが使用されます。色パレットには設定された色数(12 色など)が含まれ、それらの色がビジュアルライゼーションで繰り返されます。ストレッチ・パレットは、それぞれの値が独自の色合いになるようにパレットの色を拡張します。
- 「色」セクションに複数の属性がある場合はデフォルトで階層パレットが使用されますが、かわりにストレッチ・パレットを使用するように選択できます。階層パレットは関連する値のグループに色を割り当てます。たとえば、「色」セクションの属性が Product と Brand であり、階層パレットを選択している場合、ビジュアルライゼーションの各ブランドは独自の色になり、その色の中で各製品が独自の色合いになります。

色のオプションへのアクセス

ワークブックおよびワークブック内の個々のビジュアルライゼーションの色オプションを設定できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. ワークブック全体の色オプションを編集する場合は、次のようにします:
 - a. ワークブック・ツールバーの「**メニュー**」をクリックして、「**ワークブック・プロパティ**」を選択します。
 - b. 色系列や連続的な色を編集するには、「**一般**」タブを使用します。
3. ビジュアルライゼーションの色オプションを編集する場合は、次のようにします。
 - a. ビジュアルライゼーションを選択して「**メニュー**」をクリックするか、右クリックします。
 - b. 「**色**」を選択します。使用可能な色のオプションは、ビジュアルライゼーションのメジャーおよび属性の設定方法によって異なります。



- c. ビジュアライゼーションの色を試してから、「**ビジュアライゼーション色のリセット**」を選択して元の色に戻せます。
- d. 「**ストレッチ・パレット**」を選択してこのオプションをオンまたはオフにします。
色パレットには設定された色数があり、ビジュアライゼーションに色数の値を超える値が含まれている場合は、パレット色が繰り返されます。パレット内の色数を拡張するには、「**ストレッチ・パレット**」オプションを使用します。色のストレッチ設定では、パレットの色に明るい色合いと暗い色合いが追加されて、各値が独自の色になります。一部のビジュアライゼーションに対しては、色のストレッチ設定がデフォルトで使用されます。

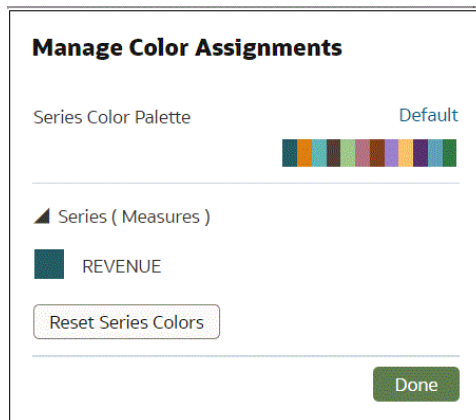
色パレットの変更

必要なものが見つかるまで、様々なカラー・パレットを切り替えることができます。

LiveLabs スプリント

各パレットには、ビジュアライゼーションに適用できる 12 色が含まれます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 色パレットを変更するビジュアライゼーションを選択します。
3. 「**メニュー**」をクリックするか、右クリックして、「**色**」を選択してから「**割当ての管理**」を選択します。
4. 「**系列色パレット**」を見つけ、現在ビジュアライゼーションで使用されている色パレットをクリックします(たとえば「**デフォルト**」や「**Alta**」)。

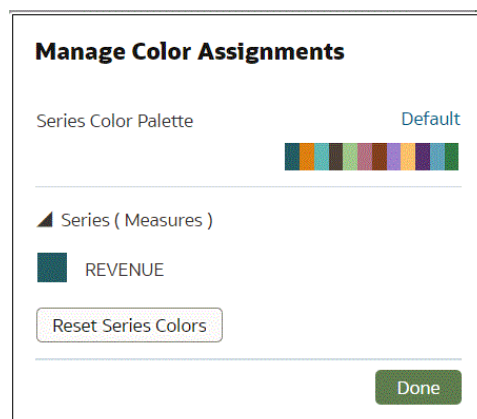


5. ビジュアライゼーションに適用する色パレットをリストから選択します。

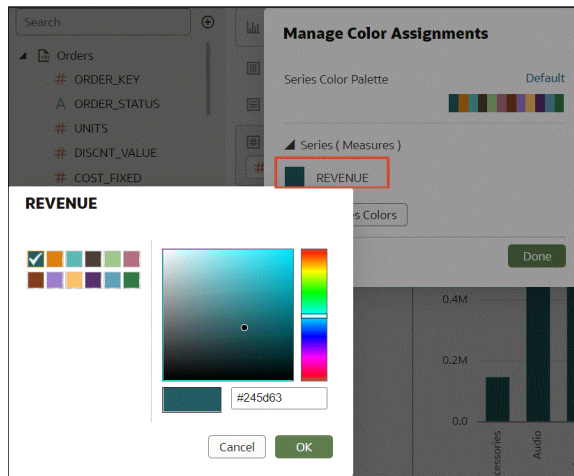
列への色の割当て

パレットのデフォルト色を使用するかわりに、特定の色を選択してビジュアライゼーションの外観を微調整できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 色を管理するビジュアライゼーションを選択します。
3. ビジュアライゼーション・ツールバーの「メニュー」をクリックするか、右クリックして、「色」を選択してから「割当ての管理」を選択します。
4. メジャー列で作業している場合は、次のように操作できます。
 - メジャーに割り当てられている色を含むボックスをクリックします。メジャーに割り当てる色を色ピッカー・ダイアログから選択します。「OK」をクリックします。
 - メジャーに対する色の範囲の表示方法(たとえば、色の範囲を逆にする、別の色の範囲を選択する、色の範囲の色合いの数を指定するなど)を指定します。



5. 属性列で作業している場合は、変更する色の割当てを含むボックスをクリックします。値に割り当てる色を色ピッカー・ダイアログから選択します。「OK」をクリックします。



条件付き書式を使用した重要なデータ・イベントの強調表示

条件付き書式を使用して、ビジュアライゼーションの重要なデータ・イベントを強調表示して、アクションを実行できるようにします。

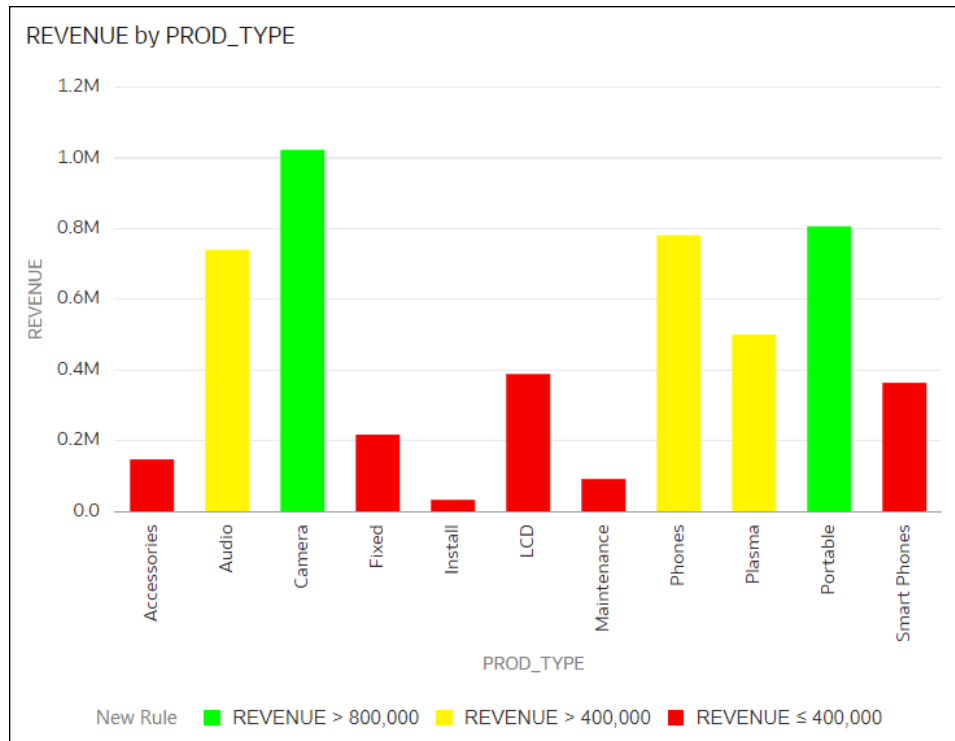
▶ [ビデオ](#)

トピック:

- [条件付き書式の使用法](#)
- [既存の条件付き書式ルールを使用したデータの書式設定](#)
- [データへの条件付き書式の追加](#)
- [例 - メジャーと一連のしきい値との比較](#)
- [例 - メジャーとターゲットまたは目標との比較](#)
- [例 - メジャーと複合式の値との比較](#)
- [例 - メジャーと値のパーセンテージの比較](#)

条件付き書式の使用法

条件付き書式を使用して、何か重要なことが発生した場合に強調表示するルールをデータに適用します。たとえば、収益が高、中および低のしきい値に一つ一致しているかを示すことができます。



条件付き書式ルールを、ワークブック・レベルまたはビジュアライゼーション・レベルで使用可能にできます。

条件付き書式は、データ内のイベントまたは変更を確認する手段をビジネス・ユーザーに提供します。たとえば、収益が高、中または低のしきい値にいつ一致しているかをユーザーが確認したい場合、コンテンツの作成者は、収益データ・ポイントを緑、オレンジまたは赤で色分けするルールを作成します。

コンテンツ作成者は、次のことを実行できます：

- 複数のルールを同時に適用します。
- 1つのメジャーに複数のルールを同時に適用します。
- ルールの適用順序を変更します。
- ルールのオンとオフを切り替えます。

条件付き書式は、年間収益、製品単位数、学年度中に学校に戻らなかった学生数などのメジャーと次のいずれかを比較します：

- 一連のしきい値。
たとえば、血圧が 90 よりも高いか 70 よりも低い場合は値を赤色で強調表示します。
- ターゲットまたは目標。
たとえば、費用が予算を上回っている場合は値を赤色で強調表示します。
- ターゲットのパーセンテージ。
たとえば、売上目標の 80% に到達したら値を緑色で強調表示します。
- 複雑な式。
たとえば、昨年と同じ期間と比較して 5% の売上増加を達成したら値を緑色で強調表示します。

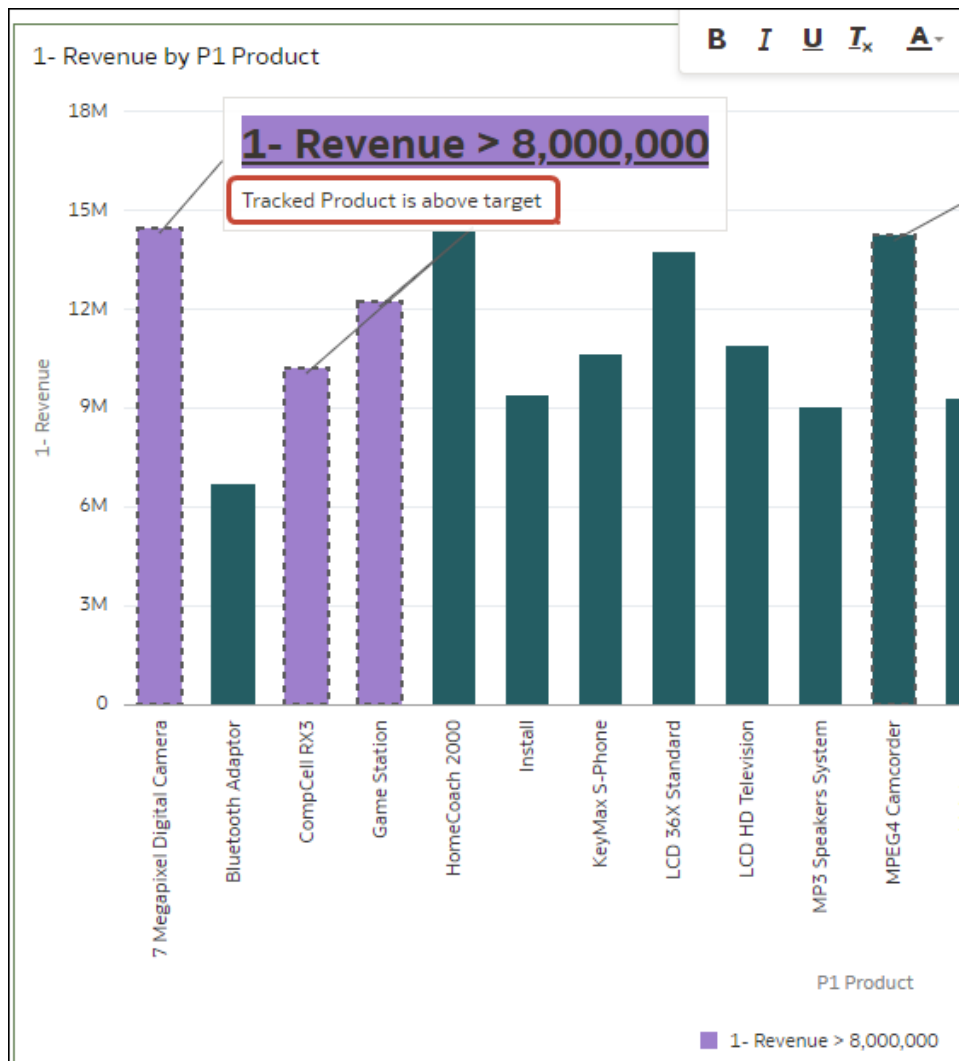
ノート: ピボット表の小計または総計に条件付き書式を適用することはできません。

次の書式を設定できます:

- 塗りつぶしの色と色の濃さ。
- フォント、フォント・サイズ、フォントの色およびフォント・スタイル。

次のことも可能です:

- マップに条件付き書式を適用します。
- ラベル、ツールチップおよび凡例を追加します。たとえば、データ・ポイントにカーソルを合せたときに、適用されているルールを識別するためのラベル"Tracked product is above target"を表示します。



- 値が複数のルールと一致する場合、ルールをブレンドします。たとえば、フォント・スタイルはブレンドしますが、背景色の区別は保持します。1つのメジャーに複数のルールを適用する場合、trueに評価される最後のルールが、そのアイテムの色を決めるルールになります。たとえば、ルール1は100万を超える収益が緑色で強調表示され、ルール2は目標を下回る収益が赤色で強調表示される場合、収益が両方の基準を満たすアイテムは赤色で強調表示されます。ブレンドが選択され

ていると(「**ルール・ブレンドの有効化**」オプション)、true に評価される最初のルールのテキスト・フォントとスタイルが、基準を満たしているすべての値に適用されますが、背景色は後続のルールに従って区別されます。

- 条件付き書式を Oracle Analytics アプリケーションにデプロイします。

既存の条件付き書式ルールを使用したデータの書式設定

データ内の重要なイベントを強調表示するには、既存の条件付き書式ルールをアクティブまたは非アクティブにします。たとえば、収益が高、中および低のしきい値に一つ一致しているかを示すことができます。

📺 ビデオ

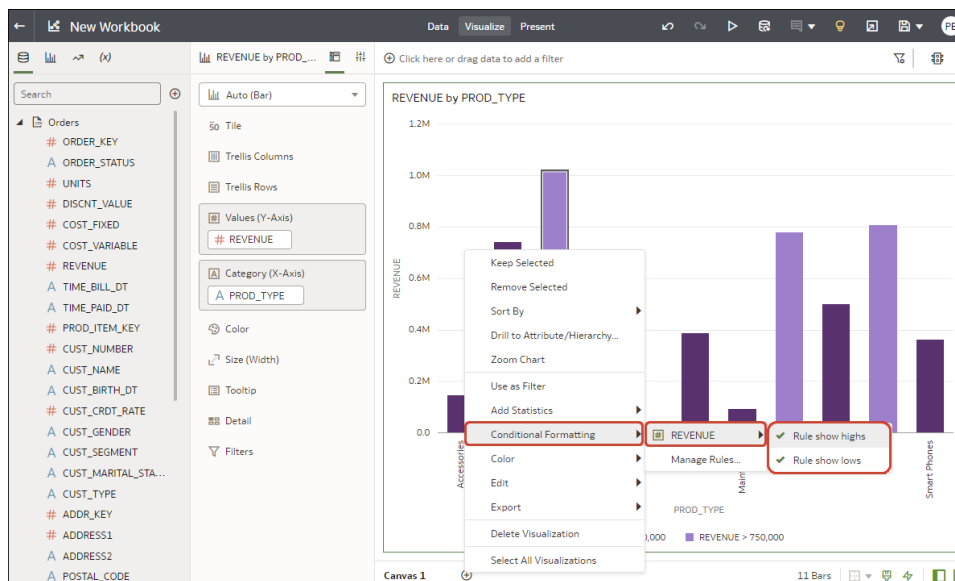
📄 チュートリアル

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「**ビジュアル化**」をクリックします。
3. ビジュアライゼーション・エディタから、ビジュアライゼーションにカーソルを合せ、右クリックしてから「**条件付き書式設定**」を選択してルールが使用可能になっているメジャーを表示します。

メジャーに使用可能なルールがない場合は、「**ルールの管理**」をクリックして「条件付き書式設定」ダイアログを表示します。ここでルールを作成できます。

4. メジャー(REVENUE など)をクリックして、メジャーで使用可能なルールを表示します。

この例では、REVENUE には'Rule show highs'および'Rule show lows'という 2 つのルールが使用可能です。アクティブなルールにはチェック・マークが付いています。





5. ルールをクリックしてアクティブまたは非アクティブにします。

データへの条件付き書式設定の追加

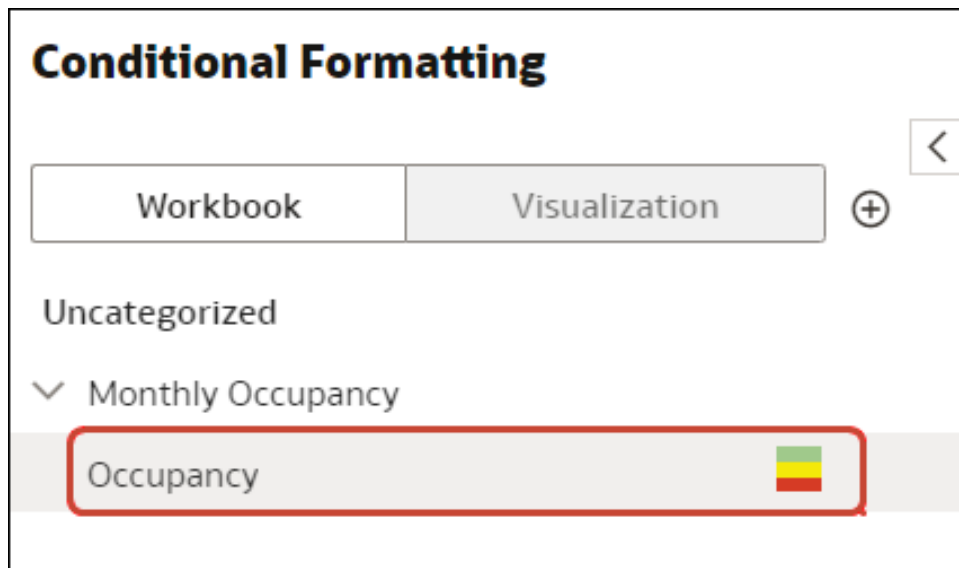
条件付き書式を追加して、データの重要なイベントを強調表示します。たとえば、rentral プロパティの稼働率が高、中および低のしきい値にいつ一致しているかを示すことができます。

 ビデオ

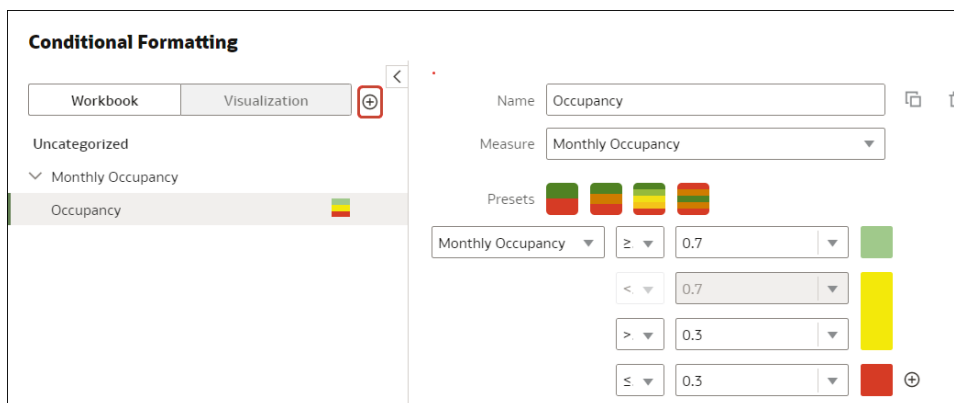
 チュートリアル

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「ビジュアル化」をクリックします。
3. ビジュアライゼーション・ツールバーから、「条件付き書式設定」()をクリックします。
4. 「ワークブック」または「ビジュアライゼーション」をクリックして、ワークブック全体またはビジュアライゼーションに固有の条件付き書式を追加します。

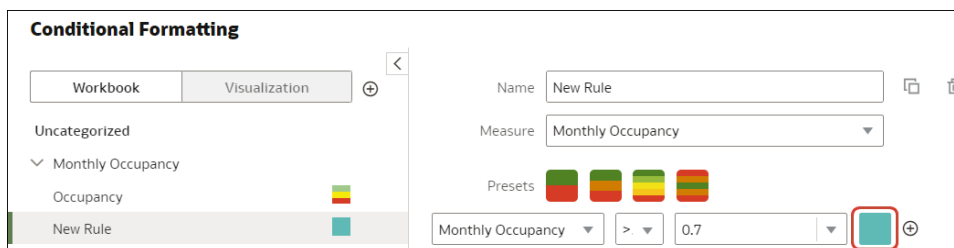
既存のルールはターゲット・メジャーの下にリストされます。たとえば、このスクリーンショットでは、分類されていないルールがないため、「未分類」リストは空で、ルール稼働率がメジャー月次稼働率の下にリストされます。ターゲット・メジャーが指定されるまで、ルールは「未分類」として表示されます。



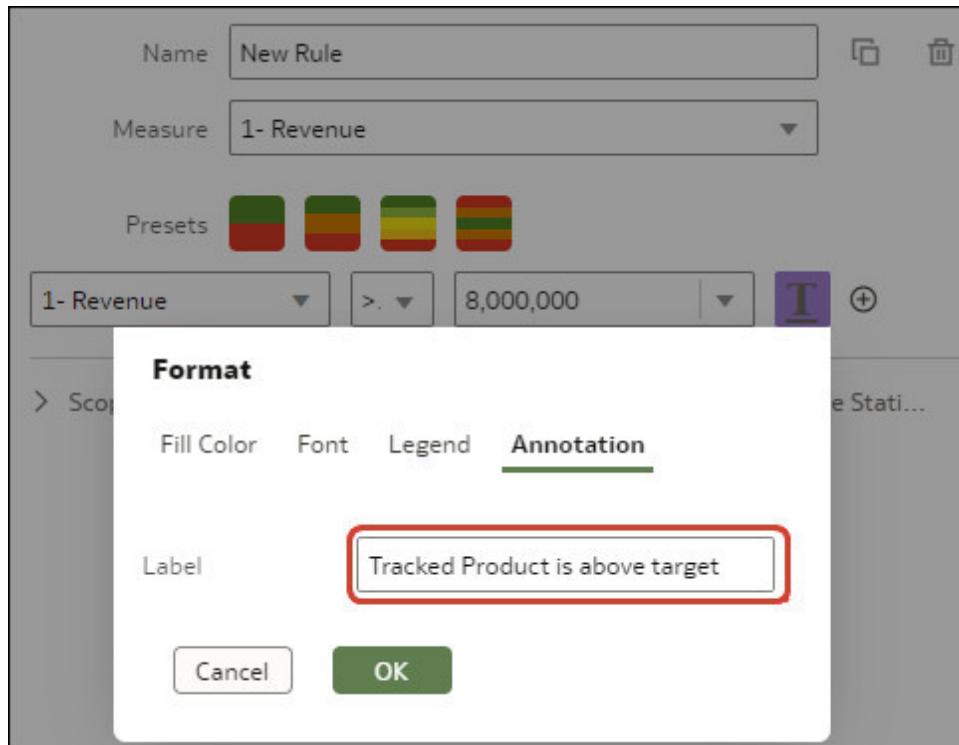
5. 「新規ルールの追加」をクリックします。



6. 「名前」フィールドのデフォルト名を、よりわかりやすい用語に変更します。
7. 「メジャー」で、ルールによって評価されるデータ・メジャーを選択します。
たとえば、稼働率が高、中、低のしきい値に一つ一致しているかを強調表示するには、月次稼働率を選択できます。
8. 演算子フィールドと、隣接する値フィールドを使用して、しきい値を指定します。
たとえば、0.7 を超える稼働率を強調表示するには、演算子フィールドで、大なり記号(>) を選択して、値フィールドに 0.7 を入力します。
「プリセット」のいずれかをクリックし、各しきい値の値を定義して、ルールを作成することもできます。たとえば、「3 ステップのしきい値」をクリックして、一連のストップライトしきい値を作成します。
9. 「フォーマット」をクリックして「フォーマット」ダイアログを表示し、新規ルールの塗りつぶしの色、フォント、凡例および注釈をフォーマットします。



たとえば、「注釈」パネルで、「ラベル」の値を入力して、ルールのしきい値に一致するデータ・ポイントにカーソルを合せたときに適用可能な条件を示すラベルを表示します。



10. ルールを追加するには、ステップ5から9を繰り返します。

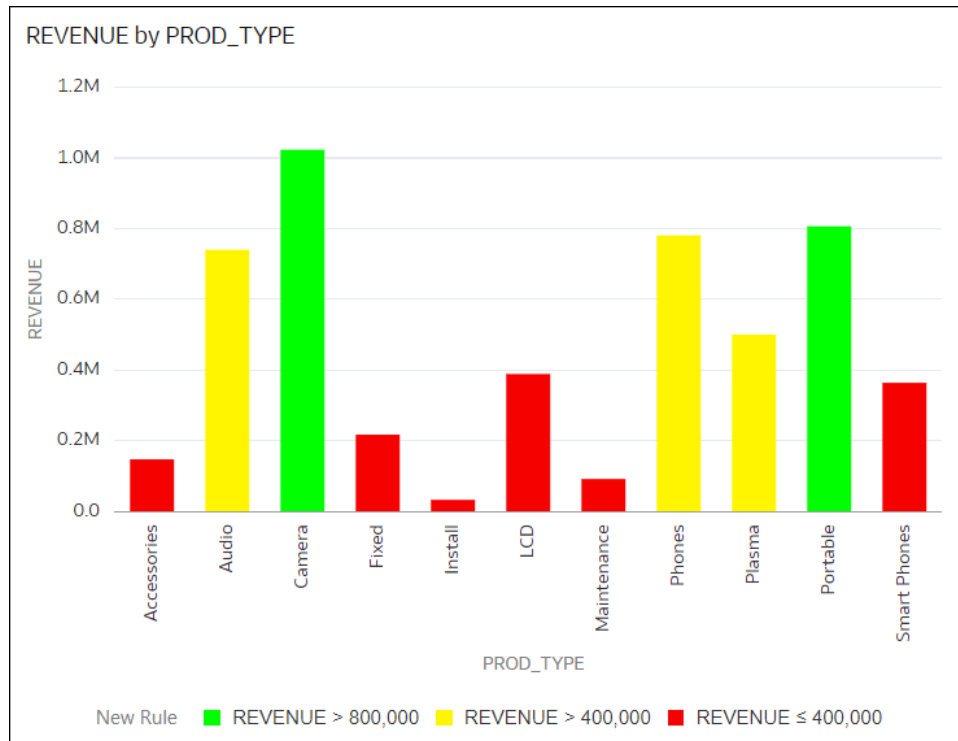
複数のルールを同じメジャーに適用する場合は、グラブ・ハンドルを使用して目的の順序でルールを配置し(一番上のルールが最初にアクティブ化されます)、「**ルール・ブレンドの有効化**」をクリックします(テキストのフォントとスタイルを結合するが背景色の区別は保持する場合)。

11. 「保存」をクリックします。

例 - メジャーと一連のしきい値との比較

この例は、メジャーと低、中、高のしきい値を比較するための条件付き書式(ストップライト書式とも呼ばれます)の使用方法を示しています。

この例では、オーディオ、電話、付属品などの製品タイプの収益レベルを強調表示します。800,000を超える収益を緑色で表示し、400,000から800,000までの収益を黄色で表示し、400,000を下回る収益を赤色で表示します。



次に、「条件付き書式」ダイアログを使用したこの例の構成方法を示します。

- 「名前」フィールドに、「Stoplight」と入力します。
- 「メジャー」フィールドで「Revenue」を選択します。
- 「プリセット」で、「3ステップのしきい値」をクリックして、3ステップのテンプレートを表示します。
- 最初のステップで、大なり記号(>)を選択して、値として800,000を入力します。
- 2つ目のステップで、大なり記号(>)を選択して、値として400,000を入力します。

Conditional Formatting

Dataset Workbook Visualization

REVENUE

Stoplight

Name: Stoplight

Measure: REVENUE

Presets: 3-step threshold

REVENUE > 800,000 (Green)

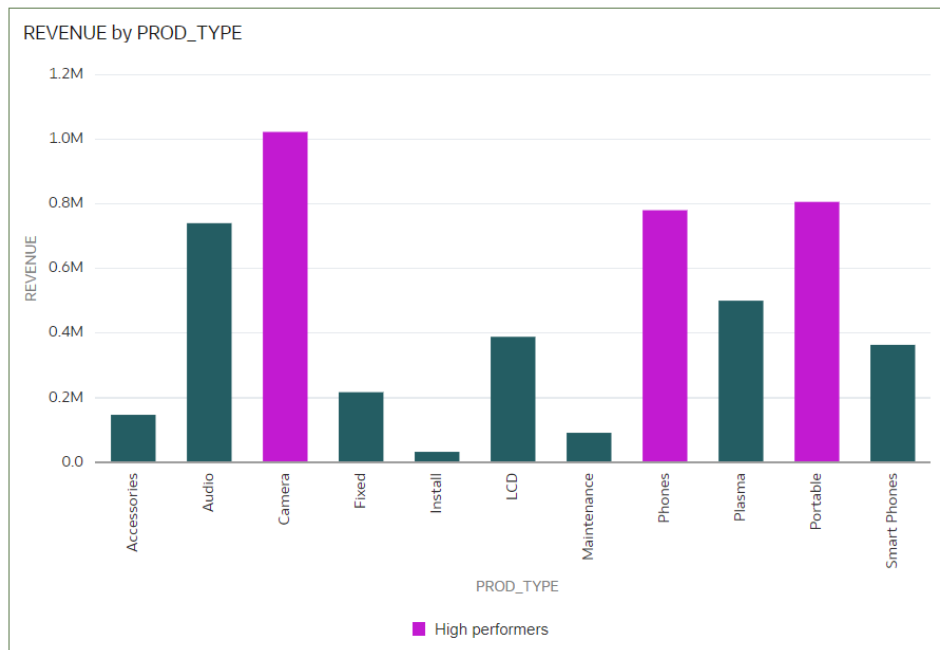
REVENUE > 400,000 (Yellow)

REVENUE ≤ 400,000 (Red)

例 - メジャーとターゲットまたは目標との比較

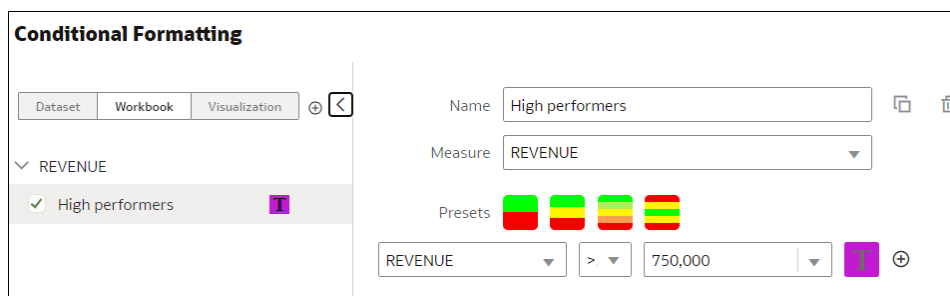
この例は、メジャーとターゲットまたは目標を比較するための条件付き書式の使用方を示しています。

この例では、収益が 750,000 を超えるオーディオ、電話、付属品などの製品タイプを強調表示します。



次に、「条件付き書式」ダイアログを使用したこの例の構成方法を示します。

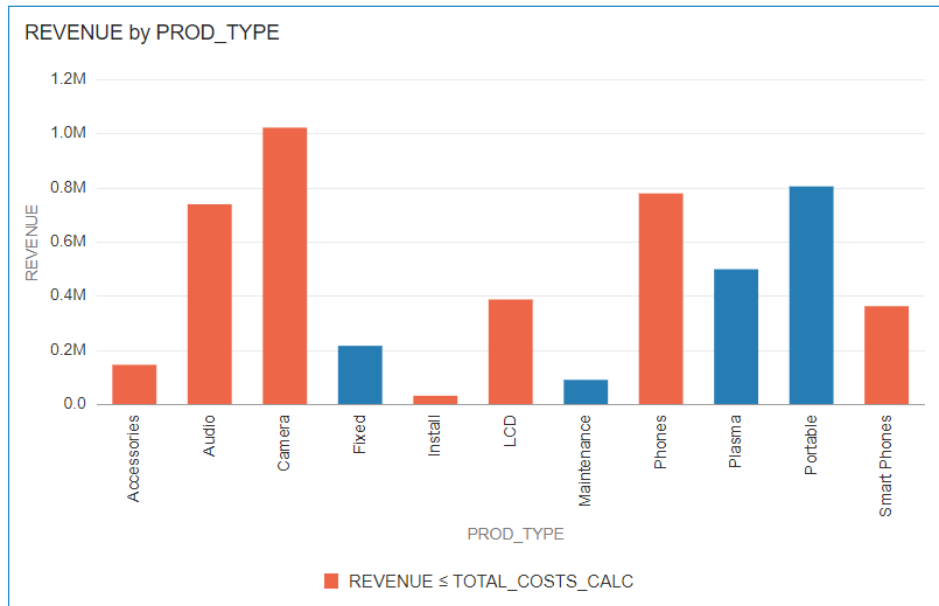
- 「名前」フィールドに、「High performers」と入力します。
- 「メジャー」フィールドで「Revenue」を選択します。
- 演算子リストで、大なり記号(>)を選択して、値ボックスに 750,000 を入力します。
- 「フォーマット」をクリックし、色ピッカーを表示して紫の色合いを選択します。



例 - メジャーと複合式の値との比較

この例は、メジャーと、式で計算された値を比較するための条件付き書式の使用方を示しています。

この例では、固定コスト、変動コストおよび割引額を合計する式を使用して計算する合計コストに対して、収益を比較します。



次に、「条件付き書式」ダイアログを使用したこの例の構成方法を示します。

- 「名前」フィールドに、「Compare revenue to costs」と入力します。
- 「メジャー」フィールドで「Revenue」を選択します。
- 演算子リストで、以下記号(\leq)を選択します。
- 値ボックスで、下矢印をクリックし、「f(x)」をクリックして計算エディタを表示します。
- 「名前」フィールドで TOTAL_COSTS_CALC と指定して、計算フィールドで COST_FIXED + COST_VARIABLE + DISCNT_VALUE と指定します。

Calculation

Name: TOTAL_COSTS_CALC $f(x)$

COST_FIXED + COST_VARIABLE + DISCNT_VALUE

Validate Cancel Save

- 式を検証して「保存」をクリックします。
- 「フォーマット」をクリックして色ピッカーを表示し、赤の色合いを選択します。

Conditional Formatting

Dataset Workbook Visualization

Name: Compare revenue to costs

Measure: REVENUE

Presets: [Color Picker]

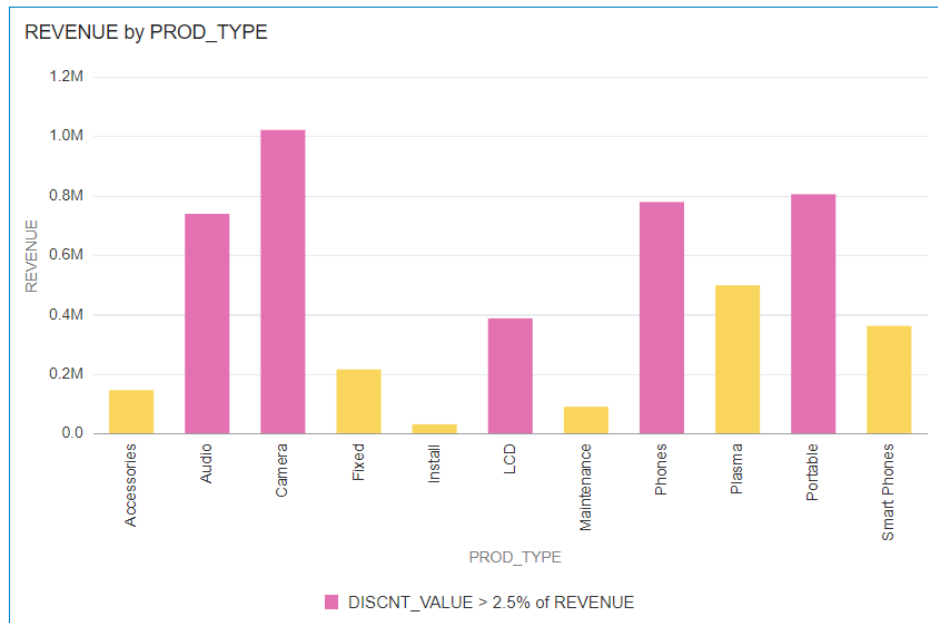
REVENUE ≤ TOTAL_COSTS_C... [Color Picker]

> Scope

例 - メジャーと値のパーセンテージの比較

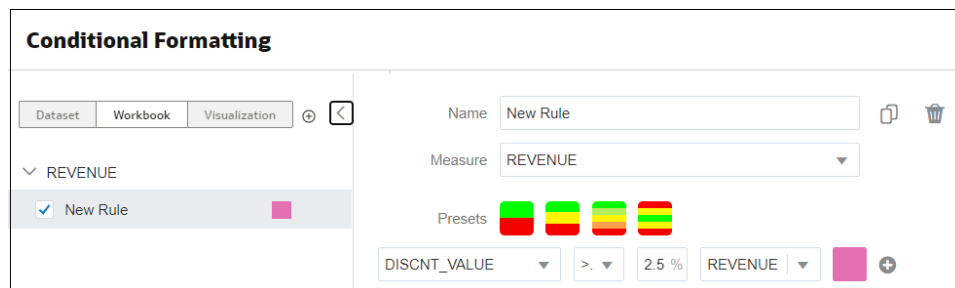
この例では、条件付き書式を使用してメジャーと値のパーセンテージを比較する方法を示します。

この例では、オーディオ、電話機、付属品などの製品タイプの割引額(DISCNT_VALUEに格納されている)が収益の2.5%を上回る場合にこれらを強調表示します。



「条件付き書式」ダイアログを使用して、この例を構成する方法を次に示します。

- 「**メジャー**」フィールドで「Revenue」を選択します。
- 「**プリセット**」の下のドロップダウン・リストで「DISCNT_VALUE」を選択します。
- 演算子ドロップダウン・リストで、大なり記号「>」を選択し、値ボックスに「2.5」を入力して、「%」をクリックします。
- 「**フォーマット**」をクリックし、色ピッカーを表示して紫の色合いを選択します。



列の数値の書式設定

ビジュアライゼーションの列の数値を、すぐに使用できる様々な書式を使用して書式設定できます。たとえば、集計タイプを合計から平均に変更できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「データ・パネル」で、列を選択します。
3. 選択した列のプロパティ・ペインで、「**一般**」または「**数値書式**」タブを使用して、数値プロパティを変更します。

- **一般** - 列名、データ型、処理形式(メジャーまたは属性)および集計タイプを変更します。
たとえば、数値の集計方法を変更するには、「**集計**」オプションを使用します。
 - **数値書式** - 数値列のデフォルトの書式を変更します。
4. 「**保存**」をクリックします。

ビジュアライゼーションの数値の書式設定

ビジュアライゼーションの数値プロパティを、すぐに使用できる様々な書式を使用して書式設定できます。

たとえば、データ・ラベル、通貨、小数点以下の桁数、スケール数値または通貨オプションに対する省略プリセット、負の数値、ツールチップの数値および集計方法の表示方法を変更できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「**ビジュアル化**」をクリックして、ビジュアライゼーションを選択します。
3. 選択したビジュアライゼーションのプロパティ・ペインで、「**値**」タブを使用して、数値プロパティを変更します。

たとえば、負の値を赤色で表示するように数値書式を変更するには、「**数値書式**」で、「**負の値**」をクリックして、赤いオプション、**123** または **(\$123)** を選択します。
4. 「**保存**」をクリックします。

数値および通貨値のスケール・オプションの設定

1,000(K)、100 万(M)、10 億または兆(T)に対する数値および通貨を表示するためのビジュアライゼーション列に対する省略プリセット・スケール・オプションを選択できます。

32,810.00 などの列の数値スケール・フォーマットを変更して、32.81K などの省略プリセット数値スケール・フォーマットで表示できます。たとえば、「**K**」を選択して、売上げ列の値の表示を **\$37,723.21** などから **\$37.72K** などのように変更できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「**ビジュアル化**」をクリックして、ビジュアライゼーションを選択します。
3. 選択したビジュアライゼーションのプロパティ・ペインで、「**値**」タブを選択して、メジャー列を展開します。
4. 「**数値書式**」で、「**省略形**」をクリックします。
5. 値を選択します。
 - 数字を自動的にスケールし省略する場合は、「**オン**」を選択します。
 - 特定のスケールおよび省略形の値を選択する場合、値を選択します。
 - 省略を無効化する場合は、「**オフ**」を選択します。
6. 「**保存**」をクリックします。

ビジュアライゼーションの通貨記号の設定

ビジュアライゼーションでメジャー値を設定して、適切な通貨記号を表示できます。

カスタム通貨を使用して通貨に関連付けられている記号を表示するように、メジャーを構成できます。たとえば、ヨーロッパの元帳を表示するようにキャンバス・フィルタを設定すると、カスタム通貨プロパティに関連付けられているメジャー値ごとにユーロ記号が表示されます。ワークブック・データには、「元帳通貨」列などの通貨コード列を含める必要があります。通貨コード列を使用すると、「利益」列などのメジャー列に適切な通貨記号を表示できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 選択したメジャーのプロパティ・パネルで、「**値**」タブをクリックし、「**数値書式**」をクリックして「**通貨**」を選択します。
3. 「**通貨**」フィールドで、現在表示されている値をクリックして「**カスタム**」を選択します。
4. 「**カスタム**」フィールドに、通貨コードを決定する列を追加します。
5. 「**保存**」をクリックします。

ビジュアライゼーションへのノートの追加

ノートを使用してビジュアライゼーションに注釈を付け、関心のある領域をコールアウトしたり、特定のデータ・ポイントを強調したりします。

トピック:

- [ビジュアライゼーションへのノートの追加](#)
- [ビジュアライゼーションのデータ・ポイントへのノートの接続](#)
- [ノートのデータ・ポイント・コネクタの表示または非表示](#)
- [ノートのデータ・コネクタの削除](#)
- [ビジュアライゼーションのノートの表示または非表示](#)

ビジュアライゼーションへのノートの追加

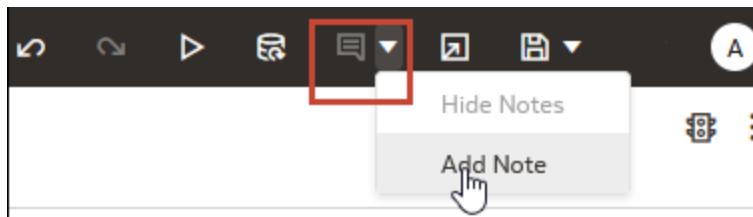
ノートを追加して、ワークブックのビジュアライゼーションで重要な情報を呼び出すことができます。ノートを使用して、キャンバス内の 1 つまたはすべてのビジュアライゼーションに注釈を付けたり、表の列や散布図のクラスターなど、ビジュアライゼーションの特定のデータ・ポイントを強調したりできます。

ノートの内容をカスタマイズするために使用できる多くの書式設定オプションがあります。たとえば、フォントのタイプ、サイズおよび色を選択したり、箇条書きリストや番号付きリストを追加したり、URL リンクを追加したりできます。

ノートを追加する際には、データ・コネクタを追加して、ビジュアライゼーションの特定のポイントを呼び出したり、ノートを作成して、後でデータ・ポイント・コネクタを追加または調整したりできます。[ビジュアライゼーション内のデータ・ポイントへのノートの接続](#)を参照してください。

デフォルトでは、追加したノートが表示されますが、ビジュアライゼーションのノートを非表示にできます。[ビジュアライゼーションのノートの表示または非表示](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. ワークブックで、「ビジュアル化」をクリックします。
 - データ・ポイント・コネクタを使用せずにノートを追加するには、「ノート」アイコンをクリックし、「ノートの追加」を選択します。
 - データ・ポイント・コネクタを使用してノートを追加するには、ノートを追加するビジュアライゼーションに移動し、[Ctrl]キーを押しながら、ノートを接続するデータ・ポイントを最大10個までクリックします。次に、「ノート」アイコンをクリックし、「ノートの追加」を選択します。



3. ノート・ボックスにノート・テキストを入力し、書式設定オプションを使用して、ノートのフォント・スタイル、色、サイズなどを指定します。
4. オプション: ノートにリンクを追加するには、リンクにするノート・テキストを強調表示します。「リンク」をクリックし、「ハイパーリンク」ダイアログでURLを入力します。「OK」をクリックします。
5. 「保存」をクリックします。

ビジュアライゼーションのデータ・ポイントへのノートの接続

コネクタをノートに追加して、ビジュアライゼーション内の特定のデータ・ポイントを識別します。

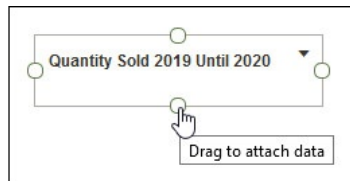
LiveLabs スプリント

ビジュアライゼーションまたはキャンバス上の最大10個のデータ・ポイントにノートを接続できます。次のビジュアライゼーション・タイプでデータ・ポイントにノートを接続することはできません:

- コード図
- 相関マトリックス
- リスト
- マップ
- パラレル座標
- タイル

デフォルトでは、ノートのデータ・ポイント・コネクタが表示されますが、非表示にすることができます。[ノートのデータ・ポイント・コネクタの表示または非表示](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. データ・ポイントにアタッチするノートを見つけてカーソルを合せます。円をクリックしたまま、ノートを接続するデータ・ポイントまで線をドラッグします。円を複数のデータ・ポイントに接続できます。

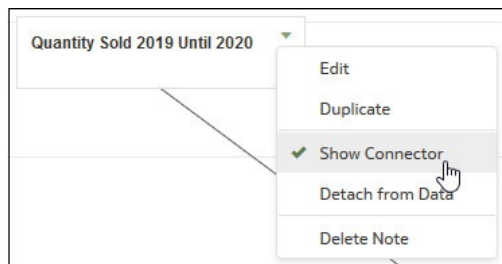


3. 「保存」をクリックします。

ノートのデータ・ポイント・コネクタの表示または非表示

デフォルトでは、ノートのデータ・ポイント・コネクタが表示されますが、必要に応じて表示または非表示にできます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 表示または非表示にするコネクタを含むノートを見つけてカーソルを合せます。「クリックして編集」、「コネクタの表示」の順にクリックします。



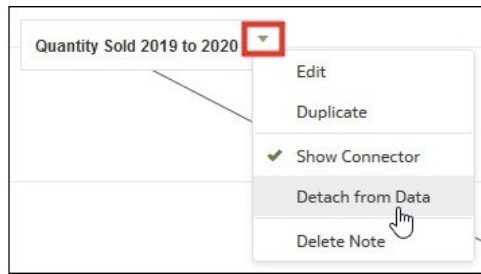
3. 「保存」をクリックします。

ノートのデータ・コネクタの削除

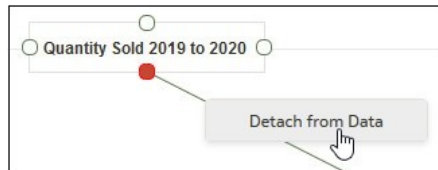
ノートのデータ・コネクタを 1 つ以上削除できます。

ノートのデータ・コネクタを削除するのではなく、非表示にすることができます。[ノートのデータ・ポイント・コネクタの表示または非表示](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. オプション: すべてのコネクタを削除するには、コネクタを含むノートを見つけてカーソルを合せます。「クリックして編集」、「データからのデタッチ」の順にクリックします。



3. オプション: 個々のコネクタを削除するには、コネクタにカーソルを合せて右クリックし、「データからのデタッチ」をクリックします。



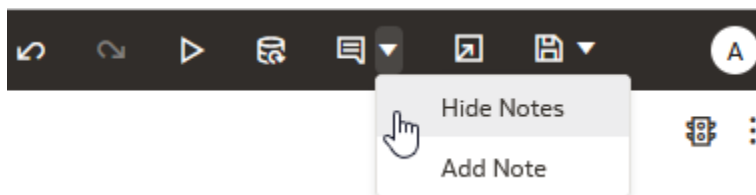
4. 「保存」をクリックします。

ビジュアライゼーションのノートの表示または非表示

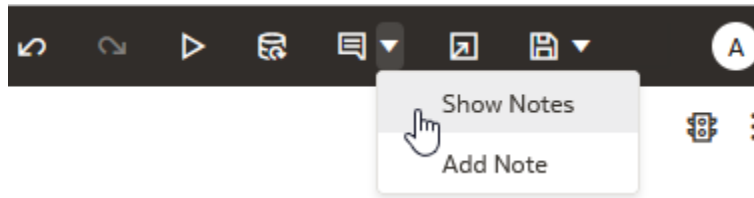
デフォルトでは、ワークブックのビジュアライゼーション・ノートが表示されますが、すべてのノートを表示または非表示にできます。

ワークブックからプレゼンテーション・フローを作成した場合は、「ビジュアル化」ですべてのノート为非表示にしても、キャンバスに含まれるすべてのノートがダッシュボードに表示されます。キャンバスを追加してプレゼンテーション・フローおよびワークブックを作成する「表示」ページで、キャンバスの「ノート」プロパティを使用して、キャンバスの個々のノートを表示および非表示にできます。プレゼンテーション・フローおよびワークブックに複数のキャンバスが含まれている場合は、キャンバスごとに個々のノートを表示および非表示にするように設定できます。「表示」でのキャンバス・ノートの表示または非表示を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. オプション: ワークブックのノートが表示されている場合は、「ノートの非表示」をクリックします。



3. オプション: ワークブックのノートが表示されていない場合は、「ノートの表示」をクリックします。



4. 「保存」をクリックします。

ビジュアライゼーションでのデータのソート、ドリルおよび選択

データのソート、ドリルおよび選択によって焦点を絞り、データの特定の側面を探索できます。

LiveLabs スプリント

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. ビジュアライゼーションを選択して「メニュー」をクリックします。
3. 次のいずれかを選択します:

- 「ソート基準」をクリックしてから「カスタム」を選択するか、ビジュアライゼーション・ツールバーで「ソート」をクリックして「ソート順」ダイアログを表示します。ここで、ビジュアライゼーションの 1 つ以上の属性をソートできます。ソートを作成して表示したり、ソート属性を定義したり、複数のソートのソート順を配置したり、ソートの競合を表示して解決したりできます。ビジュアライゼーションで使用されないメジャー列によって属性をソートすることもできます。表に小計が含まれていたり、ディメンションが含まれている場合、小計またはディメンションの後の列のすべての列ソートは、小計グループでソートされます。

複数のソートが含まれる表ビューで作業している場合は、常に最初にソートした最後の列がソートされます。特定の値が左列に表示される場合は、中央列をソートできない場合があります。たとえば、左列が製品で中央列が製品タイプの場合、製品タイプ列ではソートできません。この問題を回避するには、列の位置を入れ替えて、再度ソートを試みます。

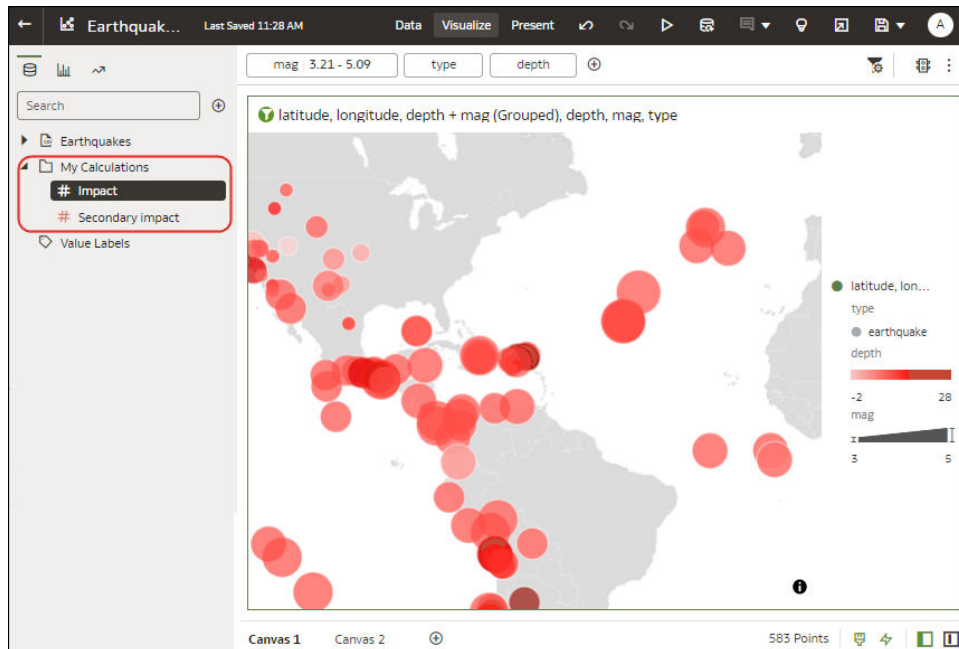
- 「ドリル」をクリックして、データ要素へのドリルを作成し、データ要素内の階層へのドリルを作成します(たとえば、四半期内の週へのドリルを作成できます)。複数のデータ要素を使用してドリルを作成することもできます。たとえば、ピボット表の列である 2 つの異なる年メンバーを選択し、そのメンバーにドリルして詳細を表示できます。
- 「[Attribute Name]にドリル」をクリックして、ビジュアライゼーション内の特定の属性に直接ドリルします。
- 「選択項目の保持」をクリックして、選択済メンバーのみを保持し、ビジュアライゼーションおよびリンクされたビジュアライゼーションから他のすべてのメンバーを除去します。たとえば、特定の販売担当者によって生成された販売のみを保持できます。
- 「選択項目を除去」をクリックして、ビジュアライゼーションおよびリンクされたビジュアライゼーションから選択済メンバーを除去します。たとえば、選択から東部地域と西部地域を除去できます。

「マイ計算」の概要

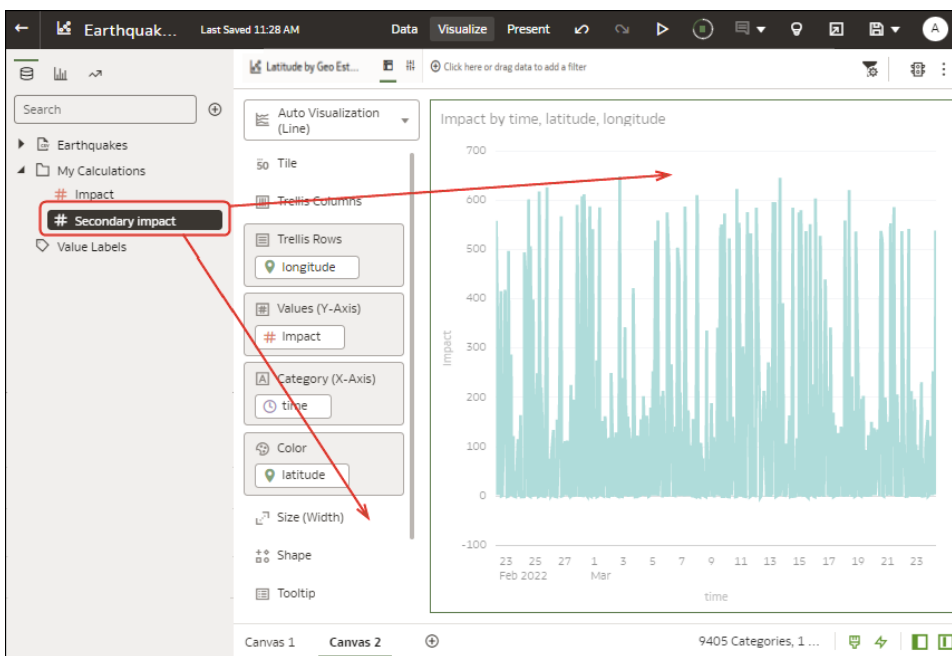
「マイ計算」領域では、ワークブック内の計算を管理および再利用できます。

計算を作成すると、それらはデータ・パネルの「マイ計算」領域に格納され、任意のキャンバスおよびワークブックのビジュアライゼーションでそれらを再利用できます。たとえば、height および width のデータ要素がある場合は、height に width を乗算(つまり、 $height * width$)して、area を計算できます。area の計算をワークブック内の他のビジュアライゼーションで再利用できます。

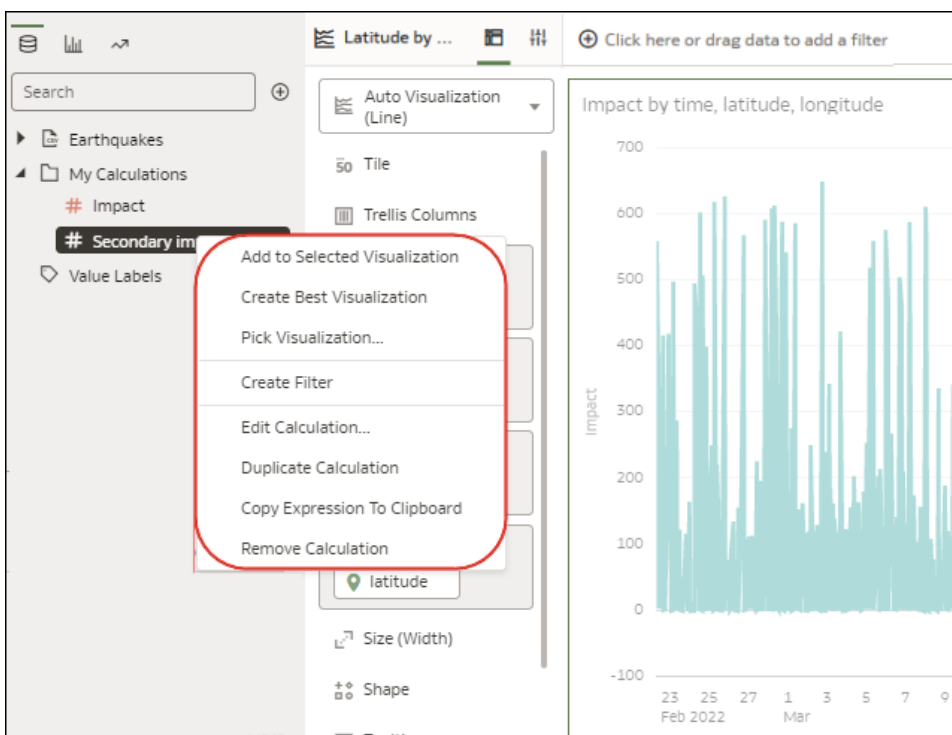
- ワークブック・エディタで、「マイ計算」領域の既存の計算を確認し、データ・パネルに属性を表示する計算を選択します。



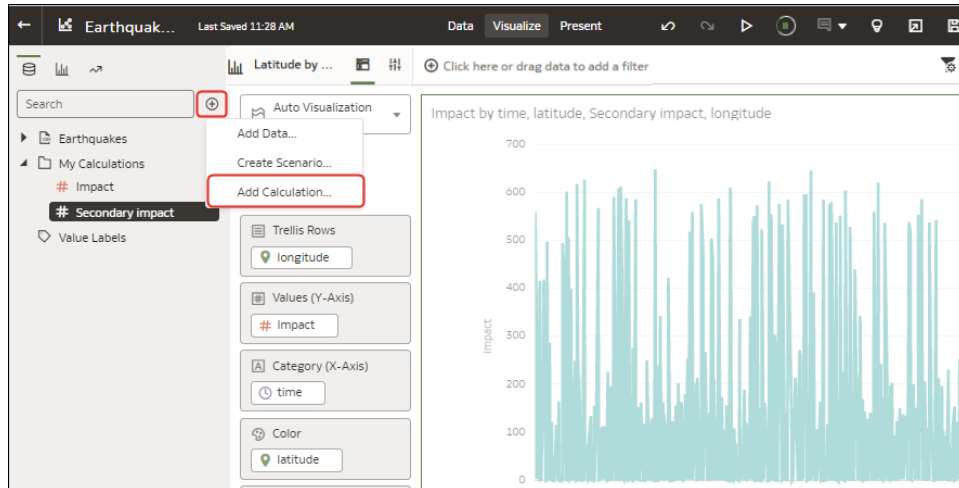
- ビジュアライゼーションに計算を追加するには、「マイ計算」領域からビジュアライゼーションまたは文法パネルにドラッグします。



- 計算を右クリックして編集オプションを表示します。たとえば、選択したビジュアライゼーションに追加したり、データのフィルタ処理に使用したり、Oracle Analytics によって最適なビジュアライゼーション・タイプが選択される(つまり、「**最高のビジュアライゼーションの作成**」)ようにしたりすることができます。



- ワークブックで使用する新規の値を計算するには、「**追加**」、「**計算**」の順にクリックして、「新規計算」ダイアログを表示します。このダイアログで、詳細(height * width など)を指定できます。新しい計算が「マイ計算」領域に追加されます。



クラスタまたは外れ値に基づいた計算の作成

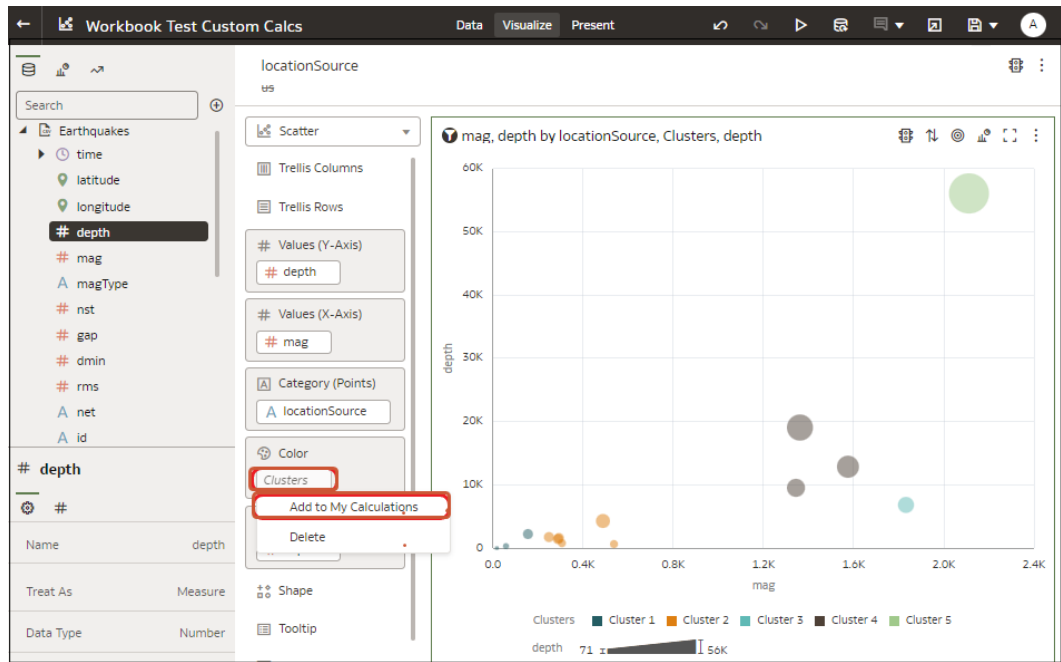
Oracle Analytics がクラスタおよび外れ値のために計算として作成した基礎となる式を保存して、同じワークブックの他のビジュアライゼーションで再利用できます。

このような計算を作成すると、多くのビジュアライゼーション全体で同じクラスタまたは外れ値を 1 回のクリックのみで分析できます。

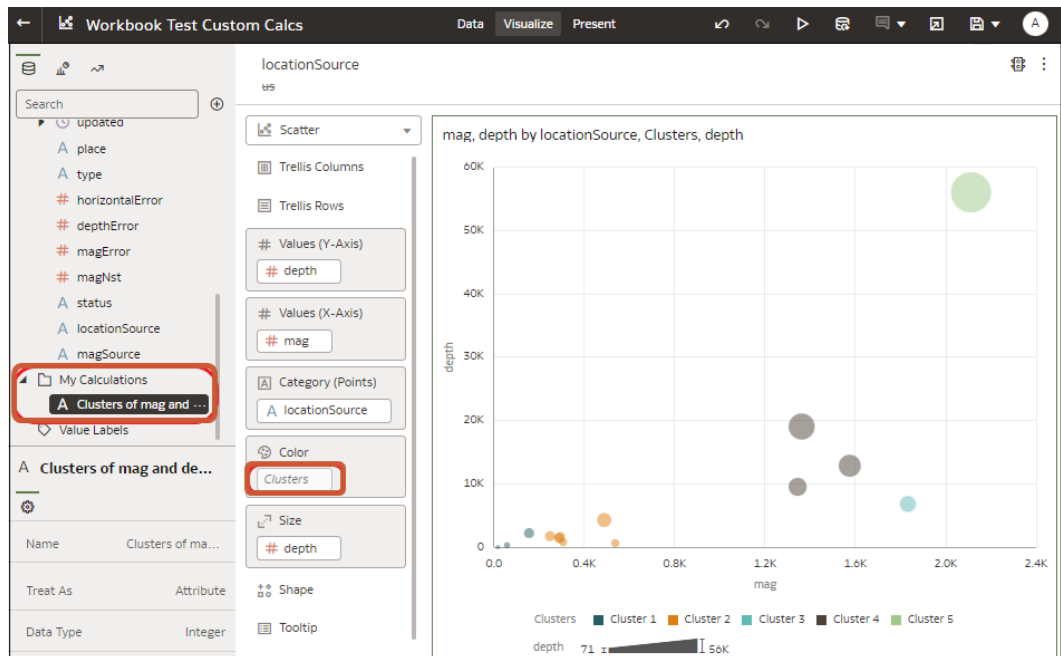
1. ホーム・ページで、グラフ・ビジュアライゼーションを含むワークブックを開くか作成します。
たとえば、散布図を含むワークブックを開きます。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、ビジュアライゼーションにカーソルを合せて右クリックし、「統計の追加」を選択します。
3. クラスタを追加するには、「クラスタ」を選択します。または、外れ値を追加するには、「外れ値」を選択します。

Oracle Analytics によって、クラスタまたは外れ値が文法パネルに追加されます。

4. 文法パネルで、「クラスタ」または「外れ値」要素をクリックし、**マイ計算に追加**を選択します(または、データ・パネルの「**マイ計算**」に要素をドラッグします)。



この計算を使用して、ワークブックの他のビジュアライゼーションでクラスタおよび外れ値を分析できます。



Explain を使用したデータの分析

Explain は、機械学習を使用してデータに関する有益なインサイトを検出します。

トピック:

- [Explain とは何ですか。](#)
- [インサイトとは何ですか。](#)
- [Explain を使用したデータ・インサイトの検出](#)
- [Explain で使用するデータセットの作成](#)

Explain とは何ですか。

Explain は、選択された列をそのデータセットのコンテキスト内で分析し、検出したインサイトに関するテキスト説明を生成します。たとえば、任意の列で、基本的なファクト、キー・ドライバ、列を説明するセグメントおよび異常を確認します。

[ビデオ](#)

Explain では、Oracle の機械学習を使用して、データに関する正確で高速で強力な情報を生成し、ワークブックのキャンバスに追加できる対応するビジュアライゼーションを作成します。

Explain は、検索するデータ・トレンドがわからない可能性があるが、キャンバスに列をドラッグ・アンド・ドロップしたり、データ・フローを使用して予測モデルをトレーニングおよび適用する試験的作業に時間を費やしたくないデータ・アナリストを対象としています。

Explain は、データ・アナリストにとって、データ内で検索するトレンドを確認し、その情報を使用して他のデータセットに適用する予測モデルを作成およびチューニングするための有益な開始ポイントでもあります。

インサイトとは何ですか。

インサイトは、データセットのコンテキスト内で選択された列を説明するカテゴリです。

[LiveLabs スプリント](#)

Explain が提供するインサイトは、選択した列タイプまたは集計に基づいており、選択したメトリックに対して設定された集計ルールに従って変化します。Explain では、選択した列タイプにとって意味のあるインサイトのみが生成されます。

インサイト・タイプ	説明
基本ファクト	列の値の基本分布を表示します。列データは、各データセットのメンバーに対して分類されます。 このインサイトは、すべての列タイプで使用できます。 <ul style="list-style-type: none">• 選択したメトリックについて、このインサイトは、各属性列の各メンバーに対する集計メトリック値の分布を示します。• 選択した属性について、このインサイトは、その属性のメンバー値全体におけるデータセットの各メトリックの値を示します。

インサイト・タイプ	説明
キー・ドライバ	選択した列の結果と最高度の相関を持つデータセットの列を表示します。相関する各属性値全体における選択値の分布がチャートに表示されます。 このタブが表示されるのは、属性列を説明する場合か、平均集計ルールを持つメトリック列を説明する場合のみです。
セグメント	列値のキー・セグメント(またはグループ)を表示します。Explain は、データに分類アルゴリズムを実行してデータ値の共通部分を特定し、属性の指定された結果について最高確率を生成するすべてのディメンション全体にわたる値の範囲を識別します。 たとえば、一定の地域に居住する一定の年数教育を受けた一定の年齢範囲の個人グループは、特定の製品を非常に高い確率で購入するセグメントを形成します。 このタブが表示されるのは、属性列を説明する場合のみです。
異常	いずれかの(集計)値が回帰アルゴリズムの予想から大幅に逸脱している一連の値を識別します。

Explain を使用したデータ・インサイトの検出

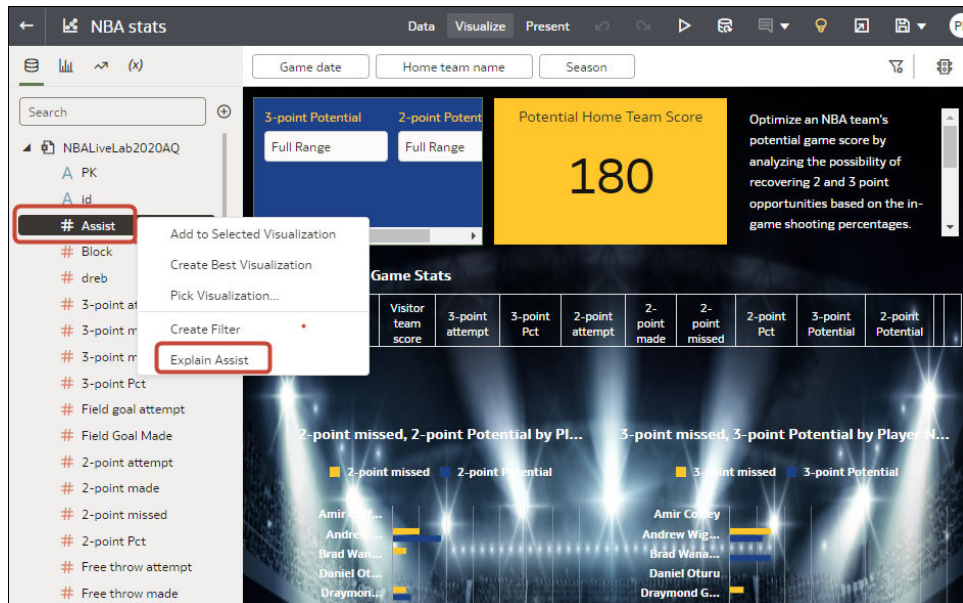
列を選択して Explain 機能を選択すると、Oracle Analytics は機械学習を使用してデータセットのコンテキスト内で列を分析します。たとえば、Explain は、選択されたデータでキー・ドライバと異常を検索します。

Explain では、その検索結果がテキスト説明およびビジュアライゼーションとしてユーザーに表示されます。これをワークブックのキャンバスに追加できます。

チュートリアル

Explain を列上で実行し、相関する高ランクの列が結果に非常に多く含まれる場合(たとえば、都道府県や市区町村と組み合わされた郵便番号)、データセットから一部の列を除外して、Explain がよりわかりやすいドライバを識別できるようにします。[列の表示/非表示](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、「作成」、「ワークブック」の順にクリックして、新規ワークブックを作成します。
2. 「ビジュアル化」をクリックして、「ビジュアル化」ページを開きます。
3. 「データ・パネル」で、列を右クリックして「<データ要素>の説明」を選択します。



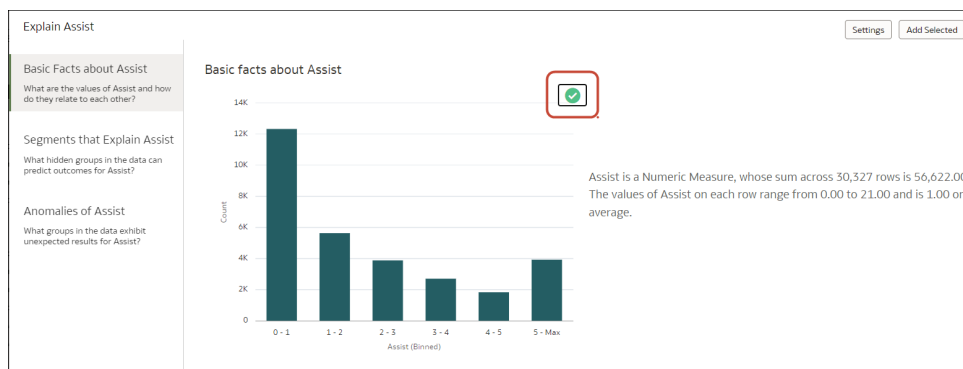
「<Data Element>の説明」オプションを表示するには、データセットに対する書込みアクセス権が必要です。

Explain で属性の分析を正常に行うには、その属性に 3 から 99 個までの個別値が含まれる必要があります。

「説明」ダイアログに、選択した列に関する基本ファクトや異常などの情報が表示されます。

4. タブをクリックして、他のカテゴリ内の提示されたインサイトを確認します。たとえば、「<attribute>に関する基本ファクト」や「<attribute>の異常」などです。
5. ワークブックのキャンバスに含めるインサイトごとに、それにカーソルを合せて「**キャンバスについて選択**」をクリックします。

選択したアイテムの横に緑色のチェック(✔)が表示されます。

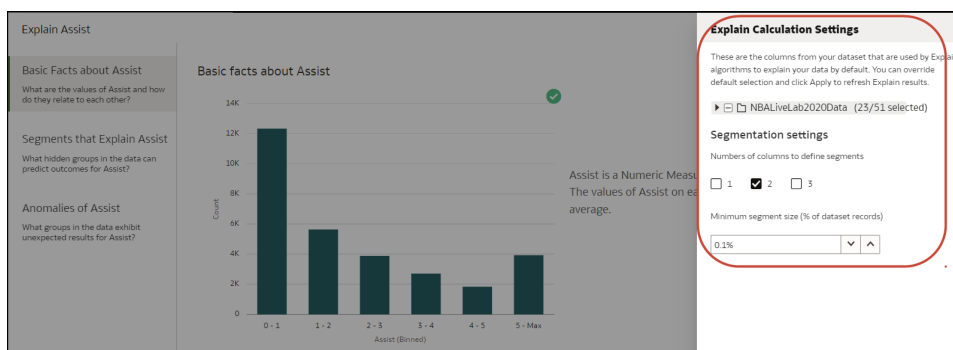


いずれのタブからも複数のインサイトを選択できます。

6. 「**選択項目の追加**」をクリックすると、いずれのタブにも緑色のチェックが付いたインサイトが追加されます。

Explain インサイトは、キャンバスに手動で作成した他のビジュアライゼーションと同様に管理できます。

インサイトを微調整するには、「設定」をクリックして分析する列を変更し、そのカテゴリのオプションを構成します。たとえば、セグメントの最小サイズを選択します。



Explain で使用するデータセットの作成

Explain は、Oracle Analytics インスタンスに格納されたサブジェクト領域で使用することはできません。ただし、ローカル・サブジェクトからデータセットを作成してから、Explain を使用してデータセットの列を分析できます。

[Explain を使用したデータ・インサイトの検出](#)を参照してください

1. ホーム・ページで、「作成」、「データセット」の順にクリックします。
2. 「データセットの作成」ダイアログで、ローカル・サブジェクト領域を選択します。
3. オプション: 「列の選択」を選択して、使用可能なサブジェクト領域および列を表示、参照および検索します。列を選択して「選択項目の追加」をクリックし、これをデータセットに追加します。
4. オプション: または、「論理 SQL の入力」を選択して問合せを作成するか、「列の選択」領域で選択した列の問合せを変更します。
5. オプション: 「フィルタを追加するにはここをクリックします」を選択して、列のフィルタ基準を指定します。
6. 「追加」をクリックしてデータセットを保存し、変換エディタに移動してデータセットのデータを変換およびエンリッチします。
7. オプション: 「ワークブックの作成」をクリックして、データセットを含むワークブックを作成してから、Explain を使用します。

ビジュアライゼーションのデータの問題に対する警告について

ビジュアライゼーションに関連付けられたデータのすべてのセットが適切に表示または取得されていない場合は、データの警告アイコンが表示されます。データのすべてのセットが適切にレンダリングまたは取得できない場合、固定の制限に従って、ビジュアライゼーションではできるだけ多くのデータが表示され、残りのデータまたは値は切り捨てられるか、表示されません。

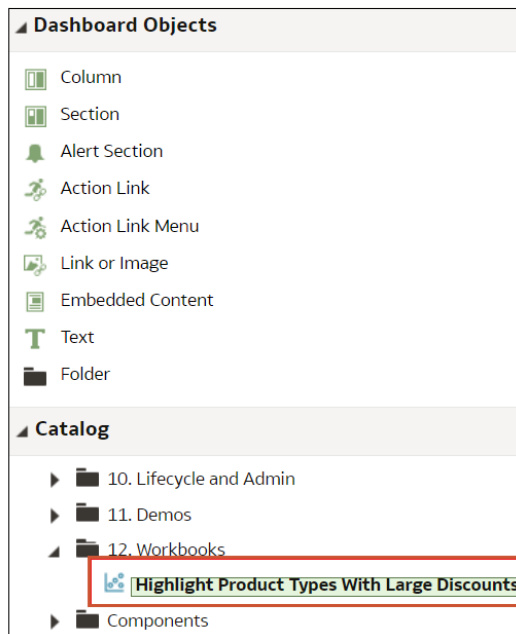
ダッシュボードでのワークブックおよびビジュアライゼーションの埋込み

ダッシュボードでワークブックを埋め込んで、これらをアナリストと共有します。

開始する前に、ワークブックを作成してカタログに格納します。埋込みの詳細は、「[ダッシュボードへのワークブック・キャンバスの埋込みに関するヒント](#)」を参照してください。ワークブックに複数のキャンバスがある場合は、ダッシュボードに表示するキャンバスを選択できます。

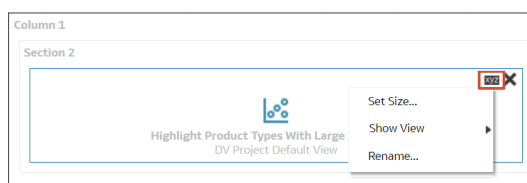
1. ホーム・ページで、「**ページ・メニュー**」をクリックし、「**クラシック・ホームを開く**」を選択してから、ワークブックを埋め込むダッシュボードを開くか作成し、「共有フォルダ」に保存します。
2. ダッシュボード・デザイナーの「**カタログ**」ペインで、ワークブックに移動して、これをダッシュボード・キャンバスにドラッグします。

たとえば、ビジュアライゼーション・ワークブックを「共有フォルダ」領域の「Workbooks」という名前のフォルダに格納したとします。



3. 表示サイズを変更するか、表示するキャンバスを指定するには、「**プロパティ**」をクリックします。

デフォルトでは、ワークブック内の最後のキャンバスが表示されます。



ダッシュボードへのワークブック・キャンバスの埋込みに関するヒント

埋込みコンテンツを最大限活用するには、次のヒントに従います。

サポートされているプロンプト・タイプの使用

ダッシュボードにワークブックを埋め込む際は、次のプロンプト・タイプを使用して、ワークブックのフィルタを制御できます。次の表に、サポートされているプロンプトと操作をリストします。

ユーザー入力のプロンプト	列のタイプ	サポートされる演算子	ワークブックのフィルタ・タイプ
テキスト・フィールド 選択リスト チェック・ボックス ラジオ・ボタン リスト・ボックス	ディメンション(数値以外)	is in および is not in	リスト・フィルタ
スライダ テキスト・フィールド	ファクト(数値)	>=、<=および is between	数値範囲フィルタ
カレンダー	日付	>=および<=	日付範囲フィルタ

印刷するため、またはデリバー経由で共有するためのワークブック・キャンバスは埋め込まないでください:

次のような場合、コンシューマには、埋め込まれたワークブック・キャンバスが表示されないことに注意してください:

- ダッシュボードのページを印刷する場合。
- デリバーを使用して共有されたダッシュボードのページにアクセスする場合。

カタログ・フォルダの作成

自分だけがアクセスできるカタログ・フォルダ(マイ・フォルダ)または他のユーザーがアクセスできるカタログ・フォルダ(共有フォルダ)を作成できます。カタログ・フォルダは、作成または変更するワークブックを整理、検索および管理するのに役立ちます。

マイ・フォルダと共有フォルダにフォルダとサブフォルダを作成するには、DV コンテンツ作成者のアプリケーション・ロールが必要です。

作成する共有カタログ・フォルダには、権限を割り当てる必要があります。共有カタログ・フォルダの権限によって、共有カタログ・フォルダにアクセスできるユーザーおよびロールが決まります。共有カタログ・フォルダに割り当てる権限は、共有カタログ・フォルダに保存したワークブックにデフォルトで設定されます。[共有カタログ・フォルダ権限の追加または更新](#)および[共有ワークブックの権限の追加または更新](#)を参照してください。

1. 「ホーム・ページ」で、「ナビゲータ」をクリックしてから「カタログ」をクリックします。
2. 「マイ・フォルダ」または「共有フォルダ」をクリックして、新しいカタログ・フォルダを作成する場所に移動します。

3. カタログ・ヘッダーから「ページ・メニュー」をクリックして、「フォルダの作成」をクリックします。
4. 「新規フォルダ」で、カタログ・フォルダ名を入力し、「作成」をクリックします。
5. オプション: カタログ・フォルダ内にサブフォルダを作成するには、サブフォルダを追加するカタログ・フォルダを探し、「アクション」メニューをクリックし、「新規フォルダ」をクリックします。「新規フォルダ」で、カタログ・フォルダ名を入力し、「作成」をクリックします。

共有カタログ・フォルダへのワークブックの保存

個々のユーザーまたはユーザーのグループがワークブックにアクセスできるようにする場合は、ワークブックを共有カタログ・フォルダに保存できます。

ワークブックを作成できるすべてのユーザーは、ワークブックを保存する際に共有カタログ・フォルダを作成することもできます。新しい共有カタログ・フォルダを作成する場合は、それにアクセスできるユーザーを指定する必要があります。ワークブックの権限によって、ワークブックにアクセスできるユーザーが決まります。[共有カタログ・フォルダとワークブック権限の割当て](#)を参照してください。

ワークブックにはアーティファクトが含まれており、これは他のワークブックに含めることができるスタンドアロンの Oracle Analytics オブジェクト(データセットなど)です。これらのアーティファクトは、まだ共有されていないことがあります。このような場合、ワークブックの権限を追加または更新すると、Oracle Analytics では共有関連アーティファクト・ダイアログが表示され、これらのアーティファクトを共有するかどうかを指定できます。

アーティファクトの権限を手動で確認して割り当てる場合や、共有ワークブックでユーザーが別のアーティファクトを選択する必要がある場合(たとえば、別のデータセットを選択する場合)などは、アーティファクトを共有しないよう選択できることがあります。

1. ワークブックを作成するか、または開きます:
 - ワークブックを作成するには、ホーム・ページで、「作成」、「ワークブック」の順にクリックし、ワークブックを構築します。
 - ワークブックを開くには、ホーム・ページで、「ナビゲータ」、「カタログ」の順にクリックして、ワークブックに移動し、編集モードで開きます。ワークブックを変更します。
2. ワークブック・エディタで、「保存」または「別名保存」をクリックして、ワークブックを保存します。
3. 「ワークブックの保存」で、「すべて」、「共有フォルダ」の順にクリックし、ワークブックを保存する共有カタログ・フォルダを見つけてクリックします。
4. 「保存」をクリックします。
5. 共有関連アーティファクト・ダイアログが表示されたら、ワークブックに含まれるアーティファクト(ワークブックのデータセットなど)を共有するかどうかを指定し、「適用」をクリックします。

共有カタログ・フォルダとワークブック権限の割当て

カタログ・フォルダおよびワークブックのアクセス権限を表示、変更および追加できます。権限によって、共有フォルダおよびワークブックを操作するときにユーザーが実行できるアクションが決まります。

トピック:

- [共有カタログ・フォルダ権限の追加または更新](#)
- [共有ワークブックの権限の追加または更新](#)
- [ワークブック権限ルール](#)

共有ワークブックの権限の追加または更新

作成または管理するワークブックにユーザーとロール、アクセス権限(「読み取り/書き込み」および「読み取り専用」)、および共有権限(「表示」および「編集」)を割り当てることができます。

共有カタログ・フォルダの権限は、デフォルトでワークブックの「アクセス」および「共有」タブに表示されます。ワークブックに権限を設定して、デフォルト権限を微調整できます。[ワークブック権限ルール](#)を参照してください。

ワークブックのデフォルト権限はロールに基づいています。「**アクセス**」タブで割り当てるロールと権限によって、誰がワークブックにアクセスでき、それに対して何を行うことができるかが決まります。たとえば、開く、新しいタブで開く、検査、お気に入り、名前変更、エクスポート、移動、複製、削除などです。

「**共有**」タブで割り当てる権限によって、ユーザーがワークブックに対して実行できるアクション(名前変更、移動、保存、名前を付けて保存など)が決まります。

ワークブックにはアーティファクトが含まれており、これは他のワークブックに含めることができるスタンドアロンの **Oracle Analytics** オブジェクト(データセットなど)です。これらのアーティファクトは、まだ共有されていないことがあります。このような場合、ワークブックの権限を追加または更新すると、**Oracle Analytics** では共有関連アーティファクト・ダイアログが表示され、ワークブックにアクセスできるユーザーとこれらのアーティファクトを共有するかどうかを指定できます。

アーティファクトの権限を手動で確認して割り当てる場合や、権限を追加または更新するワークブックでユーザーが別のアーティファクトを選択する必要がある場合(たとえば、別のデータセットを選択する場合)などは、アーティファクトを共有しないよう選択することができます。

ワークブック権限を更新する場合は、**Oracle Analytics** のホーム・ページを使用し、クラシック・ホーム・ページは使用しないことをお勧めします。

1. 「ホーム・ページ」で、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**カタログ**」をクリックします。
2. 「**共有フォルダ**」をクリックし、ワークブックに移動します。
3. ワークブックにカーソルを合せ、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**検査**」をクリックします。

4. 「**アクセス**」タブをクリックして、ユーザーとロールおよび権限を追加または更新します。このタブの権限のデフォルトは、共有カタログ・フォルダに設定したアクセス権限から取得されます。
5. 「**共有**」タブをクリックして、ユーザーとロールおよび権限を追加または更新します。このタブのデフォルトになる権限は、「**アクセス**」タブのデフォルトと同じ権限です。
6. 「**保存**」をクリックします。
7. 共有関連アーティファクト・ダイアログが表示されたら、ワークブックに含まれるアーティファクト(ワークブックのデータセットなど)を共有するかどうかを指定し、「**適用**」をクリックします。

共有カタログ・フォルダ権限の追加または更新

作成または管理する共有カタログ・フォルダにユーザーとロールおよびアクセス権限(「読取り/書込み」または「読取り専用」)を割り当てることができます。

共有カタログ・サブフォルダのデフォルト権限はロールに基づいています。「**アクセス**」タブで割り当てるロールと権限によって、誰が共有カタログ・サブフォルダにアクセスでき、それに対して何を行うことができるかが決まります。たとえば、開く、検査、名前変更、移動、複製、削除などです。

指定したユーザーとロールおよび権限は、作成したすべての共有カタログ・サブフォルダと、共有カタログ・サブフォルダに保存したワークブックに適用されます。共有カタログ・サブフォルダやワークブックに対する権限を微調整できます。

共有カタログ・フォルダにはアーティファクトを含めることができ、これはスタンドアロンの **Oracle Analytics** オブジェクト(データセットなど)です。共有カタログ・フォルダの権限を追加または更新すると、**Oracle Analytics** では共有関連アーティファクト・ダイアログが表示され、共有カタログ・フォルダにアクセスできるユーザーとこれらのアーティファクトを共有するかどうかを指定できます。

アーティファクトの権限を手動で確認して割り当てる場合などは、アーティファクトを共有しないよう選択できることがあります。

1. 「ホーム・ページ」で、「**ナビゲータ**」をクリックしてから「**カタログ**」をクリックします。
2. 「**共有フォルダ**」をクリックし、権限を更新する共有カタログ・フォルダに移動します。
3. 共有カタログ・フォルダにカーソルを合せ、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**検査**」をクリックします。
4. 「**アクセス**」タブをクリックし、ユーザーとロールおよび権限を追加するか、既存のユーザーとロールの権限を更新します。
5. 「**保存**」をクリックします。
6. 共有関連アーティファクト・ダイアログが表示されたら、共有カタログ・フォルダに含まれるアーティファクト(データセットなど)を共有するかどうかを指定し、「**適用**」をクリックします。

ワークブック権限ルール

これらのルールを使用すると、ワークブックの権限の設定に役立ちます。

アクセス(読取り専用および読取り/書込み)ルール:

- 権限は、ロール用に構成された任意の階層によって評価されます。
- ロール階層内の最上位に最も近いロールの権限セットよりも、より下位にあるロールの権限セットの方が優先されます。
- 同じレベルに複数のルールがある場合は、Oracle BI プレゼンテーション・カタログ・リスト内の先頭のロールの権限セットが他のロールより優先されます。
- ユーザーの権限は、常にロールの権限より優先されます。

共有(編集および表示)ルール:

- ユーザーが編集権限のあるロールのメンバーである場合は、ワークブックを編集できます。
- ユーザーに編集権限がある場合は、ワークブックを編集できます。
- ユーザーが表示権限のあるロールのメンバーである場合は、ワークブックを表示できます。
- ユーザーに表示権限がある場合は、ワークブックを表示できます。

共有およびアクセス権限が DVConsumer ユーザーによって開かれたワークブックの保存にどのように影響するか

共有	アクセス: 読取り専用	アクセス: 読取りと書込み
表示	「保存」および「名前を付けて保存」が有効化されません。	「保存」および「名前を付けて保存」が有効化されません。
編集	「保存」および「名前を付けて保存」が有効化されません。	「保存」および「名前を付けて保存」が有効化されません。

共有およびアクセス権限が DVContentAuthor ユーザーによって開かれたワークブックの保存にどのように影響するか

共有	アクセス: 読取り専用	アクセス: 読取りと書込み
表示	「保存」および「名前を付けて保存」が有効化されません。	「保存」および「名前を付けて保存」が有効化されません。
編集	「保存」は有効化されませんが、「名前を付けて保存」は有効化されます。	「保存」および「名前を付けて保存」の両方が有効化されます。

ワークブックを開くデフォルトの方法の構成

すべてのワークブックはデフォルトで表示モードで開きますが、ワークブックの作成者は、デフォルトで編集モードまたは表示モードで開くようにワークブックを構成できます。

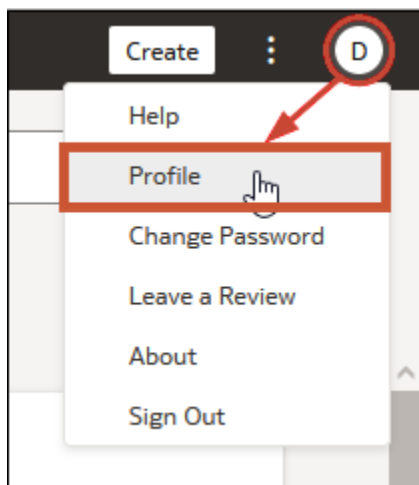
トピック:

- すべてのワークブックをデフォルトで編集モードで開くための構成
- ワークブックを編集モードで開くように構成

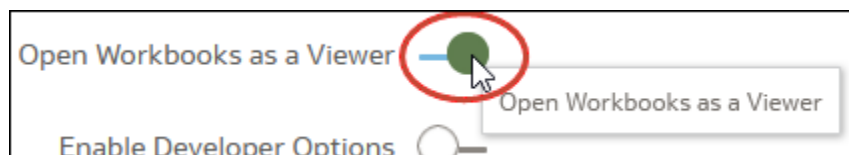
すべてのワークブックをデフォルトで編集モードで開くための構成

このタスクは、ワークブックの作成者を対象とします。すべてのワークブックはデフォルトでは表示モードで開かれますが、すべてのワークブックをデフォルトで編集モードで開くように、この動作を変更できます。

1. ホーム・ページで、ユーザー・プロファイル・アイコンをクリックし、メニューから「**プロファイル**」を選択します。



2. 「拡張」をクリックし、「ワークブックをビューアとして開く」トグルをクリックします。
 - 「ワークブックをビューアとして開く」トグルがオン(丸が緑) - すべてのワークブックが、デフォルトで表示モードで開きます。



- 「ワークブックをビューアとして開く」トグルがオフ(丸が白) - すべてのワークブックが、デフォルトで編集モードで開きます。

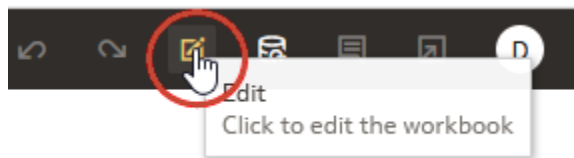


3. 「閉じる」をクリックします。

ワークブックを編集モードで開くように構成

ワークブック作成者は、作成するワークブックが、デフォルトの動作で、編集モードで開くようにすることができます。自分が所有していないワークブックが編集可能な場合は、それらのワークブックも、編集モードで開くようにできます。

1. ホーム・ページで、ワークブックをクリックして開きます。
2. 「編集」をクリックしてワークブックを編集モードで開き、ワークブックのプロパティの表示を有効にします。



3. ワークブックの「メニュー」をクリックし、「ワークブック・プロパティ」を選択します。
4. ビューアとして開くフィールドで、「オフ」をクリックして、ワークブックがデフォルトで編集モードで開くようにします。
5. 「OK」をクリックします。
6. 「戻る」をクリックしてから、「保存」をクリックします。

ワークブック・サムネイルの設定

データ作成者は、ホーム・ページで個々のワークブックのサムネイルを表示または非表示にすることができます。ワークブックのサムネイルを非表示にすると、データ作成者と同じアクセス権を持たないユーザーに機密データが公開されないよう保護するのに役立つ可能性があります。

ノート:

管理者は、サムネイルが許可されるかどうかを制御します。サムネイルが無効になっている場合、サムネイルが表示されることはありません。つまり、この設定は常に「オフ」です。セキュリティ・オプションを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. ワークブックが表示用に開かれている場合は、「**編集**」をクリックします。
3. ワークブック・ツールバーの「**メニュー**」をクリックして、「**ワークブック・プロパティ**」を選択します。
4. 「**サムネイルの保存**」を「**オン**」に設定してホーム・ページにワークブックのサムネイルを表示するか、「**オフ**」に設定してそれを非表示にします。
5. 「**OK**」をクリックします。
6. 「**保存**」をクリックします。

ビジュアライゼーション・ロード・オーバーレイの不透明度の設定

データ作成者は、ワークブックでのデータのロード中に表示されるビジュアライゼーションの周りの白いオーバーレイの不透明度を調整できます。不透明度レベルを低く設定すると、ビジュアライゼーションのレンダリング中に背景の暗いキャンバスが透けて見えることがあります。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. ワークブックが表示用に開かれている場合は、「**編集**」をクリックします。
3. ワークブック・ツールバーの「**メニュー**」をクリックして、「**ワークブック・プロパティ**」を選択します。
4. **ビジュアライゼーション・ロード・オーバーレイ**・スライダを使用して、ビジュアライゼーション・オーバーレイの不透明度を 1 から 100 の値に設定します(1 が透明、100 が不透明になります)。
5. 「**OK**」をクリックします。
6. 「**保存**」をクリックします。

ワークブックのパーソナライズ(プレビュー)

ビューア・モードで開かれたワークブックのダッシュボード・フィルタやビジュアライゼーション・フィルタでフィルタを選択すると、選択したフィルタの内容は、そのワークブックを再度開いたときに維持されています。

この機能は、現在プレビューを目的として公開されています(Enterprise Edition のみ)。「システム設定」にあるワークブックのパーソナライズ(プレビュー)機能を有効化するように、管理者に依頼してください。プレビュー・オプションを参照してください。表示モードでダッシュボードまたはビジュアライゼーションのフィルタを更新すると、その変更内容は、後からワークブックを表示したときに維持されています。

1. ホーム・ページで、フィルタの値を変更するビジュアライゼーションが含まれるワークブックを開き、「**アクション**」メニューをクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 列セクタのパラメータのフィルタ値を変更して、ビジュアライゼーションに表示される値を変更するなど、ダッシュボード・フィルタまたはビジュアライゼーション・フィルタの値を変更します。

3. ワークブックを閉じます。
4. ワークブックを再度開くと、フィルタ値に加えた変更が維持されています。
5. 変更を作成者の元のフィルタ値に戻す場合は、「**すべての変更を元に戻します**」をクリックします。

ユーザーがパーソナライズしたフィルタを管理者が削除、非表示または無効にすると、パーソナライズされた各ユーザーの変更内容は、次のような状態になります：

作成者によるフィルタの変更	ユーザーのパーソナライズに対する変更の影響
フィルタの削除	ユーザーのパーソナライズが削除されます。
フィルタの非表示	ユーザーのパーソナライズは有効なままです。
フィルタの無効化	ユーザーのパーソナライズが削除されます。

7

データのフィルタ

フィルタを使用すると、関心のあるデータのみをフォーカスできます。たとえば、月でフィルタして、1月、2月、3月のデータのみをビジュアル化できます。

トピック:

- [フィルタとフィルタ・タイプについて](#)
- [ワークブックのデータのフィルタ](#)
- [フィルタの選択値の指定](#)
- [フィルタ・バーからの次により制限設定の有効化または無効化](#)
- [ビジュアライゼーションのデータのフィルタ](#)
- [ビジュアライゼーション・フィルタのラベルのカスタマイズ](#)
- [ビジュアライゼーション・リスト・フィルタの複数選択の無効化](#)
- [ダッシュボード・フィルタの使用](#)
- [メイン・フィルタ・バーとビジュアライゼーション間のフィルタのスコープの変更](#)
- [ビジュアライゼーションのフィルタとしての使用](#)
- [様々なフィルタ・タイプの適用](#)

フィルタとフィルタ・タイプについて

Oracle Analytics では、ビジュアライゼーション、キャンバスおよびワークブックで関心のあるデータにフォーカスできるように、多くのタイプのフィルタをサポートしています。

「範囲」、「リスト」、「日付」および「式」フィルタ・タイプは、ビジュアライゼーション、キャンバスまたはワークブックに固有です。フィルタ・タイプは、フィルタとして選択したデータ要素に基づいて自動的に決定されますが、別の互換性のあるフィルタ・タイプに切り替えることもできます。

- **日付フィルタ** - カレンダー・コントロールを使用して時間または日付の選択を調整します。1つの連続的な日付範囲を選択するか、指定範囲内の日付を除外するための日付範囲フィルタを使用できます。
- **式フィルタ** - SQL 式を使用してより複雑なフィルタを定義できます。
- **リスト・フィルタ** - テキスト・データ型や日付データ型、および集計できない数値データ型のデータ要素に適用されます。リスト・フィルタは、キャンバス全体、またはそのキャンバスの特定のビジュアライゼーションに適用されます。
- **範囲フィルタ** - 数値データ型であり、「集計ルール」が「なし」以外に設定されているデータ要素に対して生成されます。範囲フィルタは、メジャーであり、\$100,000 から\$500,000 の売上のように連続する値の範囲にデータを限定するデータ要素に適用されます。あるいは、連続する値の範囲を(含むのではなく)除外する範囲フィルタを作成でき

ます。こうした排他的フィルタでは、連続しない範囲(例: \$100,000 未満または\$500,000 超の売上)にデータが限定されます。

- **相対時間** - 今日からの相対で指定された期間の値にフォーカスします。たとえば、過去3年間、今後3年間、または年累計にフォーカスします。
- **上位および下位フィルタ** - メジャーおよび属性のデータ要素に適用されます。上位と下位のどちらでフィルタするか、アイテムをいくつ表示するか、どのメジャーまたは属性を制限基準にするかを指定できます。

ワークブックでのデータのフィルタ処理について

- データセットにロールベースのフィルタを適用した場合、ワークブック・ユーザーには、アクセス権が付与されたデータのみが表示されます。たとえば、アプリケーション・ロール北米アナリストを持つユーザーの場合、共有のグローバル・セールス・ワークブックを開いたときに、北米の売上データのみが表示されます。
- ワークブックに複数のデータセットがあり、一部が結合されていない場合は、フィルタの使用に制限があります。
- アクティブなフィルタのデータ要素が使用されていないビジュアライゼーションはグレー表示されます。
- データセットが結合されていないかぎり、データセットのデータ要素を別のデータセットのフィルタとして指定することはできません。
- 日付または時間のフィルタとは別のフィルタ・タイプを選択するには、対象のフィルタをクリックして、別のタイプを選択します。たとえば、「月」要素の場合、フィルタ・タイプを「日付範囲」から「リスト」に変更すると、個々の月にフォーカスできます。

データセットとフィルタの相互作用の方法

ワークブックでは、データセットがフィルタと相互作用できる複数の方法があります。ワークブックでのデータセットとフィルタの相互作用には、様々なファクタが影響します。

- ワークブック内のデータセットの数。データセットの数がフィルタに与える影響を参照してください。
- ブレンドされているデータセットまたはブレンドされていないデータセット(複数のデータセットを含むワークブック)。
- ブレンドされたデータセット間で一致しているデータ要素(列)。

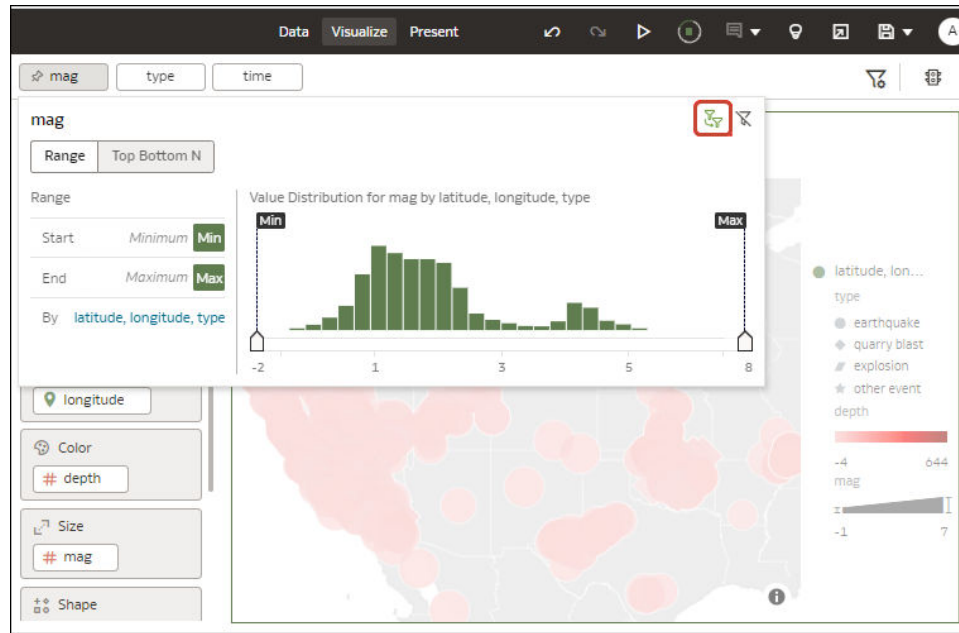
ワークブックの「データ」ページにあるデータ・ダイアグラムを使用して、次のことが可能です:

- ブレンドされたデータセットおよびブレンドされていないデータセットの表示。
- データセットのデータ要素の照合による、複数のデータセットのブレンドまたは接続。
- 一致したデータ要素の除去による、データセットの切断。

データセットの数がフィルタに与える影響

データセットの数、データセットが結合されているかどうか、フィルタの適用対象に応じて、フィルタとビジュアライゼーションは異なる方法で相互作用できます。

キャンバス上のビジュアライゼーションは、すべてまたは個別にフィルタできます。「**値の限定**」オプションを使用すると、フィルタ・バーのフィルタ同士による制限をなくしたり、制限したりできます。



ワークブックのデータセットが1つの場合

単一のデータセット フィルタの相互作用

フィルタ・バーへの フィルタの追加
ワークブックのすべてのビジュアライゼーションに適用されます。

ビジュアライゼーションへのフィルタの追加
フィルタ・バーのフィルタが適用された後に適用されます。

複数のフィルタの追加
デフォルトでは、選択した値に基づいてフィルタにより相互に制限されます。

ワークブックのデータセットが複数の場合

複数のデータセット フィルタの相互作用

フィルタをフィルタ・バーに追加する場合。

- フィルタは、結合されたデータセットを使用するすべてのビジュアライゼーションに適用されます。結合されていないデータセットを使用するビジュアライゼーションには、各データセットに別個にフィルタを追加する必要があります。
- 2つのデータセットが結合されていない場合、データセットのデータ要素を他方のデータセットのフィルタとして指定することはできません。
- データセットのデータ要素がフィルタとして指定されているが、結合されたデータセットと一致しない場合、フィルタはその特定のデータセットのビジュアライゼーションにのみ適用され、結合されたデータセットまたは結合されていないデータセットの他のビジュアライゼーションには適用されません。
- フィルタの「**すべてのキャンバスに固定**」を選択して、フィルタをワークブック内のすべてのキャンバスに適用できます。

複数のデータセット フィルタの相互作用

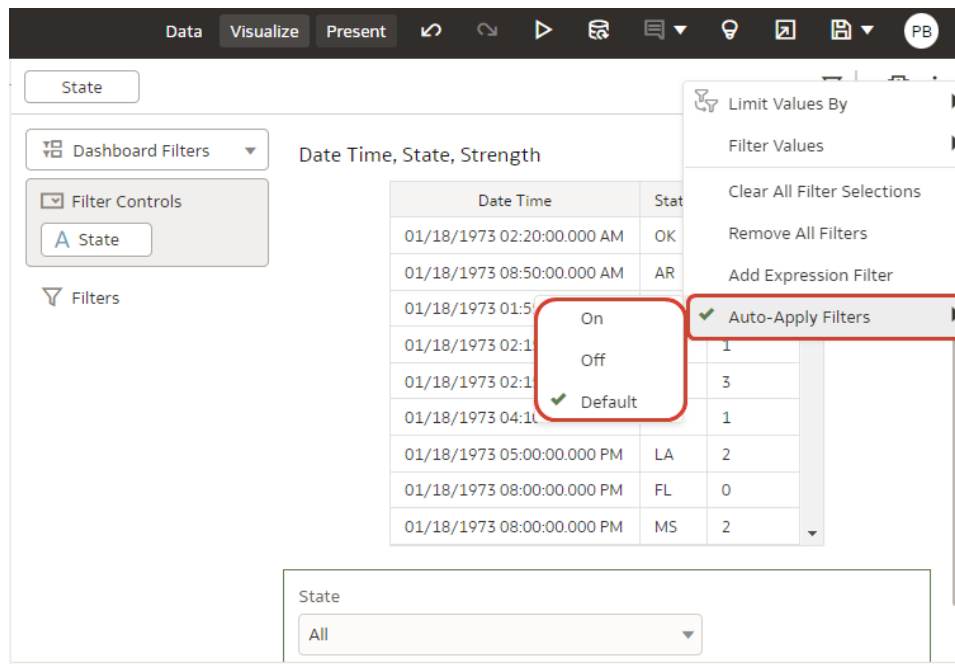
フィルタ名にカーソルを合せて、フィルタが適用されるビジュアライゼーションを確認する場合。

- フィルタをビジュアライゼーションに追加する場合。
- 個々のビジュアライゼーションにフィルタを指定すると、そのフィルタは、フィルタ・バーのフィルタが適用された後にそのビジュアライゼーションに適用されます。
 - 「**フィルタとして使用**」オプションを選択し、ビジュアライゼーションのフィルタとして使用されているデータ・ポイントを選択した場合、フィルタは、結合済データセットおよび一致したデータ要素の他のビジュアライゼーションで生成されます。

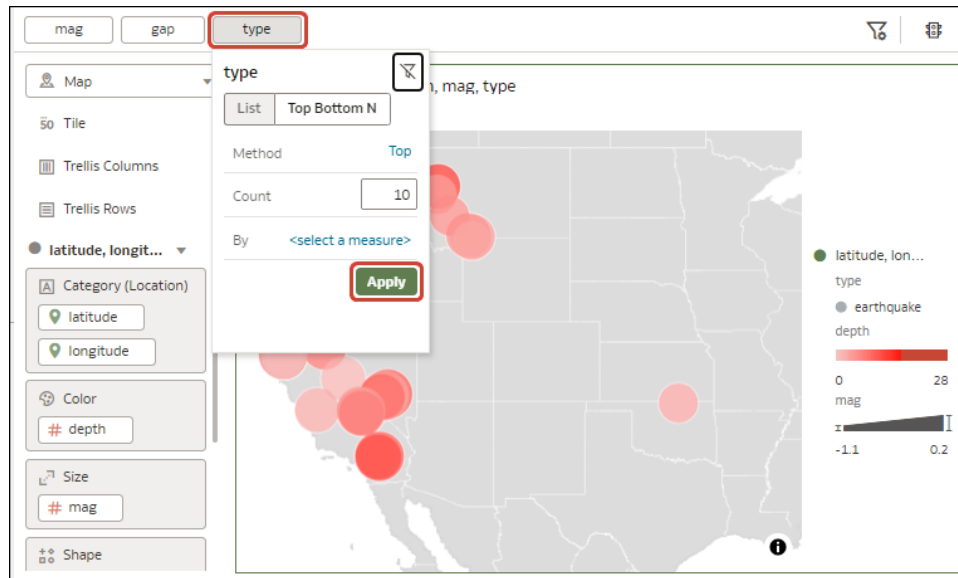
自動的に適用されるフィルタについて

デフォルトでは、フィルタは自動的に適用されます。ただし、フィルタを手動で適用する場合は、「**自動適用フィルタ**」オプションを使用して、この動作をオフにできます。

「**自動適用フィルタ**」オプションを表示するには、「フィルタ・バー・メニュー」アイコン(🔍)をクリックし、続いて「**自動適用フィルタ**」をクリックします。「**自動適用フィルタ**」がオンの場合は、フィルタ・バーまたはフィルタ・ドロップ・ターゲットで選択した内容がビジュアライゼーションにすぐに適用されます。



「**自動適用フィルタ**」がオフの場合は、フィルタ・バーまたはフィルタ・ドロップ・ターゲットで選択した内容は、フィルタ・パネルの「**適用**」ボタンをクリックするまでキャンバスに適用されません。

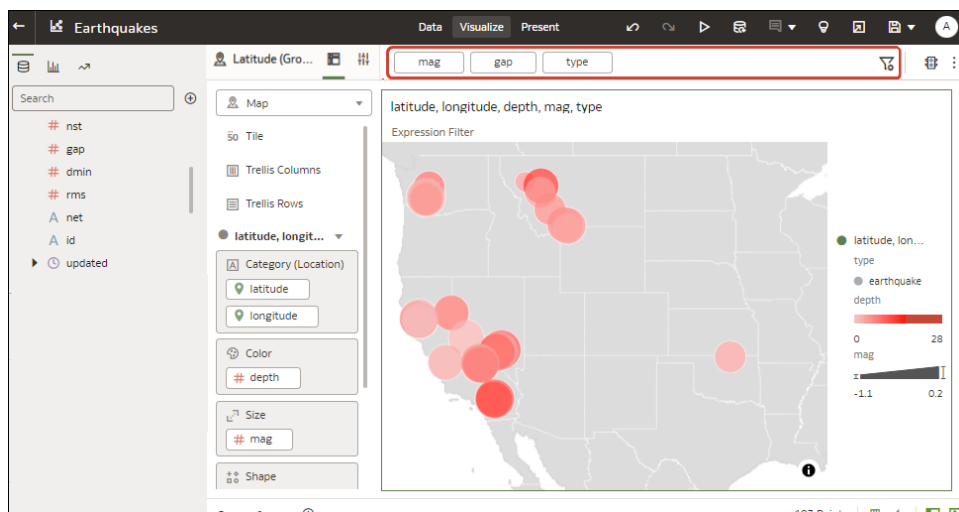


ワークブックでのデータのフィルタ処理

ワークブックでフィルタを使用すると、関心のあるデータにフォーカスできます。たとえば、月でフィルタして、1月、2月、3月のデータのみをビジュアル化できます。

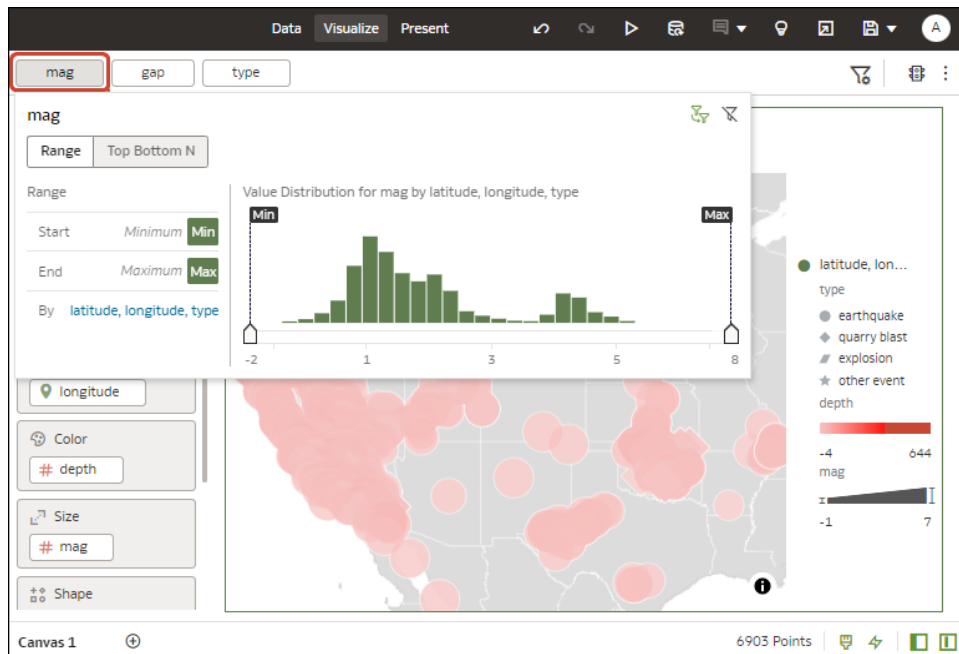
フィルタは、1つのビジュアライゼーション、キャンバス内のすべてのビジュアライゼーション、またはワークブック内のすべてのキャンバスに適用できます。

1. ホーム・ページでワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックして、「開く」を選択し、「編集」をクリックします。
2. キャンバスに移動して、「ビジュアル化」ペインを表示します。
3. フィルタ・バーを使用して、既存のフィルタを更新します。

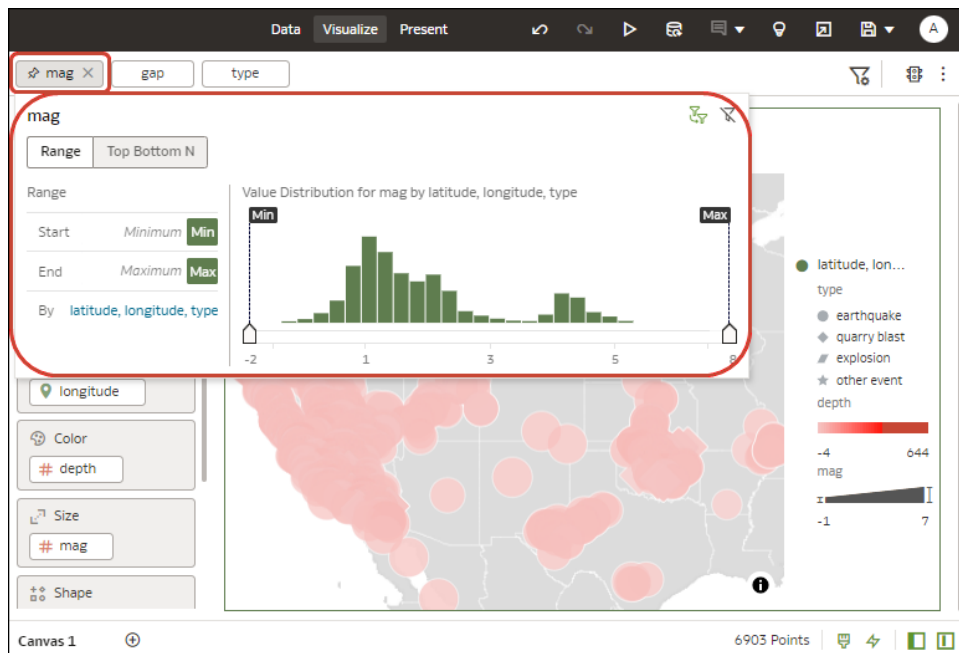


4. デフォルトのフィルタ・オプションを変更するには、フィルタ・バーの「フィルタ・バー・メニュー」アイコン(🔍)をクリックし、表示されたオプションを使用します。

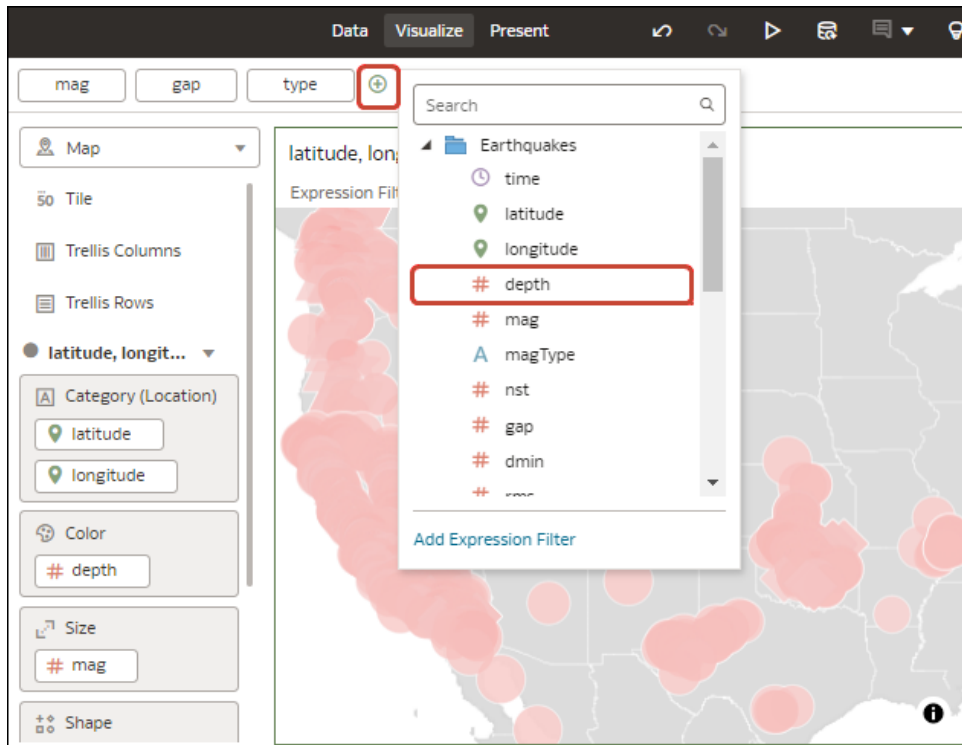
5. 既存のフィルタを変更するには、フィルタ・バーにあるフィルタをクリックします。



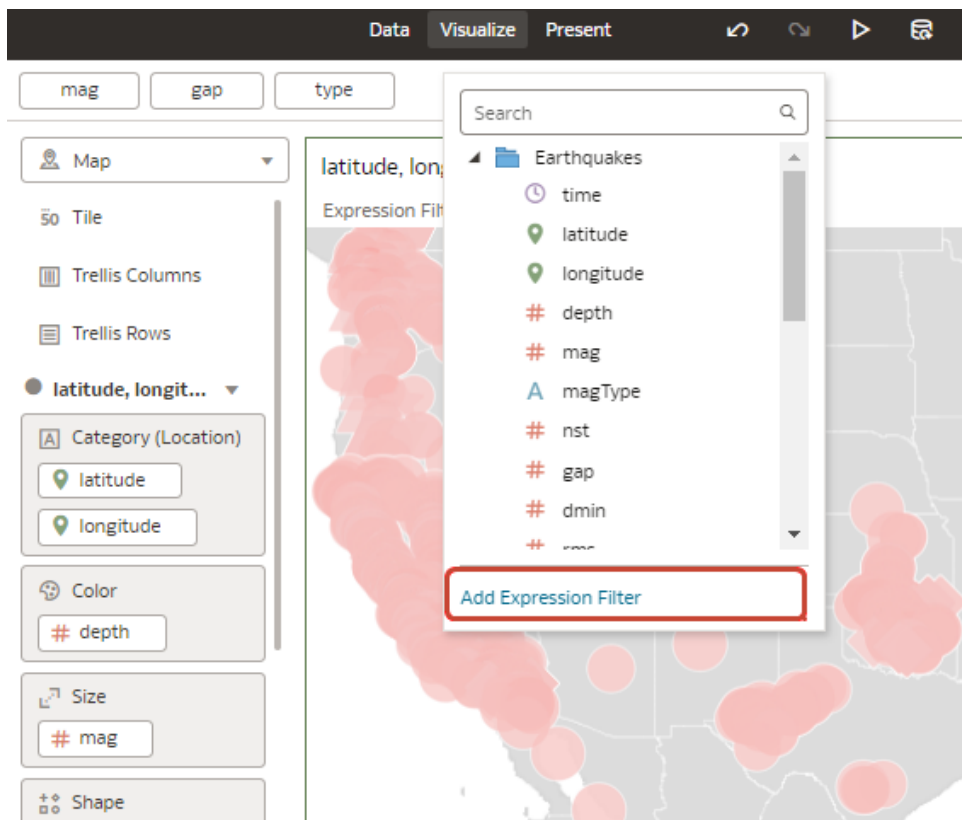
オプションを使用して、そのフィルタを構成します(たとえば、範囲を設定したり、フィルタを無効化したりします)。



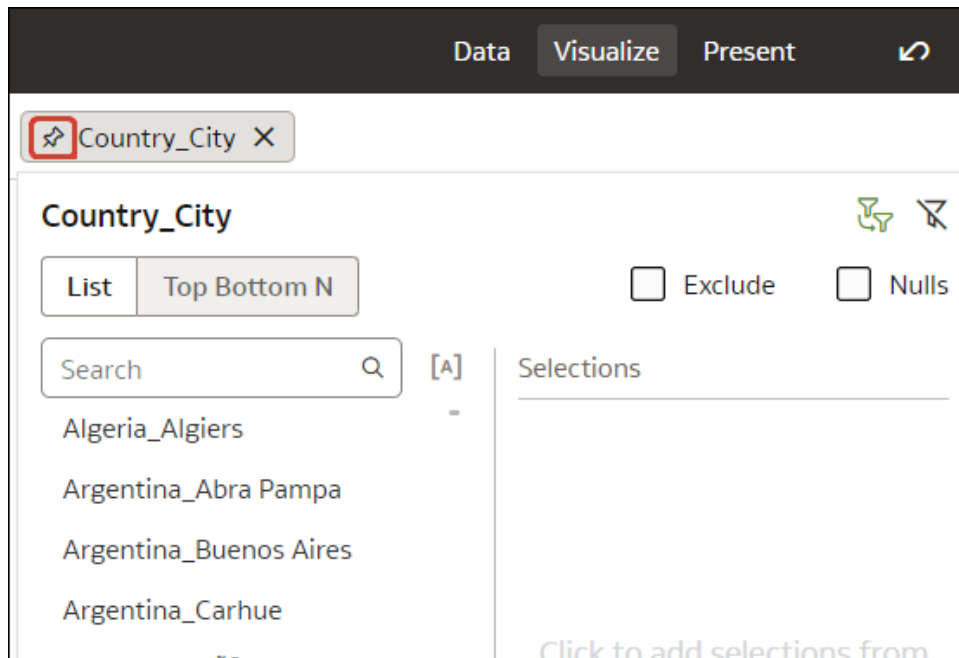
6. フィルタを追加するには、フィルタ・バーにカーソルを合せ、「フィルタの追加」(+)をクリックし、フィルタ処理するデータ要素を選択します。



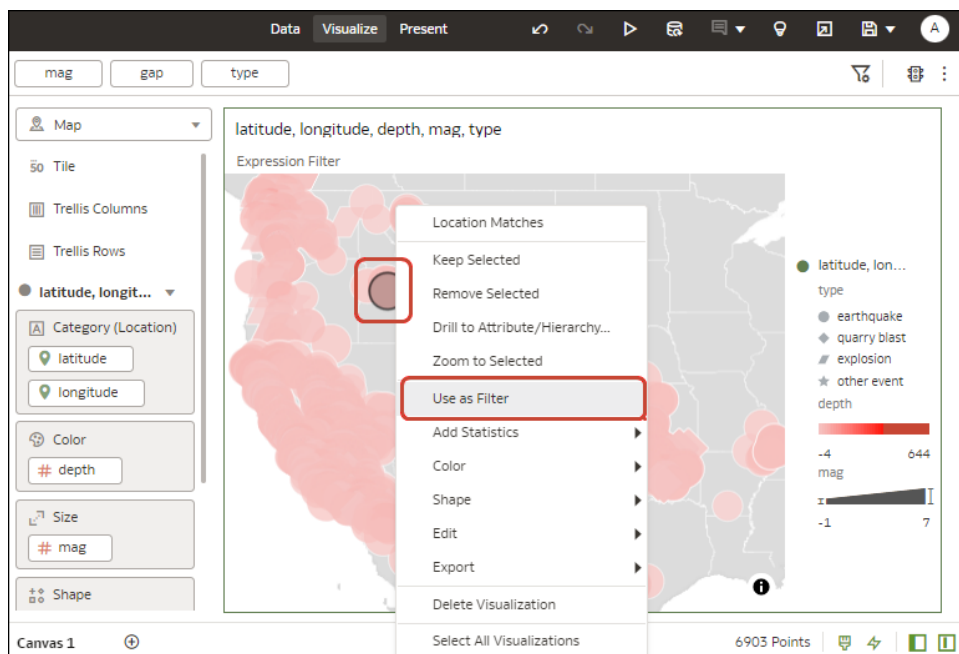
7. 式($\text{field1} + \text{field 2} > 100$ など)を使用して複雑なフィルタを追加するには、フィルタ・バーにカーソルを合わせて、「フィルタの追加」(+)をクリックし、「式フィルタの追加」をクリックします。



8. ワークブック内のすべてのキャンバスにフィルタを適用するには、フィルタにカーソルを合わせて、「すべてのキャンバスに固定」(ピンのアイコン)をクリックします。



9. ビジュアライゼーション要素でフィルタするには、その要素を右クリックして、「フィルタとして使用」を選択します。



「フィルタとして使用」アイコンは、アクティブ化されると緑色に変わります。



フィルタの選択値の指定

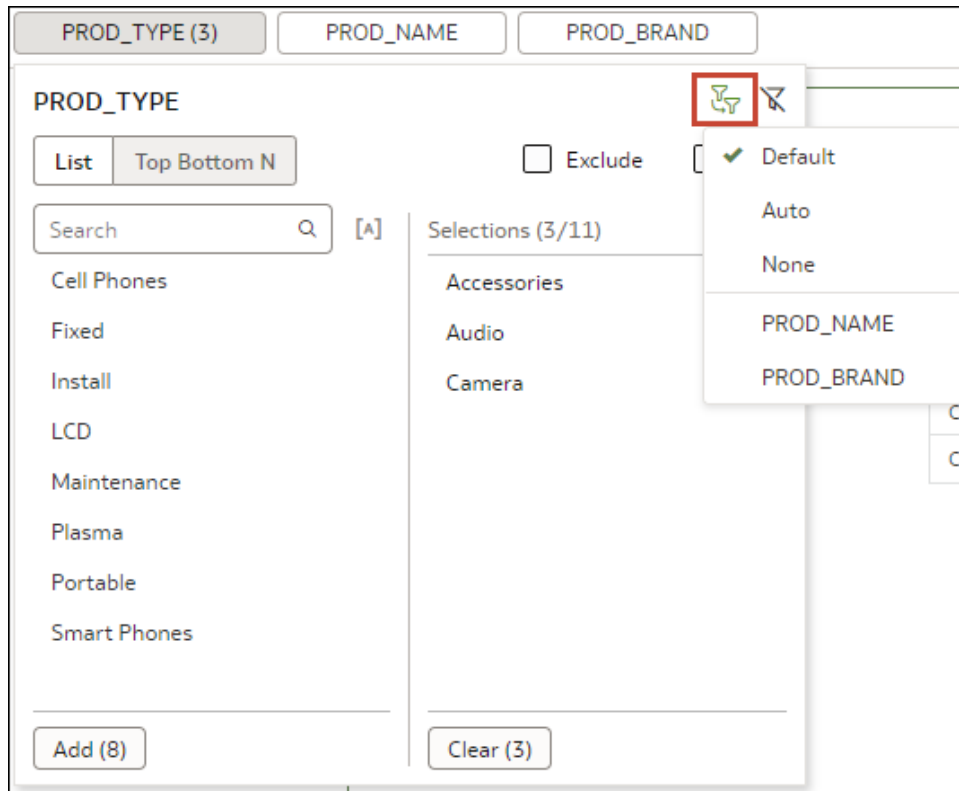
ワークブックにフィルタを追加する場合は、フィルタが選択値を取得する方法を指定できます。たとえば、フィルタに対してすべての列値を使用したり、別のワークブック・フィルタを選択してフィルタの選択値を制限したりできます。

次のオプションから選択できます:

- **デフォルト** - フィルタの選択値をワークブック内の他のフィルタで制限します。フィルタをフィルタ・バーに追加すると、フィルタが「**デフォルト**」に設定されます。
- **自動** - 「**フィルタ・バー・メニュー**」の「**次により値を制限**」オプションが「**なし**」に設定されている場合に、デフォルトの動作(ワークブック内の他のフィルタでフィルタを制限)を維持します。
- **なし** - 他のフィルタによって課されているフィルタの選択値制限を除去します。
- **<フィルタ名>** - フィルタの選択値を、選択したフィルタに従って制限します。複数のフィルタを選択できます。

「**フィルタ・バー・メニュー**」の「**次により値を制限**」オプションと、それが個々のフィルタの選択値を制御する方法の詳細は、[フィルタ・バーからの次により制限設定の有効化または無効化](#)を参照してください。

1. ホーム・ページでワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックして、「**開く**」を選択し、「**編集**」をクリックします。
2. キャンバスに移動して、「**ビジュアル化**」ペインを表示します。
3. 複数のワークブック列をフィルタ・バーにドラッグ・アンド・ドロップして、フィルタ選択で相互に制限する順序でそれらを配置します。たとえば、「**製品名**」の前に「**製品カテゴリ**」を配置します。
4. フィルタを選択して選択値を設定し、「**値の限定**」をクリックします。



5. フィルタの選択値を制限する方法を選択します。
6. 「保存」をクリックしてワークブックを保存します。

フィルタ・バーからの次により制限設定の有効化または無効化

「次により値を制限」フィルタ・バー・アイコンを使用して、「値の限定」設定が「デフォルト」に設定されているすべてのワークブック・フィルタを有効または無効にします。

ワークブックに多くのフィルタが含まれている場合は、フィルタ・バーの「次により値を制限」設定を使用して時間を節約します。各フィルタの「値の限定」プリファレンスを「デフォルト」と「なし」の間で手動で切り替える代わりに、「フィルタ・バー・メニュー」を使用して、制限されたフィルタ選択値と無制限のフィルタ選択値の間を切り替えることができます。

フィルタレベル「値の限定」設定の詳細は、[フィルタの選択値の指定](#)を参照してください。

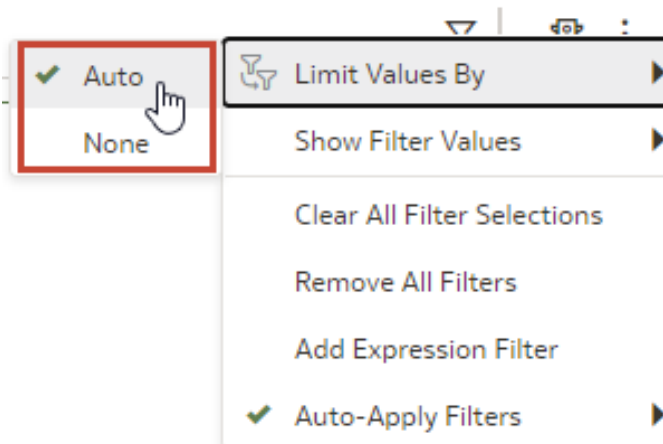
次のオプションから選択できます：

- **自動** - フィルタ選択値を、各フィルタの「値の限定」設定で指定されたとおりに表示します。
- **なし** - すべてのフィルタについて「デフォルト」に設定された「値の限定」を無視し、すべての選択値を表示します。「値の限定」プリファレンスが「自動」または「<フィルタ名>」に設定されたフィルタの選択値の制限を維持します。

1. ホーム・ページでワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックして、「開く」を選択し、「編集」をクリックします。
2. キャンバスに移動して、「ビジュアル化」ペインを表示します。
3. フィルタ・バーで、「フィルタ・バー・メニュー」をクリックし、「次により値を制限」にカーソルを合せます。



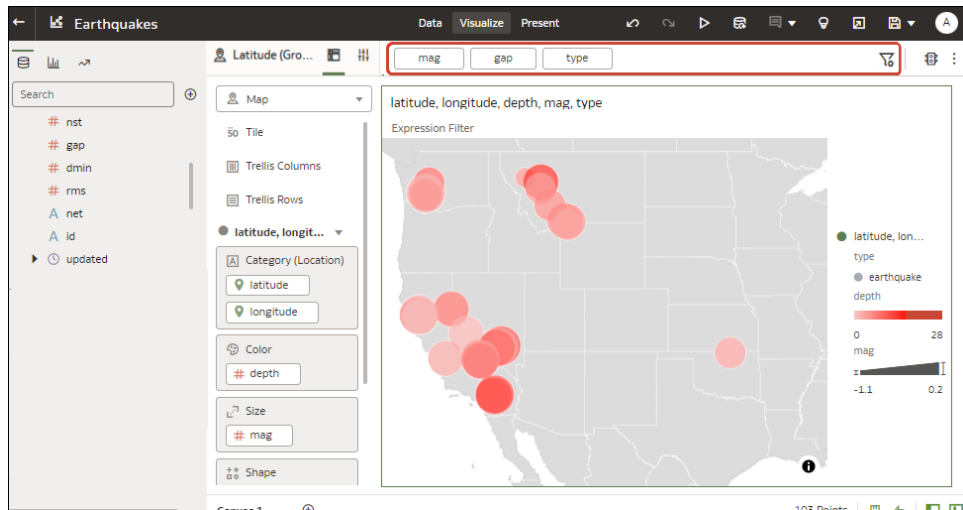
4. 「自動」をクリックしてフィルタの制限された選択値を表示するか、「なし」をクリックしてフィルタのすべての選択値を表示します。



ビジュアライゼーションのデータのフィルタ

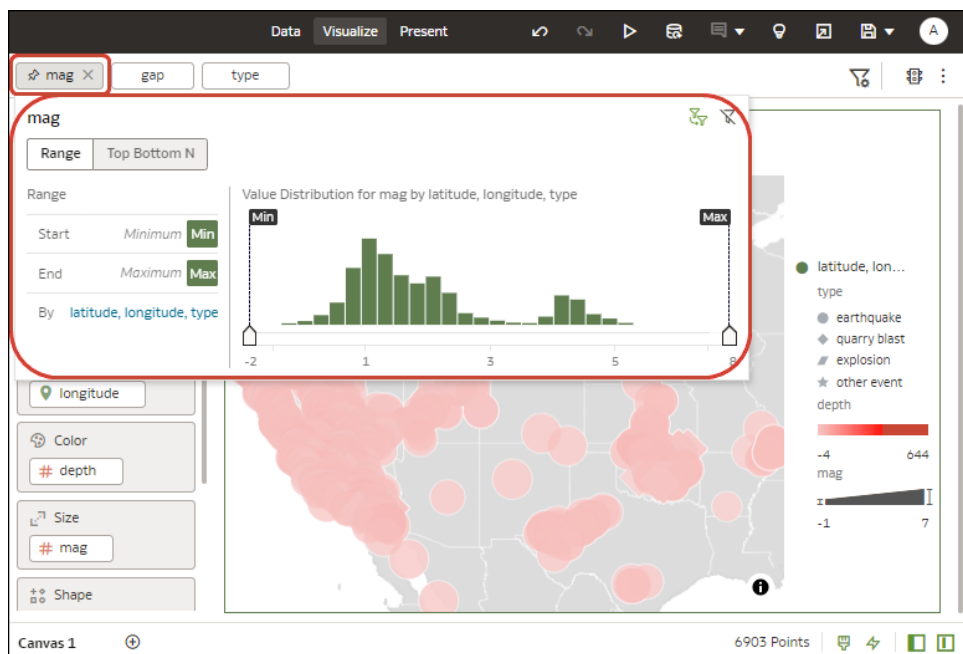
ビジュアライゼーションでフィルタを使用すると、関心のあるデータにフォーカスできます。たとえば、月でフィルタして、1月、2月、3月のデータのみをビジュアル化できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択して「アクション」をクリックし、「開く」を選択して「編集」をクリックします。
2. フィルタを追加するビジュアライゼーションを選択します。
3. データ・パネルからフィルタ・バーに、データ要素をドラッグ・アンド・ドロップします。



あるデータセットのデータ要素を別のデータセットのビジュアライゼーションでフィルタとして使用するには、データ要素をフィルタとして使用する前に、データセットを結合します。

4. フィルタ処理オプションを表示するフィルタをクリックすると、分析するデータにフォーカスできます。



ビジュアライゼーション・フィルタのラベルのカスタマイズ

ビジュアライゼーション・フィルタのラベルをカスタマイズして、そのデフォルト値のテキストを変更できます。たとえば、デフォルトのフィルタ名 COUNTRY を Country に変更します。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択して「**アクション**」をクリックし、「**開く**」を選択して「**編集**」をクリックします。
2. ラベルをカスタマイズするフィルタを含むビジュアルライゼーションを選択します。
3. 「文法パネル」で「**プロパティ**」をクリックします。
4. 「**フィルタ**」をクリックします。
5. カスタマイズするフィルタを展開します。
6. 「ラベル」フィールドで、「**自動**」をクリックして、コンテキスト・メニューから「**カスタム**」を選択します。
7. カスタマイズしたテキストを入力します。
8. [Enter]キーを押します。

ビジュアルライゼーション・リスト・フィルタの複数選択の無効化

ビジュアルライゼーション・リスト・フィルタを、単一値のみが選択されるように構成できません。たとえば、リスト・フィルタを使用してパラメータをフィルタにバインドするときは、この設定を「オフ」に構成する必要があります。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択して「**アクション**」をクリックし、「**開く**」を選択して「**編集**」をクリックします。
2. 複数値選択を無効にするリスト・フィルタを含むビジュアルライゼーションを選択します。
3. 「文法パネル」で「**プロパティ**」をクリックします。
4. 「**フィルタ**」をクリックします。
5. 更新するリスト・フィルタを展開します。
6. 「**複数選択**」フィールドで、「**オン**」をクリックして値を「**オフ**」に変更し、このリスト・フィルタでの複数値の選択を無効にします。
7. 「**保存**」をクリックします。

ダッシュボード・フィルタの使用

この項の情報を使用して、ワークブック・キャンバスにダッシュボード・フィルタを追加する方法を学習します。

トピック:

- [ダッシュボード・フィルタについて](#)
- [ダッシュボード・フィルタ・ビジュアルライゼーションを使用したデータのフィルタ](#)
- [スライダ・ダッシュボード・フィルタを使用したビジュアルライゼーションのフィルタおよびアニメーション化の概要](#)
- [スライダ・ダッシュボード・フィルタを使用したビジュアルライゼーションのフィルタ処理およびアニメーション化](#)

ダッシュボード・フィルタについて

ダッシュボード・フィルタを使用すると、実行時にユーザーが、ワークブック・キャンバス上にあるすべてのビジュアライゼーションのフィルタ値を指定できるようになります。

設計時に、ワークブックのフィルタ・バーにフィルタを追加することで、ワークブックのすべてのキャンバスに含まれているデータを制限できます。これらのフィルタを追加したら、フィルタはエンド・ユーザーに表示しないのが一般的です。

ダッシュボードの任意のキャンバスにダッシュボード・フィルタを追加すると、ユーザーが独自の値を選択し、そのキャンバスの特定のデータを表示できるようになります。実行時、ユーザーが指定したダッシュボード・フィルタの値は、作成者が設計時に追加および非表示にしたワークブック・フィルタよりも優先して適用されます。

追加できるダッシュボード・フィルタのタイプは、列のタイプによって異なります：

- **リスト** - テキスト、集計できない数値および日付をフィルタする場合に使用します。このオプションを使用すると、メンバーを含む/メンバーを除外、NULLを含む、リストの切替え、上位下位 N 件などを指定できます。
- **リスト・ボックス** - テキスト、集計できない数値および日付をフィルタする場合に使用します。このオプションを使用すると、データ値の簡単なリストを作成できます。「リスト・ボックス」ダッシュボード・フィルタ・タイプは、「リスト」ダッシュボード・フィルタ・タイプと似ており、デフォルトで、フィルタの選択可能値リスト内の「すべて」オプションを含みます。「リスト・ボックス」フィルタ・タイプでは、ユーザーは値を複数選択できず、「リスト」ダッシュボード・フィルタ・タイプで提供される追加オプション(上位下位 N 件、除外、フィルタの無効化など)を含みません。
- **範囲** - 「集計ルール」が「なし」以外に設定されている数値型のデータ要素をフィルタする場合に使用します。
- **スライダー** - ビジュアライゼーションをアニメーション化し、時間などの特定のディメンションでデータがどのように変化するかを動的に表示する場合に使用します。
- **上位下位 N 件** - メジャーや属性をフィルタし、最高値または最小値を表示する場合に使用します。

ダッシュボード・フィルタ・ビジュアライゼーションを使用したデータのフィルタ

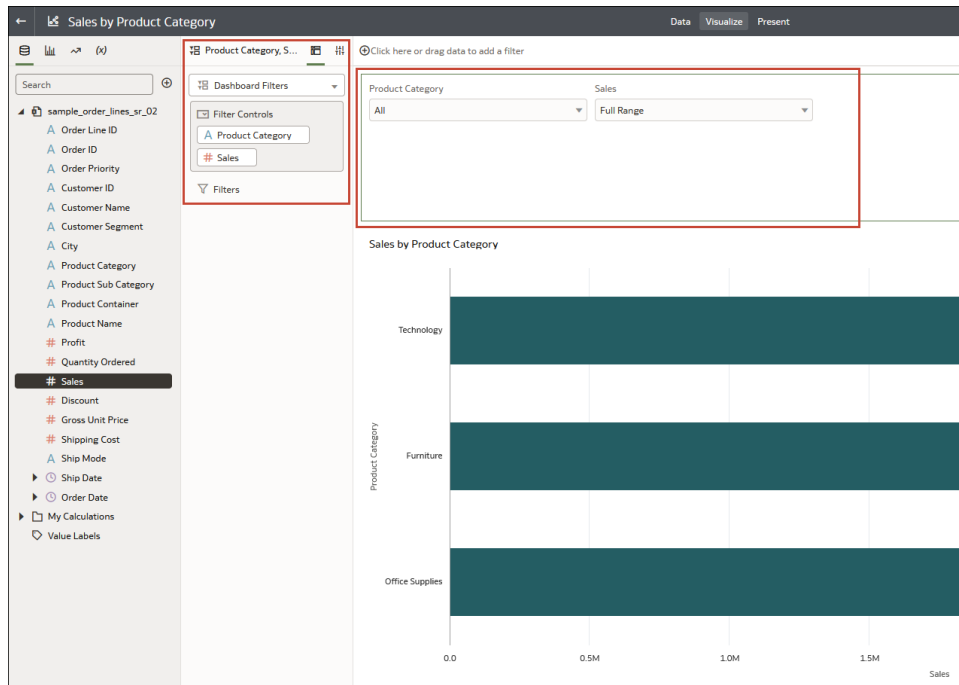
ダッシュボード・フィルタを使用してワークブックのキャンバスに直接フィルタ・バーを作成すると、エンド・ユーザーが関心のあるデータを選択できるようになります。

デフォルトでは、ダッシュボード・フィルタの値は、その他のフィルタ(ワークブック、キャンバス、ビジュアライゼーションの各フィルタ)によって制限されます。ダッシュボード・フィルタを構成するには、フィルタを選択し、プロパティ・ペインを使用して表示オプションを指定します。

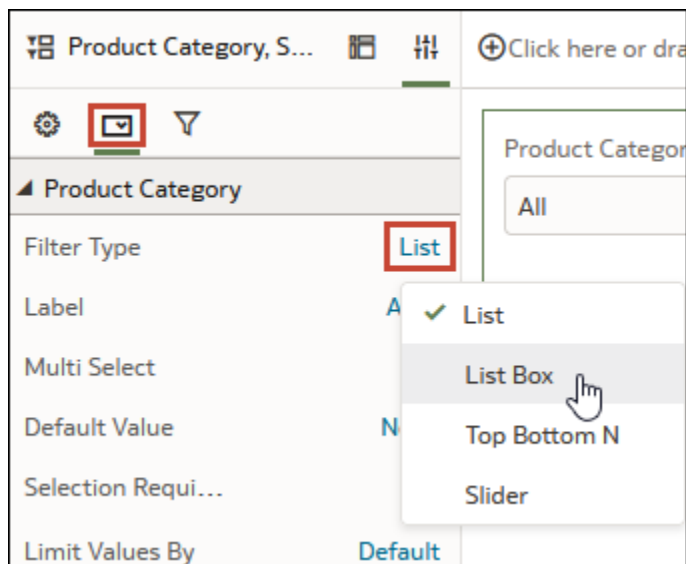
選択できるダッシュボードのフィルタ・タイプに関する詳細は、「[ダッシュボード・フィルタについて](#)」を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択して「**アクション**」をクリックし、「**開く**」を選択して「**編集**」をクリックします。

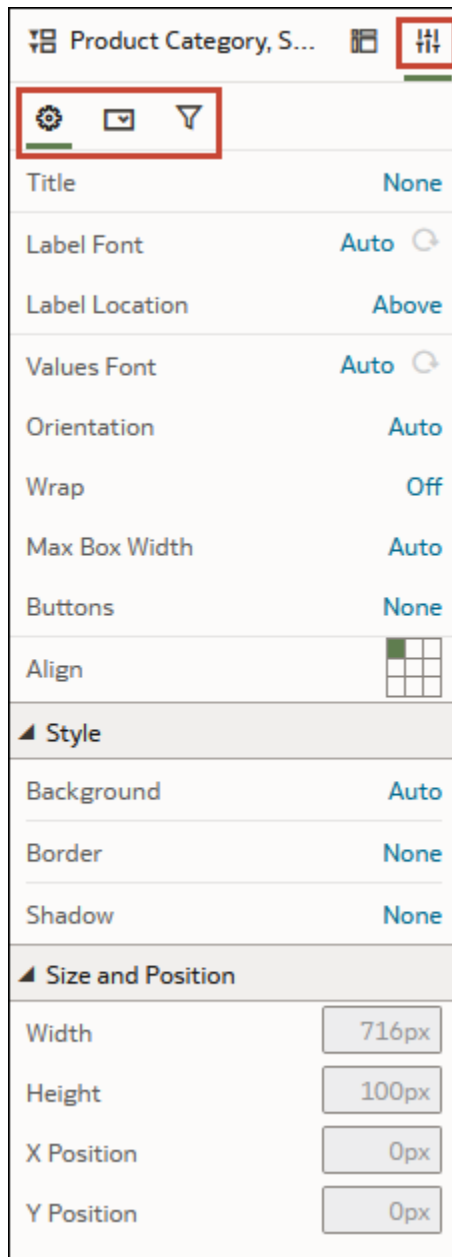
2. 「ビジュアル化」タブをクリックします。
3. 「データ・パネル」で、「ビジュアライゼーション」タブをクリックし、「ダッシュボード・フィルタ」をキャンバスにドラッグ・アンド・ドロップします。
4. 「データ・パネル」で「データ」タブをクリックし、新しいダッシュボード・フィルタに列を1つ以上ドラッグ・アンド・ドロップして、個々のフィルタを作成します。



5. ダッシュボード・フィルタの「プロパティ」ペインで、「プロパティ」、「フィルタ・コントロール」の順にクリックします。「フィルタ・タイプ」フィールドに移動し、ワークブックに組み込むフィルタのタイプを選択します。



- 「プロパティ」ペインの「一般」、「フィルタ・コントロール」、「フィルタ」の各タブを使用して、複数選択の許可、値の制限、ラベルのフォント、背景色など、フィルタの表示や動作の仕方を変更します。



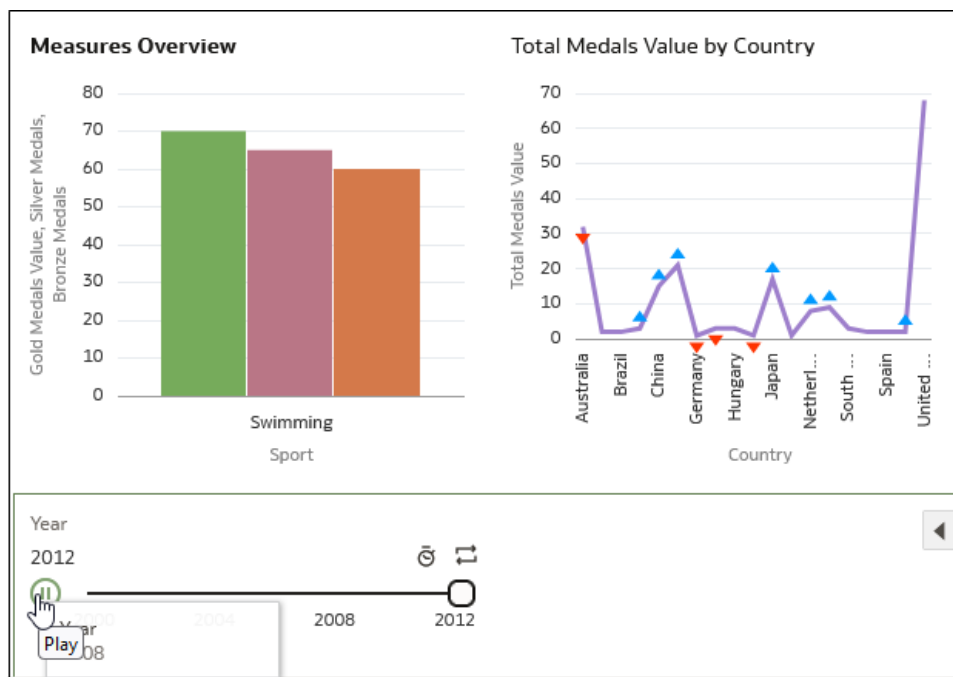
- 「保存」をクリックします。

スライダ・ダッシュボード・フィルタを使用したビジュアライゼーションのフィルタ処理およびアニメーション化の概要

スライダ・ダッシュボード・フィルタをキャンバスに追加して、ビジュアライゼーションをアニメーション化し、時間などの特定のディメンションでデータがどのように変化するかを動的に表示できます。

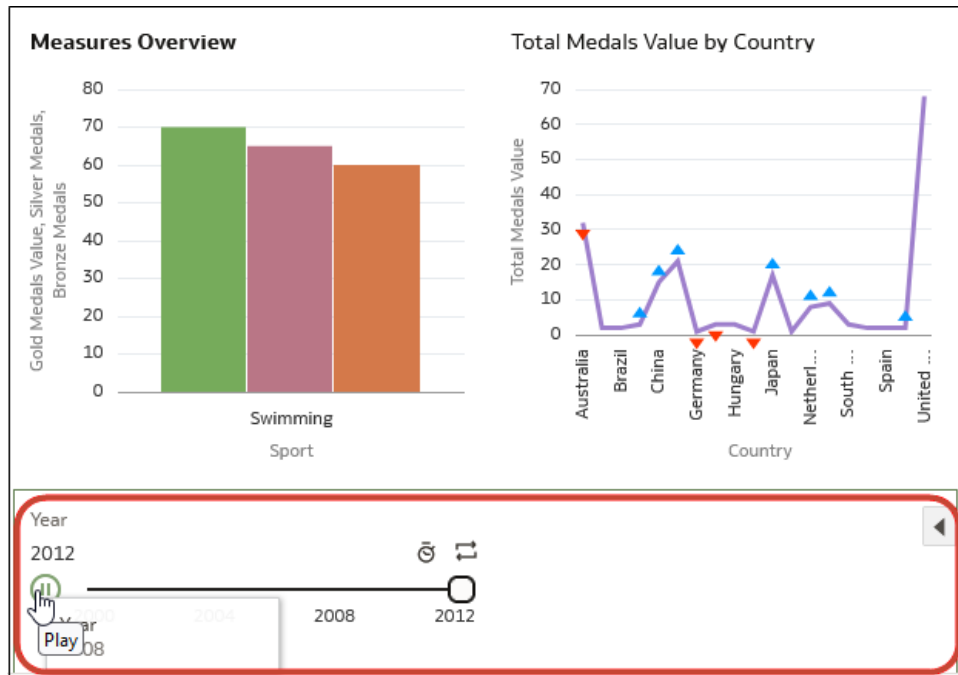
ワークブック作成者は、ダッシュボード・コンシューマがディメンション値を対話的に選択したり、タイムラプス・ビデオやアニメーションのようにディメンション値を自動的に再生したりできるように、スライダ・フィルタを構成できます。

たとえば、2000年から2012年までに各国が獲得した金、銀、銅のオリンピック・メダルの数とメダルの総数を分析できます。自動再生がオンに設定されている場合、フィルタが各年を自動的に再生すると、ビジュアライゼーションは動的に変化します。この例では、最初のビジュアライゼーションには水泳で獲得されたメダル数が表示され、2番目のビジュアライゼーションには国別の獲得メダル数が表示されています。

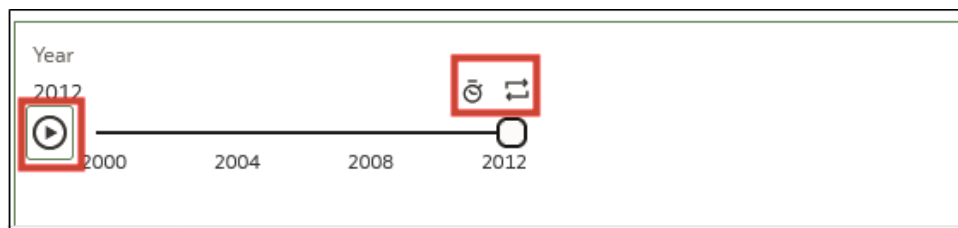


機能:

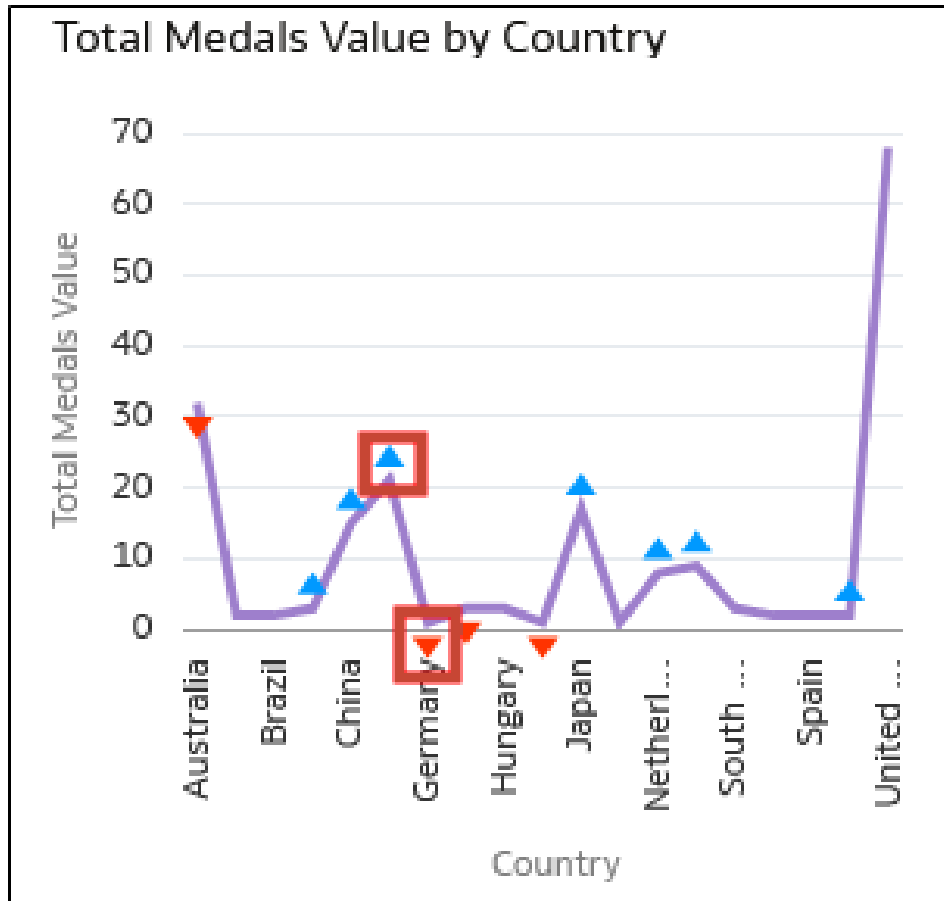
- スライダに、ディメンションベースの値がアニメーション・コントロール(「再生」、「速度」および「繰返し」とともに表示されます。



- 自動再生が有効になっている場合、コンシューマは「再生」ボタンを使用してアニメーションを開始および停止でき、「速度」オプションと「繰返し」を使用して再生を制御できます。

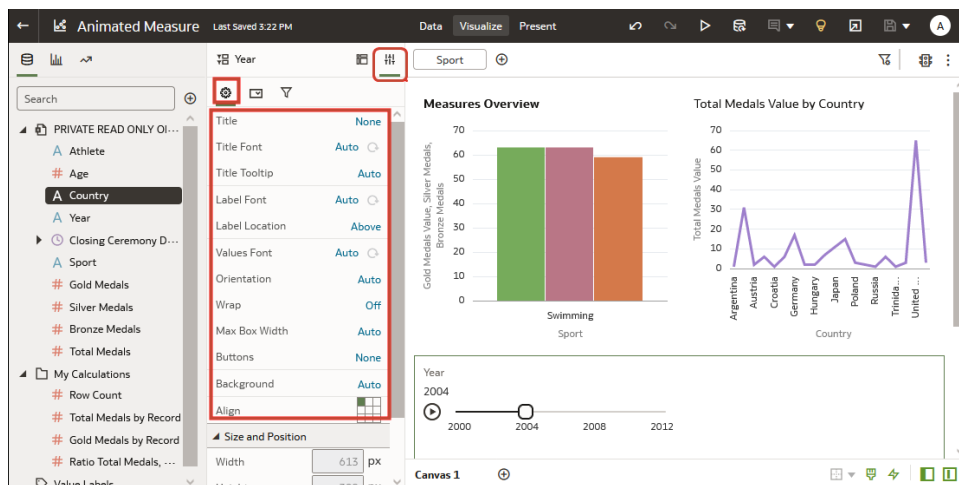


- この例のビジュアライゼーションでは、上向き青い三角形は獲得メダルの増加を示し、下向き赤い三角形は獲得メダルの減少を示します。



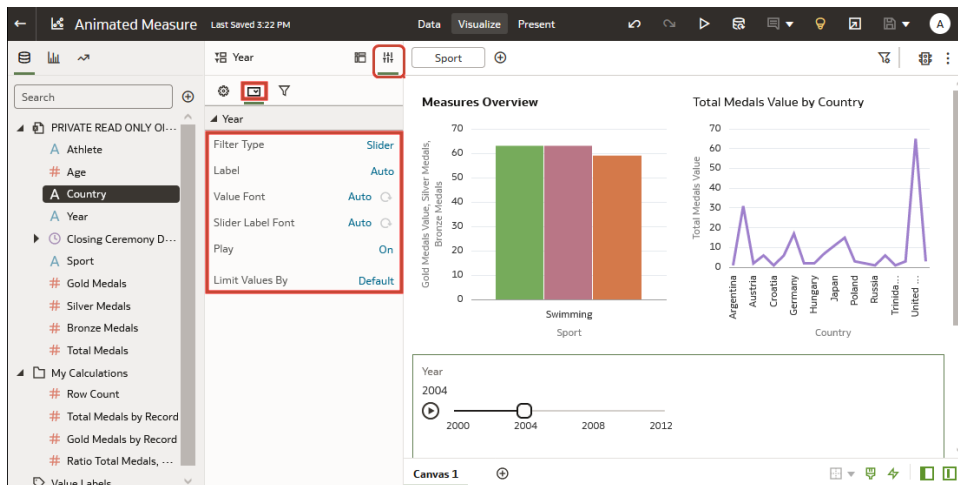
スライダ・ダッシュボード・フィルタのすべての側面を構成できます:

- 「一般」タブでは、タイトルや、タイトル、ラベル、値のフォント、背景や配置などのその他のオプションを変更できます。

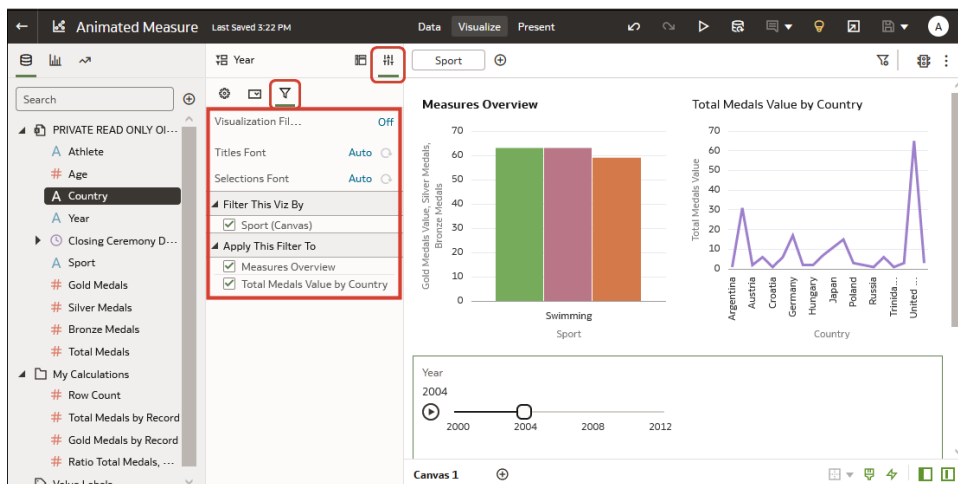


- 「フィルタ・コントロール」タブで、ラベル、値のフォントおよび再生オプションを変更できます。アニメーションなどの時間値を自動的に再生するには、「再生」をオンに設定

します。または、ダッシュボード・コンシューマが時間値を対話的に選択できるようにするには、「再生」をオフに設定します。



- 「フィルタ」タブで、フォントを選択でき、どのビジュアライゼーションが更新または"再生"されるかをダッシュボード・フィルタで指定できます。



スライダ・ダッシュボード・フィルタを使用したビジュアライゼーションのフィルタ処理およびアニメーション化

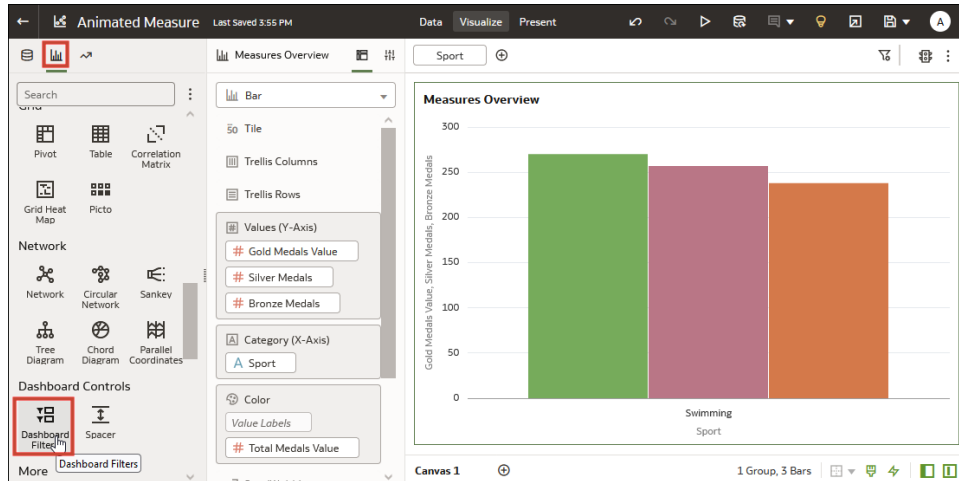
ワークブック作成者として、スライダ・ダッシュボード・フィルタをワークブック・キャンバスに追加して、ビジュアライゼーションをフィルタ処理およびアニメーション化し、時間などの特定のディメンションでデータがどのように変化するかを動的に表示できるようにします。

たとえば、2000年から2012年の間に獲得されたオリンピック・メダル数を分析し、その年範囲で変動する数値をアニメーションで表示できます。

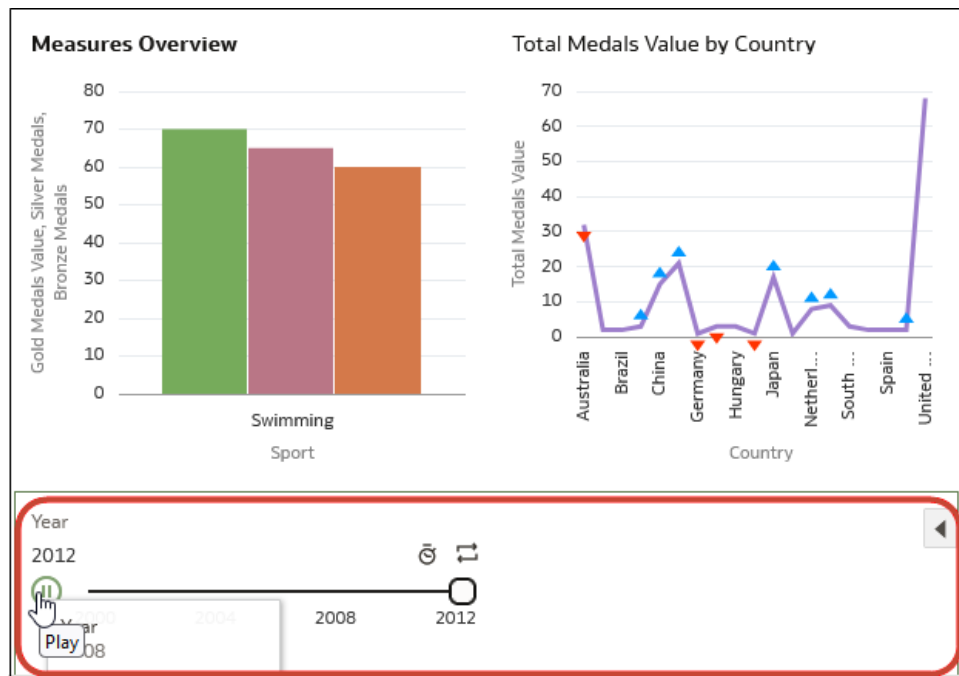
1. ワークブックの「ビジュアル化」ペインで、ディメンションをフィルタとして使用できる1つ以上のビジュアライゼーションを追加します。

各ビジュアライゼーションに同じディメンション・データが含まれていることを確認します。たとえば、2000年から2012年の間のデータを分析できるように「年」のデータをフィルタ処理できます。

- データ・パネルで、「ビジュアライゼーション」をクリックし、「ダッシュボード・コントロール」までスクロールしてから、「ダッシュボード・フィルタ」をダブルクリックします。

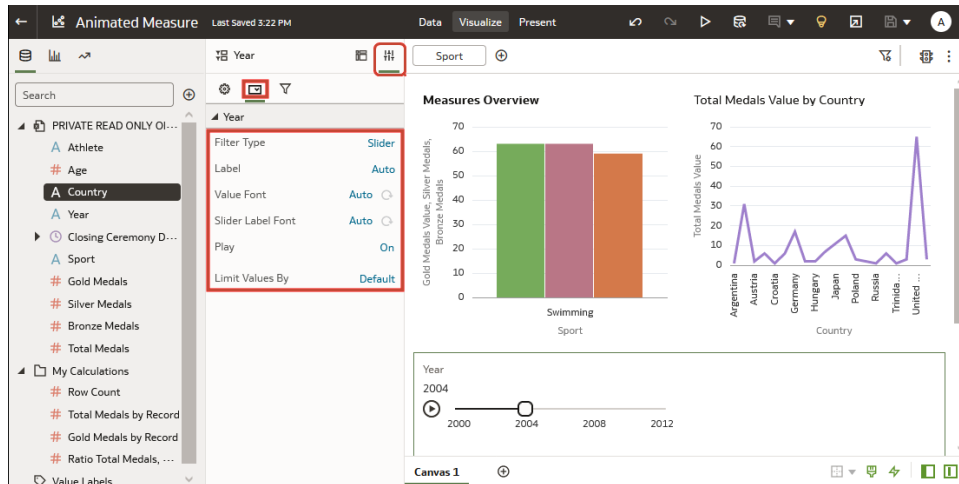


- データ・パネルの上部にある「データ」をクリックし、ディメンションベースのデータ要素を新しいダッシュボード・フィルタにドラッグします。たとえば、一定期間の値を分析するには、ダッシュボード・フィルタに「年」を追加できます。

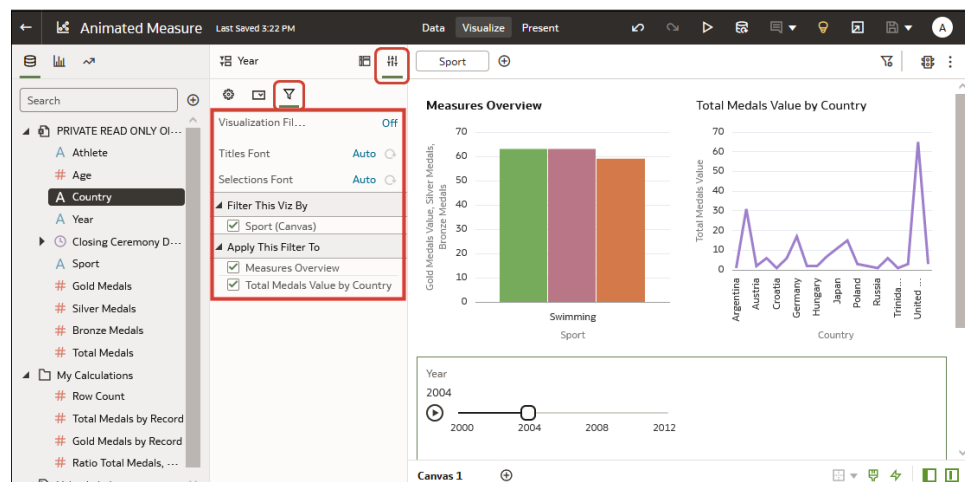


- 「データ・パネル」で「プロパティ」をクリックしてから「フィルタ・コントロール」をクリックし、「フィルタ・タイプ」の値(デフォルトは「リスト」)をクリックして「スライダ」を選択します。ダッシュボード・フィルタに表示されているメジャーの値が表示され

ます。たとえば、ダッシュボード・フィルタに「年」を追加した場合は、2000、2001 および 2002 が表示されます。



5. データ・パネルの下部にあるプロパティ・パネルで、**フィルタ・コントロール**をクリックし、「再生」オプションを使用して自動再生をオフまたはオンにします。
6. 再生を有効にした場合は、スライダ・ダッシュボード・プロンプトで「再生」をクリックすると、デフォルト設定でビジュアライゼーションがどのように再生されるかを確認できます。
7. 「プロパティ」ペインの「フィルタ」タブで、次のオプションを使用してデフォルト設定を変更します：
 - 「一般」タブでは、タイトルや、タイトル、ラベル、値のフォント、背景や配置などのその他のオプションを変更できます。
 - 「フィルタ・コントロール」タブで、ラベル、値のフォントおよび再生オプションを変更できます。アニメーションなどの時間値を自動的に再生するには、「再生」を「オン」に設定します。または、ダッシュボード・コンシューマが時間値を対話的に選択できるようにするには、「再生」を「オフ」に設定します。
 - 「フィルタ」タブで、フォントを選択し、ダッシュボード・フィルタで再生されるビジュアライゼーションを指定できます。



メイン・フィルタ・バーとビジュアライゼーションの間でのフィルタのスコープの変更


フィルタのスコープは、メイン・フィルタ・バーとビジュアライゼーションの間で移動したり、コピーして変更できます。


1. ホーム・ページでワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックして、「開く」、「編集」の順に選択します。
2. 「ビジュアル化」タブをクリックします。
3. メイン・フィルタ・バーとビジュアライゼーションの間で移動したり、コピーしてフィルタのスコープを変更します。
 - **メイン・フィルタをビジュアライゼーションに移動** - ドラッグ・アンド・ドロップしてメイン・フィルタ・バーから**文法パネル**またはビジュアライゼーションにフィルタを移動します。
 - 「すべてのキャンバスに固定」が選択されている場合、フィルタはワークブック、ワークブックのすべてのキャンバス、およびキャンバスのすべてのビジュアライゼーションに適用されます。
 - 「すべてのキャンバスに固定」が選択されていない場合、フィルタはキャンバスおよびキャンバスのすべてのビジュアライゼーションに適用されます。
 - **メイン・フィルタをビジュアライゼーションにコピー** - [Shift]キーを押したまま、メイン・フィルタ・バーから**文法パネル**またはビジュアライゼーションにフィルタをドラッグ・アンド・ドロップします。
 - **ビジュアライゼーション・フィルタをメイン・フィルタ・バーに移動** - ビジュアライゼーション・フィルタを**文法パネル**からメイン・フィルタ・バーにドラッグ・アンド・ドロップします。
これによって、フィルタがメイン・フィルタ・バーに移動され、ビジュアライゼーションから削除されます。
 - **ビジュアライゼーション間でのフィルタのコピー** - ビジュアライゼーション・フィルタを**文法パネル**から別のビジュアライゼーションにドラッグ・アンド・ドロップします。
これによって、選択したビジュアライゼーションにフィルタがコピーされます。
 - **ビジュアライゼーション間でのフィルタの移動** - [Shift]キーを押したまま、**文法パネル**から別のビジュアライゼーションにビジュアライゼーション・フィルタをドラッグ・アンド・ドロップします。

ビジュアライゼーションのフィルタとしての使用

キャンバスの他のビジュアライゼーションをフィルタするようビジュアライゼーションを構成できます。たとえば、月フィルタで1月を選択すると、キャンバス上の他のビジュアライゼーションで1月にフォーカスします。

ワークブックに複数のデータセットがあり、一部が結合されていない場合は、フィルタの使用に制限があります。データセットのデータ要素を別のデータセットのビジュアライゼーションにおいてフィルタとして使用するには、データ要素をフィルタとして使用する前に、両方のデータセットを結合する必要があります。フィルタのデータ要素が使用されていないビジュアライゼーションは淡色表示になります。

1. ホーム・ページでワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックして、「開く」を選択し、「編集」をクリックします。
2. 「ビジュアル化」タブをクリックします。
3. フィルタとして使用するビジュアライゼーションにカーソルを合せます。
4. 「フィルタとして使用」アイコンをクリックして、アクティブ化します。

「フィルタとして使用」アイコンは、アクティブになると緑色に変わります。

様々なフィルタ・タイプの適用

様々なフィルタ・タイプを使用すると、関心のあるデータにフォーカスできます。

トピック:

- [範囲フィルタの適用](#)
- [上位下位 N 件フィルタの適用](#)
- [リスト・フィルタの適用](#)
- [日付範囲フィルタの適用](#)
- [相対時間フィルタの適用](#)
- [式フィルタを使用したデータのフィルタ](#)
- [ロールベース・フィルタの適用](#)

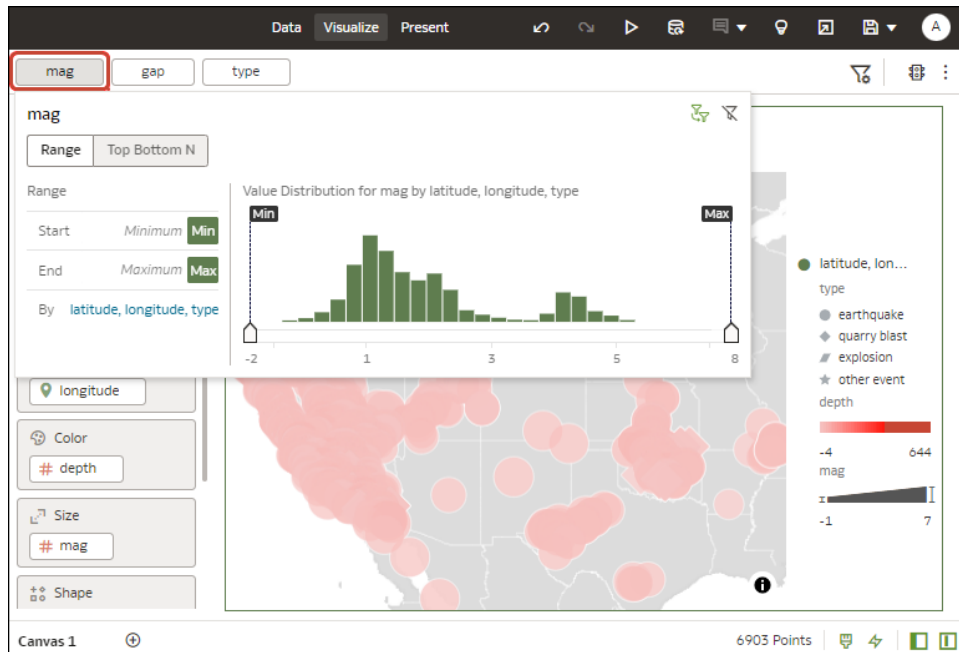
範囲フィルタの適用

範囲フィルタは、数値データ型であり、「集計ルール」が「なし」以外に設定されているデータ要素に対して使用します。

範囲フィルタはメジャー列にのみ適用され、\$100,000 から\$500,000 の売上など、連続する値の範囲にデータを制限します。あるいは、連続する値の範囲を(含むのではなく)除外する範囲フィルタを作成できます。このような排他的フィルタでは、2つの連続しない範囲(例: \$100,000 未満または\$500,000 超の売上)にデータが制限されます。

ワークブックにビジュアライゼーションがない場合は、作成します。[ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスでフィルタをクリックし、「範囲」をクリックします。



3. 「基準」をクリックして、選択された「属性」のリストを表示し、フィルタを構成します:
 - メンバーをクリックし、選択済リストに対してそのメンバーを削除または追加します。
 - **プラス(+)**アイコンをクリックし、新しいメンバーを選択済リストに追加します。
 - ヒストグラムの「最小」と「最大」のスライダを動かして、フィルタ処理する範囲を設定します。
4. フィルタの外側をクリックしてフィルタ・パネルを閉じます。

上位下位 N 件フィルタの適用

上位下位 N 件フィルタは、メジャーや属性をフィルタして、最高値や最小値を表示する場合に使用します。

1. 「上位下位 N 件」フィルタをキャンバスおよびワークブック内のすべてのビジュアライゼーションに適用するには:
 - a. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
 - b. ビジュアライゼーションの「データ・パネル」で、フィルタする属性またはメジャーを選択し、フィルタ・バーにこれをドラッグ・アンド・ドロップします。
 - c. フィルタ・バーでフィルタをクリックしてから、「上位下位 N 件」をクリックします。範囲フィルタのみを「上位下位 N 件」フィルタに変換できます。
2. 上位下位 N 件フィルタをワークブック内の特定のビジュアライゼーションに適用するには:
 - a. キャンバスで、フィルタするビジュアライゼーションを選択します。
 - b. 「データ・パネル」で、フィルタする属性またはメジャーを探し、文法パネルの「フィルタ」ドロップ・ターゲットにドラッグ・アンド・ドロップします。

- c. フィルタ・バーでフィルタをクリックして**上位下位 N 件**をクリックします。
3. 「上位下位 N 件」フィルタをキャンバス上フィルタに適用するには:
 - a. 選択したキャンバスで「データ・パネル」に戻り、「**ビジュアライゼーション**」をクリックして、「**リスト・ボックス**」フィルタをクリックします。
 - b. 「データ・パネル」で、フィルタする属性またはメジャーを見つけ、作成した「リスト・ボックス」ビジュアライゼーションにこれをドラッグ・アンド・ドロップします。
4. 上位下位 N 件フィルタを構成するには、フィルタをクリックしてから、次を実行します:
 - 上位と下位を変更するには、「**方法**」の値をクリックして、「上位」または「下位」をクリックします。
 - 表示される行数を指定するには、「**件数**」フィールドをクリックして行数を入力します。
 - 制限の基準とする属性またはメジャー列を変更するには、「**基準**」フィールドをクリックして属性またはメジャーを選択するか、キャンバスにあるカスタム計算を選択します。または、**プラス(+)**をクリックし、制限の基準とする属性、メジャーまたはメトリックを探して選択します
5. フィルタの外側をクリックしてフィルタ・パネルを閉じます。

リスト・フィルタの適用

リスト・フィルタをテキスト、集計できない数値および日付に適用し、フィルタでどのメンバーを含めるか、除外するかを選択できます。

ワークブックにビジュアライゼーションがない場合は、作成します。[ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、フィルタ・バーのフィルタまたはキャンバス上フィルタを選択し、「**リスト**」をクリックします。
3. 含めるメンバーを見つけてクリックし、「**選択項目**」リストに追加します。あるいは、「**検索**」フィールドと「**検索オプション・メニュー**」を使用して、フィルタに追加するメンバーを見つけます。検索にはワイルドカード(*および?)を使用します。
4. オプション: 「**選択項目**」リストに関連する次のアクションを実行します:
 - リストから削除するメンバーをクリックします。
 - フィルタで除外するがリストからは削除しないメンバーの横にある目のアイコンをクリックします。
 - 上部の「**メニュー**」をクリックして、「**選択項目を除外する**」を選択してリストからメンバーを除外します。
 - 「**NULL**」をクリックして、リストの null 値のメンバーを含めます。
 - 「**追加**」をクリックして、リストにすべてのメンバーを追加します。
 - 「**クリア**」をクリックして、リストからすべてのメンバーを削除します。
5. フィルタの外側をクリックしてフィルタ・パネルを閉じます。

日付範囲フィルタの適用

日付範囲フィルタでは、カレンダー・コントロールを使用して時間または日付の選択を調整します。1つの連続的な日付範囲を選択するか、指定範囲内の日付を除外するための日付範囲フィルタを使用できます。

ワークブックにビジュアライゼーションがない場合は、作成します。[ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、フィルタ・バーまたはキャンバス上フィルタにあるフィルタを選択し、「**日付範囲**」をクリックします。
3. ドロップダウン・リストをクリックして、適用する日付範囲のタイプ(「範囲」、「開始時間」、「終了時間」、「次と等しい」など)を選択します。
4. 日付ピッカーを使用して、範囲を構成します。
5. フィルタの外側をクリックしてフィルタ・パネルを閉じます。

相対時間フィルタの適用

日付または日時列で相対時間フィルタを使用し、現在の日付および時間に基づいて特定の期間のデータを表示します。

過去または将来の時間単位(2年など)の明示的な数値として相対期間を指定するか、前の期間を指定できます。たとえば、当年初めからの累計には今年の1月1日から現在の日付までのデータが含まれ、当月初めからの累計には月初から現在の日付までのデータが含まれます。

相対時間フィルタをデータ・ソースにすでに存在する日付列のみに適用でき、「年」または「四半期」などの派生列には適用できません。相対時間フィルタ・タイプでは、日付(時刻部分なし)および日時(日付と時刻の両方がある **TIMESTAMP**)列タイプをサポートしています。

問合せで使用される現在日付と時間は、サーバーのタイムゾーン(ブラウザ・ホストの時間またはタイムゾーンではない)の Oracle Analytics サーバー・ホストの日付と時間です。週の開始曜日(日曜日または月曜日)は Oracle Analytics サーバーのロケールに基づいています。これは、サーバー構成設定 **NLS_TERRITORY** を使用して設定されます。

ワークブックにビジュアライゼーションがない場合は、作成します。[ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、フィルタ・バーまたはキャンバスのフィルタをクリックし、「**相対時間**」をクリックします。
3. フィルタする範囲を定義する**タイプ**を選択します。
 - **最後** - 選択した「**時間レベル**」(年、四半期、月、週、日。列時間が **TIMESTAMP** の場合、時間、分および秒を含む)に今日の日付に対応して適用する「**期間**」を指定し、その期間の日付値のレコードを表示します。
「日時」列に基づいた、日よりも長い粒度(たとえば、年、四半期、月、週、日など)を持つ「最後」フィルタは、開始日の同じ時刻からデータを取得します。たとえば、サーバーの日付/時間が現在、木曜日の午後 3:15 である場合、「日時」列の最後の2日間

フィルタは、サーバーのタイムゾーンで火曜日の午後 3:15 と木曜日の午後 3:15 の間のタイムスタンプを持つデータを取得します。DATE 列タイプに基づいたフィルタ問合せ(定義時に時刻が関連付けられていない問合せ)は、サーバー・ホストの日付のみに依存しており、時刻には依存しません。

- **次** - 選択した「**時間レベル**」(年、四半期、月、週、日。列時間が **TIMESTAMP** の場合、時間、分および秒を含む)に今日の日付に対応して適用する将来の「**期間**」の数値を指定し、その期間の日付値のレコードを表示します。
- **終了日** - 今日の日付に対応する過去の「**時間レベル**」(年、四半期、月、週、日。列時間が **TIMESTAMP** の場合、時間および分を含む)を指定します。この値は、ビジュアライゼーションの日付値に適用されます。「終了日」フィルタは選択した期間の開始からのデータを取得します。たとえば、「月累計」では、今月の最初の日の午前 0 時から現在の日付と時刻(今日または現在)までのデータを取得します。

4. フィルタの外側をクリックしてフィルタ・パネルを閉じます。

式フィルタを使用したデータのフィルタ

式フィルタを使用すると、SQL 式でより複雑なフィルタを定義できます。式フィルタでは、ゼロ個以上のデータ要素を参照できます。

たとえば、式フィルタ"Sample Sales"."Base Facts"."Revenue" < "Sample Sales"."Base Facts"."Target Revenue"を作成するとします。フィルタを適用すると、ターゲット売上を達成しなかった項目が表示されます。

式フィルタ・パネルを使用して、式を作成します。データ要素を式フィルタ・パネルにドラッグ・アンド・ドロップして、適用する関数を選択します。式は、適用する前に検証されます。

ワークブックにビジュアライゼーションがない場合は、作成します。[ワークブックの構築およびビジュアライゼーションの作成の開始](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアライゼーション」キャンバスでフィルタ・バーに移動し、「**フィルタの追加**」をクリックしてから、「**式フィルタの追加**」を選択します。
3. 式フィルタ・パネルの「**式**」フィールドに式を作成します。たとえば、目標収益を達成しなかった項目にフォーカスするには、"Sample Sales"."Base Facts"."Revenue" < "Sample Sales"."Base Facts"."Target Revenue"と入力します。
4. 「**ラベル**」フィールドで、式に名前を指定します。
5. オプション: 説明を入力します。

計算の上にカーソルを合せると、ツールチップに説明が表示されます。

6. 「**検証**」をクリックして、構文が正しいかどうかを確認します。
7. 式フィルタが有効である場合は、「**適用**」をクリックします。キャンバスのビジュアライゼーションに式が適用されます。

ロールベース・フィルタの適用

このトピックでは、ロールベース・フィルタをワークブックおよびビジュアライゼーションに適用するために知っておく必要があることについて説明します。アプリケー

ション・ロールに基づくフィルタ(ロールベース・フィルタとも呼ばれる)を使用すると、ビジネス・アナリストおよびユーザーは、必要なデータにのみアクセスできます。

トピック:

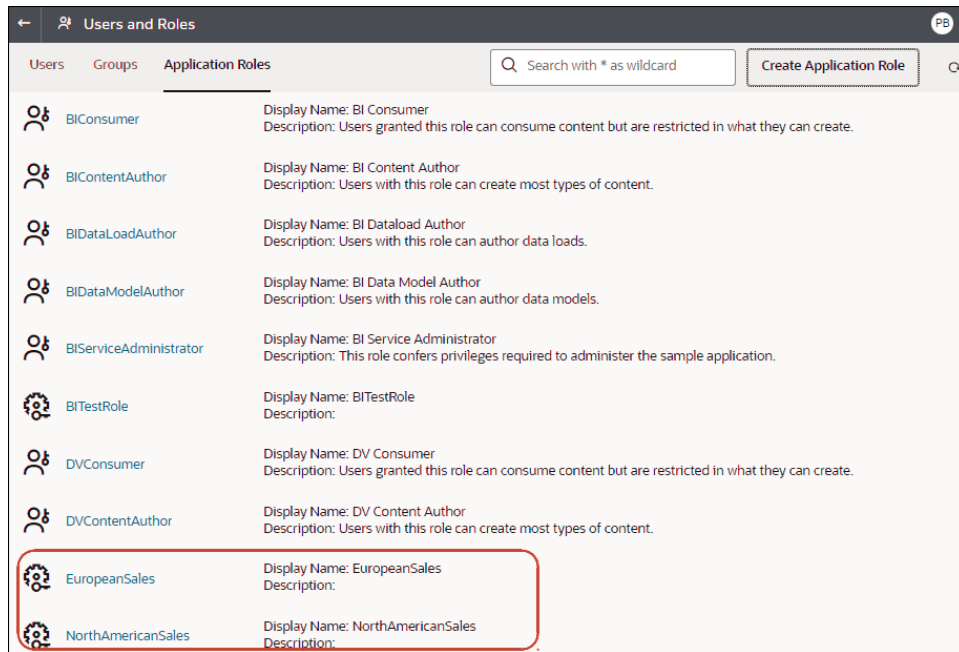
- [ロールベース・フィルタの使用の概要](#)
- [アプリケーション・ロールに基づくデータセットのフィルタ](#)
- [例 1 - ワークブックへの単純なロールベース・フィルタの適用](#)
- [例 2 - ワークブックへの複数のロールベース・フィルタの適用](#)

ロールベース・フィルタの使用の概要

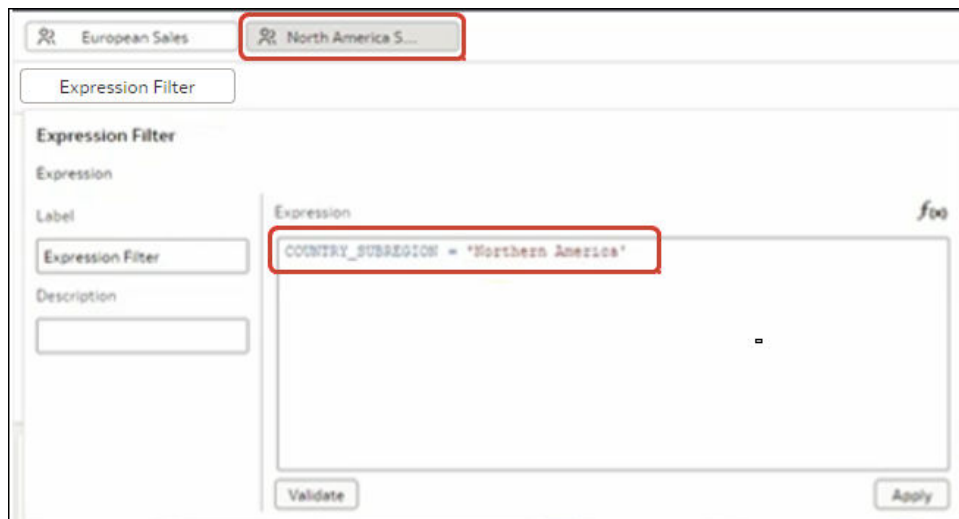
アプリケーション・ロールに基づくフィルタ(ロールベース・フィルタとも呼ばれる)を使用すると、Oracle Analytics のビジネス・アナリストおよびユーザーは、必要なデータにのみアクセスできます。たとえば、一部のユーザーが共有のグローバル・セールス・ワークブックを開いたときに、北米の売上データのみが表示されるようにしたいとします。これを実現するには、「北米アナリスト」というカスタム・アプリケーション・ロールを作成し、それを使用してワークブック・データをフィルタ処理します。

ロールベース・フィルタについて

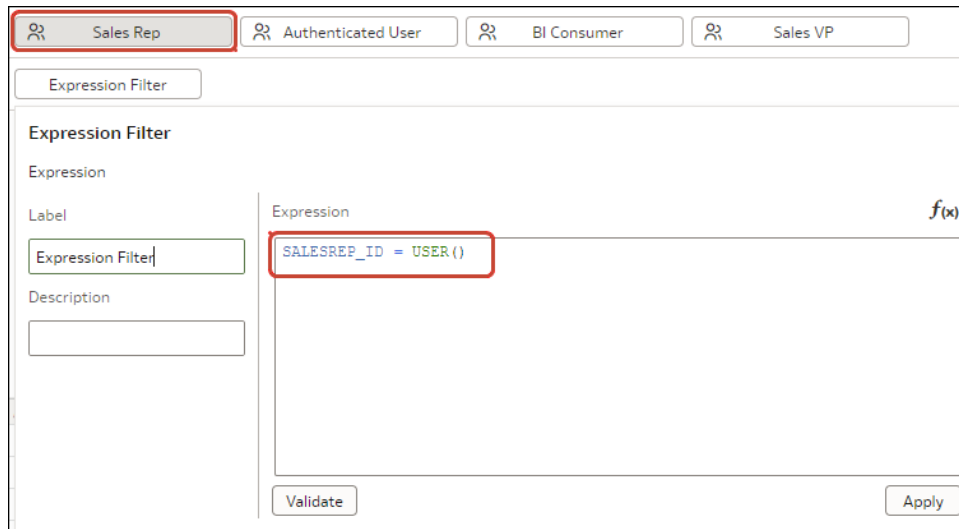
- データセット所有者は、Oracle Analytics アプリケーション・ロールに基づいてフィルタを適用します。これにより、ユーザーには自分のアプリケーション・ロールに適したデータのみが表示されます。
- ロールベース・フィルタをデータセットに適用します。
- 同時に複数のロールベース・フィルタをデータセットに適用できます。
- データセット・エディタでロールベース・フィルタを追加する場合、表示されるプレビュー・データはフィルタ処理されず、ワークブック・コンシューマがデータセットにアクセスしたときにデータセットがフィルタ処理されます。
- 既存のアプリケーション・ロールを使用することも、独自のアプリケーション・ロールを作成することもできます。たとえば、ヨーロッパと北米のアナリストのグローバル売上データセットをフィルタ処理するには、アプリケーション・ロール *EuropeanSales* および *NorthAmericaSales* を作成できます。



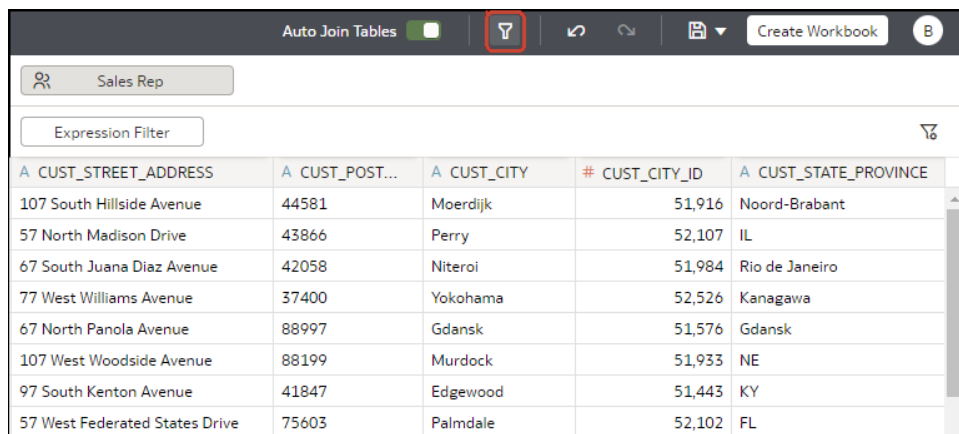
- 式を使用して、ロールベース・フィルタを指定します。たとえば、**North America Sales** アプリケーション・ロールでは、式 `COUNTRY_SUBREGION = "Northern America"` を使用して、**COUNTRIES** 表の **COUNTRY_SUBREGION** 列をフィルタ処理できます。



- フィルタ式では、**Oracle Analytics** システム変数を参照できます。たとえば、**Sales Rep** アプリケーション・ロールでは、式 `SALESREP_ID = USER()` を使用して **SALESREP_ID** 列をフィルタ処理できます。ここで、**USER()** はログイン・ユーザーの ID を提供するシステム変数です。



- データベース・エディタで、ツールバーの**ロールベース・フィルタ・バー**の非表示または表示オプションを使用して、ロールベース・フィルタ・パネルを表示します。



ロールベース・フィルタの使用に関するヒント

- すべてのユーザーおよびロールのデータセットをフィルタ処理するには、*Authenticated User* ロールにロールベース・フィルタを追加します。たとえば、ユーザーが EMEA リージョンのデータにのみアクセスできるようにする場合は、フィルタ式 `REGION = "EMEA"` を *Authenticated User* ロールに追加します。

- データセットにロールベース・フィルタを設定すると、データセット所有者を含め、指定されたロールを持たないユーザーは、どのデータも参照できなくなります。データセット所有者がデータを参照する必要がある場合は、指定されたロールの1つにデータセット所有者を追加します。さらに、Admin や OrgVP などのスーパー・ロールを持つユーザーがすべてのデータを参照する必要がある場合は、 دامパー・フィルタを作成します。たとえば、OrgVP がリージョン内のすべてのデータを参照できるようにする場合は、OrgVP のアプリケーション・ロール用に追加のフィルタを作成し、式 1=1 でフィルタを作成します。OrgVP を持つユーザーがログインしてワークブックを作成する場合、すべてのデータを参照できます。

アプリケーション・ロールに基づくデータセットのフィルタ

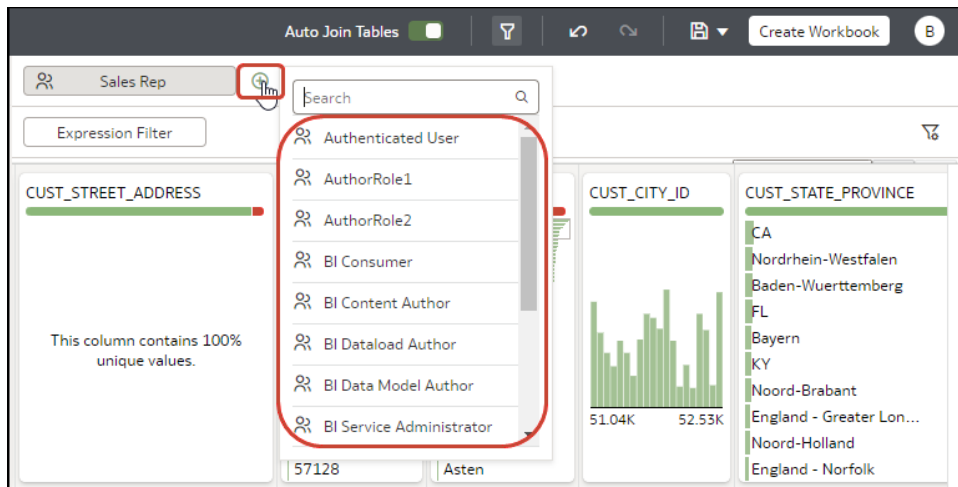
アプリケーション・ロールに基づくフィルタを使用して、ビジネス・アナリストおよびユーザーが必要なデータにのみアクセスできるようにします。たとえば、北米のビジネス・ユーザーが共有ワークブックを開いたときに、北米のデータのみが表示されるようになります。

データセットにロールベースのフィルタを適用した場合、それをワークブックに追加し、他のビジネス・アナリストおよびユーザーとワークブックを共有します。他のユーザーが Oracle Analytics にログインし、ワークブックを開くと、ロールベース・フィルタを使用して共有したデータのみが表示されます。

- 「ホーム」ページで、データセットを選択し、「アクション・メニュー」をクリックしてから「開く」を選択します。
- データベース・エディタで、「結合ダイアグラム」をクリックします。
- ツールバーのロールベース・フィルタ・バーの非表示または表示オプションをクリックします。

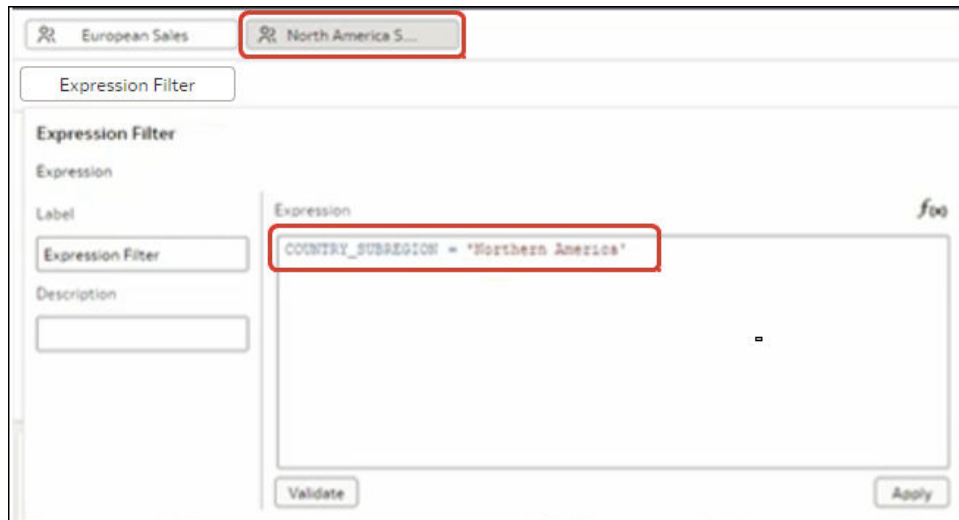
A CUST_STREET_ADDRESS	A CUST_POST...	A CUST_CITY	# CUST_CITY_ID	A CUST_STATE_PROVINCE
107 South Hillside Avenue	44581	Moerdijk	51,916	Noord-Brabant
57 North Madison Drive	43866	Perry	52,107	IL
67 South Juana Diaz Avenue	42058	Niteroi	51,984	Rio de Janeiro
77 West Williams Avenue	37400	Yokohama	52,526	Kanagawa
67 North Panola Avenue	88997	Gdansk	51,576	Gdansk
107 West Woodside Avenue	88199	Murdock	51,933	NE
97 South Kenton Avenue	41847	Edgewood	51,443	KY
57 West Federated States Drive	75603	Palmdale	52,102	FL

4. ロールベース・フィルタ・バーにカーソルを合せ、「**ロールの追加**」(+) をクリックしてアプリケーション・ロールのリストを表示します。



5. ドロップダウン・リストで、データセットのフィルタ処理に使用するアプリケーション・ロールを選択します。
6. アプリケーション・ロールを右クリックし、「**フィルタの作成**」を選択して式フィルタ・エディタを表示します。
7. オプション: 必要な場合は、「**ラベル**」フィールドを使用して、フィルタ名をよりわかりやすい名前に変更します。
8. 「**式**」ボックスで、データ値を一重引用符で囲んでデータをフィルタ処理する論理式を入力します。

たとえば、データセットに、地理的地域を特定する列 `COUNTRY_SUBREGION` がある場合は、`COUNTRY_SUBREGION = 'Northern America'` と入力します。



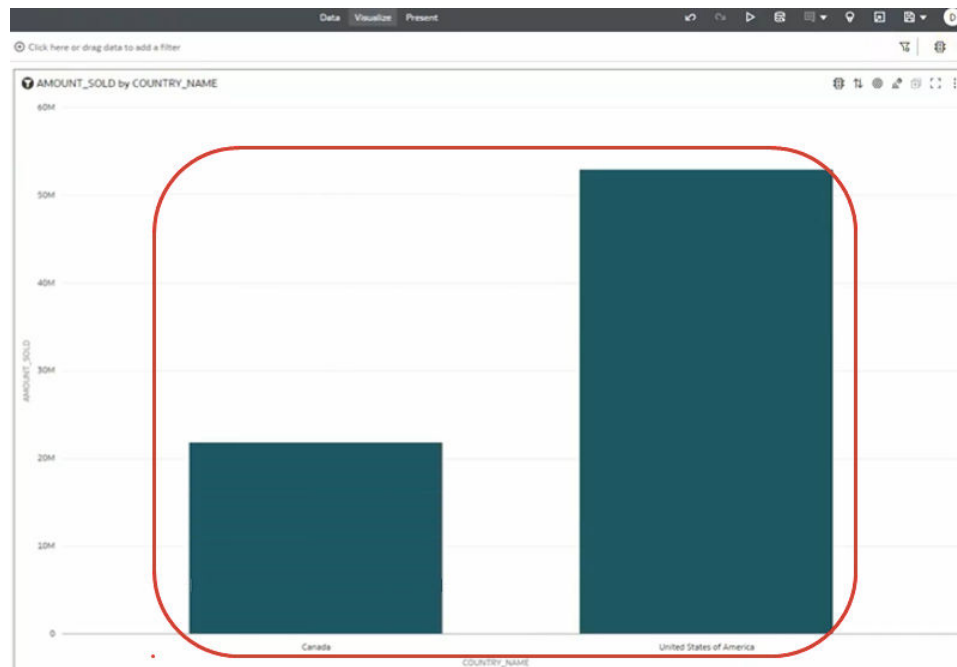
9. 「検証」をクリックし、「適用」をクリックします。

例 1 - ワークブックへの単純なロールベース・フィルタの適用

この例では、北米の営業担当者が共有のグローバル・セールス・ワークブックを開いたときに北米の売上データのみアクセスできるようにデータセットをフィルタ処理する方法を示しています。

サンプル・レポート

北米の営業担当者は、Oracle Analytics にログインし、共有のグローバル・セールス・ワークブックを開いたときに、北米の売上データのみを参照する必要があります。この例では、営業担当者 *dvauthoruser* は北米の国であるカナダと米国の売上のみを参照できます。



サンプル・データ

サンプル・データセットには売上データが含まれ、COUNTRIES 表の COUNTRY_SUBREGION 列に位置情報が格納されています。

COUNTRY_ID	COUNTRY_ISO...	COUNTRY_NAME	COUNTRY_SUBREGION	COUNTRY_SUBR...	COUNTRY_REGI...	COUNTRY_REGI...	COUNTRY_TOTAL	COUNTRY_TOT...
52771	CN	China	Asia	52,793	Asia	52,802	World total	52,806
52781	IN	India	Asia	52,793	Asia	52,802	World total	52,806
52782	JP	Japan	Asia	52,793	Asia	52,802	World total	52,806
52783	MY	Malaysia	Asia	52,793	Asia	52,802	World total	52,806
52769	SG	Singapore	Asia	52,793	Asia	52,802	World total	52,806
52791	ZA	South Africa	Africa	52,792	Africa	52,800	World total	52,806
52774	AU	Australia	Australia	52,794	Oceania	52,805	World total	52,806
52785	NZ	New Zealand	Australia	52,794	Oceania	52,805	World total	52,806
52787	SA	Saudi Arabia	Middle East	52,796	Middle East	52,804	World total	52,806
52786	PL	Poland	Eastern Europe	52,795	Europe	52,803	World total	52,806
52776	DE	Germany	Western Europe	52,799	Europe	52,803	World total	52,806
52777	DK	Denmark	Western Europe	52,799	Europe	52,803	World total	52,806
52778	ES	Spain	Western Europe	52,799	Europe	52,803	World total	52,806
52779	FR	France	Western Europe	52,799	Europe	52,803	World total	52,806

サンプル・ユーザーおよびアプリケーション・ロール

- ユーザー *dvauthoruser* にはアプリケーション・ロール *North America Sales* が割り当てられています。

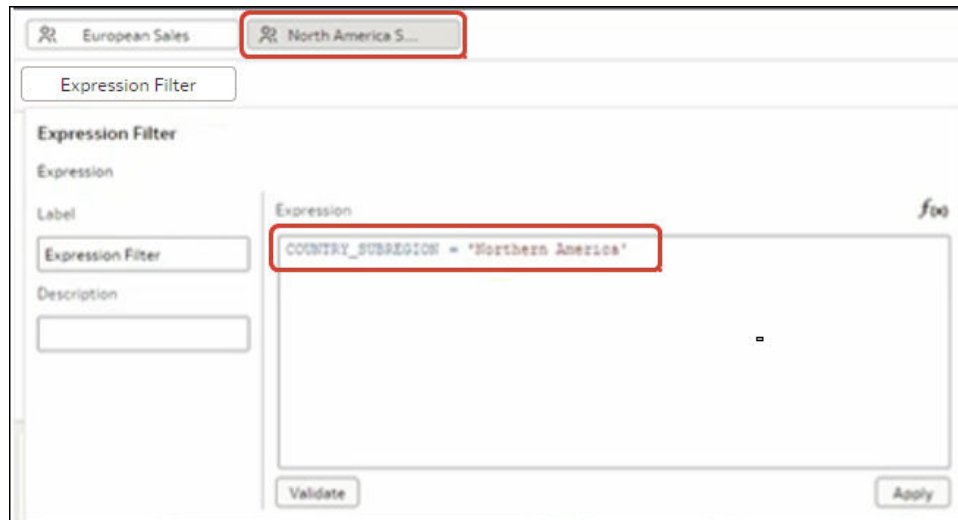
サンプル・データセット・アクセス構成

データセットの「検査」ダイアログの「アクセス」の下の「ロール」で、認証されたユーザーに「読み取り専用」アクセス権が付与されます。



サンプル・ロールベース・フィルタ

データセット・エディタで、ワークブック作成者は、式 `COUNTRY_SUBREGION = "Northern America"` を使用して、ロールベース・フィルタを *North America Sales* アプリケーション・ロールに適用します。



例 2 - ワークブックへの複数のロールベース・フィルタの適用

この例は、営業担当副社長と営業担当者が同じ共有ワークブックを使用して売上データを分析する方法を示しています。副社長は、チーム内のすべての営業担当者の売上データを参照できます。営業担当者は、自分の売上データのみを参照できます。

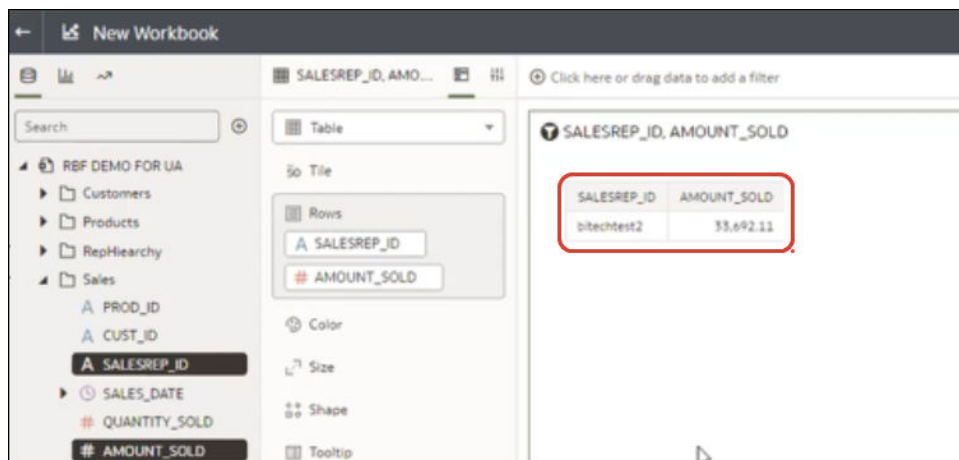
サンプル・レポート

営業担当副社長または営業担当者は、同じ共有ワークブックを開いて、自分のアプリケーション・ロールとユーザー ID に適したデータを参照できます。

- 営業担当副社長が Oracle Analytics にログインし、共有のセールス・ワークブックを開くと、チーム内の各営業担当者の売上データが表示されます。この例では、営業担当副社長である *dvauthoruser* は、チーム内の営業担当者(*bitechtest*、*bitechtest2* および *bitechtest3*)の売上サマリーを参照できます。

SALESREP_ID	AMOUNT_SOLD
bitechtest	23,910.46
bitechtest2	33,692.11
bitechtest3	35,922.69

- 営業担当者が Oracle Analytics にログインし、共有のセールス・ワークブックを開くと、自分の売上データのみが表示されます。この例では、営業担当者 *bitechtest2* は自分の売上である \$33,692.11 のみを参照できます。

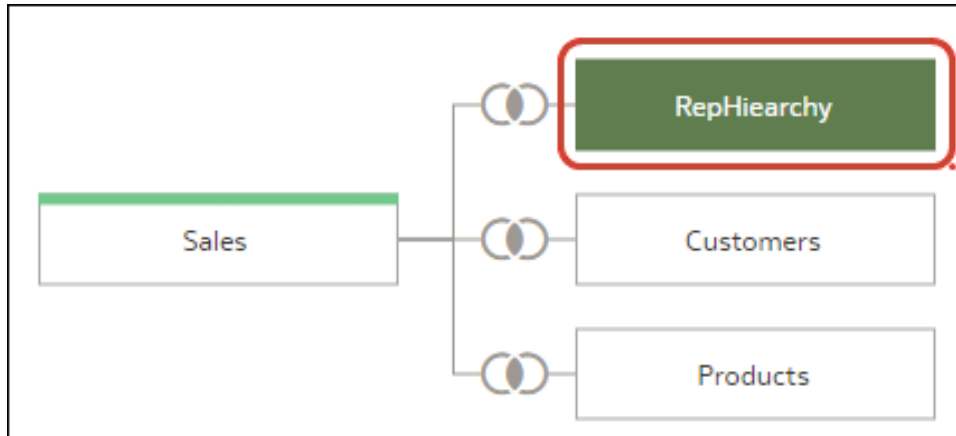


サンプル・データ

サンプル・データセットには売上データが含まれ、SALESREP_ID 列に営業担当者 ID が表示されています。

A PROD_ID	A CUST_ID	A SALESREP_ID	SALES_DATE	# QUANTITY...	# AMOUNT_SOLD
139	2943	bitechtest2	08/26/2019	1	17.7700000000000
34	1025	bitechtest	06/19/2018	1	44.7900000000000
118	2365	bitechtest4	09/30/2019	1	8.1300000000000
47	3059	bitechtest2	01/27/2019	1	30.0800000000000
48	4678	bitechtest5	03/28/2022	1	12.0000000000000
134	3829	bitechtest7	08/09/2020	1	23.6000000000000
46	680	bitechtest5	06/10/2021	1	24.6100000000000
38	3374	bitechtest4	11/23/2019	1	27.7800000000000
139	1619	bitechtest6	07/07/2020	1	22.2500000000000
45	3635	bitechtest2	07/03/2020	1	48.1000000000000
16	2985	bitechtest3	07/07/2021	1	303.330000000000
28	4047	bitechtest3	07/17/2018	1	214.740000000000
31	5576	bitechtest2	12/16/2020	1	8.3200000000000
130	8203	bitechtest2	08/30/2018	1	94.4900000000000
140	4344	bitechtest5	03/31/2020	1	37.7900000000000
132	4435	bitechtest	10/02/2021	1	27.5900000000000
132	12005	bitechtest6	05/21/2021	1	23.7300000000000
123	9084	bitechtest3	12/26/2019	1	50.7900000000000
26	11445	bitechtest3	12/21/2021	1	154.650000000000
126	3927	bitechtest	04/08/2020	1	29.5200000000000
24	4960	bitechtest7	06/29/2021	1	64.3000000000000

営業担当副社長から営業担当者までの階層は、RepHierarchy 表を使用して実装されています。



RepHierarchy 表は、営業担当副社長をチーム内の営業担当者に関連付けます:

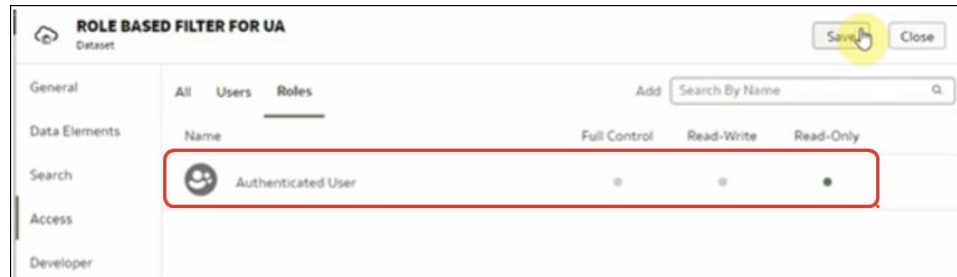
A VP_ID	A SALESREP_ID
dvauthoruser	bitechtest
dvauthoruser	bitechtest2
dvauthoruser	bitechtest3
dvauthoruser2	bitechtest4
dvauthoruser2	bitechtest5
dvauthoruser2	bitechtest6
⋮	
dvauthoruser2	bitechtest7

サンプル・ユーザーおよびアプリケーション・ロール

- ユーザー *dvauthoruser* および *dvauthoruser2* は、アプリケーション・ロール *Sales VP* に割り当てられています。
- ユーザー *bitechtest* から *bitechtest7* には、アプリケーション・ロール *Sales Rep* が割り当てられています。

サンプル・データセット・アクセス構成

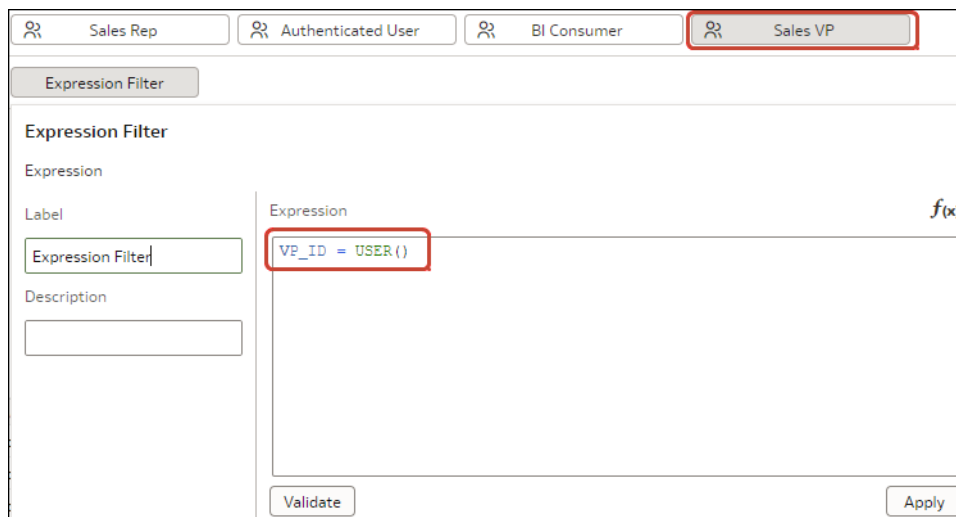
データセットの「検査」ダイアログの「アクセス」の下の「ロール」で、認証されたユーザーに「読取り専用」アクセス権が付与されます。



サンプル・ロールベース・フィルタ

ワークブック作成者は、ワークブックによって使用されるデータセットに2つのロールベース・フィルタを適用します。一方は営業担当副社長用で、もう一方は営業担当者用です。

- ワークブック作成者は、式 `SALESVP_ID = USER()` を使用して、ロールベース・フィルタを営業担当副社長の'Sales VP'アプリケーション・ロールに適用します。引数 `USER()` は Oracle Analytics のシステム変数で、ログイン・ユーザーの ID を提供します。



- ワークブック作成者は、式 `SALESREP_ID = USER()` を使用して、ロールベース・フィルタを'Sales Rep'アプリケーション・ロールに適用します。

The screenshot shows the 'Expression Filter' dialog box in Oracle BI Express. At the top, there are four user selection buttons: 'Sales Rep' (highlighted with a red box), 'Authenticated User', 'BI Consumer', and 'Sales VP'. Below this is a section titled 'Expression Filter' with a sub-section 'Expression'. On the left, there are three input fields: 'Label' (containing 'Expression Filter'), 'Description' (empty), and 'Expression' (containing 'SALESREP_ID = USER()', which is also highlighted with a red box). At the bottom right of the 'Expression' field, there is a small 'f(x)' icon. At the bottom of the dialog, there are two buttons: 'Validate' and 'Apply'.

8

パラメータの作成および使用

このトピックでは、パラメータを作成して、ワークブックの様々な部分で使用できる値を格納および管理する方法について説明します。

トピック:

- [パラメータの概要](#)
- [システム・パラメータについて](#)
- [パラメータのプロパティについて](#)
- [パラメータの変更および削除について](#)
- [パラメータの作成](#)
- [二重列に論理 SQL 問合せを使用するパラメータの作成](#)
- [SQL 式データ型を使用するパラメータの作成](#)
- [パラメータを参照するための構文](#)
- [フィルタへのパラメータのバインド](#)
- [パラメータの使用](#)

パラメータの概要

パラメータは、複数の場所で使用する現在の値を格納および管理するユーザー定義変数として機能します。

パラメータは次のように使用できます:

- ワークブックおよびビジュアライゼーションで列セレクトアとして
- 式フィルタで
- 計算で
- 論理 SQL 式で
- ビジュアライゼーションのプロパティで
- データ・アクションで

パラメータを作成するときは、**Oracle Analytics** でパラメータの現在の値の初期化に使用される初期デフォルト値を指定できます。パラメータに使用可能な値と初期値のリストを指定するには、値を手動で入力するか、論理 SQL 問合せを使用します。

パラメータの範囲はワークブック内のみです。他のワークブックとパラメータを共有することはできません。

システム・パラメータについて

各ワークブックにはシステム・パラメータが含まれており、ユーザーのシステム情報(現在の日付や時刻など)に基づくデータをワークブックに含める場合は、これらのパラメータを使用できます。

システム・パラメータはワークブックのデータセットやサブジェクト領域とは無関係であり、ほとんどの一般的なパラメータ・ユース・ケースをカバーするように設計されているため、ワークブックごとにこれらのパラメータを作成する必要はありません。システム・パラメータは削除も変更もできません。

ワークブックの「パラメータ」タブで、システム・パラメータの上にマウスを置くと、その定義が表示されます。ワークブックのシステム・パラメータは、追加、変更または削除できません。

システム・パラメータは次のとおりです:

- 現在の日付
- 現在の時刻
- 現在の日時
- 表示名
- ユーザー名

パラメータのプロパティについて

パラメータの使用法と使用場所によって、それに設定するプロパティが決定されます。たとえば、フィルタ・コントロールとして使用するパラメータと、式で使用するパラメータには、異なるプロパティを設定します。

これらは、パラメータを作成または変更するときに設定できるプロパティです:

データ型

パラメータに含まれるデータの種類の、パラメータが受け入れる値または値範囲を指定します。データ型は、パラメータに互換性があることと、パラメータを使用する場所に対して式が正しく生成されることを検証するためにも使用されます。

複数選択を許可

パラメータが単一の初期値を受け入れることができるか、または複数の初期値を受け入れることができるかを決定します。

複数値を許可したら、「初期値」フィールドを使用して、複数の初期値を指定するか、初期値を指定する SQL 式を記述します。パラメータに複数の初期値が含まれている場合、パラメータをフィルタ・コントロールとして使用すると、ユーザーは 1 つ以上の初期値を選択できます。

別名

パラメータによって渡されたデータ要素またはキー値の表示値を指定します。

多くのデータセットでは、データ要素にわかりにくい名前が使用されます。別名を使用すると、ユーザーがデータ要素の概要を理解しやすくなります。たとえば、LST_OR_DT に別名 "Last Order Date" を作成すると、データ要素名がわかりやすくなります。

別名を使用すると、ユーザーがフィルタ・コントロールから選択する名前がより馴染みのあるわかりやすい名前になります。たとえば、データ値 1 には **East Sales Region** という別名を指定し、データ値 2 には **West Sales Region** という別名を指定できます。

データ・アクションの場合、パラメータ内の別名を使用して、キー値および表示値を渡します。次に、ターゲット・ワークブックが受信パラメータ値を適用すると、各受信キー値の受信表示値も適用します。

使用可能な値

パラメータの使用可能な値は、「すべて」、「値」、「列」、「論理 SQL 問合せ」および値の範囲です。

- ユーザーがデータ型でサポートされている任意の値を入力できるようにする場合は、「**すべて**」を選択します。
- ユーザーが選択できる 1 つ以上の値を指定する場合は、「**値**」を選択します。「**複数値の許可**」が有効になっている場合、ユーザーは複数の値を選択できます。
- 値のリストをフェッチする列を選択する場合は、「**列**」を選択します。このオプションを選択すると、列の選択フィールドに、ワークブックのすべてのデータセットまたはサブジェクト領域列のツリーと、ワークブックの「マイ計算」フォルダのすべての計算が表示されます。
- 1 つ以上の使用可能な値を返す論理 SQL 式を入力する場合は、「**論理 SQL 問合せ**」を選択します。論理 SQL 式内で他のパラメータを参照できます。論理 SQL 式を入力した後に、「**検証**」アイコンをクリックすると式を検証できます。
- 開始値と終了値を指定してユーザーが選択できる値を制限する場合は、「**範囲**」を選択します。

検証の強制

パラメータの作成や編集を行った場合は、このオプションにより、パラメータの初期値が使用可能な値のリストに対してチェックされます。このオプションでは、実行時に、指定されたパラメータ値のリストが、使用可能な値のリストに含まれていることが検証されます。

初期値

初期値は、ユーザーがワークブックを開くと適用および表示されるパラメータのデフォルト値です。

- デフォルトの初期パラメータ値を適用しない場合は、「**値**」を選択し、値フィールドを空白のままにします。初期値を指定しない場合は、すべての値が使用されます。
- 「**値**」を選択し、デフォルトの初期パラメータ値として適用する値を指定します。**複数選択を許可**をクリックした場合は、複数の初期値を指定できます。
- パラメータの値リストの最初の値をデフォルトの初期値として適用および表示する場合は、「**使用可能な最初の値**」を選択します。文字を含む属性列を使用している場合、最初の値は、論理 SQL 式で返されたリストによって決定されます。返されるリストは、常にアルファベット順になります。
- 論理 SQL 式を入力してパラメータのデフォルトの初期値を指定する場合は、「**論理 SQL 問合せ**」を選択します。論理 SQL 式内で他のパラメータを参照できます。論理 SQL 式を入力した後に、「**検証**」アイコンをクリックすると式を検証できます。

パラメータの変更および削除について

パラメータを変更または削除する前に、ワークブックをチェックして、パラメータの使用場所と使用方法を把握しておく必要があります。

たとえば、変更または削除するパラメータが式で参照されているか、または論理 SQL 問合せで参照されているかを確認してください。

パラメータを変更または削除する前にそのパラメータの使用場所と使用方法を理解しておくことで、ビジュアライゼーション、問合せおよび計算の破損を未然に回避できます。

パラメータの作成

ワークブックの複数の場所で使用する現在の値を格納および管理するパラメータを作成します。

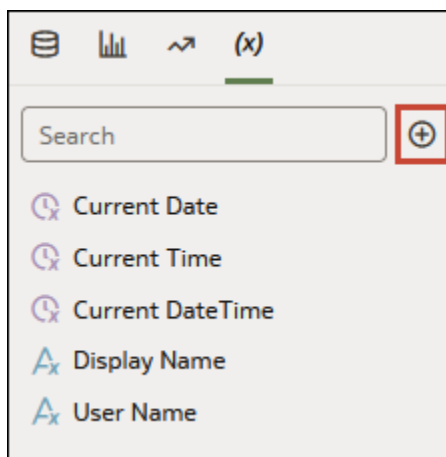
フィルタでパラメータを使用する場合は、パラメータを作成し、フィルタのプロパティからフィルタにバインドできます。[パラメータの作成およびフィルタへのバインド](#)を参照してください。

パラメータのプロパティの選択方法の詳細は、[パラメータのプロパティについて](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、パラメータを追加するワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックして、「開く」を選択します。
2. 「データ・パネル」で、「パラメータ」をクリックします。



3. 「パラメータ」ペインで、「追加」をクリックします。



4. 「名前」フィールドに、一意の名前を入力します。
5. 「データ型」をクリックし、パラメータで受け入れるデータの型を選択します。

The screenshot shows the 'Create Parameter' dialog box. The 'Name' field is filled with 'Year'. The 'Data Type' dropdown menu is open, with 'Text' selected. The 'Possible Values' field contains 'Any'. The 'Initial Value' field contains 'Value'. There are 'Cancel' and 'OK' buttons at the bottom.

6. 「使用可能な値」フィールドで、パラメータ値を指定する方法を選択します。
7. 「初期値」フィールドで、パラメータの初期値を決定する方法を選択します。初期値を使用しない場合は、「値」を選択し、値を空白のままにします。
8. 「OK」をクリックします。
9. 「保存」をクリックします。

二重列に論理 SQL 問合せを使用するパラメータの作成

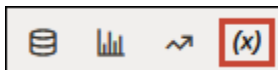
二重列で使用するパラメータを作成する際、論理 SQL を指定して、表示列および記述子 ID 列を選択できます。

二重列は、ローカル・サブジェクト領域から作成されたデータセットでのみ使用可能です。二重列では、1つの列はデータ記述子値を表し、エンド・ユーザーに表示されます。2番目の列はデータ記述子の識別子を表し、エンド・ユーザーに表示されません。

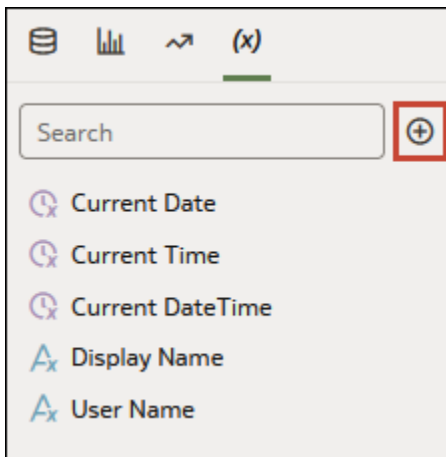
二重列タイプ・フィルタでパラメータを使用する場合は、パラメータを作成し、フィルタのプロパティからフィルタにバインドできます。[パラメータの作成と二重列タイプ・フィルタへのパラメータのバインド](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、パラメータを追加するワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックして、「開く」を選択します。

2. 「データ・パネル」で、「パラメータ」をクリックします。



3. 「パラメータ」ペインで、「追加」をクリックします。



4. 「名前」フィールドに、一意の名前を入力します。
5. 「使用可能な値」フィールドで、「論理 SQL 問合せ」を選択します。
6. テキスト・ボックスに論理 SQL を記述し、表示列と記述子 ID 列が含まれていることを確認します。たとえば、


```
SELECT "A - Sample Sales"."Double Column Products"."P10 Product (Dble Column)", DESCRIPTOR_IDOF("A - Sample Sales"."Double Column Products"."P10 Product (Dble Column)") FROM "A - Sample Sales"
```
7. 「初期値」フィールドに移動し、「値」または「使用可能な最初の値」が選択されていることを確認します。
8. 「保存」をクリックします。

SQL 式データ型を使用するパラメータの作成

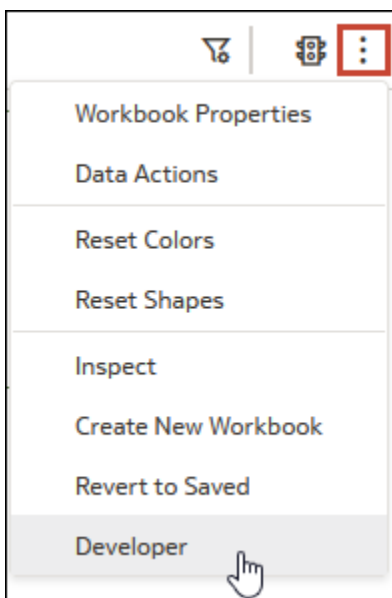
SQL 式データ型を使用するパラメータの場合、論理 SQL 式を入力するか貼り付けて、パラメータで使用する列値を指定します。

ワークブックから「開発者」オプションが表示されない場合は、プロファイル設定から開発者オプションを有効にしてください。「開発者」オプションを参照してください。

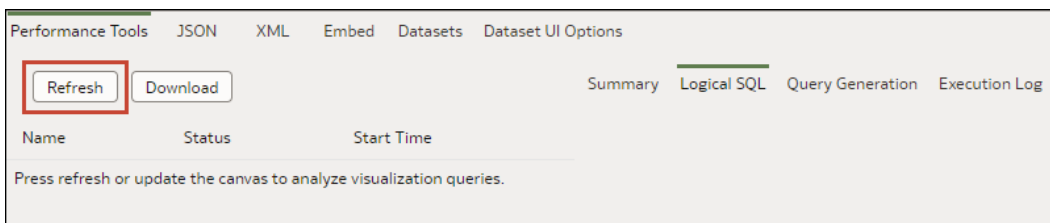
SQL 式でのパラメータの参照の詳細は、[パラメータを参照するための構文](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、パラメータを追加するワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. パラメータ値として指定する列の論理 SQL 式を見つけてコピーするには、ワークブックで列をキャンバスにドラッグ・アンド・ドロップします。

3. ワークブック・ツールバーの「メニュー」をクリックして、「開発者」を選択します。



4. 「開発者」ペインで、「パフォーマンス・ツール」、「論理 SQL」の順にクリックします。「リフレッシュ」をクリックします。



5. パラメータで値として使用する列の論理 SQL SELECT 文を探してコピーします。
6. ワークブック・エディタで、「データ・パネル」に移動し、「パラメータ」をクリックします。
7. 「パラメータ」ペインで、「追加」をクリックします。
8. 「名前」フィールドに名前を入力します。
9. 「データ型」をクリックし、「SQL 式」を選択します。
10. 「使用可能な値」フィールドで、「論理 SQL 問合せ」を選択します。

Create Parameter

Name: City

Description:

Data Type: Text

Allow Multi Select:

Alias:

Possible Values: Any

Initial Value:

Any
Value
Logical SQL Query

Cancel OK

11. テキスト・ボックスに列の論理 SQL 式を貼り付けます。たとえば、

```
SELECT
  0 s_0
  XSA('Admin'. 'sample_order_line'). "sample_order_line". "City" s_1
FROM XSA('Admin'. 'sample_order_line')
ORDER BY 2 ASC NULLS LAST
FETCH FIRST 125001 ROWS ONLY
```

12. オプション: または、デフォルト値を持つパラメータを含む式を指定します。たとえば、

```
SELECT @parameter("Current Date") (DATE'2023-05-02') FROM
XSA('Admin'. 'sample_order_line')
```

13. 「検証」をクリックして、張り付けた論理 SQL 式を検証します。
14. 「OK」をクリックします。
15. 「保存」をクリックします。

パラメータを参照するための構文

このトピックに示された構文を使用して、ビジュアライゼーションのプロパティ、SQL 式または計算からのパラメータを参照します。

パラメータを参照するには、次の構文を使用します:

```
@parameter("parameter name")('default value')
```

この表には、式構文の例が含まれています:

パラメータ式	説明
@parameter("Supplier")('Brembo')	Supplier パラメータを参照します。Supplier パラメータがデータ・アクションまたは URL パラメータを介してワークブックに渡されないかぎり、パラメータ値は'Brembo'です。
@parameter("StartDate")(DATE'2021-10-08')	デフォルトの日付が 2021 年 10 月 8 日である StartDate というパラメータを参照します。
@parameter("CurrentTime")(TIME'18:00:00')	デフォルトの時刻が 18:00:00 である CurrentTime というパラメータを参照します。
@parameter("CurrentDateTime")(TIMESTAMP'2023-02-28T18:00:00')	デフォルトの日付が 2023 年 2 月 28 日で、デフォルトの時刻が 18:00:00 である CurrentDateTime というパラメータを参照します。
@parameter("NumOccurrences")(5)	デフォルトが 5 である NumOccurrences というパラメータを参照します。
@parameter("SelectedColumn")("A - Sample Sales"."Offices"."D2 Department")	SelectedColumn というパラメータを参照します。デフォルトは"A - Sample Sales"."Offices"."D2 Department"です。
@parameter("Supplier", style="delimited", separator="/")('Brembo','Bosch')	Supplier というパラメータを参照します。使用時の値のデフォルトは"Brembo/Bosch"です。
@parameter("Supplier", style="individual")('Brembo','Bosch')	Supplier というパラメータを参照します。データ・アクションでパラメータの区切りに使用されます: &myParam=Brembo&myParam=Bosch
@parameter("Supplier", type="alias")('Brembo','Bosch')	Supplier というパラメータを参照します。構成済の別名値があれば、その値を使用します。別名が構成されていない場合、別名は値を使用します。
@parameter("Supplier", type="value")('Brembo','Bosch')	Supplier というパラメータを参照します。別名が構成されているかどうかに関係なく、構成済の値を使用します。

フィルタへのパラメータのバインド

このトピックでは、パラメータを作成してフィルタにバインドする方法、または既存のパラメータを選択してフィルタにバインドする方法について説明します。

トピック:

- [フィルタへのパラメータのバインドについて](#)

- [パラメータの作成およびフィルタへのバインド](#)
- [パラメータの作成およびリスト・ボックス・ダッシュボード・フィルタへのバインド](#)
- [パラメータの作成と二重列タイプ・フィルタへのパラメータのバインド](#)
- [フィルタへの既存パラメータのバインド](#)

フィルタへのパラメータのバインドについて

ワークブックのキャンバスから選択したフィルタ値を別のキャンバスに渡す場合や、フィルタの動作およびユーザーへの公開方法をより詳細に制御する場合は、パラメータをフィルタにバインドします。

ノート:

パラメータをリストまたは範囲フィルタにバインドできます。

フィルタへのパラメータのバインドは、1方向バインドであるため、パラメータによって、ユーザーが選択できる使用可能なフィルタ値のリストが制限されることはありません。パラメータのプロパティによって、フィルタから使用できる値が定義されます。

フィルタにバインドされたパラメータは、フィルタの選択をリスニングします。パラメータがフィルタ値を受け入れると、ワークブック内のパラメータの使用場所にその値を渡します。

フィルタへのパラメータのバインドには多くの用途があります。たとえば、デフォルトでは、ダッシュボード・フィルタ・コントロールをキャンバスに追加すると、フィルタはそのキャンバスにのみ適用されます。フィルタにバインドされたパラメータを使用して、ワークブック内の複数のキャンバスにわたってダッシュボード・フィルタを固定できます。同じフィルタが同じパラメータにバインドされたダッシュボード・コントロールが複数のキャンバスに含まれている場合、ユーザーが選択したフィルタ値は各キャンバスに適用されます。

パラメータの作成およびフィルタへのバインド

フィルタの「**パラメータの作成**」オプションをクリックしてパラメータを作成し、ワンクリックでそれをフィルタにバインドします。

ノート:

パラメータをリストおよび範囲フィルタにバインドできます。

ワークブックのフィルタでのパラメータ・バインディングの使用の詳細は、[フィルタへのパラメータのバインドについて](#)を参照してください。

フィルタからパラメータを作成すると、パラメータ定義の「**使用可能な値**」プロパティ・フィールドが「**すべて**」に設定され、パラメータにはユーザーが選択したすべてのフィルタ値が使用されます。フィルタからパラメータを作成した後で、パラメータのプロパティを変更できます。たとえば、パラメータで使用する値を追加できます。

1. ホーム・ページで、フィルタを作成して追加し、パラメータを追加およびバインドするワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックして、「開く」を選択します。
2. パラメータを作成およびバインドするフィルタを作成するか、探してクリックします。
3. (x)をクリックしてから「パラメータの作成」をクリックして、パラメータを作成し、それをフィルタにバインドします。

新しいパラメータの名前は、フィルタ処理している列名と一致します。

4. オプション: ワークブックの「データ・パネル」に移動して「パラメータ」をクリックし、フィルタから作成したパラメータを右クリックして「パラメータの編集」を選択し、パラメータのプロパティを確認および更新します。「OK」をクリックします。

パラメータの作成およびリスト・ボックス・ダッシュボード・フィルタへのバインド

リスト・ボックス・フィルタには「パラメータにバインド」オプションが含まれないため、「パラメータの作成」フィルタ・プロパティを使用して、パラメータを作成し、リスト・ボックス・ダッシュボード・フィルタにバインドします。


パラメータ・バインディングの使用の詳細は、[フィルタへのパラメータのバインドについて](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択して「アクション」をクリックし、「開く」を選択して「編集」をクリックします。
2. 「ビジュアル化」タブをクリックします。
3. 「データ・パネル」で、「ビジュアライゼーション」タブをクリックし、「ダッシュボード・フィルタ」をキャンバスにドラッグ・アンド・ドロップします。
4. 「データ・パネル」で、「データ」タブをクリックし、キャンバスのフィルタに使用する列をドラッグ・アンド・ドロップします。
5. ダッシュボード・フィルタの「プロパティ」ペインで、「プロパティ」、「フィルタ・コントロール」の順にクリックします。「フィルタ・タイプ」フィールドに移動し、「リスト・ボックス」を選択します。
6. 「プロパティ」ペインで、「パラメータ・バインディング」に移動し、「なし」をクリックします。
7. フィルタにバインドする既存のパラメータを選択するか、「パラメータの作成」をクリックし、選択したフィルタ値を使用して、パラメータを作成しリスト・ボックス・フィルタにバインドします。
8. オプション: ユーザーがフィルタ値を選択する必要があるかどうかを指定するには、「プロパティ」ペインに移動し、「選択が必要」フィールドをクリックし、「オン」を選択します。
9. 「保存」をクリックします。

パラメータの作成と二重列タイプ・フィルタへのパラメータのバインド

二重列タイプ・フィルタの「**パラメータの作成**」オプションをクリックしてパラメータを作成し、それをワンクリックでフィルタにバインドします。

このチュートリアルでは、二重列リスト・フィルタのパラメータへのバインド方法を説明するユースケースを示します:

 [チュートリアル](#)

ワークブックのフィルタでのパラメータ・バインディングの使用の詳細は、[フィルタへのパラメータのバインドについて](#)を参照してください。

二重列は、ローカル・サブジェクト領域から作成されたデータセットでのみ使用可能です。二重列では、1つの列はデータ記述子値を表し、エンド・ユーザーに表示されません。2番目の列はデータ記述子の識別子を表し、エンド・ユーザーに表示されません。

二重列のパラメータを作成する際は、パラメータのプロパティの「**別名**」フィールドが、デフォルトでオンになっています。二重列パラメータには別名が必要なため、「**別名**」フィールドをオフに切り替えることはできません。

1. ホーム・ページで、二重列タイプ・フィルタの作成と追加、パラメータへのバインドを行うワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックして、「**開く**」を選択します。
2. パラメータを作成してバインドする二重列タイプ・フィルタを作成するか、探してクリックします。フィルタには、二重列の表示値が表示され、その ID 値は表示されません。
3. (x)をクリックしてから「**パラメータの作成**」をクリックして、パラメータを作成し、それをフィルタにバインドします。

新しいパラメータの名前は、フィルタ処理している列名と一致します。

4. オプション: ワークブックの「**データ・パネル**」に移動して「**パラメータ**」をクリックし、フィルタから作成したパラメータを右クリックして「**パラメータの編集**」を選択し、パラメータのプロパティを確認および更新します。
5. 「**OK**」をクリックします。

フィルタへの既存パラメータのバインド

フィルタにバインドするシステム・パラメータまたは既存のワークブック・パラメータを選択し、選択したフィルタ値をパラメータに渡します。


ノート:

パラメータをリストおよび範囲フィルタにバインドできます。

ワークブックのフィルタでのパラメータ・バインディングの使用の詳細は、[フィルタへのパラメータのバインドについて](#)を参照してください。

ワンクリックでフィルタからパラメータを作成することもできます。[パラメータの作成およびフィルタへのバインド](#)を参照してください。

「**パラメータにバインド**」をクリックすると、Oracle Analytics によって、フィルタにバインド可能な互換性のあるワークブックのパラメータがリストされます。

パラメータの感嘆符アイコン  にカーソルを合せると、パラメータとフィルタの互換性の情報が表示されます。この情報は単なる警告であり、パラメータをフィルタにバインドすることを妨げるものではありません。

「フィルタでは複数值がサポートされますが、パラメータではサポートされません。」という警告は、フィルタで複数の値を選択できるが、パラメータ定義ではフィルタ値選択リストで指定された最初の値のみが受け入れられるという意味です。この問題を修正するには、フィルタのプロパティに移動し、**複数選択フィルタ**・コントロールが、パラメータの「**複数選択を許可**」の設定と一致するように変更します。

1. ホーム・ページで、パラメータのバインド先のフィルタを含むワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックして、「**開く**」を選択します。
2. パラメータのバインド先のフィルタを作成するか、探してクリックします。
3. (x)をクリックしてから、フィルタにバインドするパラメータをクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

パラメータの使用

このトピックでは、(たとえば、ビジュアライゼーション・ラベルや式での)パラメータの使用方法について説明します。

トピック:


- [フィルタ・バーでのパラメータの使用](#)
- [ダッシュボード・フィルタ・コントロールとしてのパラメータの使用](#)
- [ビジュアライゼーションのタイトルでのパラメータの使用](#)
- [パラメータをビジュアライゼーションの軸ラベルとして使用](#)
- [パラメータをタイル・ビジュアライゼーションのメジャー・ラベルで使用](#)
- [式フィルタでのパラメータの使用](#)
- [計算でのパラメータの使用](#)
- [分析リンク・データ・アクションを使用してパラメータ値を渡す](#)
- [URL ナビゲーション・データ・アクションを使用してパラメータ値を渡す](#)

フィルタ・バーでのパラメータの使用

キャンバスのフィルタ・バーにパラメータを追加すると、ワークブックにパラメータ値を設定できます。オプションで、「表示」モードでパラメータ・フィルタ・コントロールをユーザーに対して非表示にできます。

このチュートリアルでは、フィルタ・バーでのパラメータの使用方法を説明するユースケースを示します:

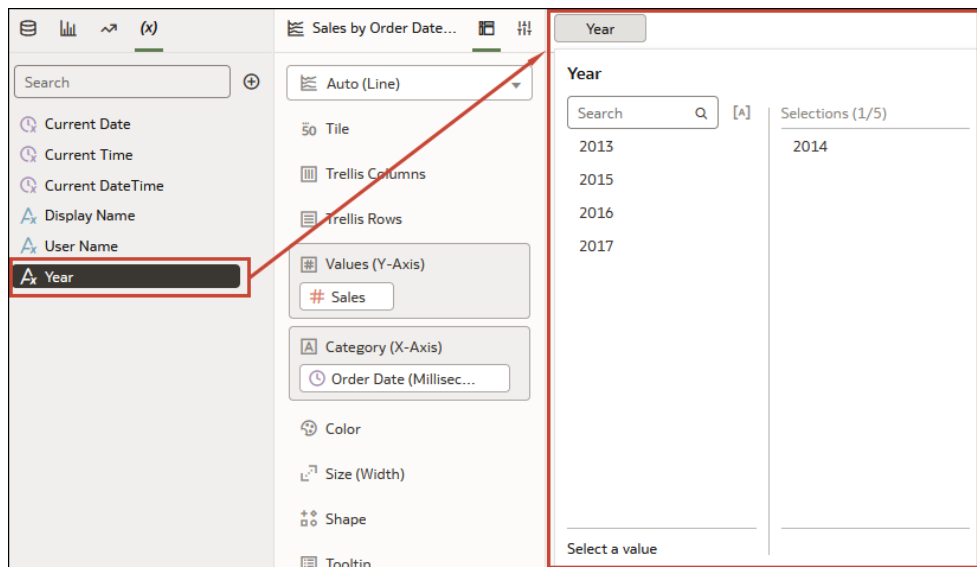
 [チュートリアル](#)

 ノート:

パラメータをフィルタ・コントロールとして追加すると、列セクタとして機能します。パラメータをフィルタ・コントロールとして追加しても、データはフィルタされません。

フィルタ・バーでパラメータを使用しても、標準フィルタと同じ機能は提供されません。たとえば、「上位下位 N 件」、「除外」、「Null」および「値の限定」の機能は提供されません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「データ・パネル」で、「パラメータ」をクリックします。
3. パラメータをキャンバスのフィルタ・バーにドラッグ・アンド・ドロップします。





4. 「保存」をクリックしてワークブックを保存します。

ダッシュボード・フィルタ・コントロールとしてのパラメータの使用

パラメータをダッシュボード・フィルタ・コントロールとして使用すると、「ビジュアル化」または「表示」モードで作業しているユーザーは、ディメンションを選択および変更し、キャンバス上のビジュアライゼーションの列値を測定できます。

このチュートリアルでは、ダッシュボード・フィルタ・コントロールでのパラメータの使用方法を説明するユースケースを示します:

 [チュートリアル](#)

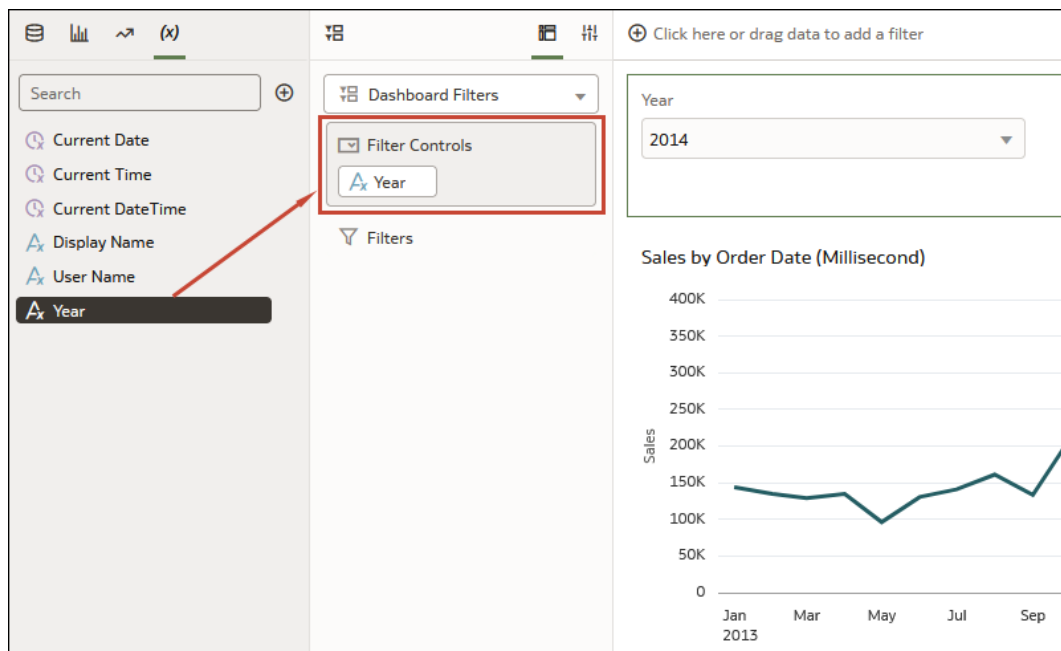
 [チュートリアル](#)

ノート:

パラメータをフィルタ・コントロールとして追加すると、列セクタとして機能します。パラメータをフィルタ・コントロールとして追加しても、データはフィルタされません。

パラメータをダッシュボード・フィルタ・コントロールとして追加しても、標準フィルタと同じ機能は提供されません。たとえば、「上位下位 N 件」、「除外」、「Null」および「値の限定」の機能は提供されません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「データ・パネル」で、「ビジュアライゼーション」をクリックします。
3. 「ダッシュボード・コントロール」セクションまでスクロールし、「ダッシュボード・フィルタ」をキャンバスにドラッグ・アンド・ドロップします。
4. 「データ・パネル」で、「パラメータ」をクリックします。
5. パラメータをダッシュボード・フィルタ・ビジュアライゼーションの「文法」パネルの「フィルタ・コントロール」にドラッグ・アンド・ドロップします。



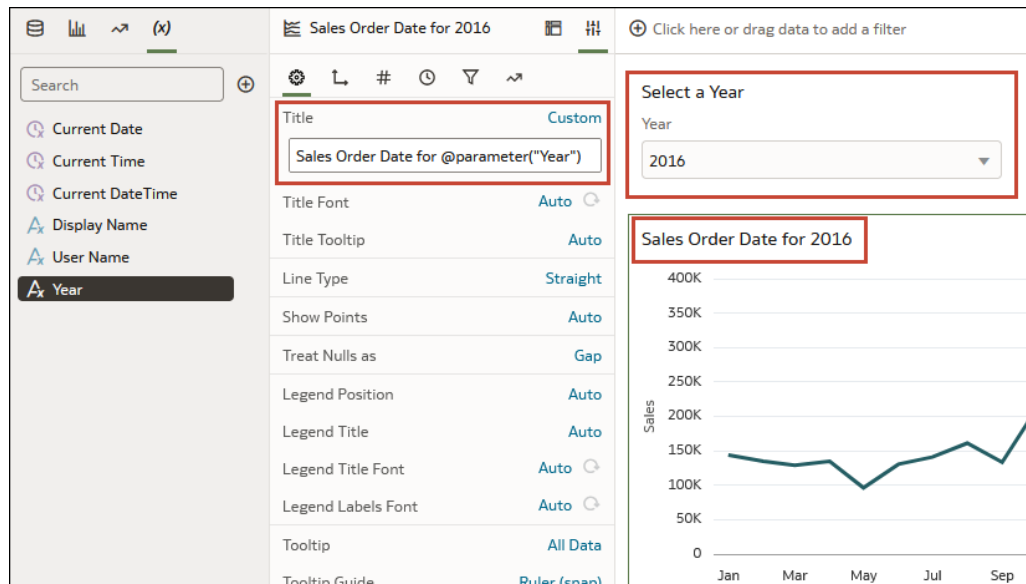
6. 「保存」をクリックしてワークブックを保存します。

ビジュアライゼーションのタイトルでのパラメータの使用

タイトルのコンテキストでパラメータの値を表示する場合は、ビジュアライゼーションのタイトルにパラメータを追加します。

たとえば、Year という名前のパラメータを作成してキャンバスのダッシュボード・フィルタに追加できます。これにより、ビジュアライゼーションのタイトルにそのパラメータが表示

され、ユーザーが年の値を選択すると、選択した年が含まれるようにタイトルが更新されます。



1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. ビジュアライゼーションをクリックして選択し、「プロパティ」をクリックすると、「プロパティ」パネルが表示されます。「一般」をクリックすると、一般プロパティが表示されます。
3. 「タイトル」フィールドを見つけて、「自動」をクリックします。「カスタム」を選択します。
4. デフォルトのタイトルをクリアまたは変更し、次の構文を使用してパラメータをタイトルに追加します:

```
@parameter("parameter name")
```

例:

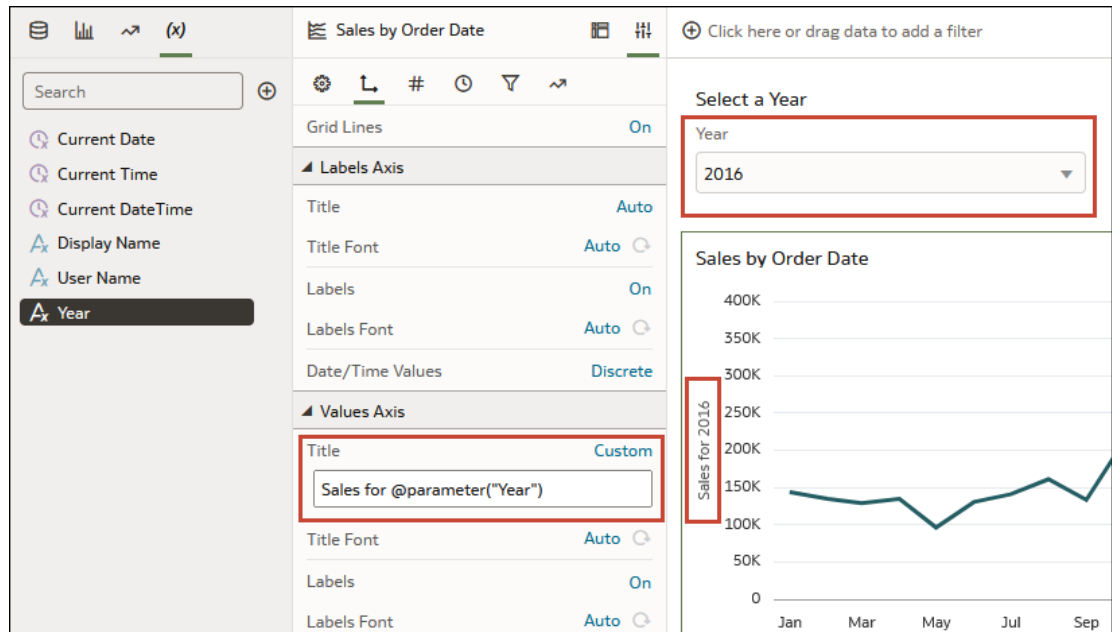
```
Sales by Order Date for @parameter("Year")
```

5. 「保存」をクリックしてワークブックを保存します。

パラメータをビジュアライゼーションの軸ラベルとして使用

パラメータ値をビジュアライゼーションの軸ラベルに動的に渡すことができます。パラメータの現在の値が、軸ラベルの名前として使用されます。

たとえば、Year という名前のパラメータを作成してキャンバスのダッシュボード・フィルタに追加できます。これにより、ビジュアライゼーションの値軸にそのパラメータが表示され、ユーザーが年の値を選択すると、選択した年が含まれるように値軸のタイトルが更新されます。



1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. キャンバスでビジュアライゼーションを選択して「プロパティ」をクリックすると、「プロパティ」パネルが表示されます。「軸」をクリックすると、軸のプロパティが表示されます。
3. パラメータを使用する軸ラベルを見つけます。「タイトル」プロパティに移動し、「自動」、「カスタム」の順にクリックします。
4. デフォルトのタイトルをクリアまたは変更し、次の構文を使用してパラメータをタイトルに追加します:

```
@parameter("<parameter name>")
```

例:

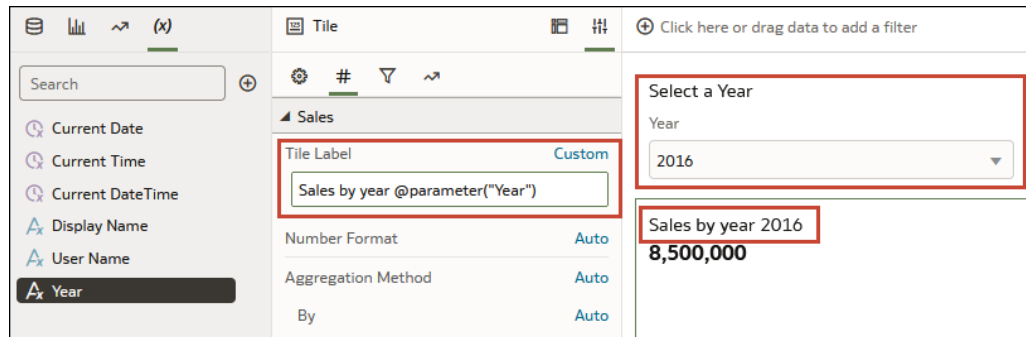
```
@parameter("Year")
```

5. 「保存」をクリックしてワークブックを保存します。

パラメータをタイトル・ビジュアライゼーションのメジャー・ラベルで使用

パラメータ値は、タイトル・ビジュアライゼーションのプライマリおよびセカンダリ・メジャー・ラベルに動的に渡すことができます。

たとえば、ワークブックにダッシュボード・フィルタのメジャー・セレクトタを含め、ユーザーがメジャー値を選択したときに、選択した値がメジャーのラベルに渡されてタイトル・ビジュアライゼーションにさらにコンテキストが与えられるようにするとします。



1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. タイル・ビジュアライゼーションをクリックして選択し、「プロパティ」をクリックしてから「値」をクリックして「値」パネルを表示します。
3. メジャーの「タイトル・ラベル」フィールドを見つけて、「自動」をクリックします。「カスタム」を選択します。
4. デフォルトのタイトルをクリアまたは変更し、次の構文を使用してパラメータをタイトルに追加します:

```
@parameter("parameter name")
```

例:

```
@parameter("Measure")
```

5. 「保存」をクリックしてワークブックを保存します。

式フィルタでのパラメータの使用

式フィルタの SQL 式にパラメータを組み込んで、複合ビジュアライゼーション・フィルタを作成できます。

このチュートリアルでは、式フィルタでのパラメータの使用方法を説明するユースケースを示します:

 [チュートリアル](#)

[パラメータを参照するための構文](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 式フィルタを追加するビジュアライゼーションをクリックし、そのビジュアライゼーションの「文法」パネルが表示されていることを確認します。
3. 「文法」パネルで、「フィルタ」領域までスクロールし、「ドロップ・ターゲット・オプション」をクリックして「式フィルタの追加」を選択します。
4. 「ラベル」に、式フィルタの名前を入力します。

5. 「式」フィールドで、次の構文を使用して式を作成します:

```
@parameter("parameter name")('default value')
```

例:


```
rank(Sales)<=@parameter("Top N")(10)
```

6. 「検証」、「適用」の順にクリックして、式フィルタを保存します。

計算でのパラメータの使用

パラメータを使用して、計算の定数を置換します。

このチュートリアルでは、計算でのパラメータの使用方法を説明するユースケースを示します:

 [チュートリアル](#)

[パラメータを参照するための構文](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「データ・パネル」で、「データ」をクリックします。
3. 「マイ計算」フォルダを見つけて右クリックし、「計算の追加」を選択します。
4. 「新規計算」に、計算の名前を入力します。
5. 「計算」フィールドで、次の構文を使用して計算を作成します:

```
@parameter("parameter name")('default value')
```

例:


```
@parameter("Dimensions")('Order Priority')
```

6. 「検証」をクリックして計算を検証してから、「保存」をクリックして計算を保存します。
7. 「保存」をクリックしてワークブックを保存します。

分析リンク・データ・アクションを使用してパラメータ値を渡す

選択したパラメータ値を別のワークブックのキャンバスに渡すデータ・アクションを作成できます。

このチュートリアルでは、分析リンクでのパラメータの使用方法を説明するユースケースを示します:

 [チュートリアル](#)

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。

2. ワークブック・ツールバーの「**メニュー**」をクリックして、「**データ・アクション**」をクリックします。
3. 「**アクションの追加**」をクリックして新しいナビゲーション・リンクの名前を入力します。
4. 「**タイプ**」フィールドをクリックし、「**分析リンク**」を選択します。
5. 「**アンカー先**」フィールドをクリックし、現在のビジュアライゼーションからこのデータ・アクションに関連付ける列を選択します。メジャー列または非表示の列は選択しないでください。「**アンカー先**」フィールドに値を指定しなかった場合、データ・アクションはビジュアライゼーションのすべてのデータ 要素に適用されます。
6. 「**ターゲット**」フィールドで、「**このワークブック**」フィールドをクリックし、「**カタログから選択**」を選択して、アンカーに使用するワークブックを参照して選択します。
7. 「**キャンバス・リンク**」フィールドをクリックし、使用するキャンバスを選択します。
8. フィルタ値を渡す場合は、「**値を渡す**」フィールドをクリックして、データ・アクションで渡す値を選択します。
 - **すべて** - クリックしたセルの共通部分が動的に決定され、選択されているデータのすべてのフィルタ値が渡されます。
 - **アンカー・データ** - 「**アンカー先**」フィールドに指定された必須列がビュー・コンテキストで使用可能な場合にのみ、実行時にデータ・アクションが表示されるようにします。
 - **なし** - ページ(URL またはキャンバス)が開きますが、選択されているデータのフィルタ値は渡されません。
 - **カスタム** - 選択されているデータに対してユーザーが選択したカスタム・フィルタ値のみが渡されます。
9. **パラメータ値を渡す**フィールドをクリックし、データ・アクションで渡すパラメータ値を選択します。
 - **すべて** - クリックしたセルの共通部分が動的に決定され、選択されているデータのすべてのパラメータ値が渡されます。
 - **なし** - ページ(URL またはキャンバス)が開きますが、選択されているデータのパラメータ値は渡されません。
 - **カスタム** - 選択されているデータに対してユーザーが選択したカスタム・パラメータ値のみが渡されます。
10. 「**複数の選択をサポート**」をクリックして値を設定します。
 - **オン** - データ・アクションは、1 つまたは複数のデータ・ポイントが選択されている場合に呼び出すことができます。
 - **オフ** - データ・アクションは、単一のデータ・ポイントが選択されている場合にのみ呼び出すことができます。
この設定は、複数のデータ・ポイントを選択するとエラーになる可能性がある場合に特に有用です。
11. 「**OK**」をクリックして保存します。

URL ナビゲーション・データ・アクションを使用してパラメータ値を渡す

選択したパラメータ値をワークブックから別のアプリケーションに渡すために URL を使用するデータ・アクションを作成できます。

たとえば、ユーザーが従業員 ID 値を選択できるようにするパラメータがワークブックに含まれているとします。従業員 ID 値を HCM アプリケーションに渡す URL ナビゲーション・データ・アクションを作成できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「**メニュー**」をクリックして、「**データ・アクション**」を選択します。
3. 「**アクションの追加**」をクリックして新しいナビゲーション・リンクの名前を入力します。
4. 「**タイプ**」フィールドをクリックし、「**URL のナビゲーション**」を選択します。
5. 「**アンカー先**」フィールドをクリックし、URL を適用する列を選択します。「**アンカー先**」フィールドに値を指定しなかった場合、データ・アクションはビジュアライゼーションのすべてのデータ要素に適用されます。
6. URL を入力し、オプションでセパレータ、スタイル、タイプなどの URL オプションを含めます。

例: `http://www.example.com/search?q=@parameter("City",separator=",",type="value") ('')`

7. 「**複数の選択をサポート**」をクリックして値を設定します。
 - **オン** - データ・アクションは、1 つまたは複数のデータ・ポイントが選択されている場合に呼び出すことができます。
 - **オフ** - データ・アクションは、単一のデータ・ポイントが選択されている場合にのみ呼び出すことができます。
この設定は、複数のデータ・ポイントを選択するとエラーになる可能性がある場合に特に有用です(たとえば、一部のサードパーティの REST API の場合)。
8. 「**OK**」をクリックして保存します。

9

ビジュアライゼーションを強化するためのマップ背景およびマップ・レイヤーの適用

地理情報を使用してデータの分析を強化できます。

トピック:

- [マップ背景について](#)
- [マップ背景によるビジュアライゼーションの強化](#)
- [ワークブックでの異なるマップ背景の使用](#)
- [マップ・ビジュアライゼーションで色とサイズを使用したデータ値の解釈](#)
- [カスタム・マップ・レイヤーの追加](#)
- [カスタム・マップ・レイヤーの更新](#)
- [単一のマップ・ビジュアライゼーションへの複数のデータ・レイヤーの適用](#)
- [マップ背景としてのイメージの使用およびイメージ上でのマップ・レイヤー形状の描画](#)
- [データ列へのマップ・レイヤーの割当て](#)
- [マップ・ビジュアライゼーションのデータへの自動フォーカス](#)
- [マップ・ビジュアライゼーションでのズームの構成](#)
- [マップ・ビジュアライゼーションの場所の一致の確認](#)
- [マップ・ビジュアライゼーションでのヒートマップ・レイヤーの作成](#)
- [マップ・ビジュアライゼーションでのクラスタ・レイヤーの作成](#)
- [マップ上のカスタム・アイコンでのポイント・データの表現](#)
- [マップ上でのポイントまたは領域の選択](#)
- [マップ上のサイズおよび色を使用した線データの表現](#)
- [マップ・レイヤーおよびマップ背景をユーザーに対して使用可能にする方法](#)
- [マップ背景のデフォルトとしての使用](#)
- [マップ背景の追加](#)
- [マップへのデータ・ラベルの追加](#)

マップ背景について

マップ背景を追加して保守することで、ワークブックのマップ・ビジュアライゼーションを強化できます。

すぐに使用できるマップの背景をワークブックに適用できます。また、Google マップや Baidu マップなど、利用可能な Web マップ・サービス(WMS)プロバイダのリストから背景を

追加したり、適切な Web マップ・サービスまたはタイル Web マップの詳細を指定してマップの背景を追加できます。これらのプロバイダの背景マップは、特定の地域(アジア諸国など)に必要な詳細および言語サポート(市区町村または地域名など)を提供します。

次の方法で背景を変更できます:

- マップ・タイプ、フォーマット、API キーなど、背景パラメータを変更します。パラメータは、各 WMS プロバイダで異なります。
- ワークブックのデフォルトの背景を割当てまたは変更します。
- ワークブックに継承されたデフォルトの背景設定を逆にします。


WMS プロバイダを追加して、次のタイプの機能を実行できます。

- WMS マップ・サーバーを追加し、追加のマップ背景オプションとして使用できるようにします。
- WMS プロバイダから入手可能なマップ背景を 1 つ以上選択します。
- 追加された WMS プロバイダのマップをデフォルトのマップ背景として割り当てます。

マップ背景によるビジュアライゼーションの強化

マップ背景を使用して、ワークブックのビジュアライゼーションを強化できます。

 LiveLabs スプリント

 チュートリアル

列値に基づいて、ディメンションおよびメトリックの特定のセットがマップ・ビジュアライゼーションに表示されます。デフォルトのマップ背景または既存の Oracle マップ背景(デフォルトが設定されていない場合)のいずれかが表示されます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「ビジュアル化」をクリックします。
3. 列を選択してマップ・ビューでレンダリングするには、次のいずれかを実行します。
 - 「データ要素」ペインでマップ関連の列を右クリックし、「ビジュアライゼーションの選択」をクリックして「マップ」を選択します。
 - 「データ要素」ペインから列を空白のキャンバスに、あるいはキャンバスのビジュアライゼーション間で、マップ関連の列をドラッグ・アンド・ドロップします。ビジュアライゼーション・ツールバーで、「ビジュアライゼーション・タイプの変更」をクリックして「マップ」を選択します。
4. 「プロパティ」ペインで、「マップ」をクリックし、ビジュアライゼーション・プロパティを指定します。
5. 別のマップ背景を使用する場合は、「プロパティ」ペインで「背景マップ」の値をクリックし、背景を選択します。たとえば、「Google マップ」を選択すると、ビジュアライゼーションでは Google マップがマップ背景として表示されます。
 - 使用可能なマップ背景のリストを表示する場合または使用できる背景を変更する場合は、次のいずれかを実行します。

- 「背景マップ」値をクリックして「マップ背景の管理」を選択し、「マップ背景」タブを表示します。
 - 「コンソール」ページを開き、「マップ」をクリックし、「背景」タブを選択します。
 - 「衛星」、「道路」、「混合」、「地形」など、別のマップ背景を選択します。
6. 「保存」をクリックします。

ワークブックでの異なるマップ背景の使用

作成者は、マップ・ビジュアライゼーションで異なるマップ背景を使用できます。

次に、ワークブックでマップ背景を使用する方法の例を示します。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「ワークブック」をクリックします。
2. 「データセットの追加」ダイアログでデータセットを選択します。
3. 「ワークブックに追加」をクリックします。
「ワークブック」ペインおよびデータ要素のリストが表示されます。
4. マップ関連のデータ要素を選択(たとえば、「市区町村」をクリック)し、「ビジュアライゼーションの選択」をクリックします。
5. 使用可能なビジュアライゼーションのリストから「マップ」を選択します。
デフォルトのマップ背景または既存の Oracle マップ背景(デフォルトが設定されていない場合)のいずれかが表示されます。
6. ビジュアライゼーションのプロパティ・ペインで、「マップ」タブを選択します。
7. 「背景マップ」値をクリックし、ドロップダウン・リストからマップを選択します。
たとえば、「Google マップ」を選択すると、Google マップがマップ背景として表示されます。
8. オプション: 別の値をクリックして、マップのタイプを変更します(「衛星」、「道路」、「混合」、「地形」など)。
9. オプション: 「背景マップ」オプションから「マップ背景の管理」をクリックして、「マップ背景」ペインを表示します。
このオプションを使用して、使用するマップの背景を保守します。

マップ・ビジュアライゼーションで色とサイズを使用したデータ値の解釈

多角形やバブルなどの図形の色とサイズを使用して、マップ・ビジュアライゼーションの値を解釈できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 次のいずれかを実行し、列を選択してマップ・ビューでレンダリングします。
 - 「データ要素」ペインでマップ関連の列を右クリックし、「ビジュアライゼーションの選択」をクリックして「マップ」を選択します。

- 「データ要素」ペインから列を空白のキャンバスに、あるいはキャンバスのビジュアライゼーション間で、マップ関連の列をドラッグ・アンド・ドロップします。ビジュアライゼーション・ツールバーで、「**ビジュアライゼーション・タイプの変更**」をクリックして「**マップ**」を選択します。
3. 「ビジュアライゼーション文法ペイン」にある次のセクションに、列をドラッグ・アンド・ドロップします。
- 「**色**」を使用して、値に基づいて、対応するマップ・レイヤーに表示されるジオメトリの色(多角形塗りつぶし色、バブルの色など)を変更します。
 - **サイズ(バブル)**を使用して、メジャー列の値に基づいて色のバブル・サイズを変更します。色のバブル・サイズを変更するには、メジャー列のみをドラッグ・アンド・ドロップする必要があります。サイズは、マップ・ビジュアライゼーションでの地理的な特定の位置について集計されたメジャーを示します。
 - 「**トレリス列**」/「**行**」を使用して、フィルタで列の値に基づいて複数のマップ・ビジュアライゼーションを比較します。

マップ・ビジュアライゼーションでは、次を使用してメジャー列および属性値を解釈することもできます。

- **凡例** - メジャー列または属性に複数の値がある場合は、サイズまたは色で値を示す凡例が表示されます。
- **ツールチップ** - 色のバブルまたはデータ・ポイントにマウス・ポインタを合わせると、値がツールチップに表示されます。

カスタム・マップ・レイヤーの追加

マップ・ビジュアライゼーションで使用するカスタム・マップ・レイヤーを追加できます。

📺 ビデオ

GeoJSON スキーマ(<https://en.wikipedia.org/wiki/GeoJSON>)に準拠する.json 拡張子のジオメトリック・データ・ファイルを使用して、カスタム・マップ・レイヤーを追加します(許可されている最大ファイル・サイズは 20MB です)。次に、カスタム・マップ・レイヤーを使用して、ワークブックでジオメトリック・マップ・データを表示します。たとえば、`Mexico_States.json` ファイルを追加して、メキシコの州のマップ内のジオメトリック・データをビジュアル化できます。

カスタム・マップ・レイヤーを作成する場合、マップ・ビジュアライゼーションで分析するデータ列に対応するレイヤー・キーを選択する必要があります。たとえば、マップ・ビジュアライゼーションでメキシコの州データを分析する場合、メキシコの州のカスタム・マップ・レイヤーを追加することから開始して、`Mexican_States.json` ファイルから `HASC` コード・レイヤー・キーを選択できます。次に、`Mexican_States.json` ファイルの抜粋を示します。ここでは、`Baja California` 州のジオメトリック・データの一部を表しています。

```

},
{
  "type": "Feature",
  "properties": {
    "adml_code": "MEX-2706",
    "OBJECTID_1": 745,
    "diss_me": 2706,
    "adml_cod_1": "MEX-2706",
    "iso_3166_2": "MX-",
    "wikipedia": "",
    "iso_a2": "MX",
    "adm0_sr": 6,
    "name": "Baja California",
    "name_alt": "",
    "name_local": "",
    "type": "Estado",
    "type_en": "State",
    "code_local": "",
    "code_hasc": "MX.BN",
    "note": ""
  }
}

```

Mexican_States.json ファイルを使用する場合、選択するレイヤー・キーはメキシコの州データの表の、分析対象の列と一致する必要があります。たとえば、メキシコの州の **Baja California** のデータ・セルが存在する場合、対応する名前フィールドを JSON ファイルで選択してマップ・ビジュアライゼーションに州名を表示します。ワークブックを作成して列(州や HASC など)を選択すると、メキシコの州が地図に表示されます。州にマウス・ポインタをあわせると、各州の HASC コード(MX BN など)が地図上に表示されます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」を選択して「コンソール」ページを表示します。
2. 「マップ」をクリックして、「マップ・レイヤー」ページを表示します。
「システム・マップ・レイヤー」を有効および無効にすることはできますが、作成または削除することはできません。
3. カスタム・マップ・レイヤーを追加するには、**カスタム・レイヤーの追加**をクリックするか、ファイル・エクスプローラから JSON ファイルをカスタム・マップ領域にドラッグ・アンド・ドロップします。
4. 「開く」ダイアログを参照して、JSON ファイル(Mexico_States.json など)を選択します。

JSON ファイルは、<https://en.wikipedia.org/wiki/GeoJSON> で指定される標準に準拠している GeoJSON ファイルである必要があります(許可されている最大ファイル・サイズは 20MB です)。

線文字列ジオメトリ・タイプを使用するカスタム・レイヤーは完全にはサポートされていません。「ビジュアライゼーション文法ペイン」の「色」および「サイズ」セクションは、線ジオメトリには適用されません。


5. 「開く」をクリックして、「マップ・レイヤー」ダイアログを表示します。
6. 「名前」とオプションの「説明」を入力します。
7. 使用するレイヤー・キーを「レイヤー・キー」リストから選択します。

レイヤー・キーは、メキシコの州ごとの各種コードなど、マップ機能ごとのプロパティ属性セットです。レイヤー・キーは、元々 JSON ファイルにあります。可能であれば、データに対応するレイヤー・キーのみを選択します。

8. 「追加」をクリックします。プロセスが完了してレイヤーが追加されると、成功メッセージが表示されます。

カスタム・マップ・レイヤーの更新

カスタム・マップ・レイヤーを管理できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「コンソール」をクリックします。
2. 「マップ」、「マップ・レイヤー」、「カスタム・マップ・レイヤー」の順にクリックします。
3. カスタム・マップ・レイヤーを含める、または使用可能なものから除外するには、レイヤーのチェック記号  をクリックします。たとえば、マップから `us_states_hexagon_geo` を除外する場合は、そのチェックをクリックしてこれを無効にし、検索から除去します。
4. 「オプション」をクリックして、次のいずれかのオプションを選択します:
 - a. オプション: カスタム・マップ・レイヤーの設定を変更するには、「検査」を選択します。
「名前」、「説明」、「レイヤー・キー」を指定し、このレイヤーのデフォルトの背景として使用するイメージまたはマップを選択できます。
 - b. オプション: JSON ファイルを再度アップロードするには、「リロード」を選択します。
 - c. オプション: JSON ファイルをローカルに保存するには、「ダウンロード」を選択します。
 - d. オプション: カスタム・マップ・レイヤーを削除するには、「削除」を選択します。

別のマップ・レイヤーを使用するように切替え

マップ・ビジュアライゼーションで使用するマップ・レイヤーを変更できます。

1. ホーム・ページで、マップ・ビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックして、「開く」を選択します。
2. 「プロパティ」ペインの「データ・レイヤー」をクリックします。
3. 現在の「マップ・レイヤー」をクリックします(メキシコの州など)。これには、そこから選択できる使用可能なマップ・レイヤーのリストが表示されます。
4. データ・ポイントとの照合に使用するマップ・レイヤーをクリックします。

単一のマップ・ビジュアライゼーションへの複数のデータ・レイヤーの適用

データ・レイヤー機能を使用して、単一のマップ・ビジュアライゼーションに、複数のデータ系列(ディメンションおよびメトリックの異なるセット)を表示できます。データ・レイヤーは、単一のマップ・ビジュアライゼーションで相互にオーバーレイされます。

1. ホーム・ページで、マップ・ビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「データ・パネル」からマップ関連データが含まれているメジャーまたは属性列を文法パネルの「カテゴリ」(場所)セクションにドラッグ・アンド・ドロップします。
3. 「グラマー」ペインの「カテゴリ」(場所)セクションで「レイヤー・オプション」をクリックし、「レイヤーの追加」をクリックして新規データ・レイヤー(レイヤー 2 など)を追加します。
レイヤーの順序の設定、レイヤーの非表示およびレイヤーの削除を行うこともできます。
4. 「カテゴリ」(場所)セクションに列をドラッグ・アンド・ドロップします。列値に基づいて、マップ・ビジュアライゼーションは異なるディメンション・セットで自動的に更新され、前のレイヤーにオーバーレイされます。
5. オプション: 「名前」、「マップ・レイヤー」、「レイヤー・タイプ」、「サイズ」(ポイント・レイヤーの場合、バブル・サイズをピクセル単位で設定できます)、「透明度」、「ツールチップ」、「レイヤーの表示」または「凡例タイトルの表示」を指定する場合は、「プロパティ」ペインで「データ・レイヤー」をクリックします。

マップ背景としてのイメージの使用およびイメージ上でのマップ・レイヤー形状の描画

イメージをアップロードし、イメージをマップ背景として準備し、マップ・レイヤー形状をイメージに描画し、データをマップ背景レイヤーに関連付けることができます。

 [LiveLabs スプリント](#)

 [ビデオ](#)

トピック:

- [マップ背景としてのイメージのアップロード](#)
- [アップロードしたイメージへのカスタム・マップ・レイヤー・スナップの描画](#)
- [アップロードされたイメージに描画されたマップ・レイヤー形状とのデータセットの関連付け](#)

マップ背景としてのイメージのアップロード

イメージをマップ背景としてアップロードし、アップロードしたイメージの一番上にレイヤーを描画できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「コンソール」をクリックします。
2. ホーム・ページで、「マップ」をクリックします。
3. 「マップ」で、「背景」タブをクリックし、「イメージ背景」を展開します。
4. 「イメージの追加」をクリックし、イメージを選択して「開く」をクリックします。
5. アップロードしたイメージの名前と説明を入力し、「保存」をクリックします。

アップロードしたイメージへのカスタム・マップ・レイヤー・スナップの描画

アップロードしたイメージにカスタム・マップ・レイヤー形状を描画して編集し、形状をマップ・ビジュアライゼーションと関連付けることができます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「コンソール」をクリックします。
2. ホーム・ページで、「マップ」をクリックします。
3. 「マップ」で、「背景」タブをクリックし、「イメージ背景」を展開します。
4. 「イメージ背景」でイメージを選択し、「オプション」、「マップ・レイヤーの作成」の順に選択します。
5. 「多角形」、「線」または「点」を選択し、形状をイメージに描画します。

形状	アクション
多角形	イメージをクリックし、ドラッグおよびクリックして形状が完成するまで多角形の各辺を描画してから、「終了」をクリックします。
円	イメージをクリックし、円が必要なサイズになるまで円のサイズを大きくし、その後クリックして終了します。
線	イメージをクリックし、ドラッグおよびクリックして線が完成するまで各直線エッジを描画します。
点	データ・ポイントを描画する位置にあるイメージをクリックします。

オートバイのイメージをアップロードした場合は、目に見える各 부품の形状の輪郭を描画できます。たとえば、多角形を描画して、燃料タンクなどの不規則形状を表す多角形、フォークを表す線、タイヤを表す円などを描画できます。

作成する新しい各形状は、「地物」の下にリストされます。

6. データセット内のキー列値に対応する各形状の名前を入力します。
たとえば、ガソリン・タンクの多角形の形状を描画し、データセット内のキー列 PartID にガソリン・タンクの値 PT がある場合は、形状名として PT を入力する必要があります。
- 「地物」リストで対応するオブジェクトをクリックして形状名を編集することもできます。
7. オプション: 形状を再配置する場合は、形状をクリックし、ドラッグして新しい位置に移動します。
 8. オプション: 形状をサイズ変更する場合は、形状または辺をクリックしたまま必要なサイズになるまでドラッグしてから、もう一度クリックして終了します。
 9. 「保存」をクリックします。

アップロードされたイメージに描画されたマップ・レイヤー形状とのデータセットの関連付け

データセットを、アップロードされたイメージで描画したマップ背景レイヤー形状と関連付け、それをワークブックで使用できます。

LiveLabs スプリント

1. 「ホーム」ページで、「**作成**」をクリックして、マップ背景に関連付けるデータセット・ファイルに取り込みます。
たとえば、motorbike.xls を選択して、描画した形状の部品名と一致する値を含む PartID キー列を使用してオートバイのデータセットを作成できます。
2. データセットのキー列で、「**オプション**」をクリックし、「**場所詳細**」、カスタム・マップ・レイヤーの順に選択し、「**OK**」をクリックして、選択したマップ・レイヤーにキー列を割り当てます。
3. ワークブックを作成します。
4. キー列をビジュアライゼーションにドラッグ・アンド・ドロップします。これにより、列がカテゴリ(場所)に自動的に配置されます。
マップ・ビジュアライゼーションがキー列に基づいて提示され、関連付けられたマップ背景が表示されます。
5. 列の追加を継続し、必要に応じてビジュアライゼーションを作成します。
6. 「**保存**」をクリックします。

データ列へのマップ・レイヤーの割当て

マップ・レイヤーをデータ列に割り当て、任意のワークブックで一貫して使用できるようにします。

マップ・レイヤーを、テキストまたは数値属性を含む列(空港名、緯度、経度など)に割当てできます。ビジュアライゼーションのためのマップ・レイヤーが割り当てられたデータ列を選択すると、Oracle Analytics によりマップ・ビジュアライゼーションが自動的に作成されます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「**データ**」をクリックして、「データ」ページに移動します。
3. **データ・ダイアグラム**で準備する列を含むデータセットを選択して、データセットの「**編集**」アイコンをクリックします。
データセットに複数の表が含まれている場合、データセット・エディタが表示され、各表のタブを含む結合ダイアグラムが表示されます。準備する列を含む表を選択して、これを変換エディタで開きます。
4. 変換エディタで、数値またはテキスト属性列の「**オプション**」をクリックし、「**場所詳細**」をクリックします。
5. 「場所詳細」で、関連付けられたマップ・レイヤーを確認し、必要に応じてマップ・レイヤーを変更して、「**OK**」をクリックします。

プロパティの変更は、「準備スクリプト」ペインに「プロパティの変更」ステップとしてリストされます。

6. データセットに応じて、「準備スクリプト」ペインで「適用スクリプト」をクリックするか、ツールバーで「データセットの保存」をクリックします。

更新された列には、場所のプリファレンスが設定されていることを示す場所アイコンが表示されます。

7. 更新された列のプロパティ・パネルで、「場所」アイコンをクリックして、列に関連付けられているマップ・レイヤーを確認します。
8. 場所詳細を設定したデータ列を使用してビジュアライゼーションを作成します。

ビジュアライゼーション・タイプはマップとして自動的に設定され、マップ・レイヤーが特定の列で使用可能となります。各ビジュアライゼーションに対して場所詳細を設定する必要はありません。

マップ・ビジュアライゼーションのデータへの自動フォーカス

マップ・ビジュアライゼーションの新規データにフォーカスする際、現在の表示領域をオーバーライドできます。

データへの自動フォーカス機能により、マップで表示していた特定のデータのビジュアライゼーションを表示できます。たとえば、マップ・ビジュアライゼーションに国別の売上げが表示されていて、オーストラリアの売上げを最初に表示した場合、マップではオーストラリアがズームされます。ただし、イタリアの売上げにフォーカスした場合、マップではイタリアがズームされます。

1. ホーム・ページで、マップ・ビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「ビジュアライゼーションのプロパティ」で、「マップ」をクリックし、次にデータに自動フォーカスを「オン」に設定します。

このプロパティのデフォルト値は「オフ」です。

マップ・ビジュアライゼーションのズームの構成

ズームを構成すると、ユーザーがマップ・ビジュアライゼーションのズーム・インやズーム・アウトを実行できるようになります。

ズーム制御がオンになっていると、倍率制御が表示され、マップのズーム・インとズーム・アウトが可能です。ズーム相互作用がオンになっていると、マウス・ホイールやタッチ・スクリーンで、選択したマップ領域をズーム・インしたりズーム・アウトしたりできます。ズーム制御とズーム相互作用がオンの場合は、倍率制御、マウス・ホイールまたはタッチ・スクリーンで、マップのズーム・インとズーム・アウトを行います。

1. ホーム・ページで、マップ・ビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. ビジュアライゼーション・プロパティで、「マップ」をクリックします。
3. 「ズーム制御と「ズーム相互作用」を「オン」にします。

マップ・ビジュアライゼーションの場所の一致の確認

用語間にあいまい一致や部分一致が存在する場合など、マップ・レイヤーのデータと一致結果の間にある不一致の問題を確認できます。

あいまいな結果が存在する場合、正確な一致を得るためにマップ・ビジュアライゼーションに別の列を追加することを検討してください。たとえば、マップに市区町村、国および大陸のレイヤーを割り当てることができます。また、データの行を除外することもできます。

1. ホーム・ページで、マップ・ビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「**ビジュアライゼーション**」タブをクリックします。
3. マップ・ビジュアライゼーションを右クリックし、メニューから「**場所の一致**」を選択して「場所の一致」ダイアログを表示します。
4. 現在のビジュアライゼーションのマップ・レイヤーを表しているタブを選択し、データがマップ・レイヤーとどれほど正確に一致しているかを検査します。

たとえば、「**国**」タブを選択すると、データが国のマップ・レイヤーとどれほど正確に一致しているかを参照できます。

5. オプション: 「**マップ・レイヤー**」をクリックして別のレイヤーを選択するか、「**マップ・レイヤーの管理**」をクリックして「コンソール」ページを表示します。
6. データの不一致の確認および解決に列を使用します。

「**一致**」を使用して、マップ・レイヤー情報と一致しているデータ・アイテムを表示します。一致は、一致なしや部分一致から **100%**一致まで様々です。一致は、当初、最も不正確な一致から最も正確な一致まで上から下にソートして表示されます。

- 一致なし - 赤い警告の三角インジケータが表示されます。
- 問題のある一致 - 黄色い警告の三角インジケータが表示されます。警告は、不適切な一致ではなく、ユースケースを確認できる不完全な一致を示しています。
- 完全一致 - 警告の三角インジケータは表示されません。
- 緯度と経度を一致させる場合、一致の値は「有効」または「無効」です。

表の上のサマリー・セクションには、場所と問題の数が表示されます。

7. 「**一致**」列タイトルのフィルタ・アイコンをクリックして、フィルタ・オプションを選択します。
 - 「**すべてのデータ**」を使用して、すべてのタイプの一致を表示します。
 - 「**最適な一致**」を使用して、100%の完全一致のみを表示します。
 - 「**すべての問題**」を使用して、部分一致、複数一致および一致なしを表示します。
 - 「**部分一致**」を使用して、照合している文字列間の差分率を示します。例: Paulo と Sao Paulo のように文字列の一部が完全に同じ。Caiyro と Cairo のように語の大部分が完全に同じ。
 - 「**複数の一致あり**」を使用して、あいまいな用例で存在する一致の数を示します。たとえば、Barcelona, Spain が Barcelona Argentina に一致している場合です。この

場合、データを再確認して GEO 列に詳細を追加し、正しい列にのみ一致するよう設定できます。

8. 除外する各データ行の「除外」列をクリックします。
9. 「除外」メニューをクリックします:
 - 「すべて選択」または「すべて選択解除」をクリックします。
 - 「ワークブック・スコープ」、「キャンパス・スコープ」または「ビジュアル・スコープ」のいずれかをクリックします。
10. オプション: 一致をより具体的にするために、ビジュアライゼーションの「カテゴリ」(場所)エッジに別の列を追加します。たとえば、Barcelona, Spain と Barcelona, Argentina のような不一致を除くため、国のデータを追加します。
11. 「場所の一致」ダイアログを表示して残っている不一致のサマリーを確認し、問題なければ「OK」をクリックします(または、必要に応じて前のステップを繰り返します)。

マップ・ビジュアライゼーションでのヒートマップ・レイヤーの作成

マップ・ビジュアライゼーションでヒートマップをデータ・レイヤー・タイプとして使用し、ポイント値またはポイントに関連付けられているメトリック値の密度または高濃度を識別します。たとえば、ヒートマップを使用して、地域または国内の高収益店舗を識別できます。

2つのタイプのヒートマップ・レイヤーを作成できます。

- **密度ヒートマップ** - マップ関連の列データのみを使用します(緯度と経度の列など)。密度ヒートマップ・レイヤーは、ポイントの累積合計を示し、各ポイントには特定の加重があります。ポイントには、周囲に影響を与える半径があり、同じ領域にある他のポイントもポイントの累積合計に寄与します。
 - **メトリック・ヒートマップ** - 同じレイヤー内のメジャー列データを使用します。たとえば、文法パネルの「色」セクションにメジャー列を追加すると、ヒートマップが更新され、補間されたメトリック値が表示されます。
1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
 2. 空のマップ・ビジュアライゼーションを作成します。
 3. 「データ・パネル」からマップ関連データが含まれている属性列を文法パネルの「カテゴリ」(地理)セクションにドラッグ・アンド・ドロップします。
 - マップ・ビジュアライゼーションを使用するワークブックを作成する場合は、「データ・パネル」で属性列を右クリックし、「ビジュアライゼーションの選択」をクリックして「マップ」を選択します。
 4. 「プロパティ」ペインの「データ・レイヤー」タブに移動します。
 - あるいは、「カテゴリ」(地理)セクションの「レイヤー・オプション」をクリックし、「レイヤーの管理」をクリックします。
 5. 密度ヒートマップを作成するには、「レイヤー・タイプ」値をクリックして「ヒートマップ」を選択します。

- あるいは、新規マップ・レイヤーを追加して、レイヤー・タイプを「**ヒートマップ**」に変更し、属性列を「**カテゴリ**」(地理)セクションに追加することもできます。
- 6. メトリック・ヒートマップを作成するには、「**データ・パネル**」から「**色**」セクションにメトリック列をドラッグ・アンド・ドロップします。ヒートマップ・ビジュアライゼーションが密度からメトリックに変わります。
- 7. 「**プロパティ**」ペインの「**データ・レイヤー**」タブで、半径、補間、透明度、色など、ヒートマップ・レイヤーのオプションを指定します。
 - デフォルトの補間方法は、レイヤーに対して選択したメトリック列または値の集計ルールに基づいて自動的に選択されます。
 - 半径の値はピクセル(px)で選択できます。半径の値は、マップ上のポイント値の周囲でメジャーが影響する範囲です。

ヒートマップは、「**データ・レイヤー**」タブで選択されたオプションに基づいて自動的に更新されます。

マップ・ビジュアライゼーションでのクラスタ・レイヤーの作成

マップ・ビジュアライゼーションでデータ・レイヤーのタイプとしてクラスタ・レイヤーを使用できます。クラスタ・レイヤーで、相互に近くに位置するポイントは共通のバブルと一緒にグループ化されます。

グループでクラスタ化されたポイント数はバブルのラベルに示されます。選択されたポイントが未選択のポイントとともにグループ化された場合、円が点線になり、一部選択されていることが示されます。各ポイントはピン・アイコンで表示され、グループ化済ポイントと未グループ化ポイント間の区別を強調表示します。ポイントは、マップのズーム・ファクタでピクセルでの近似性に基づいてグループ化されます。

1. ホーム・ページで、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「**データ・パネル**」からキャンバスにマップ・ビジュアライゼーションをドラッグし、空のマップ・ビジュアライゼーションを作成します。
3. 「**データ・パネル**」からマップ関連データが含まれている属性列を文法パネルの「**カテゴリ**」(地理)セクションにドラッグ・アンド・ドロップします。

マップ・ビジュアライゼーションを使用するワークブックを作成する場合は、「**データ・パネル**」で属性列を右クリックし、「**ビジュアライゼーションの選択**」をクリックして「**マップ**」を選択します。

4. 「**プロパティ**」ペインの「**データ・レイヤー**」タブをクリックします。

あるいは、「**カテゴリ**」(地理)セクションの「**レイヤー・オプション**」をクリックし、「**レイヤーの管理**」をクリックします。
5. ポイント・クラスタを作成するには、「**レイヤー・タイプ**」値をクリックして「**クラスタ**」を選択します。

あるいは、新規マップ・レイヤーを追加して、レイヤー・タイプを「**クラスタ**」に変更し、属性列を「**カテゴリ**」(地理)セクションに追加することもできます。

ポイント・クラスタは、ズーム・レベルに基づいて自動的に更新されます。

マップ上のカスタム・アイコンでのポイント・データの表現

「形状」エッジを使用すると、マップ・ビジュアライゼーション上にカスタム・アイコンでポイント・データを表現できます。

列を「形状」エッジに関連付けると、ポイント・データのカスタム形状を表示できます。たとえば、カスタム形状(正方形、三角形、通貨記号など)を使用してこれらを表示することにより、都市を区別できます。1つ以上のデータ・ポイントに適用するカスタム形状を変更することもできます。

1. ホーム・ページで、ポイント・データが含まれるマップ・ビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. ポイント・データ(都市など)を含む属性列を「データ・パネル」から文法パネルの「カテゴリ」(地理)エッジにドラッグ・アンド・ドロップします。
3. 列を「データ・パネル」から「**形状**」エッジに、オプションで文法パネルの「**色**」エッジにドラッグ・アンド・ドロップします。

マップ・ビジュアライゼーションは選択内容に基づいて自動的に更新され、前のレイヤーにオーバーレイされます。

4. オプション: カスタム形状をデータ・ポイントおよびマップ凡例に割り当てる方法を変更できます。
 - a. 選択ツールのいずれかを使用してマップ上で1つ以上のデータ・ポイントを強調表示するか、[Ctrl]をクリックして1つ以上のデータ・ポイントを選択します。
 - b. 複数選択したデータ・ポイントのいずれかを右クリックし、「**カスタム形状**」を選択してから、「**系列**」または「**データ・ポイント**」を選択します。
 - c. カスタム形状を選択し、「**完了**」をクリックします。

カスタム形状は次のように適用されます。

- 「**系列**」**ダイアログ** - まだ設定されていないカスタム・データ・ポイントの形状
強調表示されたデータ・ポイントおよび系列項目がカスタム形状で置き換わります。
 - 「**系列**」**ダイアログ** - 以前に設定されたカスタム・データ・ポイントの形状
対応する系列項目のみがカスタム形状で置き換わります。
 - 「**データ・ポイント**」**ダイアログ**
強調表示されたデータ・ポイントのみがカスタム形状で置き換わります。
5. データ・ポイントのカスタム形状を再度割り当てる場合、次の手順を実行します。
 - a. 任意のデータ・ポイントを右クリックし、「**形状**」を選択して「**カスタム形状**」をクリックします。
 - b. データ・ポイントに割り当てられたカスタム形状を変更するには、変更するデータ・ポイントに対応する形状をクリックします。
 - c. 新規カスタム形状を選択し、「**完了**」をクリックしてから再度「**完了**」をクリックします。

6. マップ・ビジュアライゼーション上でデータ・ポイントに現在適用されているカスタム形状をすべてリセットする場合、任意のデータ・ポイントを右クリックし、「**形状**」を選択して「**カスタム形状のリセット**」をクリックします。
これにより、マップ上でデータ・ポイントに適用されている形状がすべてデフォルト設定にリセットされます。

マップ上でのポイントまたは領域の選択

選択ツールを使用し、定義する特定の領域でマップ上に複数のポイントを選択できます。

1. ホーム・ページで、マップ・ビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「**アクション**」**メニュー**をクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、マップ・ビジュアライゼーションを選択します。
3. ビジュアライゼーション・ツールバーで次のいずれかの操作を行います。
 - 「**四角形選択**」ツールをクリックし、マップ上の四角形をドラッグして対象のポイントまたは領域を選択します。
 - 「**円形選択**」ツールをクリックし、マップ上のポイントを選択してから外側にドラッグして円を作成します。単位には、マップ上で対象となっている距離の合計が表示されます。
 - 「**多角形選択**」ツールをクリックし、マップ上で選択するポイントまたは領域にフリーハンドの境界をドラッグします。

選択したポイントまたは領域がマップ上で強調表示されます。

マップ上のサイズおよび色を使用した線データの表現

マップ・ビジュアライゼーション上で太さおよび色を使用して線データの加重を表現できます。

メジャーを「サイズ」エッジに関連付けて、線の相対的な加重を示すことができます。たとえば、航空路線の遅延を比較するには、線の太さを変更してフライトの路線を表示します。線が太くなり、色が暗くなると遅延時間が長くなることを示します。

1. ホーム・ページで、線データを含むマップ・ビジュアライゼーションを使用するワークブックを選択し、「**アクション**」**メニュー**をクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「ビジュアル化」キャンバスで、線データを表示するマップ・ビジュアライゼーションを選択します。
3. 線データ(航空路線など)を含む列を「データ・パネル」から文法パネルの「カテゴリ」(地理)エッジにドラッグ・アンド・ドロップします。
4. 線メジャー列を「データ・パネル」から「**サイズ**」エッジに、オプションで文法パネルの「**色**」エッジにドラッグ・アンド・ドロップします。

マップ・ビジュアライゼーションは選択内容に基づいて自動的に更新され、前のレイヤーにオーバーレイされます。

マップ・レイヤーと背景をユーザーに対して使用可能にする方法

ビジュアライゼーション・ワークブックでは、管理者は、マップ・レイヤーと背景をユーザーに表示したり、非表示にしたりできます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「マップ」をクリックし、「背景」または「マップ・レイヤー」をクリックします。
3. 「含める」(青色のチェック)オプションをクリックして、選択した行項目を使用可能にするか、ユーザーから非表示にします。

マップ背景、イメージ背景、カスタム・マップ・レイヤーおよびシステム・マップ・レイヤーを表示または非表示にできます。

デフォルトとしてのマップ背景の使用

ビジュアライゼーション・ワークブックでは、管理者は、マップの背景をユーザーのデフォルトにすることができます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「マップ」をクリックし、「背景」をクリックして「マップ背景」をクリックします。
3. マップの背景の行で「デフォルト」列フィールドをクリックし、これをデフォルトにします。

マップの背景が、新しいビジュアライゼーションでデフォルトで使用されます。

マップの背景の追加

Google、Baidu、他の Web マップ・サービスの背景を追加してビジュアライゼーションで使用できます。

トピック:

- [Google マップの背景の追加](#)
- [Baidu マップの背景の追加](#)
- [Web マップ・サービス\(WMS\)の背景の追加](#)
- [タイル Web マップ\(XYZ\)の背景の追加](#)
- [Web マップ背景のトラブルシューティングのヒント](#)

Google マップの背景の追加

Google マップの背景を追加してマップ・ビジュアライゼーションで使用できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. 「コンソール」で、「マップ」を選択し、「背景」をクリックして、「マップ背景」をクリックします。
3. 「背景の追加」をクリックし、リストから **Google** を選択します。
4. 必要に応じて、役立つ説明を入力します。
5. 「アカウント・タイプ」をクリックしてアカウントを選択します。
6. Google マップ API アクセス・キーをコピーして貼り付けます。

Google マップ・タイルを使用するには、Google 社から Google マップ API アクセス・キーを取得する必要があります。マップ API アクセス・キーと、該当する場合は Google のクライアント ID の入力を求める Google のプロンプトが表示されます。タイルの使用は、Google 社が指定した利用規約(Google Developers サイト利用規約)を満たす必要があります。
7. 該当する場合は、「デフォルト・マップ・タイプ」をクリックします。
8. 「保存」をクリックし、使用可能なマップ背景のリストにマップを含めます。

Baidu マップの背景の追加

Baidu マップの背景を追加してマップ・ビジュアライゼーションで使用できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. コンソールで「マップ」を選択し、「背景」をクリックして「マップ背景」をクリックします。
3. 「背景の追加」をクリックし、リストから **Baidu** を選択します。
4. 必要に応じて、役立つ説明を入力します。
5. Baidu マップ API アクセス・キーをコピーして貼り付けます。

Baidu マップ・タイルを使用するには、Baidu 社から Baidu マップ API アクセス・キーを取得する必要があります。マップ API アクセス・キーの入力を求める Baidu のプロンプトが表示されます。タイルの使用は、使用許諾の Baidu 社が指定した利用規約を満たす必要があります。
6. 該当する場合は、「この外部ホストを信頼することに同意します。」をクリックします。
7. 「保存」をクリックし、使用可能なマップ背景のリストにマップを含めます。
8. Analytics Cloud の Baidu マップの場合は、次の URL を安全ドメインとして追加する必要があります。これは、コンソールの「安全ドメイン」ページから行います。
 - *.map.baidu.com [Image, Script]
 - *.map.bdimg.com [Image, Script]
 - *.bdstatic.com [Image, Script]

Image と Script の両方のオプションを選択する必要があります。これにより、これらのドメインがイメージ・タイルと必要なスクリプトの提供に関して信頼できることが示され、Baidu マップのコンテンツの正常なレンダリングが確実化されます。

Web マップ・サービス(WMS)の背景の追加

Web マップ・サービスの背景を追加してマップ・ビジュアライゼーションで使用できます。

Web マップ・サービスの背景は、Web マップ・サービス(WMS)・プロトコルを使用して Web サーバー上で動的にホスティングされます。これらを使用して、エンタープライズ内にはない可能性がある情報が含まれるマップを統合し、このマップをデータとともに空間的に簡単に提示できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. コンソールで「マップ」を選択し、「背景」をクリックして「マップ背景」をクリックします。
3. 「背景の追加」をクリックし、リストから「Web マップ・サービス」を選択します。
4. 「一般」タブをクリックし、名前と説明を入力します。
5. 「URL」に、Web マップ・サービスの完全な URL を入力します。

正確な URL については、Web マップ・サービス・プロバイダに問い合わせてください。

たとえば、https://www.gebco.net/data_and_products/gebco_web_services/web_map_services/mapserv です。

「バージョン」には、WMS プロバイダによって使用される Web マップ・サービス・プロトコルのバージョンが自動的に表示されます。デフォルト値は 1.1.1 ですが、ドロップダウン・リストから別のバージョンを選択できます。

「座標参照系」には、ホスト・プロバイダによって使用される参照システムが自動的に表示されます。デフォルト値の EPSG:3857 は、マップを 2 デイメンションでプロジェクト化するために使用する座標系です。詳細を表示するには、ツールチップ・アイコンにカーソルを合せます。

6. 「この外部ホストを信頼することに同意します。」をクリックすると、安全ドメインのリストにホストが自動的に追加されます。
7. 「レイヤー」に、使用する各背景マップ・レイヤーの名前を入力します。レイヤーを削除するには、(x)アイコンをクリックします。
8. イメージ・タイプを変更する必要がある場合は、「フォーマット」をクリックします。
9. 「パラメータ」タブを表示し、「パラメータの追加」をクリックします。

入力したパラメータは URL に含まれ、マップの背景に何を表示するか(たとえば、イメージ・タイプ、レイヤー、マップの地理的範囲、返されるイメージのサイズ)をホスティング・サーバーに指示します。

10. URL に含めてホスト・サーバーに渡すパラメータを key:value 形式で入力します。

次の URL を使用して、この Web マップ・サービスに使用できるパラメータを確認します:

`http://<url_of_the_map_server>?request=getCapabilities&service=wms`

11. 「保存」をクリックし、使用可能なマップの背景のリストに背景マップ・レイヤーを追加します。
変更を確認するには、ページをリフレッシュする必要があります。
12. 「プレビュー」をクリックしてマップの背景のプレビューを表示します。
「プレビュー」タブは、ページの保存およびリフレッシュ後にのみ使用可能になります。
これは、リフレッシュによって安全ドメインの認識が可能になるためです。

タイル Web マップ(XYZ)の背景の追加

タイル Web マップ(XYZ)の背景を追加して、これらをマップ・ビジュアライゼーションで使用できます。

タイル Web マップ(XYZ)の背景は、個々にリクエストされた多数のイメージ、または Web サーバー経由のインターネット上のベクター・データ・ファイルをシームレスに結合することにより、ブラウザに表示されます。これらを使用して、企業にない情報および空間的にデータに存在する情報を含むマップを統合できます。

ロードするベクター・タイルまたはラスター・タイル・マップ・イメージを指定するようにタイル URL 文字列を構成します。ホストは各文字列を評価し、ロードするタイルを決定します。

正確な URL については、タイル Web マップ・サービス・プロバイダに問い合せてください。URL 内のパラメータは、マップの背景に何を表示するかをホスティング・サーバーに指示します。たとえば、マップ名、バージョンおよび指定したフォーカスで使用するタイルの番号などです。次に、Mapbox タイル Web マップの背景の URL の例を示します:

- <https://api.mapbox.com/styles/v1/mapbox/streets-v11/tiles/256/{z}/{x}/{y}>
- <https://api.mapbox.com/styles/v1/mapbox/satellite-v9/tiles/256/{z}/{x}/{y}>
- <https://api.mapbox.com/styles/v1/mapbox/light-v10/tiles/256/{z}/{x}/{y}>
- <https://api.mapbox.com/styles/v1/mapbox/dark-v10/tiles/256/{z}/{x}/{y}>
- <https://api.mapbox.com/styles/v1/mapbox/outdoors-v11/tiles/256/{z}/{x}/{y}>

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「コンソール」をクリックします。
2. コンソールで「マップ」を選択し、「背景」をクリックして「マップ背景」をクリックします。
3. 「背景の追加」をクリックし、リストから「タイル Web マップ」を選択します。
4. 「一般」タブをクリックし、名前と説明を入力します。
5. 「URL」に、ホスト・タイル Web マップ・サービスの完全な URL を入力します。
6. 負荷分散のため、プラス(+)アイコンをクリックして同じドメインの追加のサーバーの URL を入力します。
7. 「この外部ホストを信頼することに同意します。」をクリックすると、安全ドメインのリストにホストが自動的に追加されます。
8. 「パラメータ」タブを表示し、「パラメータの追加」をクリックします。

入力したパラメータは URL に含まれ、マップの背景に何を表示するか(たとえば、イメージ・タイプ、レイヤー、マップの地理的範囲、返されるイメージのサイズ)をホスティング・サーバーに指示します。

たとえば、exampleaccessTokenXYZ123456789nnnxxxZZz の値を指定して access_token を入力します。

詳細はプロバイダに問い合わせてください。

9. URL に含めてホスト・サーバーに渡すパラメータを key:value 形式で入力します。
10. 「保存」をクリックし、使用可能なマップの背景のリストに指定したタイル Web マップを追加します。
変更を確認するには、ページをリフレッシュする必要があります。
11. 「プレビュー」をクリックしてマップの背景のプレビューを表示します。
「プレビュー」タブは、ページの保存およびリフレッシュ後にのみ使用可能になります。これは、リフレッシュによって安全ドメインの認識が可能になるためです。

Web マップ背景のトラブルシューティングのヒント

Web マップ背景を追加する際にエラーが発生した場合、このトピックを使用します。

Web マップ背景イメージが「プレビュー」タブまたはビジュアライゼーションに表示されない場合、問題を解決する措置を講じる必要があります。

- エラーが解決されず、問題を診断する場合:
 - **[F12]**をクリックしてブラウザの開発ツール・アプリケーションを表示し、ブラウザのコンソール・タブでエラーを検索します。たとえば、error または CORS を検索します。エラー・メッセージが赤色のテキストで表示されます。
 - http://example.com の画像へのアクセスは CORS ポリシーによってブロックされた...のようなエラー・メッセージが表示される場合、ホスト・プロバイダに連絡して問題を解決します。Cross Origin Resource Sharing (CORS)ポリシーに言及したエラー・メッセージは、ホスト・プロバイダによってのみ解決できます。
- または、エラーが解決されない場合は、問題の解決を支援する Oracle サポートに連絡してください。

マップでのアウトラインのポイントおよび形状への追加

アウトラインを追加して、マップ・ビジュアライゼーションでのポイントおよび形状の境界を強調表示できます。

ユーザーがマップに表示されているビジュアライゼーション情報を迅速に識別できるように、アウトラインはポイントおよび形状の境界を強調表示します。「アウトライン」プロパティは、「ポイント」レイヤー・タイプを使用するマップでのみ使用可能です。「ヒートマップ」および「クラスタ」レイヤー・タイプには「アウトライン」プロパティはありません。

1. マップ・ビジュアライゼーションが含まれるワークブックを開き、「アクション」メニューをクリックして、「開く」を選択します。
2. 「プロパティ」をクリックします。「プロパティ」で「データ・レイヤー」をクリックします。

3. 「アウトライン」行で、「自動」をクリックし、「カスタム」を選択します。
4. 「アウトラインの色」フィールドをクリックして色を選択します。「アウトラインの幅」で、上向き矢印を使用して幅を広げ、下向き矢印を使用して幅を狭めます。
5. 「保存」をクリックします。

マップへのデータ・ラベルの追加

マップ・ビジュアライゼーションにデータ・ラベルを組み込むと、個々のデータ・ポイントを説明することができます。

マップにデータ・ラベルがあると、わかりやすく有益なマップになります。データ・ラベルによって、関心がある特定のデータ・ポイントや地域が強調して表示されるため、ユーザーは、マップに表示された視覚情報をすぐに理解できます。

1. マップ・ビジュアライゼーションが含まれるワークブックを開き、「アクション」メニューをクリックして、「開く」を選択します。
2. マップ・ビジュアライゼーションで、長方形の選択ツールを使用して、ラベルに使用するデータ要素を選択し、「メニュー」をクリックします。
3. 「プロパティ」をクリックし、「プロパティ」の「データ・レイヤー」をクリックします。
4. 「データ・ラベル」を選択してオンにします。
5. データ・ラベルを構成します。
 - **データ・ラベルの位置** - ラベルの位置を選択します。
 - **列** - データ・ラベルの元となる列を1つ以上選択します。
列を複数選択した場合は、「複数行」プロパティをオンにすると、新しい行に2つ目のラベルが表示されます。
 - **重複を許可** - オンにすると、間隔やズーム・レベルに関係なく、すべてのデータ・ラベルが表示されます。
 - **フォント** - データ・ラベルのサイズと色を選択します。
 - **ハロー** - 「自動」または「カスタム」を選択して、データ・ラベル・テキストを強化するためのハロー効果を追加します。
「カスタム」を選択した場合、「ハローの色」をクリックして、ハローの色を選択できます。

10

データ・アクションの使用

「データ・アクション」リンクでは、コンテキスト値を外部 URL へのパラメータとして、他のワークブックへのフィルタとして、または外部コンテナに埋め込まれたビジュアライゼーションとして渡すことができます。アクションを使用して、キャンバス、外部 URL、Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続し、外部コンテナで使用できます。

リンクがワークブックにナビゲートすると、データ・コンテキストがキャンバス・スコープ・フィルタの形でフィルタ・バーに表示されます。リンクのデータ・コンテキストには、選択項目に関連付けられた属性またはリンクが開始されたセルが含まれる場合があります。

トピック:

- [ビジュアライゼーション・キャンバスに接続するためのデータ・アクションの作成](#)
- [ビジュアライゼーション・キャンバスから外部 URL に接続するためのデータ・アクションの作成](#)
- [HTTP データ・アクションの作成](#)
- [Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続するためのデータ・アクションの使用](#)
- [ビジュアライゼーション・キャンバスからのデータ・アクションの起動](#)
- [データ・アクションがフィルタに与える影響](#)
- [外部コンテナに埋め込まれたビジュアライゼーションのデータ・アクションの作成](#)
- [埋込みコンテンツを含むデータ・アクションの実行](#)

ビジュアライゼーション・キャンバスに接続するためのデータ・アクションの作成

現在のワークブックのキャンバスまたは他のワークブックのキャンバスに移動するデータ・アクションを作成できます。

ビデオ

データ・アクションを使用して、コンテキスト関連の情報(たとえば注文番号)を転送することもでき、この場合、リンクでは他のビジュアライゼーションまたはワークブックの注文番号に関する詳細が表示されます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. ワークブック・ツールバーの「**メニュー**」をクリックして、「**データ・アクション**」をクリックします。
3. 「**アクションの追加**」をクリックして新しいナビゲーション・リンクの名前を入力します。
 - ナビゲーション・リンクの名前には文字と数字のみ使用できます。

- 複数のナビゲーション・リンクを追加できます。
4. 「**タイプ**」フィールドをクリックし、「**分析リンク**」を選択します。
 5. 「**アンカー先**」フィールドをクリックし、現在のビジュアライゼーションからこのデータ・アクションに関連付ける列を選択します。メジャー列または非表示の列は選択しないでください。「**アンカー先**」フィールドに値を指定しなかった場合、データ・アクションはビジュアライゼーションのすべてのデータ要素に適用されます。
 6. 「**ワークブック**」フィールドをクリックし、アンカーに使用するワークブックを選択します:
 - **このワークブックを使用** - アクティブなワークブックのキャンバスにリンクする場合に選択します。
選択する列は、現在のビジュアライゼーションに存在している必要があります。
 - **カタログから選択** - 使用するワークブックを参照して選択する場合に選択します。
 7. 「**キャンバス・リンク**」フィールドをクリックし、使用するキャンバスを選択します。
 8. 「**値を渡す**」フィールドをクリックして、データ・アクションで渡す値を選択します。
たとえば、「**アンカー先**」フィールドに注文番号列を指定した場合は、「**値を渡す**」フィールドで「**アンカー・データ**」を選択して指定した列の値を渡します。
 - **すべて** - クリックしたセルの交差を動的に判断し、それらの値をターゲットに渡します。
 - **アンカー・データ** - 「**アンカー先**」フィールドに指定された必須列がビュー・コンテキストで使用可能な場合にのみ、実行時にデータ・アクションが表示されるようにします。
 - **なし** - ページ(URL またはキャンバス)を開きますが、いずれのデータも渡しません。
 - **カスタム** - カスタム・セットの列を渡すように指定できます。
 9. 「**複数の選択をサポート**」をクリックして、値を設定します。
 - **オン** - データ・アクションは、1 つまたは複数のデータ・ポイントが選択されている場合に呼び出すことができます。
 - **オフ** - データ・アクションは、単一のデータ・ポイントが選択されている場合にのみ呼び出すことができます。
この設定は、複数のデータ・ポイントを選択するとエラーが発生する可能性がある場合に特に役立ちます(たとえば、一部のサード・パーティの REST API を使用する場合)。
 10. 「**OK**」をクリックして保存します。

ビジュアライゼーション・キャンバスから外部 URL に接続するためのデータ・アクションの作成

データ・アクションを使用してキャンバスから外部 URL にナビゲートできるため、サプライヤ ID などの列を選択すると特定の外部 Web サイトが表示されます。

LiveLabs スプリント

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 「**メニュー**」をクリックして、「**データ・アクション**」を選択します。
3. 「**アクションの追加**」をクリックして新しいナビゲーション・リンクの名前を入力します。複数のナビゲーション・リンクを追加できます。
4. 「**タイプ**」フィールドをクリックし、「**URL のナビゲーション**」を選択します。
5. 「**アンカー先**」フィールドをクリックし、URL を適用する列を選択します。「**アンカー先**」フィールドに値を指定しなかった場合、データ・アクションはビジュアライゼーションのすべてのデータ要素に適用されます。
6. URL アドレスを入力し、オプションで表記法およびパラメータを含めます。

たとえば、`http://www.example.com?q=${keyValuesForColumn:"COLUMN"}`は、`www.oracle.com?q=${keyValuesForColumn:"Sales"."Products"."Brand"}`のように表示されます。ここで選択した列名は、データ・アクションを起動した場合の値に置き換わります。

7. 「**複数の選択をサポート**」をクリックして、値を設定します。
 - **オン** - データ・アクションは、1 つまたは複数のデータ・ポイントが選択されている場合に呼び出すことができます。
 - **オフ** - データ・アクションは、単一のデータ・ポイントが選択されている場合にのみ呼び出すことができます。
この設定は、複数のデータ・ポイントを選択するとエラーが発生する可能性がある場合に特に役立ちます(たとえば、一部のサード・パーティの REST API を使用する場合)。
8. 「**OK**」をクリックして保存します。
9. 「**キャンバス**」で、セルをクリックするか、または[Ctrl]を押しながらかlickして複数のセルを選択します。
10. すでに作成したナビゲーション名を右クリックおよびメニューから選択します。
セルを選択すると、パラメータに渡す値が決定されます(URL トークン)。

HTTP API データ・アクションの作成について

ワークブックから REST API に接続するための HTTP API データ・アクションを作成できます。

ワークブックから選択された列値を REST API に渡して、そこからレスポンスが返されるように、HTTP API データ・アクションを構成します。次の点に注意してください:

- 作成可能なデータ・アクションの数に制限はありません。
- URL には、コンテキスト値をデータ・アクション(データ値、ユーザー名、ワークブック・パス、キャンパス名など)に渡すトークンを含めることができます。

次の REST API URL の例には、Google books API を表示する Category 列トークン値が含まれています: `http://www.googleapis.com/books/v1/volumes?q=${valuesForColumn:"Category"}`。Category 列のセルから選択した値("Books"など)は REST API に渡され、それによりリクエストされたページが表示されます。

- POST メソッドを使用する場合、または HTTP ヘッダーをオーバーライドするカスタム HTTP ヘッダーを使用する場合は、次のことが適用されます:
 - "=" で区切られた名前と値を持つ名前/値ペアとして各パラメータを入力します。
 - 呼び出している API に応じて、同じ URL トークン構文を名前/値ペアで使用できます。例:

```
* paramName1=paramValue1

* paramName2=${valuesForColumn:"Product"}
```

- カスタム・ヘッダーは、HTTP リクエストのターゲットが、使用している HTTP ヘッダーをリクエストに設定することを明確に許可している場合に機能します。ヘッダーが許可されない場合、ブラウザはリクエストをブロックし、エラー・メッセージを表示します。たとえば、Content-Type=application/json を含む Cookie ヘッダーはブロックされます。

HTTP データ・アクションの作成

列を選択すると値が REST API に送信され、そこからレスポンスが返されるように、ワークブックで HTTP API データ・アクションを使用できます。

HTTP API データ・アクションを作成する前に、接続しようとしているドメインを安全なドメインとして構成する必要があります。安全なドメインの登録を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. ワークブックの「**メニュー**」をクリックして、「**データ・アクション**」を選択します。
3. 「**アクションの追加**」をクリックして新しい HTTP API データ・アクションの名前を入力します。たとえば、HTTP API Example と入力します。
4. 「**タイプ**」フィールドをクリックし、「**HTTP API**」を選択します。
5. 「**アンカー先**」フィールドをクリックし、HTTP API データ・アクションを適用する列を選択します。メジャー列または非表示の列は選択しないでください。「**アンカー先**」フィールドに値を指定しなかった場合、データ・アクションはビジュアライゼーションのすべてのデータ要素に適用されます。
6. 「**HTTP メソッド**」リストで、メソッドを選択します。
7. http または https で開始し、オプションで置換トークンを含む REST API の URL を入力します。

8. POST メソッドを選択した場合:
 - 「ペイロード・タイプ」の値として「フォーム・データ」を選択した場合は、各パラメータを別々の行に入力します。
 - 「ペイロード・タイプ」の値として「RAW データ」を選択した場合は、RAW データを入力します。
9. インタフェースしている API に合わせて HTTP ヘッダーを追加またはオーバーライドする場合は、カスタム HTTP ヘッダーを入力します。
10. 「複数の選択をサポート」をクリックして、値を設定します。
 - オン - データ・アクションは、1 つまたは複数のデータ・ポイントが選択されている場合に呼び出すことができます。
 - オフ - データ・アクションは、単一のデータ・ポイントが選択されている場合にのみ呼び出すことができます。
この設定は、複数のデータ・ポイントを選択するとエラーが発生する可能性がある場合に特に役立ちます(たとえば、一部のサード・パーティの REST API を使用する場合)。
11. 「OK」をクリックして保存します。
12. ビジュアライゼーションのデータ・ポイントをクリックします。
たとえば、トークン「Category」列から"Books"を選択して、特定の REST API を表示できます。
13. 右クリックして **HTTP API の例**を選択し、結果を表示します。
選択したデータ・ポイントで、URL トークンに渡す値が決定されます。
成功または失敗メッセージが表示され、選択した値を使用して REST API が正常に起動されたことを確認します。

Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続するためのデータ・アクションの使用

データ・アクション・リンクは、コンテキスト値を Oracle Business Intelligence Publisher レポートの URL パラメータとして渡すことができます。

リンクをクリックして BI Publisher レポートを開いた場合、リンクには、ビジュアライゼーションで選択した列に関連付けられている属性が含まれる場合があります。

トピック:

- [Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続するためのデータ・アクションの作成について](#)
- [Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続するためのデータ・アクションの作成](#)
- [データ・アクションにカスタム列名を作成して Oracle Business Intelligence Publisher レポート URL に渡す](#)

Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続するためのデータ・アクションの作成について

Oracle Business Intelligence Publisher レポートにリンクするデータ・アクションを作成できます。

ビジュアライゼーションから選択した列値を渡して BI Publisher レポートに表示するようにデータ・アクションを構成します。

- BI Publisher レポートはローカル・フォルダに格納する必要があります。
- BI Publisher レポートがデータ・モデルとして分析を使用する場合、基になる分析のプロンプトでは、選択した値を BI Publisher レポートのプロンプトに渡せるように「ユーザー入力」値が「選択リスト」に設定されている必要があります。
- 値リストとリスト・フィルタを渡して、BI Publisher レポートにプロンプトとして表示できます。ただし、数値フィルタ、日付フィルタまたは式フィルタは渡せません。

Oracle Business Intelligence Publisher レポートに接続するためのデータ・アクションの作成

分析データ・アクション・リンクを作成して、選択したデータ・ポイントを Oracle Analytics ワークブックから Oracle Business Intelligence Publisher レポートに転送できます。

Oracle Analytics ワークブック、BI Publisher レポートおよび分析は異なるフォルダに入れることができます。

1. ホーム・ページで、BI Publisher レポートで使用されるデータ・モデルを使用するワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「メニュー」をクリックして、「データ・アクション」を選択します。
3. 「アクションの追加」をクリックして新しいナビゲーション・リンクの名前を入力します。
4. 「タイプ」フィールドをクリックし、「分析リンク」を選択します。
5. 「名前」フィールドに、データ・アクションの名前を入力します。
6. 「ターゲット」フィールドをクリックし、「カタログから選択」を選択し、データ・アクションがデータを渡す BI Publisher レポートを参照して選択し、「OK」をクリックします。
7. 「パラメータ・マッピング」が「デフォルト」に設定されていることを確認します。
8. 「値を渡す」フィールドが「すべて」に設定されていることを確認します。
9. 「複数の選択をサポート」をクリックして値を設定します。
 - オン - データ・アクションは、1 つまたは複数のデータ・ポイントが選択されている場合に呼び出すことができます。
 - オフ - データ・アクションは、単一のデータ・ポイントが選択されている場合にのみ呼び出すことができます。

この設定は、複数のデータ・ポイントを選択するとエラーになる可能性がある場合に特に有用です(たとえば、一部のサードパーティの REST API の場合)。

10. 「OK」をクリックします。
11. ビジュアライゼーションのデータ・ポイントを選択し、値が BI Publisher レポートに渡されることをテストするデータ・アクションを選択します。

データ・アクションにカスタム列名を作成して Oracle Business Intelligence Publisher レポート URL に渡す

Oracle Business Intelligence Publisher レポートの URL にカスタム列名を渡すデータ・アクション・リンクを作成できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「メニュー」をクリックして、「データ・アクション」を選択します。
3. 「アクションの追加」をクリックして新しいナビゲーション・リンクの名前を入力します。
4. 「タイプ」フィールドをクリックし、「分析リンク」を選択します。
5. 「名前」フィールドに、データ・アクションの名前を入力します。
6. 「ターゲット」フィールドをクリックし、「カタログから選択」を選択し、データ・アクションがデータを渡す BI Publisher レポートを参照して選択し、「OK」をクリックします。
7. 「パラメータ・マッピング」をクリックし、「カスタム・マッピングの設定」を選択して、BI Publisher レポートに URL パラメータとして渡すカスタム列名を指定します。
8. 「行の追加」をクリックし、カスタム名を使用して BI Publisher レポートに渡す列ごとに「列の選択」をクリックします。
9. 「パラメータの入力」をクリックし、置換する各列名のカスタム名を入力します。
カスタム名は URL で BI Publisher レポートに渡されます。
10. 「値を渡す」フィールドが「すべて」に設定されていることを確認します。
11. 「複数の選択をサポート」をクリックして、値を設定します。
 - オン - データ・アクションは、1 つまたは複数のデータ・ポイントが選択されている場合に呼び出すことができます。
 - オフ - データ・アクションは、単一のデータ・ポイントが選択されている場合にのみ呼び出すことができます。
この設定は、複数のデータ・ポイントを選択するとエラーが発生する可能性がある場合に特に役立ちます(たとえば、一部のサード・パーティの REST API を使用する場合)。
12. 「OK」をクリックします。
13. ビジュアライゼーションのデータ・ポイントを選択し、カスタム列名が BI Publisher レポートの URL に表示されることを検証するデータ・アクションを選択します。

ビジュアライゼーション・キャンバスからのデータ・アクションの起動

キャンバスから他のキャンバスおよび URL にデータ・アクションを起動できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. 別のキャンバスまたは URL に繋がる「データ・アクション」リンクが含まれるキャンバスで、次のステップを実行します。
 - a. データ要素を右クリックするか、([Ctrl]キーを押しながらクリックして)複数の要素を選択します。
 - b. コンテキスト・メニューから、起動するデータ・アクションを選択します。
 - c. 「ワークブック・プロパティ」ダイアログを完成させます。

現在のビュー・コンテキストに適用されるデータ・アクションの名前がコンテキスト・メニューに表示されます。

データ・アクションがコンテキスト・メニューに表示されるためには、「**アンカー先**」フィールドに定義されているすべての値がビュー・コンテキストで使用可能である必要があります。

値として渡されるデータ要素と、ターゲット・キャンバス上のデータ要素の照合には、次のルールが適用されます。

- 同じデータ要素がターゲット・ワークブックのキャンバスと一致する場合に、このデータ要素に対する既存のキャンバス・フィルタがターゲット・キャンバスにない場合は、新しいキャンバス・フィルタが追加されます。既存のキャンバス・フィルタがある場合は、ソース・ワークブックのキャンバスの値で置換されます。[データ・アクションがフィルタに与える影響](#)を参照してください。
- 期待されるデータセットが使用可能ではなく、別のデータセットが使用可能な場合は、異なるデータセットの列名とデータ型を使用して照合が行われ、その列にフィルタが追加されます。
- 名前とデータ型による列の一致が複数ある場合は、ターゲット・ワークブックまたはキャンバスのそれらすべての列にフィルタが追加されます。

データ・アクションは、ターゲット・セルまたはマップされた URL にナビゲートし、「データ・アクション」ダイアログに指定された値に基づいて、表示されたデータをフィルタします。

「**値を渡す**」フィールドに設定された、「値を渡す」コンテキストは、データ・アクションを起動するビジュアライゼーションで使用されるデータ要素で構成されます。「値を渡す」コンテキストには、ワークブック、キャンバスまたはビジュアライゼーション・レベルのフィルタのデータ要素は含まれていません。

データ・アクションがフィルタに与える影響

ここで設定したルールを使用して、データ・アクションがターゲット・ワークブック、キャンバスおよびダッシュボードのフィルタに与える影響を理解します。

選択した列値をワークブックから別のワークブック・フィルタ、キャンバス・フィルタまたはダッシュボード・フィルタに渡すデータ・アクションを構成します。データ・アクションでは、ダッシュボード・フィルタおよびワークブック・フィルタを変更で

きます。フィルタ・バージョンが非表示の場合は、ダッシュボードおよびワークブック・フィルタを変更できません。

データ・アクションからのフィルタ値は、デフォルトではワークブック・レベル、またはキャンバス・レベルで適用されますが、ユーザーに表示される一致するフィルタがターゲット・ワークブックに存在する場合は、データ・アクション・フィルタ値でそれをオーバーライドできます。データ・アクションからのフィルタ値でビジュアライゼーション・フィルタをオーバーライドすることはできません。

これらは、データ・アクション・フィルタ値のユース・ケース・シナリオ・ロジックです：

- データ・アクションからのフィルタ値はダッシュボード・フィルタ・バー列の選択値を変更します - この状況は、ターゲット・ワークブックが、同じ列を使用するダッシュボード・フィルタ・バーを持ち、一致するフィルタ・タイプを持つ場合に発生します。
- データ・アクションからのフィルタ値はワークブックまたはキャンバスのフィルタ値を変更します - この状況は、ダッシュボード・フィルタに対する変更が可能でない場合に発生します。システムは最上位レベルのフィルタ・バー(ワークブックまたはキャンバス・フィルタ)を参照し、受信した列選択との一致がある場合、フィルタ・バーがユーザーに表示される場合、および特定の一致フィルタが表示可能かつ対話型である(読取り専用ではない)場合に変更を加えます。
- データ・アクションからのフィルタ値はフィルタ・バーにキャンバス・フィルタを作成します - この状況は、最上位レベルのフィルタ・バーまたは一致するフィルタが非表示または読取り専用である場合に発生します。デフォルトの次により制限動作が維持されます。

これらのルールを使用して、データ・アクション・フィルタとターゲット・ダッシュボードおよびワークブックの既存のフィルタとの相互作用について理解します：

- データ・アクションは、フィルタをダッシュボード・フィルタ・バーに追加できません。ダッシュボード・フィルタ・バーの既存のフィルタの再利用のみ行うことができます。
- データ・アクションは、一致するフィルタがターゲット・ワークブックに存在する場合にのみダッシュボード・フィルタを再利用できます。
- データ・アクションは、ダッシュボード・フィルタ・バーの一致するフィルタを優先します。つまり、データ・アクションがダッシュボード・フィルタ・バーとキャンバス・フィルタ・バーのどちらの一致するフィルタを再利用するかを選択できる場合、データ・アクションはキャンバス・フィルタよりもダッシュボード・フィルタを優先して再利用します。
- 互換性のあるダッシュボード・フィルタがターゲット・ワークブックに存在しない場合、データ・アクションは、ワークブック・フィルタ・バーにキャンバス・フィルタを作成します。
- データ・アクションによってターゲット・ワークブックにワークブック・フィルタが作成されることはありません。この機能を実現するにはフィルタをパラメータにバインドする必要があります。
- データ・アクションはビジュアライゼーション・フィルタを変更できません。これらはデータ・アクションのターゲットではないからです。これには、ダッシュボード・フィルタ・バーで選択されたビジュアライゼーション・フィルタが含まれます。これらのフィルタをパラメータにバインドして値を変更する必要があります。
- データ・アクションは式フィルタを再利用せず、かわりにキャンバス式フィルタを作成します。

外部コンテナに埋め込まれたビジュアライゼーションのデータ・アクションの作成

ビジュアライゼーションを外部コンテナ(HTML ページ、コンシューマのアプリケーション・ページなど)に埋め込み、データ・アクションをビジュアライゼーションに含めることができます。埋込みデータ・アクションを使用して、外部コンテナに埋め込まれたビジュアライゼーションと相互作用できます。ビジュアライゼーションで使用するデータ要素のセットを外部コンテナから取得できます。埋込みデータ・アクションは、必要な数だけ追加できます。

「イベントの公開」を使用すると、外部アプリケーションはビジュアライゼーション・コンテキストと呼ばれる選択したビジュアライゼーション内のデータ要素値のセットを取得できます。選択したビジュアライゼーション内のデータ要素値のセットは、メジャー列や非表示列であってはなりません。

イベント名は外部コンテナで指定され、コンテキスト・イベントの公開時に渡されます。コンテキストは、ビジュアライゼーションの選択された場所におけるデータ要素値のセットです。複数のワークブック間、または 1 つのワークブック内の複数のデータ要素間でデータ・アクションが使用される場合は、トラッキングしやすいように一意のイベント名を指定できます。たとえば、アクション名として DV Embedded Content DA1 と入力した場合、「**イベント名**」フィールドに Event from DA1 と入力すると、イベントが由来するデータ・アクションを示すことができます。

「**値を渡す**」を入力する際は、次のことに注意してください:

- 「**すべて**」を使用して、クリックしたセルの交差(たとえば「製品と年」)を動的に判断し、それらの値をターゲットに渡します。
- 「**アンカー・データ**」を使用して、「**アンカー先**」フィールドに指定された必須列がビュー・コンテキストで使用可能な場合にのみ、実行時にデータ・アクションが表示されるようにします。
- 「**なし**」を使用して、ページ(URL またはキャンバス)を開きますが、いずれのデータも渡しません。たとえば、コンテキストを渡さずに www.oracle.com にナビゲートできます。
- 「**カスタム**」を指定して、カスタム・セットの列を渡すように指定できます。

「**複数の選択をサポート**」を選択する際は、次のことに注意してください:

- **オン** - 1 つ以上のデータ・ポイントが選択されている場合に、データ・アクションが呼び出されます。
- **オフ** - 単一のデータ・ポイントが選択されている場合に、データ・アクションが呼び出されます。
この設定は、複数のデータ・ポイントを選択するとエラーになる可能性がある場合に特に有用です(たとえば、一部のサードパーティの REST API の場合)。

ワークブックを保存した後に、ワークブックを外部コンテナに埋め込むことができます。外部コンテナに埋込みビジュアライゼーションが表示されます。ビジュアライゼーションを右クリックして適用可能なデータ・アクションが含まれる場合は、データ・アクションがビジュアライゼーションのドロップダウン・メニューに表示されます。埋込みデータ・アクションをクリックすると、ビジュアライゼーションのコンテキスト情報が判別され、その情報がナビゲーション・アクション・サービスに渡されて処理されます。ナビゲーション・サービスでは、コンテキスト・ペイロード情報を使用

してイベントを発生させます。このイベントをサブスクライブしてイベント・コールバックでペイロードを受け取り、ペイロードを他の領域で使用できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックしてから「**開く**」を選択します。
2. ワークブックで、「**メニュー**」をクリックし、「**データ・アクション**」を選択します。
3. 「**アクションの追加**」をクリックします。「新規データ・アクション」で、「**名前**」に移動して名前を入力します。
4. 「**タイプ**」をクリックし、「**イベントの公開**」を選択します。
5. 「**アンカー先**」フィールドで「**データの追加**」または「**データの選択**」をクリックし、データ・アクションの適用時に値を渡すデータ要素を 1 つ以上選択します。
6. 「**イベント名**」を入力します。
7. 「**値を渡す**」フィールドをクリックして、データ・アクションがコンシューマに渡す値を選択します。
8. 「**複数の選択をサポート**」をクリックして値を設定します。
9. 「**OK**」をクリックして保存します。

埋込みコンテンツを含むデータ・アクションの実行

ここに示された情報に従って、HTML ページやアプリケーション Web ページなどの外部コンテナ内のビジュアライゼーションにデータ・アクションを埋め込んで実行する方法を学習します。

ノート:

この項の例は、埋込みアプリケーションで Oracle JET テクノロジを使用しない場合に埋込みデータ・アクションに適用されます。関連項目:

- [Oracle JET を使用しないカスタム・アプリケーションへの埋込み](#)
- [外部コンテナに埋め込まれたビジュアライゼーションのデータ・アクションの作成](#)

データ・アクションの実行

イベントを公開するデータ・アクションをクリックすると、ビジュアライゼーションのコンテキスト情報が判別され、その情報がナビゲーション・アクション・サービスに渡されて処理されます。ナビゲーション・アクションのサービス・プロセスでは、コンテキスト・ペイロード情報を使用して `oracle.bitech.dataaction` というイベントを発生させます。このイベントをサブスクライブしてイベントのコールバックでペイロードを受け取り、必要に応じてペイロードをさらに利用できます。

次のビジュアライゼーションには、組織(Franchises Org、Inbound Org、International Org など)の部門(Communication、Digital、Electronics など)ごとに収益(ドル)が表示されています。

	Franchises Org. 1- Revenue	Inbound Org. 1- Revenue	International Org. 1- Revenue	Production Org. 1- Revenue	Subcontracted Org. 1- Revenue	Subsidiaries Org. 1- Revenue
Communication	1,945,442.17	3,205,196.75	2,072,118.69	1,970,055.76	1,311,952.23	2,596,174.23
Digital	1,057,904.94	1,458,738.42	915,528.97	1,140,216.00	721,805.34	1,319,910.88
Electronics	1,948,769.52	2,849,051.48	1,772,490.57	2,027,938.13	1,298,795.50	2,502,014.97
Games	2,459,631.95	3,697,414.06	2,318,144.51	2,595,862.48	1,651,129.01	3,163,713.44
Services	1,232,145.16	2,104,468.29	1,289,809.63	1,222,054.29	829,583.58	1,650,876.93
TV	2,054,249.30	3,296,097.36	2,091,426.20	2,103,728.80	1,408,666.46	2,716,894.00

イベントおよびペイロードの書式とコンテキスト

次の例では、1 つ以上のデータ・セルを右クリックし、それによって表示された埋込みワークブックのメニューからデータ・アクションを選択することで埋込みデータ・アクションが起動される際のイベントの公開を示しています。

次の例は、JSON ファイルからのものです(例: obitech-cca/cca/component.json)。

イベント書式

```
"events": {
  "oracle.bitech.dataaction": {
    "description": "Generic DV Event published from an embedded data
visualization.",
    "bubbles": true,
    "cancelable": false,
    "detail": {
      "eventName": {
        "description": "The name of the published BI Event",
        "type": "string"
      },
    },
    "payload": {
      "description": "The payload contains context and related
information to the event published",
      "type": "object"
    }
  }
}
```

ペイロード書式

```
{"context": [
  "or": [
    "and": [
      {"contextParamValues": [...],
        "contextParamValuesKeys": [...],
        "colFormula": "...",
        "displayName": "...",
        "isDoubleColumn": true/false,
        "dataType": "..."}
    ]
  ]
}
```



```

]
}

```

コンテキストで渡すでの単一行に対する単一値の引渡し

この例では、列セルをクリックすると、その列についてコンテキスト情報を保持するオブジェクトが外部コンテナに渡されます。ここでは組織名が渡されます。

```

{
  "context": [
    {
      "contextParamValues": [
        "Inbound Org."
      ],
      "contextParamValuesKeys": [
        "Inbound Org."
      ],
      "colFormula": "\"A - Sample Sales\".\"Offices\".\"D3 Organization\"",
      "displayName": "D3 Organization",
      "isDoubleColumn": false,
      "dataType": "varchar"
    }
  ]
}

```

コンテキストで渡すでの各列に対する単一値の引渡し

この例では、列セル(例: Inbound Org の Digital 製品)をクリックし、埋込み DA1 メニュー・オプションをクリックして埋込みアクションを選択したときに渡されるのは、選択した部門と組織に対応する収益値(ドル)です。たとえば、Inbound Org から Digital 製品の収益が渡され、この例では\$1,458,738.42 です。

	Franchises Org. 1- Revenue	Inbound Org. 1- Revenue	International Org. 1- Revenue	Production Org. 1- Revenue	Subcontracted Org. 1- Revenue	Subsidiaries Org. 1- Revenue
Communication	1,945,442.17	3,205,196.75	2,072,118.69	1,970,055.76	1,311,952.23	2,596,174.23
Digital	1,057,904.94	1,458,738.42	915,528.97	1,140,216.00	721,805.34	1,319,910.88
Electronics	1,948,769.52	2,849,051.48	Embedded DA1		1,298,795.50	2,502,014.97
Games	2,459,631.95	3,697,414.06	Drill to P2 Product Type, D2 Department		1,651,129.01	3,163,713.44
Services	1,232,145.16	2,104,468.29	Drill ...		829,583.58	1,650,876.93
TV	2,054,249.30	3,296,097.36	Keep Selected		1,408,666.46	2,716,894.00
			Remove Selected			
			Use as Filter			
			Hide Value Labels			

```

{
  "context": [
    {
      "contextParamValues": [
        "Digital"
      ],

```

```

    "contextParamValuesKeys": [
      "Digital"
    ],
    "colFormula": "\"A - Sample Sales\".\"Products\".\"P3 LOB\"",
    "displayName": "P3 LOB",
    "isDoubleColumn": false,
    "dataType": "varchar"
  },
  {
    "contextParamValues": [
      "Inbound Org."
    ],
    "contextParamValuesKeys": [
      "Inbound Org."
    ],
    "colFormula": "\"A - Sample Sales\".\"Offices\".\"D3
Organization\"",
    "displayName": "D3 Organization",
    "isDoubleColumn": false,
    "dataType": "varchar"
  }
]
}

```

コンテキストで渡すでの複数値の引渡し

この例では、2つの行セル(例: Digital 製品に対する Inbound Org と International Org)をクリックし、埋込み DA1 メニュー・オプションをクリックして埋込みアクションを選択すると、組織と部門に対して選択された2つのセルの収益値(ドル)が渡されます。たとえば、選択した2つの組織(Inbound Org と International Org)から Digital 製品の収益をクリックすると、\$1,458,738.42 および\$915,528.97 の値が渡されます。

	Franchises Org. 1- Revenue	Inbound Org. 1- Revenue	International Org. 1- Revenue	Production Org. 1- Revenue	Subcontracted Org. 1- Revenue	Subsidiaries Org. 1- Revenue
Communication	1,945,442.17	3,205,196.75	2,072,118.69	1,970,055.76	1,311,952.23	2,596,174.23
Digital	1,057,904.94	1,458,738.42	915,528.97	1,140,216.00	721,805.34	1,319,910.88
Electronics	1,948,769.52	2,849,051.48	1,772,490.57	Embedded DA1		2,502,014.97
Games	2,459,631.95	3,697,414.06	2,318,144.51	Drill to P2 Product Type, D2 Department		3,163,713.44
Services	1,232,145.16	2,104,468.29	1,289,809.63	Drill ...		1,650,876.93
TV	2,054,249.30	3,296,097.36	2,091,426.20	Keep Selected		2,716,894.00
				Remove Selected		
				Use as Filter		
				Hide Value Labels		

```

{
  "context": [
    {
      "or": [
        {
          "and": [
            {
              "contextParamValues": [

```



```

        "Digital"
    ],
    "contextParamValuesKeys": [
        "Digital"
    ],
    "colFormula": "\"A - Sample Sales\".\"Products\".\"P3
LOB\"",
    "displayName": "P3 LOB",
    "isDoubleColumn": false,
    "dataType": "varchar"
},
{
    "contextParamValues": [
        "Inbound Org."
    ],
    "contextParamValuesKeys": [
        "Inbound Org."
    ],
    "colFormula": "\"A - Sample Sales\".\"Offices\".\"D3
Organization\"",
    "displayName": "D3 Organization",
    "isDoubleColumn": false,
    "dataType": "varchar"
}
]
},
{
    "and": [
        {
            "contextParamValues": [
                "Digital"
            ],
            "contextParamValuesKeys": [
                "Digital"
            ],
            "colFormula": "\"A - Sample Sales\".\"Products\".\"P3
LOB\"",
            "displayName": "P3 LOB",
            "isDoubleColumn": false,
            "dataType": "varchar"
        },
        {
            "contextParamValues": [
                "International Org."
            ],
            "contextParamValuesKeys": [
                "International Org."
            ],
            "colFormula": "\"A - Sample Sales\".\"Offices\".\"D3
Organization\"",
            "displayName": "D3 Organization",
            "isDoubleColumn": false,
            "dataType": "varchar"
        }
    ]
}
]

```

```

    }
  ]
}
]
}

```

これらのステップを使用して、次に示すサンプル HTML ページを構成します。

1. ワークブックのパスの位置を追加または変更します。
次の<===== 1 を参照してください。
2. `oracle.bitech.dataaction` という公開イベントをサブスクリブします。
次の<===== 2 を参照してください。
3. イベント・リスナーおよびイベント・コールバックを定義します。
次の<===== 3 を参照してください。

イベントを受け取るビジュアライゼーションのある HTML ページの例

次の HTML ページには、ビジュアライゼーションが埋め込まれており、イベントを受け取ることができます。HTML ページは、イベント `oracle.bitech.dataaction` をリスニングするように構成されています。

```

<!DOCTYPE HTML PUBLIC "-//IETF//DTD HTML//EN"><html>
  <head>
    <meta http-equiv="X-UA-Compatible" content="IE=edge"/>
    <title>Standalone DV CCA Demo</title>
    <script src="http://hostname:port/bali/ui/api/v1/plugins/
embedding/standalone/embedding.js" type="text/javascript"></script>
  </head>
  <body>
    <h1>Standalone DV CCA Embedded Data Action Demo</h1>
    <div id="mydiv" style="position: absolute; width: calc(100% -
40px); height: calc(100% - 120px)" >
      <oracle-dv project-path="/shared/RR/sample"></oracle-
dv>
      <===== 1
    </div>
    <script>
      requirejs(['knockout', 'ojs/ojcore', 'ojs/ojknockout', 'ojs/
ojcomposite', 'jet-composites/oracle-dv/loader'], function(ko) {
        ko.applyBindings();
      });
    </script>
    <script>
      var eventName = 'oracle.bitech.dataaction'; <===== 2
      var element = document.getElementById("mydiv");
      if (element) {
        var oEventListener = element.addEventListener(eventName,
function (e) { <===== 3
          console.log("***** Payload from DV ***** ");
          console.log("eventName = " + e.detail.eventName);
          console.log("payload = " + JSON.stringify(e.detail.payload));
          console.log("***** Payload from DV end ***** ");

```


```
        }, true);  
    }  
</script>  
</body>  
</html>
```

11

カスタム・データ・アクション・プラグインの作成

Oracle Analytics で使用するカスタム・データ・アクション・プラグインを作成できます。

データ・アクション・プラグインは、Oracle Analytics を拡張し、ユーザーがビジュアライゼーションでデータ・ポイントを選択し特定のアクションを起動できるようにします。Oracle Analytics には、多くの一般的なユースケースをカバーするデータ・アクションのコア・セットが用意されていますが、独自のデータ・アクション・プラグインを記述することで、この機能をさらに拡張できます。

チュートリアルでは、例を使用してカスタム・データ・アクション・プラグインの作成方法を理解できます。  [チュートリアル](#)

カスタム・データ・アクション・プラグインを作成するには、次の要素に関する基本的な理解が必要です:

- JavaScript
- RequireJS
- JQuery
- KnockoutJS

トピック:

- [データ・アクション・プラグインおよびデータ・アクション・フレームワークについて](#)
- [拡張するために最適なデータ・アクション・クラスの選択](#)
- [テンプレートからのデータ・アクション・プラグインの生成](#)
- [生成されたフォルダとファイル](#)
- [データ・アクション・ベース・クラスの拡張](#)
- [オーバーライドするデータ・アクションの継承メソッドの選択](#)
- [データ・アクションのテスト、パッケージ化およびインストール](#)
- [Knockout モデル変更のためのアップグレード・ハンドラの使用](#)
- [データ・アクション・プラグインのアップグレード](#)
- [データ・アクション・プラグイン・ファイルのリファレンス](#)

データ・アクション・プラグインおよびデータ・アクション・フレームワークについて

データ・アクション・プラグインは、データ・アクション・フレームワークを活用して、Oracle Analytics ユーザー・インタフェースに緊密に統合されているカスタムのデータ駆動型アクションを提供します。

ユーザーがデータ・アクションを起動すると、データ・アクション・マネージャは、リクエストの処理を担当するデータ・アクション・プラグインにリクエスト・コンテキスト(修飾データ参照、メジャー値、フィルタ、メタデータなど)を渡します。Oracle では、CanvasDataAction、URLNavigationDataAction、HTTPAPIDataAction および EventDataAction という 4 つのタイプのデータ・アクション・プラグインが提供されます。これらのデータ・アクション・プラグイン・タイプとその抽象ベース・クラスを拡張して、独自のデータ・アクションを提供できます。

トピック:

- [データ・アクション・カテゴリ](#)
- [データ・アクション・コンテキスト](#)
- [データ・アクション・コード設計](#)
- [データ・アクション・モデル・クラス](#)
- [データ・アクション・サービス・クラス](#)
- [データ・アクション・コード相互作用](#)
- [データ・アクション plugin.xml ファイルの例](#)
- [データ・アクション・プラグインのファイルとフォルダ](#)

データ・アクション・カテゴリ

データ・アクション・カテゴリには、URL へのナビゲート、HTTP API、キャンバスへのナビゲート、およびイベント・アクションが含まれます:

- **URL へのナビゲート:** 指定された URL を新しいブラウザ・タブで開きます。
- **HTTP API:** GET/POST/PUT/DELETE/TRACE コマンドを使用して HTTP API をターゲット指定し、結果を新しいタブで開きません。かわりに、HTTP ステータス・コードが調査され、一時的な成功または失敗メッセージが表示されます。
- **キャンバスへのナビゲート:** 同じかまたは異なるビジュアライゼーションでユーザーがソース・キャンバスからターゲット・キャンバスにナビゲートできるようにします。ソース・キャンバス内で有効なフィルタは、すべて外部フィルタとしてターゲット・キャンバスに渡されます。ターゲット・キャンバスが開かれると、ビジュアライゼーションへの外部フィルタの適用が試行されます。外部フィルタが適用されるメカニズムは、ここでは説明しません。
- **イベント・アクション:** Oracle Analytics イベント・ルーターを使用してイベントを公開します。どの JavaScript コード(サード・パーティ・プラグインなど)でもこれらのイベントにサブスクライブでき、その結果に基づいてカスタム・レスポンスを処理できます。プラグイン開発者はデータ・アクションの応答方法を選択できるため、柔軟性が最大限に高まります。たとえば、ユーザー・インタフェースを表示することも、一度に複数のサービスにデータを渡すこともできます。

URL へのナビゲートと HTTP API のデータ・アクション・カテゴリ・タイプは、両方ともトークン構文を使用して、ビジュアライゼーションから URL および POST パラメータにデータまたはメタデータを挿入できます。

URL トークンの置換

HTTP データ・アクションでは、URL 内のトークンを、データ・アクションに渡されるコンテキストに基づいた値に置換できます。たとえば、修飾データ参照値、フィルタ値、ユーザー名、ワークブック・パスおよびキャンバス名が対象になります。

トークン	ノート	置換後の値	例	結果
\$ {valuesForColumn: COLUMN}	NA	修飾データ参照に基づいた列の表示値。	\$ {valuesForColumn: : "Sales"."Products"."Brand"}	BizTech, FunPod
\$ {valuesForColumn: COLUMN, separator:"/"}	複数の値に置換される可能性のあるトークンでは、任意のセレータ・オプションがサポートされます。separator は、カンマ(,)がデフォルトですが、任意の文字列に設定できます。この文字列内で二重引用符をエスケープするには、バックスラッシュ(\)を使用します。	修飾データ参照に基づいた列の表示値。	\$ {valuesForColumn: : "Sales"."Products"."Brand"}	BizTech, FunPod
\$ {valuesForColumn: COLUMN, separationStyle: individual}	separationStyle は、delimited がデフォルトですが、値ごとに個別の URL パラメータを生成する必要がある場合は individual に設定できます。	修飾データ参照に基づいた列の表示値。	&myParam=\$ {valuesForColumn: : "Sales"."Products"."Brand"}	&myParam=BizTech &myParam=FunPod
\$ {keyValuesForColumn: COLUMN}	NA	修飾データ参照に基づいた列のキー値。	\$ {keyValuesForColumn: COLUMN}	10001,10002
\${env:ENV_VAR}	サポートされる環境変数は、sProjectPath、sProjectName、sCanvasName、sUserID および sUserName です。	環境変数。	\${env:'sUserID'}	myUserName

データ・アクション・コンテキスト

ユーザーがデータ・アクションを起動したときに渡されるコンテキストを定義できます。

データ・アクションの作成時に、そのデータ・アクションに渡されるコンテキストの分量を定義します。

修飾データ参照

データ・アクションが起動されると、LogicalFilterTree オブジェクトの配列を使用して、マークされたデータ・ポイントごとに修飾データ参照が生成されます。LogicalFilterTree

は、ツリー構造に編成された複数の `LogicalFilterNode` オブジェクトで構成されます。このオブジェクトには次のものが含まれます:

- データ・レイアウトの行エッジまたは列エッジの属性。
- マークされた各セルに対応するメジャー・エッジの特定のメジャー。
- マークされた各セルの特定のメジャー値。
- キー値と表示値。

環境変数

一部のデータ・アクションでは、マークされた各データ・ポイントを説明するデータおよびメタデータに加え、データ・アクションが起動される環境を説明するより詳細なコンテキストが必要になることがあります。このような環境変数には次のものが含まれます:

- プロジェクト・パス
- プロジェクト名
- キャンバス名
- ユーザー ID
- ユーザー名

データ・アクション・コード設計

API クラスを使用してデータ・アクションを作成します。

- `AbstractDataAction` クラスから継承されるデータ・アクションの 4 つの具象クラスは次のとおりです:
 - `CanvasDataAction`
 - `URLNavigationDataAction`
 - `HTTPAPIDataAction`
 - `EventDataAction`
- データ・アクション・プラグイン API を使用して、新しいタイプのデータ・アクションを作成できます。
- データ・アクション・タイプの登録は、`DataActionPluginHandler` によって管理されます。
- データ・アクションのインスタンスの作成、読取り、編集、削除または起動を行うコードは、イベントを公開することでそれらを行います。
- イベントは、`DataActionManager` によって処理されます。

データ・アクション・モデル・クラス

データ・アクション・モデル・クラスにはいくつかの異なるタイプがあります。

`AbstractDataAction`

このクラスの役割は次のとおりです:

- **Knockout** モデルの格納(サブクラスは独自のプロパティでこれを自由に拡張できます)。
- サブクラスが実装する必要がある抽象メソッドの定義:
 - + invoke(oActionContext: ActionContext, oDataActionContext: DataActionContext) <<abstract>>
渡されたコンテキストでデータ・アクションを起動します(コール元は常に DataActionManager である必要があります)。
 - + getGadgetInfos(oReport): AbstractGadgetInfo[] <<abstract>>
このタイプのデータ・アクションを編集するためのユーザー・インタフェース・フィールドをレンダリングする役割を持つ GadgetInfos を構築して返します。
 - + validate(): DataActionError
データ・アクションを検証して、有効な場合は null を、無効な場合は DataActionError を返します。
- データ・アクションのユーザー・インタフェース・フィールドの一般的な部分をレンダリングするために使用される次のメソッドのデフォルト実装を提供:
 - + getSettings(): JSON
レポートに含める準備のためにデータ・アクションの Knockout モデルを JSON にシリアライズします(komapping.toJS(_koModel))を使用します)。
 - + createNameGadgetInfo(oReport): AbstractGadgetInfo
データ・アクションの「名前」フィールドをレンダリングできる GadgetInfo を構築して返します。
 - + createAnchorToGadgetInfo(oReport): AbstractGadgetInfo
データ・アクションの「アンカー先」フィールドをレンダリングできる GadgetInfo を構築して返します。
 - + createPassValuesGadgetInfo(oReport): AbstractGadgetInfo
データ・アクションの「値を渡す」フィールドをレンダリングできる GadgetInfo を構築して返します。

サブクラスでは、ベース・クラスによって提供されるすべての GadgetInfo が必要とされるわけではないため、状況によってはこれらすべてのメソッドをコールする必要はありません。この方法で各フィールドのレンダリングを抽出することで、サブクラスは必要なガジェットを自由に選択できます。一部のサブクラスでは、これらの一般的なデータ・アクション・ガジェットの異なる実装を提供することも可能です。

CanvasDataAction、URLNavigationDataAction、HTTPAPIDataAction、EventDataAction

これらは、データ・アクションの基本タイプの具象クラスです。これらのクラスは、独自に動作して、これらのタイプのデータ・アクションに対して一般的なユーザー・インタフェースを提供します。また、カスタム・データ・アクション・プラグインで拡張できる有益なベース・クラスとしても動作します。

- **CanvasDataAction:** キャンバスにナビゲートするために使用します。
- **URLNavigationDataAction:** 新しいブラウザ・ウィンドウで Web ページを開くために使用します。
- **HTTPAPIDataAction:** HTTP API に対する GET/POST/PUT/DELETE/TRACE リクエストを作成して HTTP Response をプログラムで処理するために使用します。
- **EventDataAction:** イベント・ルーターを通じて JavaScript イベントを公開するために使用します。

各クラスの役割は次のとおりです:

- ベース・クラスからの抽象メソッドの実装。
 - `invoke(oActionContext: ActionContext, oDataActionContext: DataActionContext)`
このメソッドは、**KOModel** で定義されたプロパティと指定された `DataActionContext` オブジェクトを結合してデータ・アクションを起動します。
 - `getGadgetInfos(oReport): AbstractGadgetInfo[]`
このメソッドでは次が行われます:
 - * `AbstractGadgetInfos` を格納した配列を作成します。
 - * 各 `AbstractGadgetInfo` を配列に配置する個々の `createXXXGadgetInfo()` メソッドをコールします。
 - * 配列を返します。
- データ・アクションの特定のサブクラスに固有の個々のガジェットを作成するための追加メソッドを提供。

これらの具象クラスのサブクラスでは、カスタム・ユーザー・インタフェースのスーパークラスによって提供されるすべてのガジェットを使用する必要はありません。この方法で各ガジェットの構築を抽出することで、サブクラスは必要なガジェットを自由に選択できます。

DataActionKOModel、ValuePassingMode

`DataActionKOModel` クラスは、`AbstractDataAction` の異なるサブクラスによって共有されるベース `KOModel` を提供します。[DataActionKOModel クラス](#) を参照してください。

データ・アクション・サービス・クラス

いくつかの異なるデータ・アクション・サービス・クラスがあります。

DataActionManager



`DataActionManager` とのすべてのやり取りでは、次の操作のイベント・ハンドラを実装している `ClientEvents.DataActionManager` を使用します:

- 現在のワークブックに定義されたデータ・アクション・セットの管理。
- データ・アクションの起動。
- 現在のワークブックに定義されたすべてのデータ・アクションの取得。
- マークされた現在のデータ・ポイントに適用できるすべてのデータ・アクションの取得。

DataActionContext、EnvironmentContext

データ・アクションが起動されると、ターゲットに渡されるコンテキストが DataActionContext クラスに格納されます。

- getColumnValueMap()

属性列名でキー設定された属性列値のマップを返します。これらは、データ・アクションの起動元となるデータ・ポイントの修飾データ参照を定義します。
- getLogicalFilterTrees()

データ・アクションの起動元となる特定のデータ・ポイントの修飾データ参照を記述した LogicalFilterTrees オブジェクトを返します(詳細は InteractionService を参照してください)。
- getEnvironmentContext()

ソース環境を記述した次のような EnvironmentContext クラスのインスタンス:

 - getProjectPath()
 - getCanvasName()
 - getUserID()
 - getUserName()
- getReport()

データ・アクションの起動元のレポートを返します。

DataActionHandler

DataActionHandler クラスは、様々なデータ・アクション・プラグインを登録します。その API は、他のプラグイン・ハンドラ(VisualizationHandler など)と広範囲にわたり整合性があります。

DataActionHandler クラスは、次のパブリック・メソッドを提供しています:

- getClassname(sPluginType:String) : String

指定されたデータ・アクション・タイプの完全修飾クラス名を返します。
- getDisplayName(sPluginType:String) : String

指定されたデータ・アクション・タイプの翻訳された表示名を返します。
- getOrder(sPluginType:String) : Number

データ・アクション・タイプのリストを優先順序にソートするために使用される数値を返します。

DataActionHandler クラスは、次の静的メソッドを提供しています:

- getDependencies(oPluginRegistry:Object) : Object.<String, Array>

登録されたすべてのデータ・アクション・タイプをカバーする依存性マップを返します。
- getHandler(oPluginRegistry:Object, sExtensionPointName:String, oConfig:Object) : DataActionPluginHandler

DataActionHandler クラスの新規インスタンスを構築して返します。

DataActionUpgradeHandler

DataActionUpgradeHandler クラスは、レポートが開かれたときに UpgradeService によってコールされます。

DataActionHandler クラスは、次の 2 つのメイン・メソッドを提供しています:

- deferredNeedsUpgrade(sCurrentVersion, sUpgradeTopic, oDataActionJS, oActionContext) : Promise
 指定されたデータ・アクションをアップグレードするか(true)、アップグレードしないか(false)を示すブールに解決される Promise を返します。このメソッドは、データ・アクション・インスタンスを、データ・アクションのコンストラクタと比較して、データ・アクションをアップグレードする必要があるかどうかを決定します。
- performUpgrade(sCurrentVersion, sUpgradeTopic, oDataActionJS, oActionContext, oUpgradeContext) : Promise
 指定されたデータ・アクションでアップグレードを実行し、Promise を解決します。アップグレード自体は、データ・アクションの upgrade() メソッドをコールすることで実行されます(アップグレード自体の要件を満たすのは、アップグレードされるデータ・アクションの特定のサブクラスのみです)。
- getOrder(sPluginType:String) : Number
 データ・アクション・タイプのリストを優先順序にソートするために使用される数値を返します。

データ・アクション・コード相互作用

データ・アクションは、ユーザー・インタフェース・フィールドを作成するとき、およびユーザーがデータ・アクションを起動するときに、Oracle Analytics コードと相互作用します。

新しいデータ・アクション・インスタンス用のフィールドの作成

この相互作用は、Oracle Analytics がデータ・アクションのユーザー・インタフェース・フィールドをレンダリングするときに開始します。そのために、次を行います:

1. データ・アクションから返される GadgetInfos の親の GadgetInfo として動作する PanelGadgetInfo を作成します。
2. データ・アクションの getGadgetInfos() をコールします。
3. 最初のステップで作成した PanelGadgetInfo の子としてデータ・アクションの GadgetInfos を追加します。
4. PanelGadgetInfo をレンダリングする PanelGadgetView を作成します。
5. PanelGadgetView のコンテナである HTMLElement を設定します。
6. HostedComponent ツリーにすでに接続されている HostedComponent の子の HostedComponent として PanelGadgetView を登録します。
 これにより、getGadgetInfos() から返される配列の表示順序でパネル・ガジェット内にデータ・アクションのガジェットがレンダリングされます。

データ・アクションの起動

ユーザーが、Oracle Analytics ユーザー・インタフェースを通じて(たとえば、ビジュアライゼーションのデータ・ポイント上のコンテキスト・メニューから)データ・アクションを起動すると、この相互作用が開始します。

ユーザー相互作用に応答して、コードにより次の操作が行われます:

1. データ・アクションの ID、データ・アクションの起動元である DataVisualization、および TransientVizContext オブジェクトが含まれる INVOKE_DATA_ACTION イベントを公開します。
2. DataActionManager は、次の操作によってこのイベントを処理します:
 - a. データ・アクション・インスタンスをその ID から取得します。
 - b. 指定された DataVisualization でマークされたデータ・ポイントの LogicalFilterTrees を取得します。
 - c. データ・アクションのターゲットに渡されるすべての情報が含まれた DataActionContext を構築します。
 - d. データ・アクションの invoke(oDataActionContext) をコールします。

データ・アクション plugin.xml ファイルの例

このトピックでは、CanvasDataAction データ・アクションの plugin.xml ファイルの例を示します。

plugin.xml の例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<tns:obiplugin xmlns:tns="http://plugin.frameworks.tech.bi.oracle"
  xmlns:viz="http://plugin.frameworks.tech.bi.oracle/extension-
points/visualization"
  xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
  id="obitech-currencyconversion"
  name="Oracle BI Currency Conversion"
  version="0.1.0.@qualifier@"
  optimizable="true"
  optimized="false">

  <tns:resources>
    <tns:resource id="currencyconversion" path="scripts/
currencyconversion.js" type="script" optimizedGroup="base"/>
    <tns:resource-folder id="nls" path="resources/nls" optimizable="true">
      <tns:extensions>
        <tns:extension name="js" resource-type="script"/>
      </tns:extensions>
    </tns:resource-folder>
  </tns:resources>

  <tns:extensions>
    <tns:extension id="oracle.bi.tech.currencyconversiondataaction" point-
id="oracle.bi.tech.plugin.dataaction" version="1.0.0">
      <tns:configuration>
        {
          "resourceBundle": "obitech-currencyconversion/nls/messages",
          "properties":
            {
              "className": "obitech-currencyconversion/
currencyconversion.CurrencyConversionDataAction",
```

```

        "displayName": { "key" : "CURRENCY_CONVERSION",
"default" : "Currency Conversion" },
        "order": 100
    }
}
</tns:configuration>
</tns:extension>
</tns:extensions>

</tns:obiplugin>

```

データ・アクション・プラグインのファイルとフォルダ

データ・アクション・プラグインの実装には次のファイルとフォルダが使用されます。

bitech/client/plugins/src/

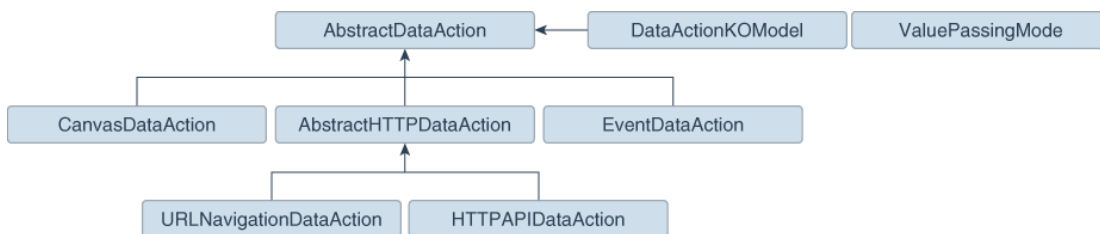
- report
 - obitech-report
 - * scripts
 - * dataaction
 - * dataaction.js
 - * dataactiongadgets.js
 - * dataactionpanel.js
 - * dataactionupgraderhandler.js
- obitech-reportservice
 - scripts
 - * dataaction
 - * dataactionmanager.js
 - * dataactionhandler.js

拡張するために最適なデータ・アクション・クラスの選択

カスタム・データ・アクション・プラグインの記述を開始する前に、拡張する既存のデータ・アクション・クラスを決定します。データ・アクションで実行しようとする操作に最も近い機能を提供するデータ・アクション・クラスを選択してください。

各データ・アクションは、クラス図に示すように、AbstractDataAction クラスから継承されます。このクラス図は、拡張可能な 2 つの抽象データ・アクション・クラス (AbstractDataAction と AbstractHTTPDataAction) および 4 つの具象データ・アクション・クラス (CanvasDataAction、URLNavigationDataAction、HTTPAPIDataAction および EventDataAction) を示しています。提供する各データ・アクションは、これらのクラスのいずれかを拡張する必要があります。どのクラスを拡張するかは、データ・アクションの起動時に実装する動作によります。ほとんどのサード・パーティ・データ・

アクションは、URLNavigationDataAction、HTTPAPIDataAction または EventDataAction のいずれかを拡張することになります。



拡張するクラスとは関係なく、データ・アクションを起動すると、データ・アクションの起動元であるデータ・ポイントの完全なコンテキストを説明したメタデータが提供されます。[データ・アクション・コンテキスト](#)を参照してください。

AbstractDataAction クラス

AbstractDataAction は、すべてのタイプのデータ・アクションの継承元となる抽象ベース・クラスです。これは、サブクラスで使用できる共通機能およびデフォルト動作を提供する役割を果たします。

AbstractDataAction

すべてのタイプのデータ・アクションは、AbstractDataAction ベース・クラスのサブクラスです。これは、すべてのデータ・アクションに共通する機能のコア・セットを提供します。起動時に複数のタイプのアクションを実行する複雑なデータ・アクションを作成する場合や具象クラスでサポートされない操作を実行する場合を除き、このクラスを直接拡張しないでください。複雑なデータ・アクションを作成する必要がある場合は、必要な機能に最も近い機能を提供する具象クラスを拡張することを検討してください。

AbstractDataAction の構文

```
+ AbstractDataAction (oKOModel)

+ getKOViewModel():DataActionKOModel

+ createFromJS(fDataActionConstructor, sClassName,
oDataActionKOModelUS) : AbstractDataAction

+ invoke(oActionContext, oDataActionContext)
+ getGadgetInfos(oReport) : AbstractGadgetInfo[]
+ validate() : DataActionError

+ getSettings() : Object
+ requiresActionContextToInvoke() : Boolean
+ isAllowedHere() : Boolean

# createNameGadgetInfo(oReport) : AbstractGadgetInfo
# createAnchorToGadgetInfo(oReport) : AbstractGadgetInfo
# createPassValuesGadgetInfo(oReport) : AbstractGadgetInfo
```

DataActionKOModel クラス

AbstractDataAction の各サブクラスは、その独自のサブクラスである DataActionKOModel を作成することが多くあります。DataActionKOModel ベース・クラスには、次のプロパティがあります：

DataActionKOModel、ValuePassingMode

- sID:String
データ・アクション・インスタンスに割り当てられる一意の ID。
- sClass:String
この特定タイプのデータ・アクションのクラス名。
- sName:String
データ・アクション・インスタンスに割り当てられる表示名。
- sVersion
- sScopeID
- eValuePassingMode:ValuePassingMode
コンテキスト値を渡すときに使用されるモード。モードは、ValuePassingMode 値 (ALL、ANCHOR_DATA、NONE、CUSTOM)のいずれかです。
- aAnchorToColumns: ColumnKOViewModel[]
このデータ・アクションのアンカー先の列。これはオプションです。指定しない場合、データ・アクションはすべての列で使用できます。

- `aContextColumns` : `ColumnKOViewModel[]`
このデータ・アクションが、その起動時にデータ・アクション・ターゲットに渡されるコンテキストに含める列。指定しない場合、マークされたすべての列がコンテキストに含まれます。

CanvasDataAction クラス

`CanvasDataAction` は、`AbstractDataAction` ベース・クラスのサブクラスです。この具象クラスを拡張して、必要な機能を提供できます。

CanvasDataAction

`CanvasDataAction` クラスを使用して、ビジュアライゼーションのデータ・ポイントから別のキャンバスにナビゲートします。ナビゲート先のキャンバスは、同じワークブック内でも別のワークブック内でもかまいません。ソース・ビジュアライゼーションのすべてのアクティブ・フィルタは、データ・ポイント自体の修飾データ参照を説明する新しいフィルタとともにターゲット・キャンバスに渡されます。データ・アクションを別のキャンバスにナビゲートする必要がある場合、それはデータ・アクションで拡張する必要のあるクラスです。

```
+ CanvasDataAction(oKOModel)

+ create(s)ID_sName) : CanvasDataAction
+ upgrade(oOldDataActionJS) : Object

+ invoke(oActionContext: ActionContext, oDataActionContext:DataActionContext)
+ getGadgetInfos(oReport) : AbstractGadgetInfo[]
+ validate() : DataActionError

# createProjectGadgetInfo(oReport) : AbstractGadgetInfo
# createCanvasGadgetInfo(oReport) : AbstractGadgetInfo
```

EventDataAction クラス

`EventDataAction` は、`AbstractDataAction` ベース・クラスのサブクラスです。この具象クラスを拡張して、必要な機能を提供できます。

EventDataAction

`EventDataAction` クラスを使用してクライアント側イベントを公開します。その後、そのイベントをリスニングして独自のアクションを実行する 1 つ以上のサブスクリバを登録できます。このタイプのデータ・アクションは、大量のコードがあって、データ・アクションの

起動時に必要なアクションを実行するコードと疎結合されたデータ・アクション・コードを維持することでメリットを得ることのできる複雑なユースケースで使用してください。

```
+ EventDataAction (oKOModel)

+ create(sID_sName) : EventDataAction
+ upgrade(oOldDataActionJS) : Object

+ invoke(oActionContext: ActionContext,
oDataActionContext:DataActionContext)
+ getGadgetInfos(oReport) : AbstractGadgetInfo[]
+ validate() : DataActionError

# createEventGadgetInfo(oReport) : AbstractGadgetInfo
```

AbstractHTTPDataAction クラス

AbstractHTTPDataAction は、URLNavigationDataAction および HTTPAPIDataAction サブクラスが共通機能とデフォルト動作を継承する抽象ベース・クラスです。

AbstractHTTPDataAction

AbstractHTTPDataAction 抽象ベース・クラスは、URLNavigationDataAction クラスと HTTPAPIDataAction クラスの両方で共有されます。データ・アクションで **Web** ページを新しいブラウザ・タブで開く場合、URLNavigationDataAction を拡張する必要があります。データ・アクションで **HTTP API** を起動する場合、HTTPAPIDataAction を拡張する必要があります。状況によっては、AbstractHTTPDataAction を直接拡張することも可能です。

```
+ HTTPDataAction (oKOModel)

+ validate() : DataActionError

# createURLGadgetInfo(oReport) : AbstractGadgetInfo
```

URLNavigationDataAction クラス

URLNavigationDataAction は、AbstractHTTPDataAction ベース・クラスのサブクラスです。

URLNavigationDataAction

URLNavigationDataAction クラスを使用して、特定の **URL** を新しいブラウザ・タブで開きます。データ・アクションの起動時にユーザーが選択したデータ・ポイントから導出される値に置き換えられるトークンを使用して、**URL** を構成します。データ・ポ

イント値は、データ・アクション・コンテキストの一部として外部 Web ページに渡されます。たとえば、Oracle Sales Cloud などのカスタマ・リレーションシップ・マネジメント・アプリケーションで顧客の Web ページが表示されるように、CustomerID 列を使用して起動されるデータ・アクションを作成します。

```
+ URLNavigationDataAction(oKOModel)

+ create(sID_sName) : URLNavigationDataAction
+ upgrade(oOldDataActionJS) : Object

+ invoke(oActionContext: ActionContext, oDataActionContext:DataActionContext)
+ getGadgetInfos(oReport) : AbstractGadgetInfo[]
```

HTTPAPIDataAction クラス

HTTPAPIDataAction は、AbstractHTTPDataAction ベース・クラスのサブクラスです。この具象クラスを拡張して、必要な機能を提供できます。

HTTPAPIDataAction

HTTPAPIDataAction クラスを使用し、非同期 XMLHttpRequest (XHR)を作成してそれを指定した URL に送信することで、HTTP API を起動します。HTTP レスポンス・コードによって、キャンバスにメッセージが簡潔に表示されます。たとえば、JSON または XML ペイロードを REST または SOAP サーバーに送信するようにリクエストをカスタマイズしたり、カスタム・ユーザー・インタフェースを表示するようにレスポンス・ハンドラをカスタマイズできます。

HTTPAPIDataAction データ・アクションを動作させるには、アクセスする HTTP API の URL を「安全ドメイン」のリストに追加し、「**接続**」アクセス権を付与する必要があります。安全ドメインの登録を参照してください。

```
+ HTTPAPIDataAction(oKOModel)

+ create(sID_sName) : HTTPAPIDataAction
+ upgrade(oOldDataActionJS) : Object

+ invoke(oActionContext: ActionContext, oDataActionContext:DataActionContext)
+ getGadgetInfos(oReport) : AbstractGadgetInfo[]

# createHTTPMethodGadgetInfo(oReport) : AbstractGadgetInfo
# createPostParamGadgetInfo(oReport) : AbstractGadgetInfo
```

テンプレートからのデータ・アクション・プラグインの生成

一連のコマンドを使用して開発環境を生成し、カスタム・データ・アクション・プラグインを作成するために必要なフォルダとファイル付きで HTTP API データ・アクションを移入します。

プラグイン・ファイルはすべて、同じ基本構造に従います。ファイルとフォルダを手動で作成することも、それらをテンプレートから生成することもできます。これを行うためのツールは、Oracle Analytics Desktop Software Development Kit (SDK)に含まれており、Oracle Analytics Desktop に付属しています。

次のコマンドを使用して開発環境を生成し、それに HTTP API データ・アクションを移入します。

1. コマンド・プロンプトで、Oracle Analytics Desktop インストールのルート・フォルダを指定します:

```
set DVDESKTOP_SDK_HOME=C:\Program Files\Oracle Analytics Desktop
```
2. カスタム・プラグインを格納する場所を指定します:

```
set PLUGIN_DEV_DIR=C:\temp\dv-custom-plugins
```
3. 次を使用して SDK コマンドライン・ツールを追加します:

```
set PATH=%DVDESKTOP_SDK_HOME%\tools\bin;%PATH%
```
4. 次を使用してカスタム・プラグインの格納に使用するディレクトリのフォルダを作成します:

```
mkdir %PLUGIN_DEV_DIR%
```
5. ディレクトリを変更してカスタム・プラグインを格納するためのフォルダに移動します:

```
cd %PLUGIN_DEV_DIR%
```
6. 環境変数を作成します:

```
bicreateenv
```
7. 次のように、カスタム HTTP API データ・アクションの開発を開始するために必要なテンプレート・ファイルを作成します:

```
bicreateplugin -pluginxml dataaction -id company.mydataaction -subType httpapi
```

-subType オプションを使用して、作成元となるデータ・アクション・タイプ (httpapi、urlNavigation、canvasNavigation、event または advanced) を指定します。advanced オプションは、AbstractDataAction ベース・クラスからの拡張です。

生成されたフォルダとファイル

新しく生成されたデータ・アクション開発環境には、次のフォルダとファイルが含まれます:

```
1  %PLUGIN_DEV_DIR%\src\customdataaction
2      company-mydataaction\
3          extensions\
4              oracle.bi.tech.plugin.dataaction\
5                  company.mydataaction.json
6          nls\
7              root\
8                  messages.js
9                  messages.js
10             mydataaction.js
11             mydataactionstyles.css
12             plugin.xml
```

- **行 2:** company-mydataaction フォルダは、指定した ID です。
- **行 6:** nls フォルダには、プラグインでネイティブ言語サポートを提供できるようにする外部化文字列のファイルが含まれます。
- **行 7:** nls\root フォルダ以下のファイルの文字列は、リクエストされた言語の翻訳が使用できない場合に使用されるデフォルト文字列です。
- **行 8:** messages.js ファイルには、追加可能なプラグイン用の外部化文字列が含まれます。
- **行 9:** messages.js ファイルには、ローカライズされた文字列を提供する追加言語ごとに追加したエントリが含まれる必要があります。翻訳を追加する各ロケールの nls フォルダ以下に、対応するフォルダを追加する必要があります。各フォルダには、nls\root フォルダ以下に追加されたファイルと同じファイル名で、同じファイル・セットが含まれる必要があります。
- **行 10:** mydataaction.js ファイルは、カスタム・データ・アクションを開発するための開始ポイントを提供する、新しく生成された **JavaScript** モジュール・テンプレートです。
- **行 11:** mydataactionstyles.css ファイルには、追加する予定があり、データ・アクションのユーザー・インターフェースで使用できる任意の **CSS** スタイルを含めることができます。
- **行 12:** plugin.xml ファイルは、プラグインとそのファイルを **Oracle Analytics** に登録します。

データ・アクション・ベース・クラスの拡張

拡張するデータ・アクションのサブクラスを選択し、必要なフォルダとファイルを生成したら、新しいデータ・アクションに固有のコードの記述を開始できます。

新しく生成されたデータ・アクション・コードは、%PLUGIN_DEV_DIR%\src\dataaction 以下にあります。ファイルおよびフォルダ構造の説明は、[生成されたフォルダとファイル](#)を参照してください。編集する必要があるメイン・ファイルは、**JavaScript** ファイルです。たとえば、カスタム・データ・アクション ID が company.MyDataaction である場合、検索する

ファイルは%PLUGIN_DEV_DIR%\src\dataaction\company-mydataaction\mydataaction.js です。

データ・アクションの Knockout モデルの拡張

格納する必要のある追加プロパティがデータ・アクションに含まれる場合、それらを監視可能プロパティとして Knockout モデルに追加する必要があります。データ・アクションの ID が company.MyDataaction である場合、Knockout モデルは mydataaction.MyDataActionKOModel と呼ばれ、mydataaction.js の最上位付近にあります。デフォルトで、この Knockout モデルはデータ・アクションのスーパークラスで使用される Knockout モデルを拡張するように構成されるため、モデルに追加プロパティを追加するだけで済みます。

HTTPAPIDataAction ベース・クラスを拡張しているデータ・アクションでは、次のようなコードを使用します:

```
1 - mydataaction.MydataactionKOModel = function (sClass, sID, sName,
sVersion, sScopeID, aAnchorToColumns, eValuePassingMode, sURL,
    eHTTPMethod, sPOSTParams)
2 - {
3 - mydataaction.MydataactionKOModel.baseConstructor.call(this,
sClass, sID, sName, sVersion, sScopeID, aAnchorToColumns,
eValuePassingMode, sURL, eHTTPMethod, sPOSTParams);
4 - };
5 - jsx.extend(mydataaction.MydataactionKOModel,
dataaction.HTTPAPIDataActionKOModel);
```

- **行 1:** これは、Knockout モデルのコンストラクタです。モデルが格納する必要のあるプロパティを受け入れます。
- **行 3:** これは、スーパークラスのコンストラクタであり、Knockout モデルのスーパークラスのいずれかによって処理されるすべてのプロパティに対する値の受渡し先となる baseConstructor でもあります。
- **行 5:** これは、この Knockout モデル・クラスのスーパークラスを設定します。

次のようなコードを使用して文字列と配列を追加し、データ・アクションによって永続化されるプロパティを設定します。

```
1 mydataaction.MydataactionKOModel = function (sClass, sID, sName,
sVersion, sScopeID, aAnchorToColumns, eValuePassingMode, sURL,
eHTTPMethod, sPOSTParams)
2 {
3 mydataaction.MydataactionKOModel.baseConstructor.call(this,
sClass, sID, sName, sVersion, sScopeID, aAnchorToColumns,
eValuePassingMode, sURL, eHTTPMethod, sPOSTParams);
4
5
6 // Set Defaults
7 sMyString = sMyString || "My default string value";
8 aMyArray = aMyArray || [];
9
10
11 // Asserts
12 jsx.assertString(sMyString, "sMyString");
13 jsx.assertArray(aMyArray, "aMyArray");
```

```
14
15
16 // Add observable properties
17 this.sMyString = ko.observable(sMyString);
18 this.aMyArray = ko.observableArray(aMyArray);
19 };
20 jsx.extend(mydataaction.MydataactionKOModel,
dataaction.HTTPAPIDataActionKOModel);
```

オーバーライドするデータ・アクションの継承メソッドの選択

各データ・アクションは、適切に動作するために様々なメソッドを実装する必要があるため、変更して使用できる動作を実装しているメソッドをオーバーライドすることになります。

HTTPAPIDataAction などの具象データ・アクション・クラスのいずれかを拡張する場合、必要なメソッドのほとんどはすでに実装されており、変更して使用できる動作を実装しているメソッドをオーバーライドするだけで済みます。

汎用メソッド

この項では、様々なメソッドとその予期される動作について説明します。

すべてのタイプのデータ・アクションは、ここで説明されているメソッドを実装する必要があります。

create(sID, sName)

create() 静的メソッドは、新しいデータ・アクションを作成してドロップダウン・メニューから**データ・アクション・タイプ**を選択したときにコールされます。このメソッドの役割は次のとおりです:

- データ・アクションで使用する Knockout モデル・クラスの構築。
Knockout モデル・クラスには、他のすべてのプロパティにとって意味のあるデフォルト値とともに create() メソッドに渡される ID と名前が含まれる必要があります。たとえば、通貨換算データ・アクションでは、ドルに換算するデフォルト通貨を設定できます。Knockout モデルは、デフォルト値を提供するための適切な場所です。
- Knockout モデルからのデータ・アクションのインスタンスの構築。
- データ・アクションのインスタンスの返却。

invoke(oActionContext, oDataActionContext)

invoke() メソッドは、ビジュアライゼーションのデータ・ポイントのコンテキスト・メニューからユーザーがデータ・アクションを起動したときにコールされます。このメソッドは、選択されたデータ・ポイント、ビジュアライゼーション、フィルタ、ワークブックおよびセッションを記述したメタデータを含む DataActionContext 引数を渡します。**データ・アクション・サービス・クラス**を参照してください。

validate()

validate() メソッドは、「データ・アクション」ダイアログでユーザーが「OK」をクリックしたときに各データ・アクションでコールされます。validate() メソッドは、すべてが有効であることを示す場合は null を返し、何かが無効である場合は DataActionError を返しま

す。ダイアログでいずれかのデータ・アクションにエラーが発生した場合、ダイアログは閉じられず、ユーザーにエラー・メッセージが表示されます。このメソッドは、`this.validateName()` メソッドを使用してデータ・アクションの名前を検証します。

getGadgetInfos(oReport)

`getGadgetInfos()` メソッドは、ユーザー・インタフェースでデータ・アクション・プロパティ・フィールドを表示できるようにするためにコールされます。このメソッドは、ユーザーが希望するユーザー・インタフェースへの表示順序で `GadgetInfos` の配列を返します。ガジェットは、最も一般的なタイプのすべてのフィールドに対して提供されます(たとえば、テキスト、ドロップダウン、パスワード、複数選択、ラジオ・ボタン、チェック・ボックスなど)、より複雑なフィールドが必要な場合はカスタム・ガジェットを作成できます(たとえば、複数のガジェットをまとめてグループ化する場合や、ユーザーの選択したオプションに応じて異なるガジェット・フィールドを表示する場合など)。配列に必要な各 `GadgetInfo` を構築するメソッドを作成する方が、後でサブクラスがその提供された `GadgetInfo` から選択しやすくなるため、ベスト・プラクティスです。このベスト・プラクティスに従う場合、ユーザー・インタフェースで使用されるフィールドごとに `GadgetInfo` を返すことができる各種データ・アクション・ベース・クラスによって実装された様々なメソッドがすでに用意されています。また、これらの `GadgetInfo` のいずれかが必要な場合、対応する `create***GadgetInfo()` メソッドをコールして、その戻り値をガジェットの配列に配置します。

isAllowedHere(oReport)

`isAllowedHere()` メソッドは、ユーザーがビジュアライゼーションのデータ・ポイントを右クリックし、ユーザー・インタフェースがコンテキスト・メニューの生成を開始したときにコールされます。選択されたデータ・ポイントに関連するデータ・アクションが存在する場合、メソッドは `true` を返し、そのデータ・アクションがコンテキスト・メニューに表示されます。メソッドが `false` を返した場合、データ・アクションはコンテキスト・メニューに表示されません。スーパークラスから継承したデフォルト動作を受け入れることを検討してください。

upgrade(oOldDataActionJS)

最初のデータ・アクションを作成する場合、`upgrade(oOldDataActionJS)` メソッドを使用しないでください。このメソッドは、最初の `Knockout` モデルの作成後に、第 2 バージョンの `Knockout` モデルのプロパティを大幅に変更する場合にのみ使用してください。たとえば、最初のバージョンのデータ・アクションではその `Knockout` モデルに URL を格納するが、次のバージョンでは別個のプロパティに URL コンポーネント部分を格納する予定の場合です(たとえば、`protocol`、`hostname`、`port`、`path`、`queryString`、`bookmark` など)。

第 2 バージョンの `Knockout` モデル・コードは、問題が発生する可能性のある最初のバージョンの `Knockout` モデル・コードに保存されているデータ・アクションを開こうとする場合があります。この問題を解決するため、システムでは、現在のデータ・アクション・コードのバージョンが、開かれようとしているデータ・アクションのバージョンより新しいことを認識すると、新しいデータ・アクション・クラスの `upgrade()` メソッドをコールして、古いデータ・アクションの `Knockout` モデル(JSON オブジェクトにシリアライズ済)を渡します。その後、古い JSON オブジェクトを使用して新しい `Knockout` モデルに移入し、JSON オブジェクトのアップグレード・バージョンを返すことができます。これにより、データ・アクション・コードを改善しても、古いデータ・アクション・メタデータは動作し続けることが保証されます。

HTTPAPIDataAction メソッド

HTTPAPIDataAction クラスを拡張する場合、オーバーライドできる次の追加メソッドが用意されています:

getAJAXOptions(oDataContext)

getAJAXOptions() メソッドは、データ・アクションの invoke() メソッドによってコールされます。getAJAXOptions() メソッドは、データ・アクションで作成される HTTP リクエストを記述した AJAX Options オブジェクトを作成します。getAJAXOptions() メソッドには、選択されたデータ・ポイント、ビジュアライゼーション、フィルタ、ワークブックおよびセッションを記述したメタデータを含む oDataContext オブジェクトが渡されます。統合しようとしている HTTP API の要件どおりに AJAX Options を設定し、HTTPRequest が成功するかエラーで終了した場合にコールする関数を指定します。jQuery.ajax オブジェクトとそのプロパティの説明は、jQuery の Web サイトを参照してください。

次の実装は、HTTPAPIDataAction クラスから継承されています。継承メソッドをリライトして要件を指定する必要があります。たとえば、HTTP リクエストと、HTTP レスポンスを処理するコードを構成します。この実装は、getAJAXOptions() 関数に渡されるパラメータ、返されることが予期されるオブジェクト、およびメソッド内でコードを構成する方法の明確な例を示しているため、役に立ちます。

```

1 /**
2  * This method returns an object containing the AJAX settings used when
3  * the data action is invoked.
4  * Subclasses may wish to override this method to provide their own
5  * behavior.
6  * @param {module:obitech-reportservices/
7  * dataactionmanager.DataContext} oDataContext The context metadata
8  * describing where the data action was invoked from.
9  * @returns {?object} A JQuery AJAX settings object (see http://
10 * api.jquery.com/jquery.ajax/ for details) - returns null if there is a
11 * problem.
12 */
13 dataaction.HTTPAPIDataAction.prototype.getAJAXOptions = function
14 (oDataContext)
15 {
16     jsx.assertInstanceOfModule(oDataContext, "oDataContext",
17     "obitech-reportservices/dataactionmanager", "DataContext");
18
19     var oAJAXOptions = null;
20     var oKOVViewModel = this.getKOVViewModel();
21     var sURL = oKOVViewModel.sURL();
22     if (sURL)
23     {
24         // Parse the URL
25         var sResultURL = this._parseURL(sURL, oDataContext);
26         if (sResultURL)
27         {
28             // Parse the POST parameters (if required)
29             var eHTTPMethod = oKOVViewModel.eHTTPMethod()[0];
30             var sData = null;
31             if (eHTTPMethod ===
32 dataaction.HTTPDataActionKOModel.HTTPMethod.POST)

```



```

24     {
25         var sPOSTParams = oKOVViewModel.sPOSTParams();
26         sData =
sPOSTParams.replace(dataaction.AbstractHTTPDataAction.RegularExpression
s.LINE_END, "&");
27         sData = this._parseURL(sData, oDataContext, false);
28     }
29     oAJAXOptions = {
30         type: eHTTPMethod,
31         url: sResultURL,
32         async: true,
33         cache: false,
34         success: function (/*oData, sTextStatus, oJQXHR*/)
35         {
36
oDataContext.getReport().displaySuccessMessage(messages.HTTP_API_
DATA_ACTION_INVOCATION_SUCCESSFUL.format(oKOVViewModel.sName()));
37         },
38         error: function (oJQXHR/*, sTextStatus, sError*/)
39         {
40
oDataContext.getReport().displayErrorMessage(messages.HTTP_API_DA
TA_ACTION_INVOCATION_FAILED.format(oKOVViewModel.sName(),
oJQXHR.statusText, oJQXHR.status));
41         }
42     };
43     if (sData)
44     {
45         oAJAXOptions.data = sData;
46     }
47 }
48 }
49 return oAJAXOptions;
50 };

```

データ・アクションのテスト、パッケージ化およびインストール

Oracle Analytics Desktop を使用して、データ・アクションをインストールする前にそのソースの場所でテストします。

1. Oracle Analytics Desktop が現在実行中である場合は、閉じます。
2. プロキシの裏で作業している場合、プロキシ設定を%PLUGIN_DEV_DIR%\gradle.properties で設定します。HTTP プロキシを通じた Web へのアクセスの詳細は、[Gradle ユーザー・マニュアル](#)を参照してください。
3. [オーバーライドするデータ・アクションの継承メソッドの選択](#)で開始したコマンド・プロンプトを使用して、SDK モードで Oracle Analytics Desktop を実行し、次のコマンドを入力します:

```

cd %PLUGIN_DEV_DIR%
.\gradlew run

```

Oracle Analytics Desktop が SDK モードで起動します。「コンソール | 拡張機能」ページにデータ・アクション・プラグインが表示されます。

ワークブックを作成してデータ・アクションをテストします。問題が発生した場合、ブラウザの組込み開発者ツールを使用してコードをデバッグできます。

4. HTTP API データ・アクションを作成した場合:
 - a. コンソールに移動して「安全ドメイン」ページを表示します。
 - b. アクセスする各ドメインを追加します。

たとえば、`apilayer.com` の API にアクセスする必要がある場合、安全なドメインのリストに `apilayer.net` を追加します。
 - c. 選択したドメインの「接続」列のチェック・ボックスを選択します。
 - d. ブラウザで「安全ドメイン」ページをリロードして変更を反映します。
5. データ・アクション・プラグインを準備して、他のユーザーに配布する、または Oracle Analytics でインストールする場合:
 - `%PLUGIN_DEV_DIR%\src\customdataaction` フォルダとその内容を含む 1 つの ZIP ファイルにすべてのファイルをパッケージ化します。
 - データ・アクション・プラグインの作成時に指定したものと同一 ID を使用して zip に名前を付けます。
6. データ・アクション・プラグインをインストールします。[カスタム・プラグインの管理](#)を参照してください。

Knockout モデル変更のためのアップグレード・ハンドラの使用

一部の Knockout モデル変更では、アップグレード・ハンドラを使用してデータ・アクション・プラグインをアップグレードする必要があります。

Knockout モデルを変更せずにデータ・アクション・プラグインを改善する場合、通常どおり JavaScript または CSS ファイルを編集し、新しい ZIP ファイルを作成して、既存のデータ・アクション・プラグインを新しい ZIP ファイルに置き換えます。ただし、データ・アクションの Knockout モデルを変更した場合、データ・アクションの VERSION プロパティを変更してアップグレード・ハンドラを指定する必要があります。

アップグレード・ハンドラを使用する必要があるかどうかを決定します:

アップグレード・ハンドラが必要な場合

- Knockout モデルのプロパティ名を変更する場合。
- Knockout モデルの複数のプロパティを単一のプロパティに結合する場合。
- Knockout モデルの単一のプロパティを複数のプロパティに分割する場合。
- Knockout モデルに新しいプロパティを追加する際に、その正しいデフォルト値が Knockout モデルの他の値に依存する場合。

アップグレード・ハンドラが不要な場合

- Knockout モデルに新しいプロパティを追加する際に、データ・アクションのすべての既存の使用法に対して正しいデフォルト値を指定できる場合。

- データ・アクション・コードで使用しなくなったために Knockout モデルからプロパティを除去する場合。

データ・アクション・プラグインのアップグレード

データ・アクション・プラグインをアップグレードしてデータ・アクション・コードを改善するか、メタデータをアップグレードして既存のデータ・アクションで新しいデータ・アクション・コードを操作できるようにします。

データ・アクション・プラグインをアップグレードするには、アップグレード・ハンドラを使用します。

- データ・アクションのバージョン番号を増やします。
たとえば、データ・アクション名が `company.MyDataAction` である場合、`mydataaction.js` で `mydataaction.MyDataAction.VERSION` プロパティを検索します。これが現在 `1.0.0` に設定されている場合、`1.0.1` に変更します。
- `static upgrade(oOldDataActionJS)` メソッドをデータ・アクション・クラスに追加します。
`VERSION` プロパティがデータ・アクション・メタデータに格納されている `sVersion` 値と異なる場合、データ・アクション・マネージャは、データ・アクション・クラスの `static upgrade()` メソッドをコールします。
- スーパークラスの `upgrade()` メソッドをコールすることで `upgrade()` メソッドを実行し、そのレスポンスを取得します。
- 最新の Knockout モデルで必要とされる適切なプロパティ・セットにオブジェクトが一致するまで、スーパークラスから返される部分的にアップグレードされたデータ・アクション JSON に編集を加えることで `upgrade()` メソッドを実行し続けます。
- ```
var oUpgradedDataAction =
dataaction.AbstractDataAction.createFromJS(fDataActionClass,
sFullyQualifiedDataActionClassName, oUpgradedDataActionJS)
```

 をコールして終了します。  
このコマンドは、アップグレードされたデータ・アクション JSON からデータ・アクションの新しいインスタンスを構築し、`oUpgradedDataAction.getSettings()` を返します。

## データ・アクション・プラグイン・ファイルのリファレンス

データ・アクション・プラグインごとに 1 つの `plugin.xml` ファイルが必要で、各 `plugin.xml` ファイルには任意の数のデータ・アクションを含めることができます。

### トピック:

- [データ・アクション plugin.xml ファイルの例](#)
- [データ・アクション plugin.xml ファイルのプロパティ・セクション - tns:obiplugin](#)

- データ・アクション plugin.xml ファイルのリソース・セクション - [tns:resources](#)
- データ・アクション plugin.xml ファイルの拡張機能セクション - [tns:extension](#)

## データ・アクション plugin.xml ファイルの例

plugin.xml ファイルには、tns:obiplugin、tns:resources および tns:extension という 3 つのメイン・セクションがあります。

### plugin.xml の例

この例は、1 つのデータ・アクションに対する一般的な plugin.xml ファイルを示しています。

```
1 <?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
2 <tns:obiplugin xmlns:tns="http://plugin.frameworks.tech.bi.oracle"
3 id="obitech-currencyconversion"
4 name="Oracle BI Currency Conversion"
5 version="0.1.0.@qualifier@"
6 optimizable="true"
7 optimized="false">
8
9
10 <tns:resources>
11 <tns:resource id="currencyconversion" path="scripts/
12 currencyconversion.js" type="script" optimizedGroup="base"/>
13 <tns:resource-folder id="nls" path="resources/nls"
14 optimizable="true">
15 <tns:extensions>
16 <tns:extension name="js" resource-type="script"/>
17 </tns:extensions>
18 </tns:resource-folder>
19 </tns:resources>
20
21 <tns:extensions>
22 <tns:extension id="oracle.bi.tech.currencyconversiondataaction"
23 point-id="oracle.bi.tech.plugin.dataaction" version="1.0.0">
24 <tns:configuration>
25 {
26 "host": { "module": "obitech-currencyconversion/
27 currencyconversion" },
28 "resourceBundle": "obitech-currencyconversion/nls/messages",
29 "properties":
30 {
31 "className": "obitech-currencyconversion/
32 currencyconversion.CurrencyConversionDataAction",
33 "displayName": { "key" : "CURRENCY_CONVERSION", "default" :
34 "Currency Conversion" },
35 "order": 100
36 }
37 }
38 </tns:configuration>
39 </tns:extension>
40 </tns:extensions>
```

```
36
37 </tns:obiplugin>
```

## データ・アクション plugin.xml ファイルのプロパティ・セクション - tns:obiplugin

tns:obiplugin セクションでは、すべてのタイプのプラグインに共通のプロパティを定義します。

### プラグインのプロパティ

tns:obiplugin セクションでは、すべてのタイプのプラグインに共通のプロパティを定義します。

```
1 <?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
2 <tns:obiplugin xmlns:tns="http://plugin.frameworks.tech.bi.oracle"
3 id="obitech-currencyconversion"
4 name="Oracle BI Currency Conversion"
5 version="0.1.0.@qualifier@"
6 optimizable="true"
7 optimized="false">
```

- **行 1:** XML 宣言。
- **行 2:** プラグインのルート `XMLElement` の開始タグと、`plugin.xml` ファイル全体で使用される `tns` ネームスペースの宣言。
- **行 3:** プラグインの一意の ID。
- **行 4:** プラグインのデフォルトの表示名(ローカライズされたバージョンが使用できない場合に使用されます)。
- **行 5:** プラグインのバージョン番号。
- **行 6:** JS/CSS が最適化(圧縮)可能であるかどうかを示すブール。
- **行 7:** JS/CSS が最適化(圧縮)済であるかどうかを示すブール。

## データ・アクション plugin.xml ファイルのリソース・セクション - tns:resources

tns:resources セクションでは、プラグインに提供するファイルをすべて登録します。

### リソース

```
1 <tns:resources>
2 <tns:resource id="currencyconversion" path="scripts/
currencyconversion.js" type="script" optimizedGroup="base"/>
3 <tns:resource-folder id="nls" path="resources/nls"
optimizable="true">
```

```

4 <tns:extensions>
5 <tns:extension name="js" resource-type="script"/>
6 </tns:extensions>
7 </tns:resource-folder>
8 </tns:resources>

```

各 **JavaScript**、**CSS**、イメージおよび翻訳リソース・ファイルをここで登録する必要があります。このセクションは、<tns:resources>要素内に含まれ、次の要素を任意の数だけ含みません:

- <tns:resource>  
これらの要素は、単一のファイルを登録するために使用します(たとえば、**JavaScript** または **CSS** ファイル)。
- <tns:resource-folder>  
これらの要素は、指定したフォルダ内のすべてのファイルを同時に登録するために使用します。たとえば、イメージ・フォルダまたはネイティブ言語サポートのリソース・ファイルを含むフォルダです。

各タイプのファイルを登録する方法の詳細は、次の各項を参照してください。

### JavaScript ファイル

プラグインの各 **JavaScript** ファイルは、次に示すような行に登録する必要があります。

```
<tns:resource id="currencyconversion" path="scripts/currencyconversion.js"
type="script" optimizedGroup="base"/>
```

ここで:

- **id** は、ファイルに割り当てられる ID です。  
ID は、**JavaScript** ファイル名(.js 拡張子なし)に一致するよう設定します。
- **path** は、plugin.xml ファイルから **JavaScript** ファイルへの相対パスです。**JavaScript** ファイルは、プラグインの scripts ディレクトリに格納する必要があります。  
**JavaScript** ファイルには、アンダースコアやハイフンなどの特殊文字なしで、すべて小文字を使用してください。
- **type** は、登録するファイルのタイプです。**JavaScript** ファイルの場合、これは script に設定する必要があります。
- **optimizedGroup** は、複数の **JavaScript** ファイルを 1 つの圧縮ファイルにグループ化します。サード・パーティ・プラグインでは、この設定を base のままにする必要があります。

### CSS ファイル

プラグインの各 **CSS** ファイルは、次に示すような行に登録する必要があります。

```
<tns:resource id="currencyconversionstyles" path="resources/
currencyconversion.css" type="css"/>
```

ここで:

- **id** は、ファイルに割り当てられる ID です。  
ID は、**CSS** ファイル名(.css 拡張子なし)に一致するよう設定します。

- **path** は、`plugin.xml` ファイルから `CSS` ファイルへの相対パスです。`CSS` ファイルは、プラグインの `resources` ディレクトリに格納する必要があります。`CSS` ファイルには、アンダースコアやハイフンなどの特殊文字なしで、すべて小文字を使用してください。
- **type** は、登録するファイルのタイプです。`CSS` ファイルの場合、これは常に `css` に設定する必要があります。

### イメージ・フォルダ

JavaScript コード内から参照するために必要なイメージがプラグインに含まれる場合、プラグインのディレクトリ構造内の `resources/images` ディレクトリにそれらを配置し、次のように `<tns:resource-folder>` 要素を `plugin.xml` に追加します:

```
<tns:resource-folder id="images" path="resources/images"
optimizable="false"/>
```

イメージが `CSS` ファイルからのみ参照される場合、この `<tns:resource-folder>` 要素を `plugin.xml` ファイルに追加する必要はありません。この場合は、`resources/images` ディレクトリにそれらを追加して、`CSS` ファイルからの相対パスを使用して参照できるようにする必要があります。

### ネイティブ言語サポートのリソース・フォルダ

Oracle Analytics は、ネイティブ言語サポートを実装しています。そのため、開発者は、ユーザー・インタフェースに表示する文字列を、個別の `JSON` リソース・ファイルに外部化する必要があります。その後、所定のディレクトリ構造にこれらのファイルの様々なローカライズ・バージョンを提供することで、Oracle Analytics では、ユーザーの選択した言語にとって適切なファイルが自動的に使用されます。リソース・ファイルの翻訳バージョンは、必要な数だけ提供できます。ネイティブ言語サポートのリソース・フォルダによって、Oracle Analytics に対し、プラグインで使用される所定のネイティブ言語サポート・ディレクトリ構造のルートが指示されます。ネイティブ言語サポートのリソース・ファイルを使用するすべてのプラグインには、次の例とまったく同じ `<tns:resource-folder>` エントリが含まれる必要があります。

```
1 <tns:resource-folder id="nls" path="resources/nls"
2 optimizable="true">
3 <tns:extensions>
4 <tns:extension name="js" resource-type="script"/>
5 </tns:extensions>
6 </tns:resource-folder>
```

ファイルの内容および準拠する必要のある所定のディレクトリ構造の詳細は、[生成されたフォルダとファイル](#)を参照してください。

## データ・アクション plugin.xml ファイルの拡張機能セクション - tns:extension

プラグインで提供するデータ・アクションごとに、次のような<tns:extension>要素を使用してデータ・アクションの拡張機能を登録する必要があります:

```
<tns:extension id="oracle.bi.tech.currencyconversiondataaction" point-
id="oracle.bi.tech.plugin.dataaction" version="1.0.0">
 <tns:configuration>
 {
 "host": { "module": "obitech-currencyconversion/currencyconversion" },
 "resourceBundle": "obitech-currencyconversion/nls/messages",
 "properties":
 {
 "className": "obitech-currencyconversion/
currencyconversion.CurrencyConversionDataAction",
 "displayName": { "key" : "CURRENCY_CONVERSION", "default" :
"Currency Conversion" },
 "order": 100
 }
 }
 </tns:configuration>
</tns:extension>
```

ここで:

- **id** は、データ・アクションに割り当ての一意の ID です。
- **point-id** は、登録する拡張機能のタイプです。データ・アクションの拡張機能では、これを oracle.bi.tech.plugin.dataaction に設定する必要があります。
- **version** は、拡張機能定義で使用する拡張機能の API バージョンです(この設定は **1.0.0** のままにします)。

<tns:configuration>要素には、次を定義する JSON 文字列が含まれます:

- **host.module** - これは、データ・アクションが含まれるモジュールの完全修飾名です。この完全修飾モジュール名は、%PluginID%/ModuleName%という書式で示されます。ここで:
  - %PluginID%は、<tns:obiplugin>要素の id 属性で指定したプラグイン ID に置き換える必要があります。
  - %ModuleName%は、データ・アクションが含まれる JavaScript ファイルの <tns:resource>要素の id 属性で指定したリソース ID に置き換える必要があります。
- **resourceBundle** - これは、このデータ・アクションのローカライズされたリソースが含まれるリソース・ファイルへのネイティブ言語サポート・パスです。リソース・ファイルが messages.js という名前です。所定の nls ディレクトリ構造に正しく格納されている場合、このプロパティを %PluginID%/nls/messages に設定します(ここで、%PluginID% は、plugin.xml ファイルの先頭にある<tns:obiplugin>要素の id 属性で指定したプラグイン ID に置き換える必要があります)。



- **properties.className** - これは、登録するデータ・アクションに割り当てられる完全修飾クラス名です。この完全修飾クラス名は、`%PluginID%/ %ModuleName%. %ClassName%`という書式で示されます。ここで:
  - `%PluginID%`は、`<tns:obiplugin>`要素の `id` 属性で指定したプラグイン ID に置き換える必要があります。
  - `%ModuleName%`は、データ・アクションが含まれる JavaScript ファイルの `<tns:resource>`要素の `id` 属性で指定したリソース ID に置き換える必要があります。
  - `%ClassName%`は、JavaScript ファイルでデータ・アクション・クラスに割り当てた名前に置き換える必要があります。
- **properties.displayName** - このプロパティには、1つのオブジェクトと2つの追加プロパティが含まれます:
  - **key** は、指定された `resourceBundle` 内からデータ・アクションのローカライズされた表示名を検索するために使用できるネイティブ言語サポートのメッセージ・キーです。
  - **default** は、なんらかの理由でローカライズされたバージョンの表示名を検出できない場合に使用されるデフォルトの表示名です。
- **properties.order** - このプロパティによって、データ・アクションのリストが表示されるときに、データ・アクションの表示位置を決定するためのヒントを提供できます。`order` プロパティで小さい数値を持つデータ・アクションは、大きい数値を持つデータ・アクションより前に表示されます。同じ数値の場合、データ・アクションは、システムにロードされた順序で表示されます。

# 12

## その他の機能を使用したデータのビジュアル化

このトピックでは、データをビジュアル化するために使用できるその他の機能について説明します。

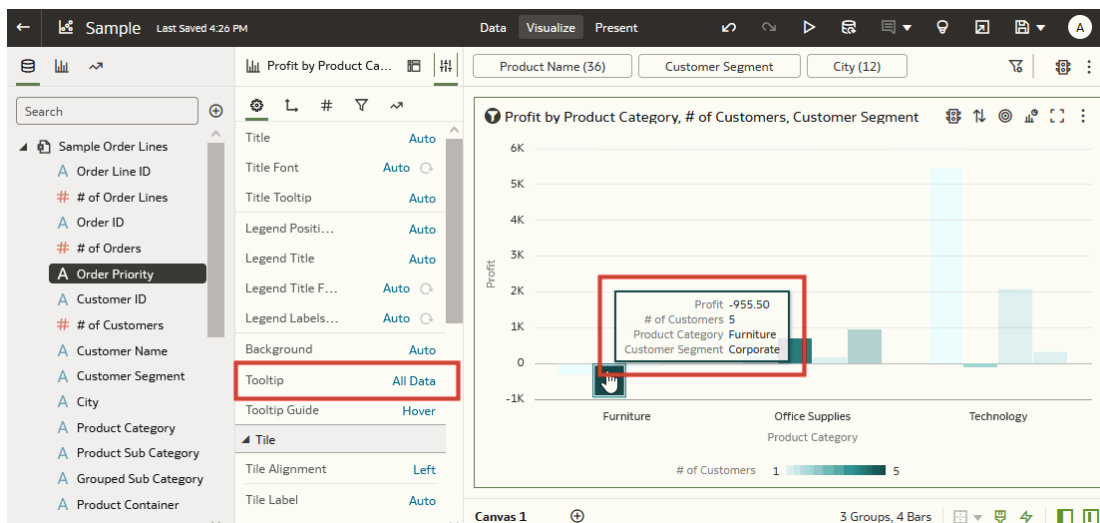
### トピック:

- ツールチップによる内容の識別
- カスタム・プラグインの管理
- 式の作成
- ホーム・ページからのデータのビジュアル化
- 変更内容の自動保存
- ページでの項目のソート

## ツールチップによる内容の識別

ツールチップを使用すると、過剰な情報による混乱をなくして、ビジュアライゼーションをよりインタラクティブにすることができます。

ビジュアライゼーション・デザイナー・ページの「ツールチップ」ペインを使用すると、ユーザーがメジャーをクリックするか、ビジュアライゼーションにカーソルを合せたときにメジャーやラベルが表示されるようにすることができます。



## カスタム・プラグインの管理

カスタム・プラグインをアップロード、ダウンロード、検索および削除できます。プラグインは、外部で作成してからシステムにインポートするカスタム・ビジュアライゼーション・タイプまたはカスタム・データ・アクションです。

### LiveLabs スプリント

たとえば、ワークブックで使用可能なビジュアライゼーション・タイプを指定するカスタム・プラグインをアップロードできます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「コンソール」をクリックします。
2. 「拡張機能」をクリックします。

このページを使用して、カスタム・プラグインをアップロード、検索、削除またはダウンロードします。

3. カスタム・プラグインをアップロードするには、「拡張機能」をクリックして、次のアクションのいずれかを実行します。
  - ファイル・システムで必要なプラグイン・ファイルを参照し、「開く」をクリックしてプラグインを選択します。
  - 必要なプラグイン・ファイルを「カスタム・プラグインのアップロード」オブジェクトにドラッグします。

アップロードされるカスタム・プラグイン・ファイルの名前が既存のカスタム・プラグインと同じ場合、アップロードされるファイルが既存のファイルと置き換わり、ビジュアライゼーションに表示されます。

4. 次のタスクのいずれかを実行します。
  - プラグインでビジュアライゼーション・タイプを指定する場合、ビジュアライゼーションのタイプを作成または切り替えるときに使用可能なタイプのリストからタイプを選択できます。
  - カスタム・プラグインを検索するには、「検索」フィールドに検索基準を入力し、「戻る」をクリックして検索結果を表示します。
  - カスタム・プラグインを削除するには、カスタム・プラグインで「オプション」をクリックし、「削除」を選択し、「はい」をクリックしてカスタム・プラグインを削除します。  
ワークブックで使用されているカスタム・ビジュアライゼーション・タイプを削除すると、そのワークブックではビジュアライゼーションの場所にエラー・メッセージが表示されます。「削除」をクリックしてビジュアライゼーションを除去するか、ビジュアライゼーションが正しく表示されるように同じカスタム・プラグインをアップロードします。
  - カスタム・プラグインをダウンロードするには、カスタム・プラグインで「オプション」をクリックして「ダウンロード」を選択します。

## 式の作成

「式」ウィンドウを使用して、式フィルタまたは計算に使用する式を作成できます。式フィルタに対して作成する式はブール(つまり、true または false に評価される式)である必要があります。

式フィルタと計算の両方に対して式を作成しますが、最終結果は異なります。計算は、ビジュアルライゼーションに追加できる新規データ要素となります。他方で、式フィルタはフィルタ・バー内のみ表示され、データ要素としてビジュアルライゼーションに追加することはできません。式フィルタは計算から作成できますが、計算を式フィルタから作成することはできません。[計算済データ要素の作成](#)および[式フィルタの作成](#)を参照してください。

式は様々な方法で作成できます。

- 「式」ウィンドウにテキストと関数を直接入力できます。
- 「データ要素」ペインからデータ要素を追加(ドラッグ・アンド・ドロップまたはダブルクリック)します。
- 関数パネルから関数を追加(ドラッグ・アンド・ドロップまたはダブルクリック)します。

[式エディタのリファレンス](#)を参照してください。

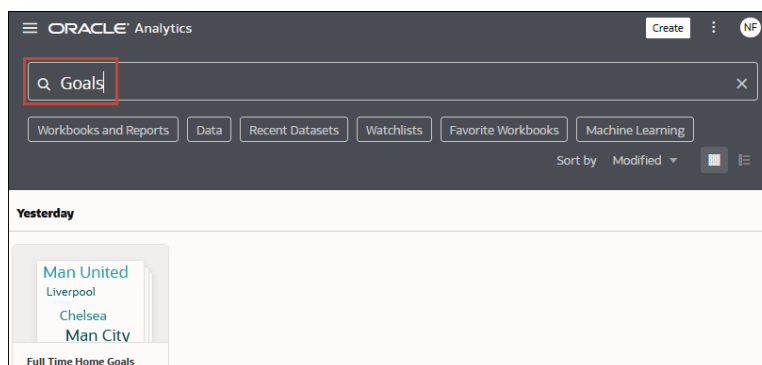
## ホーム・ページからのデータのビジュアル化

ホーム・ページの検索バーを使用して、データの検索とその迅速なビジュアル化を行います。その後、結果に対して適切なアクションを実行できます。

### ノート:

ファイルベースのデータセットを使用してホーム・ページからビジュアルライゼーションを構築する前に、それらに索引付けする必要があります。自分とデータセットを共有しているユーザーが、ファイルベースのデータセットを使用してホーム・ページからビジュアルライゼーションを構築する前に、それらに索引付けして認証する必要があります。[データセットの索引付け](#)および[データセットの認証](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、検索バーをクリックします。
2. 検索語("Goals"など)を入力して[Shift] + [Enter]を押すか、ドロップダウン・リストに表示された特定の結果を選択します。結果が表示されます。



3. いずれかの結果をさらに調べるには、「アクション」メニューをクリックして、オプションの 1 つを選択します。

## 変更内容の自動保存

自動保存オプションを使用して、ビジュアライゼーション・ワークブックに更新内容をリアルタイムで自動的に保存できます。

ワークブックが特定の場所にすでに保存されている場合は、「自動保存」をクリックした後、「ワークブックの保存」ダイアログは表示されません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「保存」メニューから「自動保存」を選択します。
3. 「ワークブックの保存」ダイアログで、ワークブックを識別する「名前」およびオプションの「説明」を入力します。
4. ワークブックを保存するフォルダを選択します。
5. 「保存」をクリックします。ワークブックの更新内容はリアルタイムで保存されます。

2人のユーザーが同じワークブックを更新し、「自動保存」が有効になっていると仮定します。ワークブックに対して異なるタイプの更新が行われると、「自動保存」オプションは自動的に無効になります。別のユーザーがワークブックを更新したことを示すメッセージが表示されます。

## ページでの項目のソート

属性に基づいて項目をソートすると、「カタログ」、「データ」および「機械学習」ページで項目をすばやく再編成できます。

さらにデータまたはワークブックを追加すると、項目のソートはリストされる順序の制御に役立ちます。たとえば、変更日時に基づいて、「データ」ページでデータセットを再編成できます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックしてから「コンソール」をクリックします。
2. ソートする項目に応じて、「カタログ」、「データ」または「機械学習」のいずれかをクリックします。
3. ページのツールバーで「ソート基準」メニューをクリックし、「変更」または「逆順」などのソート・オプションを選択します。
4. 「リスト・ビュー」アイコンをクリックしてリスト・ビューに切り替えます。表で列ヘッダーをクリックし、昇順または降順にその列の項目をソートします。

選択したソートおよび列オプションは、ユーザー・プリファレンスとして保存されます。

## プレゼンテーション・フローの作成

この章では、「表示」を使用して、ワークブックのキャンバスからプレゼンテーション・フローを作成する方法について説明します。プレゼンテーション・フローでは、エンド・ユーザーのワークブックを決定します。

### トピック:

- [プレゼンテーション・フローとは](#)
- [「表示」の自動モードと手動モードとは](#)
- [「表示」の自動モードと手動モードの切り替え](#)
- [プレゼンテーション・フローを開く](#)
- [「表示」でのキャンバス・レイアウトの指定](#)
- [「表示」での「ワークブック」プロパティの設定](#)
- [「表示」での「キャンバス」プロパティの設定](#)
- [プレゼンテーション・フローのプレビュー](#)

## プレゼンテーション・フローとは

プレゼンテーション・フローの設計では、エンド・ユーザーが操作するワークブックを決定します。ベースとなるのは設計時のワークブックですが、変更が可能で、設計側の複雑さを隠すために非表示にしたり、エンド・ユーザーがデータの操作に必要なとするワークブックの操作性を実現したりできます。

Oracle Analytics では、デフォルトで、「ビジュアル化」で設計されたワークブックに基づいてプレゼンテーション・フローが作成されます。「表示」でワークブックに初めてアクセスすると、デフォルトのプレゼンテーション・フローが表示され、これは「ビジュアル化」で設計したワークブックと同じです。たとえば、プレゼンテーション・フローには、ワークブックのすべてのキャンバス、ビジュアライゼーション、フィルタなどが含まれます。

「ビジュアル化」からワークブックをプレビューして、設計と機能に問題がない場合は、何もする必要はありません。ただし、エンド・ユーザーのワークブックを微調整する必要がある場合は、「表示」を使用して、よりエンド・ユーザーに合ったプレゼンテーション・フローに変更できます。作成者として「表示」を使用すると、適切な相互作用を柔軟に探すことができ、エンド・ユーザーが使用しやすい最適なワークブックを作成できます。

「表示」を使用すると、次のようなワークブックの変更が可能です:

- 作成途中のキャンバスの非表示。
- ビジュアライゼーションの非表示。
- ビジュアライゼーションのツールバーまたはメニューへのさらなるオプションの追加。
- ワークブックのフィルタ・バーの非表示。
- キャンバスの順序の変更。

新しいビジュアライゼーションの追加など、キャンバスのコンテンツを変更する場合は、「ビジュアル化」を使用します。「ビジュアル化」で行った変更は、「表示」のプレゼンテーション・フローにも組み込まれます。ただし、「表示」を使用してエンド・ユーザーの使用感を改善した場合、行った変更は、「ビジュアル化」のワークブックの設計には適用されません。

## 「表示」の自動モードと手動モードとは

自動モードと手動モードによって、プレゼンテーション・フローを設計する際に行える変更のタイプが決まります。

[プレゼンテーション・フローとは](#)を参照してください

ワークブックのプレゼンテーション・フローを「表示」で初めて開いたとき、プレゼンテーション・フローのプロパティと設定は、デフォルトで、「ビジュアル化」のワークブックの設計のものと同一になります。ワークブックのプレゼンテーション・フローを初めて開いたときは、自動モードが有効です。

自動モードでは、キャンバスを非表示にすることを選擇できる他、ワークブックのヘッダー・バーの表示/非表示、キャンバスのフィルタ選擇の維持など、数多くのプレゼンテーション・フロー・プロパティをワークブック・レベルまたはキャンバス・レベルで変更できます。これらの変更は、「ビジュアル化」のワークブックやキャンバスには適用されないので注意してください。

手動モードに切り替えると、次のオプションが追加されます：

- キャンバス名の変更。
- キャンバスの複製。
- キャンバスの削除。
- キャンバスの位置の変更
- 「ビジュアル化」に追加された新しいキャンバスの表示の選擇。
- キャンバス上のビジュアライゼーションの非表示。


手動モードから自動モードに切り替えると、上にリストされている、プレゼンテーション・フローに行った手動での変更がすべてリセットされ、「ビジュアル化」のワークブックの設定と同一になります。手動モードから自動モードに切り替えた場合は、ワークブック・レベルまたはキャンバス・レベルで行われたその他すべてのプロパティの設定が保持されます。

自動モードから手動モードに切り替えると、上にリストされた追加の変更を行えるようになります。ユーザーが行うこれらの変更は、「ビジュアル化」のワークブックの設定とは別のものです。

## 「表示」の自動モードと手動モードの切り替え

「表示」で設定した自動モードまたは手動モードによって、プレゼンテーション・フローのキャンバスやビジュアライゼーションに行える変更のタイプが決まります。

このチュートリアルでは、自動モードでのプレゼンテーション・フローの作成方法を説明するユースケースを示します：


 [チュートリアル](#)

このチュートリアルでは、手動モードでのプレゼンテーション・フローの作成方法を説明するユースケースを示します:


 [チュートリアル](#)


「表示」の自動モードと手動モードとはを参照してください

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。

2. 「表示」をクリックして、「表示」ページの下部に移動し、「モード」ボタン  を見つけます。

3. どちらのモードを使用しているかに応じて、次のいずれかを実行します:

- 手動モードから自動モードに切り替えるには、「手動モードがアクティブです」  をクリックします。

- 自動モードから手動モードに切り替えるには、「自動モードがアクティブです」  をクリックします。

4. 「保存」をクリックします。

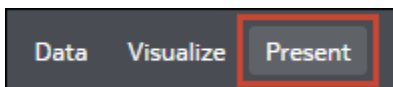
## プレゼンテーション・フローを開く

ワークブックのプレゼンテーション・フローを開いて、ワークブックとそのキャンバスの表示方法とエンド・ユーザー用の機能を微調整します。

プレゼンテーション・フローに行った変更は、「表示」に保存され、エンド・ユーザーのワークブックに表示されます。変更内容は、「ビジュアル化」のワークブックの設計には保存されません。たとえば、「表示」でワークブックの名前をカスタマイズし、フィルタ・バーを非表示にした場合、この変更は「ビジュアル化」のワークブックには反映されません。

「表示」での「ワークブック」プロパティの設定および「表示」での「キャンバス」プロパティの設定を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。



## 「表示」でのキャンバス・レイアウトの指定

プレゼンテーション・フロー・ワークブックは、「ビジュアル化」で指定したレイアウトを継承します。「表示」を使用して、プレゼンテーション・フローやエンド・ユーザーのワークブックに、キャンバスをどのように表示するかを指定できます。

トピック:

- [「表示」でのキャンバスの再配置](#)



- 「表示」でのキャンバスの複製
- 「表示」での重複しているキャンバスの削除
- 「表示」でのキャンバスの非表示
- 非表示になっているキャンバスの「表示」での表示
- 「表示」のキャンバス上のビジュアライゼーションの移動または非表示について
- 「表示」のキャンバスにおけるビジュアライゼーションの配置の変更
- 「表示」でのキャンバスのリセット

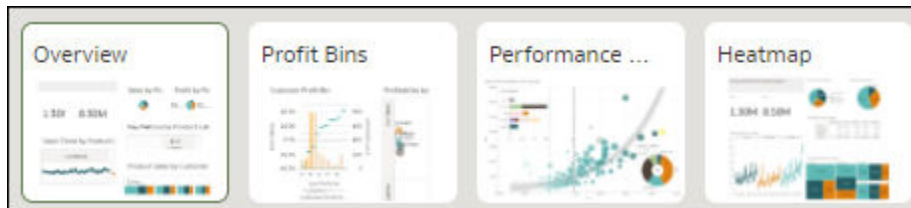
## 「表示」でのキャンバスの再配置

手動モードでプレゼンテーション・フローで作業している際は、ワークブックのキャンバスの順序を変更できます。

「表示」でキャンバスの順序に行った変更は、プレゼンテーション・フローに保存されませんが、「ビジュアル化」のワークブックの設計には保存されません。

「表示」の自動モードと手動モードの切り替えを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページの下部に移動し、「キャンバス」パネルを探します。



4. 「キャンバス」パネルで、キャンバスの表示順序の新しい位置にキャンバスをドラッグ・アンド・ドロップします。
5. オプション: キャンバスをさらにドラッグ・アンド・ドロップして、キャンバスの表示順序の中で再配置します。
6. 「保存」をクリックします。

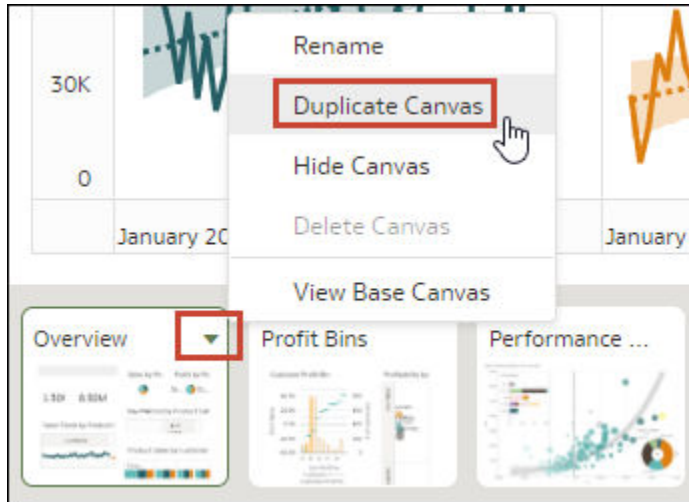
## 「表示」でのキャンバスの複製

手動モードでプレゼンテーション・フローで作業している際は、同じキャンバスをプレゼンテーション・フローに複数回追加できます。複製したキャンバスのバージョンごとに、ユーザーに異なるフィルタ値を表示する場合に、キャンバスを複数回追加します。

「表示」で複製したキャンバスは、プレゼンテーション・フローに保存されますが、「ビジュアル化」のワークブックの設計には保存されません。

「表示」の自動モードと手動モードの切り替えを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページの下部に移動し、「キャンバス」パネルを探します。
4. 「キャンバス」パネルで、キャンバスにカーソルを合わせて下矢印をクリックし、「キャンバスの複製」を選択します。



5. 「キャンバスの複製」をクリックして、変更します。
6. 「保存」をクリックします。

## 「表示」での重複しているキャンバスの削除

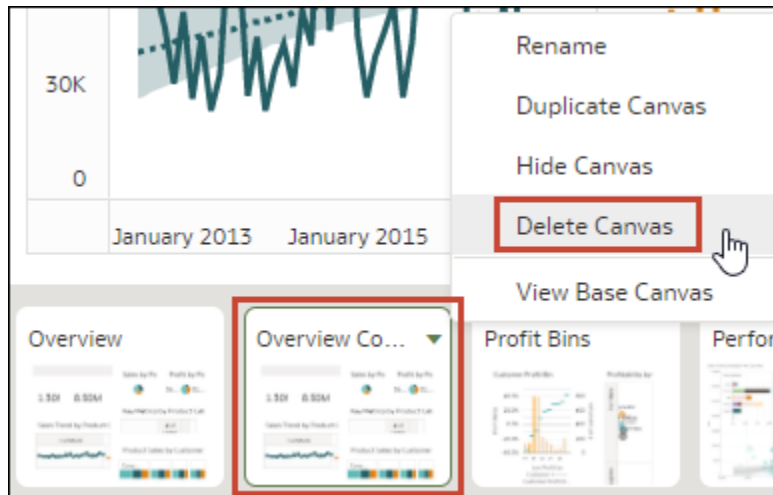
手動モードでプレゼンテーション・フローで作業している際は、プレゼンテーション・フローから重複しているキャンバスを削除できます。

「キャンバスの削除」オプションを使用できるのは、複製したキャンバスのみです。「表示」で、その他のキャンバスは非表示にはできますが削除はできません。

プレゼンテーション・フローでキャンバスの表示に行った変更は、「表示」に保存されますが、「ビジュアル化」のワークブックの設計には保存されません。

[「表示」の自動モードと手動モードの切り替え](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページの下部に移動し、「キャンバス」パネルを探します。
4. 「キャンバス」パネルで、キャンバスにカーソルを合わせて下矢印アイコンをクリックし、「キャンバスの削除」を選択します。



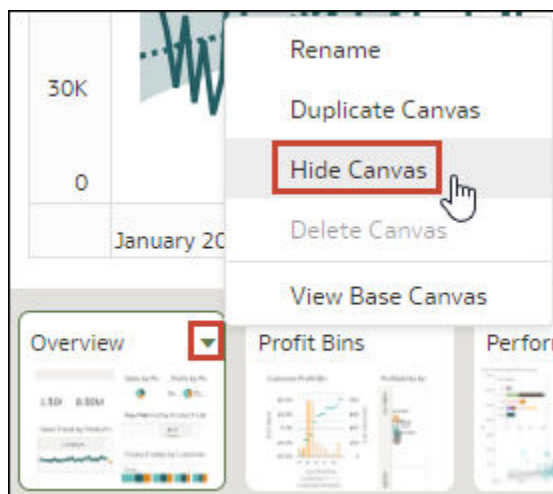
5. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのキャンバスの非表示

プレゼンテーション・フローで作業している際は、手動モードと自動モードのどちらであっても、ワークブックでエンド・ユーザーに表示しないキャンバスを非表示にできます。

「表示」でキャンバスの表示に行った変更は、プレゼンテーション・フローに保存されますが、「ビジュアル化」のワークブックの設計には保存されません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページの下部に移動し、「キャンバス」パネルを探します。
4. 「キャンバス」パネルで、キャンバスの上にカーソルを合せて、「キャンバスの非表示」を選択してキャンバスを非表示にします。



5. 「保存」をクリックします。

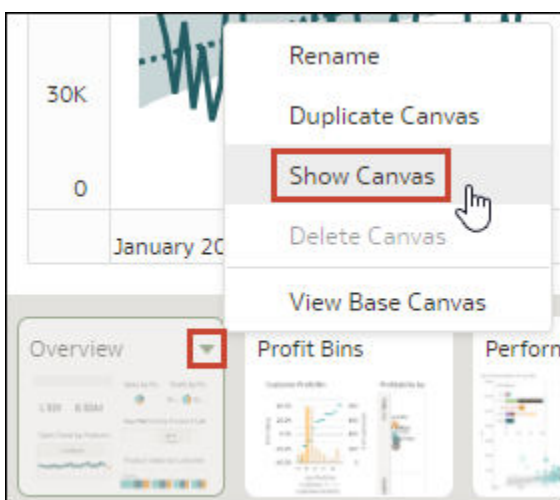
## 非表示になっているキャンバスの「表示」での表示

プレゼンテーション・フローで作業している際は、手動モードと自動モードのどちらであっても、非表示になっているキャンバスを表示できます。

手動モードで「表示」で作業している場合、「ビジュアル化」で追加されたキャンバスは、プレゼンテーション・フローに非表示の状態が表示されます。キャンバスを非表示のままにすることも、「表示」に表示することもできます。

プレゼンテーション・フローでキャンバスの表示に行った変更は、「表示」に保存されますが、「ビジュアル化」のワークブックの設計には保存されません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページの下部に移動し、「キャンバス」パネルを探します。
4. 「キャンバス」パネルで、キャンバスの上にカーソルを合わせて下矢印アイコンをクリックし、「キャンバスの表示」を選択してキャンバスを表示します。



5. 「保存」をクリックします。

## 「表示」のキャンバス上のビジュアライゼーションの移動または非表示について

手動モードでプレゼンテーション・フローで作業すると、「ビジュアル化」内のベース・キャンバスの「レイアウト」プロパティにより、「表示」でのキャンバス・レイアウトの調節時にキャンバスに空白または重複が含まれるかどうか決定されます。

[キャンバス・レイアウト・プロパティについて](#)および[キャンバス・プロパティの更新](#)を参照してください。

ベース・キャンバスの「レイアウト」プロパティが「ビジュアル化」で「自動調整」に設定されている場合、「表示」のキャンバス・レイアウトは、ユーザーが移動する、または非表示にするビジュアライゼーションに対応するように自動的に調整されます。キャンバスをプレ

ビューする際、または「調整のリセット」を選択してキャンバスのレイアウト変更を削除する際、空白および重複は表示されません。

ベース・キャンバスの「レイアウト」プロパティが「ビジュアル化」で「自由書式」に設定されている場合、キャンバス・レイアウトは、「表示」でユーザーが移動する、または非表示にするビジュアライゼーションに対応するように自動的に調整されません。キャンバスをプレビューする際、または「調整のリセット」を選択してキャンバスのレイアウト変更を削除する際、空白および重複が表示されます。

キャンバスが「自由書式」に設定されていて、「表示」でビジュアライゼーションを移動するまたは非表示にする、あるいはキャンバスをリセットする場合、空白または重複がないようにビジュアライゼーションを再配置するようにしてください。「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーションの表示または非表示および「表示」でのキャンバスのリセットを参照してください。

## 「表示」のキャンバスにおけるビジュアライゼーションの配置の変更

キャンバスの別の場所にビジュアライゼーションをドラッグ・アンド・ドロップできます。

「ビジュアル化」内のキャンバスの「レイアウト」プロパティにより、ビジュアライゼーションの再配置時にキャンバスに空白および重複が含まれるかどうか決定されます。「表示」のキャンバス上のビジュアライゼーションの移動または非表示についてを参照してください。

「表示」でキャンバスの表示に行った変更は、プレゼンテーション・フローに保存されますが、「ビジュアル化」のワークブックの設計には保存されません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. プレゼンテーション・フローに複数のキャンバスがある場合は、「表示」ページの下部に移動して、再配置するビジュアライゼーションを含むキャンバスをクリックします。
4. キャンバスで、ビジュアライゼーションをドラッグ・アンド・ドロップして、それらを再配置します。
5. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのキャンバスのリセット

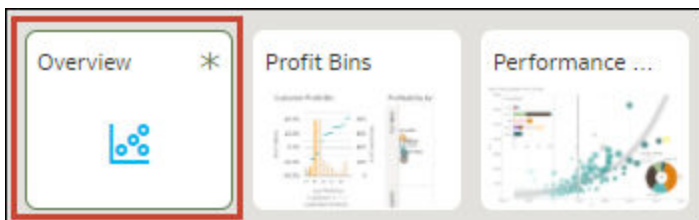
手動モードで作業している際、「調整のリセット」キャンバス・オプションを使用すると、「表示」内のキャンバスと「ビジュアル化」内のそのベース・キャンバスを同期できます。

リセットできるのは、アスタリスクが表示されているすべてのキャンバスです。アスタリスクは、そのキャンバスのレイアウトが、「ビジュアル化」のベース・キャンバスと同期していないことを示しています。

「ビジュアル化」内のキャンバスの「レイアウト」プロパティにより、キャンバスのリセット時にキャンバスに空白および重複が含まれるかどうか決定されます。「表示」のキャンバス上のビジュアライゼーションの移動または非表示についてを参照してください。

「表示」の自動モードと手動モードの切り替えを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページの下部に移動し、「キャンバス」パネルを探します。
4. 「キャンバス」パネルで、アスタリスクが表示されているキャンバスの上にカーソルを合わせて下矢印アイコンをクリックし、「調整のリセット」を選択してキャンバスをリセットします。



5. 「保存」をクリックします。

## 「表示」での「ワークブック」プロパティの設定

ワークブックは、「ビジュアル化」で設定したプロパティを継承します。「表示」を使用して、エンド・ユーザーにワークブックをどのように表示するかや、エンド・ユーザーがワークブックを移動したり操作したりする方法を指定できます。

### トピック:

- 「表示」でのワークブック・キャンバス・ナビゲーションの指定
- 「表示」でのワークブックのヘッダー・バーの表示または非表示
- 「表示」でのワークブックのヘッダー・タイトルの変更
- 「表示」でのワークブックのヘッダーの色の変更
- 「表示」でのワークブック・ヘッダーへのイメージの追加
- 「表示」でのワークブックのツールバーの表示または非表示
- 「表示」でのワークブック・ツールバー・オプションの選択
- 「表示」でのワークブックのフィルタ・バーの表示または非表示
- 「表示」でのワークブック・フィルタ・オプションの指定
- 「表示」でのワークブックのフィルタの表示または非表示
- 「表示」でのワークブック・ビジュアライゼーション・アクションの指定
- 「表示」でのワークブック・キャンバスのビジュアライゼーションの配置の変更
- 「表示」でワークブックおよびキャンバスのアクションをすべてオンまたはオフ

## 「表示」でのワークブック・キャンバス・ナビゲーションの指定

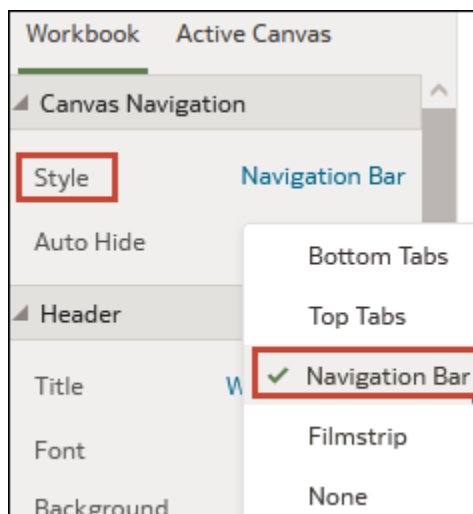
プレゼンテーション・フローを設計する際は、エンド・ユーザーがワークブックのキャンバスを移動する方法として最も適したナビゲーション・オプションを選択できます。

ワークブックのキャンバス・ナビゲーション・バーを常に表示するか、ユーザーがワークブックの下部にカーソルを合せたときにのみ表示するかを選択できます。また、ワークブックのナビゲーション・バーでのキャンバスの表示方法に対応するナビゲーション・コントロールを選択することもできます。

ナビゲーション・コントロールのオプションは次のとおりです：

- **下部タブ** - 各キャンバスを、キャンバスのタイトルを含むタブとしてワークブックの下部に表示します。ユーザーは、タブをクリックしてキャンバス間をナビゲートします。
- **上部タブ** - 各キャンバスを、キャンバスのタイトルを含むタブとしてワークブックの上部に表示します。ユーザーは、タブをクリックしてキャンバス間をナビゲートします。
- **ナビゲーション・バー** - 各キャンバスをワークブックの下部に円として表示します。ユーザーは、円をクリックしてキャンバス間をナビゲートします。
- **フィルムストリップ** - 各キャンバスをサムネイルとしてワークブックの下部に表示します。ユーザーは、サムネイルをクリックしてキャンバス間をナビゲートします。
- **なし** - ワークブックからナビゲーション・コントロールを除去します。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「**表示**」をクリックします。
3. 「表示」ページで、「**ワークブック**」タブをクリックします。
4. 「キャンバスのナビゲーション」セクションで、「**スタイル**」フィールドをクリックし、ユーザーがワークブック・キャンバス間を移動する方法を選択します。



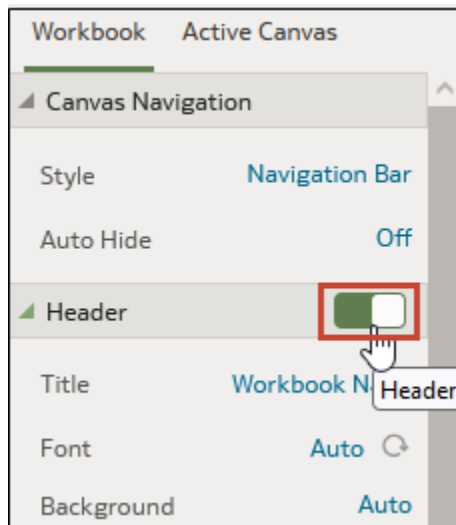
- オプション: ユーザーがワークブックの下部にマウスを置いたときにナビゲーション・パネルを表示する場合は、「自動非表示」フィールドをクリックし、「オン」を選択します。
- 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのワークブックのヘッダー・バーの表示または非表示

プレゼンテーション・フローを設計すると、ワークブックのヘッダー・バーは、デフォルトで表示に設定されます。ヘッダー・バーを表示するか非表示にするかは選択できます。

ヘッダー・バーには、指定したワークブック・タイトルが表示されます。たとえば、キャンバス名、ワークブック名またはカスタム名などです。

- ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
- 「表示」をクリックします。
- 「表示」ページで、「ワークブック」タブをクリックします。
- 「ヘッダー」セクションで、「ヘッダー」をクリックして「オフ」に切り替えてヘッダー・バーを非表示にするか、クリックして「オン」に切り替えてヘッダー・バーを表示します。



- 「保存」をクリックします。

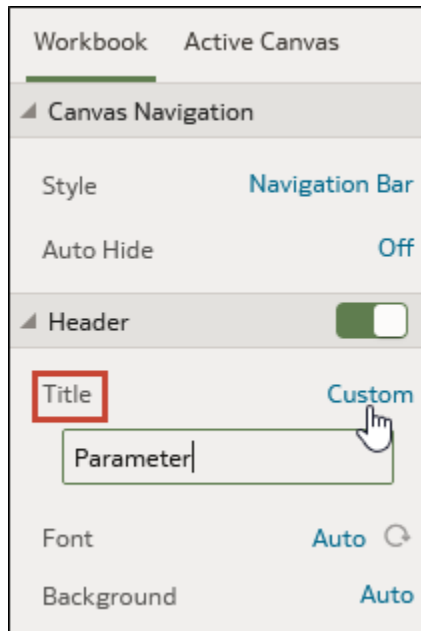
## 「表示」でのワークブックのヘッダー・タイトルの変更

プレゼンテーション・フローを設計する際、ワークブックのヘッダーとして表示する名前や、ヘッダーのテキストを書式設定する方法を指定できます。

ワークブック・ヘッダーにイメージを追加することもできます。「表示」でのワークブック・ヘッダーへのイメージの追加を参照してください。



1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページで、「ワークブック」タブをクリックします。
4. 「ヘッダー」セクションで、「タイトル」フィールドをクリックし、タイトルとして使用する名前を選択するか、「カスタム」を選択してタイトルを入力します。

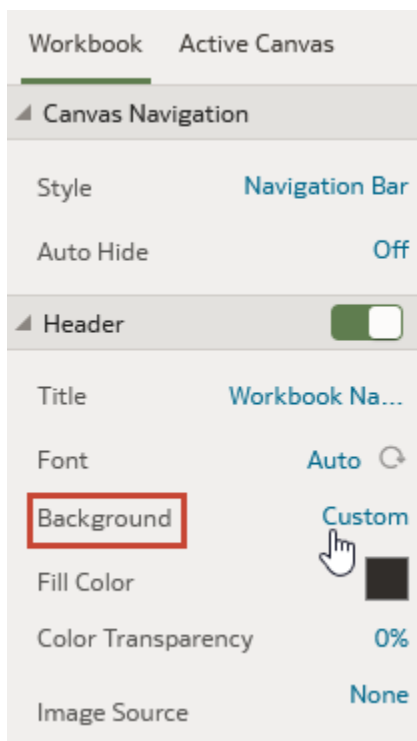


5. オプション: 「フォント」フィールドをクリックし、フォント・スタイル、フォント・サイズ、およびタイトルに使用する書式設定(太字やイタリックなど)を指定します。
6. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのワークブックのヘッダーの色の変更

プレゼンテーション・フローの設計時、ワークブックのヘッダーの背景色や透明度をカスタマイズできます。


1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページで、「ワークブック」タブをクリックします。
4. 「ヘッダー」セクションで、「背景」フィールドをクリックし、「カスタム」を選択します。

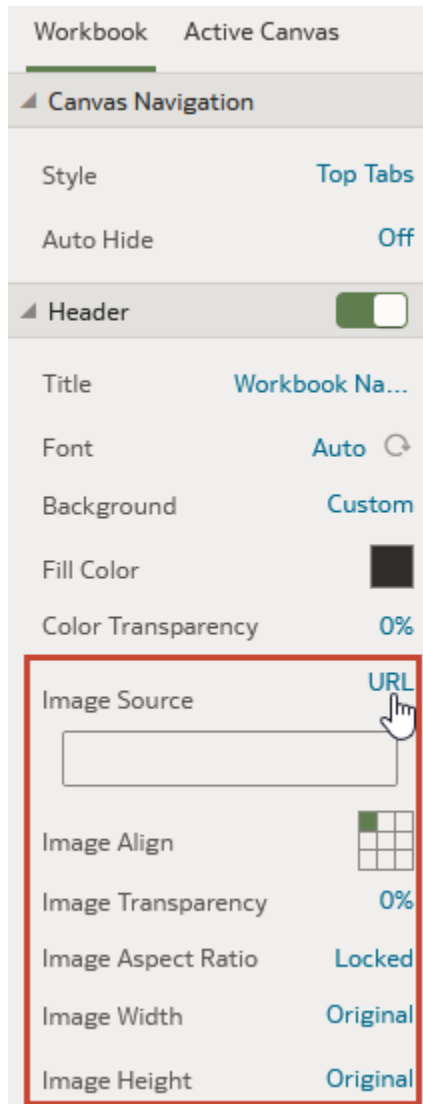


5. 「ヘッダー」セクションで、「塗りつぶしの色」と「色の透明度」のフィールドを使用して、ヘッダーの背景の表示方法を指定します。
6. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのワークブック・ヘッダーへのイメージの追加

プレゼンテーション・フローの設計時、ファイルまたは URL からワークブック・ヘッダーにイメージを追加し、イメージの表示方法を指定できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページで、「ワークブック」タブをクリックします。
4. 「ヘッダー」セクションで、「背景」フィールドをクリックし、「カスタム」を選択します。
5. 「ヘッダー」セクションで、「イメージ・ソース」フィールドをクリックし、イメージの取得場所を選択します。
  - 「URL」を選択した場合は、イメージ・ソースの URL をテキスト・フィールドに貼り付けます。
  - 「ファイル」を選択した場合は、ファイル・アップロード・アイコン  をクリックし、使用するファイルを参照して選択します。
6. 「ヘッダー」セクションで、イメージの幅や高さなど、イメージの表示プロパティを指定します。



7. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのワークブックのツールバーの表示または非表示

プレゼンテーション・フローを設計すると、ワークブックのツールバーはデフォルトで表示されます。ワークブックのツールバーをユーザーに表示するか非表示にするかを選択できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」で、「ワークブック」タブをクリックします。
4. 「ツールバー」セクションで、「ツールバー」をクリックして「オフ」に切り替えてツールバーを非表示にするか、クリックして「オン」に切り替えてツールバーを表示します。

5. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのワークブック・ツールバー・オプションの選択

ユーザーにどのワークブック・ツールバー・オプションを表示するかを指定できます。

ユーザーに表示するツールバー・プロパティを「表示」で選択できます。ツールバー・プロパティには、変更の取消しとやり直し、ワークブック・データのリフレッシュ、ノートの表示およびエクスポートが含まれます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページで、「ワークブック」タブをクリックします。
4. 「ツールバー」セクションで、非表示にするツールバー・オプションの選択を解除するか、表示するツールバー・オプションを選択します。
5. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのワークブックのフィルタ・バーの表示または非表示

プレゼンテーション・フローの設計時、ワークブックのフィルタ・バーを表示または非表示にできます。

フィルタ・バーを表示すると、ユーザーはワークブックのフィルタ値を表示、設定および変更できます。ワークブックに特定のデータが含まれるように、フィルタ値を設定した後、フィルタ・バーを非表示にできます。フィルタ・バーを非表示にすると、ユーザーはフィルタ値を変更できなくなります。

「ワークブック」タブで設定したフィルタ・バー・プロパティは、アクティブ・キャンバスの「フィルタ・アクション」プロパティに継承されます。個々のキャンバスの「ワークブック」タブのフィルタ・バー・プロパティをオーバーライドできます。

「完全な双方向性」オプションが「オフ」に設定されている場合、すべてのフィルタ・アクション・オプションはグレー表示されます。「表示」でワークブックおよびキャンバスのアクションをすべてオンまたはオフを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」で、「ワークブック」タブをクリックします。
4. 「フィルタ・バー」セクションで、「フィルタ・バー」をクリックして「オフ」に切り替えてフィルタ・バーを非表示にするか、クリックして「オン」に切り替えてフィルタ・バーを表示します。
5. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのワークブック・フィルタ・オプションの指定

プレゼンテーション・フローを設計する際、フィルタの追加またはフィルタ値の変更など、ユーザーに提供するワークブック・フィルタ・オプションを指定できます。

「ワークブック」タブで設定したオプションは、アクティブ・キャンバスの「フィルタ・アクション」プロパティに継承されます。個々のキャンバスの「ワークブック」タブのフィルタ・バー・プロパティをオーバーライドできます。

「完全な双方向性」オプションが「オフ」に設定されている場合、すべてのフィルタ・アクション・オプションはグレー表示されます。「表示」でワークブックおよびキャンバスのアクションをすべてオンまたはオフを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページで、「ワークブック」タブをクリックします。
4. 「フィルタ・バー」セクションで、非表示にするフィルタ・アクション・オプションの選択を解除するか、表示するフィルタ・アクション・オプションを選択します。
5. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのワークブックのフィルタの表示または非表示

プレゼンテーション・フローの設計時、個別のワークブック・フィルタを表示または非表示にできます。

プレゼンテーション・フローでフィルタを操作すると、表示または非表示にしたフィルタは「表示」に保存されますが、「ビジュアル化」には保存されません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「表示」ページで、「ワークブック」タブをクリックします。
4. 「ワークブック・フィルタ」セクションで、非表示にするフィルタ・アクション・オプションの選択を解除するか、表示するフィルタ・アクション・オプションを選択します。
5. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのワークブック・ビジュアライゼーション・アクションの指定

プレゼンテーション・フローの設計時、ワークブックでどのビジュアライゼーション・アクションをユーザーに対して使用可能にするかを選択できます。たとえば、ワークブックが、ビジュアライゼーション・ツールバー・アイテム(ソート、最大化またはウォッチリストへの追加など)、およびビジュアライゼーション・メニュー・アイテム(ド

リル、ファイルへのエクスポート、電子メールまたは印刷、あるいはデータのコピーなど)を提供するように指定できます。

**「ワークブック」** タブで設定したビジュアライゼーション・プロパティは、アクティブ・キャンバスの「ビジュアライゼーション・アクション」プロパティに継承されます。個々のキャンバスの **「ワークブック」** タブのビジュアライゼーション・プロパティをオーバーライドできます。[「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーション・ツールバー・オプションの選択](#)を参照してください。

**「完全な双方向性」** オプションが **「オフ」** に設定されている場合、すべてのビジュアライゼーション・アクション・オプションはグレー表示されます。[「表示」でワークブックおよびキャンバスのアクションをすべてオンまたはオフ](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. **「表示」** をクリックします。
3. 「表示」ページで、「**ワークブック**」タブをクリックします。
4. 「ビジュアライゼーション・アクション」セクションで、ユーザーが実行できないようにするアクションの選択を解除するか、ユーザーが実行できるようにするアクションを選択します。
5. **「保存」** をクリックします。

## 「表示」でのワークブック・キャンバスのビジュアライゼーションの配置の変更

プレゼンテーション・フローの設計時、ビジュアライゼーションを、ワークブックのキャンバスのどこに表示するかを制御できます。このため、エンド・ユーザーの画面サイズや解像度に基づいて、ビジュアライゼーションの最適な配置を選択できます。

たとえば、ワークブックのキャンバスのそれぞれにビジュアライゼーションが 1 つある場合、**「中央」** を選択すると、ビジュアライゼーションの周りに空白を入れて、キャンバスの中央に配置することができます。

「配置」オプションは次のとおりです:

- **左上** - キャンバス上でビジュアライゼーションの右側には空白を入れますが、キャンバスの上部と左側には入れません。これがデフォルト値です。
- **中央上** - キャンバス上でビジュアライゼーションの左側と右側には空白を入れますが、キャンバスの上部には入れません。
- **中央** - キャンバス上でビジュアライゼーションの上部と左側、右側に空白を入れます。

キャンバス上のビジュアライゼーションの位置も変更できます。[「表示」のキャンバスにおけるビジュアライゼーションの配置の変更](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. **「表示」** をクリックします。
3. 「表示」ページで、「**ワークブック**」タブをクリックします。
4. 「プレゼンテーション・レイアウト」セクションで、「**文字スペースの位置合せ**」フィールドに移動し、配置を選択します。
5. **「保存」** をクリックします。

## 「表示」でワークブックおよびキャンバスのアクションをすべてオンまたはオフ

プレゼンテーション・フローを設計すると、すべてのフィルタ・バーおよびビジュアライゼーション・アクションがデフォルトでオンになります。アクションのオンとオフを個別に切り替えることも、「**完全な双方向性**」オプションを使用して、ワークブックのキャンバスのすべてのアクションを 1 回のクリックで切り替えることもできます。

フィルタ・アクションの例として、フィルタの追加、フィルタの削除およびフィルタ値選択の変更があります。ビジュアライゼーションの例として、ドリル、エクスポートおよびソート基準などがあります。

ユーザーが実行できるすべてのフィルタおよびビジュアライゼーション・アクションをすべてのキャンバスでオフにするには、「**完全な双方向性**」フィールドを「**オフ**」に設定します。

「**完全な双方向性**」フィールドを「**オン**」にすると、個別のフィルタおよびビジュアライゼーション・アクションを設定して、ユーザーがどのようにワークブックおよびキャンバスを操作するかを指定できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「**表示**」をクリックします。
3. 「表示」ページで、「**ワークブック**」タブをクリックします。
4. 「双方向性」セクションで、「**完全な双方向性**」フィールドに移動します。
  - 「**オフ**」を選択すると、すべてのキャンバス上のすべてのフィルタおよびビジュアライゼーション・アクションが無効になります。
  - 「**オン**」を選択すると、すべてのキャンバス上のすべてのフィルタおよびビジュアライゼーション・アクションが有効になります。
5. 「**保存**」をクリックします。

## 「表示」での「キャンバス」プロパティの設定

プレゼンテーション・フローで、各キャンバスは、「表示」の「**ワークブック**」タブで設定したワークブック・プロパティを継承します。キャンバスの継承されたプロパティは変更できます。

### トピック:

- 「表示」でのキャンバス・フィルタ・アクションの指定
- 「表示」でのキャンバス・フィルタの表示または非表示
- 「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーション・ツールバー・オプションの選択
- 「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーション・メニュー・オプションの指定
- 「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーションの表示または非表示
- 「表示」でのキャンバス・ノートの表示または非表示

## 「表示」でのキャンバス・フィルタ・アクションの指定

プレゼンテーション・フローの設計時、各キャンバスは、「ワークブック」タブで設定したフィルタ・アクションを継承します。「アクティブ・キャンバス」タブを使用すると、フィルタの追加またはフィルタ値の変更など、個々のキャンバスのフィルタ・アクションをカスタマイズできます。

フィルタ・バーを表示すると、ユーザーはキャンバスのフィルタ値を表示、設定および変更できます。キャンバスに特定のデータが含まれるように、フィルタ値を設定した後、フィルタ・バーを非表示にできます。フィルタ・バーを非表示にすると、ユーザーはフィルタ値を変更できなくなります。

「表示」で変更したフィルタ設定あるいは追加または削除したフィルタ値は、プレゼンテーション・フローのキャンバスに保存されますが、「ビジュアル化」のキャンバスには保存されません。

**「完全な双方向性」** オプションが「ワークブック」タブで「オフ」に設定されている場合、すべてのフィルタ・アクション・オプションはグレー表示されます。「表示」でワークブックおよびキャンバスのアクションをすべてオンまたはオフを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. プレゼンテーション・フローに複数のキャンバスがある場合は、「表示」ページの下部に移動して、フィルタを更新するキャンバスをクリックします。
4. 「表示」ページで、「アクティブ・キャンバス」タブをクリックします。
5. 「フィルタ・バー」セクションまでスクロールし、「フィルタ・アクション」領域で非表示にするフィルタ・バー・オプションの選択を解除するか、表示するオプションを選択します。
6. オプション: 「カスタム」をクリックしてから「自動」をクリックし、「ワークブック」タブで指定したすべてのビジュアライゼーション・アクションをデフォルト設定にリセットします。
7. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのキャンバス・フィルタの表示または非表示

プレゼンテーション・フローの設計時、個別のキャンバス・フィルタを表示または非表示にできます。

「表示」で表示または非表示にしたフィルタは、プレゼンテーション・フローのキャンバスに保存されますが、「ビジュアル化」のキャンバスには保存されません。

**「完全な双方向性」** オプションが「ワークブック」タブで「オフ」に設定されている場合、すべてのキャンバス・フィルタ・オプションはグレー表示されます。「表示」でワークブックおよびキャンバスのアクションをすべてオンまたはオフを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. プレゼンテーション・フローに複数のキャンバスがある場合は、「表示」ページの下部に移動して、フィルタを更新するキャンバスをクリックします。



4. 「表示」ページで、「**アクティブ・キャンバス**」タブをクリックします。
5. 「キャンバス・フィルタ」領域で、キャンバスで非表示にするフィルタの選択を解除するか、表示するフィルタを選択します。
6. 「**保存**」をクリックします。

## 「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーション・ツールバー・オプションの選択

プレゼンテーション・フローの設計時、各キャンバスは、「**ワークブック**」タブで設定したビジュアライゼーション・ツールバー・オプションを継承します。「**アクティブ・キャンバス**」タブを使用すると、「マップ・アクション」または「ウォッチリストに追加」など、ワークブックに設定されているビジュアライゼーション・ツールバー・オプションをオーバーライドできます

「表示」で変更したビジュアライゼーション設定は、プレゼンテーション・フローのキャンバスに保存されますが、「ビジュアル化」のキャンバスには保存されません。

**「完全な双方向性」** オプションが「**ワークブック**」タブで「**オフ**」に設定されている場合、すべてのビジュアライゼーション・アクション・オプションはグレー表示されます。「**表示**」で**ワークブック**および**キャンバスのアクション**をすべて**オン**または**オフ**を参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**開く**」を選択します。
2. 「**表示**」をクリックします。
3. プレゼンテーション・フローに複数のキャンバスがある場合は、「表示」ページの下部に移動して、フィルタを更新するキャンバスをクリックします。
4. 「表示」ページで、「**アクティブ・キャンバス**」タブをクリックします。
5. 「ビジュアライゼーション・ツールバー」セクションまでスクロールし、ビジュアライゼーション・ツールバーからユーザーが実行できないようにするアクションをクリックして非表示にするか、ビジュアライゼーション・ツールバーからユーザーが実行できるようにするアクションをクリックして追加します。
6. オプション: 「**カスタム**」をクリックしてから「**自動**」をクリックし、「**ワークブック**」タブで指定したすべてのビジュアライゼーション・アクションをデフォルト設定にリセットします。
7. 「**保存**」をクリックします。

## 「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーション・メニュー・オプションの指定

プレゼンテーション・フローの設計時、各キャンバスは、「**ワークブック**」タブで設定したビジュアライゼーション・メニュー・オプションを継承します。「**アクティブ・キャンバス**」タブを使用すると、ドリルまたはエクスポートなど、ユーザーに提供するビジュアライゼーション・メニュー・オプションを指定できます

「表示」で変更したビジュアライゼーション設定は、プレゼンテーション・フローのキャンバスに保存されますが、「ビジュアル化」のキャンバスには保存されません。

**「完全な双方向性」** オプションが「**ワークブック**」タブで「**オフ**」に設定されている場合、すべてのビジュアライゼーション・アクション・オプションはグレー表示されま

す。「表示」でワークブックおよびキャンバスのアクションをすべてオンまたはオフを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. プレゼンテーション・フローに複数のキャンバスが含まれている場合は、「表示」ページの下部に移動して、ユーザー・アクションを変更するキャンバスをクリックします。
4. 「表示」ページで、「アクティブ・キャンバス」タブをクリックします。
5. 「ビジュアライゼーション・メニュー」セクションまでスクロールし、ビジュアライゼーションからユーザーが実行できないようにするアクションをクリックして非表示にするか、ビジュアライゼーション・メニューからユーザーが実行できるようにするアクションをクリックして追加します。
6. オプション: 「カスタム」をクリックしてから「自動」をクリックし、「ワークブック」タブで指定したすべてのビジュアライゼーション・アクションをデフォルト設定にリセットします。
7. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのキャンバス・ビジュアライゼーションの表示または非表示

手動モードで作業している際は、キャンバス上の個々のビジュアライゼーションを非表示にしたり表示したりすることができます。

「ビジュアル化」内のキャンバスの「レイアウト」プロパティにより、ビジュアライゼーションの非表示または表示時にキャンバスに空白および重複が含まれるかどうかが決まります。「表示」のキャンバス上のビジュアライゼーションの移動または非表示についてを参照してください。

「表示」の自動モードと手動モードの切り替えを参照してください。

「表示」でビジュアライゼーションを表示または非表示にすると、変更はプレゼンテーション・フローのキャンバスに保存されますが、「ビジュアル化」には保存されません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. プレゼンテーション・フローに複数のキャンバスが含まれている場合は、「表示」ページの下部に移動して、ビジュアライゼーションを表示または非表示にするキャンバスをクリックします。
4. 「表示」ページで、「アクティブ・キャンバス」タブをクリックします。
5. 「ビジュアライゼーション」セクションまでスクロールし、キャンバスで非表示にするビジュアライゼーションの選択を解除するか、表示するビジュアライゼーションを選択します。
6. 「保存」をクリックします。

## 「表示」でのキャンバス・ノートの表示または非表示

プレゼンテーション・フローを設計すると、デフォルトですべてのキャンバス・ノートが表示されます。「アクティブ・キャンバス」タブを使用すると、表示または非表示にするキャンバス・ノートを指定できます



ノートの一部または全部をキャンバスに表示されたままにした場合は、ワークブックをプレビューするときに、「ノートの非表示」ワークブック・ヘッダー・ボタンをクリックして、非表示になっていないすべてのノートをオフまたはオンに切り替えることができます。また、ユーザーがワークブックを表示するときに、「ノートの非表示」ヘッダー・ボタンをクリックして、非表示になっていないすべてのノートをオフまたはオンに切り替えることもできます。[ビジュアライゼーションのノートの表示または非表示](#)を参照してください。

「表示」で表示または非表示にしたノートは、プレゼンテーション・フローのキャンバスに保存されますが、「ビジュアル化」のキャンバスには保存されません。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. プレゼンテーション・フローに複数のキャンバスが含まれている場合は、「表示」ページの下部に移動して、ノートを表示または非表示にするキャンバスをクリックします。
4. 「表示」ページで、「アクティブ・キャンバス」タブをクリックします。
5. 「ノート」セクションまでスクロールし、キャンバスで非表示にするノートの選択を解除するか、表示するノートを選択します。
6. 「保存」をクリックします。

## プレゼンテーション・フローのプレビュー

作成者として「表示」ページを使用してプレゼンテーション・フローを設計すると、ユーザーにどのように表示されるかをプレビュー・モードでテストし、設計しているワークブックを操作できます。プレビュー・モードに切り替えると、プレゼンテーション・フローのワークブックとキャンバスのオプション、キャンバス・パネルがなくなります。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「表示」をクリックします。
3. 「プレビュー」をクリックして、ユーザーに表示されるワークブックを確認します。
4. 「編集」をクリックしてワークブックのプレビュー・モードを終了し、「表示」ページのプレゼンテーション・フローに戻ります。

# Oracle Analytics 予測モデルおよび Oracle 機械学習モデルの使用

Oracle Analytics では、Oracle Database、Oracle Autonomous Data Warehouse または Oracle Cloud Infrastructure (OCI)に存在する予測モデルまたは機械学習モデルを使用できます。データに予測モデルを適用すると、機械学習(ML)や人工知能(AI)の専門知識を必要とせずに、アプリケーションに ML や AI を構築できます。

## トピック:

- [Oracle Analytics がサポートする機械学習および人工知能サービス](#)
- [Oracle Analytics 予測モデルの作成および使用](#)
- [Oracle Analytics での Oracle 機械学習モデルの使用](#)
- [予測モデルまたは登録されている Oracle 機械学習モデルのデータセットへの適用](#)
- [オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析の実行](#)
- [Oracle Analytics での OCI Data Science モデルの使用](#)
- [Oracle Analytics での OCI Language モデルの使用](#)
- [Oracle Analytics での OCI Document Understanding モデルの使用](#)

## Oracle Analytics がサポートする機械学習および人工知能サービス

Oracle Analytics では、データ・サイエンティストの専門知識がなくてもアプリケーションに機械学習と人工知能を構築できます。

Oracle Analytics は次のものと統合します:

- OCI Artificial Intelligence
- OCI Data Science
- OCI 関数
- OCI Language
- OCI Vision
- Oracle Database Machine Learning
- Oracle Database Advanced Analytics (データベース・アナリティクスおよびグラフ・アナリティクス)
- Oracle Autonomous Data Warehouse (AutoML 機能など)。

# Oracle Analytics 予測モデルの作成および使用

Oracle Analytics 予測モデルは、いくつかの埋込み Oracle Machine Learning アルゴリズムを使用して、データセットのマイニング、ターゲット値の予測、またはレコードのクラスの識別を行います。予測モデルの作成やトレーニング、データへの適用には、データ・フロー・エディタを使用します。

## トピック:

- [Oracle Analytics 予測モデルとは](#)
- [予測モデル・アルゴリズムの選択方法](#)
- [Oracle Autonomous Data Warehouse の AutoML を使用した予測モデルのトレーニング](#)
- [予測モデルの作成およびトレーニング](#)
- [予測モデルの検査](#)
- [ワークブックへの予測モデルの追加](#)
- [リフト・チャートおよびゲイン・チャートを使用した機械学習モデルの評価](#)

## Oracle Analytics 予測モデルとは

Oracle Analytics 予測モデルは、特定のアルゴリズムをデータセットに適用して、値の予測、クラスの予測またはデータ内のグループの識別を行います。

Oracle 機械学習モデルは、データの予測にも使用できます。

Oracle Analytics には、様々な目的のための予測モデルのトレーニングに役立つアルゴリズムが含まれます。アルゴリズムの例として、分類、回帰ツリー(CART)、ロジスティック回帰および K 平均法があります。

まず、データ・フロー・エディタを使用して、トレーニング・データセットでモデルをトレーニングします。予測モデルをトレーニングしたら、予測するデータセットに適用します。

トレーニングされたモデルは、他のユーザーに対して使用可能にでき、そのユーザーはこれをデータに適用し値を予測できます。場合によっては、特定のユーザーがモデルをトレーニングし、他のユーザーがモデルを適用します。

### ノート:

データ内で何を検索するか不明な場合、機械学習を使用してトレンドおよびパターンを特定する Explain を使用することで操作を開始できます。次に、データ・フロー・エディタを使用して、予測モデルを作成およびトレーニングし、Explain によって検出されたトレンドおよびパターンをドリルできます。

データ・フロー・エディタを使用して、モデルをトレーニングします:

- 最初に、データ・フローを作成して、モデルのトレーニングに使用するデータセットを追加します。このトレーニング・データセットには、予測するデータが含まれます(たとえば、売上または年齢などの値、あるいは信用リスク・バケットなどの変数)。
- 必要な場合、データ・フロー・エディタを使用して、列の追加、列の選択、結合などを行い、データセットを編集できます。
- データが、モデルをトレーニングする対象であることを確認したら、トレーニング・ステップをデータ・フローに追加して、モデルをトレーニングするための分類(二項または多項)、回帰またはクラスタ・アルゴリズムを選択します。次に、結果として作成されるモデルに名前を付け、データ・フローを保存して実行し、モデルをトレーニングし作成します。
- 機械言語オブジェクト内のプロパティを調査し、モデルの品質を判断します。必要な場合、モデルの品質が必要なレベルに到達するまで、トレーニング・プロセスを繰り返します。

終了したモデルを使用して、未知、つまりラベル付けされていないデータをスコアリングしてデータ・フロー内でデータセットを生成したり、予測ビジュアライゼーションをワークブックに追加したりできます。

### 例

多項分類モデルを作成しトレーニングして、どの患者に心臓病の発症リスクが高いかを予測すると仮定します。

1. 年齢、性別、および胸痛の症状が過去にあったかなどの各患者の属性、ならびに血圧、空腹時血糖、コレステロールおよび最大心拍数などのメトリックを含むトレーニング・データセットを指定します。トレーニング・データセットには、"尤度"という名前の列も含まれ、これには次のいずれかの値が割り当てられます: なし、起こり得る可能性が低い、起こり得る可能性がある、起こり得る可能性が高い、あり。
2. CART (ディビジョン・ツリー)アルゴリズムでは、予測に値が追加されない重複列は無視され、ターゲットの予測に有用な列のみが使用されるため、これを選択します。アルゴリズムをデータ・フローに追加する際、モデルをトレーニングするための尤度列を選択します。アルゴリズムは、機械学習により、予測および関連データセットの実行および出力に必要なドライバ列を選択します。
3. 結果を検査し、トレーニング・モデルを微調整した後、モデルをより大きいデータセットに適用し、どの患者が心臓病を発症するリスクが高いかを予測します。

## 予測モデル・アルゴリズムの選択方法

Oracle Analytics は、機械言語のあらゆるモデリング・ニーズに対するアルゴリズム(数値、予測、多項分類子、二項分類子、クラスタリング)を提供しています。

オラクルの機械言語は、データ内で何を探しているかについてのアイデアを持ち、予測分析の慣習に精通し、アルゴリズム間の相違を理解している上級データ・アナリストを対象にしています。

 ノート:

Oracle Autonomous Data Warehouse をソースとするデータを使用している場合は、機械学習のスキルがなくても、AutoML 機能を使用して、予測モデルを簡単にトレーニングできます。「*Autonomous Data Warehouse の AutoML を使用した予測モデルのトレーニング*」を参照してください。

通常、ユーザーは、複数の予測モデルを作成し、それらを比較して、基準および要件を満たす結果を出す可能性が最も高いモデルを選択します。この基準は様々です。たとえば、正確性が全体的に高いモデルを選択する、最低限タイプ I (偽陽性) およびタイプ II (偽陰性) エラーがあるモデルを選択する、または理想的ではないが結果が迅速に返され、その正確性が許容範囲であるモデルを選択する場合などがあります。

Oracle Analytics には、予測または分類各種に対する複数の機械言語アルゴリズムがあります。これらのアルゴリズムを使用して、複数のモデルを作成する、微調整された様々なパラメータを使用する、または様々な入力トレーニング・データ・セットを使用するなどして、最適なモデルを選択します。ユーザーは、独自の基準に対してモデルを比較および検討し、最適なモデルを選択できます。ユーザーは、最適なモデルを選択するために、モデリングおよびビジュアル化の計算結果を適用して正確性を判断したり、Oracle Analytics がモデルを使用して出力した関連データセットを開き探索したりできます。

この表を参照して、提供されているアルゴリズムについて学習します。

| 名前               | タイプ      | カテゴリ                  | 関数         | 説明                                                                                                                   |
|------------------|----------|-----------------------|------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| CART             | 分類<br>回帰 | 二項分類子<br>多項分類子<br>数値型 | -          | ディビジョン・ツリーを使用して、個別の値と連続的な値の両方を予測します。より大きいデータセットで使用します。                                                               |
| Elastic Net 線形回帰 | 回帰       | 数値型                   | ElasticNet | 詳細回帰モデル。追加情報(正則化)を提供し、変数選択を実行して、線形結合を実行します。Lasso 回帰法およびリッジ回帰法のペナルティ。共線性(複数の属性が完全に相関する)および過剰適合を回避するために多数の属性とともに使用します。 |



| 名前          | タイプ     | カテゴリ           | 関数                      | 説明                                                                                                                                               |
|-------------|---------|----------------|-------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 階層          | クラスタリング | クラスタリング        | AgglomerativeClustering | ボトムアップ(各観測がそれ独自のクラスターであり、マージされます)またはトップ・ダウン(すべての観測が 1 つのクラスターとして開始されます)のいずれか、および距離メトリックを使用してクラスタリングの階層を構築します。データセットが大きく、クラスター数が事前にわからない場合に使用します。 |
| K 平均法       | クラスタリング | クラスタリング        | k-means                 | 最も近い平均値のクラスターに各観測が属するように、レコードを K クラスターに繰り返しパーティション化します。クラスタリング・メトリック列に対して、必要なクラスター数の一連の期待値とともに使用します。大規模なデータセットで適切に機能します。結果は実行ごとに異なります。           |
| 線形回帰        | 回帰      | 数値型            | 最小二乗法<br>リッジ<br>Lasso   | ターゲット変数およびデータセット内のその他の属性間のモデリング関係に対する線形アプローチ。属性が完全に相関していない場合に数値の予測に使用します。                                                                        |
| ロジスティック回帰   | 回帰      | 二項分類子          | LogisticRegressionCV    | カテゴリ従属変数の値の予測に使用します。従属変数は、1 または 0 にコーディングされるデータを含む二項変数です。                                                                                        |
| Naive Bayes | 分類      | 二項分類子<br>多項分類子 | GaussianNB              | 特徴間に従属がないと見なす Bayes の定理に基づく確率的な分類。入力ディメンションが多数ある場合に使用します。                                                                                        |



| 名前           | タイプ | カテゴリ                  | 関数            | 説明                                                                                                           |
|--------------|-----|-----------------------|---------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ニューラル・ネットワーク | 分類  | 二項分類子<br>多項分類子        | MLPClassifier | 分類結果を実際の値と比較して学習し、それをネットワークに返し、さらなる反復のためにアルゴリズムを変更する反復分類アルゴリズム。<br>テキスト分析に使用します。                             |
| ランダム・フォレスト   | 分類  | 二項分類子<br>多項分類子<br>数値型 | -             | 複数のディシジョン・ツリーを構築し、すべてのディシジョン・ツリーを集合的に表す値を出力するアンサンブル学習法です。<br>数値およびカテゴリ変数の予測に使用します。                           |
| SVM          | 分類  | 二項分類子<br>多項分類子        | LinearSVC、SVC | レコードを空間にマッピングし、分類に使用できる超平面を構築することでレコードを分類します。新規レコード(スコアリング・データ)は空間にマップされ、それがあてはまる超平面の面に基づくカテゴリに属することが予測されます。 |

## Oracle Autonomous Data Warehouse の AutoML を使用した予測モデルのトレーニング

Oracle Autonomous Data Warehouse のデータを使用する場合、その AutoML 機能を使用して予測モデルの推奨およびトレーニングを行うことができます。AutoML によってデータが分析され、使用する最善のアルゴリズムが計算され、データに関する予測を実行できるように予測モデルが Oracle Analytics に登録されます。

AutoML を使用すると、困難な作業が Oracle Autonomous Data Warehouse によってすべて自動で行われるため、機械学習や人工知能のスキルがなくても予測モデルをデプロイできます。生成された予測モデルは、「機械学習」ページの「モデル」領域に保存されます。新しいモデルに基づいてデータを予測するには、データ・フローを作成し、「**モデルの適用**」ステップを使用します。

開始する前に:

- 予測の対象となる Oracle Autonomous Data Warehouse のデータに基づいて、データセットを作成します。たとえば、従業員減少に関するデータに、減少の 'Yes' または 'No' を示す ATTRITION というフィールドを含めることができます。
- Oracle Analytics から Oracle Autonomous Data Warehouse への接続で指定されているデータベース・ユーザーが OML\_Developer ロールを持っていること、および

'admin'スーパーユーザーではないことを確認してください。そうしない場合、データ・フローを保存または実行しようとするすると失敗します。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「データ・フロー」をクリックします。
2. 「データセットの追加」で、分析するデータが含まれる Oracle Autonomous Data Warehouse に基づいてデータセットを選択します。
3. 「ステップの追加」をクリックし、「AutoML」をクリックします。
4. 「ターゲット」で、「列の選択」をクリックし、予測しようとする値が含まれるデータ列を選択します。

たとえば、従業員減少を予測する場合は、従業員が退社したかどうかを'TRUE'または'FALSE'で示す ATTRITION というフィールドを選択します。

The screenshot shows the 'New Data Flow' configuration page. The 'AutoML' step is selected. The configuration for the AutoML step is as follows:

- Target: ATTRITION (highlighted with a red box and a red circle)
- Task Type: Classification
- Model Ranking Metric: Accuracy

Below the configuration, a data table is displayed with the following columns: AGE, ATTRITION, TRAVELFORW..., SALARYLEVEL, and JOBFUNCTION. The 'ATTRITION' column is highlighted with a red box.

| 99 | AGE | ab | ATTRITION | ab | TRAVELFORW... | 99 | SALARYLEVEL | ab | JOBFUNCTION        |
|----|-----|----|-----------|----|---------------|----|-------------|----|--------------------|
| 53 |     |    | FALSE     |    | infrequent    |    | 1182        |    | Software Developer |
| 38 |     |    | FALSE     |    | infrequent    |    | 6704        |    | Software Developer |
| 36 |     |    | FALSE     |    | often         |    | 916         |    | Software Developer |
| 26 |     |    | FALSE     |    | infrequent    |    | 4352        |    | Software Developer |

5. Oracle Analytics により推奨されたタスク・タイプおよびモデル・ランキング・メトリックを受け入れるか、別のアルゴリズムを選択します。
6. 「モデルの保存」をクリックし、生成された予測モデルの名前を指定します。
7. 「保存」をクリックし、データ・フローの名前を指定します。
8. 「実行」をクリックして、データを分析し、予測モデルを生成します。
9. ホーム・ページから「ナビゲート」、「機械学習」の順にクリックし、生成されたモデルを右クリックして「検査」を選択します。

## 予測モデルの作成およびトレーニング

上級データ・アナリストは、解決する必要がある問題に基づいて適切なアルゴリズムを選択し、予測モデルをトレーニングしてモデルの結果を評価します。

[LiveLabs スプリント](#)

正確なモデルへの到達とは反復的なプロセスであり、上級データ・アナリストは、様々なモデルを試し、その結果を比較して、試行の繰返しに基づきパラメータを微調整します。デー

タ・アナリストは、最終決定された正確な予測モデルを使用して、他のデータセット内のトレンドを予測したり、ワークブックにモデルを追加したりできます。

### ノート:

Oracle Autonomous Data Warehouse がソースのデータを使用している場合は、AutoML 機能を使用すると、機械学習のスキルがなくても予測モデルをすばやく簡単に自動でトレーニングできます。Autonomous Data Warehouse の AutoML を使用した予測モデルのトレーニングに関する項を参照してください。

Oracle Analytics は、数値予測、多項分類、二項分類およびクラスタリングのためのアルゴリズムを提供しています。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「データ・フロー」を選択します。
2. モデルのトレーニングに使用するデータセットを選択します。「追加」をクリックします。
3. データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」(+ )をクリックします。

データセットを追加したら、データセットのすべての列を使用してモデルを作成する、または関連する列のみを選択することができます。関連する列を選択するには、データセットを理解している必要があります。結果動作に影響しないことがわかっている列または重複する情報を含む列は無視します。「列の選択」ステップを追加することで、関連する列のみを選択できます。関連する列が不明な場合、すべての列を使用します。
4. モデルのトレーニング・ステップのいずれかを選択します(「数値予測のトレーニング」または「クラスタリングのトレーニング」など)。
5. アルゴリズムを選択して「OK」をクリックします。
6. 予測または分類などの監視対象モデルを操作している場合、「ターゲット」をクリックして、予測しようとしている列を選択します。たとえば、個人の所得を予測するモデルを作成している場合、所得列を選択します。

クラスタリングなどの監視対象外モデルを操作している場合、ターゲット列は必要ありません。
7. モデルのデフォルト設定を変更して、予測された結果の正確性を微調整し改善します。操作しているモデルにより、これらの設定が決定されます。
8. 「モデルの保存」ステップをクリックして、名前と説明を指定します。
9. 「保存」をクリックして、データ・フローの名前および説明を入力し、「OK」をクリックしてデータ・フローを保存します。
10. 「データ・フローの実行」をクリックして、指定した入力データセットおよびモデル設定に基づいて予測モデルを作成します。

## 機械学習モデルのトレーニングのデータ・フロー・ステップ

Oracle Analytics では、データ・フローのステップを使用して、機械学習モデルをトレーニングできます。機械学習モデルのトレーニングを完了したら、「**モデルの適用**」ステップを使用して、データに適用します。

| ステップ名                                                    | 説明                                                                                                                                               |
|----------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>AutoML (Oracle Autonomous Data Warehouse use が必要)</b> | 予測モデルの推奨やトレーニングには、Oracle Autonomous Data Warehouse の AutoML 機能を使用します。AutoML ステップによってデータが分析され、使用する最善のアルゴリズムが計算され、予測モデルが Oracle Analytics に登録されます。 |
| <b>二項分類子のトレーニング</b>                                      | 機械学習モデルをトレーニングして、データを 2 つの事前定義済カテゴリのいずれかに分類します。                                                                                                  |
| <b>クラスタリングのトレーニング</b>                                    | 機械学習モデルをトレーニングして、似たような特徴を持つグループを分離し、それらをクラスタに割り当てます。                                                                                             |
| <b>多項分類子のトレーニング</b>                                      | 機械学習モデルをトレーニングして、データを 3 つ以上の事前定義済カテゴリに分類します。                                                                                                     |
| <b>数値予測のトレーニング</b>                                       | 機械学習モデルをトレーニングして、既知のデータ値に基づいて数値を予測します。                                                                                                           |

## 予測モデルの検査

予測モデルを作成し、データ・フローを実行すると、モデルに関する情報を確認して、その正確性を判断できます。この情報を使用して、モデルの設定を繰り返し調整することで、その正確性を向上させ、より質の高い結果を予測します。

### トピック:

- [予測モデルの詳細の表示](#)
- [予測モデルの質の評価](#)
- [予測モデルの関連データセットとは](#)
- [予測モデルの関連データセットの検出](#)

## 予測モデルの詳細の表示

予測モデルの詳細情報は、モデルの理解およびデータの予測に適しているかどうかの判断に役立ちます。モデルの詳細には、そのモデル・クラス、アルゴリズム、入力列および出力列が含まれます

1. ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」をクリックし、「**機械学習**」をクリックします。
2. トレーニング・モデルのメニュー・アイコンをクリックして「**検査**」を選択します。

3. 「詳細」をクリックしてモデルの情報を表示します。

## 予測モデルの質の評価

予測モデルの質の理解に役立つ情報を表示します。たとえば、モデル精度、適合率、再現率、F1 値、偽陽性比率などの正確性のメトリックを確認できます。

Oracle Analytics は、モデルの作成に使用されたアルゴリズムに関係なく、同様のメトリックを提供するため、様々なモデル間の比較を容易にします。モデル作成のプロセス中、入力データセットは、トレイン・パーティション率パラメータに基づいて、モデルをトレーニングおよびテストする 2 つの部分に分割されます。このモデルでは、データセットのテスト部分を使用して、作成されたモデルの正確性をテストします。

「品質」タブの知見に基づいて、モデル・パラメータを調整して再トレーニングする必要がある場合があります。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「機械学習」をクリックします。
2. トレーニング・モデルのメニュー・アイコンをクリックして「検査」を選択します。
3. 「品質」タブをクリックしてモデルの質のメトリックを確認します。

## 予測モデルの関連データセットとは

データ・フローを実行して Oracle Analytics 予測モデルのトレーニング・モデルを作成すると、Oracle Analytics によって一連の関連データセットが作成されます。これらのデータセットについてワークブックを開き作成すると、モデルの正確性を確認できます。

### LiveLabs スプリント

関連データセットには、モデルに選択したアルゴリズムに応じて、予測ルール、正確性メトリック、混同マトリックス、予測のキー・ドライバなどのモデルに関する詳細が含まれます。この情報を使用して、より質の高い結果を得られるようにモデルを微調整したり、関連データセットを使用してモデルを比較し、どのモデルがより正確かを決定したりできます。

たとえば、ドライバ・データセットを開いて、どの列に、モデルに対するプラスまたはマイナスの強い影響があるかを検出できます。これらの列を確認することで、一部の列が、現実的な入力ではないためモデル変数として扱われないこと、またはそれらが予測に対して細分化されすぎていることがわかります。データ・フロー・エディタを使用してモデルを開き、検出した情報に基づいて、関係のない、または細分化されすぎている列を除去し、モデルを再生成します。「品質」および「結果」タブを確認して、モデルの正確性が向上しているかどうかを確認します。デルの正確性に満足し、新しいデータセットのスコアリングの準備が完了するまで、このプロセスを続行します。

様々なアルゴリズムにより、類似の関連データセットが生成されます。個々のパラメータおよび列名は、アルゴリズムのタイプに応じてデータセット内で変わる場合がありますが、データセットの機能は変わりません。たとえば、統計データセット内の列名は、線形回帰からロジスティック回帰に変更される場合がありますが、統計データセットには、モデルの正確性メトリックが含まれます。

これらは、関連データセットです：

## CARTree

このデータセットは、ターゲット列の値の予測を算出する **CART** (ディシジョン・ツリー)の表形式表現です。ディシジョン・ツリーの条件および条件の基準、各グループの予測、および予測の信頼度を表す列が含まれます。組込みツリー・ダイアグラム・ビジュアライゼーションを使用して、このディシジョン・ツリーをビジュアル化できます。

CARTree データセットは、これらのモデルとアルゴリズムの組合せを選択したときに出力されます。

| モデル  | アルゴリズム            |
|------|-------------------|
| 数値   | 数値予測の CART        |
| 二項分類 | CART (ディシジョン・ツリー) |
| 多項分類 | CART (ディシジョン・ツリー) |

## 分類レポート

このデータセットは、ターゲット列の各個別の値の正確性メトリックの表形式表現です。たとえば、ターゲット列に 2 つの個別の値(「はい」と「いいえ」)を指定できる場合、このデータセットは、ターゲット列の各個別の値に対する、**F1**、適合率(Precision)、再現率(Recall)、サポート(この値を含むトレーニング・データセット内の行数)などの正確性メトリックを表示します。

分類データセットは、これらのモデルとアルゴリズムの組合せを選択したときに出力されます。

| モデル  | アルゴリズム                                       |
|------|----------------------------------------------|
| 二項分類 | Naive Bayes<br>ニューラル・ネットワーク<br>サポート・ベクター・マシン |
| 多項分類 | Naive Bayes<br>ニューラル・ネットワーク<br>サポート・ベクター・マシン |

## 混同マトリックス

エラー・マトリックスとも呼ばれるこのデータセットは、ピボット表レイアウトです。各行は予測されたクラスのインスタンスを表し、各列は実際のクラス内のインスタンスを表します。この表は、偽陽性、偽陰性、真陽性および真陰性の数を示しており、これらは適合率(precision)、再現率(recall)および **F1** の正確性メトリックの算出に使用されます。

混同マトリックス・データセットは、これらのモデルとアルゴリズムの組合せを選択したときに出力されます。

| モデル  | アルゴリズム                                                                                       |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 二項分類 | ロジスティック回帰<br>CART (ディシジョン・ツリー)<br>Naive Bayes<br>ニューラル・ネットワーク<br>ランダム・フォレスト<br>サポート・ベクター・マシン |
| 多項分類 | CART (ディシジョン・ツリー)<br>Naive Bayes<br>ニューラル・ネットワーク<br>ランダム・フォレスト<br>サポート・ベクター・マシン              |

### ドライバ

このデータセットは、ターゲット列の値を決定する列の情報を提供します。これらの列の識別には、線形回帰が使用されます。各列には、係数および相関値が割り当てられます。係数値は、ターゲット列の値を決定するために使用される列の加重時間を表しています。相関値は、ターゲット列と依存列の関係の方向を示しています。たとえば、ターゲット列の値は、依存列に基づいて増加または減少する場合などがあります。

ドライバ・データセットは、これらのモデルとアルゴリズムの組合せを選択したときに出力されます。

| モデル  | アルゴリズム                     |
|------|----------------------------|
| 数値   | 線形回帰<br>Elastic Net 線形回帰   |
| 二項分類 | ロジスティック回帰<br>サポート・ベクター・マシン |
| 多項分類 | サポート・ベクター・マシン              |

### Hitmap

このデータセットには、ディシジョン・ツリーのリーフ・ノードに関する情報が含まれています。表の各行はリーフ・ノードを表しており、セグメント・サイズ、信頼度および予測される行数など、リーフ・ノードが表す内容を説明する情報を含んでいます。たとえば、予測される正しい予測数 = セグメント・サイズ \* 信頼度などがあります。

Hitmap データセットは、これらのモデルとアルゴリズムの組合せを選択したときに出力されます。

| モデル | アルゴリズム     |
|-----|------------|
| 数値  | 数値予測の CART |

## 残差

このデータセットは、残差予測の品質に関する情報を提供します。残差とは、測定値と回帰モデルの予測値の差分です。このデータセットには、データセット内のすべての列に対する実際値と予測値の絶対差分の集計合計値が含まれます。

残差データセットは、これらのモデルとアルゴリズムの組合せを選択したときに出力されま

| モデル  | アルゴリズム                                 |
|------|----------------------------------------|
| 数値   | 線形回帰<br>Elastic Net 線形回帰<br>数値予測の CART |
| 二項分類 | CART (ディジジョン・ツリー)                      |
| 多項分類 | CART (ディジジョン・ツリー)                      |

## 統計

このデータセットのメトリックは、その生成に使用されたアルゴリズムによって異なります。アルゴリズムに基づくメトリックの次のリストを参照してください。

- 線形回帰、数値予測の CART、Elastic Net 線形回帰 - これらのアルゴリズムには、R2 乗、調整済 R2 乗、平均絶対誤差(MAE)、2 乗平均誤差(MSE)、相対絶対誤差(RAE)、関連 2 乗誤差(RSE)、2 乗平均平方根誤差(RMSE)が含まれます。
- CART(分類および回帰ツリー)、Naive Bayes 分類、ニューラル・ネットワーク、サポート・ベクター・マシン(SVM)、ランダム・フォレスト、ロジスティック回帰 - これらのアルゴリズムには、正確性、F1 合計が含まれます。

このデータセットは、これらのモデルとアルゴリズムの組合せを選択したときに出力されま

| モデル  | アルゴリズム                                                                                       |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 数値   | 線形回帰<br>Elastic Net 線形回帰<br>数値予測の CART                                                       |
| 二項分類 | ロジスティック回帰<br>CART (ディジジョン・ツリー)<br>Naive Bayes<br>ニューラル・ネットワーク<br>ランダム・フォレスト<br>サポート・ベクター・マシン |
| 多項分類 | Naive Bayes<br>ニューラル・ネットワーク<br>ランダム・フォレスト<br>サポート・ベクター・マシン                                   |

## サマリー

このデータセットには、ターゲット名およびモデル名などの情報が含まれます。



サマリー・データセットは、これらのモデルとアルゴリズムの組合せを選択したときに出力されます。

| モデル  | アルゴリズム                                       |
|------|----------------------------------------------|
| 二項分類 | Naive Bayes<br>ニューラル・ネットワーク<br>サポート・ベクター・マシン |
| 多項分類 | Naive Bayes<br>ニューラル・ネットワーク<br>サポート・ベクター・マシン |

## 予測モデルの関連データセットの検出

関連データセットは、予測モデルをトレーニングすると生成されます。

関連データセットには、アルゴリズムに応じて、予測ルール、正確性メトリック、混同マトリックス、予測のキー・ドライバなどのモデルに関する詳細が含まれます。これらのパラメータは、予測および分類を決定するためにモデルで使用されるルールを理解するのに役立ちます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「機械学習」をクリックします。
2. トレーニング・モデルのメニュー・アイコンをクリックして「検査」を選択します。
3. 「関連」タブをクリックして、モデルの関連データセットにアクセスします。
4. 関連データセットをダブルクリックして、表示したり、ワークブックで使用します。

## ワークブックへの予測モデルの追加

ワークブックでシナリオを作成する際に、予測モデルをワークブックのデータセットに適用し、設計されたモデルによって検出されるトレンドおよびパターンを明らかにします。

### ノート:

Oracle 機械学習モデルをワークブックのデータに適用することはできません。

モデルをワークブックに追加し、モデルの入力をデータセットの列にマップすると、「データ・パネル」に、キャンバスにドラッグ・アンド・ドロップできるモデルのオブジェクトが表示されます。機械学習によって、ビジュアライゼーションの対応するデータ列に基づきモデルの値が生成されます。

1. ホーム・ページで、「作成」、「ワークブック」の順にクリックします。
2. ワークブックの作成に使用するデータセットを選択し、「ワークブックに追加」をクリックします。
3. 「データ」ペインで、「追加」をクリックし、「シナリオの作成」を選択します。

4. 「シナリオの作成 - モデルの選択」ダイアログで、モデルを選択して「OK」をクリックします。  
適用できるのは予測モデルのみです。Oracle 機械学習モデルは適用できません。  
各モデルの入力がデータ要素に一致しない場合、「モデルへのデータのマップ」ダイアログが表示されます。
5. 「モデルへのデータのマップ」ダイアログが表示された場合、「データセット」フィールドで、モデルで使用するデータセットを選択します。
6. 必要に応じて、モデル入力とデータ要素を照合します。「完了」をクリックします。  
シナリオが、「データ要素」ペインにデータセットとして表示されます。
7. 要素をデータセットおよびモデルから「ビジュアル化」キャンバスにドラッグ・アンド・ドロップします。
8. シナリオを調整するには、「データ要素」ペインでシナリオを右クリックし、「シナリオの編集」を選択します。
9. 必要に応じて、データセットを変更し、モデル入力およびデータ要素マッピングを更新します。
10. 「保存」をクリックしてワークブックを保存します。

## リフトおよびゲイン・チャートを使用した機械学習モデルの評価

リフトおよびゲイン・チャートにより、異なる分類機械学習モデルを比較して、最も正確なモデルを決定できます。

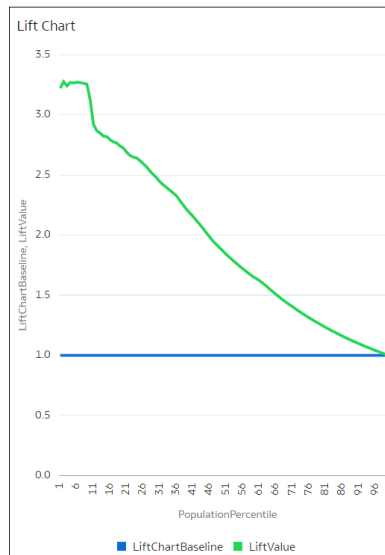
### トピック:

- [リフトおよびゲイン・チャートの使用の概要](#)
- [リフトおよびゲイン・チャートの予測データの生成](#)
- [リフトおよびゲイン・チャートを使用した機械学習モデルの評価](#)

## リフトおよびゲイン・チャートの使用の概要

リフトおよびゲイン・チャートにより、Oracle Analytics 内のビジュアライゼーションのモデリング統計をグラフ化することで、予測機械学習モデルを評価できます。

データ・フローを使用して分類モデルをデータセットに適用する場合、Oracle Analytics により、リフトおよびゲインの値を計算できます。そして、このデータをチャートでビジュアル化すると、予測モデルの正確性を評価し、使用に最適なモデルを決定するのに役立ちます。



### 前提条件

- Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse
- 予測確率(たとえば、Naive Bayes トレーニング・スクリプトを使用して作成された多項分類子モデルなど)を含む分類モデル。  
Oracle Analytics の機械学習領域で、既存の予測モデルにアクセスします。

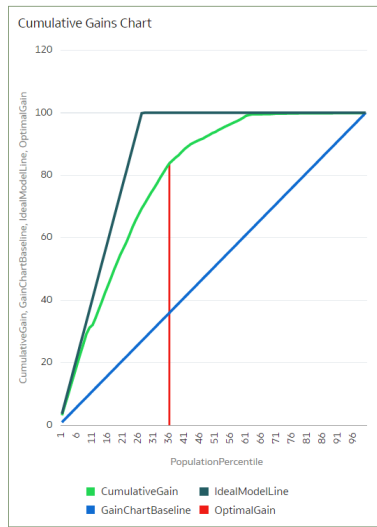
### リフトおよびゲインの分析のために生成された統計

予測分類モデルをデータセットに適用し、リフトおよびゲインの統計を生成すると、次の列を含む<データ・フロー名>\_LIFT という名前のデータセットが作成されます:

- **PopulationPercentile** - 100 等分したグループに分割されたデータセットの母集団です。
- **CumulativeGain** - ポジティブ・ターゲットの総数に対する、そのパーセンタイルまでのポジティブ・ターゲットの累積数の比率です。累積ゲインの線がチャートの左上隅に近いほど、ゲインは大きくなります。連絡を受けた顧客の割合が低いほど、到達した応答者の割合が高くなります。
- **GainChartBaseline** - 全体的な応答率: この線は、レコードをランダムに選択した場合に得られると予想されるポジティブ・レコードの割合を表します。たとえば、マーケティング・キャンペーンで、X%の顧客にランダムに連絡すると、全体の X% のポジティブな応答を得ることができます。
- **LiftChartBaseline** - 値は 1 で、リフト比較のベースラインとして使用されます。
- **LiftValue** - パーセンタイルの累積リフトです。リフトは、すべてのテスト・データのポジティブ密度に対する、選択したデータの累積ポジティブ・レコード密度の比率です。
- **IdealModelLine** - ポジティブ・ターゲットの総数に対する、ポジティブ・ターゲットの累積数の比率です。
- **OptimalGain** - これは、連絡を取る最適な顧客数を示しています。累積ゲイン曲線は、このポイントを超えると平坦になります。

これで、<データ・フロー名>\_LIFT データセットを Oracle Analytics のチャートでビジュアル化できます。たとえば、ゲインを分析するには、X 軸に PopulationPercentile を配

置し、Y 軸に CumulativeGain、GainChartBaseline、IdealModelLine および OptimalGain を配置します。



## リフトおよびゲイン・チャートの予測データの生成

データ・フローを使用して分類モデルをデータセットに適用する場合、Oracle Analytics により、リフトおよびゲイン・チャートでビジュアル化できる統計を計算できます。

開始する前に、予測確率(たとえば、Naive Bayes トレーニング・スクリプトを使用して作成された多項分類子モデルなど)を含む分類モデルを作成します。Oracle Analytics では、機械学習ページ(ホーム・ページから「機械学習」をクリック)の「モデル」タブに使用可能なモデルが表示されます。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「データ・フロー」をクリックします。
2. データ・ソースを選択し、「追加」をクリックします。
3. 「ステップの追加」をクリックし、「モデルの適用」を選択します。
4. 「モデルの選択」で、予測確率を含む分類モデルを選択し、「OK」をクリックします。
5. 「モデルの適用」の「パラメータ」セクションで、次を行います:
  - **リフトおよびゲインの計算**で、「はい」をクリックします。
  - **リフトを計算するターゲット列**で、予測している値の列名を選択します。たとえば、SIGNUP という名前の列を使用して顧客がメンバーシップにサインアップするかどうかを予測するモデルの場合は、SIGNUP を選択します。
  - **計算するポジティブ・クラス**で、予測におけるポジティブ・クラス(または優先結果)を表す、大小文字を区別するデータ値を指定します。たとえば、値が YES または NO の SIGNUP という名前の列を使用して顧客がメンバーシップにサインアップするかどうかを予測するモデルの場合は、YES を指定します。
6. 「データの保存」ノードをデータ・フローに追加します。
7. このデータ・フローを実行します。

データ・フローでは、<データ・フロー名>\_LIFT という名前のデータセットが作成され、このデータセットには、評価可能なリフトおよびゲインの統計が含まれています。

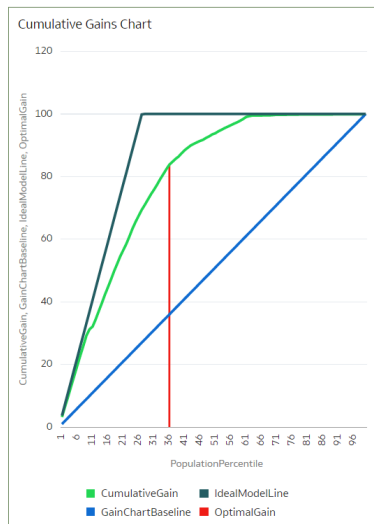
## リフトおよびゲイン・チャートを使用した機械学習モデルの評価

チャートを使用して、機械学習分類モデルによって生成された統計を分析し、使用する最適なモデルを決定します。

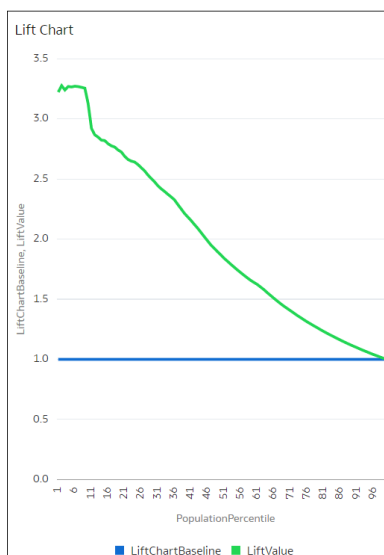
開始する前に、予測モデルをデータに適用して、データセットにリフトおよびゲイン統計を生成します。

1. ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「ワークブック」をクリックします。
2. 「データセットの追加」で、前のタスク生成した<Data flow name>\_LIFT データセットを選択して、「ワークブックに追加」をクリックします。
3. 「ビジュアル化」パネルで、分析する統計を選択し、右クリックして「ビジュアライゼーションの選択」を選択し、「折れ線グラフ」を選択します。

たとえば、ゲインを分析するには、**PopulationPercentile** を x 軸に配置し、**CumulativeGain**、**GainChartBaseline**、**IdealModelLine** および **OptimalGain** を y 軸に配置します。



リフトを分析するには、**PopulationPercentile** を x 軸に配置し、**LiftChartBaseline** および **LiftValue** を y 軸に配置します。



## Oracle Analytics での Oracle 機械学習モデルの使用

Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse の Oracle 機械学習モデルを登録して使用すると、Oracle Analytics のデータをスコアリングできます。データに機械学習モデルを適用するには、データ・フロー・エディタを使用します。

Oracle Analytics を使用すると、データ・サイエンティストの専門知識がなくてもアプリケーションに機械学習を構築できます。

### トピック:

- [Oracle Analytics では Oracle 機械学習モデルをどのように使用できますか。](#)
- [Oracle Analytics への Oracle 機械学習モデルの登録](#)
- [登録されている Oracle 機械学習モデルの検査](#)
- [登録されている Oracle 機械学習モデルのビューのビジュアル化](#)

## Oracle Analytics では Oracle 機械学習モデルをどのように使用できますか。

Oracle Analytics では、Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse から Oracle 機械学習モデルを登録して使用できます。

Oracle Analytics で Oracle 機械学習モデルを使用すると、データセットで実行できる予測分析のレベルが大幅に向上しますが、これは、データとモデルがデータベースに存在し、データのスコアリングも結果のデータセットの格納もデータベースで行われるためです。これにより、Oracle 機械学習の実行エンジンを使用して、大規模なデータセットをスコアリングできます。

次のデータベースのデータ・ソースにある Oracle 機械学習モデルを登録して使用できます:

- Oracle Autonomous Data Warehouse
- Oracle Database

Oracle Analytics で、Oracle Machine Learning for SQL API (OML 4SQL)を使用して作成された分類、回帰、クラスタリング、異常、または特徴抽出マイニング・クラスのデータベースの Oracle 機械学習モデルを登録できます。Oracle Analytics のユーザー・ロールとデータベース権限で、登録して使用できる Oracle 機械学習モデルが決まります。

Oracle Analytics では、予測モデルも作成できます。

## Oracle Analytics への Oracle 機械学習モデルの登録

Oracle 機械学習モデルをデータの予測に使用するには、Oracle Analytics に登録されている必要があります。Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse データ・ソースに存在するモデルを登録して使用できます。

1. ホーム・ページで、「**ページ・メニュー**」、「**モデル/関数の登録**」、「**マシン学習モデル**」の順にクリックします。

このオプションを使用できるのは、BI サービス管理者または DV コンテンツ作成者のロールを持つユーザーです。

2. 「ML モデルの登録」ダイアログで、接続を選択します。

「登録するモデルの選択」ダイアログに、Oracle Machine Learning for SQL API (OML 4SQL)を使用して作成された分類、回帰、クラスタリング、異常、または特徴抽出マイニング・クラスのデータベースの Oracle 機械学習モデルが表示されます。

必要な場合は、「**接続の作成**」をクリックして、使用する Oracle 機械学習モデルが含まれている Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse のデータ・ソースへの接続を作成します。

3. 「登録するモデルの選択」ダイアログで、登録するモデルをクリックし、モデルの情報を確認します。たとえば、そのモデルの作成に使用されたモデル・クラスとアルゴリズム、モデルの予測ターゲット、モデルがトレーニングされた列、モデルの予測、パラメータです。
4. 「**登録**」をクリックします。
5. ホーム・ページで「**ナビゲータ**」をクリックし、「**機械学習**」をクリックして、モデルが正常にインポートされたことを確認します。

## 登録されている Oracle 機械学習モデルの検査

Oracle Analytics に登録した Oracle 機械学習モデルに関する情報にアクセスし、確認できます。

### トピック:

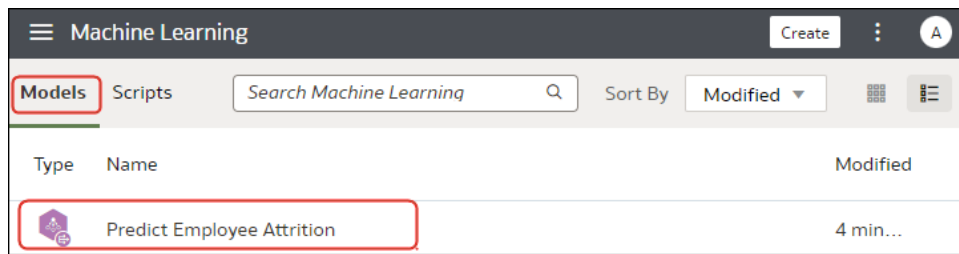
- [登録されているモデルの詳細の表示](#)
- [登録されているモデルのビューとは](#)
- [登録されているモデルのビュー・リストの表示](#)

## 登録されているモデルの詳細の表示

Oracle 機械学習モデルの詳細情報を表示すると、モデルの理解およびデータの予測に適しているかどうかの判断に役立ちます。モデルの詳細には、モデル・クラス、アルゴリズム、入力列、出力列およびパラメータが含まれます。

モデルを登録すると、その詳細情報が含まれます。この情報は、Oracle Database または Oracle Autonomous Data Warehouse から取得されます。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「機械学習」をクリックします。
2. 「モデル」タブをクリックします。



3. 表示するモデルにカーソルを合せ、その「アクション」メニュー



をクリックして「検査」を選択します。

4. 「詳細」をクリックしてモデルの情報を表示します。

## 登録されているモデルのビューとは

Oracle 機械学習モデルを作成すると、モデルに関する特定の情報を含むビューが生成され、データベースに格納されます。Oracle Analytics を使用してモデルのビューのリストにアクセスし、ビューに含まれる情報のビジュアル化に使用できるデータセットを作成します。

ビューには、モデルの統計、ターゲット値分布、アルゴリズム設定などの登録されているモデルに関する情報が含まれます。作成されるビューの数および種類は、モデルのアルゴリズムによって決定されます。そのため、Naive Bayes アルゴリズムから作成されたモデルには 1 セットのビューがあり、ディシジョン・ツリー・アルゴリズムから作成されたモデルには、異なるセットのビューがあります。たとえば、ディシジョン・ツリー・モデル用に生成されるビューは次のとおりです:

- スコアリング・コスト・マトリックス - 分類モデルのスコアリング・マトリックスを示します。ビューには、actual\_target\_value、predicted\_target\_value および cost が含まれます。
- グローバル名/値ペア - モデルに関連するグローバル統計(モデルの作成で使用される行の数や収束ステータスなど)を示します。
- ディシジョン・ツリー統計 - ディシジョン・ツリー内の個々のノードに関連付けられている統計を示します。統計には、ノード内のデータのターゲット・ヒストグラムが含まれます。ツリー内の各ノードについて、このビューには predicted\_target\_value、actual\_target\_value および node サポートに関する情報が含まれます。



各ビューの名前は一意です(DM\$VCDDT\_TEST など)。ビュー名の生成に使用される書式は DM\$VAlphabet\_Model Name です:

- **DM\$V** - 登録されているモデルから生成されるビューの接頭辞を表します。
- **Alphabet** - 出力モデルのタイプを示す値を表します。たとえば、**C** は、ビュー・タイプがスコアリング・コスト・マトリックスであることを示し、**G** は、ビュー・タイプがグローバル名/値ペアであることを示します。
- **Model Name** - 登録されている Oracle 機械学習モデルとそのビューの名前が入ります。たとえば、DT\_TEST です。

ビューの詳細は、Oracle データベース・バージョンのドキュメントを参照してください。

Oracle Analytics は、登録されているモデルのビューのリストを提供します。ただし、ビューにアクセスしたり、ビジュアル化できるのは、Oracle Database 12c リリース 2 以降の場合のみです。それより前のバージョンの Oracle Database を使用している場合、Oracle Analytics を使用してビューにアクセスしたり、ビジュアル化できません。

## 登録されているモデルのビュー・リストの表示

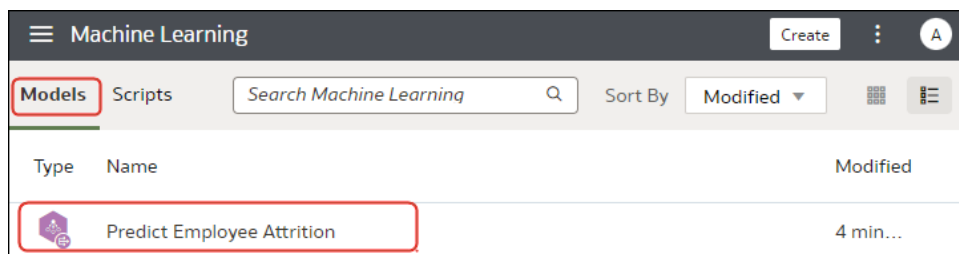
登録されているモデルのビューはデータベースに格納されていますが、Oracle Analytics を使用してモデルのビューのリストを表示できます。

ビューには、モデルのサイズ、設定およびモデルで使用されている属性などの情報が含まれています。この情報は、モデルをよりよく理解して利用するのに役立ちます。

### ノート:

Oracle Database 12c リリース 2 以降の場合、ビューにアクセスしたり、ビジュアル化できます。それより前のバージョンの Oracle Database を使用している場合、これらのビューはデータベースに存在せず、Oracle Analytics を使用してアクセスしたり、ビジュアル化できません。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「機械学習」をクリックします。
2. 「モデル」タブをクリックします。



3. 表示するモデルにカーソルを合せ、その「アクション」メニュー



をクリックして「検査」を選択します。

4. 「関連」タブをクリックしてモデルのビューのリストを表示します。

## 登録されている Oracle 機械学習モデルのビューのビジュアル化

登録されているモデルのビューをビジュアル化すると、モデルをよりよく理解して利用するのに役立つ情報が得られます。

### ノート:

Oracle Database 12c リリース 2 以降の場合、ビューにアクセスしたり、ビジュアル化できます。それより前のバージョンの Oracle Database を使用している場合、これらのビューはデータベースに存在せず、Oracle Analytics を使用してアクセスしたり、ビジュアル化できません。

データセットを作成する際、モデルのビュー名とデータベース・スキーマ名がわかっている必要があります。次のタスクを使用して名前を確認し、データセットを作成してビューの情報をビジュアル化します。

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックし、「機械学習」をクリックします。
2. 登録されている機械学習モデルを特定し、そのアクション・メニューをクリックします。「検査」をクリックします。
3. 「詳細」をクリックし、「モデル情報」セクションが展開されていることを確認します。「DB モデル所有者」フィールドに移動し、データベース・スキーマ名を書き留めます。
4. 「関連」をクリックしてビューの名前を特定し、書き留めます。「閉じる」をクリックします。
5. ホーム・ページで、「作成」、「データセット」の順にクリックします。
6. 機械学習モデルとそのビューを含む接続を選択します。
7. データセット・エディタで、「詳細」タブで特定したデータベース・スキーマ名を参照し、クリックします。
8. 「関連」タブで特定したビューを選択し、列をダブルクリックしてデータセットに追加します。「追加」をクリックします。
9. 「ワークブックの作成」をクリックしてビジュアライゼーションを作成します。

## 予測モデルまたは登録されている Oracle 機械学習モデルのデータセットへの適用

任意のデータセットに対して予測モデルをスコアリングする場合や、対応するデータベースのデータセットに対して登録されている Oracle 機械学習モデルをスコアリングする場合は、データ・フロー・エディタを使用します。

予測モデルをデータに適用すると、機械学習(ML)や人工知能(AI)の専門知識がなくても、ML および AI をアプリケーションに組み込むことができます。

モデルを実行すると、分析やビジュアライゼーションに使用できる予測値が列に格納された新規データセットが出力されます。

予測モデルを実行すると、データは Oracle Analytics に移動されて処理されます。登録されている Oracle 機械学習モデルを実行する場合は、データがデータベースから Oracle Analytics に移動されることはありません。かわりに、モデルは常にデータベースに存在し、処理が行われるのも、出力データセットが格納されるのもデータベースです。

次の情報を使用して、データ・フロー・エディタおよび「**モデルの適用**」ステップのオプションについて理解します:

- 登録されているモデルを表示して、レビューや分析に使用できます。登録されていないモデルは表示されません。
  - 使用可能な出力列は、モデル・タイプに固有です。たとえば、数値予測の場合、出力列には PredictedValue および PredictedConfidence が含まれ、クラスタリングの場合は clusterId が含まれます。
  - 使用可能なパラメータは、モデル・タイプに固有です。たとえば、スコアリングにクラスタリング・モデルを使用する場合、最大 null 値は、スコアリング・プロセスに指定できるパラメータです。このパラメータは欠落している値の補完で使用されます。
  - Oracle 機械学習モデルを使用する場合は、モデルとマップされた入力データ型が一致している必要があります。「登録されているモデルの詳細の表示」を参照してください。
1. ホーム・ページで、「**作成**」をクリックし、「**データ・フロー**」をクリックします。
  2. モデルを適用するデータセットを選択します。「**追加**」をクリックします。
  3. データ・フロー・エディタで、「**ステップの追加 (+)**」をクリックします。
  4. 「データ・フロー・ステップ」ペインで「**モデルの適用**」をダブルクリックし、使用するモデルを選択します。
  5. 「モデルの適用」で「**入力**」セクションに移動し、入力とする列を選択します。
  6. 「モデルの適用」で「**出力**」セクションに移動し、データセットを使用して作成する列を選択し、必要に応じて「**列名**」フィールドを更新します。
  7. データ・フロー・エディタで、「**ステップの追加 (+)**」をクリックし、「**データの保存**」を選択します。
  8. 名前を入力します。「**データ保存先**」フィールドで、出力データを保存するための場所を指定します。  
Oracle 機械学習モデルを使用する場合、入力データセットの接続には、データセットの接続情報がデフォルトで設定されます。
  9. 「**処理形式**」および「**デフォルト集計**」フィールドで、必要に応じてデータ・プリファレンスを設定します。  
データを保存する際、モデルの適用により、入力データセットに選択したモデルの出力列が追加されます。
  10. 「**保存**」をクリックして、データ・フローの名前と説明を入力し、「**OK**」をクリックしてデータ・フローを保存します。
  11. 「**データ・フローの実行**」をクリックして、データセットを作成します。

# オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析の実行

事前作成済の OCI Vision モデルを使用すると、機械学習(ML)や人工知能(AI)の専門知識がなくても、画像認識とテキスト認識をアプリケーションに組み込むことができます。たとえば、オブジェクト検出を使用して、写真に写っている車を識別できます。

処理するイメージが 20,000 を超える場合は、OCI のオブジェクト・ストレージおよびアーカイブ・ストレージ領域で、通常は複数のバケットを設定し、各バケットのイメージが 20,000 を超えないようにします。次に、個別のデータ・フローを作成して各バケットを処理し、シーケンスを使用して複数のデータ・フローを順番に処理することで、すべてのイメージを処理できるようにします。

前提条件:

- Oracle Analytics インスタンスが OCI Vision と統合されていることを確認します。[Oracle Analytics の OCI Vision との統合](#)を参照してください。
  - 分析するイメージを参照するデータセットを準備し、Oracle Analytics にアップロードします。[Vision モデルを使用した分析用のイメージの準備](#)を参照してください。
1. Oracle Analytics ホーム・ページで、「作成」、「データ・フロー」の順にクリックします。
  2. 分析するイメージにリンクしているデータセットを選択し、「追加」をクリックします。
  3. データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」(+ )をクリックします。
  4. 「データ・フロー・ステップ」ペインで、AI モデルの適用をダブルクリックし、使用するモデルを選択します。  
たとえば、車のナンバー・プレートを検出するには、事前トレーニング済オブジェクト検出を選択します。
  5. 「モデルの適用」で、「入力」セクションに移動し、「入力列」および「入力タイプ」パラメータを構成します。
    - バケットごとにソース・イメージを参照する場合は、「入力列」で「URL」を選択し、「入力タイプ」で「バケット」を選択します。

Parameters

- \* Input Column URL  
Column identifying the OCI Object Storage location for input
- Input Type: Buckets  
Specifies the type of URLs in input Column
- \* Maximum Number of Results: 5  
Specifies maximum results to fetch from vision service for each image
- Include all input columns in result ...: Yes

- 個別にソース・イメージを参照する場合は、「入力列」で「ファイルの場所」を選択し、「入力タイプ」で「イメージ」を選択します。

オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析モデルのパラメータ・オプションを参照してください。

- データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」(+ )をクリックし、「データの保存」を選択します。
- 出力結果を格納するデータセットの名前を入力します。  
たとえば、データセットを「駐車場分析結果」という名前にすることができます。
- 「データ保存先」フィールドで、出力データを保存するための場所を指定します。
- 「保存」をクリックして、データ・フローの名前と説明を入力し、「OK」をクリックしてデータ・フローを保存します。
- 「データ・フローの実行」をクリックしてイメージを分析し、結果を新しいデータセットに出力します。

イメージが 20,000 未満の場合は、単一のデータ・フローで処理できます。イメージが 20,000 を超える場合は、個別のデータ・フローを作成して各バケットを処理し(つまり、バケットごとに個別のデータセットを使用し)、シーケンスを使用して複数のデータ・フローを順番に処理します。複数のデータ・フローを作成した後、Oracle Analytics ホーム・ページで、「作成」、「シーケンス」の順にクリックします。

データ・フローで分析が完了したら、ステップ 7 で指定したデータセットを開きます。生成されたデータセットを見つけるには、Oracle Analytics ホーム・ページから、「データ」、「データセット」の順に移動します。

The screenshot shows the Oracle Analytics interface for a 'Car Parking Analysis' data set. The main area displays a table with the following columns: Image Name, Object Name, Confidence, and Parents. The table lists 17 rows of data, including various car images and a mobile phone. The 'Parents' column shows a hierarchical path for each object, such as 'Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car'.

| Image Name          | Object Name  | Confidence | Parents                                            |
|---------------------|--------------|------------|----------------------------------------------------|
| Car_Parking_001.jpg | Car          | 0.79       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_002.jpg | Car          | 4.92       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_003.jpg | Car          | 0.78       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_004.jpg | Mobile Phone | 4.20       | Electronics -> Phone -> Mobile Phone               |
| Car_Parking_005.jpg | Car          | 4.92       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_006.jpg | Car          | 0.98       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_013.jpg | Car          | 3.62       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_013.jpg | Street light | 0.90       | Street light                                       |
| Car_Parking_014.jpg | Car          | 4.91       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_015.jpg | Car          | 2.73       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_015.jpg | Land vehicle | 0.92       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_015.jpg | Truck        | 0.94       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Truck |
| Car_Parking_016.jpg | Car          | 4.74       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |
| Car_Parking_017.jpg | Car          | 4.90       | Transportation -> Vehicle -> Land vehicle -> Car   |

生成された結果の詳細は、オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析モデル用に生成された出力データを参照してください。

## オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析モデルのパラメータ・オプション

Oracle Analytics のデータ・フローから OCI Vision モデルを呼び出す際には、パラメータを使用してモデルを構成します。

たとえば、ソース・データセットの構成方法を指定します(バケットごと、または個々のイメージごと)。Vision モデルを使用した分析用のイメージの準備を参照してください。

### パラメータ

| パラメータ          | 説明                                                                                                                                                                        |
|----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 入力列            | 処理するイメージの OCI オブジェクト・ストレージの場所を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>バケットごとにソース・イメージを参照する場合は、「URL」を選択します。</li> <li>個別にソース・イメージを参照する場合は、「ファイルの場所」を選択します。</li> </ul> |
| 入力タイプ          | 入力列の URL のタイプを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>バケットごとにソース・イメージを参照する場合は、「バケット」を選択します。</li> <li>個別にソース・イメージを参照する場合は、「イメージ」を選択します。</li> </ul>                   |
| 最大結果数          | (オブジェクト検出およびイメージ分類の場合のみ)各イメージについて、OCI Vision サービスからフェッチする結果の最大数(1 から 100)を指定します。                                                                                          |
| すべての入力列を結果に含める | すべての入力列を結果に含める場合のオプションです。                                                                                                                                                 |

## オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析モデル用に生成された出力データ

OCI Vision モデルを使用してイメージを分析する場合、Oracle Analytics データ・フローはイメージに関するデータを生成します。たとえば、「オブジェクト名」は識別された予測オブジェクトまたはテキストであり、「信頼度」は予測の信頼のレベルです。

生成されたデータセットを見つけるには、Oracle Analytics ホーム・ページから、「データ」、「データセット」の順に移動します。

### オブジェクト検出

| 出力列                 | タイプ | 説明                                                                                   |
|---------------------|-----|--------------------------------------------------------------------------------------|
| オブジェクト名             | 文字列 | 識別されたオブジェクト名。                                                                        |
| 信頼度                 | 番号  | オブジェクト検出の信頼度スコア(0 から 1 のスケール)。                                                       |
| 頂点 1、頂点 2、頂点 3、頂点 4 | 文字列 | 識別されたオブジェクトの強調表示しているボックスの頂点(x 座標と y 座標)。例: x_1 = 0.001; y_1 = 0.0013333333333333333。 |
| 親                   | 文字列 | 識別されたオブジェクト名の分類。                                                                     |

| 出力列              | タイプ | 説明                                                             |
|------------------|-----|----------------------------------------------------------------|
| シノニム             | 文字列 | 使用されません。                                                       |
| ステータス・サマリー       | 文字列 | モデルの出力の簡単なサマリー。例: サポートされていないイメージ・タイプ。出力が成功した場合、この列は空白です。       |
| バケットからのイメージ・ファイル | 文字列 | 指定されたバケットからのイメージのオブジェクト・ストレージ URL。この列は、入力タイプがバケットの場合にのみ使用されます。 |

### イメージ分類

| 出力列              | タイプ | 説明                                                             |
|------------------|-----|----------------------------------------------------------------|
| オブジェクト名          | 文字列 | 識別されたオブジェクト名。                                                  |
| 信頼度              | 番号  | オブジェクト検出の信頼度スコア(0 から 1 のスケール)。                                 |
| 親                | 文字列 | 識別されたオブジェクト名の分類。                                               |
| シノニム             | 文字列 | 使用されません。                                                       |
| ステータス・サマリー       | 文字列 | モデルの出力の簡単なサマリー。例: サポートされていないイメージ・タイプ。出力が成功した場合、この列は空白です。       |
| バケットからのイメージ・ファイル | 文字列 | 指定されたバケットからのイメージのオブジェクト・ストレージ URL。この列は、入力タイプがバケットの場合にのみ使用されます。 |

### テキスト検出

| 出力列                             | タイプ | 説明                                                                                     |
|---------------------------------|-----|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 行の単語                            | 文字列 | 行として検出および抽出された単語。                                                                      |
| 行の信頼度                           | 番号  | 検出された単語の行の信頼度スコア(0 から 1 のスケール)。                                                        |
| 線の頂点 1、線の頂点 2、線の頂点 3、線の頂点 4     | 文字列 | 行の強調表示しているボックスの頂点(x 座標と y 座標)。例: $x_1 = 0.001$ ; $y_1 = 0.0013333333333333333$ 。       |
| 単語                              | 文字列 | 検出された単語。                                                                               |
| 単語の信頼度                          | 文字列 | 検出された単語の信頼度スコア(0 から 1 のスケール)。                                                          |
| 単語の頂点 1、単語の頂点 2、単語の頂点 3、単語の頂点 4 | 文字列 | 識別された単語の強調表示しているボックスの頂点(x 座標と y 座標)。例: $x_1 = 0.001$ ; $y_1 = 0.0013333333333333333$ 。 |
| ステータス・サマリー                      | 文字列 | モデルの出力の簡単なサマリー。例: サポートされていないイメージ・タイプ。出力が成功した場合、この列は空白です。                               |
| バケットからのイメージ・ファイル                | 文字列 | 指定されたバケットからのイメージのオブジェクト・ストレージ URL。この列は、入力タイプがバケットの場合にのみ使用されます。                         |



# Oracle Analytics での OCI Data Science モデルの使用

Oracle Analytics に Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Data Science モデルを組み込むと、機械学習(ML)の専門知識を必要とせずに、アプリケーションに ML を構築できます。

## トピック:

- [データセットへの OCI Data Science モデルの適用](#)

開始する前に、OCI Data Science 統合の前提条件に従い、Oracle Analytics のモデルを登録したことを確認します。[OCI Data Science モデルを Oracle Analytics と統合するための前提条件](#)および [Oracle Analytics で OCI Data Science モデルを使用可能にする方法を参照してください](#)。

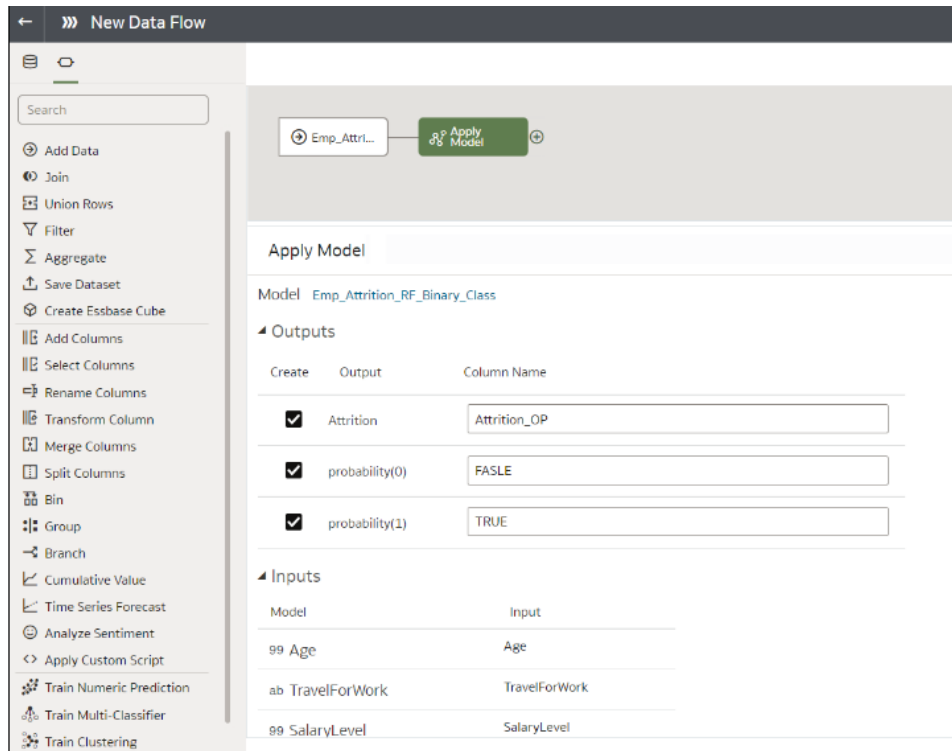
## データセットへの OCI Data Science モデルの適用

OCI Data Science モデルをデータセットに適用して、データを分析し、結果を別のデータセットに格納します。たとえば、医療データの場合、予測モデルによって、リスク要因を特定し、退院後の患者の再入院リスクを予測できます。

### 前提条件:

- Oracle Analytics インスタンスが OCI Data Science と統合されていることを確認します。[Oracle Analytics の OCI Data Science との統合](#)を参照してください。
  - Oracle Analytics Cloud に OCI Data Science モデルを登録します。[Oracle Analytics で OCI Data Science モデルを使用可能にする方法を参照してください](#)。
  - 分析するデータを含むデータセットを準備します。
1. Oracle Analytics ホーム・ページで、「作成」、「データ・フロー」の順にクリックします。
  2. 分析するデータセットを選択し、「追加」をクリックします。
  3. データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」(+ )をクリックします。
  4. 「データ・フロー・ステップ」ペインで「モデルの適用」をダブルクリックして、「モデルの選択」ダイアログを表示します。
  5. モデルを選択し、「OK」をクリックします。
  6. 「モデルの適用」ダイアログで、「出力」と「入力」の下の設定を構成します。





7. データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」(+ )をクリックし、「データの保存」を選択します。
  8. 出力結果を格納するデータセットの名前を入力します。  
たとえば、データセットを「従業員減少の結果」という名前にすることができます。
  9. 「データ保存先」フィールドで、出力データを保存するための場所を指定します。
  10. 「保存」をクリックして、データ・フローの名前と説明を入力し、「OK」をクリックしてデータ・フローを保存します。
  11. 「データ・フローの実行」をクリックして、Data Science モデルを適用し、詳細に分析するために結果を出力データセットに保存します。
  12. データ・フローの実行が完了したら、「ナビゲータ」をクリックし、「データ」をクリックして、生成されたデータセットを「データセット」ページから開きます。
- これで、ワークブックのデータをビジュアル化できるようになりました。

| name             | Attrition_OP | FALSE | TRUE | Gender | JobRole                   | MonthlyIncome |
|------------------|--------------|-------|------|--------|---------------------------|---------------|
| Aaron Dean       | FALSE        | 0.98  | 0.02 | Male   | Human Resources           | 4,071.00      |
| Aaron Mills      | FALSE        | 0.95  | 0.07 | Male   | Sales Executive           | 6,929.00      |
| Aaron Moody      | FALSE        | 0.92  | 0.08 | Male   | Research Director         | 17,861.00     |
| Aaron Oconnor    | FALSE        | 0.97  | 0.03 | Male   | Manufacturing Director    | 9,957.00      |
| Aaron Ward       | FALSE        | 0.96  | 0.04 | Female | Healthcare Representative | 10,248.00     |
| Aaron Wolfe      | FALSE        | 0.95  | 0.07 | Male   | Research Scientist        | 4,950.00      |
| Adam Bush        | TRUE         | 0.37  | 0.63 | Male   | Sales Executive           | 9,619.00      |
| Adam Murray      | TRUE         | 0.5   | 0.7  | Male   | Laboratory Technician     | 2,404.00      |
| Adam Warner      | FALSE        | 0.95  | 0.05 | Female | Sales Executive           | 6,652.00      |
| Adrienne Holland | FALSE        | 0.95  | 0.07 | Male   | Research Scientist        | 5,974.00      |
| Aimee Copeland   | FALSE        | 0.95  | 0.07 | Male   | Human Resources           | 2,592.00      |
| Alan Watson      | FALSE        | 0.96  | 0.04 | Male   | Research Scientist        | 4,485.00      |
| Albert Gordon    | TRUE         | 0.31  | 0.69 | Male   | Sales Executive           | 5,160.00      |
| Albert Taylor    | FALSE        | 0.97  | 0.03 | Male   | Research Scientist        | 2,194.00      |

## Oracle Analytics での OCI Document Understanding モデルの使用

事前構築済 OCI Document Understanding モデルを使用して、機械学習(ML)や人工知能(AI)の専門知識なしで、ドキュメント分類およびキー値抽出をアプリケーションに組み込みます。たとえば、ドキュメント分類を使用して、パスポート、運転免許、領収書または請求書を識別します。

### トピック:

- [ドキュメント分類およびキー値抽出の概要](#)
- [OCI Document Understanding モデルによる分析対象のドキュメントの作成](#)
- [ドキュメント分類およびキー値抽出の実行](#)

## ドキュメント分類およびキー値抽出の概要

Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Document Understanding サービスは、テキスト、表およびその他のキー・データをドキュメント・ファイルから抽出できる AI モデルを提供します。抽出されたデータを Oracle Analytics で使用して、ドキュメント分類およびキー値抽出を実行できます。

Oracle Analytics でデータ・フローを使用して、AI モデルを自分のデータに適用します。

Oracle Analytics では次の事前トレーニング済モデルがサポートされています:

- ドキュメント分類
- 領収書、請求書、ドライバ ID およびパスポートのキー値抽出。

この例では、データ・フローはドキュメント分類モデルを **JPG** 形式のドキュメントに適用し、それらが領収書であるかどうかを予測し、分析結果をデータセットに出力します。データセットには、「ドキュメント・タイプ」として **RECEIPT** 値、および各ドキュメントに対して「信頼度」予測レベルが含まれます。

| Page No | Document Type | ID | Document Name  | Document URL                    | Confidence |
|---------|---------------|----|----------------|---------------------------------|------------|
| 1       | RECEIPT       | 1  | receipt001.jpg | document_input/o/receipt001.jpg | 0.94       |
| 1       | RECEIPT       | 2  | receipt002.jpg | document_input/o/receipt002.jpg | 0.94       |
| 1       | RECEIPT       | 3  | receipt003.jpg | document_input/o/receipt003.jpg | 0.91       |
| 1       | RECEIPT       | 4  | receipt004.jpg | document_input/o/receipt004.jpg | 0.93       |
| 1       | RECEIPT       | 5  | receipt005.jpg | document_input/o/receipt005.jpg | 0.92       |
| 1       | RECEIPT       | 6  | receipt006.jpg | document_input/o/receipt006.jpg | 0.95       |
| 1       | RECEIPT       | 7  | receipt007.jpg | document_input/o/receipt007.jpg | 0.93       |
| 1       | RECEIPT       | 8  | receipt008.jpg | document_input/o/receipt008.jpg | 0.92       |
| 1       | RECEIPT       | 9  | receipt009.jpg | document_input/o/receipt009.jpg | 0.95       |
| 1       | INVOICE       | 10 | receipt010.jpg | document_input/o/receipt010.jpg | 1.00       |
| 1       | RECEIPT       | 11 | receipt011.png | document_input/o/receipt011.png | 0.94       |
| 1       | RECEIPT       | 12 | receipt012.png | document_input/o/receipt012.png | 0.95       |
| 1       | RECEIPT       | 13 | receipt013.png | document_input/o/receipt013.png | 0.98       |
| 1       | RECEIPT       | 14 | receipt014.png | document_input/o/receipt014.png | 0.95       |

開始する前に:

- Oracle Analytics サービスと OCI Document Understanding を統合するように管理者に依頼します。[Oracle Analytics と OCI Document Understanding の統合](#)を参照してください。
- Oracle Analytics で、OCI Document Understanding サービスへの接続を作成します。[OCI テナンスへの接続の作成](#)を参照してください。

## OCI Document Understanding モデルによる分析対象のドキュメントの作成

OCI オブジェクト・ストレージのバケットを使用して、分析するドキュメントを格納し、Oracle Analytics でこれらのドキュメントにアクセスするためのデータセットを作成します。

通常、入力ドキュメントと AI モデルは *同じ* Oracle Cloud アカウント(テナンス)に格納され、これにより、Oracle Analytics の設定が容易になります。

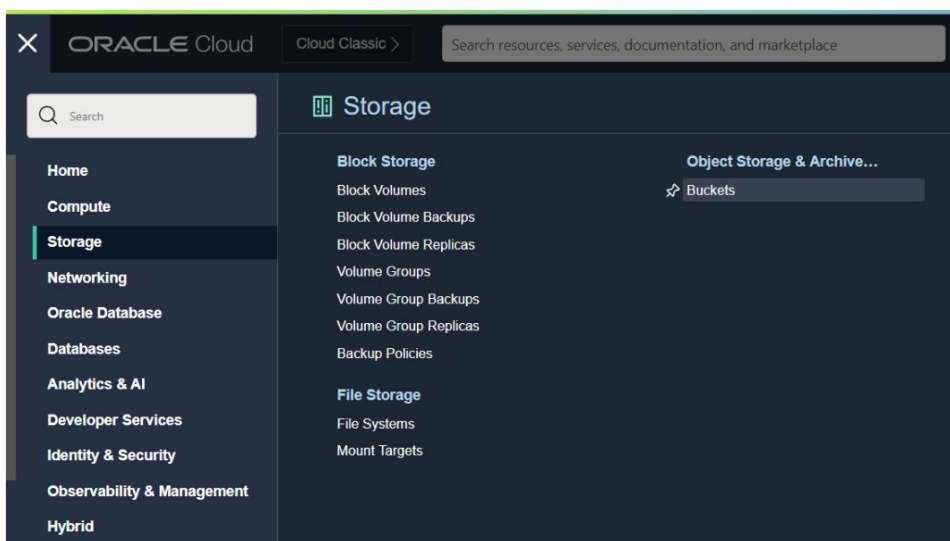
入力ドキュメントと AI モデルが異なるテナンスに格納されている場合:

- 入力イメージを含むストレージ・バケットの可視性が **パブリック**であることを確認してください。[バケットの可視性の変更](#)を参照してください。
- ドキュメントが格納されている OCI バケットの単一 URL ではなく、個々のイメージ URL をデータ・フローの入力データセットに移入します。

Oracle Analytics のデータ・フローは、1 回の実行で最大 10,000 のドキュメントを処理できません。ドキュメントが 10,000 を超える場合は、OCI のオブジェクト・ストレージおよびアーカイブ・ストレージで複数のバケットを作成し、それぞれのドキュメントが 10,000 を超えないようにします。次に、バケットごとに個別のデータセットおよびデータ・フローを作成し、シーケンスを使用してデータ・フローを順番に処理します。

OCI ユーザーがアクセスでき、イメージに関する OCI の一般的な制限事項に準拠しているプライベートまたはパブリックバケットを使用できます。OCI のドキュメントを参照してください。

1. OCI コンソールで、「オブジェクト・ストレージとアーカイブ・ストレージ」に移動し、イメージを格納するためのバケットを作成します。



2. 「オブジェクト・ストレージおよびアーカイブ・ストレージ」領域でバケット名をクリックし、ページの「オブジェクト」リージョンの下にある「アップロード」をクリックし、ドキュメントをアップロードします。

処理対象ではない無関係なファイルがバケットに含まれていないことを確認します。Oracle Analytics は、バケット内のすべてのファイルを処理します。


| Objects                  |                |                                 |            |              |
|--------------------------|----------------|---------------------------------|------------|--------------|
| Upload                   |                | More Actions                    |            |              |
| Search by prefix         |                |                                 |            |              |
| <input type="checkbox"/> | Name           | Last Modified                   | Size       | Storage Tier |
| <input type="checkbox"/> | invoice001.jpg | Tue, Jul 18, 2023, 14:08:30 UTC | 59.85 KiB  | Standard     |
| <input type="checkbox"/> | invoice002.jpg | Tue, Jul 18, 2023, 14:08:30 UTC | 102.54 KiB | Standard     |
| <input type="checkbox"/> | invoice003.jpg | Tue, Jul 18, 2023, 14:08:30 UTC | 145.41 KiB | Standard     |
| <input type="checkbox"/> | invoice004.jpg | Tue, Jul 18, 2023, 14:08:30 UTC | 622.19 KiB | Standard     |
| <input type="checkbox"/> | invoice005.jpg | Tue, Jul 18, 2023, 14:08:29 UTC | 21.3 KiB   | Standard     |
| <input type="checkbox"/> | invoice006.jpg | Tue, Jul 18, 2023, 14:08:30 UTC | 78.65 KiB  | Standard     |
| <input type="checkbox"/> | invoice007.jpg | Tue, Jul 18, 2023, 14:08:30 UTC | 123.42 KiB | Standard     |

3. 各バケットで、バケット URL をカンマ区切り(CSV)ファイルに追加します。

- a. オブジェクト・ストレージで、バケットを選択して、「オブジェクト」ダイアログにイメージを表示します。
- b. ブラウザの URL バーから URL をコピーします。
- c. ID、Bucket Name および Bucket URL のフィールドを含む CSV ファイルを作成します。
- d. バケット URL を Bucket URL の値として CSV ファイルに貼り付けます。

| ID | Bucket Na | Bucket URL                                                                                          |
|----|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | document  | https://cloud.oracle.com/object-storage/buckets/analytcs/document_input/objects?region=us-ashburn-1 |

または、入力ドキュメントと AI モデルが異なるテナンシに格納されている場合、それらを CSV ファイルに個別に追加します。


ID、Document Name および Document ID のフィールドを含む CSV ファイルを作成します。オブジェクト・ストレージ内の各ドキュメントで、省略アイコン  をクリックし、「オブジェクト詳細の表示」を選択し、「名前」値および「URL パス(URI)」値をコピーします。

### Object Details

Basic Information

**Name:** invoice001.jpg

**URL Path (URI):** [https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analytcsdev/b/document\\_input/o/invoice001.jpg](https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analytcsdev/b/document_input/o/invoice001.jpg)

 The current URL is deprecated and will no longer be supported in a future release of the console. A new URL will be used as shown below. [Learn more](#)

[https://analytcsdev-objectstorage.us-ashburn-1.oci.customer-oci.com/n/analytcsdev/b/document\\_input/o/invoice001.jpg](https://analytcsdev-objectstorage.us-ashburn-1.oci.customer-oci.com/n/analytcsdev/b/document_input/o/invoice001.jpg)

**Storage Tier:** Standard

**Size:** 59.85 KIB

Response Headers

**Accept-Ranges:** bytes

**Content Length:** 61289

名前値をドキュメント名として貼り付け、URL パス(URI)値をドキュメント URL として貼り付けます。

| ID | Document   | Document URL                                                                                        |
|----|------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | receipt001 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt001.jpg |
| 2  | receipt002 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt002.jpg |
| 3  | receipt003 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt003.jpg |
| 4  | receipt004 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt004.jpg |
| 5  | receipt005 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt005.jpg |
| 6  | receipt006 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt006.jpg |
| 7  | receipt007 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt007.jpg |
| 8  | receipt008 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt008.jpg |
| 9  | receipt009 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt009.jpg |
| 10 | receipt010 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt010.jpg |
| 11 | receipt011 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt011.png |
| 12 | receipt012 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt012.png |
| 13 | receipt013 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt013.png |
| 14 | receipt014 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt014.png |
| 15 | receipt015 | https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/analyticsdev/b/document_input/o/receipt015.png |

- Oracle Analytics で、ドキュメントの格納に使用している各バケットに対して、「作成」、「データセット」の順にクリックします。
- ステップ 3 で作成した CSV ファイルをアップロードし、データセットを保存します。

バケットごとに 4 から 5 のステップを繰り返します。ドキュメントが 10,000 を超える場合は、通常、最大 10,000 ドキュメントで構成される複数のバケットを作成し、バケットごとに個別のデータセットを作成します。

## ドキュメント分類およびキー値抽出の実行

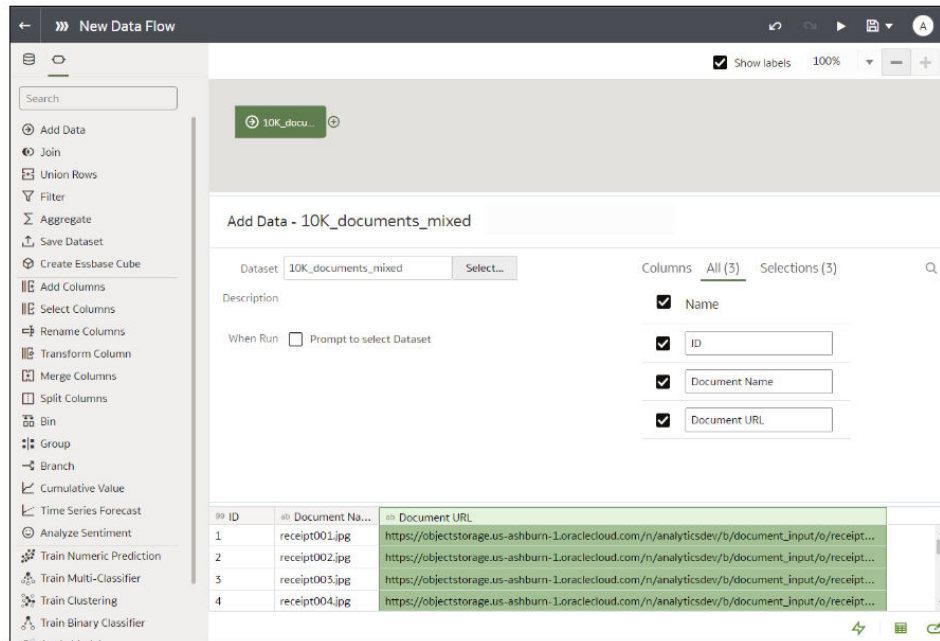
事前構築済 OCI Document Understanding モデルを使用して、機械学習(ML)や人工知能(AI)の専門知識なしで、ドキュメント分類およびキー値抽出をアプリケーションに組み込みます。たとえば、ドキュメント分類を使用して、パスポート、運転免許、領収書および請求書を識別します。

処理するドキュメントが 10,000 を超える場合は、OCI のオブジェクト・ストレージおよびアーカイブ・ストレージ領域で、通常は複数のバケットを設定し、各バケットのドキュメントが 10,000 を超えないようにします。次に、個別のデータ・フローを作成して各バケットを処理し、シーケンスを使用して複数のデータ・フローを順番に処理することで、すべてのドキュメントを処理できるようにします。

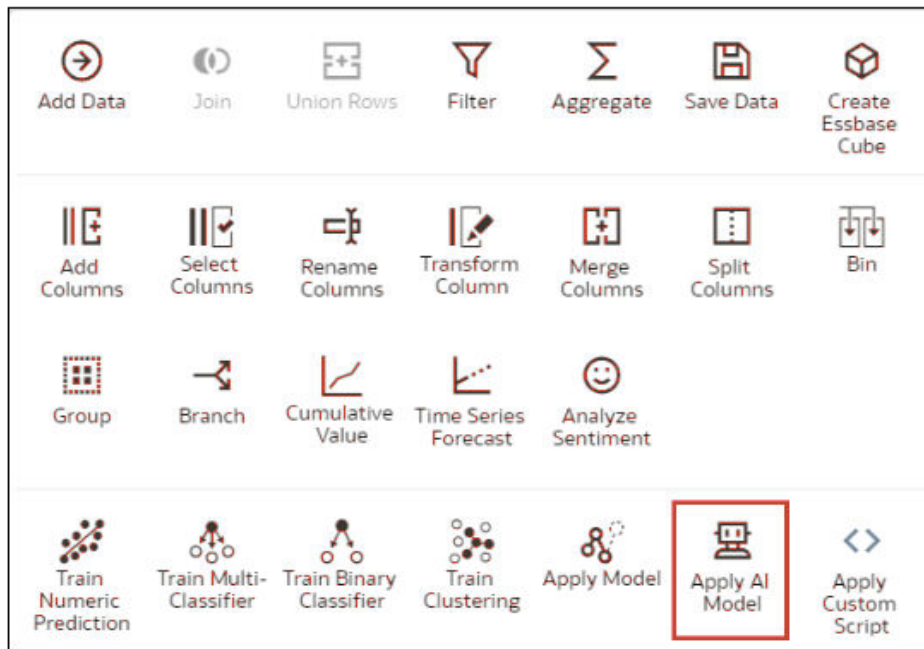
前提条件:

- Oracle Analytics インスタンスが OCI Document Understanding と統合されていることを管理者に確認します。
  - 分析するイメージを参照するデータセットを準備し、Oracle Analytics にアップロードします。OCI Document Understanding モデルによる分析対象のドキュメントの作成を参照してください。
- Oracle Analytics ホーム・ページで、「作成」、「データ・フロー」の順にクリックします。
  - 分析するドキュメントにリンクしているデータセットを選択し、「追加」をクリックします。





3. データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」 (+)をクリックします。
4. 「データ・フロー・ステップ」ペインで、**AI モデルの適用**をダブルクリックし、使用するモデルを選択します。



たとえば、事前トレーニングされたドキュメント分類を選択して、パスポートを識別できます。

5. 「AI モデルの適用」で、「入力」セクションに移動し、「入力列」および「入力タイプ」パラメータを構成します。

- バケットごとにソース・イメージを参照する場合は、「**入力列**」で「**URL**」を選択し、「**入力タイプ**」で「**バケット**」を選択します。

▲ Parameters

\* Input Column **URL**  
Column identifying the OCI Object Storage location for input

Input Type **Buckets**  
Specifies the type of URLs in Input Column

\* Maximum Number of Results **5**  
Specifies maximum results to fetch from vision service for each image

Include all input columns in result ... **Yes**

- 個別にソース・イメージを参照する場合は、「**入力列**」で「**ファイルの場所**」を選択し、「**入力タイプ**」で「**イメージ**」を選択します。

OCI Document Understanding モデルのパラメータ・オプションを参照してください。

6. データ・フロー・エディタで、「**ステップの追加 (+)**」をクリックし、「**データの保存**」を選択します。
7. 出力結果を格納するデータセットの名前を入力します。  
たとえば、データセット'パスポート識別分析結果'を呼び出すことができます。
8. 「**データ保存先**」フィールドで、出力データを保存するための場所を指定します。
9. 「**保存**」をクリックして、データ・フローの名前と説明を入力し、「**OK**」をクリックしてデータ・フローを保存します。
10. 「**データ・フローの実行**」をクリックしてイメージを分析し、結果を新しいデータセットに出力します。

ドキュメントが 10,000 未満の場合は、単一のデータ・フローで処理できます。イメージが 10,000 を超える場合は、個別のデータ・フローを作成して各バケットを処理し(つまり、バケットごとに個別のデータセットを使用し)、シーケンスを使用してデータ・フローを順番に処理します。複数のデータ・フローを作成した後、Oracle Analytics ホーム・ページで、「**作成**」、「**シーケンス**」の順にクリックします。

データ・フローで分析が完了したら、ステップ 7 で指定したデータセットを開きます。生成されたデータセットを見つけるには、Oracle Analytics ホーム・ページから、「**データ**」、「**データセット**」の順に移動します。



| Page No | Document Type | ID | Document Name  | Document URL                    | Confidence |
|---------|---------------|----|----------------|---------------------------------|------------|
| 1       | RECEIPT       | 1  | receipt001.jpg | document_input/o/receipt001.jpg | 0.94       |
| 1       | RECEIPT       | 2  | receipt002.jpg | document_input/o/receipt002.jpg | 0.94       |
| 1       | RECEIPT       | 3  | receipt003.jpg | document_input/o/receipt003.jpg | 0.91       |
| 1       | RECEIPT       | 4  | receipt004.jpg | document_input/o/receipt004.jpg | 0.95       |
| 1       | RECEIPT       | 5  | receipt005.jpg | document_input/o/receipt005.jpg | 0.92       |
| 1       | RECEIPT       | 6  | receipt006.jpg | document_input/o/receipt006.jpg | 0.95       |
| 1       | RECEIPT       | 7  | receipt007.jpg | document_input/o/receipt007.jpg | 0.93       |
| 1       | RECEIPT       | 8  | receipt008.jpg | document_input/o/receipt008.jpg | 0.92       |
| 1       | RECEIPT       | 9  | receipt009.jpg | document_input/o/receipt009.jpg | 0.95       |
| 1       | INVOICE       | 10 | receipt010.jpg | document_input/o/receipt010.jpg | 1.00       |
| 1       | RECEIPT       | 11 | receipt011.png | document_input/o/receipt011.png | 0.94       |
| 1       | RECEIPT       | 12 | receipt012.png | document_input/o/receipt012.png | 0.95       |
| 1       | RECEIPT       | 13 | receipt013.png | document_input/o/receipt013.png | 0.98       |
| 1       | RECEIPT       | 14 | receipt014.png | document_input/o/receipt014.png | 0.95       |

生成された結果の詳細は、[OCI Document Understanding モデルに生成された出力データ](#)を参照してください。

## OCI Document Understanding モデルのパラメータ・オプション

Oracle Analytics のデータ・フローから OCI Document Understanding モデルを起動する際、パラメータを使用してモデルを構成します。

たとえば、ソース・データセットの構成方法を指定します(バケットごと、または個々のイメージごと)。[OCI Document Understanding モデルによる分析対象のドキュメントの作成](#)を参照してください。

### ドキュメント分類モデルのパラメータ

| パラメータ          | 説明                                                                                                                                                                                            |
|----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 入力列            | 処理するドキュメントの OCI オブジェクト・ストレージの場所を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>バケットごとにソース・ドキュメントを参照する場合は、バケット URL を含む列を選択します。</li> <li>ソース・ドキュメントを個別に参照する場合は、ドキュメント URL を含む列を選択します。</li> </ul> |
| 入力タイプ          | 入力列の URL のタイプを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>バケットごとにソース・ドキュメントを参照する場合は、「バケット」を選択します。</li> <li>ソース・ドキュメントを個別に参照する場合は、「ドキュメント」を選択します。</li> </ul>                                 |
| 最大ドキュメント・タイプ数  | (ドキュメント分類のみ)各イメージについて OCI Document Understanding サービスから取得する結果の最大数(1 から 100 の間)を指定します。                                                                                                         |
| すべての入力列を結果に含める | すべての入力列を結果に含める場合のオプションです。                                                                                                                                                                     |

### キー値抽出モデルのパラメータ

| パラメータ          | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 入力列            | <p>処理するドキュメントの OCI オブジェクト・ストレージの場所を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>バケットごとにソース・ドキュメントを参照する場合は、バケット URL を含む列を選択します。</li> <li>ソース・ドキュメントを個別に参照する場合は、ドキュメント URL を含む列を選択します。</li> </ul>                                                                                                                                                                        |
| 入力タイプ          | <p>入力列の URL のタイプを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>バケットごとにソース・ドキュメントを参照する場合は、「<b>バケット</b>」を選択します。</li> <li>ソース・ドキュメントを個別に参照する場合は、「<b>ドキュメント</b>」を選択します。</li> </ul>                                                                                                                                                                                          |
| 出力タイプ          | <p>(請求書および領収書のみ)出力に含める列セットを指定します。</p> <p>領収書の場合、出力タイプは、フィールド項目または明細項目のいずれかとして選択できます。フィールド項目は、業者情報、請求合計、税など一般的な詳細です。明細項目は、購入されたアイテムの詳細です。このオプションは、OCI Document Understanding サービスによって取得される出力列を決定します。</p> <p>請求書の場合、出力タイプは、フィールド項目または明細項目のいずれかとして選択できます。フィールド項目は、ベンダー詳細、請求合計、税など一般的な詳細です。明細項目は、購入されたアイテムの詳細です。このオプションは、OCI Document Understanding サービスによって取得される出力列を決定します。</p> |
| すべての入力列を結果に含める | すべての入力列を結果に含める場合のオプションです。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |

## OCI Document Understanding モデルに生成された出力データ

OCI Document Understanding モデルを使用してドキュメントを分析する場合、Oracle Analytics データ・フローはドキュメントに関するデータを生成し、結果を別のデータセットに保存します。

生成されたデータセットを見つけるには、Oracle Analytics ホーム・ページから、「**データ**」、「**データセット**」の順に移動し、データセットを開きます。たとえば、領収書情報のキー値抽出からの出力データセットを次に示します。ここで、「ドキュメント・タイプ」は予測されたドキュメント・タイプであり、「信頼度」は予測の信頼度レベルです。

| Page No | Document Type | ID | Document Name  | Document URL                    | Confidence |
|---------|---------------|----|----------------|---------------------------------|------------|
| 1       | RECEIPT       | 1  | receipt001.jpg | document_input/o/receipt001.jpg | 0.94       |
| 1       | RECEIPT       | 2  | receipt002.jpg | document_input/o/receipt002.jpg | 0.94       |
| 1       | RECEIPT       | 3  | receipt003.jpg | document_input/o/receipt003.jpg | 0.91       |
| 1       | RECEIPT       | 4  | receipt004.jpg | document_input/o/receipt004.jpg | 0.95       |
| 1       | RECEIPT       | 5  | receipt005.jpg | document_input/o/receipt005.jpg | 0.92       |
| 1       | RECEIPT       | 6  | receipt006.jpg | document_input/o/receipt006.jpg | 0.95       |
| 1       | RECEIPT       | 7  | receipt007.jpg | document_input/o/receipt007.jpg | 0.93       |
| 1       | RECEIPT       | 8  | receipt008.jpg | document_input/o/receipt008.jpg | 0.92       |
| 1       | RECEIPT       | 9  | receipt009.jpg | document_input/o/receipt009.jpg | 0.95       |
| 1       | INVOICE       | 10 | receipt010.jpg | document_input/o/receipt010.jpg | 1.00       |
| 1       | RECEIPT       | 11 | receipt011.png | document_input/o/receipt011.png | 0.94       |
| 1       | RECEIPT       | 12 | receipt012.png | document_input/o/receipt012.png | 0.95       |
| 1       | RECEIPT       | 13 | receipt013.png | document_input/o/receipt013.png | 0.98       |
| 1       | RECEIPT       | 14 | receipt014.png | document_input/o/receipt014.png | 0.95       |

## ドキュメント分類

| 出力列                | タイプ | 説明                                                                               |
|--------------------|-----|----------------------------------------------------------------------------------|
| ドキュメント・タイプ         | 文字列 | 識別されたドキュメント・タイプ。                                                                 |
| 信頼度                | 番号  | 予測の信頼度スコア(0 から 1 のスケール)。                                                         |
| ページ番号              | 番号  | 結果のページ番号。                                                                        |
| メディア・タイプ           | 文字列 | ドキュメントのファイル・タイプのメディア。                                                            |
| ステータス・サマリー         | 文字列 | モデルの出力の簡潔なサマリー。この列は、成功した出力の場合空白となり、失敗した出力の場合問題が示されます(たとえば、サポートされていないファイル・タイプなど)。 |
| バケットからのドキュメント・ファイル | 文字列 | 指定されたバケットからのドキュメントのオブジェクト・ストレージ URL。この列は、入力タイプがバケットの場合にのみ使用されます。                 |

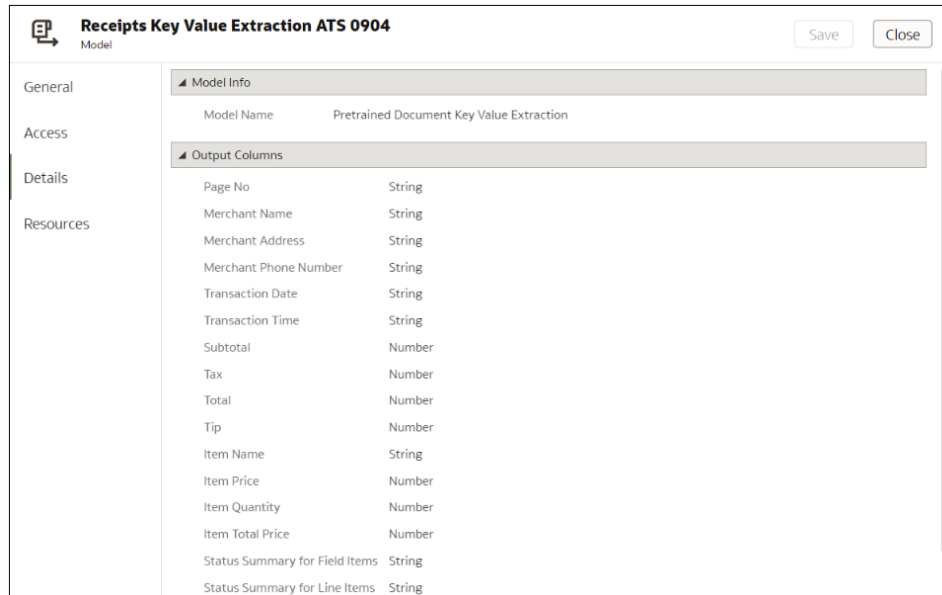
## キー値の抽出

キー値抽出モデルの出力列を確認するには、Oracle Analytics ホーム・ページから、「機械学習」、「モデル」の順に移動します。

| Type | Name                                      | Connection   | Owner | Modified    |
|------|-------------------------------------------|--------------|-------|-------------|
| ☺    | Language Pretrained Sentiment Analysis    | OCI Resource | Admin | 15 Sep 2023 |
| ☺    | Pretrained Sentiment Analysis             | OCI Resource | Admin | 15 Sep 2023 |
| ☺    | AI-Language Pretrained Sentiment Analysis | OCI Resource | Admin | 15 Sep 2023 |
| 🔍    | AIVISION Pretrained Object Detection      | OCI Resource | Admin | 15 Sep 2023 |
| 📄    | Pretrained Document Classification MB     | OCI Resource | Admin | 13 Sep 2023 |
| 🔑    | Receipts Key Value Extraction AT5 0904    | OCI Resource | Admin | 4 Sep 2023  |

モデルにカーソルを合せ、「アクション」をクリックします(👉)。

「検査」をクリックしてから「詳細」をクリックし、そのモデル・タイプに生成されている出力列を確認します。



「リソース」をクリックして、ステージング・バケットのコンパートメントおよびステージング・バケットを確認して更新します。

## Oracle Analytics での OCI Language モデルの使用

Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Language モデルを使用すると、人工知能(AI)の専門知識を必要とせずに、アプリケーションにキー・フレーズ抽出、センチメント分析、分類、名前付きエンティティ認識および言語認識を構築できます。

### トピック:

- データセットへの OCI Language モデルの適用
- データセット内の機密データの不明瞭化

開始する前に、OCI Data Science 統合の前提条件に従い、Oracle Analytics のモデルを登録したことを確認します。OCI Language モデルを Oracle Analytics と統合するための前提条件および Oracle Analytics で OCI Language モデルを使用可能にする方法を参照してください。

Oracle Analytics は次のモデルをサポートします:

- キー・フレーズの抽出
- 言語の検出
- 名前エンティティの認識
- PII 識別
- センチメント分析
- テキスト分類

**ノート:** Oracle Analytics は、OCI AI Language で作成されたカスタム・モデルをサポートしません。

## データセットへの OCI Language モデルの適用

OCI Language モデルをデータセットに適用して、データを分析し、結果を別のデータセットに格納します。たとえば、顧客データの場合、センチメント分析によって、フィードバック・ポータルに入力された顧客レビューを分析できます。

前提条件:

- Oracle Analytics インスタンスが OCI Language と統合されていることを確認します。[Oracle Analytics の OCI Language との統合](#)を参照してください。
  - Oracle Analytics Cloud に OCI Language モデルを登録します。[Oracle Analytics で OCI Language モデルを使用可能にする方法](#)を参照してください。
  - 分析するデータを含むデータセットを準備します。
1. Oracle Analytics ホーム・ページで、「作成」、「データ・フロー」の順にクリックします。
  2. 分析するテキストを含むデータセットを選択し、「追加」をクリックします。
  3. データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」(+)をクリックします。
  4. 「データ・フロー・ステップ」ペインで、**AI モデルの適用**をダブルクリックし、使用するモデルを選択します。
  5. 「AI モデルの適用」ダイアログで、「入力」セクションに移動し、パラメータを構成します。

The screenshot displays the 'Apply AI Model' configuration for 'Pretrained Key Phrase Extraction'. It includes sections for 'Outputs' and 'Parameters'. The 'Outputs' section has three checked items: 'Key Phrase Text', 'Score', and 'Status Summary'. The 'Parameters' section shows three dropdown menus for 'Input Column', 'Reference Column 1', and 'Reference Column 2', all currently set to 'Select a column'. Below the parameters is a data table with columns '99 ID', 'ab Review\_Date', 'ab Author\_Name', and 'ab Vehicle\_Tit'. A search dropdown on the right shows 'ab review' selected, with a tooltip indicating 'Treat As: Attribute', 'Data Type: Text', and 'Aggregation: None'.

最低限、「入力列」および参照列 1 を構成します。

必要に応じて、参照列 2 および 3 に値を割り当てて、出力データセットをさらに強化できます。たとえば、ソース・データセットから AI モデルの出力データセットに含まれる 2 つの追加の列を選択できます。

6. データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」 (+) をクリックし、「データの保存」を選択します。
7. 出力結果を格納するデータセットの名前を入力します。
8. 「データ保存先」フィールドで、出力データを保存するための場所を指定します。
9. 「保存」をクリックして、データ・フローの名前と説明を入力し、「OK」をクリックしてデータ・フローを保存します。
10. 「データ・フローの実行」をクリックしてイメージを分析し、結果を新しいデータセットに出力します。

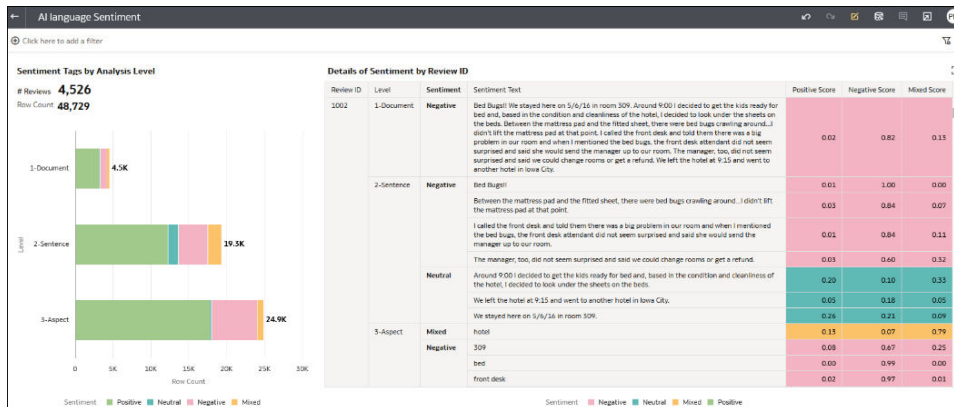
データ・フローで分析が完了したら、ステップ 7 で指定したデータセットを開きます。生成されたデータセットを見つけるには、Oracle Analytics ホーム・ページから、「データ」、「データセット」の順に移動します。

| Review ID | Sentiment | Aspect      | Document    | Sentence    |
|-----------|-----------|-------------|-------------|-------------|
|           |           | {Row Count} | {Row Count} | {Row Count} |
| 1002      | Mixed     | 1           |             |             |
|           | Negative  | 10          | 1           | 4           |
|           | Neutral   |             |             | 3           |
| 1003      | Negative  | 2           | 1           | 2           |
| 1004      | Mixed     |             |             | 1           |
|           | Negative  | 2           | 1           | 4           |
| 1005      | Negative  | 9           | 1           | 7           |
|           | Positive  | 1           |             | 1           |
| 1006      | Negative  |             | 1           | 1           |
|           | Neutral   |             |             | 3           |
| 1007      | Negative  | 4           | 1           | 2           |
| 1008      | Mixed     | 1           |             |             |
|           | Negative  | 3           | 1           | 4           |
|           | Neutral   |             |             | 1           |
| 1009      | Mixed     | 1           |             |             |
|           | Negative  | 6           | 1           | 2           |
|           | Positive  | 2           |             | 2           |

| Positive Score, Negative Score |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|--------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Review ID                      | Review Text                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 1002                           | Bed Bugs!! We stayed here on 5/6/16 in room 309. Around 9:00 I decided to get the kids ready for bed and, based in the condition and cleanliness of the hotel, I decided to look under the sheets on the beds. Between the mattress pad and the fitted sheet, there were bed bugs crawling around...I didn't lift the mattress pad at that point. I called the front desk and told them there was a big problem in our room and when I mentioned the bed bugs, the front desk attendant did not seem surprised and said she would send the manager up to our room. The manager, too, did not seem surprised and said we could change rooms or get a refund. We left the hotel at 9:15 and went to another hotel in Iowa City. |

これで、ワークブックのデータをビジュアル化できるようになりました。



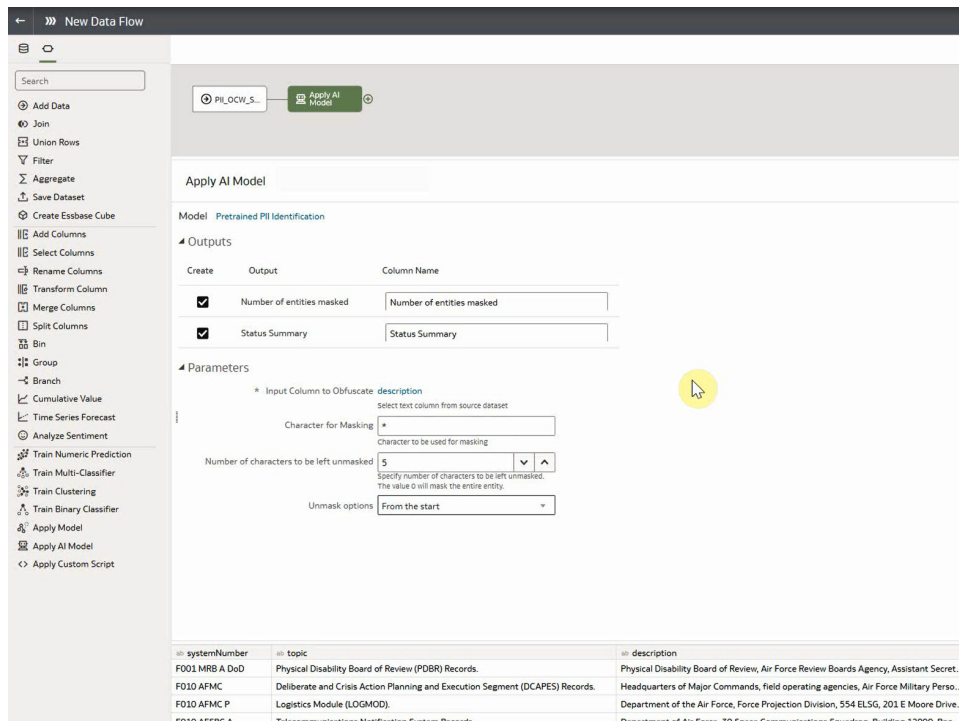
## データセット内の機密データの不明瞭化

個人識別可能情報(PII)モデルをデータセットに適用して、データセット内の機密データをマスクまたは非表示にします。たとえば、ワークブック・ユーザーが顧客の個人詳細にアクセスできないように、顧客住所詳細を部分的にマスクできます。

開始する前に、次の前提条件ステップを実行します:

- Oracle Analytics インスタンスが OCI Language と統合されていることを確認します。Oracle Analytics の OCI Language との統合を参照してください。
- Oracle Analytics Cloud に OCI Language モデルを登録します。Oracle Analytics で OCI Language モデルを使用可能にする方法を参照してください。
- 不明瞭化するデータを含むデータセットを準備します。

1. Oracle Analytics ホーム・ページで、「作成」、「データ・フロー」の順にクリックします。
2. 分析するテキストを含むデータセットを選択し、「追加」をクリックします。
3. データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」(+)をクリックします。
4. 「データ・フロー・ステップ」ペインから、「AI モデルの適用」をクリックしてから、Oracle Analytics Cloud 環境に登録されている事前トレーニング済 PII 識別モデルを選択します。



5. 「AI モデルの適用」ダイアログの「パラメータ」セクションで、次のオプションを構成します：
  - **不明瞭化する入力列** - マスクまたは非表示にする機密詳細を含む列を選択します。
  - **マスキング用文字** - 不明瞭化に使用する文字を入力します。たとえば、アスタリスクでデータを不明瞭化するには"\*"を入力します。
  - **マスクしないままにする文字数** - すべてのデータをマスクまたは非表示にするために 0 を入力するか、表示したままにする文字数を入力します。たとえば、最初の 5 文字を変更しないままにするには"5"を入力します(「マスク解除オプション」で「先頭から」を選択した場合)。
  - **マスク解除オプション** - 不明瞭化の開始位置を指定します。たとえば、住所詳細の先頭からなどです。
6. データ・フロー・エディタで、「ステップの追加」(+)をクリックし、「データの保存」を選択します。
7. 出力結果を格納するデータセットの名前を入力します。
8. 「データ保存先」フィールドで、出力データを保存するための場所を指定します。
9. 「保存」をクリックして、データ・フローの名前と説明を入力し、「OK」をクリックしてデータ・フローを保存します。



10. 「データ・フローの実行」をクリックしてイメージを分析し、結果を新しいデータセットに出力します。

データ・フローで分析が完了したら、ステップ 7 で指定したデータセットを開きます。生成されたデータセットを見つけるには、Oracle Analytics ホーム・ページから、「データ」、「データセット」の順に移動します。

これで、ワークブックのデータをビジュアル化できるようになりました。

Total number of entities masked

157 



Masked descriptions w/ # of entities masked

| description                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | Number of entities masked |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------|
| 306 Flying Training Group, 1st Flying Training Squadron, Pueblo, CO 81001                                                                                                                                                                                                                                                                     | 0                         |
| 83d Fighter Weapons Squadron, Analysis Division, Building 1801, 1287 ***** Tyndall Air Force Base, FL 32403-5217.                                                                                                                                                                                                                             | 1                         |
| Absentee and deserter documents are maintained in the Unit Personnel Record Group at consolidated base personnel offices. Deserter information files are maintained at major commands of the parent unit of assignment. Official mailing addresses are published as an appendix to the Air Force's compilation of systems of records notices. | 0                         |
| Academic Detachment, Secretary of the Air Force Office of Public Affairs (SAF/PAOL), 780 V*****                                                                                                                                                                                                                                               | 2                         |
| Air Force Appellate Review Office, 1535 ***** Andrews Air Force Base, MD 20351-7002; all Civilian Personnel Flights where appeals and/or grievances are filed. Official mailing addresses are published as an appendix to the Air Force's compilation of systems of records notices.                                                          | 1                         |
| Air Force Art Program Office, 1720 Air Force Pentagon, Washington, DC 20330-1720.                                                                                                                                                                                                                                                             | 0                         |
| Air Force Audit Agency Training Division (AFAA/RMT), March Air Force Base, CA 92518*****.                                                                                                                                                                                                                                                     | 1                         |
| Air Force Central Adjudication Facility, 229 B***** 20032-7040.                                                                                                                                                                                                                                                                               | 1                         |
| Air Force Colonels Group, Headquarters United States Air Force, 1040 Air Force Pentagon, Washington, DC 20330-1040.                                                                                                                                                                                                                           | 0                         |

# インポート、エクスポートおよび共有

このトピックでは、ワークブック、ビジュアライゼーションおよびストーリーをインポート、エクスポートおよび他のユーザーと共有する方法について説明します。

## トピック:

- [ワークブック・ファイルのインポート](#)
- [ワークブックの共有](#)
- [選択した特定のキャンバスとのワークブック URL の共有](#)
- [ワークブックまたはフォルダのファイルとしてのエクスポート](#)
- [「ビジュアル化」または「表示」ページからのビジュアライゼーションのエクスポート](#)
- [ビジュアライゼーションから Excel への書式設定されたデータのエクスポート\(プレビュー\)](#)
- [ソーシャル・メディアとのビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードの共有](#)
- [ソーシャル・メディアと共有しているファイルの管理](#)
- [ビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードのファイルの電子メール送信](#)
- [ビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードの印刷](#)
- [ワークブック電子メール・スケジュールを使用したビジュアライゼーションの共有\(プレビュー\)](#)

## ワークブック・ファイルのインポート

Analytics Cloud または Oracle Analytics Desktop からエクスポートされたワークブック・ファイル(.dva file)をインポートできます。Oracle Fusion Cloud Applications Suite からエクスポートされたワークブックもインポートできます。

Oracle Analytics によって、ワークブックのエディタにアクセスするためのパスワードを求められる場合があります。

インポートには、関連付けられているデータセット、接続文字列、接続資格証明および保存されたデータなど、ワークブックの使用に必要なすべてのものが含まれています。

 ノート:

Oracle Analytics 環境と同じバージョン(またはそれより前のバージョン)からエクスポートされたワークブック・ファイルをインポートできます。たとえば、2022 年 5 月の更新を含む Oracle Analytics 環境からワークブックをエクスポートした場合、2022 年 5 月以降の更新(2022 年 7 月など)を含む他の Oracle Analytics 環境にそれをインポートできます。

ただし、Oracle Analytics のより新しい更新からエクスポートされたワークブックをインポートした場合、予期しない結果が発生することがあります。たとえば、2022 年 9 月の更新を含む Oracle Analytics 環境からワークブックをエクスポートした場合は、より古い更新(2022 年 6 月など)を含む Oracle Analytics 環境にこのワークブックをインポートすることはお薦めしません。

1. ホーム・ページで、「ページ・メニュー」アイコンをクリックし、「ワークブック/フローのインポート」を選択します。
2. 「ワークブック/フローのインポート」ダイアログで「ファイルの選択」をクリックするか、ワークブック・ファイルをダイアログにドラッグして、「インポート」をクリックします。

インポートが成功したら、インポートした接続を開いて保存し、有効であることを確認します。データ・ソース接続の編集を参照してください。

## ワークブックの共有

ワークブックの URL をコピーして共有することによって、ワークブックを他のユーザーと共有できます。

 LiveLabs スプリント

ワークブックは共有フォルダに保存し、ワークブックに適切な権限を付与する必要があります。

ユーザーがワークブックを開いたときにワークブックが表示される方法は、ユーザーの権限とワークブックがどのように設定されているかによって異なります。

- 共有されているワークブックにダッシュボードが含まれていて、ユーザーの権限が読み取り専用である場合、ワークブックのダッシュボードは表示されますが、ユーザーは「ビジュアル化」ページでワークブックにアクセスできません。
  - 共有されているワークブックが、「表示」ページにプレゼンテーション・フローとして表示されている場合、ダッシュボードとキャンバスのプリファレンスの設定内容によって、ユーザーがプレビューで、プレゼンテーション・フローやダッシュボードをどのように操作できるかが決まります。[プレゼンテーション・フローを開く](#)を参照してください。
  - ワークブックにダッシュボードが含まれておらず、ユーザーの権限が読み取り専用である場合、ワークブックは「ビジュアル化」ページに表示されます。ユーザーは、「ビジュアル化」ページでフィルタ値の変更、フィルタの追加、エクスポート、ソートおよびドリルを実行できます。
1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。

2. ワークブックを共有フォルダに保存します。  
共有のワークブック・フォルダがない場合は、「名前を付けて保存」、「新規フォルダ」の順にクリックし、名前を入力して「作成」をクリックします。
3. 共有ワークブックにロールを付与し、同じロールのユーザーが、ワークブックを適切に表示または編集できるようにします。
  - a. 「ホーム・ページ」で、「ナビゲータ」をクリックしてから「カタログ」をクリックします。
  - b. 「共有フォルダ」をクリックし、共有ワークブックに移動します。
  - c. ワークブックにカーソルを合せ、「アクション」メニューをクリックしてから「検査」をクリックします。
  - d. 「共有」タブをクリックします。
  - e. ロールを適切に追加または編集します。

| ロール         | 説明                                     |
|-------------|----------------------------------------|
| BI コンシューマ   | このロールのユーザーがワークブックを表示し、使用するフィルタを制御できます。 |
| BI コンテンツ作成者 | このロールのユーザーがワークブックを編集できます。              |

4. ワークブックの URL をコピーし、ユーザーと共有します。  
これで、ユーザーがカタログからワークブックにアクセスできます。

## 選択した特定のキャンバスとのワークブック URL の共有

特定のワークブック・キャンバスを表示する URL を作成し、その URL を共有することで、他のユーザーはユーザー・インターフェースを使用して特定のワークブック・キャンバスに移動する必要なく、ワークブック・キャンバスを表示できます。

1. ホーム・ページで、共有するキャンバスを含むワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します
2. 「ビジュアル化」または「表示」のキャンバスで、ワークブック・ツールバーの「エクスポート」アイコンをクリックします。
3. 「開始」リストから、キャンバスを選択します。
  - ワークブックの保存方法に基づいて、ワークブックを開くキャンバスを選択する場合は、「デフォルト・キャンバス」を使用します。
  - 現在表示しているキャンバスを選択する場合は、「選択済キャンバス」を使用します。
4. 「リンクのコピー」をクリックして、URL を他のユーザーと共有します。
5. オプション: QR コードを共有してスキャンすると、モバイル・デバイスでワークブックの URL を開くことができます。

# ワークブックまたはフォルダのファイルとしてのエクスポート

バックアップの目的で、または別のユーザーに提供して **Analytics Cloud** または **Oracle Analytics Desktop** のインスタンスにインポートできるようにするために、ワークブックまたはフォルダをアーカイブ・ファイル(.DVA)としてエクスポートできます。

エクスポートは、ワークブックとファイルを他のユーザーと共有したり、ワークブックとファイルを **Analytics Cloud** と **Oracle Analytics Desktop** の間で移動したりするための方法です。.DVA ファイルはエクスポートおよびインポートのためのもので、**Analytics Cloud** または **Oracle Analytics Desktop** 以外のアプリケーションで開くことはできません。

.DVA ファイルには、関連付けられているデータセット、接続文字列、接続資格証明および保存されたデータなど、指定する項目が含まれます。

1. 「ホーム」 ページで、「ナビゲータ」をクリックし、次に「カタログ」をクリックします。
2. 「カタログ」 ページで、共有するワークブックまたはフォルダを強調表示して「アクション・メニュー」をクリックし、「エクスポート」を選択して「エクスポート」ダイアログを開きます。
3. 「名前」では、デフォルト名を維持するか、エクスポート・ファイル(.DVA ファイル)の新規名を入力します。
4. 「データを含める」 オプションを有効にし、ワークブックまたはフォルダを共有するときにデータを含めます。
5. 「接続資格証明を含める」 オプションを有効にし、ユーザーがサインインせずにワークブックを開くことができるようにします。このフィールドを設定するには、次のガイドラインを使用してください:
  - **Excel、CSV または TXT データ・ソース** - これらのデータ・ソースはデータ接続を使用しないため、「接続資格証明を含める」 オプションをクリアできます。
  - **データベース・データ・ソース** - 「接続資格証明を含める」 オプションを有効にする場合、インポートしたワークブックにデータをロードするために、有効なユーザー名およびパスワードを指定する必要があります。
  - **Oracle Fusion Cloud Applications Suite、Oracle Analytics Cloud – Essbase または Oracle Essbase データ・ソース** - 「接続の作成」ダイアログの「認証」フィールドで、「常にこれらの資格証明を使用」 オプションも選択していることを確認してください。

「接続資格証明を含める」 オプションをクリアするか、「認証」フィールドで「ユーザーは自分の資格証明の入力が必要」 オプションを指定する場合、インポートしたワークブックにデータをロードするために、有効なユーザー名およびパスワードを指定する必要があります。
6. 「データを含める」 または 「接続資格証明を含める」 を有効にした場合、ワークブックまたはフォルダをインポートし、接続資格証明およびデータを復号化するために指定する必要があるパスワードを入力し確認します。
7. 「権限を含める」 を有効にすると、ワークブックのインポート時に共有接続が動作するように、アクセス権限の詳細を含めることができます。

8. 「保存」をクリックして.DVA ファイルにエクスポートします。
9. 「OK」をクリックして、ブラウザ内で開くのではなく、.DVA ファイルを保存することを指定します。
10. .DVA ファイルを保存する場所を参照します。
11. 「保存」をクリックして、指定したフォルダに.DVA ファイルを保存します。

## 「ビジュアル化」または「表示」ページからのビジュアライゼーションのエクスポート

ビジュアライゼーションは、DVA (ビジュアライゼーション・ワークブック・ファイル)、Powerpoint (PPTX)、Adobe Acrobat (PDF)、PNG または CSV (データのみ)などの様々な形式でエクスポートできます。

### ノート:

別のアプリケーションまたは Web ページに組み込まれているビジュアライゼーションからデータをエクスポートできます。[分析コンテンツの埋込みについて](#)を参照してください。

1. ホーム・ページで、エクスポートするビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「ビジュアル化」または「表示」キャンバスに移動して、エクスポートするビジュアライゼーションをクリックします。
3. ビジュアライゼーションのツールバーで「メニュー」、「エクスポート」の順にクリックして、「ファイル」をクリックします。
4. 「フォーマット」フィールドで必要な出力フォーマットを選択し、出力オプションを指定します:
  - 「Powerpoint (pptx)」、「Acrobat (pdf)」および「イメージ(png)」の場合 — ファイル名、用紙のサイズおよび向きを指定します。これらのビジュアル形式のいずれかを共有する場合、ビジュアライゼーションは選択したサイズと向きに基づいて再レンダリングされます。このため、表を共有している場合、出力ファイルにはビジュアライゼーションに表示される表の列と行の一部が含まれない可能性があります。
  - 「データ(csv)」の場合 — 出力ファイル名を指定します。このオプションには、ワークブックで使用されるデータのみが含まれます。出力ファイルでは、コンピュータのロケールのデータ・デリミタが使用されます。たとえば、ロケールがブラジルに設定されている場合、小数値のデリミタは、ロケールが米国に設定されている場合に使用されるピリオドではなくカンマとなります。
  - 「パッケージ(dva)」の場合 — ワークブック・データ、接続資格証明およびアクセス権限を含めるかどうかを指定します。パスワードを入力する必要なくワークブック DVA ファイルを開けるようにするには、「接続資格証明を含める」をクリックして、パスワードを指定します。
5. 「含める」フィールドで「アクティブ・ビジュアル」を選択します。
6. 「保存」をクリックします。

## ビジュアライゼーションから Excel への書式設定されたデータのエクスポート(プレビュー)

書式設定されたデータを表およびピボット表のビジュアライゼーションから Microsoft Excel (XLSX)形式にエクスポートできます。

この機能は、現在プレビューを目的として公開されています(Enterprise Edition のみ)。システム設定で「Excel エクスポートのプレビュー」というプレビュー機能を有効にするよう管理者に依頼します。ワークブックのデータに適用されているフィルタは、エクスポートしたファイルのデータにも適用されます。25,000 行以下のビジュアライゼーションをエクスポートできます。プレビュー・オプションを参照してください。

1. ホーム・ページで、エクスポートする表またはピボット表ビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. ワークブックを表示している場合は、キャンバスで、データをエクスポートする表またはピボット表ビジュアライゼーションを右クリックします。
3. ワークブックを編集している場合は、キャンバスで、表またはピボット表ビジュアライゼーションの「アクション・メニュー」をクリックします。
4. 「エクスポート」を選択してから、「ファイル」を選択します。
5. 「ファイル」ダイアログで、「書式」フィールドに移動し、「Excel」を選択します。
6. 「含める」フィールドで「アクティブ・ビジュアル」を選択します。
7. 「保存」をクリックします。
8. ローカル・ファイル・システム内で、Excel ファイルを保存する場所を選択します。
9. 「保存」をクリックします。

## ソーシャル・メディアとのビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードの共有

ビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードを Oracle Social Network (OSN)、Oracle Content and Experience (OCE)、Slack、Twitter、LinkedIn などのソーシャル・メディア・チャンネルと共有できます。

管理者が設定したソーシャル・メディア・チャンネルと共有できます。共有を希望するソーシャル・メディア・チャンネルが見当たらない場合、管理者に連絡してください。

共有しているリンクは、すべてユーザー・プロフィールに表示されます。「ユーザー・プロフィール」ページを使用して共有リンクを管理できます。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「アクション」メニューをクリックしてから「開く」を選択します。
2. 「ビジュアル化」または「表示」キャンバスで、ワークブック・ツールバーの「エクスポート」アイコンをクリックして、使用するソーシャル・チャンネルのアイコンをクリックします。



初めてソーシャル・チャンネルを開く場合、サインインを求められることがあります。

3. ソーシャル・チャンネル・オプション・ペインを使用して、共有オプションを指定します。
4. 「送信」をクリックします。

## ソーシャル・メディアと共有しているファイルの管理

Oracle Social Network (OSN)、Oracle Content and Experience (OCE)、Slack、Twitter、LinkedIn などのソーシャル・チャンネルと共有しているリンクを表示および削除できます。

1. ホーム・ページで、ユーザー・プロフィール・アイコンをクリックします。
2. 「ユーザー・プロフィール」ページで、「共有リンク」タブをクリックします。
3. 共有ファイル・リンクのリストを確認します。必要に応じてリンクを削除します。

## ビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードのファイルの電子メール送信

ビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードは、Powerpoint (PPTX)、Acrobat (PDF)、イメージ(PNG)、CSV (データのみ)、パッケージ(接続資格証明を含むワークブック全体)などの形式で電子メール送信できます。

1. ホーム・ページで、エクスポートするビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードを含むワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「ビジュアル化」または「表示」のキャンバスで、ワークブック・ツールバーの「エクスポート」アイコンをクリックして、「メール送信」をクリックします。

「メール送信」オプションが見当たらない場合、このオプションが構成されているかどうかを管理者に問い合せてください。

3. 「フォーマット」オプションを使用して、必要な出力フォーマットを選択し、出力オプションを指定します:
  - 「Powerpoint (pptx)」、「Acrobat (pdf)」および「イメージ(png)」の場合 - ファイル名、用紙のサイズおよび向きを指定します。  
これらのビジュアル形式のいずれかを電子メールで送信する場合、ビジュアライゼーションまたはページは選択したサイズと向きに基づいて再レンダリングされます。このため、表を電子メールで送信している場合、出力ファイルにはビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードに含まれる表の列と行の一部が含まれない可能性があります。
  - 「データ(csv)」の場合 - 出力ファイル名を指定します。このオプションには、ワークブックで使用されるデータのみが含まれます。出力ファイルでは、コンピュータのロケールのデータ・デリミタが使用されます。たとえば、ロケールがブラジルに設定されている場合、小数値のデリミタは、ロケールが米国に設定されている場合に使用されるピリオドではなくカンマとなります。
  - 「パッケージ(dva)」の場合 - ワークブック・データ、接続資格証明およびアクセス権限を含めるかどうかを指定します。パスワードを入力する必要なくワークブック DVA ファイルを開けるようにするには、「接続資格証明を含める」をクリックして、パスワードを指定します。



4. 「電子メール」をクリックします。

電子メール・クライアントで、.DVA ファイルが添付された一部作成済の新規電子メールが開きます。

## ビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードの印刷

ワークブックのビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードを印刷できます。

印刷時に、ビジュアライゼーションまたはページは選択したサイズと向きに基づいて再レンダリングされます。このため、表を出力する場合に、印刷コピーにはビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードに含まれる表の列と行の一部が含まれない可能性があります。

1. ホーム・ページで、印刷するビジュアライゼーション、キャンバスまたはダッシュボードを含むワークブックを選択し、「アクション・メニュー」をクリックして、「開く」を選択します。
2. 「ビジュアル化」または「表示」のキャンバスで、「メニュー」および「エクスポート」をクリックして、「印刷」をクリックします。
3. 名前を指定し、包含リストからオプションを選択します。
  - **名前** - 必要に応じて名前を更新できます。
  - **含める** - アクティブなビジュアライゼーション、アクティブなキャンバスまたはすべてのキャンバスを印刷するように選択できます。また、「フィルタを含める」(フィルタがある場合)および「タイトルを含める」をクリックして、印刷される出力にそれらを含めることもできます。
  - **サイズ** - 「カスタム」設定(デフォルト・サイズ)を使用して画面に表示される高さで印刷したり、オプションで「比率調整」を選択することが可能であり、また別のサイズ・オプション(US Letter、A4 など)を選択することもできます。
  - **向き** - 横または縦のいずれの書式で印刷するかを選択できます。
4. オプション: ビジュアライゼーション、ワークブックまたはダッシュボードにフィルタがあり、それらを含める場合は、「フィルタを含める」をクリックします。
5. オプション: タイトルを含める場合は、「タイトルを含める」をクリックします。
6. オプション: 「サイズ」リストから、使用する用紙を選択します。「カスタム」を使用する場合は、幅と高さをインチ、(in)、ピクセル(px)または mm で指定します。
7. オプション: 印刷の向きの書式を選択します。
8. 「印刷」をクリックします。

## ワークブック電子メール・スケジュールを使用したビジュアライゼーションの共有(プレビュー)

スケジュール済電子メールを使用して、ワークブックのビジュアライゼーションを共有し、受信者のデータが常に最新のものになります。

この機能は、現在プレビューを目的として公開されています(**Enterprise Edition** のみ)。「システム設定」のワークブック電子メール・スケジュール(プレビュー)機能を有効にするように管理者に依頼してください。プレビュー・オプションを参照してください。

#### トピック:

- [ワークブック電子メール・スケジュールの作成について\(プレビュー\)](#)
- [ワークブック電子メール・スケジュールの作成\(プレビュー\)](#)
- [バースティング・ワークブック電子メール・スケジュールの作成\(プレビュー\)](#)
- [ワークブックのスケジュールおよびジョブの管理\(プレビュー\)](#)

## ワークブック電子メール・スケジュールの作成について(プレビュー)

PDF ファイルまたは PNG イメージ形式のワークブックのビジュアライゼーションを 1 人以上の受信者と電子メールで共有するようにスケジュールを設定できます。受信者のデータが常に最新のものになるように、時間単位、日単位、週単位、月単位または年単位で電子メールをスケジュールします。

この機能は、現在プレビューを目的として公開されています(**Enterprise Edition** のみ)。バースティング機能を使用するために、コンソールのワークブック電子メール・スケジュール(プレビュー)機能、および「システム設定」の「バースティングによるワークブック電子メール・スケジュールリング(プレビュー)」を有効にするように管理者に依頼してください。プレビュー・オプションを参照してください。

ビジュアライゼーションの配信をスケジュールするには、組織で **Oracle Analytics** の電子メール設定を構成しておく必要があります。レポート配信のための電子メール・サーバーの設定および[電子メール配信の制限](#)を参照してください。

- ワークブックにスケジュールを作成できるのは、そのワークブックに対する読取り/書込みアクセス権および共有の編集権限を持つ BI サービス管理者アプリケーション・ロールのメンバーのみです。
- ワークブックの配信スケジュールでは、ファイル名とワークブックのパスが使用されます。ワークブックを移動または名前変更した場合は、既存のスケジュールを削除し、新しいスケジュールを作成します。[ワークブックのスケジュールおよびジョブの管理\(プレビュー\)](#)を参照してください。
- ワークブックのスケジュールは **Shared Folders** 内に作成できます。**My Folders** 内のワークブックには他のユーザーはアクセスできません。
- 時間単位、日単位、週単位、月単位または年単位で繰り返すスケジュールを設定できます。
- ワークブックの電子メール・スケジュールでサポートされていないビジュアライゼーション・コンポーネントには、カスタム・プラグイン拡張機能、フィルタ・バー・オブジェクト、傾向線および RTL (右から左へ記述される)言語などがあります。

#### バースティング・スケジュール

**Oracle Analytics** で構成された特定のアプリケーション・ロールおよびユーザー・グループがアクセスする機密データがデータ・ビジュアライゼーションに含まれている場合、ワークブック・データ・ビジュアライゼーションを受信者に配信するバースティング・スケジュールを作成します。各受信者は、スケジュールを作成した管理者ユーザーのデータ・アクセス構

成ではなく、自分のデータ・アクセス構成に基づいてカスタマイズされたデータ・ビジュアライゼーションを受信します。[バースティング・ワークブック電子メール・スケジュールの作成\(プレビュー\)](#)を参照してください

- バースティングは、**Shared Folders** に保存されているワークブックから作成されたスケジュールに対して使用できます。
- 新しいスケジュールの作成を開始するとき、デフォルトでバースティングは無効になっています。
- バースティングでは、**Oracle Analytics** でまだ構成されていない外部受信者にビジュアライゼーションを送信することはできません。
- バースティングを使用する場合、**Oracle Analytics** で構成した個々のユーザーまたはアプリケーション・ロールの受信者を最大 **100** 人追加できます。たとえば、**BI コンシューマ**のアプリケーション・ロールを受信者として追加する場合、このロールが割り当てられているユーザーが **100** 人を超えていると、**100** 人目より後の受信者へのビジュアライゼーションの送信はスケジュールできません。

### スケジュールの管理

既存のワークブック電子メール・スケジュールを管理し、スケジュール済ジョブのステータスを確認したり、スケジュールを表示、編集または削除したりできます。[ワークブックのスケジュールおよびジョブの管理\(プレビュー\)](#)を参照してください。

- ワークブック電子メール・スケジュールを編集できるのは、スケジュールの作成者か、そのワークブックに対して同じアクセス権限および編集権限を持つユーザーです。受信者と共有されるデータ・ビジュアライゼーションは、スケジュールを編集して変更を保存する管理者ユーザーのデータ・アクセス構成に基づいています。
- ワークブックからワークブック電子メール・スケジュールを作成した後でワークブックのデータ・ビジュアライゼーションを編集すると、そのワークブックのデータ・ビジュアライゼーションに対する保存済の変更は、スケジュールを保存した管理者ユーザーのデータ・アクセス構成に基づいて、スケジュール済の電子メールに反映されます。
- 複数の受信者が設定されたワークブック電子メール・スケジュールをバースティングすると、受信者が個々のユーザーであるかアプリケーション・ロールのメンバーであるかに関係なく、スケジュールの受信者ごとにジョブがトリガーされます。各受信者は、**Oracle Analytics** での各自のデータ・アクセス構成に基づいて、カスタマイズされたバージョンのデータ・ビジュアライゼーションを受信します。

## ワークブック電子メール・スケジュールの作成(プレビュー)

ワークブック内の選択したキャンバスのデータ・ビジュアライゼーションを目的の受信者と共有するようにスケジュールを設定できます。データ・ビジュアライゼーションは、スケジュール済電子メールに添付された PDF ファイルまたは PNG 形式のイメージ・ファイルとして送信できます。

この機能は、現在プレビューを目的として公開されています(**Enterprise Edition** のみ)。バースティング機能を使用するために、コンソールのワークブック電子メール・スケジュール(プレビュー)機能、および「システム設定」の「バースティングによるワークブック電子メール・スケジュールリング(プレビュー)」を有効にするように管理者に依頼してください。プレビュー・オプションを参照してください。

1. ホーム・ページで、ワークブックを選択し、「**アクション・メニュー**」をクリックして、「**スケジュール**」を選択します。
2. 「スケジュール」タブで、「**新規**」をクリックします。
3. 「フォーマット」タブで、スケジュールの名前を入力します。
4. フォーマット(「**Acrobat (pdf)**」または「**イメージ(png)**」)を選択します。
5. 「**含む**」フィールドで、ビジュアライゼーションを共有するキャンバスを最大合計 5 つまで選択します。
6. PDF の場合のみ、ファイルのサイズおよび向きを選択します。ワークブック電子メール・スケジュール・オプションとして PDF を選択した場合は、自動検出を使用して、デバイスの画面サイズに基づいて PDF のサイズを決定できます。あるいは、ファイルに特定のサイズおよび向きを自分で選択することもできます。
7. 「**スケジュール**」タブで、開始日時を選択します。
8. オプション: 「**繰返し**」を選択して、繰返しスケジュールを作成します。
9. 「メール送信」タブで、受信者を入力します。外部受信者に対して Oracle Analytics ユーザー、アプリケーション・ロールおよび電子メール・アドレスを追加できます。複数の電子メール・アドレスはカンマで区切ります(例:  
*jane.white@abc.com,steve.brown@abc.com*)。すべての受信者は、スケジュールを作成した管理者ユーザーのデータ・アクセス構成に基づいてビジュアライゼーションを受信します。
10. オプション: データ・ビジュアライゼーションでバースティングが構成されており、特定のアプリケーション・ロールおよびユーザー・グループがアクセスする機密データがビジュアライゼーションに含まれている場合は、「**バースティング**」を有効にします。
11. 件名およびメッセージを入力します。電子メール・メッセージの本文には、リッチ・テキスト・エディタを使用でき、「**リンク**」をクリックすると、URL リンクをワークブックに追加できます。また、「**出カイメージ**」をクリックすると、データ・ビジュアライゼーションの PNG イメージを、電子メール・メッセージの本文に追加することも可能です。
12. 「**保存**」をクリックします。

## バースティング・ワークブック電子メール・スケジュールの作成(プレビュー)

Oracle Analytics で構成された特定のアプリケーション・ロールおよびユーザー・グループがアクセスする機密データがデータ・ビジュアライゼーションに含まれている場合、ワークブック・データ・ビジュアライゼーションを受信者に配信するバースティング・スケジュールを作成します。各受信者は、スケジュールを作成した管理者ユーザーのデータ・アクセス構成ではなく、自分のデータ・アクセス構成に基づいてカスタマイズされたデータ・ビジュアライゼーションを受信します。

この機能は、現在プレビューを目的として公開されています(Enterprise Edition のみ)。「システム設定」のワークブック電子メール・スケジュール(プレビュー)機能および「バースティングによるワークブック電子メール・スケジュールリング(プレビュー)」を有効にするように管理者に依頼してください。プレビュー・オプションを参照してください。

1. ホーム・ページで、共有するキャンバスおよびビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックして、「**スケジュール**」を選択します。
2. スケジュールを作成するか、既存のスケジュールを編集します。

3. 「メール送信」タブで、「**バースティング**」を有効にし、受信者を入力します。
4. オプション: 件名およびメッセージを入力します。
5. 「**保存**」をクリックします。

## ワークブックのスケジュールおよびジョブの管理(プレビュー)

スケジュール済ジョブのステータスを確認したり、スケジュールを表示、編集または削除したりできます。

この機能は、現在プレビューを目的として公開されています(Enterprise Edition のみ)。「システム設定」のワークブック電子メール・スケジュール(プレビュー)機能を有効にするように管理者に依頼してください。プレビュー・オプションを参照してください。

1. ホーム・ページで、共有するキャンバスおよびビジュアライゼーションを含むワークブックを選択し、「**アクション**」メニューをクリックして、「**スケジュール**」を選択します。
2. 名前をクリックして、スケジュールを編集します。
3. オプション: 「**アクション**」メニューをクリックし、「**実行**」を選択して、現在時刻でのスケジュールを手動で実行します。
4. スケジュールを削除するには、スケジュールを選択して「**アクション**」メニューをクリックし、「**削除**」をクリックします。
5. オプション: 「**履歴**」タブをクリックして、以前にスケジュールされているジョブのステータスを確認します。
6. 「**保存**」をクリックします。
7. オプション: スケジュール済ジョブの進捗を検査するには、ホーム・ページで、「**ナビゲータ**」、「**ジョブ**」、「**フィルタ**」の順にクリックし、「**ワークブック**」を選択します。スケジュールのジョブを選択し、「**検査**」をクリックします。

# 第 IV 部

## レポート・データ

ここでは、データ・レポートの操作方法について説明します。

章:

- [分析の作成](#)
- [様々な方法でのデータの表示](#)
- [ダッシュボードの作成](#)
- [分析用データのフィルタリングと選択](#)
- [分析とダッシュボードでのプロンプト](#)
- [分析のインタラクティブ化](#)
- [コンテンツの管理](#)

# 16

## 分析の作成

この章では、分析を作成する方法を説明します。

 [ビデオ](#)

### トピック:

- [分析の作成の一般的なワークフロー](#)
- [最初の分析の作成](#)
- [列のプロパティの設定](#)
- [分析およびダッシュボードからのコンテンツのエクスポート](#)
- [式または計算済メジャーの編集](#)
- [分析のプロパティの設定](#)
- [プリファレンスの設定](#)
- [高度な手法: 別の分析からの書式設定のインポート](#)
- [高度な手法: HTML タグを使用した書式設定](#)
- [高度な手法: データを異なる方法で表示するための列の結合](#)
- [高度な手法: 分析のキャッシュ・オプションの設定](#)
- [高度な手法: 分析用論理 SQL 文の確認](#)
- [高度な手法: 変数の格納値の参照](#)
- [高度な手法: 直接データベース・リクエストの発行](#)

## 分析の作成の一般的なワークフロー

次に、分析を作成するための一般的なタスクを示します。

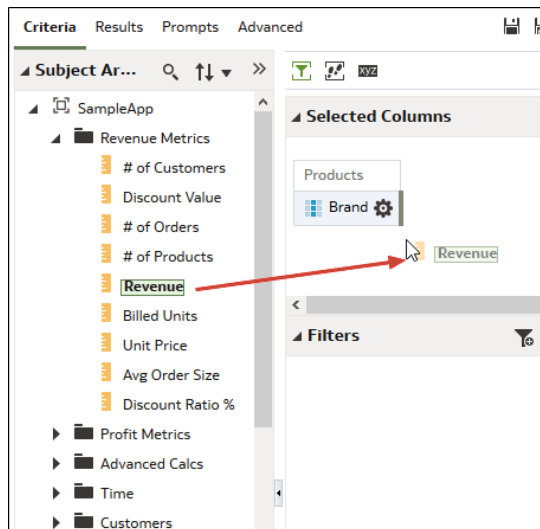
| タスク         | 説明                                      | 詳細情報                              |
|-------------|-----------------------------------------|-----------------------------------|
| 分析の作成       | 分析に使用する列を選択して配置します。                     | <a href="#">最初の分析の作成</a>          |
| 列のプロパティの設定  | 見出しや値の書式、データの表示、条件付き書式設定などのプロパティを指定します。 | <a href="#">列のプロパティの設定</a>        |
| 分析でのデータの使用  | 式および計算済メジャーを分析に追加します。                   | <a href="#">式または計算済メジャーの編集</a>    |
| 分析のデータ値への作用 | 分析に対してフィルタ、選択ステップ、グループおよび計算項目を指定します。    | <a href="#">分析用データのフィルタリングと選択</a> |

## 最初の分析の作成

組織のデータに対して問合せを実行する分析をすばやく作成できます。分析結果は、ビジネス上の疑問に対する回答に役立ちます。たとえば、「SampleApp」サブジェクト領域の「Brand」列と「Revenue」列を使用して分析を作成できます。

### 📺 ビデオ

1. クラシック・ホーム・ページの「作成」ペインで、「分析」をクリックします。
2. 「サブジェクト領域の選択」ダイアログを使用して、サブジェクト領域を検索および選択します。
3. 分析に含める列を追加するには、「サブジェクト領域」ペインから「選択された列」ペイン内の任意の位置にドラッグ・アンド・ドロップします。連続しない複数の列を選択するには、[Ctrl]キーを使用して、含める各列を選択し、列を「選択された列」ペインにドラッグします。

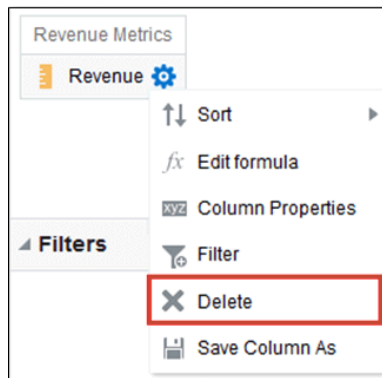


4. 列の順序を変更するには、列の上の十字を使用して、列を別の位置にドラッグ・アンド・ドロップします。



5. 列をカタログに保存するには、「選択された列」ペインで、列名の横の「オプション」をクリックして「名前を付けて列を保存」をクリックします。
6. 「名前を付けて保存」ダイアログで、列のフォルダ、名前および説明を指定して、「OK」をクリックします。
7. 列を除去するには、「選択された列」ペインで、列名の横にある「オプション」をクリックして、「削除」をクリックします。





すべての列を除去するには、「**基準からすべての列を除去します。**」をクリックします。このオプションでは元に戻すアクションを使用できないことに注意してください。列を除去するかわりに、分析に表示する価値のない列を非表示にできます。

8. 「結果」タブをクリックして、表またはピボット表で分析の結果を確認します。

The image shows a 'Compound Layout' dialog box. It has a 'Title' field and a 'Table' field. The 'Table' field contains a table with the following data:

| Brand    | Revenue      |
|----------|--------------|
| BizTech  | 318100000.00 |
| FunPod   | 322000000.00 |
| HomeView | 159900000.00 |

9. 「分析の保存」をクリックして、分析を保存するダイアログを表示します。
10. 「名前を付けて保存」ダイアログで、フォルダを選択し、分析の名前およびオプションで説明を指定します。

他のユーザーが分析を表示できるようにする場合は、分析を共有フォルダ領域に保存します。分析に他のオブジェクトが含まれる場合は、それらのオブジェクトにアクセス権限を割り当てるように求められます。

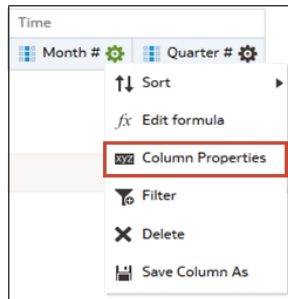
自分以外のユーザーが分析を表示できないようにする場合は、分析を「マイ・フォルダ」フォルダの下のフォルダに保存します。

11. ペイン下部にある「リフレッシュ」をクリックすると、保存したフォルダ下に分析がリストされることを再確認できます。

## 列のプロパティの設定

分析を作成する際は、列のプロパティを編集して列のロック・アンド・フィールドを制御できます。たとえば、「Revenue」列の値を小数第 2 位までドル記号付きで表示するように指定できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「選択された列」ペインで、列名の横にある「オプション」をクリックしてから、「列のプロパティ」を選択します。



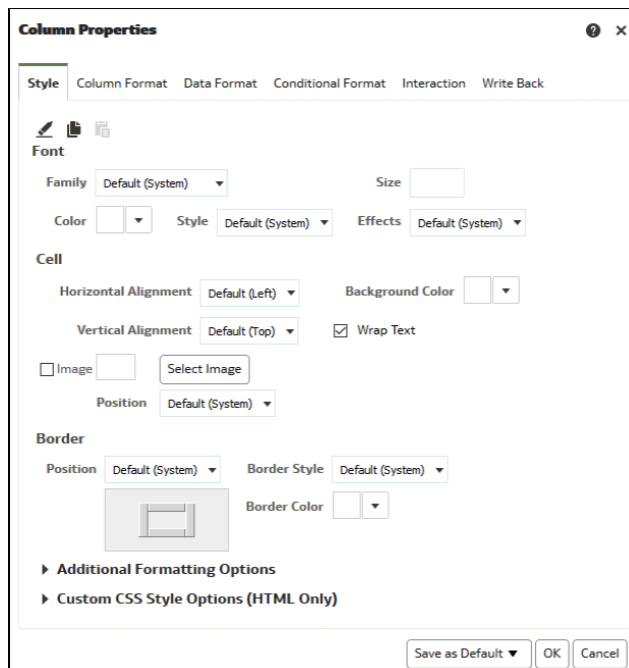
3. 列値の表示方法を指定します。
4. 列見出しとカスタム・テキストを書式設定し、データ表示条件を追加します。
5. ユーザーが列見出しまたは値をクリックすると実行されるアクションを指定します。
6. デフォルトの列書式を設定します。
7. 「OK」をクリックします。

## コンテンツへの書式設定の適用

列、ビューおよびダッシュボード・ページ・セクションなどの様々なタイプのコンテンツの値には、基本的な書式設定を適用できます。

たとえば、列の地域名を Arial 14 ポイントの赤で表示する場合があります。また、州名を Calibri 12 ポイントの青で表示することもできます。

1. 「選択された列」ペインで、列名の横にある「オプション」をクリックしてから、「列のプロパティ」を選択します。
2. フォント、セルの位置合せ、境界など、列のスタイルの特性を指定します。



3. 「OK」をクリックします。

## 列の書式設定

分析を作成する際は、列のプロパティを編集して外観とレイアウトを制御できます。列のコンテンツが特定の条件を満たす場合のみ、適用する書式を指定することもできます。

たとえば、「Revenue」列の\$1 百万を超える値が緑色の背景で表示されるように指定できます。

1. 「選択された列」ペインで、列名の横にある「オプション」をクリックしてから、「列のプロパティ」を選択します。
2. 「列のプロパティ」ダイアログで、「列書式」タブをクリックします。
3. 値の集計に影響しない分析の列を非表示にするには、「非表示」チェック・ボックスを選択します。

たとえば、イリノイ州の顧客のみを含む分析を作成するとします。「Customers.State」列はフィルタ処理のためにのみ追加されるため、この列は非表示にできます。

4. 「フォルダ見出し」および「列見出し」フィールドに独自の値を入力するには、「カスタムの見出し」を選択します。これらのフィールドを使用して、変数を参照し、ヘッダー値の書式を設定できます。これらの値で分析の列を識別します。
5. 管理者権限があり、HTML マークアップ(JavaScript を含む)を使用して見出しをカスタマイズする場合は、「カスタムの見出し」を選択した後、「HTML マークアップを含みます」を選択し、次に、適用する HTML マークアップを入力します。
6. 列で繰り返されるデータ値の表示方法を指定するには、「値の抑制」オプションの 1 つを選択します。

連続する複数の行で同じ値が出現する場合は、その値が 1 度のみ表示されるように指定できます。

7. 列のデータのデフォルト表示をオーバーライドするには、「データ書式」タブをクリックします。

このタブのオプションは、データのタイプによって異なります。

8. 特定の基準に基づいて列の値を特定の方法で表示するかどうかを指定するには、「条件付き書式」タブをクリックします。条件付き書式には、データおよびデータを含むセルに対する色、フォント、イメージなどを含めることができます。ヒート・マトリックスでは、データ・セルの背景やフォント色に条件付き書式を適用できません。
9. 「**条件の追加**」をクリックして、列を選択します。

10. 「**次と等しい次に存在する**」、「**次より大きい**」などの演算子を選択します。
11. 演算子に対する値は、値(1000000 など)を直接入力するか、リストから値を選択して指定します。
12. オプション: 「**詳細オプションの追加**」をクリックして、条件に変数を追加します。
13. 条件が true の場合に適用する書式設定を指定します。
14. 「**OK**」をクリックします。

## 分析を動的に設定

ユーザーが分析で列見出しや値をクリックしたときの動作を指定できます。たとえば、ユーザーが「Product」列値をクリックすると、その列値を求めるために合計されたデータにドリルダウンするように指定できます。

 [ビデオ](#)

**トピック:**

- [分析への相互作用の追加](#)
- [相互作用を使用可能にする方法](#)

## 分析への相互作用の追加

ビューで左クリックするか、右クリックしてポップアップ・メニューを表示するユーザーが使用できる相互作用を追加することで、ビューをよりインタラクティブにできます。たとえば、地域の列に対するデフォルトのプライマリ相互作用(左クリック・アクション)を「**ドリル**」と指定できます。これによって、ユーザーは詳細な地域にドリルダウンできます。

階層型データの場合、左クリックすると、デフォルトでデータが詳細にドリルダウンされます。Web ページまたはリンクを表示する右クリック・オプションをビューに追加できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「選択された列」ペインで、列名の横にある「オプション」をクリックしてから、「列のプロパティ」を選択します。
3. 「列のプロパティ」ダイアログで、「相互作用」タブをクリックします。  
列見出しおよびデータ値の相互作用を指定できます。
4. 「列見出し」の横にある「プライマリ相互作用」または「値」をクリックして、必要な動作を選択します。たとえば、「なし」を選択してアクションを無効にするか、「ドリル」を選択して詳細を表示します。
  - 「なし」を使用して、列でのすべての相互作用を無効にします。
  - データが階層になっている場合は、「ドリル」を使用して、より深いレベルの詳細コンテンツを表示します。列に階層が構成されていない場合は、ドリルを使用できません。
  - 「アクション・リンク」を使用して、Web ページを開くか、サポート BI コンテンツに移動します。
  - 「マスター詳細イベントの送信」を使用して、ビューを接続し、1つのビューによって1つ以上の他のビューの変更が促進されるようにします。
5. 「OK」をクリックします。

実行時にダッシュボードの列またはデータ・セルで右クリックしたときに使用できる相互作用を指定できます。「Products」列で製品名を右クリックしたときに使用可能な相互作用の例を次に示します。この列は、「Top Product Performers Based on Revenue」表にあります。

| Product           | Revenue              | Profit Ratio % | # of Orders    |
|-------------------|----------------------|----------------|----------------|
| PocketFun ES      | \$106,020,505        | 6.72%          | 159,170        |
| MicroPod 60Gb     |                      | 1.47%          | 74,422         |
| MPEG4 Camcorde    |                      | 5.19%          | 92,061         |
| CompCell RX3      |                      | 8.83%          | 91,421         |
| 7 Megapixel Digit |                      | 5.48%          | 75,124         |
| Touch-Screen T5   |                      | 5.00%          | 60,939         |
| Plasma HD Televi  |                      | 5.33%          | 15,352         |
| LCD HD Television |                      | 8.09%          | 13,727         |
| Tungsten E Plasm  |                      | 7.97%          | 10,279         |
| LCD 36X Standard  | \$28,699,248         | 7.05%          | 18,160         |
| <b>Total</b>      | <b>\$641,265,653</b> | <b>5.79%</b>   | <b>610,655</b> |

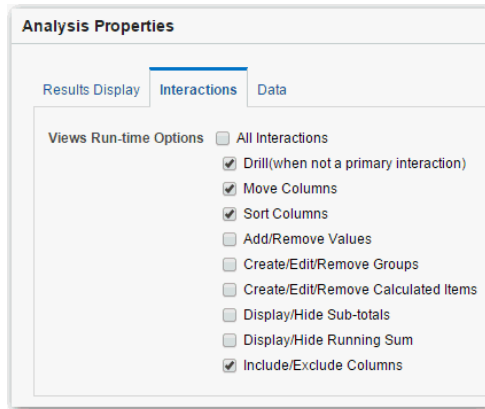
表示されている選択肢で、「ドリル」、「グループの作成」および「計算項目の作成」を設定できます。

## 相互作用を使用可能にする方法

分析に相互作用を追加する場合は、これらの相互作用を他のユーザーがポップアップ・メニューで使用できるようにします。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「基準」タブまたは「結果」タブをクリックします。

3. ツールバーの「**分析プロパティの編集**」をクリックします。
4. 「相互作用」タブをクリックします。



5. その分析で使用できるようにする相互作用を選択します。
6. 「OK」をクリックします。

## システムに対するデフォルト書式の設定

適切な権限がある場合は、列の書式設定をデフォルトの書式設定として保存できます。システム全体のデフォルトを設定すると、ユーザーには一貫性がもたらされ、分析に取り組む時間を節約できます。

たとえば、テキスト列に対するシステム全体のデフォルトとして **Times New Roman** を設定できます。

デフォルトを特定の値でオーバーライドするのではなく、デフォルト値を変更することをお勧めします。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「選択された列」ペインで、列名の横にある「**オプション**」をクリックしてから、「**列のプロパティ**」を選択します。
3. 「列のプロパティ」ダイアログで、列のデフォルトの書式設定を指定します。
4. 「**デフォルトとして保存**」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

## 分析およびダッシュボードからのコンテンツのエクスポート

分析およびダッシュボードからコンテンツをエクスポートできます。

### トピック:

- [分析の結果のエクスポート](#)
- [ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのエクスポート](#)

- エクスポートのヒント

## 分析の結果のエクスポート

Microsoft Office Excel、Adobe PDF と CSV 形式、および様々なデータのための形式(書式設定なし)のデータおよび書式設定を含む分析結果は、様々な形式にエクスポートできます。

たとえば、あるサプライヤが在庫管理分析の結果を Microsoft Excel で確認できるように、この分析をエクスポートできます。

百万行を超えるデータをエクスポートする場合、エクスポート可能な最大行数について管理者に確認してください。

1. 編集する分析を開きます。
2. データおよび書式設定をエクスポートするには、「この分析のエクスポート」、書式設定済の順にクリックして、出力形式を選択します。
3. データのみをエクスポートするには、「この分析のエクスポート」、「データ」の順にクリックして、出力形式を選択します。

## ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのエクスポート

ダッシュボード全体または 1 つのダッシュボード・ページを Microsoft Excel 2007 以上にエクスポートできます。ダッシュボードの内容を Microsoft Excel にエクスポートするとき、ダッシュボードの状態(プロンプトやドリルなど)は変わりません。

たとえば、ブランド売上分析が含まれるダッシュボード・ページをエクスポートできます。これによって、ブランド・マネージャはこのデータを Microsoft Excel でレビューできます。

1. エクスポートするダッシュボードまたはダッシュボード・ページを開きます。
2. ダッシュボード・ページのツールバーで、「ページ・オプション」をクリックし、「Excel にエクスポート」を選択して、「現在のページのエクスポート」または「ダッシュボード全体のエクスポート」のいずれかを選択します。

ダッシュボード全体をエクスポートする場合:

- 各ページは Excel ワークブックの個々のシートに含められます。
  - 各シートには対応するダッシュボード・ページの名前が付けられます。
3. ファイル・ダウンロード・ダイアログを使用して、ダッシュボードまたはダッシュボード・ページをスプレッドシート・ファイルとして開くか保存します。

## エクスポートのヒント

ここでは、分析、ダッシュボード、およびダッシュボードのページからデータをエクスポートする場合のヒントをいくつか示します。

- 百万行を超えるデータをエクスポートする場合、エクスポート可能な最大行数について管理者に確認してください。
- デフォルトでは、表またはピボット表を Excel にエクスポートする場合、複数の行にわたるセルおよび複数の列にわたるセルを(常に繰り返すのではなく)繰り返すかどうか、「列のプロパティ」ダイアログ: 「列書式」タブの「値の抑制」オプションによって決まり

まず、Excel スプレッドシートを使用するユーザーがデータを操作する場合は、Excel にエクスポートする際に値を抑制しないでください。

- 「**値の抑制**」が「**抑制**」に設定されている場合、複数の行にわたるセルおよび複数の列にわたるセルは繰り返されません。たとえば、年と月の値を含む表では、年は月の値に対して 1 回のみ表示されます。この値の抑制は、Excel スプレッドシートにデータを表示するのみの場合に便利です。
- 「**値の抑制**」が「**繰返し**」に設定されている場合、複数の行にわたるセルおよび複数の列にわたるセルは繰り返されます。たとえば、年と月の値を含む表では、年はすべての月の値に対して繰返し表示されます。
- PDF 形式では、行はまとめて保持されずに改ページで分割されます。
- エクスポートした形式では「アクション」リンクは含まれません。
- Excel にエクスポートする場合、数値および日付は、指定されたデータ書式の文字列としてではなく、完全な数値精度および書式設定マスクが設定された **RAW** 書式でエクスポートされます。
- フォーマットされた Excel スプレッドシートに分析結果をエクスポートするときに、完全な精度の値をエクスポートするか、パフォーマンス・タイルに表示される省略値をエクスポートするかを選択できます。「パフォーマンス・タイルのプロパティ」ダイアログで、パフォーマンス・タイルで使用される省略のレベル(千や百万など)を決定する**省略値オプション**を選択します。省略値を Excel にエクスポートするには、「**フォーマットされた Excel での省略**」オプションを選択します。
- Excel 形式に直接エクスポートすることもできますが、多数の行のエクスポート時には、最初に CSV にエクスポートした後、そのファイルを Excel にインポートする方がパフォーマンスがよくなる場合があります。

## 式または計算済メジャーの編集

列の式の編集または計算済メジャーの編集によって、分析内の列を微調整できます。

### トピック:

- [列の式の編集](#)
- [計算済メジャーの編集](#)

## 列の式の編集

分析の基準を指定する際、属性列とメジャー列の式を編集できます。この編集は、分析と関係する場合にのみ列に作用し、サブジェクト領域の元の列の式は変更しません。

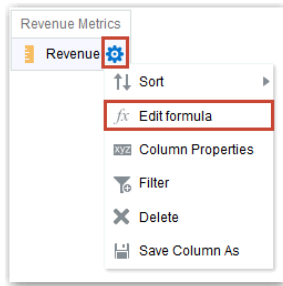
### ビデオ

列式は、列値が何を表すかを指定します。「Revenue Metrics」."Revenue"などの最も基本的な形式では、列は、データ・ソースからのデータをそのまま値とします。式を編集して、関数や条件式などを追加できます。この編集によって、分析結果を様々な方法で表すことができます。たとえば、「Revenue」列の式を編集して、売上を **10%**増加した値を表示します。これを実行するには、「Revenue」列に **1.1** を乗算する式を記述します。

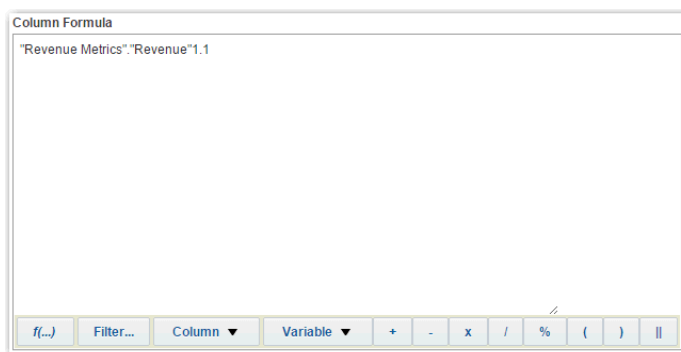
1. 編集する分析を開きます。



- 「選択された列」ペインで、列名の横にある「オプション」をクリックしてから、「式の編集」を選択します。



- 「列式の編集」ダイアログの「式の編集」タブで、「列式」ペインに式を入力します。



「列式」ペインには、デフォルトで「選択された列」ペインの列の名前が表示されます。

- 「列式」ペインの下部にある演算子ボタンおよび文字列ボタンを使用すると、式の作成に役立ちます。
- `f(...)` ボタンを使用して、列式に関数を含めることができる「関数の挿入」ダイアログを表示します。たとえば、SQL 関数に基づいて式を作成できます(例: `RANK("Sales Measures"."Dollars")`)。式エディタのリファレンスを参照してください。
- 「フィルタ...」 ボタンを使用して、列式にフィルタ式を含めることができる「フィルタの挿入」ダイアログを表示します。少なくとも 1 つのメジャー列が含まれるフィルタ式から開始します。メジャー列またはネストされた問合せがないブール式を含めます。

たとえば、SQL FILTER 関数を使用する式を作成して、データをフィルタ処理できます(例: `FILTER("Sales Measures"."Dollars" USING ("Markets"."Region" = 'EASTERN REGION'))`)。

- `Folder-Name.Column.Name` の形式を使用して、式で列名を参照します。フォルダ名または列名に英数字以外の文字(スペースやアンダースコアなど)が含まれている場合は、それぞれの名前を二重引用符で囲みます。それらの名前がすべて英数字の場合でも、名前を二重引用符で囲むことができます。
  - データ型が文字列のリテラルまたは定数を含める場合は、一重引用符を使用します。たとえば、式に `'John Doe'` や `'Best Selling Product'` などの定数を含めることができます。
- 「OK」をクリックします。「結果」タブの列には、式が適用された値が表示されます。

| Brand    | Revenue     | Revenue*1.10 |
|----------|-------------|--------------|
| BizTech  | 318,100,000 | 349,910,000  |
| FunPod   | 322,000,000 | 354,200,000  |
| HomeView | 159,900,000 | 175,890,000  |

## 計算済メジャーの編集

他のメジャーから導出され、式を使用して作成された計算済メジャーを使用できます。たとえば、売上から割引を差し引いた後の値を検索する必要がある場合です。売上の値から割引金額を差し引く計算済メジャーを作成します。

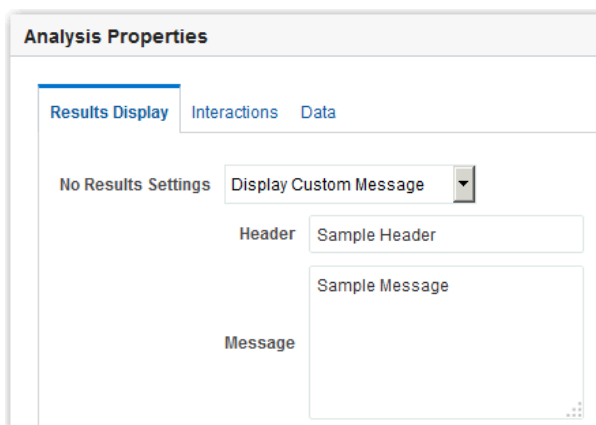
1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブで、ツールバーにある「**新規計算済メジャー**」をクリックして、このダイアログを表示します。
3. 管理者権限があり、HTML マークアップ(Javascript を含む)を使用してフォルダおよび列の見出しをカスタマイズする場合は、「**HTML マークアップを含みます**」を選択して、適用する HTML マークアップを入力します。例は、[高度な手法: HTML タグを使用した書式設定](#)を参照してください。
4. 計算済メジャーの式を編集します。
5. 「OK」をクリックします。

## 分析のプロパティの設定

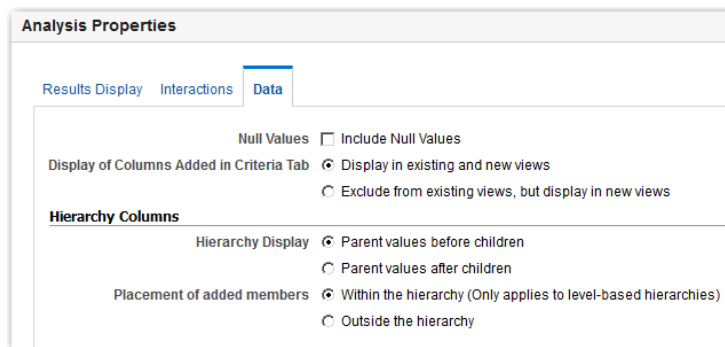
結果の表示方法およびデータの処理方法は、分析プロパティを設定して指定できます。ユーザーがピボット表、表、ヒート・マトリックス、ツリーマップまたはトレリス・ビューで右クリックしたときに使用できるアクションを設定することもできます。

たとえば、ブランド売上分析に関するカスタム・メッセージを作成できます。このメッセージは、「Revenue」列に制約の多すぎるフィルタが設定されている場合や、表示される結果がない場合に表示できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「基準」タブのツールバーまたは「結果」タブのツールバーで、「**分析プロパティの編集**」を選択して、「分析プロパティ」ダイアログを表示します。



- 「結果の表示」タブで、結果の表示に影響を与えるオプションを選択します。たとえば、「**結果がない場合の設定**」フィールドで、分析の実行時に結果が返されない場合に表示されるデフォルトまたはカスタム・メッセージを指定します。このメッセージは、たとえば、分析の列に非常に限定的なフィルタが設定されている場合などに表示されます。複数の列が含まれない単純な分析を作成した場合、カスタム・メッセージは表示されません。
- 管理者権限があり、HTML マークアップ(JavaScript を含む)を使用してメッセージをカスタマイズする場合は、「**結果がない場合の設定**」フィールドで「**カスタム・メッセージの表示**」を選択し、次に「**HTML マークアップを含みます**」を選択して、適用する HTML マークアップを入力します。
- このダイアログで、「相互作用」タブをクリックします。
- ピボット表、表、グラフ、ヒート・マトリックス、ツリーマップまたはトレリス・ビューで右クリックしたときに使用できるアクション(「**ドリル**」など)を指定します。
- このダイアログで、「データ」タブをクリックします。



- 「OK」をクリックします。

## プリファレンスの設定

アカウント・プリファレンスを設定して、居住地を反映したり、作業方法をサポートできます。

たとえば、特定の売上ダッシュボードを開始ページとして、太平洋標準時間をタイムゾーンとして選択します。開始ページを指定することによって、ダッシュボードの操作をすぐに開始できます。

- クラシック・ホーム・ページで、「**マイ・プロフィール**」の **username** をクリックし、「**マイ・アカウント**」を選択します。  
「**次としてサインイン**」が表示されない場合は、最初にツールバーまたはナビゲータから「**クラシック・ホームを開く**」をクリックします。
- 「マイ・アカウント」ダイアログのタブを使用して、開始ページ、ロケール、タイムゾーンなどのプリファレンスを指定します。
- 「OK」をクリックし、変更を保存します。

## 高度な手法: 別の分析からの書式設定のインポート

保存済分析とそのビューの書式をインポートすることによって、新規または既存の分析をすばやく書式設定できます。ほとんどのユーザーは、このタスクを実行する必要はありません。

たとえば、前年度ブランド売上分析の「Store」、「City」および「Product」の列に異なる色を適用したとします。列の色書式をインポートすることによって、本年度ブランド売上分析に同じ色を適用できます。

- 分析内のすべてのビューに書式設定をインポートするには、複合レイアウトのツールバーの「別の分析から書式設定をインポート」ボタンをクリックします。
- 編集中のビューにのみ書式設定をインポートするには、「ビューの編集」をクリックし、次に「別の分析から書式設定をインポート」をクリックします。

列に適用された書式をインポートするか、ビューに適用された書式をインポートするか、複合レイアウトのビューのコンテナに適用された書式をインポートするかによって、書式の適用方法は少し異なります。

### 列からの書式設定の適用について

列からの書式設定の適用は、保存済分析にターゲット分析と同じ数の列がある場合に最も適切に機能します。

単一系列の場合、書式設定は、ターゲット分析の表、ピボット表およびトレリスのすべての列に適用されます。

複数列の場合、書式設定は、列見出しおよび値に対して左から右に適用されます。保存済分析の列がターゲット分析よりも少ない場合、保存済分析の最後の列の書式がターゲットの後続の列で繰り返されます。

たとえば、保存済分析に、赤、緑、青、黄という色の順で 4 個の列が含まれているとします。ターゲット分析の 6 個の列に適用された場合、色の順は赤、緑、青、黄、黄、黄になります。

### ビューからの書式の適用について

ビューの 1 つのタイプの書式をインポートすると、その書式はターゲット分析内の同じタイプのすべてのビューに適用されます。

たとえば、ある表のカスタム書式設定を、3 つの表を含むターゲット分析にインポートするとします。カスタム書式は 3 つすべてに適用されます。

### コンテナからの書式設定の適用について

複合レイアウトで、背景色、枠、パディングなどの書式設定プロパティをビューのコンテナに指定できます。

コンテナの書式設定をインポートすると、ターゲットの分析のビューは、保存済分析のビューのコンテナの書式設定プロパティをそのまま継承します。

ただし、2 つの分析のビューのレイアウトはまったく同じである必要はありません。ターゲットの分析にソースの分析より多くのビューが含まれている場合、余剰分のビューもインポートされた書式設定を継承します。

たとえば、1 つのレイアウト列内に重なり合った 2 つの表が保存済分析に含まれており、2 つのレイアウト列間で分割された 4 つの表がターゲットの分析に含まれているとします。書式設定をインポートすると、ターゲットの分析の 1 つ目と 2 つ目の各レイアウト列の 2 つの表は書式を継承します。

## 保存済分析からターゲット分析への書式設定のインポート

ある分析から別の分析に書式設定をインポートできます。

たとえば、分析に含まれる 1 つの列に、フォント・ファミリー、水平方向の位置合せ、背景色などの書式設定を適用したとします。分析を保存し、別の分析内にあるすべての列に同じ書式設定を適用できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブにターゲット分析を表示するか、またはビューを編集します。
3. ツールバーにある「別の分析から書式設定をインポート」をクリックします。
4. 「分析の選択」ダイアログで、保存済分析に移動します。
5. 「OK」をクリックします。

## 高度な手法: HTML タグを使用した書式設定

管理者権限がある場合、オプション「HTML/JavaScript/CSS マークアップを含みます」が一部のダイアログに表示されます。

このオプションを使用すると、有効な HTML マークアップ(JavaScript および CSS を含む)を使用してコンテンツを書式設定できます。追加の書式設定を含める場合は、HTML マークアップに@を接頭辞として付加します。カスタム書式設定がサポートされないデバイスでは、@の後ろのマークアップは無視され、コンテンツは書式設定なしで表示されます。

たとえば、次の HTML マークアップでは、表とピボット表の列の幅および高さが設定されます。接頭辞@[html]は、HTML を適用することを意味します。

```
@[html]@
```

「HTML/JavaScript/CSS マークアップを含みます」オプションは、書式設定を適用できるすべての場所で使用できます。

- 分析:
  - 分析エディタ。
  - 「分析プロパティ」ダイアログ。
  - 「列のプロパティ」ダイアログ。
  - 「新規計算済メジャー」ダイアログ。
- ダッシュボード:
  - 「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログ。

いくつかの例を示します。実際の使用目的と類似する例がある場合は、その例をコピーして貼り付け、必要に応じて変更します。

| HTML 要素    | 使用上のノートおよび使用例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| テキスト       | <p>任意の HTML タグを使用してテキストの書式を制御できます。例:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>テキストをセクションの中央に配置するには:<br/>&lt;CENTER&gt;中央に配置されるテキスト&lt;/CENTER&gt;</li> <li>テキストを太字にするには:<br/>&lt;B&gt;太字のテキスト&lt;/B&gt;</li> <li>フォント・サイズおよび色を設定するには:<br/>&lt;FONT SIZE="4" COLOR="red"&gt;赤いテキスト&lt;/FONT&gt;</li> </ul> <p>また、タグを結合して効果を付加することもできます:<br/>&lt;CENTER&gt;&lt;B&gt;&lt;FONT COLOR="red"&gt;中央に配置される太字の赤いテキスト&lt;/FONT&gt;&lt;/B&gt;&lt;/CENTER&gt;</p> |
| JavaScript | <p>ブラウザによってサポートされている自己包含型のスクリプトを使用します。「HTML テキスト」ウィンドウにスクリプトを貼り付けるか入力します。開始タグ&lt;script&gt;および終了タグ&lt;/script&gt;を含めます。</p> <p>開始タグ&lt;SCRIPT&gt;で JavaScript を指定します(&lt;SCRIPT LANGUAGE="javascript"&gt;)。</p>                                                                                                                                                                                                                                         |

## 高度な手法: データを異なる方法で表示するための列の結合

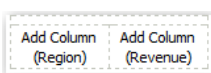
論理和や論理積など検索条件の操作に基づいて列を結合できます。列を結合することにより、データを異なる方法で表示するための列を作成します。

たとえば、「Region」列と「City」列を結合して、「Regions and Cities」という名前の列を作成できます。

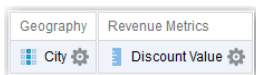
検索条件の操作を使用する場合は、分析が特定の基準を満たす必要があります。

- 列の数とデータ型は同じである必要があります。
  - 基準を結合する場合、階層列、選択ステップやグループは使用できません。
- 編集する分析を開きます。
  - 分析エディタの「基準」タブにある「選択された列」ペインのツールバーで、「**論理和、論理積、および論理差の演算に基づいた結果を結合します。**」をクリックします。

「検索条件の操作」エリアが「選択された列」ペインに表示されます。点線の枠線が付いたボックスは、分析内の他の列と結合する必要がある列であることを示します。



- 「サブジェクト領域」ペインで、元の列と結合する列を選択します。点線の境界線と内容が置換されていることに注意してください。



4. 「検索条件の操作」ペインの「結果列」領域で、「UNION」ボタンをクリックし、検索条件の操作を選択します。
  - 「UNION」を使用して、すべての列から重複していない行のみを返すように指定します。
  - 「UNION ALL」を使用して、重複行も含め、すべての列の行を返すように指定します。
  - 「INTERSECT」を使用して、すべての列に共通する行のみを返すように指定します。
  - 「MINUS」を使用して、最初の列にあり、2 番目の列にない行のみを返すように指定します。
5. 「結果列」リンクをクリックします。「選択された列」ペインには、新しく結合された列が表示されます。
6. 列の見出しを変更するには:
  - a. 列の「オプション」ボタンをクリックします。
  - b. 「列のプロパティ」を選択します。
  - c. 「列書式」を選択します。
  - d. 「カスタムの見出し」が選択されていることを確認します。
  - e. 「列見出し」ボックスに、新しい見出しを入力します。
  - f. 「OK」をクリックします。
7. 「結果」タブをクリックして、表ビューに列を表示します。

## 高度な手法: 分析用論理 SQL 文の確認

論理 SQL コードを調べて、分析用に生成された XML コードおよび論理 SQL 文を確認できます。分析エディタの「詳細設定」タブまたは「単純論理 SQL からの分析の作成」オプションを使用して、その SQL 文を基にオプションで分析を作成できます。ほとんどのユーザーは、このタスクを実行する必要はありません。

この方法を使用して分析を作成する場合、左側のペインにサブジェクト領域のリストは表示されません。かわりに、「無効なサブジェクト領域」というメッセージが表示されます。サブジェクト領域のリストがなくなると、論理 SQL コードに加えられた変更が確実に反映されません。

「詳細設定」タブを使用する前に、このタブは、「詳細設定」タブにアクセスするための適切な職責が割り当てられた上級ユーザーおよび開発者専用であることに留意してください。高度な SQL 文を理解する必要があり、分析のメタデータを操作する専門知識が必要です。基礎となるデータ・ソースの内容と構造も理解する必要があります。

1. 編集する分析を開きます。
2. 分析エディタの「詳細設定」タブをクリックします。
3. 「発行された SQL」領域の読取り専用ボックスを使用して、分析の実行時に使用される SQL 文を調べ、コピーします。
4. 「新規分析」をクリックし、SQL コードに基づいて分析を作成します。



## 高度な手法: 分析のキャッシュ・オプションの設定

キャッシュ・データがある場合にそれが分析に表示されるかどうかを指定できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 分析エディタの「詳細設定」タブをクリックします。
3. **BI プレゼンテーション・サービス・キャッシュのバイパス**・オプションを使用し、キャッシュ・ポリシーを指定します。

このオプションをクリアすると、使用可能な場合にキャッシュ・データを表示することによりパフォーマンスが向上します。ソース・データの変更が早い場合、キャッシュ・データが失効していることがあります。このオプションを選択すると、キャッシュ・データがシステム・キャッシュで使用可能であっても、データ・ソースから常に新しいデータがプルされます。分析では、大量のデータが含まれていると、表示に時間がかかる場合があります。

## 高度な手法: 変数の格納値の参照

現在のユーザー名をタイトルに表示する分析を作成する場合があります。これは、変数を参照することによって行えます。

分析、ダッシュボードおよびアクション内で、複数の異なるタイプの変数(セッション、リポジットリ、プレゼンテーション、リクエストおよびグローバル)を参照できます。コンテンツ作成者は、プレゼンテーション、リクエストおよびグローバル変数を定義できますが、その他のタイプ(セッションおよびリポジットリ)はセマンティック・モデル内で定義されます。

**ノート:** Oracle Analytics では、データ・ソースの接続資格証明の:user と:password の変数はサポートされません。

| 変数のタイプ                      | 定義場所             | 定義者        | 詳細情報                                     |
|-----------------------------|------------------|------------|------------------------------------------|
| セッション<br>• システム<br>• システム以外 | セマンティック・モデル      | データ・モデル作成者 | <a href="#">セッション変数について</a>              |
| リポジットリ<br>• 動的<br>• 静的      | セマンティック・モデル      | データ・モデル作成者 | <a href="#">リポジットリ変数について</a>             |
| プレゼンテーション                   | 分析とダッシュボードのプロンプト | コンテンツ作成者   | <a href="#">プレゼンテーション変数について</a>          |
| リクエスト                       | 分析とダッシュボードのプロンプト | コンテンツ作成者   | <a href="#">リクエスト変数について</a>              |
| グローバル                       | 分析               | 管理者        | <a href="#">グローバル変数についておよびグローバル変数の作成</a> |



## セッション変数について

セッション変数は、ユーザーがサインインすると初期化されます。

これらの変数は、各ユーザーの参照セッションの間存在し、ユーザーがブラウザを閉じるかサインアウトすると、期限切れになります。セッション変数には、システムとシステム以外の 2 つのタイプがあります。

## システム・セッション変数

レポートおよびダッシュボードで使用できるいくつかのシステム・セッション変数があります。

システム・セッション変数には予約名があるため、他の種類の変数には使用できません。

モデラーは、これらのセッション変数の値を「データ・モデラー」で定義できます。式で使用する変数の作成を参照してください。「データ・モデラー」では、セッション変数は、「**値の更新**」を「**サインイン時**」に設定して定義します。

| システム・セッション変数    | 説明                                                                                                                            | SQL 問合せ値の例(変数ダイアログ)                                                                                              |
|-----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| PORTALPATH      | ユーザーがサインインしたときに表示されるデフォルトのダッシュボードを示します(ユーザーはサインイン後にこのプリファレンスをオーバーライドできます)。                                                    | ユーザーがサインインしたときに mydashboard を表示するには:<br><br><pre>select '/shared/_portal/mydashboard' from dual;</pre>           |
| TIMEZONE        | ユーザーがサインインしたときのデフォルトのタイムゾーンを指定します。<br><br>ユーザーのタイムゾーンは、通常、ユーザーのプロファイルから移入されます。ユーザーは、プリファレンス(「マイ・アカウント」)からデフォルトのタイムゾーンを変更できます。 | ユーザーがサインインしたときにタイムゾーンを設定するには:<br><br><pre>select '(GMT-08:00) Pacific Time (US &amp; Canada)' from dual;</pre>   |
| DATA_TZ         | データの元のタイムゾーンからのオフセットを指定します。<br><br>この変数を使用すると、適切なタイムゾーンがユーザーに表示されるように、ゾーンを変換できます。                                             | 時間データを東部標準時(EST)に変換するには:<br><br><pre>select 'GMT-05:00' from dual;</pre><br><br>この例は、グリニッジ標準時(GMT) - 5 時間を意味します。 |
| DATA_DISPLAY_TZ | データを表示するタイムゾーンを指定します。                                                                                                         | 東部標準時(EST)を表示するには:<br><br><pre>select 'GMT-05:00' from dual;</pre><br><br>この例は、グリニッジ標準時(GMT) - 5 時間を意味します。       |

## システム以外のセッション変数

システム以外のセッション変数は、セマンティック・モデル内で命名および作成されます。

たとえば、データ・モデラーは、ユーザーがサインインしたときにユーザーの販売地域の名前に初期化される **SalesRegion** 変数を作成できます。

モデラーは、これらのセッション変数の値を「データ・モデラー」で定義できます。式で使用する変数の作成を参照してください。

## リポジトリ変数について

リポジトリ変数は、どの時点でも 1 つの値を持つ変数です。

リポジトリ変数は静的または動的に設定できます。静的リポジトリ変数には、管理者が変更するまで存続して変わらない値が格納されます。動的リポジトリ変数には、問合せから返されたデータによってリフレッシュされる値が格納されます。

モデラーは、「データ・モデラー」で動的および静的リポジトリ変数を定義します。「**値の更新**」オプションによって、変数が動的か静的かが決まります。動的変数の場合、「値の更新」は「スケジュール時」です。静的変数の場合、「値の更新」は「なし」です。

## プレゼンテーション変数について

プレゼンテーション変数は、列プロンプトまたは変数プロンプトを作成する過程で作成できる変数です。

| タイプ     | 説明                                                                                                                                                                                                         |
|---------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 列プロンプト  | 列プロンプトの一部として作成されるプレゼンテーション変数は列と関連付けられ、とり得る値は列値からの値です。<br>プレゼンテーション変数を列プロンプトの一部として作成するには、「新規プロンプト」ダイアログの「 <b>変数の設定</b> 」フィールドで「 <b>プレゼンテーション変数</b> 」を選択する必要があります。「 <b>変数名</b> 」フィールドに変数の名前を入力します。           |
| 変数プロンプト | 変数プロンプトの一部として作成されるプレゼンテーション変数は列に関連付けられないため、とり得る値はユーザーが定義します。<br>プレゼンテーション変数を変数プロンプトの一部として作成するには、「新規プロンプト」ダイアログの「 <b>プロンプト対象</b> 」フィールドで「 <b>プレゼンテーション変数</b> 」を選択する必要があります。「 <b>変数名</b> 」フィールドに変数の名前を入力します。 |

プレゼンテーション変数の値は、同時に作成された列プロンプトまたは変数プロンプトによって移入されます。つまり、ユーザーが列プロンプトまたは変数プロンプトで 1 つ以上の値を選択するたびに、プレゼンテーション変数の値が、ユーザーが選択した値に設定されます。

## リクエスト変数について

リクエスト変数を使用すると、セッション変数の値をオーバーライドできますが、オーバーライドできるのは、列プロンプトから開始されたデータベース・リクエストの間のみです。リクエスト変数は、列プロンプトの作成過程で作成できます。

次のいずれかのタイプのダッシュボード・プロンプトを作成する過程の一部として、リクエスト変数を作成できます。

- 列プロンプトの一部として作成されるリクエスト変数は列と関連付けられ、とり得る値は列値からの値です。

リクエスト変数を列プロンプトの一部として作成するには、「新規プロンプト」ダイアログの「**変数の設定**」フィールドで「**リクエスト変数**」を選択する必要があります。「**変数名**」フィールドに、オーバーライドするセッション変数の名前を入力します。

- 変数プロンプトの一部として作成されるリクエスト変数は列に関連付けられないため、ユーザーがとり得る値を定義します。

リクエスト変数を変数プロンプトの一部として作成するには、「新規プロンプト」ダイアログ(または「プロンプトの編集」ダイアログ)の「**プロンプト対象**」フィールドで「**リクエスト変数**」を選択する必要があります。次に、オーバーライドするセッション変数の名前を「**変数名**」フィールドに入力します。

リクエスト変数の値は、同時に作成された列プロンプトによって移入されます。つまり、ユーザーが列プロンプトで値を選択するたびに、リクエスト変数の値が、ユーザーが選択した値に設定されます。ただし、値が有効なのは、ユーザーがプロンプトの「**実行**」ボタンを押した時点から、分析結果がダッシュボードに返されるまでです。

特定のシステム・セッション変数(USERGUID、ROLES など)をリクエスト変数でオーバーライドすることはできません。DATA\_TZ、DATA\_DISPLAY\_TZ (タイムゾーン)などのその他のシステム・セッション変数は、Oracle BI 管理ツールで構成されている場合、オーバーライドできます。

複数の値がサポートされるのは、文字列および数値のリクエスト変数のみです。その他のデータ型では最初の値のみが渡されます。

## グローバル変数について

グローバル変数は、特定のデータ型と値の組合せによって作成される列です。値には、「日付」、「日付と時間」、「数値」、「テキスト」および「時間」があります。

グローバル変数は分析の実行時に評価され、グローバル変数の値が適切に置き換えられます。

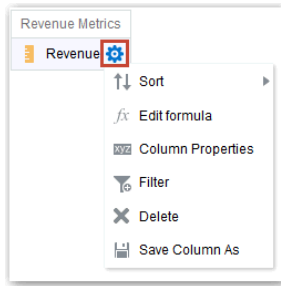
BI サービス管理者ロールを持つユーザーのみが、グローバル変数を管理(追加、編集および削除)できます。

グローバル変数は、分析の作成過程で「列式の編集」ダイアログを使用して作成できます。グローバル変数はカタログに保存されるため、特定のテナント・システムに属する他のすべての分析で使用できます。

## グローバル変数の作成

計算は、グローバル変数として保存し、別の分析で再利用できます。グローバル変数を作成するのみで、データ・モデラーに新しい列を作成する必要はありません。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「選択された列」 ペインで、列名の横にある **「オプション」** をクリックします。



3. **「式の編集」** を選択して、「列式」 タブを表示します。
4. **「変数」** を選択して、「グローバル」 を選択します。
5. **「新規グローバル変数の追加」** をクリックします。



6. **「名前」** に値を入力します。たとえば、gv\_region、date\_and\_time\_global\_variable、rev\_eastern\_region\_calc\_gv などです。  
 グローバル変数を参照するときは、完全修飾の名前が必要になるため、global.variables というテキストが接頭辞として付加されます。たとえば、「列式」ダイアログには、売上を計算するグローバル変数セットが次のように表示されます。  
`"Base Facts"."1- Revenue"*@{global.variables.gv_qualified}`
7. **「タイプ」** および **「値」** に値を入力します。
  - データ型として「日付と時間」を選択した場合、値は次の例のように入力します: 03/25/2004 12:00:00 AM
  - 式または計算を値として入力する場合は、次の例のようにテキストのデータ型を使用する必要があります: "Base Facts"."1- Revenue"\*3.1415
8. **「OK」** をクリックします。新しいグローバル変数が「グローバル変数の挿入」ダイアログに追加されます。
9. 作成した新しいグローバル変数を選択し、**「OK」** をクリックします。「列式の編集」ダイアログが表示されます。「列式」ペインにはそのグローバル変数が挿入されています。**「カスタムの見出し」** チェック・ボックスが自動的に選択されます。
10. グローバル変数を割り当てた列に、変数をより正確に反映する新しい名前を入力します。
11. **「OK」** をクリックします。

## 変数を参照する構文

分析およびダッシュボードでは、変数を参照できます。

変数の参照方法は、実行するタスクによって異なります。フィルタ定義で変数を参照する場合など、ダイアログにフィールドが表示されるタスクの場合、(完全な構文ではなく)変数のタイプと名前のみ指定する必要があります。

タイトル・ビューでの変数の参照などの他のタスクの場合、変数の構文を指定する必要があります。次の表に示すように、使用する構文は変数のタイプによって異なります。

| タイプ               | 構文                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 例                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| セッション             | <code>@{biServer.variables['NQ_SESSION.variablename']}</code><br><i>variablename</i> は、セッション変数の名前です(DISPLAYNAME など)。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | <code>@{biServer.variables['NQ_SESSION.SalesRegion']}</code>                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| リポジトリ             | <code>@{biServer.variables.variablename}</code><br>または<br><code>@{biServer.variables['variablename']}</code><br><i>variablename</i> は、リポジトリ変数の名前です(prime_begin など)。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | <code>@{biServer.variables.prime_begin}</code><br>または<br><code>@{biServer.variables['prime_begin']}</code>                                                                                                                                                                                                                                   |
| プレゼンテーションまたはリクエスト | <code>@{variables.variablename}[format]</code><br><code>{defaultvalue}</code><br>または<br><code>@{scope.variables['variablename']}</code><br>ここで:<br><i>variablename</i> は、プレゼンテーション変数またはリクエスト変数の名前です(MyFavoriteRegion など)。<br>(オプション) <i>format</i> は、変数のデータ型によって異なる書式マスクです(#、##0、MM/DD/YY hh:mm:ss など)。(書式はデフォルト値には適用されないことに注意してください)。<br>(オプション) <i>defaultvalue</i> は、 <i>variablename</i> で参照される変数に値が入っていない場合に使用される値を示す定数または変数の参照です。<br><i>scope</i> は、変数の修飾子を識別します。変数が複数のレベル(分析ダッシュボード・ページおよびダッシュボード)で使用され、特定の値にアクセスする場合、有効範囲を指定する必要があります。(有効範囲を指定しない場合、分析、ダッシュボード・ページ、ダッシュボードの順に優先されます)。<br>複数の値を設定できるプレゼンテーション変数が指定されたダッシュボード・プロンプトを使用する際には、列タイプによって構文が異なります。複数の値がカンマ区切りの値に書式設定されるため、書式設定句は、カンマで結合される前に各値に適用されます。 | <code>@{variables.MyFavoriteRegion}{EASTERN REGION}</code><br>または<br><code>@{MyFavoriteRegion}</code><br>または<br><code>@{dashboard.variables['MyFavoriteRegion']}</code><br>または<br><code>@{myNumVar}[#,##0]{1000}</code><br>または<br><code>@{variables.MyOwnTimestamp}{YY-MM-DD hh:mm:ss}{}</code><br>または<br><code>@{myTextVar}{A, B, C}</code> |

| タイプ   | 構文                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 例                                               |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| グローバル | <p><code>@{global.variables.variablename}</code></p> <p><i>variablename</i> はグローバル変数の名前です(例: <code>gv_region</code>)。グローバル変数を参照する場合は、例に示すように、完全修飾名を使用する必要があります。</p> <p>グローバル変数の命名規則は、JavaScript の EMCA スクリプト言語仕様に準拠している必要があります。名前は 200 文字以内にする必要があります。埋込みスペース、予約語および特殊文字は使用できません。JavaScripting 言語要件に精通していない場合は、サード・パーティのリファレンスを参照してください。</p> | <code>@{global.variables.gv_date_n_time}</code> |

式で変数を参照することもできます。式で変数を参照するためのガイドラインは、次の各トピックに記載されています。

- [セッション変数](#)
- [プレゼンテーション変数](#)
- [リポジットリ変数](#)

## セッション変数

式でセッション変数を参照するには、次のガイドラインを使用できます。

- セッション変数を `VALUEOF` 関数の引数として含めます。
- 変数名を二重引用句で囲みます。
- セッション変数の前に `NQ_SESSION` とピリオドを付けます。
- `NQ_SESSION` の部分とセッション変数名の両方を丸カッコで囲みます。

例:

```
"Market"."Region"=VALUEOF(NQ_SESSION."SalesRegion")
```

## プレゼンテーション変数

式でプレゼンテーション変数を参照するには、次のガイドラインを使用できます。

プレゼンテーション変数を参照する場合は、次の構文を使用します。

```
@{variablename}{defaultvalue}
```

*variablename* は、プレゼンテーション変数の名前、*defaultvalue*(オプション)は *variablename* で参照される変数に値が入っていない場合に使用される値を示す定数または変数の参照です。

変数を文字列に型変換(つまり、変換)する場合や、複数の変数を含める場合は、次のように、変数全体を一重引用符で囲みます:

```
'@{user.displayName}'
```

@マークの後ろに{がない場合は、@マークとして処理されます。複数の値を設定できるプレゼンテーション変数を使用する際には、列タイプによって構文が異なります。

有効な SQL 文を生成するには、各列タイプの SQL で次の構文を使用します。

- テキスト - (@{variablename}[@]{'defaultvalue'})
- 数値 - (@{variablename}{defaultvalue})
- 日時 — (@{variablename}{timestamp 'defaultvalue'})
- 日付(日付のみ) — (@{variablename}{date 'defaultvalue'})
- 時間(時間のみ) — (@{variablename}{time 'defaultvalue'})

例:

```
'@{user.displayName}'
```

## リポジットリ変数

式でリポジットリ変数を参照するには、次のガイドラインを使用できます。

- リポジットリ変数を VALUEOF 関数の引数として含めます。
- 変数名を二重引用句で囲みます。
- 静的リポジットリ変数を名前で参照します。
- 動的リポジットリ変数を完全修飾名で参照します。

例:

```
CASE WHEN "Hour" >= VALUEOF("prime_begin") AND "Hour" < VALUEOF("prime_end")
THEN 'Prime Time' WHEN ... ELSE...END
```

## 高度な手法: 直接データベース・リクエストの発行

管理者から適切な権限を付与されている場合、接続プールおよびデータベース固有の SQL 文を使用してバックエンド・データベースへの直接リクエストを作成および発行できます。

また、SQL 文を変更することでデータベース・リクエストの結果列を確認および変更できます。変更を加えて必要な結果を取得したら、その結果をダッシュボードおよびエージェントに取り込むことができます。

**トピック:**

- [直接データベース・リクエストに必要な権限](#)
- [直接データベース・リクエストの作成と実行](#)

## 直接データベース・リクエストに必要な権限

管理者はクラシック管理ページの権限の管理ページを使用して、直接データベース・リクエストのアクセス権限を表示および設定できます。

直接データベース・リクエストを作成および発行するには、次の権限が付与されている必要があります。



- 直接データベース分析の編集 - 直接データベース・リクエストを作成および編集できます。
- 直接データベース分析の実行 - 直接リクエストを発行して結果を表示できます。

Oracle Analytics 用に最適化されているため、デフォルトの権限を維持することをお勧めします。権限を編集すると、予期しない動作または機能へのアクセスが行われる場合があります。

## 直接データベース・リクエストの作成と実行

データベースへの直接リクエストをクラシック・ホーム・ページから作成できます。

直接データベース・リクエストの作成時には、データのセキュリティ・ルールはバイパスされ、適用できません。

1. クラシック・ホーム・ページの「**作成**」ペインで、「**分析**」をクリックします(または、「**新規**」をクリックして、「**分析**」を選択します)。
2. 「サブジェクト領域の選択」ダイアログで、「**直接データベース問合せの作成**」をクリックします。
3. 「基準」タブで接続プールおよび問合せ文を入力します。
  - 「**接続プール**」を使用して、問合せに使用する接続プールの名前を指定します。
  - 「**SQL 文**」を使用して、データベースからデータを取得するための、データベース固有の SQL 文を指定します。
4. 「**SQL の確認と列の取得**」をクリックして、「結果列」フィールドで取得済の列を確認します。
5. 「**結果**」タブをクリックしてリクエストを発行し、結果を表示します。「結果列」フィールドに何の列も表示されない場合がときどきありますが、これは、「基準」タブに指定した SQL 文によりデータベースから何のデータも取得されなかったためです。

次の機能は、列が直接データベース・リクエストにより生成されている分析で実行できません。

- 「サブジェクト領域」ペインでの列の選択。これは、セマンティック・モデルからの列を使用していないためです。
- この分析のグループや選択ステップの作成。
- 列への条件付き書式の指定。
- ピボット表や表、トレリス・ビューの列ヘッダーでの「**昇順ソート**」および「**降順ソート**」オプションの使用による取得済の列の値のソート。



# 17

## 様々な方法でのデータの表示

この章では、ビューを使用してデータを様々な方法で表示する方法を説明します。

分析の結果は、ビューに視覚的に表示されます。必要性和好みに応じて、様々なタイプのビューを使用して同じデータを様々な方法で表示できます。

### トピック:

- [様々な方法でデータを表示するための一般的なワークフロー](#)
- [ビューについて](#)
- [ビューの追加](#)
- [ビューの編集](#)
- [様々なタイプのビューの編集](#)
- [分析でのデータのグラフ化](#)
- [ビューの保存](#)
- [ビューの再配置](#)
- [ビューの結果のリフレッシュ](#)
- [ビューの印刷](#)
- [ビューの印刷オプションの変更](#)
- [ダッシュボードに表示されるビューのプレビュー](#)
- [ビューの除去](#)
- [ビューでの値のソート](#)
- [ビュー内のソートのクリア](#)
- [結果のドリル](#)
- [ビュー内の行および列のサイズ変更](#)
- [ビューでの Null 値の抑制](#)
- [表示するビューの構築](#)
- [マスター詳細関係でのビューのリンク](#)
- [ビューのデータのレイアウトの変更](#)
- [「レイアウト」ペインのドロップ・ターゲットについて](#)

# 様々な方法でデータを表示するための一般的なワークフロー

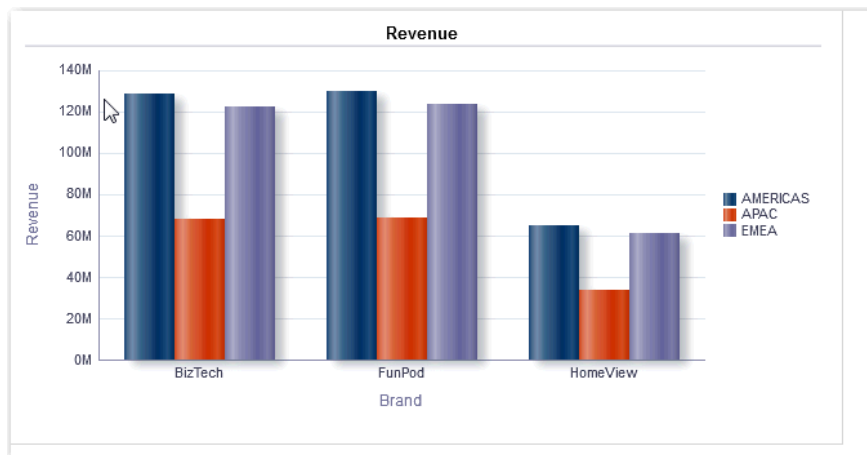
次に、分析にビューを追加して、様々な方法でデータを表示するための一般的なタスクを示します。

| タスク        | 説明                                                 | 詳細情報                           |
|------------|----------------------------------------------------|--------------------------------|
| 分析の作成      | 分析に使用する列を選択して配置します。                                | <a href="#">最初の分析の作成</a>       |
| ビューの追加     | 様々な方法でデータをビジュアル化するために、ビューを分析に追加します。                | <a href="#">ビューの追加</a>         |
| ビューの編集     | そのビューを編集するために、ビューのそれぞれのタイプに使用できるエディタを使用します。        | <a href="#">ビューの編集</a>         |
| ビューの除去     | 複合レイアウトまたは分析からビューを削除します。                           | <a href="#">ビューの除去</a>         |
| ビューの保存     | 分析を保存することで、ビューを保存します。                              | <a href="#">ビューの保存</a>         |
| ビューの印刷     | 印刷可能な HTML または印刷可能な PDF で、単一のビューまたはビューのグループを印刷します。 | <a href="#">ビューの印刷</a>         |
| データのビジュアル化 | 分析でデータをビジュアル化します。                                  | <a href="#">分析でのデータのビジュアル化</a> |

## ビューについて

ビューは、分析の結果のビジュアル表示です。ビューでは、データを様々な方法で確認できるため、パターン、トレンド、外れ値およびその他の興味深い特徴を検出しやすくなります。

説明テキストやフィルタ・コントロールなどの詳細情報にドリル・ダウンできるピボット表またはグラフなどの、様々なビューを結果に追加できます。この例では、棒グラフ・ビューに表示される売上分析の結果を示します。



この表では、データの表示に使用できるビュー・タイプについて説明します(必要な権限がある場合)。

| ビュー名        | 説明                                                                                                                                                                                                                                            |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 列セレクト       | 結果に列セレクトを追加します。列セレクトは、事前に選択された列を含む一連のドロップダウン・リストです。ユーザーは列を動的に選択し、分析のビューに表示されているデータを変更できます。                                                                                                                                                    |
| フィルタ        | 分析に有効なフィルタを表示します。(選択ステップと同様に)フィルタを使用すると、分析を限定し、特定の質問への回答となる結果を得ることができます。フィルタは、問合せの集計前に適用されます。                                                                                                                                                 |
| ファンネル       | 結果を 3 次元グラフとして表示します。通常、ファンネル・グラフは、時間の経過とともに変化するデータを表します。たとえば、ファンネル・グラフは、四半期を通じた売上数量の表示にしばしば使用されます。ファンネル・グラフでは、しきい値は、ターゲット値のパーセンテージを示し、色は、各ステージにビジュアル情報を与えます。色の付いた領域のいずれかをクリックすると、詳細情報にドリルダウンできます。                                             |
| グラフ         | 数値情報をグラフ・キャンバスと呼ばれる背景に表示します。厳密な値が必要な場合は、表などの他のデータ表示でグラフを補完する必要があります。                                                                                                                                                                          |
| ゲージ         | 単一のデータ値をゲージ・キャンバスと呼ばれる背景に表示します。サイズが小さいため、単一のデータ値を表示する場合、グラフよりゲージの方が通常効率的です。<br>ゲージ・ビューは、ゲージ・セット内の複数のゲージで構成される場合があります。たとえば、過去 12 か月の売上データを表示するゲージ・ビューを作成する場合、各月 1 つずつ、12 個のゲージでゲージ・ビューが構成されます。総売上高を表示するゲージ・ビューを作成する場合、ゲージ・ビューは 1 つのゲージで構成されます。 |
| ヒート・マトリックス  | 値が色のグラデーションで表現される、データの 2 次元描写を表示します。ヒート・マトリックスでは、データはピボット表と同じように編成され、行と列がグループ化されて編成されます。                                                                                                                                                      |
| 凡例          | 結果に凡例を追加すると、ゲージに適用されているカスタム色の意味など、結果に使用されている特別な形式の意味を記録できます。                                                                                                                                                                                  |
| マップ         | 結果をマップに重ねて表示します。データに応じて、イメージ、色による塗りつぶし領域、棒グラフと円グラフ、可変サイズのマーカーなどの書式で、結果をマップに重ねることができます。                                                                                                                                                        |
| ナレーティブ      | 1 段落以上のテキストで結果を表示します。結果の各列に対するプレースホルダを含む文を入力したり、行の区切りを指定できます。                                                                                                                                                                                 |
| パフォーマンス・タイル | 単一の集計データを表示します。パフォーマンス・タイルは、色、ラベルおよび限定されたスタイルを使用してステータスを示し、背景色またはメジャー値の条件付き書式設定を使用してタイルを視覚的に目立つようにします。たとえば、収益がターゲットをトラッキングしていない場合、収益値は赤で表示することができます。                                                                                          |
| ピボット表       | ピボット表では、通常の表と同様にデータが編成されますが、行と列の両方で複数レベルの見出しを表示できます。通常の表とは異なり、ピボット表の各データ・セルには一意の値が含まれます。大量のデータの表示、データの階層的な表示、トレンド分析に最適です。                                                                                                                     |
| 表           | 行と列で編成されたデータを表示します。表はデータのサマリー・ビューであり、行や列をドラッグ・アンド・ドロップして、データを異なるビューで表示できます。                                                                                                                                                                   |
| ティッカ        | インターネット上の多くの金融サイトやニュース・サイトで使用されている株式ティッカと同様の形式のティッカやマーキーで結果を表示します。表示する情報とページでのスクロール方法を制御できます。                                                                                                                                                 |
| タイトル        | タイトル、サブタイトル、ロゴ、カスタム・オンライン・ヘルプ・ページへのリンク、結果のタイムスタンプを表示します。                                                                                                                                                                                      |

| ビュー名     | 説明                                                                                                                                                                                                                       |
|----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ツリーマップ   | データを四角形(タイルと呼ばれます)にグループ化して、階層データを表示します。ツリーマップには、あるメジャーのサイズおよび 2 番目のメジャーの色に基づいてタイルが表示されます。<br>ツリーマップは、事前定義済みの領域によって制約され、2 つのレベルのデータを表示します。マップ領域が制約されるという点で散布図グラフに似ています。このグラフでは、大量のデータをビジュアル化し、そのデータ内のトレンドと異常を迅速に識別できます。   |
| トレリス     | 各データ・セルに 1 つずつの複数グラフのグリッドが表示されるタイプのグラフ・ビューを表示します。<br>トレリス・ビューには単純または拡張があります。単純トレリスには、中核の内部グラフが行セットと列セット全体に複数表示されるので、多数の小さなグラフを複数表示して比較対照するのに最適です。拡張トレリスには、小さなスパーク・グラフのグリッドが表示されるので、データセットのトレンドをモニタリングして、パターンを見つけるのに最適です。 |
| 選択ステップ   | 分析に有効な選択ステップを表示します。(フィルタと同様に)選択ステップを使用すると、特定の質問への回答となる結果を得ることができます。選択ステップは、問合せの集計後に適用されます。 <a href="#">選択ステップの編集</a> を参照してください。                                                                                          |
| 静的テキスト   | 結果に静的テキストを追加します。HTML を使用して、バナー、ティッカ、ActiveX オブジェクト、Java アプレット、指示、説明、グラフなどを結果に追加できます。                                                                                                                                     |
| ビュー・セレクト | 結果にビュー・セレクトを追加します。ビュー・セレクトは、保存済ビューから特定の結果のビューを選択できるドロップダウン・リストです。                                                                                                                                                        |

## ビューの追加

デフォルトでは、分析を作成すると、選択した列に応じて表またはピボット表のビューが表示されます。別のビューを分析に追加して、異なる方法でデータをビジュアル化できます。

たとえば、新しいビューを作成し、「**推奨ビジュアライゼーション**」および「**トレンドの分析**」オプションを選択することで、販売予測分析のトレンドを分析できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブで、「**新規ビュー**」をクリックして、ビュー・タイプを選択します。



3. 分析でビューのコンテナをフォーマットするには、「**コンテナのフォーマット**」をクリックします。
4. 「コンテナのフォーマット」ダイアログのフィールドに値を指定して、位置合せ、色、境界などのオプションを指定します。
5. 「**OK**」をクリックします。
6. 「**分析の保存**」をクリックします。

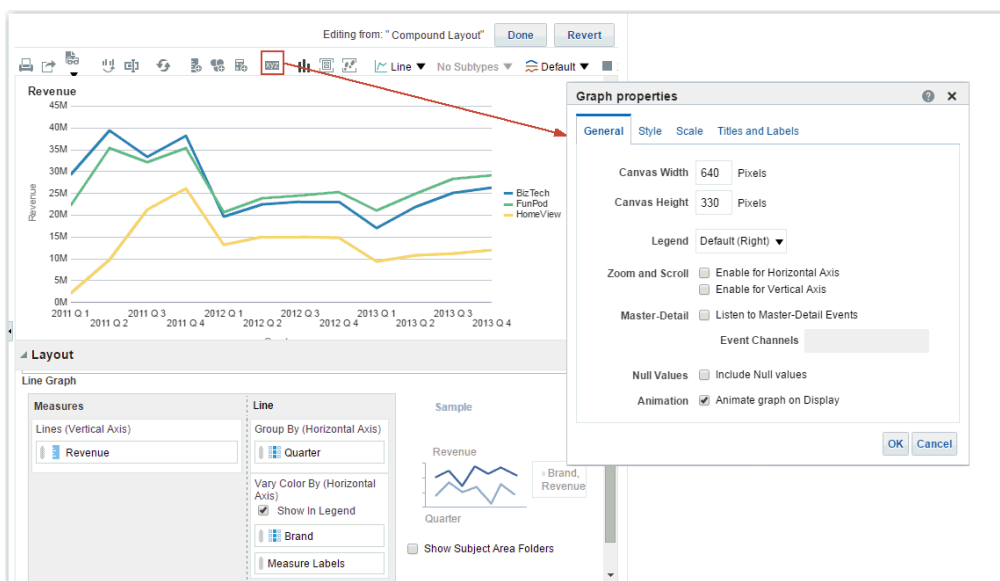
## ビューの編集

各タイプのビューには、それぞれのエディタがあります。エディタには、複数のビューに共通する機能と、ビュー固有の機能があります。

たとえば、グラフ・エディタでは、ブランド売上分析のグラフを編集して凡例を表示できます。

次の手順では、ビューを編集する際の一般情報を提供します。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. ビューを編集するには、「**ビューの編集**」をクリックします。
4. ビュー・エディタ(グラフ・エディタなど)で、適切な編集(凡例を表示するなど)を実行します。



5. 「完了」をクリックします。
6. ビューを保存します。「結果」タブのツールバーにある「**分析の保存**」または「**名前をつけて保存**」をクリックします。

## 様々なタイプのビューの編集

このトピックでは、様々なタイプのビューの編集に関する追加情報について説明します。

**トピック:**

- 表ビューおよびピボット表ビューの編集
- パフォーマンス・タイル・ビューの編集
- ツリーマップ・ビューの編集

- ヒート・マトリックス・ビューの編集
- トレリス・ビューの編集
- ゲージ・ビューの編集
- マップ・ビューの編集
- ナレーティブ・ビューの編集
- データ以外のビューの編集

## 表ビューおよびピボット表ビューの編集

表およびピボット表は一般的に使用されるビューとなり、これらは、データを任意の方法で表示するために、同様の方法で編集できます。

たとえば、ブランド列を行エッジに移動して四半期および地域ごとの対応する売上データを表示することによって、分析のピボット表を編集できます。次に示すように、複合レイアウトでピボット表の横に表を追加することによって、同じデータを従来の方法で表示することもできます。

| Table    |          |          |                 | Pivot Table |          |                 |                 |                  |                 |
|----------|----------|----------|-----------------|-------------|----------|-----------------|-----------------|------------------|-----------------|
| Quarter  | Region   | Brand    | Revenue         | Quarter     | Region   | BizTech Revenue | FunPod Revenue  | HomeView Revenue |                 |
| 2011 Q 1 | AMERICAS | BizTech  | \$11,645,428.23 | 2011 Q 1    | AMERICAS | \$11,645,428.23 | \$8,843,580.33  | \$857,347.11     |                 |
|          |          | FunPod   | \$8,843,580.33  |             | APAC     | \$6,349,188.84  | \$4,878,733.21  | \$421,786.94     |                 |
|          |          | HomeView | \$857,347.11    |             | EMEA     | \$11,252,556.27 | \$8,516,320.93  | \$811,010.51     |                 |
|          | APAC     | BizTech  | \$6,349,188.84  |             | 2011 Q 2 | AMERICAS        | \$15,961,085.17 | \$14,250,184.37  | \$4,006,234.54  |
|          |          | FunPod   | \$4,878,733.21  |             |          | APAC            | \$8,323,016.53  | \$7,459,796.18   | \$2,072,521.07  |
|          |          | HomeView | \$421,786.94    |             |          | EMEA            | \$14,988,891.73 | \$13,579,147.13  | \$3,676,637.59  |
|          | EMEA     | BizTech  | \$11,252,556.27 |             | 2011 Q 3 | AMERICAS        | \$13,530,397.30 | \$13,091,639.22  | \$8,596,068.76  |
|          |          | FunPod   | \$8,516,320.93  |             |          | APAC            | \$7,066,661.36  | \$6,799,599.22   | \$4,380,851.91  |
|          |          | HomeView | \$811,010.51    |             |          | EMEA            | \$12,775,800.05 | \$12,187,409.65  | \$8,173,579.67  |
| 2011 Q 2 | AMERICAS | BizTech  | \$15,961,085.17 |             | 2011 Q 4 | AMERICAS        | \$15,263,089.30 | \$14,114,596.08  | \$10,540,349.59 |
|          |          | FunPod   | \$14,250,184.37 |             |          | APAC            | \$8,061,133.27  | \$7,661,871.39   | \$5,224,840.08  |
|          |          | HomeView | \$4,006,234.54  |             |          | EMEA            | \$14,782,751.95 | \$13,617,122.29  | \$10,238,772.23 |
|          | APAC     | BizTech  | \$8,323,016.53  | 2012 Q 1    | AMERICAS | \$7,982,425.01  | \$8,335,174.46  | \$5,262,063.24   |                 |
|          |          | FunPod   | \$7,459,796.18  |             | APAC     | \$4,248,702.87  | \$4,428,307.35  | \$2,780,112.85   |                 |
|          |          | HomeView | \$2,072,521.07  |             | EMEA     | \$7,410,923.33  | \$7,766,619.80  | \$5,049,320.09   |                 |
|          | EMEA     | BizTech  | \$14,988,891.73 | 2012 Q 2    | AMERICAS | \$9,020,570.44  | \$9,695,602.19  | \$6,025,253.19   |                 |
|          |          | FunPod   | \$13,579,147.13 |             | APAC     | \$4,819,684.75  | \$5,021,379.44  | \$3,381,181.60   |                 |
|          |          | HomeView | \$3,676,637.59  |             | EMEA     | \$8,610,199.31  | \$9,093,043.75  | \$5,638,455.41   |                 |
| 2011 Q 3 | AMERICAS | BizTech  | \$13,530,397.30 | 2012 Q 3    | AMERICAS | \$9,113,882.29  | \$9,917,779.81  | \$6,225,545.43   |                 |
|          |          | FunPod   | \$13,091,639.22 |             | APAC     | \$5,068,110.57  | \$5,177,948.44  | \$3,193,102.10   |                 |
|          |          | HomeView | \$8,596,068.76  |             | EMEA     | \$8,818,200.61  | \$9,306,563.90  | \$5,542,629.33   |                 |
|          | APAC     | BizTech  | \$7,066,661.36  | 2012 Q 4    | AMERICAS | \$9,483,122.26  | \$10,151,443.54 | \$6,087,138.14   |                 |
|          |          | FunPod   | \$6,799,599.22  |             | APAC     | \$4,863,501.81  | \$5,472,364.77  | \$3,045,603.45   |                 |
|          |          | HomeView | \$4,380,851.91  |             | EMEA     | \$8,660,676.75  | \$9,633,772.55  | \$5,669,595.17   |                 |
|          | EMEA     | BizTech  | \$11,252,556.27 | 2013 Q 1    | AMERICAS | \$6,755,709.76  | \$8,444,604.16  | \$3,816,075.84   |                 |
|          |          | FunPod   | \$8,516,320.93  |             |          |                 |                 |                  |                 |
|          |          | HomeView | \$811,010.51    |             |          |                 |                 |                  |                 |

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。

3. 編集する表で「**プロパティの表示**」をクリックします。
4. 表のプロパティを編集します。
5. 「**OK**」をクリックします。
6. 「**ビューの編集**」をクリックして、表ビュー・エディタを表示します。
7. ピボット表の場合は、ツールバーの「**グラフのピボット結果**」ボタンをクリックして、ピボット表の結果をグラフ・ビューに表示すると、ピボット表の横に表示されます。
8. 「**完了**」をクリックします。

## パフォーマンス・タイル・ビューの編集

パフォーマンス・タイル・ビューでは、単一の集計データにフォーカスが適用されます。色、ラベルおよび限定されたスタイルを使用してステータスを示し、背景色またはメジャー値の条件付き書式設定を使用してタイルを視覚的に目立つようにします。

デフォルトでは、「基準」タブの分析内の最初のメジャーがパフォーマンス・タイル・メジャーとして選択されています。正しいメジャー値がタイルに表示されるように、「基準」タブで集計およびフィルタを設定します。分析内のメジャーごとに追加のパフォーマンス・タイル・ビューを含めるには、メジャーごとに個別のビューを追加します。

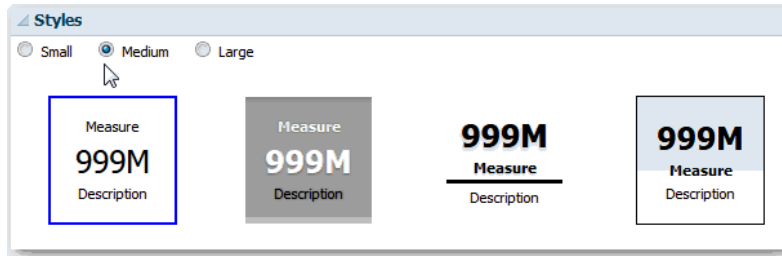
たとえば、パフォーマンス・タイル・ビューを編集して、メジャーとして「収益」を使用するとします。値およびラベルで使用可能スペースを利用するように指定できます。この例はダッシュボード・ページのパフォーマンス・タイルを示しています。

| Revenue | Billed Units | Avg Order Size | # of Orders | # of Products |
|---------|--------------|----------------|-------------|---------------|
| \$800M  | 11M          | \$758          | 1M          | 674           |

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. 「**プロパティの表示**」をクリックします。次のプロパティを設定できます。
  - タイルのサイズ - 事前定義済みのオプション「**小**」、「**中**」または「**大**」を選択するか、「**カスタム**」を選択して高さと幅をピクセル単位で設定できます。その他のオプションを使用して、表示される値に基づいてタイルを自動配置できます。
  - タイルの位置 - オプション「**固定位置**」を使用すると、ラベルの位置は設定(固定)されます。つまり、ラベル・テキストは固定位置に表示されます(1行に同じサイズの複数のパフォーマンス・タイルがあるレイアウトに推奨されます)。オプション「**使用可能スペースの利用**」を使用すると、パフォーマンス・タイル上のラベル・テキストは縦に均等に配置されます。ラベル・テキストは、パフォーマンス・タイル上の使用可能なスペースをすべて利用します。複数のタイルを横に並べて配置した場合、ラベルの高さが異なり、ラベル・コンテンツの内容によっては不均等に見える可能性があります。
  - 省略値の使用 - パフォーマンス・タイルでは、そのメジャーのデフォルトの書式設定を使用して値を表示したり、値を千や百万などの直近まで省略できます。たとえば、省略値を使用すると、123,456.50 のデフォルトの書式設定は 123K として表示されます。フォーマットされた Excel スプレッドシートに分析結果をエクスポートする際

に省略値を表示する場合は、「**フォーマットされた Excel での省略**」オプションを選択します。

- タイルの外観(背景色や境界色など) - 「**条件付き書式設定の編集**」リンクをクリックして、条件付き書式設定をタイルに適用します。
4. 「OK」をクリックします。
  5. 「**ビューの編集**」をクリックして、パフォーマンス・タイル・エディタを表示します。
  6. 「スタイル」ペインで、タイル・サイズを「小」、「中」または「大」に変更します。

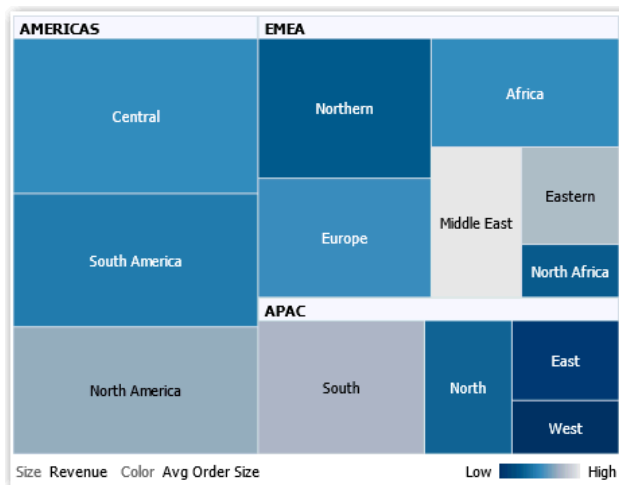


7. 「**タイル・サイズ**」オプション・ボタンの下にあるテーマ(またはスタイル)設定されたタイルを選択して、パフォーマンス・タイルのテーマを変更します。
8. 「完了」をクリックします。

## ツリーマップ・ビューの編集

ツリーマップでは、データを四角形(タイルと呼ばれます)にグループ化して、階層データを編成します。ツリーマップには、あるメジャーのサイズおよび 2 番目のメジャーの色に基づいてタイルが表示されます。

次の画像は、ツリーマップ・ビューの例を示しています。国名が地域およびエリア別にグループ化されています。このツリーマップには、エリアの様々な地域における各国の売上の相関が(平均オーダー・サイズに基づいて)表示されています。



デフォルトでは、「基準」タブの分析の最初のメジャーがサイズ基準メジャーとして選択され、2 番目のメジャーが「色の基準」メジャーとして選択されます。分析内のメジ



ャーが 1 つのみの場合、このメジャーは「サイズの基準」と「色の基準」の両方のオプションのデフォルトになります。また、「スタイル」要素のデフォルトは、ビン数の値が「四分位数」である「百分位数によるビン化」に設定されます。

ツリーマップには次の特性があります。

- タイルは、百分位数によるビン別または連続的に色付けされます。
  - 最初の「グループ化基準」ディメンションはグループ(ヘッダー)ラベルとして表示されます。
  - 「グループ化基準」ディメンションの順序は、ツリーマップ内のネストの順序を示しています。「グループ化基準」の最後のディメンションは最下位レベルで、このディメンションの名前がタイル・ラベルとして表示されます。ラベルが長すぎてタイルに収まらない場合は切り捨てられます。ラベルの完全な値は、ツールチップに表示されます。
1. 編集する分析を開きます。
  2. 「結果」タブをクリックします。
  3. 「プロパティの表示」をクリックします。次のようなプロパティを設定できます。
    - ツリーマップのサイズ。
    - 連続的な色の変化またはツリーマップ・タイルのビン化を示すために凡例を表示するかどうか。
    - 凡例の背景色と塗りつぶし。
    - グループおよびタイルの境界色。
  4. 「OK」をクリックします。
  5. 「ビューの編集」をクリックして、ツリーマップ・ビュー・エディタを表示します。
  6. ビューのカラー・パレットを変更するには、「レイアウト」ペインで「百分位数によるビン化」または「連続的な色の塗りつぶし」を選択します。
    - 「百分位数によるビン化」を使用して、ツリーマップ内のタイルの色を百分位数によるビンとして表示するように指定します。「ビン」リストで、ツリーマップに表示するビンの数を選択します。整数、「四分位数(4)」または「十分位数(10)」を選択できます。値の範囲は 2 から 12 までです。選択されるビンの数は、ツリーマップ内の色の数に対応します。たとえば、地域とエリアのツリーマップを作成するとします。「サイズ基準」メジャーとして「Revenue」、「色の基準」メジャーとして「Avg Order Size」を指定します。次に、スタイルとして「百分位数によるビン化」を選択し、ビン数は 4(四分位数)を指定します。「4 分の 1 番目」は、売上別の平均オーダー・サイズを下回る地域内のエリアを表します。「ビン化プロパティ」領域は、100%の合計に基づいてビンの割合が表示され、選択したビンの数に基づいて計算されます。各割合は色コード化され、「色」の選択に対応します。
    - 「連続的な色の塗りつぶし」を使用して、ツリーマップ内のタイルがグラデーション色スキームとして表示されるように指定します。最低値のグラデーション色は、選択した「色の基準」メジャーの最小値です。最高値のグラデーション色は、選択した「色の基準」メジャーの最大値です。
  7. 「グループ化基準」、「サイズ基準」および「色の基準」オプションを使用して新しいデータをわかりやすくビジュアル化するには、メジャーおよび属性列と階層列(スキップ・レベル階層を除く)を変更します。
  8. 「完了」をクリックします。

## ヒート・マトリックス・ビューの編集

通常、ヒート・マトリックス・ビューでは、データ値間の関係を色のグラデーションとして表形式で表します。ビュー・サイズ、ヘッダーとデータ・セルの表示、凡例の表示などのプロパティを編集できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. 編集するヒート・マトリックスの「**プロパティの表示**」をクリックします。
4. 必要に応じてプロパティを編集します。
  - 「**データ表示**」を使用して、レイアウトにおけるビューのサイズを制御します。オプションとして、オプションの最大幅および高さでのスクロールや、オプションのページごとの行数でのページ処理があります。
  - 「**凡例**」を使用して、連続的な色の变化またはヒート・マトリックスのビン化を示す凡例を表示します。
  - 「**マスター詳細**」を使用して、表をマスター・ビューにリンクします。「**イベント・チャンネル**」フィールドに、表がマスター詳細イベントをリスニングするチャンネルの大文字/小文字が区別される名前を入力します。複数のチャンネルはカンマで区切ります。
  - 「**フォルダと列の見出しの表示**」を使用して、列およびビューの見出しを表示する方法を指定します。フォルダ/列オプションを選択して、サブジェクト領域からの完全修飾フォルダ名と列名を行または列のタイトルとして表示します(例: Offices.D1 Offices)。
5. 「OK」をクリックします。
6. 左クリックでセルにドリルします。
 

複数レベルの階層をドリルすると、最下位レベルのすべてのメンバーがセルとして表示され、現在のデータが詳細レベルのデータで置き換えられます。たとえば、国名(米国など)にドリルすると、ヒート・マトリックスには国自体ではなくその国の州のデータが表示されます。
7. 外部エッジを右クリックすると、オプションのコンテキスト・メニュー(**ドリル**、アクションの**起動**、**保持のみ**、**除去**、または指定したセルにフォーカスなど)が表示されます。
8. 「**ビューの編集**」をクリックして、ヒート・マトリックス・エディタを表示します。
9. 「レイアウト」ペインで、次のように操作します。
  - a. ビューのカラー・パレットを変更するには、「**スタイル**」ボックスで、「**百分位数によるビン化**」または「**連続的な色の塗りつぶし**」を選択します。
  - b. 「**行**」、「**列**」および「**色の基準**」ドロップ・ターゲットを使用してデータをわかりやすくビジュアル化するには、メジャーおよび列を変更します。
10. ソートを指定するには、ビュー内のセルを右クリックし、「**ソート**」をクリックします。「ソート」ダイアログで使用できる相互作用は、ビューのどこを右クリックしたかによって異なります。
11. 「**完了**」をクリックします。

## ヒート・マトリックス・ビューについて

ヒート・マトリックス・ビューでは、データが 2 次元で描写され、値が色のグラデーションで表現されます。単純ヒート・マトリックスは即時に情報のビジュアル・サマリーを提供するもので、大量のデータを分析して外れ値を確認する用途に適しています。

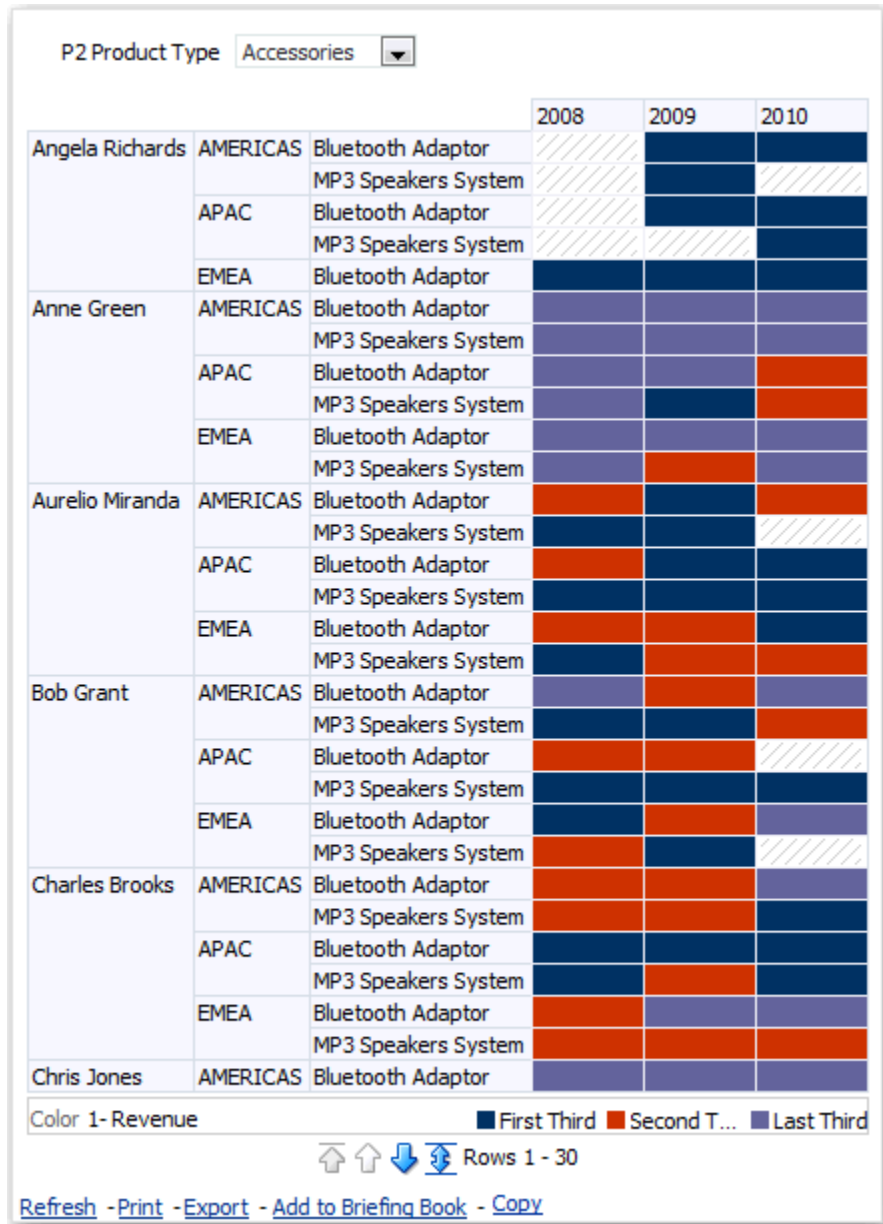
ヒート・マトリックスでは、1 つのメジャーのデータが表示されます。色付きのセルは、「プロンプト」、「セクション」、「行」、「列」および「色の基準」ドロップ・ターゲットに配置された行と列のグループ化および交差で形成されます。セルは、百分位数によるビン化または連続的な色として表示されます。セルにカーソルを合せてその値を表示するか、セルの値を常に表示しておくことができます。

デフォルトでは、「基準」タブの最初の分析メジャーが「色の基準」メジャーとして選択され、これがメジャーの値を表します。「スタイル」要素のデフォルトは、ビン数の値が「四分位数」である「百分位数によるビン化」に設定されます。セルは、同じ幅および同じ高さで一律に表示されます。セルの幅および高さは同じである必要はありません。ストライプの「透明な」対角線パターンは null 値を示します。

ヒート・マトリックスの下に、次を含む凡例を表示できます。

- 1 つのメジャー(「色の基準」リストで選択)と対応するラベル。
- 指定されたビンの数(四分位数など)、色分けとラベル付け、または連続的な色の塗りつぶしとして表示され、「低」から「高」にラベル付けされたグラデーション・バー。

ダッシュボード・ページに表示されたヒート・マトリックス・ビューの例を次に示します。各営業担当の収益が地域および製品ごとに表示されており、製品タイプでプロンプトされます。売上収益が各年でビン化されています。このヒート・マトリックスは各営業担当の製品収益の外れ値を示しています(例: 2008 年に、Angela Richards は Bluetooth Adaptors または MP3 Speakers Systems についていずれの地域でも売上収益を上げていない)。

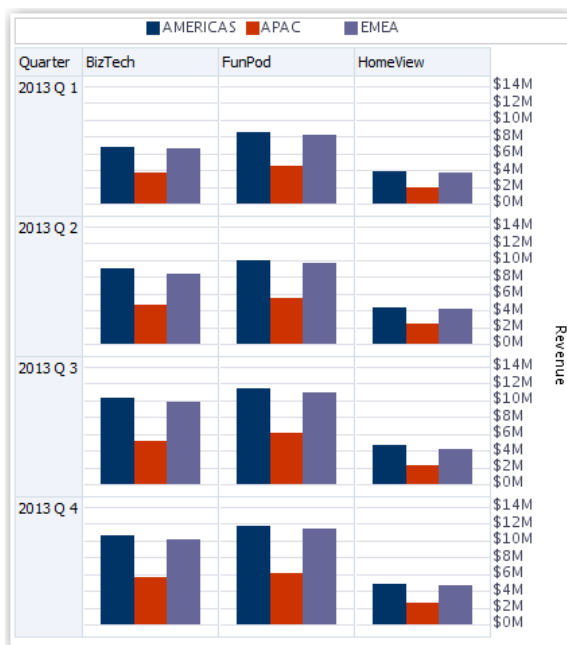


## トレリス・ビューの編集

トレリス・ビューは、各データ・セルに 1 つずつの複数グラフのグリッドが表示されるタイプのグラフ・ビューです。

トレリス・ビューには単純または拡張があります。単純トレリスには、中核の内部グラフが行セットと列セット全体に複数表示されるので、多数の小さなグラフを複数表示して比較対照するのに最適です。拡張トレリスには、小さなスパーク・グラフのグリッドが表示されるので、データセットのトレンドをモニタリングして、パターンを見つけるのに最適です。

次の画像は、単純トレリス・ビューを示しています。



トレリス・ビュー(トレリス・グラフとも呼ばれます)は、ピボット表と似ていますが、トレリス内のデータ・セルにグラフが含まれている点が異なります。単一の棒グラフや単一の散布図のようなスタンドアロン・グラフ・タイプが独立して動作するのに対して、トレリス・グラフは、内部グラフと呼ばれるネストされたグラフのグリッドを必ず表示して動作します。そのため、棒グラフのトレリス・ビューは、実際には複数の棒グラフで構成されています。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. 「プロパティの表示」をクリックして、プロパティを編集します。

次のようなプロパティを設定できます。

- 凡例の場所など、グリッド・キャンバス関連(単純トレリス・ビューのみ)。
- トレリスに含まれるビジュアライゼーションのグラフ・サイズ関連。
- データの参照に使用する方法(スクロールまたはページ・コントロール)の指定
- 様々なスタイルの選択肢および凡例の表示方法など、トレリスのグリッドおよびビジュアライゼーションの外観の制御。
- トレリスのビジュアライゼーションごとのスケールのタイプとスケール・マーカーの外観の制御(単純トレリス・ビューのみ)。
- タイトルとラベルの表示制御(単純トレリス・ビューのみ)。

4. 「OK」をクリックします。
5. 「ビューの編集」をクリックして、トレリス・エディタを表示します。
6. 「レイアウト」ペインで、次のように操作します。
  - a. 「列」および「行」フィールドに列をドラッグ・アンド・ドロップして、トレリスでのデータの配置方法を指定します。
  - b. トレリス内の各セルに対して表示するグラフのタイプを選択します。

- c. 列をドラッグ・アンド・ドロップして、グラフの色付け方法を示します。
7. ビューの見出しで右クリックし、「列のソート」をクリックして、ビューでの値のソート方法を指定します。
8. 「完了」をクリックします。

## トレリス・ビューの機能について

トレリス・ビューは、多くの部分でピボット表のように動作します。トレリスとピボット表の主な違いは、データ・セルの表示方法です。

トレリスの行と列のラベル・セルでは、次のことを行えます:

- 右クリックして、メジャー・ラベルを非表示にしたり移動します。
- 右クリックして、データをソートします。
- ドラッグして、行と列を再配置します。

トレリスのデータ・セルでは、マウス・ポインタを合せると、関連するコンテキスト情報を表示できます。トレリスの数値データ・セルは、ピボット表の数値データ・セルと同様に動作します。トレリス・ビューの動作がピボット表の動作と異なるのは、次の点です:

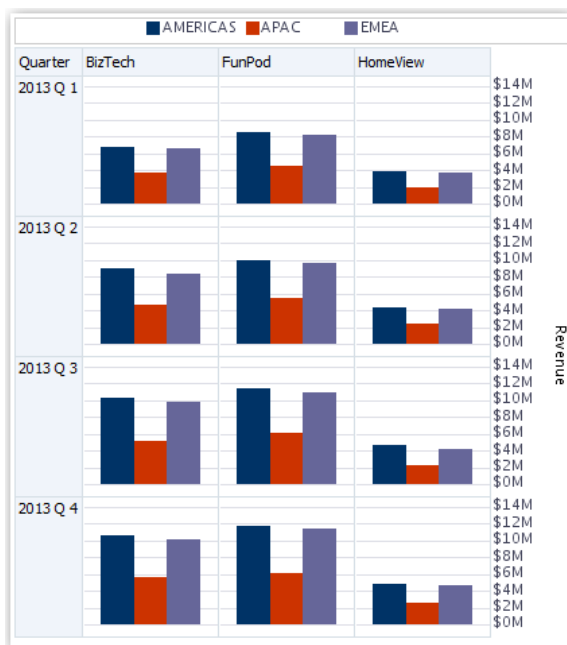
- グラフ・データ・セル—単純トレリスのデータ・セルには右クリック機能がなく、トレリス・グラフ・データ・セルにはドリルもありません(左クリック機能)。
- マイクロチャート・データ・セル—スパーク・グラフのデータ・セルにカーソルを合せると、ピボット表ビューでは表示されないコンテキスト情報(最初、最後、最小および最大の値など)が表示されます。

## 単純トレリスと拡張トレリスについて

トレリス・ビューには、単純トレリスと拡張トレリスの 2 つのいずれかのタイプがあります。

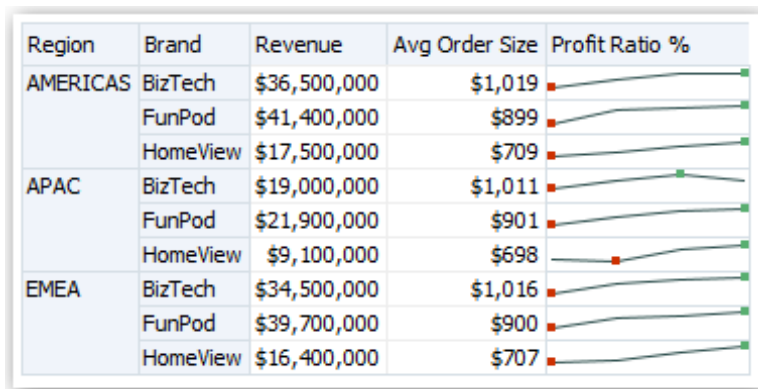
単純トレリスには、1 つのタイプの内部ビジュアライゼーション、たとえば、すべての棒グラフが表示されます。内部のビジュアライゼーションでは、常に共通の軸を使用して、すべての内部グラフが同じスケールで表示されます。共通の軸があれば、すべてのグラフ・マーカーを行と列で簡単に比較できます。

この図は、単純トレリス・ビューを示しています。



拡張トレリスは、グリッド内での複数のビジュアライゼーション・タイプの表示に対応しています。販売のトレンドを示す拡張トレリスには、1つの列のセルに(売上などの)数字を格納するグリッドを表示できます。数字の列に近い別の列には、そのセルにスパーク折れ線グラフを表示します。その列の隣りに、合計ユニット数などの別のメジャーをビジュアル化するスパーク棒グラフの列など、別のマイクロチャートを表示することもできます。

この図は、拡張トレリス・ビューを示しています。



ビジュアル化される各メジャーには、別の内部グラフ・タイプが割り当てられます。グリッドの各セルには独立したスケールが設定されます。

拡張トレリスは、データ・セルにスパーク・グラフがあるピボット表と考えてください。ただし、追加する各メジャーに対して、オプションでディメンションを関連付けて、マイクロチャートとしてビジュアライゼーション表示できます。この点が、拡張トレリスと単純トレリスでは大きく異なります。単純トレリスでは、追加のディメンションとともに、すべてのメジャーが同じビジュアライゼーションで表示されます。



## トレリス・ビューおよびマイクロチャートの設計上の考慮事項

ここでは、トレリス・ビューに表示されるコンテンツを設計する際の考慮事項について説明します。

すべてのトレリス・ビューの場合:

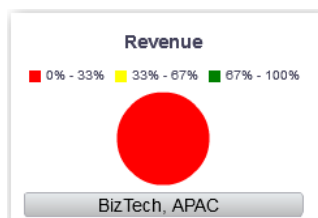
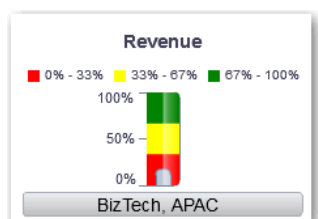
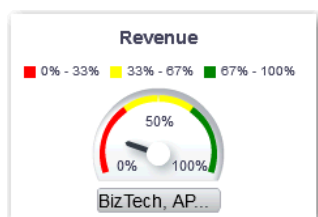
- 比較する場合は、単純トレリスを選択します。
- トレンドを分析する場合は、拡張トレリスを選択します。
- トレリスを構成する内部グラフは、読みやすく密集しすぎないようにします。トレリス・ビューで複数の系列や複数のグループを表示しても、特に有用ではありません。(ツールチップを表示するために)データ・ポイントをマウスで簡単に指せない場合は、内部グラフが密集しすぎていて読みにくい可能性が高いです。
- 単純トレリスの場合:
  - 単純トレリスの設計はピボット表の設計に似ていますが、トレリスの場合は、表示できるセルの合計数がずっと少なくなります。
  - 単純トレリスとピボット表の設計の主な違いは、トレリスの場合、ビジュアルライゼーションに関連付けることができるディメンションは 1 つか 2 つです。外部エッジに追加するディメンションは少数です。
  - トレリスは、少数の外部エッジ・ディメンションで設計します。(類似と類似を簡単に比較できるようにするために)スクロールしなくてもグラフ系列全体を一度に表示できるようにする必要があります。追加のディメンションを表示する必要がある場合は、グラフのプロンプトにディメンションを追加することを検討してください。
  - 列ヘッダーおよび行ヘッダーにどのデータを表示するかを決定する際には、列ヘッダーに 1 つか 2 つのディメンションを表示するようにします(各ディメンションのメンバーは少数にします)。
- 拡張トレリスの場合:
  - 拡張トレリスの一般的なユースケースは、数値の横にトレンド・グラフを圧縮形式で表示する場合です。そのため、一般的な拡張トレリスでは、同じメジャーの数値表記の横にスパーク・グラフを組み合せます。
  - 列ヘッダーにはディメンションを含めないのが理想的です。列ヘッダーにはメジャーを含めます。
  - スパーク・グラフに一般的に関連付けられるディメンションは時間です。スパーク・グラフにはラベルを表示できないため、ビジュアル化されるデータが本質的な順序で並んでいることが重要です。たとえば、(スパーク棒グラフの特定の棒になる)地域の順序は直感的には理解できないため、地域をスパーク・グラフにビジュアル化しても無意味です。
  - ピボット表を設計する場合と同様に、一般に時間を横軸に表示し、もう 1 つのディメンションを縦軸に表示します。そうすれば、目を左から右に動かして、一定期間にディメンションがどのように変化したかを見ることができます。
- 単純トレリスでは階層列が正常に機能しません。階層列が外部エッジに表示されると、デフォルトでは親と子(年と四半期など)が共通の軸スケールを使用して表示されます。また、年と四半期では規模が異なるため、子グラフのマーカーが非常に小さくなって、親スケールに対しては読みにくくなる場合があります。(拡張トレリスでは、各データ・セルのスケールが異なるため、階層列が正常に機能します。)



## ゲージ・ビューの編集

ゲージ・ビューを使用して、目標に対してパフォーマンスを比較します。サイズが小さいため、単一のデータ値を表示する場合、グラフよりゲージの方が効率的です。結果は、ダイアル・ゲージ、棒ゲージまたは球ゲージで表示されます。たとえば、実績売上がブランドに対する事前定義済の制限内であるかどうかを確認できます。

次の図は、同じ値をダイアル・ゲージ、棒ゲージおよび球ゲージで示しています。



1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. 編集するゲージの「プロパティの表示」をクリックします。
4. ゲージのプロパティを編集します。
  - 「行ごとのゲージ」を使用して、表示するゲージの行数およびラベルの配置を指定します。
  - 「マスター詳細イベントのリスニング」を使用して、ゲージをマスター・ビューにリンクします。「イベント・チャンネル」フィールドに、ゲージ・ビューがマスター詳細イベントをリスニングするチャンネルの、大文字/小文字が区別された名前を入力します。複数のチャンネルはカンマで区切ります。
  - 「ゲージのスタイル」を使用して、ゲージの幅および高さを変更します。
  - 「マーカー・タイプ」を使用して、ダイアル・ゲージのマーカー・タイプ(「針」、「線」または「塗りつぶし」など)を指定します。

- 「**ゲージの制限**」を使用して、ゲージの制限のスケールを指定します。たとえば、カスタム・ゲージ制限を指定できます。実際の値またはパーセンテージとして、1000 などの静的値を指定できます。指定する値は、データ・ポイントの範囲に依存します。最大ゲージ制限が最大データ・ポイントより大きいことを確認する必要があります。これは、すべてのデータ・ポイントがゲージ上に確実に表示されるようにするために実行します。
  - 「**タイトルとラベル**」を使用して、タイトルとフッターの外観およびラベルの書式を変更します。
5. 「OK」をクリックします。
  6. 「**ビューの編集**」をクリックします。
  7. ツールバーの「**ゲージ・タイプ**」ボタンをクリックして、ゲージのタイプを選択します。
  8. オプション: ゲージのしきい値を定義します。
  9. 「**完了**」をクリックします。

## しきい値の設定

ゲージおよびファンネル・グラフに表示するためのしきい値を設定できます。

各しきい値には最高値と最低値があり、しきい値で識別される範囲をゲージに表示するための色(緑: 許容、黄: 警告、赤: クリティカルなど)が関連付けられます。

1. 「**ビューの編集**」をクリックして、ビュー・エディタを表示します。
2. 「設定」ペインで、「**高い値が望ましい**」または「**低い値が望ましい**」を選択します。  
たとえば、「**高い値が望ましい**」を選択すると、上から順に、最も望ましいインジケータ(優良など)から最も望ましくないインジケータ(警告など)までのステータスがリストされます。一般に、売上などの列では高い値が望ましくなります。費用などの列では低い値が望ましくなります。
3. 「しきい値」リストで、特定の値の範囲を強調表示するデータ値を指定します。  
この値は、ビューの制限に対して設定された最小値から最大値の間にあることが必要です。しきい値が識別する範囲には、他の範囲とは異なる色が設定されます。  
データ値を指定するには、「しきい値」フィールドに静的値を直接入力するか、**しきい値のオプション**をクリックして、メジャー列、変数式または SQL 問合せの結果に基づいて値を設定できます。しきい値がシステムで決定されるようにするには、「**動的**」を選択します。
4. 「ステータス」領域で、範囲のラベルを入力します。
  - 現在のしきい値を範囲のラベルとして使用するには、「**しきい値**」を選択します。
  - テキストを使用して範囲のラベル(優良など)を指定するには、「**ラベルの指定**」を選択します。

## マップ・ビューの編集

マップ・ビューは、空間フォームにデータを表示し、ロケーション・コンテキストを使用して、リージョン全体でのトレンドおよびトランザクションを明らかにします。

たとえば、アメリカ合衆国の地図を表示する場合に、販売実績ごとに州を色分けできます。

### チュートリアル

そのビューに表示する列を選択した後、マップ・ビューを作成します。管理者は、複数の背景マップを指定できます。最初のマップ・ビューには、選択した列に関連付けられた少なくとも 1 つのレイヤーを持つ最初の背景マップが表示されます。別の背景マップを選択したり、背景マップにレイヤーを適用したり、あるいはレイヤーを書式設定することで、マップ・ビューを編集できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. 「プロパティの表示」をクリックします。
4. 「キャンバス」タブで、マップ・サイズを指定します。
  - 「キャンバスのサイズ」を使用して、コンテナ内のマップ・サイズを指定します。「デフォルト」、「カスタム」または事前定義済のサイズを選択できます。「デフォルト」または事前定義済のサイズを選択した場合、選択可能な追加のオプションは存在せず、マップのサイズはコンテナにあわせて調整されます。コンテナは、「マップ」エディタ内の領域やダッシュボード・ページのセクションなどの、マップが含まれているあらゆる領域を指します。
  - 「マップ・ラップアラウンド」を使用して、マップに線の書式を含めるときのラップアラウンド機能を指定します。線は、サン・フランシスコから東京までの航空路のように、マップの境界を超える唯一のフォーマットです。この機能をオンにすると、線が中断されないようにマップをパンできます。
5. 「ラベル」タブで、すべてのレイヤーのラベルを表示するか、マップ・ビューの特定のレイヤーのラベルを表示するかを指定します。
 

このタブには、マップ・ビューの各レイヤーのボックスが含まれます。ラベルは、「マップ」エディタの「マップ・フォーマット」領域にリストされているレイヤーと同じ順序で表示されます。カスタム・ポイント・レイヤーのラベルは、デフォルトで表示されません。
6. 「相互作用」タブの「初期マップ・ビュー」セクションで、初期のマップ中心とズーム・レベルを選択します。
7. 「ツール」タブで、ズーム・スライダと距離インジケータなど、マップで使用可能なツールを指定します。
8. 「OK」をクリックします。
9. 書式をレイヤーに適用します。
10. 「ビューの編集」をクリックします。
11. フォーマットとレイヤーを変更します。
12. 「完了」をクリックします。
13. 値をドリルします。

## マップ・ビューについて

マップ・ビューを使用すると、マップ上のデータを複数の異なるフォーマットで表示し、データと対話できます。

データをマップ上にビジュアル化すると、それ以前には明確でなかったデータ値間の関係を直観的に表すことができます。たとえば、郵便番号が売上高によって色分けされた市のマップをマップ・ビューに表示し、イメージ・マーカーに注文ごとの平均割引額を表示できます。

## マップ・コンポーネント

マップは、背景またはテンプレート・マップと、ウィンドウ内に重なり合って表示された多数のレイヤーなどの多くのコンポーネントで構成されます。マップには、そのマップのすべてのレイヤーが共有する座標系が関連付けられています。マップは、イメージ・ファイル、イメージ・ファイルのオブジェクト表現、またはイメージ・ファイルを指す URL です。

- **メイン・コンテンツ** - メイン・コンテンツは背景またはテンプレート・マップで、背景の地理データとズーム・レベルを提供します。メイン・コンテンツは、オフィス・ビルのフロアー・マップや国、市、道路などのアイテムの外観やプレゼンスなどのイメージです。
- **レイヤー** - 1 つ以上のインタラクティブ・レイヤーまたはカスタム・レイヤーをメイン・コンテンツにオーバーレイできます。
- **ツールバー** - ツールバーはデフォルトで表示され、ボタンをクリックしてマップのコンテンツを直接操作できます。マップ・ビュー自体にツールバーがあります。コンテンツ設計者は、ダッシュボード・ページのマップ・ビューにツールバーを表示するかどうかを指定します。ダッシュボード・ページでは、ツールバーはマップの上に直接表示され、「パン」、「ズーム・アウト」および「ズーム・イン」ボタンのみが含まれています。「マップ」エディタのツールバーには、マップ・ビューを変更するためのその他のオプションが含まれています。
- **ズーム・コントロール** - これらのコントロールにより、マップ・ビューに表示される地理データの詳細を調整します。たとえば、国からズーム・インすると、州や市の詳細が表示されます。管理者は、どのズーム・レベルで各レイヤーを表示するかを指定します。1 つのレイヤーに複数のズーム・レベルを持たせたり、複数のレイヤーが関連付けられている 1 つのズーム・レベルを持つことができます。ズームすると、そのズーム・レベルにマップ情報が変更されますが、そのレベルの BI データは影響を受けません。データの表示はドリルによって操作します。

ズーム・コントロールにはズーム・スライダがあり、広域のズーム用のつまみと 1 レベルのズーム用のボタンとともに、マップ・ビューの左上隅に表示されます。ズーム・コントロールが最大限にズーム・アウトされると、ズーム・レベルは 0 に設定され、マップ・ビュー全体が表示されます。

ズーム・コントロールの表示を決定します。マップ・ビューを作成すると、デフォルトでは、マップは最上位レイヤーのコンテンツ全体が収まる最上位ズーム・レベルに最初にズーム・インされます。たとえば、最上位のレイヤーにカリフォルニア州のデータのみが含まれている場合、マップはすべてのカリフォルニアを引き続き表示する最上位ズーム・レベルにズームします。

- **スケール・ツール** - 距離インジケータとしても知られるこのツールは、マップの距離を判断する手段で、マップ・ビューの左下隅、情報パネルと著作権表示の間に表示される 2 つの横棒で構成されます。上のバーはマイル(mi)を表し、下のバーはキロメートル(km)を表します。ラベルは、マイル・バーの上およびキロメートル・バーの下に [distance] [unit of measure] の形式で表示されます。ズーム・レベルの変更やマップのパンに応じて、バーの長さや距離の値が変わります。

- **凡例** - 凡例はマップ・ビューの右上隅にある半透明の領域で、表示/非表示を切り替えることができます。凡例には、現在のズーム・レベルに関連する情報が表示されます。凡例は、マップ上の記号、レイヤーおよび書式設定の読取り専用のビジュアル・キーで、マップに適用された表示可能なすべてのフォーマットが表示されます。フォーマットがオフの場合は、対応する凡例項目も非表示になります。フォーマットがオンでも表示からズームアウトされている場合、その項目は凡例に表示されません。現在のズーム・レベルにフォーマットを定義していない場合、凡例には「現行ズーム・レベルでのフォーマットが定義されていません。」などのテキストが表示されます。  
マップでフォーマットを選択すると、対応する凡例項目が強調表示されます。強調表示には選択した書式に応じて様々な粒度があります(たとえば、円グラフには色の塗りつぶしにある粒度のレベルがありません)。

右上隅の「**マップ凡例の表示**」および「**マップ凡例の非表示**」ボタンを使用して、凡例の表示を制御します。

- **概要マップ** - 概要マップはメイン・マップの縮小ビューで構成され、メイン・マップの右下隅に表示されます。この概要マップは地域コンテキストを提供します。  
網線は、メイン・マップの縮小ビュー全体を移動可能な小さいウィンドウとして表示されます。縮小マップ内の網線の位置によって、メイン・マップの表示可能領域が決まります。網線を移動すると、メイン・マップが自動的に更新されます。網線を使用せずに概要マップでパンすることもできます。

網線が表示できない場合、概要マップは自動的に非表示になります。この非表示は、通常、連続するズーム・レベル間の差が小さすぎて、概要マップに縮小ビューを表示できない場合に起こります。

- **インタラクティブ・パネル** - インタラクティブ・パネルの上部のセクションを使用すると、分析エディタで BI データの書式を作成および編集できます。書式に編集可能なしきい値がある場合、マップ・エディタにスライダが表示され、スライダをドラッグしてしきい値を編集できます。インタラクティブ・パネルでは、地理レイヤー内の書式を再配置できます。たとえば、州レイヤーに 3 つの書式がある場合、書式が表示される順序を選択できます。

マップ領域にカーソルを合せてツールチップを表示すると、インタラクティブ・パネルの対応する詳細が更新および強調表示されます。

コンテンツ設計者から許可されている場合、ダッシュボード・ユーザーは、書式の表示モードを制御(オン/オフ)したり、書式のしきい値を調整できます。

パネルの下部のセクションには「機能レイヤー」エリアが含まれます。このエリアでは、マップに追加する BI 以外のレイヤーを選択できます。BI 以外のレイヤーとは、BI 列に関連付けられていないレイヤーです。BI 以外のレイヤーに書式を適用することはできません。

## マップ・ビューのフォーマットとレイヤーについて

このトピックでは、マップ・ビューでフォーマットおよびレイヤーが相互作用する仕組みについて説明します。

### トピック:

- [マップ・ビューのレイヤーについて](#)
- [マップ・ビューの書式について](#)

## マップ・ビューの書式について

書式は、都市または河川を表す点または線などの地物について、表示プロパティを定義します。

たとえば、地物が国を表す多角形の場合、書式で国の塗りつぶしの色を定義したり、国に重ねて表示する円グラフを定義できます。書式は、大陸、国、地域、州、市などの特定の地理レベルと関連付けられます。

## 書式のタイプについて

マップ・ビューは、BI データの列を使用します。各列は、書式設定や相互作用などの特性を定義するプロパティのセットを持ちます。列に適用されている書式設定は、相互作用の設定以外、マップに適用されません。マップのしきい値が基となっている書式設定は適用されます。

様々な種類の書式をマップ・ビューおよび BI レイヤーに適用できます。BI 以外のレイヤーに書式を適用することはできません。様々な書式を定義して BI レイヤーに適用できます。

| フィールド   | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 色の塗りつぶし | 「色の塗りつぶし(レイヤー)」ダイアログが表示され、これを使用して、領域が特定の条件を満たすことを示す塗りつぶし色で領域を表示します。<br>色の塗りつぶし書式は、地域や多角形に適用します。たとえば、色の塗りつぶし書式によって、ある地域の州の人口やある地域の州での製品の人気を表すための様々な色を識別します。マップ・ビューは、異なるズーム・レベルで表示可能な複数の色書式を持つことができます。たとえば、1 から 5 のズーム・レベルのレイヤーの色の塗りつぶし書式は州の人口を表し、6 から 10 のズーム・レベルのレイヤーでは、国の平均収入を表します。異なる色を指定して、様々なデータ値を識別することもできます。 |
| 棒グラフ    | 「棒グラフ(レイヤー)」ダイアログが表示され、これを使用して、一連のデータを領域内に棒グラフとして表示します。グラフ書式では、州や国などの特定の地域に関連付けられた統計を示すことができます。たとえば、グラフ書式で、様々な製品の州での売上値を表すことができます。<br>特定のレイヤーに複数のグラフ書式を作成できますが、書式がレイヤーで重なり合い、好ましくない表示結果になるため、お勧めできません。                                                                                                             |
| 円グラフ    | 「円グラフ(レイヤー)」ダイアログが表示され、これを使用して、一連のデータを領域内に円グラフとして表示します。                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 形状      | 「可変形状(レイヤー)」ダイアログが表示され、これを使用して、領域内にマーカーまたは形状を描画し、領域に関連付けられているメジャー列を表示します。形状に異なる色を指定して、様々なデータ値を識別することもできます。                                                                                                                                                                                                         |
| バブル     | 「バブル(レイヤー)」ダイアログが表示され、これを使用して、形状書式と同様に領域内にバブルを表示します。                                                                                                                                                                                                                                                               |
| イメージ    | 「イメージ(レイヤー)」ダイアログが表示され、これを使用して、形状書式と同様に領域内にイメージを表示します。異なるイメージを指定して様々なデータ値を識別することができます。管理者が指定しているイメージを選択します。                                                                                                                                                                                                        |



| フィールド     | 説明                                                                                                                                                                                                                 |
|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 折れ線       | 「線(レイヤー)」ダイアログが表示され、これを使用して、マップに線を表示します。<br>マップに線を含めて、ハイウェイ、鉄道、出荷ルートなどのパスを表示できます。線の幅を指定し、「マップ・プロパティ」ダイアログの「マップ・ラップアラウンド」機能を使用すれば、サン・フランシスコから東京への航空会社の航空路を表示する場合のように、連続した線にすることができます。機能を目立たせるために、メジャーごとに線の幅を変更できます。 |
| カスタム・ポイント | カスタム・ポイントの書式設定(レイヤー)ダイアログが表示され、これを使用して、レイヤー内のバブル、イメージまたは形状などのポイント書式を表示します。カスタム・ポイントは、すべてのズーム・レベルで表示され、他のすべてのマップ書式設定の上に表示されます。カスタム・ポイント書式を作成する場合、緯度と経度を指定する列を選択します。                                                 |

## 書式の表示について

書式の表示は、様々な要因に依存しています。

次の要因によって書式の表示は異なります。

- マップのズーム・レベルと書式のズーム範囲。たとえば、州の境界が表示され、州に対する色の塗りつぶし書式が有効な場合、この書式は表示されますが、マップが大陸レベルにズーム・アウトされると、書式は表示されません。
- データ・ポイント制限。通常、ビューにズーム・インされて書式が有効な場合、書式は表示されますが、特定のレイヤーがデータ・ポイントの最大数を超過している場合、書式が表示されない場合があります。

カスタム・ポイント書式は独特で、すべてのズーム・レベルで常にマップに表示されます。

書式データが有効で、ビューにズーム・インされている場合にのみ、書式データが凡例に表示されます。「マップ・フォーマット」領域で名前前の横にあるボックスが選択されている場合、書式は有効です。

マップでは、一度に(1つのズーム・レベルで)複数の非ポイント書式は表示できませんが、ポイント書式で同じ経度と緯度の位置を共有していない場合、複数のポイント書式を同時に表示できます。複数のグラフ書式が同じ地理レイヤーで指定された場合、重なり合って表示されます。

## 書式の適用について

書式に適用される様々なガイドラインがあります。

- 色の塗りつぶし、バブル、円グラフおよび棒グラフの書式は、多角形などの地理領域に適用されます。
- バブル、可変形状、イメージおよびカスタム・ポイントの書式は、1つの緯度と経度の位置(ポイント)に基づきます。
- 線の書式設定は、線ジオメトリが存在する場合のみに表示されます。線の書式は、線ジオメトリに対して作成できる唯一の書式です。
- 書式を定義する際、レイヤーで異なる書式を異なるメジャー列に適用するよう指定できます。

## マップ・ビューのレイヤーについて

レイヤーは、共通の属性と位置のセットを持つ機能と書式の集まりです。

たとえば、米国の州を示すレイヤーには、売上別の色分けや、その州のブランドごとの売上を示す円グラフを含めることができます。米国の州のレイヤー以外に、州内の店舗を、各店舗の売上を示すポップアップの注釈付きの点で示すレイヤーを使用できます。

レイヤーは、背景またはテンプレート・マップに表示できます。マップでズーム・インやズーム・アウトを行うと、様々なレイヤーが非表示になったり、表示されたりします。一部のレイヤーはデータと対応しており、マップに表示できます。その他のレイヤー(道路を表示するレイヤーなど)は、データと関連付けられていません。

レイヤーは事前に定義されている場合もカスタムの場合もあります。事前定義レイヤーは、ジオメトリが Oracle Database の空間表で定義されているレイヤーです。マップ上のデータ表示方法の構成の説明に従って、管理者が事前定義レイヤーを使用可能にします。カスタム点レイヤーは、マップ・ビューの編集時に定義するレイヤーです。

レイヤーのタイプは様々です。多角形レイヤーは、州などの地域を表します。コネチカット、メイン、マサチューセッツ、ニュー・ハンプシャー、ロード・アイランドおよびバーモントで構成される米国のニュー・イングランド・レイヤーがこの例です。

ポイント・レイヤーは、座標系に基づいて、マップに特定のポイントを示します。たとえば、ポイント・レイヤーで、マップに倉庫の場所を示すことができます。このレイヤーでは、倉庫の商品構成のタイプ(電子機器、家庭用品、園芸用品)によって異なるイメージを使用し、倉庫を区別することができます。

経度と緯度の座標を使用して、マップにポイントを配置するカスタム・ポイント・レイヤーを作成できます。たとえば、会社の本社がニューヨーク市にあるとします。会社のアイコンをニューヨーク市の上に表示し、ニューヨーク市を含むマップが表示される場合は常にアイコンが表示されるカスタム・ポイント・レイヤーを作成できます。カスタム・ポイント・レイヤーは常に、他のレイヤーより上に置かれ、ズーム・レベルの影響を受けません。カスタム・ポイント・レイヤーは、現在の分析の現在のマップ・ビューでのみ使用され、同じ分析であっても他のマップ・ビューで使用されません。

レイヤーをマップに表示するかどうかは選択できますが、事前定義レイヤーは変更できません。色付きの地域、バブル、ポイント、折れ線、棒グラフや円グラフなどの、レイヤーに適用する書式を作成することもできます。すべての書式がすべてのレイヤー・タイプに使用できるわけではありません。たとえば、ポイント・レイヤーには「色の塗りつぶし」フォーマットを適用できません。

## マップ・ビューのフォーマットとレイヤーの編集

マップ・ビューのレイヤーに表示されるフォーマットを編集できます。

1. 編集するマップ・ビューを開きます。
2. 「**ビューの編集**」をクリックして、マップ・エディタを表示します。
3. 「**新規**」をクリックしてフォーマット・タイプを選択し、レイヤーを選択して、そのフォーマットを定義するのに適したダイアログを表示します。
4. マップ・フォーマット領域でレイヤーが指定されていない場合は、「**新規マップ・フォーマット**」をクリックします。特定のジオ・レイヤーのフォーマットを表示す



るためのジオ・エンコードされた列が分析に含まれていない場合は、それらの列をインポートするよう求めるプロンプトが表示されます。

5. リストのレイヤー名にカーソルを合わせると、レイヤーを変更するためのオプションが表示されます。
6. リストのレイヤー名の下にあるフォーマット名にカーソルを合わせると、フォーマットの並替え、編集および削除のオプションが表示されます。
7. フォーマット名の横にあるボックスをクリックすると、マップ上でのフォーマットの表示/非表示が切り替わります。
8. 「完了」をクリックします。

## マップ・ビューのレイヤーに対する書式の適用

色、棒グラフ、円グラフ、可変サイズのバブル、イメージ、線またはピン化やその他の書式設定オプションを適用するのに役立つ色付き形状を使用して、マップ・ビューを書式設定できます。

- 「マップ・フォーマット」リストにレイヤーが指定されていない場合、**新規マップ・フォーマットの作成**リンクをクリックします。
- 「マップ・フォーマット」タイトル・バーの中またはレイヤー名の横にある**「新しいマップ・フォーマットの追加」**ボタンをクリックします。

## マップ・ビューの操作

このトピックでは、マップ・ビューの様々な操作手法について説明します。

### トピック:

- [マップ・ビューのパン](#)
- [マップ・ビューのズーム](#)
- [マップ・ビューでのフォーマットのしきい値の変更](#)
- [マップ・ビューでのフォーマットの表示および非表示](#)

## マップ・ビューのパン

マップのツールバーを使用してパンし、メイン・マップまたは概要マップ上でパンできます。概要マップでは十字線を使用して全体を移動することもできます。

パンはマップ・ビューのデフォルト・モードで、手型カーソルはパン・モードであることを示します。「パン」ツールを選択すると、次の様々な方法で移動できます。

- マップの背景をクリックしてドラッグします。
- マップ上の地域にカーソルを合わせて情報ウィンドウを表示し、カーソル直下の地域のデータを表示する。
- クリックして情報ウィンドウを表示します。情報ウィンドウを使用すると、詳細ビューをドリルまたは更新できます。
- マップをダブルクリックしてズームします。

「パン」ツールを使用してマップ・ビューでパンするには、ツールバーの**「パン」**ボタンをクリックし、マップの背景をクリックして適切な場所にドラッグ・アンド・ドロップします。

## マップ・ビューのズーム

マップをズームすると、マップに表示される地理データの詳細が調整されます。

たとえば、国レベルからズーム・インすると州や市区町村の詳細が表示されます。道レベルのビューからズーム・アウトすると、道レベルの情報は非表示になり、市区町村が表示されます。マスター詳細リンクでは、マスター・ビューで選択された詳細機能がマップ・ビューによりフォーカスされます。

次の様々な方法でズームできます。

- マップの背景をクリックする。クリックでズームするには、まずツールバーからズーム・モードを選択する必要があります。デフォルト・モードはパンで、これは手型カーソルで示されます。ズーム・モードになるとマウス・ポインタは拡大鏡に変わり、マップ上で直接クリックしてズームできます。

ズームインしているときに、1 回クリックするか、クリックしてドラッグすることで、マーカー・ズームを使用できます。ズームするエリアを描くボックスを描画できます。

- マップ上の地域にカーソルを合せて情報ウィンドウを表示し、カーソル直下の地域のデータを表示する。
- クリックしてズーム・インおよびズーム・アウトする。クリックすると、その場所を中心点として増分 1 のズーム・インが実行されます。

ズームとドリルは同じではありません。ズームしてもドリルは実行されません(つまり、新規問合せは発行されません)。ただし、マップ・レイヤー上でドリルし、新規レイヤーがマップに追加された場合は、結果として新規ズーム・レベルが表示される可能性があります。新規レイヤーが追加されない場合、ズーム・レベルは変わりません。

ズームはツールバーのボタンまたはズーム・スライダを使用して実行できます。ズーム・スライダを使用した場合、ズーム・インまたはズーム・アウトは現在表示されている状態で実行されます。ズーム・スライダにカーソルを移動すると、マップ・レイヤーの名前が中程度のズーム・レベルの横に表示されます。名前をクリックすると、そのレベルまでマップがズームされます。ズームしても新規問合せは発行されません。

ツールバー・ボタンまたはスライダを使用して、マップ・ビューでズーム・インできます。

- ツールを使用してズームするには、ツールバーの「**ズーム・イン**」または「**ズーム・アウト**」ボタンをクリックしてから、マップの背景をクリックしてその地点をズーム・インします。

ズーム・インしている場合、クリックしてドラッグすると、四角形を描画してズームするエリアを指定できます。

- スライダのボタンを使用してズームするには、スライダの両端にあるプラス記号またはマイナス記号をクリックします。

スライダにカーソルを合せて、ズーム先レベルの名前をクリックすることもできます。

## マップ・ビューでのフォーマットのしきい値の変更

マップ・ビューでのフォーマットの表示に使用するしきい値を変更できます。

「マップ・フォーマット」ペインに含まれるフォーマット名の下にスライダが表示されている場合、ユーザーはこの機能を使用できます。しきい値の変更は、**what-if** 分析と呼ばれることもあります。フォーマットの範囲はスライダの背景の色の塗りつぶしとして表示され、各しきい値に対して、編集可能なつまみが表示されます。

- つまみにカーソルを合せると、つまみの下の値が表示されます。
- つまみをドラッグしてしきい値を調整します。
- スライダのセクションをクリックすると、そのセクションにつまみが移動します。
- スライダを右クリックすると、各種オプションを含むメニューが表示されます。
  - **色の編集** - しきい値の(事前定義済またはカスタムの)色を選択できるダイアログが表示されます。
  - **しきい値の追加** - 別のしきい値およびしきい値を示すつまみがスライダに追加されます。これにより、新規フォーマットのピンが新規の色で作成されます。たとえば、3つのピン(赤、黄、緑の色)が存在しており、1つのしきい値を作成した場合、ピンが4つになります。最大 12 個のピンが許可されています。
  - **しきい値の除去** - 右クリックした場所より上のしきい値が除去されます。スライダのつまみとフォーマット・ピンも除去されます。
- スライダのつまみの数値をクリックすると、しきい値に対応する数値を編集できるテキスト・ボックスが表示されます。[Enter]キーを押すかボックスの外をクリックすると、しきい値およびつまみの位置が更新されます。

## マップ・ビューでのフォーマットの表示および非表示

コンテンツ設計者は、情報の複数のレイヤー(テーマとも呼ぶ)を単一のマップ・ビュー上で重ねることができます。フォーマットを作成すると、これらのレイヤーを拡張できます。マップのフォーマットは、表示または非表示にすることができます。

- 「マップ・フォーマット」ペインの「表示」メニューから「**すべてのフォーマットの表示**」または「**表示可能なフォーマットの表示**」を選択します。
- 「マップ・フォーマット」ペインでフォーマット名の横のボックスを選択解除します。

## マップ・ビューの初期ビュー・ポートの設定

ブラウザでマップ・ビューが最初にロードまたはリフレッシュされるときに初期ビュー・ポート(初期のマップ中心とズーム・レベル)を設定できます。

1. マップ・ビューを開きます。
  - a. 編集する分析を開きます。
  - b. 分析エディタの「結果」タブをクリックします。
  - c. 「**プロパティの表示**」をクリックします。
2. 「相互作用」タブの「初期マップ・ビュー」セクションで、適切な値を選択します。

| フィールド | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 動的    | <p>マップ上の実際のデータに合わせてマップがズームまたはパンされるよう指定します。</p> <p>このオプションでは、ユーザーがマップ・ビューに追加したコンテンツに重点が置かれます。すべての BI コンテンツを表示しようとするので、マップ・ビューの初期表示や、マップ・ビューのリフレッシュ時に適しています。座標とズーム・レベルはすべての WYSIWYG 操作を制御するため、このオプションを設定してもマップの印刷には影響しません。</p> <p>マップは最大ズーム・レベルまでズームされ、その場合もマップ上でコンテンツを合わせることは引き続き可能です。このズーム・レベルは、「背景マップの編集」ダイアログでこのレイヤーに対して指定されている、表示可能な最小および最大ズーム・レベルを超える場合があります。表示可能な最小および最大のズーム・レベルを超えた場合、フォーマットは非表示になります。</p> |
| 最終保存  | <p>前回保存されたマップ中心およびズーム・レベルでマップが表示されるよう指定します。</p> <p>このオプションでは、表示された直前のマップ・ウィンドウに重点が置かれます。表示は X (経度) および Y (緯度) の中心座標とズーム・レベルに基づきます。このオプションは、初期ビュー・ポートに対して選択できますが、マップの印刷やその他の WYSIWYG 操作にも適しており、常に使用されます。</p>                                                                                                                                                                                                      |

3. 「OK」をクリックします。

## ナレーティブ・ビューの編集

ナレーティブ・ビューでは、1 段落以上のテキストでデータの結果が表示されます。ナレーティブ・ビューを使用して、コンテキスト、説明テキスト、詳細説明などの情報を列値に付加します。

ナレーティブ・ビュー・エディタで様々なタスクを実行できます。

- 結果に含まれる各列に対して、プレースホルダを含む文を入力します。
  - 行の区切り方を指定します。
  - ナレーティブ・ビューで使用するフォントに外観の書式設定を適用するか、保存済のビューのフォント書式をインポートします。
  - 変数の参照を追加します。
1. 編集する分析を開きます。
  2. 「結果」タブをクリックします。
  3. 「ビューの編集」をクリックして、ナレーティブ・ビュー・エディタを表示します。
  4. 管理者権限があり、ナレーティブ・ビューのコンテンツを JavaScript などの有効な HTML マークアップを使用して書式設定する必要がある場合、「HTML マークアップを含みます」を選択します。
  5. 「接頭辞」フィールドに、ナレーティブのヘッダーを入力します。  
このテキストは、ナレーティブの最初に表示されます。
  6. 「ナレーティブ」ボックスに、結果に含まれる各行に対して表示する、ナレーティブ・テキストを入力します。

テキスト値と列値の両方を含めることができます。このフィールドの最後に改行コードを含めると、テキストと値の各行が個別の行に表示されます。

列値を含めるには、アットマーク(@)を使用し、オプションで、その後に数字を付加します。最初の列を示すには、アットマークを単独で使用します。複数のアットマークを含めると、最初のアットマークが最初の列、2 番目のアットマークが 2 番目の列(以下同様)に対応します。

指定された列の結果をナレーティブに含めるには、@n を使用します。たとえば、@1 を使用すると分析の最初の列の結果が挿入され、@3 を使用すると 3 番目の列の結果が挿入されます。

たとえば、2 番目の列に地域名が返される分析で、ビューに東部地域と西部地域の値を含めるには@2 と指定します。

7. 「**行セパレータ**」フィールドで、値を含む「ナレーティブ」フィールドの各行に対して行セパレータを入力します。たとえば、各行の間に一連のプラス記号(+)を入力できます。
8. 「**表示する行**」フィールドで、戻す列の行数を入力します。  
たとえば、5 を入力すると列の最初の 5 行の値が表示されます。階層列の場合、選択ステップを使用して、階層レベルを階層列とともに表示できます。たとえば、階層に基づいてメンバーを選択するステップを作成し、指定されたレベルのメンバーを追加します。1 つの階層レベルは 1 行とみなされます。
9. 「**接尾辞**」フィールドに、ナレーティブのフッターを入力します。必ず、ナレーティブを改行で終了させるか、フッターを改行で開始してください。
10. 「**完了**」をクリックします。

## データ以外のビューの編集

表、グラフ、ゲージなどのデータを表示するビューを編集することが多くあります。データを含まないビューを編集することもできます。

分析およびダッシュボードには、次のタイプのビューを含めることができます。

- 列セレクト
- フィルタ
- 選択ステップ
- 静的テキスト
- タイトル
- ビュー・セレクト

## 列セレクト・ビューについて

列セレクト・ビューは、事前に選択された列を含む一連のドロップダウン・リストです。ユーザーは列を動的に選択し、分析のビューに表示されているデータを変更できます。

分析の各列には 1 つのドロップダウン・リストをアタッチでき、各ドロップダウン・リストに複数の列をアタッチできます。列セレクト・ビューで行った更新は、分析のすべてのデータ・ビューに作用します。

「サブジェクト領域」ペインからドロップダウン・リストに列を追加できます。この方法で列を追加した場合、列は分析の「基準」タブには追加されません。かわりに、「基準」タブを表

示すると、列は列グループと呼ばれ、リストのデフォルト列も指定されています。デフォルト列は、ドロップダウン・リストの作成のベースになった列です。

## ビュー・セレクタ・ビューについて

ビュー・セレクタ・ビューを使用すると、ユーザーは、保存されている分析のビューの中から、特定の結果のビューを選択できます。ダッシュボードに配置した場合、ビュー・セレクタはリストとして表示され、セレクタの下に表示されるビューをここからユーザーが選択できます。

通常、複合レイアウト・ビューに表示されないビューは、ビュー・セレクタに含めません。たとえば、分析に対し、表、グラフ、ゲージおよびビュー・セレクタの各ビューを作成し、複合レイアウト・ビューには、表ビューとビュー・セレクタ・ビューのみ含めます。分析をダッシュボード・ページに表示する際、ユーザーは、ビュー・セレクタ・ビューからグラフ・ビューまたはゲージ・ビューを選択できます。

## フィルタ・ビューについて

フィルタ・ビューには、分析に有効なフィルタが表示されます。

(選択ステップと同様に)フィルタを使用すると、分析を限定し、特定の質問への回答となる結果を得ることができます。フィルタは、問合せの集計前に適用されます。[列に対するフィルタの作成](#)を参照してください。

## 選択ステップ・ビューについて

選択ステップ・ビューには、分析に有効な選択ステップが表示されます。フィルタと同様に、選択ステップを使用すると、特定の質問への回答となる結果を取得できます。選択ステップは、問合せの集計後に適用されます。

このビュー・エディタでは選択ステップを変更しません。選択ステップを変更するには、選択ステップ・エディタを終了し、「選択ステップ」ペインを使用します。[データの選択の絞込み](#)を参照してください。

## 静的テキスト・ビューについて

静的テキスト・ビューは、分析結果とともに表示される静的テキストを追加します。

次の例に示すように、静的テキスト・ビューに変数を含めることができます。[高度な手法: 変数の格納値の参照](#)を参照してください。

```
[u] Static Text View [/u][br/]
Region: @{{variables.myFavoriteRegion}} - Year:
@{{variables.myFavoriteYear}}[br/]
System Time: @{{system.currentTime}}[dddd,MMMM dd,yyyy][br/]
Product Version: @{{system.productVersion}}[br/]
[br/]
```

## タイトル・ビューについて

タイトル・ビューには、タイトル、サブタイトル、ロゴおよび結果のタイムスタンプが表示されます。

タイトルを指定しなかった場合は、保存済分析の名前がタイトルとして使用されます。未保存の分析の場合、「**タイトル**」テキスト・ボックスは空白になります。タイトル・エディタのテキスト・フィールドでは変数を参照できます。

## 分析でのデータのグラフ化

このトピックでは、分析でのデータのグラフ化に関する追加情報について説明します。

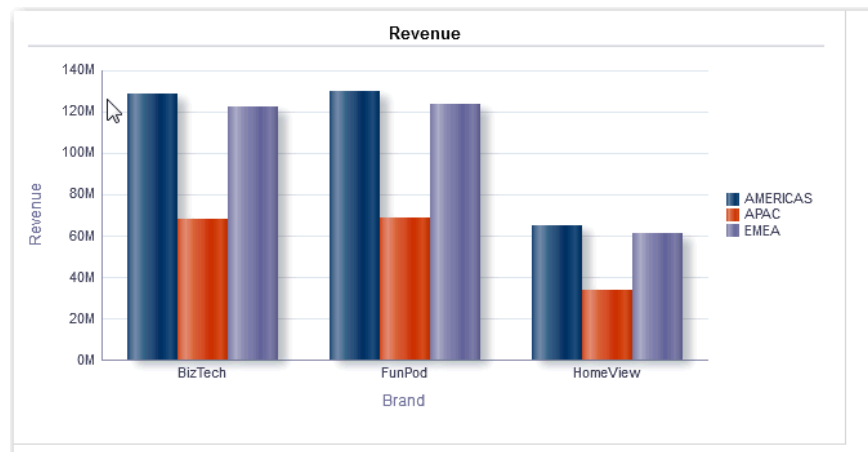
### トピック:

- [グラフ・ビューの編集](#)
- [グラフのズームおよびスクロール](#)
- [グラフの外観の書式設定](#)
- [グラフおよびゲージに表示されるデータの制限](#)

## グラフ・ビューの編集

様々なグラフの種類を使用してデータを分析または表示することができます。

たとえば、次に示すように、ブランド売上分析で、3つの異なる地域の製品売上を比較するように棒グラフを編集できます。



1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. 編集するグラフ・ビューの「**プロパティの表示**」をクリックします。
4. 「グラフのプロパティ」ダイアログで、必要に応じてプロパティを編集します。
5. プロパティ・ダイアログの「スケール」タブで、「**クリックしてスケール・マーカーを編集**」を選択して「スケール・マーカー」ダイアログを表示します。

スケール・マーカーは、強調線、または影付きの背景領域で、グラフ内の主要なポイント、しきい値、範囲などを示します。線のスケール・マーカーを使用し、スケール上の指定された位置にグラフを横切って線を描画します。範囲を使用して、グラフの背後に表示される、影付きの背景領域を追加します。

線または範囲のスケール・マーカーは、グラフのタイプに応じて1つ以上の軸に適用できます。



6. 「OK」をクリックします。
7. 「ビューの編集」をクリックして、グラフ・エディタを表示します。
8. 様々なツールバー・ボタンを使用して、グラフの表示に影響を与えます。
9. オプション: ファンネル・グラフのしきい値を定義します。
10. オプション: ビューのデータをドリルします。
11. 「完了」をクリックします。

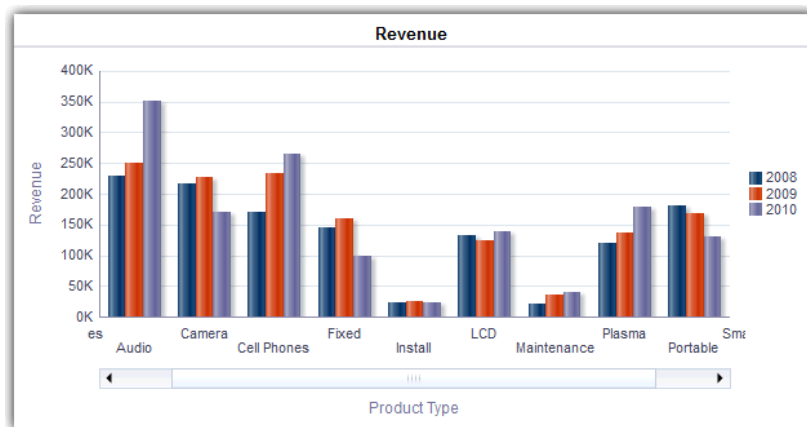
## グラフのズームおよびスクロール

グラフのズームおよびスクロールが有効な場合は、グラフにズーム・アイコンが含まれています。ズーム・アイコンを使用すると、グラフの描画領域で軸を使用してズーム・インおよびズーム・アウトを実行できます。

軸でズーム・インした後は、その軸をスクロールできます。ズームおよびスクロールは、「グラフのプロパティ」ダイアログの「一般」タブで有効にします。

たとえば、ブランド売上分析の結果でグラフを表示しているときに、「Product Type」軸でズームインできます。このようにして、軸をスクロールし、製品タイプ別に詳細なデータを表示できます。

グラフでズームおよびスクロールするには、グラフにマウス・カーソルを合せて「ズーム」ボタンを表示し、「ズーム」をクリックします。1つの軸のみが有効な場合は、「ズーム・イン」または「ズーム・アウト」を選択します。



グラフの両方の軸のズームおよびスクロールが有効な場合は、次のようにします。

- 「横軸」を選択し、次に「ズーム・イン」または「ズーム・アウト」を選択します。ズームとスクロールのスライダが X 軸に表示されます。X 軸のズームを解除するには、「実際のサイズ」を選択します。
- 「縦軸」を選択し、次に「ズーム・イン」または「ズーム・アウト」を選択します。ズームとスクロールのスライダが Y 軸に表示されます。Y 軸のズームを解除するには、「実際のサイズ」を選択します。



- X 軸と Y 軸の両方のズームを解除するには、「**実際のサイズ**」を選択します。オプションで、その他のズーム機能を使用します。
- 「**ズーム**」を使用して、徐々にズーム・インおよびズーム・アウトします。
- 軸上のスクロールのつまみをドラッグしてグラフを動的にスクロールし、グラフの表示されていない部分を表示します。
- 軸上のスクロール・ボタンをクリックして、左右(X 軸)または上下(Y 軸)にスクロールします。
- サイズ変更ハンドルを使用して、軸上でズーム・インおよびズーム・アウトします。

## グラフの外観の書式設定

グラフの外観を書式設定できます。

外観の書式設定は 2 つの設定に基づきます。

- グラフ要素の位置(折れ線-棒グラフの線や棒、または円グラフのスライスなど)。
- 列に適用されている条件。

## 位置に基づいたグラフの書式設定

位置の書式設定では、グラフ要素の位置(つまり、棒などのグラフ要素が表示されるグループ内での番号順)に基づいてグラフの外観をカスタマイズできます。

グループは、「グループ化」ドロップ・ターゲット領域に表示される属性列によって決まります。

色、線の幅、線記号に関するグラフの外観を、位置に基づいて書式設定できます。位置の書式設定は、ウォーターフォール・グラフでは使用できません。

## 列に基づいたグラフの書式設定

条件付き書式設定では、列に適用されている条件に基づいてグラフの外観をカスタマイズできます。書式は、条件を満たす列値に適用されます。

列に指定された条件を満たす特定の列値または列値の範囲に基づいて、グラフ・データが表示される色を指定できます。例:

- 特定の列値に基づいた、グラフの色の条件付き変更。  
レモネードとコーラという 2 つの飲料の売上を比較する棒グラフを作成します。棒グラフの作成時、レモネードの売上を表す棒は黄色、コーラの売上を表す棒は青色という 2 つの条件を指定します。
  - 列値の範囲に基づいた、グラフの色の条件付き変更。  
営業部長が、2 つの営業バンドについて営業担当者全員の売上を比較する棒グラフを作成したいと考えています。棒グラフの作成時、営業部長は、売上が\$250,000 より少ないすべての担当者の棒を赤にし、売上が\$250,000 より多いすべての担当者の棒を緑にするという 2 つの条件を指定します。
1. グラフ・エディタのツールバーで「**グラフ・プロパティの編集**」をクリックします。
  2. 「グラフのプロパティ」ダイアログの「スタイル」タブをクリックします。

3. 「スタイルと条件付き書式設定」をクリックします。
4. 「スタイルの書式設定」タブをクリックして、グラフ要素の位置に基づいてグラフの外観を書式設定します。カスタム書式設定位置を追加するには:
  - a. カスタム書式設定位置の追加先のグラフ要素(棒など)のタブを選択します。
  - b. 「新しい位置の追加」をクリックします。新規位置のエントリが「カスタム書式設定位置」表に表示されます。
  - c. 書式設定を指定します。たとえば、位置に適用する色を選択するには、「色」ボックスの隣にある下向きの矢印をクリックし、「色の選択」ダイアログにアクセスします。(書式設定オプションは、要素によって異なることに注意してください)
 

線の幅として 0 を指定した場合、その線およびグラフ内の他の線について、凡例マーカークラウドがデフォルトの線マーカークラウドから記号マーカークラウドに変わります。たとえば、グラフのすべての線について、記号マーカークラウドが凡例マーカークラウドとして表示されます。
5. 「条件付き書式設定」タブをクリックして、列に適用されている条件に基づいてグラフの外観を書式設定します。列に条件を追加するには:
  - a. 「条件付き書式の追加」をクリックし、条件を適用する列を選択します。
  - b. この条件に対する演算子と列値、または列値の範囲を入力します。
  - c. 「OK」をクリックします。
  - d. 条件を満たす場合に列値に適用される色を選択するには、「色」ボックスの隣にある下向きの矢印をクリックし、「色の選択」ダイアログを表示します。
6. 「OK」をクリックします。

## グラフの条件付き書式の適用に関するルール

グラフで条件を作成または使用する場合、次のルールに従います。

- グラフで使用されている列からのみ、条件を作成できます。
- 書式条件が互いに競合する場合、競合する条件は次の順序で優先されます。
  1. 属性に対する条件付き書式設定。
  2. メジャーに対する条件付き書式設定
  3. グラフ要素の位置に基づいたスタイル書式設定。
- 条件付き書式が適用されているグラフでユーザーがドリルする場合、次のルールが適用されます。
  - メジャーに基づいた条件付き書式は、次のレベルに繰り越されません。(条件付き書式を地理的階層の地域から市などの異なるレベルへ繰り越しても意味がありません。)
  - 属性に基づいた条件付き書式は、ドリルされていない場合、次のグラフに繰り越されます。
 

たとえば、"Lemonade = Blue"という条件付き書式があり、年でのみドリルした場合、"Lemonade = Blue"はそのままになります。
- 条件付き書式設定は、ウォーターフォール・グラフの小計および合計ではサポートされていません。

## グラフの列に対する条件付き書式設定の例外

ここでは、グラフの列に基づいた条件付き書式設定に適用される例外をリストします。

| グラフ・タイプ                        | 例外                            |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 折れ線<br>折れ線-棒<br>レーダー<br>時系列折れ線 | 線の記号の書式設定のみ許可されています。          |
| パレート                           | 書式設定は棒にのみ適用され、パレート線には適用されません。 |

## グラフおよびゲージに表示されるデータの制限

セクション・スライダを使用して、グラフまたはゲージに表示されるデータを制限できます。セクション・スライダには、1 つ以上の属性列または階層列のメンバーが長方形の棒上に値として表示されます。

また、スライダには、増加ボタンと減少ボタンなど、その列に対する値を選択するメカニズムも用意されています。再生ボタンでは、スライダ値を連続的に移動します。



### トピック:

- [グラフとゲージのセクション・スライダの定義](#)
- [グラフおよびゲージのセクション・スライダの使用](#)

## グラフとゲージのセクション・スライダの定義

グラフまたはゲージに表示されるデータは、セクション・スライダを定義して限定できます。

たとえば、グラフに表示されるデータを 2013 年の特定の四半期に限定できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. グラフまたはゲージを作成します。
4. グラフ・ビューまたはゲージ・ビューで、「**ビューの編集**」をクリックします。
5. 「レイアウト」ペインで、複数の列を「セクション」ドロップ・ターゲットにドラッグします。
6. 「**スライダとして表示**」を選択します。
7. 「**セクションのプロパティ**」をクリックします。
8. セクション・スライダに表示する値の最大数を指定して、「**OK**」をクリックします。
9. エディタを閉じるには、「**完了**」をクリックします。

10. 変更内容を保存するには、「**分析の保存**」をクリックします。

## グラフおよびゲージのセクション・スライダの使用

グラフまたはゲージでセクション・スライダを使用できます。

- スライダのつまみを希望する値に移動します。
- スライダのつまみを左に移動するには、減少ボタンをクリックします。
- スライダのつまみを右に移動するには、増加ボタンをクリックします。
- スライダのすべての値をつまみが続けて移動するには、再生ボタンをクリックします。

再生ボタンは一時停止ボタンに変化するため、特定の値で停止できます。

グラフまたはゲージに表示されるデータは、スライダのつまみで示した現在の値によって制限されます。

## ビューの保存

使用しているビューはいつでも保存できます。

ビューを保存するには、新規または既存の分析を保存する必要があります。たとえば、ブランド売上分析を作成し、その表ビューを編集した後、最初にそのビューを保存できます。

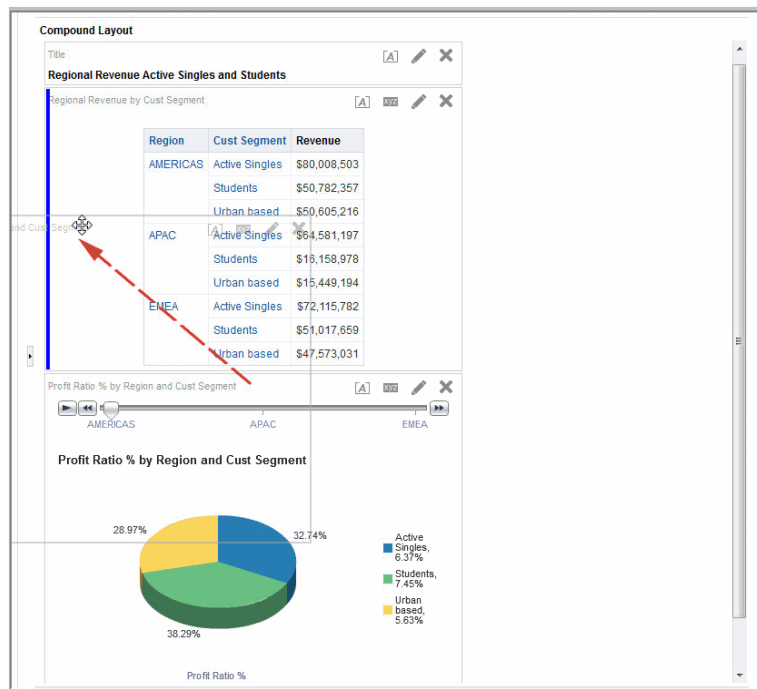
分析エディタの「結果」タブのツールバーにある「**分析の保存**」または「**名前を付けて保存**」をクリックします。

## ビューの再配置

複合レイアウト内のビューは、他のビューの境界に沿って、または複合レイアウトの外側の境界(複合レイアウトの縦横いっばいにビューが表示されます)に再配置できます。

たとえば、ブランド売上分析のビューを再配置できます。実績売上の折れ線グラフの前に、予測売上の棒グラフを表示するように再配置できます。

1. 再配置するビューの上側エッジの少し内側にカーソルを置きます。
2. ビューで左マウス・ボタンをクリックしたままにします。  
ビューが移動可能なオブジェクトとして透明に表示されます。
3. 目的の位置までビューをドラッグ・アンド・ドロップします。  
ビューは、青色の棒でマークされた位置(ドロップ・ターゲット)に表示されます。



## ビューの結果のリフレッシュ

表やピボット表などの結果データを表示するビューの使用時に、現在の分析の結果をリフレッシュできます。

たとえば、ブランド売上分析にフィルタを追加できます。その後に、変更の結果を確認します。

「結果」タブのツールバーで、「現在の分析の結果をリフレッシュ」をクリックします。

## ビューの印刷

HTML または Adobe PDF(Portable Document Format)を使用してビューを印刷できます。

たとえば、「印刷可能 HTML」オプションを選択すると、ブランド売上分析を新しいブラウザ・ウィンドウに表示して印刷できます。

- 1つ以上のビューを印刷します。
  - 1つのビューを印刷するには、ビューのエディタのツールバーで「この分析を印刷します」ボタンをクリックします。
  - 複合レイアウトに表示されているビューのグループを印刷するには、「結果」タブのツールバーで「この分析を印刷します」をクリックします。
- 「印刷可能 HTML」または「印刷可能 PDF」を選択します。
  - HTML の場合は、印刷するビューが新しいブラウザ・ウィンドウに表示されます。新しいブラウザ・ウィンドウの「ファイル」メニューから、「印刷」を選択します。
  - PDF の場合は、印刷するビューが Adobe Acrobat ウィンドウに表示されます。ウィンドウでオプションを選択して、ファイルを保存または印刷します。

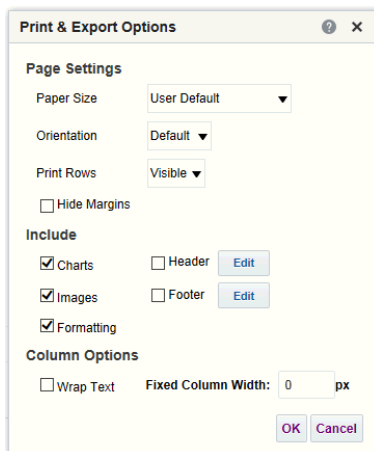
## ビューの印刷オプションの変更

ダッシュボード・ページおよびビューを印刷するための設定を指定できます。

たとえば、各ページに多くのビューが並べて表示されている売上ダッシュボードを印刷するときは、「方向」を「横」に設定できます。

指定した印刷設定は、PDF 出力のみに適用されます。ローカルまたはネットワーク上のプリンタで PDF ファイルを印刷する場合でも、ブラウザで指定した印刷設定は有効です。たとえば、ブラウザでの用紙サイズの設定は有効です。

1. 「結果」タブのツールバーで、「印刷とエクスポートのオプション」をクリックします。  
「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログが表示されます。



2. ダイアログで適切なオプションを指定します。たとえば、用紙サイズと方向、ヘッダーとフッターを含めるかどうかを指定します。
3. 「OK」をクリックします。

## ダッシュボードに表示されるビューのプレビュー

ビューがダッシュボード・ページでどのように表示されるかをプレビューできます。

たとえば、「ダッシュボードでの結果の表示方法を示します」を選択できます。これによって、ビューのグループからの結果がダッシュボードにどのように表示されるかをプレビューします。

1. 1つのビューをプレビューする場合:

ビューのエディタのツールバーで「ダッシュボードでの結果の表示方法を示します」をクリックします。

2. 複合レイアウトに表示されているビューのグループをプレビューする場合:

「結果」タブのツールバーで「ダッシュボードでの結果の表示方法を示します」をクリックします。

ダッシュボードのプレビューは、新しいウィンドウに表示されます。プレビューにはプロンプトが表示され、適用されます。

## ビューの除去

複合レイアウトまたは分析からビューを除去できます。

たとえば、ブランド売上分析の結果を表示するのに、トレリス・ビューは最適な方法ではない場合です。そのトレリス・ビューを除去できます。

- 複合レイアウトからビューを除去するには、ビューのツールバーで「**複合レイアウトからビューを除去**」をクリックします。複合レイアウトからビューを除去しても、分析からは除去されません。
- 分析からビューを除去するには、ビューを選択して、「結果」タブの「ビュー」ペインにある「**分析からビューを除去**」をクリックします。分析からビューを除去すると、分析に加えて、ビューが追加されていた複合レイアウトからも除去されます。

## ビューでの値のソート

表ビュー、ピボット表ビュー、グラフ・ビュー、ヒート・マトリックス・ビューおよびトレリス・ビューで値をソートできます。ソートは、(横向きの三角形が表示されている)メンバー、メジャーおよび行を基準に行えます。ページやセクション・エッジに基づくソートはできません。

ピボット表およびトレリス・ビューで、列内の値はエッジ上で左から右へソートされます。いずれの列でも値を昇順および降順にソートできません。

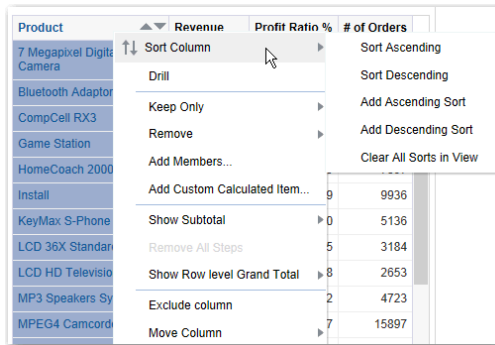
ビューでは、様々なオプションを使用してソートできます。たとえば、列をソートする場合は、次のオプションから選択できます。

- **昇順ソート** — 第 1 レベル・ソートとして、列の値を昇順でソートできます。たとえば、文字列のアルファベット順(A から Z へ)のソート、数値の低いものから高いものへのソート、日付の古いものから新しいものへのソートなどです。
- **降順ソート** — 第 1 レベル・ソートとして、列の値を降順でソートできます。
- **昇順ソートの追加** - この列の昇順ソートが分析の別のソートとして追加されます。
- **降順ソートの追加** - この列の降順ソートが分析の別のソートとして追加されます。
- **ソートのクリア** - 指定された列のソート指定を除去します。このオプションの効果は、「選択された列」ペインと他の場所で異なります。「選択された列」ペインとビュー自体の両方でソート指定を行い、「選択された列」ペインに戻って「**ソートのクリア**」をクリックすると、「選択された列」ペインで指定したソートのみが除去されます。ビューで指定したソートは維持されます。
- **すべての列におけるすべてのソートのクリア** — 適用したすべてのソート指定を除去します。このオプションは、「ソートのクリア」で説明されているように、「選択された列」ペインとその他の場所では機能が異なります。

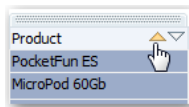
たとえば、ブランド売上分析の表では、「Revenue」列で昇順ソートを選択できます。このようにすると、売上の値は最低から最高にソートされます。

次の方法により、値をソートできます。

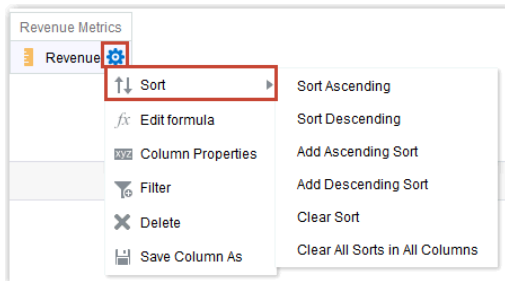
- ビューの見出しで右クリックし、「**列のソート**」をクリックして適切なオプションを選択します。



- 列見出しにある上向きおよび下向きの三角形をクリックします。



- ビュー内のセルを右クリックし、「ソート」をクリックして「ソート」ダイアログを表示します。「ソート」ダイアログで使用できる相互作用は、データ・ビューのタイプ(グラフまたは表など)およびビューのどこを右クリックしたかによって異なります。
- 「基準」タブの「選択された列」ペインから、列の横の「オプション」をクリックし、「ソート」をクリックして適切なオプションを選択します。



## ビュー内のソートのクリア

ビューまたは分析で列に適用したソートをクリアできます。

たとえば、ブランド売上分析の「Time」列に適用したすべてのソートをクリアできます。

ピボット表、表、ヒート・マトリックスまたはトレリス・ビューに適用したソートをクリアするには、ビューの見出しを右クリックして「**ビュー内のすべてのソートのクリア**」をクリックします。

1. 「基準」タブの「選択された列」ペインを表示します。
2. 列の横にある「オプション」をクリックします。
3. 「ソート」を選択し、次に「ソートのクリア」を選択します。



「基準」タブからソートをクリアする場合は、「列のオプション」メニューから定義したソートのみをクリアします。特定のビュー内で実行されるソートはクリアしないでください。

現在プライマリ・ソートが適用されている列からプライマリ・ソートを除去して、ボタンをクリックした列にソートを適用するには、未ソートの列でソート・ボタンをクリックします。

## 結果のドリル

結果はドリルすることができます。

### トピック:

- [ドリルについて](#)
- [表とその他のビューのドリル](#)
- [グラフのドリル](#)
- [マップ・ビューのドリル](#)

## ドリルについて

ビューに表示される結果の多くは、データの階層構造を表します。メタデータはこれらの階層を指定するもので、階層内の異なる詳細レベルへのアクセスを可能にします。ドリルは、ビュー内のデータ間を素早く簡単に移動する方法です。

- ドリルダウンして詳細なデータを表示すると、より多くのメンバーが表示されます。
- ドリルアップすると、より少ないデータが表示されます。

たとえば、ブランド売上分析の結果で、製品別売上のグラフの詳細データにドリルできます。これを実行するには、携帯電話データ・ポイントをクリックします。過去 3 年間の営業オフィスごとの携帯電話売上など、詳細データがグラフに表示されます。

## 表とその他のビューのドリル

表、ピボット表、ヒート・マトリックスまたはトレリスでドリルダウンすると、現在のデータに詳細レベルのデータが追加されます。

たとえば、1つの大陸からドリルした場合、その大陸および大陸にある国のデータが表示されます。

1. ビュー内の値にカーソルを合わせます。  
値に下線が付きます。

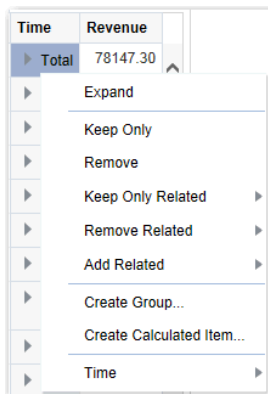
| Product Type | Product                    | Time    | Revenue     |
|--------------|----------------------------|---------|-------------|
| Accessories  | Bluetooth Adaptor          | ▶ Total | 4685230.15  |
|              | MP3 Speakers System        | ▶ Total | 1261931.26  |
| Audio        | MicroPod 60Gb              | ▶ Total | 15100469.26 |
|              | SoundX Nano 4Gb            | ▶ Total | 4138549.22  |
| Camera       | 7 Megapixel Digital Camera | ▶ Total | 12825733.88 |
|              | MPEG4 Camcorder            | ▶ Total | 20785424.84 |

2. ドリルする見出しまたはメンバーをクリックします。  
表またはトレリスに、さらに詳細が追加されます。

| Product Type | Item Description                        | Product           |
|--------------|-----------------------------------------|-------------------|
| Accessories  | 8 X Zoom Optical LensBlack              | Bluetooth Adaptor |
|              | 8 X Zoom Optical LensBlue               | Bluetooth Adaptor |
|              | 8 X Zoom Optical LensPink               | Bluetooth Adaptor |
|              | 8 X Zoom Optical LensSilver             | Bluetooth Adaptor |
|              | CompCell All in One Laser Jet F400Black | Bluetooth Adaptor |

表、ピボット表およびトレリスの階層列をドリルするには、メンバーの横にある「展開」または「縮小」アイコンをクリックします。

右クリック・メニューを使用して、列を展開および縮小することもできます。

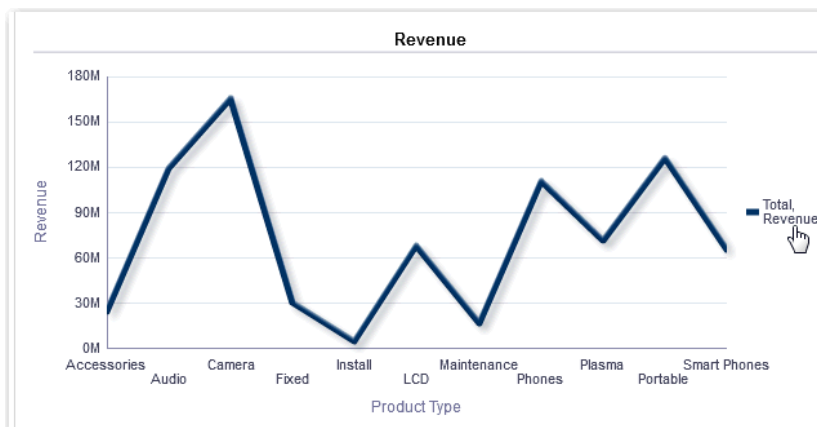


## グラフのドリル

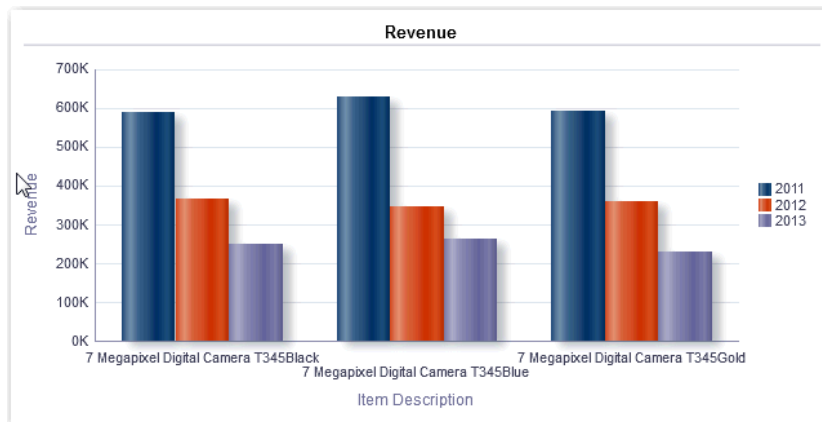
グラフをドリルダウンすると、現在のデータが詳細レベルのデータに置き換えられます。

たとえば、1つの大陸からドリルダウンした場合、その大陸に含まれる国のデータは表示されますが、大陸自体のデータは表示されません。

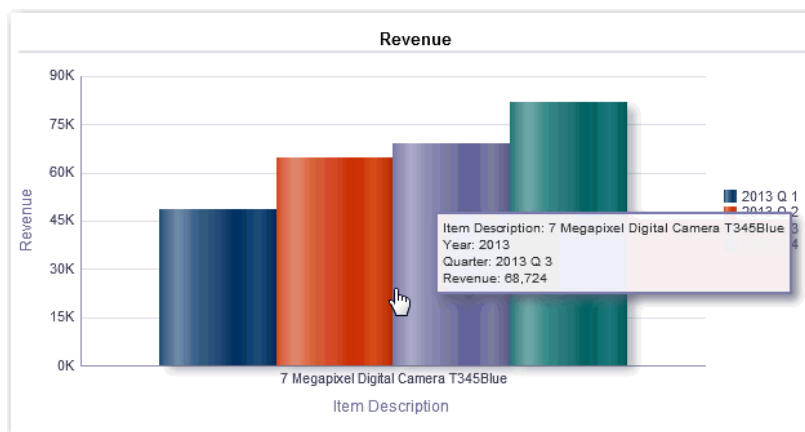
- 軸または凡例のラベルをクリックします。



- データ・ポイントをクリックします。



- 詳細がグラフに表示されます。



## マップ・ビューのドリル

マップをドリルするとデータ全体をナビゲートできます。ドリルは、手型カーソルで示されるパン・ツールが選択されている場合でも実行できます。マップ・データにカーソルを移動すると情報ウィンドウが表示され、その場所に関する様々な情報が表示されます。

マップ上の地域またはポイントをクリックすると:

- 列が別のビューのマスターとして構成されている場合は、そのビューが最新の情報を使用して更新されます。
- 列またはマップの構成により、列のドリルまたは単一アクションが実行される場合は、ドリル操作またはアクションがただちに開始されます。
- 複数のアクションを実行するように列が構成されている場合や複数のドリルが可能な場合は、表示される情報ウィンドウに複数の列に対するアクションやリンクのリストが表示されます。

情報ウィンドウにはドリル可能なすべての列がリンク・テキストとして表示されます。単純なドリルを行うためのリンクをクリックすると、データがドリルされ、別のレイヤーでマップが再描画された後、情報ウィンドウが閉じます。アクション・リンクが定義されている場合は、ポップアップ・ウィンドウ表示され、追加のリンクが表示されます。

ドリルすると、新たにドリルされたデータを反映してマップ・フォーマットが更新されます。一部のドリル操作(州をドリルする場合など)では、指定した地域にマップがズームされると同

時にフォーマットが更新されます。表示される内容は、ズーム方法、およびマップに含まれるフォーマットと地理レベルによって異なります。フォーマットには特定のズーム範囲があり、異なるズーム・レベルで表示されます。ドリルしたフォーマットのズーム・レベルを超えて急激にズーム・アウトした場合は、新規フォーマットが表示される可能性があります。

ドリルダウン後にドリルアップして戻るには、ズーム・スライダを使用します。ドリル開始前のズームまたはドリル・レベルで元のマップ・ビューを表示するには、ダッシュボード・ページの「戻る」ボタンを使用します。

## ビュー内の行および列のサイズ変更

表、ピボット表および拡張トレリスのビューの行エッジおよび列エッジのサイズを変更できます。

たとえば、ブランド売上分析の結果の表で「Time」列をサイズ変更できます。

行および列のサイズ変更について、次の点に注意してください。

- 行および列を対話形式でサイズ変更した場合、その変更内容は永続的ではありません。表を離れてから再度表示すると、対話形式でのサイズ変更は消失します。プロパティを使用して列の幅を設定した場合、その幅は永続的です。
- ビューを PDF にエクスポートすると、サイズ変更は無視されます。

**トピック:**

- [ビューでのサイズ変更の構成](#)
- [ビューでのサイズ変更](#)

## ビューでのサイズ変更の構成

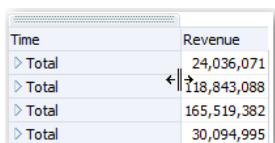
サイズ変更できるようにするには、データを参照する方法としてスクロールを使用するようにビューを構成する必要があります。

1. ビューのツールバーで、「**プロパティの表示**」をクリックします。
2. プロパティ・ダイアログで、「**スクロール・コンテンツがある固定ヘッダー**」を選択します。
3. 「**OK**」をクリックします。ビューにスクロール・バーが表示され、行と列のサイズを変更できます。

## ビューでのサイズ変更

表ビュー、ピボット表ビューまたは拡張トレリスの行エッジまたは列エッジはサイズ変更できます。

1. 列または行エッジの境界線にマウス・ポインタを合せます。



| Time    | Revenue     |
|---------|-------------|
| > Total | 24,036,071  |
| > Total | 118,843,088 |
| > Total | 165,519,382 |
| > Total | 30,094,995  |

2. マウス・ボタンをクリックして押したままの状態にします。

| Time    | Revenue     |
|---------|-------------|
| > Total | 24,036,071  |
| > Total | 118,843,088 |
| > Total | 165,519,382 |
| > Total | 30,094,995  |
| > Total | 4,494,375   |

3. 必要なサイズになるまで点線をドラッグします。
4. マウス・ボタンを放します。

## ビューでの Null 値の抑制

行または列全体に null 値が設定されている場合に、分析に null 値を含めるかどうかを選択できます。デフォルトで、null のメジャー値はすべての分析で抑制されます。

たとえば、販売分析の「Revenue」列に null 値を表示するよう決定する場合があります。

1. ビューを含める分析の「結果」タブを表示します。
2. 「プロパティの表示」をクリックします。
3. ビューで使用する適切な「Null 値を含める」オプションを選択します。

たとえば、ピボット表の行と列の両方に対して null 抑制をオフにするとします。「Null 値のみの行を含める」および「Null 値のみの列を含める」を選択します。

この設定では、データを含むディメンションのみでなく、null 値を含むディメンションも表示されます。ビューにプロンプトやセクション・エッジが含まれている場合、それらは行または列エッジの null 抑制値を継承します。

### ノート:

null 抑制をオフにすると返されるデータ量が増え、パフォーマンスに影響を与える場合があります。詳細は、管理者に問い合わせてください。

null 値を含む分析の結果が期待していたものと異なる場合は、管理者に問い合わせてください。ソースのデータの整合性を確認してください。

## 表示するビューの構築

複合レイアウトを使用して、ダッシュボードに表示する様々なビューを構築します。これらのビューは、複合レイアウト内の別個のコンテナに表示されます。

- 追加複合レイアウトを作成して、分析のプレゼンテーションを多様化できます。ダッシュボードまたはデバイスごとに異なる複合レイアウトを使用できます。たとえば、ブランド売上ダッシュボードに、1つは表とグラフを表示する複合レイアウト、もう1つは円グラフを表示する複合レイアウトを設定する場合があります。
- 新しい複合レイアウトを作成するショートカットとして、複合レイアウトを複製できます。元の複合レイアウトのビューが保持されます。すでにそこにあるビューに加えて、ビューを追加したり、不要なビューを削除できます。たとえば、ブランド売上分析を複製し

た複合レイアウトがあるとしします。表、グラフ、円グラフおよびゲージ・ビューの保持に加えて、パフォーマンス・タイル・ビューを追加できます。

- ビューの名前を変更して、よりわかりやすい名前にすることができます。たとえば、ブランド売上分析では、現在西部地域は、カリフォルニアのみで構成されているとしします。西部地域の複合レイアウトの名前をカリフォルニアに変更できます。
  - 不要になった複合レイアウトを削除できます。たとえば、ブランド売上分析で、西部地域のビューが不要になった場合です。それらのビューが含まれている複合レイアウトを削除できます。
1. 編集する分析を開きます。
  2. 「結果」タブをクリックし、ツールバー・オプションを使用してビューを構築します。
    - 複合レイアウトを作成するには、「**複合レイアウトの作成**」をクリックします。タイトル・ビューのみを備えた複合レイアウト・タブが表示されます。必要に応じて、ビューを追加できます。
    - 複合レイアウトを複製するには、「**複合レイアウトの複製**」をクリックします。選択した複合レイアウトと同じビューが含まれた複合レイアウト・タブが表示されます。必要に応じて、ビューを追加または削除できます。
    - 複合レイアウトの名前を変更するには、「**複合レイアウトの名前変更**」をクリックします。「名前変更」ダイアログで、複合レイアウトの新しい名前を入力して、「**OK**」をクリックします。
    - 複合レイアウトを削除するには、「**複合レイアウトの削除**」をクリックします。

## マスター詳細関係でのビューのリンク

1 つのビューによって他のビューが変更されるようにビューをリンクできます。

たとえば、マスター・ビューの「年」の値として 2011 を選択すると、詳細ビューのチャートに 2011 のデータが表示されます。

リンクする 2 つのビューを定義できます:

- 1 つ以上の詳細ビューでデータの変更が行われるマスター・ビュー。

次のタイプのビューをマスター・ビューにできます: ファンネル・グラフ、ゲージ、グラフ、ヒート・マトリックス、マップ、ピボット表、表およびトレリス。トレリス・ビューでは、外部エッジのみがマスター・ビューになり、内部のビジュアライゼーションはマスター・ビューにはできません。

マスター・ビューは、詳細ビューと同じ分析内であっても、別の分析内であってもかまいません。

マスター・ビューにはマスター列があり、この列にチャンネルでマスター詳細イベントを送信する相互作用を設定します。チャンネルは、マスター詳細イベントを詳細ビューに送信します。マスター・ビューは、ビュー本体に表示する必要があり、ページ・エッジまたはセクション・スライドには表示できません。
- マスター・ビューの表での値のクリックなどのイベントに応答する詳細ビュー。

次のタイプのビューを詳細ビューにできます: ファンネル・グラフ、ゲージ、グラフ、ヒート・マトリックス、マップ、ピボット表、表およびトレリス。トレリス・ビューでは、外部エッジのみが詳細ビューになり、内部のビジュアライゼーションは詳細ビューにはできません。

詳細ビュー:

- 複数のマスター・ビューからのイベントをリスニングできます
- マスター・ビューと同じ分析内であっても、別の分析内であってもかまいません
- 別のビューのマスター・ビューとして機能しません

### トピック

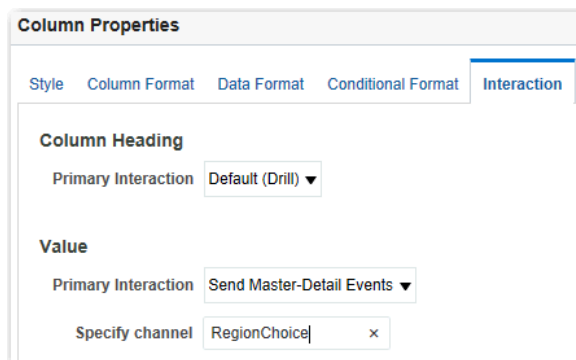
- [マスター・ビューの定義](#)
- [詳細ビューの定義](#)

## マスター・ビューの定義

マスター詳細関係でビューをリンクする過程で、詳細ビューに変更内容を送信するマスター・ビューを定義します。

1. 編集する分析を開きます。
2. マスター列となる列に対して、「基準」タブで「オプション」ボタンをクリックし、「列のプロパティ」を選択します。  
マスター・ビューにサポートされているタイプのいずれかを使用することを確認します。
3. 「列のプロパティ」ダイアログで、「相互作用」タブをクリックします。
4. 「値」領域の「プライマリ相互作用」ボックスで、「マスター詳細イベントの送信」を選択します。
5. 「チャンネルの指定」フィールドに、マスター・ビューがマスター詳細イベントを送信するチャンネルの名前を入力します。

たとえば、地理的リージョンを選択している場合、チャンネルに「RegionChoice」と名前を付ける場合があります。



6. 「結果」タブをクリックして、デフォルトの表ビューまたはピボット表ビューを表示します。
7. 「OK」をクリックします。

## 詳細ビューの定義

マスター詳細関係でビューをリンクする過程で、マスター・ビューの変更内容を取得する詳細ビューを定義します。

**ノート:** マスター・ビューの列(「**プライマリ相互作用**」を「マスター詳細イベントの送信」に設定したマスター・ビューの列)を詳細ビューの「プロンプト」または「セクション」領域に配置していることを確認してください。

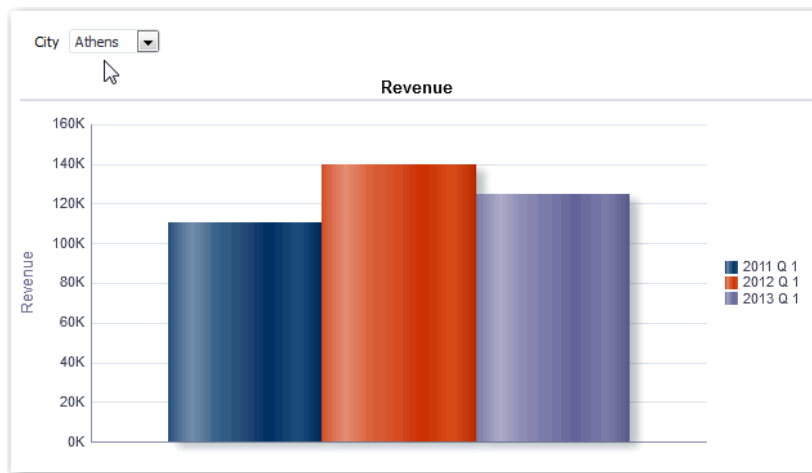
1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. 詳細ビューとして使用するビューを作成します。  
詳細ビューにサポートされているタイプのいずれかを使用することを確認します。
4. ビューのツールバーで、「**編集**」をクリックします。
5. マスター・ビューの列(マスター・ビューで「**プライマリ相互作用**」を「マスター詳細イベントの送信」に設定)を「**プロンプト**」ボックスまたは「**セクション**」ボックスにドラッグして、「**完了**」をクリックします。
6. ビューのエディタのツールバーにある「**プロパティの表示**」ボタンをクリックします。ビューの「プロパティ」ダイアログが表示されます。
7. 「**マスター詳細イベントのリスニング**」を選択します。  
「**マスター詳細イベントのリスニング**」オプションの場所は、次のようにビュー・タイプによって異なります:
  - 「ゲージのプロパティ」ダイアログ: 「一般」タブ
  - 「グラフのプロパティ」ダイアログ: 「一般」タブ(グラフまたはファンネル・グラフの場合)
  - ヒート・マトリックス・プロパティ・ダイアログ: 「一般」タブ
  - 「マップ・プロパティ」ダイアログ: 「相互作用」タブ
  - 「ピボット表のプロパティ」ダイアログ: 「スタイル」タブ
  - 「表のプロパティ」ダイアログ: 「スタイル」タブ
8. 「**イベント・チャンネル**」フィールドで、[マスター・ビューの定義](#)のステップ 5 で定義したチャンネルの名前を入力します。  
たとえば、地理的リージョンのチャンネルに「RegionChoice」という名前を付けている場合があります。  
チャンネル名の大文字/小文字は区別されるため、マスター・ビューで指定したチャンネル名と完全に一致させる必要があります。複数のチャンネルは、channel a、channel b のようにカンマで区切ってください。
9. 「**OK**」をクリックします。

次の例では、マスター詳細関係を使用して、都市別売上分析の表ビューが棒グラフにリンクされています。

グラフ・ビューには、「City」列がマスター・ビューとして構成されています。「City」列によって、イベントが特定の CityChoice チャンネルを介してグラフ・ビューに送信されます。



グラフ・ビューには、ユーザーが都市を選択できるプロンプトがあります。グラフのデータは都市の選択に基づいて表示されます。



このグラフは詳細ビューで、特定の **CityChoice** チャンネルで表ビューからのイベントをリスニングする「**City**」プロンプトがあります。ユーザーが表ビューの「**City**」列にある値をクリックしたとします。グラフ・ビューのプロンプトがその都市に設定され、グラフがリフレッシュされます。

## ビューのデータのレイアウトの変更

「レイアウト」ペインを使用して、ビューでのデータの配置方法を変更します。列の追加と再配置や合計の追加などのタスクを実行します。

### トピック:

- ビューでの列の追加と再配置
- ビュー内のデータ・セクションのプロパティの設定
- 表およびピボット表への合計の追加
- ピボット表での合計と相対値の表示

## ビューでの列の追加と再配置

ビューで列を追加および再配置できます。

### トピック

- ビューへの列の追加
- ビューからの列の除去
- ビューでの列の再配置

## ビューへの列の追加

このトピックでは、ビューへの列の追加方法について説明します。

- 「サブジェクト領域」ペインからビュー・エディタの適切な場所に列をドラッグします。
- 「サブジェクト領域」ペインからビュー・エディタの「レイアウト」ペインにあるドロップ・ターゲットに列をドラッグ・アンド・ドロップします。

たとえば、ブランド売上分析の表に「Office」列を追加する場合です。「サブジェクト領域」ペインから「Product」列の後のドロップ・ターゲットに「Office」列をドラッグできます。

## ビューからの列の除去

ビューから列を除去できます。

特定のビューから列を除去しても、その列が基礎となる分析から除去されたり、他のビューから除去されることはありません。分析およびすべてのビューから列を除去する場合は、「基準」タブを使用して除去します。

1. 編集するビューを開きます。
2. 「レイアウト」ペインの「列とメジャー」セクションで、「**詳細オプション**」をクリックします。
3. 「**列の除去**」を選択します。

## ビューでの列の再配置

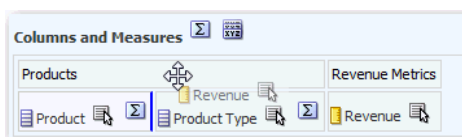
ビューの列を再配置できます。

1. 編集するビューを開きます。
2. 列ハンドルを使用して列をドラッグし、ドロップ・ターゲットに列をドロップします。

| Product Type | Brand   | Revenue    |
|--------------|---------|------------|
| Accessories  | BizTech | 24,036,071 |
| Audio        | BizTech | 18,843,088 |
| Camera       | FunPod  | 65,519,382 |

「レイアウト」ペインで列を再配置するには:

1. 編集するビューを開きます。
2. 「レイアウト」ペインで、列を必要な場所にドラッグ・アンド・ドロップします。



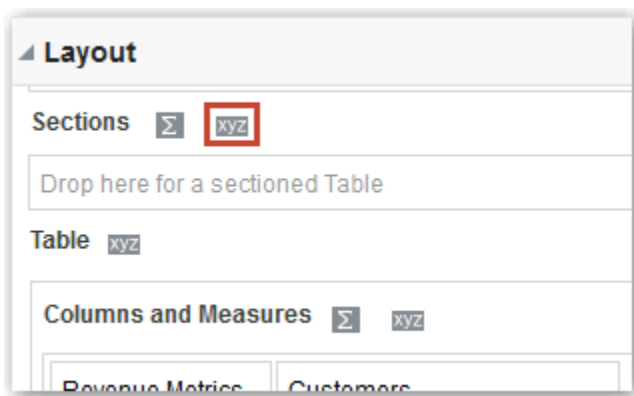
この手順では、「レイアウト」ペインを使用して列を再配置する最も基本的なステップを示しています。「レイアウト」ペインでの列の再配置では、様々なオプションを使用できます。「レイアウト」ペインのドロップ・ターゲットについてを参照してください。

## ビュー内のデータ・セクションのプロパティの設定

ビュー本体(ピボット表など)またはドロップ・ターゲット(セクションなど)のプロパティを指定できます。

たとえば、背景色を薄緑色に設定したり、売上値の長い表に改ページを挿入できます。

1. 編集するビューを開きます。
2. ビュー・エディタで、「レイアウト」ペインを表示します。
3. ビュー本体またはドロップ・ターゲットの隣にある「セクションのプロパティ」をクリックします。



4. 適切なプロパティを設定します。
  - 「改ページの挿入」を使用して、セクションの前に改ページを作成するかどうかを指定し、セクションのドロップ・ターゲットの値が変わるたびに、その列の新しいセクションが新規ページに表示されるようにします。改ページは、分析を PDF にエクスポートする際に表示されます。これは、データ駆動の詳細分析に役立ちます。次から選択します:
    - ページ区切りなし- ページは区切られません。
    - 最下層列 — 最下層列で区切られます(各セクションの間に改ページが挿入されます)
    - 最も外側の列 — 最上層列で区切られます(最も外側の列のセクション・ラベルが変わると改ページが挿入されます)。最上層列の値が変わると、下層列の値も変わったとみなされます。そのため、最上層列での改ページを設定すると、各セクション間に手動改ページが挿入されません。
    - フォルダ.列 — Markets.Region や Products.Brand など。指定された列のセクション・ラベルが変わると改ページが挿入されます。このオプションは、「セクション」ドロップ・ターゲットに列が含まれる場合のみ使用できます。
  - 「空白行を表示」を使用して、セクションにデータがない行を表示するかどうかを指定します。行が空のテキスト文字列で値が含まれない場合でもすべての行を表示するには、このオプションを選択します。結果が表示されていない行を非表示にするには、このオプションの選択を解除します。このオプションは、空のアドレス行を非表示にする場合などに便利です。
  - 「セクション・スライダ値の最大数」をグラフで使用して、セクション・スライダ・バーに表示する値の最大数(システムの最大数を超えない範囲)を指定します。システ

ムの最大数は管理者によって構成されます。システムの最大数を超える値を入力した場合、その値は無視されます。

5. 「OK」をクリックします。

## 表およびピボット表への合計の追加

「レイアウト」ペインで、表およびピボット表に列の合計を追加できます。

合計は、ビュー内の様々な位置に配置できます。様々なエッジに表示される列の合計を追加できます。各メジャーの集計ルールが合計に使用されます。

ピボット表の「行」または「列」ドロップ・ターゲットに合計を指定すると、「メジャー」ドロップ・ターゲットに指定された列の結果が合計として表示されます。合計値は、ピボット表の「列」または「行」エッジではなく、ピボット表の中心のデータに表示されます。

1. ビューの「レイアウト」ペインを表示します。
2. 表全体に総計を追加するには、「列とメジャー」ドロップ・ターゲットで「合計」ボタンをクリックし、「前」などの位置をクリックします。  
ピボット表全体の場合は、「行」または「列」ドロップ・ターゲットで「合計」をクリックし、次に位置をクリックします。
3. ドロップ・ターゲット内のすべての値に適用される合計の有効/無効を切り替えるには、「セクション」などのドロップ・ターゲット名の横にある「合計」ボタンをクリックします。  
その後、データ項目の「前」などの合計の位置を選択します。合計領域がビューに追加されます。
4. 表およびピボット表の合計の見出しに挿入するカスタム・テキストを指定するには、「キャプション」ボックスにテキストを入力します。
  - @を使用し、データ値を表示します。「Region」列に対して合計が指定されており、合計の見出しの「キャプション」ボックスに次のテキストを入力するとします:- All values in the @。西部地域の合計の見出しには、次のテキストが表示されます:- All values in the Western Region。
  - @を使用し、@記号を表示します。
  - \を使用し、二重引用符を表示します。二重引用符の構文は、単一の文字以外にも使用できます。一般的に、バックスラッシュでエスケープする文字列を二重引用符の内側に使用できます。たとえば、"1234567890\abc\d\"x\"yz!@#\$%^&\*()-+={}|;:'!/?><,.` ~"は 1234567890\abc\d\"x\"yz!@#\$%^&\*()-+={}|;:'!/?><,.` ~として表示されます
  - \を使用し、\記号を表示します。

## ピボット表での合計と相対値の表示

「レイアウト」ペインを使用して、ピボット表にメジャー列の合計や相対値を表示できます。

### トピック

- [ピボット表でのメジャー列の累計の表示](#)

- [ピボット表でのメジャー列の相対値の表示](#)

## ピボット表でのメジャー列の累計の表示

ピボット表で数値メジャーを累計で表示すると、メジャーの連続する各列は、そのメジャーのそれより前のすべてのセルの合計を表示します。このオプションは単なる表示機能で、実際のピボット表の結果には影響しません。

通常、累計は、複製された属性列または、データを列のパーセンテージで表示するオプションが選択されているメジャー列に対して表示され、最後の値が **100** パーセントになります。たとえば、累計およびパーセンテージを表示し、翌年の売上目標の**\$2** 百万に向けた進捗を表示できます。累計はすべての合計に適用されます。各詳細レベルの累計は別々に計算されます。

累計オプションが選択されている場合、列見出しは影響を受けません。累計オプションが有効であることを示す必要がある場合、列見出しを書式設定できます。

次の使用上のルールが累計に適用されます。

- 累計は、SQL `RSUM` 関数と非互換です(結果は、累計の累計になります)。
  - すべての累計は、新規セクションごとにリセットされます。累計は、セクション内の区切りでリセットされることはなく、セクションをまたがって続くこともありません。
  - メジャーが **1** つの列または **1** つの行に表示されない場合、メジャーは、左から右、上から下の順に合計されます。(右下のセルに合計が含まれます。)累計は、行ごとまたは列ごとにリセットされません。
1. ビュー・エディタで、ピボット表ビューを開きます。
  2. 「レイアウト」ペインの「メジャー」領域で、累計される行または列の「**詳細オプション**」をクリックします。
  3. 「**累計として表示**」を選択します。

## ピボット表でのメジャー列の相対値の表示

ピボット表で、格納済または計算済のメジャーをパーセントまたは指数に動的に変換できます。

ここで項目の合計に対する相対値が表示されるため、明示的に計算項目を作成する必要はありません。**0.00** から **100.00** までのパーセンテージ、または **0** から **1** までの指数でメジャーを表示できます。

たとえば、ピボット表を使用して製品別の売上を調べる場合、売上メジャーを複製し、合計に対するパーセンテージで表示できます。これによって、各製品の実際の売上と、売上に占めるパーセンテージを表示できます。

1. ビュー・エディタでピボット表を開きます。
2. 「レイアウト」ペインで、相対値で表示する項目の「**詳細オプション**」をクリックします。
3. オプション: メジャー列を複製するには、「**レイヤーの複製**」を選択します。  
項目が、ピボット表に同じ名前が表示されます。
4. 「**データの表示形式**」を選択します。
5. 「**パーセント**」または「**指数**」を選択します。
6. 「**列**」、「**行**」または「**セクション**」など、適切な値を選択します。

列がピボット表ビューに表示されます。

| Product Type | Time    | Revenue |
|--------------|---------|---------|
| Accessories  | ▷ Total | 3.0%    |
| Audio        | ▷ Total | 14.9%   |
| Camera       | ▷ Total | 20.7%   |
| Fixed        | ▷ Total | 3.8%    |
| Install      | ▷ Total | 0.6%    |

7. 列名を変更するには、「**詳細オプション**」、「**見出しの書式設定**」の順にクリックします。

「書式の編集」ダイアログで、「**キャプション**」フィールドに値を入力します。

## 「レイアウト」ペインのドロップ・ターゲットについて

データ・ビューの各エディタには、「レイアウト」ペインが含まれています。「レイアウト」ペインは、グラフ、パフォーマンス・タイル、ピボット表などのビュー・タイプごとに表示が若干異なります。「レイアウト」ペインでは、ビューのデータの配置が示されます。

「レイアウト」ペインで、データ・ビューの列はドロップ・ターゲットに表示されます。ドロップ・ターゲットは、列を挿入、移動またはドロップできる場所を示します。列の有効な位置を表します。各ドロップ・ターゲットには、設定可能なプロパティがあります。ドロップ・ターゲットを使用(ビュー内の別のターゲットに列をドラッグ・アンド・ドロップ)して、データ・ビュー内のデータの配置を変更できます。

### 概念

- [ドロップ・ターゲットのタイプについて](#)
- [「除外」ドロップ・ターゲットについて](#)
- [様々なビューのドロップ・ターゲットのガイドラインについて](#)

## ドロップ・ターゲットのタイプについて

ここでは、ドロップ・ターゲットのタイプについて説明します。

データ・ビューには、ビューのタイプに応じて 1 つ以上の次のドロップ・ターゲットを含めることができます。

| ターゲット            | 説明                                                                                                                                    |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <view-type>プロンプト | 表示するデータを選択できるインタラクティブ結果セットを提供します。このドロップ・ターゲットに表示される列からの値は、初期基準として使用されます。ビューで、これらの値は、選択用のドロップダウン・リスト(ページ・エッジとも呼ばれる)に表示されます。            |
| セクション            | ビューをセクションに分ける領域を挿入します。このドロップ・ターゲットで「 <b>スライダとして表示</b> 」オプションを選択した場合、「セクション」ドロップ・ターゲットにドロップされる列の値は、一意のビューとしてではなく、セクション・スライダとして表示されません。 |

| ターゲット         | 説明                                                                       |
|---------------|--------------------------------------------------------------------------|
| <view-type>領域 | 描画領域またはビュー自体の本体をシミュレートして、ビューの外観を確認できるようにします。この領域との間で列をドラッグ・アンド・ドロップできます。 |

表で説明しているドロップ・ターゲット以外に、「レイアウト」ペインには「除外」ドロップ・ターゲットが表示されます。「レイアウト」ペインには、ビューのタイプに固有の他のドロップ・ターゲットが含まれます。たとえば、レーダー・グラフの「レイアウト」ペインには、円の半径に沿って各線上に点として列値が表示される「レーダー・セクション」ドロップ・ターゲットが含まれます。

## 「除外」ドロップ・ターゲットについて

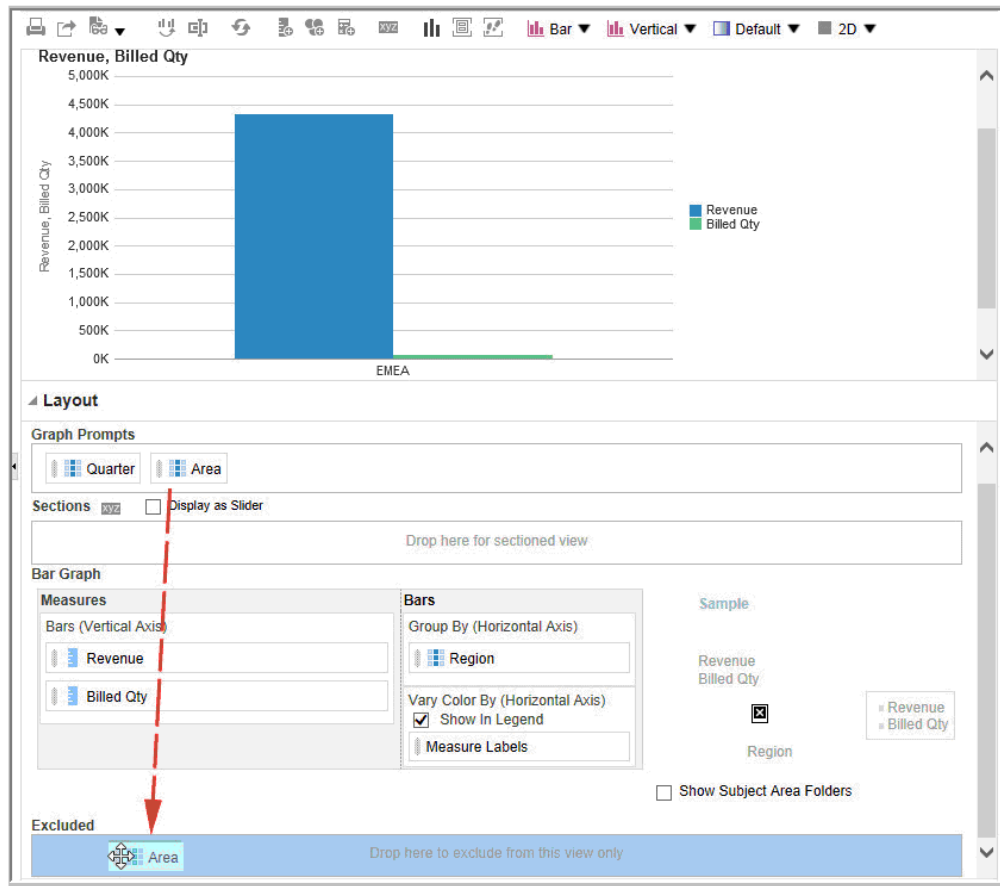
データのレイアウトを変更するには、「除外」ドロップ・ターゲットを理解する必要があります。「除外」ドロップ・ターゲットの列はビュー結果には含まれませんが、分析の一部であることには変わりありません。

一般に、1つのビューまたはすべてのビューに明示的に追加されていない場合、列は「除外」ドロップ・ターゲットに置かれます。

「除外」ドロップ・ターゲットにある列をビューに表示する必要がある場合は、その列を簡単に移動できます。ビューの「レイアウト」ペインを表示し、「除外」ドロップ・ターゲットから、希望する場所に列をドラッグ・アンド・ドロップするだけです。

列の除外は、列の除去とは異なります。分析から列を完全に除去するには、ビューの「レイアウト」ペインの「詳細オプション」ボタンから「列の除去」オプションを使用します。

分析のビューを様々な方法で作成した後、列を「除外」ドロップ・ターゲットに置きます。たとえば、ビューの右クリック・メニューから「列の除外」を選択できます。エディタでビューを編集して、「サブジェクト領域」ペインからそのビューに列を追加するとします。列は、分析のその他のすべてのビューの「除外」ドロップ・ターゲットに置かれます。



## 様々なビューのドロップ・ターゲットのガイドラインについて

ビューのレイアウトを変更する際は、「レイアウト」ペインのドロップ・ターゲットについて覚えておく必要があるガイドラインがあります。

- グラフおよびファンネル・グラフに対するドロップ・ターゲットのガイドライン
- ヒート・マトリックスに対するドロップ・ターゲットのガイドライン
- トレリスに対するドロップ・ターゲットのガイドライン
- ツリーマップに対するドロップ・ターゲットのガイドライン

## グラフおよびファンネル・グラフに対するドロップ・ターゲットのガイドライン

ここでは、グラフおよびファンネル・グラフで、あるドロップ・ターゲットから別のターゲットへ列をドラッグ・アンド・ドロップする場合の制限とガイドラインについて説明します。

- バブル・グラフには、3つ以上のメジャーが必要です。1つのメジャーを横軸にプロットし、別のメジャーを縦軸に、3つ目のメジャーをバブル・サイズ軸にプロットします。



- パレート・グラフは、メジャーを 1 つのみ持つことができます。  
別のメジャーを「メジャー」ドロップ・ターゲットにドロップすると、メジャーが入れ替わりますが、既存のメジャーが新たにドロップしたメジャーに置き換えられ、自動的に「除外」ドロップ・ターゲットに移動されるということです。
- 時系列折れ線グラフは、横軸に 1 つの日付または日時データ列が選択されている必要があります。これは、1 つの縦軸を持ちますが、複数のデータ系列がサポートされます。
- 散布図には、2 つ以上のメジャーが必要です。たとえば、1 つのメジャー列を横軸にプロットし、別のメジャー列を縦軸にプロットします。これらのメジャーは、「グループ化」軸の値としてプロットされます。
- ファンネル・グラフでは 2 つのメジャーが使用されますが、1 つのみ必須です。2 つ目のメジャーを選択しない場合、1 つ目のメジャーが 2 つ目のメジャーとして使用されます。2 つのメジャーが選択されている状況で新たにメジャーを選択すると、実際のメジャーのドロップ・ターゲットにある現在のメジャーが新規メジャーで置き換えられます。
- 積上げ棒グラフには、値の比較ができるように 2 つ以上のメジャーが必要です。

## ヒート・マトリックスに対するドロップ・ターゲットのガイドライン

ヒート・マトリックスをビジュアル化するには、「レイアウト」ペイン領域を使用します。大量のデータの異常を迅速に見つけ、個別の値を調査できます。

ヒート・マトリックスの「レイアウト」ペインは、次の各種ドロップ・ターゲット領域で構成されています。

| 領域    | ガイドライン                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| プロンプト | ヒート・マトリックスのフィルタに使用する属性列または階層列を選択します。「プロンプト」領域は最初は空です。「セクション」領域、「行」領域、「列」領域または「サブジェクト領域」ペインから、「プロンプト」領域に 1 つ以上の列をドラッグ・アンド・ドロップできます。                                                                                                                                                                                                                               |
| セクション | ヒート・マトリックスのセクション化に使用する属性列または階層列を選択します。「セクション」領域は最初は空です。「プロンプト」領域、「行」領域、「列」領域または「サブジェクト領域」ペインから、「セクション」領域に 1 つ以上の列をドラッグ・アンド・ドロップできます。                                                                                                                                                                                                                             |
| 行     | <p>行の位置合せて表示される列を表します。「基準」タブで定義されているすべての属性列と階層列は、最初は「基準」タブに追加された順序で「行」領域に表示されます。</p> <p>属性列また階層列を「サブジェクト領域」ペインから「行」ドロップ・ターゲットにドラッグするか、または属性列また階層列をダブルクリックする方法で、1 つ以上の属性列また階層列を「行」ドロップ・ターゲットに追加できます。1 つ以上の属性列または階層列を「列」領域、「プロンプト」領域または「セクション」領域からドラッグ・アンド・ドロップすることもできます。</p> <p>分析の結果を表示した後に、属性列または階層列をヒート・マトリックス・ビューに追加した場合、新しい列が下位列として「行」ドロップ・ターゲットに追加されます。</p> |
| 列     | <p>列の位置合せて表示される列を表します。「列」ドロップ・ターゲットは最初は空の状態です。</p> <p>1 つ以上の属性列または階層列を「サブジェクト領域」ペインから「列」ドロップ・ターゲットにドラッグできます。1 つ以上の属性列または階層列を「行」領域、「プロンプト」領域または「セクション」領域からドラッグ・アンド・ドロップすることもできます。</p>                                                                                                                                                                             |
| 色の基準  | 詳細は、次の項を参照してください。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |

## 「色の基準」領域の詳細

「色の基準」領域は、グループ化および行と列の交差のメジャー値を表します。

- 「基準」タブに追加された最初のメジャーが「色の基準」メジャーとして表示されます。
- 「色の基準」リストからメジャーを選択できます。このリストには、最初は「基準」タブの分析に追加されたすべてのメジャーが含まれています。
- 「サブジェクト領域」ペインから「色の基準」ドロップ・ターゲットにメジャー列をドラッグ・アンド・ドロップできます。現在の「色の基準」メジャーが新しいメジャーで置換され、新しいメジャーを反映するようにヒート・マトリックスが再描画されます。  
分析の結果を表示した後に、メジャー列をヒート・マトリックス・ビューに追加した場合、ビューおよび「色の基準」ドロップ・ターゲット内の既存の列が新しい列で置き換えられます。
- 「基準」タブの「色の基準」メジャー列を除去すると、「色の基準」リストからも除去されます。「色の基準」リストの新しいメジャー値は、分析に最後に追加されたメジャー値にデフォルト設定されます。  
「色の基準」ドロップ・ターゲットは、次の 2 つのオプションに分かれています：
  - **スタイル:** ヒート・マトリックスのスタイルを選択します。「スタイル」には、「百分位数によるビン化」と「連続的な色の塗りつぶし」の 2 つのオプションが含まれています。オプションとして「百分位数によるビン化」を選択すると、ビンの数を入力し、カラー・パレットを選択して、ビンのカスタム・ラベルを入力できます。「連続的な色の塗りつぶし」を選択した場合、ヒート・マトリックス・タイルはグラデーション色スキームとして表示されます。
  - **色:** ヒート・マトリックスのカラー・パレットを選択します。

## トレリスに対するドロップ・ターゲットのガイドライン

ここでは、トレリスのドロップ・ターゲットを操作する際に適用されるガイドラインについて説明します。

- 拡張トレリス・ビューでは、トレリスの一番内部の列ヘッダーでメジャーが構成されています。
- 「色の基準」ドロップ・ターゲットおよび「グループ化」ドロップ・ターゲットからメジャーを双方向に移動する場合：
  - 1 つのメジャーをドラッグすると、それとともにすべてのメジャーが移動されます。(これをスティッキーな動作といいます。)
  - 新しいメジャーをビューにドラッグすると、新しいメジャーを配置した場所にすべての既存のメジャーが移動されます。
- ビジューライゼーションの非メジャー・エッジ、「行」ターゲットまたは「列」ターゲットにメジャーを配置するには、メジャーを属性列にまず変換する必要があります。詳細は、[列の式の編集](#)を参照してください。
- 属性列を「メジャー」ドロップ・ターゲットからドラッグしても、ドロップ・ターゲットまたはその中のメジャーが属性とともに移動されることはありません。

## ツリーマップに対するドロップ・ターゲットのガイドライン

ツリーマップ(制約のある階層型データ)をビジュアル化するには、「レイアウト」ペイン領域を使用します。大量のデータのトレンドと異常を迅速に見つけ、個別の値を調査できます。

ツリーマップの「レイアウト」ペインは、次の各種ドロップターゲット領域で構成されています。

| 領域      | ガイドライン                                                                                                                                                                                                                                                          |
|---------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| プロンプト   | ツリーマップのフィルタに使用する属性列または階層列(不規則な階層とスキップ・レベル階層を除く)を選択します。                                                                                                                                                                                                          |
| セクション   | ツリーマップの区分に使用する属性列または階層列(不規則な階層とスキップ・レベル階層を除く)を選択します。たとえば、年でグループ化された地域を、売上でサイズ設定し、1年前の売上で色付けするツリーマップを表示するコンテンツにできます。                                                                                                                                             |
| グループ化基準 | 集計値のコンテンツを生成または記述するためにスライスされた階層データの最上位レベルを表します。集計値はタイルとして表示されます。<br>グループ領域では、「サイズ基準」領域および「色の基準」領域で指定されたメジャー列のヘッダーまたはグループが作成されます。ツリーマップに複数のデータ列が表示される場合は、グループ化用にタイトル・バーが表示されます。たとえば、年でグループ化された地域を、売上でサイズ設定し、1年前の売上で色付けするツリーマップを表示するコンテンツにできます。地域がタイトル・バーに表示されます。 |
| サイズ基準   | 親内でのタイルの分布を表します。子のサイズは、親のサイズと常に等しくなります。四角形の各領域は、適用されたフィルタ(プロンプト、地域によるフィルタ処理など)に基づく関連メジャーの集計値です。                                                                                                                                                                 |
| 色の基準    | 同じレベルにあるすべてのタイルでの値の分布を表し、分析にツリーマップに対する質的なパースペクティブを提供する付加的なスコープを追加します。                                                                                                                                                                                           |

## 分析でのデータのビジュアル化

分析でデータをビジュアル化できます。

### ホーム・ページから

1. ホーム・ページで、ビジュアル化する分析を見つけます。  
たとえば、検索バーの下の「**ワークブックとレポート**」検索タグをクリックするか、検索バーをクリックして「**分析**」を選択します。
2. 分析にカーソルを合せ、「**アクション**」メニューをクリックして「**ワークブックとして探索**」を選択します。  
ビジュアライゼーションとして表示される分析を確認できます。データをビジュアル化し、変更を加え、ビジュアライゼーション・ワークブックとして保存できます。

### クラシック・ホーム・ページから

1. クラシック・ホーム・ページに移動します。  
ホーム・ページでは、「**ページ・メニュー**」で「**クラシック・ホームを開く**」をクリックします。
2. 「最近」ペインまたは「カタログ」ペインで、ビジュアル化する分析を見つけます。

3. 「詳細」をクリックしてから「ワークブックとして探索」をクリックします。  
新しいブラウザ・タブまたはページに分析がビジュアライゼーションとして表示されます。データをビジュアル化し、変更を加え、ビジュアライゼーションとしてワークブックを保存できます。

## ダッシュボードの作成

この章では、企業および外部の情報をパーソナライズして表示できるダッシュボードの作成方法について説明します。

### 📺 ビデオ

#### トピック:

- [ダッシュボードを作成するための一般的なワークフロー](#)
- [最初のダッシュボードの作成](#)
- [ダッシュボードの編集](#)
- [ダッシュボードでのページの追加と削除](#)
- [ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのレイアウトの作成および管理](#)
- [ダッシュボードの印刷](#)
- [ブリーフィング・ブック内のダッシュボード・ページの編成](#)
- [デフォルトの選択項目を含むダッシュボード・ページの表示時間の改善](#)
- [ダッシュボード状態の保存および復元](#)
- [ダッシュボード・ページの公開](#)
- [ダッシュボード・ページへのリンク](#)

## ダッシュボードを作成するための一般的なワークフロー

次に、ダッシュボードを作成するための一般的なタスクを示します。

| タスク                   | 説明                                            | 詳細情報                                  |
|-----------------------|-----------------------------------------------|---------------------------------------|
| 複数の分析の作成              | ダッシュボードに表示するビューの作成が可能な分析を作成します。               | <a href="#">最初の分析の作成</a>              |
| ダッシュボードの作成            | ダッシュボードを作成して、分析からのデータを表示します。                  | <a href="#">最初のダッシュボードの作成</a>         |
| ダッシュボード・ページへのコンテンツの追加 | コンテンツをダッシュボードに追加して、ビューやプロンプトなどの項目を表示します。      | <a href="#">ダッシュボード・ページへのコンテンツの追加</a> |
| ダッシュボード・ページへのプロンプトの追加 | ダッシュボード・ページにプロンプトを追加して、ページ上にコンテンツを誘導します。      | <a href="#">ダッシュボード・ページへのプロンプトの追加</a> |
| ダッシュボードへのページの追加       | オプションで、1つ以上のページをダッシュボードに追加して、データを様々な方法で表示します。 | <a href="#">ダッシュボードへのページの追加</a>       |

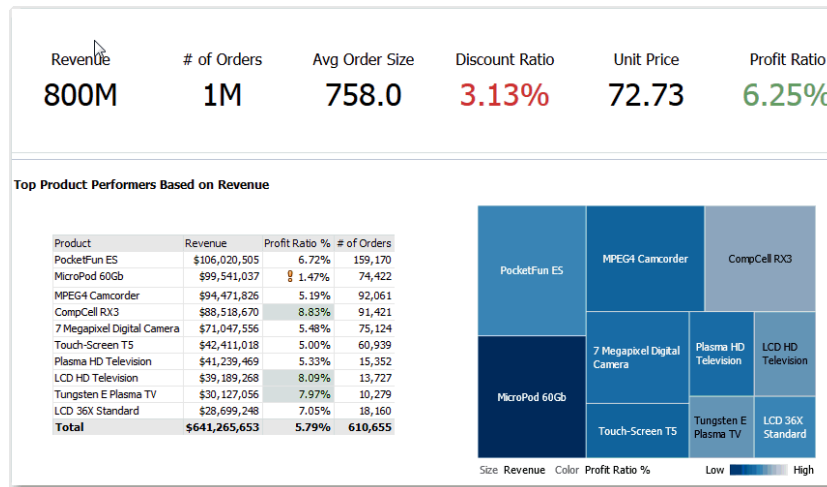
| タスク                  | 説明                                               | 詳細情報                              |
|----------------------|--------------------------------------------------|-----------------------------------|
| ダッシュボードに関する個人設定の再呼出し | 現在の状態で、またはあらかじめ選択した方法でページを表示できるように、カスタマイズを作成します。 | <a href="#">ダッシュボード状態の保存および復元</a> |
| ダッシュボードの実行           | 完成したダッシュボードを試します。「実行」をクリックします。                   |                                   |

## 最初のダッシュボードの作成

企業および外部の情報をパーソナライズして表示できるダッシュボードを作成できます。ダッシュボードは、分析の結果を表示する 1 つ以上のページで構成されます。

### ▶ ビデオ

たとえば、販売業績ダッシュボードを作成して、チームの売上をトラッキングするためのコンテンツを追加できます。分析用の 3 つのビューとして、パフォーマンス・タイル・ビュー、表ビューおよびツリーマップ・ビューを作成するとします。これらの 3 つのビューを表示するダッシュボードを作成できます。ダッシュボードに、ビューに表示する値をユーザーが指定できるプロンプトを含めることができます。[列プロンプトの作成](#)を参照してください。



- クラシック・ホーム・ページの「作成」ペインで、「ダッシュボード」をクリックします。
- 「新規ダッシュボード」ダイアログで、ダッシュボードの短い名前と説明を入力します。
- 「場所」の下で、ダッシュボードの保存場所を選択します。ダッシュボードの保存場所によって、ダッシュボードがユーザーのプライベート用なのか、他のユーザーと共有されるかが決まります。
  - 個人の使用およびプライベート用に保存するには、ダッシュボードを / MyFolders に保存します。
  - 他のユーザーと共有するには、「/共有フォルダ」にダッシュボードを保存します。

ダッシュボードを他のユーザーと共有し、グローバル・ヘッダーの「**ダッシュボード**」メニューに表示しない場合は、ダッシュボードを任意のレベル(「/共有/会社/販売/東部」など)に保存します。

ダッシュボードを他のユーザーと共有し、グローバル・ヘッダーの「**ダッシュボード**」メニューに表示する場合は、ダッシュボードを「/共有/**最初のレベルのサブフォルダ**」に保存します。

ダッシュボードが保存されていない共有フォルダを選択した場合は、そのフォルダ内に「ダッシュボード」新規サブフォルダが自動的に作成されます。

たとえば、ダッシュボードが保存されていない「/共有フォルダ/会社/販売」というフォルダを選択すると、「ダッシュボード」新規フォルダが作成されます。位置のエントリは「/共有/販売/ダッシュボード」に変わります。(他のレベルのフォルダを選択した場合、「ダッシュボード」新規フォルダは自動的に作成されません。)

4. 新規ダッシュボードにコンテンツをすぐに追加することを指定します。
5. 「OK」をクリックします。

1つの空白ページを含む新規ダッシュボードが、編集用にダッシュボード・ビルダーに表示されます。

## ダッシュボードの編集

適切な許可および権限を持つダッシュボードを編集できます。ダッシュボード・ページの追加または削除、列やセクションなどのコンテンツの追加、プロパティおよび設定(印刷オプションなど)の編集を実行できます。

たとえば、カタログからブランド売上分析を追加することで、チームの進捗をトラッキングするためのコンテンツを販売業績ダッシュボードに追加できます。

1. ダッシュボードを開きます。
2. 「**ページ・オプション**」をクリックしてから、「**ダッシュボードの編集**」を選択して変更します。

## ダッシュボードでのページの追加と削除

ダッシュボードではページを追加したり削除できます。

### トピック:

- [ダッシュボードへのページの追加](#)
- [ダッシュボードへのサブページの追加](#)
- [ダッシュボード・ページへのコンテンツの追加](#)
- [ダッシュボード・ページと BI Publisher レポートがどのように相互作用するかの理解](#)
- [ダッシュボードとページのスタイルおよび動作の構成](#)
- [ダッシュボード・ページに追加されたオブジェクトのプロパティの変更](#)
- [ダッシュボード・ページのオブジェクトの削除](#)
- [ダッシュボード・ページの削除](#)
- [ダッシュボード・サブページの削除](#)

## ダッシュボードへのページの追加

新しいページを追加して、ダッシュボードのコンテンツを編成できます。

たとえば、最初に、表および棒グラフに地域の売上データが含まれる新しいダッシュボード・ページを追加できます。次に、様々な競合相手の Web サイトへのリンクが含まれる別のページを追加できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. ダッシュボード・ビルダーのツールバーで、「**ダッシュボード・ページを追加**」をクリックし、「ダッシュボード・ページを追加」メニュー・オプションを選択します。
3. 画面に表示される指示に従います。

## ダッシュボードへのサブページの追加

新規サブページをダッシュボードに追加できます。

サブページを追加すると、第 2 レベルの情報をユーザーに表示できます。たとえば、最初に、表および棒グラフに地域の売上データが含まれる新しいダッシュボード・ページを追加できます。次に、様々な競合相手の Web サイトへのリンクが含まれるサブページを追加できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. ダッシュボード・ビルダーのツールバーで、「**ダッシュボード・ページを追加**」をクリックし、「**サブページの追加**」メニュー・オプションを選択します。
3. 画面に表示される指示に従います。

## ダッシュボード・ページへのコンテンツの追加

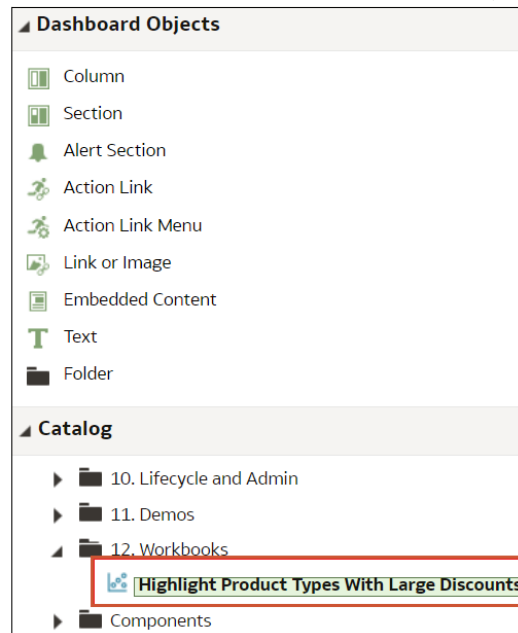
ダッシュボード・オブジェクト(「ダッシュボード・オブジェクト」ペインのすべてのオブジェクト)をダッシュボード・ページに追加できます。また、カタログに保存したオブジェクトを追加することもできます。

たとえば、新しく作成した販売業績ダッシュボードに、チームの進捗をトラッキングするためのコンテンツを追加できます。これを実行するために、カタログからブランド売上分析を追加できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. コンテンツを追加するページに移動します。
3. ダッシュボード・ビルダーで、「ダッシュボード・オブジェクト」ペインまたは「カタログ」ペイン内のオブジェクトを選択して分析し、それらを「ページ・レイアウト」領域にドラッグ・アンド・ドロップします。
  - 「**列**」を使用して、ダッシュボード上にコンテンツを配置するための列を追加します。ダッシュボード・ページ上に必要な数の列を作成できます。列は水平方向または垂直方向に配置できます。
  - 「**セクション**」を使用して、アクション・リンクや分析など、ページに対するコンテンツを含めるための列内のセクションを追加します。列に対して必要な数のセクションを含めることができます。



- **Publisher** レポートを使用して、1 つ以上のレポートを追加し、これらを他のユーザーが使用できるようにします。レポートを使用して、構成済の分析をダッシュボード・ページに追加できます。レポートを、ダッシュボード・ページに表示する埋込みコンテンツとして、あるいはレポートを **Oracle Analytics Publisher** で開くリンクとして追加できます。ダッシュボード・ページに追加したレポートを **Oracle Analytics Publisher** で変更して変更を保存した場合、その変更を表示するには、ダッシュボード・ページをリフレッシュする必要があります。
- ビジュアライゼーションを使用して、ダッシュボードにビジュアライゼーションおよびキャンバスを埋め込んで、これらをアナリストと共有します。プロジェクトをキャンバスにドラッグしてから、表示するキャンバスまたはインサイトを選択します。



4. 必要に応じて、「プロパティ」をクリックして各オブジェクトのプロパティを設定します。
5. 「保存」をクリックします。

## ダッシュボード・ページと BI Publisher レポートがどのように相互作用するかの理解

ダッシュボード・ページで BI Publisher レポートの実行や表示、および BI Publisher レポートとの相互作用を行えます。

BI Publisher レポートをダッシュボード・ページに追加すると、次のオプションがあるツールバーがレポートに含められます。

- レポートのデータの分析。
- レポートのレイアウト・テンプレートの選択。
- レポートの出力形式の変更。
- レポートのエクスポート。
- プリンタや FAX、電子メール、FTP といった、使用可能な宛先にレポートを送信。
- レポートのスケジュール。

BI Publisher レポートを含むダッシュボード・ページに対してエージェントを構成する場合、次の基準に注意してください。

- BI Publisher レポートの出力書式は PDF である必要があります。
- エージェントはコンテンツを PDF 形式で配信するよう設定されている必要があります。

BI Publisher レポートを含むダッシュボード・ページまたはブリーフィング・ブックを特定の形式で印刷できます。

BI Publisher レポートを含むダッシュボード・ページを印刷する場合、またはブリーフィング・ブックにページを含める場合、次の点に注意する必要があります。

- PDF 形式のブリーフィング・ブックを印刷する場合および BI Publisher レポートの出力書式が PDF の場合、BI Publisher レポートは、ページの他のオブジェクトの後に印刷されます。PDF 形式の BI Publisher レポートを含むダッシュボード・ページを印刷するが、そのダッシュボード・ページがブリーフィング・ブックの一部ではない場合、BI Publisher レポートは印刷されません。
- MHTML 形式のダッシュボード・ページまたはブリーフィング・ブックを印刷する場合、BI Publisher レポートは印刷されません。

## ダッシュボードとページのスタイルおよび動作の構成

ダッシュボード・プロパティを使用して、ダッシュボードとページのスタイルおよび動作を構成します。たとえば、チーム・メンバーがダッシュボードのページをエクスポート、リフレッシュまたは印刷できるかどうかを指定します。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. ダッシュボードのスタイルおよび動作を指定するには、「ツール」をクリックし、「**ダッシュボードのプロパティ**」を選択します。

「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログで、目的のプロパティを変更します。  
例:

- ログ、ブランド、ページの色およびリンクの色などのダッシュボード・プロパティを変更する場合は、「**スタイル**」を使用して、使用可能なダッシュボード・スタイルのリストから選択します。管理者がスタイルを作成し、ダッシュボード・ビルダーおよびユーザーが使用できるようにします。リストにないスタイルを使用する場合は、自分用の新しいスタイルの作成を管理者に依頼してから、新しいブラウザ・セッションを起動して再試行してください。
- ダッシュボード・レベルで分析に含めるレポート・リンク(「分析」、「編集」、「リフレッシュ」、「印刷」、「エクスポート」、「ブリーフィング・ブックに追加」および「コピー」)を指定する場合は、「**ダッシュボード・レポート・リンク**」を使用します。これらのリンクは、ダッシュボード・ページ・レベルおよび分析レベルで設定し、ダッシュボード・レベルで設定したリンクをオーバーライドできます。
- 有効な HTML マークアップ(JavaScript を含む)を使用してコンテンツを書式設定する管理者権限がある場合、「**HTML マークアップを含みます**」を使用します。
- 非表示のページに移動する際にページ見出しを表示する場合は、**非表示のページ**を使用します。

3. ダッシュボードで受信ナビゲーション・パラメータを処理する方法を指定するには、「ツール」をクリックし、「**拡張ページ・プロパティ**」を選択します。

受信ナビゲーション・パラメータは、外部ポータルまたはアプリケーションと共有している Oracle Analytics コンテンツの動作を制御します。たとえば、ナビゲーション・パラメータは、ユーザーをダッシュボードの特定のページに移動させ、PDF 出力のコンテンツを書式設定できます。「拡張ページ・プロパティ」ダイアログで、「**受信ナビゲーション・オプション**」を使用して、ナビゲーション・パラメータをダッシュボードのすべてのページに適用するか、ランディング・ページにのみ適用するかを指定します。

次のナビゲーション・リンクの動作を構成できます：

- **プロンプト URL** - これらのリンクは、ユーザーを特定のダッシュボード・ページに移動させ、書式設定パラメータを含むことができます。たとえば、「プロンプト URL」は、特定のページに直接移動し、PDF 出力のコンテンツを書式設定できます。
  - **Go URL** - これらのリンクは、コンテンツの外観および動作方法を制御するパラメータを含みます。たとえば、「Go URL」は、ユーザー名とパスワードに加え、ページ上の結果をリフレッシュするコマンドを含むことができます。
  - **「BI コンテンツにナビゲート」アクション** - これらのリンクは、アクション・フレームワークを使用して、ユーザーをコンテンツの特定の領域に移動させます。
4. ナビゲーション・リンクのタイプごとに、ナビゲーション・パラメータの範囲を選択します。
    - **「ダッシュボード」** をクリックして、ダッシュボードのすべてのページにナビゲーション・パラメータを適用します。たとえば、「プロンプト URL」リンクが(&Action=Print を使用して) PDF 出力のコンテンツを書式設定する場合、ダッシュボードのすべてのページが PDF への出力用に書式設定されます。
    - **「ページ」** をクリックして、ランディング・ページにのみナビゲーション・パラメータを適用します。たとえば、「プロンプト URL」リンクが(&Action=Print を使用して) PDF 出力のコンテンツを書式設定する場合、ランディング・ページのみが PDF への出力用に書式設定されます。
  5. 「OK」、「保存」の順にクリックします。

## ダッシュボード・ページに追加されたオブジェクトのプロパティの変更

ダッシュボード・ページに追加されたオブジェクトのプロパティを変更できます。

たとえば、ブランド売上分析の列プロパティを変更して、見出しを 14 ポイント、太字、Helvetica フォントで表示するように指定できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. オブジェクトが含まれているページに移動します。
3. 「ページ・レイアウト」領域でオブジェクトにマウス・ポインタを合せてオブジェクトのツールバーを表示し、「**プロパティ**」をクリックします。

オブジェクト・タイプに応じて、編集オプションのメニューまたは「プロパティ」ダイアログを表示します。

4. プロパティを変更します。

たとえば、ダッシュボード・セクションの場合には、「名前変更」を選択してデフォルトのセクション名を変更でき、ダッシュボード Web リンクの場合には、キャプションまたはターゲット URL を変更できます。

5. 変更内容を保存します。

## ダッシュボード・ページのオブジェクトの削除

オブジェクトの追加後、オブジェクトが不要になった場合、オブジェクトを削除できます。

たとえば、前年度のブランド売上分析を、現行年度の分析に置き換えるために販売業績ダッシュボードから削除できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. 削除するオブジェクトが含まれているページに移動します。
3. 「ページ・レイアウト」領域でオブジェクトにマウス・ポインタを合わせてオブジェクトのツールバーを表示し、「削除」をクリックします。

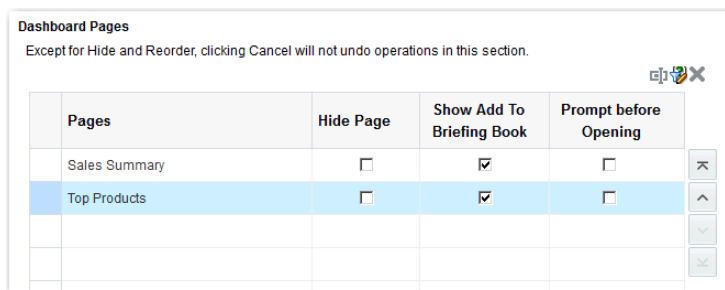
## ダッシュボード・ページの削除

現在のダッシュボード・ページ、または 1 つ以上のダッシュボード・ページを削除できます。

たとえば、販売業績ダッシュボードから 2 ページ目と 3 ページ目を削除して、最新のブランド売上分析を含むページのみを保持できます。

1 つ以上のダッシュボード・ページを削除できます:

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. 「ツール」をクリックし、「ダッシュボードのプロパティ」を選択します。
3. 削除する各ページに対して:
  - a. ダイアログの「ダッシュボード・ページ」領域で、ページを選択します。
  - b. 「ダッシュボード・ページ」ツールバーで、「削除」をクリックします。

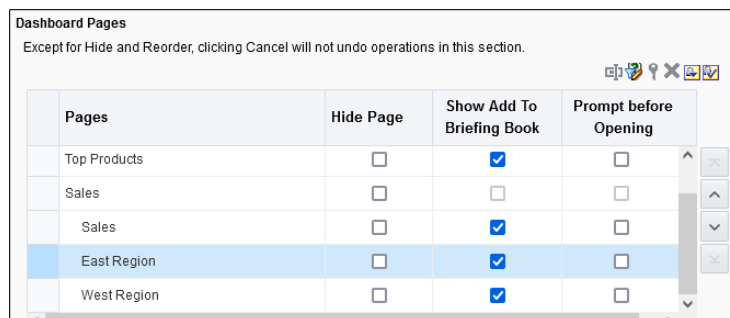


- c. 削除を確認します。
4. 「OK」をクリックします。

## ダッシュボード・サブページの削除

ダッシュボード・ページから 1 つ以上のダッシュボード・サブページを削除できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. 「ツール」をクリックし、「ダッシュボードのプロパティ」を選択します。
3. 削除するサブページごとに:
  - a. ダイアログの「ダッシュボード・ページ」領域で、削除するダッシュボード・サブページを選択します。



- b. 「ダッシュボード・ページ」 ツールバーで、「削除」をクリックします
  - c. 削除を確認します。
4. 「OK」をクリックします。

## ダッシュボードおよびダッシュボード・ページのレイアウトの作成および管理

印刷またはエクスポートのためにダッシュボードのレイアウトを指定および管理できます。

- [印刷とエクスポートのカスタム・レイアウトについて](#)
- [カスタム・レイアウトの作成](#)
- [カスタム・レイアウトの編集、置換または除去](#)
- [BI Publisher のカスタム印刷レイアウトでサポートされないアイテム](#)

### 印刷とエクスポートのカスタム・レイアウトについて

ダッシュボード全体または単一のダッシュボード・ページの印刷およびエクスポート用にカスタム・レイアウトを作成および定義できます。

カスタム・レイアウトでは次のことができます:

- 高品質で出力されたダッシュボード・コンテンツの生成。
- Excel 用にカスタマイズされたダッシュボード・コンテンツのエクスポート。

カスタム・レイアウトを作成すると:

- ダッシュボード・ページが BI Publisher にエクスポートされて、次の項目が自動的に生成されます:
  - エクスポートされたダッシュボード・レイアウトに基づくレイアウトが設定された BI Publisher レポート

- ダッシュボード・ページ・コンポーネントのデータを取得するデータ・モデル
- **BI Publisher** レポート・エディタが新しいブラウザ・ウィンドウで開き、自動生成されたレイアウトがサムネイルとして表示されます。レポート・エディタでは、レイアウトの編集や削除、追加ができます。

印刷レイアウトを作成している場合、**BI Publisher** では、階層列やマップ・ビューといった一部のカスタマイズおよびビューはサポートされません。

**BI Publisher** でカスタム・レイアウトを保存すると、それがダッシュボード用に使用可能となり、「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログの「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」領域に表示されます。

データ・モデルまたはレイアウトを **Oracle BI** プレゼンテーション・カタログから手動で削除すると、関連付けられた **BI Publisher** レポートは機能しなくなり、そのレイアウトは使用できなくなります。分析を削除すると、データ・モデルとレイアウトは使用できますが、実行時に失敗します。

## カスタム・レイアウトの作成

ダッシュボード全体または単一のダッシュボード・ページの印刷およびエクスポート用に 1 つ以上のカスタム・レイアウトを作成できます。

管理者は、「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」コンポーネントの表示を制御できます。

1. 印刷またはエクスポートするダッシュボードまたはダッシュボード・ページを開きます。
2. ダッシュボード・ページ・ツールバーで、「**ツール**」をクリックして「**印刷とエクスポートのオプション**」を選択します。
3. 「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」領域でギア・アイコンをクリックして、「**レイアウトの作成**」を選択します。

**BI Publisher** レポート・エディタが新しいブラウザ・ウィンドウで開き、自動生成されたレイアウトがサムネイルとして表示されます。

4. **BI Publisher** で変更して、変更内容を保存します。
5. **BI Publisher** を閉じてダッシュボードを保存します。
6. ユーザーがカスタム・レイアウトを使用できるようにするには、次を実行します:
  - a. 「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログを開き、「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」領域に移動します。
  - b. 使用可能にする各カスタム・レイアウトについて、次を選択します。
    - **PDF:** ダッシュボード・ページの「印刷」メニューでそのレイアウトを使用できるようにします。
    - **Excel:** ダッシュボード・ページの「Excel にエクスポート」メニューでレイアウトを使用できるようにします。
  - c. 「**OK**」をクリックして「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログを閉じます。
  - d. ダッシュボードを保存します。

分析およびダッシュボードのフォント・サイズはピクセル単位であるのに対し、**Excel** のフォント・サイズはポイント単位です。そのため、分析またはダッシュボードから

Excel にエクスポートすると、フォント・サイズは分析またはダッシュボードのフォント・サイズの 75%に減少します。

## カスタム・レイアウトの編集、置換または除去

作成したカスタムの印刷レイアウトおよびエクスポート・レイアウトは編集、置換または除去できます。たとえば、レイアウトが関連付けられているダッシュボード・ページが変更された場合は、カスタム印刷レイアウトを除去できます。

1. ダッシュボードまたはダッシュボード・ページを開きます。
2. ダッシュボード・ページ・ツールバーで、「**ツール**」をクリックして「**印刷とエクスポートのオプション**」を選択します。
3. 「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログで、「印刷とエクスポートのカスタム・レイアウト」領域に移動してギア・アイコンをクリックし、次のいずれかを選択します。
  - **レイアウトの作成と編集** - ダッシュボード・ページが変更された場合、既存の印刷レイアウトが正しく動作しない可能性があることを示す警告メッセージが表示されます。次のいずれか 1 つを選択し、「**OK**」をクリックします。
    - **既存レイアウトを保持** - BI Publisher レポート・エディタが新しいブラウザ・ウィンドウで開き、既存のレイアウトを編集できます。
    - **既存レイアウトを除去して新規レイアウトを作成** - BI Publisher レポート・エディタが新しいブラウザ・ウィンドウで開き、新規レイアウトを作成できます。
  - **レイアウトの置換** - 既存のすべてのレイアウトが置換されることを示す警告メッセージが表示されます。「**OK**」をクリックすると、関連付けられた BI Publisher レポートおよびデータ・モデルが削除され、新規レイアウトが自動生成されます。BI Publisher レポート・エディタが新しいブラウザ・ウィンドウで開き、新規レイアウトを作成できます。
  - **レイアウトの除去** - 既存のすべてのレイアウトが除去されることを示す警告メッセージが表示されます。「**OK**」をクリックすると、レイアウトと、関連付けられた BI Publisher レポートおよびデータ・モデルが除去されます。
4. レイアウトの編集、置換または除去が終了した後、「**OK**」をクリックして「印刷とエクスポートのオプション」ダイアログを閉じます。
5. ダッシュボードを保存します。

## BI Publisher のカスタム印刷レイアウトでサポートされないアイテム

カスタム印刷レイアウトでサポートされる項目は限定的です。

BI Publisher でアイテムがサポートされない場合、そのアイテムはレイアウトから除去され、サポートされていないアイテムについてその理由を示すメッセージが表示されます。



## ダッシュボードの印刷

ダッシュボードは電子フォームに表示するのが一般的です。ダッシュボードのページを PDF または HTML 形式で参照する場合は、ダッシュボードを簡単に印刷できます。

たとえば、在庫管理ダッシュボード・ページを印刷して、サプライヤの工場を訪問するときに参照できます。ここでは、外部のコンピュータ・デバイスの使用は許可されていません。

1. ダッシュボードを開きます。
2. 印刷するダッシュボード・ページに移動します。
3. 「ページ・オプション」をクリックして、「印刷」を選択します。
4. 「印刷可能 PDF」または「印刷可能 HTML」を選択します。
5. Adobe Acrobat またはブラウザ・ウィンドウを開き、そこから印刷します。

## ブリーフィング・ブック内のダッシュボード・ページの編成

ブリーフィング・ブック内のダッシュボード・ページは編成できます。

トピック:

- [新規または既存のブリーフィング・ブックへのコンテンツの追加](#)
- [ブリーフィング・ブックのコンテンツの編集](#)
- [ブリーフィング・ブックのダウンロード](#)
- [ブリーフィング・ブックのリストをダッシュボード・ページに追加します](#)

## 新規または既存のブリーフィング・ブックへのコンテンツの追加

ダッシュボード・ページまたは個々の分析のコンテンツを、新規または既存のブリーフィング・ブックに追加できます。ブリーフィング・ブックは、ダッシュボード・ページおよび個々の分析の静的または更新可能なスナップショットの集まりです。

たとえば、四半期ごとに地域別売上分析のコンテンツをブリーフィング・ブックに追加して、四半期ごとの売上をレビューできます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. 追加するページまたは追加する分析を含むページに移動します。
3. 個々の分析の結果をブリーフィング・ブックに追加するには:
  - a. ダッシュボードを編集して、「ツール」、「ページ・レポート・リンク」の順に選択します。
  - b. 「カスタマイズ」オプションを選択し、「ブリーフィング・ブックへの追加」をクリックします。



- c. 「OK」をクリックします。
4. ダッシュボード・ページのコンテンツをブリーフィング・ブックに追加するには:
  - a. 「ページ・オプション」をクリックし、「ブリーフィング・ブックへの追加」を選択します。
  - b. 「ブリーフィング・ブックのコンテンツの保存」ダイアログで、「参照」をクリックします。
  - c. 「名前を付けて保存」ダイアログで、コンテンツを保存する場所を選択し、「OK」をクリックします。

## ブリーフィング・ブックのコンテンツの編集

ブリーフィング・ブックを編集して、コンテンツの並替えや削除、およびコンテンツ・タイプ、ナビゲーション・リンクのプロパティとコンテンツの説明の変更を行えます。

たとえば、ブリーフィング・ブックを編集して、ブランド売上分析データの期間を反映するように、コンテンツの説明を変更できます。

1. グローバル・ヘッダーで「カタログ」をクリックし、カタログ・ページを表示します。
2. 編集対象のブリーフィング・ブックに移動し、「編集」をクリックします。
3. 「ブリーフィング・ブックの編集」ダイアログで、次のようにコンテンツを変更します。
  - a. コンテンツを選択します。
  - b. 「ページの編集」をクリックして、コンテンツ・タイプ、更新可能なコンテンツに対するナビゲーション・リンクの数またはコンテンツの説明を変更します。
  - c. 「OK」をクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

## ブリーフィング・ブックのダウンロード

ブリーフィング・ブックをダウンロードできます。

次のことが可能です:

- コンピュータにブリーフィング・ブックを MHTML 形式でダウンロードし、共有してオフラインで表示します。
- ブリーフィング・ブックを PDF 形式でダウンロードし、印刷します(Adobe Reader が必要)。PDF 版のブリーフィング・ブックには、自動生成された目次が含まれます。

たとえば、その年度のブランド売上分析をすべて含むブリーフィング・ブックをダウンロードできます。ダウンロード後、Adobe Reader でブリーフィング・ブックを表示して、販売プレゼンテーション用に印刷できます。

1. グローバル・ヘッダーで「カタログ」をクリックし、カタログ・ページを表示します。
2. ダウンロードするブリーフィング・ブックに移動します。
3. 次のアクションのいずれかを実行します。
  - ブリーフィング・ブックを PDF 形式でダウンロードするには、「PDF」をクリックし、ファイルを開くか保存します。
  - ブリーフィング・ブックを MHTML 形式でダウンロードするには、「Web アーカイブ (.mht)」をクリックし、ファイルを開くか保存します。

ダウンロードしたブリーフィング・ブックは.mht ファイル拡張子で保存され、ブラウザで開くことができます。ブリーフィング・ブックを電子メールで送信したり、共有できます。

## ブリーフィング・ブックのリストをダッシュボード・ページに追加します

ブリーフィング・ブックのリストをダッシュボード・ページに追加できます。

たとえば、ブランド売上分析が保存されているブリーフィング・ブックのリストを販売業績ダッシュボード・ページに追加できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. ブリーフィング・ブックのリストの追加先のページに移動します。
3. 「ダッシュボード・オブジェクト」ペインから、フォルダ・オブジェクトをセクションにドラッグ・アンド・ドロップします。
4. 「ページ・レイアウト」領域でフォルダ・オブジェクトにマウス・ポインタを合わせてオブジェクトのツールバーを表示し、「プロパティ」をクリックします。
5. 「フォルダ・プロパティ」ダイアログの「フォルダ」フィールドに、リストするブリーフィング・ブックを格納するフォルダを入力します。
6. 「展開」ボックスで、フォルダを展開して表示するかどうかを指定します。
7. 「OK」をクリックし、「保存」をクリックしてダッシュボードを保存します。

## デフォルトの選択項目を含むダッシュボード・ページの表示時間の改善

ダッシュボード・ページの表示に要する時間を改善できます。

特定の状況では、ダッシュボード・ページがブラウザに表示されるまでに少し時間がかかる可能性があります。ページが表示される際に、プロンプトの選択項目に基づいてユーザーが分析で表示することを希望していた値が表示される場合があります。分析のコンテンツがダッシュボード・ページに表示される前に、(デフォルトのプロンプト値を使用せずに)ユーザーによるプロンプト値の指定を可能にできます。このようにコンテンツの表示を最初に確認することによって、デフォルトのプロンプト選択項目を含むページを表示するための待機時間が改善されます。分析のコンテンツは、ユーザーがプロンプトに回答するまでページに表示されません。その他のオブジェクト(ダッシュボード・プロンプト、テキストなど)は表示されます。

たとえば、販売業績ダッシュボード・ページにブランド売上分析を表示する前に、対象とする地域の指定を要求できます。

分析を表示する前に値の指定をユーザーに要求する場合は、次のように処理されます。

- ページが完全にロードされていないことを示すメッセージがページの上部に表示されます。メッセージによって、プロンプト値を選択して「続行」をクリックすることもユーザーに指示されます。「続行」をクリックすると、ユーザーが指定したプロンプト値を使用して、コンテンツがページに表示されます。ユーザーがプロンプト値を指定しない場合、分析はデフォルトのプロンプト値で表示されます。

- ページには、まだ表示されていないオブジェクトに関する静的な情報が表示されます。この情報には、オブジェクト名、オブジェクト・ビューを表すアイコン、ビュー名およびオブジェクトの説明(使用可能な場合)が含まれます。
  - 「ページ・オプション」メニュー(ダッシュボード・ページ・ツールバーの「ページ・オプション」から表示)の「ダッシュボードの編集」以外のすべてのオプションが無効になります。
  - ダッシュボード・プロンプトの「適用」ボタンは表示されません。かわりに、ユーザーが「続行」をクリックすると、すべてのプロンプト値が自動的に適用されます。
1. 編集するダッシュボードを開きます。
  2. 「ツール」をクリックし、「ダッシュボードのプロパティ」を選択します。  
「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログが表示されます。
  3. 「ダッシュボード・ページ」領域でページを特定して、「開く前にプロンプト」を選択します。

| Pages         | Hide Page                | Show Add To Briefing Book           | Prompt before Opening               |
|---------------|--------------------------|-------------------------------------|-------------------------------------|
| Sales Summary | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> |
| Top Products  | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/>            |

4. 「OK」をクリックします。
5. 「保存」をクリックします。

## ダッシュボード状態の保存および復元

ダッシュボード・ページ用に作成したパーソナライズ済設定を保存して、後でこれらの設定をダッシュボードに適用できます。

ダッシュボード・ページを使用している間に、次のタイプの設定を行うことがよくあります。

- フィルタ
- プロンプト
- 列のソート
- 分析のドリル
- セクションの展開と縮小

カスタマイズとして設定を保存した場合、ダッシュボード・ページにアクセスするたびにこれらを手動で選択する必要がなくなります。

### トピック:

- [ダッシュボード・ページのカスタマイズの保存](#)
- [保存されたカスタマイズの適用](#)
- [保存済カスタマイズの編集](#)

- 現在のカスタマイズのクリア

## ダッシュボード・ページのカスタマイズの保存

自分、または作成者(コンシューマ以外)ロールを持つ他のユーザーが使用するカスタマイズを保存できます。カスタマイズを自分または他のユーザーのダッシュボード・ページのデフォルト・カスタマイズにするかどうかも指定できます。

たとえば、販売業績ダッシュボードのカスタマイズを保存できます。カスタマイズによって、権限を持つ営業マネージャは、ブランド売上分析のカスタマイズされたビューを表示できます。

1. ダッシュボードを開きます。
2. カスタマイズを保存するページに移動します。
3. パーソナライズ設定を行います。
4. 「ページ・オプション」をクリックして、「**現在のカスタマイズの保存**」を選択します。
5. カスタマイズについてわかりやすい名前を入力し、カスタマイズを誰のために保存するかを指定します。
6. 「OK」をクリックします。

## 保存されたカスタマイズの適用

自分で保存したカスタマイズを個人で使用するために適用できます。他のユーザーが保存したカスタマイズを自分用に適用することもできます。

たとえば、営業チームのメンバー別ブランド売上分析のカスタマイズ・ビューに対して作成された、共有の営業チーム・カスタマイズを適用できます。

1. ダッシュボードを開きます。
2. 適用するカスタマイズを含むページに移動します。
3. 「ページ・オプション」をクリックして、「**保存されたカスタマイズの適用**」を選択します。  
先頭に自分で保存したカスタマイズが表示され、その後に共有の保存されたカスタマイズが表示されます。
4. リスト内の保存済カスタマイズをクリックし、ダッシュボード・ページに適用します。

## 保存済カスタマイズの編集

カスタマイズの名前変更と削除、およびデフォルトとして使用するカスタマイズの変更を行うことができます。

たとえば、デフォルトのカスタマイズを、販売業績ダッシュボードに保存したカスタマイズに変更できます。

1. ダッシュボードを開きます。
2. 編集するカスタマイズが含まれているページに移動します。

3. 「ページ・オプション」をクリックし、「保存済カスタマイズの編集」を選択します。
4. 必要に応じて、カスタマイズを名前変更または削除したり、デフォルトのカスタマイズを変更します。
5. 「OK」をクリックします。

## 現在のカスタマイズのクリア

フィルタ、プロンプト、列のソート、分析でのドリル、セクションの展開と縮小など、項目に対する選択が希望通りでない場合は、現在のカスタマイズをクリアできます。

たとえば、ブランド売上分析の表示を縮小するカスタマイズをクリアできます。

現在のカスタマイズをクリアするには、「ページ・オプション」をクリックし、「マイ・カスタマイズのクリア」を選択します。現在のカスタマイズがクリアされます。

## ダッシュボード・ページの公開

ダッシュボード・ページを共有ダッシュボードに発行して、他のユーザーが使用できるようにできます。

ダッシュボード・ページを公開する場合、次のようになります。

- ダッシュボード・ページのコンテンツが宛先ダッシュボードにコピーされ、その参照が更新されます。
- 共有コンテンツへの参照は保持されます。
- ダッシュボード・ページの未保存のコンテンツは保存済コンテンツとともに公開されます。
- 公開されたダッシュボードを表示する他のユーザーが、そのページのオブジェクトに対して適切な権限を持っていることを確認します。たとえば、ページに BI Publisher レポートが含まれる場合、ユーザーがそのレポートを表示する権限を持っている必要があります。

1. 編集用にダッシュボードを開き、公開するページにナビゲートします。

2. 「ツール」()をクリックし、「ダッシュボードへのページの公開」を選択します。

ダッシュボード・ページに未保存のコンテンツがある場合はメッセージが表示されます。「OK」をクリックして公開します。

3. 「ダッシュボードへのページの公開」ダイアログで、「ダッシュボード」フィールドに宛先ダッシュボードを指定します。

宛先ダッシュボード、ページや分析、プロンプトといったコンテンツがある場合はメッセージが表示されます。「OK」をクリックして宛先ダッシュボードの既存のコンテンツを置換します。

4. 5. 「OK」をクリックしてページを宛先ダッシュボードに発行します。

## ダッシュボード・ページへのリンク

ダッシュボード・ページへのリンクを作成すると、他のユーザーがそのページを表示できるように簡単に設定できます。

たとえば、販売業績ダッシュボードへのリンクを作成し、チーム・メンバーにそのリンクを電子メールで送信できます。

**トピック:**

- [ブックマーク・リンクについて](#)
- [ダッシュボード・ページへのリンクの作成](#)

## ブックマーク・リンクについて

ブックマーク・リンクは、ダッシュボード・ページへのパスとページの状態の全側面を取得する URL です。

ブックマーク・リンクを作成すると、次のことができます。

- リンクをブックマークとして保存し、後でまったく同じページ・コンテンツに戻ることができます。
- このリンクをコピーして他のユーザーに送信すると、自分が表示している内容とまったく同じコンテンツを他のユーザーが表示できます。送信先のユーザーがこれを実行できるのは、自分と同じ権限がそのユーザーにあり、そのページにアクセスできる場合です。

ブックマーク・リンクを作成すると、ダッシュボード・ページの状態が、非表示のブックマーク・オブジェクトとしてカタログに保存されます。オブジェクトを保存するデフォルトの日数は 30 日です。

## ダッシュボード・ページへのリンクの作成

ダッシュボード・ページへのリンクを作成できます。

1. ダッシュボードを開きます。
2. リンクを作成するページに移動します。
3. 「ページ・オプション」メニューから、「**ブックマーク・リンクの作成**」を選択します。

リンクがブラウザのアドレス・バーに表示されます。リンクがブックマーク・リンクの場合は、ブックマークとして保存するか、またはコピーして他のユーザーに送信できます。

ダッシュボードを新しい結果で置換するように設定されている分析をドリルできます。新しい結果をダッシュボードに直接表示するのではなく、置換することができます。この場合は、新しい結果の下に「**ブックマーク・リンクの作成**」オプションがリンクとして表示されます。このオプションは「ページ・オプション」メニューに表示されません。

# 19

## 分析用データのフィルタリングと選択

この章では、分析のデータをフィルタ処理して選択する方法について説明します。

### トピック:

- データをフィルタ処理して選択するための一般的なワークフロー
- フィルタおよび選択ステップについて
- 列に対するフィルタの作成
- 列に対するフィルタの編集
- フィルタの再利用
- 保存済分析のフィルタとしての使用
- 高度な手法: ダッシュボード・プロンプトと分析プロンプトとの相互作用
- データの選択の絞込み
- グループと計算項目を使用したメンバーの操作

## データをフィルタ処理して選択するための一般的なワークフロー

次に、分析に表示するデータをフィルタ処理して選択するための一般的なタスクを示します。

| タスク       | 説明                                            | 詳細情報                         |
|-----------|-----------------------------------------------|------------------------------|
| 分析の作成     | 分析に使用する列を選択して配置します。                           | <a href="#">最初の分析の作成</a>     |
| フィルタの作成   | 分析の実行時に表示される結果を限定します。                         | <a href="#">列に対するフィルタの作成</a> |
| フィルタの編集   | フィルタの演算子および値を変更します。                           | <a href="#">列に対するフィルタの編集</a> |
| フィルタの保存   | フィルタをカタログまたは分析に保存します。                         | <a href="#">フィルタの保存</a>      |
| 選択ステップの作成 | データを表示するメンバー、新規グループ、既存グループ、新規計算項目および条件を選択します。 | <a href="#">選択ステップの作成</a>    |
| グループの作成   | 分析に表示される列の値をグループ化します。                         | <a href="#">グループと計算項目の作成</a> |
| 計算項目の作成   | 列の値に関数を適用して、新規の値を計算します。                       | <a href="#">グループと計算項目の作成</a> |

## フィルタおよび選択ステップについて

フィルタと選択ステップの両方を使用して、分析の結果を限定します。たとえば、上位 10 人の成績優秀者や最も利益率の高い顧客をリストできます。フィルタは、選択ステップが適用される前に列に適用されます。

- フィルタは、問合せの集計前に列に直接適用されます。フィルタは、問合せおよびメジャーの結果値に影響を与えます。たとえば、集計すると 100 になるメンバーのリストがあるとします。時間の経過とともに、フィルタ基準に合うメンバーが増え、集計が 200 になります。
- 選択ステップは問合せの集計後に適用され、表示されているメンバーにのみ作用し、結果の集計値には作用しません。たとえば、集計すると 100 になるメンバーのリストがあるとします。選択ステップを使用してメンバーの 1 つを除去した場合、集計は 100 のままです。

## プロンプト・フィルタについて

プロンプト・フィルタは、演算子が「**プロンプトで使用**」に設定されているフィルタです。この演算子は、テキスト、数値または日付を含む列に対して有効です。

フィルタの列に対して「**プロンプトで使用**」演算子を選択すると、プロンプトによるフィルタ処理の対象であることを示すフラグが設定されます。プロンプトが使用されると、結果には、プロンプトされた列のデータがユーザーの選択と一致するレコードのみが含まれます。

事前にフィルタ処理された値が要求されないプロンプトに列を含めるには、「**プロンプトで使用**」演算子を使用する必要があります。

## 列に対するフィルタの作成

列に対するフィルタを作成できます。



### トピック:

- [インライン・フィルタおよび名前付きフィルタの作成](#)
- [フィルタの値の指定](#)
- [フィルタへの EVALUATE\\_PREDICATE 関数の埋込み](#)
- [フィルタの組合せとグループ化](#)
- [フィルタの保存](#)

フィルタでは、分析の実行時に表示される結果を限定します。分析に対して選択した列およびフィルタによって、結果に含まれる内容が決定されます。表示する必要がある結果のみが表示されるように、フィルタ基準を指定します。



## インライン・フィルタおよび名前付きフィルタの作成

ほとんどの場合、フィルタは 1 つの分析でのみ使用するために作成してインラインで保存します。すべての分析やダッシュボードでフィルタを再利用するために、名前付きフィルタを作成することもできます。フィルタを再利用する必要がないかぎり、インライン・フィルタを作成します。

たとえば、営業コンサルタントは、担当しているブランドのみの収益を分析できます。

### 「基準」タブの「選択された列」ペインからインライン・フィルタを作成

1. 編集する分析を開きます。
2. 「基準」タブの「選択された列」ペインで、列名の横にある「オプション」をクリックし、「フィルタ」を選択します。

### 「基準」タブの「フィルタ」ペインからインライン・フィルタを作成

1. 編集する分析を開きます。
2. 「基準」タブの「フィルタ」ペインで、「現在のサブジェクト領域のフィルタを作成」をクリックします。
3. メニューから列名を選択します。

### ホーム・ページから名前付きフィルタを作成

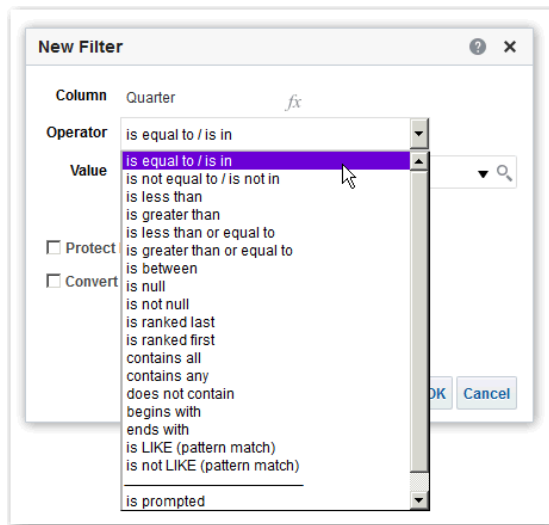
1. クラシック・ホーム・ページの「作成」ペインで、「分析およびインタラクティブ・レポート」の下にある「詳細」をクリックし、次に「フィルタ」をクリックします。
2. 「サブジェクト領域の選択」ダイアログで、フィルタ処理するデータ・ソースを選択します。「新規フィルタ」ダイアログが表示されます。

## フィルタの値の指定

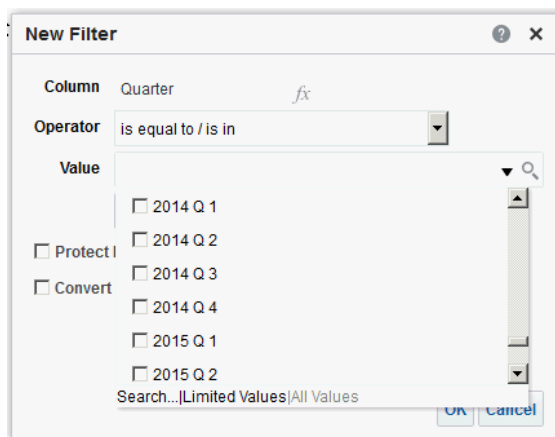
興味のある値のみを分析に表示するフィルタの値を指定できます。

たとえば、ブランド売上分析で、フィルタによって分析結果を 3 年間の第 1 四半期の値のみに限定できます。この結果、これらの四半期の年度ごとの売上達成状況を知ることができます。

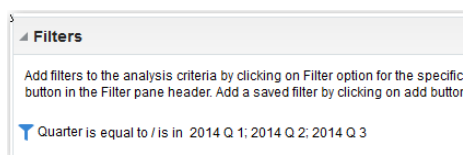
1. 「新規フィルタ」ダイアログで、「次と等しい次に存在する」など、適切な演算子を選択します。



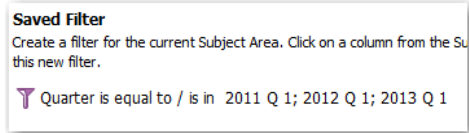
2. リストから値を選択するか、または「検索」アイコンをクリックして、選択対象の他の値を検索します。



3. オプション: 「フィルタの保護」を選択し、プロンプトでフィルタが上書きされないようにします。
  4. オプション: 「このフィルタを SQL に変換する」を選択します。
  5. 「OK」をクリックします。
- インライン・フィルタの場合、フィルタは「基準」タブの「フィルタ」ペインに表示されます。



- 名前付きフィルタの場合、フィルタは「保存済みフィルタ」ペインに表示されま



値を指定した後、フィルタを名前付きまたはインラインとして保存します。

## フィルタへの EVALUATE\_PREDICATE 関数の埋込み

EVALUATE\_PREDICATE 関数は、インライン・フィルタ句として追加できます。

この関数は、フィルタ演算子で必要なインライン・フィルタ句を作成できない場合に使用できます。この関数は、戻り型がブールである SQL 関数およびデータベース関数に対してのみ使用します。この関数は、階層列、XML データ・ソース、およびすべてのマルチディメンショナル・データ・ソースとともに使用することはできません。この関数をフィルタに埋め込むには、管理者によって EVALUATE\_PREDICATE 関数の追加権限が付与されている必要があります。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「基準」タブの「フィルタ」ペインで、「詳細オプション」をクリックして「EVALUATE\_PREDICATE 関数の追加」を選択します。
3. 「新規 EVALUATE\_PREDICATE 関数」ダイアログに関数の式を入力します。
4. 「OK」をクリックして、「フィルタ」ペインに EVALUATE\_PREDICATE 関数を追加します。

たとえば、EVALUATE\_PREDICATE 関数を使用した次のフィルタ句を追加して、「Products.P4 Brand」列が 6 文字未満である値を除外できます。

```
SELECT
 0 s_0,
 "A - Sample Sales"."Products"."P3 LOB s_1,
 "A - Sample Sales"."Products"."P4 Brand" s_2,
 "A - Sample Sales"."Base Facts"."1- Revenue" s_3
FROM "A - Sample Sales"
Where EVALUATE_PREDICATE('length(%)>6',"A - Sample Sales"."Products"."P4
Brand").
ORDER BY 1,2,3
```

## フィルタの組合せとグループ化

複数のインライン・フィルタを組み合わせてグループ化し、SQL 文を使用せずに複雑なフィルタを作成できます。

フィルタをグループ化または組み合わせることにより、分析のデータをフィルタする優先順を定めることができます。分析や名前付きフィルタに 2 つ以上のインライン・フィルタを追加する場合、デフォルトではインライン・フィルタは **AND** ブール演算子を使用して組み合わせられます。**AND** 演算子は、分析の実行時に結果を決定するために、すべてのインライン・フィルタで指定されている基準が満たされている必要があることを示します。

分析の結果を決定するために、少なくとも 1 つのフィルタで指定されている基準が満たされている必要があることを示すには、**OR** 演算子を使用します。**OR** 演算子は、代替基準を使用して複数のフィルタのグループを作成するのに役立ちます。

1. インライン・フィルタを含む名前付きフィルタまたは分析を編集用を開きます。
2. 「基準」タブの「フィルタ」ペインで、分析に 2 つ以上のインライン・フィルタが含まれていることを確認します。あるいは、「保存済みフィルタ」ペインで、名前付きフィルタに 2 つ以上のインライン・フィルタが含まれていることを確認します。
3. 「基準」タブの「保存済みフィルタ」ペインまたは「フィルタ」ペインで、**AND** または **OR** 演算子を使用してインライン・フィルタがどのように組み合されているかを通知します。
4. インライン・フィルタの前の単語「**AND**」をクリックして、**AND** 演算子を **OR** 演算子に変更します。このようにして、**AND** および **OR** 演算子を切り替えることができます。
5. 他のインライン・フィルタの **AND** および **OR** 演算子を変更して必要なフィルタの組合せを作成します。あるいは、さらにインライン・フィルタを作成して **AND** および **OR** 演算子を変更します。
6. 「**分析の保存**」または「**フィルタの保存**」をクリックしてフィルタの組合せを保存します。

## フィルタの保存

インライン・フィルタおよび名前付きフィルタを保存できます。

「フィルタ」ペインでインライン・フィルタを作成するときに、オプションで、インライン・フィルタを名前付きフィルタとして保存できます。インライン・フィルタを名前付きフィルタとして保存した場合は、チームの他のユーザーがこのフィルタを新しい分析で使用できます。名前付きフィルタは、グローバル・ヘッダーからスタンドアロン・オブジェクトとして作成することもできます。

たとえば、カタログ内の共有フォルダに「Quarter」列のフィルタを保存できます。結果として、マネージャがこのフィルタにアクセスできます。四半期を「2011 Q1」、「2012 Q1」および「2013 Q1」に限定するフィルタを保存しているとします。マネージャは、製品売上分析でこのフィルタを使用して、これら四半期のみでの製品の業績を検索できます。

名前付きフィルタを保存するには、ツールバーの「名前を付けて保存」をクリックして、カタログ内のフォルダを指定し、「OK」をクリックします。

インライン・フィルタを名前付きフィルタとして保存するには、次を実行します。

1. 「基準」タブの「フィルタ」ペインで、「**詳細オプション**」をクリックして「**フィルタの保存**」を選択します。
2. Oracle BI プレゼンテーション・カタログで、フォルダを指定します。
3. 「OK」をクリックします。

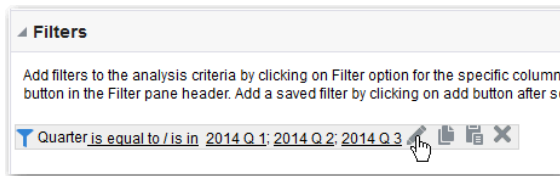
## 列に対するフィルタの編集

変更が必要な場合は、インライン・フィルタを編集できます。名前付きフィルタを編集して保存すると、フィルタに対する変更はフィルタが使用される場所に伝播されます。

たとえば、「2010 Q1」四半期のデータを含めるように「Quarter」列のフィルタを編集できます。このデータは、フィルタが適用されるすべての分析に伝播されます。

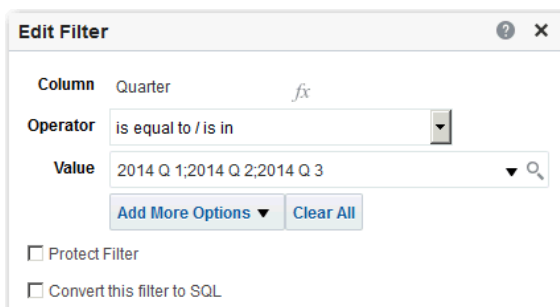
1. 「フィルタの編集」ダイアログを表示します。

たとえば、「保存済みフィルタ」ペインまたは「基準」タブの「フィルタ」ペインで、フィルタにマウス・カーソルを合せて、「**フィルタの編集**」をクリックします。



2. 「フィルタの編集」ダイアログで、次の表に記載されているオプションに対して選択を変更します。

| オプション             | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 演算子               | <p>「<b>値</b>」フィールドに指定された値に適用する演算子を選択します。「<b>演算子</b>」リストは、実行する機能(フィルタの作成、ダッシュボード・プロンプトの作成など)に基づいて移入されます。また、選択した列のタイプに基づいて移入されます。</p> <p>たとえば、「<b>値</b>」リストで選択する値より大きい値のみを使用するには、「<b>次より大きい</b>」を選択できます。「<b>値</b>」リストから <b>100,000</b> を選択すると、フィルタによって <b>100,000</b> より大きい列の値が使用されます。この情報を分析に使用して、業績が高い製品に絞り込むことができます。</p> |
| 値                 | <p>選択する列のメンバーが含まれているリストで、1 つまたは複数の値を指定します。値は、フィールドに手動で入力したり、検索することもできます。</p> <p>たとえば、分析の「<b>Products</b>」列用に作成したフィルタを編集するとします。「<b>値</b>」フィールドには、列からの製品のリストが格納されます。選択した演算子に応じて、分析に含める 1 つ以上の製品を選択できます。</p>                                                                                                                 |
| フィルタの保護           | <p>フィルタの上書きを尋ねるプロンプトを回避するには、このオプションを選択します。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| このフィルタを SQL に変換する | <p>手動で編集できる SQL WHERE 句にフィルタを変換するには、このオプションを選択します。フィルタを SQL コードに変換すると、そのフィルタは「フィルタの編集」ダイアログに表示されなくなり、編集できません。</p>                                                                                                                                                                                                         |



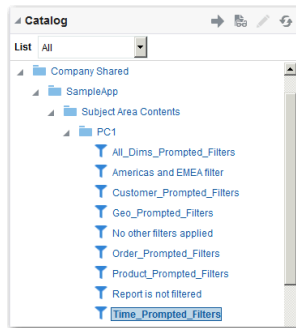
3. 「OK」をクリックします。

## フィルタの再利用

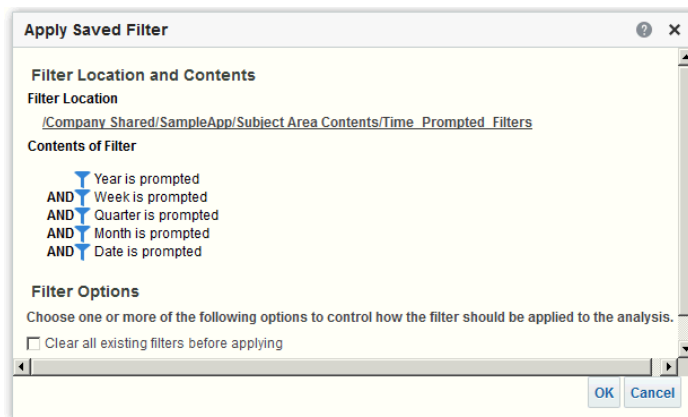
カタログに名前付きフィルタとして保存したフィルタは再利用できます。保存したフィルタは既存の分析に適用できます。

たとえば、「Quarter」列のフィルタをブランド売上分析に適用できます。

1. 「基準」 タブの「カタログ」 ペインで、名前付きフィルタを選択します。



2. 「詳細オプションの追加」 をクリックします。



3. 「OK」 をクリックします。

## 保存済分析のフィルタとしての使用

別の分析から返された値に基づいてフィルタを作成できます。値の列を返す任意の保存済分析を使用して、分析内の一致する列をフィルタ処理できます。

たとえば、ブランド売上分析の結果に基づいたフィルタを作成できます。

1. 名前付きフィルタ、またはインライン・フィルタを適用する分析を作成するか、開きます。
2. フィルタを見つけます。
  - 名前付きフィルタを操作する場合は、「保存済みフィルタ」 ペインを探します。「サブジェクト領域」 ペインから、フィルタを作成する列を選択します。

- インライン・フィルタを操作する場合は、「フィルタ」ペインを探します。「フィルタ」ペインのツールバーから、「**現在のサブジェクト領域のフィルタを作成**」をクリックします。フィルタを作成する列を選択します。
- 3. 「新規フィルタ」ダイアログの「**演算子**」フィールドで、「**別の分析の結果に基づく**」を選択します。
- 4. 「**保存済分析**」フィールドで、分析へのパスを入力するか、または「**参照**」をクリックして分析を探します。
- 5. 「**次の列の値を使用**」メニューから列名を選択します。
- 6. 「**関係**」フィールドで、フィルタ処理する結果と列の間の適切な関係を選択します。
- 7. 「**OK**」をクリックします。

## 高度な手法: ダッシュボード・プロンプトと分析プロンプトとの相互作用

ダッシュボード・プロンプトと分析プロンプトを組み合わせると、正確で重要なデータを瞬時に表示できます。

プロンプトを組み合わせるには様々な方法があります。

| 関連付け方法                          | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|---------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 自動関連付け                          | 自動関連付けでは、列に対して機能するプロンプトを作成すること、つまり、プロンプトをアクティブ化して適用することを前提としています。分析を作成して列プロンプトを追加すると、自動関連付けが適用されます。この方法には、「 <b>プロンプトで使用</b> 」フィルタ演算子は必要ありません。任意の保護されていないフィルタが使用されます。フィルタ演算子を「 <b>プロンプトで使用</b> 」に設定すると、自動関連付け方法より精密なレベルで、プロンプトとフィルタ間の制御を実行できます。この表の「フィルタの演算子を「 <b>プロンプトで使用</b> 」に設定」行を参照してください。 |
| 制約付きプロンプト                       | この方法をプロンプト内のいくつかの列に使用し、ユーザーのプロンプトの選択肢が後続の選択肢に基づくよう強制します。制約付きプロンプトはプロンプト・オプションのダイアログで設定でき、選択肢を絞るプロンプトを指定します。たとえば、1つの列で地域をフィルタ処理し、次の列で都市をフィルタ処理するとします。これによって、選択した地域の都市のみが表示されるように、都市の列を制約できます。                                                                                                   |
| フィルタの演算子を「 <b>プロンプトで使用</b> 」に設定 | この方法を使用して、フィルタと相互作用する複雑なプロンプトを作成します。この方法を使用すると、ダッシュボード・プロンプト、インライン・プロンプトおよびフィルタが埋込み分析にどのように適用されるかを完全に制御できます。 <a href="#">プロンプト・フィルタについて</a> を参照してください。                                                                                                                                         |
| プロンプトで選択ステップをオーバーライドするオプション     | この方法を使用すると、分析またはダッシュボードの列プロンプトを使用して、特定のメンバー選択ステップにデータの選択肢が提供されます。フィルタは階層列に使用できないため、選択ステップが、階層列にプロンプトを使用できる唯一の方法です。列の選択ステップ・セットごとに1つの選択ステップのみをプロンプトでオーバーライドできます。オーバーライド・ステップの前後のすべてのステップは指定どおりに処理されます。 <a href="#">データの選択の絞込みおよびプロンプトによる選択ステップのオーバーライド</a> を参照してください。                           |

| 関連付け方法                 | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 保護されたフィルタと保護されていないフィルタ | <p>この方法を使用して、該当する列のフィルタ値が「<b>プロンプトで使用</b>」以外に設定されている場合にダッシュボード・プロンプトがインライン・プロンプト値を提供するかどうかを決定します。保護されていないフィルタと保護されたフィルタの設定は、ダッシュボード・プロンプトとインライン・プロンプトが同じダッシュボードにある場合に使用できます。また、両方のプロンプトが同じ列に対して作成されている必要があります。</p> <p>列のフィルタ値が保護されていない場合、ダッシュボード・プロンプト値によって分析の結果が決まります。フィルタ値が「<b>プロンプトで使用</b>」以外（「<b>次と等しい/次の範囲内にある</b>」など）に設定され、フィルタが保護されたフィルタに設定されているとします。ダッシュボード・プロンプトではレポートの結果は決定できません。</p> |

## データの選択の絞込み

分析に含めるデータ・メンバーを指定すると、データ・ソースからのデータの選択が作成されます。選択ごとに、特定の列(製品、地理など)に対するメンバー・セットの基準を指定します。

各選択は 1 つ以上のステップで構成されます。ステップは、選択に影響を与える指示(テキスト"ABC"を値に含む製品メンバーの追加など)です。ステップが実行される順序は、データの選択に影響を及ぼします。各ステップはその列のすべてのメンバーに作用するのではなく、前のステップからの結果に増分的に作用します。

### トピック:

- [選択ステップの作成](#)
- [選択ステップの編集](#)
- [再利用するための選択ステップの保存](#)
- [高度な手法: 条件ステップの作成](#)

## 選択ステップの作成

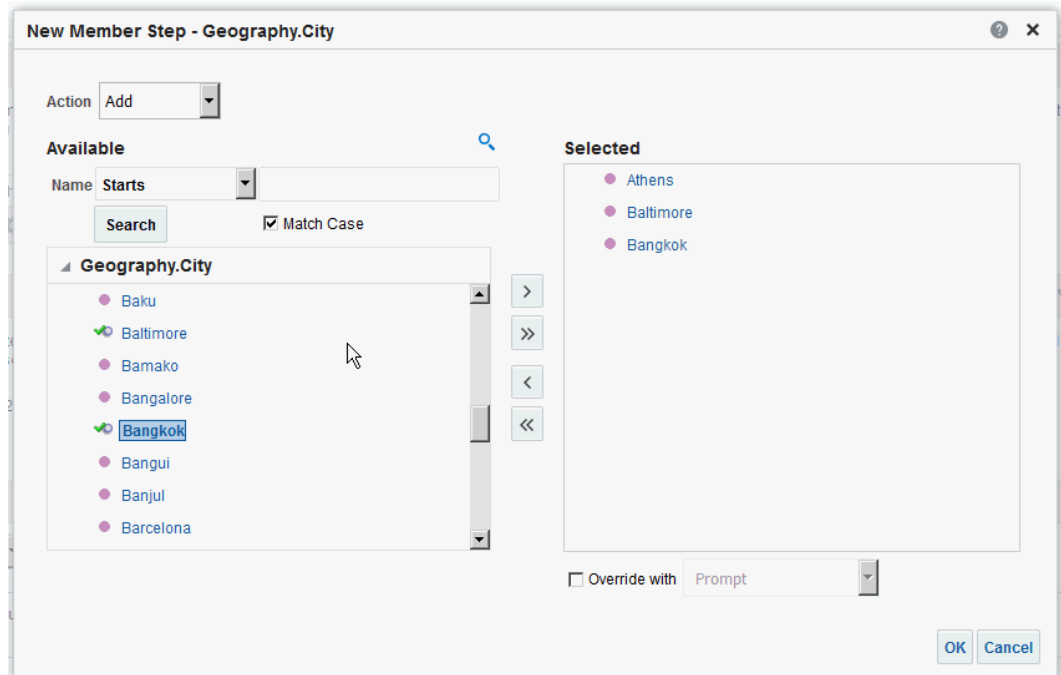
選択ステップは分析するデータの表示に役立ちます。分析に列を追加すると、暗黙的な「すべてのメンバーで開始」ステップが追加されます。「すべて」とは、フィルタ適用後の列のすべてのメンバーを意味します。

たとえば、「Office」列のメンバー(Baltimore、Austin および Athens)の基準を指定する選択ステップを作成できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「基準」タブを選択します。
3. ツールバーで**選択ステップ・ペインの表示**をクリックして、「選択ステップ」ペインを表示します。
4. 「次に、新規ステップ」をクリックして、作成するステップの種類を選択します。たとえば、このステップには選択済みのメンバーのリストを指定できます。
5. メンバー・ステップの場合は、「アクション」リストから「追加」、「保持のみ」または「除去」を選択します。



- メンバー・ステップを作成する場合は、ステップに含めるメンバーを「使用可能」領域から「選択済」領域に移動します。



- 列の値に使用するアクション、メジャーおよび演算子などの条件に対して適切な値を指定します。
- 「OK」をクリックします。

## 選択ステップの編集

分析の選択ステップまたはグループ・オブジェクトとして保存された選択ステップを編集できます。

たとえば、ブランド売上分析の「Offices」列のメンバー・ステップを編集できます。都市のリストに、必要に応じて都市を追加できます。

- 編集する分析を開きます。
- 「結果」タブをクリックします。
- 「選択ステップ」ペインで、編集する選択ステップにマウス・ポインタを合せます。
- ツールバーの鉛筆アイコンをクリックします。
- 適切な編集を行います。たとえば、列からステップに 1 つ以上のメンバーを追加します。
- 「OK」をクリックします。

## 再利用するための選択ステップの保存

選択ステップのセットを作成した場合は、それらをカタログにグループとして保存すると再利用できます。

たとえば、「Offices」列に対する選択ステップをグループ・オブジェクトとして再利用できます。これを実行すると、ブランド売上分析でそのセットをインラインで使用できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブで、「選択ステップ」ペインを表示します。
3. 列名の一番右にある「**選択ステップの保存**」をクリックします。
4. 「**保存先**」フィールドで、それを /My Folders/subfolder (個人用)に保存するか、 / shared/subfolder に保存して他のユーザーと共有します。
5. 保存した選択ステップの名前を入力します。
6. 「OK」をクリックします。

## 高度な手法: 条件ステップの作成

作成可能な選択ステップのタイプの 1 つが条件ステップです。ほとんどのユーザーは、このタスクを実行する必要はありません。

条件に基づいて列からメンバーが選択されるように指定します。条件は、メジャーや上/下値などを基準にする様々なタイプから 1 つを指定できます。このメンバー・リストは動的で、実行時に決まります。たとえば、ブランド売上に基づいてメンバーの上位 5%を選択できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「基準」タブを選択します。
3. ツールバーで**選択ステップ・ペインの表示**をクリックして、「選択ステップ」ペインを表示します。
4. 「次に、新規ステップ」をクリックし、「**条件の適用**」を選択します。
5. 「新規条件ステップ」ダイアログで、次の表の説明に従って、作成する条件のタイプを選択します。

| タイプ   | 説明                                                                                                                 |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 例外    | メジャー列の比較値を使用してメンバーを選択します。条件の例は、「Sales > Cost +10%」です。                                                              |
| 上/下   | 指定したメジャー列でメンバーをランク付けした後、指定した数のメンバーを選択します。メンバーの数、またはメンバー全体における割合を指定できます。条件の例は、「Top 10 based on Sales」および「Top 5%」です。 |
| 一致    | テキスト文字列と属性値の一致に基づいてメンバーを選択します。サンプル条件は、「abc を含む名前」です。このタイプを使用できるのは、データ型が文字列の列のみです。                                  |
| 時間/序数 | 時間の範囲および階層レベルに基づいてメンバーを選択します。条件の例は、「From July 2012 to December 2012」です。このタイプを使用できるのは、時間に関するデータ型を含む列のみです。           |

| Condition Type                   | Example                        |
|----------------------------------|--------------------------------|
| <b>Exception</b>                 |                                |
| X >= value                       | Sales >= 10000                 |
| X >= Y                           | Sales >= Costs                 |
| X >= Y + 10                      | Sales >= Costs + 10            |
| X >= Y - 5%                      | Sales >= Costs - 5%            |
| X within 10 of Y                 | Sales within 10 of Costs       |
| X not within 5% of Y             | Sales not within 5% of Costs   |
| X between 'min' and 'max' values | 5000 <= Sales <= 10000         |
| <b>Top/Bottom</b>                |                                |
| Top 10 based on X                | Top 10 based on Sales          |
| Bottom 5% based on X             | Bottom 5% based on Sales       |
| Making up to 3% based on X       | Making up to 3% based on Sales |
| <b>Match</b>                     |                                |
| Name contains 'abc'              | Name contains 'abc'            |
| All X values where Y = values    | All Cars where Color = Red     |

このダイアログに含まれるコンポーネントは、選択したタイプによって若干異なります。

6. 「アクション」ボックスで、メンバー用に作成するアクションのタイプを選択します。選択済メンバーを選択に追加したり、選択済メンバーのみを保持してその他の全メンバーを除去することを選択できます。または、選択済メンバーを選択から除去することを選択できます。
7. アクション・タイプの横にあるボックスで、条件ステップ作成の対象となるメンバーの列を選択します。
8. ダイアログの様々なフィールドに適切な値を入力します。

たとえば、条件のタイプに基づいて**演算子**を選択します。たとえば、「例外」タイプに対して「次の範囲内にある」を選択します。

9. 「次でオーバーライド」ボックスを使用して、この条件で指定する分析プロンプト、ダッシュボード・プロンプトまたは変数によって値のオーバーライドが可能かどうかを指定します。

オーバーライドの対象に応じて、プロンプト、プレゼンテーション変数、セッション変数またはレポートリ変数で特定の値をオーバーライドできます。

変数タイプを選択した場合は、フィールドに変数の名前を入力します。たとえば、**EMPLOYEE\_ID** という列が含まれるとします。その列の値をオーバーライドするセッション変数として **USER** を指定できます。ユーザーがサインインすると、列値はユーザーのユーザー名に設定されます。[高度な手法: 変数の格納値の参照](#)を参照してください。

ステップ・リストで、プロンプトまたはプレゼンテーション変数によるオーバーライドを、リスト内の 1 つのステップのみで可能にすることを指定します。

10. 「期間」領域で、メンバーが選択対象のディメンションを除く、分析のすべてのディメンションを修飾します。

これは、「例外」または「上/下」タイプの条件ステップを作成する際に行います。ディメンションごとに、含めるメンバーを選択します。特定のメンバーを選択するか、「すべて」を選択して条件の作成時にメンバーを集計することを指定します。たとえば、地域ディメンションを修飾するとします。「新規条件ステップ」ダイアログの条件に値が使用される特定の地域(**East** など)を選択できます。「すべて」を選択した場合は、すべての地域の値が集計され、条件に使用されます。

「期間」領域を使用して、修飾データ参照(QDR)を作成できます。QDR は、メジャー列に対して 1 つ以上のディメンションが単一の値を取得することを制限するための修飾子で

す。QDR は、現在のディメンション・ステータスに影響を与えずにメジャー列値を一時的に参照する場合に便利です。次に示すのは、QDR の例です。

```
Add members of Total Products (Rgd Sk Lvl) where "A - Sample Sales"."Base Facts"."1- Revenue", For: Cust Segments Hier: 'Active Singles', 'Baby Boomers' is greater than "A - Sample Sales"."Base Facts"."1- Revenue", For: Cust Segments"
```

QDR を指定する場合は、ディメンションを制限するために複数のメンバーを指定できます。複数のメンバーを指定した場合は、デフォルト集計を使用してメジャー列値が集計されます。たとえば、単位が 100 より大きい地域を表示するための条件を作成するとします。また、2010 および 2011 を指定する年ディメンションの QDR を作成し、デフォルト集計が「合計」であるとします。中部地域の 2010 および 2011 の値がそれぞれ 50 および 60 の場合は、両方の年が表示されます。これらの合計は、指定された 100 単位を超えています。

11. 「OK」をクリックします。

## グループと計算項目を使用したメンバーの操作

グループおよび計算項目を使用して、メンバーを操作できます。

### トピック:

- [グループおよび計算項目について](#)
- [グループと計算項目の作成](#)
- [グループと計算項目の編集](#)
- [グループのコンテンツの表示](#)
- [グループと計算項目の保存](#)
- [分析でのグループまたは計算項目の再利用](#)
- [グループおよび計算項目の削除](#)

## グループおよび計算項目について

表、ピボット表、トレリス、ヒート・マトリックスまたはグラフにデータを表示する方法として、グループまたは計算項目を作成できます。

グループおよび計算項目を使用して、データ・ソースに存在しない新規メンバーを列に追加できます。これらのメンバーは、カスタム・メンバーとも呼ばれます。

グループを使用して、メンバーのリストとして、またはメンバーのリストを生成する選択ステップのセットとして、列のメンバーを定義します。グループはメンバーとして表されます。

計算項目はメンバー間の計算で、ドリルできない 1 つのメンバーとして表されます。計算項目を作成する際は、選択した項目の集計方法に新規メンバーを追加します。合計、平均またはカスタム式を使用して集計できます。

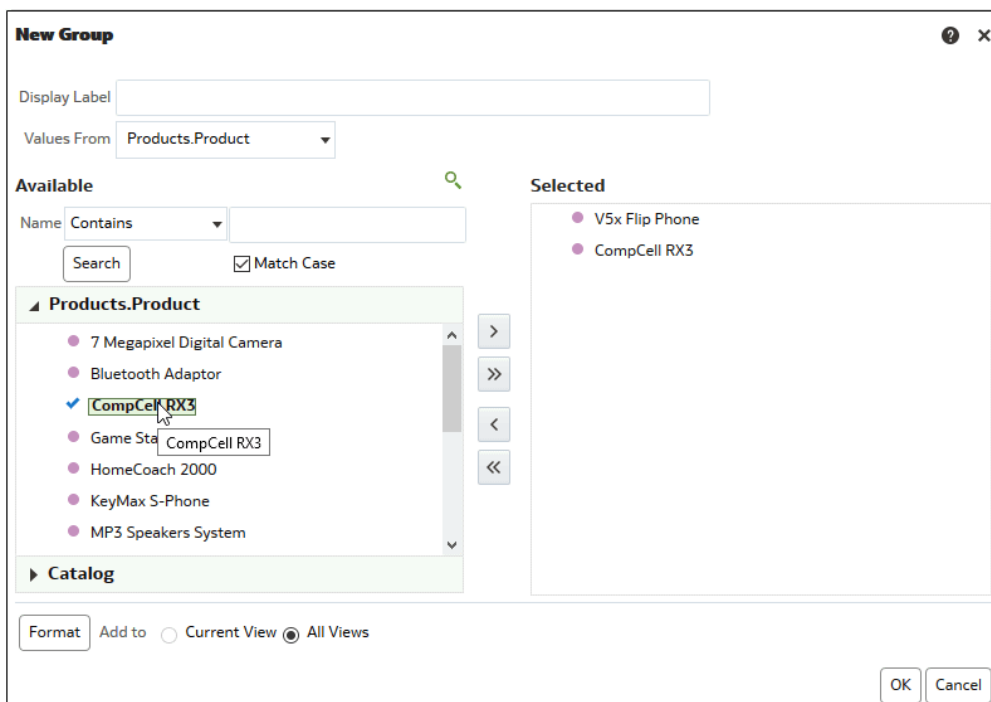
## グループと計算項目の作成

グループまたは計算項目を使用して、新しいメンバーを列に追加します。

たとえば、モバイル・デバイスに対して生成された売上金額をレビューし、その数字を他の製品タイプと比較できます。「Product」列に対して、折り畳み式携帯電話とスマートフォンが含まれる「Mobile Devices」というグループを作成できます。

### ビデオ

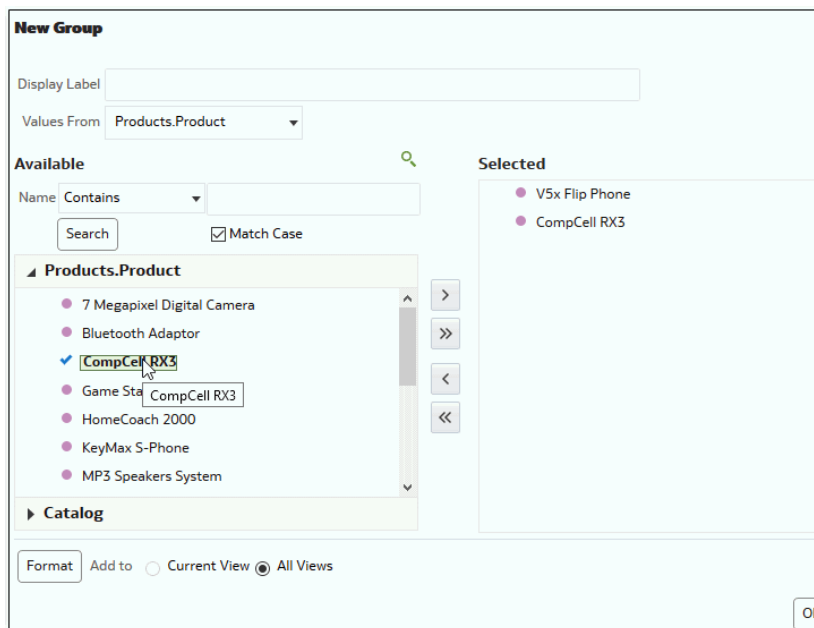
1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブのツールバーで、「**新規グループ**」または「**新規計算項目**」をクリックします。  
「新規グループ」ダイアログまたは「新規計算項目」ダイアログが表示されます。
3. 「**表示ラベル**」に、グループまたは計算項目がビューに表示された際の値を入力します。
4. 「**値の場所**」リストで、グループまたは計算項目に含める値がある列を選択します。
5. 計算項目を作成する場合は、計算項目の関数を選択します。
6. 適切な列の値を「使用可能」領域から「選択済」領域に移動します。



7. 計算項目で関数として「**カスタム式**」を選択した場合は、ツールバーを使用して関数に含める数学演算子を選択します。さらに、関数 ABSOLUTE、CEILING、FLOOR、ROUND、SQRT も使用できます。

式によって、ビュー内の動的カスタム・グループ化を作成できます。式の中で参照されるすべてのメジャーは、同じ列から取得され、結果に表示される必要があります。式は、他の計算項目に挿入したり、他の計算項目と組み合わせることが可能です。

列の名前付き項目を指定するかわりに、\$n または \$-n を指定できます。ここで n は項目の行の位置を示す整数です。\$n と指定した場合、メジャーは n 番目の行から取得されます。\$-n と指定した場合、メジャーは最後から n 番目の行から取得されます。



- オプション: 計算項目を作成する場合は、「計算項目メンバーをビューから除去」を選択します。

このボックスを使用して、計算項目に含めたメンバーのビューでの表示を抑制します。

- 「OK」をクリックします。

この新しいグループまたは計算項目は、デフォルトで分析のすべてのビューに作成されます。

## グループと計算項目の編集

グループと計算項目は、「選択ステップ」ペインまたは「カタログ」ペインから編集できます。表、ピボット表、ヒート・マトリックスまたはトレリスのグループおよび計算項目も編集できます。

たとえば、「Game Station」メンバーと「Plasma Television」メンバーを含めるようにグループを編集できます。

次のいずれかの方法を選択して、グループまたは計算項目を編集します。

- 「選択ステップ」ペインで、グループまたは計算項目へのリンクをクリックしてから、「編集」をクリックします。
- 「カタログ」ペイン(カタログに保存した場合)で、オブジェクトを選択し、「編集」をクリックします。
- (外側エッジの)表、ピボット表、ヒート・マトリックスまたはトレリスで、グループまたは計算項目を右クリックし、「グループの編集」または「計算項目の編集」を選択します。

## グループのコンテンツの表示

グループのコンテンツを表示して、必要なメンバーが含まれていることを確認できます。

たとえば、「Product Category」列にカテゴリのグループを作成したとします。グループのコンテンツを表示して、適切なカテゴリが含まれていることを確認できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブをクリックします。
3. 表ビューで、グループが格納されているセルを右クリックします。
4. 「グループ定義の表示」を選択します。



5. 「閉じる」をクリックします。

## グループと計算項目の保存

グループまたは計算項目は、(分析内の)インライン・オブジェクトまたは名前付きオブジェクト(スタンドアロン・オブジェクト)として保存できます。

たとえば、ブランド売上分析で再利用するために、モバイル・デバイス・グループを名前付きオブジェクトとしてカタログに保存できます。

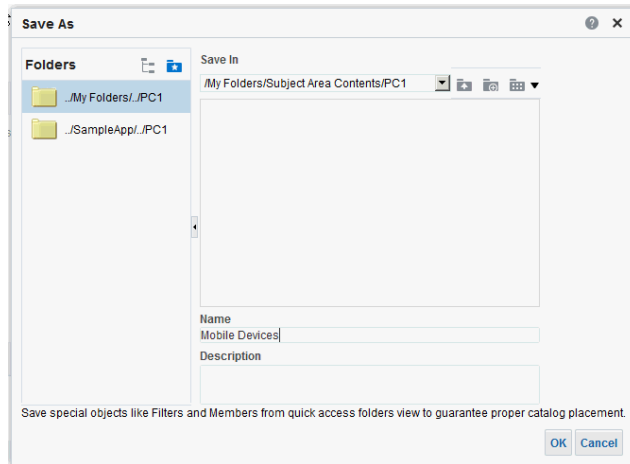
### グループまたは計算項目をインライン・オブジェクトとして保存

- 分析とその分析に含まれているグループまたは計算項目を保存するには、「分析の保存」をクリックします。

グループまたは計算項目は、分析の一部として保存されます。

### グループまたは計算項目を名前付きオブジェクトとして保存

1. 「結果」タブで、「選択ステップ」ペインを表示します。
2. グループまたは計算項目のリンクをクリックします。
3. 「グループを次の名前で保存」または「計算項目を次の名前で保存」を選択します。



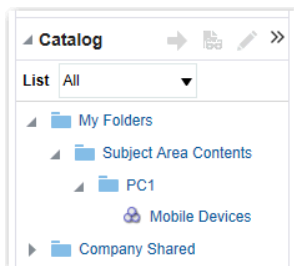
4. 「保存場所」フィールドにフォルダを入力します。
5. 「OK」をクリックします。

## 分析でのグループまたは計算項目の再利用

別の分析で作成された列と同じ列にグループまたは計算項目を追加できます。グループまたは計算項目はメンバーのリストまたは選択ステップのセットのいずれかです。

たとえば、ブランド売上分析を表示して、「Mobile Devices」グループのグループ・メンバーを追加できます。「Mobile Devices」グループのメンバーは、「選択ステップ」ペインの「追加」ステップに含められます。

1. 「結果」タブで、適用するグループまたは計算項目の選択と同じ列が含まれる分析を表示します。
2. 「カタログ」ペインで、グループまたは選択項目を選択します。



3. 「カタログ」ペインのツールバーで、「詳細オプションの追加」をクリックします。
4. グループまたは計算項目自体を追加する場合は、「追加」を選択します。グループまたは計算項目のメンバーを追加する場合は、「メンバーの追加」を選択します。

「メンバー・ステップの編集」ダイアログからグループまたは計算項目を再利用:

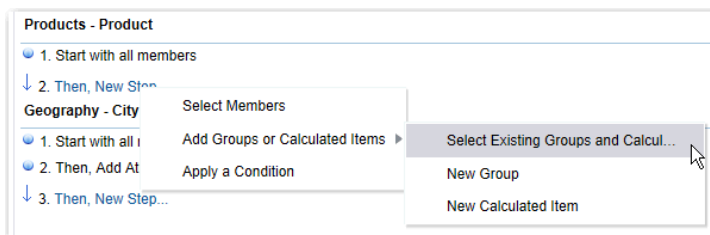
1. 「結果」タブで、適用するグループまたは計算項目の選択と同じ列が含まれる分析を表示します。
2. 「選択ステップ」ペインを表示します。
3. 該当の列のエントリにある鉛筆アイコンをクリックします。
4. 「アクション」メニューから、「グループまたは計算項目で開始」を選択します。



5. 保存済のグループまたは計算項目を「使用可能」領域から「選択済」領域に移動します。
6. 「OK」をクリックします。

「選択ステップ」ペインからグループまたは計算項目を再利用:

1. 「結果」タブで、適用するグループまたは計算項目の選択と同じ列が含まれる分析を表示します。
2. 「選択ステップ」ペインで、適切な列に対して「次に、新規ステップ」を選択します。
3. 「グループまたは計算項目の追加」を選択します。
4. 「既存のグループおよび計算項目の選択」を選択します。



5. 結果のダイアログで、「使用可能」領域からグループまたは計算項目を選択して「選択済」領域に移動します。
6. 「OK」をクリックします。

## グループおよび計算項目の削除

インラインおよび名前付きのグループと計算項目を削除できます。

たとえば、分析で折り畳み式携帯電話とスマートフォンの組合せが不要になったとします。「Mobile Devices」グループを削除できます。

インライン・グループまたは計算項目を削除:

1. 「結果」タブで、削除するグループまたは計算項目を含むセルを右クリックします。
2. 「除去」をクリックします。

名前付きグループまたは名前付き計算項目を削除:

1. グローバル・ツールバーで、「カタログ」をクリックします。
2. カタログ・ページで、グループまたは計算項目を特定します。
3. グループまたは計算項目で「詳細」をクリックします。
4. 「削除」を選択します。

## 分析とダッシュボードでのプロンプト

この章では、分析やダッシュボードに表示する値を要求するためのプロンプトを作成する方法について説明します。

### トピック:

- [分析およびダッシュボードでプロンプトを作成するための一般的なワークフロー](#)
- [プロンプトの作成](#)
- [プロンプトの編集](#)
- [ダッシュボード・ページへのプロンプトの追加](#)
- [ダッシュボード・ページへの非表示プロンプトの追加](#)

## 分析およびダッシュボードでプロンプトを作成するための一般的なワークフロー

次に、分析およびダッシュボードに表示する値を要求するために、プロンプトを作成する際の一般的なタスクを示します。

| タスク                    | 説明                                            | 詳細情報                                  |
|------------------------|-----------------------------------------------|---------------------------------------|
| 分析の作成                  | 分析に使用する列を選択して配置します。                           | <a href="#">最初の分析の作成</a>              |
| 列プロンプトの作成              | プロンプトを作成して、表示されたデータをフィルタ処理します。                | <a href="#">列プロンプトの作成</a>             |
| プロンプトの編集               | プロンプトを編集すると、そのプロンプトが使用されるすべての場所でプロンプトが変更されます。 | <a href="#">プロンプトの編集</a>              |
| ダッシュボード・ページへの列プロンプトの追加 | 新規または既存のダッシュボードにプロンプトを追加します。                  | <a href="#">ダッシュボード・ページへのプロンプトの追加</a> |
| 通貨プロンプトの作成             | 異なる通貨で金額データを表示するためのプロンプトを作成します。               | <a href="#">通貨プロンプトの作成</a>            |

## プロンプトの作成

アナリストが関心のあるデータを表示できるようにプロンプトを作成します。

### トピック:

- [列プロンプトの作成](#)
- [変数プロンプトの作成](#)
- [プロンプトによる選択ステップのオーバーライド](#)
- [通貨プロンプトの作成](#)

## 列プロンプトの作成

プロンプトを使用すると、表示されるデータをフィルタ処理できます。列プロンプトを使用すると、ユーザーはダッシュボードを表示して、ダッシュボードの表示内容に影響を与える列の値を選択できます。

### 📺 ビデオ

次の手順を使用して作成します。

- 1つ以上のダッシュボードに適用できる名前付き列プロンプト。
- 分析に埋め込まれるインライン列プロンプト。たとえば、特定のブランドについて分析をレビューできるように、ブランド売上分析にプロンプトを追加できます。分析の列にプロンプトを直接追加します(インライン・プロンプト)。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「プロンプト」タブの「定義」ペインで、「新規」をクリックして、プロンプト・タイプの選択リストにアクセスします。「列プロンプト」を選択し、適切な列を選択します。

3. 「カスタム・ラベル」をクリックし、列フィルタ・プロンプトのキャプションを入力します。キャプションは、プロンプトのフィールド・ラベルとして表示されます。

たとえば、「Select a currency.」と入力します。

4. 「説明」フィールドに、プロンプトの短い説明を入力します。

この説明はツールチップ・テキストになり、ユーザーがダッシュボードまたは分析でプロンプトのラベルにマウス・ポインタを合わせると表示されます。

5. 「演算子」リストから、使用する演算子(「次より大きい」など)を選択します。実行時にユーザーに演算子を選択させる場合は、「\*ユーザーにプロンプトする」を選択します。

プロンプトの値選択リストにグループを含むプロンプトを作成する場合は、演算子を「次と等しい次に存在する」または「次と等しくない次に存在しない」のいずれかに設定する必要があります。[グループおよび計算項目について](#)を参照してください。

6. 「ユーザー入力」フィールドで、プロンプト・インタフェースでユーザーに入力を要求する方法を選択します。たとえば、ラジオ・ボタンを使用してプロンプト値を1つのみ選択するようユーザーに要求します。

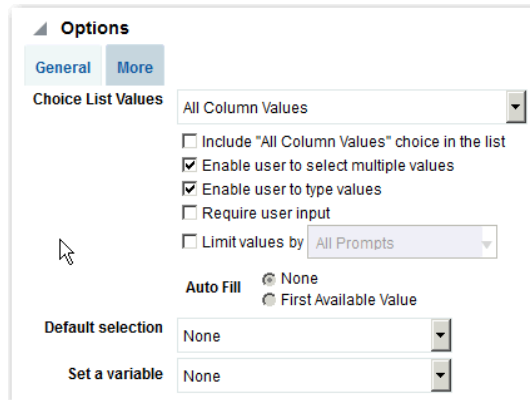
The screenshot shows a 'New Prompt' dialog box with the following configuration:

- Prompt For Column:** "Time", "Month" (with a fx icon)
- Label:** Select a Month
- Custom Label:**
- Description:** Months
- Operator:** \* Prompt User
- User Input:** Choice List
- Options:** (collapsed)

- 指定したユーザー入力のタイプに応じて、「**ユーザー入力**」フィールドに適切な値を入力します。

たとえば、ユーザーが、列によって提供される値ではなく、作成されたプロンプト値のリストから値を選択できるように指定するには、「**カスタム値**」を選択します。

- 「オプション」セクションでプロンプト・オプションを選択して、リスト値の表示およびユーザーとプロンプトとの相互作用を指定します。プロンプト・オプションは、ユーザー入力タイプと、選択したリスト値のタイプによって異なります。



- 「**デフォルトの選択**」フィールドで、ユーザーに最初に表示するプロンプト値を選択します。

デフォルト・タイプを選択すると、特定の値を選択するか、デフォルト値の決定方法を指定するフィールドが表示されます。たとえば、「**SQL の結果**」を選択した場合は、値リストを生成する **SQL 文** を指定する必要があります。

- 「**OK**」をクリックします。

- エディタで「**プロンプトの保存**」をクリックするか、分析を保存します。

- 「定義」ペインの矢印ボタンを使用して、選択したプロンプトを並べ替えます。プロンプトの並べ替えによって、実行時に選択肢がユーザーに表示される順序を制御します。

- 「定義」ペインで「**新規行**」または「**新規列**」をクリックして、プロンプト・ページに適用するレイアウトのタイプを選択します。

行ベースのレイアウトでは、プロンプトが水平方向に編成されるのでスペースを節約できます。列ベースのレイアウトでは、整理された列にプロンプトが整列されます。「定義」表の「**新規列**」または「**新規行**」列で、プロンプト・ページに新規の列または行を追加する場所に対応するボックスをクリックします。

- 「表示」ペインを使用してサンプル・データによるプロンプトをプレビューするか、「定義」ペインのツールバーで「**プレビュー**」（使用可能な場合）をクリックして、実際のプロンプト値によるプロンプトを表示します。

## 変数プロンプトの作成

変数プロンプトでは、ユーザーは、変数プロンプトに指定されている値を選択してダッシュボードに表示できます。

変数プロンプトは列に依存しませんが、列を使用することはできます。変数プロンプトを使用すると、ユーザーは既存のデータを指定して販売予測を実行できます。

たとえば、販売予測という変数プロンプトを作成し、変数プロンプトの値に **10** パーセント、**20** パーセントおよび **30** パーセントを指定します。地域と売上金額の列を含む分析を作成し

ます。売上金額の列式に乗算の演算子を選択し、販売予測変数を挿入します。ユーザーは、この分析を実行する際、売上金額の列の再計算に使用するパーセンテージを選択します。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「プロンプト」タブを表示します。
3. 「プロンプト」タブの「定義」ペインで、「新規」、「変数プロンプト」の順にクリックして、「新規プロンプト」ダイアログを表示します。

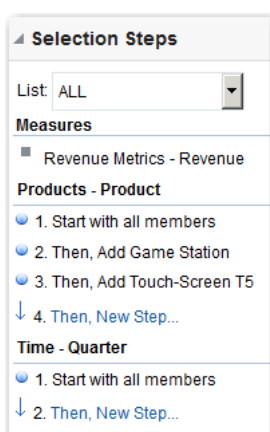
4. 「**プロンプト対象**」フィールドで、作成する変数のタイプを選択し、変数の名前を入力します。  
この変数名は、ユーザーによって指定された変数プロンプト値を表示させる分析またはダッシュボードに追加する名前になります。現在作成できるのは、プレゼンテーション変数のみです。
5. 「**ラベル**」フィールドに、変数フィルタ・プロンプトのキャプションを入力します。キャプションは、プロンプトのフィールド・ラベルとして表示されます。
6. 「**説明**」フィールドに、プロンプトの短い説明を入力します。この説明はツールチップ・テキストとして表示され、ユーザーがダッシュボードまたは分析でプロンプトのラベルにマウス・ポインタを合わせると表示されます。
7. 「**ユーザー入力**」フィールドで、プロンプト・インタフェースでユーザーに入力を要求する方法を選択します。たとえば、ラジオ・ボタンを使用してプロンプト値を1つのみ選択するようユーザーに要求します。
8. 「**選択リスト**」、「**チェック・ボックス**」、「**ラジオ・ボタン**」、「**リスト・ボックス**」のいずれかのユーザー入力タイプを選択した場合、プロンプトの値のリストも指定する必要があります。
9. 「**オプション**」セクションでプロンプト・オプションを選択します。プロンプト・オプションは、選択したユーザー入力タイプによって異なります。  
プロンプト・オプションによって、ユーザーとプロンプトの対話方法をさらに指定できます。たとえば、ユーザー入力が必要かどうかなどです。
10. 「**デフォルトの選択**」フィールドで、ユーザーに最初に表示するプロンプト値を選択します。特定の値を選択すると、「**デフォルト値**」フィールドが表示され、値を入力できます。
11. 「**OK**」をクリックすると、プロンプトが「定義」ペインに表示されます。
12. 変更内容を保存します。

## プロンプトによる選択ステップのオーバーライド

選択ステップをダッシュボード・プロンプトまたはインライン・プロンプトでオーバーライドできます。

たとえば、Products.Brand 選択ステップを BizTech および FunPod メンバーが指定された列プロンプトでオーバーライドするように指定できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブで、分析の列を選択し、「**選択ステップ・ペインの表示/非表示**」を選択して「選択ステップ」ペインに移動します。
3. 分析に対する選択ステップを指定します。



4. 列プロンプトでオーバーライドする選択ステップを決定して、「**編集**」をクリックします。
5. このダイアログで、「**プロンプトでオーバーライド**」を選択します(そのステップのタイプに対して使用可能である場合)。
6. 「**OK**」をクリックし、分析を保存します。

## 通貨プロンプトの作成

通貨プロンプトを使用すると、ユーザーは、ダッシュボードまたは分析に表示されている通貨タイプを変更できます。

この手順を使用して、1つ以上のダッシュボードに適用できる通貨プロンプトを作成したり、分析に埋め込まれる通貨プロンプトを作成します。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「プロンプト」タブを表示します。
3. 「定義」ペインで、「**新規**」ボタンをクリックし、「**通貨プロンプト**」を選択します。
4. 「**ラベル**」フィールドにキャプションを入力します。
5. 「**説明**」フィールドに短い説明を入力します。この説明はツールチップ・テキストとして表示され、ユーザーがダッシュボードまたは分析でプロンプトのラベルにマウス・ポインタを合せると表示されます。

6. 「OK」をクリックします。
7. プロンプトを保存します。
  - ダッシュボード・プロンプトを作成する場合、プロンプトのエディタの「保存」ボタンをクリックし、プロンプトの保存先のフォルダを指定して、プロンプトを説明する名前を指定します。個人フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、本人のみが使用できます。共有フォルダに保存されているダッシュボード・プロンプトは、オブジェクトにアクセスする権限を持つ他のユーザーも使用できます。
  - インライン・プロンプトを作成する場合、分析を保存します。
8. 「定義」ペインの矢印ボタンを使用して、選択したプロンプトを並べ替えます。プロンプトの並替えによって、実行時に選択肢が表示される順序が制御されるため、制約付きプロンプトを作成する場合は特に、順序が論理的であるようにします。
9. プロンプト・ページに新規の行または列を追加する場合は、ツールバーの「新規行」ボタンまたは「新規列」ボタンをクリックします。「定義」表で、新しい行または列に表示するプロンプトに対応するチェック・ボックスをクリックします。
10. ダッシュボードにプロンプトがどのように表示されるかをプレビューするには、「表示」ペインを使用してサンプル・データが使用されたプロンプトをプレビューするか、ツールバーの「プレビュー」ボタンをクリックして実際のプロンプト値が使用されたプロンプトを表示します。

## プロンプトの編集

保存済のダッシュボード・プロンプトまたはインライン・プロンプトを編集して、プロンプトが使用される場所にその変更を伝播できます。

たとえば、「Brand」列のプロンプトを編集して、選択リストへのユーザー入力を変更できます。この変更は、プロンプトが使用されるブランド売上分析に伝播されます。

1. 「プロンプト」タブの「定義」ペインで、対象のプロンプトをダブルクリックして開きます。

あるいは、「プロンプト」タブの「定義」ペインで、適切なプロンプトを選択して「編集」をクリックします。

2. 「プロンプトの編集」ウィンドウで、適切に変更を行います。

たとえば、プロンプトのラベルを変更したり、選択リストへのユーザー入力を変更します。

The screenshot shows a dialog box titled "Edit Prompt: Select a Quarter". It contains the following fields and controls:

- Prompt For Column:** "Time"."Quarter" with a *fx* icon.
- Label:** A text input field containing "Select a Quarter".
- Custom Label:** A checked checkbox.
- Description:** A text input field containing "Prompt for Quarter".
- Operator:** A dropdown menu showing "\* Prompt User".
- User Input:** A dropdown menu showing "Choice List".
- Options:** A section with a right-pointing arrow.
- Buttons:** "OK" and "Cancel" buttons at the bottom right.

3. 「OK」をクリックします。
4. 「プロンプトの保存」をクリックします。  
プロンプトが使用される場所に変更が伝播されます。

## ダッシュボード・ページへのプロンプトの追加

ダッシュボードまたはダッシュボード・ページにプロンプトを追加できます。

### ▶ ビデオ

たとえば、「Brand」列のダッシュボード・プロンプトを作成できます。販売業績ダッシュボードにプロンプトを追加して、ダッシュボード・ページ上にコンテンツを誘導します。「Brand」に対して「プロンプトで使用」演算子を使用するフィルタを追加し、プロンプトによるフィルタ処理の対象として列をフラグ付けします。プロンプトが使用されると、結果には、プロンプトされた列のデータがユーザーの選択と一致するレコードのみが含まれます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. ダッシュボード・ビルダーの「カタログ」ペインで、分析などのオブジェクトを特定し、ダッシュボード・ページのセクションにドラッグ・アンド・ドロップします。
3. 新しいまたは事前に作成されたプロンプトを追加します。
  - 新しいプロンプトを追加するには、「新規」をクリックしてから「ダッシュボード・プロンプト」をクリックし、画面の手順に従います。
  - 事前に作成されたプロンプトを追加するには、ダッシュボード・ビルダーの「カタログ」ペインで、ダッシュボード・プロンプトを特定し、ダッシュボード・ページのセクションにドラッグ・アンド・ドロップします。

ダッシュボード・プロンプトがダッシュボード・ページに追加されます。

4. プロンプトの「適用」ボタンおよび「リセット」ボタンをダッシュボード・ページに含めるかどうかを指定するには、ダッシュボード・ビルダーのツールバーで「ツール」をクリックします。次に、「現在のページのボタンをプロンプト」、および「適用」ボタンまたは「リセット」ボタンのいずれかを選択します。
5. ダッシュボードのツールバーにある「保存」をクリックします。
6. ダッシュボード・ページをプレビューするには、ダッシュボードのツールバーにある「プレビュー」をクリックします。

## ダッシュボード・ページへの非表示プロンプトの追加

ダッシュボードまたはダッシュボード・ページに非表示プロンプトを追加できます。

1. 非表示プロンプトとして使用するプロンプトを作成し、保存します。
2. 編集するダッシュボードを開きます。
3. ダッシュボード・ページ・ツールバーで、「ツール」をクリックして「ダッシュボードのプロパティ」を選択します。
4. 「ダッシュボードのプロパティ」ダイアログで、「フィルタと変数」の鉛筆アイコンをクリックし、ダッシュボード全体に非表示プロンプトを追加します。



あるいは、非表示プロンプトをページに追加するには、「ダッシュボード・ページ」領域でそのページを見つけて、「**デフォルトのフィルタと変数を取得するためのプロンプトの選択**」アイコンをクリックします。

5. 「ダッシュボードのフィルタと変数」ダイアログで、「**新規非表示ダッシュボード・プロンプトの埋込み**」のプラス・アイコンをクリックし、プロンプトを参照して選択します。「OK」をクリックして非表示プロンプトを追加します。
6. 「OK」をクリックしてダッシュボード・プロパティを保存します。
7. ダッシュボードのツールバーにある「**保存**」をクリックします。
8. ダッシュボード・ページをプレビューするには、ダッシュボードのツールバーにある「**プレビュー**」をクリックします。

# 21

## 分析のインタラクティブ化

分析およびダッシュボードをさらにインタラクティブにします。一部の関連ビジネス・インテリジェンス・コンテンツへのハイパーリンクを埋め込むか、またはその他 **Web** ページへのリンクを追加します。



### トピック:

- [分析をインタラクティブにするための一般的なワークフロー](#)
- [再利用するための名前付きアクションの作成](#)
- [インライン・アクションの作成](#)
- [分析へのアクションの追加](#)
- [ダッシュボード・ページへのアクションの追加](#)
- [名前付きアクションの編集](#)
- [分析内のアクション・リンクの編集および削除](#)
- [ダッシュボード・ページ内のアクション・リンクの編集および削除](#)
- [分析内のインライン・アクションのカタログへの保存](#)
- [ダッシュボード内のインライン・アクションのカタログへの保存](#)

## 分析をインタラクティブにするための一般的なワークフロー

次に、分析をさらにインタラクティブにするための一般的なタスクを示します。

| タスク               | 説明                                | 詳細情報                                  |
|-------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|
| 分析の作成             | 分析に使用する列を選択して配置します。               | <a href="#">分析の作成</a>                 |
| 名前付きアクションの作成      | アクションを作成し、カタログに保存します。             | <a href="#">再利用するための名前付きアクションの作成</a>  |
| インライン・アクションの作成    | アクションを作成し、分析とともに保存します。            | <a href="#">インライン・アクションの作成</a>        |
| 分析へのアクションの追加      | アクションを分析の列値に追加します。                | <a href="#">分析へのアクションの追加</a>          |
| ダッシュボードへのアクションの追加 | アクションまたはアクション・メニューをダッシュボードに追加します。 | <a href="#">ダッシュボード・ページへのアクションの追加</a> |

## 再利用するための名前付きアクションの作成

ユーザーが Web サイトやレポートなどの関連 BI コンテンツに移動したり、ビジネス・タスクを実行できるように、アクション・リンクを作成します。名前付きアクションをカタログに保存し、アナリストやビジネス・ユーザーがそのカタログからアクションを実行できるようにします。

ユーザーは、列見出しや列値に埋め込まれた分析をクリックできます。グラフなどのビュー、表内やピボット表内の総計にあるリンクをクリックすることもできます。

1. クラシック・ホーム・ページの「作成」に移動し、「アクションナブル・インテリジェンス」の下にある「アクション」をクリックします。
2. 作成するアクションのタイプに対応するオプションをクリックします
3. オプション: デフォルトのパラメータを変更して、アクションの実行時に表示される情報を変更します。
  - **BI コンテンツにナビゲート** - 「マイ・フォルダ」または共有フォルダ領域に格納されている分析やダッシュボードを表示します。
  - **Web ページにナビゲート** - Web ページを表示します。
  - **Web サービスの起動** - Web サービス操作、または Web サービスとして公開されているサービス指向アーキテクチャ(SOA)サービス(Business Process Execution Language (BPEL)など)を起動します。
  - **HTTP リクエストの起動** - URL API で公開されている外部システム・コマンドを起動します。これは HTTP リクエストをサーバー経由でターゲット URL に送信します。
  - **ブラウザ・スクリプトの起動** - 管理者が利用可能にした JavaScript 関数を呼び出します。「参照」をクリックして管理者が利用可能にした関数のリストを表示するか、または「関数名」フィールドに関数の名前を入力します。たとえば、USERSCRIPT.mycurrencyconversion を指定します。
4. 「アクションの保存」をクリックし、アクションを保存する場所を選択します。
5. アクションが適切に実行されることを確認してください。
  - a. カタログ内の名前付きアクションに移動します。
  - b. 「実行」をクリックします。
  - c. 詳細のリクエストまたは確認プロンプトが表示されたら、応答します。

## インライン・アクションの作成

インライン・アクションとは、特定の分析またはダッシュボードについて定義し、名前を付けてカタログに保存しないアクションのことです。

たとえば、ブランド売上分析に、商談詳細 Web サイトへのリンクを作成するよう決定できます。

- 分析 - アクション・リンクを使用して、列見出し、列値または階層レベル値にアクションを追加します。[分析へのアクションの追加](#)を参照してください。

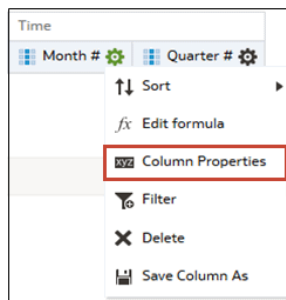
- ダッシュボード・ページ - ページにアクション・リンクまたはアクション・リンク・メニューを追加します。[ダッシュボード・ページへのアクションの追加](#)を参照してください。

## 分析へのアクションの追加

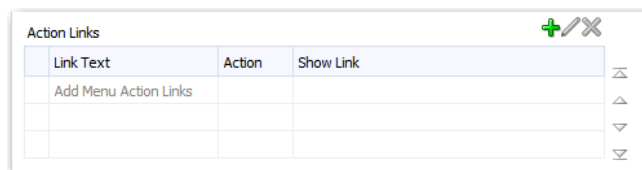
アクション・リンクを使用して、アクションを分析の列見出し、列値または階層レベル値に追加できます。

たとえば、ブランド売上分析に、商談詳細 Web サイトへのアクション・リンクが記載されたアクションを含めることができます。営業コンサルタントは、商談名または商談 ID のプロンプトに応じることでサイトで商談を問い合わせることができます。

- 編集する分析を開きます。
- 「基準」タブで、列の「オプション」メニューを開き、「列のプロパティ」を選択します。



- 「相互作用」タブをクリックします。
- 「列見出し」領域または「値」領域の「プライマリ相互作用」ボックスで、「アクション・リンク」を選択します。



- 「アクション・リンクの追加」をクリックします。
- 「リンク・テキスト」フィールドで、リンクに表示するテキストを入力します。
- 新規アクションを作成するには、「新規アクションの作成」をクリックして必要なアクションのタイプを選択し、アクションの設定を指定します。

[再利用するための名前付きアクションの作成](#)を参照してください。

または、「既存のアクションの選択」をクリックして必要なアクションを選択し、「パラメータ・マッピングの編集」ダイアログで、関連付けられる任意のパラメータを指定します。

- 変更内容を保存します。

## ダッシュボード・ページへのアクションの追加

アクション・リンクおよびアクション・リンク・メニューを使用して、ダッシュボード・ページにアクションを追加できます。

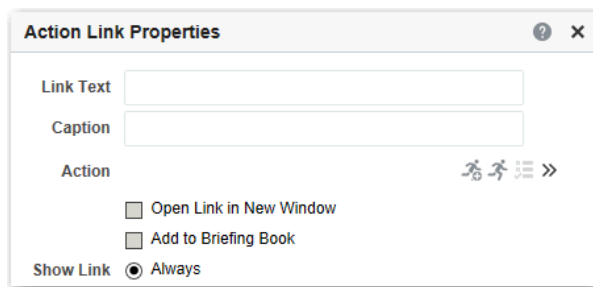
### トピック

- [アクション・リンクによるダッシュボード・ページへのアクションの追加](#)
- [アクション・リンク・メニューによるダッシュボード・ページへのアクションの追加](#)

## アクション・リンクによるダッシュボード・ページへのアクションの追加

関連レポートまたは便利な Web サイトをダッシュボードにリンクします。たとえば、営業コンサルタントが商談名または商談 ID のプロンプトに応じることで商談を問い合わせることができるように、販売業績ダッシュボードから商談 Web サイトへの直接リンクを営業コンサルタントに提供します。

1. 編集するダッシュボード・ページを開きます。
2. 「ダッシュボード・オブジェクト」ペインからダッシュボード・ページに「アクション・リンク」オブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップします。
3. 新規リンクについて「プロパティ」をクリックします。



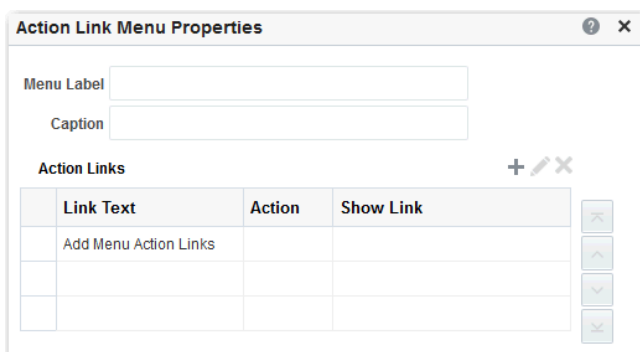
4. ダイアログのフィールドに入力します。
5. 「OK」をクリックします。
6. ダッシュボード・ビルダーで、「保存」をクリックします。

## アクション・リンク・メニューによるダッシュボード・ページへのアクションの追加

ダッシュボードに複数のアクション・リンクを指定することが必要な場合があります。メニューを使用してリンクをグループ化し、整理します。

たとえば、販売業績ダッシュボード上で、外部の商談 Web サイトや関連するブランド売上ダッシュボードなどの便利なリンクとともに、関連情報のメニューを営業コンサルタントに提供できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. 「ダッシュボード・オブジェクト」 ペインからダッシュボード・ページに「アクション・リンク・メニュー」 オブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップします。
3. 新規メニューについて「プロパティ」をクリックします。

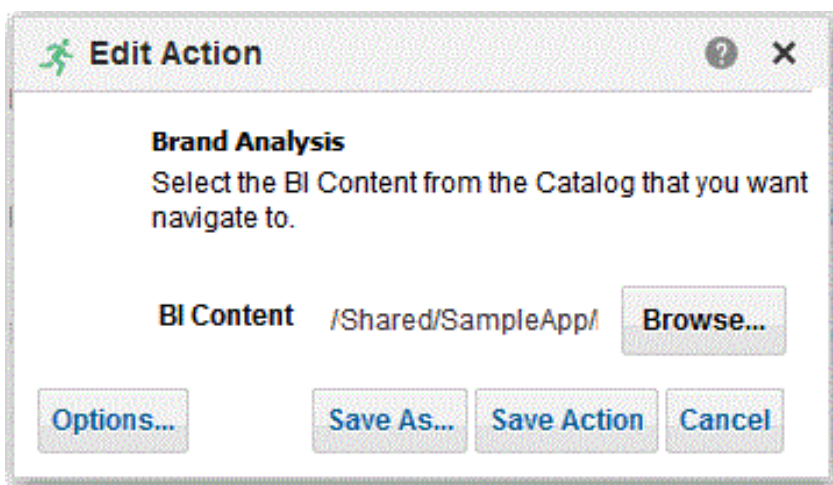


4. アクション・リンクをメニューに追加します。
5. 「OK」をクリックします。
6. ダッシュボード・ビルダーで、「保存」をクリックします。

## 名前付きアクションの編集

既存の名前付きアクションは編集できます。たとえば、販売業績ダッシュボードのブランド分析アクションを、新しく作成した分析に移動するように編集できます。

1. カタログ内のアクションに移動します。
2. 「編集」をクリックします。

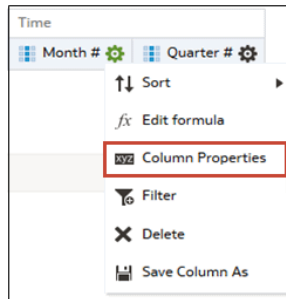


3. アクションを編集し、「OK」をクリックします。
4. 「アクションの保存」をクリックします。

## 分析内のアクション・リンクの編集および削除

アクション・リンクを編集したり、不要になったアクション・リンクを削除できます。これにより、アクション・リンクの移動先が廃止された分析または Web サイトである場合は、新しい場所を指すようにするか、またはリンクを除去できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「基準」タブで、列の「オプション」メニューを開き、「列のプロパティ」を選択します。



3. 「相互作用」タブをクリックします。
4. アクションまたはアクション・リンクを編集するには:
  - a. 「アクション・リンク」領域で、編集するアクションを選択し、「アクション・リンクの編集」をクリックします。
  - b. 必要な変更を行います。
  - c. 関連付けられるアクションを編集するには、「詳細」をクリックして「アクションの編集」を選択します。
  - d. 必要な変更を行います。
5. アクション・リンクを削除するには:
  - a. 「アクション・リンク」領域で、削除するアクション・リンクを選択します。
  - b. 「削除」をクリックします。
6. 「OK」をクリックします。
7. 「基準」タブで、「分析の保存」をクリックします。

## ダッシュボード・ページ内のアクション・リンクの編集および削除

アクション・リンクを編集したり、不要になったアクション・リンクを削除できます。たとえば、商談サイトへの URL が変更になった場合、新しい URL を指すことができます。

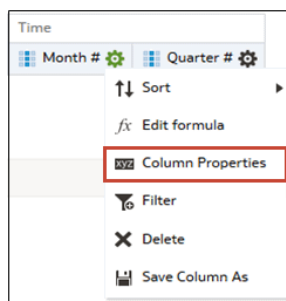
1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. アクションおよびアクション・リンクがアクション・リンク・メニューに関連付けられている場合:

- a. アクション・リンク・メニューの「プロパティ」をクリックします。
- b. メニュー・ラベルおよびキャプションに適切な変更を加えます。
- c. 「アクション・リンク」領域で必要なアクションを選択し、「編集」をクリックします。
3. メニューに含まれないアクションを編集するには、アクション・リンクの「プロパティ」をクリックします。
4. アクション・リンクを更新します。
5. 「詳細」をクリックし、「アクションの編集」を選択してアクションを編集します。
6. アクションを編集し、「OK」をクリックします。
7. 「アクション・リンクのプロパティ」ダイアログおよび「アクション・リンク・メニューのプロパティ」ダイアログ(表示された場合)で「OK」をクリックします。
8. 「保存」をクリックします。
9. アクション・リンク(またはアクション・リンク・メニュー)のツールバーで「削除」をクリックし、不要になったアクションを除去します。

## 分析内のインライン・アクションのカタログへの保存

便利なインライン・アクションをカタログに保存して、他の分析やダッシュボードで再利用できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「基準」タブで、列の「オプション」メニューを開き、「列のプロパティ」を選択します。



3. 「相互作用」タブをクリックします。
4. 「アクション・リンク」領域で必要なアクションを選択し、「アクション・リンクの編集」をクリックします。
5. 「詳細」をクリックし、「アクションに名前を付けて保存」を選択します。
6. カタログでのアクションの表示方法を指定してから、「OK」をクリックして保存します。



## ダッシュボード内のインライン・アクションのカタログへの保存

便利なインライン・アクションをカタログに保存して、他の分析やダッシュボードで再利用できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. アクションおよびアクション・リンクがアクション・リンク・メニューに関連付けられている場合:
  - a. アクション・リンク・メニューの「プロパティ」をクリックします。

|  | Link Text                     | Action                              | S |
|--|-------------------------------|-------------------------------------|---|
|  | Navigate to Opportunity Sales | Navigate - www.opportunitysales.com | A |
|  | Navigate to Brand Revenue     | Navigations                         | A |
|  |                               |                                     |   |

- b. メニュー・ラベルおよびキャプションに適切な変更を加えます。
  - c. 「アクション」領域でカタログに保存するアクションを選択します。
3. メニューに含まれないアクションを保存するには、アクション・リンクの「プロパティ」をクリックします。
  4. 「詳細」をクリックし、「アクションに名前を付けて保存」を選択します。
  5. カタログでのアクションの表示方法を指定して、「OK」をクリックします。
  6. 「保存」をクリックします。

## コンテンツの管理

この章では、カタログ内のコンテンツの管理方法について説明します。

### トピック:

- [コンテンツを管理するための一般的なワークフロー](#)
- [カタログ・オブジェクトの名前付け制限について](#)
- [コンテンツの名前変更](#)
- [お気に入りへの容易なアクセス](#)
- [アクセス・プロパティ](#)
- [アクセス権限の割当](#)
- [レポートの電子メール送信と配信のトラッキング](#)
- [エージェントによるビジネス・プロセスの自動化](#)
- [項目の所有権の割当て](#)
- [項目の所有権の想定](#)
- [コンテンツへの外部イメージおよび他の外部リソースの埋込みについて](#)
- [Smart View でのレポート・コンテンツへのアクセス](#)
- [Microsoft Power BI でのレポート・コンテンツへのアクセス](#)

## コンテンツを管理するための一般的なワークフロー

次に、カタログのコンテンツにアクセスして編成するために実行する一般的なタスクをいくつか示します。

| タスク                    | 説明                                                                    | 詳細情報                                   |
|------------------------|-----------------------------------------------------------------------|----------------------------------------|
| コンテンツの検索と探索            | 編集が必要な項目の検索など、コンテンツを検索します。                                            | <a href="#">コンテンツの検索</a>               |
| コンテンツの名前変更             | コンテンツの名前を改善または更新します。                                                  | <a href="#">コンテンツの名前変更</a>             |
| コンテンツのプロパティの表示または設定    | コンテンツに関する情報を表示したり、様々なコンテンツのオプションおよびプロパティを変更します。                       | <a href="#">アクセス・プロパティ</a>             |
| 他のユーザーへのアクセス権の付与       | 自分のコンテンツに他のユーザーがアクセスできるように権限を割り当てます。                                  | <a href="#">アクセス権限の割当</a>              |
| レポートの電子メール送信と配信のトラッキング | 組織の内部または外部のユーザーにレポートを電子メール送信します。日次または週次のレポートにより、すべてのユーザーを最新の状態に保持します。 | <a href="#">レポートの電子メール送信と配信のトラッキング</a> |

| タスク                | 説明                                                                      | 詳細情報                                          |
|--------------------|-------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| ビジネス・プロセスの自動化      | 分析、ダッシュボードおよびブリーフィング・ブックをターゲットとなる参加者に対して、オンデマンドまたは定期的に配信するエージェントを作成します。 | <a href="#">エージェントによるビジネス・プロセスの自動化</a>        |
| デバイスと配信プロファイルの構成   | エージェントによってアラートが生成された場合に、ユーザーへの配信に使用するデバイスおよび配信プロファイルを構成します。             | <a href="#">デバイスと配信プロファイルの構成</a>              |
| コンテンツの所有権の変更       | 別のユーザーをコンテンツ所有者として割り当てます。                                               | <a href="#">項目の所有権の割当て</a>                    |
| Smart View を使用した分析 | Smart View でレポート・コンテンツを分析します。                                           | <a href="#">Smart View でのレポート・コンテンツへのアクセス</a> |
| 高度なカタログ管理の実行       | カタログに関する高度なレポートを生成したり、個々の項目の基礎となる XML をレビューします。                         | <a href="#">高度なカタログ管理の実行</a>                  |

## カタログ・オブジェクトの名前付け制限について

ワークブック、ダッシュボード、分析などのカタログ・オブジェクトの名前付けまたは名前変更を行うときに、特殊文字を使用することはできません。

カタログ・オブジェクトの名前付けまたは名前変更を行うときは、オブジェクト名に特殊文字(～、!、#、\$、%、^、&、\*、+、`、|、:、"、\、<、>、?、,、/)を使用しないでください。

## コンテンツの名前変更

項目およびビューの名前を変更して、よりわかりやすい名前にすることができます。

**トピック:**

- [項目の名前変更](#)
- [ビューの名前変更](#)

## 項目の名前変更

項目の名前を変更して、よりわかりやすい名前にすることができます。たとえば、「High Products」フィルタの名前を「Top 3 Products」に変更できます。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. カタログ・ページで、名前を変更する項目を検索します。
3. 項目の検索結果で、「**詳細**」、「**名前変更**」の順にクリックします。
4. 項目に新しい名前を付けます。
5. オプション: 「**この項目の以前の名前への参照を保存する**」をクリックします(項目に対してオプションが使用可能な場合)。

このオプションを使用して、項目の以前の名前への既存の参照を維持することを指定します。これによって、カタログ内の名前を変更した項目を指す、以前の名前のショートカットが作成されます。このオプションを選択しない場合、既存の参照は機能しなくなります。

6. 「OK」をクリックします。

## ビューの名前変更

ビューの名前を変更して、よりわかりやすい名前にすることができます。たとえば、ビューの名前を「Sales Forecast 2014」から「Forecast 2014」に変更できます。

1. 編集する分析を開きます。
2. 「結果」タブで、「**ビューの編集**」をクリックします。
3. ビュー・エディタのツールバーで、「**ビューの名前変更**」をクリックします。
4. 「ビューの名前変更」ダイアログで、ビューに新しい名前を付けます。
5. 「OK」をクリックします。

## お気に入りへの容易なアクセス

ホーム・ページの「**お気に入り**」オプションを使用すると、お気に入りに簡単にアクセスできます。

### トピック:

- [カタログ・ページからのお気に入りの追加](#)
- [カタログ・ページからのお気に入りの除去](#)
- [他のページからのお気に入りの追加または除去](#)

## カタログ・ページからのお気に入りの追加

最も使用するコンテンツをお気に入りとしてブックマークできます。お気に入りは金色の星とともに表示され、ホーム・ページで「**お気に入り**」をクリックすることによって、すべてのお気に入りを表示できます。

たとえば、「ボックス・プロットおよび棒」プロジェクトを定期的に表示する場合があります。プロジェクトにお気に入りのフラグを付けると、すばやくアクセスできるようになります。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. カatalog・ページで、お気に入りとしてマーク付けするコンテンツを検索します。
3. 項目の検索結果で、「**詳細**」、「**お気に入りに追加**」の順にクリックします。

## カタログ・ページからのお気に入りの除去

頻繁にアクセスする必要がなくなったコンテンツをお気に入りリストから除去できます。たとえば、ボックス・プロットおよび棒プロジェクトの期限が切れたため、これをお気に入りから除去することがあります。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. カタログ・ページで、除去するお気に入りを検索します。
3. 項目の検索結果で、「**詳細**」、「**お気に入りから除去**」の順にクリックします。

## 他のページからのお気に入りの追加または除去

他のページからお気に入りリスト内のコンテンツを追加または削除できます。

たとえば、ホーム・ページの「最近」または「その他」リスト内の分析にお気に入りとしてフラグを付けてすばやくアクセスできるようにすることができます。

1. そのページまたはフォルダに移動し、お気に入りリスト内の追加または削除するコンテンツを検索します。
2. アイテムを選択し、「**詳細**」をクリックするか、右クリックします。
3. そのアイテムの「アクション・メニュー」から、「**お気に入りに追加**」または「**お気に入りから除去**」をクリックします。

## アクセス・プロパティ

管理者は、任意の項目またはフォルダのプロパティにアクセスして、システム情報の表示やアクセス・レベルの変更などのタスクを実行できます。その他のユーザーは、自分が作成または所有する項目のみのプロパティへのアクセスや変更を実行できません。

たとえば、他のユーザーが変更できないように、ブランド売上分析を読み取り専用に変更する場合があります。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. ホーム・ページまたはカタログ・ページで、編集するカタログ項目を見つけます。  
ホーム・ページの「最近」または「その他」リストでカタログ項目を見つけるか、検索ツールを使用してカタログ項目を見つけます。たとえば、「**Revenue by Region**」という名前の分析を見つけることができます。
3. 「**詳細**」、「**プロパティ**」の順にクリックします。
4. 「プロパティ」ダイアログで、設定をレビューまたは変更します。

たとえば、項目を読み取り専用として設定したり、項目の所有権を取得できます。

**Properties**

**General**

Name Customers Profile

Description

Type Dashboard

Location /shared/01. QuickStart/\_portal/1.30 Quickstart

**Access**

Created 5/24/2016 5:00:55 PM

Modified 5/24/2016 5:00:55 PM

**Attributes**

Content State Non Factory Content

Hidden  System  Read Only  Do Not Index

**Custom Properties**

No properties to display

**Ownership**

[Set Ownership of this item](#)

Internal Properties OK Cancel

5. 「OK」をクリックして変更内容を保存するか、「取消」をクリックします。

## アクセス権限の割当

他のユーザーに対して、カタログの項目およびダッシュボードのセクションへのアクセス権を付与できます。これは、ユーザーが表示または編集できるコンテンツを制御するのに役立ちます。

### トピック:

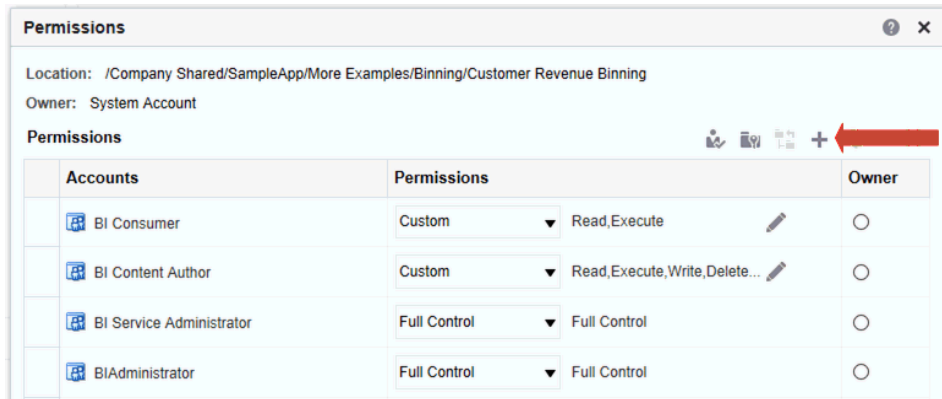
- [品目権限の追加または更新](#)
- [ダッシュボード選択権限の追加または更新](#)

## 品目権限の追加または更新

カタログ品目へのアクセス権限をアプリケーション・ロールに付与します。

他のユーザーに割り当てることができる権限は、コンテンツのタイプによって異なります。権限を変更するには、割り当てられているアプリケーション・ロールに「権限の変更」権限がある必要があります。

1. ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. カタログ・ページで、権限を割り当てるコンテンツを検索します。
3. 項目の検索結果で、「**詳細**」、「**権限**」の順にクリックします。



- 「権限」ダイアログで、「ユーザー/ロールの追加」をクリックして「アプリケーション・ロールおよびユーザーの追加」ダイアログにアクセスし、必要なアカウントを追加します。

ロールおよびユーザーは、メンバーであるロールから権限を継承します。たとえば、販売売上分析の「フル・コントロール」権限を **BIServiceAdministrator** アプリケーション・ロールに付与できます。この結果、そのロールのすべてのユーザーまたはアプリケーション・ロールにその項目の「フル・コントロール」が付与されます。項目に対してユーザーおよびロールに付与されている(直接付与または継承)権限を確認できます。「アプリケーション・ロールおよびユーザーの追加」ダイアログの「**クリックして有効な権限を表示**」ボタンをクリックして、「権限」列を表示または非表示にし、「**選択済メンバー**」表の各行に対する有効な権限を確認します。

- 「権限」ダイアログで、「権限」リストをクリックします。リストの項目のほとんどは親権限で、いくつかの子権限が含まれています。
- オプション: 特定の権限のリストを作成するには、「**カスタム**」をクリックします。このオプションは、カタログまたはダッシュボードから項目へのユーザー・アクセスを防ぐためにフォルダに設定されているすべての権限を回避する権限をユーザーに付与します。このオプションによってフォルダの権限が変更されることはありません。

たとえば、共有フォルダ領域にある「テスト」フォルダに対する「トラバース」権限をユーザーに付与できます。これにより、このフォルダに格納されている、ダッシュボードに埋め込まれた項目にアクセスできます。また、「<共有フォルダ領域>/テスト/ゲスト」フォルダなど、サブフォルダに格納されているダッシュボードの埋込み項目にもアクセスできます。ただし、ユーザーは、カタログからフォルダおよびサブフォルダ自体にアクセス(表示、展開または参照)することはできません。

- 「**OK**」を 2 回クリックします。

## ダッシュボード選択権限の追加または更新

他のユーザーに対してダッシュボード・セクションへのアクセス権を付与できるため、セクションにアクセス可能なユーザーを管理できます。アクセス権を付与するには、ダッシュボードのユーザーに権限を割り当てます。

たとえば、ダッシュボードの「Project Costs」セクションに対する権限を **BI** 管理者に割り当てます。不必要な変更を防ぐために、アクセスを **BI** コンシューマに制限できます。

1. 編集するダッシュボードを開きます。
2. セクション・ツールバーにある「プロパティ」を選択します。
3. 「権限」を選択します。
4. 「権限」ダイアログで「権限」リストをクリックして権限を選択します。
5. 「OK」をクリックします。

## レポートの電子メール送信と配信のトラッキング

組織の内部または外部のユーザーにレポートを電子メール送信したり、エージェントを使用して他の様々なデバイスにレポートを送信します。定期的な日次または週次のレポートにより、すべてのユーザーを最新の状態に保持します。

### トピック

- [1 回のみ、週次または日次のレポートの電子メール送信](#)
- [電子メールまたはエージェント経由で配布するレポートのトラッキング](#)
- [配信スケジュールの復元および有効化](#)
- [電子メール・セキュリティ・アラート](#)

### 1 回のみ、週次または日次のレポートの電子メール送信

1 人以上の受信者に、レポートをカタログから直接電子メール送信します。レポートをこのように配布する方法は簡単であり、レポートをダウンロードして電子メール・クライアントから電子メール送信するよりも迅速です。すべてのユーザーを最新の状態に保持するために、日次または週次の電子メールをスケジュールします。

電子メールの制限および電子メール配信を最適化する方法については、電子メール配信の制限は何ですか。を参照してください

1. クラシック・ホーム・ページで、次のいずれかを行います:
  - 電子メール送信する項目に移動して、「編集」をクリックして、「結果」タブで、「電子メール」をクリックします。
  - 「カタログ」をクリックし、電子メール送信する項目に移動して、「詳細」アクション・メニューをクリックし、「電子メール」を選択します。
2. 1 人以上の受信者の電子メール・アドレスを入力します。

複数の電子メール・アドレスはカンマで区切ります。たとえば、jane.white@abc.com, steve.brown@abc.com のようにします。
3. 「件名」行をカスタマイズします。
4. 電子メールを**今すぐ**送信するか、または「後で」をクリックして将来の日時を設定します。
5. レポート更新を日次または週次ベースで電子メール送信するには、「繰返し」をクリックしてから、「毎日」または「毎週」を選択します。

コンソールから、電子メール配信のステータスを確認できます。



## 電子メールまたはエージェント経由で配布するレポートのトラッキング

コンソールで、ユーザーに電子メールで送信することを選択したレポートをトラッキングします。レポートの送信時期や保留中(将来実行するようにスケジュールされている)の項目が迅速に表示されます。同じページで、(スケジュール済または完了済)配信を確認、変更または削除します。

コンソールには、コンテンツを配信するように設定したエージェントも表示されます。このように、すべての配信情報が 1 箇所にまとめられています。

ステータス別に配信をフィルタすると、最も重要な配信をトラッキングできます。ここで、様々なステータス・メッセージについて説明します。

| 配信ステータス | 説明                                                                                                                                                                                                |
|---------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 取消済     | 配信が取り消されました。<br>ユーザーは自分の配信はすべて取り消すことができます。                                                                                                                                                        |
| 完了      | 配信は正常に実行されました。                                                                                                                                                                                    |
| 無効      | ユーザーは、カタログ経由で所有している配信またはエージェントを一時的に無効にできます。<br>たとえば、レポートを編集するか、レポートを表示するユーザーを変更する場合、定義済スケジュールで実行中のジョブを停止します。                                                                                      |
| 失敗      | スケジュールに従って配信が実行されましたが、正常に完了しませんでした。<br>エラー・アイコン(❌)の後の <b>詳細の表示...</b> をクリックし、問題のある箇所を特定して修正します。                                                                                                   |
| 未スケジュール | 配信のスケジュールが設定されていないか、スケジュール済実行日が(将来の日付ではなく)過去の日付です。                                                                                                                                                |
| 実行中     | 配信は進行中です。                                                                                                                                                                                         |
| 一時停止    | 管理者は他のユーザーが設定した配信を一時的に停止できます。<br>たとえば、テスト環境から本番環境に移行する前に、管理者はテスト環境で配信を一時停止して、本番環境で再開します。                                                                                                          |
| タイム・アウト | 完了に時間がかかりすぎたため、配信がタイムアウトしました。                                                                                                                                                                     |
| 再度実行    | 問題が発生しました。もう一度配信の実行を試してください。                                                                                                                                                                      |
| 警告      | スケジュールに従って配信が実行されましたが、 <b>100%</b> 正常終了ではありませんでした。<br>たとえば、配信では <b>10</b> 人の受信者を指定しますが、電子メール・アドレスの <b>1</b> つが正しくなかったため、 <b>9</b> 人しか受信しませんでした。<br>警告アイコン(⚠️)の後の <b>詳細の表示...</b> をクリックし、詳細を特定します。 |

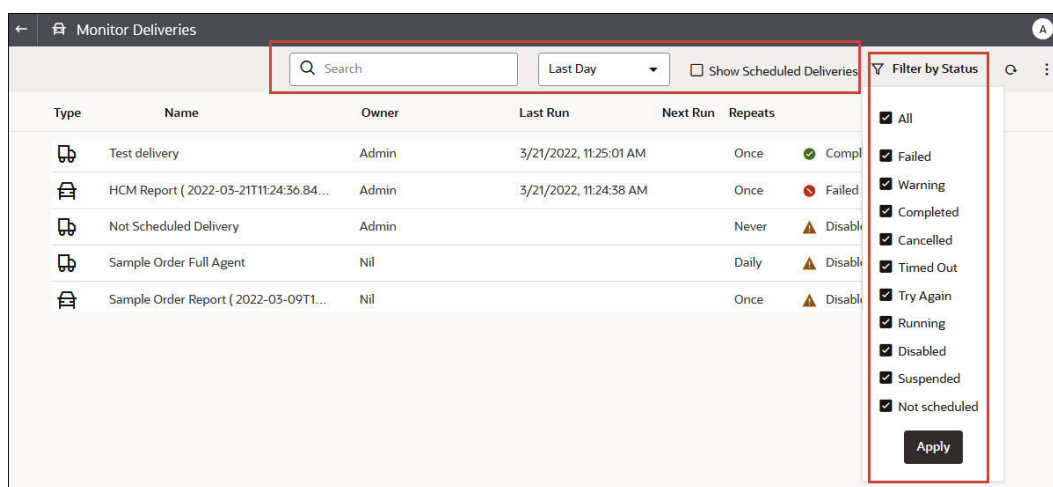
コンソールから配信をトラッキングするには:

1. ホーム・ページに移動し、「ナビゲータ」をクリックして、「コンソール」をクリックします。
2. **配信のモニター**をクリックします。

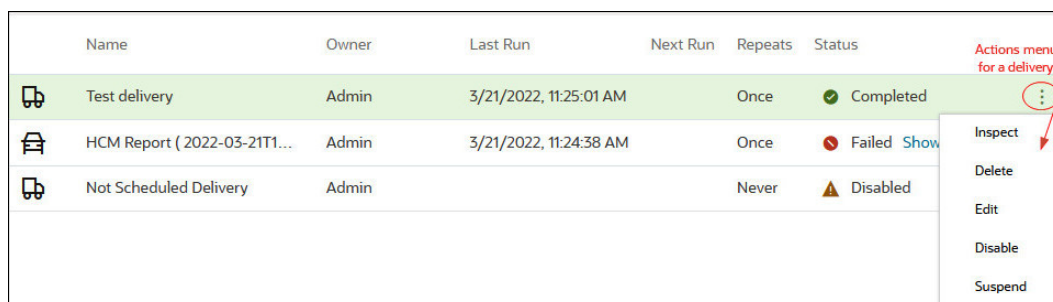
配信は実行日別にリストされ、最新の配信が最初に表示されます。最初は、過去 24 時間(「**最終日**」)に送信された配信のみが表示されます。先週の配布またはすべての配布を表示するには、「**過去 7 日間**」または「**すべての時間**」を選択します。

「スケジュール済配信の表示」をクリックして、将来実行するようにスケジュールされている配信を表示します。たとえば、明日の午前 9 時に実行するように配信をスケジュールするとします。前夜または午前 8 時に「配信」ページを見ると、配信がまだ実行されていないため、「スケジュール済配信の表示」を選択した場合にのみ配信が表示されます。

3. 配信のリストを名前、時間またはステータスでフィルタ処理します。
  - **名前:** 名前でフィルタ処理するには、検索ボックスに検索する配信の名前を入力し、[Enter]を押します。
  - **時間:** 時間でフィルタ処理するには、時間フィルタをクリックします。「最終日」、「過去 7 日間」、「すべての時間」から選択します。
  - **ステータス:** ステータスでフィルタ処理するには、「ステータスによるフィルタ」をクリックします。「失敗」、「警告」、「完了」、「取消済」、「タイムアウト」、「再度試行」、「実行中」、「無効」、「一時停止」、「未スケジュール」から 1 つ以上を選択し、「適用」をクリックします。



4. 配信の「アクション」メニューをクリックして、単一の配信を確認または管理します。



5. コンテンツをプレビューするには、配信の「アクション」メニューをクリックし、「レポートの表示」を選択します。

このオプションは、エージェントによって配信が生成されている場合は使用できません。

6. 前回または次の実行の日付、配信頻度、履歴など、配信の詳細を表示するには、配信の「アクション」メニューをクリックして「検査」を選択します。

これまでのジョブ実行を表示したり検索したりするには、「履歴」をクリックします。名前や時間、ステータスのフィルタを使用すると、必要な配信を見つけやすくなります。

7. 配信を編集するには、配信の「アクション」メニューをクリックし、「編集」を選択します。

- 電子メール配信 - 電子メール・オプションを更新します。
  - エージェント配信 - 配信に関連付けられているエージェントを編集します。
8. 失敗した、または警告ありで完了した配信をトラブルシューティングするには、**詳細の表示...**をクリックします。
- ❌ 失敗 - **詳細の表示...**をクリックして、問題のある箇所を特定して修正します。
  - ⚠️ 警告 - **詳細の表示...**をクリックして、詳細を参照します。
9. 配信を無効にするには、配信の「アクション」メニューをクリックし、「無効化」を選択します。
- 配信を後で有効にする場合は、配信の「アクション」メニューをクリックし、「有効化」を選択します。
10. 配信および今後予定されているすべての配信を削除するには、「削除」、「OK」の順に選択します。
11. 複数の配信を削除、再開または一時停止するには、[Ctrl]を押しながら対象の配信をクリックして選択し、右クリックして、実行するアクション（「削除」、「再開」、「一時停止」）を選択します。

## 電子メール・セキュリティ・アラート

電子メールで送信するコンテンツは、暗号化されません。送信するあらゆる機密データを保護するのは、自分の責任です。

電子メールによるレポートの送信と配信のトラッキングを参照してください。

## エージェントによるビジネス・プロセスの自動化

コンテンツ作成者は、分析、ダッシュボードおよびブリーフィング・ブックをターゲットとなる参加者に対して、オンデマンドまたは定期的に配信するエージェントを作成できます。

### トピック:

- [コンテンツを配信するエージェントの作成](#)
- [分析からコンテンツを直接配信するためのエージェントのスケジューリング](#)
- [エージェントのスケジュールの無効化と有効化](#)
- [エージェントのサブスクリプション](#)
- [サブスクリプションまたは所有するエージェント・リストの表示](#)
- [アラートへのアクセスおよび管理](#)

## コンテンツを配信するエージェントの作成

分析、ダッシュボード・ページおよびブリーフィング・ブックを特定の受信者およびサブスクリプション者に配信するエージェントを作成できます。これらのエージェントは、オンデマンドで、または定期的にコンテンツを配信できます。

1. クラシック・ホーム・ページで、「作成」をクリックし、「エージェント」を選択します。
2. オプション: エージェントの一般オプションを設定します。
  - a. エージェントの優先度レベルを設定します。  
配信するコンテンツの重要性を考慮してください。
  - b. コンテンツの生成方法、つまり、どのユーザーがレポート問合せを実行するかを定義します。
3. 配信スケジュールを設定します。
  - a. 「スケジュール」タブをクリックします。
  - b. エージェントをスケジュールに基づいて実行するかどうか、実行する頻度、開始時期および停止時期を選択します。  
  
夏時間が適用されるタイム・ゾーンの日時を選択した場合は、タイム・ゾーンにより夏時間が反映されます。たとえば、夏時間が適用される月に「(GMT) グリニッチ標準時間: ダブリン、エジンバラ、リスボン、ロンドン」を選択した場合、これは BST (イギリス夏時間) を意味します。  
  
配信エージェントによる日次実行の最小頻度は 15 分です。
4. オプション: 「条件」タブをクリックし、特定の条件下でのみエージェントを実行する場合は「条件を使用」を選択します。
  - 条件を定義するには、「作成」をクリックします。
  - カタログから既存の条件を選択するには、「参照」をクリックします。エージェントが常にコンテンツを配信するようにする場合は、デフォルト(条件を使用しない)のままにします。
5. ダッシュボード・ページや分析など、配信するコンテンツを選択します。
  - a. 「配信コンテンツ」タブをクリックします。
  - b. 配信するコンテンツおよび送信する形式を選択します。
6. コンテンツの配信先となるユーザーおよびこのエージェントのサブスクライブを許可するその他の対象者を指定します。
  - a. 「受信者」タブをクリックします。
  - b. 「受信者の追加」をクリックし、ユーザーを個別に追加するか、アプリケーション・ロールに基づいてユーザーを追加できます。
  - c. 「電子メール受信者の追加」をクリックし、1人以上の受信者の電子メール・アドレスを入力します。
  - d. 「エージェント条件に使用されている分析から受信者を取得します」をクリックし、このエージェントで使用される条件の分析列を選択します。これにより、実行時に、条件で使用されている選択済の列に、構成された受信者(電子メール・アドレス)が追加されます。  
  
このオプションを選択した場合は、エージェントを共有フォルダに保存する必要があります。
  - e. 「エージェントを実行しているユーザーに関連する行のみを返します」をクリックし、ユーザーが使用できるデータのみを返します。
  - f. その他のユーザーがこのエージェントをサブスクライブできるようにするには、「サブスクライブ用にエージェントを公開」を選択し、ユーザー名またはアプリケーション・ロールを選択して、サブスクライブできるユーザーを定義します。

このオプションの対象になるのは、共有フォルダに保存されているエージェントまたはレポートのみです。

7. コンテンツを受信者に配信する方法を指定します。配信は、Oracle Analytics に、電子メールで、および携帯電話やポケットベルなどのデバイスに送信できます。
    - a. 「送信先」タブをクリックします。
    - b. コンテンツを配信するには、「ホーム・ページとダッシュボード」をクリックします。ユーザーは、配信が送信されるたびに Oracle Analytics でアラートを受け取ります。
    - c. その他の方法でコンテンツを配信するには、「デバイス」をクリックします。
      - ユーザーが配信の受信方法を決定できるようにするには、「アクティブな配信プロファイル」を選択します。
      - 配信を送信できるデバイスのタイプを制限するには、特定のデバイスを選択し、必要なデバイス・タイプのみを選択します。
- ユーザーは、「配信オプション」プリファレンス(マイ・アカウント)を使用して配信プロファイルを設定します。

8. エージェントを保存します。

その他のユーザーがエージェントをサブスクライブできるようにする場合は、ユーザーがエージェントを見つけられるように、/Shared Folders のサブフォルダにエージェントを保存する必要があります。たとえば、/Shared Folders/MySharedAgents/Sales/MonthlySalesTarget\_Agent のようにします。

エージェントを保存した後は、「エージェントを今すぐ実行」ボタンをクリックしてエージェントを実行できます。これは、エージェントをテストする場合などに便利です。

「アクション」タブは将来の使用のために予約されています。

## 分析からコンテンツを直接配信するためのエージェントのスケジューリング

分析からコンテンツを直接配信するようにエージェントを設定できます。この方法でエージェントを作成すると、Oracle Analytics によって「コンテンツ」プロパティが設定され、エージェントの配信条件が作成されるため、開始する際に便利です。

1. カタログ内の分析に移動します。
2. 「詳細」アクション・メニューをクリックし、「スケジュール」を選択します。
3. 必要に応じて、エージェントを詳細に定義します。

## エージェントのスケジュールの無効化と有効化

エージェントのスケジュールを一時的に無効にし、再び有効にすることができます。

エージェントのスケジュールを無効にすると、定義されたスケジュールでエージェントが実行されません。スケジュールを無効にした場合も、エージェント・エディタの「エージェントを今すぐ実行」ボタンなど、その他の方法では実行できます。

1. クラシック・ホーム・ページで、「カタログ」をクリックし、スケジュールを無効または有効にするエージェントに移動します。

2. 「詳細」アクション・メニューをクリックして「**スケジュールの無効化**」を選択し、エージェントのスケジュールを無効にします。
3. 「詳細」アクション・メニューをクリックして「**スケジュールの有効化**」を選択し、エージェントを再度スケジュールどおりに実行します。

エージェント・エディタの「スケジュール」タブの「有効」ボックスを使用して、エージェントのスケジュールを無効にしたり、有効にすることもできます。

## エージェントのサブスクライブ

エージェントによって生成された最新の情報を受信する場合は、エージェントをサブスクライブします。所有者がサブスクライブを許可している場合にのみ、エージェントをサブスクライブできます。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. サブスクライブするエージェントに移動します。
3. 「詳細」アクション・メニューをクリックし、「**サブスクライブ**」を選択します。  
エージェントをサブスクライブ可能にするには、所有者が「**サブスクライブ用にエージェントを公開**」（「受信者」タブ）を選択し、サブスクライブを許可するユーザーを特定する必要があります。
4. 必要に応じてサブスクライブを解除するには、「詳細」アクション・メニューをクリックし、「**サブスクライブ解除**」を選択します。

## サブスクライブまたは所有するエージェント・リストの表示

サブスクライブしているエージェントおよび所有しているエージェントのリストを表示できます。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. 「**検索**」をクリックします。
3. すべてのエージェントを検索するには、「検索」ボックスに\* (アスタリスク)を入力し、「場所」リストで「**すべて**」を選択して、「タイプ」リストから「**エージェント**」を選択します。  
または、「検索」フィールドにエージェントの名前または名前の一部を入力し、「場所」に特定の場所を選択して、「タイプ」リストから「**エージェント**」を選択します。
4. 「**検索**」をクリックします。

## アラートへのアクセスおよび管理

アラートは、エージェントからコンテンツが到着したときに通知します。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**アラート**」をクリックします。
2. アラートを表示して管理します。
  - アラートの内容を確認します。
  - アラートとその繰返しのすべてをクリアします。
  - 権限がある場合は、アラートを生成したエージェントを編集します。



- 権限がある場合は、アラートを生成したエージェントを実行します。
- アラートをサブスクライブします。
- すべてのアラートとその繰返しのすべてをクリアします。

## デバイスと配信プロファイルの構成

「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブを使用して、エージェントによってアラートが生成された場合に連絡に使用されるデバイスと配信プロファイルを構成します。

- [デバイスと配信プロファイルについて](#)
- [デバイスの構成](#)
- [配信プロファイルの構成](#)

## デバイスと配信プロファイルについて

デバイスと配信プロファイルは、エージェントによってアラートが生成された場合の最適な連絡方法と、コンテンツを受信するデバイスを制御します。

- **デバイス** - デバイスはコンテンツの配信に使用される手段です。エージェントのコンテンツは、電子メールや SMS メッセージなどの様々な方法で配信されます。
- **配信プロファイル** - 配信プロファイルは、コンテンツの優先度に基づいてコンテンツの配信に使用されるデバイスを指定します。ニーズに合わせていくつかの配信プロファイルを定義し、切り替えて使用することができます。ただし、一度にアクティブにできるプロファイルは 1 つのみです。

たとえば、情報の優先度に応じて、会社の電子メールにコンテンツを配信する**社内**配信プロファイルと、携帯電話にコンテンツを配信する**移動中**プロファイルを持つことができます。

「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブから、デバイスおよび配信プロファイルを構成します。

ユーザーが使用できるデバイスのタイプは管理者が管理します。『*Oracle Analytics Cloud の構成*』のコンテンツを配信するデバイスのタイプの管理に関する項を参照してください。

エージェントに対して指定された配信先に応じて、コンテンツは次の宛先に配信されます。

- ホーム・ページおよびダッシュボード(「アラート」セクション)。
- アクティブな配信プロファイルまたは特定のデバイス。

配信先が特定のデバイスの場合、コンテンツは、アクティブな配信プロファイル内のデバイスではなく、構成されたデバイスに配信されます。たとえば、電子メール・デバイスに配信するようエージェントが定義されている場合、アクティブな配信プロファイルで構成された電子メール・デバイスではなく、構成されているデフォルトの電子メール・デバイスが使用されます。

配信コンテンツには特定の優先度が割り当てられます。デフォルトの優先度は「標準」です。アクティブなプロファイルに対するデバイスを選択する際、どの優先度のコンテンツをそのデバイスに送信するかを指定できます。たとえば、携帯電話を配信プロファイルに追加した場合、優先度の高いコンテンツのみを関連付けます。

## デバイスの構成

アラートを配信する 1 つ以上のデバイスを構成できます。

1. クラシック・ホーム・ページで、**Your-Username** としてサインインをクリックし、「**マイ・アカウント**」を選択します。
2. 「**配信オプション**」タブをクリックします。
3. 「**デバイス**」領域で、「**デバイスの作成**」をクリックしてデバイスを追加します。

エージェントによっては、アクティブな配信プロファイルに従ってアラートを配信するように設定される場合や、特定のデバイスにのみ配信する場合があります。それらをここで定義します。たとえば、電子メール・デバイスに配信するようにエージェントが定義されている場合は、アクティブな配信プロファイルで指定した電子メール・デバイスはいずれも使用されず、ここで指定したデフォルトの電子メール・デバイスが使用されます。
4. 「**名前**」に、簡単に理解できるデバイスの名前を入力します。たとえば、**My Work Email** や **My Work Mobile** のように指定します。
5. デバイス・カテゴリを選択します。たとえば、「**電子メール**」を選択します。
6. 「**デバイス・タイプ**」に、デバイスを説明するタイプを指定します。
7. 「**アドレス/番号**」に、デバイスに関連付けられているアドレスまたは番号を入力します。たとえば、勤務先の電子メール・アドレスや携帯電話番号を指定します。

数字を入力する際は、スペース、ダッシュ、カッコなどの記号を使用しないでください。
8. 「**OK**」をクリックして「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブに戻ります。

適切なカテゴリ(「**電子メール**」など)の「デバイス」リストにデバイスが表示されます。
9. このデバイスをデフォルト・デバイスにする場合、デバイス名の右にある「**デフォルト**」オプションを選択します。
10. デバイスを編集するには、次のステップを実行します。
  - a. リストでデバイスを選択します。
  - b. 「**デバイスの編集**」ボタンをクリックして「デバイスの編集」ダイアログを表示します。
  - c. 編集を行い、「**OK**」をクリックして「マイ・アカウント」ダイアログの「配信オプション」タブに戻ります。
11. 「**OK**」をクリックします。

## 配信プロファイルの構成

1 つ以上の配信プロファイルを設定して、アラートをどこに配信するかを指定できます。

1. クラシック・ホーム・ページで、**Your-Username** としてサインインをクリックし、「**マイ・アカウント**」を選択します。
2. 「**配信オプション**」タブをクリックします。
3. 「**配信プロファイル**」領域で、「**配信プロファイルの作成**」をクリックします。



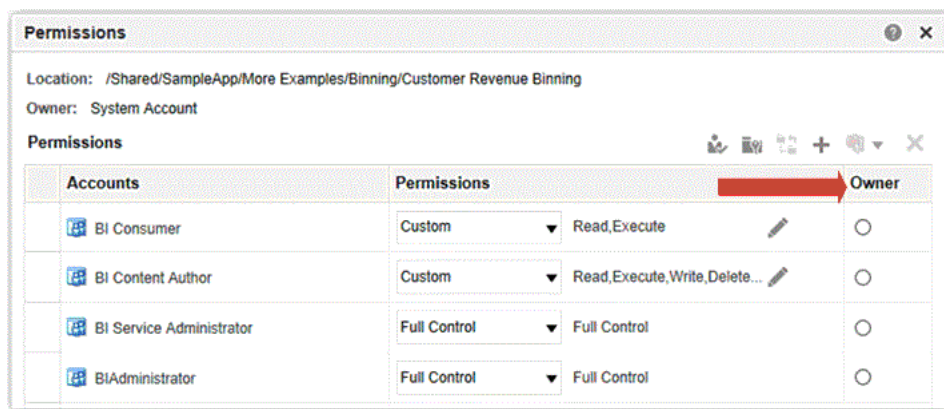
4. 「名前」には、配信プロファイルについて簡単に理解できる名前を入力します。たとえば、**In the Office**、**On the Road** などです。
5. このプロファイルがアクティブなプロファイルの場合に使用する配信デバイスごとに、優先度オプション(「高」、「標準」または「低」)を 1 つ以上選択します。  
これらの優先度は配信コンテンツの優先度とともに使用され、コンテンツの配信先デバイスを決定します。  
使用しないデバイスには優先度を設定しないでください。優先度が選択されていないデバイスは、プロファイルで使用されません。
6. 「OK」をクリックします。
7. この配信プロファイルをアクティブなプロファイルにする場合は、「**アクティブ**」オプションを選択します。

## 項目の所有権の割当て

カタログのコンテンツを作成する際は、コンテンツの所有権を他のユーザーに付与できます。また、適切な権限が付与されたユーザーは、コンテンツの所有権を取得できます。

たとえば、ブランド売上分析を作成し、今後はその分析の管理を担当する地域営業アナリストに所有権を付与できます。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. カタログ・ページで、所有権を割り当てるコンテンツを検索します。
3. 項目の検索結果で、「**詳細**」、「**権限**」の順にクリックします。
4. 「権限」表で、「**所有者**」列をクリックし、新しい所有者を指定します。



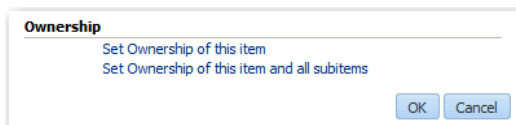
5. 「OK」をクリックします。

## 項目の所有権の想定

ユーザーまたはロールのメンバーとして、**BIServiceAdministrator** ロールを割り当てられている場合は、共有フォルダ・コンテンツの所有権を取得できます。

たとえば、販売グループのユーザーである場合は、販売予測分析にプロパティを割り当て、自分自身を所有者としてマーク付けできます。

1. クラシック・ホーム・ページで、「**カタログ**」をクリックします。
2. カタログ・ページで、所有する必要があるコンテンツを検索します。
3. 項目の検索結果で、「**詳細**」、「**プロパティ**」の順にクリックします。



4. 「所有権」領域で、その項目の所有権のみを取得するか、その項目とその子項目の所有権を取得するかを選択します。
5. 「OK」をクリックします。

## コンテンツへの外部イメージおよび他の外部リソースの埋込みについて

管理者によって安全とみなされた場合には、レポートに外部イメージおよび他の外部リソースを埋め込むことができます。

承認されていないソースからイメージを追加しようとする、無効なイメージのエラーにより、管理者に連絡してイメージの安全なドメインを構成するよう求められます。



管理者は、安全ドメインのリストを管理しています。たとえば、\*.example.org からイメージを埋め込む場合は、このドメインをセーフ・リストに追加するよう管理者に依頼します。安全ドメインの登録を参照してください。

イメージに加えて、管理者は、フレーム、スクリプト、フォント、スタイルシート、音声、ビデオ、接続など、その他の Web リソースへのアクセスを許可または制限できます。

## Smart View でのレポート・コンテンツへのアクセス

Oracle Smart View for Office (Smart View)では、Oracle の Enterprise Performance Management (EPM)と Business Intelligence (BI)専用に設計された共通の Microsoft Office インタフェースを提供します。

Smart View を使用すると、Microsoft Excel、Word および PowerPoint インタフェースでデータを表示、インポート、操作、配布および共有できます。Microsoft Office 製品から EPM および BI コンテンツへのアクセスと統合のための包括的なツールです。

ダッシュボードおよびレポートを Smart View で BI コンシューマが使用できるようにする方法の詳細は、Smart View と Oracle Analytics Cloud を参照してください。

# Microsoft Power BI でのレポート・コンテンツへのアクセス

Microsoft Power BI Desktop から Oracle Analytics Cloud に接続して、Oracle Analytics コンテンツをビジュアル化できます。

Microsoft Power BI のユーザー・ベースが確立されている場合、Microsoft Power BI Desktop が提供するビジュアライゼーションおよび公開機能と Oracle Analytics のエンタープライズ・モデリング機能を組み合わせて活用すると、データに対する強力な洞察を得ることができます。Microsoft Power BI から Oracle Analytics Cloud への接続を参照してください。

## 高度なカタログ管理の実行

カタログのほとんどの管理タスクを実行するには、Oracle Analytics のクラシック・ビューのカタログ・ページを使用できます。

高度なタスクを実行する場合は、ローカルの Windows または Linux マシンにカタログ・マネージャをデプロイできます。たとえば、カタログ・マネージャを使用して、カタログ・オブジェクトの基礎となる XML コードを表示することで、高度なカタログ・レポートを作成してカタログの問題を診断できます。

### トピック:

- [カタログ・マネージャのデプロイ](#)
- [カタログ・マネージャを使用したカタログ・データを表示するレポートの作成](#)
- [XML でのカタログ・オブジェクトの表示](#)
- [XML でのカタログ・オブジェクトの編集](#)
- [カタログ・マネージャを使用したカタログ・テキストの検索と置換](#)

## カタログ・マネージャのデプロイ

カタログ・マネージャをローカルの Windows または Linux マシンにデプロイします。

### 前提条件

カタログ・マネージャを Oracle Analytics Cloud で使用するには、有効なユーザー資格証明が必要です。具体的には、Oracle Analytics Cloud の管理者権限を持つ Oracle Analytics Cloud に関連付けられた Oracle Cloud アイデンティティ管理システムのユーザー (BI サービス管理者ロールを持つユーザー) の資格証明です。

Oracle Analytics Cloud は、次の Oracle Cloud アイデンティティ管理システムのいずれかを使用します:

- **Oracle Identity Cloud Service (IDCS):** Oracle Analytics Cloud が Oracle Identity Cloud Service とフェデレートしている場合、Oracle Identity Cloud Service のユーザー資格証明で接続する必要があります。
- **Oracle Cloud Infrastructure Identity and Access Management (IAM) アイデンティティ・ドメイン:** Oracle Analytics Cloud がアイデンティティ管理に IAM アイ

デンティティ・ドメインを使用している場合、アイデンティティ・ドメインのユーザー資格証明で接続する必要があります。

不明な場合、クラウド・サービス管理者にお問い合わせください。ユーザーおよびグループの設定についてを参照してください。

Oracle Analytics Cloud でシングル・サインオン(SSO)に Active Directory などの外部アイデンティティ・プロバイダが使用されている場合に自分の SSO ユーザー資格証明で接続しようとすると、メッセージ"接続失敗 401: 権限がありません"が接続時に表示されます。

1. まだダウンロードしていない場合は、Oracle Technology Network から Oracle Analytics Client Tools をダウンロードします。Oracle Analytics Client Tools のダウンロードおよびインストールを参照してください。

Oracle Analytics Client Tools をすでにダウンロードしてインストールしてある場合は、ステップ 1 をスキップしてかまいません。

2. Oracle Analytics で、クラシック・ビューの「カタログ」ページに移動し、ブラウザ URL をコピーします。たとえば、`https://myoac-idabcd0efghj-ia.analytics.ocp.oraclecloud.com/ui/analytics/saw.dll?catalog` です。

カタログ・マネージャにログインする際、この URL の一部を使用します。

3. Oracle Analytics Client Tools をインストールしたマシンで、カタログ・マネージャを起動します。

- Windows の場合、「スタート」メニューから「Oracle Analytics Client Tools」、「Catalog Manager」の順にクリックします。

- Linux の場合、それに相当するスタート・メニュー・オプションを使用します。

4. カタログ・マネージャで、「ファイル」、「カタログを開く」の順にクリックします。

5. 次を指定します。

- **タイプ** - 「オンライン」を選択します。

- **URL** - ステップ 2 でコピーした URL を変更します。ホスト名の後ろに、**analytics-ws/saw.dll** を追加する必要があります。

たとえば、URL が `https://myoac-idabcd0efghj-`

`ia.analytics.ocp.oraclecloud.com/ui/analytics/saw.dll?catalog` の場合は、

`https://myoac-idabcd0efghj-ia.analytics.ocp.oraclecloud.com/analytics-ws/saw.dll` に変更します

- **「ユーザー」** および **「パスワード」** - 管理者権限を持つユーザーの資格証明を入力します。

- **表示専用モード** - このオプションをクリックしてカタログが変更されないようにすることをお勧めします。変更する必要がある場合は、必要に応じて復元できるように、カタログを最初にアーカイブしておくことをお勧めします。

## Oracle Analytics Client Tools のダウンロードおよびインストール

レポート・ダッシュボードおよび分析からのリモート接続を有効にするために、Oracle Analytics Client Tools をダウンロードしてインストールします。さらに、モデル管理ツール (Microsoft Windows で使用可能なクライアント・ツールの 1 つ) を使用して、セマンティック・モデラーでサポートされていないセマンティック・モデル(.rpd ファイル)を編集することもできます。

Windows または Linux プラットフォームに Oracle Analytics Client Tools をインストールします。

- Windows では、ソフトウェア・パックによって、グラフィカル・ユーザー・インタフェース・バージョンの **モデル管理ツール**と **カタログ・マネージャ**、コマンド・ライン・ユーティリティがインストールされます。
- Linux では、ソフトウェア・パックによって、`runcat.sh` および `datamodel.sh` コマンド・ライン・ユーティリティがインストールされます。

#### ノート:

オラクル社は、Oracle Analytics Cloud の各更新を含む Oracle Analytics Client Tools を更新します。Oracle Analytics Client Tools の最後の更新を使用していることを確認してください。

1. **Oracle Analytics Client Tools** のダウンロード・ページに移動します。
2. 最新の **Oracle Analytics Client Tools <Month Year>更新** リンクをクリックして、Oracle Software Delivery Cloud ページを表示します。
3. 「**プラットフォーム**」下矢印、「**すべて**」の順にクリックして、ドロップダウン・リストの外部をクリックするか、[Enter]を押します。
4. 表の「ソフトウェア」列で、目的のプラットフォーム用のダウンロード・パックを選択します。
  - Windows の場合、「**Oracle Analytics Client May2023-Win for (Microsoft Windows x64 (64-bit)), <Size in MB>**」を選択します。
  - Linux の場合、「**Oracle Analytics Client May2023-Linux for (Linux x86-64), <Size in MB>**」を選択します。

他のコンポーネント(データ・ゲートウェイや Power BI Connector など)が選択解除されていることを確認します。

5. Oracle Cloud Service のライセンス契約に同意します。
6. 「**ダウンロード**」をクリックして Oracle Download Manager を起動し、画面の指示に従います。
7. ダウンロードが完了したら、**宛先を開く**をクリックします。
8. ダウンロードした ZIP ファイルから Oracle インストーラを抽出して実行します。たとえば、インストーラ・ファイル `oac_client-<update ID>-win64.exe` を抽出して実行し、画面の指示に従います。

Windows でツールを起動するには、Windows の「スタート」メニューに移動して「**Oracle Analytics Client Tools**」をクリックし、使用するツールの名前を選択します。たとえば、セマンティック・モデルを編集するには、「**Model Administration Tool**」をクリックします。

Linux では、`runcat.sh` および `datamodel.sh` コマンド・ライン・ユーティリティを使用します。Linux での Oracle Analytics Client Tools の使用を参照してください。

## カタログ・マネージャを使用したカタログ・データを表示するレポートの作成

カタログ・オブジェクトのカタログ・データを表示するためのレポートを作成できます。レポートは画面に表示するか、ファイルに保存できます。たとえば、オブジェクトごとに Oracle Analytics に送信される SQL 文を表示するレポートを作成できます。

レポートを作成すると、空白または空のフィールドがタブ文字としてエクスポートされます。デフォルトのタブをフィールド・セパレータとして使用してレポートを作成した場合、レポート・ファイル内の 2 つのタブ文字は空白のフィールドを示します。

1. カatalog・マネージャで、カタログの最上位フォルダを選択します。
2. 「ツール」メニューから「レポートの作成」を選択します。
3. レポートを作成するカタログ・オブジェクト・タイプを選択します。
4. レポートから同じ行を除外するには、「重複なし」ボックスを選択します。
5. 「レポート内の列」リストで、レポートに表示する列を指定します。左右の矢印ボタン («<» と «>») を使用して、「使用可能な列」リストと「レポート内の列」リストの間で列を移動し、プラスとマイナスのボタン(「+» と «-») を使用して、レポートに列の表示順序を設定します。
6. 「OK」をクリックします。
7. レポートに適切な列が含まれるまで、ステップ 4 から 7 を繰り返します。
8. レポートをファイルに保存するには、**レポートの保存先** フィールドにファイルのパス名を指定します。パス名を選択するために、「参照」ボタンをクリックして「名前を付けて保存」ダイアログを表示します(ファイルが存在しない場合は作成されます)。
9. 「Excel 形式」を選択し、Microsoft Excel にインポートできる .tab 拡張子でファイルを作成します。
10. 「OK」をクリックします。

レポートを作成してエクスポートすると、空白または空のフィールドはタブ文字としてエクスポートされます。また、タブ文字をフィールド・セパレータとして使用すると、空白のフィールドは 2 つのタブ文字として表示されます。

## レポートの使用例

カタログ・マネージャからのレポートを使用して、インスタンス内のデータを保守し、問題が発生する前に問題を識別できます。

たとえば、次を行えます:

- 分析を使用しているダッシュボードを調査します。分析を含むダッシュボード・レポートを作成し、そのレポートで分析を検索します。
- セマンティック・モデル表で変更された列の影響を受ける分析を調査します。すべての列および式を含む分析レポートを作成し、カタログ・マネージャで置換する必要がある項目についてレポートを検索します。
- ダッシュボードで使用されているダッシュボード・プロンプトおよび関連フィールド(列、式、サブジェクト領域など)を調査します。分析のレポートを作成し、それらの分析に使

用されているフィルタを抽出します。次の例は、プロンプトが表示される保存済フィルタを使用して式が導出されるフィルタの抽出を示しています。

例: "Markets"."Region" [Filter, prompted]

- オブジェクトの ACL を調査します。レポートの ACL を確認することで、オブジェクトへのアクセス権が、読取り/書込みなどの適切な権限を保持する適切なロールに付与されていることを確認できます。たとえば、ACL を表示するには、次のように指定します。

`^biconsumer=RX:steve=F`。ここで、キャレット(^)はアプリケーション・ロールを示します。

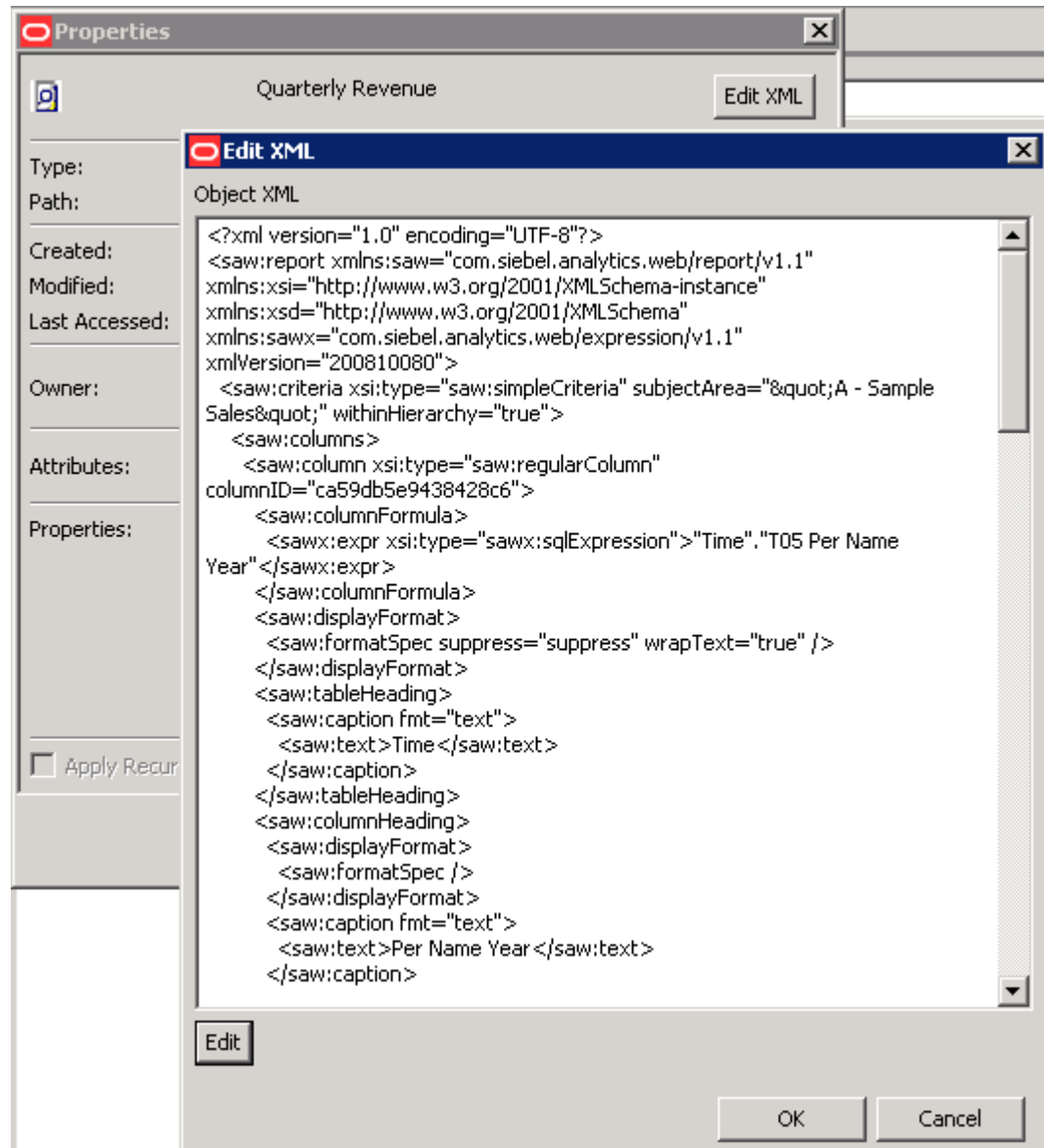
## XML でのカタログ・オブジェクトの表示

カタログ・マネージャでは、分析、ダッシュボード、フィルタなどのカタログ・オブジェクトの XML 記述を表示できます。

1. カタログ・マネージャで、オブジェクトに移動します。
2. 「名前」列でオブジェクトを右クリックし、「プロパティ」を選択します。
3. 「XML の編集」をクリックします。
4. XML 定義の表示が終了した場合は、「取消」をクリックします。
5. 「プロパティ」ダイアログで「OK」をクリックします。

この図は、オブジェクトについてカタログ・マネージャのサンプル XML コードを示しています。





## XML でのカタログ・オブジェクトの編集

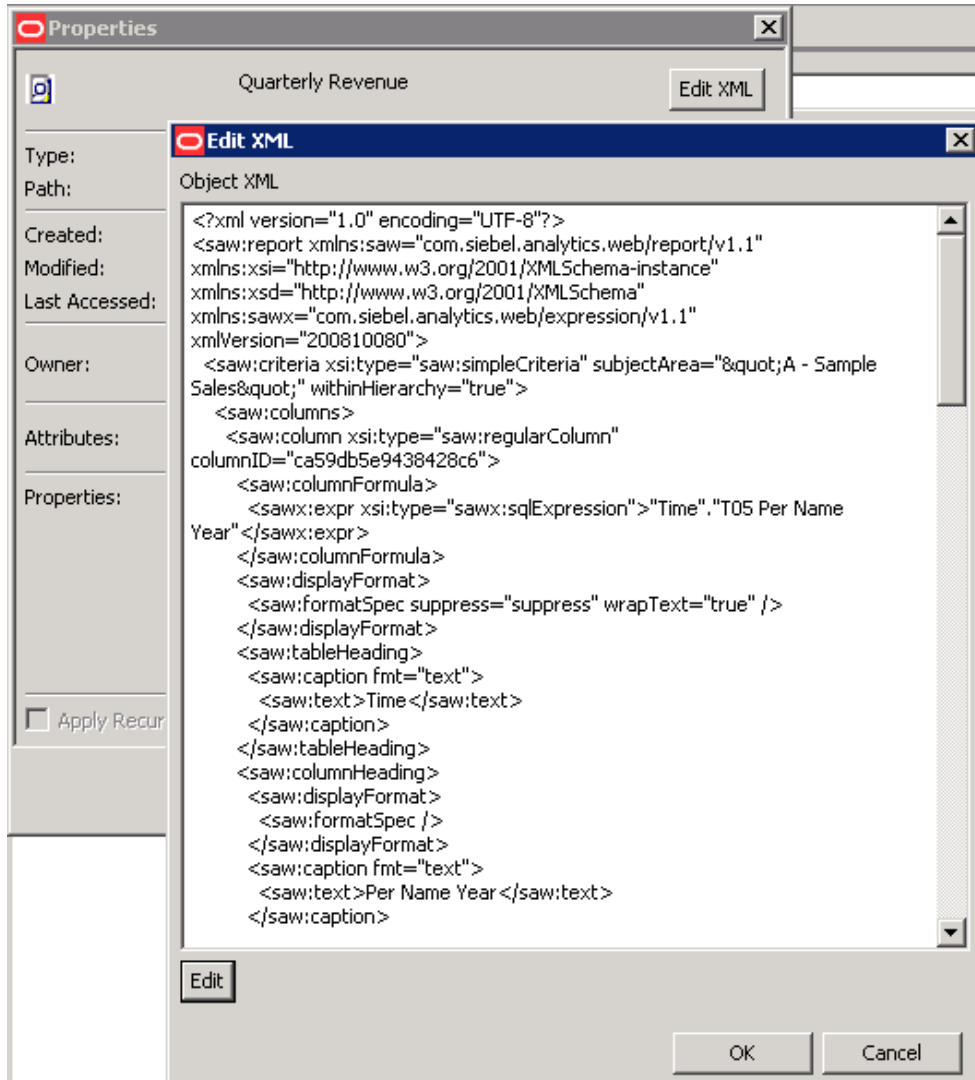
カタログ・マネージャでは、分析、ダッシュボード、フィルタなどのカタログ・オブジェクトの XML 記述を編集できます。

オブジェクトの XML 記述を編集すると、カタログ・マネージャでは XML が整形形式であることは確認されますが、内容は検証されません。開始する前に、必要な場合にカタログを復元できるように、カタログをバックアップしてください。

1. カタログ・マネージャで、編集するオブジェクトに移動します。



- 「名前」列でオブジェクトを右クリックし、「プロパティ」を選択します。



- 「XML の編集」、「編集」の順にクリックします。
- 「オブジェクト XML」領域で変更を追加します。
- 「XML の編集」ダイアログで「OK」をクリックします。
- 「プロパティ」ダイアログで「OK」をクリックします。

## カタログ・マネージャを使用したカタログ・テキストの検索と置換

カタログ・マネージャを使用して、カタログ内の特定のテキストを検索し、それを他のテキストに置換できます。

具体的には、次のものを検索および置換できます：

- ダイアログを使用して、単純なテキスト文字列(「[単純なカタログ・テキスト文字列の検索と置換](#)」を参照)。

たとえば、オブジェクトに「My Misspeled Wirlds」という文字列が含まれているとします。カタログ・マネージャを使用してその文字列を検索し、正しい文字列である「My Misspelled Words」に置換できます。

- 複数または複雑なテキスト文字列を、XML ファイルを使用してすべて同時に実行(「[複数のカタログ・テキスト文字列の検索と置換](#)」を参照)。

たとえば、管理者が、ワークブック、サブジェクト領域、表または列の名前を変更するとします。表 Sales を MySales という名前に変更します。カタログ・マネージャを使用して、カタログ全体でそのオブジェクトが使用されているすべての箇所を検索して置換できます。

## 単純なカタログ・テキスト文字列の検索と置換

カタログ内の単純なテキスト文字列を検索し、別のテキストに置換できます。

1. カタログ・マネージャで、カタログを開きます。
2. 「ツール」メニューから、「XML 検索と置換」を選択します。
3. 「旧テキスト」フィールドに、検索するテキスト文字列を入力します。
4. 「置換先」フィールドに、置換テキストを入力します。
5. 検索で大文字と小文字を区別しない場合は、「**大小文字を区別**」ボックスの選択を解除します。
6. 「OK」をクリックします。

## 複数のカタログ・テキスト文字列の検索と置換について

検索および置換対象のそれぞれのテキスト文字列を識別する XML ファイルをインポートすると、複数のカタログ・テキスト文字列を一度にすべて検索および置換する、さらに強力な操作を実行できます。

## テキスト文字列の検索と置換のための XML ファイル形式

検索および置換の XML ファイルでは、**action** 要素を使用して検索および置換する各テキスト文字列を識別します。

**action** 要素は、**commands** 要素に含まれています。

- **command** — 置換するテキストを指定します。有効な値は次のとおりです：
  - **textReplace** — 列名など、XML ファイル内で一致するすべてのテキストを置換します。
- **oldValue** — 検索するテキスト文字列を指定します。

検索および置換の XML ファイルで **textReplace** コマンドにこの属性を指定する場合は、一般的な文字列とは異なり、完全な **Java regex** 構文を使用する必要があります。文字列を置換する場合は、次を実行する必要があります：

- 角カッコ、丸カッコ、ドル記号、カレットなどの特殊な **Java regex** 文字を置換します。
- バックスラッシュや引用符などの特殊文字を置換します。
- 引用符やアンパサンドなどの特殊な **HTML** 文字を置換します。

- `newValue` — 置換テキストを指定します。
- `ignoreCase` — `true` に設定すると大文字と小文字が区別されず、`false` に設定すると区別されます。デフォルト値は `false` です。

## 検索基準の regex 構文で使用するためのサンプル文字列

検索基準には、次のサンプル文字列を使用できます:

完全な Java regex 構文については、次のドキュメントを参照してください:

[java.util.regex: クラス Pattern](#)

検索基準で、次のサンプル文字列を regex 構文と一緒に使用します。

| 入力された検索文字列       | 結果                                                                                                                                                |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>a</code>   | 検索文字列の前後にワイルドカードが追加され(例: <code>*a*</code> )、文字" <code>a</code> "を含む検索結果が返されます。                                                                    |
| <code>^a</code>  | 検索文字列の後にワイルドカードが追加され(例: <code>a*</code> )、文字" <code>a</code> "で始まる検索結果が返されます。                                                                     |
| <code>a\$</code> | 検索文字列の前にワイルドカードが追加され(例: <code>*a</code> )、文字" <code>a</code> "で終わる検索結果が返されます。                                                                     |
| <code>a\*</code> | 文字列にアスタリスク( <code>*</code> )が続く文字(例: " <code>a*</code> ")が含まれていることを明示して検索します。                                                                     |
| <code>?</code>   | 文字に疑問符( <code>?</code> )とアスタリスク( <code>*</code> )を付加して使用すると、ゼロ(0)個以上の文字の繰返しが返されます。たとえば、 <code>?a*</code> では、文字" <code>a</code> "のゼロ個以上の繰返しが返されます。 |

## テキスト文字列の検索と置換のための XML ファイルの例

次に、テキスト文字列の検索と置換のための XML ファイルの例を部分的に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<actions>
<action command="textReplace" oldValue="boots" newValue="HoleyShoes"
ignoreCase="true"/>
</actions>
```

## 複数のカタログ・テキスト文字列の検索と置換

複数のカタログ・テキスト文字列を一度にすべて検索および置換する場合は、次の手順を実行します。

1. 複数のテキスト文字列を検索および置換するための XML ファイルを作成します。  
[複数のカタログ・テキスト文字列の検索と置換について](#)を参照してください。
2. カタログ・マネージャで、カタログを開きます。
3. 「ツール」メニューから、「XML 検索と置換」を選択します。
4. 「ファイルからインポート」フィールドにパスを入力するか、「参照」をクリックしてステップ 1 で作成した XML ファイルを指定します。

5. 検索で大文字と小文字を区別するには、「**大小文字を区別**」ボックスを選択します。
6. 「OK」をクリックします。

# 第 V 部

## データの公開

ここでは、ピクセルパーフェクト・レポートの表示方法とスケジュール方法について説明します。

### 章:

- [ピクセルパーフェクト公開の概要](#)
- [ピクセルパーフェクト・レポートの表示](#)
- [ピクセルパーフェクト・レポート・ジョブの作成](#)
- [ピクセルパーフェクト・レポート・ジョブの表示および管理](#)
- [ピクセルパーフェクト・レポート履歴の表示および管理](#)
- [ピクセルパーフェクト・レポートの管理](#)

## ピクセルパーフェクト公開の概要

このトピックでは、ピクセルパーフェクト・レポートの表示やスケジュールに固有の機能を紹介します。

### トピック:

- [ピクセルパーフェクト・レポートの概要](#)
- [レポート・コンシューマのタスク](#)
- [アカウント・プリファレンスの設定](#)
- [カタログについて](#)
- [デスクトップ・ツールのダウンロード](#)

## ピクセルパーフェクト・レポートの概要

ピクセルパーフェクト・レポート・ソリューションである **Oracle Analytics Publisher** を使用して、運用レポート、電子資金決済ドキュメント、政府報告用 PDF フォーム、出荷ラベル、小切手、販促用レターなどの高度にフォーマットされたあらゆるドキュメントを作成、管理および配信できます。

使用可能なタスクは、管理者によって割り当てられた権限に依存します。このガイドでは、レポート利用者がレポートを表示およびスケジュールする方法について説明します。

ロール	サンプル・タスク
管理者	システム設定の構成 データ・ソースの設定 配信サーバーへの接続の構成 スケジュールラの構成 システム・プロセスの診断およびモニター
データ・モデル開発者	レポートに使用するデータのフェッチおよび構築
レポート・デザイナー	レポート定義の作成およびレイアウトの設計

## レポート・コンシューマのタスク

レポート・コンシューマは、レポートを表示したり、スケジュールすることができます。

レポート・コンシューマは次のタスクを実行します。

- カatalog内のレポートをリアルタイムに実行して表示します。
- 指定した間隔でレポートを実行し、プリンタ、FAX、電子メールなどの様々な宛先に送信するようにスケジュールします。
- レポート・ジョブの履歴および保存された出力を表示します。

## アカウント・プリファレンスの設定

「アカウント」ダイアログを使用して、アカウント・プリファレンスおよびグループを設定または表示します。

1. BI Publisher のホーム・ページで、「**マイ・プロフィール**」の **username** をクリックし、「**マイ・アカウント**」を選択します。
2. 「**一般**」タブでアカウント・プリファレンスを設定または表示します。
  - **アクセシビリティ・モード**
  - **電子メール・アドレス**
  - **デフォルトのプリンタ**
3. 「**グループ**」タブで自分に割り当てられているグループを表示します。  
ユーザー・グループは、自分に割り当てられているアプリケーション・ロールです。このリストは変更できません。

## カタログについて

カタログには、レポート、データ・モデル、スタイル・テンプレートなど、BI Publisher のオブジェクトが格納されます。

カタログ・ページを使用して、カタログ内にオブジェクトを配置し、これらのオブジェクト固有のタスクを実行します。使用できるオブジェクトおよびオプションは、システム権限、および個々のフォルダやオブジェクトに割り当てられている権限によって異なります。

### ノート:

カタログにフォルダを作成する際、フォルダの名前に特殊文字(～、!、#、\$、%、^、&、\*、+、\、|、:、"、\\、<、>、?、,、/)を使用しないでください。

カタログ・ページを使用して、次のような特化したタスクを実行できます。

- オブジェクト・レベルでの権限の設定
- オブジェクトのダウンロードとアップロード
- カタログ翻訳のエクスポートとインポート

## カタログの参照

カタログを参照し、フォルダの内容を表示できます。

「フォルダ」ペインを使用して、個人のコンテンツ(「マイ・フォルダ」)および「共有フォルダ」の表示およびナビゲートを行います。すべてのユーザーが「共有フォルダ」のコンテンツにアクセスできます。

1. ヘッダーで、「**カタログ**」をクリックします。

2. フォルダを選択すると、その内容が表示領域に表示されます。

## カタログの検索

検索機能を使用すると、カタログ内の任意の場所からオブジェクトをタイプおよび名前によってすばやく検索できます。

1. 「検索」メニューからオブジェクト・タイプを選択し、検索フィールドにオブジェクトの名前全体またはその一部を入力します。
2. 「検索」ボタンをクリックして、基準に一致する結果を表示します。

結果ページでは、結果からオブジェクトを選択してアクションを実行したり、検索結果をフィルタしたり、新規検索を開始することができます。

## デスクトップ・ツールのダウンロード

Publisher デスクトップ・ツールをダウンロードして、テンプレート・ビルダーおよびテンプレート・ビューアを使用します。

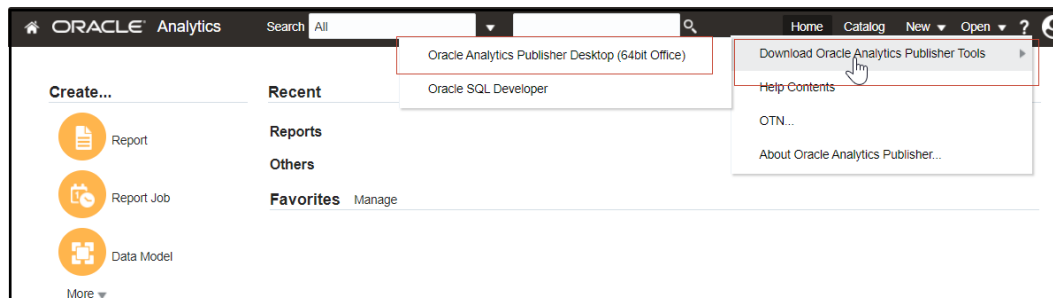
Publisher デスクトップ・ツールには、ダウンロードしてインストール可能な追加の製品が含まれています。Publisher の RTF または Excel のテンプレートを設計している場合は、「Template Builder For Word」を選択して、Publisher Desktop インストーラをダウンロードします。

Microsoft Office - 32 ビットまたは 64 ビットのバージョンに基づいて、Oracle Analytics Publisher Desktop ツールの最新バージョンを選択します。

Oracle Analytics Publisher Desktop ツールを直接 [Publisher ツールのダウンロード](#) ページから、または次からダウンロードします:

- Analytics のホーム・ページ - 「デスクトップ・ツールのダウンロード」から、「**Template Builder For Word**」を選択し、Oracle Analytics Publisher ページの「**ダウンロード**」をクリックします。
- BI Publisher の **ホーム**・ページ

Publisher のヘルプに移動し、Oracle Analytics Publisher Tools をダウンロードするオプションを選択して、Oracle Analytics Publisher ページの「**ダウンロード**」をクリックします。



Publisher Desktop には、次が含まれます:

- Microsoft Word 用テンプレート・ビルダー
- Microsoft Excel 用テンプレート・ビルダー



- テンプレート・ビューア

この Microsoft Word 用のアドインによって、RTF テンプレートの設計が容易になります。

Excel 用テンプレート・ビルダは、Word 用テンプレート・ビルダのインストールに含まれています。Excel 用テンプレート・ビルダは Microsoft Excel 用のアドインであり、Excel テンプレートの設計が容易になります。

テンプレート・ビューアでは、ほとんどのテンプレート・タイプをデスクトップからテストできます。

## ピクセルパーフェクト・レポートの表示

このトピックでは、ピクセルパーフェクト・レポートの表示、レポート・コンポーネントとの相互作用、代替レイアウトの表示、およびレポートの出力オプションの変更について説明します。

### トピック:

- [レポートの表示](#)
- [レポート・ビューアを使用したピクセルパーフェクト・レポートの構成](#)

## レポートの表示

カタログにはすべてのレポートが存在します。ホーム・ページには、すぐにアクセスできるように最近表示したレポートおよびお気に入りのレポートが表示されます。

カタログには、主要な 2 つのレポート・フォルダが表示されます:

- **「共有フォルダ」**には、ロールに基づいてアクセス権が付与されているレポートおよびフォルダが格納されます。
- **「マイ・フォルダ」**には、自分が作成したレポートおよびフォルダが格納されます。

レポート・ビューアを使用してレポートを表示できます。レポートのプロパティおよびユーザー権限に応じて、別のレイアウトの選択と表示、表示されたデータの直接の操作、出力タイプの変更、または他のユーザーへのレポートの送信を実行できます。

オンライン表示用に構成されていないレポートについては、ジョブをスケジュールしてレポートを実行できます。

1. 「カタログ」でレポートに移動します。
2. レポート名をクリックするか、レポートの「開く」リンクをクリックします。
3. レポートでパラメータ値が必要な場合は、パラメータの値を指定して、「適用」をクリックします。

## レポート・ビューアを使用したピクセルパーフェクト・レポートの構成

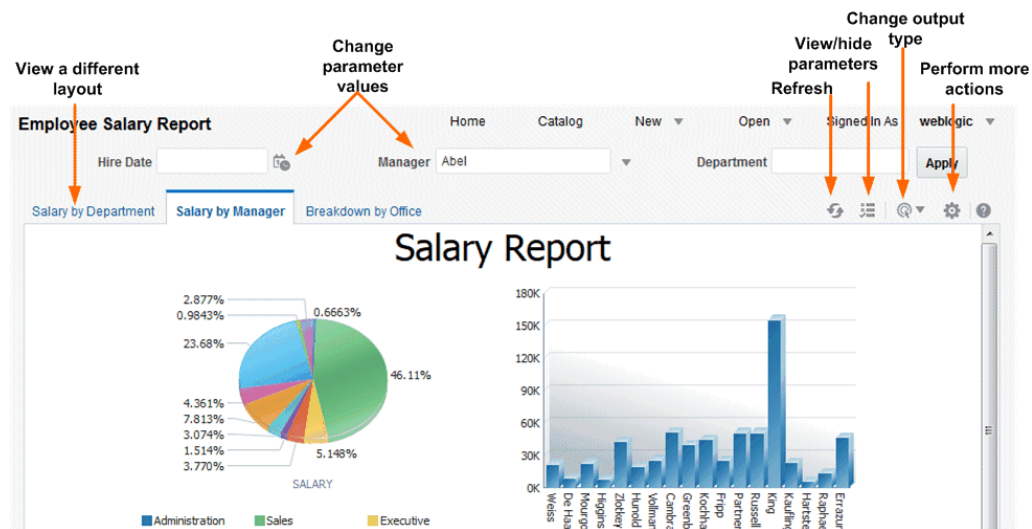
画像のようなレポート・ビューアを使用して、ピクセルパーフェクト・レポートを構成できます。

レポート・ビューアには、次のオプションが用意されています。すべてのレポートに対してすべてのオプションを使用できるとはかぎりません。

- パラメータを指定
- レイアウトの選択
- 出力タイプの選択

- アクションの実行

この画像は、レポート・ビューアのオプションを示しています。



## パラメータを指定

パラメータ値の入力を必要とするレポートでは、レポート・ビューアにパラメータ選択プロンプトが表示されます。プロンプトの表示方法は、レポートの構成によって異なります。

パラメータは、レポート表示領域の上部またはレポート表示領域の左側に表示したり、ポップアップ・ダイアログとして表示したり、レポートが表示される前にページ上のプロンプトとして表示できます。レポート・エディタを使用して、各レポート専用のパラメータ設定を構成します。

1. パラメータのプロンプトは、レポート・ビューアの右上の領域にある「**パラメータ**」をクリックすることで表示または非表示にします。
2. パラメータ値を入力します。

レポートの構成に基づいて、次のプロンプト・タイプを使用してパラメータ値を指定できます。

- 日付を選択するカレンダー。
- 値を入力するテキスト・ボックス。複数の値はカンマで区切ります。
- 値を選択する選択式のリスト。一部のリストは複数選択をサポートしています。多数の値があるリストでは、検索がサポートされます。スクロール・リストの下部にある「**検索**」をクリックすると、「**検索**」ダイアログが表示されます。
- 複数の選択を行うチェック・ボックス。
- 単一の選択を行うラジオ・ボタン。

3. パラメータを選択した後、「**適用**」をクリックしてレポートを再表示します。「**適用**」ボタンがない場合は、新しい値を選択するとレポートが自動的に再生成されます。

「**適用**」ボタンの表示は、パラメータのプロパティ設定です。

## パラメータ値の検索

パラメータ検索オプションを使用して、リスト内のパラメータ値を検索します。

リスト内のパラメータ値を検索するには:

1. パラメータ・スクロール・リストの下部で「**検索**」をクリックして、検索ダイアログを起動します。
2. 検索文字列を入力した後、検索対象の値が、入力した文字列で始まるのか、入力した文字列で終わるのか、あるいは入力した文字列を含むのかを選択します。

%および\_をワイルド・カードとして検索文字列に使用できます。

- %を使用すると、任意の長さ(長さ 0 を含む)の文字列と一致します。
- \_を使用すると、1文字と一致します。

複数値の選択をサポートするパラメータの場合、検索ダイアログには、複数の戻り値を選択するためのシャトル・インタフェースが表示されます。

## レイアウトの選択

複数のレイアウトが使用可能な場合、それらのレイアウトはレポート・ビューア・ページに個別のタブとして表示されます。様々なレイアウトに異なる出力タイプを指定できます。

1. レポート・ビューアでレポートを開きます。
2. 表示するレポート・レイアウトのタブを選択します。

## 出力タイプの選択

レポート・ビューアのメニューから出力オプションを選択できます。

1. レポート・ビューアでレポートを開きます。
2. 「出力タイプ」メニューからレポートの出力オプションを選択します。

ブラウザまたは起動されたアプリケーションに、出力が自動的にレンダリングされます。

## 出力タイプ

「レポートの表示」リストには、ピクセルパーフェクト・レポートに使用可能な出力のタイプが含まれています。

### 出力タイプ

出力タイプ	説明
インタラクティブ	ポップアップ・チャート値の表示、ナビゲーションやフィルタ処理が可能な表、およびレポートに対するその他の相互作用機能を使用できます。この出力は、レイアウト・エディタを使用して設計されたレイアウトにのみ使用できます。
HTML	レポートをブラウザに表示するように HTML (Hypertext Markup Language) ファイルとして生成します。

出力タイプ	説明
PDF	レポートを PDF (Portable Document Format) ファイルとして生成し、Adobe Acrobat リーダーに開きます。この出力タイプは印刷用に最適化されています。
RTF	レポートを RTF (Rich Text Format) ファイルとして生成します。Microsoft Word や OpenOffice.org などのワード・プロセッシング・アプリケーションがインストールされている場合は、表示するアプリケーションを開くように求めるプロンプトが表示されます。
Word	レポートを Microsoft Word 文書として.docx 形式で生成します。
Excel (*.xlsx)	<p>レポートを Excel.xlsx (Excel XML 形式) ファイルとして生成します。Excel 2007 以降がインストールされている場合は、このオプションによって最適なレイアウトと書式設定で保存されます。</p> <p>ファイル拡張子 xlsx を使用する Excel 2007 の出力形式の場合、数値と日付の書式設定は Publisher では適用しません。Publisher は、書式マスクおよび実際の値(日付または数値)を XLSX 出力ファイルに保存します。書式設定は Microsoft Excel によって処理されます。例:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>クライアント・コンピュータで Microsoft Windows の「地域と言語」が「英語(米国)」に設定されている場合、Excel 出力ファイルの数値と日付は en-US ロケールで書式設定されます。</li> <li>クライアント・コンピュータで Microsoft Windows の「地域と言語」が「フランス語(フランス)」に設定されている場合、Excel 出力ファイルの数値と日付は fr-FR ロケールで書式設定されます。</li> </ul>
MHTML	MHTML (Mime HyperText Markup Language) ファイルを生成します。このオプションでは、Web ページとそのリソースを単一の MHTML ファイル(.mht)として保存できるため、すべてのイメージおよびリンクされているファイルが単一のエンティティとして保存されます。このオプションを使用して、HTML 出力を送信または保存し、埋め込まれているイメージおよびスタイルシートの書式設定を保持します。
PDF/A	PDF ファイルを生成します。このタイプには、長期間保存する必要があるレポートをサポートするためにアーカイビング規格があります。PDF/A は PDF 規格の専門のサブセットで、自己完結型ドキュメントとして、ファイルの保持を妨げる可能性がある要素が禁止されます。
PDF/X	プリプレス用グラフィック変換をサポートする PDF ファイルを生成します。PDF/X は PDF 規格の専門のサブセットで、高品質な印刷物の出力のためにドキュメントが合理化され、署名、コメント、埋込みのマルチメディアなど、印刷物を供給しないコンテンツが制限されます。
Zip 形式の PDF	レポート PDF 出力および索引ファイルを格納した Zip ファイルを生成します。このオプションは、Zip 形式の PDF 出力を使用できるように設計されたレポートに対してのみ使用可能です。
FO 形式の XML	XSL-FO 情報を使用した XML ファイルを生成します。

出力タイプ	説明
データ(XML)	XML データを生成します。 Safari ブラウザのユーザーの場合、XML は Safari ブラウザによってテキストとしてレンダリングされます。データ・エンジンによって生成された XML を XML として表示するには、データを表示しているフレーム内を右クリックして、「 <b>View Frame Source</b> 」をクリックします。これは表示のみの問題です。データのエクスポートを選択した場合、データは正しく保存されます。
データ(csv)	データをカンマ区切り値形式で生成します。データは単純な <rowset>/<row> 構造になります。

## アクションの実行

「アクション」メニューには、レポートに対して実行できる複数のコマンドおよび操作が用意されています。

1. レポート・ビューアでレポートを開きます。
2. 「アクション」メニューからアクションを選択します。

## アクション

「アクション」メニューで使用可能なオプションは、レポートに対するユーザー権限およびプロパティ設定に依存します。

メニュー・オプション	説明
お気に入りに追加	ホーム・ページの「 <b>My お気に入り</b> 」リストにレポートを追加します。
レポートの編集	レポート定義を更新できます。たとえば、新しいレイアウトの追加または作成、レポート・プロパティの更新、デフォルトのパラメータ値の変更などを操作できます。
レイアウトの編集	表示しているレイアウトを更新できます。レイアウトが BI Publisher の「 <b>レイアウト・エディタ</b> 」を使用して作成された場合は、ブラウザに「レイアウト・エディタ」が起動します。レイアウトが、RTF、PDF、Excel などのサポートされている別のテンプレート・タイプに基づいている場合は、テンプレート・ファイルを保存するように求めるプロンプトが表示されます。その後、適切なアプリケーションでレイアウトを開きます。
エクスポート	PDF の出力には Adobe Acrobat、Excel の出力には Microsoft Excel など、選択した出力タイプのデフォルトのアプリケーションにレポートをエクスポートします。
送信	電子メール・アドレス、プリンタまたはその他の宛先に即時に配信するように、レポートをスケジュールできます。 「送信」アクションによって、出力、宛先および通知オプションを選択できるレポート・ジョブのスケジュール・ページが起動します。 レポートはインタラクティブ・モードでは送信できません。「 <b>レポートの表示</b> 」リストから、PDF や HTML などの異なる出力タイプを選択して、「送信」をクリックする必要があります。
スケジュール	レポートを実行して配信するジョブを作成します。
ジョブ	このレポートに現在スケジュールされているジョブを表示および管理できます。

メニュー・オプション	説明
ジョブ履歴	完了したレポート・ジョブおよび実行中のレポート・ジョブを表示できます。
履歴から再公開	レポート・ビューアに表示する、以前にスケジュールされた完了済のジョブおよび特定の出力を選択できます。
レポート・リンクの共有	<p>現在表示しているレポートに基づいて、コピーおよび再利用可能なリンクを生成できます。オプションを選択すると、ダイアログにレポートの URL が表示されます。</p> <p>URL による表示の対象は、次のように制御できます。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 「現在のページ」は、表示どおりに現在のページを表示します。</li><li>• 「ヘッダーなし」は、BI Publisher のロゴ、タブまたはナビゲーション・パスを表示せずに、現在のレポートを表示します。</li><li>• 「パラメータなし」は、ヘッダーまたはパラメータの選択肢を表示せずに、現在のレポートを表示します。「アクション」、「エクスポート」および「レポートの表示」メニューは引き続き使用できます。</li><li>• 「ドキュメントのみ」は、現在のレポート・ドキュメントに対する URL のみを表示します。その他のページ情報またはオプションは表示されません。</li></ul>

# ピクセルパーフェクト・レポート・ジョブの作成

このトピックでは、ピクセルパーフェクト・レポート・ジョブを作成およびモニターする方法について説明します。レポート・ジョブを定義した間隔で実行し、複数の宛先にレポートを配信するようにスケジュールできます。

## トピック:

- [レポート・ジョブのスケジュール・ページへの移動](#)
- [一般オプションの設定](#)
- [出力オプションの設定](#)
- [ジョブのスケジュールの定義](#)
- [通知の構成](#)
- [ジョブの発行およびモニター](#)
- [既存のジョブからのジョブの作成](#)
- [バースティング・ジョブの作成](#)
- [高度なトピック](#)

## レポート・ジョブのスケジュール・ページへの移動

レポート・ジョブのスケジュール・ページにナビゲートして、レポート・ジョブをスケジュールします。

1. ホーム・ページ、カタログまたはレポート・ビューアから、「レポート・ジョブ」ページにナビゲートします。
  - ホーム・ページの「**作成**」で、「レポート・ジョブ」を選択します。
  - 「**カタログ**」で、スケジュールするレポートにナビゲートし、「**スケジュール**」リンクを選択します。
  - 「**レポート・ビューア**」で、「**アクション**」、「**スケジュール**」の順にクリックします。
2. 「レポート・ジョブのスケジュール」タブを使用して、レポート・ジョブのオプションを定義します。

## 一般オプションの設定

「**一般**」タブを使用して、レポート・ジョブの表に一般情報を入力します。

レポート・ジョブをスケジュールする前に、データ・モデルとレポートのレイアウトを設計してあることを確認します。データ・モデルにパラメータを定義した場合は、レポート・ジョブのパラメータ値を指定します。



1. 「一般」タブを選択します。
2. レポート・ジョブについて次の情報を入力します。
  - **レポート** - レポートからスケジュール・ページにアクセスした場合は、このフィールドにレポートのパスと名前が表示されます。「作成」領域またはグローバル・ヘッダーからスケジュール・ページにアクセスした場合は、「選択」をクリックして、スケジュールするレポートを参照および選択します。
  - **パラメータ** - レポートに対して定義されているすべてのパラメータが表示されます。このジョブの値を入力します。テキスト入力が許可されたパラメータについては、複数の値はカンマで区切って入力します。日付パラメータについては、式を使用して実行ごとに日付を増分できます。

## 出力オプションの設定

各スケジュール済のジョブには、異なる特徴を備えた複数の出力ファイルを確保できます。各出力ファイルには、複数の宛先を指定できます。

「出力」タブには、「出力」と「宛先」の2つのリージョンがあります。

1. 「出力」タブを選択します。
2. ジョブに必要な出力オプションを選択します。
  - 出力および配信にレポート・バースティング定義を使用するには、「**出力先および配信先を決定するには、バースティング定義を使用します**」を選択します。このオプションを選択すると、このページの他のすべてのフィールドは選択できなくなります。このオプションは、レポートのバースティングが有効になっている場合にのみ使用できます。
  - 大規模なレポートを処理するために XML データをチャンク化するには、「**XML データのチャンク化の使用**」を選択します。このオプションを選択する場合、ジョブでは1つの出力のみが可能です。レポートに対して XML データのチャンク化を有効化した場合のみ、このオプションは使用可能です。
  - 大規模な非バイナリ・データセットをプルーニングするには、「**XML プルーニングの有効化**」を選択します。この設定は、データ・モデル内の XML データをプルーニングする設定により影響を受けません。  
XML データ・プルーニングは、次に対してサポートされていません：
    - XPT テンプレート
    - バースティング・レポート
    - XML データのチャンク化
  - このレポートにアクセスする権限のあるすべてのユーザーが、このジョブ出力を使用できるようにするには、「**出力をパブリックに設定**」を選択します。アクセス権があるユーザーは、レポート・ジョブ履歴ページからレポートを表示できます。
  - このジョブに対して生成された XML データを保存するには、「**再公開用にデータを保存**」を選択します。保存されているデータには、新しいレイアウトおよび出力のオプションを選択してデータを再公開できるレポート・ジョブ履歴ページからアクセスします。
  - 各レポート (HTML 形式以外のすべてのレポート) を圧縮してから配信するには、「**配信前に出力を圧縮**」を選択します。圧縮された各レポートのファイル名の書式は、`Name_Output Format.zip` です。たとえば、`Order.pdf` と

Invoice.xlsx の各レポートの配信先が電子メールである場合、order\_PDF.zip と Invoice\_XLSX.zip が電子メールに添付されます。

サポートされている配信チャネルは、電子メール、HTTP、コンテンツ・サーバーおよび Documents Cloud Service (Oracle Content Management) です。

レポート・ジョブ履歴ページで、「**配信前に出力を圧縮**」オプションが構成されたジョブの詳細を表示してから、「出力および配信」セクションで「**送信**」をクリックした場合、配信される出力は圧縮されません。

## レポート出力への宛先タイプの追加

複数の宛先にレポートを配信するには、レポートの「宛先」リージョンに配信詳細を入力します。

管理者は、管理ページで配信サーバーを設定する必要があります。

1. レポート・ビューアの既存のレポートから、「**アクション**」、「**スケジュール**」の順に選択します。
2. 「レポート・ジョブのスケジュール」で、「**出力**」タブをクリックします。
3. 「**出力**」タブで「宛先」を開き、「**宛先タイプ**」リストから宛先タイプを選択します。  
「**宛先タイプ**」リストには、管理者が設定した宛先タイプのみが表示されます。
4. 各宛先について、宛先に送信するドキュメントを「**出力**」リストから選択します。
5. レポート・ドキュメントを複数の宛先に配信するには、「**宛先の追加**」をクリックします。
6. 「**出力の保存**」を選択して、レポート・ジョブ履歴ページからの出力を表示します。

## レポート出力の宛先タイプ

レポート・ジョブのスケジュール・ページでは、レポートの出力の宛先タイプを選択および定義します。

選択できるのは、管理者によって構成された宛先タイプのみです。レポートの出力に対して複数の宛先を追加できます。

宛先タイプ	説明
電子メール	<p>複数の電子メール・アドレスはカンマで区切って入力します。</p> <p>レポートに含めるメッセージ・テキストを入力します。メッセージ・テキストを書式設定するには、<b>HTML 4 要素</b>(フォント、リスト、表のセル、ハイパーリンク、埋込み GIF イメージなど)を使用できます。</p> <p>これらのオプションを使用して、電子メールの受信通知や開封通知を構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>配信ステータス通知のリクエスト</b> 電子メールの配信が成功、遅延または失敗した場合に送信者に通知メッセージを送信するには、このオプションを選択します。</li> <li>• <b>開封通知のリクエスト</b> 受信者が電子メール・メッセージを開封した場合に送信者に通知メッセージを送信するには、このオプションを選択します。</li> </ul>
プリンタ	<p>プリンタ・グループおよびプリンタを選択して、印刷部数を入力し、片面印刷または両面印刷(このオプションを有効にするにはプリンタが両面印刷をサポートしていることが必要)を選択します。オプションで、レポートを印刷するプリンタのデフォルト・トレイ、および印刷範囲のページ数を選択します。</p>

宛先タイプ	説明
FAX	レポートを送信する FAX 番号を入力します。
FTP	<p>管理者が構成した FTP 配信設定を使用する場合は、ユーザー名とパスワードのフィールドをスキップします。FTP サーバーの構成をオーバーライドして、パスワードベースの認証を使用する場合にのみ、FTP サーバーの有効なユーザー名とパスワードの資格証明を入力します。次のプロパティを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>リモート・ディレクトリ</b>                      (必須)配信ディレクトリの場所を入力します(例: /pub/)。                      ドキュメントをユーザーのホーム・ディレクトリに配信するには、. (ピリオド)を入力します。                 </li> <li> <b>リモート・ファイル名</b>                      (必須) <b>Publisher</b> でリモート・サーバーの配信ドキュメントに割り当てるファイル名を入力します(例: myreport.pdf)。                      名前にはファイル拡張子を含める必要があります(例: .pdf)。                      日付式を使用してファイル名を動的に割り当てることができます。                 </li> </ul>
コンテンツ・サーバー	<p>コンテンツ・サーバーおよび宛先フォルダを選択します。                      コンテンツ・サーバーのレポートへのアクセスを制限するには、セキュリティ・グループおよびアカウントをレポートに割り当てます。  <b>Publisher</b> は、コンテンツ・サーバー用に構成されたセキュリティ・グループおよびアカウントの値を取得します。</p>
Content and Experience	<p>Oracle Content Management サーバーおよび宛先フォルダを選択します。</p>
オブジェクト・ストレージ	<p>レポートを配信したり、接頭辞テキストやレポートのファイル名を入力する、オブジェクト・ストレージを選択します。接頭辞は、オブジェクト・ストレージでレポートを編成する際に役立ちます。オブジェクト・ストレージからレポート出力をダウンロードする場合、接頭辞はレポートの識別に役立ちます。                      接頭辞はオブジェクト・ストレージのフォルダ・パスを定義します。既存の接頭辞または新しい接頭辞を指定できます。ジョブ ID またはレポート名を接頭辞として使用できます。接頭辞を指定しない場合、BIP がデフォルトで接頭辞として使用されます。</p>

## 「コンテンツ・サーバー」宛先タイプのプロパティ

コンテンツ・サーバーは、レポート・ドキュメントを配信する宛先タイプの 1 つです。レポートの配信先となるコンテンツ・サーバーを選択します。

この表の情報を使用して、コンテンツ・サーバーのプロパティに適切な値を入力します。

プロパティ名	説明
セキュリティ・グループ	(オプション)レポートの割当て先となるコンテンツ・サーバー・セキュリティ・グループを選択します。
アカウント	(オプション)セキュリティ・グループ内のレポートの割当て先となるアカウントを選択します。 後続する必要なメタデータ・フィールドに値を入力できます。これらのフィールドに値を入力しなかった場合は、デフォルトのレポート情報から値が適用されます。

プロパティ名	説明
作成者	(オプション)レポートの作成者の名前を入力します。このフィールドを空白にした場合、コンテンツ・サーバーの「作成者」メタデータ・フィールドにはユーザー ID が使用されます。管理者がコンテンツ・サーバーに対して <b>ログインしているユーザーを制作者として使用する</b> を選択した場合、Publisher はコンテンツ・サーバーの「作成者」メタデータ・フィールドでログインしているユーザーを制作者として設定します。
タイトル	(オプション)レポートのタイトルを入力します。タイトルを入力しなかった場合、コンテンツ・サーバーのタイトルにはレイアウト名が使用されます。
ファイル名	リモート・サーバーに配信されるドキュメントに割り当てるファイル名を入力します(例: myreport.pdf)。ファイル名が、コンテンツ・サーバーのネイティブ・ファイル名として使用されます。ファイル名の値を指定しなかった場合は、出力名が使用されます。
コメント	(オプション)コンテンツ・サーバーのドキュメントに添える説明を入力します。
カスタム・メタデータを含める	<b>「カスタム・メタデータを含める」</b> オプションは、レポートのデータ・モデルにカスタム・メタデータ・コンポーネントが含まれている場合にのみ使用できます。「カスタム・メタデータを含める」オプションを選択すると、配信されるドキュメントには、データ・モデルで指定されたカスタム・メタデータ・フィールドが挿入されます。

オンラインで表示するためにパラメータ化された埋込みレポートを構成できる場合、パラメータには、分析から、またはサブジェクト領域への直接接続から適切な値が表示されます。パラメータ化された埋込みレポートをスケジュールすると、分析からレポートにパラメータが渡されません。結果的にレポートには、分析に使用されたパラメータのデフォルト値が表示されます。スケジュールされたレポートへの直接接続の場合、パラメータが渡され、値はレポートに正しく表示されます。

## 出力の追加

出力形式、ロケール、タイム・ゾーンおよびカレンダーの組合せを使用して、1 つ以上のレイアウトの複数のレポート・ドキュメントを作成できます。

1. レポート・ビューアの既存のレポートから、「アクション」、「スケジュール」の順に選択します。
2. レポート・ジョブのスケジュール・ページで、「出力」タブをクリックします。
3. 「出力」タブで、「+」をクリックして出力を追加します。
4. 「名前」に出力の名前を入力します。
5. 「レイアウト」、「形式」、「ロケール」、「タイムゾーン」および「カレンダー」リストから、使用するオプションを選択します。

出力形式とは、PDF、HTML、Excel など、生成されるドキュメントのタイプです。ここで使用できるオプションは、レポート定義で指定します。

ロケールは、ユーザーの「プリファレンス」に定義されているレポート・ロケールにデフォルト設定されます。選択されたロケールに対してレイアウトに使用可能な翻訳がない場合、BI Publisher では、ロケール・フォールバック・ロジックを適用してレイアウトが選択されます。適切な数と日付の書式は、テンプレート翻訳とは別に適用されます。

6. 「出力の保存」をクリックします。

## ジョブのスケジュールの定義

レポート・ジョブの実行スケジュールを定義できます。

1. Oracle BI Publisher ホーム・ページの「作成」で、「**レポート・ジョブ**」を選択します。
2. 「レポート・ジョブのスケジュール」の「一般」タブで、「**レポート**」フィールドの横にある「検索」をクリックします。
3. 「開く」で、レポートにナビゲートして選択し、「**開く**」をクリックします。
4. 「レポート・ジョブのスケジュール」で、「**スケジュール**」タブをクリックします。
5. 「**頻度**」リストで、このレポートに使用するオプションを選択します。
6. 指定した頻度のオプションを設定します。
7. 「**送信**」をクリックします。
8. オプション: 送信で、「**レポート・ジョブ名**」フィールドに名前を入力し、「**OK**」をクリックします。

## 繰り返しパターンの定義

レポート・ジョブのスケジュール・ページの「スケジュール」タブでは、レポートの実行時期をこれらの繰り返しパターン・オプションから定義します。

オプション	説明	値
頻度	「 <b>頻度</b> 」リストのスケジュールを使用して、レポート・ジョブの実行時期を定義します。	NA
頻度	<b>1 回</b>	「 <b>即時実行</b> 」オプションを使用するか、日付セレクタを使用して特定の <b>開始</b> 日時を入力します
頻度	<b>毎時/分</b>	次の値を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>間隔</b> - 時間または分を選択し、増分に適切な整数値を入力します。</li> <li>• <b>開始</b> - 日付セレクタを使用して、このジョブの実行を開始する日時を入力します。</li> <li>• <b>終了</b> - (オプション)日付セレクタを使用して、このジョブの終了日時を入力します。</li> </ul>
頻度	<b>日次</b>	次の値を使用します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>間隔</b> - 増分(日数)を入力します。たとえば、レポートを毎日実行する場合は「1」を入力し、レポートを2日に1回実行する場合は「2」を入力します。</li> <li>• <b>開始</b> - 日付セレクタを使用して、このジョブの実行を開始する日時を入力します。選択した時間によって、ジョブが実行される時期(1日の時間)が決まります。</li> <li>• <b>終了</b> - (オプション)日付セレクタを使用して、このジョブの終了日時を入力します。</li> </ul>

オプション	説明	値
頻度	週次	<p>次の値を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>間隔</b> - 増分(週数)を入力し、希望する週の曜日(複数可)を選択します。たとえば、レポートを毎週火曜日と木曜日に実行する場合は「1」を入力して、「火曜日」と「木曜日」を選択します。レポートを隔週の水曜日に実行する場合は、「スケジュール」タブで、「頻度」に「日次」、「間隔」に「14」、「開始」には、レポートを実行する最初の水曜日、「終了」には将来の終了日を選択します。</li> <li><b>開始</b> - 日付セレクタを使用して、このジョブの実行を開始する日時を入力します。選択した時間によって、各実行でジョブが処理される時間が決まります。</li> <li><b>終了</b> - (オプション)日付セレクタを使用して、このジョブの終了日を入力します。</li> </ul>
頻度	月次	<p>次の値を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>間隔</b> - ジョブを実行する各月を選択します。</li> <li><b>指定日</b> - 曜日を選択するか(例: 毎月の第 1 月曜日)、または月の特定の日を選択します(例: 15)。</li> <li><b>開始</b> - 日付セレクタを使用して、このジョブの実行を開始する日時を入力します。選択した時間によって、各実行でジョブが処理される時間が決まります。</li> <li><b>終了</b> - (オプション)日付セレクタを使用して、このジョブの終了日を入力します。</li> </ul>
頻度	毎年	<p>次の値を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>間隔</b> - ジョブを実行する増分(年数)を選択します。</li> <li><b>指定日</b> - 月の日にちを選択するか(例: 1 月 1 日)、または月の曜日を選択します(例: 1 月の第 1 月曜日)。</li> <li><b>開始</b> - 日付セレクタを使用して、このジョブの実行を開始する日時を入力します。選択した時間によって、各実行でジョブが処理される時間が決まります。</li> <li><b>終了</b> - (オプション)日付セレクタを使用して、このジョブの終了日を入力します。</li> </ul>
頻度	特定の日付	「日付の追加」オプションを使用して、ジョブを実行する日時を指定します。必要に応じて、複数の特定の日付を追加します。
即時実行	このオプションは、「頻度」オプションからの選択内容に依存します。	NA
開始	このオプションは、「頻度」オプションからの選択内容に依存します。 レポート・ジョブを開始する日時を指定します。	NA

## スケジュール・トリガーの使用

任意のデータ・モデルに定義されているスケジュール・トリガーにジョブを関連付けることができます。

スケジュール・トリガーを使用すると、トリガー条件が満たされたときにレポートを実行できます。レポート・ジョブごとに 1 つのトリガーを構成できます。レポート・ジョブと関連付けたスケジュール・トリガーは、カタログ内のデータ・モデル内に格納可能です。トリガーの実行対象となるレポートのデータ・モデル内にスケジュール・トリガーを作成する必要はありません。複数のレポート・ジョブ間でスケジュール・トリガーを再利用できます。

## スケジュール・トリガーについて

スケジュール・トリガーでは条件が検証されます。

指定したジョブは、トリガー条件を満たす場合に実行されます。トリガー条件を満たさない場合、ジョブ・インスタンスはスキップされます。トリガーによって条件が継続的にチェックされるように、繰返しスケジュールを設定することもできます。条件を満たさない場合は、トリガーが再び処理されるまでの待機時間(分数)を設定できます。

スケジュール・トリガーは次のような状況で使用します。

- 抽出、転送およびロード・プロセスが正常に完了した場合にのみ、レポート・ジョブが実行されるようにします。
- アカウント管理者が、前日に所定の金額を超える入金があった場合にレポートがトリガーされることを希望しています。
- 人事管理では、前の週に新入社員がシステムに登録された場合にのみ、レポートが必要になります。

データ・モデルにトリガーを設定すると、それらのトリガーを「スケジュール」タブから選択できるようになります。

## スケジュール・トリガーの有効化

データ・モデルに定義されているトリガーを有効にすることができます。

1. 「トリガーの使用」を選択します。
2. オプション: 「再試行制限」の値を設定して、条件をチェックするためにスケジュール・トリガーを処理する最大回数を指定します。デフォルト値は 1 であり、このフィールドには正の整数値のみを指定できます。
3. オプション: 「休止時間」の値を設定して、スケジュール・トリガーが再び処理されるまでの待機時間(分)を指定します。このフィールドは、「再試行制限」の値を 1 より大きい値に設定した場合に有効になります。このフィールドには正の整数値のみを指定できます。

再試行制限と休止時間は、定期スケジュールの間隔を超えないようにしてください。最大試行回数に達したときに条件が `false` である場合、ジョブ・ステータスは「スキップ」として表示されます。

4. スケジュール・トリガーが定義されている「データ・モデル」を選択します。
5. 「トリガー」リストからオプションを選択します。



6. スケジュール・トリガーにパラメータが含まれている場合は、使用する値を選択します。

## 通知の構成

電子メールおよび HTTP の通知を構成できます。

通知を送信するための配信電子メール・サーバーまたは HTTP サーバーを、管理者が構成していることを確認してください。

通知とは、ジョブの処理が終了したというメッセージです。Publisher では、次の通知ステータスをサポートしています。

- レポートの完了
- レポートの警告付き完了
- レポートの失敗
- レポートのスキップ
- 「通知」タブを選択します。
  - 電子メール通知を有効化するには、次のステップを実行します。
    1. 「通知方法」に「電子メール」を選択します。
    2. 通知の送信対象となるレポート完了ステータスを選択します。
    3. アドレスのカンマ区切りリストを入力します。
  - HTTP 通知を有効化するには、次のステップを実行します。
    1. 「通知方法」に「HTTP」を選択します。
    2. 通知の送信先となる HTTP サーバーを選択します。
    3. 必要に応じて、HTTP サーバーのユーザー名とパスワードを指定します。
    4. 通知の送信対象となるレポート完了ステータスを選択します。

## ジョブの発行およびモニター

ジョブの発行ダイアログを使用して、ジョブの確認事項の詳細をレビューします。

1. 「発行」を選択し、ジョブの発行ダイアログを起動してレビューする確認事項の詳細を表示します。
2. このジョブの名前を入力し、「発行」をクリックします。
3. オプション: グローバル・ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ」の順にクリックし、ジョブを一時停止、編集または削除します。
4. オプション: グローバル・ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ履歴」の順にクリックし、実行中のジョブをモニターしたり、結果を確認します。

## 既存のジョブからのジョブの作成

レポート・ジョブの管理ページでは、既存のジョブからジョブを作成できます。



1. Oracle BI Publisher ホーム・ページの「参照/管理」の下で、「レポート・ジョブ」をクリックします。
2. 「レポート・ジョブの管理」で、既存のジョブを検索するフィルタ基準を選択します。
3. 結果表で、「編集」をクリックして、編集対象のジョブを開きます。
4. 新規ジョブ定義の詳細を入力します。終了したら、「新規として発行」をクリックします。
5. 新規ジョブの名前を入力して、「発行」をクリックします。

## バースティング・ジョブの作成

レポートがバースティングの対象として構成されている場合は、バースティング・ジョブを作成できます。

バースティングとは、レポート・データをデータ内のキー・フィールドに基づいて複数のブロックに分割し、各データ・ブロックのレイアウトと配信に特定のパラメータを適用することです。たとえば、各顧客の請求書をそれぞれの電子メール・アドレスに配信するために、顧客請求書レポートをバースティングできます。

レポートのバースティング定義は、そのレポートのデータ・モデルで構成する必要があります。

1. そのレポートでバースティングが有効になっていることを確認します。
2. Oracle BI Publisher ホーム・ページの「作成」で、「レポート・ジョブ」を選択します。
3. 「出力」タブの「出力先および配信先を決定するには、バースティング定義を使用します」ボックスを選択します。

## 高度なトピック

日付パラメータを増分したり、宛先ファイル名を動的に定義することができます。

### トピック:

- [日付パラメータの増分](#)
- [日付式を使用した宛先ファイル名の動的な定義](#)

## 日付パラメータの増分

レポートのデータ・パラメータ・フィールドには式を入力できます。

スケジュールされたレポートに日付パラメータが含まれ、スケジュール日付の値を入力した場合は、日付値を変更できません。スケジュールしたレポート・インスタンスが実行されるたびに、同じ日付パラメータが使用されます。実行ごとに日付パラメータを変更する必要がある場合は、スケジューラの日付パラメータ・フィールドに式を入力して、レポート・ジョブが実行されるたびに日付が計算されるようにできます。

たとえば、毎週月曜日に前の週のデータを取得して実行するレポートのスケジュールを作成する場合は、レポートの日付パラメータを増分して、前の週の初日と最終日に更新する必要があります。

示された構文を使用して、次の関数のいずれかを入力し、レポートの実行がスケジュールされる日が適切に計算されるようにします。

- `{$SYSDATE()$}` - 現在の日付(BI Publisher が実行されているサーバーのシステム日付)。
- `{$FIRST_DAY_OF_MONTH()$}` - 当月の初日
- `{$LAST_DAY_OF_MONTH()$}` - 当月の最終日
- `{$FIRST_DAY_OF_YEAR()$}` - 当年の初日
- `{$LAST_DAY_OF_YEAR()$}` - 当年の最終日

パラメータ値での日付関数のコールは、スケジュールによってレポート・ジョブが処理されるまで評価されません。

プラス記号(+)とマイナス記号(-)を使用して式を入力することによって、次のように日を増減させることもできます。

- `{$SYSDATE()+1$}`
- `{$SYSDATE()-7$}`

この例では、スケジュールが実行されるたびに前の週のデータが取得されるように、レポートの日付パラメータ・フィールドに、次のように入力します。

- 開始日: `{$SYSDATE()-7$}`
- 終了日: `{$SYSDATE()-1$}`

データ・モデルのデフォルトのパラメータ値として、日付関数を設定できます。この場合は、ユーザーがレポート・ビューアでレポートを表示するたびに、デフォルト値として指定された式に従って日付パラメータが計算されます。

## 日付式を使用した宛先ファイル名の動的な定義

出力先が Web フォルダまたは FTP のリモート・ファイル名を入力する場合は、日付式を入力してファイル名に日付式を自動的に付加できます。日付は、サーバーのタイム・ゾーンを使用して実行時に設定されます。

次の表に、日付式の説明を示します。

式	説明
%y	年を 4 桁で表示します: 例: 2011
%m	月を 2 桁で表示します: 01-12 (01 = 1 月)
%d	日を 2 桁で表示します: 01-31
%H	24 時間制に基づいて時間を 2 桁で表示します: 00-24
%M	分を 2 桁で表示します: 00 - 59
%S	秒を 2 桁で表示します: 00 - 59
%l	ミリ秒を 3 桁で表示します: 000 - 999

## 例

次のステップを使用して、日付が付加されたファイル名、および先頭に日付が付き、末尾に時刻が付加されたファイル名を作成します。

日付、月、年が付加された次のようなファイル名を作成するには:

```
myfile_01_11_2010.pdf
```

次を入力します。

```
myfile_%d_%m_%y.pdf
```

日付、月、年が先頭に付き、時間と分が末尾に付加された次のようなファイル名を作成するには:

```
01_01_2010_myfile_22_57.pdf
```

次を入力します。

```
%d_%m_%y_myfile_%H_%M.pdf
```

ファイル名に未定義の式が含まれている場合(`my_file_%a%b%c.pdf` など)、そのファイルは `my_file_%a%b%c.pdf` という名前で作成されます。

# ピクセルパーフェクト・レポート・ジョブの表示および管理

このトピックでは、**Publisher** に対して発行されたピクセルパーフェクト・レポート・ジョブを表示して管理する方法について説明します。

## トピック:

- [レポート・ジョブの管理ページについて](#)
- [特定のレポートに対するジョブの表示](#)
- [レポート・ジョブの検索](#)
- [ジョブを表示するタイム・ゾーンの設定](#)
- [ジョブ詳細を表示](#)
- [ジョブの休止](#)
- [ジョブの再開](#)
- [ジョブの削除](#)
- [ジョブの編集](#)

## レポート・ジョブの管理ページについて

レポート・ジョブの管理ページでは、将来のスケジュールされているレポート・ジョブや定期レポート・ジョブに関する情報を表示し、それらのジョブに対応できます。

次の場合にレポート・ジョブの管理ページを使用します。

- プライベート・レポート、共有レポートおよびパブリック・レポートについて、将来スケジュールされているジョブや定期ジョブを参照します。
- ジョブの開始時間と終了時間の表示に使用するタイムゾーンを選択します。
- 表示ページをリフレッシュして、最近発行されたジョブを表示します。
- レポート履歴にリンクして、完了したジョブ実行の出力を表示します。
- レポート・ジョブを編集します。
- レポート・ジョブを削除します。
- レポート・ジョブを一時停止/再開します。
- ジョブ詳細を表示します。

## レポート・ジョブの管理ページへのアクセス

レポート・ジョブの管理ページにアクセスして、管理するレポート・ジョブを検索できます。あるいは、特定のレポートのコンテキストからこのページにアクセスできます。

1. 管理するジョブを検索するには、次のいずれかの方法でレポート・ジョブの管理ページに移動します。
  - ホーム・ページで、「参照/管理」、「レポート・ジョブ」の順に選択します。
  - グローバル・ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ」の順にクリックします。
2. 特定のレポートのコンテキストからレポート・ジョブの管理ページにアクセスするには、次のいずれかを実行します。
  - カタログから、カタログ内のレポートに移動して「ジョブ」をクリックします。
  - レポート・ビューア・ページから、「アクション」、「ジョブ」の順にクリックします。

## 特定のレポートに対するジョブの表示

レポート・ジョブの管理ページでは、検索基準を指定して、特定のレポートのジョブを表示できます。

特定のレポートのコンテキストから「レポート・ジョブの管理」に移動した場合は、デフォルトのフィルタが適用された表に、そのレポートのジョブが自動的に表示されます。

適用されるデフォルトのフィルタは、次のとおりです。

- **レポート名** - レポート・ジョブの管理ページの起動元レポートの名前
  - **所有者** - ユーザー ID と等しい
  - **スコープ** - すべてと等しい(公開ジョブとプライベート・ジョブ)
  - **ステータス** - すべてと等しい(アクティブ・ジョブと一時停止ジョブ)
1. レポートを開き、カタログまたはレポート・ビューアから「レポート・ジョブの管理」に移動します。
  2. 検索基準を指定して、結果をさらにフィルタ処理します。
  3. 「レポート・ジョブ」の下にリストされたレポートを表示します。

## レポート・ジョブの検索

検索基準を指定して、レポート・ジョブを検索できます。

1. ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ」の順にクリックします。
2. 「フィルタ」基準に値を入力して、特定のジョブまたはジョブのグループを検索します。
3. 「検索」をクリックします。フィルタ基準を満たすジョブが「レポート・ジョブ」表に表示されます。

「レポート・ジョブ」表には、ジョブに関する一般情報およびステータスが表示されます。

列見出しをクリックして上矢印または下矢印を選択することで、特定の列で表を昇順または降順にソートできます。

ステータスは、次のいずれかの値になります。

- **アクティブ** - スケジュール・イベントが発生するとジョブが実行されます。
- **休止** - ジョブは一時停止されています。レポート・ジョブは、再開されるまで再度実行されません。休止されたジョブは、フィルタ基準を使用して「**一時停止**」のジョブを検索すると表示されます。

## ジョブを表示するタイム・ゾーンの設定

レポート・ジョブの管理ページにジョブの開始時間と終了時間を表示するタイム・ゾーンを選択できます。

1. 次のいずれかの方法で、「レポート・ジョブの管理」ページに移動します:
  - ホーム・ページで、「参照/管理」、「レポート・ジョブ」の順に選択します。
  - グローバル・ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ」の順にクリックします。
2. 「**ジョブ表示用タイムゾーンの選択**」リストから、タイムゾーンを選択します。
3. 「**リフレッシュ**」をクリックします。  
「レポート・ジョブ」表がリフレッシュされ、選択したタイム・ゾーンでジョブの開始時間と終了時間が表示されます。

## ジョブ詳細を表示

レポート・ジョブの管理ページにリストされているジョブの詳細を表示できます。

1. ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ」の順にクリックします。
2. ジョブの詳細を表示するには、**レポート・ジョブ名**をクリックします。
3. 各出力の配信情報を表示するには、出力名の横にある展開アイコンをクリックします。
4. 「**戻る**」をクリックして、レポート・ジョブの管理ページに戻ります。

## ジョブの休止

レポート・ジョブの管理ページでは、レポート・ジョブを検索し、ジョブを休止できます。

1. ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ」の順にクリックします。
2. レポート・ジョブの管理ページで、ジョブ情報がリストされた表の行内の任意の場所(ジョブ名のリンクを除く)をクリックして、ジョブを選択します。  
[Ctrl]または[Shift]を押しながら、追加の行を選択することで、複数のジョブを選択できます。行の選択を解除するには、ジョブを再度クリックします。
3. 「**休止**」をクリックします。

## ジョブの再開

レポート・ジョブの管理ページでレポート・ジョブを検索し、休止したジョブのステータスをアクティブに変更できます。

1. ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ」の順にクリックします。

2. 休止されているジョブの表の行で、ジョブ名のリンク以外の場所をクリックしてジョブを選択します。

[Ctrl]+[Shift]を押しながら別の行をクリックすることで、複数のジョブを選択できます。行の選択を解除するには、ジョブを再度クリックします。

3. 「再開」をクリックします。

ジョブのステータスが「アクティブ」に変わります。

## ジョブの削除

レポート・ジョブの管理ページでは、レポート・ジョブを検索して削除できます。

1. ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ」の順にクリックします。
2. ジョブ情報がリストされた表の行で、任意の場所(ジョブ名のリンクを除く)をクリックして、ジョブを選択します。  
複数のジョブを選択するには、さらに別の行をクリックします。
3. 「削除」をクリックします。

## ジョブの編集

レポート・ジョブの管理ページでは、レポート・ジョブを検索して編集できます。

1. ヘッダーで、「開く」、「レポート・ジョブ」の順にクリックします。
2. レポート・ジョブの管理ページで、次のいずれかの操作を行います。
  - 結果の表で、該当するジョブの「編集」アイコンをクリックします。
  - 「レポート・ジョブ名」をクリックしてレポート・ジョブの詳細ページを表示し、レポート・ジョブ名の横にある「編集」アイコンをクリックします。
3. 「一般」、「出力」、「スケジュール」、「通知」の各タブでジョブ詳細を編集します。
4. 「ジョブの更新」をクリックして、該当するジョブに加えた変更を保存します。または、編集したジョブを新規ジョブとして保存するには、「新規ファイルとして保存」をクリックして、新規レポート・ジョブの名前を入力します。

# ピクセルパーフェクト・レポート履歴の表示および管理

このトピックでは、ジョブ履歴機能について説明します。これには、履歴からのデータの再公開、新規宛先へのジョブ出力の送信、正常に完了しなかったレポート・ジョブに関するエラー情報の取得が含まれます。

## トピック:

- [レポート・ジョブの履歴および保存された出力の表示](#)
- [特定のレポートに対するジョブ履歴の表示](#)
- [レポート・ジョブ履歴の検索](#)
- [ジョブ履歴の詳細の表示](#)
- [レポート・ジョブからのデータのダウンロード](#)
- [履歴からのレポートの再公開](#)
- [新しい宛先への出力の送信](#)
- [実行中のジョブのモニター](#)
- [実行中のジョブの取消し](#)
- [レポートのエラーおよび警告情報の取得](#)
- [ジョブ履歴の削除](#)

## レポート・ジョブの履歴および保存された出力の表示

レポート・ジョブ履歴ページには、実行中および完了済のレポート・ジョブに関する情報が表示されます。

レポート・ジョブ履歴ページにアクセスして、レポート・ジョブ履歴を検索できます。このページには、特定のレポートのコンテキストからアクセスすることもできます。次のいずれかを使用して、「**レポート・ジョブ履歴**」を選択します。

- ホーム・ページの「**参照/管理**」。
- グローバル・ヘッダーの「**開く**」。

**レポート・ジョブ履歴**ページでは、次の操作を実行できます。

- 実行中および完了済のレポート・ジョブのステータスおよび詳細を表示します。
- クリティカルなジョブを識別します。
- 実行中のジョブを取り消します。
- 実行中のジョブをモニターします。



- ジョブ発行の詳細を表示します。
- レポートから生成された XML データをダウンロードして表示します(レポートの「データの保存」を選択した場合)。
- レポート・ドキュメントをダウンロードして表示します(「出力の保存」を選択した場合)。
- 他のフォーマットまたはテンプレートを使用してレポート・データを再公開します(レポートの「再公開用にデータを保存」を選択した場合)。
- レポート・ジョブを履歴から削除します。

BI Publisher では、スケジュール済ジョブで、過去 90 日の間に更新されていないもののレコードが自動的に削除されます。アクティブな繰返しジョブと、アクティブな子ジョブがある古いジョブは削除されません。90 日を超えても一部のレポートやレポート・データを保持する必要がある場合は、将来参照できるように、そうしたレポートや XML データをダウンロードしてアーカイブしておきます。

## 特定のレポートに対するジョブ履歴の表示

特定のレポートのコンテキストからレポート・ジョブ履歴ページにナビゲートした場合は、デフォルト・フィルタが適用された状態でレポートのジョブが自動的に表示されます。

1. 次のいずれかを実行します。
  - 「カタログ」からレポートにナビゲートし、「ジョブ履歴」をクリックします。
  - 「レポート・ビューア」からレポートにナビゲートし、「ジョブ履歴」をクリックします。
2. レポート・ジョブ履歴ページで、必要に応じてフィルタを指定し、「検索」をクリックします。

デフォルト・フィルタは次のとおりです。

- レポート・パス - レポート・ジョブ履歴ページを起動したレポートのパス。
- 処理開始 - 1 週間以内。
- 所有者 - 自分のユーザー ID。
- スコープ - 「すべての履歴」。「プライベート・ジョブ履歴」と「公開ジョブ履歴」の両方を対象とします。
- ステータス - 「すべて」。考えられるすべてのステータス値(「成功」、「失敗」、「実行中」、出力エラーあり、「取消済」、「取消中」、配信エラーあり、更新ステータス・エラーあり、「削除済」、「スケジュール済」、「スキップ」、「一時停止」、「不明」、「待機中」)を対象とします。

## レポート・ジョブ履歴の検索

レポート・ジョブ履歴を検索するためのフィルタ基準を指定します。

1. 特定のジョブ履歴または完了した一連のレポート・ジョブを検索するために「フィルタ」基準の値を入力します。
2. 「検索」をクリックします。フィルタ基準を満たすジョブが「レポート・ジョブ履歴」表に表示されます。

列見出しをクリックして上矢印または下矢印を選択することで、特定の列で表を昇順または降順にソートできます。

## ジョブ履歴の詳細の表示

レポート・ジョブ履歴ページを使用して、ジョブ履歴の詳細を表示します。

1. レポート・ジョブ履歴ページで、「**レポート・ジョブ名**」をクリックして、ジョブの詳細ページを表示します。
2. 各出力の配信情報を表示するには、出力名の横にある拡張アイコンをクリックします。
3. 「**戻る**」をクリックして、レポート・ジョブ履歴ページに戻ります。

## レポート・ジョブからのデータのダウンロード

レポート・ジョブの詳細を表示したり、XML データをダウンロードしたり、ファイルを任意の場所に保存することができます。

データを再公開できるようにするジョブを作成する場合は、「**再公開用にデータを保存**」オプションを有効にする必要があります。

1. レポート・ジョブ履歴ページの「レポート・ジョブ履歴」表で、レポート・ジョブ名をクリックして、ジョブ詳細ページを表示します。
2. 「**出力および配信**」セクションで、「**XML データ**」ダウンロード・ボタンをクリックします。
3. プロンプトが表示されたら、ファイルの保存先を選択します。

## レポート・ビューアでの履歴からの再公開

レポート・ビューアでは、ジョブ履歴を使用してデータを再公開できます。

再公開用のデータを保存するジョブが正常に完了すると、レポートに含まれているレイアウト・テンプレートでサポートされている出力形式のいずれかを使用してデータを再公開できます。新しいレイアウトの適用、別の出力形式の選択、またはレポートのエクスポートを操作できます。以前のレポート実行から取得したデータを使用しているため、パラメータは更新できません。

1. BI カタログでレポートを選択します。
2. 「**開く**」をクリックし、レポート・ビューアでレポートを実行します。
3. 「**アクション**」メニューで、「**履歴から再公開**」をクリックします。
4. 「開く」ダイアログで、ジョブ名を選択し、出力形式を指定します。


「**ジョブ名**」ドロップダウン・リストには、ジョブが 10 個のみ表示されます。自分が発行したすべてのジョブをレポート・ジョブ履歴ページに表示するには、「**このレポート用の全履歴の表示**」をクリックします。

5. 「**OK**」をクリックします。

## 履歴からのレポートの再公開

レポートは、履歴から再公開できます。

データを再公開できるようにするジョブを作成する場合は、「再公開用にデータを保存」オプションを有効にする必要があります。

1. レポート・ジョブ履歴ページで、**レポート・ジョブ名**をクリックしてジョブの詳細ページを表示します。
2. 「出力および配信」セクションから、「再公開」をクリックします。レポート・ビューアが起動します。
3. レポート・ビューアから、新しいレイアウトの適用、異なる出力タイプの選択、またはレポートのエクスポートを実行できます。以前のレポート実行から取得したデータを使用しているため、パラメータは更新できません。
4. レポート・ジョブ履歴ページに戻るには、「アクション」メニューをクリックして「戻る」を選択します。

## 新しい宛先への出力の送信

レポートの出力を新しい宛先または同じ宛先に送信できます。

履歴表で出力を使用できるようにするジョブを作成する場合は、「出力の保存」オプションを有効にする必要があります。選択した宛先に出力が単純に送信されます。

1. レポート・ジョブ履歴ページで、**レポート・ジョブ名**をクリックしてジョブの詳細ページを表示します。
2. 「出力および配信」セクションで、新しい宛先または同じ宛先に送信する出力を探して「送信」をクリックします。
3. 「送信」ダイアログで、次の操作を実行します。
  - a. 配信タイプを選択します。
  - b. 「宛先の追加」をクリックします。
  - c. 配信タイプの適切なフィールドに情報を入力します。
4. 宛先の追加を終了した後、「OK」をクリックします。

配信発行通知を閉じた後、宛先タイプを選択して、「宛先の追加」をクリックし、「OK」ボタンを押して、別のレポート配信を発行できます。ジョブ履歴の詳細ページで、レポート配信の配信ステータスを表示できます。

## 実行中のジョブのモニター

ジョブが実行中のステータスである場合は、レポート処理のステージをモニターできます。

1. レポート・ジョブ履歴ページで、「レポート・ジョブ履歴」表の「実行中」ステータス・インジケータにカーソルを重ねます。

処理を取り扱うクラスタ・インスタンスのインスタンス ID とともに、ステータスが表示されます。

- 最新のステータスを確認するには、ページをリフレッシュします。ページを表示している間、ステータスは自動的に更新されません。

## ジョブのステージの処理

このトピックでは、ジョブの処理ステージをリストします。

処理ステージ	サブステージ
ジョブ・プロセッサ	ジョブ・キューに送信中 ジョブ・キュー内 ジョブ・プロセッサ内 ジョブ・プロセッサの完了 ジョブ・プロセッサで例外が発生
データ・フェッチ	<b>XML</b> データのフェッチ中 <b>XML</b> データをフェッチ済 データ・モデルのトリガー前処理の呼出し前 データ・モデルのトリガー前処理の呼出し後 データ・モデルのトリガー後処理の呼出し前 データ・モデルのトリガー後処理の呼出し後
バースティング制御ファイルのフェッチ(バースティング・ジョブにのみ該当)	バースティング制御のフェッチ中 バースティング制御 <b>XML</b> をフェッチ済
データ・プロセッサ	データ・プロセッサ内 制御ファイルの解析中(バースティング・ジョブにのみ該当) 制御ファイルを解析済(バースティング・ジョブにのみ該当) 分割キーに基づいてデータを切り取り中(バースティング・ジョブにのみ該当) データの切り取りの完了(バースティング・ジョブにのみ該当) 合計サブジョブ数(バースティング・ジョブにのみ該当) データ・プロセッサの完了
レポート・プロセッサ	レポート・プロセッサ内 レポート・ドキュメントのレンダリング中 レポート・ドキュメントのレンダリングの完了 レポート・プロセッサの完了 レポート・ドキュメントのレンダリング・エラー
配信プロセッサ	<delivery>プロセッサ内 <delivery>プロセッサに配信中 <delivery>サーバーにドキュメントを配信済 <Delivery>プロセッサの完了

## 実行中のジョブの取消し

実行中のジョブを取り消すことができます。

- レポート・ジョブ履歴ページで、レポート・ジョブの表の行で(ジョブ名のリンク以外の)任意の場所をクリックし、レポート・ジョブを選択します。

[Ctrl]または[Shift]を押しながら、追加の行をクリックすることで、複数のジョブを選択できます。行の選択を解除するには、ジョブを再度クリックします。取り消すことができるのは、ステータスが「実行中」のジョブのみです。

2. 表の上部にある「**実行中のジョブの取消**」アイコンをクリックします。
3. 確認メッセージで「**OK**」をクリックします。

## レポートのエラーおよび警告情報の取得

レポートのジョブが失敗した場合または警告付きで完了した場合は、エラーおよび警告の情報を表示できます。

- レポート・ジョブ履歴ページの結果表で、エラーまたは警告のステータス・インジケータにカーソルを重ねます。

ジョブ詳細ページにはエラーと警告も表示されます。

エラーまたは警告の完全な診断情報については、ジョブの診断ログ・ファイルを表示できます。

## ジョブ履歴の削除

ジョブ履歴は削除できます。

1. レポート・ジョブ履歴ページで、レポート・ジョブの表の行で(ジョブ名のリンク以外の)任意の場所をクリックし、レポート・ジョブを選択します。

複数の行を選択できます。

2. 表の上部にある「**削除**」アイコンをクリックします。
3. 「確認」ダイアログで「**OK**」をクリックします。

## ピクセルパーフェクト・レポートの管理

このトピックでは、フォルダ内のピクセルパーフェクト・レポート・コンポーネントを管理する方法について説明します。たとえば、権限の設定、レポートやフォルダのダウンロード/アップロード、カタログ内のレポート・コンポーネントの移動などです。

### トピック:

- [フォルダの概要](#)
- [「カタログ」に格納されているレポート・コンポーネント](#)
- [フォルダまたはサブフォルダの作成](#)
- [カタログ・オブジェクトに対するタスクの実行](#)
- [カタログ・オブジェクトのダウンロードとアップロード](#)
- [レポートによって参照されるオブジェクトへのアクションの実行に対する影響の理解](#)
- [カタログ翻訳ファイルのエクスポートとインポート](#)

## フォルダの概要

カタログ・フォルダには、作成するレポート、データ・モデル、スタイル・テンプレートおよびサブ・テンプレートが格納されます。

ユーザーおよび他のすべてのユーザーには、各自の個人フォルダである「**マイ・フォルダ**」があります。個人フォルダ内のレポートには、レポートを作成し、コンテンツをそのフォルダに保存したユーザーのみがアクセスできます。ユーザーは、「**マイ・フォルダ**」にサブフォルダを追加し、自分にとって最も理にかなった方法でコンテンツを編成できます。

他のユーザーやグループがレポートにアクセスできる共有フォルダに、レポートを格納することもできます。ユーザー権限によって、どのユーザーがどのフォルダを使用できるかが決まります。権限はオブジェクト・レベルで割り当てられ、そのフォルダ内のレポートを表示、編集およびスケジュールできるユーザーを決定します。管理者は、共有フォルダ構造を作成して保守します。

## 「カタログ」に格納されているレポート・コンポーネント

各レポート・コンポーネントはアイコンで識別され、作成と変更の情報がリストされます。各項目の横には、実行可能なアクションのリストが表示されます。

カタログには次のレポート・コンポーネントが表示されます。

- [フォルダ](#)
- [レポート](#)
- [データ・モデル](#)

- スタイル・テンプレート
- サブ・テンプレート

## フォルダまたはサブフォルダの作成

「マイ・フォルダ」内にサブフォルダを作成でき、必要な権限がある場合は、共有システム・フォルダを作成できます。

1. カタログの「フォルダ」ペインで、適切な場所に移動します。
2. 「カタログ」ツールバーで、「新規」をクリックして「フォルダ」を選択します。
3. オプション: 「新規フォルダ」で、フォルダ名を入力し、説明を入力します。
4. 「作成」をクリックします。

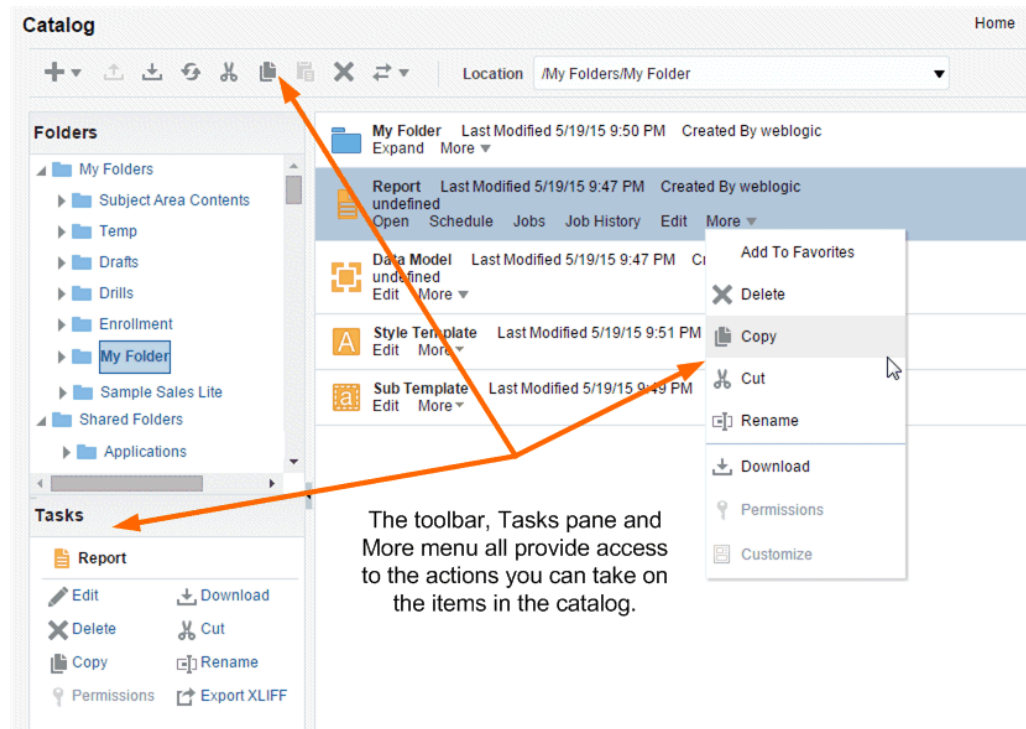
## カタログ・オブジェクトに対するタスクの実行

カタログ・オブジェクトに対して編集、コピー、貼付け、名前変更、ダウンロード、権限設定などのタスクを実行できます。

オブジェクトに対するタスクは、次のような複数の方法で実行できます。

- オブジェクトの横にあるリンクを使用します。
- カタログ・ツールバーを使用します。
- オブジェクトを選択し、「タスク」領域からタスクを選択します。

この画像は、カタログ・ページを示しています。



これらのアクションにアクセスできるかどうかは、管理者によって付与されている権限によって異なります。

## カタログ・オブジェクトのダウンロードとアップロード

**BI Publisher** カタログのダウンロード機能を使用すると、レポートなどのマルチコンポーネント・オブジェクトをバンドルして、アーカイブ・ファイルにダウンロードできます。次に、アップロード機能を使用して、カタログ内の別の場所にデータをアンアーカイブできます。

カタログ・オブジェクトをダウンロードおよびアップロードする機能によって、環境間でオブジェクトを転送できます。たとえば、この機能を使用すると、開発環境から本番環境に **BI Publisher** オブジェクトを転送できます。

アーカイブ・オブジェクトの拡張子の表は、**BI Publisher** がダウンロード時にアーカイブ・オブジェクトの各タイプに割り当てるファイル拡張子を示しています。

カタログ・オブジェクト	ダウンロード・ファイルに割り当てられる拡張子
データ・モデル	.xdmz
フォルダ	.xdrz
レポート	.xdoz
スタイル・テンプレート	.xssz
サブテンプレート	.xsbz

## レポートによって参照されるオブジェクトへのアクションの実行に対する影響の理解

レポートのリソースとして使用されているデータ・モデル、サブ・テンプレートまたはスタイル・テンプレートの移動、切り取り、名前変更または削除を実行すると、リソースへの参照が機能しなくなり、レポートが正しく実行できなくなります。

たとえば、「**マイ・データ・モデル**」というフォルダ内にあるデータ・モデルを使用して作成したレポートがあり、このデータ・モデルを別のフォルダに移動すると、レポートを実行できなくなります。これは、レポート定義により、「**マイ・データ・モデル**」フォルダにデータ・モデルが必要なためです。

リソース・オブジェクトの移動が避けられない場合は、そのオブジェクトを参照している各レポートが新しい場所のオブジェクトを参照するように編集する必要があります。

## カタログ翻訳ファイルのエクスポートとインポート

管理者は、カタログ翻訳ファイルのエクスポートおよびインポート機能を使用して、翻訳対象文字列を含む **XLIFF** ファイルをエクスポートできます。

管理者権限を持つユーザーの場合、カタログ・ツールバーに「**XLIFF のエクスポート**」および「**XLIFF のインポート**」機能が含まれています。カタログ・オブジェクト、データ・モデルおよびテンプレートの翻訳を参照してください。



管理者は、この機能を使用して、選択したカタログ・オブジェクトまたはオブジェクト・グループの翻訳対象文字列を含む XLIFF ファイルをエクスポートできます。その後、XLIFF 文字列を目的のターゲット言語に翻訳できます。管理者は、翻訳後の XLIFF ファイルをカタログにインポートしなおして、適切なロケールを割り当てることができます。

1. カタログでファイルを選択します。
2. 「XLIFF のエクスポート」および「XLIFF のインポート」機能を使用します。

# 第 VI 部

## リファレンス

このパートでは、リファレンス情報について説明します。

### 章:

- [よくある質問](#)
- [トラブルシューティング](#)
- [データ準備のリファレンス](#)
- [式エディタのリファレンス](#)
- [アプリケーションおよび Web ページへの分析コンテンツの埋込み](#)
- [動作保証情報](#)

# 29

## よくある質問

ここでは、データのビジュアル化およびレポート作成に関するよくある質問への回答を示します。

### トピック:

- 分析およびダッシュボードのビュー表示制限とは何ですか。
- プロンプトの表示制限はいくつですか。
- 問合せまたはダウンロードで許可されている最大行数は何行ですか。
- 電子メール配信の制限は何ですか。
- アップロードできるマップ・レイヤー・ファイルの最大サイズはいくつですか。
- オブジェクトを保存するときのデフォルトの場所はどこですか。
- 自分の分析、ダッシュボードおよびワークブックへの他のユーザーのアクセスを有効にできますか。
- 分析およびダッシュボードがプロンプトおよび他の分析と相互作用するようにできますか。
- ダッシュボードのドリルおよびフィルタの適用との相互作用があります。ダッシュボードの状態はどのように保存して、他のユーザーと共有しますか。
- 自分の分析およびダッシュボードに表示されている「診断」リンクはどのように除去するのですか。
- 分析は、異なる環境間で移行できますか。
- 削除されたユーザーがアップロードしたデータ・ファイルを自分のクラウド・サービスから削除できますか。
- BI ユーザーは **Smart View** でレポート・ダッシュボードおよびレポートにアクセスできますか。
- デフォルトのロゴおよびダッシュボード・スタイルを変更できますか。
- **Oracle Analytics Cloud** で初期化ブロックを使用できますか。
- 背景マップのイメージが、PDF、PPT、PNG および印刷でエクスポートされたイメージに含まれていないのはなぜですか。
- 一部のユーザーが割り当てていない権限を持つのはなぜですか。

## 検索とレポート作成に関する FAQ

このトピックでは、データの探索およびレポート作成に関するよくある質問への回答を示します。

### 自分のデータセット記憶域の制限はどれくらいですか。

Oracle Analytics Cloud には、すべてのユーザーで共有されているデータ・ファイル用の 250GB の記憶域の固定割当てがあります。個別のユーザーの制限は 50GB です。未使用のデータセットを削除して、記憶域スペースを解放することをお勧めします。要件がこれらの制限を超えている場合、管理者に連絡してください。

### 分析およびダッシュボードのビュー表示制限とは何ですか。

分析およびダッシュボードの制限	制限	ビュー・タイプ	代替オプション
ビューのプロンプト値の最大数	10,000	ビュー(ページ・エッジ)プロンプトをサポートするすべてのビュー・タイプ	なし
最大表示行数	40,000	解説、ティッカ	なし
最大セクション数	300	単純トレリスを除くセクションをサポートするすべてのビュー・タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>分析ビューのセクション・エッジにより少ない列を配置します。</li> <li>セクション・エッジの 1 つ以上の列を行またはページ・エッジに移動します。</li> <li>ダッシュボードまたは分析フィルタをセクション・エッジの列に適用し、分析ビューのセクション・エッジ内のデータ値の数を減らします。</li> </ul>
単純トレリスのセクションの最大数	10	単純トレリス	なし
ピボット表内に表示される列の最大数	300	ピボット表	<ul style="list-style-type: none"> <li>ピボット表ビューの列エッジにより少ない列を配置します。</li> <li>列エッジの 1 つ以上の列を行、ページまたはセクション・エッジに移動します。</li> <li>ダッシュボードまたは分析フィルタを列エッジの列に適用し、列エッジ内のデータ値の数を減らします。</li> </ul>
ピボット表内に表示されるページ当たりの行の最大数	5,000	ピボット表	「コンテンツ・ページング」のかわりに「スクロール・コンテンツがある固定ヘッダー」の「データ表示」オプションを使用します。
表ビュー内に表示されるページ当たりの行の最大数	5,000	表	「コンテンツ・ページング」のかわりに「スクロール・コンテンツがある固定ヘッダー」の「データ表示」オプションを使用します。

## プロンプトの表示制限はいくつですか。

プロンプト制限	制限	詳細情報
選択値の最大数	1000	適用対象: <ul style="list-style-type: none"> <li>プロンプトの選択リスト、チェック・ボックス、リスト・ボックスおよびラジオ・ボタン。</li> <li>プロンプト値リストの「検索」オプションを選択した場合の値の選択ダイアログに表示される値のリスト。</li> </ul>
デフォルト値の最大数	1000	ダッシュボード・プロンプトに適用されます。

## 問合せまたはダウンロードで許可されている最大行数は何行ですか。

サービスの計画のデータの問合せ、表示、およびエクスポートの制限に関する項を参照してください。

## 電子メール配信の制限は何ですか。

Oracle Analytics Cloud デプロイメントのコンピュート・サイズによって、1つの電子メールで配信できる最大行数が決まります。行制限は、配信するレポートが書式設定されているかどうかによっても異なります。サービスの計画の電子メールによる配信時の制限(クラシック分析およびダッシュボード)を参照してください。

### ノート:

電子メールによるコンテンツ配信は負荷がかかる操作であり、システム全体のパフォーマンスに直接影響します。システム・パフォーマンスへの影響は、受信者の数、送信する行と列の数、および配信形式によって大きくなります。パフォーマンスへの影響を軽減するために、ピーク時以外に配信をスケジュールするか、配信形式を変更することをお勧めします。

## アップロードできるマップ・レイヤー・ファイルの最大サイズはいくつですか。

アップロードできる最大ファイル・サイズは 25MB です。

## オブジェクトを保存するときのデフォルトの場所はどこですか。

任意のオブジェクトを任意の場所に保存できます。ただし、「保存」ダイアログの「**保存場所**」フィールドでは、保存するオブジェクト・タイプに基づいて最も適した場所が推奨される場合があります。たとえば、保存するフィルタ、グループおよび計算項目をサブジェクト領域の分析作成時に使用するには、そのサブジェクト領域フォルダ内に保存する必要があります。「/マイ・フォルダ」または「/共有フォルダ」内にサブジェクト領域フォルダが存在しない場合は、フォルダが自動的に作成されます。「**保存場所**」フィールドのデフォルトの保存パスは、「/マイ・フォルダ/サブジェクト領域のコンテンツ/」<サブジェクト領域>ですが、ダイアログの「フォルダ」エリアに、カタログ内のサブジェクト領域フォルダの全インスタンスが表示されます。

分析やプロンプトなどのその他のオブジェクトは、任意のフォルダに保存できます。保存するオブジェクトを他のユーザーと共有するかどうかを決定する際には、共有フォルダと個人のフォルダの違いに注意してください。

**自分の分析、ダッシュボードおよびワークブックへの他のユーザーのアクセスを有効にできますか。**

はい。自分の分析、ダッシュボードおよびワークブックに他のユーザーがアクセスできるようにするには、分析、ダッシュボードまたはワークブックを共有フォルダに移動または保存し、他のユーザーに必要なアクセス権を付与します。[アクセス権限の割当](#)および[共有カタログ・フォルダとワークブック権限の割当て](#)に関する項を参照してください。

**分析およびダッシュボードがプロンプトおよび他の分析と相互作用するようにはできませんか。**

はい。分析およびダッシュボードはプロンプトと相互作用します。[高度な手法: ダッシュボード・プロンプトと分析プロンプトとの相互作用](#)を参照してください。1つのビューによって他の1つ以上のビューが変更されるようにビューをリンクできます。[マスター詳細関係でのビューのリンク](#)を参照してください。

**ダッシュボードのドリルおよびフィルタの適用との相互作用があります。ダッシュボードの状態はどのように保存して、他のユーザーと共有しますか。**

ダッシュボードに対して実行した設定を保存し、その設定に戻ることができます。[ダッシュボード状態の保存および復元](#)を参照してください。ダッシュボード・ページは、そのリンクを共有することで他のユーザーと共有できます。[ダッシュボード・ページへのリンク](#)を参照してください。

**自分の分析およびダッシュボードに表示されている「診断」リンクはどのように除去するのですか。**

クラシック・ビューで、BI サービス管理者ロールを持つユーザーとしてサインインし、構成設定「[BI サーバー問合せの診断](#)」の値を「拒否」に設定します。この設定は、[管理\セキュリティ - 権限の管理\管理: 一般](#)にあります。

**ヒント:** ユーザーの「[マイ・プロフィール](#)」アイコン、「[管理](#)」の順にクリックして、「[管理](#)」ページにアクセスできます。

**分析は、異なる環境間で移行できますか。**

はい。分析エディタの「[詳細設定](#)」タブを使用し、分析の XML コードをコピーして貼り付けることで、分析をサービス環境間で移行できます。[高度な手法: 分析用論理 SQL 文の確認](#)を参照してください。

**削除されたユーザーがアップロードしたデータ・ファイルを自分のクラウド・サービスから削除できますか。**

はい。削除されたユーザーを元の状態に戻してから、データセット・ファイルを削除します。

**BI ユーザーは Smart View でレポート・ダッシュボードおよびレポートにアクセスできますか。**

はい。Smart View と Oracle Analytics Cloud を参照してください。

### デフォルトのロゴおよびダッシュボード・スタイルを変更できますか。

はい。「ダッシュボードのプロパティ」ページで、カスタム・ロゴが含まれている事前定義済のテーマを「スタイル」リストから選択します。管理者がこれらのテーマを作成し、ダッシュボード・ビルダーで使用できるようにします。

### Oracle Analytics Cloud で初期化ブロックを使用できますか。

初期化ブロックを使用してセッション変数を設定できますが、これらを使用してユーザー、ロールまたはグループを設定できません。Oracle Analytics Cloud にサインインする際、Oracle Analytics Cloud で使用されているアイデンティティ管理システムにより、USER および ROLE (GROUP)セッション変数の値が移入されます。

### ページを印刷する場合または PDF、PPT および PNG などの形式でイメージをエクスポートする場合、背景マップからイメージが表示されないのはなぜですか。

ユーザーまたはビジュアライゼーション・ビルダーが、イメージを URL で参照して背景マップにこのイメージを追加した可能性があります。様々な形式で印刷またはエクスポートされるイメージの場合、イメージをホストする外部 Web サイトはホスト・サーバーの Access-Control-Allow-Origin ヘッダーが必要です。マップの背景に、このヘッダーを含まない外部 Web サイトから取得されたイメージ参照が含まれる場合、イメージは表示されません。

このヘッダーの詳細は、[https://www.w3.org/wiki/CORS\\_Enabled](https://www.w3.org/wiki/CORS_Enabled) を参照してください

### 一部のユーザーが割り当てていない読取り権限を持つのはなぜですか。

アーティファクト(データセットなど)を含むレポート、ダッシュボードまたはワークブックを共有フォルダに保存または移動し、プロンプトが表示されたときに関連アーティファクトを共有する場合、Oracle Analytics は、共有フォルダのレポート、ダッシュボードまたはワークブックにアクセスできるユーザーにアーティファクト 読取り権限を割り当てます。

読取り権限がない場合、ユーザーはレポート、ダッシュボードまたはワークブックを開くときに正しいコンテンツにアクセスできません。

### 他のユーザーと共有したワークブックがダッシュボードとして表示される理由と、ユーザーが「ビジュアル化」ページにアクセスできない理由を教えてください。

ユーザーがワークブックを開いたときにワークブックが表示される方法は、ユーザーの権限とワークブックがどのように設定されているかによって異なります。

- 共有されているワークブックにプレゼンテーション・フローが含まれていて、ワークブックに対するユーザーの権限が読取り専用である場合、ワークブックのダッシュボードは表示されるだけで、ユーザーは「ビジュアル化」ページでワークブックにアクセスできません。プレゼンテーション・フローのダッシュボードとキャンバスのプリファレンスによって、ダッシュボードの表示方法と、そこに組み込まれる機能が決まります。
- 共有されているワークブックがプレゼンテーション・モードで表示されている場合、ワークブックのプレゼンテーション・フローのダッシュボードとキャンバスのプリファレンスによって、ユーザーがプレゼンテーション・フローやダッシュボードをどのように操作できるかが決まります。[プレゼンテーション・フローを開く](#)を参照してください。
- ワークブックにプレゼンテーション・フローが含まれておらず、ユーザーの権限が読取り専用である場合、ワークブックは「ビジュアル化」ページに表示されます。ユーザーは、「ビジュアル化」ページでフィルタ値の変更、フィルタの追加、エクスポート、ソートおよびドリルを実行できます。

## データの公開に関する FAQ

このトピックでは、データの公開に関するよくある質問への回答を示します。

**自分のレポート、データ・モデル、テンプレートをどこに保存すれば、自分だけがアクセスできるようになりますか。**

マイ・フォルダを個人用ストレージとして使用します。マイ・フォルダに保存したオブジェクトにアクセスできるのは、あなたのみです。

**デフォルトのプリンタはどのように構成しますか。**

「マイ・アカウント」ダイアログでアカウントのプリファレンスを設定します。

**Publisher でスケジュールされたジョブはどのように取り消しますか。**

「ジョブ履歴」ページに移動し、取り消したいジョブを見つけて、「**取消**」をクリックします。

**レポートを複数の宛先にバーストするようにジョブをスケジュールするにはどうすればよいですか。**

1. 管理者がデータ・ソース接続および配信チャネルへの接続を構成していることを確認してください。
2. レポートのデータ・モデルを作成します。
3. データ・モデルでバースティングを定義します。
4. 適切なレポート・テンプレートを使用して、レポート・レイアウトを設計します。
5. レポート・ビューアでレポートを表示します。
6. バースティング・ジョブをスケジュールする際には、出力形式、バースティング問合せおよび配信先を指定します。

**自分が行った変更をプリファレンスにどのように適用しますか。**

Publisher では、タイム・ゾーンやロケールなどのプリファレンスを変更した場合、Publisher セッションで変更をすぐに適用できます。

1. ページの URL の最後に&relogon=1 パラメータを追加し、ページをリロードします。
2. Publisher からログアウトし、再度ログインします。

**Publisher レポートを PDF としてダウンロードするにはどうしたらよいですか。**

PDF プラグインでフレーム内の埋込みコンテンツが処理される方法が原因で、Chrome ブラウザでは Publisher レポートを PDF としてダウンロードできない可能性があります。

次のオプションでは、レポートを PDF としてダウンロードできます：

- 「**印刷**」をクリックして、レポートを PDF としてダウンロードします。
- Firefox など、別のブラウザでレポートを表示し、そこからダウンロードします。



- 「**エクスポート**」をクリックするか、「**レポート・リンクの共有**」(`_xpt=1` パラメータを使用)をクリックして、レポートを直接ダウンロードします。

# トラブルシューティング

このトピックでは、一般的な問題およびそれらの解決方法について説明します。

## トピック:

- [使用可能な診断ツール](#)
- [一般的な問題のトラブルシューティング](#)
- [ワークブック、分析およびダッシュボードでの問題のトラブルシューティング](#)
- [ビジュアライゼーションの問題のトラブルシューティング](#)

## 使用可能な診断ツール

問題のトラブルシューティングに使用できる診断ツールがいくつかあります。

ツール	説明	リファレンス
ブラウザ・セッション・レポート	Oracle サポートが使用するブラウザ・セッション情報を記録します。	<a href="#">サービス・リクエストで HAR ファイルを提供する必要がある</a>
クライアント・スクリプト・エラー・レポート	Oracle サポートが使用するクライアント・スクリプト・エラー情報を記録します。	<a href="#">サービス・リクエストでクライアント・スクリプト・エラーの詳細を提供する必要がある</a>
Oracle Cloud Infrastructure コンソールの「診断」ページ	問題にドリルインして、ログ・ファイルを表示および構成します。	使用状況および診断ログのモニター インスタンス・イベント・ログのモニター
ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター(管理者)	「セッションの管理」ページで、現在サインインしているユーザーに関する情報を参照して、レポート問合せをトラブルシューティングします。	ユーザーおよびアクティビティ・ログのモニター
Oracle Cloud Infrastructure コンソールのネットワーク・パス・アナライザ	コンソール、API またはコマンドラインを使用して、Oracle Analytics Cloud インスタンスの接続の問題を診断します。	プライベート・データ・ソースへの接続の問題をトラブルシューティングするツールはあるか。
企業ネットワークからネットワークの問題を診断するためのその他のツール	nslookup、netcat、cURL などのツールを使用します。	企業ネットワークからネットワークの問題をテストまたはデバッグするツールはあるか。
Oracle Cloud Infrastructure コンソールの「概要」ページ	システムに関する最近の問題を表示します。	ステータスのモニター
パフォーマンス・メトリック	インスタンスのパフォーマンス・メトリックを表示します。	メトリックのモニター

ツール	説明	リファレンス
テスト SQL 問合せの実行(管理者)	基礎となるデータ・ソースに SQL 文を直接入力します。	テスト SQL 問合せの実行
セマンティック・モデル一貫性	セマンティック・モデルの妥当性を確認します。	整合性チェックの作業
使用状況トラッキング	データベースの最適化、集計の戦略、ユーザーや部門が利用したリソースに基づく課金など、様々な方法で利用できる使用状況トラッキング統計を生成します。	使用状況のトラッキング
ワークブックのパフォーマンス情報	「開発者オプション」のパフォーマンス・ツールを使用して、ワークブック内のビジュアライゼーション・コンポーネントの問合せ時間、サーバー時間およびストリーミング時間などのパフォーマンス統計を確認します。	「開発者」オプション

## 一般的な問題のトラブルシューティング

このトピックでは、発生する可能性のある一般的な問題とその解決方法について説明します。

### Oracle Analytics Cloud にサインインできない

誤った資格証明を使用してサインインしようとしている可能性があります。Oracle Analytics Cloud にサインインするには、Oracle からメールで送信されるか、または管理者から指示された Oracle Cloud アイデンティティ・ドメインの資格証明を使用する必要があります。Oracle.com のアカウント資格証明を使用して Oracle Analytics Cloud にサインインすることはできません。

### パスワードをリセットできない

Oracle Analytics Cloud を使用するためにサインアップする場合は、一時パスワードを含む電子メールを取得します。このパスワードをコピーして貼り付ける場合は注意が必要です。コピーするときにパスワードの前後に誤って空白が含まれると、そのパスワードを貼り付けても認識されません。空白を含まずにパスワードのみを貼り付けたことを確認してください。

### ホーム・ページから特定のオプションにアクセスできない

必要なオプションにアクセスする正しい権限があることを管理者に確認してください。

### Mozilla Firefox の使用時にパフォーマンスが低下する

Mozilla Firefox を使用しており、クラウド・サービスのパフォーマンスの低下に気付いた場合、履歴の保存オプションが有効であることを確認してください。Firefox が訪問済ページの履歴を保存しないよう設定されている場合、Web コンテンツ・キャッシュも無効になっていると、サービスのパフォーマンスに大きな影響を与えます。このオプションの設定の詳細は、Firefox のドキュメントを参照してください。

## Microsoft Access からエクスポートしたスプレッドシート(XLSX)から、データをアップロードできない

Microsoft Excel でスプレッドシートを開き、Excel ワークブック(\*.xlsx)として再保存します。

その他のツールからスプレッドシートをエクスポートする場合は、ファイル形式が若干異なる可能性があります。これは、Microsoft Excel からデータを再度保存することで解決できます。

ユーザーには、ワークブック・エディタ内の「ビジュアル化」キャンバスに「**自動インサイト**」オプションは表示されません。

コンソールで「システム設定」、パフォーマンスと互換性の順に移動し、**データセットでの自動インサイトの有効化**オプションを有効にします。次に、データセット開発者に、インサイトが必要なデータセットのデータセットの検査ダイアログの「**インサイトの有効化**」オプションを選択するよう依頼します。その後、ワークブック・ユーザーは、ワークブック・エディタ内の「ビジュアル化」キャンバスの「**自動インサイト**」オプションを使用できるようになります。

## 自分の分析またはワークブックのタイムアウト

分析またはワークブックを実行しようとして、タイムアウトになることがわかりました。次のようなメッセージが表示されます。

```
[nQSError: 60009] ユーザー・リクエストが、実行時間を管理する最大問合せを超えました。
```

このメッセージは、Oracle Analytics 問合せがデータ・ソースとの通信に割り当てられた時間より長い時間を費やした場合に表示されます。パフォーマンス上の理由から、単一の問合せの実行は 10 分に制限されています。

もう一度問合せを実行してみてください。このエラーを防ぐには、長時間実行される問合せを避けてください。

### ノート:

Oracle Database への直接接続の場合、問合せ制限は、時々発生する長時間実行問合せに対応するために自動的に 60 分に延長されます。データベースに対する過剰な負荷を回避するために、どの時点でも、Oracle Analytics は自動延長できる問合せ数を制限しています。分析またはワークブックで他のデータ・ソースに接続する場合、またはデータ・ゲートウェイを介して Oracle Database に間接的に接続する場合、問合せ制限は常に 10 分で、10 分を超えて延長されません。

## ホーム・ページの検索結果に探しているデータが含まれていない

ホーム・ページの検索結果に表示するには、ユーザーがファイルから作成したデータセットに索引付け(および一部の場合は認証)する必要があります。

- ファイルベースのデータセットを使用してホーム・ページからビジュアライゼーションを構築する前に、それらに索引付けする必要があります。
- データセットにアクセスする権限を持つ他のユーザーが、ファイルベースのデータセットを使用してホーム・ページからビジュアライゼーションを構築する前に、それらに索引付けして認証する必要があります。

データセットの索引付けについておよびホーム・ページからのデータのビジュアル化を参照してください。

### サービス・リクエストで HAR ファイルを提供する必要がある

ユーザーのパフォーマンスの問題を報告するためにサービス・リクエスト(SR)を記録する場合、ブラウザ・セッションを記録し、HTTP アーカイブ形式(HAR)でレポートを Oracle Support に提供するように求められる場合があります。HAR ファイルには、Web ブラウザと Oracle Analytics Cloud の対話が記録されています。

ブラウザ・セッションの記録には任意のサポート対象ブラウザを使用できますが、Chrome のデベロッパ・ツールを使用することをお勧めします。Chrome を使用してブラウザ・セッションを記録するには:

1. Chrome で、「**Google Chrome の設定**」を選択し、「**その他のツール**」、「**デベロッパー ツール**」の順に選択します。
2. 「ネットワーク」タブにナビゲートします。
3. 「**キャッシュを無効化**」および「**ログを保持**」を選択し、ページをリフレッシュします。
4. 記録がまだ開始されていない場合は、「**記録**」をクリックします。
5. パフォーマンス問題の原因となっているステップを実行します。
6. 「**ネットワーク ログの記録を停止**」をクリックします。
7. 表またはグリッドを右クリックして、「**すべてをコンテンツのある HAR として保存**」を選択します。
8. 画面の指示に従って、HAR ファイルをローカルに保存します。

### サービス・リクエストでクライアント・スクリプト・エラーの詳細を提供する必要がある

クライアント側の問題に関するサービス・リクエストを記録する場合は、クライアント・スクリプト・エラーの詳細を Oracle Support に送信するように求められる場合があります。

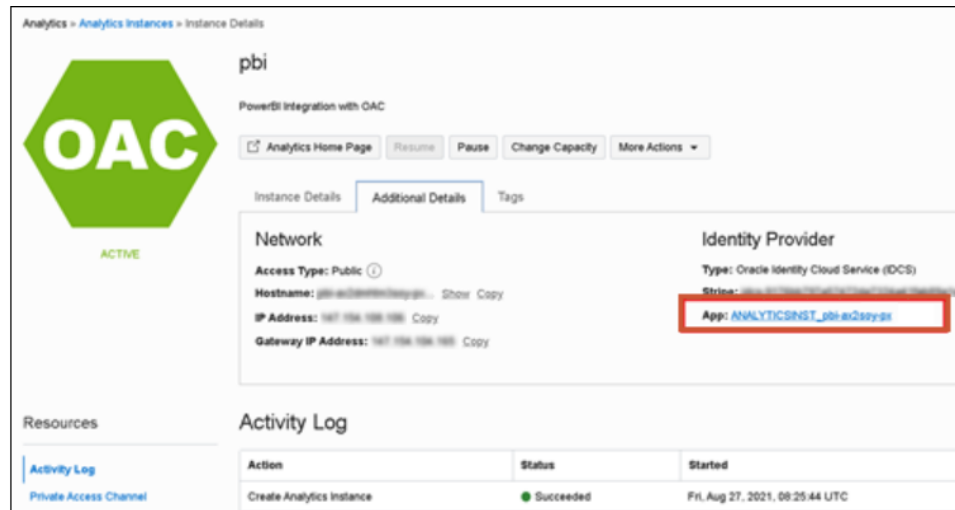
クライアント・スクリプト・エラーの収集には任意のサポート対象ブラウザを使用できますが、Chrome のデベロッパ・ツールを使用することをお勧めします。Chrome を使用してクライアント・スクリプト・エラーを収集するには:

1. Chrome で、Oracle Analytics Cloud にサインインし、問題が発生したページにナビゲートします。
2. 「**Google Chrome の設定**」を選択し、「**その他のツール**」、「**デベロッパー ツール**」の順に選択します。
3. 「**コンソール**」タブをクリックします。
4. 「**コンソールを消去**」をクリックして、コンソールから既存のメッセージをすべて削除します。
5. 「**コンソール サイドバーを表示します**」をクリックし、「**エラー**」オプションをクリックして、エラーのみ(赤い円で囲まれた十字)を表示します。
6. 問題を再現し、エラーが発生して記録されていることをコンソールで確認します。
7. エラー・メッセージを右クリックし、「**名前を付けて保存...**」を選択して、ファイルをコンピュータに保存します。

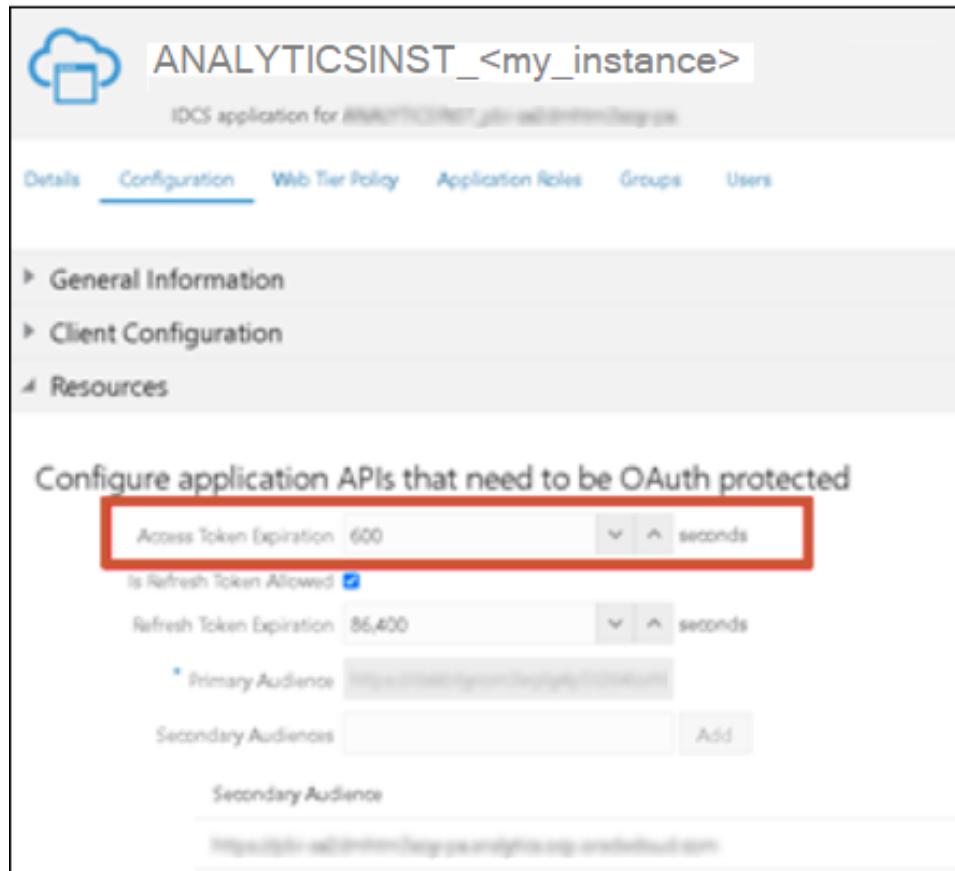
8. エラー・ファイルを SR にアップロードします。

ユーザーが MS Power BI コネクタを使用していると、100 秒くらいで認証エラーが発生する

Oracle Analytics Cloud のアクセス・トークンの有効期限を調整してください。Oracle Cloud Infrastructure コンソールで、Microsoft Power BI で接続する Oracle Analytics Cloud インスタンスに移動します。



「追加詳細」をクリックし、「アイデンティティ・プロバイダ」の下にある「アプリケーション」リンクをクリックします。「構成」タブで、「リソース」を展開し、アクセス・トークンの有効期限を 600 秒(10 分)に増やします。



## ワークブック、分析およびダッシュボードでの問題のトラブルシューティング

このトピックでは、ワークブック、分析およびダッシュボードの使用時に発生する可能性のある一般的な問題と、その解決方法について説明します。

### 分析またはワークブック内のデータが表示されない

分析またはワークブックを開いても、データが表示されません。

データベースに一時的な問題が発生している可能性があります。管理者に連絡してください。

データへのアクセスに必要な権限がない場合があります。オブジェクトの所有者または管理者に連絡し、アクセス権限の確認を依頼します。分析またはワークブックと、分析またはワークブックに含まれている任意のアーティファクト(データセットなど)に対する読取り権限が必要になります。

### 特定の分析、ダッシュボードまたはワークブックにアクセスできない

分析、ダッシュボードまたはワークブックを表示しようとして、アクセスできないことがわかりました。

一般に、分析、ダッシュボードまたはワークブックにアクセスするための適切な権限またはアプリケーション・ロールが不足している場合はアクセスできません。適切な

権限またはアプリケーション・ロールが確保されるように、分析、ダッシュボードまたはワークブックの所有者または管理者に連絡してください。

### 分析、ダッシュボードまたはワークブックが見つからない

カタログを検索してください。分析、ダッシュボードまたはワークブックは、名前(のすべてまたは一部)およびフォルダの場所で検索できます。検索では大/小文字は区別されません。カタログの検索では、表示する権限があるカタログ・オブジェクトのみが返されます。

分析、ダッシュボードまたはワークブックが依然として見つからず、誤って削除された可能性がある場合は、管理者に連絡してください。必要な場合、管理者は、最近のスナップショットから以前のバージョンのカタログを復元できます。

### 分析またはワークブックの実行が非常に低速である

分析またはワークブックを実行しようとして、実行に長時間かかることがわかりました。

内在する様々な状況によって、分析またはワークブックの実行速度が遅くなる可能性があります。管理者に連絡し、分析やワークブックに関連するログ・ファイルを確認するように依頼してください。管理者とともにログ・ファイルを確認した後、適切な調整を分析またはワークブックに適用します。

### 分析またはワークブックで予期しないデータが返される

内在する様々な状況によって、分析またはワークブックで予期しない結果が返される可能性があります。分析では、「基準」タブの「サブジェクト領域」ペインで「リフレッシュ」をクリックして、最新の情報が表示されていることを確認します。ワークブックの場合は、ソース・データをリフレッシュします。

代替方法:

- セマンティック・モデルに対する最新の変更が分析に確実に反映されるように、基礎となるデータのリロードをデータ・モデラーまたは管理者に依頼します。分析では、データ・モデラーおよび管理者は、「基準」タブの「サブジェクト領域」ペインで「リフレッシュ」アイコンをクリックすると、「**サーバー・メタデータのリロード**」オプションにアクセスできます。
- 分析やワークブックのログ・ファイルを確認するように、管理者に依頼します。管理者とともにログ・ファイルを確認した後、適切な調整を分析またはワークブックに適用します。

### 分析またはワークブックでビューの表示エラーが提示される理由がわからない

分析またはワークブックを表示すると、次のようなメッセージが表示されることがあります: 「ビューの表示エラー。構成済の許容されている入力レコードの最大数を超過しました。」このメッセージは、そのタイプのビューで表示可能なデータより多いデータを選択したことを示します。分析またはワークブックに 1 つ以上のフィルタを追加して、データの量を削減してください。たとえば、数年間のみの日付範囲を指定するフィルタを追加します。

### サブジェクト領域および外部データ・ソースの一致する「年」列が正しく機能しない

数値を含むにもかかわらず文字を含むかのように処理する必要がある列では、この不一致はよくあることです。Microsoft Excel では通常、数値のみを含む列のデータ型は数値に設定されます。数値の前に一重引用符が置かれるため、数値の先頭にスペースが追加される問題が生じます。照合およびフィルタでは、この先頭のスペースが原因で照合が失敗します。

この問題を回避するには、数値を含む列に長さゼロの文字列(間になにも挟まない 2 つの一重引用符)を連結する式を作成します。たとえば、数値を含む列が列 A にある場合、同等の文字



列を作成するには、`=concatenate(A2, '')`, `=concatenate(A3, '')` という式でセルごとに列を追加します。

### ワークブック・エディタ内の「ビジュアル化」キャンバスに<uicontrol>「自動インサイト」</uicontrol>オプションが表示されません

自動インサイトを有効にするように Oracle Analytics 管理者に依頼してください。

### 「自動インサイト」オプションがワークブック・エディタ内の「ビジュアル化」キャンバスでグレー・アウトされています

インサイトが必要なデータセットのデータセットの検査ダイアログで、「インサイトの有効化」オプションを選択します。

## ビジュアライゼーションの問題のトラブルシューティング

このトピックでは、ビジュアライゼーションの操作時に発生する可能性がある一般的な問題と、その解決方法について説明します。

### ワークブックをインポートするときに、異常が発生したというエラーが表示され、.dva ファイルをインポートできません

このメッセージは様々な理由で表示されます。

- アーカイブに含まれるファイルのサイズが最大アップロード・サイズ(100 MB)を超えています。
- インポートしようとしている接続と同じ名前の接続が 1 つ以上のデータ・ソースで使用されています。これらのデータ・ソースを削除してください。

### ワークブックをインポートするときに、ワークブック、データ・ソースまたは接続がすでに存在するというエラーが表示されます

ワークブックをインポートしようとするときに、次のエラー・メッセージが表示される場合があります：

「インポートしようとしている対象と同じ名前を持つワークブック、データ・ソースまたは接続がすでにあります。インポートを続行し、既存のコンテンツを置き換えますか。」

このエラー・メッセージが表示されるのは、ワークブックとともにエクスポートされた 1 つ以上のコンポーネントがすでにシステムにあるためです。ワークブックがエクスポートされると、出力される.DVA ファイルには、ワークブックに関連付けられているデータ・ソースおよび接続文字列が格納されます。このエラーを解決するには、「OK」をクリックしてシステム・コンポーネントを置換するか、「取消」をクリックしてシステムに移動し、コンポーネントを手動で削除します。

このエラー・メッセージは、インポートしようとしているワークブックにデータが含まれていない場合にも表示されます。データなしでワークブックをエクスポートする場合は、ワークブックとデータ・ソースの両方のメタデータが.DVA に格納されます。この問題を解決するには、「OK」をクリックしてシステム・コンポーネントを置換するか、「取消」をクリックしてシステムに移動し、エラーの原因となっているデータ・ソースまたは接続を手動で削除します。

### ファイルベースのデータ・ソースのデータをリフレッシュしようとする問題が発生します

Microsoft Excel、CSV または TXT データ・ソースのデータをリフレッシュする場合、次の要件に留意します。

- Excel ファイルをリフレッシュするには、新しいスプレッドシート・ファイルに、アップロードした元のファイルと同じ名前のシートが含まれていることを確認してください。シートが見つからない場合は、元のアップロード済ファイルのシートと一致するように、ファイルを修正する必要があります。
- リロードする Excel、CSV または TXT ファイルに列が欠落している場合、データのリロードが失敗したことを示すエラーを受信します。この場合、アップロードした元のファイルの列と一致するようにファイルを修正する必要があります。
- データ・ソースの作成に使用した Excel、CSV または TXT ファイルを移動または削除した場合、接続パスが「データ・ソース」ダイアログから削除されます。データ・ソースを元のソース・ファイルに再接続したり、「表示」ペインでデータ・ソースを右クリックしてこれを置換ファイルに接続したり、「オプション」メニューで「**データのリロード**」を選択できます。次に、ロードするファイルを参照して選択できます。
- 新規列が含まれる Excel、CSV または TXT ファイルをリロードした場合、その新規列は非表示としてマークされ、データセットを使用している既存のワークブックの「データ・パネル」には表示されません。これらの列を表示するには、「**非表示**」オプションをクリックします。

Excel スプレッドシートに特定の構造が含まれる必要があります。[データセットのファイルについて](#)を参照してください。

### MongoDB データ・ソースのデータをリフレッシュできません

最初に MongoDB に接続すると、MongoDB ドライバはキャッシュ・ファイルを作成します。MongoDB スキーマの名前が変更され、MongoDB データ・ソースのリロードまたはワークブックでのデータ・ソースの使用を試みた場合、エラーが発生するか、Oracle Analytics が応答しないことがあります。

このエラーを修正するには、管理者に MongoDB キャッシュのクリアを依頼してください。

### カスタム・アプリケーションまたは Web ページに埋め込んだビジュアライゼーションが、正しくレンダリングされません

ビジュアライゼーションが正しくレンダリングされない場合、アプリケーションまたは Web ページの HTML ページを表示するか開いて、DOCTYPE 宣言が存在しており、<!DOCTYPE html>に設定されていることを確認してください。HTML ページの準備を参照してください。

# 31

## データ準備のリファレンス

変換推奨、開発者オプションおよび様々な OCI サービスとの統合について学習します。

### トピック:

- [変換推奨のリファレンス](#)
- [クイック・データ変換の列メニュー・オプション](#)
- [「開発者」オプション](#)
- [OCI テナントへの接続の作成](#)
- [Oracle Analytics の OCI 関数との統合](#)
- [Oracle Analytics の OCI Data Science との統合](#)
- [Oracle Analytics と OCI Document Understanding の統合](#)
- [Oracle Analytics の OCI Language との統合](#)
- [Oracle Analytics の OCI Vision との統合](#)

## 変換推奨のリファレンス

データ変換オプションについて説明します。

オプション	説明
編集	列を編集します。たとえば、名前の変更、別の列の選択または関数の更新が可能です。
非表示	「データ・パネル」およびビジュアライゼーションで列を非表示にします。非表示の列を表示する必要がある場合は、ページ・フッターで「 <b>非表示列</b> 」(ゴースト・アイコン)をクリックします。その後、個々の列を表示するか、一度にすべての非表示列を表示できます。
グループ、条件付きグループ	「 <b>グループ</b> 」を選択して、独自のカスタム・グループを作成します。たとえば、都道府県をカスタム地域とグループ化したり、ドルの金額を小、中、大を示すグループに分類できます。
分割	特定の列値をいくつかの部分に分割します。たとえば、名前という列を名と姓に分割できます。
大文字	列のコンテンツをすべて大文字の値に更新します。
小文字	列のコンテンツをすべて小文字の値に更新します。
文の先頭大文字	列のコンテンツを、文の最初の語の最初の文字が大文字になるように更新します。
名前変更	任意の列の名前を変更できます。
複製	選択した列と同じコンテンツで列を作成します。
テキストに変換	列のデータ型をテキストに変更します。
置換	選択した列内の特定のテキストを、指定した任意の値に変更します。たとえば、列内の <i>Mister</i> のすべてのインスタンスを <i>Mr.</i> に変更できます。
作成	関数に基づいて列を作成します。

オプション	説明
数値に変換	列のデータ型を数値に変更することで、数値ではないすべての値を列から削除します。
日付に変換	列のデータ型を日付に変更し、日付ではないすべての値を列から削除します。
ビン	数値範囲に対して独自のカスタム・グループを作成します。たとえば、カスタム要件に基づいて、13 歳未満、若年成人、成人または高齢者にビン化した年齢範囲を使用して、年齢列のビンを作成できます。
対数	式の自然対数を計算します。
累乗	列の値を指定した指数で累乗します。デフォルトの指数は 2 です。
平方根	選択した列内の値の平方根が移入された列を作成します。

## クイック・データ変換の列メニュー・オプション

次の列メニュー・オプションを使用すると、データ・フロー内のデータを変換できます。

オプション	説明
ビン	数値範囲に対してカスタム・グループを作成します。
数値に変換	列のデータ型を数値に変更し、数値ではないすべての値を削除します。
テキストに変換	列のデータ型をテキストに変更します。
削除	データセットから列を選択して除去します。
複製	選択した列と同じデータを含む列を作成します。
グループ	列グループを作成して関連する値を結合します。たとえば、都道府県をカスタム地域とグループ化したり、ドルの金額を小、中、大を示すグループに分類できます。
小文字	列のすべてのテキストを小文字に変換します。
列のマージ	2 つ以上の列を結合して 1 つの列として表示します。
名前変更	列名を変更します。
文の先頭大文字	列内の各行の最初の単語の最初の文字を大文字にします。
変換	式を使用し、列データを変更します。
トリミング	テキスト・データから先頭および末尾のスペースを削除します。Oracle Analytics では、データ・プレビューに先頭または末尾のスペースは表示されませんが、元のデータ・ソースに先頭または末尾のスペースが含まれている場合、これによって問合せが影響を受ける可能性があります。
大文字	列のすべてのテキストを大文字に変換します。

## 「開発者」オプション

「ビジュアル化」キャンバスには、分析コンテンツの他のアプリケーションへの埋込み、およびビジュアライゼーション・コンポーネントのパフォーマンス統計の確認を行える開発者オプションが含まれます。開発者オプションを使用するには、管理者またはコンテンツ作成者の権限でログインしている必要があります。

開発者オプションを表示するには、ワークブックを開き、「ビジュアル化」ペインを表示し、「メニュー」、「開発者」の順にクリックします。

タブ	説明
パフォーマンス・ツール	ワークブック内のビジュアライゼーション・コンポーネントの問合せ時間、サーバー時間およびストリーミング時間などのパフォーマンス統計を確認します。 最新の統計を取得するには、「リフレッシュ」をクリックします。次に、次のタブを使用して、パフォーマンスを分析できます: 「サマリー」、「論理 SQL」、「問合せ生成」、「実行ログ」。
埋込み	他のアプリケーションに Oracle Analytics コンテンツを埋め込みます。「コピー」オプションを使用して HTML コードをコピーし、これを別のアプリケーションに貼り付け、Oracle Analytics コンテンツが表示されるようにします。
JSON	フィルタを使用する埋込みコンテンツの列参照を調べます。
XML、データセット、準備データセット、準備 UI オプション	これらのタブは使用しないでください。これらは内部診断専用です。

## 開発者オプションの有効化

埋込みリンクへのアクセスやワークブックのパフォーマンスの分析などの高度なタスクを実行するには、Oracle Analytics の開発者オプションを有効にします。開発者オプションを使用するには、管理者またはコンテンツ作成者の権限が必要です。不明な場合は、管理者に問い合わせてください。

開発者オプションは、コンシューマ権限のみで Oracle Analytics にログインしている場合は使用できません。ただし、ブラウザで `&devtools=true` を指定してワークブック URL を追加して、ビジュアライゼーション・キャンバスのパフォーマンスを分析できます。

1. ホーム・ページで、ユーザー・アイコンをクリックして、「プロフィール」をクリックします。
2. 管理ページで、「拡張」をクリックし、「開発者オプションの有効化」をクリックします。
3. 「保存」、「閉じる」の順にクリックします。

開発者オプションまたはコンテンツ作成者権限がある場合、ワークブック・デザイナーの「ビジュアル化」ペインの下の開発者オプションを表示できます(「メニュー」、「開発者」の順にクリックします)。

## OCI テナントへの接続の作成

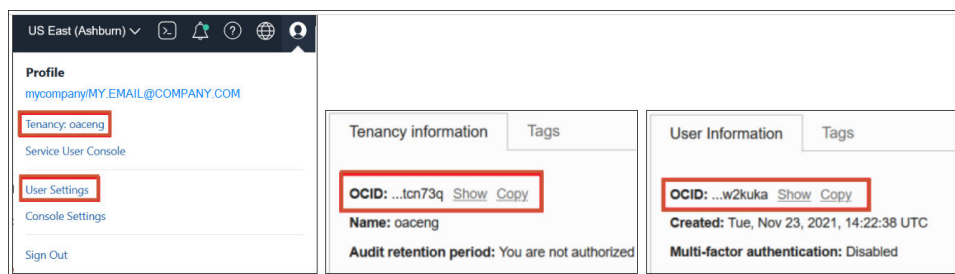
OCI テナントへの接続を作成して、Oracle Analytics を OCI 関数、OCI Vision、OCI Data Science または OCI Language と統合できるようにします。たとえば、OCI にホストされている言語変換関数を登録して、Oracle Analytics データ・フローを使用して英語のテキストをスペイン語またはドイツ語に変換できるようにします。

API キーまたはリソース・プリンシパルを使用して OCI テナントに接続できます。

- API キーを使用すると、BI サービス管理者の権限を持つユーザーとして Oracle Analytics にログインする必要なしに、OCI に接続できます。ただし、接続しようとしているテナントの OCID 詳細を知っている必要があり、OCI に登録する公開 API キーを生成する必要があります。この方法を使用するには、ステップ 1 から開始します。
- リソース・プリンシパルを使用すると、OCI 管理者は、OCI に登録する公開 API キーを生成する必要なしに OCI サービスに対する権限を持つように Oracle Analytics をプロビ

ジョニングできます。ただし、リソース・プリンシパル接続には管理者レベルの権限があるため、このオプションを選択するには、BI サービス管理者の権限を持つユーザーとして Oracle Analytics にログインする必要があります。この方法を使用するには、ステップ 2 から開始します。

- OCI コンソールで、OCI テナンス・プロファイルに移動し、リージョン、テナンス OCID およびユーザー OCID をコピーします。
  - リージョンについては、プロファイルの上部に表示されている地理的リージョンを確認してください。
  - テナンス OCID については、「テナンス」の名前をクリックし、「OCID」をコピーします。
  - ユーザー OCID については、「ユーザー設定」をクリックし、「OCID」をコピーします。



テナンスの OCID とユーザーの OCID を取得する場所を参照してください。

- Oracle Analytics のホーム・ページで、「作成」をクリックし、「接続」をクリックします。
- 「接続タイプを選択してください」ダイアログで、OCI リソースをクリックします。
- 「接続名」には、Oracle Analytics 内でこの接続を識別するためのわかりやすい名前を指定します。
- API キーを使用して接続するには:
  - 「接続情報」では、「API キー」を選択します。
  - 「テナンス OCID」で、ステップ 1 でコピーしたテナンス OCID を貼り付けます。
  - 「デフォルト・リージョン」では、OCI リソースが配置されているリージョンを選択します。
  - 「ユーザー OCID」で、ステップ 1 でコピーしたユーザー OCID を貼り付けます。
  - 公開 API キーでは、「生成」、「コピー」の順にクリックします。
  - OCI テナンスで、API キーを「ユーザー設定」の「API キー」ページに貼り付け、「追加」をクリックします。
- リソース・プリンシパルを使用して接続するには:
  - 「接続情報」では、リソース・プリンシパルを選択します。
  - 「デフォルト・リージョン」では、OCI リソースが配置されているリージョンを選択します。

- 「コンパートメント」では、「選択」をクリックし、接続先の OCI コンパートメントを選択します。
  - 「サービス」では、接続が使用される OCI サービスを選択します。サービスを選択するには、BI サービス管理者の権限を持つユーザーとして Oracle Analytics にログインします。
7. Oracle Analytics の「接続の作成」ダイアログで、「保存」をクリックします。
- API キーを使用して接続している場合は、接続を保存する前に数秒待って、次のエラーを回避します: "Failed to save the connection. Invalid connection parameters specified".

## Oracle Analytics の OCI 関数との統合

Oracle Cloud Infrastructure (OCI)関数を Oracle Analytics と統合し、それらをデータ・フローで使用してデータを変換できるようにします。

- [Oracle Analytics での OCI 関数の使用について](#)
- [Oracle Analytics で使用する OCI 関数の構成について](#)
- [OCI 関数と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー](#)
- [OCI 関数を使用したデータの変換のための一般的なワークフロー](#)
- [OCI テナントへの接続の作成](#)
- [Oracle Analytics での OCI 関数の登録](#)

## Oracle Analytics での OCI 関数の使用について

OCI で作成された関数を使用して Oracle Analytics 内のデータを変換できます。たとえば、言語変換関数を使用して、英語のテキストをスペイン語またはドイツ語に変換できます。

まず、Oracle Analytics で OCI 関数を登録すると、BI サービス管理者または DV コンテンツ作成者権限を持つすべての Oracle Analytics ユーザーがデータ・フローでそれらを使用できるようになります。

## Oracle Analytics で使用する OCI 関数の構成について

OCI コンソールで関数を作成し、それらを使用して、Oracle Analytics データ・フローのデータを変換できるようにします。

### Oracle Analytics での OCI 関数の登録について

OCI 関数を Oracle Analytics に登録する際、「関数の選択」ダイアログでグレー表示されている場合、それが `oac-compatible` タグで構成済みであり、正しい `funcMode` 値で起動されていることを確認してください。

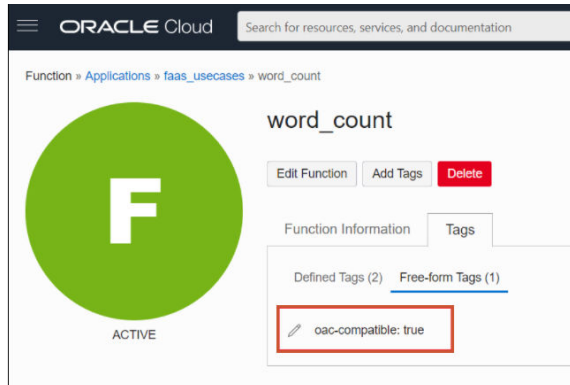


Type	Function	Last Modified
	English_to_Spanish	Mar 11, 2021
	English_to_French	Mar 11, 2021
	English_to_German	Mar 11, 2021

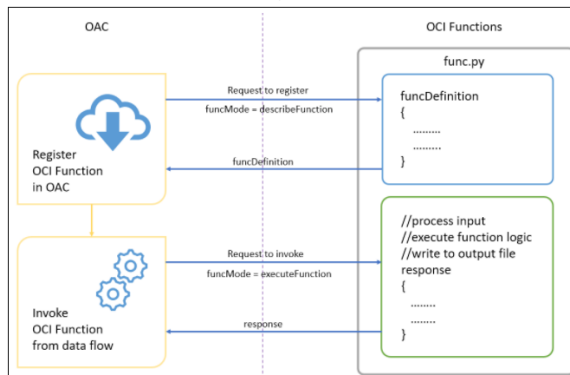
### Oracle Analytics で使用する OCI 関数の構成について

Oracle Analytics で使用する OCI 関数には `oac-compatible` タグがあり、関数コードには `funcMode` 変数を含める必要があります。OCI コンソールでこれらの設定を構成します:

- **oac-compatible** - 名前 `oac-compatible` を使用してフリー・フォーム・タグを関数に追加して、値 `true` に設定します。



- **funcMode** - `funcMode` 変数を関数コードに含めます。Oracle Analytics は、`funcMode=describeFunction` で OCI 関数を登録するリクエスト、および `funcMode=executeFunction` で OCI 関数を起動するリクエストを送信します。`func.py` 内のハンドラ関数は、**describeFunction** モードまたは **executeFunction** モードで操作する必要があります。次に示すリクエストの入力変数 `funcMode` の値に基づいて、これを実行できます。



`python` での語数の例における OCI 関数のリクエストおよびレスポンス形式を次に示します。



### funcMode = describeFunction

```
{ "funcMode": "describeFunction"}
```

リクエストの **funcMode** が 'describeFunction' の場合、関数はステータス (**returnCode** および **errorMessage**)、出力 (出力列の名前、データ型)、パラメータ (入力パラメータの名前、説明、タイプなど)、**bucketName** などを含む関数定義を、次の形式の **JSON** オブジェクトとして返します (語数の例):

```
funcDefinition = {
 "status": {
 "returnCode": 0,
 "errorMessage": ""
 },
 "funcDescription": {
 "outputs": [
 {"name": "word_count", "dataType": "integer"}
],
 "parameters": [
 {"name": "textColumn", "displayName": "Text Column",
 "description": "Choose column to count words", "required":
True,
 "value": {"type": "column"}}
],
 "bucketName": "bucket-OCI-FAAS",
 "isOutputJoinableWithInput": True
 }
}
```

リクエスト内の **funcMode** が 'describeFunction' である場合、次のコードを **func.py** に追加して、**funcDefinition** を返します。

```
def handler(ctx, data: io.BytesIO = None):
 response_data = ""
 try:
 body = json.loads(data.getvalue())
 funcMode = body.get("funcMode")
 if funcMode == 'describeFunction':
 response_data = json.dumps(funcDefinition)
 except (Exception, ValueError) as ex:
 response_data = json.dumps(
 {"error": "{0}".format(str(ex))})
 return response.Response(
 ctx, response_data,
 headers={"Content-Type": "application/json"})
```

**funcMode = executeFunction** - **funcMode** が 'executeFunction' の場合、実際の関数ロジックを実行し、レスポンスを出力とともに **Oracle Analytics** に返信する必要があります。登録されている関数が **Oracle Analytics** のデータフローから起動される場合、リクエスト・オブジェクトは、**args** の列名、**input(bucketName、 fileName、 fileExtension、 fileName、**

method、rowID)および output(bucketName、 fileName、 fileExtension)を含む次のような形式になります。

```
{
 "args":
 {
 "textColumn": "REVIEW"
 },
 "funcMode": "executeFunction",
 "input":
 {
 "bucketName": "bucket-OCI-FAAS",
 "fileExtension": ".csv",
 "fileName": "oac-fn-e99cd4fddb3844be89c7af6ea4bbbeb76-input",
 "method": "csv",
 "rowID": "row_id"
 },
 "output":
 {
 "bucketName": "bucket-OCI-FAAS",
 "fileExtension": ".csv",
 "fileName": "oac-fn-e99cd4fddb3844be89c7af6ea4bbbeb76-output"
 }
}
```

## OCI での関数の作成について

OCI コンソール、コマンド・ライン(Fn Project CLI)または API を使用して、関数を作成できます。たとえば、OCI コンソールで、「**開発者サービス**」、「**ファンクション**」を順にクリックし、画面上の指示に従って、アプリケーションおよび 1 つ以上の関数を作成します。詳細は、[OCI での関数の作成ドキュメント](#)を参照してください。初めて関数を作成している場合、エンド・ツー・エンドの例 [Helloworld 関数の作成、デプロイおよび起動](#)のステップに従ってください。Oracle Analytics で使用するすべての関数には、フリー・フォーム・タグ oac-compatible=true を含める必要があります(前述の [Oracle Analytics で使用する OCI 関数の構成について](#)を参照)。

## OCI コンソールでの関数の作成のヒント

- **ログの有効化** - デフォルトでは、関数のログは無効化されています。関数のログを有効にするには、「**アプリケーション**」ページで、「**ログ**」をクリックし、「**ログ名**」に提供されているログを有効にします。「**リソース**」で、「**ログの探索**」を選択し、ログ・エントリにドリルして、関数の問題をデバック、診断できます。
- **依存関係を含める** - 関数の requirements.txt ファイル内の依存パッケージを含めます。
- **インデント・ルールに従う** - Python 関数をコーディングする際に、Python のインデント・ルールに従います。
- **関数レスポンス・エラーの使用** - データフロー・ページにリストされているエラー詳細を使用して、問題を診断します。
- **関数を先にローカルでテスト** - OCI で関数を作成する前に、開発環境において関数をローカルでテストし、関数が構文的かつ論理的に正しいことを確認してください。

- **OCI での関数のテスト** - 関数を Oracle Analytics と統合する前に、それらを OCI 内の標準関数として正常にデプロイおよび起動できることを確認してください。
- **タイムアウトの増加**- デフォルトでは、関数のタイムアウト値は 30 秒です。必要に応じて、OCI コンソールの「ファンクションの編集」ページでタイムアウト設定を増加します (たとえば、300 秒に変更します)。
- **メモリーの増加**- デフォルトでは、関数のメモリー制限は 1024MB です。必要に応じて、OCI コンソールの「ファンクションの編集」ページでメモリー制限を増加します。
- **領域の最適化** - 未使用のファイルは、使用後にただちに削除してください。
- **ネットワーク・レイテンシに注意** - ネットワーク・レイテンシにより処理全体でわずかな遅延が発生する可能性があることに注意してください。

## OCI 関数と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー

Oracle Analytics を OCI 関数と統合するには、必要なセキュリティ・ポリシーがあることを確認します。

Oracle Analytics Cloud と OCI テナンス間の接続で指定する OCI ユーザーには、使用する OCI リソースを含むコンパートメントに対する読取り、書込みおよび削除権限が必要です。OCI ユーザーが次の最小限の OCI セキュリティ・ポリシーを持つユーザー・グループに属していることを確認してください。OCI テナンスに Oracle Analytics から接続する場合は、OCI API キーまたはリソース・プリンシパルを使用できます。

**ノート:** リソース・プリンシパルの場合、コンパートメント下のすべての分析インスタンスを含めるには、`{request.principal.id='<analytics_instance_ocid>'}`のかわりに `{request.principal.type='analyticsinstance', request.principal.compartment.id='<compartmentA_ocid>'}`を指定します。

表 31-1 OCI 関数統合に必要なセキュリティ・ポリシー

API キー・ポリシー	リソース・プリンシパル・ポリシー
Allow group <group_name> to use functions-family in compartment <compartment_name>	Allow any-user to use functions-family in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_ocid>'}
Allow group <group_name> to read buckets in compartment <compartment_name>	Allow any-user to read buckets in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_ocid>'}
Allow group <group_name> to manage objects in compartment <compartment_name> where target.bucket.name='<staging_bucket_name>'	Allow any-user to manage objects in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_ocid>', target.bucket.name='<staging_bucket_name>'}

表 31-1 (続き) OCI 関数統合に必要なセキュリティ・ポリシー

API キー・ポリシー	リソース・プリンシパル・ポリシー
Allow group <group_name> to read objectstorage-namespaces in tenancy	Allow any-user to read objectstorage-namespaces in tenancy where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>'}</td>

表 31-2 OCI 関数 - 動的グループ・ポリシー

ポリシー	説明
Allow dynamic-group <dynamic_group> to manage objects in compartment <compartment_name> where target.bucket.name='<staging_bucket_name>'	動的グループのステージング・バケットへのアクセスを提供します。

<dynamic\_group>.{resource.type = 'fnfunc', resource.compartment.id = '<compartment\_oci>'}のサンプル一致ルール

**ノート:** <compartment\_id>は、関数を含むコンパートメントの OCID です。

## OCI 関数を使用したデータの変換のための一般的なワークフロー

次にリストされた順序でこれらの高レベルのタスクに従い、OCI 関数を使用してデータを変換します。

タスク	説明	詳細情報
OCI での関数の作成(関数の開発者権限が必要)	OCI テナンスで関数を作成し、それらが、Oracle Analytics で使用するために指定された前提条件に準拠していることを確認してください。	<a href="#">Oracle Analytics で使用する OCI 関数の構成について</a>
OCI ポリシーの割当て	API キーまたはリソース・プリンシパルを使用して接続するために必要な OCI ポリシーがあることを確認します。	<a href="#">OCI 関数と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー</a>
OCI テナンスへの Oracle Analytics の接続(管理者または DV 作成者権限が必要)	Oracle Analytics で、OCI テナンスへの接続を作成します。	<a href="#">OCI テナンスへの接続の作成</a>
Oracle Analytics での OCI 関数の登録(管理者または DV 作成者権限が必要)	Oracle Analytics で、OCI 関数をデータ・フローから呼び出せるように登録します。	<a href="#">Oracle Analytics での OCI 関数の登録</a>

タスク	説明	詳細情報
OCI 関数を使用したデータの変換(管理者または DV 作成者権限が必要)	データ・フローを作成し、「 <b>カスタム・スクリプトの適用</b> 」ステップを使用して、OCI 関数を起動します。	<a href="#">OCI 関数を使用したデータの変換</a>

## Oracle Analytics での OCI 関数の登録

OCI 関数を Oracle Analytics に登録し、それらをデータ・フローで使用してデータを変換できるようにします。たとえば、言語変換関数を登録して、データ・アナリストが英語のテキストをスペイン語またはドイツ語に変換できるようにします。

1. Oracle Analytics のホーム・ページで、「**ページ・メニュー**」、「**モデル/関数の登録**」、「**OCI 関数**」の順にクリックします。
2. 「カスタム関数の登録」ダイアログで、関数がある OCI テナンスへの接続を選択します。
3. 「アプリケーションの選択」ダイアログで、OCI 関数を含むアプリケーションを選択します。

不明な場合、OCI で関数を作成した個人に問い合せてください。

4. 「関数の選択」ダイアログで、関数を選択し、「**登録**」をクリックします。

使用する関数がグレー表示されている場合、それが Oracle Analytics 用に構成されていることを管理者に確認してください。[Oracle Analytics で使用する OCI 関数の構成について](#)を参照してください。

データ・フロー内の登録された OCI 関数を使用して、データを変換できます。どの関数が登録されているかを確認するには、機械学習ページ(ホーム・ページから「**ナビゲータ**」、「**機械学習**」、「**スクリプト**」の順にクリック)の「スクリプト」タブで登録済関数を表示できます。

## Oracle Analytics の OCI Data Science との統合

Oracle Analytics を Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Data Science と統合して、データ・サイエンティストの専門知識を必要とせずに機械学習と人工知能を実行します。たとえば、医療データの場合、予測モデルを使用してリスク要因を特定し、退院後の患者の再入院リスクを予測できます。

### トピック:

- [OCI Data Science モデルを Oracle Analytics と統合するための前提条件](#)
- [OCI Data Science と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー](#)
- [OCI Data Science モデルを Oracle Analytics と統合するための前提条件](#)

## OCI Data Science モデルを Oracle Analytics と統合するための前提条件

OCI Data Science を Oracle Analytics と統合するには、これらの前提条件が必要です。

- **Oracle Analytics インスタンスと OCI サービス間の接続を作成します - OCI テナンスへの接続の作成**を参照してください。
- **OCI で、機械学習モデルを OCI Data Science モデル・カタログに保存します。**これらのモデルは、Oracle Accelerated Data Science Software Development Kit 2.6.1 以上を使用して作成および保存し、Oracle Analytics と互換性を持たせる必要があります。

## OCI Data Science と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー

Oracle Analytics を OCI Data Science と統合するには、必要なセキュリティ・ポリシーがあることを確認します。

Oracle Analytics Cloud と OCI テナンス間の接続で指定する OCI ユーザーには、使用する OCI リソースを含むコンパートメントに対する読取り、書込みおよび削除権限が必要です。OCI ユーザーが次の最小限の OCI セキュリティ・ポリシーを持つユーザー・グループに属していることを確認してください OCI テナンスに Oracle Analytics から接続する場合は、OCI API キーまたはリソース・プリンシパルを使用できます。

**ノート:** リソース・プリンシパルの場合、コンパートメント下のすべての分析インスタンスを含めるには、`{request.principal.id='<analytics_instance_ociid>'}`のかわりに`{request.principal.type='analyticsinstance', request.principal.compartment.id='<compartmentA_ociid>'}`を指定します。

表 31-3 OCI Data Science 統合に必要なセキュリティ・ポリシー

API キー・ポリシー	リソース・プリンシパル・ポリシー
Allow group <group_name> to read data-science-projects in compartment <compartment_name>	Allow any-user to read data-science-projects in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_ociid>'}
Allow group <group_name> to read data-science-models in compartment <compartment_name>	Allow any-user to read data-science-models in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_ociid>'}
Allow group <group_name> to manage data-science-jobs in compartment <compartment_name>	Allow any-user to manage data-science-jobs in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_ociid>'}

表 31-3 (続き) OCI Data Science 統合に必要なセキュリティ・ポリシー

API キー・ポリシー	リソース・プリンシパル・ポリシー
Allow group <group_name> to inspect instance-family in compartment <compartment_name>	Allow any-user to inspect instance-family in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>'} }
Allow group <group_name> to manage data-science-job-runs in compartment <compartment_name>	Allow any-user to manage data-science-job-runs in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>'} }
Allow group <group_name> to inspect virtual-network-family in compartment <compartment_name>	Allow any-user to inspect virtual-network-family in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>'} }
Allow service datascience to use virtual-network-family in compartment <compartment_name>	Allow service datascience to use virtual-network-family in compartment <compartment_name>
Allow group <group_name> to manage log-groups in compartment <compartment_name>	Allow any-user to manage log-groups in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>'} }
Allow group <group_name> to read buckets in compartment <compartment_name>	Allow any-user to read buckets in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>'} }
Allow group <group_name> to manage objects in compartment <compartment_name> where target.bucket.name='<staging_bucket_name>'	Allow any-user to manage objects in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>', target.bucket.name='<staging_bucket_name>'} }
Allow group <group_name> to read objectstorage-namespaces in compartment <compartment_name>	Allow any-user to read objectstorage-namespaces in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>'} }

表 31-4 OCI Data Science - 動的グループ・ポリシー

ポリシー	説明
Allow dynamic-group <dynamic_group> to read data-science-models in compartment <compartment_name>	データ・サイエンス・ジョブ実行へのデータ・サイエンス・モデル・アクセスを提供します。
Allow dynamic-group <dynamic_group> to manage objects in compartment <compartment_name> where target.bucket.name='<staging_bucket_name>'	データ・サイエンス・ジョブ実行へのオブジェクト・ストレージ・アクセスを提供します。
Allow dynamic-group <dynamic_group> to use log-content in compartment <compartment_name>	データ・サイエンス・ジョブ実行へのログ・アクセスを提供します。

**ノート:** <dynamic\_group>を指定する際は、次の書式で一致ルールを使用します:

```
all { resource.type='datasciencejobrun',
resource.compartment.id='<compartment_id>' }
```

ここで、<compartment\_id>は、Data Science モデルを含むコンパートメントの OCID です。

## Oracle Analytics で OCI Data Science モデルを使用可能にする方法

Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Data Science モデルを使用してデータを分析する前に、Oracle Analytics に登録します。

Oracle Analytics に OCI Data Science モデルを登録すると、機械学習(ML)の専門知識を必要とせずに、アプリケーションに ML を構築できます。

開始する前に、Oracle Analytics インスタンスと OCI サービス間の接続を作成します。[OCI テナンスへの接続の作成](#)を参照してください。

また、BI サービス管理者または DV コンテンツ作成者ロールを持つユーザーとして Oracle Analytics にログインしていることを確認してください。

1. ホーム・ページで、「**ページ・メニュー**」、「**モデル/関数の登録**」、「**マシン学習モデル**」の順にクリックします。

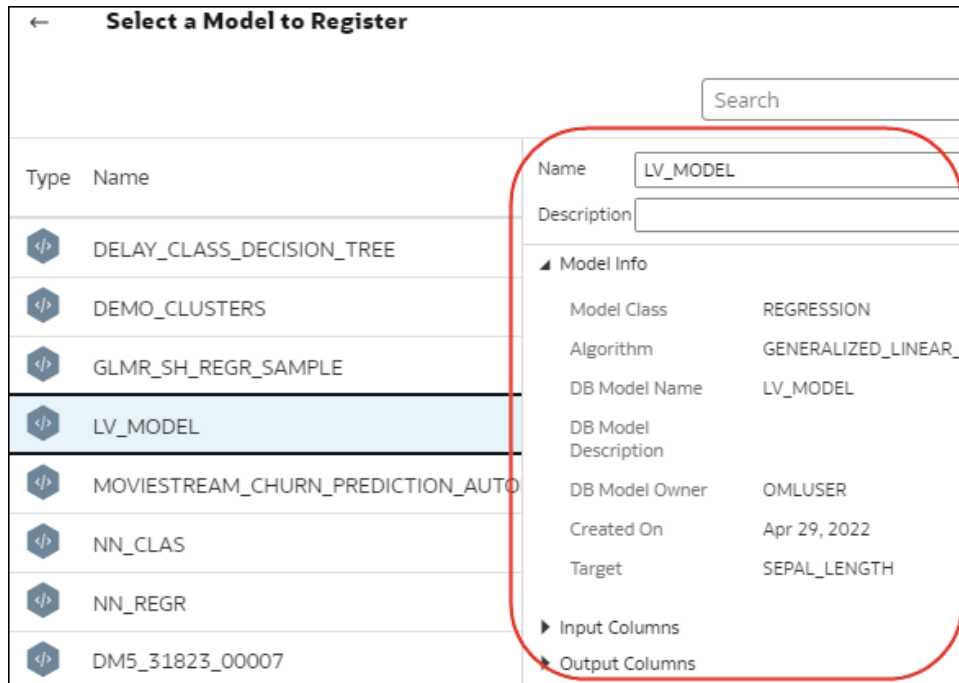
このオプションを使用できるのは、BI サービス管理者または DV コンテンツ作成者のロールを持つユーザーです。

2. 「ML モデルの登録」ダイアログで、OCI テナンスへの接続を選択します。
3. 「プロジェクトの選択」ページで、「**選択**」をクリックします。

4. 「コンパートメントの検索」で、格納されているモデルに移動し、モデル名をクリックします。

モデルを選択すると、右側のパネルで、名前、説明、アルゴリズム、および入力列と出力列などの詳細をレビューできます。





5. 「次」をクリックして、リソース・パラメータの入力ダイアログを表示し、モデルを構成します:

- **ステージング・バケット・コンパートメント** - ステージング・バケットのコンパートメント名。「選択」をクリックして、ステージング・バケットのコンパートメントに移動して選択します。

**ステージング・バケット** - データ転送にはステージング・バケット名が必要です。

**コンピュータ・シェイプ** - コンピュータ・シェイプは、Data Science ジョブの作成に必要な仮想マシン構成です。

**OCPU** - コンピュータ・シェイプがフレックス・シェイプである場合にのみ必要です。

**メモリー(GB)** - コンピュータ・シェイプがフレックス・シェイプである場合にのみ必要です。

**ストレージ(GB)** - Data Science ジョブに必要なブロック・ストレージのサイズ。

**デフォルト・ネットワークの使用** - ネットワーク構成を構成するオプション。デフォルト・ネットワークを使用するかわからない場合は、Oracle Analytics の管理者に問い合わせてください。

- このオプションは、デフォルト・ネットワークを使用する場合に選択しますが、これにより、パブリック・インターネットへのデフォルト・エグレスが可能になります。デフォルト・ネットワーク・オプションでは、ネットワークの作成と、サブネットおよびゲートウェイの設定をスキップできます。デフォルト・ネットワーク構成を使用する場合は、指定されたデフォルト・ネットワークに、別の目的でアクセスすることや変更することはできません。
- サブネットおよびネットワーク・アドレス変換(NAT)ゲートウェイを構成する場合は、このオプションの選択を解除します。パブリック・インターネットへのエグレス・アクセスの場合、OCI では、NAT ゲートウェイへのルートがあるプライベート・サブネットを推奨しています。NAT ゲートウェイでは、プライベート・サブネット内のインスタスが、インターネットにアクセスできます。このステ

ップで作成した仮想クラウド・ネットワーク(VCN)により、VCN の NAT ゲートウェイ経由でインターネットへのエグレス・アクセスが可能なプライベート・サブネットが作成されます。

**VCN コンパートメント** - 使用する VCN を含むコンパートメントの名前。「**デフォルト・ネットワークの使用**」の選択が解除されている場合にのみ必要です。

**VCN** - 既存の VCN の名前。「**デフォルト・ネットワークの使用**」の選択が解除されている場合にのみ必要です。

**サブネット・コンパートメント** - 使用するサブネットを含むコンパートメントの名前。「**デフォルト・ネットワークの使用**」の選択が解除されている場合にのみ必要です。

**サブネット** - 既存のサブネットの名前。「**デフォルト・ネットワークの使用**」の選択が解除されている場合にのみ必要です。

**ロギングの有効化** - OCI Data Science でのロギングを有効にするオプション。

**ログ・グループ・コンパートメント** - Data Science ログが格納されるログ・グループを含むコンパートメントの名前。ロギングが有効な場合にのみ必要です。

**ログ・グループ** - ログを格納する既存のログ・グループの名前。ロギングが有効な場合にのみ必要です。

6. 「登録」をクリックします。
7. オプション: モデルが正常に登録されたことを確認するには、ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「モデル」、「機械学習」の順にクリックして、登録されたモデルを表示し、モデルが正常に登録されたことを確認します。「検査」をクリックして、モデルが正しく構成されていることを確認します。

## Oracle Analytics と OCI Document Understanding の統合

Oracle Analytics を Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Document Understanding と統合すると、機械学習や人工知能の専門知識がなくても、ドキュメント分類およびキー値抽出を実行できます。たとえば、ドキュメント内のパスポート番号を識別できます。

### トピック:

- [Oracle Analytics と OCI Document Understanding を統合するための一般的なワークフロー](#)
- [OCI Document Understanding を Oracle Analytics と統合するために必要なポリシー](#)
- [Oracle Analytics での OCI Document Understanding モデルの有効化](#)

## Oracle Analytics と OCI Document Understanding を統合するための一般的なワークフロー

これらのタスクを実行して、Oracle Analytics と OCI Document Understanding を統合します。

この統合を完了した後、アナリストはデータ・フローを使用して、ドキュメント分類およびキー値抽出を実行できます。[ドキュメント分類およびキー値抽出の実行](#)を参照してください。

タスク	説明	詳細情報
前提条件の確認	Oracle Analytics から OCI テナンスに接続しているユーザーに、必須のセキュリティ・ポリシーがあることを確認します。	<a href="#">OCI Document Understanding を Oracle Analytics と統合するために必要なポリシー</a>
OCI Document Understanding への接続	OCI テナンスへの再利用可能な接続を作成します。	<a href="#">OCI テナンスへの接続の作成</a>
Oracle Analytics でモデルを使用可能にする方法	OCI Document Understanding モデルを Oracle Analytics に登録し、データ・フローで使用できるようにします。	<a href="#">Oracle Analytics での OCI Document Understanding モデルの有効化</a>

## OCI Document Understanding を Oracle Analytics と統合するために必要なポリシー

Oracle Analytics を OCI Document Understanding と統合するには、必要なセキュリティ・ポリシーがあることを確認します。

Oracle Analytics Cloud と OCI テナンス間の接続で指定する OCI ユーザーには、使用する OCI リソースを含むコンパートメントに対する読取り、書込みおよび削除権限が必要です。OCI ユーザーが次の最小限の OCI セキュリティ・ポリシーを持つユーザー・グループに属していることを確認してください。OCI テナンスに Oracle Analytics から接続する場合は、OCI API キーまたはリソース・プリンシパルを使用できます。

**ノート:** リソース・プリンシパルの場合、コンパートメント下のすべての分析インスタンスを含めるには、`{request.principal.id='<analytics_instance_ocid>'}`のかわりに `{request.principal.type='analyticsinstance', request.principal.compartment.id='<compartmentA_ocid>'}`を指定します。

**表 31-5 OCI Document Understanding の統合に必要なセキュリティ・ポリシー**

API キー・ポリシー	リソース・プリンシパル・ポリシー
Allow group <group_name> to manage ai-service-document-family in tenancy	Allow any-user to manage ai-service-document-family in tenancy where all <code>{request.principal.id='&lt;analytics_instance_ocid&gt;'}</code>
Allow group <group_name> to read buckets in compartment <compartment_name>	Allow any-user to read buckets in compartment <compartment_name> where all <code>{request.principal.id='&lt;analytics_instance_ocid&gt;'}</code>

表 31-5 (続き) OCI Document Understanding の統合に必要なセキュリティ・ポリシー

API キー・ポリシー	リソース・プリンシパル・ポリシー
Allow group <group_name> to manage objects in compartment <compartment_name> where target.bucket.name='<staging_bucket_name>'	Allow any-user to manage objects in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>', target.bucket.name='<staging_bucket_name>'}
Allow group <group_name> to read objects in compartment <compartment_name> where target.bucket.name='<document_bucket_name>'	Allow any-user to read objects in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>', target.bucket.name='<document_bucket_name>'}
Allow group <group_name> to read objectstorage-namespaces in tenancy	Allow any-user to read objectstorage-namespaces in tenancy where all {request.principal.id='<analytics_instance_oci>'}


## Oracle Analytics での OCI Document Understanding モデルの有効化

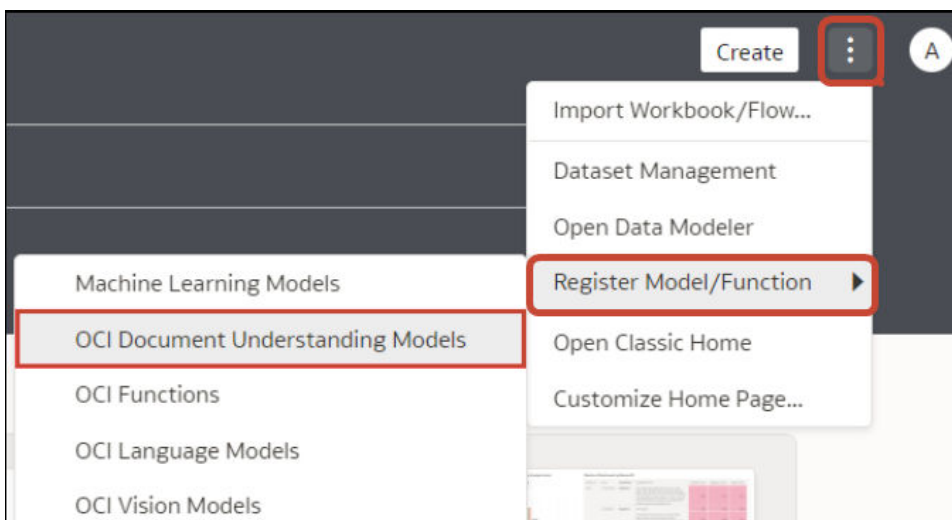
データ・フローを使用してドキュメント分類およびキー値抽出を実行できるように、OCI Document Understanding モデルを Oracle Analytics で使用可能にします。

- OCI オブジェクト・ストレージで、適切な名前(たとえば、MyDocumentsModelStagingBucket)を使用して、コンパートメントにバケットを作成します。

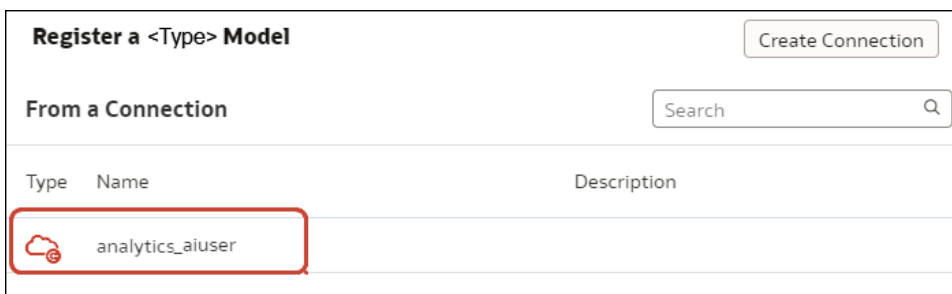
このステージング・バケットは:

- アクセス可能なコンパートメントに作成する必要があります。
- モデルを登録する前に作成する必要があります。
- プライベート可視性を設定できます。
- 複数のモデルに使用できます。
- 「検査」画面で変更できます。

- Oracle Analytics ホーム・ページで、「ページ・メニュー」 をクリックし、「モデル関数の登録」、「OCI Document Understanding モデル」の順に選択します。

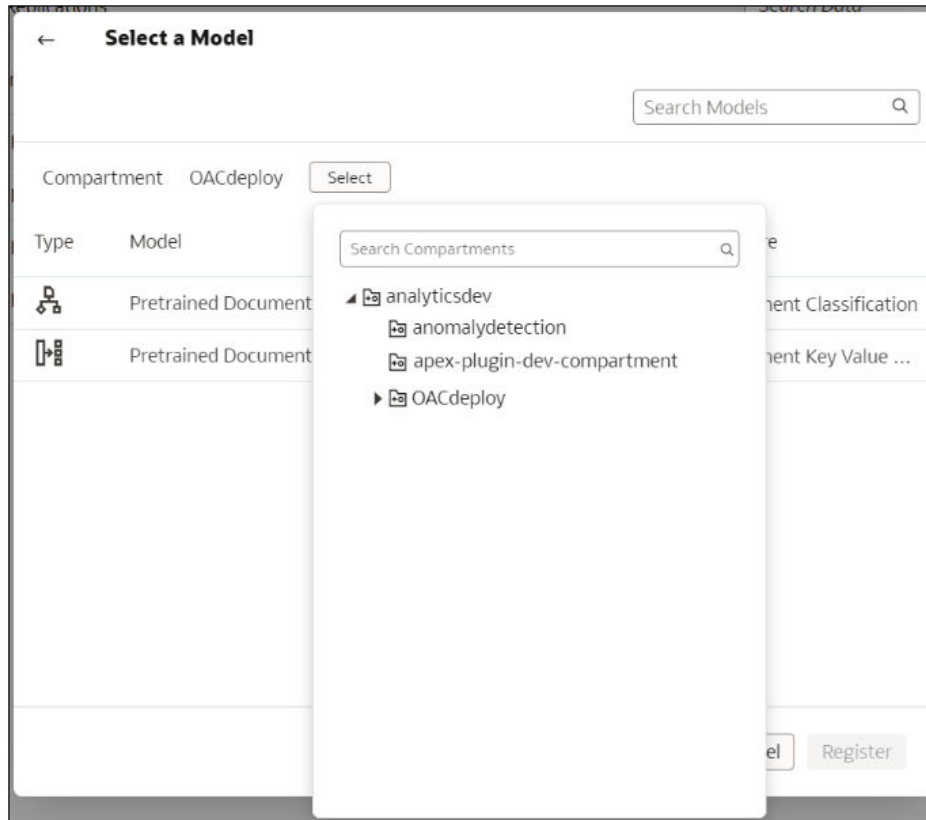


3. モデルの登録ダイアログで、「**接続から**」の下にある、[OCI テナンスへの接続の作成](#)で作成した接続をクリックします。



Oracle Analytics では、デフォルト・コンパートメント内の使用可能なモデルのリストが表示されます。

モデルを別のコンパートメントに登録するには、コンパートメント名の隣の「**選択**」をクリックして、別のコンパートメントを選択します。



4. 使用するモデルを選択します。  
ドキュメントを識別するドキュメント分類モデルを選択します。

← **Select a Model**

Search Models

Compartment OACdeploy

Type	Model	Project
	Pretrained Document Classification	None
	Pretrained Document Key Value E...	None

Model Name: Pretrained Document Classificatio

Description:

Staging Bucket Compartment: OACdeploy

Staging Bucket: document\_ai\_testing

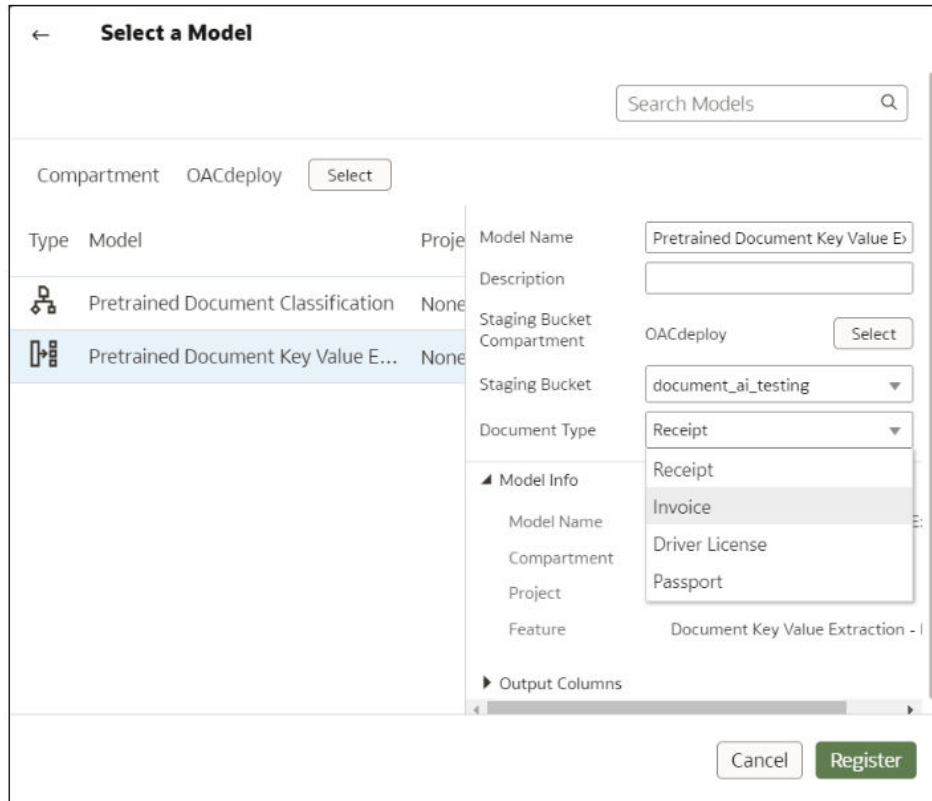
Model Info

- Model Name: Pretrained Document Classificatio
- Compartment: OACdeploy
- Project: None (Pretrained)
- Feature: Document Classification

Output Columns

- Page No: String


ドキュメントから情報を抽出するためのキー値抽出モデルを選択し、「ドキュメント・タイプ」リストから「領収書」、「請求書」、「運転免許」または「パスポート」を選択します。



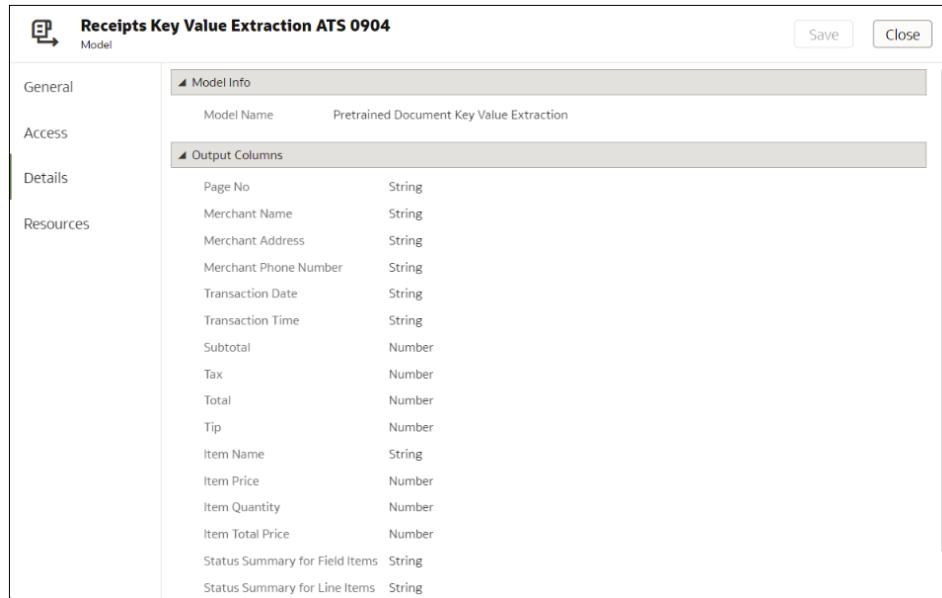
5. 「モデル名」で、Oracle Analytics 内のモデルを識別するための名前を指定します。
6. 「ステージング・バケット・コンパートメント」で、ステージング・バケットの場所を選択します。
7. 「ステージング・バケット名」で、ステップ 1 で指定したバケット(例: MyDocumentsModelStagingBucket)を選択します。
8. 「登録」をクリックします。

登録されているモデルを確認するには、Oracle Analytics ホーム・ページから、「機械学習」、「モデル」の順に移動します。

Type	Name	Connection	Owner	Modified
☺	Language Pretrained Sentiment Analysis	OCI Resource	Admin	15 Sep 2023
☺	Pretrained Sentiment Analysis	OCI Resource	Admin	15 Sep 2023
☺	AI Language Pretrained Sentiment Analysis	OCI Resource	Admin	15 Sep 2023
🔍	AIVISION Pretrained Object Detection	OCI Resource	Admin	15 Sep 2023
🔍	Pretrained Document Classification MB	OCI Resource	Admin	13 Sep 2023
🔍	Receipts Key Value Extraction ATS 0904	OCI Resource	Admin	4 Sep 2023

モデルにカーソルを合せ、をクリックしてから「検査」をクリックしモデルを確認します。たとえば、「詳細」をクリックし、そのモデル・タイプに生成されている出力列を確認します。





## Oracle Analytics の OCI Language との統合

Oracle Analytics を Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Language と統合して、データ・サイエンティストの専門知識を必要とせずに機械学習と人工知能を実行します。たとえば、顧客データの場合、センチメント分析を実行して、顧客がフィードバック・ポータルに入力したレビューを分析できます。

### トピック:

- [OCI Language モデルを Oracle Analytics と統合するための前提条件](#)
- [OCI Language と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー](#)
- [Oracle Analytics で OCI Language モデルを使用可能にする方法](#)

## OCI Language モデルを Oracle Analytics と統合するための前提条件

OCI Language を Oracle Analytics と統合するには、これらの前提条件が必要です。

- [Oracle Analytics インスタンスと OCI サービス間の接続を作成します - OCI テナンスへの接続の作成](#)を参照してください。

## OCI Language と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー

Oracle Analytics を OCI Language と統合するには、必要なセキュリティ・ポリシーがあることを確認します。

Oracle Analytics Cloud と OCI テナンス間の接続で指定する OCI ユーザーには、使用する OCI リソースを含むコンパートメントに対する読取り、書込みおよび削除権限が必要です。OCI ユーザーが次の最小限の OCI セキュリティ・ポリシーを持つユーザー・グループに属し

ていることを確認してください OCI テナンスに Oracle Analytics から接続する場合は、OCI API キーまたはリソース・プリンシパルを使用できます。

**ノート:** リソース・プリンシパルの場合、コンパートメント下のすべての分析インスタンスを含めるには、`{request.principal.id='<analytics_instance_ocid>'}`のかわりに`{request.principal.type='analyticsinstance', request.principal.compartment.id='<compartmentA_ocid>'}`を指定します。

**表 31-6 OCI Language 統合に必要なセキュリティ・ポリシー**

API キー・ポリシー	リソース・プリンシパル・ポリシー
Allow group <group_name> to use ai-service-language-family in tenancy	Allow any-user to use ai-service-language-family in tenancy where all {request.principal.id='<analytics_instance_ocid>'}
Allow group <group_name> to read buckets in compartment <compartment_name>	Allow any-user to read buckets in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_ocid>'}
Allow group <group_name> to manage objects in compartment <compartment_name> where target.bucket.name='<staging_bucket_name>'	Allow any-user to manage objects in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_ocid>', target.bucket.name='<staging_bucket_name>'}
Allow group <group_name> to read objectstorage-namespaces in tenancy	Allow any-user to read objectstorage-namespaces in tenancy where all {request.principal.id='<analytics_instance_ocid>'}

## Oracle Analytics で OCI Language モデルを使用可能にする方法

Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Language モデルを使用してデータを分析する前に、Oracle Analytics に登録します。

Oracle Analytics に OCI Language モデル登録すると、人工知能(AI)の専門知識を必要とせずに、アプリケーションにキー・フレーズ抽出、センチメント分析、分類、名前付きエンティティ 認識および言語認識を構築できます。

Oracle Analytics は次のモデルをサポートします:

- キー・フレーズの抽出
- 言語の検出
- 名前エンティティの認識
- センチメント分析

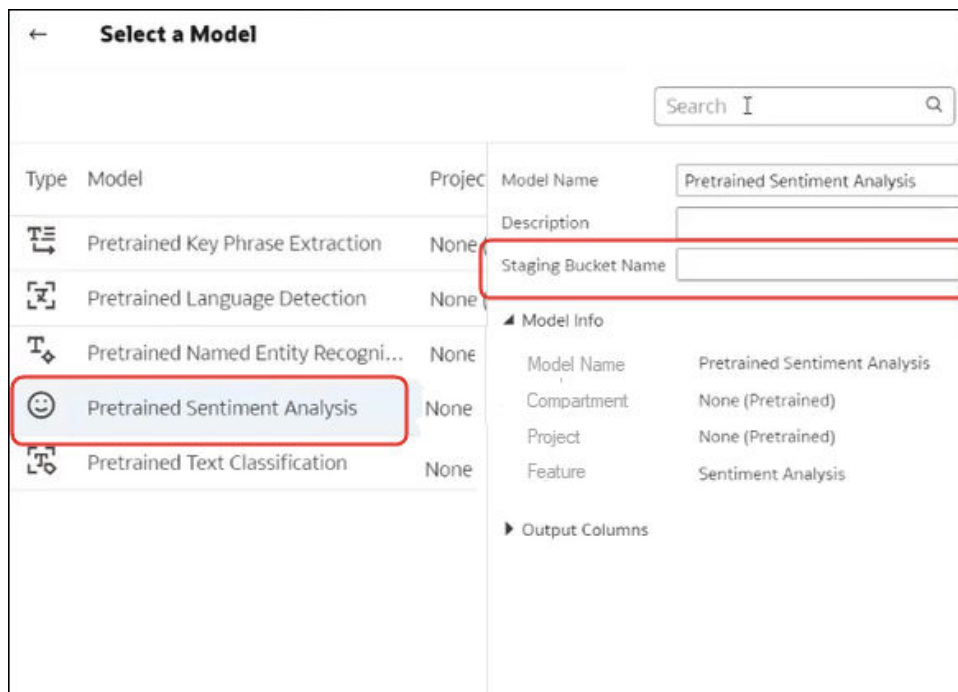
- テキスト分類

**ノート:** Oracle Analytics は、OCI AI Language で作成されたカスタム・モデルをサポートしません。

開始する前に、Oracle Analytics インスタンスと OCI サービス間の接続を作成します。「[OCI テナントへの接続の作成](#)」を参照してください。

また、BI サービス管理者または DV コンテンツ作成者ロールを持つユーザーとして Oracle Analytics にログインしていることを確認してください。

1. ホーム・ページで、「**ページ・メニュー**」、「**モデル/関数の登録**」、**OCI Language モデル**の順にクリックします。
2. Language モデルの登録ダイアログで、OCI テナントへの接続の名前をクリックします。
3. 「モデルの選択」ダイアログで、Oracle Analytics で使用可能にするモデルを選択します。
4. ポップアップ・パネルで、「**ステージング・バケット名**」フィールドを使用して、モデルのステージング・バケットの名前を指定します。



5. 「登録」をクリックします。
6. オプション: モデルが正常に登録されたことを確認するには、ホーム・ページで「**ナビゲータ**」をクリックし、「**モデル**」、「**機械学習**」の順にクリックして、登録されたモデルを表示し、モデルが正常に登録されたことを確認します。「**検査**」をクリックして、モデルが正しく構成されていることを確認します。

## Oracle Analytics の OCI Vision との統合

Oracle Analytics を Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Vision と統合すると、機械学習や人工知能の専門知識がなくても、オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出を実行できます。たとえば、写真に写っている車を識別できます。

### トピック:

- [Oracle Analytics と Vision の統合の概要](#)
- [OCI Vision と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー](#)
- [Oracle Analytics と Vision を統合するための一般的なワークフロー](#)
- [OCI テナントへの接続の作成](#)
- [Vision モデルを使用した分析用のイメージの準備](#)
- [Oracle Analytics で Vision モデルを使用可能にする方法](#)

## Oracle Analytics と Vision の統合の概要

Vision は、Oracle Cloud Infrastructure が提供する複数の人工知能(AI)サービスの 1 つです。データ・サイエンスの専門知識がなくても、機械学習や人工知能を適用することができます。

Label	Confidence
Bus	98.87%
Car	98.21%
Car	97.84%
Person	97.06%
Car	91.60%
Person	81.21%

Oracle Analytics Cloud を Vision と統合すると、Oracle Analytics Cloud 内のオブジェクトの検出、イメージの分類およびテキストの検出が可能になります。この AI 分析は、Oracle Analytics Cloud のデータ・フローから Vision サービスを呼び出して実行します。

Vision には、事前トレーニング済モデルとカスタム・トレーニング済モデルがあります。

### 事前トレーニング済モデル

事前トレーニング済モデルにより、ユーザーは汎用データセットに対してイメージ分析タスクを実行できます。

- **オブジェクト検出**は、画像や動画内の現実のオブジェクトや特定のパターンのインスタンスを検出します(たとえば、猫、犬、自転車、航空機など)。

- **イメージ分類**は、固定カテゴリ・セットを使用してイメージにラベルを割り当てます。
- **テキスト検出**は、印刷または手書きのテキストをデジタル形式に変換します。

### カスタム・トレーニング済モデル

カスタム・トレーニング済モデルは、特定の目的のために画像およびパターンを検出するように修正および微調整されます。たとえば、事前トレーニング済モデルは電気回路を識別できますが、カスタム・トレーニング済モデルは、電気回路を構成する電気部品(レジスタ、LED、ダイオード、コンデンサなど)を識別するように設計できます。

## OCI Vision と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー

Oracle Analytics を OCI Vision と統合するには、必要なセキュリティ・ポリシーがあることを確認します。

Oracle Analytics Cloud と OCI テナント間の接続で指定する OCI ユーザーには、使用する OCI リソースを含むコンパートメントに対する読取り、書込みおよび削除権限が必要です。OCI ユーザーが次の最小限の OCI セキュリティ・ポリシーを持つユーザー・グループに属していることを確認してください。OCI テナントに Oracle Analytics から接続する場合は、OCI API キーまたはリソース・プリンシパルを使用できます。

**ノート:** リソース・プリンシパルの場合、コンパートメント下のすべての分析インスタンスを含めるには、`{request.principal.id='<analytics_instance_oci>'}`のかわりに `{request.principal.type='analyticsinstance', request.principal.compartment.id='<compartmentA_oci>'}`を指定します。

表 31-7 OCI Vision 統合に必要なセキュリティ・ポリシー

API キー・ポリシー	リソース・プリンシパル・ポリシー
Allow group <group_name> to manage ai-service-vision-family in tenancy	Allow any-user to manage ai-service-vision-family in tenancy where all <code>{request.principal.id='&lt;analytics_instance_oci&gt;'}</code>
Allow group <group_name> to read buckets in compartment <compartment_name>	Allow any-user to read buckets in compartment <compartment_name> where all <code>{request.principal.id='&lt;analytics_instance_oci&gt;'}</code>
Allow group <group_name> to manage objects in compartment <compartment_name> where <code>target.bucket.name='&lt;staging_bucket_name&gt;'</code>	Allow any-user to manage objects in compartment <compartment_name> where all <code>{request.principal.id='&lt;analytics_instance_oci&gt;', target.bucket.name='&lt;staging_bucket_name&gt;'}</code>

表 31-7 (続き) OCI Vision 統合に必要なセキュリティ・ポリシー

API キー・ポリシー	リソース・プリンシパル・ポリシー
Allow group <group_name> to read objects in compartment <compartment_name> where target.bucket.name='<images_bucket_name>'	Allow any-user to read objects in compartment <compartment_name> where all {request.principal.id='<analytics_instance_ocid>', target.bucket.name='<images_bucket_name>'}
Allow group <group_name> to read objectstorage-namespaces in tenancy	Allow any-user to read objectstorage-namespaces in tenancy where all {request.principal.id='<analytics_instance_ocid>'}

## Oracle Analytics と Vision を統合するための一般的なワークフロー

Oracle Analytics と Vision を統合し、オブジェクトの検出、イメージの分類またはテキストの検出を実行するには、次のタスクを実行する必要があります。

タスク	説明	詳細情報
前提条件の確認	Oracle Analytics から OCI テナンスに接続しているユーザーに、必須のセキュリティ・ポリシーがあることを確認します。	<a href="#">OCI Vision と Oracle Analytics の統合に必要なポリシー</a>
OCI Vision への接続	Vision サービスへの再利用可能な接続を作成します。	<a href="#">OCI テナンスへの接続の作成</a>
分析するイメージの準備	分析するソース・イメージのデータセットを作成し、Oracle Analytics にアップロードします。	<a href="#">Vision モデルを使用した分析用のイメージの準備</a>
Oracle Analytics でモデルを使用可能にする方法	Oracle Analytics に Vision モデルを登録して、データ・フローで使用できるようにします。	<a href="#">Oracle Analytics で Vision モデルを使用可能にする方法</a>
イメージの処理	データ・フローを使用して、オブジェクト検出、イメージ分類またはテキスト検出を実行します。	<a href="#">オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析の実行</a>
結果の分析	データ・フローによって生成されたデータセットを使用して、結果を分析します。	<a href="#">オブジェクト検出、イメージ分類およびテキスト検出分析モデル用に生成された出力データ</a>

## Vision モデルを使用した分析用のイメージの準備

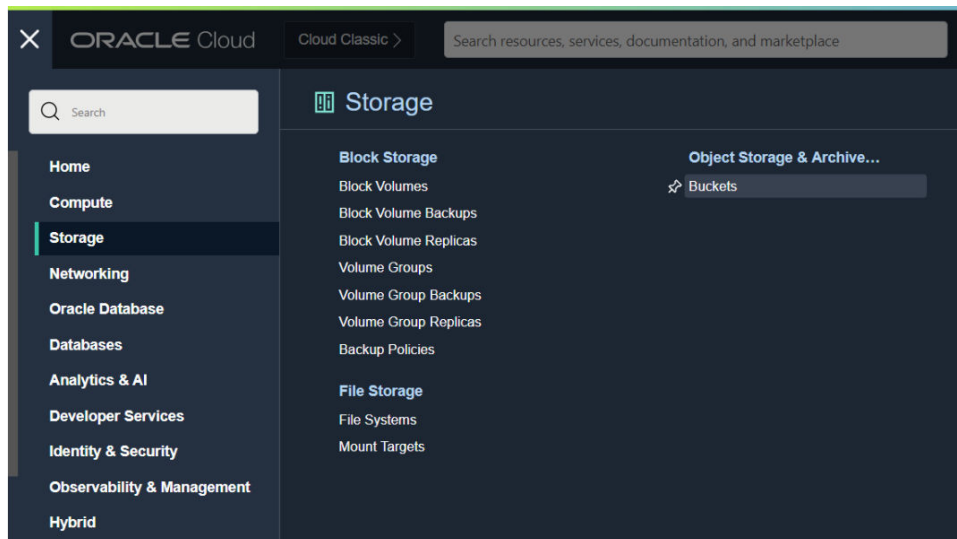
OCI オブジェクト・ストレージのバケットを使用して、分析するイメージを格納し、Oracle Analytics でこれらのイメージにアクセスするためのデータセットを作成します。

ほとんどの場合、入力イメージと Vision モデルは同じ Oracle Cloud アカウント(テナンス)に格納されます。入力イメージと Vision モデルが異なるテナンスに格納されている場合、入力イメージを含むストレージ・バケットの可視性が「パブリック」であり、

データ・フローの入力データセットが個々のイメージ URL を含むことを確認する必要があります(ステップ 4 を参照)。バケットをパブリックにする方法については、[バケットの可視性の変更](#)を参照してください。

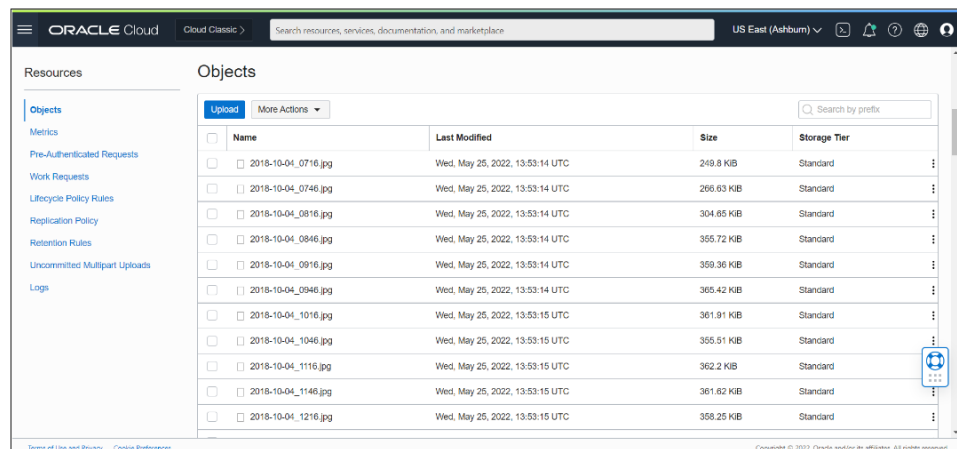
Oracle Analytics のデータ・フローは、1 回の実行で最大 20,000 のイメージを処理できます。処理するイメージが 20,000 を超える場合は、OCI のオブジェクト・ストレージおよびアーカイブ・ストレージで複数のバケットを作成し、各バケットを構成するイメージが 20,000 を超えないようにします。次に、バケットごとに個別のデータセットおよびデータ・フローを作成し、シーケンスを使用して複数のデータ・フローを順番に処理します。

1. OCI コンソールで、「オブジェクト・ストレージとアーカイブ・ストレージ」に移動し、イメージを格納するためのバケットを作成します。



2. イメージをバケットにアップロードします。

バケットに無関係なファイルが含まれていないことを確認します。Oracle Analytics は、バケット内のすべてのファイルを処理します。






バケットはプライベートでもパブリックでもかまいませんが、OCI ユーザーがアクセスでき、イメージに関する OCI の一般的な制限事項に準拠している必要があります。OCI のドキュメントを参照してください。

3. バケット内のすべてのイメージを処理するには、バケット URL を CSV ファイルに追加します。
  - a. オブジェクト・ストレージで、バケットを選択して、「オブジェクト」ダイアログにイメージを表示します。
  - b. ブラウザの URL バーから URL をコピーします。
  - c. ID、Bucket Name および Bucket URL のフィールドを含む CSV ファイルを作成します。
  - d. バケット URL を Bucket URL の値として CSV ファイルに貼り付けます。

ID	Bucket Name	Bucket URL
1	Car_Parking	https://cloud.oracle.com/object-storage/buckets/analyticsdev/Car_Parking/objects?region=us-ashburn-1

4. イメージを個別に処理するには、イメージ URI を CSV ファイルに追加します。
  - a. ID、Image Name および File Location のフィールドを含む CSV ファイルを作成します。
  - b. オブジェクト・ストレージ内の各イメージについて、省略アイコン  をクリックし、「オブジェクト詳細の表示」を選択します。
  - c. 「名前」の値および「URL パス(URI)」の値をコピーします。
  - d. 「名前」の値を Image Name に貼り付け、「URL パス(URI)」の値を File Location に貼り付けます。

Id	Image Name	File Location	Uploaded Size	Type
1	Car_Parking_001.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_001.jpg	Fri, Feb 18, 109.87 KiB	Standard
2	Car_Parking_002.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_002.jpg	Fri, Feb 18, 70.29 KiB	Standard
3	Car_Parking_003.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_003.jpg	Fri, Feb 18, 139.07 KiB	Standard
4	Car_Parking_004.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_004.jpg	Fri, Feb 18, 605.48 KiB	Standard
5	Car_Parking_005.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_005.jpg	Fri, Feb 18, 2.43 MiB	Standard
6	Car_Parking_006.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_006.jpg	Fri, Feb 18, 239.33 KiB	Standard
7	Car_Parking_007.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_007.jpg	Fri, Feb 18, 136.87 KiB	Standard
8	Car_Parking_008.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_008.jpg	Fri, Feb 18, 7.54 MiB	Standard
9	Car_Parking_009.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_009.jpg	Fri, Feb 18, 23.79 KiB	Standard
10	Car_Parking_010.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_010.jpg	Fri, Feb 18, 107.99 KiB	Standard
11	Car_Parking_011.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_011.jpg	Fri, Feb 18, 30.08 KiB	Standard
12	Car_Parking_012.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_012.jpg	Fri, Feb 18, 34.93 KiB	Standard
13	Car_Parking_013.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_013.jpg	Fri, Feb 18, 72.15 KiB	Standard
14	Car_Parking_014.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_014.jpg	Fri, Feb 18, 50.02 KiB	Standard
15	Car_Parking_015.jpg	https://objectstorage.us-ashburn-1.oraclecloud.com/n/ifuufa/b/pm-public/o/Car_Parking_015.jpg	Fri, Feb 18, 40.58 KiB	Standard

5. Oracle Analytics で、「作成」、「データセット」の順にクリックします。
6. ステップ 3 またはステップ 4 で作成した CSV ファイルをアップロードし、データセットを保存します。

イメージが 20,000 を超える場合は、通常、最大 20,000 イメージで構成される複数のバケットを作成し、バケットごとに個別のデータセットを作成します。




## Oracle Analytics で Vision モデルを使用可能にする方法

Oracle Analytics で Vision モデルを使用可能にすると、データ・フローを使用して、オブジェクトの検出、イメージの分類またはテキストの検出を実行できるようになります。

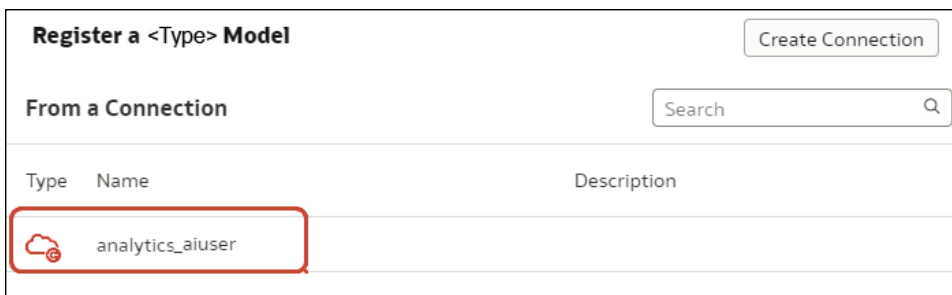
1. OCI オブジェクト・ストレージで、適切な名前(たとえば、MyVisionModelStagingBucket)を使用して、コンパートメントにバケットを作成します。


このステージング・バケットは:

- アクセス可能なコンパートメントに作成する必要があります。
- モデルを登録する前に作成する必要があります。
- プライベート可視性を設定できます。
- 複数のモデルに使用できます。
- 「検査」画面で変更できます。

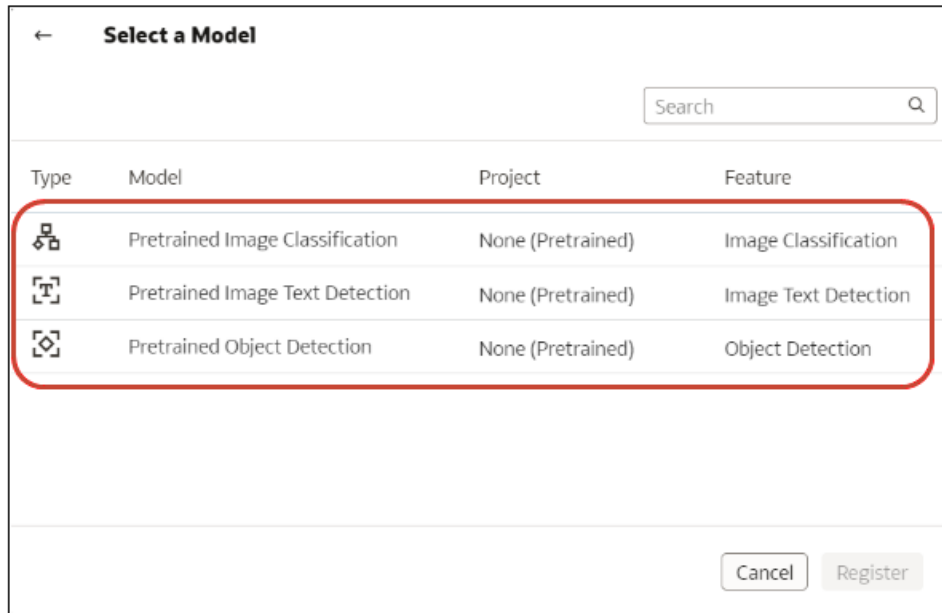
2. Oracle Analytics ホーム・ページで、「ページ・メニュー」をクリックし、「モデル/関数の登録」、OCI Vision モデルの順に選択します。

3. Vision モデルの登録ダイアログで、「接続から」の下にある、OCI テナントへの接続の作成で作成した接続をクリックします。



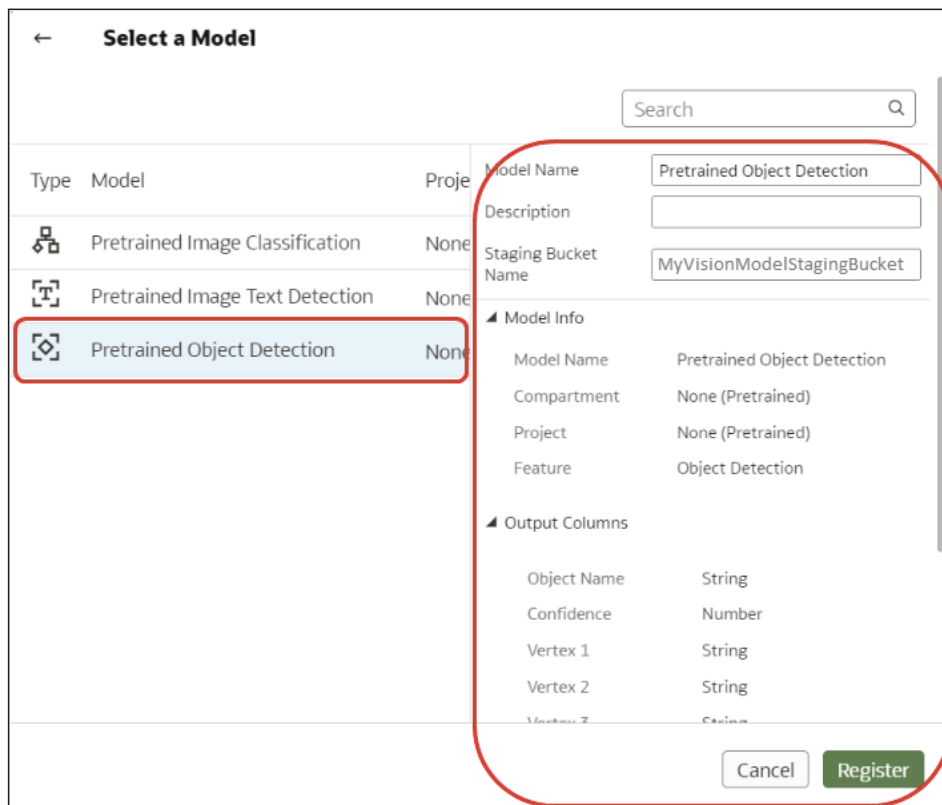
Type	Name	Description
	analytics_aiuser	

使用可能なモデルのリストが表示されます。



4. 使用可能なモデルのリストで、イメージ・データに適用するモデルをクリックします。

たとえば、写真に写っている車を検出するには、**事前トレーニング済オブジェクト検出**を選択します。モデルの詳細を表示する情報パネルがポップアップ表示されます。



5. 「モデル名」で、Oracle Analytics 内のモデルを識別するための名前を指定します。
6. ステージング・バケット名に、ステップ 1 で指定した名前(たとえば、MyVisionModelStagingBucket)を入力します。
7. 「登録」をクリックします。

登録されているモデルを確認するには、Oracle Analytics ホーム・ページから、「機械学習」、「モデル」の順に移動します。

## 式エディタのリファレンス

この項では、式エディタで使用できる式要素について説明します。

### トピック:

- セマンティック・モデル・オブジェクト
- [SQL 演算子](#)
- [条件式](#)
- [関数](#)
- [定数](#)
- [型](#)
- [変数](#)

## セマンティック・モデル・オブジェクト

時間レベル、ディメンション列、ファクト列など、セマンティック・モデル・オブジェクトを式で使用できます。

セマンティック・モデル・オブジェクトを参照するには、次の構文を使用します:

```
"Fact/Dimension Table Name"."Column Name"
```

例: "Order Metrics"."Booked Amount"-"Order Metrics"."Fulfilled Amount"

「式要素」セクションにはユーザーのタスクに関連する項目のみ含まれるため、すべてのファクト表およびディメンション表がリストされるわけではありません。同様に、時間階層が含まれるのは、「Time」ファクト表が現在の表に結合されている場合のみです。

## SQL 演算子

SQL 演算子を使用して、式間の比較を指定します。

様々なタイプの SQL 演算子を使用できます。

演算子	例	説明	構文
BETWEEN	"COSTS"."UNIT_COST" BETWEEN 100.0 AND 5000.0	値が 2 つの境界値の間(境界値は含まない)にあるかどうかを判断します。条件を否定する場合は、BETWEEN の前に NOT を付けることができます。	BETWEEN [LowerBound] AND [UpperBound]
IN	"COSTS"."UNIT_COST" IN (200, 600, 'A')	値が値のセット内に存在するかどうかを判断します。	IN ([Comma Separated List])

演算子	例	説明	構文
IS NULL	"PRODUCTS"."PROD_NAME" IS NULL	値が <b>null</b> かどうかを判断します。	IS NULL
LIKE	"PRODUCTS"."PROD_NAME" LIKE 'prod%'	値が文字列のすべてまたは一部と一致するかどうかを判断します。通常、ゼロ文字以上の任意の文字列と一致することを示すワイルドカード文字( <b>%</b> )、または任意の単一の文字と一致することを示すワイルドカード文字( <b>_</b> )とともに使用します。	LIKE
+	(FEDERAL_REVENUE + LOCAL_REVENUE) - TOTAL_EXPENDITURE	加算用のプラス記号。	+
-	(FEDERAL_REVENUE + LOCAL_REVENUE) - TOTAL_EXPENDITURE	減算用のマイナス記号。	-
* または X	SUPPORT_SERVICE * 1.5	乗算用の乗算記号。	* X
/	CAPITAL_OUTLAY_EXPENDITURE / 1.05	除算用の除算記号。	/
%		パーセンテージ	%
	STATE    CAST(YEAR AS CHAR(4))	文字列の連結。	
(	(FEDERAL_REVENUE + LOCAL_REVENUE) - TOTAL_EXPENDITURE	左カッコ。	(
)	(FEDERAL_REVENUE + LOCAL_REVENUE) - TOTAL_EXPENDITURE	右カッコ。	)
>	YEAR > 2000 and YEAR < 2016 and YEAR <> 2013	大なり記号は、値が比較対象より大きいことを示します。	>

演算子	例	説明	構文
<	YEAR > 2000 and YEAR < 2016 and YEAR <> 2013	小なり記号は、値が比較対象より小さいことを示します。	<
=		等号は、同じ値であることを示します。	=
>=		以上記号は、値が比較対象と同じか、比較対象より大きいことを示します。	>=
<=		以下記号は、値が比較対象と同じか、比較対象より小さいことを示します。	<=
<>	YEAR > 2000 and YEAR < 2016 and YEAR <> 2013	等しくありませんは、値が比較対象より大きいか小さいが、異なることを示します。	<>
,	STATE in ( 'ALABAMA', 'CAL IFORNIA' )	カンマは、リスト内の要素を区切るために使用されます。	,

## 条件式

条件式を使用して、値を変換する式を作成します。

ここで説明する条件式は、ある形式から別の形式に値を変換する式を作成するための構築ブロックです。

これらのルールに従ってください。

- CASE 文では、AND の優先度が OR よりも高くなります
- 文字列は一重引用符で囲む必要があります。

式	例	説明	構文
CASE (If)	CASE WHEN score-par < 0 THEN 'Under Par' WHEN score-par = 0 THEN 'Par' WHEN score-par = 1 THEN 'Bogey' WHEN score-par = 2 THEN 'Double Bogey' ELSE 'Triple Bogey or Worse' END	各 WHEN 条件を評価し、条件を満たす場合は対応する THEN 式の値が割り当てられます。一致する WHEN 条件がない場合は、ELSE 式に指定されているデフォルト値が割り当てられます。ELSE 式が指定されていない場合は、ELSE NULL が自動的に追加されます。  <i>ノート:</i> 分析およびビジュアライゼーションで CASE 文を使用するためのベスト・プラクティスを参照してください。	CASE WHEN request_condition1 THEN expr1 ELSE expr2 END

式	例	説明	構文
CASE (Switch)	<pre> CASE Score-par WHEN -5 THEN 'Birdie on Par 6' WHEN -4 THEN 'Must be Tiger' WHEN -3 THEN 'Three under par' WHEN -2 THEN 'Two under par' WHEN -1 THEN 'Birdie' WHEN 0 THEN 'Par' WHEN 1 THEN 'Bogey' WHEN 2 THEN 'Double Bogey' ELSE 'Triple Bogey or Worse' END </pre>	<p>CASE (Lookup)とも呼ばれます。最初の式の値が確認され、次に WHEN 式が評価されます。最初の式がいずれかの WHEN 式と一致する場合は、対応する THEN 式の値が割り当てられます。</p> <p>どの WHEN 式とも値が一致しない場合は、ELSE 式に指定されているデフォルト値が割り当てられます。ELSE 式が指定されていない場合は、ELSE NULL が自動的に追加されます。</p> <p>最初の式が複数の WHEN 句の式と一致する場合は、最初に一致した式のみが割り当てられます。</p> <p><b>ノート</b> 分析およびビジュアルライゼーションで <b>CASE</b> 文を使用するためのベスト・プラクティスを参照してください。</p>	<pre> CASE expr1 WHEN expr2 THEN expr3 ELSE expr4 END </pre>
IfCase > ELSE	-	-	ELSE [expr]
IfCase > IFNULL	-	-	IFNULL([expr], [value])
IfCase > NULLIF	-	-	NULLIF([expr], [expr])
IfCase > WHEN	-	-	WHEN [Condition] THEN [expr]
IfCase > CASE	-	-	CASE WHEN [Condition] THEN [expr] END
SwitchCase > ELSE	-	-	ELSE [expr]
SwitchCase > IFNULL	-	-	IFNULL([expr], [value])
SwitchCase > NULLIF	-	-	NULLIF([expr], [expr])
SwitchCase > WHEN	-	-	WHEN [Condition] THEN [expr]

## 分析およびビジュアライゼーションで CASE 文を使用するためのベスト・プラクティス

レポートおよびワークブックで CASE 文を使用する際には、レポートの列と集計の順序を考慮してください。これらは、式および小計の計算方法に影響を与えるためです。

- 一般的に、CASE 式を使用する場合は、式で使用されるすべての列がレポートに含まれていることを確認してください。
- 集計の順序が重要な場合は、レポート集計ルールを Default から Sum に変更します。
- 集計の計算を行う前に条件を評価する必要がある場合(たとえば、フィルタ処理された列がレポートに表示されない場合は)、FILTER 関数を使用します。

### 例

この例では、「Brand」、「Product Type」および「Revenue」のデータを使用しています。

Brand	Product_Type	Revenue
BizTech	Accessories	2698715.06
BizTech	Audio	7415868.56
BizTech	Cell Phones	5917902.82
BizTech	Smart Phones	4967513.56
FunPod	Camera	7735104.57
FunPod	Fixed	4530169.23
FunPod	Portable	5234726.2
HomeView	Install	487556.74
HomeView	LCD	5324361.46
HomeView	Maintenance	518288.16
HomeView	Plasma	5169793.64

Camera の収益を 0 に設定する条件を適用するには、次の条件式を作成します: CASE WHEN Product\_Type = 'Camera' THEN 0 ELSE Revenue END。

Product\_Type がレポートから除外されている場合、式には Product\_Type が含まれているため、データは式を評価するために使用できず、結果は次のようになります:



P4 Brand	Revenue Excluding Camera (CASE)
BizTech	21,000,000.00
FunPod	0.00
HomeView	11,500,000.00

レポートに PRODUCT\_TYPE を追加し、レポート集計を SUM に設定すると、ベース・レベルの値が計算された後に結果が集計されます:

P4 Brand	P2 Product Type	Revenue Excluding Camera (CASE)
BizTech	Accessories	2,698,715.06
	Audio	7,415,868.56
	Cell Phones	5,917,902.82
	Smart Phones	4,967,513.56
<b>BizTech Total</b>		<b>21,000,000.00</b>
FunPod	Camera	0.00
	Fixed	4,530,169.23
	Portable	5,234,726.20
<b>FunPod Total</b>		<b>9,764,895.43</b>
HomeView	Install	487,556.74
	LCD	5,324,361.46
	Maintenance	518,288.16
	Plasma	5,169,793.64
<b>HomeView Total</b>		<b>11,500,000.00</b>

CASE を使用するかわりに、フィルタ式 FILTER(Revenue using Product\_Type != 'Camera')を使用することもできます。式はレポートの列とは別に計算され、集計は計算後に適用されます:

P4 Brand	Revenue Excluding Cameras (FILTER)
BizTech	21,000,000.00
FunPod	9,764,895.43
HomeView	11,500,000.00

# 関数

式で使用できる関数には様々なタイプがあります。

## トピック:

- 集計関数
- 分析関数
- 変換関数
- 日付と時間関数
- 日付抽出関数
- 表示関数
- 評価関数
- 算術関数
- 集計実行関数
- 空間関数
- 文字列関数
- システム関数
- 時系列関数

## 集計関数

集計関数は、複数の値に対して操作を実行しサマリー結果を作成します。

次のリストに、列およびメジャー列で使用できる集計ルールを示します。リストには、分析の計算項目の作成時に使用できる関数も含まれています。

- **デフォルト** - セマンティック・モデルと同様に、もしくは分析の最初の作成者によって、デフォルトの集計ルールが適用されます。分析の計算項目には使用できません。
- **サーバーの設定を適用** — Oracle Analytics によって決定された集計ルール(セマンティック・モデルで定義されたルールなど)が適用されます。集計は、合計、最小および最大などの単純なルールの場合は、Oracle Analytics 内で実行されます。「レイアウト」ペインのメジャー列または分析の計算項目には使用できません。
- **SUM** - 結果セットに含まれるすべての値を加算して取得した合計が計算されます。数値を含む項目に使用します。
- **MIN** - 結果セットに含まれる行の最小値(最も低い数値)が計算されます。数値を含む項目に使用します。
- **MAX** - 結果セットに含まれる行の最大値(最も高い数値)が計算されます。数値を含む項目に使用します。
- **AVG** - 結果セットに含まれる項目の平均値が計算されます。数値を含む項目に使用します。表およびピボット表の平均が、近似の整数値に丸められます。

- **FIRST** - メジャーに関して、結果セットに含まれるその項目のうち、最初に出現するものが選択されます。計算項目の場合は、「選択済」リストの表示に準じて最初のメンバーが選択されます。「列式の編集」ダイアログ・ボックスでは使用できません。
- **LAST** - 結果セットに含まれるその項目のうち、最後に出現するものが選択されます。計算項目の場合は、「選択済」リストの表示に準じて最後のメンバーが選択されます。「列式の編集」ダイアログ・ボックスでは使用できません。
- **COUNT** - その項目に関して、結果セットに含まれる **null** でない値を持つ行の数が計算されます。通常、項目は列名であり、その場合はその列に対して **null** 以外の値を持つ行の数が返されます。
- **COUNT DISTINCT** - **COUNT** 関数に個別処理を追加します。つまり、項目の個別の出現が 1 回のみカウントされるようになります。
- **なし** - 集計は適用されません。分析の計算項目には使用できません。
- **レポートを基準にした合計(適用可能な場合)** — 選択解除すると、メジャーにフィルタが適用される前に、結果セット全体に基づいて、**Oracle Analytics** によって合計が計算されます。「列式の編集」ダイアログ・ボックスまたは分析の計算項目には使用できません。属性列のみに使用できます。

関数	例	説明	構文
AGGREGATE AT	AGGREGATE (sales AT year)	指定したデータ・モデル階層内のレベルに基づいて列を集計します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>measure</i> は、メジャー列の名前です。</li> <li>• <i>level</i> は、集計するレベルです。</li> </ul> オプションで、複数のレベルを指定できます。1 番目の引数で指定したメジャーのメジャー・レベルとして使用されるレベルを含むディメンションのレベルを指定できません。たとえば、 <i>month</i> が <i>yearly_sales</i> のメジャー・レベルとして使用される同じ時間ディメンションからのものである場合、この関数を AGGREGATE (yearly_sales AT month) として記述することはできません。	AGGREGATE (measure AT level [, level1, levelN])
AGGREGATE BY	AGGREGATE (sales BY month, region)	1 つ以上のディメンション列に基づいてメジャーを集計します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>measure</i> は、集計するメジャー列の名前です。</li> <li>• <i>column</i> は、集計するディメンション列です。</li> </ul> 複数の列に基づいてメジャーを集計できます。	AGGREGATE (measure BY column [, column1, columnN])
AVG	Avg (Sales)	数値のセットの平均(平均値)を計算します。	AVG (expr)
AVGDISTINCT		式のすべての値の平均(平均値)を個別に計算します。	AVG (DISTINCT expr)

関数	例	説明	構文
BIN	<code>BIN(revenue BY productid, year WHERE productid &gt; 2 INTO 4 BINS RETURNING RANGE_LOW)</code>	指定された数式を、指定された数の等幅のバケットに分類します。この関数は、ビン番号、またはビン間隔の 2 つのエンドポイントのいずれかを返すことができます。 <b>numeric_expr</b> はビンに対するメジャーまたは数値属性です。 <b>BY grain_expr1,..., grain_exprN</b> は、 <b>numeric_expr</b> が計算されるグレインを定義する式のリストです。 <b>BY</b> はメジャー式では必須ですが、属性式ではオプションです。 <b>WHERE</b> は数値がビンに割り当てられる前に <b>numeric_expr</b> に適用されるフィルタです。 <b>INTO number_of_bins</b> <b>BINS</b> は、返すビンの数です。 <b>BETWEEN min_value AND max_value</b> は、最も外側のビンのエンドポイントに使用する最小値と最大値です。 <b>RETURNING NUMBER</b> は、戻り値をビン番号(1、2、3、4 など)にすることを示しています。これがデフォルト値です。 <b>RETURNING RANGE_LOW</b> は、ビン間隔の最低値を示します。 <b>RETURNING RANGE_HIGH</b> は、ビン間隔の最高値を示します	<code>BIN(numeric_expr [BY grain_expr1, ..., grain_exprN] [WHERE condition] INTO number_of_bins BINS [BETWEEN min_value AND max_value] [RETURNING {NUMBER   RANGE_LOW   RANGE_HIGH}])</code>
BottomN		式引数の下位 <b>n</b> 件の値を 1 から <b>n</b> 番目までランク付けします。1 が最下位の数値です。 <b>expr</b> は、数値に評価される任意の式です。 <b>integer</b> は、任意の正の整数です。結果セットに表示されるランキングの下位数を表し、1 が最低ランクです。	<code>BottomN(expr, integer)</code>
COUNT	<code>COUNT(Products)</code>	<b>null</b> 以外の値を含む項目の数を判別します。	<code>COUNT(expr)</code>
COUNTDISTINCT		個別の処理を <b>COUNT</b> 関数に追加します。 <b>expr</b> は任意の式です。	<code>COUNT(DISTINCT expr)</code>
COUNT*	<code>SELECT COUNT(*) FROM Facts</code>	行数をカウントします。	<code>COUNT(*)</code>
First	<code>First(Sales)</code>	式引数の <b>null</b> 以外の最初の戻り値を選択します。 <b>First</b> 関数は、明示的に定義されたディメンションで指定される最も詳細なレベルで動作します。	<code>First([NumericExpression])</code>
Last	<code>Last(Sales)</code>	式の <b>null</b> 以外の最後の戻り値を選択します。	<code>Last([NumericExpression])</code>
MAVG		現在の行を含めて、結果セットのデータの最後の <b>n</b> 行の移動平均を計算します。 <b>expr</b> は、数値に評価される任意の式です。 <b>integer</b> は、任意の正の整数です。最後の <b>n</b> 行のデータ平均を表します。	<code>MAVG(expr, integer)</code>
MAX	<code>MAX(Revenue)</code>	数値式引数に一致する行の最大値(最も高い数値)を計算します。	<code>MAX(expr)</code>
MEDIAN	<code>MEDIAN(Sales)</code>	数値式引数に一致する行のメジアン(中央)値を計算します。偶数行がある場合、メジアンは 2 つの中央行の平均値です。通常、この関数は <b>double</b> 値を返します。	<code>MEDIAN(expr)</code>

関数	例	説明	構文
MIN	MIN (Revenue)	数値式引数に一致する行の最小値(最も低い数値)を計算します。	MIN(expr)
NTILE		ユーザー指定範囲内での値のランクを判別します。範囲内のランクを示す整数が返されます。 <b>numTiles=100</b> を指定した <b>NTILE</b> は、一般に「パーセンタイル」(1 から 100 までの範囲の数値で、 <b>100</b> がこの分割の最高値) と呼ばれる値を返します。 <b>expr</b> は、数値に評価される任意の式です。 <b>numTiles</b> は、タイルの数を表す、 <b>null</b> ではない正の整数です。	NTILE(expr, numTiles)
PERCENTILE		数値式引数に一致する各値のパーセンタイル・ランクを計算します。パーセンタイル・ランクの範囲は、 <b>0</b> ( <b>0</b> 番目のパーセンタイル) から <b>1</b> ( <b>100</b> 番目のパーセンタイル) です。 <b>expr</b> は、数値に評価される任意の式です。	PERCENTILE(expr)
RANK	RANK(chronological_key, null, year_key_columns)	数値式引数に一致する各値のランクを計算します。最も高い数にはランク <b>1</b> が割り当てられ、次に続くランクには <b>2</b> 、 <b>3</b> 、 <b>4</b> などの連続した整数が割り当てられます。ある値が等しい場合、同じランクが割り当てられます(例: <b>1</b> 、 <b>1</b> 、 <b>1</b> 、 <b>4</b> 、 <b>5</b> 、 <b>5</b> 、 <b>7</b> ...)。 <b>expr</b> は、数値に評価される任意の式です。	RANK(expr)
STDDEV	STDDEV (Sales) STDDEV (DISTINCT Sales)	値のセットの標準偏差を返します。通常、戻り型は <b>double</b> です。	STDDEV(expr)
STDDEV_POP	STDDEV_POP (Sales) STDDEV_POP (DISTINCT Sales)	母分散と標準偏差の計算式を使用して、値のセットの標準偏差を返します。	STDDEV_POP([NumericExpression])
SUM	SUM (Revenue)	数値式引数に一致するすべての値を加算して得られる合計を計算します。	SUM(expr)
SUMDISTINCT		数値式引数に一致するすべての値を個別に加算して得られる合計を計算します。 <b>expr</b> は、数値に評価される任意の式です。	SUM(DISTINCT expr)
TOPN		式引数の上位 <b>n</b> 件の値を <b>1</b> から <b>n</b> 番目までランク付けします。 <b>1</b> が最上位の数値です。 <b>expr</b> は、数値に評価される任意の式です。 <b>integer</b> は、任意の正の整数です。結果セットに表示されるランキングの上位数を表し、 <b>1</b> が最高ランクです。	TOPN(expr, integer)

## 分析関数

分析関数では、トレンド線やクラスタなどのモデルを使用してデータを調査できます。

関数	例	説明	構文
TRENDLINE	TRENDLINE (revenue, (calendar_year, calendar_quarter, calendar_month) BY (product), 'LINEAR', 'VALUE')	ビジュアライゼーションを表示する際に、「統計の追加」プロパティを使用してトレンド線を適用することをお勧めします。ビジュアライゼーション・プロパティの調整を参照してください。  線形、多項式または指数モデルに適合させて、適合した値またはモデルを返します。 <i>numeric_expr</i> はトレンドの Y 値を表し、 <i>series</i> (時間列)は X 値を表します。	TRENDLINE (numeric_expr, ([series]) BY ([partitionBy]), model_type, result_type)
CLUSTER	CLUSTER ((product, company), (billed_quantity, revenue), 'clusterName', 'algorithm=k- means;numClusters=%1;maxI ter=%2;useRandomSeed=FA LSE;enablePartitioning=TR UE', 5, 10)	K 平均法または階層的クラスタリングを使用する 1 つ以上の入力式に基づいてレコード・セットをグループに集めます。	CLUSTER ((dimension_expr1 , ... dimension_exprN), (expr1, ... exprN), output_column_name, options, [runtime_binded_options])
OUTLIER	OUTLIER ((product, company), (billed_quantity, revenue), 'isOutlier', 'algorithm=kmeans')	K 平均法、階層的クラスタリングまたは多変量外れ値検出アルゴリズムを使用する 1 つ以上の入力式に基づいて、レコードを外れ値として分類します。	OUTLIER ((dimension_expr1 , ... dimension_exprN), (expr1, ... exprN), output_column_name, options, [runtime_binded_options])
REGR	REGR (revenue, (discount_amount), (product_type, brand), 'fitted', '')	線形モデルに適合させて、適合した値またはモデルを返します。この関数は、2 つのメジャーに線形曲線を適合するために使用できません。	REGR (y_axis_measure_expr, (x_axis_expr), (category_expr1, ..., category_exprN), output_column_name, options, [runtime_binded_options])

## 変換関数

変換関数は、ある形式から別の形式に値を変換します。

関数	例	説明	構文
CAST	CAST(hiredate AS CHAR(40)) FROM employee	式または <b>null</b> リテラルのデータ型を別のデータ型に変更します。たとえば、 <b>customer_name</b> (CHAR または VARCHAR のデータ型) または <b>birthdate</b> (日時リテラル) をキャストできます。 <b>Date</b> データ型に変更する場合は、CAST を使用します。 TODATE は使用しないでください。	CAST(expr AS type)
IFNULL	IFNULL(Sales, 0)	ある式が <b>null</b> 値と評価されるかどうかをテストし、評価された場合は、指定された値をその式に割り当てます。	IFNULL(expr, value)
INDEXCOL	SELECT INDEXCOL(VALUEOF (NQ_SESSION.GEOGRAPHY _LEVEL), Country, State, City), Revenue FROM Sales	外部情報を使用して、サインイン・ユーザーが表示するのに適切な列を戻します。	INDEXCOL([integer literal], [expr1] [, [expr2], ?-])
NULLIF	SELECT e.last_name, NULLIF(e.job_id, j.job_id) "Old Job ID" FROM employees e, job_history j WHERE e.employee_id = j.employee_id ORDER BY last_name, "Old Job ID";	2 つの式を比較します。それらが等しい場合、関数により <b>NULL</b> が戻されます。それらが等しくない場合、関数により最初の式が戻されます。最初の式には、リテラルの <b>NULL</b> を指定できません。	NULLIF([expression], [expression])
To_DateTime	SELECT To_DateTime ('2009-03-0301:01:00' , 'yyyy-mm-dd hh:mi:ss') FROM sales	<b>DateTime</b> 書式の文字列リテラルを <b>DateTime</b> データ型に変換します。	To_DateTime([expressi on], [literal])
VALUEOF	SalesSubjectArea.Cust omer.Region = VALUEOF("Region Security"."REGION")	フィルタでセマンティック・モデル変数の値を参照します。 <b>expr</b> 変数を VALUEOF 関数の引数として使用します。静的モデル変数は名前 で参照します。	VALUEOF(expr)

## 日付と時間関数

日付と時間関数は、DATE および DATETIME に基づいてデータを操作します。

関数	例	説明	構文
CURRENT_Date	CURRENT_DATE	現在の日付を返します。 日付は <b>Oracle BI</b> を実行しているシステムによって決定されます。	CURRENT_DATE

関数	例	説明	構文
CURRENT_TIMESTAMP	CURRENT_TIMESTAMP(3)	たとえば、HH:MM:SS.SSS など、指定された精度の桁数で現在の時刻を返します。 引数の指定がない場合は、デフォルトの精度を返します。	CURRENT_TIMESTAMP(expr)
CURRENT_TIMESTAMP	CURRENT_TIMESTAMP(3)	指定された精度の桁数で現在の日付/タイムスタンプを返します。	CURRENT_TIMESTAMP(expr)
DAYNAME	DAYNAME(Order_Date)	指定された日付式について、どの曜日かを示す名前を返します。	DAYNAME(expr)
DAYOFMONTH	DAYOFMONTH(Order_Date)	指定された日付式について、1 か月のうちのどの日付かを示す数値を返します。	DAYOFMONTH(expr)
DAYOFWEEK	DAYOFWEEK(Order_Date)	指定された日付式について、どの曜日かを示す 1 から 7 の数値を返します。たとえば、1 は常に日曜に対応し、2 は月曜に対応し、同様の要領で 7 を返す土曜まであります。	DAYOFWEEK(expr)
DAYOFYEAR	DAYOFYEAR(Order_Date)	指定された日付式について、年の通算日に対応する数字(1 から 366)を返します。	DAYOFYEAR(expr)
DAY_OF_QUARTER	DAY_OF_QUARTER(Order_Date)	指定された日付式について、四半期の通算日に対応する数字(1 から 92)を返します。	DAY_OF_QUARTER(expr)
HOUR	HOUR(Order_Time)	指定された時刻式について、時に対応する数字(0 から 23)を返します。たとえば、0 は午前 12 時に対応し、23 は午後 11 時に対応します。	HOUR(expr)
MINUTE	MINUTE(Order_Time)	指定された時刻式について、分に対応する数字(0 から 59)を返します。	MINUTE(expr)
MONTH	MONTH(Order_Time)	指定された日付式について、月に対応する数字(1 から 12)を返します。	MONTH(expr)
MONTHNAME	MONTHNAME(Order_Time)	指定された日付式について、月の名前を返します。	MONTHNAME(expr)
MONTH_OF_QUARTER	MONTH_OF_QUARTER(Order_Date)	指定された日付式について、四半期の通算月に対応する数字(1 から 3)を返します。	MONTH_OF_QUARTER(expr)
NOW	NOW()	現在のタイムスタンプを返します。NOW 関数は、CURRENT_TIMESTAMP 関数と同じです。	NOW()
QUARTER_OF_YEAR	QUARTER_OF_YEAR(Order_Date)	指定された日付式について、年の四半期に対応する数字(1 から 4)を返します。	QUARTER_OF_YEAR(expr)
SECOND	SECOND(Order_Time)	指定された時刻式について、秒に対応する数字(0 から 59)を返します。	SECOND(expr)
TIMESTAMPADD	TIMESTAMPADD(SQL_TSI_MONTH, 12, Time."Order Date")	指定された間隔の数をタイムスタンプに計算して、単一のタイムスタンプを返します。 間隔のオプションは、SQL_TSI_SECOND、SQL_TSI_MINUTE、SQL_TSI_HOUR、SQL_TSI_DAY、SQL_TSI_WEEK、SQL_TSI_MONTH、SQL_TSI_QUARTER、SQL_TSI_YEAR です	TIMESTAMPADD(interval, expr, timestamp)



関数	例	説明	構文
TIMESTAMPDIFF	TIMESTAMPDIFF(SQ L_TSI_MONTH, Time."Order Date",CURRENT_DA TE)	2つのタイムスタンプ間の指定された間隔の 合計数を返します。 <b>TIMESTAMPADD</b> と同じ間隔を使用します。	TIMESTAMPDIFF(interval, expr, timestamp2)
WEEK_OF_QUARTER	WEEK_OF_QUARTER( Order_Date)	指定された日付式について、四半期の通算週 に対応する数字(1 から 13)を返します。	WEEK_OF_QUARTER(expr)
WEEK_OF_YEAR	WEEK_OF_YEAR(Ord er_Date)	指定された日付式について、年の通算週に対 応する数字(1 から 53)を返します。	WEEK_OF_YEAR(expr)
YEAR	YEAR(Order_Date)	指定された日付式の年を返します。	YEAR(expr)

## 日付抽出関数

これらの関数は、タイムスタンプ値の計算または切捨てを行って、最も近い指定した期間(時間、日、週、月、四半期など)にします。

計算されたタイムスタンプを使用して、異なるグレインを使用してデータを集計できます。たとえば、EXTRACTDAY() 関数を受注日に適用して、注文が発生した日の午前 0 時のタイムスタンプを計算すると、データを日別に集計できます。

関数	例	説明	構文
日を抽出	EXTRACTDAY("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>2/22/1967 3:02:01 AM は、2/22/1967 12:00:00 AM を返します。</li> <li>9/2/2022 10:38:21 AM は、9/2/2022 12:00:00 AM を返します。</li> </ul>	入力値が発生した日の午前 0 時 (午前 12 時)のタイムスタンプを 返します。たとえば、入力タイム スタンプが 2 月 22 日午前 3 時 02 分 01 秒の場合、関数は 2 月 22 日午前 12 時 00 分 00 秒のタ イムスタンプを返します。	EXTRACTDAY(expr)
時間を抽出	EXTRACTHOUR("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>2/22/1967 3:02:01 AM は、2/22/1967 3:00:00 AM を返します。</li> <li>6/17/1999 11:18:30 PM は、6/17/1999 11:00:00 PM を返します。</li> </ul>	入力値が発生した時刻の時間の 開始のタイムスタンプを返しま す。たとえば、入力タイムスタ ンプが午後 11 時 18 分 30 秒の場 合、関数は午後 11 時 00 分 00 秒 のタイムスタンプを返します。	EXTRACTHOUR(expr)
日の時間を抽出	EXTRACTHOUROFDAY("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>2014/09/24 10:58:00 は、 2000/01/01 10:00:00 を 返します。</li> <li>2014/08/13 11:10:00 は、 2000/01/01 11:00:00 を 返します</li> </ul>	年、月、日、分および秒のデフォ ルト値を使用して、時間が入力値 ) の時間と等しいタイムスタンプ を返します。	EXTRACTHOUROFDAY(expr)

関数	例	説明	構文
ミリ秒を抽出	EXTRACTMILLISECOND("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>1997/01/07 15:32:02.150 は、1997/01/07 15:32:02.<b>150</b> を返します。</li> <li>1997/01/07 18:42:01.265 は、1997/01/07 18:42:01.<b>265</b> を返します。</li> </ul>	入力値のミリ秒を含むタイムスタンプを返します。たとえば、入力タイムスタンプが 15 時 32 分 02.150 秒の場合、関数は 15 時 32 分 02.150 秒のタイムスタンプを返します。	EXTRACTMILLISECOND(expr)
分を抽出	EXTRACTMINUTE("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>6/17/1999 11:18:00 PM は、6/17/1999 11:18:00 PM を返します。</li> <li>9/2/2022 10:38:21 AM は、9/2/2022 10:38:00 AM を返します。</li> </ul>	入力値が発生した時刻の分の開始のタイムスタンプを返します。たとえば、入力タイムスタンプが午前 11 時 38 分 21 秒の場合、関数は午前 11 時 38 分 00 秒のタイムスタンプを返します。	EXTRACTMINUTE(expr)
月を抽出	EXTRACTMONTH("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>2/22/1967 3:02:01 AM は、2/1/1967 12:00:00 AM を返します。</li> <li>6/17/1999 11:18:00 PM は、6/1/1999 12:00:00 AM を返します。</li> </ul>	入力値が発生した月の最初の日のタイムスタンプを返します。たとえば、入力タイムスタンプが 2 月 22 日の場合、関数は 2 月 1 日のタイムスタンプを返します。	EXTRACTMONTH(expr)
四半期を抽出	EXTRACTQUARTER("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>2/22/1967 3:02:01 AM は、第 1 会計四半期の初日である 1/1/1967 12:00:00 AM を返します。</li> <li>6/17/1999 11:18:00 PM は、第 2 会計四半期の初日である 4/1/1999 12:00:00 AM を返します。</li> <li>9/2/2022 10:38:21 AM は、第 3 会計四半期の初日である 7/1/2022 12:00:00 AM を返します。</li> </ul> <p><b>ヒント:</b> QUARTER(expr) は、返されたタイムスタンプから四半期の序数のみを計算する場合に使用します。</p>	入力値が発生した四半期の最初の日のタイムスタンプを返します。たとえば、入力タイムスタンプが第 3 会計四半期に発生した場合、関数は 7 月 1 日のタイムスタンプを返します。	EXTRACTQUARTER(expr)

関数	例	説明	構文
秒を抽出	EXTRACTSECOND("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>1997/01/07 15:32:02.150 は、1997/01/07 15:32:02 を返します。</li> <li>1997/01/07 20:44:18.163 は、1997/01/07 20:44:18 を返します。</li> </ul>	入力値のタイムスタンプを返します。たとえば、入力タイムスタンプが 15 時 32 分 02.150 秒の場合、関数は 15 時 32 分 02 秒のタイムスタンプを返します。	EXTRACTSECOND(expr)
週を抽出	EXTRACTWEEK("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>2014/09/24 10:58:00 は、2014/09/21 を返します。</li> <li>2014/08/13 11:10:00 は、2014/08/10 を返します。</li> </ul>	入力値が発生した週の最初の曜日(日曜日)の日付を返します。たとえば、入力タイムスタンプが 9 月 24 日水曜日の場合、関数は 9 月 21 日日曜日のタイムスタンプを返します。	EXTRACTWEEK(expr)
年を抽出	EXTRACTYEAR("Order Date") <ul style="list-style-type: none"> <li>1967/02/22 03:02:01 は、1967/01/01 00:00:00 を返します。</li> <li>1999/06/17 23:18:00 は、1999/01/01 00:00:00 を返します。</li> </ul>	入力値が発生した年の 1 月 1 日のタイムスタンプを返します。たとえば、入力タイムスタンプが 1967 年に発生した場合、関数は 1967 年 1 月 1 日のタイムスタンプを返します。	EXTRACTYEAR (expr)

## 表示関数

表示関数は、問合せの結果セットを操作します。

関数	例	説明	構文
BottomN	BottomN(Sales, 10)	式の下位 $n$ 件の値を、最低から最高の順にランク付けして返します。	BottomN([NumericExpression], [integer])
FILTER	FILTER(Sales USING Product = 'widget')	特定の事前集計済フィルタを使用して式を計算します。	FILTER(measure USING filter_expr)
MAVG	MAVG(Sales, 10)	現在の行を含めて、結果セットのデータの最後の $n$ 行の移動平均を計算します。	MAVG([NumericExpression], [integer])
MSUM	SELECT Month, Revenue, MSUM(Revenue, 3) as 3_MO_SUM FROM Sales	現在の行を含めて、データの最後の $n$ 行の移動合計を計算します。最初の行の合計は、最初の行の数値式と同じです。2 番目の行の合計は、最初の 2 つの行のデータ合計を取得することで計算され、同様に続いて実行されます。 $n$ 番目の行に到達すると、合計は最後の $n$ 行のデータに基づいて計算されます。	MSUM([NumericExpression], [integer])

関数	例	説明	構文
NTILE	NTILE (Sales, 100)	ユーザー指定範囲内での値のランクを判別します。範囲内のランクを示す整数が返されます。この例では、1 から 100 までの範囲 (最低が sale = 1 で最高が sale = 100) を示しています。	NTILE ([NumericExpression], [integer])
PERCENTILE	PERCENTILE (Sales)	数値式引数に一致する各値のパーセント・ランクを計算します。パーセンタイル・ランクの範囲は、0(1 番目のパーセンタイル)から 1(100 番目のパーセンタイル)です。	PERCENTILE ([NumericExpression])
RANK	RANK (Sales)	数値式引数に一致する各値のランクを計算します。最も高い数にはランク 1 が割り当てられ、次に続くランクには 2、3、4 などの連続した整数が割り当てられます。ある値が等しい場合、同じランクが割り当てられます(例: 1、1、1、4、5、5、7...)	RANK ([NumericExpression])
RCOUNT	SELECT month, profit, RCOUNT(profit) FROM sales WHERE profit > 200	入力として一連のレコードを取得して、見つかったレコード数をカウントします。	RCOUNT ([NumericExpression])
RMAX	SELECT month, profit, RMAX(profit) FROM sales	入力として一連のレコードを取得して、そこまでに処理されたレコードに基づいて最大値を表示します。指定するデータ型はソートできるデータ型である必要があります。	RMAX ([NumericExpression])
RMIN	SELECT month, profit, RMIN(profit) FROM sales	入力として一連のレコードを取得して、そこまでに処理されたレコードに基づいて最小値を表示します。指定するデータ型はソートできるデータ型である必要があります。	RMIN ([NumericExpression])
RSUM	SELECT month, revenue, RSUM(revenue) as RUNNING_SUM FROM sales	そこまでに処理されたレコードに基づいて累計を計算します。最初の行の合計は、最初の行の数値式と同じです。2 番目の行の合計は、最初の 2 つの行のデータ合計を取得することで計算され、同様に続いて実行されます。	RSUM ([NumericExpression])
TOPN	TOPN (Sales, 10)	式の上位 $n$ 件の値を、最高から最低の順にランク付けして返します。	TOPN ([NumericExpression], [integer])

## 評価関数

評価関数は、式を渡して高度な計算を取得するために使用できるデータベース関数です。

埋込みデータベース関数には、1 つ以上の列が必要になる場合があります。これらの列は、関数内で %1 ... %N によって参照されます。実際の列は、関数の後にリストする必要があります。

関数	例	説明	構文
EVALUATE	SELECT EVALUATE('instr( %1, %2)', address, 'Foster City') FROM employees	パラメータとして(オプションで)参照列を使用する、指定されたデータベース関数をデータベースに渡して評価します。	EVALUATE([string expression], [comma separated expressions])
EVALUATE_AGG	EVALUATE_AGG('R EGR_SLOPE(%1, %2)', sales.quantity, market.marketkey )	パラメータとして(オプションで)参照列を使用する、指定されたデータベース関数をデータベースに渡して評価します。この関数は、GROUP BY 句を使用する集計関数を対象としています。	EVALUATE_AGG('db_agg _function(%1...%N)' [AS datatype] [, column1, columnN])

## 算術関数

ここで説明する算術関数では、数学的な操作を実行します。

関数	例	説明	構文
ABS	ABS(Profit)	数値式の絶対値を計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	ABS( <i>expr</i> )
ACOS	ACOS(1)	数値式のアークコサインを計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	ACOS( <i>expr</i> )
ASIN	ASIN(1)	数値式のアークサインを計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	ASIN( <i>expr</i> )
ATAN	ATAN(1)	数値式のアークタンジェントを計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	ATAN( <i>expr</i> )
ATAN2	ATAN2(1, 2)	$y/x$ のアークタンジェントを計算します。ここで $y$ は最初の数値式、 $x$ は 2 番目の数値式です。	ATAN2( <i>expr</i> 1, <i>expr</i> 2)
CEILING	CEILING(Profit)	整数以外の数値式を最も近い整数に切り上げます。数式が整数に評価される場合、CEILING 関数はその整数を返します。	CEILING( <i>expr</i> )
COS	COS(1)	数値式のコサインを計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	COS( <i>expr</i> )
COT	COT(1)	数値式のコタンジェントを計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	COT( <i>expr</i> )
DEGREES	DEGREES(1)	式をラジアンから度数に変換します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	DEGREES( <i>expr</i> )
EXP	EXP(4)	値を指定された値でべき乗します。 $e$ の $n$ 乗を計算します。ここで $e$ は自然対数の底です。	EXP( <i>expr</i> )
ExtractBit	Int ExtractBit(1, 5)	整数内の特定の位置にあるビットを取得します。そのビットに対応する 0 か 1 の整数が返されます。	ExtractBit([Source Number], [Digits])

関数	例	説明	構文
FLOOR	FLOOR(Profit)	整数以外の数値式を最も近い整数に切り下げます。数式が整数に評価される場合、FLOOR 関数はその整数を返します。	FLOOR(expr)
LOG	LOG(1)	式の自然対数を計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	LOG(expr)
LOG10	LOG10(1)	式の十進法の対数を計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	LOG10(expr)
MOD	MOD(10, 3)	最初の数値式を 2 番目の数値式で除算し、商の剰余を返します。	MOD(expr1, expr2)
PI	PI()	PI の定数値を返します。	PI()
POWER	POWER(Profit, 2)	最初の数値式を使用して、これを 2 番目の数値式で指定された累乗にします。	POWER(expr1, expr2)
RADIANS	RADIANS(30)	式を度数からラジアンに変換します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	RADIANS(expr)
RAND	RAND()	0 から 1 の擬似乱数を返します。	RAND()
RANDFromSeed	RAND(2)	シード値に基づいた擬似乱数を返します。特定のシード値に対して、乱数の同一のセットが生成されます。	RAND(expr)
ROUND	ROUND(2.166000, 2)	数値式を <i>n</i> 桁の精度で丸めます。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。 <i>integer</i> は、丸める精度の桁数を表す任意の正の整数です。	ROUND(expr, integer)
SIGN	SIGN(Profit)	次が返されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 数値式が正数に評価される場合は、1</li> <li>• 数値式が負数に評価される場合は、-1</li> <li>• 数値式がゼロに評価される場合は、0</li> </ul>	SIGN(expr)
SIN	SIN(1)	数値式のサインを計算します。	SIN(expr)
SQRT	SQRT(7)	数値式引数の平方根を計算します。数式は、負数でない数値に評価される必要があります。	SQRT(expr)
TAN	TAN(1)	数値式のタンジェントを計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	TAN(expr)
TRUNCATE	TRUNCATE(45.12345, 2)	小数部分を切り捨て、小数点から指定した数の桁数を返します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。 <i>integer</i> は、小数位の右側から返す文字数を表す任意の正の整数です。	TRUNCATE(expr, integer)

## 集計実行関数

集計実行関数は、複数の値に対して操作を実行しサマリー結果を作成します。

関数	例	説明	構文
MAVG		現在の行を含めて、結果セットのデータの最後の $n$ 行の移動平均を計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。 <i>integer</i> は、任意の正の整数です。最後の $n$ 行のデータ平均を表します。	MAVG( <i>expr</i> , <i>integer</i> )
MSUM	<pre>select month, revenue, MSUM(revenue, 3) as 3_MO_SUM from sales_subject_ar ea</pre>	現在の行を含めて、データの最後の $n$ 行の移動合計を計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。 <i>integer</i> は、任意の正の整数です。データの最後の $n$ 行の合計を表します。	MSUM( <i>expr</i> , <i>integer</i> )
RSUM	<pre>SELECT month, revenue, RSUM(revenue) as RUNNING_SUM from sales_subject_ar ea</pre>	そこまでに処理されたレコードに基づいて累計を計算します。 <i>expr</i> は、数値に評価される任意の式です。	RSUM( <i>expr</i> )
RCOUNT	<pre>select month, profit, RCOUNT(profit) from sales_subject_ar ea where profit &gt; 200</pre>	入力として一連のレコードを取得して、見つかったレコード数をカウントします。 <i>expr</i> は、任意のデータ型の式です。	RCOUNT( <i>expr</i> )
RMAX	<pre>SELECT month, profit,RMAX(profit) from sales_subject_ar ea</pre>	入力として一連のレコードを取得して、そこまでに処理されたレコードに基づいて最大値を表示します。 <i>expr</i> は、任意のデータ型の式です。	RMAX( <i>expr</i> )
RMIN	<pre>select month, profit,RMIN(profit) from sales_subject_ar ea</pre>	入力として一連のレコードを取得して、そこまでに処理されたレコードに基づいて最小値を表示します。 <i>expr</i> は、任意のデータ型の式です。	RMIN( <i>expr</i> )

## 空間関数

空間関数により、データをモデル化するとき地理的分析を実行できます。たとえば、2 つの地理的なエリア(形状または多角形と呼ばれる)間の距離を計算できます。

### ノート:

これらの空間関数は、ビジュアライゼーション・ワークブックのカスタム計算では使用できません。

関数	例	説明	構文
GeometryArea	GeometryArea (Shape)	形状が占有するエリアを計算します。	GeometryArea (Shape)
GeometryDistance	GeometryDistance (TRIP_START, TRIP_END)	2 つの形状間の距離を計算します。	GeometryDistance (Shape 1, Shape 2)
GeometryLength	GeometryLength (Shape)	形状の外周を計算します。	GeometryLength (Shape)
GeometryRelate	GeometryRelate (TRIP_START, TRIP_END)	1 つの形状が他の形状の内側にあるかどうかを特定します。TRUE または FALSE を文字列( <b>varchar</b> )として返します。	GeometryRelate (Shape 1, Shape 2)
GeometryWithinDistance	GeometryWithinDistance (TRIP_START, TRIP_END, 500)	2 つの形状が、指定された互いの距離以内に存在しているかどうかを特定します。TRUE または FALSE を文字列( <b>varchar</b> )として返します。	GeometryWithinDistance (Shape1, Shape2, DistanceInFloat)

## 文字列関数

文字列関数は様々な文字操作を実行します。これらは文字列に対して動作します。

関数	例	説明	構文
ASCII	ASCII ('a')	シングル・キャラクタ文字列を、0 から 255 までの対応する ASCII コードに変換します。文字式が複数の文字に評価される場合は、式の最初の文字に対応する ASCII コードが返されます。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	ASCII ( <i>expr</i> )
BIT_LENGTH	BIT_LENGTH ('abcdef')	指定した文字列の長さをビット単位で返します。各 Unicode 文字の長さは 2 バイトです(16 ビットに相当)。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	BIT_LENGTH ( <i>expr</i> )
CHAR	CHAR (35)	0 から 255 の間の数値を対応する ASCII コードの文字値に変換します。 <i>expr</i> は、0 から 255 までの数値に評価される任意の式です。	CHAR ( <i>expr</i> )
CHAR_LENGTH	CHAR_LENGTH (Customer_Name)	指定した文字列の長さを文字数で返します。先頭と末尾の空白は、文字列の長さとして計算されません。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	CHAR_LENGTH ( <i>expr</i> )
CONCAT	SELECT DISTINCT CONCAT ('abc', 'def') FROM employee	2 つの文字列を連結します。 <i>exprs</i> は、カンマで区切られた文字列に評価される式です。 CONCAT では、フォーマットされたデータではなく RAW データを使用する必要があります。	CONCAT ( <i>expr1</i> , <i>expr2</i> )



関数	例	説明	構文
INSERT	SELECT INSERT ('123456', 2, 3, 'abcd') FROM table	指定した文字列を別の文字列の指定した場所に挿入します。 <i>expr1</i> は、文字列に評価される任意の式です。ターゲットの文字列を示します。 <i>integer1</i> は、2 番目の文字列が挿入される、ターゲットの文字列の先頭からの文字数を表す任意の正の整数です。 <i>integer2</i> は、2 番目の文字列によって置換される、ターゲットの文字数を表す任意の正の整数です。 <i>expr2</i> は、文字列に評価される任意の式です。ターゲットの文字列に挿入される文字列を示します。	INSERT( <i>expr1</i> , <i>integer1</i> , <i>integer2</i> , <i>expr2</i> )
LEFT	SELECT LEFT ('123456', 3) FROM table	文字列の左側から、指定された文字数を返します。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。 <i>integer</i> は、文字列の左側から返す文字数を表す任意の正の整数です。	LEFT( <i>expr</i> , <i>integer</i> )
LENGTH	LENGTH(Customer_ Name)	指定した文字列の長さを文字数で返します。末尾の空白文字を除いた長さが返されます。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	LENGTH( <i>expr</i> )
LOCATE	LOCATE ('d' 'abcdef')	別の文字列での文字列の数値位置を返します。文字列が検索される文字列で見つからない場合、関数は値 0 を返します。 <i>expr1</i> は、文字列に評価される任意の式です。検索する文字列を示します。 <i>expr2</i> は、文字列に評価される任意の式です。検索される文字列を示します。	LOCATE( <i>expr1</i> , <i>expr2</i> )
LOCATEN	LOCATEN ('d' 'abcdef', 3)	LOCATE と同様に、別の文字列での文字列の数値位置を返します。LOCATEN には、検索の開始位置を指定できる整数の引数が含まれます。 <i>expr1</i> は、文字列に評価される任意の式です。検索する文字列を示します。 <i>expr2</i> は、文字列に評価される任意の式です。検索される文字列を示します。 <i>integer</i> は、文字列の検索を開始する位置を表す任意の正(ゼロ以外)の整数です。	LOCATEN( <i>expr1</i> , <i>expr2</i> , <i>integer</i> )
LOWER	LOWER(Customer_ Name)	文字列を小文字に変換します。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	LOWER( <i>expr</i> )
OCTET_LENGTH	OCTET_LENGTH ('ab cdef')	指定した文字列のバイト数を返します。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	OCTET_LENGTH( <i>expr</i> )

関数	例	説明	構文
POSITION	POSITION('d', 'abcdef')	文字式での <i>strExpr1</i> の数値位置を返します。 <i>strExpr1</i> が見つからない場合、関数は 0 を返します。  <i>expr1</i> は、文字列に評価される任意の式です。ターゲット文字列で検索する文字列を示します。たとえば、"d"などです。  <i>expr2</i> は、文字列に評価される任意の式です。検索されるターゲット文字列を示します。たとえば、"abcdef"などです。	POSITION( <i>expr1</i> , <i>expr2</i> )
REPEAT	REPEAT('abc', 4)	指定した式を <i>n</i> 回繰り返します。  <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です  <i>integer</i> は、文字列を繰り返す回数を表す任意の正の整数です。	REPEAT( <i>expr</i> , <i>integer</i> )
REPLACE	REPLACE('abcd123 4', '123', 'zz')	指定した文字式の 1 つ以上の文字を、別の 1 つ以上の文字で置換します。  <i>expr1</i> は、文字列に評価される任意の式です。これは、文字が置換される文字列です。  <i>expr2</i> は、文字列に評価される任意の式です。この 2 番目の文字列は、1 番目の文字列で置換される文字を示します。  <i>expr3</i> は、文字列に評価される任意の式です。この 3 番目の文字列は、1 番目の文字列内に代入する文字を指定します。	REPLACE( <i>expr1</i> , <i>expr2</i> , <i>expr3</i> )
RIGHT	SELECT RIGHT('123456', 3) FROM table	文字列の右側から、指定した数の文字を返します。  <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。  <i>integer</i> は、文字列の右側から返す文字数を表す任意の正の整数です。	RIGHT( <i>expr</i> , <i>integer</i> )
SPACE	SPACE(2)	空白を挿入します。  <i>integer</i> は、挿入するスペースの数を示す任意の正の整数です。	SPACE( <i>expr</i> )
SUBSTRING	SUBSTRING('abcde f' FROM 2)	固定文字数から元の文字列の新しい文字列を作成します。  <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。  <i>startPos</i> は、文字列の左の先頭(結果の先頭)からの文字数を表す任意の正の整数です。	SUBSTRING([SourceStri ng] FROM [StartPostition])
SUBSTRINGN	SUBSTRING('abcde f' FROM 2 FOR 3)	SUBSTRING と同様に、固定文字数から元の文字列の新しい文字列を作成します。  SUBSTRINGN には、新しい文字列の長さを文字数で指定できる整数の引数が含まれません。  <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。  <i>startPos</i> は、文字列の左の先頭(結果の先頭)からの文字数を表す任意の正の整数です。	SUBSTRING( <i>expr</i> FROM <i>startPos</i> FOR <i>length</i> )

関数	例	説明	構文
TrimBoth	Trim(BOTH '_' FROM '_abcdef_')	文字列から指定した先頭および末尾の文字列を削除します。 <i>char</i> は、任意の単一文字です。文字の指定(および必須の一重引用符)を省略すると、空白文字がデフォルトで使用されます。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	TRIM(BOTH char FROM expr)
TRIMLEADING	TRIM(LEADING '_' FROM '_abcdef')	文字列から指定した先頭の文字列を削除します。 <i>char</i> は、任意の単一文字です。文字の指定(および必須の一重引用符)を省略すると、空白文字がデフォルトで使用されます。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	TRIM(LEADING char FROM expr)
TRIMTRAILING	TRIM(TRAILING '_' FROM 'abcdef_')	文字列から指定した末尾の文字列を削除します。 <i>char</i> は、任意の単一文字です。文字の指定(および必須の一重引用符)を省略すると、空白文字がデフォルトで使用されます。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	TRIM(TRAILING char FROM expr)
UPPER	UPPER(Customer_Name)	文字列を大文字に変換します。 <i>expr</i> は、文字列に評価される任意の式です。	UPPER(expr)

## システム関数

USER システム関数は、セッションに関連する値を返します。たとえば、サインインしたユーザーのユーザー名です。

関数	例	説明	構文
DATABASE		ログオンしているサブジェクト領域の名前を返します。	DATABASE()
USER		ログオンしているセマンティック・モデルのユーザー名を返します。	USER()

## 時系列関数

時系列関数では、時間ディメンションに基づいてデータを集計および予測できます。たとえば、AGO 関数を使用して、1 年前からの収益を計算できます。

時間ディメンションのメンバーは、関数のレベル以下である必要があります。そのため、指定されたレベル以下のメンバーを一意に識別する 1 つ以上の列が、問合せに計画されている必要があります。

関数	例	説明	構文
AGO	SELECT Year_ID, AGO(sales, year, 1)	過去の指定された期間のメジャーの集計値を計算します。たとえば、1 年前の月次収益を計算するには、AGO(Revenue, Year, 1, SHIP_MONTH)を使用します。前四半期の四半期収益を計算するには、AGO(Revenue, Quarter, 1)を使用します。	<p>AGO (EXPR, TIME_LEVEL, OFFSET, [TIME_DIMENSION])</p> <p>ここで:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>EXPR</b> = 計算するメジャー。たとえば、収益。</li> <li>• <b>TIME_LEVEL</b> = 期間。年、四半期、月、週、または日である必要があります。</li> <li>• <b>OFFSET</b> = さかのぼって計算する期間の数。たとえば、1 年の場合は 1。</li> <li>• <b>TIME_DIMENSION</b> = ビジューアライゼーションの日付または日時の列。たとえば、SHIP_MONTH。<b>TIME_DIMENSION</b> を省略した場合、ビジューアライゼーションには日付または日時の列が 1 つのみ含まれている必要があります。ビジューアライゼーションに日付または日時の列が含まれていない、または 2 つ以上が含まれているとき、構文エラーが発生します。</li> </ul>
PERIODROLLING	SELECT Month_ID, PERIODROLLING (monthly_sales, -1, 1)	x 単位の時間から始まり、現在の時刻から y 単位の時間で終わる期間のメジャーの合計を計算します。たとえば、PERIODROLLING を使用して、現在の四半期前の四半期で始まり、現在の四半期後の四半期で終わる期間の売上を計算できます。	<p>PERIODROLLING (measure, x [, y])</p> <p>ここで:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>measure</b> = メジャー列の名前です。</li> <li>• <b>x</b> は、現在の時刻からのオフセットを指定する整数です。</li> <li>• <b>y</b> は、この関数が計算する時間単位の数を指定します。</li> <li>• <b>hierarchy</b> は、<i>yr</i>、<i>mon</i>、<i>day</i> など、時間ウィンドウの計算に使用する時間ディメンション内の階層の名前を指定するオプションの引数です。</li> </ul>

関数	例	説明	構文
TODATE	SELECT Year_ID, Month_ID, TODATE (sales, year)	<p>期間の開始から最新の期間までのメジャーの集計値を計算します。たとえば、年度開始から現在の計算。</p> <p>たとえば、過去 1 年間の売上を計算するには、TODATE(sales, year)を使用します。</p>	<p>TODATE(EXPR, TIME_LEVEL, [TIME_DIMENSION])</p> <p>ここで:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>EXPR</b> = 少なくとも 1 つのメジャー列を参照する式。たとえば、売上。</li> <li>• <b>TIME_LEVEL</b> = 期間。年、四半期、月、週、または日である必要があります。</li> <li>• <b>TIME_DIMENSION</b> = ビジュアライゼーションの日付または日時の列。たとえば、SHIP_MONTH。</li> </ul> <p><b>TIME_DIMENSION</b> を省略した場合、ビジュアライゼーションには日付または日時の列が 1 つのみ含まれている必要があります。ビジュアライゼーションに日付または日時の列が含まれていない、または 2 つ以上が含まれているとき、構文エラーが発生します。</p>

### FORECAST 関数

指数平滑法(ETS)または季節性 ARIMA や ARIMA を使用して、**series** に対して指定されたメジャーの時系列モデルを作成します。この関数は、**numPeriods** 引数で指定された一連の期間の予測を出力します。

**構文** FORECAST(*numeric\_expr*, ([*series*]), *output\_column\_name*, *options*, [*runtime\_binded\_options*]))

ここで:

- **numeric\_expr** は、収益データなど、予測するメジャーを示しています。
- **series** は、予測モデルの作成に使用される時間粒度を示しています。**series** は 1 つ以上の時間ディメンション列のリストです。**series** を省略すると、問合せから時間粒度が決定されます。
- **output\_column\_name** は、**forecast**、**low**、**high** および **predictionInterval** の有効な列名を示しています。
- **options** は、セミコロン(;)で区切られた名前/値のペアの文字列リストを示しています。runtime\_binded\_options に指定される %1 ... %N を値に含めることができます。
- **runtime\_binded\_options** は、列およびオプションのカンマ区切りリストを示しています。これらの列およびオプションの値は、個別の問合せ実行時に評価および解決されます。

**FORECAST 関数のオプション** 次の表は、FORECAST 関数とともに使用できるオプションを示しています。

オプション名	値	説明
numPeriods	整数	予測する期間の数
predictionInterval	0 から 100。高い値で高い信頼度を指定します。	予測の信頼度レベル。
modelType	ETS (指数平滑法) SeasonalArima ARIMA	予測に使用するモデル。
useBoxCox	TRUE FALSE	TRUE の場合は、Box-Cox 変換を使用します。
lambdaValue	該当なし	Box-Cox 変換パラメータ。 NULL の場合または useBoxCox が FALSE の場合は無視されます。 それ以外の場合は、モデルが評価される前にデータが変換されます。
trendDamp	TRUE FALSE	これは、指数平滑法モデルに固有です。 TRUE の場合は、減衰トレンドを使用します。FALSE または NULL の場合は、非減衰トレンドを使用します。
errorType	該当なし	これは、指数平滑法モデルに固有です。
trendType	N (なし) A (加算) M (乗算) Z (自動選択)	これは、指数平滑法モデルに固有です
seasonType	N (なし) A (加算) M (乗算) Z (自動選択)	これは、指数平滑法モデルに固有です
modelParamIC	ic_auto ic_aicc ic_bic ic_auto (デフォルト)	モデル選択で使用される情報基準 (IC)。

### 日ごとの収益予測の例

この例では、日ごとの収益予測を選択しています。

```
FORECAST("A - Sample Sales"."Base Facts"."1- Revenue" Target,
("A - Sample Sales"."Time"."T00 Calendar Date"), 'forecast',
'numPeriods=30;predictionInterval=70;') ForecastedRevenue
```

### 年および四半期ごとの収益予測の例

この例では、年および四半期ごとの収益予測を選択しています。

```
FORECAST("A - Sample Sales"."Base Facts"."1- Revenue",
("A - Sample Sales"."Time"."T01 Year" timeYear, "A - Sample Sales"."Time"."T02
Quarter" TimeQuarter), 'forecast', 'numPeriods=30;predictionInterval=70;')
ForecastedRevenue
```

## 定数

定数を使用して特定の固定日時をワークブックおよびレポートに含めることができます。

定数	例	説明	構文
DATE	DATE '2026-04-09'	計算または式で特定の日付を作成します。	DATE 'yyyy-mm-dd'
TIME	TIME '12:00:00'	計算または式で特定の時間を作成します。	TIME 'hh:mi:ss'
TIMESTAMP	TIMESTAMP '2026-04-09 12:00:00'	計算または式で特定のタイムスタンプを作成します。	TIMESTAMP 'yyyy-mm-dd hh:mi:ss'

## 型

式では、CHAR、INT、NUMERIC などのデータ型を使用できます。

たとえば、式または null リテラルのデータ型を別のデータ型に変更する CAST 式を作成する場合は、型を使用します。

## 変数

変数は式で使用されます。

変数を式で使用できます。

高度な手法: 変数の格納値の参照を参照してください。

# アプリケーションおよび Web ページへの分析コンテンツの埋込み

Oracle Analytics コンテンツをアプリケーション、カスタム・アプリケーションまたはポータル Web ページに埋め込むことができます。

- [分析コンテンツの埋込みについて](#)
- [安全ドメインとしての埋込み環境の登録](#)
- [iFrame を使用した埋込み](#)
- [JavaScript 埋込みフレームワークを使用した埋込み](#)

## 分析コンテンツの埋込みについて

分析コンテンツをアプリケーションおよび Web ページに埋め込む方法は 2 つあります。

コンテンツ・アイテムの URL を使用してコンテンツを埋め込むことができます。通常、この方法では iFrame を使用します。[iFrame を使用した埋込み](#)を参照してください。

コンテンツを埋め込むための統合された方法が必要な場合は、JavaScript 埋込みフレームワークを使用します。この方法は、iFrame での埋込み方法より柔軟性が高いです。たとえば、カスタム Web アプリケーションにビジュアライゼーションを埋め込む場合にこの方法を使用します。[JavaScript 埋込みフレームワークを使用するための一般的なワークフロー](#)を参照してください。

## 安全ドメインとしての埋込み環境の登録

セキュリティ上の理由により、ドメインを安全と登録しないかぎり、コンテンツを別のアプリケーションに埋め込むことはできません。

安全ドメインの登録を参照してください。

JavaScript を使用してコンテンツを埋め込む場合、次の情報を使用します：

- CORS 保護のため、埋込みコンテンツを含む HTML ファイルをブラウザで直接開くことはできません。この問題を回避するには、Web サーバー(localhost または別の Web サーバー)を安全ドメインとして登録する必要があります。
- localhost Web サーバーをテストに使用する場合は、`http://localhost:<port>`および `http://127.0.0.1:<port>`への参照を追加することが必要な場合があります。

このタスクを実行できるのは、管理者のみです。

1. Oracle Analytics に移動し、「ナビゲータ」、「コンソール」の順にクリックします。
2. 「安全ドメイン」をクリックします。
3. 「ドメインの追加」をクリックし、ドメインを入力します。



4. 「埋込み」を選択します。

## iFrame を使用した埋込み

この項のトピックでは、iFrame を使用して Oracle Analytics コンテンツをアプリケーションおよび Web ページに埋め込む方法について説明します。

### トピック:

- [iFrame を使用したコンテンツの埋込みに関する考慮事項](#)
- [iFrame を使用したコンテンツの埋込み](#)

## iFrame を使用したコンテンツの埋込みに関する考慮事項

このトピックでは、iFrame を使用してコンテンツを埋め込む際に発生する可能性のある問題について説明します。

ユーザーがアプリケーションから埋込みコンテンツを開くと、通常、Oracle Analytics にログインするよう求められます。この問題を回避するには、シングル・サインオン、または Oracle Analytics と埋込みコンテンツをホストするアプリケーションの間のユーザー・フェデレーションを設定します。

Safari ブラウザを使用していて、埋込みコンテンツが予想したように表示されない場合、Safari の「[サイト越えトラッキングを防ぐ](#)」プリファレンスを無効にします。

## iFrame を使用したコンテンツの埋込み

ターゲット・コンテンツの URL をアプリケーションまたはポータル*の* iFrame に追加することで、分析コンテンツを埋め込むことができます。たとえば、この方法を使用してコンテンツを Microsoft Teams に埋め込むことができます。

### ノート:

コンテンツを埋め込むための統合された方法が必要な場合は、JavaScript 埋込みフレームワークを使用します。この方法は、iFrame での埋込み方法より柔軟性が高いです。[JavaScript 埋込みフレームワークを使用するための一般的なワークフロー](#)を参照してください。

このタスクを実行する前に、コンテンツの埋め込み先のドメインを安全ドメインとして登録したことを確認します。[安全ドメインとしての埋込み環境の登録](#)を参照してください。

パラメータを含む URL を作成するなど、URL を手動で作成する必要がある場合は、適切に文字をエスケープしてください。URL 内のすべての特殊文字は URL エンコードされている必要があります。たとえば、%2c を使用してカンマをエンコードし、%20 を使用してスペースをエンコードします。

1. 「ホーム」ページで、「ナビゲータ」をクリックし、次に「カタログ」をクリックします。

2. 埋め込むアイテムを特定し、その**アクション・メニュー**をクリックします。「開く」をクリックします。
3. ブラウザのアドレス・バーに移動し、アイテムの URL をコピーします。次に URL の例を示します:
  - **レポート** - `http://example.com/analytics/saw.dll?PortalGo&path=%2Fshared%2FRevenuehttp://example.com/analytics/saw.dll?PortalGo&Action=prompt&path=%2Fshared%2FSaled%2FSales%20by%20Brand`
  - **ダッシュボード** - `http://example.com/analytics/saw.dll?Dashboard&PortalPath=%2Fshared%2FSales%2F_portal%2FQuickStart&page=Top%20Products`
  - **ワークブック** - `http://example.com/ui/dv/home.jsp?pageid=visualAnalyzer&reportmode=full&reportpath=%2Fshared%2FMySalesWorkbook`
  - **キャンバス** - `https://example.com:8080/ui/dv/?pageid=visualAnalyzer&reportmode=full&reportpath=%2F%40Catalog%2Fusers%2Fadmin%2FOAC%20Demo%20Samples%2FCost%20Management%20Analytics%20copy&canvasname=canvas!2`。選択した特定のキャンバスとのワークブック URL の共有を参照してください。
4. または、URL を手動で作成してからコピーして、iFrame に挿入します。  
次に、パラメータを含む URL の作成方法の例を示します:  
`https://example.com/ui/dv/ui/project.jsp?pageid=visualAnalyzer&reportmode=full&reportpath=%2F%40Catalog%2Fshared&pln=pCustomerSegment&plv=Corporate&p2n=pCity&p2v=Bristol%2CCardiff%2CAustin`
5. ターゲット・アプリケーションまたはポータルを開き、iFrame を特定してそこにコンテンツの URL を貼り付けます。

## JavaScript 埋込みフレームワークを使用した埋込み

この項のトピックでは、JavaScript 埋込みフレームワークを使用して Oracle Analytics コンテンツをアプリケーションおよび Web ページに埋め込む方法について説明します。

### トピック:

- JavaScript 埋込みフレームワークを使用するための一般的なワークフロー
- JavaScript 埋込みフレームワークを使用したコンテンツの埋込みの開始
- Oracle JET を使用しないカスタム・アプリケーションへの埋込み
- Oracle JET を使用するカスタム・アプリケーションへの埋込み
- 認証の追加

## JavaScript 埋込みフレームワークを使用するための一般的なワークフロー

分析コンテンツをアプリケーションまたは Web ページに埋め込む場合は、ガイドとしてこれらのタスクに従います。

 **ノート:**

コンテンツ・アイテムの URL を使用してコンテンツを埋め込むこともできます。通常、この方法では iFrame を使用します。[iFrame を使用した埋込み](#)を参照してください。

タスク	説明	詳細情報
安全ドメインの追加	コンソールを使用して、開発、本番およびテスト環境を安全なドメインとして登録します。	<a href="#">安全ドメインとしての埋込み環境の登録</a>
HTML ページの作成	分析コンテンツを埋め込む HTML ページを作成します。ステップには、 <code>embedding.js</code> JavaScript ソースおよび埋め込まれたワークブックの URL の参照、フィルタの指定、およびデータのリフレッシュ方法の指定が含まれます。	<a href="#">HTML ページの準備</a> <a href="#">HTML ページにフィルタを渡す</a> <a href="#">HTML ページのデータのリフレッシュ</a>
埋込みモードの指定	アプリケーションでは、JET または別のテクノロジーを使用してコンテンツを埋め込みます。	<a href="#">Oracle JET を使用するカスタム・アプリケーションへの埋込み</a> <a href="#">Oracle JET を使用しないカスタム・アプリケーションへの埋込み</a>
認証方法の決定	ログオン・プロンプト、3-Legged OAuth またはトークン認証を構成できます。	<a href="#">ログオン認証の使用</a> <a href="#">3Legged-OAuth 認証の使用</a> <a href="#">トークン認証の使用</a>

## JavaScript 埋込みフレームワークを使用したコンテンツの埋込みの開始

この項のトピックを使用して、必要な情報を収集し、前提条件タスクを実行し、HTML ページの作成を開始します。

 **ノート:**

この項のタスクを実行する前に、開発、本番およびテスト環境を安全ドメインとして登録したことを確認してください。[安全ドメインとしての埋込み環境の登録](#)を参照してください。

**トピック:**

- [開発者オプションの有効化](#)
- [コンテンツの Javascript および HTML の検索](#)
- [HTML ページの準備](#)
- [HTML ページにフィルタを渡す](#)

- [HTML ページにパラメータを渡す](#)
- [HTML ページのデータのリフレッシュ](#)

## 開発者オプションの有効化

開発者のページにアクセスするための開発者のオプションを有効にします。開発者のページを使用して、アプリケーションおよび Web ページにコンテンツを埋め込むために必要な `<script>` タグ、HTML および列の式を見つけます。

1. 上部のツールバーに移動し、ユーザー名をクリックします。
2. 「**プロフィール**」をクリックし、「プロフィール」ウィンドウで「**詳細設定**」をクリックします。
3. 「**開発者オプションの有効化**」アイコンをクリックし、「**保存**」をクリックします。

## コンテンツの Javascript および HTML の検索

Oracle Analytics では、`<script>` タグと HTML が生成されます。これをコピーして、カスタム・アプリケーションまたはポータル Web ページの HTML ページに貼り付けることができます。

「**開発者**」オプションがワークブックの「**メニュー**」に表示されていない場合は、これを有効にする必要があります。[開発者オプションの有効化](#)を参照してください。

1. Oracle Analytics に移動し、埋め込むコンテンツが含まれているワークブックを開きます。
2. ワークブックの「**メニュー**」をクリックし、「**開発者**」をクリックします。
3. 「開発者」ウィンドウで、「埋込み」タブをクリックします。
4. 「**含める埋込みスクリプト**」フィールドを探し、「**コピー**」をクリックして `<script>` タグをコピーし、HTML ページに貼り付けます。
5. オプション: 埋込みワークブックでワークブックのデフォルト・ビューを表示するには、「**デフォルト**」フィールドを探し、「**コピー**」をクリックして HTML をコピーし、それを HTML ページに貼り付けます。
6. オプション: 埋込みワークブックで特定のキャンバスなどの項目を表示するには、項目のフィールドを探し、「**コピー**」をクリックして HTML をコピーし、それを HTML ページに貼り付けます。

## HTML ページの準備

分析コンテンツを埋め込むには、HTML ページを作成または更新して必要な DOCTYPE 宣言、`dir` グローバル属性を含め、`embedding.js` JavaScript ソースおよび埋込みワークブックの URL を参照し、埋込みモード (JET またはスタンドアロン) を指定し、認証方法を指定し、属性を追加する必要があります。

このトピックには、次の情報が含まれています。

- [DOCTYPE 宣言](#)
- [dir グローバル属性](#)
- [<script>タグおよび JavaScript ソース参照](#)
- [認証](#)
- [<oracle-dv>要素](#)

- 例

### Doctype 宣言

doctype 宣言を<!DOCTYPE html>に設定します。<!DOCTYPE html>以外の doctype 宣言を使用しているか、doctype 宣言を含め忘れた場合、ページが適切にレンダリングされないなどの予測不可能な動作が発生します。

### dir グローバル属性

Web ページのロケールの必要に応じて dir グローバル属性を設定します。dir グローバル属性は、埋込みコンテンツのレイアウト方向を示します。

#### ノート:

複数のロケールをサポートする必要がある場合、JavaScript を使用して属性を設定します。

属性の値のオプションは次のとおりです:

- rtl - 右から左のレイアウト方向に使用します。
- ltr - 左から右のレイアウト方向に使用します。
- auto - 使用しないでください。この値は Oracle Analytics でサポートされていません。

### <script>タグおよび JavaScript ソース参照

#### ノート:

Oracle Analytics によって、含める必要のある<script>タグおよび JavaScript ソースの URL が生成されます。

embedding.js を参照する<script>タグを HTML ページに追加します。

JavaScript ソースの URL 構造は次のとおりです:

- "https://<instance>.analytics.ocp.oraclecloud.com/public/dv/v1/embedding/<embeddingMode>/embedding.js"。このドキュメントの例ではこの URL を使用します。
- 以前のデプロイメントの場合、次を使用します:"http://<instance>.analytics.ocp.oraclecloud.com/ui/dv/v1/embedding/<embeddingMode>/embedding.js"。

<embeddingMode>は jet または standalone である必要があります。

- コンテンツを既存の Oracle JET アプリケーション内に埋め込む場合は、jet を使用します。jet を使用する場合は、アプリケーションで使用される Oracle JET のバージョンと、Oracle Analytics で使用される Oracle JET のメジャー・バージョン

が一致している必要があります。たとえば、Oracle Analytics で JET 11.0.0 が使用されている場合は、カスタム・アプリケーションでも JET 11.0.0 または 11.1.0 を使用する必要があります。Oracle Analytics では、Oracle JET バージョン 11.1.10 が使用されます。

埋込みアプリケーションで JET が使用されている場合、Oracle Analytics によってアプリケーションおよびアプリケーションに必要なコンポーネントが拡張されます。Oracle JET を使用するカスタム・アプリケーションへの埋込みを参照してください。

Oracle JET は、Oracle Analytics ユーザー・インタフェースに使用される Javascript ベースのライブラリ・セットです。

- Oracle JET を使用しない汎用アプリケーションにビジュアライゼーション・コンテンツを埋め込む際に standalone を使用します。

埋込みアプリケーションが JET を使用しない場合は、Oracle Analytics によって、その JET 配信は追加のコンポーネントとともにページに表示されます。Oracle JET を使用しないカスタム・アプリケーションへの埋込みを参照してください。

## 認証

埋込みコンテンツを表示するには認証されたセッションが必要です。ログオン・プロンプトまたは 3-Legged OAuth 認証を使用できます。認証の追加を参照してください。

## <oracle-dv>要素

ワークブックを埋め込むには、次の HTML スニペットと属性値を適切にサイズ設定された要素の内部に追加する必要があります。Oracle Analytics によって、含める必要のある HTML が生成されます。

```
<oracle-dv project-path="" active-page="" active-tab-id="" filters=""></oracle-dv>
```

**サポートされる属性** - 次の属性では、Knockout モデルに定義されている静的文字列およびプロパティがサポートされます。Knockout は、Oracle JET で使用されているテクノロジーです。

### ノート:

これらの属性を Knockout モデルにバインドする例は、Oracle JET を使用しないカスタム・アプリケーションへの埋込みを参照してください。

- project-path: レンダリングするワークブックのリポジトリのパスを指定します。
- active-page: (オプション) デフォルト以外のキャンバスまたはインサイトがレンダリングされるかどうかを指定します。active-page を指定する場合は active-tab-id も使用して、表示する厳密な「ビジュアル化」キャンバスまたは「表示」キャンバスを指定します。有効な値は canvas および insight です。
- active-tab-id: (オプション)表示している「ビジュアル化」キャンバスまたは「表示」キャンバスの ID を指定します。
- filters: (オプション)埋込みワークブックにフィルタ値をプログラムにより渡すことを許可します。
- project-options: (オプション)この属性では、プロジェクトがワークブックを参照します。次のオプションを渡すことを許可します:

- bDisableMobileLayout: モバイル・レイアウトを無効化または有効化します。モバイル・レイアウトとは、電話デバイスでのみ使用可能なサマリー・カード・レイアウトを指します。値は true または false である必要があります。
- bShowFilterBar: フィルタ・バーを表示または非表示にします。値は true または false である必要があります。

例: `<oracle-dv project-path="{{projectPath}}" active-page="canvas" active-tab-id="1" filters="{{filters}}" project-options='{"bDisableMobileLayout":true, "bShowFilterBar":false}'></oracle-dv>`

- brushing-type: ブラッシングがどのように機能するかを制御します。指定した値により、システム・デフォルト、および保存済ワークブック内の設定を含む、他のすべての設定がオーバーライドされます。値は、文字列 on、off または auto である必要があります。
  - on: 標準の優先度でブラッシング問合せを発行する場合に使用します。ブラッシング問合せおよびビジュアライゼーション問合せは、混合され同時に実行されます。
  - auto: デフォルト。低い優先度でブラッシング問合せを発行する場合に使用します。ユーザーがビジュアライゼーションを操作する際、ブラッシング問合せが完了するまで、他のビジュアライゼーションのマークの表示で遅延が発生する場合があります。

## 例

この例では、プロジェクトのすべてのインスタスがワークブックを参照します。

```
<!DOCTYPE html>
<html dir="ltr">
 <head>
 <meta http-equiv="Content-Type" content="text/html;
charset=utf-8">
 <title>Embedded Oracle Analytics Workbook Example</title>
 <script src="https://<instance>.analytics.ocp.oraclecloud.com/
public/dv/v1/embedding/<embedding mode>/embedding.js"
type="application/javascript">
 </script>

 </head>
 <body>
 <h1>Embedded Oracle Analytics Workbook</h1>
 <div style="border:1px solid black;position: absolute; width:
calc(100% - 40px); height: calc(100% - 120px)" >
 <!--
 The following <oracle-dv> tag is the tag that will embed
the specified workbook.
 -->
 <oracle-dv
 project-path="<project path>"
 active-page="canvas"
 active-tab-id="1">
 </oracle-dv>
 </div>
```

```

<!--
 Apply Knockout bindings after DV workbook is fully loaded. This
 should be executed in a body onload handler or in a <script> tag after the
 <oracle-dv> tag.
-->
<script>
 requirejs(['knockout', 'ojs/ojcore', 'ojs/ojknockout', 'ojs/
ojcomposite', 'jet-composites/oracle-dv/loader'], function(ko) {
 ko.applyBindings();
 });
</script>
</body>
</html>

```

## HTML ページにフィルタを渡す

数値およびリスト・フィルタを HTML ページに渡すことができます。これらのフィルタ・タイプで任意のタイプのデータをフィルタできます。

フィルタのペイロードは、配列項目ごとに 1 つのフィルタの Javascript オブジェクトを含む Javascript 配列です。

この例では、プロジェクトのすべてのインスタンスがワークブックを参照します。フィルタ適用時のワークブックのレンダリングは次のとおりです:

```

<oracle-dv project-path="{{projectPath}}" filters="{{filters}}">
</oracle-dv>

<script>
requirejs(['knockout', 'ojs/ojcore', 'ojs/ojknockout', 'ojs/ojcomposite',
'jet-composites/oracle-dv/loader'], function(ko) {
 function MyProject() {
 var self = this;
 self.projectPath = ko.observable("/users/weblogic/EmbeddingStory");
 self.filters = ko.observableArray([
 "sColFormula": "\"A - Sample Sales\".\"Products\".\"P2 Product
Type\"",
 "sColName": "P2 Product Type",
 "sOperator": "in", /* One of in, notIn, between, less, lessOrEqual,
greater, greaterOrEqual */
 "isNumericCol": false,
 "bIsDoubleColumn": false,
 "aCodeValues": [],
 "aDisplayValues": ['Audio', 'Camera', 'LCD']
], {
 "sColFormula": "\"A - Sample Sales\".\"Base Facts\".\"1- Revenue\"",
 "sColName": "Rev",
 "sOperator": "between", /* One of in, notIn, between, less,
lessOrEqual, greater, greaterOrEqual */
 "isNumericCol": true,
 "bIsDoubleColumn": false,
 "aCodeValues": [],
 "aDisplayValues": [0, 2400000] /* Because the operator is
"between", this results in values between 0 and 2400000 *

```



```

/
 });
}
 ko.applyBindings(MyProject);
});
</script>

```

**サポートされている属性** - フィルタ・ペイロード内の各フィルタ・オブジェクトには、次の属性が含まれている必要があります。

- `sColFormula`: フィルタ対象の列の 3 つの部分を指定します。列の式には、3 つの部分が含まれている必要があります。

式が不明な場合は、その列を使用するワークブックを作成し、「ビジュアル化」タブで、ワークブックの「**メニュー**」をクリックして、「**開発者**」をクリックします。「**開発者**」ページで、「**JSON**」タブをクリックして列の式を表示します。たとえば、`sColFormula: "\"A - Sample Sales\".\"Base Facts\".\"1- Revenue\""` となります。

「**開発者**」オプションがワークブックの「**メニュー**」に表示されていない場合は、これを有効にする必要があります。[開発者オプションの有効化](#)を参照してください。

- `sColName`: (必須)この列に一意の名前を指定します。
- `sOperator`: `in`、`notIn`、`between`、`less`、`lessOrEqual`、`greater` または `greaterOrEqual` を使用します。
  - `in` および `notIn` - リスト・フィルタに適用されます。
  - `between`、`less`、`lessOrEqual`、`greater` および `greaterOrEqual` - 数値フィルタに適用されます。
- `isNumericCol`: フィルタが数値またはリストかどうかを指定します。値は `true` または `false` である必要があります。
- `isDateCol`: (必須)列が日付列かどうかを示します。値は `true` または `false` である必要があります。列が日付であるが、年、月、四半期などではない場合は、`true` を使用します。`true` に設定した場合、`aDisplayValues` 属性に日付を指定します。
- `bIsDoubleColumn`: 列の表示値の背後に二重列値があるかどうかを指定します。値は `true` または `false` である必要があります。
- `aCodeValues`: `bIsDoubleColumn` が `true` である場合、この配列を使用します。
- `bHonorEmptyFilter`: (オプション)空のフィルタが優先されるかどうかを示します (例: `bIsDoubleColumn` フラグに基づく空の `aCodeValues/aDisplayValues`)。この属性は、すべての列フィルタ(リスト・フィルタ、数値範囲フィルタおよび日付範囲フィルタ)に適用されます。値は `true` または `false` である必要があります。
  - `true` に設定し、ユーザーが空の `aCodeValues/aDisplayValues` を渡した場合、すべての値はフィルタに含まれます。
  - `false` に設定し、ユーザーが空の `aCodeValues/aDisplayValues` を渡した場合、属性は適用されず、フィルタ値に変更はありません。
  - この属性が存在しない場合、デフォルト値は `false` です。

- aDisplayValues: bIsDoubleColumn が false の場合、ユーザー・インタフェース内の値のフィルタおよび表示にこの配列が使用されます。

bIsDoubleColumn が true の場合、aCodeValues の値がフィルタリングに使用されていると、この配列の値がユーザー・インタフェースでの表示に使用されます。

bIsDoubleColumn が true の場合、この配列の内のエントリ数は、aCodeValues 配列内の数と同じであり、値は用意されている必要があります。たとえば、aCodeValues に 1 と 2 の 2 つの値がある場合、aDisplayValues に a と b の 2 つの値がある必要があります、ここで 1 は a のコード値であり、2 は b のコード値です。

isDateCol 属性が true に設定されている場合、日付を含む aDisplayValues 配列を指定します。タイムスタンプにタイム・ゾーンがない、またはタイムスタンプが提供されていない場合、時間はローカルのタイム・ゾーンで設定されます。次の書式のいずれかを使用します。

- mm/dd/yyyy (例: 12/31/2011)
- yyyy-mm-dd (例: 2011-12-31)
- yyyy/mm/dd (例: 2011/12/31)
- mm/dd/yyyy または yyyy/mm/dd, hh:mm:ss (例: 12/31/2011 または 2011/12/31, 23:23:00)  
**ノート:** 24 時間の書式を使用します。スペースをセパレータとして使用できます。
- mm/dd/yyyy または yyyy/mm/dd, hh:mm:ss AM/PM (例: 12/31/2011 または 2011/12/31, 11:23:00 PM)  
**ノート:** 12 時間の書式を使用します。スペースをセパレータとして使用できます。
- <3 文字の月名> dd yyyy (例: Mar 25 2015)
- dd <3 文字の月名> yyyy (例: 25 Mar 2015)
- Fri Sep 30 2011 05:30:00 GMT+0530 (インド標準時)
- ISO 日付書式 - 2011-10-05T14:48:00.000Z

## HTML ページにパラメータを渡す

HTML ページにパラメータ値を渡すことができます。渡されたパラメータ値は、問合せ式や製品の様々な部分で使用できます。

パラメータのペイロードは Javascript オブジェクトで、パラメータの名前と値の属性がペアで格納されています。

この例では、プロジェクトのすべてのインスタンスがワークブックを参照します。パラメータ適用時のプロジェクトのレンダリングは次のようになります:

```
<oracle-dv project-path="{projectPath}" active-page="canvas" active-tab-id="3" parameters="{parameters}"
project-options='{"bDisableMobileLayout":false, "bShowFilterBar":false}'>
</oracle-dv>
```

```
<script>
requirejs(['knockout', 'ojs/ojcore', 'ojs/ojknockout', 'ojs/ojcomposite',
'jet-composites/oracle-dv/loader'], function(ko) {
```

```
function MyProject() {
var self = this;
```

```

 self.projectPath = ko.observable("/users/weblogic/
EmbeddingStory");
 self.parameters = ko.observable({
 "p1n": "Office",
 "p1v": "Bristol Office"
 "p2n": "Year",
 "p2v": [2023, 2022]
 });
 }
 ko.applyBindings(MyProject);
});
</script>

```

**サポートされている属性** - パラメータのペイロード内の各パラメータ・オブジェクトには、次の属性が含まれている必要があります:

- p <number> n: (必須)ワークブックに定義されているとおりに、パラメータの名前を指定します。"Office"や"Year"などです。
- p <number> v: (必須)渡すパラメータ値を指定します。"Bluebell Office"、"10"、[2023, 2022]などです。
- p <number> d: (オプション)二重列を含むパラメータに使用します。p <number> v に対応するパラメータの表示値を指定します。"My Office"などです。

## HTML ページのデータのリフレッシュ

埋込みワークブックのデータのリフレッシュ方法を構成できます。

ワークブックを再ロードせずにデータをリフレッシュするために、refreshData 関数がすべての<oracle-dv>要素にアタッチされています。それを呼び出すと、その要素の下のすべてのビジュアライゼーションが強制的にリフレッシュされます。

これは、単一の埋込みワークブックのデータをリフレッシュするコードです。このコードでは、プロジェクトのすべてのインスタンスがワークブックを参照します。

```

<oracle-dv id="project1" project-path="{projectPath}">
</oracle-dv>

```

```

<script>
 function refreshProject() {
 $('#project1')
 [0].refreshData();
 }
</script>

```

これは、複数の埋込みワークブックのデータをリフレッシュするコードです。このコードでは、プロジェクトのすべてのインスタンスがワークブックを参照します。

```

<script>
 function refreshProject()
 {
 $('oracle-dv').each(function() {

```

```

 this.refreshData();
 });
}
</script>

```

## Oracle JET を使用するカスタム・アプリケーションへの埋込み

カスタム・アプリケーションで Oracle JET を使用している場合は、埋込みコンテンツによってアプリケーションが必要なコンポーネントで拡張されます。

コンテンツの埋込みを開始する前に、Oracle Analytics で使用されているものと同じメジャー・バージョンの JET が、カスタム・アプリケーションで使用されていることを確認してください。たとえば、Oracle Analytics で JET 11.0.10 が使用されている場合は、カスタム・アプリケーションでも JET 11.x.x を使用する必要があります。

Oracle Analytics で使用されている JET のバージョンを確認するには、Oracle Analytics にログインしてブラウザ・コンソールを開き、次のコマンドを実行します:

```
requirejs('ojs/ojcore').version
```

JET アプリケーションでも、Oracle Analytics で使用されているものと同じスタイル(Alta)を使用する必要があります。

コンテンツを埋め込む Oracle JET クイック・スタート・アプリケーションの作成の詳細は、Oracle JET スタート・ガイドを参照してください。

この手順では、OAJETAPP という名前のアプリケーションを埋め込む例を使用しています。

1. 次の指示に従い、Oracle JET クイックスタート・アプリケーションをインストールし、--template=navdrawer を使用して埋込みアプリケーション OAJETAPP に名前を付けます。
2. 埋込みアプリケーションの index.HTML ファイル(例: OAJETAPP/src/index.html)を編集し、embedding.js を挿入します。

```

<script src="https://<instance>.analytics.ocp.oraclecloud.com/
public/dv/v1/embedding/jet/embedding.js" type="text/javascript">
</script>

```

3. <oracle-dv>を適切なセクションに挿入します(例: OAJETAPP/src/js/views/dashboard.html)。ここでは、project-path は、ワークブックのリポジトリのパスを指定します。

```

<div class="oj-hybrid-padding" style="position: absolute; width:
calc(100% - 40px); height: calc(100% - 120px)">
 <h3Dashboard Content Area</h3>
 <oracle-dv id="oracle-dv" project-path="/shared/embed/test-embed">
 </oracle-dv>
</div>

```

4. 次のコマンドを使用して、クイック・スタート・アプリケーションを実行します。

```

ojet build
ojet serve

```

## Oracle JET を使用しないカスタム・アプリケーションへの埋込み

カスタム・アプリケーションで Oracle JET 以外のテクノロジーを使用する場合は、埋込みコンテンツによってその Oracle JET 配信とすべての追加コンポーネントがページに追加されます。

**「開発者」** オプションがワークブックの「**メニュー**」に表示されていない場合は、これを有効にする必要があります。[開発者オプションの有効化](#)を参照してください。

1. `embedding.js` のスタンドアロン・バージョンを挿入します。

```
<script src=https://<instance>.analytics.ocp.oraclecloud.com/public/ui/dv/v1/embedding/standalone/embedding.js type="text/javascript"> </script>
```

2. `<oracle-dv>` を探して適切にサイズ設定された `<div>` の下に含めます。このタグを検索するには:
  - a. Oracle Analytics に移動し、埋め込むコンテンツが含まれているワークブックを開きます。
  - b. ワークブックの「**メニュー**」をクリックし、「**開発者**」をクリックします。
  - c. 「埋込み」タブをクリックします。
  - d. 埋め込む項目を特定し、「**コピー**」をクリックしてコピーします。

### 例

ここでは、`project-path` は、ワークブックのリポジトリのパスを指定します。

```
<div style="position: absolute; width: calc(100% - 40px); height: calc(100% - 120px)">
 <oracle-dv project-path="/@Catalog/users/admin/workbook_name">
 </oracle-dv>
</div>
```

3. ビジューライゼーションが完全にロードされた後、**Knockout** バインディングを適用します。これは `<oracle-dv>` タグの後に `<script>` タグの内部に配置するか、`onload body` ハンドラで実行する必要があります。

```
requirejs(['knockout', 'ojs/ojcore', 'ojs/ojknockout', 'ojs/ojcomposite', 'jet-composites/oracle-dv/loader'], function(ko) {
 ko.applyBindings();
});
```

### 完全な例

ここでは、`project-path` は、ワークブックのリポジトリのパスを指定します。

```
<!DOCTYPE html>
<html dir="ltr">
 <head>
 <title>AJAX Standalone Demo</title>
 <script src="https://<instance>.analytics.ocp.oraclecloud.com/
```

```
public/dv/v1/embedding/standalone/embedding.js""
type="text/javascript">
 </script>
</head>
<body>
 <h1>AJAX Standalone Demo</h1>

 <div style="position: absolute; width: calc(100% - 40px); height:
calc(100% -
120px)" >
 <oracle-dv project-path="/shared/embed/test-embed">
 </oracle-dv>
 </div>

 <script>
requirejs(['knockout', 'ojs/ojcore', 'ojs/ojknockout', 'ojs/ojcomposite',
'jet-composites/oracle-dv/loader'], function(ko) { ko.applyBindings();
});
 </script>
</body>
</html>
```

## 認証の追加

この項のトピックを使用して、埋め込まれた **Oracle Analytics** コンテンツを含む **Web** アプリケーションまたはポータル **Web** ページに認証方法を追加します。

### トピック:

- [ログイン・プロンプト認証の使用](#)
- [3-Legged OAuth 認証の使用](#)
- [トークン認証の使用](#)

## ログイン・プロンプト認証の使用

ログイン・プロンプト認証は、**Web** アプリケーションまたはポータル **Web** ページに埋め込まれているコンテンツのデフォルト認証方法です。

ユーザーが埋込みコンテンツにアクセスすると、データを表示する前にログイン名とパスワードを入力するログイン画面が表示されます。**Oracle Analytics** と **Web** アプリケーションまたはポータル **Web** ページの間に共通の ID 管理がない場合、埋込みコンテンツを含む **Web** アプリケーションまたはポータル **Web** ページにユーザーがすでにログインしている場合でも、このログイン画面がユーザーに表示されます

### ログイン・プロンプト認証メッセージのカスタマイズ

<oracle-dv>タグに属性を追加して、ログイン・プロンプト認証メッセージをカスタマイズします。次の属性がサポートされています。

- `auth-message-prefix`: ログイン・メッセージの接頭辞テキストを指定します。デフォルト値は"Oracle Analytics"です。

- `auth-message-link`: ログイン・リンクのテキストを指定します。デフォルト値は "Login" です。
- `auth-message-suffix`: ログイン・メッセージの接尾辞テキストを指定します。デフォルト値は "Required" です。
- `auth-needed-message`: 認証が必要であることを示すメッセージのテキストを指定します。デフォルト値は "Requires Authentication" です。
- `auth-message-prefix-small`: ログイン・メッセージの接頭辞テキストを指定します。デフォルト値は "Oracle Analytics" です。埋込みコンテナ・サイズが 215 ピクセル未満の場合にのみ適用できます。
- `auth-message-link-small`: ログイン・リンクのテキストを指定します。デフォルト値は "Login" です。埋込みコンテナ・サイズが 215 ピクセル未満の場合にのみ適用できます。
- `auth-message-suffix-small`: ログイン・メッセージの接尾辞テキストを指定します。デフォルト値は空の文字列です。埋込みコンテナ・サイズが 215 ピクセル未満の場合にのみ適用できます。
- `auth-needed-message-small`: 認証が必要であることを示すメッセージのテキストを指定します。デフォルト値は "Requires Authentication" です。埋込みコンテナ・サイズが 160 ピクセル未満の場合にのみ適用できます。

## 3-Legged OAuth 認証の使用

独自の認証方法をすでに使用しているポータルまたは Web アプリケーションに Oracle Analytics コンテンツを埋め込む場合は、3-Legged OAuth 認証方法を使用します。

シームレスなユーザー・エクスペリエンスのために、カスタム Web ページと Oracle Analytics では同じ認証プロバイダを使用する必要があります。したがって、サードパーティの Web アプリケーションの場合、Oracle Analytics と同じ Oracle Cloud 認証プロバイダ(つまり、同じ Oracle Identity Cloud Service インスタンスまたは Oracle Cloud Infrastructure Identity and Access Management (IAM) アイデンティティ・ドメイン)を使用する必要があるか、または Oracle Analytics をサードパーティ認証プロバイダにフェデレートする必要があります。

適切な認証を可能にするために、すべてのサーバー要求に対して 3-Legged OAuth パラメータを指定する必要があります。

1. `embedding.js` スクリプト参照の `IDCS_OAUTH3LEGGED` パラメータは `true` に設定します。
2. `setSecurityConfig` 関数を使用して、`oauth_3legged` のセキュリティ構成タイプをアプリケーションに指定します。

### 例

ここでは、`project-path` は、ワークブックのリポジトリのパスを指定します。

```
<!DOCTYPE html>
<html dir="ltr">
 <head>
 <script src=""https://<instance>.analytics.ocp.oraclecloud.com/public/dv/v1/embedding/<embedding_method>/embedding.js?>
```

```

IDCS_OAUTH3LEGGED=true" type="application/javascript">
 </script>
</head>
<body>
 <div style="position: absolute; width: calc(100% - 40px); height:
calc(100% - 120px)" >
 <oracle-dv project-path="/shared/Embed/Embed Samples">
 </oracle-dv>
 </div>
 <script>
 requirejs(['jquery', 'knockout', 'obitech-application/application',
'ajs/ojcore', 'ajs/ojknockout', 'ajs/ojcomposite', 'jet-composites/oracle-dv/
loader'], function($, ko, application) {
 application.setSecurityConfig("oauth_3legged");
 ko.applyBindings();
 });
 </script>
</body>
</html>

```

## トークン認証の使用

3-Legged OAuth を使用せずにバックグラウンドで Oracle Analytics を認証する場合は、トークン認証方法を使用します。

HTML ページを更新して、適切なトークン認証に対応します。トークンの生成方法の詳細は、Oracle Cloud での認可の保護を参照してください。

1. HTML ページで、`embedding.js` スクリプト参照内の `TOKEN` パラメータを `true` に設定します。
2. トークンのセキュリティ構成タイプを指定します。`setSecurityConfig` 関数を使用してトークンを取得する関数をアプリケーションに追加します。次の例を参照してください。

### 例

この例では、API を使用してトークンを取得します。HTML ページで API を使用してトークンを取得する場合は、必要な API を使用可能にする必要があります。

ここでは、`project-path` は、ワークブックのリポジトリのパスを指定します。

```

<!DOCTYPE html>
<html dir="ltr">
 <head>
 <meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=utf-8">
 <title>Standalone DV Embed Demo Using Token</title>
 <script src="https://<instance>.analytics.ocp.oraclecloud.com/
public/dv/v1/embedding/<embedding mode>/embedding.js?TOKEN=true"
type="application/javascript">
 </script>
 </head>
 <body>
 Standalone embedded workbook test
 <div style="width: calc(50% - 40px); height: 50%; border: 1px solid
black; padding: 10px;" >

```



```

 <oracle-dv
 project-path="/@Catalog/shared/Embed/Embed Samples"
 active-page="canvas"
 active-tab-id="1">
 </oracle-dv>
 </div>

 <script>
 var token = "<token from identity management API>";
 requirejs(['jquery', 'knockout', 'obitech-application/
application', 'ojs/ojcore', 'ojs/ojknockout', 'ojs/ojcomposite', 'jet-
composites/oracle-dv/loader'],
 function($, ko, application) {
 application.setSecurityConfig("token",
{tokenAuthFunction:
 function(){
 return token;
 }
 });
 ko.applyBindings();
 }
);
 </script>
</body>
</html>

```

## 動作保証情報

この付録には、Oracle Analytics の動作保証情報が含まれます。

トピック:

- [動作保証 - サポートされているブラウザ](#)

### 動作保証 - サポートされているブラウザ

Oracle Analytics では、次の Web ブラウザがサポートされています:

- **Apple Safari:** 最新のメジャー製品リリースと 1 つの前のリリースのサポート。
- **Google Chrome:** 最新のメジャーの安定したチャンネル・リリースのみのサポート。Chrome のサポート・ポリシーの詳細は、Google Chrome の FAQ (<https://support.google.com/chrome/a/answer/188447?hl=en>)を参照してください。
- **Microsoft Edge:** Microsoft Edge Chromium の最新メジャー・バージョンのサポート。Microsoft Edge v77 以降、Microsoft は Edge を Windows オペレーティング・システムから切り離し、Chrome や Firefox と同様の 6 週間の継続的な更新パターンに従う Chromium ベースのブラウザ・テクノロジーとデプロイメント・モデルに移行しました。Edge のサポート・ポリシーの詳細は、Microsoft Edge の FAQ (<https://docs.microsoft.com/en-au/deployedge/microsoft-edge-support-lifecycle>)を参照してください。
- **Mozilla Firefox:** 最新のメジャー拡張サポート・リリース(ESR)バージョン以前のサポート(本番のみ)。Firefox のサポート・ポリシーの詳細は、Mozilla FAQ (<https://www.mozilla.org/en-US/firefox/organizations/faq/>)を参照してください。